# 國譯大藏經

經部

第九卷

# 目次



以上

# 國譯大般涅槃經

## 卷の第十九

### 高貴德王菩薩品第二十二の一

(一)爾の時に世尊、光明徧照高貴德王菩薩摩訶薩に告げて言はく、(二)『善男子、若菩薩摩訶薩是の如きの大涅槃經を修行する有らば十事の功德を得、(三)聲聞、辟支佛と共ならず、思議す可らず、聞く者驚怪せん。內に非ず外に非ず、難に非ず易に非ず、相に非ず非相に非ず、是世法に非ず、相貌有る無く、世間に無き所なり。(四)何等をか十と爲す。(五)一つには五つ有り。(六)何等をか五つと爲す。一つには聞かざる所の者而も能く聞くを

【一】是より德王品の十功德を證す。之に三段、初に佛爲めに十功德を明す。此十功德に就て、治城は兩周、開善は三周とす、章安は十章の儘にて釋し、二周、三周を分たず。之に又二段、其中初に總じて十數を唱ふ。之に又三段、初に對告。
【二】次に唱數。
【三】次に稱歎。
【四】次に歷別して解釋す。之に二段あり、其中初に徵起。
【五】次に正釋。之に十段。其中初に第一の功德を明す、之に又三段、初に五事を明す。
【六】次に列。之に又三段、初に五章の標。
【七】是より別釋。これに五段あり、其中初に不聞聞を釋す。之に又三段ありて初に標。
【八】次に釋。之に三段あり、其中初に不聞聞第一義中諦を明す。之に又二段ありて初に通じて列す。この中、佛性、一體三寶、四德、涅槃常住、如來涅槃の五法あり。

得、二つには聞き已りて能く利益を爲す、三つには能く疑惑の心を斷ず、四つには慧心正直にして曲無し、五つには能く如來の密藏を知る。是を五事と爲す。(七)何等か不聞にして而も能く聞くを得。(八)所謂甚深微密の義なり。一切衆生悉く佛性有り、佛、法、衆僧差別有る無し。三寶性相常樂我淨なり。一切諸佛畢竟じて涅槃に入る者有る無し。常住不變、如來涅槃なり。(九)非有、非無。非有爲、非無爲。非有漏、非無漏。非色、非不色。非名、非不名。非相、非不相。非有、非不有。非物、非不物。非因、非果。非待、非不待。非明、非闇。非出、非不出。非常、非不常。非斷、非不斷。非始、非終。非過去、非未來、非現在。非陰、非不陰。非入、非不入。非界、非不界。非十二因緣、非不十二因緣。是の如き等の法甚深微密なり。昔聞かざる所而も能く聞くを得。(一〇)復不聞有り、所謂一切の外道の經書なり。(一一)四毗陀論、(一二)毗伽羅論、(一三)衞世師論、(一四)迦毗羅論、一切の呪術、醫方技藝、日月博食、

【九】次に通じて釋す。この中二十句あり。一一の事中、中道甚深に非ざるなし。

【一〇】次に不聞聞俗諦。之に二段あり、初に俗諦の法を列す。

【一一】四毗陀(Catur-veda)。毗陀は明又は知識と譯す、婆羅門哲學中心の典籍にして印度哲學の全系統中最古のものなり。彼等は吠陀を以て天啓書なりと信ぜり。而して此の書に四種あり、之を四吠陀と稱す。其の名は左の如し。一、梨俱毗陀(Ṛgveda)、讃誦篇。二、沙磨毗陀(Samaveda)、歌詠篇。三、夜柔毗陀(Yajur-veda)、祭祀篇。四、阿闥婆毗陀(Atharvaveda)、攘災篇。

【一二】毗伽羅(Vyakaraṇa)。聲名記論と譯す、五明中の聲名即ち語學に關する俗書の總名。

【一三】衞世師(Vaiśesika)。勝論と譯す、六派哲學の隨一たる勝論宗の梵名なり。此の派の開祖は、迦那陀(Kaṇada)仙人にして多元論者なり。

【一四】迦毗羅(Kapila)。數論(Sāṅkhya)の開祖の名。此の派は物心の二元論なり、六派哲學の一。

星宿運變、圖書讖記。是の如き等の經初て未だ曾て祕密の義を聞かず。(一五)今此の經に於て而も之を知ることを得。(一六)復十一部經有り、毗佛略を除く。亦是の如きの深密の義無し。今此の經に因りて而も之を知ることを得。(一七)善男子、是を不聞にして而も能く聞くことを得と名く。

(一八)聞き已りて利益すとは、(一九)若能く是の大涅槃經を聽受すれば、悉く能く具さに一切の方等大乘經典の甚深の義味を知る。譬へば男女の明淨の鏡に於て、其の色像を見ること了了分明なるが如く、大涅槃經も亦復是の如し。菩薩之を執りて悉く明かに大乘經典の甚深の義を見ることを得。亦人有りて闇室の中に在り、大炬火を執りて悉く諸物を見るが如く、大涅槃炬も亦復是の如し。菩薩之を執りて大乘深奧の義を見ることを得。亦日出づれば千光明有りて悉く能く諸山幽闇を照了し、一切の人をして遠く諸物を見しむるが如く、是の大涅槃の清淨慧日も亦復是の如し。大乘深邃の處を照了し、二乘の人をして遠く佛道を見しむ。所以は何ん、能く是の大涅槃微妙の經を聽受するを以ての故なり。(二〇)善男子、若菩薩摩訶薩是の如きの大涅槃經を聽受する有らば、一切の諸法名字を知ることを得。(二一)若能く書寫し、讀誦通利し、他の爲

---

【一五】次に祕密を明す。

【一六】次に不聞聞貫諸。之に貫諸法を開く、祕密を開くの二段あり。文の中毗佛略を除くとは、この中に一體三寶、常性、常住涅槃等を明し、小乘に無き所なるが故なり。

【一七】次に結。

【一八】是より聞已利益を釋す。之に三段あり、其中初に標。

【一九】次に釋。之に二段あり、其中初に略。之に緣由を出す、貫諸を顯すの二段あり。後文の中、三譬を以て一心三智を譬く。

【二〇】次に貫。之に二段あり、初に緣由を釋す。

【二一】次に四法を擧げて以て明す。

に廣く說き、其の義を思惟すれば、則ち一切諸法の義理を知る。善男子、其の聽受の者、唯名字を知りて其の義を知らず。若能く書寫し、受持、讀誦し、他の爲に廣く說き、其の義を思惟すれば、則ち能く義を知る。復次に善男子、是の經を聽く者、佛性有るを聞きて未だ見ることを得ること能はず。書寫、讀誦し、他の爲に廣く說き、其の義を思惟すれば則ち之を見ることを得。是の經を聽く者、檀の名有るを聞きて未だ檀波羅蜜を見るを得ること能はず。書寫、讀誦し、他の爲に廣く說き、其の義を思惟すれば、則ち能く檀波羅蜜を見ることを得、乃至般若波羅蜜も亦復是の如し。善男子、菩薩摩訶薩若能く是の大涅槃經を聽かば、則ち法を知り義を知り、二無閡を具へて諸の沙門、婆羅門等、若は天、魔、梵一切世中に於て無所畏を得、十二部經を開示分別し、其の義を演說するに差違有ること無し。他に從って聞かずして而も能く自ら知り、阿耨多羅三藐三菩提に近く。(二一)善男子、是を聞き已りて能く利益を爲すと名く。

(二二)疑心を斷ずとは、(二四)疑に二種有り。一つには名を疑ひ、二つには義を疑ふ。是の經を聽く者は疑名の心を斷じ、義を思惟する者は疑義の心を斷ず。(二五)復次に善男子、疑に五種有り。一つには佛は定んで涅槃するや不やと疑ひ、二つには佛は是れ常住なりや不やと疑ひ、三つには佛は是眞樂なりや

【二一】次に結。

【二二】次に疑心を斷ずるを標す。之に三段あり、其中初に標。

【二四】次に釋。之に二段あり、其中初に略して二種を釋す。之に又三段ありて初に名義の兩疑を釋る。

【二五】次に八個の疑を釋る。文は具く三單一雙合して五を示せども、理須く八を具すべきなり。

不やと疑ひ、四つには佛は是眞淨なりや不やと疑ひ、五つには佛は是眞我なりや不やと疑ふ。是の經を聽く者は佛の涅槃を疑ふこと、則ち永く斷ずるを得。書寫、讀誦し、他の爲に廣く說き、其の義を思惟すれば四疑永く斷ず。(二六)復次に善男子、疑に三種有り。一つには聲聞有と爲ん無と爲んと疑ひ、二つには緣覺有と爲ん無と爲んと疑ひ、三つには佛乘有と爲ん無と爲んと疑ふ。是の經を聽く者は是の如きの三疑永く滅して餘無し。書寫、讀誦し、他の爲に廣く說き、其の義を思惟すれば、則ち能く一切衆生悉く佛性有るを了知す。(二七)復次に善男子若衆生の是の如きの大涅槃經を聞かざる有らば、疑心甚だ多し。所謂若は常、無常。若は樂、不樂。若は淨、不淨。若は我、無我。若は命、非命。若は衆生、非衆生。若は畢竟、不畢竟。若は他世、若は過世。若は有、若は無。若は苦、若は非苦。若は集、若は非集。若は道、若は非道。若は滅、若は非滅。若は法、若は非法。若は善、若は非善。若は空、若は非空なり。是の經を聽く者は是の如きの諸疑悉く永く斷ずることを得。(二八)復次に善男子、若是の如きの經を聞かざる者有らば、復種種衆多の疑心有り。所謂色是我なりや、受、想、行、識是我なりや。眼能く見るや、我能く見るや。乃至識能く知るや、我能く知るや。色報を受くるや、我報を受くるや。乃至識報を受くるや、我報を受くるや。色他世に至るや、我他世に至るや。乃至識も亦是の如し。生死の法始有り終有りや、始無く終無きや。是の經を聽く者、

【二六】次に權實の疑を離る。
【二七】次に廣く離を釋す。之に三段あり、其中初に常法の上の疑を離る。
【二八】次に假名の上の疑を離る。

是の如き等の疑も亦永く斷ずることを得。（二九）復人有りて一闡提、犯四重禁、作五逆罪、謗方等經の是の如き等の輩佛性有りや、佛性無きやと疑ふ。（三〇）是の經を聽く者は是の如き等の疑、悉く永く斷ずることを得。復人有りて世間邊有りや、世間邊無きや。十方世界有りや、十方世界無きやと疑ふ。是の經を聽く者は、是の如き等の疑も亦永く斷ずることを得。是を能く疑惑の心を斷ずと名く。

（三一）慧心正直にして邪曲無しとは、（三二）心若し疑有らば則ち見る所正しからず、一切の凡夫、若し是の大涅槃微妙の經典を聞くことを得ざれば、所見邪曲、乃至聲聞、辟支佛の人の所見も亦曲なり。云何が名けて一切凡夫所見邪曲と爲す。有漏の中に於て常、樂、我、淨を見、如來の所に於て無常、苦、不淨、無我を見、衆生壽命知見有りと見る。非有想、非無想處を計して以て涅槃と爲し、自在天に八聖道有りと見る。有見、斷見、是の如き等の見、名けて邪曲と爲す。菩薩摩訶薩若し是の大涅槃經を聞きて聖行を修行することを得ば、則ち是の如きの邪曲を斷除することを得。云何が名けて聲聞、緣覺の邪曲見と爲すや。菩薩兜率より下り、白象に化乘して神を母胎に降す。父を淨飯と名け、母を（三三）摩耶と名く。迦毗羅城に胎に處ること十月を滿足して生ず。生れて未だ地に至らざるに、帝釋捧接し、（三四）難陀龍王及

【二九】次に依正上の疑を斷る。
【三〇】次に結す。
【三一】是より慧心正直にして曲無きを釋す。之に三段あり。初に標す。
【三二】次に釋。
【三三】摩耶は具さに摩訶摩耶（Mahāmāyā）といふ、大術、大幻と譯す。天臂城の善覺長者の長女にして淨飯王の夫人。
【三四】難陀・婆難陀（Nanda and Upananda）。難陀は歡喜と譯し、婆難陀は善歡喜と譯す。摩竭陀國に住む兄弟二龍王の名なり。

び婆難陀、水を吐きて之を浴す。(三五)摩尼跋陀大鬼神王、寶蓋を執持し、後に隨ひて侍立し、地神華を化して以て其の足を承く。四方に各行くこと七步を滿足す。天廟に至るに、諸の天像をして悉く起ちて承迎せしむ。(三六)阿私陀仙抱持して相を占ふ。既に占相し已りて大悲苦を生ず、「自ら傷む當に終に佛興を覩ざることを」と。師に詣でて書、算計、射御、圖讖、技藝を學び、深宮に處在して六萬の采女娛樂して樂を受く。城を出でて遊觀して迦毗羅園に至る。道に老人、乃至沙門の法服にして行くを見、宮中に還至して、諸の采女の形體、狀貌の猶し枯骨の如く、所有の宮殿塚墓と異なること無きを見、厭惡して出家し、夜半に城を踰えて(三七)鬱陀伽、(三八)阿羅羅等の大仙人の所に至り、識處及び非有想非無想處を說くを聞く。既に是を聞き已りて是の處を諦觀するに、是非常、苦、不淨、無我なり。捨てて樹下に至り、具さに苦行を修し、六年を滿足して是の苦行の阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得ること能はざるを知る。爾の時に復(三九)阿夷羅跋提河の中に至りて洗浴し、牧牛女の奉る所の乳糜を受く。受け已りて轉じて菩提樹下に至り。魔波旬を破して阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得、(四〇)波

【三五】摩尼跋陀（Manibhadra）。如意寶賢と譯す、夜叉八大將の隨一。
【三六】阿私陀（Asita）。無比と譯す。釋尊が淨飯王宮に生れ給ひし時之を占相せし仙人の名。
【三七】鬱陀伽は具さに鬱頭藍弗（Udraka Rāma Putra）なり。鬱頭藍子或は猛喜と譯す。釋尊に非想非非想定の教義を傳へたる仙人の名。
【三八】阿羅羅は具さに阿羅羅迦羅摩（Ārāḍakālāma）、懈怠と譯す。釋尊に無所有定の教義を傳へたる仙人の名。
【三九】阿夷羅跋提河。Hiraṇyavatī の音寫。然るに事實は尼連禪河 Nairañjanā にて洗浴し給ふ。
【四〇】波羅奈。Vārāṇasī の音寫、今の Benares これなり。

羅奈に於て五比丘の爲に初めて法輪を轉じ、乃至此の拘尸城に於て般涅槃に入ると見る。是の如き等の見、是を聲聞、緣覺の曲見と名く。善男子、菩薩摩訶薩是の如きの大涅槃經を聽受すれば、悉く是の如き等の見を斷除することを得。若し能く書寫、讀誦、通利し、他の爲に演說し其の義を思惟すれば、則ち正直にして邪曲の見無きことを得。(四一)善男子、菩薩摩訶薩是の如きの大涅槃經を修行すれば、諦かに菩薩無量劫來兜率より神を母胎に降し、乃至拘尸城に般涅槃に入らざるを知る。是を菩薩摩訶薩の正直の見と名く。

(四二)能く如來の深密の義を知るとは、(四三)所謂即ち是大般涅槃なり。(四四)一切衆生悉く佛性有り、四重禁を懺し謗法の心を除き、五逆罪を盡して一闡提を滅す。然して後阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得。是を甚深祕密の義と名く。(四五)復次に善男子、云何が復甚深の義と名くる。衆生實に我有ること無しと知ると雖も、而も未來に於て業果を失はず。五陰此に於て滅盡すと知ると雖も、善惡の業終に敗亡せず。諸業有りと雖も作者を得ず、至る處有りと雖も去る者有ること無し、繫縛有りと雖も縛を受くる者無し、涅槃有りと雖も亦滅する者無し。(四六)是を甚深祕密の義と名く。」

(四七)爾の時に光明徧照高貴德王菩薩摩訶薩佛に白して言さく、『世尊、我佛所說の聞、不聞の義を解

【四一】次に結す。
【四二】是より秘密の義を釋す。之に二段あり、其中初に問ふ。
【四三】次に釋。これに二段ありて初に果深密。
【四四】次に因深密。
【四五】次に不思議深密。
【四六】次に結す。
【四七】是より論議。之に四段あり、其中初に標王問す。之に又二段あり、其中初に問ふ。之に又二段ありて初に旨を領して仰非す。

するが如きは、是の義然らず。(四八)何を以ての故に。法若有ならば便ち定んで有なるべく、法若無ならば便ち定んで無なるべし。無生ずべからず、有滅すべからず。(四九)如其聞かば是則ち聞と爲し、若聞かざれば則ち不聞と爲す。云何ぞ而も聞所不聞と言ふや。(五〇)世尊、若聞くべからざれば是を不聞と爲し、若已に聞かば則ち更に聞かず。何を以ての故に。已に聞くことを得るが故なり。(五一)云何ぞ而も聞所不聞と言はん。(五二)譬へば去者至れば則ち去らず、去れば則ち至らざるが如し。亦生じ已らば生ぜず、不生を生ぜず。得し已らば得せず、不得を得せざるが如し。聞き已らば聞かず、不聞を聞かざるも、亦復是の如し。

(五三)世尊、若不聞聞とは、一切衆生未だ菩提有らざれば、卽ち之有るべし、未だ涅槃を得ざれば亦之を得べし、未だ佛性を見ざれば佛性を見るべし。云何ぞ復十住に菩薩佛性を見ると雖も、未だ明了を得ずと言ふ。(五四)世尊、若不聞聞とは、如來往昔菩薩に從ひて聞くことを得る。若聞くことを得と言はば、何が故ぞ如來(五五)阿含の中に於て復師無しと言ふや。(五六)若不聞不聞、如來阿耨多羅三藐三菩提

【四八】次に正しく釋す。之に三段あり、其中初に奪門を作す。之に又二段ありて初に牒し、之に又三段あり、先づ通じて有無に約して釋す。之に釋、徴の二段あり。

【四九】次に正しく不聞聞に就て辨ふ。

【五〇】次に結。之に二段あり、その中初に定んで兩と成すを結す、

【五一】次に定んで一なるべきを結す。

【五二】次に釋。之に釋、合の二段あり。

【五三】次に奪門を作す。之に二段あり、其中初に衆生を縦す。之に三縦、二徴の二段あり。

【五四】次に佛果を縦す。之に縦、徴の二段あり。

【五五】阿含（アーガマ）。前に法身常に無比法と説す、小乘經の總名。

【五六】次に更に兩徴を結す。

を成ずることを得ば、一切衆生の不聞不聞も亦阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。如來若當に是の如きの大涅槃經を聞かずして佛性を見るべくば、一切衆生の是の經を聞かざるも亦見ることを得べけん。

(五七)世尊、凡そ是色とは、或は可見、或は不可見なり。聲も亦是の如し、或は是可聞、或は不可聞なり。是の大涅槃は色に非ず聲に非じ。云何ぞ而も見聞すべしと言はん。(五八)世尊、過去已に滅すれば則ち聞くべからず、未來未だ至らざれば亦聞くべからず。現在聽く時は則ち聞と名けず、聞き已りて聲滅すれば更に聞くべからず。是の大涅槃も亦過去、未來、現在に非じ。若三世に非ざれば則ち説くべからず、若不可説ならば則ち聞くべからず。云何ぞ而も菩薩是の大涅槃經を修し、聞かざる所を聞くと言はんや。』

(五九)爾の時に世尊、光明徧照高貴德王菩薩摩訶薩を讃じて言はく『善い哉善い哉善男子、汝今善く一切諸法、幻の如く、焔の如く、乾闥婆城、畫水の迹の如く、亦泡沫、芭蕉の樹の空にして實有ること無きが如し。命に非ず、我に非ず、苦樂有ること無きを知る。十住の菩薩の知見する所の如し。』

(六〇)時に大衆の中、忽然の頃に大光明有り、青に非ずして青を見、黄に非ずして黄を見、赤に非ず

【五七】次に況門を作す。之に二段あり、其中初に色聲に就て況す。
【五八】次に三世に就て況す。
【五九】次に歎答。
【六〇】是より瑠璃光の論義。之に二段あり、其中初に遠より來る。之に又三段あり、其中初に來相を現ず。之に又二段ありて初に放光。

して赤を見、白に非ずして白を見、色に非ずして色を見、明に非ずして明を見、見るに非ずして而も見る。爾の時に大衆斯の光に遇ひ已りて、身心快樂なる、譬へば比丘の師子王定に入るが如し。

(六一)爾の時に文殊師利菩薩佛に白して言さく、『世尊、今此の光明誰の放つ所ぞ。』爾の時に如來默然として說きたまはず。迦葉菩薩復文殊師利に問はく、『何の因緣の故に、此の光明有りて大衆を照したまふ。』文殊師利默然として答へず。爾の時に無邊身菩薩復迦葉菩薩に問はく、『今此の光明誰の所有ぞ。』迦葉菩薩默然として說かず。淨住王子菩薩復無邊身菩薩に問はく、『何の因緣の故に、是の大衆の中此の光明有る。』無邊身菩薩默然として說かず。是の如くにして五百の菩薩皆亦是の如し。相咨問すと雖も然も答ふる者無し。

(六二)爾の時に世尊文殊師利に問ひたまはく、『何の因緣の故に是の大衆の中此の光明有る。』(六三)文殊師利の言さく、『世尊、是の如きの光明、名けて智慧と爲す。智慧とは卽ち是常住なり、常住の法、因緣有ること無し。云何ぞ佛、何の因緣の故に是の光明有ると問ひたまふ。(六四)是の光明は大涅槃と名く、大涅槃は則ち常住と名く、常住の法は因緣に從はず。云何ぞ佛、何の因緣の故に是の光明有ると問ひたまふ。(六五)是の光明は卽ち是如來なり、如來は卽ち是常住なり、常住の法は因緣に從はず。云何ぞ如來因緣を問ひたまふ。

【六一】次に問答。之に二段あり、其中初に其本を明す。之に又二段あり、其中初に無言に本を辨ず。

【六二】次に言に寄せて本を辨ず。之に二段あり、其中初に問ふ。

【六三】次に答ふ。之に七番有り、其前の六番は皆定相を破す。其中初に智慧に約す。

【六四】次に涅槃に約す。

【六五】次に如來に約す。

(六六)光明は大慈大悲と名く、大慈大悲は名けて常住と爲す、常住の法は因縁に從はず。云何ぞ如來因縁を問ひたまふ。(六七)光明は即ち是念佛、念佛は是を常住と名く、常住の法は因縁に從はず。云何ぞ如來因縁を問ひたまふ。(六八)光明は即ち是一切の聲聞、緣覺不共の道なり。聲聞、緣覺不共の道は即ち常住と名く。常住の法は因縁に從はず。云何ぞ如來因縁を問ひたまふ。(六九)世尊、亦因縁有り。無明を滅するに因りて則ち熾然の阿耨多羅三藐三菩提の燈を得。』

(七〇)佛の言はく、『文殊師利、汝今諸法甚深第一義諦に入ること莫れ。世諦を以て之を解說すべし。』(七一)文殊師利の言さく、『世尊、此の東方に於て、二十恆河沙等の世界を過ぎて佛世界有り、名けて(七二)不動と曰ふ。其の佛の住處は縱廣正等にして一萬二千由延に足滿す。其の地七寶にして土石有ること無く、平正柔軟にして諸の溝坑無し。其の諸の樹木は四寶の所成なり。金、銀、瑠璃、及以頗梨なり。華果茂盛にして時として有らざる無し。若衆生其の華香を聞く有らば、身心安樂なること譬へば比丘の第三禪に入るが如し。周帀して復三千の大河有り、其の水微妙にして八味具足す。若衆生の中に在りて浴する者有らば、所得の喜樂譬へば比丘の第二禪に入るが如し。其の河多く種種の諸華有り。優鉢羅華、波頭摩華、拘物頭華、芬陀利華、香華、大香華、微妙香華、常華、一切衆生無遮護華なり。其の河の兩岸も

【六六】次に慈悲に約す。
【六七】次に念佛に約す。
【六八】次に不共に約す。
【六九】次に滅の一諦は因緣に約す。
【七〇】次に其違を明す。之に二段あり、其中初に問ふ。
【七一】次に答ふ。之に三段あり、初に此に彼土を述ぶ。
【七二】不動とは梵に Acalā（アチヤラー）といふ。

亦衆華有り。所謂(七三)阿提目多伽華、(七四)占婆華、(七五)波吒羅華、(七六)婆師羅華、(七七)摩利迦華、(七八)大摩利迦華、(七九)新摩利迦華、(八〇)須摩那華、(八一)由提迦華、(八二)檀寃迦利華、(八三)常華、一切衆生不遮護華なり。底に金沙を布き、四つの梯陛有り。金、銀、瑠璃、雜色の頗梨なり。多く衆鳥有りて其の上に遊集す。復無量の虎狼、師子、諸の惡鳥獸有り、其の心相視ること猶し赤子の如し。彼の世界の中には、一切の犯重禁の者、誹謗正法、及び一闡提、五逆等の罪有ること無く、其の土調適にして寒熱、饑渇の苦惱有ること無く、貪欲、恚、放逸、嫉妬無く、日月、晝夜、時節有ること無し、猶し第二忉利天上の如し。其の土の人民等しく光明有りて、各各憍慢の心有ること無く、一切悉く是菩薩大士なり。皆神通を得、大功德を具し、其の心悉く皆正法を尊重す。大乘に乘じ、大乘を愛念し、大乘を貪樂し、大乘を護惜す。大慧成就し、(八四)大總持を得、心常に一切衆生を憐愍す。其の佛を號して滿月光明如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、

【七三】阿提目多伽(Atimuktaka)善思夷華と譯す。
【七四】占婆(Campaka)。金色華と譯す。
【七五】波吒羅(Pāṭaliputra)。一花樹の花の名、譯名を見ず。
【七六】婆師羅。具さに婆利師迦(Varṣika)雨時華と譯す。
【七七】摩利迦(Mallika)。次華と譯す。
【七八】大摩利迦(Mahāmallikā)大次第華と譯す。
【七九】新摩利迦(Sīmamallikā)。如次第華と譯す。
【八〇】須摩那(Sumana)。善稱意華と譯す。
【八一】由提迦(Yūthika)。素馨と譯す。ジャスミン(Jasmina)の一種にして我國の唐梨に類す。
【八二】檀寃迦(Dhanuka)。寃、又は健と譯す。所譯サフラン(Saffron)なり。
【八三】常華は梵に Nitya.
【八四】大總持(Mahādhāraṇī)。總持は善を持して失はず惡を持して起らしめざる義、この功德は極めて勝れたるが故に大といふ。

佛、世尊と曰ふ。所住の處に隨ひて講宣する所有り、其の土の衆生聞くことを得ざる無し。(八五)瑠璃光菩薩の爲に是の如きの大涅槃經を講宣して言はく、「善男子、菩薩摩訶薩若し能く大涅槃經を修行すれば、聞かざる所の者悉く皆聞くことを得。」彼の瑠璃光菩薩摩訶薩、滿月光明佛に問ふこと、亦此の間の光明偏照高貴德王菩薩の問ふ所の如く、等しくして異なること有ること無し。

(八六)彼の滿月光明佛即ち瑠璃光菩薩に告げて言はく、「善男子、西方此を去ること二十恆河沙の佛土、彼に世界有りて名を(八七)娑婆と曰ふ。其の土は多く山陵、堆阜、土沙、礫石、荊棘、惡刺有りて周偏充滿す。常に饑渇、寒著の苦惱有り。其の土の人民は沙門、婆羅門、父母、師長を恭敬すること能はず、非法に貪著し非法を欲し、邪法を習行して正法を信せず、壽命短促なり。姦詐を行ふ有らば王者之を治す。王國を有つと雖も滿足を知らず、他の所有に於て貪利の心を生じ、師を興し相伐ちて枉死の者衆し。王者是の如きの非法を習行すれば四天善神心に歡喜無し、故に災旱を降して五穀登らず、人民多病、苦惱無量なり。彼の中に佛有りて釋迦牟尼如來、應供、正偏知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號く。大悲淳厚にして衆生を愍むが故に拘尸城、娑羅雙樹の間に於て諸の大衆の爲に是の如きの大涅槃經を敷演す。彼に菩薩有りて光明偏照高貴德王と名く。已に斯の事を問

【八五】瑠璃光菩薩。梵名 Vaidūrya prabha Bodhisattva.

【八六】次に彼に此土を述す。

【八七】娑婆 (Sahā)。堪忍の義なり、依て忍土と譯す。此の界の衆生人法に安忍して出離に進むべきを以てこの稱あり、吾人の生棲せる閻浮提洲の別名。

ふ、汝の如く異なること無し。佛今之に答へたまふ。汝速かに往くべし、自ら當に聞くことを得べし」と。(八八)世尊、彼の瑠璃光菩薩是の事を聞き已りて、八萬四千の菩薩摩訶薩と此に來至せんと欲して、故に先に瑞を現す。是の因縁を以て此の光明有り、是を因縁と名く、亦因縁に非ず。』

(八九)爾の時に瑠璃光菩薩、八萬四千の諸の菩薩と俱に諸の幡蓋、香華、瓔珞を持し、種種の伎樂前に倍勝す。俱に此の拘尸城の娑羅雙樹の間に來至し、己が所持の供養の具を以て佛に供養し、頭面に禮足し、合掌恭敬し、右に繞ること三匝す。敬を修すること已畢りて卻つて一面に坐す。

(九〇)爾の時に世尊、彼の菩薩に問ひたまはく、『善男子、汝至來と爲ん、不至來と爲んや。』(九一)瑠璃光菩薩の言はく、『世尊、至も亦不來、不至も亦不來なり。我是の義を觀ずるに都て來有ること無し。世尊、諸行若し常なるも亦復不來、若是無常なるも亦來有ること無し。(九二)若し人衆生性有りと見る者は來、不來有り。我今衆生の定性を見ず。云何ぞ當に來、不來有りと言ふべき。憍慢有る者には去來有りと見、憍慢無き者は則ち去來無し。取行有る者は去來有りと見、取行無き者は則ち去來無し。若し如來畢竟して涅槃すと見ば則ち去來有り、如來畢竟涅槃すと見ざれば則ち去來無し。佛性を聞かざ

【八八】次に彼の菩薩の來らんと欲するを述す。
【八九】次に彼の菩薩正しく來る。
【九〇】次に至り已りて會議す。之に二段あり、其中初に傍に去來を論ず。之に又二段あり、其中初に佛の問。
【九一】次に瑠璃光の答。之に十番の答あり、其中初の兩番は前後に約して無來を明す。
【九二】次に後の八番は迷悟に約して有來、無來を明す。

れば則ち去來有り、佛性を覩く者には則ち去來無し。若し聲聞、辟支佛の人に涅槃有りと見る者は則ち去來有り、聲聞、辟支佛の人に涅槃有りと見ざる者は則ち去來無し。若し聲聞、辟支佛の人の常樂我淨を見ば則ち去來有り、若し見ざる者は則ち去來無し。若し如來常樂我淨無しと見ば則ち去來有り、若し如來の常樂我淨を見ば則ち去來無し。(九三)世尊、且く斯の事を置きたまへ。問ふ所有らんと欲す、唯哀憫を垂れて少しく聽許せられよ。』

佛の言はく、『善男子、意の問はん所に隨へ、今正に是れ時なり。我當に汝が爲に分別、解說すべし。所以は何ん。諸佛は値ひ難くして優曇華の如し。法も亦是の如し。聞くことを得べきこと難し。十二部の中、方等も復難し。是の故に應當に心を專らにして聽受すべし。』

(九四)時に瑠璃光菩薩摩訶薩、既に聽許を蒙り、兼て誡敕を被る。即ち佛に白して言さく、『世尊、云何が菩薩摩訶薩、能く大涅槃經を修行する有る。聞かざる所を聞かん。』

(九五)爾の時に如來讚じて言はく、『善い哉善い哉善男子、汝今是の如きの大乘大涅槃海を盡さんと欲す。正に復我が能善く解說するに値ふ。汝今所有の疑網の毒箭をば、我大醫と爲りて能善く拔出せん。汝佛性に於て猶未だ明了ならず。我慧炬有り、能く爲に照明せん。汝今生死の大河を度らんと欲す、我

【九三】次に正しく上の義を問ふ。之に四段あり、其中初に請許。

【九四】之に問答。之に二段あり、其中初に瑠璃光の問。

【九五】次に佛の答。之に二段あり、其中初に緣起。之に又二段あり、其中初に請許。次に六句あり。

能く汝が為に大醫師と作らん。汝我が所に於て父母の想を生ず、我も亦汝に於て赤子の心を生ず。汝が心今者正法寶を貪る、我多く有りて能く相惠施するに値ふ。(九六)諦かに聽き諦かに聽け、善く之を思念せよ。吾當に汝が為に分別宣釋すべし。善男子、法を聽かんと欲すれば今正に是時なり、(九七)若法を聞き已らば、常に敬信を生じ、一心に聽受し、恭敬尊重すべし。正法の所に於て其の過を求むること莫れ、貪欲、瞋恚、愚癡を念ずることと莫れ、法師の種姓好惡を觀ること莫れ、(九八)既に法を聞き已らば憍慢を生ずること莫れ、恭敬、名聞、利養の為にすること莫れ。當に度世出世の法利の為にすべし、亦念を生ずること莫れ。我法を聽き已り、先に自ら身を度し、然して後人を度せん。先に自ら身を解し、然して後人を解せしめん。先に自ら身を安んじ、然して後人を安んぜん。先に自ら涅槃し、然して後人をして而も涅槃を得しめんと。(九九)佛、法、僧に於て等想を生ずべし。生死の中に於て大苦の想を生ぜよ。大涅槃に於て常、樂、我、淨の想を生ずべし。先に他人の為にし、然して後身の為にす。當に大乘の為にすべし、二乘の為にすることを莫れ。一切法に於て當に住する所無かるべし。亦專ら一切法相を取することを莫れ。諸法の中に於て貪想を生ずることを莫れ。常に法を知り法を見るの想を生ぜよ。善男子、汝能く是の如く至心に法を聽かば、是則ち名けて聞かざる所を聞くと為す。

【九六】次に[illegible]之に二段あり、其中初に[illegible]。

【九七】次に聞已を[illegible]。之に三段あり、其中初に三事は[illegible]之に[illegible]、[illegible]の二段あり。

【九八】次に三事は[illegible]。

【九九】次に五事は汚を誡む。

〔一〇〇〕善男子、不聞聞有り、不聞不聞有り、聞不聞有り、聞聞有り。〔一〇一〕善男子、不生生、不生不生、生不生、生生の如く、不至至、不至不至、至不至、至至の如し。』〔一〇二〕『世尊、云何が不生生なる。』『善男子、世諦に安住して初めて出胎の時、是を不生生と名く。』『云何が不生不生なる。』『善男子、是の大涅槃は生相有ること無し、是を不生不生と名く。』『云何が生不生なる。』『善男子、世諦死する時、是を生不生と名く。』『云何が生生なる。』『善男子、一切の凡夫是れ生生と名く。何を以ての故に。生生不斷の故に、一切の有漏念念生ずるが故に。是を生生と名く。〔一〇三〕四住の菩薩を生不生と名く。何を以ての故に。生自在なるが故に。



[illegible]

くこと無ければ、自在示現するを生自在と名くべきに依て釋す。

是を生不生と名く。善男子、是を内法と名く。』(一〇四)『云何が外法の未生生、未生未生、生未生、生生なる。』『善男子、譬へば種子の如き、未だ芽を生ぜざるの時、四大和合、人功作業を得て然して後乃ち生ず。是を未生生と名く。』『云何が未生未生なる。』『譬へば敗種及び未遇縁の如き、是の如き等の是を未生未生と名く。』『云何が生未生なる。』『芽生じ已りて而も未だ増長せざるが如し。是を生未生と名く。』『云何が生生なる。』『芽の増長の如し、若生生ぜざれば則ち増長無し。是の如きの一切有漏、是を外法の生生と名く。』

(一〇五)瑠璃光菩薩摩訶薩佛に白して言さく『世尊、有漏の法若生有らば、是常と為すや、是無常なりや。生若是常ならば、有漏の法則ち生有ること無けん。生若無常ならば則ち有漏是常ならん。(一〇六)世尊、若生能く自ら生ぜば、生自性無し。若能く他を生ぜば何の因縁を以てか無漏を生ぜざる。(一〇七)世尊、若未生の時生有らば、云何

【一〇四】次に外法の四句に約す。
【一〇五】次に結難。之に三段あり、其中初に難。これに又三段ありて初に常、無常に就て難す。
【一〇六】次に自生・生他に就て難す。
【一〇七】次に本有・本無に就て難す。
【一〇八】次に解釋。之に三段あり、其中初に六非一是。此中初の六は不可説もて六問を非す。
【一〇九】不生生不可説等。天台にてはこの文を四不可説の文として尊び、以て四教判の根據となせり。自ら是れ生と云ひ復た不生といふが故に不生生と言ふ。不生は是れ常、生は是れ無常の故に兩事相乖す、故に不可説といふ、別教に擬す。無常の生復た生を生ず、生に生ぜらるれば體を舉げて皆生なるが故に生生といふ。而かも生と云はば皆生、滅といはば皆滅の故に不可説といふ、三藏教に擬す。生自ら生ぜず、本より生死を取るが故に生不生と言ふ。能生所生の事相の當體空と説くが故に不可説なり、通教に擬す。涅槃亦た不生に非ず、生死亦た生に非ず、生死涅槃倶に不生なれば不生不生といふ。涅槃は是れ修道所得なれば生の義、此の生は滅の爲めに證せられ

ぞ今に於て乃ち名けて生と爲ん。若未生の時生無くば、何が故ぞ虚空を說きて生と爲ざる。』(一〇八)佛の言はく『善い哉善い哉善男子(一〇九)不生生不可說、生生亦不可說、生不生亦不可說、不生不生亦不可說、生亦不可說、不生亦不可說、(一一〇)因緣有るが故に亦說くを得べし。』(一一一)『云何が不生生不可說なる。』『不生名けて生と爲す、云何ぞ說くべけん。何を以ての故に。其の生を以ての故なり。』(一一二)『云何が生、生不可說なる。』『生生の故に生、生、生の故に不生なり。亦說くべからず。』(一一三)『云何が生不生不可說なる。』『生を即ち名けて生と爲す、生自ら生せず。故に說くべからず。』(一一四)『云何が不生不生不可說なる。』『不生とは名けて涅槃と爲す。涅槃は不生の故に不可說なり。何を以ての故に。修道して得るを以ての故なり。』(一一五)『云何が生亦不可說なる。』『生無きを以ての故なり。』(一一六)『云何が不生不可說なる。』『得ること有るを以ての故なり。』(一一七)『云何が亦有因緣故亦可得說なる。』『十因緣法生の爲に因と爲る。是の義を以ての故に、亦說くことを得べし。善男子、汝今甚深空定に入ること莫れ。何を以ての故に。大衆鈍なるが故なり。(一一八)善

すして常なり、故に不可說と言ふ、圓敎に擬す。本と生なくば未生に已に有りと云ふ可らざるが故に生不可說。定んで不生に有りと云ふ可らざるも得べきの事あるに由りて復た生ず、故に不生不可說と言ふ、虚空の一向に無生なるに同じからず。

【一一〇】次に後の一は是可說なるを結す。

【一一一】次に六非一是。之に七段あり、初に第一不生生を釋す。

【一一二】次に第二生生を釋す。

【一一三】次に第三生不生を釋す。

【一一四】次に第四不生不生を釋す。

【一一五】次に第五生を釋す。

【一一六】次に第六不生を釋す。

【一一七】次に第七可說を釋す。文の中、十因緣法とは十二因緣中の前十支を云ふ。

【一一八】次に六問を答ふ。之に二段あり、其中初に前の兩問を答ふ。之に又二問あり、其中初に別して四相に就く。之に生、住、異、壞の四段あり。

問難せよ。吾當に汝が爲に分別解說すべし。』（二五）爾の時に無畏菩薩、六萬四千の諸の菩薩等と倶に座より起ちて更に衣服を整へ、長跪合掌して佛に白して言さく『世尊、此の土の衆生、當に何の業を造りてか彼の不動世界に生ずることを得べき。其の土の菩薩云何が智慧成就して人中の象王たる。大威德有りて具さに諸行を修し、利智捷疾にして、聞かば則ち能く解することを得る。』

（二六）爾の時に世尊即ち偈を說きて言はく、

『衆生の命を害はず、堅く諸の禁戒を持し、
佛の微妙の教を受く、則ち不動國に生ぜん。
他人の財を奪はず、常に一切に施惠し、
（二七）招提僧坊を造る、則ち不動國に生ぜん。
他の婦女を犯さず、自妻も非時ならず、
持戒に臥具を施す、則ち不動國に生ぜん。
自他の爲の故に、利を求め及び恐怖せず、
口を愼みて妄語せず、則ち不動國に生ぜん。
善知識を壞すること莫く、惡眷屬を遠離し、
口常に和合語す、則ち不動國に生ぜん。

【二五】次に會證。之に二段あり。その中初に問。之に此れ彼に生ずるを問ふ、彼の利根を問ふの二段あり。
【二六】次に答。これに二段ありて初の十行は生善を明す。
【二七】招提僧坊。招提（Catur-deśa）は四方と譯す。四方の僧の住處を招提僧坊といふ。

諸の菩薩等の如く、常に惡口を離る、
說く所人聞かんことを樂ふ、則ち不動國に生ぜん。
乃至戲笑に於ても、非時語を說かず、
謹愼して常に時語す、則ち不動國に生ぜん。
他の利養を得るを見て、常に歡喜心を生じ、
嫉妬結を起さず、則ち不動國に生ぜん。
衆生を惱まさず、常に慈心を生じ、
方便惡を生ぜず、則ち不動國に生ぜん。
邪見にして佛、父母及び去來無しと言ふ、
是の如きの見を起さざれば、則ち不動國に生ぜん。
〔二八〕曠路に好井を作り、果樹林を種植し、
常に乞者に食を施す、則ち不動國に生ぜん。
若佛法僧に於て、一香燈を供養し、
乃至一華を獻れば、則ち不動國に生ぜん。
若恐怖の爲の故に、利養及び稱德にも、

【二八】次に後の十一行は行善を明す。

是の經の一偈を書すれば、則ち不動國に生ぜん。
若は利福を希ふが爲にも、能く一日の中に於て、
是の經典を讀誦せば、則ち不動國に生ぜん。
若無上道の爲に、一日一夜の中に、
八戒齋を受持すれば、則ち不動國に生ぜん。
犯重禁と、同じく一處を共にして住せず。
方等を謗ずる者を呵せば、則ち不動國に生ぜん。
若能く病者に、乃至一果を施し、
歡喜して瞻視せば、則ち不動國に生ぜん。
僧鬘物を犯さず、善く佛の財供を守り。
佛僧の地を塗掃すれば、則ち不動國に生ぜん。
像及び佛塔を造ること、猶し大拇指の如く、
常に歡喜心を生ずれば、則ち不動國に生ぜん。
若是の經典の爲に、自身及び財寶を、
說法者に施す、則ち不動國に生ぜん。

若し能く、諸佛の祕密藏を聽き書寫し、受持し及び讀誦せば、則ち不動國に生せん。』

(一二九)爾の時に無畏菩薩摩訶薩佛に白して言さく、世尊、我今已に所造の業縁、彼の國に生ずることを得んことを知る。(一三〇)是の光明徧照高貴德王菩薩摩訶薩、普く一切衆生を憐愍するが爲に上に諮問する所、如來若し說きたまはゞ、則ち能く人天、阿脩羅、乾闥婆、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽等を利益し安樂にせん。』(一三一)爾の時に世尊、卽ち光明徧照高貴德王菩薩に告げたまはく『善い哉善い哉善男子、汝今此に於て當に至心に聽くべし。吾當に汝が爲に分別解說すべし。(一三二)因縁有るが故に未至不至、因縁有るが故に不至至、因縁有るが故に至不至、因縁有るが故に至至なり。(一三三)何の因縁の故に未至不至なる。善男子、未至とは是大涅槃なり。凡夫未だ至らず。貪欲、瞋恚、愚癡有るを以ての故に、身業、口業不清淨の故に、及び一切の不淨物を受くるが故に、(一三四)四重を犯するが故に、方等を謗ずるが故に、一闡提の故に、五逆罪の故に。是の義を以ての故に未至不至なり。

(一三五)善男子、何の因縁の故に不至至なる。至とは大涅槃を名く。何の義の故に至なる。謂く貪欲、

【一二九】次に領解。
【一三〇】是より德王の問を答へんことを請ず。之に二段あり、其中初に問。
【一三一】次に佛の答。之に二段あり、其中初に談じて聽を誡む。
【一三二】次に正しく答ふ。之に二段あり、其中初に未至不至の文。これに又二段あり、其中初に至、不至の章を標す。安註に曰く初の聞不聞の四句に依て上根のもの了し、次の不生生の四句に依て中根のもの既に悟れり。今下根の爲に未至不至の四句を出すと。
【一三三】次に解釋。これに二段あり、其中初に涅槃に未至不至有るを明す。之に又二段ありて初に未至不至。
【一三四】四重。四波羅夷罪なり。
【一三五】次に不至至。

瞋恚、愚癡、身口の惡を斷ずるが故に、一切の不淨物を受けざるが故に、四重を犯せざるが故に、方等經を謗せざるが故に、一闡提と作らざるが故に、五逆罪を作らざるが故に。是の義を以ての故に不至至と名く。須陀洹の者は八萬劫に至り、斯陀含の者は六萬劫に至り、阿那含の者は四萬劫に至り、阿羅漢の者は二萬劫に至り、辟支佛の者は十千劫に至る。是の義を以ての故に不至至と名く。(二三六)善男子、何の因緣の故に至不至と名くる。至とは名けて二十五有と爲す。一切衆生常に無量の煩惱諸結に覆蔽せられ、往來して離れざること猶し輪の轉ずるが如し、是を至と名く。聲聞、緣覺及び諸の菩薩、已に永く離るることを得、故に不至と名く。諸の衆生を化度せんと欲するが爲の故に、示現して中に在れども、亦名けて至と爲す。(二三七)善男子、何の因緣の故に名けて至至と爲す。至とは即ち二十五有に名く。一切の凡夫須陀洹、乃至阿那含の煩惱の因緣なり、故に至至と名く。(二三八)善男子、聞所不聞も亦復是の如し。不聞聞有り、不聞不聞有り、聞不聞有り、聞聞有り。(二三九)云何が不聞聞なる。善男子、不聞とは大涅槃と名く。何が故に不聞なる。有爲に非ざるが故に、音聲に非ざるが故に、說くべからざるが故なり。云何が亦聞なる。名を聞くことを得るが故に、所謂常、樂、我、淨なり。是の義を以ての故に不聞聞と名く。』(二四〇)爾

【二三六】次に生死に至不至有るを明す。之に二段ありて初に至不至。

【二三七】次に至至。

【二三八】次に不聞を釋す。之に二段ありて初に四章を列す。

【二三九】次に但一句を釋す。

【二四〇】是より德王の重請。これに二段あり、その中初に單に因果を問ふ。之に又二段あり、其中初に問。これに又二段ありて初に涅槃始有卽ち是無常ならんと問ふ。之に又三段ありて初に領旨。

の時に光明徧照高貴德王菩薩摩訶薩佛に白して言さく、『世尊、佛の所說の如き、大涅槃とは聞くことを得べからずと。〔一四一〕云何が復常、樂、我、淨、而も聞くことを得べしと云ふ。〔一四二〕何を以ての故に。世尊、煩惱を斷ずる者、涅槃を得と名く。若未斷の者、名けて不得と爲す。是の義を以ての故に、涅槃の性本無今有なり。若世間法本無今有なれば、則ち無常と名く。譬へば餅等の本無今有、已有還無の故に無常と名くるが如し。涅槃若爾らば、云何ぞ說きて常、樂、我、淨と言はん。〔一四三〕復次に世尊、凡そ莊嚴に因りて成ずることを得る者は、悉く無常と名く。涅槃若爾らば是無常なるべし。何等が因緣なる。所謂三十七品、六波羅蜜、四無量心、骨相を觀じ、〔一四四〕阿那波那、六念處、六大を破析す。是の如き等の法、皆是涅槃を成就するの因緣なり。故に無常と名く。〔一四五〕復次に世尊、有は無常と名く、若涅槃是有ならば、亦無常なるべし。佛昔阿含の中に於て說きたまふが如し、「聲聞、緣覺、諸佛世尊皆涅槃有り」と。是の義を以ての故に名けて無常と爲す。〔一四六〕復次に世尊、可見の法、名けて無常と爲す。佛先に說きたまふが如く、「涅槃を見る者は則ち一切の煩惱を斷除することを得」と。〔一四七〕復次に世尊、譬へば虛空の諸の衆生に於て等しく障閡無きが故に、名けて常と爲すが如

【一四一】次に略問。
【一四二】次に廣問。之に法、譬、合の三段あり。
【一四三】次に莊嚴に因るが故に無常ならんと問ふ。
【一四四】阿那波那（Ānāpāna）。數息觀と譯す。出息入息を數へて心を靜むる觀法。五停心の一なり。
【一四五】次に涅槃若し有なれば亦是無常ならんと問ふ。之に三段あり、其中初に是れ有なるを示す故に無常。
【一四六】次に可見の故に無常。
【一四七】次に不平等の故に無常。之に二段あり、その中初番の譬。之に譬、合の二段あり。

し。若し涅槃をして是常等ならしめば、何が故ぞ衆生、得不得有る。涅槃若し偏ならば、諸の衆生に於て不平等ならば、則ち常と名けず。（一四八）世尊、譬へば百人共して一りの怨有り。若し此の怨を害すれば、則ち多人樂を受くるが如し。若し涅槃是平等法ならば、一人得る時多人得べし。一人諸結を斷ぜば多人も亦斷ずべし。若し是の如くならざれば云何ぞ常と名けん。（一四九）譬へば人有りて、國王、王子、父母、師長を恭敬、供養、尊重、讃歎すれば、則ち利養を得。是を常と名けざるが如く、（一五〇）涅槃も亦爾なり。名けて常と爲さず。何を以ての故に。佛、昔阿含經の中に於て、阿難に告げて言ふが如し。若し人能く涅槃を恭敬する有らば則ち結を斷じて無量の樂を受くることを得と。是の義を以ての故に名けて常と爲さず。（一五一）世尊、若し涅槃の中に常、樂、我、淨の名有らば、名けて常と爲さず。如其無ければ、云何ぞ說くべけん。』（一五二）爾の時に世尊、光明徧照高貴德王菩薩に告げたまはく『涅槃の體本無今有に非ず。若し涅槃の體本無今有ならば、則ち無漏常住の法に非じ。有佛、無佛性相常住なり。諸の衆生の煩惱覆ふを以ての故に涅槃を見ず、便ち謂つて無と爲す。菩薩、戒、定、慧を以て勤めて其の心を修し、煩惱を斷じ已りて便ち之を見ることを得。當に知るべし、涅槃は是常住の法なり。本無今有に非ず、是の故に常と爲す。（一五三）善男子、闇室の中の井、種種の七寶、人亦有るを知れども闇きが

【一四八】次に二難の難。之に喩、合の二段あり。
【一四九】次に須待の故に無常。之に二段ありて其中初に喩。
【一五〇】次に合。
【一五一】次に有名字の故に無常。
【一五二】次に佛答。これに三段あり、其中初に本無今有を答ふ。之に三段ありて初に法。
【一五三】次に譬。

故に見ず。有智の人は善く方便を知り、大明燈を然し、持ち往きて照燎して悉く之を見ることを得。是の人此に於て終に、念を水及び七寶本無今有に生ぜざるが如く、(一五四)涅槃も亦爾なり。本自ら之有りて適今に非ざるなり。煩惱の闇の故に衆生見ず。大智如來善方便を以て智慧燈を然し、諸の菩薩をして涅槃の常、樂、我、淨を見ることを得しむ。是の故に智者、此の涅槃に於て、說きて本無今有と言ふべからず。(一五五)善男子、汝莊嚴に因るが故に涅槃を成ずることを得、無常なるべしと言ふは、是亦然らず。何を以ての故に。善男子、涅槃の體は生に非ず、出に非ず。實に非ず、虛に非ず。作業生に非ず。是有漏、有爲の法に非ず。聞に非ず、見に非ず。墮に非ず、死に非ず。別異相に非ず、亦同相に非ず。往に非ず、還に非ず、去來今に非ず。一に非ず、多に非ず。長に非ず、短に非ず。圓に非ず、方に非ず。尖に非ず、邪に非ず。相に非ず、想に非ず。名に非ず、色に非ず。因に非ず、果に非ず、我我所に非ず。是の義を以ての故に、涅槃は是常恆にして變易せず。是を以て無量阿僧祇劫善法を修習し、以て自ら莊嚴して而して後乃ち見る。(一五六)善男子、譬へば地下に八味の水有りて、一切衆生而も得ること能はず。有智の人は功を施して穿掘すれば、則便之を得るが如く、涅槃も亦爾なり。(一五七)譬へば盲人の日月を見ざるも、良醫之を療

【一五四】次に合。安註に曰く、地人は眞修緣修の釋を作り、眞修は本有、緣修は始有と云ふ。三論師は正因と緣因とを以て之を釋せり。即ち正因は本有、緣因は始有なりと云云。

【一五五】次に因莊嚴を答ふ。之に二段あり、其中初に法。

【一五六】次に譬。之に三段ありて初に初番の譬。之に譬、合の二段あり。

【一五七】次に第二番の譬。之に譬、合の二段あり。

すれば、則便見ることを得。而も是の日月は是今有に非ざるが如く、涅槃も亦爾なり。先より自ら之有りて適今に非ざるなり。(一三八)善男子、人罪有りて之を囹圄に繋ぎ、久しうして乃ち出づることを得、家に還りて父母、兄弟、妻子、眷屬を見ることを得るが如く、涅槃も亦爾なり。(一三九)善男子、汝因縁の故に涅槃の法無常なるべしと言ふは、是亦然らず。何を以ての故に。善男子、因に五種有り。何等をか五つと爲す。一つには生因、二つには和合因、三つには住因、四つには増長因、五つには遠因なり。云何が生因なる。生因とは即ち是業煩惱等、及び外の諸の草木の子、是を生因と名く。云何が和合因なる。善と善心と和合し、不善と不善心と和合し、無記と無記心と和合するが如し。是を和合因と名く。云何が住因なる。下に柱有れば屋則ち墮ちず。山河、樹木の大地に因るが故に、而も住立を得。内に四大無量の煩惱有りて衆生住することを得るが如し。是を住因と名く。云何が増長因なる。衣服、飲食等に因縁するが故に、衆生をして増長せしむ。外の種子火の燒かざる所、鳥の食せざる所なれば、則ち増長を得るが如く、諸の沙門、婆羅門等、和上、善知識等に依因して而も増長を得るが如く、父母に因りて子増長を得るが如し。是を増長因と名く。云何が遠因なる。譬へば呪に因りて鬼害すること能はず、毒中つること能はず。國王に依憑すれば盗賊有ること無きが如く、芽の地、水、火、風等に依因るが

【一三八】次に第三番の譬。之に譬合の二段あり。

【一三九】次に涅槃は是有なる答ふ。之に二段ありて初に五因の文。これ因縁三因に似たり。生因は即ち報因、和合因は習因、住因は依因、増長因は増上縁、遠因は即ち縁なり。唯た次第縁はこの中に存せず。

如く、水鑽及び人酥の遠因と爲るが如く、明色等の識の遠因と爲り、父母の遺體衆生の遠因と爲るが如く、時節等の如き、悉く遠因と名く。善男子、涅槃の體は是の如き等の五因の所成に非ず、云何ぞ當に是無常因と言ふべき。(二六〇)復次に善男子、復二因有り。一つには作因、二つには了因なり。陶師の輪繩の如し、是を作因と名く。燈燭等の闇中の物を照すが如し、是を了因と名く。善男子、大涅槃は作因に從ひて有らず、唯了因に從ふ。了因とは所謂三十七の助道法、六波羅蜜、是を了因と名く。善男子、布施は是涅槃の因にして、大涅槃の因に非ず。檀波羅蜜は乃ち名けて大涅槃の因と爲すことを得。三十七品は是涅槃の因にして大涅槃の因に非ず。無量阿僧祇の助菩提法は乃ち名けて大涅槃因と爲すことを得。」(二六一)爾の時に光明徧照高貴德王菩薩摩訶薩佛に白して言さく、『世尊、云何が布施は名けて檀波羅蜜と爲すことを得ざる、云何が布施は而も名けて檀波羅蜜と爲すことを得る。乃至般若は云何が般若波羅蜜と名くることを得ざる、云何が般若波羅蜜と名くることを得る。云何が涅槃と名く、云何が大涅槃と名く。』(二六二)佛の言はく、『善男子、菩薩摩訶薩方等大般涅槃を修行するに布施を聞かず、布施を見ず。檀波羅蜜を聞かず、檀波羅蜜を見ず。乃至般若を聞かず、般若を見ず。般若波羅蜜を聞かず、般若波羅蜜を見ず。涅槃を聞かず、涅槃を見ず。大涅槃を聞かず、大涅槃を見ず。菩薩摩訶薩大涅槃を修するに法界を知見し、

【二六〇】次に二因。

【二六一】次に雙べて因果を問ふ。之に二段あり、其中初に問之に問因、問果の二段あり。

【二六二】次に佛答。これに二段あり、其中初に雙べて因果を答ふ。

實相空にして所有無きを解了し、和合覺知の相有ること無し。無漏相、無所作相、如幻化相、熱時燄相、乾闥婆城空虛の相を得。菩薩爾の時に是の如きの相を得、貪恚癡無く、不聞不見なり。是を菩薩摩訶薩の眞實の相、實相に安住すと名く。菩薩摩訶薩自ら、此は是檀、此は是檀波羅蜜、乃至此は是般若、此は是般若波羅蜜、此は是涅槃、此は是大涅槃と知る。〔一六三〕善男子、云何が是施にして波羅蜜に非ざる。乞者有るを見て然して後乃ち與ふ。是を名けて施にして波羅蜜に非ずと爲す。若乞者無きに開心して自ら施す。是を則ち名けて檀波羅蜜と爲す。若時時に施す。是を名けて施にして波羅蜜に非ずと爲す。若常施を修す。是を則ち名けて檀波羅蜜と爲す。若他に施し已りて還つて悔心を生ず。是を名けて、施にして波羅蜜に非ずと爲す。施し已りて悔いず。是を則ち名けて檀波羅蜜と爲す。菩薩摩訶薩財物の中に於て四怖心を生ず。王賊、水火、歡喜施與す。是を則ち名けて檀波羅蜜と爲す。若報を望んで施す。是を名けて、施にして波羅蜜に非ずと爲す。施して報を望まず。是を則ち名けて檀波羅蜜と爲す。〔一六四〕若は恐怖、名聞利養、家法相續、天上の五欲の爲に、憍慢の爲の故に、勝慢の爲の故に、知識の爲の故に、來報の爲の故に、市易の法の如くす。善男子、人樹を種ゑて蔭涼を得るが爲に、華果及以材木を

【一六三】次に別して因果を答ふ。之に三段あり、其中初に因。之に又二段あり、其中初に順因を明す。之に又二言ありて初に正しく答ふ。之に又二段ありて初に涅槃を分つ。これに有乞無乞、時施常施、生悔不悔、望報不望に約する五段あり。

【一六四】次に違を明す。その意は相あり得あれば度の義にあらず、無相無得を名けて度と爲す。その中廣く一の檀度を擧げて首とす、餘の五度は悉く雜華經を指して後に讓れり。雜華は卽ち華嚴經なり。

得るが爲にするが如し。若し人是の如き等の施を修行せば、是を名けて、施にして波羅蜜に非ずと爲す。菩薩摩訶薩是の如く大涅槃を修行する者は、施者、受者、財物を見ず、時節を見ず、福田及び非福田を見ず。因を見ず、縁を見ず、果報を見ず。作者を見ず、受者を見ず。多を見ず、少を見ず。淨を見ず、不淨を見ず。受者、己身、財物を輕んぜず。見者を見ず、不見者を見ず。己他を計せず、唯方等大般涅槃常住の法の爲の故に、布施を修行す。一切諸の衆生を利するが爲の故に、而も布施を行す。一切衆生の煩惱を斷ずるが爲の故に布施を行ず。諸の衆生の受者施者、財物を見ざらんが爲の故に布施を行ず。善男子、譬へば人有りて大海水に墮つるに死屍を抱持すれば則ち度脱を得るが如し。菩薩摩訶薩大涅槃を修して布施を行ずる時、亦復是の如く、彼の死屍の如し。善男子、譬へば人有りて深獄に閉在す。門戸堅牢、唯廁孔有り。便ち中より出でて無閡處に至るが如く、菩薩摩訶薩の大涅槃を修して布施を行ずる時も亦復是の如し。善男子、譬へば貴人の恐怖急厄して更に恃怙無く、旃陀羅に依るが如く、菩薩摩訶薩の大涅槃を修して布施を行ずるも亦復是の如し。善男子、譬へば病人の苦惱を除き安樂を得んが爲の故に、不淨を服食するが如く、菩薩摩訶薩の大涅槃を修して布施を行ずるも亦復是の如し。善男子、婆羅門の穀の踊貴に値ひ、壽命の爲の故に狗肉を食噉せんが如く、菩薩摩訶薩の大涅槃を修して布施を行ずるも亦復是の如し。善男子、大涅槃の中是の如きの事、無量劫より來た不聞にして而も聞す。尸羅、尸羅波羅蜜、乃至般若、般若波羅蜜、華嚴經の中に廣く説くが如し。

(一六五)善男子、云何が菩薩摩訶薩大涅槃を修して聞かざるを而も聞く。十二部經、其の義深邃、昔來聞かず。今是の經に因りて具足して聞くことを得たり。先に聞くことを得と雖も、唯名字を聞き、而も今此の大涅槃經に於て乃ち義を聞くことを得たり。(一六六)聲聞、緣覺は唯十二部經の名字を聞きて其の義を聞かず。今此の經に於て具足して聞くことを得。是を不聞而聞と名く。善男子、一切の聲聞、緣覺の經の中には、曾て佛、常、樂、我、淨有りて、畢竟じて滅せず。三寶佛性差別の相無し。四重禁を犯し、方等經を謗り、五逆罪を作り、及び一闡提悉く佛性有るを聞かず。今此の經に於て而も之を聞くことを得。是を不聞而聞と名く。」

【一六五】次に經を歎ず。之に二段ありて初に菩薩を結して歎を爲す。

【一六六】次に二乘を結して歎を爲す。

# 巻の第二十

## 高貴德王菩薩品の二

(一)光明遍照高貴德王菩薩、佛に白して言さく、「世尊、若し重禁を犯し、方等經を謗り、五逆罪を作る一闡提等、佛性有らば、是等云何ぞ復地獄に墮する。世尊、若し是等をして佛性有らしめば、云何ぞ復常、樂、我、淨無しと言ふ。(二)世尊、若し善根を斷ずるを一闡提と名くれば、善根を斷ずる時所有の佛性云何ぞ斷ぜざらん。佛性若し斷ぜば云何ぞ復常、樂、我、淨と言はん。如し其れ斷ぜざれば何が故ぞ名けて一闡提と爲すや。(三)世尊、犯四重禁は名けて不定と爲す。謗方等經、作五逆罪、及び一闡提悉く不定と名く。是の如き等の輩若し決定せば、云何ぞ阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得ん。須陀洹、乃至辟支佛を得るも亦不定と名く。若し須陀洹より辟支佛に至りて是決定せば、亦阿耨多羅三藐三菩提を成ずべからず。世尊、若し犯四重不決定ならば須陀洹、乃至辟支佛も亦不決定なり。是の如く不定にして諸佛如來も亦復不定なり。若し佛不定ならば涅槃の體性も亦復不定、一切法に至りても亦復不定なり。云何

【一】第二に三問を明す。之に問、答、領解の三段あり。問中に[illegible]は六問ありとし、[illegible]は五問ありとす。今後に從ふ。前の五問はその意[illegible]三なり。前の兩問は闡提を問ひ、次の兩問は一闡提を問ひ、後の一問は不定を問ふ。其中前の兩問は闡提を問ふ。

【二】次の兩は一闡提を問ふ。

【三】次の一は不定を問ふ。

が不定なる。若一闡提、一闡提を除くときは則ち佛道を成ず。諸佛如來も、亦是の如くなるべし。涅槃に入り已るも、亦還って出でて涅槃に入らざるべし。若是の如くば涅槃の性則ち不定と爲る。不決定の故に、當に知るべし、常、樂、我、淨有ること無し。云何ぞ説きて一闡提等當に涅槃を得べしと言はん。』

(四)爾の時に世尊、光明徧照高貴德王菩薩に告げて言はく『善い哉善い哉善男子、無量の衆生を利益し、安樂を得しめんと欲するが爲に、諸の世間を憐愍念するが故に、發菩提心の諸の菩薩を增長せんと欲するが爲の故に、是の如きの問を作す。

(五)善男子、汝已に過去の無量の諸佛世尊に親近し、諸佛の所に於て諸の善根を種う。久しく已に菩提の功德を成就し、衆魔を降伏して其をして退散せしむ。已に無量無邊の衆生を教へて悉く阿耨多羅三藐三菩提に至ることを得しむ。久しく已に諸佛如來の有らゆる甚深祕密の藏に通達し、已に過去無量無邊恆河沙等の諸佛世尊に、是の如きの甚深微密の義を問ふ。(六)我都て一切世間の、若は人、若は天、沙門、婆羅門、若は魔、若は梵の、能く如來に是の義を咨問する有るを見ず。(七)今當に誠心に諦かに聽き諦かに聽くべし、吾當に汝が爲に分別して演説すべし。(八)善男子、一闡提は亦決定せし。若し決定せば、是の一闡提は終に阿耨多羅三藐三菩提を得ること能

---

【四】是より答。これに讃問、答問の二段あり、その中初に問を歎ず。之にまた四段ありて先づ現德を歎ず。

【五】次に往因を歎ず。

【六】次に問の人、人に超過せるを歎ず。

【七】次に誡聽許說。

【八】是より問を答ふ。之に二段あり、其中初に第五の不定の問を答ふ。之に又問、答、結の三段あり。

【九】次に第二の斷善の問を答へ、併て第一第二の罪人の問に答ふ。之に二段あり、其中初

はず。不決定を以て、是の故に能く得。(九)汝が言ふ所の如き佛性斷せずんば云何ぞ一闡提善根を斷ずとは、善男子、善根に二種有り、一つには(一〇)内、二つには外なり。佛性は内に非ず外に非ず。是の義を以ての故に佛性は斷せず。(一一)復二種有り。一つには有漏、二つには無漏なり。佛性は有漏に非ず無漏に非ず。是の故に斷ぜず。(一二)復二種有り。一つには常、二つには無常なり。佛性は常に非ず無常に非ず。是の故に斷ぜず。(一三)若是を斷ぜば則ち還つて得べし、若還つて得ざれば、則ち不斷と名く。若已得を斷ずれば一闡提と名く。(一四)四重を犯する者も亦是不定なり。若決定せば犯四重禁は終に阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず、方等經を謗ずるも亦復不定なり。若決定せば謗正法人は終に阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。五逆罪を作るも亦復不定なり。若決定せば五逆の人終に阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。(一五)色と色相との二つ倶に不定なり。香味觸相、生相、無明相に至る、陰入界相、二十五有相、四生、乃至一切諸法も、皆亦不定なり。(一六)善男子、譬へば幻師の大衆の中に在りて、四兵、車、歩、象馬を化作し、諸の瓔珞、嚴身の具、城邑聚落、山林の樹木、泉池河井を作り、彼の

[illegible]に正して、第三を答ふ。之に又三段ありて初に内外に約す。

【一〇】内外有漏無漏常無常、[illegible]外と爲し、[illegible]を[illegible]と爲し、世間な有漏といひ、出世を無漏といひ、有爲の故に無常、無爲の故に是れ常。佛性中道は此等二邊に非ざるが故に斷ず可らず。

【一一】次に漏無漏に約す。

【一二】次に常無常に約す。

【一三】次に兼ねて第一第二を答ふ。

【一四】次に重ねて第五不定の問[illegible]、兼て[illegible]。之に二段あり、其中初に[illegible]不定を明す。之に又四段ある中初に[illegible]人の不定。

【一五】次に諸法の不定。之に二[illegible]

【一六】次に[illegible]、之に三[illegible]其中の[illegible]

衆中に於て、諸の小兒の智慧有ること無き有りて覩見するの時、悉く以て實と爲し、其の中の智人は、其の虛誑幻力を以ての故に人の眼目を惑はすと知るが如く、(一七)善男子、一切の凡夫、乃至聲聞、辟支佛等、一切法に於て定相有りと見るも亦復是の如し。諸佛菩薩は一切法に於て定相を見ず。(一八)善男子、譬へば小兒の盛夏の月に於て熱時の燄を見、之を謂つて水と爲し、有智の人は此の熱燄に於ける、終に實水の想を生ぜず、但是虛燄人の眼目を誑す、實に是水に非ざるが如し。(一九)一切の凡夫、聲聞、緣覺の一切法を見るも亦復是の如し、悉く是實と謂ふ。諸佛菩薩は一切法に於て定相を見ず。(二〇)善男子、譬へば山㵎、聲に因りて響有り。小兒之を聞きて是實聲と謂ひ、有智の人は定實無く、但聲相有りて耳識を誑すと解するが如し。(二一)善男子、一切の凡夫、聲聞、緣覺の一切法に於けるも亦復是の如く、定相有りと見、諸の菩薩等は諸法悉く定相無く、是無常相、空寂等相、無生滅相を解了す。是の義を以ての故に、菩薩一切法是無常相を見ん。善男子、亦定相有り。云何が定と爲す。常、樂、我、淨なり。何れの處に在るや。所謂涅槃なり。(二二)善男子、(二三)須陀洹果も亦復不定なり、不決定の故に八萬劫を經て阿耨多羅三藐三菩提の心を得。斯陀含果も亦復不定なり、不決定の故に六萬劫を經て阿耨多羅三藐三菩提の心を得。阿那含果も亦復不定なり、不決定の故に六

---

【一七】次に合。

【一八】次に燄。之に二段ありて初に喩。

【一九】次に合。

【二〇】次に響。之に二段ありて初に喩。

【二一】次に合。

【二二】次に善人の不定。

【二三】須陀洹果も不定等の方便道中の如來は並びに不定なれども法身の本地は定んで凡爲らず、是れ名けて定となす。

萬劫を經て阿耨多羅三藐三菩提の心を得。阿羅漢果も亦復不定なり、不決定の故に二萬劫を經て阿耨多羅三藐三菩提の心を得。辟支佛道も亦復不定なり、決定せざるが故に十千劫を經て阿耨多羅三藐三菩提の心を得。(二四)善男子、如來今拘尸城、娑羅雙樹の間に於て師子の牀に偃臥し、涅槃に入らんと欲するを示現して、諸の未だ阿羅漢果を得ざる衆弟子等、及び諸の力士をして大憂苦を生ぜしむ。亦天、人、阿脩羅、乾闥婆、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽等をして大いに供養を設く。諸人をして千端の氈を以て其の身を纏ひ裹み、七寶もて棺を爲り、香油を盛り滿て、諸の香木を積み、火を以て之を焚かしめんと欲す。唯二端の燒くことを得べからざるを除く。(二五)一つには襯身、二つには最も外に在り。諸の衆生の爲に舍利を分散して以て八分と爲す。一切の有らゆる聲聞の弟子、咸く如來涅槃に入ると言ふ。當に知るべし、如來も亦必定して涅槃に入らず。何を以ての故に。如來常住にして變易せざるが故なり。是の義を以ての故に、如來涅槃も亦復不定なり。(二六)善男子、當に知るべし、如來も亦復不定なり。如來は天に非ず。何を以ての故に。四種の天有り。一つには世間天、二つには生天、三つには淨天、四つには義天なり。世間天とは諸の國王の如し、生天とは四天王より、乃至非有想非無想天なり、淨天とは須陀洹より辟支佛に至る、義天とは十住の菩薩摩訶薩等なり。何の義を以

【二四】次に如來の不定。
【二五】一に襯身二に最在外。之に兩釋あり。一に云く、襯身は本地に譬へ、在外は迹應に譬ふ、此の二滅せず。二に云く、襯身は佛智の微細の體に譬へ、在外は神通の行に屬するに譬ふ。
【二六】是より廣く不定を明す。之に二段あり、其中初に當門を唱ふ。

ての故に、十住の菩薩を名けて義天と爲す。能善く諸法の義を解するを以ての故なり。云何が義と爲す。一切法是空の義を見るが故なり。善男子、如來王に非ず。亦四天、乃至非有想非無想天、須陀洹より辟支佛、十住の菩薩に至るに非ず。是の義を以ての故に、如來は天に非ず。然るに諸の衆生も亦復佛を稱して天中天と爲す。是の故に如來は天に非ず、非天に非ず。人に非ず、非人に非ず。鬼に非ず、非鬼に非ず。地獄、畜生、餓鬼に非ず、非地獄、畜生、餓鬼に非ず。衆生に非ず、非衆生に非ず。法に非ず、非法に非ず。色に非ず、非色に非ず。長に非ず、非長に非ず。短に非ず、非短に非ず。相に非ず、非相に非ず。心に非ず、非心に非ず。有漏に非ず、無漏に非ず。有爲に非ず、無爲に非ず。常に非ず、無常に非ず。幻に非ず、非幻に非ず。名に非ず、非名に非ず。定に非ず、非定に非ず。有に非ず、無に非ず。説に非ず、非説に非ず。如來に非ず、不如來に非ず。是の義を以ての故に如來不定なり。

（二七）善男子、何が故ぞ如來を世天と名けざる。世天は卽ち是諸王なり。如來は久しく無量劫の中に於て已に王位を捨つ。是の故に王に非ず。非非王とは、如來は迦毘羅城の淨飯王の家に生る、是の故に非王に非ず。非生天とは、如來は久しく已に諸有を離るるが故に、是の故に生天に非ず。非生天に非ず。何を以ての故に。兜率天に昇り閻浮提に下るが故に、是の故に如來は非生天に非ず。亦淨天に非ず。何を以ての故に。如來は是須陀洹に非ず、乃至辟支佛に非ず、是の故に如來は、是淨天に非ず。

〔二三〕次に解釋。これに二十章門あり、但し十六を釋して四門を釋せず。初に天非天を釋す。

非淨天に非ず。何を以ての故に。世間の八法の染むること能はざる所、猶し蓮華の塵水を受けざるが如し、是の故に如來は非淨天に非ず。亦義天に非ず。何を以ての故に。如來は是十住の菩薩に非ざるが故に、是の故に如來は是義天に非ず。非義天に非ず。何を以ての故に。如來は常に十八空義を修するが故に、是の故に如來は非義天に非ず。(二八)如來は人に非ず。何を以ての故に。如來は久しく無量劫の中に於て人有を離るるが故に、是の故に人に非ず。亦非人に非ず。何を以ての故に。迦毗羅城に生るるが故に、是の故に非人に非ず。(二九)如來は鬼に非ず。何を以ての故に。一切衆生を害せざるが故に、是の故に鬼に非ず。亦非鬼に非ず。何を以ての故に。亦鬼の像を以て衆生を化するが故に、是の故に非鬼に非ず。(三〇)如來は亦地獄、畜生、餓鬼に非ず。何を以ての故に。如來は久しく諸の惡業を離るるが故に、是の故に地獄、畜生、餓鬼に非ず。亦非地獄、畜生、餓鬼に非ず。何を以ての故に。如來も亦復三惡諸趣の身を受くるを現じて衆生を化するが故に、是の故に非地獄、畜生、餓鬼に非ず。(三一)亦衆生に非ず。何を以ての故に。久しく已に衆生の性を捨離するが故に、是の故に如來は衆生に非ず。亦非衆生に非ず。何を以ての故に。或時に衆生相を演說するが故に、是の故に如來は非衆生に非ず。(三二)如來は法に非ず。何を以ての故に。諸法は各各別異の相有り、如來は爾らず、唯一相有り、是の故に法に非ず。亦非法に非ず。何を以ての故に。如來は法界の故に、是の故

【二八】次に人非人。
【二九】次に鬼非鬼。
【三〇】次に三惡非三惡。
【三一】次に衆生非衆生。
【三二】次に法非法。
【三三】次に色非色。

に非法に非ず。(二三)如來は色に非ず。何を以ての故に。十色入るも攝せざる所なるが故に、是の故に色に非ず。亦非色に非ず。何を以ての故に、身に三十二相、八十種好有るが故に、是の故に非色に非ず。(二四)如來は長に非ず。何を以ての故に。諸色を斷ずるが故に、是の故に長に非ず。亦非長に非ず。何を以ての故に。一切世間は能く頂髻相を見ること無きが故に、是の故に非長に非ず。(二五)如來は短に非ず。何を以ての故に。久しく已に憍慢結を遠離するが故に、是の故に短に非ず。亦非短に非ず。何を以ての故に。(二六)瞿師長者の爲に(二七)三尺身を示すが故に、是の故に非短に非ず。(二八)如來は相に非ず。何を以ての故に。久しく已に諸相の相を遠離するが故に、是の故に相に非ず。亦非相に非ず。何を以ての故に。善く諸相を知るが故に、是の故に非相に非ず。(二九)如來は心に非ず。何を以ての故に。虛空相の故に、是の故に心に非ず。亦非心に非ず。何を以ての故に。十力心法有るが故に、亦能く他の衆生心を知るが故に、是の故に非心に非ず。(三〇)如來は有爲に非ず。何を以ての故に。常、樂、我、淨の故に、是の故に有爲に非ず。亦無爲に非ず。何を以ての故に。來去、坐臥有りて涅槃を示現するが故に、是

【二四】次に長非長。
【二五】次に短非短。
【二六】瞿師。麗本瞿師羅に作る。瞿師羅(コーキラ)は美音と譯す。長者の名。本と鳥の名なり。
【二七】三尺身等。河西此の因緣を說いて云く、『其家兒なし、一子を産す。長三尺にして死す。父母悲苦して性を失す。佛爲めに兒像を現ず。父母兒を見て本心を還得し、兒に謂つて言く、「我汝死せりと思ふに、汝何の處より來れるか」。答へて言く、「死處よりして來り、因緣暫く會して身樂緣に屬し、四大假りに合す。衆緣を觀ずるに何者か是れ身ならんや」と。かく種種に說法するに惑心卽ち斷ず。便ち三尺の佛身光明の色相を現ずるに長者阿那含を得たり。』
【二八】次に相非相。
【二九】次に心非心。

の故に無爲に非ず。（四一）如來は常に非ず。何を以ての故に。身に分有るが故に、是の故に常に非ず。云何が非常なる。知有るを以ての故なり。常法は知無きこと猶し虛空の如し。如來は知有り、是の故に常に非ず。云何が非常なる。言說有るが故なり。常法は言無く、亦虛空の如し。如來は言有り、是の故に無常なり。姓氏有るが故に、名けて無常と曰ふ。無姓の法は乃ち名けて常と爲す。虛空常なるが故に姓氏有ること無し。如來は姓有り、（四二）瞿曇氏を姓とす。是の故に無常なり。父母有るが故に、名けて無常と曰ふ。父母無き者は乃ち名けて常と曰ふ。虛空常なるが故に父母有ること無し。佛は父母有り、是の故に無常なり。四威儀有り、名けて無常と曰ふ。四威儀無し、乃ち名けて常と曰ふ。虛空常なるが故に、四威儀無し。佛に四儀有り、是の故に無常なり。常住の法は方所有ること無し。虛空常なるが故に、方所有ること無し。如來は東天竺地に出在して舍婆提、或は王舍城に住す、是の故に無常なり。是の義を以ての故に、如來は常に非ず。亦非常に非ず。何を以ての故に。生永く斷ずるが故なり。生有るの法を名けて無常と曰ひ、生無きの法は乃ち名けて常と爲す。如來は生無し、是の故に常と爲す。常法は無姓、有姓の法は名けて無常と曰ふ。如來は生無く姓無し。無生無姓の故に常なり。有常の法は一切の處に徧うす、猶し虛空の處として有らざる無きが如し。如來も亦爾なり、一切の處に徧うす。是の故に常と爲す。無常の法は或は此に有と言ひ、或は彼に無と言ふ。如來は爾

【四〇】次に非有爲非無爲。

【四一】次に非常非無常。

【四二】瞿曇。梵に（Gautama）と言ひ、純淑と譯す。釋種の姓なり。

らず、說きて是の處有、彼の處無と言ふべからず。是の故に常と爲す。無常の法は時有りて是有、時有りて是無なり。如來は爾く有時是有、有時是無ならず。是の故に常と爲す。常住の法は無名無色なり。虛空は常なるが故に、名無く色無し。如來も亦爾く無名無色なり、是の故に常と爲す。常住の法は因無く果無し。虛空常なるが故に因無く果無し。如來も亦爾く因無く果無し。是の故に常と爲す。常住の法は三世を攝せず。如來も亦爾なり、三世を攝せず、是の故に常と爲す。(四三)如來は幻に非ず。何を以ての故に。永く一切虛誑の心を斷ずるが故に、是の故に幻に非ず。亦非幻に非ず。何を以ての故に。如來或時此の一身を分ちて無量身と爲し、無量の身復一身と爲す。山壁直ちに過ぎて障閡有ること無し。水を履むこと地の如く、地に入ること水の如く、空を行くこと地の如く、身煙燄を出すこと大火聚の如し。雲雷震動する其の聲畏るべし。或は城邑、聚落、舍宅、山川、樹木と爲り、或は大身と作り、或は小身と作る。男身、女身、童男女身。是の故に如來も亦非幻に非ず。(四四)如來は定に非ず。何を以ての故に。如來は此の拘尸城、娑羅雙樹の間に於て般涅槃に入ることを示現するが故に、是の故に定に非ず。亦非定に非ず。何を以ての故に。常、樂、我、淨の故に、是の故に如來も亦非定に非ず。(四五)如來は有漏に非ず。何を以ての故

---

【四三】次に幻非幻。

【四四】次に定非定。

【四五】次に漏非漏。之に二段あり、其中初に非有漏を明す。之に又二段ありて先づ三漏を明す。

【四六】三漏等。欲界の惑は重きが故に獨り一と爲し、色、無色兩界は輕きが故に合して一と爲し、無明は一切の惑の根本なれば通共して一となす。

【四七】次に七漏を明す。之に六段あり、その中第一に目漏を釋す。之に又二段ありて初に

に。三漏を斷ずるが故に、故に有漏に非ず。(四六)三漏とは、欲界の一切煩惱、無明を除く、是を欲漏と名く。色、無色界の一切の煩惱、無明を除く、是を有漏と名く。三界の無明を無明漏と名く。如來は永く斷ず、是の故に非漏なり。

(四七)復次に一切の凡夫に有漏を見ず。云何が凡夫有漏を見ざる。一切の凡夫は未來世に於て悉く疑心有り。未來世の中、當に身を得べきや、身を得ざるや。過去世の中身本有りや、本無しと爲すや。現在世の中是の身有りや、是の身無きや。若我有らば、是色なりや、非色なりや。色非色なりや、非色非非色なりや。想なりや、非想なりや。想非想なりや、非想非非想なりや。是の身他に屬するや、他に屬せずや。屬不屬なりや、非屬非不屬なりや。有命無身なりや、有身無命なりや。有身有命なりや、無身無命なりや。身と命と有常なりや、無常なりや。常無常なりや、非常非無常なりや。身と命と自在の作なりや、時節の作なりや、無因の作なりや、世性の作なりや、微塵の作なりや、法非法の作なりや、士夫の作なりや、煩惱の作なりや、父母の作なりや。我が心に住するや、眼中に住するや、身中に徧滿するや。何よりして來るや、去りて何くに至るや。誰か生ずるや、誰か死するや。我過去に於て是婆羅門姓なりや、是刹利姓なりや、是毘舍姓なりや、是首陀姓なりや。當に未來に於て何の姓を得べきや。我が此の身は過去の時是男身なりや、是女身なりや、畜生身なりや。若我生を

債く疑心を聞す。七漏とは一に見、二に思惟、三に根、四に惡、五に親近、六に受、七に念なり。前の兩は是れ漏體、後の五は是れ漏緣。見は利使、思は鈍使、根は内の五根、惡は外の惡法、[illegible]、受は[illegible]の法を受取することなり、念は善惡の念念斷えざるを云ふ。

殺さんに當に罪有るべきや、當に罪無かるべきや。乃至酒を飮み當に罪有るべきや、當に罪無かるべきや。我自ら作すや、他作と爲んや。我報を受くるや、身報を受くるや。是の如きの疑見無量の煩惱、衆生心を覆ふ。〔四八〕是の疑見に因り六種の心を生ず。決定有我、決定無我、〔四九〕我見我、我見無我、無我見我、我作我受我知。是を邪見と名く。如來永く是の如きの無量の見漏根本を拔く、是の故に非漏なり。善男子、菩薩摩訶薩大涅槃に於て聖行を修する者亦永く是の如く諸漏を斷ずるを得。諸佛如來は常に聖行を修す、是の故に漏無し。

〔五〇〕善男子、凡夫は善く五根を攝すること能はざれば、則ち三漏有り。惡に牽かれて不善處に至る。善男子、譬へば惡馬の其の性佷戾にして、能く乘者をして險惡の處に至らしむるが如く、善く此の五根を攝すること能はざる者も亦復是の如し、人をして涅槃の善道を遠離して諸の惡處に至らしむ。譬へば惡象の心未だ調順ならざるに、人の之に乘ずる有らば意に隨ひて去らず。城邑を遠離して空曠の處に至るが如し。善く此の五根を攝することを能はざる者も亦復是の如し、人を將ゐて涅槃の城邑を遠離して生死曠野の處に至る。善男子、譬へば佞臣の、王を敎へて惡を作らしむるが如く、五根の佞臣も亦復是の如し。常に衆生を敎へて無量の惡を造らしむ。善男子、譬へば惡子の、師長、父母の敎勅を受けざ

【四八】次に別して見惑を明す。

【四九】我見我等。假我に於て眞我ありと計するを我見我、假我の上に此我無しと計するを我見無我、陰身の上に眞我有りと計するを無我見我、陰身の上に作者有りて能く事を爲すと計するを我作、陰身の上に後有の果を受くる義ありと計するを我受、陰身の上に五根あり能く五塵を知ると計するを我知と名く。

【五〇】次に第三に根漏を釋す。之に三段ありて初に凡夫は根に因りて漏を起す。

れば、則ち惡の造らざる無きが如く、五根を調へざるも亦復是の如し。師長の善言教敕を受けず、惡の造らざる無し。善男子、凡夫の人は五根を攝せず。常に地獄、畜生、餓鬼に賊害せらる。亦怨盜の害善人に及ぶが如し。善男子、凡夫の人は五根を攝せざれば五塵に馳騁す。譬へば牧牛の善く守護せざれば、人の苗稼を犯すが如く、凡夫の人は五欲を攝せず、常に諸有に在りて多く苦惱を受く。(五一)善男子、菩薩摩訶薩の大涅槃を修し聖行を行ずる時、常に能善く調へて五根を守攝す。貪欲、瞋恚、愚癡、憍慢、嫉妬を怖畏し、一切諸の善法を得るが爲の故なり。善男子、若能善く此の五根を守る者は、則ち能く心を攝す。若能く心を攝すれば則ち五根を攝す。譬へば人有りて王を擁護すれば則ち國土を護る。國土を護る者は則ち王を護るが如く、

【五二】次に菩薩は偏らざるを明す。

菩薩摩訶薩も亦復是の如し。若是の大涅槃經を聞くことを得れば則ち智慧を得。智慧を得るが故に則ち專念を得。五根若散ずれば念則ち能く止す。何を以ての故に。是念慧の故なり。善男子、善牧者、設牛東西して他の苗稼を噉はば、則便遮止して犯し暴らさしめざるが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。念慧の因緣の故に五根を守攝して馳散せしめず。菩薩摩訶薩念慧有る者は、我相を見ず、我所相を見ず、衆生及び所受用を見ず。一切法を見ること法性の相に同じ。土石、瓦礫の相を生ぜず。譬へば屋舍の衆緣に從ひて生じて定性有ること無きが如し。諸の衆生を見るに、四大、五陰の成立する所、推すに定性無し。定性無きが故に菩薩中に於て貪著を生ぜず。一切の凡夫は衆生有りと見る、故に煩

惱を起す。菩薩摩訶薩大涅槃を修して念慧有るが故に、諸の衆生に於て貪著を生ぜず。復次に菩薩摩訶薩大涅槃經を修する者、衆生の相に著して種種の法相を作らず。善男子、譬へば畫師の衆の雜彩を以て衆像の、若は男、若は女、若は牛、若は馬を畫作す。凡夫は無知にして之を見れば則ち男女等の相を生じ、畫師は男女有ること無きを了知するが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如し、法の異相に於て一相を觀じて終に衆生の相を生ぜず。何を以ての故に。念慧有るが故なり。菩薩摩訶薩の大涅槃を修する、或時端正の女人を覩見するに終に貪著の心を生ぜず。何を以ての故に。善く相を觀ずるが故なり。善男子、菩薩摩訶薩は五欲の法に歡樂有ること無く、暫くも停ることを得ざるを知る。犬の枯骨を齧むが如く、人の火を持ちて風に逆ひて行くが如く、炭毒蛇の夢中の所得、路邊の果樹の多人に擲たるが如く、亦段肉の衆鳥競ひ逐ふが如く、水上の泡、水に畫けるの迹の如く、織の經盡くるが如く、囚の市に趣くが如く、猶し假借の勢久しきことを得ざるが如し。欲を觀ずるに是の如く諸の過惡多し。復次に菩薩諸の衆生を觀ず。色、香、味、觸の因緣を爲すの故に、昔無數無量劫より來た常に苦惱を受く。(三二)一一の衆生一劫の中に積む所の身骨は王舍城の(三三)毗富羅山の如く、飮む所の乳汁は四海水の如く、身より出す所の血復是より多し。父母、兄弟、妻子、眷屬、命終に哭泣して出す所の目淚は四大海より多し。盡地の草木斬

【三二】一一の衆生等。智度論二十八に云く、一劫中の一人の積骨を計るに、鞞浮羅大山に過ぐと。亦此の意なり。

【三三】毗富羅(Vipula)。廣博と譯す、王舍城北門の西に在る山の名。

りて寸籌を爲り、以て父母を數ふとも亦盡すこと能はじ。無量劫より來た或は地獄、畜生、餓鬼に在りて受くる所の【五四】行苦稱げて計ふべからず。此の大地を丸じて、猶し棗等の如くせんも窮極すべからず。生死無量にして盡すことを得べからず。菩薩摩訶薩は是の如く、深く一切衆生欲の因緣の故に苦を受くること量無きを觀ず。菩薩是の生死行苦を以ての故に念慧を失はず。善男子、譬へば世間に諸の大衆【五五】二十五里に滿つる有り。王一臣に勅す、「一つの油鉢を持し、中を經由し、過ぎて傾覆せしむること莫れ。若一渧を棄てば當に汝が命を斷つべし。」復一人を遣し、刀を拔きて後に在り、隨ひて之を怖れしむ。臣王教を受け心を盡して堅く持し、爾所の大衆の中を經歷して、可意の五邪欲等を見ると雖も、心常に念言す、「我若放逸して彼の邪欲に著せば、當に所持を棄てて命全濟せざるべし。」是の人是の怖の因緣を以ての故に、乃至一渧の油を棄てざるが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。生死の中に於て念慧を失はず。不失を以ての故に、五欲を見ると雖も心に貪著せず。若淨色を見るも色相を生せず、唯苦相を觀ず。乃至識相も亦復是の如し。生相を作さず、滅相を作さず、因相を作さず、和合相を觀ず。菩薩爾の時に五根清淨なり。根淸淨の故に護根戒具す。一切の凡夫は五根不淨なれば善く持すること能はず、名けて根漏と曰ふ。菩薩は永く斷ず、是の故に無漏なり。【五六】如來は

【五四】行苦に就て二解あり。一に三苦中の行苦、此の苦最も通ずとす。二には行は是れ無常、苦は但だ苦なり、一と爲す可らずとす。

【五五】二十五里…油鉢…等。二十五里は二十五有に、油は戒に、鉢は色心に、不棄一渧は一戒にも犯さざるに、王は[illegible]に、臣は行人に、拔刀在後は無常に譬ふ。

拔出して永く根本を斷ず、是の故に非漏なり。

(五七)復次に善男子、復離漏有り。菩薩無上甘露の佛界を爲さんと欲するが故に惡漏を離る。云何が離と爲す。若能く大涅槃經を修行して書寫、受持し、讀誦、解說し、其の義を思惟せば、是を名けて離と爲す。何を以ての故に。善男子、我都て十二部經の能く惡漏を離れ、此の方等大涅槃經の如くなるを見ず。善男子、譬へば明師の諸弟子を教へ、諸弟子の中教を受くる者有りて心に惡を造らざるが如し。菩薩大涅槃微妙の經典を修するも亦復是の如く、心に惡を造らず。善男子、譬へば世間に善呪術有りて、若一たび聞くこと有らば、後二十年、一切の毒藥に中てられず、蛇螫すること能はず。若誦する者有らば、乃至命盡衆惡有ること無きが如く、善男子、是の大涅槃も亦復是の如し。若衆生一たび耳に經る者有らば、却後七劫惡道に墮せじ。若書寫、讀誦、解說し其の義を思惟する有らば、必ず阿耨多羅三藐三菩提を得、淨く佛性を見て、彼の聖王の甘露味を得るが如し。善男子、是の大涅槃は是の如き等の無量の功德有り。善男子、若人能く是の經を書寫し、讀誦、解說し、他の爲に敷演し、其の義を思惟する有らば、當に知るべし、是の人は眞に我が弟子なり。善く我が教を受く。是我が見る所、我が念ずる所なり。是の人は諦かに我が涅槃せざるを知る。是の如く人所住の處、若は城

【五六】次に如來の漏無きことを結す。

【五七】次に第四に惡漏を釋す。治道には[illegible]と名け、治道には[illegible]と名く。之に二段あり、其の中初に能[illegible]の道を明す。之に又二段ありて初に菩薩の修行を明す。初文に五種法師あり、前の文の中、七劫不墮の文は、前の名字功德品の中、「常住の二字を聞けば生生不墮」と說けると意同し。聞に多種あり、若し深く能く思惟し、說の如く行ぜば則ち生生不墮なるも、否らざれば未だ少益あるのみ。

邑、聚落、山林、曠野、房舍、田宅、樓閣、殿堂に隨ひ、我も亦中に在りて常に住して移らず。我是の人に於て常に受施を作す。或は比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、婆羅門、梵志、貧窮乞人と作る。云何か當に是の人をして、如來、其の所施を受くるを知ることを得しむべき。善男子、是の人或は夜臥夢中に於て佛像を夢見し、或は諸天沙門の像、國主聖王、師子王の像、蓮華形像、優曇華像を見、或は大山を見、或は大海水、或は日月を見、或は白象及び白馬像を見、或は父母を見る。華を得果を得。金、銀、瑠璃、頗梨等の寶、五種の牛味なり。爾の時に當に知るべし、即ち是如來其の所施を受け、寤め已りて喜樂し、尋で種種の所須の物を得。心に惡を念せず、善法を樂修す。善男子、是の大涅槃は悉く能く是の如きの無量阿僧祇等の不可思議無邊の功德を成就す。善男子、汝今應當に我が語を信受すべし。若し善男子、善女人有りて、我を見んと欲する者、我を恭敬せんと欲し、法性に同じて而も我を見んことを欲し、空定を得んと欲し、實相を見んと欲し、(五八)首楞嚴定、(五九)師子王定を修習することを得んと欲し、(六〇)八魔を破せんと欲す。八魔とは所謂四魔と無常、無樂、無我、無淨となり。人中天上の樂を得んと欲する者、大涅槃經を受持し、書寫、讀誦し、他の爲に解說し、義を思惟する者有るを見ば、當に往いて親近し、

【五八】首楞嚴定(Śūraṃgama-samādhi)。首楞嚴は健相・健行等と譯す。諸三昧の行相の多少・淺深を分別し、定心堅固、諸魔の爲めに壞せられざるの義なり。之に金剛三昧等の五種の異名あり。

【五九】師子王定(Siṃharāja-samādhi)。三昧の最上位にありて一切の障礙畏るるものなきこと喩へば獅子の獸王にして怖畏なきが如き禪定を稱す。

【六〇】八魔。一說に煩惱・五陰・死・天の四魔と、無常・苦・空・無我の四倒とを加ふ。

依附して咨受し、供養、恭敬、尊重、讃歎し、爲に手足を洗ひ、牀席を布置し、四事供給して乏しき所無からしむべし。若遠きより來らば十由旬の路次に奉迎すべし。是の經の爲の故に重んずる所の物以て奉獻すべし。若夫無き者は自ら身を賣るべし。何を以ての故に。是の經の遇ひ難きは優曇華に過ぐ。

（六二）善男子、我念ずらく、過去無量無邊那由他劫に、爾の時に世界を名けて娑婆と曰ふ。佛世尊有りて釋迦牟尼如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號く。諸の大衆の爲に是の如きの大涅槃經を宣說す。我爾の時に於て、善友の所に從ひて轉じて彼の佛、當に大衆の爲に大涅槃を說くべきを聞く。我是を聞き已りて心中に歡喜し、供養を設けんと欲するに居貧物無く、周く行きて身を賣るに、薄福にして售れず。卽ち家に還らんと欲して路に一人を見て、而も復語りて言はく、「吾身を賣らんと欲す、君能く買はんや不や。」其の人答へて言はく、「我が家作業人堪ふる者無し。汝設能く爲さば我當に汝を買ふべし。」我卽ち問うて言はく、「何の作業にして人堪ふる者無き。」其の人答へて言はく、「吾惡病有りて良醫藥を處む。應當に日に人肉三兩を服すべし。卿若能く身肉三兩を以て日日給せらるれば、便ち當に汝に金錢五枚を與ふべし。」我時に聞き已りて心大に歡喜し、卽ち復語りて言はく、「汝我に錢を與へ、我に七日を惠め。我が事訖るを須ちて卽ち還つて相就かん。」其の人答へて言はく、「七日不可なり。能く爾るを審さば汝に一日を聽さん。」善男子、我爾の時に於て卽ち其の錢を取り、還つて佛所に

【六二】次に昔を引いて今を證す。

至り頭面に禮足し、其の所有を盡して而も以て奉獻し、然して後識心に是の經を聽受す。我時に闇鈍にして經を聞くことを得と雖も、唯能く一偈の文句を受持す、

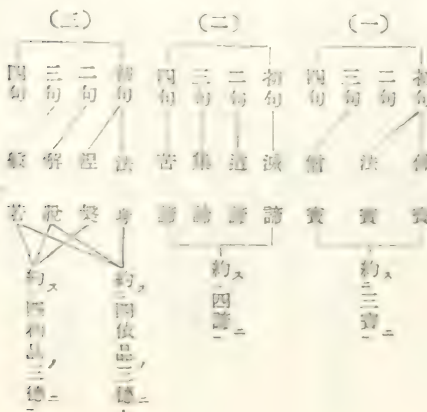
（六二）「如來涅槃を證して、永く生死を斷す、
若至心に聽く有らば、當に無量の樂を得ん。」

是の偈を受け已りて、即便彼の病人の家に還至す。善男子、我時に復日日三兩の肉を與ふと雖も、偈を念ずるの因緣を以ての故に、以て痛みと爲さず。日日廢せずして一月を足滿す。善男子、是の因緣を以て其の病差ゆることを得たり。我身平復して亦瘡痍無し。我時に身具足完具するを見て、即ち阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。一偈の力尚能く是の如し、何に況や具足して受持、讀誦せんをや。我此の經に是の如きの利有るを見て、復信發心す、「願はくは未來に於て、佛道を成得して釋迦牟尼と字せん」と。善男子、是の一偈の因緣力を以ての故に、我をして今日大衆の中に於て、諸の天人の爲に具足して宣說せしむ。善男

【六二】この四句また是れ涅槃大經の要偈なり。故に古來學者心を留む。章安亦靈師の釋を出して盛釋す。その意に曰く偈意無量、說き盡くす事を得ず、且く十義を出してこれを釋す。所謂、一に三寶に約し、二に四諦に約し、三に三德に約し、四に四德に約し、五に生不生の四句に約し、六に本有今無の偈に約し、七に雪山の偈に約し、八に四悉檀に約し、九に中論四句の偈に約し、十に四種佛性に約して釋すと。次にこれを圖示すべし。

（一）
初句――佛寶
二句――法寶
三句
四句――僧寶
約ス三寶ニ

（二）
初句――滅諦
二句――道諦
三句――集諦
四句――苦諦
約ス四諦ニ

（三）
初句――法身
二句――涅槃
三句――解脫
四句――般若
約ス四相品ノ三德ニ
約ス四依品ノ三德ニ

子、是の因縁を以て、是の大涅槃は不可思議なり、無量無邊の功德を成就す。乃ち是諸佛如來の甚深秘密の藏なり。是の義を以ての故に、能く受持する者は惡漏を斷離す。(亖)所謂惡とは惡象、惡馬、惡牛、惡狗、毒蛇の住處、惡刺の土地なり。懸崖險岸、暴水洄澓、惡人惡國、惡城惡舍、惡知識等なり。是の如き等の輩、若漏の因と作らば、菩薩卽ち離る。若作ること能はざれば、則ち遠離せず。若有漏を增さば則便之を離る。若增さざる者は則ち遠離せず。若惡法を作さば則便之を離る。若能く善を作さば則ち遠離せず。云何が離ると爲す。刀杖を持せず、常に正慧方便を以て而も之を遠離す。是の故に名けて正慧遠離と爲す。善法を生ずるが爲に則ち惡法を離る。菩薩摩訶薩自ら其の身を觀ず、病の如く瘡の如く、癰の如く、怨の如く、箭の體に入るが如く、「是大苦聚なり。悉く是一切の善惡の根本」と。是の身復不淨なる是の如しと雖も、菩薩猶故瞻視將養す。何を以ての故に。身を貪るが爲に非ず、善法の爲の故なり。涅槃の爲

---

(四)
- 初句―常德
- 二句―淨德
- 三句―我德
- 四句―樂德

約ス二四德一

(五)
- 初句―不生生
- 二句―生不生
- 三句―生生
- 四句―不生不生

約ス二生不生四句一

(六)
- 初句―本無今有
- 二句―本有今無
- 三句―三世有法
- 四句―無有是處

約ス二本有今無偈一

(七)
- 初句―諸行無常
- 二句―是生滅法
- 三句―生滅滅已
- 四句―寂滅爲樂

約ス二雪山偈一

(八)
- 初句―第一義
- 二句―對治
- 三句―世界
- 四句―爲人

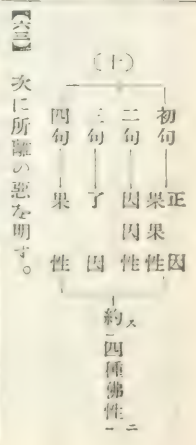
約ス二四悉檀一

(九)
- 初句―因緣所生法
- 二句―我說卽是空
- 三句―亦名爲假名
- 四句―亦是中道義

約ス二中論偈一

にして生死の爲にせず。常、樂、我、淨の爲にして無常、無我、樂淨の爲にせず。菩提道の爲にして有道の爲にせず。一乘の爲にして三乘の爲にせず。三十二相、八十種好微妙の身の爲にして、乃至非有想非無想の身の爲にせず。法輪王の爲にして轉輪王の爲にせず。善男子、菩薩摩訶薩常に當に身を護るべし。何を以ての故に。若し身を護らざれば命則ち全からず。命若し全からざれば、則ち是の經を書寫し、受持、讀誦し、他の爲に廣く說き、其の義を思惟することを得ること能はず。是の故に菩薩善く身を護るべし。是の義を以ての故に、菩薩一切の惡漏を離るることを得。善男子、水を度らんと欲すれば善く船筏を護り、路に臨むの人善く良馬を護り、田夫の種植善く糞穢を護るが如く、蠱毒の爲に善く毒蛇を護るが如く、人財の爲に旃陀羅を護るが如く、賊を壞るが爲の故に健將を養護す。亦寒人の火を愛護するが如く、癩病者の毒藥を求むるが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。是の身無量の不淨具足充滿すと見ると雖も、大涅槃經を受持せんと欲するが爲の故に、猶好く將護して乏少ならしめず。菩薩摩訶薩の惡象、及び惡知識を觀ずること等しうして二つ有ること無し。何を以ての故に。俱に身を壞するが故なり。菩薩は惡象等に於て心に恐怖無く、惡知識に於て畏懼心を生ず。何を以ての故に。是の惡象等は唯能く身を壞して心を壞すこと能はず。惡知識は二つ倶に壞するが故に。是の惡象等は唯一身を壞し、惡知識は無量の善身、無

(十)
- 初句——正因
- 二句——因果
- 三句——了因
- 四句——果性
  ——約ス 四種佛性ニ

【六三】 次に所離の惡を明す。

量の善心を壞す。是の惡象等は唯能く不淨臭身を破壞し、惡知識は能く淨身及以淨心を壞す。是の惡象等は能く肉身を壞し、惡知識は法身を壞す。惡象に殺さるれば三趣に至らず、惡友に殺さるれば必ず三趣に至る。是の惡象等は但身の怨と爲り、惡知識は善法の怨と爲る。是の故に菩薩常に當に諸の惡知識を遠離すべし。是の如き等の漏、凡夫は離せず、是の故に漏を生ず。菩薩之を離すれば則ち漏を生ぜず。菩薩是の如くすれば尚漏有ること無し、況や如來に於てをや。是の故に非漏なり。

【六四】親近漏を釋す。

(六四)云何が親近漏なる。一切の凡夫、衣食、臥具、醫藥を受取し、身心の樂の爲に是の如きの物を求め、種種の惡を造り、過患を知らず、三趣に輪回す、是の故に漏と名く。菩薩是の如きの過を見れば則便遠離す。若し衣を須ふる時は即便受取す。身の爲にせざるが故に但法の爲にす。憍慢を長ぜず、心常に卑下す。嚴飾の爲にせず、但羞恥の爲にす。諸の寒暑、惡風、惡雨、惡蟲、蚊虻、蠅蚤、蝮蠍を障ふ。飲食を受くと雖も心に貪著無し。身の爲にせざるが故に常に正法の爲にす。膚體の爲にせず、但衆生の爲にす。憍慢の爲にせず、身力の爲の故なり。怨害の爲にせず、饑瘡を治するが爲にす。上味を得と雖も心に貪著無し。房舍を受取するも亦復是の如く、貪慢の結心に居せしめず。菩提舍の爲に結賊を遮止し、惡風雨を障ふるが故に屋舍を受く。醫藥を求むる者は心に貪慢無く、但正法の爲にす。壽命の爲にせず、常命の爲の故なり。善男子、人瘡を病み酥麨を塗るが爲に衣を以て之を裹む。膿血出づるが爲に酥麨を塗傳す。瘡を癒すの爲の故に藥

を以て之を竝ぶるが如く、惡風の爲の故に深屋の中に在り。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。身是瘡を觀ず。故に衣を以て覆ふ。九孔漏るが爲に飲食を求索す。惡風雨の爲に房舍を受取す。四毒發するが爲に醫藥を求覓す。菩薩摩訶薩四種の供養を受く。菩提道の爲にして壽命の爲にせず。何を以ての故に。菩薩摩訶薩是の思惟を作さく「我若し是の四供養を受けざれば、身則ち磨滅して堅牢を得ず。若堅牢ならざれば則ち苦を忍ばず。若苦を忍ばざれば則ち善法を修習することを得ること能はず。若能く苦を忍ばば、則ち無量の善法を修習することを得。我若樂苦を堪忍すること能はざれば則ち苦受に於て瞋恚心を生じ、樂受の中に於て貪著心を生ぜん。若樂を求めて得ざれば、則ち無明を生ず。是の故に凡夫四供養に於て有漏を生ず。菩薩摩訶薩能く深く觀察して漏を生ぜず。是の故に菩薩を名けて無漏と爲す。云何ぞ如來當に有漏と名くべき。是の故に如來を有漏と名けず。

(六五)復次に善男子、一切の凡夫善く身心を護ると雖も、猶故三種の惡覺を生ず。是の因緣を以て煩惱を斷じて非想非非想處に生ずるを得と雖も、猶故還つて三惡道の中に墮す。善男子、譬へば人有りて大海を度り、彼岸に至るに垂として水に沒して死するが如く、凡夫の人も亦復是の如し。三有を盡すに垂として還つて三塗に墮す。何を以ての故に。惡覺多きが故なり。何等か惡覺なる。所謂六念處なり。凡夫の人、善心は羸劣、不善は熾盛なり。善心羸るが故に慧心薄少なり。慧心薄きが故に諸漏を增長す。菩薩摩訶薩眼根清淨にして三寶の過を見

【六五】次に念漏を釋す。

る。是の三覺種種の患有り、常に衆生の與に三乘の怨と作るを知る。三覺の因縁乃ち無量の凡夫、衆生をして佛性を見ざらしむ。無量劫の中顚倒の心を生じて、佛世尊常、樂、我無し、唯一の不淨有り。如來畢竟して涅槃に入ると謂ふ。一切衆生常無く、樂無し、我無く、淨無し、顚倒心の故に常、樂、我、淨有りと言ふ。實に三乘無く、顚倒心の故に三乘有りと言ふ。一實の道に眞實不虛なり、顚倒心の故に一實無しと言ふ。是の三惡覺は常に諸佛及び諸菩薩に訶責せらる。是の三惡覺は常に我を害し、或は亦他を害す。是の三覺有れば一切の諸惡常に來りて隨從す。是の三覺は即ち三縛と爲す、衆生の無邊の生死を連綴す。菩薩摩訶薩常に是の如く三覺を觀察することを作す。菩薩或時因縁有るが故に、欲覺を生ずときに默然として受けず。譬へば端正淨潔の人一切の穢汚不淨を受けざるが如く、熱鐵丸は人受くる者無きが如く、婆羅門性は牛肉を受けざるが如く、飽滿の人は惡食を受けざるが如く、轉輪王は一切旃陀羅等と同じく一牀に坐せざるが如く、菩薩摩訶薩三覺を惡賤して受けず味はざることも亦復是の如し。何を以ての故に。菩薩思惟すらく、「衆生我は是良福田と知る。我當に云何ぞ是の惡法を受く。若惡覺を受くれば則ち衆生の福田と爲るに任へず。我自ら是良福田と言はざれども、衆生相を見て便ち我是と言ふ。我今若是の如く惡覺を起さば、則ち一切衆生を欺誑すと爲す。我往昔に於て欺誑を以ての故に、無量劫の中生死に流轉し三惡道に墮す。我若惡心にして人の信施を受くれば、一切の天人及び五通の仙、悉く當に證知して而も呵責を見るべし。我若惡覺にして人の信施を受くれ

ば、或は施主をして果報減少し、或は空しうして報無からしむ。我若惡心にして檀越の施を受くれば、則ち施主の讎怨と爲る。一切の施主恆に我が所に於て赤子の想を起す。我當に云何ぞ彼を欺誑して怨想を生ずべき。何を以ての故に。或は施主をして果報を得ず、或は少果報ならしむ。或は常に自ら稱して出家人と爲す。夫出家は惡を起すべからず。若惡を起さば則ち出家に非ず。出家の人は身口相應す。若相應せざれば則ち出家に非ず。我父母、兄弟、妻子、眷屬、知識を棄てて出家して道を修す。正しく是諸の善覺を修習する時、是不善覺を修習する時に非ず。譬へば人有り海に入りて寶を求むるに、眞珠を取らずして水精を取るが如く、亦人有りて妙音樂を棄てて糞穢に遊戲するが如く、寶女を捨てて婢使を愛念するが如く、金器を棄てて瓦盂を用ふるが如く、甘露を棄てて毒藥を服食するが如く、親舊賢善の良醫を捨てて、反つて怨憎に從ひて藥を求めて自療するが如く、我も亦是の如し。大師如來世尊の甘露の法味を捨離して而も魔怨の種種の惡覺を服す。人身の得難きこと優曇華の如し、我今已に得たり。如來の値ひ難きこと優曇華に過ぐ。我今已に値ひたてまつれり。清淨の法寶に見聞を得ること難し、我今已に聞く。猶し盲龜の浮木の孔に値へるが如し。人命の停まらざること山水に過ぎたり。今日存すと雖も明亦保し難し。云何ぞ心を縱にして惡法に住せしめん。壯色の停まらざること猶し奔馬の如し。如何ぞ恃怙して憍慢を生ぜん。猶し惡鬼の人の過を伺求するが如く、四大惡鬼も亦復是の如し。常に來りて我が過失を伺求す。云何ぞ當に惡覺を發起せしむべき。譬へば朽宅、垂崩

の屋の如し。我が命も亦爾なり、云何ぞ惡を起さん。我は沙門と名く、沙門の人は善覺を覺すと名く、我今乃ち不善の覺を起さば、云何ぞ當に名けて沙門と爲すことを得べき。我は出家と名く、出家の人は善道を修すと名く。我今惡を行せば、云何か當に名づけて出家と爲すことを得べき。我今名けて眞の婆羅門と爲す、婆羅門とは淨行を修すと名く。我今乃ち不淨惡覺を行せば、云何ぞ當に婆羅門と名くることを得べき。我今も亦刹利の大姓と名く、刹利姓とは能く怨敵を除く。我今惡怨敵を除くこと能はざれば、云何ぞ當に刹利姓と名くることを得べき。我は比丘と名く、比丘の人は破煩惱と名く。我今惡覺煩惱を破せずば、云何ぞ當に名けて比丘と爲すことを得べき。世に六處の値遇すべき難き有り、我今已に得たり。云何ぞ當に惡覺をして心に居せしむべき。何等をか六つと爲す。一つには佛世は値ひ難く、二つには正法は聞き難く、三つには怖心は起し難く、四つには中國には生じ難く、五つには人身は得難く、六つには諸根は具し難し。是の如きの六事は得難くして已に得たり。是の故に惡覺を起すべからず。菩薩爾の時に是の如く大涅槃經を修行して、常に勤めて是の諸の惡心を觀察す。一切の凡夫は是の如きの惡心の過患を見ず。故に三覺を受く、名けて受漏と爲す。菩薩見已りて受けず著せず、放捨して護らず。八聖道に依りて之を推して去らしめ、之を斬つて斷たしむ。是の故に菩薩受漏有ること無し。云何ぞ當に如來漏有りと言ふべき。是の義を以ての故に、如來世尊は是有漏に非じ。」

# 巻の第二十一

## 高貴德王菩薩品の三

(一)「復次に善男子、凡夫若身心苦惱に遇はば種種の惡を起す。若は身病を得、若は心病を得、身、口、意をして種種の惡を作らしむ。惡を作るを以ての故に(二)三趣に輪回して具さに諸苦を受く。何を以ての故に。凡夫の人は念慧無きが故に。是の故に種種の諸漏を生ず、是を念漏と名く。(三)菩薩摩訶薩常に自ら思惟すらく、『我往昔無數劫より來た、是の身心の爲に種種の惡を造る。是の因緣を以て生死に流轉し、三惡道に在りて具さに衆苦を受け、遂に我をして三乘の正路に遠からしむ。』菩薩是の惡因緣を以ての故に、己が身心に於て大怖畏を生じ、衆惡を捨離して善道に趣向す。」

(四)善男子、譬へば(五)王有り、四毒蛇を以て之を(六)一篋に盛り、人をして養食し、臥起を瞻視し、其の身を摩洗せしむ。若一蛇をして瞋恚を生ぜしむれば、我當に法に準じて之を都市に戮す。爾の時に其の人、王の切令を聞きて

---

【一】是より第六に第七念漏を釋す。之に二段あり、其中初に漏の相。

【二】三趣(Tri-gati)。趣は又た道とも譯す。有情の趣く處即ち輪廻の對象なり。これに三あり。一に地獄(Naraka)、上品の十惡業を成ぜしもの之に趣く。二に餓鬼(Preta)、中品の十惡業を成ぜしもの之に趣く。三に畜生(Tiryag-yoni)、下品の十惡業を成ぜしもの之に趣く。

【三】次に菩薩の漏無きを明す。之に三段あり、其中初に法。

心に惶怖を生じ、篋を捨てて逃走す。(七)正時に復五旃陀羅を遣し、(八)刀を拔きて之に隨はしむ。其の人回顧して後の五人を見、遂に疾く捨て去る。(九)是の時五人惡方便を以て持する所の(一〇)刀を藏し、密かに一人を遣はし詐りて親善を爲し、之に語りて「汝來り還るべし」と言はしむ。(一一)其の人信ぜず。一(一二)聚落に投じて自ら隱匿せんと欲す。既に聚中に入りて諸舍を闚視するに都て人を見ず。諸の瓦器を執るに悉く空しうして物無し。既に人を見ず、物を求むるに得ざれば、即便地に坐す。(一三)空中の聲を聞くに、「咄哉男子、此の聚空曠にして居民有ること無し。今夜當に(一四)六たりの大賊來る有るべし。汝設遇はば命將に全からざらんとす。汝當に云何ぞ之を免るることを得べき。」爾の時に其の人恐怖遂に增し、復捨てて去る。(一五)路一河に値ふ。河水漂急にして船筏有ること無し。怖畏を以ての故に、(一六)即ち種種の草木を取りて筏と爲す。復更に思惟すらく、「我設此に住せば當に毒蛇、五たりの旃陀羅、一りの詐親善、及び六たりの大賊に危害せらるべし。若此の河を度るに(一七)筏依るべからざれば、當に水に沒して死すべし。寧ろ水に沒して死すとも、終に彼の蛇賊に害せられじ。」即ち草筏を推して之を水中に置く。

---

【四】次に譬說。之に譬、合の二段あり、譬に又八ありて初に四蛇。

【五】王あり等。これに就て三釋あり。一に云く佛衆生身中の四大を說く。二に云く無明能く衆生の四大の身を構ふ。三に云く此の經に說く衆生の四大各相ひ違害す。

【六】一篋…養食等。一篋は一身に、養食は摩洗に、導法は所作の惡品輕重あるに依るに、殺羅市は善根を斷じ慧命を絕し其顯然たるに喩ふ。切令は惡を敦んで作す莫く、善を勸めて奉行せしむ。逃走は若し眞解を得ば彰顯にして去る、今始めて伏惑す、故に逃走といふ。

【七】次に五旃陀羅。

【八】刀を拔き等。五旃陀羅は五陰に、刀は無常の苦に喩ふ。回顧は生死を厭ふに、捨去は

身其の上に倚り、手を運び足を動かし、流を截つて去る。(一八)即ち彼岸に達し安隱にして患無く、心意泰然にして恐怖消除するが如し。(一九)菩薩摩訶薩の大涅槃經を聞き、受持することを得て身を觀ずるに篋の如く、地、水、火、風は(二〇)四毒蛇の如く、見毒、觸毒、氣毒、齧毒、一切衆生是の四毒に遇ふ。故に其の命を喪ふ。衆生の四大も亦復是の如し。或は見惡を爲し、或は觸惡を爲し、或は氣惡を爲し、或は齧惡を爲す。是の因緣を以て衆善を遠離す。復次に善男子、菩薩摩訶薩四毒蛇を觀ずるに、四種の性有り、所謂刹利、婆羅門、毗舍、首陀なり。是の四大の蛇も亦復是の如し。四種の性有り、堅性、溼性、熱性、動性なり。是の故に菩薩是の四大は四毒蛇と其の種性を同じうすと觀ず。復次に善男子、菩薩摩訶薩是の四大は四毒蛇の如しと觀ず。云何が觀を爲す。是の四毒蛇は常に人の便を伺ふ。何れの時か當に視るべき、何れの時か當に觸るべき、何れの時か當に噓くべき、何れの時か當に齧むべき。四大の毒蛇も亦復是の如し。常に衆生を伺ひて其の短缺を求む。若四蛇に殺さるる者は終に三惡道の中に至らず、若四大に殺害せらるれば、必ず三惡に至ること定んで疑有ること無けん。是の四

---

涅槃を欣ふに喩ふ。

【一九】次に詐親。

【二〇】刀を藏し等。藏刀は虛妄の我を以て無我を覆ひ安樂苦を覆ふを指し、一人は愛を譬ふ。五陰の行心に此の貪愛ありて能く衆生を惑はす、故に詐親といふ。

【二一】次に聚落。

【二二】聚落瓦器等。聚落は五根に譬ふ、五根は是れ識の栖托する所にして人の聚落に在るが如し。瓦器は五根[illegible]に、不見人は人空に、求物不得は法空に、空地は空境に安心するに喩ふ。

【二三】次に六賊。この中空中の聲は佛法中六塵ありと說くを聞くに喩ふ。

【二四】六賊は六塵の能く善財を奪ふに、夜來は無明の[illegible]心此の六塵を蔽ふに譬ふ。

【二五】次に大河。

毒蛇復瞻養すと雖も亦人を殺さんと欲す。四大も亦爾なり、常に供給すと雖も、亦常に人を牽ゐて衆惡を造作せしむ。是の四毒蛇若一たび瞋らば則ち能く人を殺す。四大の性も亦復是の如し。若一大發すれば亦能く人を害す。是の四毒蛇一處に同ずと雖も四心各異なり。四大毒蛇も亦復是の如く、同じく一處と雖も性各別異なり。是の四毒蛇復恭敬すと雖も、親近すべきこと難し。四大毒蛇も亦復是の如し、復恭敬すと雖も亦親近し難し。是の四毒蛇若人を害する時、或は沙門、婆羅門等有り、若呪藥を以てすれば則ち療治すべし。四大の人を殺す、沙門、婆羅門等の神呪、良藥有りと雖も、皆治すること能はじ。自善の人四毒蛇の氣臭惡むべきを聞かば、則便遠離を以てするが如く、諸佛菩薩も亦復是の如し。四大の臭を聞がば即便遠離す。爾の時に菩薩復更に四大の毒蛇を思惟して大怖畏を生じ、之に背いて馳趣して八聖道を修す。（二一）五旃陀羅とは卽ち是五陰なり。云何が菩薩、五陰は旃陀羅の如しと觀ずる。旃陀羅とは、常に能く人をして恩愛別離し、怨憎集會せしむ。五陰も亦爾なり、人をして近き不善の法を貪り、一切の淳善の法を遠離せしむ。復次に善男子、旃陀羅の種種の器仗を以て自ら莊嚴し、若は刀、若は楯、若は弓、若は箭、

【一六】次に草筏。
【一七】[illegible]依は善微弱にして濟るに勝へ能はざらん[illegible]に、兩足は戒定二法に、運動手足は[illegible]用に譬ふ。
【一八】次に到岸。
【一九】次に八譬を合す。其中初に四蛇を合す。
【二〇】四毒蛇の如く等、衆生の四大に内外あり。内身の四大を以て、正しく四蛇に合す。四大共じて眼根を造る、見毒を合す。共じて身根を造る、觸毒を合す。共じて鼻根を造る、氣毒を合す。共に舌根を造る、齧毒を合す。
【二一】次に五旃陀羅を合す。

若は鐵、若は矟、能く人を害するが如く、五陰も亦爾なり。諸の煩惱を以て牢く自ら莊嚴し、諸の癡人を害して諸有に墮せしむ。善男子、旃陀羅、過有るの人、便を得て之を害するが如く、五陰も亦爾なり。諸結の過有らば常に能く人を害す。是の故に菩薩深く五陰は旃陀羅の如しと觀ず。復次に菩薩、五陰は旃陀羅の如しと觀察す。旃陀羅の人は慈憫の心無く怨親俱に害す、五陰も亦爾なり、慈憫の心無く善惡俱に害す。旃陀羅は一切の人を惱すが如く、五陰も亦爾なり。諸の惱煩を以て常に一切生死の衆生を惱す。是の故に菩薩五陰は旃陀羅の如しと觀ず。復次に菩薩五陰は旃陀羅の如しと觀察す。旃陀羅の人は常に害心を懷く、五陰も亦爾なり、常に諸結惱害の心を懷く。人に足、刀仗、侍從無ければ、常に知るべし、必ず旃陀羅人に殺害せらるるが如く、衆生も亦爾なり。足無く刀無く侍從有ること無ければ則ち五陰に賊害せらる。足に名けて戒と爲し、刀は名けて慧と爲し、侍從は名けて諸の善知識と爲す。此の三事無きが故に五陰に賊害せらる。是の故に菩薩、五陰は旃陀羅の如しと觀ず。復次に善男子、菩薩摩訶薩五陰の旃陀羅に過ぐるを觀察す。何を以ての故に。衆生若し旃陀羅に殺さるれば地獄に墮せず、陰に殺さるれば則ち地獄に墮す。是の故に菩薩五陰は旃陀羅に過ぐと觀察す。是の觀を作し已りて而も作願して言はく、「我寧ろ身を終りて旃陀羅に近づくとも、暫時も五陰に親近すること能はじ。旃陀羅は唯能く欲界の癡人を害し、是の五陰の賊は徧く三界の凡夫、衆生を害す。旃陀羅の人は唯能く有罪の人を殺害し、是の五陰の賊は衆生の罪有り罪無きを簡はず、悉く能く之を害

す。旃陀羅の人は衰老、婦女、稚小を害せず、是の五陰の賊は衆生の老小、婦女を問はず、一切悉く害す。是の故に菩薩は深く五陰の旃陀羅に過ぐるを觀ず。是の故に發願す「寧ろ當に終身旃陀羅に近くべし、暫時も五陰に親近する能はじ」と。復次に善男子、旃陀羅は唯他人を害し、終に自ら害せず、五陰の賊は自ら害し他を害す。旃陀羅の人は善言、錢財、寶貨を以て、求めて脱るることを得べし。五陰は爾らず、強ひて善言を以て誘喩し、錢財、寶貨求めて脱るることを得べからず、旃陀羅の人は四時の中に於て、必ずしも常に殺さず。五陰は爾らず、常に念念に於て諸の衆生を害す。旃陀羅の人は唯一處に在りて逃避有るべし。五陰は爾らず、一切處に徧うして逃避すべからず。旃陀羅の人は復人を害すと雖も、害し已りて隨はず。五陰は爾らず、衆生を殺し已りて隨逐して離れず。是の故に菩薩は寧ろ終身旃陀羅に近くを以てするとも、暫時も五陰に親近すること能はず。有智の人は善方便を以て五陰を脱することを得、善方便とは即ち八聖道、六波羅蜜、四無量心なり。是の方便を以て而も解脱を得、身心五陰に害せられず。何を以ての故に。身金剛の如く、心虚空の如し。是の故に身心沮壞すべきこと難し。是の義を以ての故に、菩薩陰の種種の諸の不善法を成就するを觀じ、大怖畏を生じて八聖道を修す。亦彼の人の四毒蛇、五旃陀羅を畏れ、路を渉りて去り顧留する所無きが如し。(三)詐親善とは名けて貪愛と爲す。菩薩摩訶薩深く愛結を觀ずるに、怨の詐り親むが如し。若實を知る者は、則ち能く爲すこと無し。若知らざる者は必ず

【三三】次に詐親を合す。

害せらる、貪愛も亦傷なり。若其の性を知らば、則ち衆生をして生死の苦中に輪轉せしむること能はず。若知らざる者は六趣に輪回して、具さに衆苦を受く。何を以ての故に。愛の病と爲りて捨離し難きが故に。怨の詐り親みて遠離すべきこと難きが如し。怨詐親とは、常に人の便を伺ひて愛別離し、怨憎合會せしむ。愛も亦是の如し、人をして一切の善法を遠離し、一切の不善の法に近かしむ。是の義を以ての故に、菩薩摩訶薩は深く貪愛の怨の詐親の如くなるを觀ず。見れども見えざるが故に、聞けども聞えざるが故なり。凡夫の人の生死の過を見るが如き、智慧有りと雖も、癡覆を以ての故に、後還って見ず。聲聞、縁覺も亦復是の如し、見ると雖も見えず、聞くと雖も聞えず。何を以ての故に。愛心を以ての故なり。所以は何ん。生死の過を見るは、疾く阿耨多羅三藐三菩提に至ること能はず、是の義を以ての故に、菩薩摩訶薩は此の愛結を怨の詐親の如しと觀ず。云何が名けて怨詐親の相と爲す。怨の不實にして詐りて實相を現じ、親近すべからずして詐りて近相を現じ、實は是不善にして詐りて善相を現じ、實は是不愛にして詐りて愛相を爲すが如し。何を以ての故に。常に人の便を伺ひて害を爲さんと欲するが故なり。愛も亦是の如し、常に衆生の爲に非實實を詐り、非近近を詐り、非善善を詐り、非愛愛を詐り、常に一切を誑かして生死に輪回せしむ。是の義を以ての故に、菩薩愛は怨の詐親の如しと觀ず。怨詐親とは、但身を見て其の心を視ず、是の故に能く誑かす。愛も亦是の如し、難害誑を爲して實は得べからず、是の故に能く一切衆生を惑はす。怨詐親とは、始有り終有れば遠離す

べきこと易し、愛は是の如くならず、(一三)始無く終無く、遠離すべきこと難し。怨詐親とは、遠ければ則ち知り難く、近ければ則ち覺り易し。愛は是の如くならず、近きも尚識り難し、況や復遠きを知らんや。是の義を以ての故に、菩薩愛は詐親に過ぐるを觀ず。一切衆生愛結を以ての故に、大涅槃に遠りて生死に近き、常、樂、我、淨に遠りて無常、苦、無我、不淨に近く。是の故に我處處經の中に於て說きて三垢と爲す。現在の事に於て無明を以ての故に、過患を見ず、捨離すること能はず。愛の怨詐親は終に有智の人を害すること能はず。是の故に菩薩は深く此の愛を觀じ、大怖畏を生じて八聖道を修す。猶し彼の人、四毒蛇、五旃陀羅及び一詐親を畏れ、路を涉りて回らざるが如し。

(一四)空聚落とは。即ち內の六入なり。菩薩摩訶薩此の六入を觀ずるに空にして所有無きこと。猶し空聚の如し。彼の怖人既に聚に入り已りて、乃至一りの居人有るを見ず、徧く瓶器を捉ふるに一物を得ざるが如し。菩薩も亦爾なり、諦かに六入を觀ずるに空にして所有無し。衆生一物の實を見ず。是の故に菩薩內の六入、空無所有、彼の空聚の如しと觀ず。善男子、常の空聚落、羣賊、遠く望みて終に空虛の想を生せず。凡夫の人も亦復是の如し、六入聚に於て空想を生せず。其空想を生ずること能はざるを以ての故に、生死に輪回して無量の苦を受く。善男子、羣賊既に至りて乃ち空想を生

【一三】始無く終無く等とは二解あり。一に云く、十二因緣の猶ほ車輪の如く始終あるなき如く愛心亦た爾かなり。二に云く、十二因緣復た始終あり、即ち無明を始とし、老死を終とす、然かも始なく終なしとは、愛の來處不可得なれば則ち無始の義成ずとするなり。

【一四】次に聚落を合す。

す。菩薩も亦爾なり、此の六入を觀ずるに常に空想を生ず。空想を生ずるが故に、則ち生死に輪回して苦を受けず。菩薩摩訶薩、此の六入に於て常に顚倒無し。顚倒無きが故に、是の故に復生死に輪回せず。復次に善男子、群賊此の空聚に入らば、則ち安樂を得る有らんが如く、煩惱の諸賊も亦復是の如し、此の六入に入れば則ち安樂を得。賊、空聚に住して心に畏るる所無きが如く、煩惱の群賊も亦復是の如し、是の六入に住して亦畏るる所無し。彼の空聚は乃ち是師子、虎狼、種種の惡獸の所住の處なるが如し。是の內の六入も亦復是の如し、一切の惡惡、煩惱の惡獸の所住の處なり。是の故に菩薩は深く六入、空無所有、純ら是一切の不善住處と觀ず。復次に善男子、菩薩內の六入、空無所有、彼の空聚の如しと觀ず。何を以ての故に。虛誑不實の故なり。空にして所有無きに有想を作すが故に、實は樂有ること無きに樂想を作すが故に、實は人有ること無きに人想を作すが故なり。內の六入なる者も亦復是の如し。空にして所有無きに、而も有想を作し、實は樂有ること無きに、而も樂想を作し、實は人有ること無きに、而も人想を作す。唯有智の人は乃ち能く之を知り、其の眞實を得。復次に善男子、空聚落の如き、或時は人有り、或時は人無し。六入は爾らず、一向に人無し。何を以ての故に。性常に空なるが故に、智者の知る所にして、是眼見に非ず。是の故に菩薩內の六入、諸の患害多きを觀じて、八聖道を修して休まず息はず、猶し彼の人の四毒蛇、五旃陀羅、一詐親者、及び六大賊を畏れ、怖れて正路に著くが如し。

（三五）六大賊とは則ち外の六塵なり。菩薩摩訶薩此の六塵は六大賊の如しと觀ず。何を以ての故に。能く一切の諸の善法を劫むるが故に。六大賊の能く一切人民の財寶を劫むるが如く、是の六塵の賊も亦復是の如し、能く一切衆生の善財を劫む。六大賊若し人舍に入らば、則ち能く現家の所有を劫奪して好惡を擇ばず。巨富の者をして忽然として貧窮ならしむるが如く、是の六塵の賊も亦復是の如し。若し人根に入らば、則ち能く一切の善法を劫奪す。善法既に盡くれば貧窮孤露一闡提と作る。是の故に菩薩諦かに六塵は六大賊の如しと觀ず。復次に善男子、六大賊の人を劫さんと欲する時、要らず內人に因る。若し內人無ければ則便中ごろ還るが如く、是の六塵の賊も亦復是の如し、善法を劫めんと欲する、要らず內に衆生知見、常、樂、我、淨、不空等の相有るに因る。若し內に是の如き等の相有ること無ければ、六塵の惡賊則ち一切の善法を劫むること能はず。有智の人は內に是の相無く、凡夫は則ち有り。是の故に六塵常に來りて善法の財を侵奪す。善く護らざるが故に其に劫められる。護とは慧を名く。有智の人は能善く防護す、故に劫められず。是の故に菩薩是の六塵は六大賊の如く等しうして差別無しと觀ず。復次に善男子、六大賊は能く人民の身心苦惱を爲すが如く、是の六塵の賊も亦復是の如し。常に衆生の身心苦惱を爲す。六大賊は唯能く人の現在の財物を劫む。是の六塵の賊は、常に衆生の三世の善財を劫め、六大賊は夜は則ち歡樂す。六塵の惡賊も亦復是の如し、無明の闇に處れば則ち歡樂を得、是の六大賊は唯諸王有りて乃ち能く遮止す。六

【三五】次に六賊を合す。

塵の惡賊も亦復是の如し、唯佛、菩薩は乃ち能く遮止す。是の六大賊は凡そ劫奪せんと欲するに、端正、種姓、聰哲、多聞、博學、豪貴、貧賤を擇ばず。六塵の惡賊も亦復是の如し、善法を劫めんと欲すれば、端正、乃至、貧賤を擇ばず。是の六大賊は諸王の其の手足を截る有りと雖も、猶故其の心をして息はしむること能はず。六塵の惡賊も亦復是の如し、須陀洹、斯陀含、阿那含、其の手足を截ると雖も、亦善法を劫めざらしむること能はず。勇健の人は乃ち能く是の六大賊を摧伏するが如く、諸佛、菩薩も亦復是の如し、乃ち能く六塵の惡賊を摧伏す。譬へば人有りて諸の種族多く、宗黨熾盛なれば則ち彼の六賊の爲に劫められざるが如く、衆生も亦爾なり、善知識有らば六塵の惡賊に劫められず。是の六大賊若人物を見ば、則ち能く偸劫す。六塵は爾らず、若は見、若は知、若は聞、若は嗅、若は觸、若は覺、皆悉く能く劫む。六大賊は唯能く欲界の人の財を劫奪して、色、無色界を劫奪すること能はず、六塵の惡賊は則ち是の如くならず、能く三界の一切の善寶を劫む。是の故に菩薩諦かに六塵の彼の六賊に過ぐるを觀ず。是の觀を作し已りて八聖道を修し、直ちに往いて回らず。彼の怖人の四毒蛇、五旃陀羅、一詐親善、及び六大賊を畏れ、空聚落を捨て、路に渉りて去るが如し。

〔二六〕路に一河に値ふとは、卽ち是煩惱なり。云何が菩薩此の煩惱は猶し大河の如しと觀ずる。彼の駛河の能く香象を漂はすが如く、煩惱の駛河も亦復是の如し、能く緣覺を漂はす。是の故に菩薩深く煩惱は猶し駛河の如しと觀ず。深くして底を得難し、

【二六】次に大河を合す。

故に名けて河と爲す。邊を得べからず、故に名けて大と爲す。其の中に多く種種の惡魚有り。煩惱も大河も亦復是の如し。唯佛、菩薩の能く底を得るが故に、故に極深と名け、唯佛、菩薩其の邊を得るが故に、故に廣大と名け、常に一切の癡衆生を害するが故に、故に惡魚と名く。是の故に菩薩、此の煩惱は猶し大河の如しと觀ず。大河水は能く一切の草木叢林を長ずるが如く、煩惱の大河も亦復是の如し、能く衆生の二十五有を長ず。是の故に菩薩、此の煩惱は猶し大河の如しと觀ず。譬へば人有りて、大河水に墮して慚愧有ること無きが如く、衆生も亦爾なり、煩惱の河に墮ちて慚愧有ること無し。河に墮つる者未だ其の底を得ず、即ち命終するが如く、煩惱の河に墮するも亦復是の如し、未だ其の底を盡さず。二十五有に周囘して輪轉す。言ふ所の底とは、名けて空相と爲す。若是の如きの空相を修せざる有らば、當に知るべし、是の人は二十五有を出離することを得ず。一切衆生は善く空無相を修すること能はざるが故に、常に煩惱の駛河に漂はさる。彼の大河の如き、唯能く身を壞し一切の善法を漂沒すること能はず。煩惱の大河は則ち是の如くならず、能く一切の身心の善法を壞す。彼の大暴河は、唯能く欲界中の人を漂沒し、煩惱の大河は、乃ち能く三界の人天を漂沒す。世間の大河は手足を運動すれば則ち彼岸に到り、煩惱の大河は、唯菩薩有りて、六波羅蜜に因り乃ち能く度ることを得。大河水は度を得べきこと難きが如く、煩惱の大河も亦復是の如し、度を得べきこと難し。云何が名けて難可得度と爲す。乃至十住の諸大菩薩猶故未だ畢竟じて度を得ること能はず。唯諸佛有りて乃

を畢竟にて度す、是の故に名けて難可度者と為す。譬へば人有りて河に漂はされ、究竟の善法を修習すること能はざるが如く、衆生も亦爾なり、煩惱の河に漂沒せらるれば、亦復善法を修習すること能はず。人河に墮ちて水に漂はさるれば、餘の有力の者、則ち能く救濟するが如く、煩惱の河に墮ちて一闡提と為れば、聲聞、緣覺、乃至諸佛も救濟すること能はず。世間の大河、劫盡くるの時七日並び照せば、能く枯涸せしむるも、煩惱の大河は則ち是の如くならず。聲聞、緣覺は七覺を修すと雖も、銷乾すること能はず。是の故に菩薩、諸の煩惱は猶ほ暴河の如しと觀ず。譬へば彼の人、四毒蛇、五旃陀羅、一詐親善、及び六大賊を畏れ、空聚落を捨て、路に從ひて去り、(二七)既に河上に至り、草を取りて筏と為すが如く、菩薩も亦爾なり。四大の蛇、五陰の旃陀羅、愛の詐親善、六入の空聚、六塵の惡賊を畏れ、煩惱の河に至り、戒定慧、解脫、解脫知見、六波羅蜜、三十七品を修して以て船筏と為し、此の筏に依乘して煩惱の河を度る。(二八)彼岸に到れば常樂の涅槃なり。菩薩大涅槃を修行する者、是の思惟を作さく、我若忍びて是の如く身苦心苦を受くること能はざれば、則ち一切衆生をして煩惱の河を度らしむること能はず。是の思惟を以て、是の如く身心の苦惱有りと雖も、默然として忍受す。忍受を以ての故に則ち漏を生ぜず。(二九)是の如く菩薩摩訶薩は諸漏無し、況や佛如來、而も當に漏有るべけんや。是の故に諸佛を有漏と名けず。(三〇)云何が如來無漏に非ざる。如來常に有漏中に行ずるが故に、

【二七】次に草筏を合す。
【二八】次に到彼岸を合す。
【二九】次に結。
【三〇】是より第二に非無漏を明す。

有漏は即ち是二十五有なり。是の故に聲聞、凡夫の人は佛に漏有りと言ふ。諸佛如來は眞實に漏無し。(三一)善男子、是の因縁を以て、諸佛如來は定相有ること無し。善男子、是の故に犯四重禁、謗方等經、及び一闡提、悉く皆不定なり。』

(三二)爾の時に光明徧照高貴德王菩薩摩訶薩の言さく、『是の如し是の如し、誠に聖言の如し。一切諸法は悉く皆不定なり。不定を以ての故に、當に知るべし、如來も亦畢竟じて涅槃に入りたまはず。(三三)佛上に説きたまふが如し。菩薩摩訶薩大涅槃を修して不聞を聞く中、涅槃有り大涅槃有りと。云何が涅槃、云何が大涅槃なる。』

(三四)爾の時に佛、光明徧照高貴德王菩薩摩訶薩を讃じて言はく、『善い哉善い哉善男子、若菩薩念總持を得る有らば、乃ち能く汝が諮問する所の如し。(三五)善男子、世人の言ふが如く、海、大海有り、河、大河有り、山、大山有り、地、大地有り、城、大城有り、衆生、大衆生有り、王、大王有り、人、大人有り、天、天中天有り、道、大道有り。(三六)涅槃も亦爾なり。涅槃有り、大涅槃有り。(三七)云何が涅槃なる。善男子、人の饑餓して少飯食を得、

---

【三一】次に第三に不定を結す。

【三二】是より第三に眞實。

【三三】是より第二に德王更に上の果の問を答ふることを請す。此は前問既に遂げれば重て之を請す。上の第二に併せて因果を問ふ中に就て先に併せて因果を答へ、次に別して因果を答ふ。別答の中如來既に廣く因を答へ竟る。今德王更に果の問を作す。之に二段ありて初に果の問。

【三四】次に如來の答。之に二段ありて初に問を歎す。

【三五】次に正しく答ふ。之に二段あり、其中初に相對に就て答ふ。之に又二段ありて初に實。

【三六】次に合。之に二段あり、其中初に總じて合す。之に又二段ありて初に大小の兩章門を列ぬ。

名けて安樂と爲すが如し。是の如き安樂も亦涅槃と名く。病差ゆることを得ば、則ち安樂を得るが如し。是の如き安樂も亦涅槃と名く。人の怖畏して歸依處を得ば、則ち安樂を得るが如し。是の如き安樂も亦涅槃と名く。貧窮の人の七寶物を獲れば、則ち安樂を得るが如し。是の如き安樂も亦涅槃と名く、人の骨を觀て貪欲を起さざれば則ち安樂を得るが如し。是の如き安樂も亦涅槃と名く。是の如き涅槃は名けて大涅槃と爲すことを得ざるなり。何を以ての故に。饑餓を以ての故に、病の故に、怖の故に、貧の故に、貪著を生ずるが故なり。是を涅槃は大涅槃に非ずと名く。(三八)善男子、若は凡夫人、及以聲聞、(三九)或は世俗に因り、或は聖道に因りて欲界の結を斷ずれば、則ち安樂を得。是の如き安樂も亦涅槃と名け、名けて大涅槃と爲すことを得ざるなり。能く初禪を斷じ、乃至能く非想非非想處の結を斷ずれば、則ち安樂を得。是の如き安樂も亦涅槃と名く、名けて大涅槃と爲すことを得ざるなり。(四〇)何を以ての故に。(四一)還つて煩惱を生じ習氣有るが故なり。云何が名けて煩惱習氣と爲す。聲聞、緣覺は煩惱の氣有り。所謂我身、我衣、我去、我來、我說、我聽なり。諸佛如來は涅槃に入る。涅

【三七】次に兩章を釋す。之に二段あり、其中初に小を釋す。之に又二段ありて初に五事少分滅苦の義有り。

【三八】次に斷伏の滅の文。これに二段ありて初は凡聖の兩章門。

【三九】次に釋。之に二段ありて初に釋の文なり。この文の中或因世俗の下は上の凡夫を釋し、或因聖道の下は上の聲聞を釋すなり。世俗は是れ外道の有漏伏惑の人を指し、聖道は即ち是れ斷惑の人を指す。

【四〇】次に釋成。

【四一】還つて煩惱等。還生煩惱は即ち凡夫を釋し、有習氣は小乘を釋す、今は偏に我見に就て習を明す。

【四二】所謂我身等。[illegible]

槃の性は我無く、樂無く、唯常淨有り、是を則ち名けて煩惱習氣と爲す。佛法、衆僧は差別の相有り、如來畢竟じて涅槃に入る。聲聞、緣覺、諸佛如來所得の涅槃等しうして差別無し。是の義を以ての故に、二乘の所得は大涅槃に非ず。何を以ての故に。(四二)常、樂、我、淨無きが故なり。(四三)常、樂、我、淨にして乃ち名けて大涅槃と爲すことを得るなり。

(四四)善男子、譬へば處の能く衆流を受くる有らば、名けて大海と爲すが如し。聲聞、緣覺、菩薩、諸佛如來所入の處有るに隨ひて、大涅槃と名く。四禪、三三昧、八背捨、八勝處、十一切處、能く是の如く無量の諸の善法を攝取する者に隨ひて、大涅槃と名く。(四五)善男子、譬へば河の第一の香象、底を得ること能はざる有らば、則ち名けて大と爲すが如く、聲聞、緣覺十住の菩薩に至りて佛性を見ざれば、名けて涅槃と爲す、大涅槃に非ず。若能く了了に佛性を見れば、則ち名けて大涅槃と爲すことを得るなり。是の大涅槃は、唯大象王能く其の底を盡す、大象王とは諸佛を謂ふなり。善男子、若(四六)摩訶那伽及び鉢揵陀大力士等、多時を經歷して上ること能はざる所、乃ち大山と名く。聲聞、緣覺、及び諸菩薩の摩訶那伽大力士等の見ること能はざる所、是の如きを乃ち大涅槃と名くるなり。(四七)復次に善男子、小王の所住の處有るに隨ひて、名けて小城と爲す。轉輪聖王

---

[illegible]常・樂・我・淨無し。

【四三】次に大を釋す。

【四四】次に譬を以て結合す。之に十譬有り、合は但[illegible]して七を合し、餘の三は譬合す。初に別して海を合す。

【四五】次に別して河を合す、

【四六】摩訶那伽（Mahānāga マハーナーガ）は大龍又は大象と譯す。鉢揵陀は具に[illegible]（[illegible]di）。鎮匱と譯す。共に天中の力士の名。

【四七】次に別して山を合す。

の所住の處を乃ち大城と名く。聲聞、緣覺の八萬、六萬、四萬、二萬、一萬の住處を名けて涅槃と爲す。(四八)無上法主聖王の住處を乃ち名けて大般涅槃と爲すことを得。是を以ての故に大般涅槃と名く。(四九)善男子、譬へば人有りて、四種の兵を見て怖畏を生ぜざるが如し。當に知るべし、是の人を大衆生と名く。若衆生、三惡道煩惱惡業に於て怖畏を生ぜず、而も能く中に於て廣く衆生を度する有らば、當に知るべし、是の人大涅槃を得と。(五〇)若人能く父母を供養し、沙門、及び婆羅門を恭敬し、善法を修治し、所言誠實にして欺誑有ること無く、能く諸惡を忍び、貧乏に惠施する有らば、大丈夫と名く。菩薩も亦爾なり。大慈悲有りて一切を憐愍し、諸の衆生に於て猶し父母の如し。能く衆生を生死の河に度し、(五一)普く衆生に一實の道を示す。是を則ち名けて大般涅槃と爲す。

(五二)善男子、大は不可思議を名く。若不可思議は一切衆生信ずること能はざる所、是を則ち名けて大般涅槃と爲す。唯佛、菩薩の見る所なるが故に大涅槃と名く。(五三)何の因緣を以て、復名けて大と爲す。無量の因緣を以て然して後乃ち得、故に名けて大と爲す。善男子、世間の人、多因緣の得る所の物を以て、則ち名けて大と爲すが如く、涅槃も亦爾なり、多因緣の所得なるを以ての故に、故に名けて大と爲す。(五四)云何が復

【四八】次に併せて王城地を合す。

【四九】次に前の第七の衆生大衆住の譬を合す。

【五〇】次に併せて前の人大人、天大人の兩譬を合す。

【五一】次に前の有道大道を合す。

【五二】是より下經體に就て答ふ。之に總別の二段あり。總の中初に不可說。

【五三】次に可說。

【五四】次に別。之に二段あり、其中初に大我を釋す。之に又二段あり。初に不可思議大を釋す。

名けて大涅槃と爲す。大我有るが故に大涅槃と名く。涅槃は無我大自在の故に、名けて大我と爲す。云何が名けて大自在と爲すや。八自在有らば則ち名けて我と爲す。何等をか八つと爲す。一つには能く一身を示して以て多身と爲す、身數の大小猶し微塵の如く、十方無量の世界に充滿す。如來の身は實に微塵に非ず、自在を以ての故に微塵身を現ず。是の如き自在は則ち大我と爲す。二つには一塵身の三千大千世界に滿つるを示す、如來の身は實に大千世界に滿たず。何を以ての故に。無閡を以ての故に、直ちに自在を以ての故に、三千大千世界に滿つ。是の如き自在を名けて大我と爲す。三つには能く此の三千大千世界に滿つるの身を以て、輕擧して空を飛んで二十恆河沙等の諸佛世界を過ぎて而も障閡無し。如來の身は實に輕重無く、自在を以ての故に能く輕重と爲す。是の如き自在を名けて大我と爲す。四つには自在を以ての故に而も自在を得。云何が自在なる。如來は一心安住して動ぜず、示化すべき所の無量の形類各心有らしむ。如來時有りて、或は一事を造りて而も衆生をして各各成辦せしむ。如來の身は常に一土に住して而も他土をして一切悉く見しむ。是の如き自在を名けて大我と爲す。五つには根自在の故に。云何が名けて根自在と爲すや。如來の一根は亦能く色を見、聲を聞き、香を嗅ぎ、味を別ち、觸を覺え、法を知る。如來の六根は亦色を見、聲を聞き、香を嗅ぎ、味を別ち、觸を覺え、法を知らず。自在を以ての故に根をして自在ならしむ。是の如き自在を名けて大我と爲す。六つには自在を以ての故に一切法を得、如來の心は亦得想無し。何を以ての故に。所得無

きが故なり。若是有ならば名けて得と爲すべし。實に所有無し、云何ぞ得と名けん。若如來をして得想有りと計せしめば、是則ち諸佛涅槃を得ず、得無きを以ての故に涅槃を得と名く。自在を以ての故に一切法を得、諸法を得るが故に名けて大我と爲す。七つには說自在の故に、如來一切の義を演說して無量劫を經るに義も亦盡きず。所謂若は戒、若は定、若は施、若は慧なり。如來爾の時に都て念を生じたまはず、我說き彼聽くと。亦復一偈の想を生ぜず。世間の人若四句を偈と爲すは、世俗に隨うが故に說きて名けて偈と爲す。一切法性も亦說く有ること無し、自在を以ての故に如來演說す、演說を以ての故に名けて大我と爲す。八つには如來一切諸處に徧滿すること猶し虛空の如し。虛空の性は見ることを得べからず、如來も亦爾なり、實に見るべからず。自在を以ての故に一切をして見しむ。是の如き自在を名けて大我と爲す、是の如き大我を大涅槃と名く。是の義を以ての故に大涅槃と名く。

(五五)復次に善男子、譬へば寶藏に諸珍異多く種種具足す、故に大藏と名くるが如く、諸佛如來の甚深の奧藏も亦復是の如し、諸の奇異多く、具足して闕くること無ければ大涅槃と名く。復次に善男子、無邊の物は乃ち名けて大と爲す。涅槃は無邊なり、是の故に大と名く。(五六)復次に善男子、大樂有るが故に大涅槃と名く、涅槃は樂無し、四樂を以ての故に大涅槃と名く。何等をか四つと爲す。一つには諸樂を斷するが故に。樂を斷ぜざれば、則ち名

【五五】次に多因緣の故に大我と名くるを釋す。

【五六】次に大樂を釋す。之に二段あり、其中初に不可說の大樂を明す。之に又四段ありて初に無苦無樂の樂を明す。

けて苦と爲す、若苦有らば、大樂と名けず。樂を斷ずるを以ての故に則ち苦有ること無し、苦無く樂無きを乃ち大樂と名く。涅槃の性は無苦無樂なり。是の故に涅槃を名けて大樂と爲す。是の義を以ての故に大涅槃と名く。復次に善男子、樂に二種有り。一つには凡夫、二つには諸佛なり。凡夫の樂は無常にして敗壞す、是の故に樂無し。諸佛は常樂にして變異有ること無し、故に大樂と名く。復次に善男子、三種の受有り。一つには苦受、二つには樂受、三つには不苦不樂受なり、不苦不樂は是亦苦と爲す。涅槃は不苦不樂に同じと雖も、然も大樂と名く。大樂を以ての故に大涅槃と名く。(五七)二つには大寂靜の故に名けて大樂と爲す。涅槃の性は是大寂靜なり。何を以ての故に。一切の憒閙法を遠離するが故なり。大寂靜を以て大涅槃と名く。(五八)三つには一切知の故に名けて大樂と爲す。一切知に非ざれば大樂と名けず。諸佛如來は一切知の故に名けて大樂と爲す。大樂を以ての故に大涅槃と名く。(五九)四つには身壞せざるが故に名けて大樂と爲す。身若壞すべくば、則ち樂と名けず。如來の身は金剛無壞なり、煩惱身、無常身に非ず、故に大樂と名く。大樂を以ての故に大涅槃と名く。

(六〇)善男子、世間の名字は或は因緣有り、或は因緣無し。有因緣とは、舍利弗、母を舍利と名け、母に因りて字を立つ、故に舍利弗と名くるが如し。(六一)摩鍮羅道人は摩鍮羅國に生ず、國に因りて名を

【五七】次に無喧無靜な大寂靜と名け、之を樂と爲すことを明す。

【五八】次に知に非ず無知に非ざるを乃ち大知と名け、之を名けて樂と爲すことを釋す。

【五九】次に身不壞を釋す。

【六〇】次に多因緣を大樂と爲すを明す。之に二段ありて初に有因緣。

【六一】摩鍮羅（Mayūra）。孔雀と譯す。

立つ、故に摩鍮羅と名くるが如し。目犍連の如し。目犍連とは即ち是姓なり。姓に因りて名を立つ、故に目犍連と名く。我瞿曇種姓に生ずれば、姓に因りて名を立て、稱して瞿曇と爲すが如し。(六二)毗舍佉道人の如し。毗舍佉とは、即ち是星の名なり、星に因りて名を爲し毗舍佉と名く。六指有れば、六指に因るが故に六指人と名くるが如し。佛奴、天奴の佛に因り天に因るが故に佛奴、天奴と名くるが如し。濕に因りて生ずるが故に、故に濕生と名け、聲に因るが故に、名けて(六三)迦迦羅と爲し、究究羅、咀咀羅と名くるが如し。是の如き等の名、是因縁の名なり。(六四)無因縁とは蓮華、地、水、火、風、虚空の如し。(六五)曼陀婆の一名二實の如し。一つには殿堂と名け、二つには飲漿と名く。堂は漿を飲まざれども亦復名けて曼陀婆と爲すことを得。(六六)薩婆車多を名けて蛇蓋と爲すが如く、實は蛇蓋に非ず。是を無因縁に強ひて名字を立つと名く。(六七)坻羅婆夷を名けて食油と爲すも、實は油を食せざるが如し。強ひて爲に名を立て、名けて食油と爲す。是を無因に強ひて名字を立つと名く。善男子、是の大涅槃も亦復是の如し、因縁有ること無きに強ひて爲に名を立つ。善男子、譬へば虚空の小空に因り、名けて大と爲さざるが如きなり。涅槃も亦爾なり。小相に因りて大涅槃と名けず。

---

【六二】毗舍佉(Viśākhā)。[illegible]星と譯す、星に依りて名を得。

【六三】迦迦羅(Kākala)。烏聲に名づく。究究羅(Kukkuṭa)。鷄聲に名づく。咀咀羅(Tatara)は雉聲に名づく。然るに玄應音義には鷄聲に名づくとす。今章安に依るを正しとす。

【六四】次に無因縁を釋す。

【六五】曼陀婆(Maṇḍapa)。河西の曰く、曼陀婆とは梵本に一音にして而かも二義あり、一に[illegible]堂、二に飲漿なり。然るに[illegible]に出せるものには殿堂飲漿と言ふと。

【六六】薩婆車多。安註曰く、薩婆車多は馬芹に似ると云ふ、一音二名と。

【六七】坻羅婆夷。安註曰く、坻

（六八）善男子、譬へば法は稱量すべからず、思議すべからざる有り、故に名けて大と爲すが如く、涅槃も亦爾なり。稱量すべからず、思議すべからず。故に名けて大般涅槃と爲すことを得。（六九）純淨を以ての故に大涅槃と名く。（七〇）云何が純淨なる。淨に四種有り。何等をか四つと爲す。一つには二十五有を名けて不淨と爲す。能く永く斷するが故に、名けて淨と爲すことを得、淨は卽ち涅槃なり。是の如き涅槃も亦有と名くることを得れども、而も是の涅槃は實は是有に非ず。諸佛如來は世俗に隨ふが故に涅槃有と說く。譬へば世人の父に非ざるを父と言ひ、母に非ざるを母と言ふ、實は父母に非ずして而も父母と言ふが如く、涅槃も亦爾なり、世俗に隨ふが故に說きて諸佛に大涅槃有りと言ふ。二つには業清淨の故に。一切の凡夫は業不淸淨なり、故に涅槃無し。諸佛如來は業清淨の故に、故に大淨と名く。大淨を以ての故に大涅槃と名く。三つには身淸淨の故に。身若無常なれば則ち不淨と名く。如來身は常なり、故に大淨と名く。大淨を以ての故に大涅槃と名く。四つには心淸淨の故に。心若漏有らば名けて不淨と曰ふ。佛心は漏無し、故に大淨と名く。大淨を以ての故に大涅槃と名く。（七一）善男子、是を善男子、善女人、是の如く大涅槃經を修行して初分の功德を具足し成就すと名く。」

羅婆毒は是れ鵲と雀となり、亦た一音にして二名あること、

【六八】次に大淨を釋す。之に三段ある中、初に不可量に就て淨を釋す。

【六九】次に純淨を以ての故に大と爲す。

【七〇】次に四義を出して淨を釋す。

【七一】是より第三に總じて結す。

# 巻の第二十二

## 高貴德王菩薩品の四

(一)「復次に善男子、云何が菩薩摩訶薩、大涅槃を修して第二の功德を成就し具足する。(二)善男子、菩薩摩訶薩大涅槃を修して、(三)昔得ざる所而も今之を得、昔見ざる所而も今之を見、昔聞かざる所而も今之を聞き、昔至らざる所而も今至ることを得、昔知らざる所而も今之を知れり。

(四)云何が名けて、昔得ざる所而も今之を得と爲す。所謂神通、昔得ざる所、而も今乃ち得たり。(五)通に二種有り。一つには內、二つには外なり。(六)言ふ所の外とは外道と共す。內に復二つ有り。一つには二乘、二つには菩薩なり。菩薩大涅槃經を修行して得る所の神通なり。聲聞、辟支佛と共ならず。云何が名けて聲聞、辟支佛と共ならずと爲す。二乘所作の神通變化に、一心に一を作して衆多を得ず。(七)菩薩は爾らず、一心の中に於て、則ち能く具足して五趣の身を現ず。所以は何ん。是の如き大涅槃經の威神力を得

【一】是より二に第二の功德を明す。五通に約す。之に標、列、釋、結の四段ありて初に標の文。

【二】次に章門を列す。

【三】昔得ざる所而も今得等。此文に六通あり、不得而得は即ち漏盡通、不見而見は即ち天眼通、不聞而聞は即ち天耳通、不至而至は即ち如意通、不知而知は即ち他心・宿命二通を指すなり。

【四】次に解釋。これに五段あり、其中初に不得得を釋す。之に標、簡顯、結の三段ありて初に標。

るを以ての故なり。是則ち名けて昔得ざる所而も今之を得と爲す。(八)又復云何が昔得ざる所而も今之を得る。所謂身に自在を得、心に自在を得。何を以ての故に。一切の凡夫所有の身心は自在を得ず、或は心身に隨ひ、或は身心に隨ふ。云何が名けて心身に隨ふと爲す。譬へば醉人の酒身中に在り、爾の時に身動ずれば心も亦隨つて動ずるが如く、亦身嬾ければ心も亦隨つて嬾きが如し。是を則ち名けて心身に隨ふと爲す。又嬰兒の其の身稺小なれば心も亦隨つて小、大人の身大なれば心も亦隨つて大なるが如し。又人有りて身體麤澀なれば、心常に思念して膏油潤漬して輭ならしむることを得んと欲するが如し。是を則ち名けて心身に隨ふと爲す。云何が名けて身心に隨ふと爲す。所謂去來、坐臥、施、戒、忍辱、精進を修行するなり。愁惱の人は身則ち羸悴し、歡喜の人は身則ち肥悅す。恐怖の人は身體戰動し、心を專らにして法を聽けば身則ち怡懌し、悲苦の人は涕淚横流す。是を則ち名けて身心に隨ふと爲す。(九)菩薩は爾らず、身心の中に於て倶に自在を得。(一〇)是を則ち名けて、昔得ざる所而も之を得と爲す。

(一一)復次に善男子、菩薩摩訶薩所現の身相は、猶し微塵の如し。此微身を以て、悉く能く徧く無量無邊の恆河沙等の諸佛世界に至り、障閡する所無く、而も心常に定んで初て移動せず。是を則ち名けて心

---

【五】次に簡顯。之に二段ありて初に標。

【六】次に釋。之に二段ありて初に非を簡ぶ。

【七】次に是を顯す。之に二段ありて初に一心の中神通圓滿具足するを明す。

【八】次に身心自在を顯す。之に二段あり。初に不自在を簡出す。

【九】次に自在を明す。

【一〇】次に結。

【一一】是より不至至章門を釋す、卽ち是れ身通。之に二段ありて初に遠到を明す。

身に隨はずと爲す。是も亦名けて昔至らざる所、而も今能く至ると爲す。(二二)何が故ぞ復昔至らざる所、而も今能く至ると名く。一切の聲聞、辟支佛等の至ること能はざる所、菩薩は能く至る。是故に名けて昔所不至而今能至と爲す。一切の聲聞、辟支佛等は神通を以てすと雖も、身を變じて細微塵の如くして、徧く無量恆河沙等の諸佛世界に至ること能はず。聲聞、縁覺は身若動ずる時は、心も亦隨つて動す。菩薩は爾らず。心動ぜずと雖も身至らざる無し。是を菩薩心身に隨はずと名く。復次に善男子、菩薩身を化して猶し三千大千世界の如くし、此の大身を以て一塵の身に入る。其の心爾の時に亦隨つて小ならず。聲聞、縁覺能く身を化して、三千大千世界の如くならしむと雖も、而も此の如きの大身を以て微塵の身に入ること能はず。此の事の中に於て尚自ら能はず。況や能く心をして而も隨つて動ぜざらしめんや。是を菩薩心身に隨はずと名く。

【二二】次に二乘に簡異す。
【二三】次に正しく自在を明す。

(二三)復次に善男子、菩薩摩訶薩一音聲を以て、能く三千大千世界の衆生をして悉く聞かしむとも、心終に是の音聲をして諸の世界に徧からしむと念ぜず。諸の衆生をして、昔聞かざる所、而も今聞くことを得しむとも、而も是の菩薩は亦都て我衆生をして、昔聞かざる所、而も今聞くことを得しむと言はす。菩薩若我が說法に因りて、諸の衆生をして不聞を聞かしむと言はば、當に知るべし、是の人は終に阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。何を以ての故に。衆生聞かず、我爲に說くとは、此の如きの心は是生死の心なり。一切の菩薩是の心已に盡く。是の義を以ての故に、菩薩摩訶薩所有の身心相

隨逐せず。善男子、一切の凡夫は身心相隨ふ。菩薩は爾らず、衆生を化せんが爲の故に、身小を現すと雖も心亦小ならず。何を以ての故に。諸の菩薩等所有の心性は常に廣大なるが故に、大身を現すと雖も心亦大ならず。云何が大身なる。身三千大千世界の如し。云何が小心なる。嬰兒行を行ず。是の義を以ての故に、心身に隨はず。菩薩已に無量阿僧祇劫に於て酒を遠けて飮まざれども、而も心亦動ず。心悲苦無くして身亦流涙し、實に恐怖無くして身亦戰慄す。是の義を以ての故に、當に知るべし、菩薩は身心自在にして相隨逐せず。菩薩摩訶薩は唯一身を現するに、而も諸の衆生各各異を見る。(一四)善男子、云何が菩薩摩訶薩大涅槃を修して、昔聞かざる所、而も今聞くことを得る。菩薩摩訶薩先に聲相を取る。所謂象聲、馬聲、車聲、人聲、貝、鼓、簫、笛、歌哭等の聲、而も之を修習す。(一五)修習を以ての故に、能く無量の三千大千世界の所有の地獄の音聲を聞く。(一六)復轉じて修習して異なる耳根を得。聲聞、緣覺の天耳に異なる。何を以ての故に。二乘所得の清淨耳通なり。若初禪の淨妙の四大に依れば、唯初禪を聞きて二禪を聞かず。乃至四禪も亦復是の如し。能く一時に三千大千世界の所有の音聲を聞くと雖も、而も無量無邊の恆河沙等の世界の音聲を聞く能はず。是の義を以ての故に、菩薩の所得は聲聞、緣覺の耳根に異なる。此の異を以ての故に、昔聞かざる所、而も今聞くを得。(一七)音聲を聞くと雖も、而も心初て聲を聞くの相無し。有相、常相、樂相、我相、淨相、主相、依相、

【一四】是より不聞而聞を釋す、即ち是れ天耳通。之に二段あり、其中初に釋。之に又四段ありて初に修。
【一五】次に得。
【一六】次に簡。
【一七】次に無著。

作相、因相、定相、果相を作さず。是の義を以ての故に、諸の菩薩等昔聞かざる所、而も今聞くことを得。』

(一八)爾の時に光明徧照高貴德王菩薩の言さく、『佛所説の、定相を作らず果相を作らざるの如き、是の義然らず。(一九)何を以ての故に。如來上に說きたまふ、「若人是の大涅槃經の一句一字を聞かば、必ず定んで阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得」と。如來今に於て復無定、無果と言ふ。若阿耨多羅三藐三菩提を得ば、卽ち是定相、卽ち是果相なり。云何ぞ而も無定、無果と言ふ。(二〇)惡聲を聞くが故に則ち惡心を生ず、惡心を生ずるが故に則ち三塗に至る。若三塗に至れば則ち是定果なり。云何ぞ而も無定無果と言ふ。』

(二一)爾の時に如來讃じて言はく、『善い哉善い哉善男子、能く是の問を作す。(二二)若諸佛の說、諸の音聲をして定果相有らしめば、則ち諸佛世尊の相に非ず。是魔王相、生死相、涅槃に遠かるの相なり。何を以ての故に。一切諸佛凡そ演說する所定果の相無し。善男子、譬へば刀の中人の面像を照す。竪は則ち長を見、橫は則ち廣を見るが如し。若定相有らば云何ぞ而も竪は則ち長を見、橫は則ち廣を見るを得んや。是義を以ての故に、諸佛世尊、凡そ演說する所、定果の相無し。(二三)善男子、夫涅槃は實に聲果に非ず。若涅槃是聲果ならしめば、當に知るべし、涅槃は是常法

【一八】次に論義。之に二番の問答あり、初の問に二段ありて初に皆な領して仰非す。
【一九】次に兩對を作す。之に二段ありて初に善聲を難す。
【二〇】次に惡聲を難す。
【二一】次に佛答。之に二段ありて初に問を歎す。
【二二】次に正しく答ふ。之に總、別の二答あり、初の總答に又二段あり、其中初に皆不定。之に又二段ありて初の重に法、譬、結の三段あり。
【二三】次の重に又法、譬、結の三段あり。

に非ず。善男子、譬へば世間因より生ずる法は、因有れば則ち果有り因無ければ則ち果無きが如く、因無常の故に果も亦無常なり。所以は何ん。因も亦果と作り、果も亦因と作る。是の義を以ての故に、一切の諸法は定相有ること無し。若涅槃をして因より生ずるならしめば、因無常の故に果も亦無常ならん。而も是の涅槃は因より生ぜず、體は是果に非ず。是の故に常と爲す。善男子、是の義を以ての故に、涅槃の體は定無く果無し。(二四)善男子、夫涅槃は亦定と言ふべく、亦果と言ふべし。云何が定と爲す。一切諸佛の所有の涅槃は常、樂、我、淨なり、是の故に定と爲す。生、老、壞無し、是の故に定と爲す。一闡提等、犯四重禁、誹謗方等、作五逆罪、本心を捨除せば必定して得るが故に、是の故に定と爲す。(二五)善男子、汝が言ふ所の如き、若人我が大涅槃の一字一句を説くを聞かば、阿耨多羅三藐三菩提を得とは、汝是の義に於て猶未だ解了せず。汝今諦かに聽け、吾當に汝が爲に更に分別して説くべし。善男子、若善男子、善女人有りて大涅槃の一字一句を聞きて、字相を作さず、句相を作さず、聞相を作さず、佛相を作さず、説相を作さざれば、是の如き義は無相相と名く。無相相を以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提を得。(二六)善男子、汝が言ふ所の如き惡聲を聞くが故に三塗に至るとは、是の義然らず。何を以ての故に。惡聲を以て而も三塗に至るに非ず。當に知るべし、是の果乃ち是惡心なり。所以は何ん。善男子、善女人等、惡聲を聞くと雖も心に惡を生ぜざる有り。是の故に當に知るべし、

【二四】次に復た定を明す。
【二五】次に別して答ふ。之に二段ありて初に善聲を答ふ。
【二六】次に惡聲を答ふ。

惡聲に因りて三趣の中に生ずるに非ず。而も諸の衆生煩惱結惡心滋多に因りて三惡趣に生ず、惡聲に因るに非ず。若聲定相有らば諸の聞くこと有る者、一切悉く惡心を生ずべし。或は生ずる者有り、生ぜざる者有り。是の故に當に知るべし、聲は定相無し。定相無きを以ての故に、復之に因ると雖も惡心を生ぜず。(二七)世尊、聲若定無くば、云何ぞ菩薩昔の聞かざる所而も今聞くことを得る。善男子、聲は定相無し、昔の聞かざる所、諸の菩薩をして而も今聞くことを得しむ。是の義を以ての故に、我是の説を作す、「昔聞かざる所而も今聞くことを得」と。

(二八)善男子、云何が昔見ざる所、而も今見ることを得。菩薩摩訶薩大涅槃微妙の經典を修して先に明相を取る。所謂日月、星宿、庭燎、燈燭、珠火の明、藥草等の光なり。(二九)修習を以ての故に、異の眼根を得、(三〇)聲聞、緣覺の所得に異なれり。云何が異と爲す。二乘所得の淸淨天眼なり。若欲界の四大眼根に依れば初禪を見ず、若初禪に依らば上地を見ず、乃至自らの眼猶見ること能はず。若多く見んと欲するも極は三千大千世界に至る。菩薩摩訶薩天眼を修せざれども、妙色身を見るに悉く是骨相なり。(三一)他方恆河沙等の世界の色相を見ると雖も、色相を作さず、常相、有相、物相、名字等の相、作因緣相を作さず、見相を作さず、是の眼微妙淨相と言はず、唯因緣、非因緣相を見る。云何が因緣なる。色は是眼の緣なり。若是の色をして因緣に非ざらしめば、一切の凡夫色を見るの相を生ずべからず。是の

【二七】次に第二番の問答。之に二段ありて初は問、次は答。
【二八】是より不見而見を釋す。之に六段ありて初に修。
【二九】次に得。
【三〇】次に簡。
【三一】次に不著。

義を以ての故に色を因緣と名く。非因緣とは、菩薩摩訶薩復色を見ると雖も色相を生ぜず、是の故に緣に非ず。是の義を以ての故に、菩薩所得の清淨天眼は、聲聞、緣覺の所得に異なれり。是の異を以ての故に、一時に徧く十方世界の現在の諸佛を見る。是を菩薩昔見ざる所、而も今見ることを得と名く。是の異を以ての故に能く微塵を見る、聲聞、緣覺の見ること能はざる所なり。是の異を以ての故に、自らの眼を見ると雖も初て見相無く、無常相無し。凡夫身の三十六物不淨充滿を見ること、掌中に於て(三二)阿摩勒果を觀るが如し。是の義を以ての故に、昔見ざる所而も今見ることを得。(三三)若し衆生所有の色相を見ば、則ち其の人の大小乘の根を知り、一たび衣に觸るが故に、亦是の人の善惡、諸根差別の相を知る。是の義を以ての故に、昔知らざる所而も今知ることを得。一見を以ての故に、昔知らざる所而も今知ることを得。(三四)此の知を以ての故に、昔見ざる所而も今見ることを得。

(三五)善男子、云何が菩薩昔知らざる所而も今知ることを得る。菩薩摩訶薩凡夫の貪恚癡心を知ると雖も、初て心及び心數の相を作さず、衆生及以物相を作さず、第一義畢竟空相を修す。何を以ての故に。一切の菩薩常に善く空性相を修習するが故なり。空を修するを以ての故に、昔知らざる所而も今知ることを得。云何が知と爲す。我有ること無く、我所有ること無きを知る。(三六)諸

【三二】阿摩勒(Āmalaka)。無垢と譯す、果實の名。果胡桃に似、其の味酸くして甜し、藥分に入るに可し、故に掌中に觀る如しと言ふ。
【三三】次に知異を明す。
【三四】次に結。
【三五】是より不知而知を釋す、即ち是れ他心・宿命の兩通の之に四段あり、其中初に他心を知る。之に又二段ありて初に他心を知る。
【三六】次に佛性を知る。

の衆生は皆佛性有り。佛性を以ての故に一闡提等本心を捨離すれば、悉く當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べしと知る。此の如きは皆是聲聞、緣覺の知ること能はざる所、菩薩は能く知る。是の義を以ての故に、昔知らざる所而も今知ることを得。(三七)復次に善男子、云何が昔知らざる所而も今知ることを得る。菩薩摩訶薩大涅槃微妙の經典を修して過去世の一切衆生の所生、種姓、父母、兄弟、妻子、眷屬、知識、怨憎を念ず。(三八)一念の中に於て殊異の智を得て、聲聞、緣覺の智慧に異なれり。云何が異と爲す。聲聞、緣覺の所有の智慧は、過去世の所有の衆生の種姓、父母、乃至怨憎を念ずるも、而も種姓、怨憎に至るの相を作す。菩薩は爾らず、過去の種姓、父母、乃至怨憎を念ずと雖も、終に種姓、父母、怨憎等の相を生ぜず。常に法相、空寂の相を作す。是を菩薩昔知らざる所而も今知ることを得と名く。(三九)復次に善男子、云何が昔知らざる所而も今知ることを得る。菩薩摩訶薩大涅槃微妙の經典を修して、他心智の聲聞、緣覺の所得に異なるを得。云何が異と爲す。聲聞、緣覺は一念の智を以て人心を知る時、則ち地獄、畜生、餓鬼、天の心を知ること能はず。菩薩は爾らず、一念の中に於て徧く六趣衆生の心を知る。是を菩薩昔知らざる所、而も今知ることを得と名く。(四〇)復次に善男子、復異知有り。菩薩摩訶薩一心の中に於て、須陀洹の初心次第して十六心に至るを知る。(四一)是の義を以ての故に、昔知らざる所而も今知る

【三七】次に宿命を知ることを明す。之に二段ありて初に正しく宿命を明す。
【三八】次に簡異。
【三九】次に重ねて他心を釋す。之に二段ありて初に横に六道を知る。
【四〇】次に竪に十六心を知る。
【四一】次に結。

ことを得。（四二）是を菩薩大涅槃を修して第二の功德を具足し成就すと爲す。

（四三）復次に善男子、云何が菩薩摩訶薩、大涅槃を修して第三の功德を成就し具足する。（四四）善男子、菩薩摩訶薩大涅槃を修して慈を捨て慈を得。慈を得るの時因緣に從はず。云何が名けて（四五）慈を捨て慈を得と爲す。（四六）善男子、慈を世諦と名く。（四七）菩薩摩訶薩世諦の慈を捨てて、第一義の慈を得。第一義の慈は緣に從ひて得ず。（四八）復次に云何が捨慈得慈なる。慈若捨つべくば凡夫慈と名く。慈若得べくば卽ち菩薩の無緣の慈と名く。（四九）一闡提の慈、犯重禁の慈、謗方等の慈、作五逆の慈を捨つ。憐愍の慈を得、如來の慈、世尊の慈、無因緣の慈を得。（五〇）云何が復捨慈得慈と名くる。黃門の慈、無根、二根、女人の慈、屠膾、獵師、畜養鷄豬、是の如き等の慈を捨て、亦聲聞、辟支佛の慈を捨て、諸菩薩の無緣の慈を得。（五一）己慈を見ず、他慈を見ず、持戒を見ず、破戒を見ず。自ら悲を見ると雖も衆生を見ず、苦受有りと雖も受者を見ず。何を以ての故に。第一眞實義を修するを以ての故なり。（五二）是を菩薩大涅槃を修して第三の功德を成就し具足すと名く。

（五三）復次に善男子、云何が菩薩摩訶薩大涅槃を修して、第四の功德を成就

---

【四二】 是より第四に結。

【四三】 是より第三の功德を明す。之に標、釋の二段あり。今は其中の標。

【四四】 次に釋。之に二段ありて初に捨得の二章門を明す。

【四五】 慈を捨て慈を得等。四心中斯く偏へに慈を明かすは蓋し二意あり。一に云く特だ是れ文略なれども義は具さに四心の意あり。二に云く、慈は尚ほ是れ一切善法の根本、何の意ぞ、卽ち是れ三心なることを得んや、偏を捨てて圓を得、一を擧げて三を知らしむ、故に略して之を說かざるなり。

【四六】 次に釋。これに二段ありて初に徵起。

【四七】 次に釋。之に五段ありて初に二諦に約す。

【四八】 次に凡聖に約す。

【四九】 次に善惡に約す。

し具足する。(五四)善男子、菩薩摩訶薩大涅槃を修して第四の功徳を成就し具足するに十事有り。何等をか十と爲す。一つには根深くして傾拔すべきこと難く、二つには自身決定想を生じ、三つには福田及び非福田を觀ぜず、四つには淨佛土を修し、五つには有餘を滅除し、六つには業緣を斷除し、七つには淸淨身を修し、八つには諸緣を了知し、九つには諸の怨敵を離れ、十には二邊を斷除す。(五五)云何が根深くして傾拔すべきこと難き。(五六)言ふ所の根とは不放逸を名く。(五七)不放逸とは是何の根と爲す。所謂阿耨多羅三藐三菩提の根なり。(五八)善男子、一切の諸佛諸善の根本は皆不放逸なり。(五九)不放逸の故に、諸餘の善根展轉して增長す。(六〇)能く諸の善根を增長するを以ての故に、諸善の中に於て最も殊勝と爲す。善男子、諸迹の中象迹を上と爲すが如く、不放逸の法も亦復是の如し、諸の善法に於て最も殊勝と爲す。善男子、諸明の中に日光を最と爲すが如く、不放逸の法も亦復是の如し、諸の善法に於て最も殊勝と爲す。善男子、諸王の中に轉輪聖王を最も第一と爲すが如く、不放逸の法も亦復是の如し、諸の善法に於て最も第一と爲す。善男子、諸流の中に四河を最と爲すが如く、不放逸の法も亦復是の如し、諸の善法に於て上と爲し最と爲す。善男子、諸山の中に須彌山王を最も

【五〇】次に勝劣に約す。
【五一】次に無等。
【五二】次に結。
【五三】是より第四の功徳を明す。之に二段あり、其中に初に功徳を明す。之に又四段ありて初に標。
【五四】次に章門を明す。
【五五】次に解釋。これに九段あり、其中初に第一根深くして傾拔き難きを明す。之に標、釋、結の三段あり、今は其中の標。
【五六】次に釋。これに六段ありて初に根本。
【五七】次に根深。
【五八】次に根實。
【五九】次に根長。
【六〇】次に根勝。

第一と爲すが如く、不放逸の法も亦復是の如し、諸の善法に於て最も第一と爲す。善男子、水生華の中に青蓮を最と爲すが如く、不放逸の法も亦復是の如し、諸の善法に於て最と爲し上と爲す。善男子、陸生華の中に(六一)婆利師華を最と爲すが如く、不放逸の法も亦復是の如し、諸の善法に於て最と爲し上と爲す。善男子、諸獸の中に(六二)師子を最と爲すが如く、不放逸の法も亦復是の如し、諸の善法に於て最と爲し上と爲す。善男子、飛鳥の中に(六三)金翅鳥王を最と爲し上と爲すが如く、不放逸の法も亦復是の如し、諸の善法に於て最と爲し上と爲す。善男子、大身の中に(六四)羅睺阿脩羅王を最と爲し上と爲すが如く、不放逸の法も亦復是の如し、諸の善法に於て最と爲し上と爲す。善男子、一切衆生若は二足、四足、多足、無足の中に、如來を最と爲すが如く、不放逸の法も亦復是の如し、善法の中に於て最と爲し上と爲す。善男子、諸の衆中に佛僧を上と爲すが如く、不放逸の法も亦復是の如し、善法の中に於て最と爲し上と爲す。善男子、佛法の中に大涅槃の法を最と爲し上と爲すが如く、不法逸の法も亦復是の如し、諸の善法に於て最と爲し上と爲す。善男子、是の義を以ての故に、不放逸の根は深固にして拔き難し。(六五)云何が不放逸の故に增長を得る。所謂信根、戒根、施根、慧根、忍根、聞根、進根、念根、定根、善知識根なり。是の如きの諸根は、

【六一】婆利師。具さに婆利師迦(Varṣika)と云ひ、雨時花と譯す。雨時に至つて花咲くが故に此の名あり。

【六二】師子。梵音にSimhaと云ふ。

【六三】金翅鳥は梵語(Garuḍa)の譯。

【六四】羅睺阿修羅(Rāhulāsura)、障碍非天と譯す。四阿修羅王の一。

【六五】次に重ねて根長を釋す。

不放逸の故に增長を得、增長を以ての故に深固にして拔き難し。(六六)是の義を以ての故に、名けて菩薩摩訶薩大涅槃を修して根深くして拔き難しと爲す。(六七)云何が身に於て決定想を作す。(六八)自身の所に於て決定心を生ず。我今此の身、未來の世に於て定んで當に阿耨多羅三藐三菩提の器と爲るべし。(六九)心も亦是の如し。輕少を作さず、(七〇)變易を作さず、聲聞、辟支佛の心を作さず、(七一)魔心、及び自樂心、樂生死心を作さず。常に衆生の爲に慈悲心を求む。是を菩薩自身の中に於て決定心を生じて、我來世に於て當に阿耨多羅三藐三菩提の器と爲るべしと名く。(七二)是の義を以ての故に、菩薩摩訶薩大涅槃を修して、自身の中に於て決定想を生ず。(七三)云何が菩薩福田、及び非福田を觀ずる。(七四)云何が福田なる。外道の持戒より上諸佛に至る、是を福田と名く。若是の如き等の輩是眞の福田と言ふ有らば、當に知るべし、是の心則ち劣と爲す。菩薩摩訶薩は、一切無量の衆生を觀ずるに福田に非ざる無し。何を以ての故に。善く(七五)異念處を修習するを以ての故に。異念處を修習する者有らば、諸の衆生を觀ずるに持戒、及以毀戒有ること無し、常に諸佛世尊の所説を觀ず。(七六)世は四種と雖も倶に淨相を

【六六】次に結。

【六七】次に第二自身定想を釋す。之に標、釋、結の三段ありて前に同じ。

【六八】次に釋、これに二段ありて初に定身。

【六九】次に定心。

【七〇】變易を作さず等。此の變易に二義あり、修因に就くと受果に就くとなり。前者に依れば生死無常を名けて變易と爲す、後者に依れば變易生死を名けて變易と爲す。

【七一】魔心・自樂心等。魔心は、即ち魔天、自樂心は二乘に通ず。樂生死心は三界に住す。此の三心は是れ有著、決定に非ず。自ら求めて他に求めず、自ら求めて他に[illegible]、之を決定と爲す。

【七二】次に結。

【七三】次に第三福田非福田觀を釋す。之に標、釋、結の三段あ

得。何等をか四つと爲す。一つには施主清淨受者不淨、二つには施主不淨受者清淨、三つには施受俱に淨、四つには二つ俱に不淨なり。云何が施主淨受者不淨なる。施主具さに戒聞智慧有り、惠施、及以果報有るを知る。受者破戒し、專ら邪見に著して施無く報無し。是を施淨受者不淨と名く。云何が名けて受者清淨施主不淨と爲す。施主破戒し、專ら邪見に著して惠施及以果報無しと言ふ。受者持戒、多聞智慧、惠施及び施の果報有るを知る。是を施主不淨受者清淨と名く。云何が名けて施受俱淨と爲す。施者受者俱に持戒、多聞、智慧有り、惠施及び施の果報有るを知る。是を施受二俱清淨と名く。云何が名けて二俱不淨と爲す。施者、受者破戒邪見にして施及び施の果報有ること無しと言ふ。若是の如くならば、云何ぞ復淨果報を得と言はん。施無く報無きを以ての故に名けて淨と爲す。善男子、若施及び施報を見ざる有らば、當に知るべし、是の人破戒にして專ら邪見に著すと名けず。若聲聞の言に依りて施及び施の果報を見ざれば、是を則ち名けて破戒邪見と名く。若是の如き大涅槃經に依りて惠施及び施の果報を見ざれば、是を則ち名けて持戒正見と爲す。菩薩摩訶薩四念處有り、修習を以ての故に、衆生の持戒、

---

りて、今は其中の轉。而して今此の持[illegible]に於て前の四依品[illegible]と其の異同を辨ぜざる可らず。四依品は佛法を匡持するに持見を備ふ、此の品にては自修平等を用ふ。四依品は出家を誡め、此の品は在家を誡む。

【七四】次に釋。此の中、外道の持戒とは、但だ持戒のみに非す、又た上定を得るものを指す。其の故は下文に繫結の外道は持戒の比丘に勝ると云へばなり。持戒の比丘は未だ欲界の惑を伏すれば之に比べて勝と爲す。

【七五】異念處とは有無の二邊に異して正しく中道を觀する義なり。

【七六】施は四種と雖も等。無施無報を以て乃ち淨施と爲す。

破戒、施者、受者、及び施の果報を見ず。是の故に持戒正見と名くるを得。(七七)是の義を以ての故に、菩薩摩訶薩福田及び非福田を觀せず。(七八)云何が名けて淨佛國土と爲す。(七九)菩薩摩訶薩大涅槃微妙の經典を修して、阿耨多羅三藐三菩提の爲に、衆生を度するが故に(八〇)殺害心を離る。此の善根を以て、願はくは一切衆生と之を共にして諸の衆生壽命の長きことを得、大勢力有りて大神通を獲んと願ふ。是の誓願因緣力を以ての故に、未來世に於て成佛するの時國土の有らゆる一切衆生壽命長きことを得、大勢力有りて大神通を獲。

復次に善男子、菩薩摩訶薩大涅槃微妙の經典を修して、阿耨多羅三藐三菩提の爲に、衆生を度するが故に偸盜心を離る。此の善根を以て、願はくは一切衆生と之を共にし、諸の佛國の土地の所有純ら是七寶にして、衆生富足し所欲自恣ならんと願ふ。此の誓願因緣力を以ての故に、未來世に於て成佛するの時、所得の國土純ら是七寶にして、衆生富足し所欲自恣ならん。復次に善男子、菩薩摩訶薩大涅槃微妙の經典を修して、阿耨多羅三藐三菩提の爲に、衆生を度するが故に淫欲心を離る。此の善根を以て願はくは一切衆生と之を共にし、諸佛の土の有らゆる衆生に、貪欲、瞋恚、癡心有ること無く、亦饑渴の苦惱の患無からんと願ふ。是の誓願因緣力を以ての故

【七七】次に結。
【七八】次に第四修淨佛土を釋す。之に標、釋、結の三段ありて初に標。
【七九】次に釋。
【八〇】殺害心等。離殺害、離偸盜等を十善と名く。此の十善心能く菩提心と和合せしめて行じ、之を廻向して淨土の業因と爲す。然るに十善に、並びに相似の因、相似の果を得るを明かす。

に、未來世に於て成佛するの時、國土の衆生貪婬、瞋恚、癡心を遠離し、一切饑渴の苦惱有ること無し。復次に善男子、菩薩摩訶薩大涅槃微妙の經典を修して、阿耨多羅三藐三菩提の爲に、衆生を度するが故に（八二）妄語心を離る。此の善根を以て、願はくは一切衆生と之を共にし、諸佛の土常に華果、茂林、香樹有りて有らゆる衆生妙音聲を得んと願ふ。是の誓願因緣力を以ての故に、未來世に於て成佛するの時、有らゆる國土常に華果、茂林、香樹有り。其の中の衆生悉く清淨上妙の音聲を得。

復次に善男子、菩薩摩訶薩大涅槃微妙の經典を修して阿耨多羅三藐三菩提の爲に、衆生を度するが故に兩舌を遠離す。此の善根を以て、願はくは一切衆生と之を共にし、諸佛の土、有らゆる衆生常に共に和合し、正法を講說せんと願ふ。是の誓願因緣力を以ての故に、成佛するの時、國土の所有の一切衆生、悉く共に和合し法要を講論せん。復次に善男子、菩薩摩訶薩大涅槃微妙の經典を修して、阿耨多羅三藐三菩提の爲に、衆生を度するが故に惡口を遠離す。此の善根を以て、願はくは一切衆生と之を共にし、諸佛の土地平かにして掌の如く、砂石、荊棘、惡刺有ること無く、有らゆる衆生其の心平等ならんと願ず。是の誓願因緣力を以ての故に、未來世に於て成佛するの時、所有の國土地平かなること掌の如く、砂石、荊棘、惡刺有ること無く、有らゆる衆生其の心平等なり。復次に善男子、菩薩摩訶薩大涅槃微妙の經典を修して、阿耨多羅三藐三菩提の爲に、衆生を度するが故に無義語

【八二】妄語心を離れて華果を得るは、妄の實なきこと華の果なきが如く、今不妄語は實の果報あり、受報の時好華の果を感ずるを明かす。

を離る。此の善根を以て、願はくは一切衆生と之を共にし、諸佛の土、有らゆる衆生苦惱有ること無からんと願ず。是の誓願因緣力を以ての故に、未來世に於て成佛するの時、國土の有らゆる一切衆生苦惱有ること無し。復次に善男子、菩薩摩訶薩大涅槃微妙の經典を修して、阿耨多羅三藐三菩提の爲に、衆生を度するが故に貪嫉を遠離す。此の善根を以て、願はくは一切衆生と之を共にし、諸佛の土、一切衆生貪嫉、惱害、邪見有ること無からんと願ず。是の誓願因緣力を以ての故に、未來世に於て成佛するの時、國土の有らゆる一切衆生、悉く貪嫉、惱害、邪見無し。復次に善男子、菩薩摩訶薩大涅槃微妙の經典を修して、阿耨多羅三藐三菩提の爲に、衆生を度するが故に惱害を遠離す。此の善根を以て、願はくは一切衆生と之を共にし、諸佛の土、有らゆる衆生悉く共に大慈大悲を修習して一子地を得んと願ず。是の誓願因緣力を以ての故に、未來世に於て成佛するの時、世界の有らゆる一切の衆生、悉く共に大慈大悲を修習して一子地を得。復次に善男子、菩薩摩訶薩大涅槃微妙の經典を修して、阿耨多羅三藐三菩提の爲に、衆生を度するが故に邪見を遠離す。此の善根を以て、願はくは一切衆生と之を共にし、諸の國土の有らゆる衆生、悉く摩訶般若波羅蜜を得んと願ず。是の誓願因緣力を以ての故に、未來世に於て成佛するの時、世界の衆生、悉く摩訶般若波羅蜜を受持することを得。〔八二〕是を菩薩摩訶薩十事を修すと名く。

〔八三〕云何か菩薩摩訶薩有餘を滅除する。有餘に三つ有り。一つには煩惱餘

【八二】次に結ぶ。
【八三】次に第五[illegible]六斷業緣を釋す。之に三段あり

報、二つには餘業、三つには餘有なり。(八四)善男子、云何が名けて(八五)煩惱餘報と爲す。若衆生貪欲に習近する有らば、是の報熟する時、地獄に墮し、地獄より出でて畜生の身を受く。所謂鴿雀、鴛鴦、鸚鵡、(八六)耆婆耆婆、(八七)舍利伽鳥、青雀、魚鼈、獼猴、麞鹿なり。若人身を得るも黄門形、女人、二根、無根、淫女を受け、若出家を得るも、初重戒を犯す。是を餘報と名く。復次に善男子、若衆生瞋恚心を以て瞋恚に習近する有らば、是の報熟する時地獄に墮し、地獄より出でて畜生の身を受く、所謂毒蛇の四種の毒を具す。見毒、觸毒、齧毒、嘘毒なり、師子、虎狼、熊羆、貓貍、鷹鷂の屬なり。若人身を得るも十二の諸の惡律儀を具足し、若出家を得るも第二重戒を犯す。是を餘報と名く。復次に善男子、若愚癡を修習するの人有らば、是の報熟するが故に地獄に墮し、地獄より出でて畜生の身を受く。所謂象、猪、羖羊、水牛、蚤蝨、蚊虻、蟻子等の形なり。若人身を得るも、聾盲、瘖瘂、癃殘、背僂の諸根不具、法を受くること能はず。若出家を得るも、諸根闇鈍にして喜んで重戒を犯す、乃至五錢。是を餘報と名く。復次に善男子、若憍慢を修習するの人有らば、是の報熟するが故に地獄に墮し、地獄より出でて畜生の身を受く、所謂糞蟲、駝驢、犬馬なり。若人中に生ずれば、

---

て別に三章門を明ふ。

【八四】次に次第に釋す。之に三種あり。て初に煩惱餘報を釋す。

【八五】煩惱餘報等。若し習報を以て因を分たば習因を煩惱と爲し、報因を業と爲す。今習報の果を分ちて煩惱餘報と云ふ。然るに報を感ずるは業に由り、煩惱は但だ此の業を潤する也。大論の中には只だ煩惱に任せて亦た能く報を得と爲す。

【八六】耆婆耆婆（Jīvaṃjīvaka）。共命鳥と譯す。

【八七】舍利伽（Śārikā）。身鳥と譯す。

奴婢の身、貧窮乞匃を受けん、或は出家を得るも、常に衆生に輕賤せられ、第四戒を破す。是を餘報と名く。是の如き等を煩惱餘報と名く。是の如き餘報は菩薩摩訶薩能く大涅槃を修習するを以ての故に、悉く除滅を得。(八八)云何が餘業なる。謂はく一切凡夫の業、一切聲聞の業、(八九)須陀洹の人の受七有業、(九〇)斯陀含の人の受二有業、阿那含の人の受色有業なり。是を餘業と名く。是の如きの餘業は、菩薩摩訶薩能く大涅槃を修習するを以ての故に、悉く除斷を得。(九一)云何が餘有の阿羅漢阿羅漢果を得、辟支佛辟支佛果を得る。業無く結無くして而も二果を轉ず。是を餘有と名く。(九二)是の如きの三種は有餘の法なり、菩薩摩訶薩大乘大涅槃經を修習するが故に除滅を得。是を菩薩摩訶薩の滅除有餘と名く。

(九三)云何が菩薩清淨身を修する。(九四)菩薩摩訶薩不殺戒を修するに五種の心有り。下、中、上、上上、上中の上を謂ふ。乃至正見も亦復是の如し。是の五十心を初發心と名く。具足決定して五十心を成ずれば是を滿足と名く。是の如き百心を(九五)百福德と名く、百福を具足して一相を成す。是の如く展轉して三十二相を具足し成就するを清淨身と名く。(九六)復八十種好を修

【八八】次に上の餘業緣を釋す。
【八九】須陀洹七有等。須陀洹の人は見惑を斷ずと雖も猶ほ思惟ありて人天に潤生す、七人七天の往還を合數すれば只是れ七有なり。
【九〇】斯陀含二有等。斯陀含の人は但だ人天に一生を受く、此れ兩生を合して數ふ。阿那含色有とは阿那含の人は欲界の思惑を斷盡するも餘の色惑あり、故に云ふ。
【九一】次に上の除餘有を釋す。
【九二】次に結。
【九三】次に第七修清淨身を釋す。之に標、釋、結の三段ありて初に標。
【九四】次に釋。これに二段ありて初に別の釋。
【九五】百福[illegible]清淨身を成ず等。佛[illegible]所[illegible]各各一相に[illegible]集めて備さ

する所以は、世に衆生の八十種神に事ふる有り。何等か八十なる。十二日、十二大天、五大星、北斗、馬天、行道天、（九七）婆羅墮跋闍天、功德天、二十八宿、地天、風天、水天、火天、梵天、（九八）樓陀天、（九九）因提天、（一〇〇）拘摩羅天、八臂天、（一〇一）摩醯首羅天、（一〇二）半闍羅天、鬼子母天、四天王天、造書天、（一〇三）婆藪天なり。是を八十と名く。此の衆生の爲に（一〇四）八十好を修して以て自ら莊嚴す。是を菩薩清淨の身と名く。何を以ての故に。是の八十天は一切衆生の信伏する所たり。是の故に菩薩八十好を修して其の身を動せず。彼の衆生をして其の所信に隨ひて各各見ることを得、見已りて宗敬して各阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしむ。是の義を以ての故に、菩薩摩訶薩淨身を修す。善男子、譬へば人有りて大王を請せんと欲はば、要ず當に有らゆる舍宅を莊嚴して極めて清淨ならしめ、種種の百味の肴膳を辦具すべく、然して後王乃ち其の所請に就くが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。阿耨多羅三藐三菩提の法輪王を請せんと欲するが故に、先に當に身を修して極めて清淨ならしむべし、無上法王は乃ち當に之に處すべし。是の義を以ての故に、菩薩摩訶薩は要ず當に清淨の身を修すべし。善男子、

---

に一身に在らしむ。

【九六】次に好の業。

【九七】婆羅墮跋闍（Bhāradvāja）。[illegible]天と譯す。

【九八】樓陀（Rudra）。暴惡、又は黑天と譯す。

【九九】因提（Indra）。天帝と譯す。

【一〇〇】拘摩羅（Kumāra）。童子天と譯す。中論疏には此の天を以て初禪に列し、那羅延天の前名なりとす。

【一〇一】摩醯首羅（Maheśvara）。大自在天と譯す。

【一〇二】半闍羅（Pañjara）。籠天と譯す。

【一〇三】婆藪（Vasu）。シヴ（Śiva）又はアグニ（Agni）天を指す。

【一〇四】八十好を修して自ら莊嚴す等。圖意を明かす。圖意の修好亦た四意あり、一に法王の[illegible]相好を以て自ら身を莊嚴すべし、諸佛皆備り、是を世

佛不淨世界に出興すと謂ふこと莫れ。當に知るべし、是の心不善陋劣なり。汝今當に知るべし、我實は閻浮提界に出でず。譬へば人有り、說きて「此の界に日月有り、他方世界は日月有ること無し」と言はんに、是の如きの言義理有ること無きが如し。若し菩薩摩訶薩是の如きの言を發す有らん、「此の佛の世界穢惡不淨、他方佛土淸淨莊嚴す」と。亦復是の如し。(一二三)善男子、西方此の娑婆世界を去り、三十二恒河沙等の諸佛の國土を度りて彼に世界有り、名けて無勝と曰ふ。彼の土何が故ぞ名けて無勝と曰ふ。其の土の有らゆる莊嚴の事悉く皆平等にして差別有ること無し。猶し西方安樂世界の如く、亦東方滿月世界の如し。我彼の土に於て世に出現す。(一二四)衆生を化せんが爲の故に、此の界閻浮提の中に於て現じて法輪を轉ず。但我が身、獨此の中に於て現じて法輪を轉ずるのみに非ず、一切の諸佛も亦此の中に於て而も法輪を轉ず。是の義を以ての故に、諸佛世尊は是の如きの十事を修行せざるに非ず。善男子、慈氏菩薩誓願を以ての故に、當來の世、此の世界をして淸淨莊嚴ならしむ。是の義を以ての故に、一切諸佛の有らゆる世界嚴淨ならざる無し。

【一一八】次に結。
【一一九】第四に結。
【一二〇】是より[illegible]、之に問、答の二段ありて初に問。
【一二一】次に答。これに[illegible]段ありて初に我の因に具さに十事を修す、[illegible]。
【一二二】次に所因を明す。
【一二三】次に無勝淨土を示す。
【一二四】次に衆生を化せんが爲に[illegible]土に出づ。
【一二五】是より第五の功德を明す。之に標、釋、結の三段ありて初に標。
【一二六】次に釋。これに二段あり、其中初に功德を明す。之に又標、釋、結の三段あり。
【一二七】五事[illegible]。之に就て三說あり。一は外凡及び三十心に通ず[illegible]。二は登地已上の依事表理とす。三は[illegible]

(一二五)復次に善男子、云何が菩薩大涅槃微妙の經典を修して、第五の功徳を具足し成就する。(一二六)善男子、菩薩摩訶薩大涅槃を修して、第五の功徳を具足し成就するに(一二七)五事有り。何等をか五つと爲す。一つには諸根完具し、二つには邊地に生ぜず、三つには諸天愛念し、四つには常に天魔、沙門、刹利、婆羅門等に恭敬せられ、五つには宿命智を得。菩薩是の大涅槃經の因緣力を以ての故に、是の如きの五事の功徳を具足す。』

(一二八)光明遍照高貴德王菩薩の言さく、『佛の所說の如くば、若し善男子、善女人布施を修する有らば、則ち五事の功徳を具成することを得と。今云何ぞ大涅槃に因りて是の五事を得と言ふや。』(一二九)佛の言はく、『善い哉善い哉善男子、是の如きの事、其の義各異なり。今當に汝が爲に分別、解說すべし。(一三〇)施五事を得るは、不定、不常、不淨、不勝、不異、非無漏なり。一切衆生を利益し、安樂にし、憐愍する能はず。若し是の如き大涅槃經に依りて得る所の五事は、(一三一)是定、是常、是淨、是勝、是異、是無漏なり。則ち能く一切衆生を利益し、安樂にし、憐愍す。(一三二)善男子、夫れ布施は饑渴を離るることを得、大涅槃經は能く衆生をして、悉く二十五有の(一三三)渴愛の病

---

す、[illegible]なり。章安第一を評して、是れ別教の初心、第[illegible]義、共に用ふるに足らずとし、第二を以て證道の意と爲せり。

【一二八】次に[illegible]義。之に問、答あ二段ありて初に問。

【一二九】次に答。之に二段ありて初に問を讚す。

【一三〇】次に正しく答ふ。之に二段ありて初に勝劣の章。

【一三一】是定是常等。定は是れ樂勝は是れ我、常淨は知るべし、異は是れ中道不共、無漏は是れ中道を證す、利益安樂は是れ化他なり。

【一三二】次に勝劣の相を[illegible]す。

【一三三】渴愛の病等。渴愛は定と樂とを釋す、生死皆不相離は常を釋し、得作皆爲は淨を釋し、斷一切有爲法は勝と我とを釋し、無分無果は異と不共とを釋し、離れて無漏と利

を遠離することを得しむ。布施の因縁は生死を相續せしめ、大涅槃經は能く生死をして斷じて相續せざらしむ。布施に因るが故に凡夫法を受く。大涅槃に因れば菩薩と作ることを得。布施の因縁は能く一切の貧窮苦惱を斷ず。大涅槃經は能く一切の善法に貧しき者を斷ず。布施の因縁は分有り果有り。大涅槃に因れば、阿耨多羅三藐三菩提を得て分無く果無し。(一三四)是を菩薩大涅槃微妙の經典を修して、第五の功德を具足し成就すと名く。

(一三五)復次に善男子、云何が菩薩、大涅槃微妙の經典を修して第六の功德を具足し成就する。(一三六)菩薩摩訶薩大涅槃を修して金剛三昧を得、是の中に安住して悉く能く一切諸法を破散す。(一三七)一切の法皆是無常、皆是動相なり。恐怖の因縁、病苦、劫盜、念念滅壞して眞實有ること無く、一切皆是魔の境界にして無可見相を見る。(一三八)菩薩摩訶薩是の三昧に住して衆生に施すと雖も、乃至一衆生の實を見ず。衆生の爲の故に精勤して尸波羅蜜を修習し、乃至般若波羅蜜を修習するも亦復是の如し。菩薩若一りの衆生有るを見ば、畢竟じて檀波羅蜜を具足し成就し、乃至般若波羅蜜を具足することと能はず。

(一三九)善男子、譬へば金剛の所擬の處碎壞せざるは無く、而も是の金剛は折損有ること無きが如く、

益とを釋す。

【一三四】次に結。

【一三五】是より第六の功德を明す。之に標、釋、結の三段あり。其中初に標。

【一三六】次に釋。これに三段あり、其中初に略して三昧を明す。之に又二段ありて初に自德を明す。又之に二段ありて先づ能斷。

【一三七】次に非。

【一三八】次に化他を辨ず。

【一三九】次に廣く三昧を明す。之に二段あり、其中初に廣く自行を明す。之に又三段あり、其中初に能斷。之に八句あり、其中初の一譬は能斷。

金剛三昧も亦復是の如し。摧する所の法碎壞せざること無く、而も是の三昧は折損有ること無し。（一四〇）善男子、諸寶の中に金剛最勝なるが如く、菩薩所得の金剛三昧も亦復是の如し。諸の三昧に於て最も第一と爲す。何を以ての故に。菩薩摩訶薩是の三昧を修すれば、一切の三昧も悉く來りて歸屬す。善男子。諸の小王悉く來りて轉輪聖王に歸屬するが如く、一切の三昧も亦復是の如し、悉く來りて金剛三昧に歸屬す。善男子。譬へば人有りて國の怨讎と爲りて人に厭患せられ、人之を殺す有らば一切の世人是の人の功德を稱讚せざる無きが如く、金剛三昧も亦復是の如し。菩薩修習して能く一切衆生の怨敵を壞す。是の故に常に一切の三昧に宗敬せらる。善男子、譬へば人有りて、其の力盛壯にして人當る者無く、復更に人有りて力能く之を伏せば、當に知るべし、是の人世に稱美せらるるが如く、金剛三昧も亦復是の如し。力能く難伏の法を摧伏す。是の義を以ての故に、一切の三昧悉く來りて歸屬す。善男子。譬へば人有りて大海に在りて浴すれば、當に知るべし、是の人已に諸河、泉池の水を用ふるが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。是の如きの金剛三昧を修習すれば、當に知るべし、已に諸餘の一切の三昧を修習すと爲す。善男子。香山の中に一つの泉水有り、阿耨達と名く。其の泉八味の水を具足し、人の是を飮む有らば、諸の病苦無きが如く、金剛三昧も亦復是の如し、八正道を具す。菩薩修習して諸の煩惱、瘡疣重病を斷ず。善男子、人摩醯首羅を供養すれば、當に知るべし、是の人已に一切の諸天を供養すと爲すが如く、金剛三昧も

【一四一】次に後の七譬は稱歎。

亦復是の如し、人の修習する有らば、當に知るべし、已に一切の諸餘の三昧を修習すと爲す。(一四一)善男子、若菩薩有りて是の如きの金剛三昧に安住すれば、一切法を見、障閡有ること無し。掌の中に於て阿摩勒果を觀るが如く、菩薩も復是の如きの見を得と雖も、終に一切法を見るに想を作さず。(一四二)善男子、譬へば人有りて、四衢道に坐して諸の衆生の來去、坐臥を見るが如く、金剛三昧も亦復是の如し、一切法の生滅出沒を見る。善男子、譬へば高山に、人有りて之に登りて遠く諸方を望むに、皆悉く明了なるが如く、金剛定の山も亦復是の如し、菩薩之に登りて諸法を遠望するに明了ならざる無し。善男子、譬へば春月天甘雨を降す。其の渧微細にして間容處無し。淨眼の人之を見ること明了なるが如く、菩薩も亦爾なり。金剛定淸淨の目を得て遠く東方の有らゆる世界を見るに、其の中或は國土の成壞有りて、一切皆見て明了にして障無し。乃至十方も亦復是の如し。(一四三)善男子、(一四四)由乾陀山七日竝び出づれば、其の山の有らゆる樹木叢林一切燒盡するが如く、菩薩金剛三昧を修習するも亦復是の如し、有らゆる一切の煩惱叢林即時に消滅す。(一四五)善男子、譬へば金剛の能く一切の有物を摧破すと雖も、終に我能く摧破すと念を生ぜざるが如く、金剛三昧も亦復是の如し、菩薩修し已りて能く煩惱を破し、終に念を生ぜず我能く結を壞すと。善男子、譬へば大地の能く萬物

【一四一】次に廣く能見を明す。之に四譬あり。其中初の一譬は能見。
【一四二】次に後の三譬は稱歎。
【一四三】次に重ねて能斷を明す。之に三譬あり、其中初の一譬は能斷。
【一四四】由乾陀（Yugaṃdhara）雙持と譯す。山に二道あり、故に名く。七金山の一。
【一四五】次に後の兩譬は亡功。

を持し、終に我が力能く持すと念を生ぜざるが如く、火も亦念はず我能く物を燒く、水も亦念はず我能く潤漬す、風も亦念はず我能く物を動かす、空も亦念はず我容受すと。涅槃も亦復念言を生ぜず、我衆生をして滅度を得しむと。金剛三昧も亦復是の如し、能く一切の煩惱を滅除すと雖も、而も初て我能く滅すと言ふの心無し。(一四六)若菩薩是の如き金剛三昧に安住する有らば、一念の中に於て身を變じて佛の如くし、其の數無量にして十方恆河沙等の諸佛世界に徧滿す。是の如く菩薩是の化を作すと雖も、其の心初て憍慢の想無し。何を以ての故に。菩薩常に念ず「誰か是の定有り能く是の化を作す。唯菩薩是の如きの金剛三昧に安住する有りて、乃ち能く作すのみ」と。(一四七)菩薩摩訶薩是の如きの金剛三昧に安住して、一念の中に於て徧く十方恆河沙等の諸佛の世界に至り、其の本處に還る。是の力有りと雖も、亦念じて我能く是の如くすと言はず。何を以ての故に。是の三昧の因緣力を以ての故なり。(一四八)菩薩摩訶薩是の如きの金剛三昧に安住して、一念の中に於て能く十方恆河沙等の世界の衆生の有らゆる煩惱を斷じ、而も心初て諸の衆生の煩惱を斷ずるの想無し。何を以ての故に。是の三昧の因緣力を以ての故なり。(一四九)菩薩是の金剛三昧に住して一つの音聲を以て演說する所有らば、一切衆生各種類に隨ひて而も解了を得。(一五〇)一色を示現するに一切の衆生各各皆種種の色相を見、一處に安住して身移易せず。(一五一)能く衆生

(一四六)次に廣く化他を明す。之に四段ありて初に身を變じて佛の如くす。
(一四七)次に本處に還る。
(一四八)次に他の惑を斷ず。
(一四九)次に三密示現。之に四段ありて初に口密。
(一五〇)次に身密。
(一五一)次に重ねて口密を明す。

をして其の方面に隨ひて各各而も一法を演說するを見しむ。若は界、若は入、一切の衆生各本解に隨ひて而も之を聞くことを得。(一五二)菩薩是の如きの三昧に安住して衆生を見ると雖も、而も心初て衆生の相無く、男女を見ると雖も男女の相無く、色法を見ると雖も色相有ること無し。乃至識を見れども亦識相無く、晝夜を見ると雖も晝夜の相無く、一切を見ると雖も一切の相無く、一切の煩惱諸結を見ると雖も、亦一切煩惱の相無く、八聖道を見れども聖道の相無く、菩提を見ると雖も菩提の相無く、涅槃を見れども涅槃の相無し。何を以ての故に。善男子、一切の諸法は本無相の故なり。菩薩是の三昧力を以ての故に、一切の法本無相の如くなるを見る。(一五三)何が故ぞ名けて金剛三昧と爲す。善男子、譬へば金剛の若日中に在らば色則ち定らざるが如く、金剛三昧も亦復是の如し、大衆に在りて色も亦不定なり。是の故に名けて金剛三昧と爲す。(一五四)善男子、譬へば金剛の一切世人平價すること能はざるが如く、金剛三昧も亦復是の如し、有らゆる功德は一切の人天平量すること能はず。是の故に復金剛三昧と名く。(一五五)善男子、譬へば貧人の金剛寶を得れば、即ち貧窮困苦、惡鬼邪毒を遠離することを得るが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如し、是の三昧を得れば即ち能く煩惱の諸苦、諸魔の邪毒を遠離す。是の故に復金剛三昧と名く。(一五六)是を菩薩大涅槃を修して第六の功德を具足し成就すと名く。』

【一五二】次に意密。
【一五三】次に釋。これに三段ありて初に不定は無相を譬ふ。
【一五四】次に不平價は無名を譬ふ
【一五五】次に離苦毒は無畏を譬ふ
【一五六】次に結。

# 卷の第二十三

## 高貴德王菩薩品の五

(一)『復次に善男子、云何が菩薩摩訶薩大涅槃微妙の經典を修して、第七の功德を具足し成就する。(二)善男子。菩薩摩訶薩大涅槃微妙の經典を修して是の思惟を作さく「何の法か能く大般涅槃の爲に而も近因と作る。菩薩即ち四種の法有り、大涅槃の爲に而も近因と作るを知る。」(三)若し一切の苦行を勤修する、是を大般涅槃の近因緣と言ふは、是の義然らず。所以は何ん。若し四法を離れて涅槃を得ば、是の處有ること無し。(四)何等をか四つと爲す。一つには善友に親近し、二つには心を專らにして法を聽き、三つには念を繫けて思惟し、四つには法の如く修行す。(五)善男子。譬へば人有りて身衆病に遇ひ、若は(六)熱、若は冷、虛勞下瘧、衆邪鬼毒。良醫の所に至る。良醫即ち爲に病に隨ひて藥を說く。是の人至心に善く醫敎を受け、敎に隨ひて藥を合し、法の如く之を服す。服し已りて病癒え、身安樂を得るが如し。

---

【一】第七の功德を明す。之に標、釋、結の三段ありて初に標章。
【二】次に釋。之に二段あり、其中初に四事を明す。之に又二段あり、初に標章。之に又三段ありて先づ是。
【三】次に拂。此の苦行を排するに就て二義あり。一は無益の故に。二は苦行は直ちに行ふこと能はす、慧品を正修し、餘行を相資して方めて可なるが故に。
【四】次に列名。
【五】次に解釋。之に總、別の二釋あり、總釋に又二段あり。

(七)有病の人は諸の菩薩を譬へ、大良醫は善知識を譬へ、良醫の所說は方等經を譬へ、善受醫教は善く方等經義を思惟するを譬へ、隨教合藥は法の如く三十七の助道の法を修行するを譬へ、病除愈は煩惱を滅するを譬へ、得安樂は涅槃の常、樂、我、淨を得るを譬ふ。(八)善男子、譬へば王有りて、法の如く治し民をして安樂ならしめんと欲して、諸の智臣に其の法云何と咨ふ。諸臣即ち先王の舊法を以て爲に之を說く。王既に聞き已りて至心に信行し、法の如く國を治めて諸の怨敵無し、是の故に民をして安樂にして患無からしむるが如し。(九)善男子、王とは諸の菩薩を譬へ、諸の智臣とは善知識を譬へ、智臣王の爲に說く所の治法は十二部經を譬へ、王既に聞き已りて至心信行するは、諸の菩薩心を繫けて十二部經の所有の深義を思惟するを譬へ、如法治國は、諸の菩薩法の如く所謂六波羅蜜を修行するを譬へ、能く六波羅蜜を修習するを以ての故に、無諸怨敵は、諸の菩薩已に諸結煩惱の惡賊を離るるを譬へ、得安樂とは、諸の菩薩大涅槃の常、樂、我、淨を得るを譬ふ。(一〇)善男子、譬へば人有りて惡癩病に遇ひ、善知識有り、而も之に語りて言はく、汝若能く須彌山の邊に至らば、病差ゆるを得べし。所以は何ん。彼に甘藥の味甘露の如くなる有り、若し能く服する者は病の差えざること無し。其の人至心に是の事を信じ已りて、即ち彼の山に往いて甘露を

其中初に菩薩を譬ふ。之に又二段あり、其中初に自行を譬ふ。之に又二段ありて先ず譬。

【四六】熱冷等。熱は愛に、冷は癡に、勞は慢に、下は瞋に、黃は疑に、寮瘵は通じて五利に譬ふ。

【四七】次に合。

【四八】次に化他を譬ふ。之に二段ありて初に譬。

【四九】次に合。

【五〇】次に凡夫を譬ふ。之に二段ありて初に譬。

柔服し、其の病除愈し、身安樂を得るが如し。(一一)惡癩病とは諸の凡夫を譬へ、善知識とは諸の菩薩摩訶薩等を譬へ、至心信受は四無量心を譬へ、須彌山とは八聖道を譬へ、甘露味とは佛性を譬へ、癩病除愈は煩惱を滅するを譬へ、得安樂とは涅槃の常、樂、我、淨を得るを譬ふ。

(一二)善男子、譬へば人有りて諸の弟子を畜へ、聰明大智なり、是の人晝夜常に教へて倦まざるが如く、(一三)諸の菩薩等も亦復是の如し、一切の衆生信不信有れども常に教化して疲厭有ること無し。(一四)善男子、善知識とは所謂佛、菩薩、辟支佛、聲聞、人中の方等を信ずる者なり。(一五)何が故ぞ名けて善知識と爲すや。善知識とは能く衆生に十惡を遠離し十善を修行するを教ふ、是の義を以ての故に善知識と名く。(一六)復次に善知識とは、法の如く說き說の如く行ず。云何が名けて如法而說如說而行と爲す。自ら殺生せず、人に不殺を教ふ、乃至自ら正見を行ひ、人に正見を教ふ。若し能く是の如くなれば、則ち名けて眞の善知識と爲すことを得。(一七)自ら菩提を修し、亦能く人に菩提を修行することを教ふ。是の義を以ての故に善知識と名く。(一八)自ら能く信、戒、布施、多聞、智慧を修行し、亦能く人に信、戒、布施、多聞、智慧を教ふ。復是の義を以て善知識と名く。(一九)善知識とは善法有るが故なり。何等か善法な

【一一】次に合。
【一二】次に別して四事を嘆す。之に略、廣の二段あり。略に又四段あり、其中初に知識を釋す。又之に四段あり、其中初に稱歎。之に二段ありて初に譬。
【一三】次に合。
【一四】次に其人を出す。
【一五】次に其位を辨す。之に五段ありて初に惡を離れ善を行するを教ふ。
【一六】次に如說如行。
【一七】次に菩提を修す。
【一八】次に戒施を行す。
【一九】次に自の爲ならず他の爲にす。

る。所作の事自樂を求めず、常に衆生の爲に而も安樂を求む。他の過有るを見て其の短を訟へず、口常に諄善の事を宣說す。是の義を以ての故に善知識と名く。(二〇)善男子、(二一)空中の月は初一日より十五日に至りて漸漸增長するが如く、善知識とは亦復是の如し。諸の學人をして漸く惡法を遠ざけ、善法を增長せしむ。善男子、若し善知識に親近する者有らば、本未だ戒、定、智、解脫、解脫知見有らざれども、卽便之有り。未だ具足せざれば則ち增廣を得。何を以ての故に。其の善知識に親近するを以ての故なり。是の親近に因りて復十二部經の甚深の義を了達することを得。(二二)若能く是の(十二部經の)甚深の義を聽かば名けて聽法と爲す。聽法とは、則ち是大乘方等經典なり。方等經を聽くを眞の聽法と名く。眞聽法とは、卽ち是大涅槃經を聽受す。大涅槃の中に佛性有り、如來畢竟して般涅槃せざるを聞く、是の故に名けて專心聽法と爲す。(二三)專心聽法は八聖道と名く。八聖道を以て能く貪欲、瞋恚、愚癡を斷ず、故に聽法と名く。夫れ聽法とは十一空と名く。此の諸空を以て、一切法に於て相貌を作さず。夫れ聽法とは初發心、乃至究竟の阿耨多羅三藐三菩提の心と名く。初心に因るを以て大涅槃を得。聞を以ての故に大涅槃を得ず、修習を以ての故に大涅槃を得。(二四)善男子、譬へば病人の醫教及び藥の名字を聞くと雖も病を愈すこと能はず、要ず服するを以ての故に、乃ち除差を得るが如し。十

【二〇】次に善知識を得るの益。
【二一】空中の月・善知識等。初月は見る可からずと云ふも無と言ふ可らず、始めて善知識に近づくは未だ益あらずと云ふも而も實は既に潤益せらる。
【二二】次に聽法の人を釋す。之に二段ありて初に三類を聽く。
【二三】次に三德を得。
【二四】次に思惟を釋す。

二の深因緣法を聽くと雖も、一切煩惱を斷滅すること能はず、要ず念を繫けて善く思惟するを以ての故に、能く除斷を得。是を第三の繫念思惟と名く。復何の義を以て繫念思惟と名くる。所謂三三昧、空三昧、無相三昧、無作三昧なり。空とは、二十五有に於て一の實有を見ず。無作とは、二十五有に於て願求を作さず。無相とは、十相有ること無し。所謂色相、聲相、香相、味相、觸相、生相、住相、滅相、男相、女相なり。是の如きの三三昧を修習する者、是を菩薩の繫念思惟と名く。(三五)云何が名けて如法修行と爲す。法の如く修行するとは、即ち是檀波羅蜜、乃至般若波羅蜜を修行す。陰入界眞實の相を知り、亦聲聞、緣覺、諸佛一道を同じうして、而も般涅槃するを知る。法とは即ち是常樂我淨、不生不老、不病不死、不饑不渴、不苦不惱、不退不沒なり。善男子、大涅槃甚深の義を解する者は、則ち諸佛終に畢竟じて涅槃に入らざるを知る。

(三六)善男子、第一眞實の善知識とは所謂菩薩、諸佛世尊なり。何を以ての故に。常に三種善く調御するを以ての故なり。何等をか三つと爲す。一つには畢竟軟語、二つには畢竟呵責、三つには軟語呵責なり。是の義を以ての故に、菩薩、諸佛は即ち是眞實の善知識なり。(三七)復次に善男子、佛及び菩薩を大醫と爲すが故に善知識と名く。何を以ての故に。病を知り藥を知り、病に應じて藥を授くるが故なり。譬へば良醫は八種の術を善くす。先病相を觀す。相に三種有り。何等をか三つと爲す。風、熱、

【三五】次に修行を釋す。
【三六】是より廣く四法を釋す。之に四段あり、其中初に[illegible]く[illegible]善知識を釋す。之に又三段ありて初に[illegible]。
【三七】次に[illegible]譬。

水を謂ふ。風病の人には之に酥油を授け、熱病の人には之に石蜜を授け、水病の人には之に薑湯を授け、病根を知りて藥を授け、差ゆることを得るを以ての故に良醫と名くるが如く、佛及び菩薩も亦復是の如し。諸の凡夫の病三種有るを知る。一つには貪欲、二つには瞋恚、三つには愚癡なり。貪欲病の者には骨相を觀ずるを教へ、瞋恚病の者には慈悲相を觀ぜしめ、愚癡病の者には十二因緣相を觀ぜしむ。是の義を以ての故に、諸佛菩薩を善知識と名く。善男子、譬へば船師の善く人を度するが故に大船師と名くるが如く、諸佛、菩薩も亦復是の如し。諸の衆生を生死の大海に度す。是の義を以ての故に善知識と名く。復次に善男子、佛、菩薩に因りて、諸の衆生をして、具足して善法の根本を修得せしむるが故なり。善男子、譬へば雪山は是れ衆妙藥の根本の處なるが如く、佛及び菩薩も亦復是の如し。悉く是一切の善根本の處なり。是の義を以ての故に善知識と名く。善男子、雪山の中に上香藥有りて娑呵(二八)と曰ふ。人の之を見る有れば壽を得ること無量、病苦有ること無し。四毒有りと雖も中傷すること能はず。若し觸るる者有らば壽命を增長して百二十を滿す。若し念ずる者有らば宿命智を得。何を以ての故に。藥勢力の故なり。諸佛、菩薩も亦復是の如し。若し見る者有らば、即ち一切煩惱を斷除することを得。四魔有りと雖も干亂すること能はず。若し觸るる者有らば命夭すべからず。不生不死、不退不墮なり。所謂觸とは、若佛邊に在りて妙法を聽受し、若し念ずる者有らば、阿耨多羅三藐三菩提を得。是の義を以ての故に、諸佛

【二八】娑呵、長壽と譯す、長壽不死の藥の名。

菩薩を善知識と名く。善男子、香山の中に【二九】阿耨達池有り。是の池に由るが故に四つの大河有り、所謂恆河、辛頭、私陀、博叉なり。世間の衆生常に是の言を作さく、「若罪有る者此の四河に浴すれば、衆罪滅することを得」と。當に知るべし、此の言虚妄不實なるが如く、此を除きて已往何等をか實と爲す。諸佛、菩薩は是乃ち實と爲す。所以は何ん。若人親近すれば則ち一切衆罪を滅除することを得。是の義を以ての故に善知識と名く。復次に善男子、譬へば大地の所有の藥木、一切の叢林、百穀、甘蔗、華果の屬、天の炎旱に値ひて將に枯死せんと欲するに、難陀龍王及び婆難陀、衆生を憐愍して大海より出で、甘雨を降し灑ぐに、一切の叢林、百穀、草木滋潤還生するが如く、一切衆生も亦復是の如し。所有の善根將に消滅せんと欲するに、諸佛、菩薩大慈悲を生じて智慧海より甘露雨を降し、諸の衆生をして、具足して十善の法を還得せしむ。是の義を以ての故に、諸佛、菩薩は善知識と名く。善男子、譬へば良醫の八種の術を善くし、諸の病人を見るに、種姓、端正、醜陋、錢財、寶貨を觀ず、悉く爲に之を治す。是の故に世に稱して大良醫と爲すが如く、諸佛、菩薩も亦復是の如し。諸の衆生の煩惱の病有るを見て、種姓、端正、醜陋、錢財、寶貨を觀ず、慈愍の心を生じて悉く爲に法を說く。衆生聞き已りて煩惱の病除く。是の義を以ての故に諸佛、菩薩を善知識と名く。是の善友に親近する因緣を以て、則ち大般涅槃に近くことを得。

【二九】阿耨達池（Anavatapta）、無熱と譯す、贍部洲の中心にある池の名。周八百里、金銀等の七寶其岸を莊嚴せる美しき池なりと傳ふ。

【三〇】次に廣く聽法を釋す。之に二段あり、その中初に釋。

これに又二段ありて初に法。

【三】 次に譬。

(三〇)云何が菩薩聽法の因緣にして、而も大般涅槃に近くことを得る。一切衆生法を聽くを以ての故に、則ち信根を具す。信根を得るが故に、樂うて布施、戒、忍、精進、禪定、智慧を行じ、須陀洹果、乃至佛果を得。是の故に當に知るべし、諸の善法を得るは皆是聽法の因緣勢力なり。(三一)善男子、譬へば長者に唯一子有り、他國に遣至して所須を市易するに、其に道路通塞の處を示し、而も之を戒む。若婬女に遇はゞ愼みて親愛すること莫れ。若親愛せば身を喪ひ命を殞し及以財寶(を失ふ)。弊惡の人も亦交遊すること莫れ。其の子父の教敕に敬順し、身心安隱にして多く寶貨を獲るが如し。菩薩摩訶薩諸の衆生の爲に法要を敷演するも亦復是の如く、諸の衆生及び四部衆に諸道の通塞を示す。是の諸衆等法を聞くを以ての故に諸惡を遠離し、善法を具足す。是の義を以ての故に、聽法の因緣則ち大般涅槃に近くことを得。善男子、譬へば明鏡の人の面像を照して明了ならざる無きが如く、聽法の明鏡も亦復是の如し。人之を照す有らば、則ち善惡を見ること明了にして翳すこと無し。是の義を以ての故に、聽法の因緣は則ち大般涅槃に近くことを得。善男子、譬へば商人の寶渚に至らんと欲するに道路を知らず、人有りて之を示す。其の人語に隨ひて即ち寶渚に至り、多く諸珍を獲て稱計すべからざるが如く、一切衆生も亦復是の如し。善處に至りて、法寶を采求せんと欲するに其の路通塞の相を知らず。菩薩之を示し、衆生隨ひ已りて善處に至ることを得、無上大涅槃の寶を獲得す。是の義を以ての故に、聽法の因緣は則ち大般涅槃に近くこと

を得。善男子、譬へば醉象の狂逸暴惡にして多く侵害せんと欲するに、調象師有りて大鐵鉤を以て其の頂に鉤斲すれば、即時に調順して惡心都て盡くるが如く、一切衆生も亦復是の如し。貪欲、瞋恚、愚癡醉の故に、多く惡を造らんと欲す。諸の菩薩等聞法の鉤を以て之を斲りて住せしめ、更に諸惡を造るの心を起すことを得ず。是の義を以ての故に、聽法の因緣則ち大般涅槃に近くことを得。(二二)是の故に我處處の經中に於て、我が弟子專心に十二部經を聽受すれば、則ち五蓋を離れ七覺分を修すと說く。是の七覺分を修習するを以ての故に、則ち大般涅槃に近くことを得。(二三)聽法を以ての故に、須陀洹の人は諸の恐怖を離る。所以は何ん。(二四)須達長者身重病に遭ひて心大いに愁怖す。舍利弗の須陀洹に四つの功德、(二五)十種の慰喩有るを說くを聞く。是の事を聞き已りて恐怖即ち除く。是の義を以ての故に、聽法の因緣は則ち大般涅槃に近くことを得。何を以ての故に。法眼を開くが故なり。世に三人有り。一つには(二六)無目、二つには一目、三つには二目なり。無目の人は常に法を聞かず、一目の人は暫く法を聞くと雖も其の心住せず、二目の人は專心に聽受し聞くが如くに行ず。聽法を以ての故に、世間の是の如きの三人を知ることを得。是の義を以ての故に、聽法の因緣は則ち大般涅槃に近くを得。(二七)善

【二二】次に證を引く。之に二段ありて初に經說を引く。

【二三】次に兩事を引く。之に二段ありて初に初果の事を引く。

【二四】須達は具さに須達多(Sudatta)と云ふ、善授と譯す。給孤獨長者の本名なり。

【二五】十種の慰喩等、舊解に十喩は八正道と盡と無生との二智を指すと云ふ、而して見諦の盡を盡とし見諦の不生を無生とす。されど此の解、根據なし、初果に二智無ければなり。河西の云く、八正道と正智と正解脫となりと。是の解可し。

思惟に因りて得ざる無し。何を以ての故に。人有りて無量無邊阿僧祇劫に於て心を專らにして法を聽くと雖も、若し思惟せざれば終に阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。是の義を以ての故に、思惟の因緣は則ち大般涅槃に近くことを得。(四二)復次に善男子、若衆生佛、法、僧の變易有ること無きを信じて恭敬を生ずる有らば、當に知るべし、皆是繋念思惟の因緣力の故に、因りて一切の煩惱を斷除することを得。是の義を以ての故に、思惟の因緣は則ち大般涅槃に近くことを得。

(四三)云何が菩薩法の如く修行する。善男子、諸の惡法を斷じ善法を修習す、是を菩薩の如法修行と名く。(四四)復次に云何が如法修行なる。一切法空にして所有無く無常、無樂、無我、無淨を見る。是の見を以ての故に、寧ろ身命を捨つとも禁戒を犯さず、是を菩薩の如法修行と名く。(四五)復次に云何が如法修行なる。修に二種有り。一つには眞實、二つには不實なり。不實とは涅槃、佛性、如來法僧、實相虛空等の相を知らず、是を不實と名く。云何が眞實なる。能く涅槃、佛性、如來法僧、實相虛空等の相を知る、是を眞實と名く。(四六)云何が名けて涅槃相を知ると爲す。涅槃の相は凡て八事有り。何等をか八つと爲す。(四七)一つには盡、二つには善性、三つには實、四つには眞、五つには常、六つには樂、

【四二】次に常法を釋す。
【四三】次に廣く修行を釋す。之に三段ありて初に止行二善を明す。
【四四】次に空無常の解を明す。
【四五】次に七種の知見を明す。之に標、釋、料簡の三段ありて初に標門。
【四六】次に釋。これに七段あり、其中第一に涅槃を知る。之に又二段あり、其中初に略して三涅槃を出す。之に又三段ありて初に佛の涅槃。
【四七】一切の煩惱盡くるが故に盡、如來の所作一切皆善の故に善性、不虛の故に實、不僞の故に眞、餘の四は文の如し。

七つには我、八つには淨なり。是を涅槃と名く。(四八)復八事有り。何等をか八つと爲す。(四九)一つには解脫、二つには善性、三つには不實、四つには不眞、五つには無常、六つには無樂、七つには無我、八つには無淨なり。(五〇)復六相有り。一つには解脫、二つには善性、三つには不實、四つには不眞、五つには安樂、六つには清淨なり。(五一)若衆生有りて世俗の道に依りて煩惱を斷ずる者、是の如きの涅槃は則ち八事有り、解脫實ならず。何を以ての故に。不常の故なり。常無きを以ての故に、則ち實有ること無し。實有ること無きが故に、則ち眞有ること無し。煩惱を斷ずと雖も、還つて起るを以ての故に、無常、無我、無樂、無淨なり。是を涅槃解脫の八事と名く。(五二)云何が六相なる。聲聞、緣覺は煩惱を斷ずるが故に名けて解脫と爲す。而も未だ阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず、故に不實と名く。不實を以ての故に名けて不眞と爲す。未來の世に當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし、故に無常と名く。無漏の八聖道を得るを以ての故に、名けて淨樂と爲す。善男子、若是の如く知るは、是涅槃を知るなり。佛性、如來法僧、實相虛空と名けず。(五三)云何が菩薩佛性を知る、佛性に六つ有り。何等をか六つと爲す。一つには常、

【四八】次に凡夫。

【四九】散心の外道は今の文に涉らず、今は非想定を得て下地の惑を脫するを取る故に解脫と云ふ、卽ち善性あり。但だ究竟の眞實常樂我淨に非ず、故に無と云ふ。

【五〇】次に聲聞。聲聞の六事を擧ぐるに互に與奪あり、佛に及ばざる故常と我とを奪ひ、外道に勝るが故に與へて樂淨と云ふ。こは有餘涅槃に據る、故に無漏八正道と云ふ。身智ある故安樂と云ひ、子縛を斷ずる故に清淨と云ふ。

【五一】次に上の章門を釋す。之に二段ありて初に凡夫の涅槃を釋す。

【五二】次に二乘の涅槃を釋す。

【五三】次に第二の知佛性の章門を釋す。

二つには淨、三つには實、四つには善、五つには常見、六つには眞なり。復七事有り。一つには可證、餘の六つは上の如し。是を菩薩佛性を知ると名く。(五四)云何が菩薩如來相を知る。如來は則ち是覺相、善相なり。常樂我淨にして解脫眞實なり。(五五)示道可見なり。是を菩薩如來相を知ると名く。(五六)云何が菩薩法相を知る。法とは、若は善不善、若は常不常、若は樂不樂、若は我無我、若は淨不淨、若は知不知、若は解不解、若は眞不眞、若は修不修、若は師非師、若は實不實なり。是を菩薩法相を知ると名く。(五七)云何が菩薩僧相を知る。僧とは(五八)常樂我淨。是弟子相、可見の相なり、善眞にして不實なり。何を以ての故に。一切の聲聞佛道を得るが故なり。何が故ぞ眞と名くる。法性を悟るが故なり。是を菩薩僧相を知ると名く。(五九)云何が菩薩實相を知る。實相とは、若は常無常、若は樂無樂、若は我無我、若は淨無淨、若は善不善、若は有若は無、若は涅槃非涅槃、若は解脫非解脫、若は知不知、若は斷不斷、若は證不證、若は修不修、若は見不見なり。是を實相と名く。是涅槃、佛性、如來法僧、虛空に非ず。是を菩薩是の如きの大涅槃を修するに因るが故に、涅槃、佛性、如來法僧、實相虛空等法の差別の相を知ると名く。(六〇)善男子、菩薩摩訶薩大涅槃微妙の經典を修して虛空を見ず。何を以ての故に。佛及び菩薩は五眼有りと

【五四】次に第二の知如來相を釋す。之に二段ありて初に一釋。
【五五】次に別釋。
【五六】次に第四の知法章を釋す。
【五七】次に第五の知僧章を釋す。
【五八】常樂…是弟子相。常樂は一體の僧、弟子相は別體の僧に名く。
【五九】次に第六の知實相を釋す。
【六〇】次に第七の知虛空を釋す。之に三段ありて初に眞空を明す。

雖も見ざる所なるが故に、唯慧眼有りて乃ち能く之を見る。慧眼の見る所法の見るべき無し、故に名けて見と爲す。若是物無きを虛空と名くれば、是の如きの虛空は乃ち名けて實と爲す。是實なるを以ての故に則ち常無と名く。常無を以ての故に樂、我、淨無し。(六二)善男子、空を無法と名け、無法を空と名く。譬へば世間に物無きを空と名くるが如く、虛空の性も亦復是の如し。所有無きが故に名けて虛空と爲す。(六三)善男子、衆生の性と虛空性と倶に實性無し。何を以ての故に。人說きて有物を除滅して、然して後空と作すと言はんが如し。而も是の虛空實は作すべからず。何を以ての故に。所有無きが故に。有無きを以ての故に、當に知るべし空無しと。是の虛空の性若作すべくば、則ち無常と名く。若無常ならば虛空と名けず。善男子、世間の人說きて「虛空は無色無閡常に變易せず」と言ふが如し。是の故に世に虛空の性を稱して第五大と爲す。善男子、而も是の虛空實は性有ること無し。(六四)光明を以ての故に、故に虛空と名く。實は虛空無し。猶し世諦の實は其の性無し、衆生の爲の故に世諦有りと說くが如し。善男子、涅槃の體も亦復是の如く、住處有ること無し、直ちに是諸佛の煩惱を斷ずるの處、故に涅槃と名く。涅槃は卽ち是常、樂、我、淨な

---

【六一】次に非空を釋す。

【六二】次に涅槃空を明す。

【六三】光明の故に虛空とは二解あり。一に虛空は見る可らざるも光明を通ずるの用あり、故に空に因つて障なくば卽ち光色を見る。二に虛空は識心の所見に非ざるも、識心は光を見る、故に導いて行心を生ぜしむれば空を見るを得。

【六四】次に料簡。前の因種を簡ぶ、卽ち四文と爲す。其中初に涅槃を簡ぶ。

【六五】次に如來を簡ぶ。凡そ人は法を體得して二乘を得。智ありて境を照す故に覺師あり。覺師を完うして涅槃を證するが故に實證なり。

【六六】次に實相を簡ぶ。

り。(六四)涅槃は樂と雖も是受樂に非ず、乃ち是上妙寂滅の樂なり。(六五)諸佛如來に二種の樂有り。一つには寂滅樂、二つには覺知樂なり。(六六)實相の體に三種の樂有り。一つには受樂、二つには寂滅樂、三つには覺知樂なり。(六七)佛性は一樂、當見を以ての故に。阿耨多羅三藐三菩提を得る時菩提樂と名く。』

(六八)爾の時に高貴德王菩薩摩訶薩、佛に白して言さく『世尊、若煩惱斷ずる處是涅槃とは、是の事然らず。(六九)何を以ての故に。如來往昔、初めて佛道を成ずるに、(七〇)尼連禪河の邊に至る。爾の時に魔王其の眷屬と佛所に到りて、而も是の言を作さく、「世尊、涅槃時至る、何が故ぞ入らざる。」佛魔王に告げたまはく、「我今未だ多聞の弟子の善く禁戒を持し、聰明利智にして能く衆生を化する有らず、是の故に入らず。」(七一)若煩惱斷ずる處是涅槃と言はば、諸の菩薩等、無量劫に於て已に煩惱を斷ず。何が故ぞ稱して涅槃と爲すことを得ざる。倶に是斷處、何に緣りてか獨り諸佛之有りと稱して、菩薩には無からんや。(七二)若煩惱を斷ずる、涅槃に非ずば、何が故ぞ如來昔生名婆羅門に告げて、「我今此の身卽ち是涅槃」と言ふや。(七三)如來又時毗舍離國に在り。魔復啓請す、「如來昔未だ弟子の多聞、持戒、聰明、利智、

【六七】次に佛性を簡ぶ。

【六八】是より別會義。之に問答の二段あり、初の問中に又二段あり、其中初に正問。之に又三段ありて初に斷煩惱處是れ涅槃を問ふ。之に二段ありて初に旨を領じて仰非す。

【六九】次に正しく難ず。之に二段ありて初に魔に答ふるに據る。

【七〇】尼連禪（Nairañjanā）。不著樂と譯す。佛成道の已前に此河に沐浴して身の不淨を洗滌し給ひし所なり。

【七一】次に菩薩を引いて難と爲す。

【七二】次に斷煩惱處涅槃に非ざるを問ふ。

【七三】次に重ねて斷煩惱處是れ涅槃なるを問ふ。之に三段ありて初に魔に答ふるに據る。毗舍離（Vaiśāli）は、廣嚴と譯す。恆河の北、尼波羅の南隣

能く衆生を化する有らざるを以て涅槃に入らず。今以に具足す。何が故ぞ入らざる」と。如來爾の時に卽ち魔に告げて言はく、「汝今悒遲の想を生ずること莫れ。卻後三月吾當に涅槃すべし。」世尊、若滅度をして涅槃に非ざらしめば、何が故ぞ如來自ら三月當に般涅槃すべしと期すや。(七四)世尊、若し煩惱を斷ずる是涅槃ならば、如來往昔初めて道場菩提樹下に在りて煩惱を斷ずる時、便ち是涅槃ならん。何が故ぞ復卻後三月當般涅槃と言ふ。(七五)世尊、若し(七六)爾の時に是涅槃ならしめば、云何ぞ方に拘尸那城の諸の力士等の爲に、說きて後夜に當に般涅槃すべしと言ふ。(七七)如來誠實、云何ぞ是の虛妄の言を發する。」

(七八)爾の時に世尊、光明徧照高貴德王菩薩に告げて言はく、「善男子、若如來廣長舌を得と言はば、當に知るべし、如來無量劫に於て已に妄語を離る。一切の諸佛及び諸菩薩、凡そ發言する所誠諦にして虛無し。(七九)善男子、汝が言ふ所の如き波旬は往昔我に入涅槃を啓請するが如き者なり。善男子、而も是の魔王は眞實に涅槃の定相を知らず。何を以ての故に。波旬は衆生を化せず默然として住する、便ち是涅槃と意謂へり。善男子、譬へば世人人の言はず、造作する所無きを見て便ち是人は死の如く異なる

にある國。

【七四】次に道場に在る時に據る。

【七五】次に力士等に語るに據る。

【七六】爾の時に二解あり。若し道場の時を指せば今日後夜に涅槃するの難あり、若し二月十五日の朝を指せば中夜涅槃の難あり。

【七七】次に[illegible]を結す。

【七八】是より答ふ。之に二段あり。(一)初に直に答へて[illegible]を結す。

【七九】次に正しく答ふ。之に二段あり、其中初に第一に斷煩惱是れ涅槃の問に答ふ。之に又二段あり(一)初に[illegible]に答ふ。

無しと謂ふが如く、魔王波旬も亦復是の如し。如來衆生を化せむと默して說く所無きを意謂ふ。便ち如來般涅槃に入りたまふと謂ふ。〔八〇〕善男子、如來、佛法、衆僧差別相無しと說かず、唯常住、清淨の二法差別無しと說くのみ。善男子、佛も亦、佛及び佛性涅槃は無差別相と說かず、唯常恆不變にして、差別無しと說きたまふのみ。善男子、佛も亦、涅槃實相は無差別相と說きたまはず。唯、常有實不變易にして差別無しと說きたまふのみ。

〔八一〕善男子、爾の時に我が諸の聲聞の弟子諍訟を生ず、拘睒彌の諸の惡比丘の如し。我が敎に違反して多く禁戒を犯し、不淨物を受けて利養を貪求し諸の白衣に向いて而も自ら讚歎し、「我無漏を得、須陀洹果と謂ふ、乃至我阿羅漢果を得」と。他人を毀辱し。佛法僧、戒律和上に於て恭敬を生ぜず。公に我が前に於て「是の如きの物佛の畜ふることを聽され、是の如き等の物佛畜ふることを聽されず」と言ふ。我卽ち語りて言はく、「是の如き等の物、我は實に聽さず」と。復我に反いて言はく、「是の如き等の物、實に是佛聽したまふ」と。是の如きの惡人我が言を信ぜず。是等の爲の故に、我波旬に告ぐ、「汝悒遲すること莫れ、卻後三月當に般涅槃すべし」と。善男子、是の如き等の惡比丘に因るが故に、諸の聲聞の受學の弟子をして我が身を見ず、我が法を聞かずして、便ち如來涅槃に入ると言はしむ。唯諸の菩薩能く我が身を見、常に我が法を聞く。是の故に我涅槃に入ると言はず。聲聞の弟子、復如來涅槃すと發言すと雖も、而も我實に涅槃に入ら

【八〇】次に菩薩の難に答ふ。
【八一】次に第三の重ねて難處を難ずる問を答ふ。之に二段あり、其中初に滅惡の故に涅槃を唱ふ。之に又二段ありて初に法說。

す。善男子、若し我が所有の聲聞の弟子、說きて如來涅槃に入ると言はば、當に知るべし、是の人は我が弟子に非ず、是魔の伴黨、邪見の惡人にして正見に非ざるなり。若し如來涅槃に入らずと言はば、當に知るべし、是の人は眞に我が弟子にして魔の伴黨に非ず、正見の人にして惡邪に非ざるなり。善男子、我初て弟子の中に、如來衆生を化せず、默然として住するを般涅槃と名くと言ふこと有るを見ざるなり。(八二)善男子、譬へば長者に多くの子息有り。捨てて他方に至り、未だ還ることを得ざる頃、諸子咸く、父已に喪しぬと謂へども、而も是の長者實に終沒せず、諸子顚倒して皆沒想を生ずるが如し、聲聞の弟子も亦復是の如し、我を見ざるが故に便ち、如來已に拘尸城娑羅雙樹の閒に於て而も般涅槃すと謂ふ。而も我實に般涅槃せざるなり。

【八二】次に五譬を喩す。

聲聞の弟子は涅槃の想を生ず。善男子、譬へば明燈の、人有りて之を覆へば餘の知らざる者は燈已に滅すと謂ふ、而も是の明炎實は亦滅せず、知らざるを以ての故に滅想を生ずるが如く、聲聞の弟子も亦復是の如し。慧眼有りと雖も、煩惱覆ふを以て、心をして顚倒して眞身を見ず、而も便ち妄りに滅度の想を生ぜしむ。而も我實は畢竟滅度せず。善男子、生盲の人は日月を見ず。見ざるを以ての故に晝夜、明闇の相を知らず。知らざるを以ての故に、便ち日月の實有ること無しと說くが如し。實に日月有るも盲者は見ず、見ざることを以ての故に倒想を生じて日月無しと言ふ。聲聞の弟子も亦復是の如し、彼の生盲の如く如來を見ざれば便ち如來涅槃に入ると謂ふ。如來は實に涅槃に入らず、倒想を以ての

故に是の如きの心を生ず。善男子、譬へば雲霧の日月を覆蔽するを、癡人は便ち日月有ること無しと言ふ。日月は實に有り、直覆ふを以ての故に衆生見ざるが如く、聲聞の弟子も亦復是の如し、諸の煩惱、智慧眼を覆ふを以て如來を見たてまつらず、便ち如來滅度に入りたまふと言ふ。善男子、直是如來嬰兒行を現ず、滅度に非ざるなり。善男子、閻浮提日入の時衆生見ず、黑山障ふるを以ての故なり。而も是の日性質に沒入無し、衆生見ざれば沒入の想を生ずるが如く、聲聞の弟子も亦復是の如し。諸の煩惱の山に障へらるるが故に、我が身を見ず。見ざるを以ての故に、便ち如來に於て滅度の想を生ず、而も我實に畢竟永く滅せず。是の故に我毘舍離國に於て波旬に告げて、「却後三月我當に涅槃すべし」と言ふ。(八三)善男子、如來懸かに迦葉菩薩の、却後三月善根當に熟すべきを見、亦香山の須跋陀羅の安居を竟り已つて、當に我が所に至るべきを見る。是の故に我魔王波旬に告ぐ、「却後三月當に般涅槃すべし」と。善男子、諸の力士有りて其の數五百なり。三月を終竟して亦當に阿耨多羅三藐三菩提の心を發すことを得べし。我是の爲の故に、波旬に告げて言はく、「却後三月當に般涅槃すべし」と。善男子。(八四)純陀等及び五百の(八五)離車、(八六)菴羅果女の如き、却後三月無上道心善根成熟す。是等の爲の故に我波旬に告ぐ、「却後三月當に般涅槃すべし」と。善男子、(八七)須那刹多は外

【八三】次に生善の故に涅槃を唱ふ。

【八四】純陀 (Cunda)。妙義と譯す、拘尸那城の工巧師の息なり。佛に對して最後の供養をなせし人として知らる。

【八五】離車 (Licchavi)。薄皮と譯す。毘沙離國に於ける刹帝利族の稱。

【八六】菴羅果女 (Amrapali)。菴羅とは、奈樹の名なり、此

道、(八八)尼犍子等に親近す。我爲に法を說きて十二年を滿ずれども、彼の人邪見にして信せず受けず。我是の人邪見の根栽、卻後三月定んで拔斷すべきを知る。我是の爲の故に波旬に告げて言はく、「卻後三月當に般涅槃すべし」と。善男子、何の因緣の故に、我往昔に於て尼連河邊にして魔波旬に告ぐる、「我今未だ多聞の弟子有らず、是の故に涅槃に入ることを得ず」と。我時に五比丘等の爲に(八九)波羅奈に於て法輪を轉ぜんと欲するが故なり。次に復五比丘等、所謂(九〇)耶奢、(九一)富那、(九二)毗摩羅闍、(九三)憍梵波提、(九四)須婆睺の爲にするを欲し、次に復(九五)郁伽長者等五十人の爲を欲し、次に復摩伽陀國頻婆娑羅王等の無量の人天の爲を欲し、次に復(九六)優樓頻螺迦葉の門徒五百の比丘の爲を欲し、次に復(九七)那提迦葉、(九八)伽耶迦葉の兄弟二人、及び五百の弟子の爲を欲し、次に復(九九)舍利弗、(一〇〇)目犍連等の二百五十の比丘の爲に妙法輪を轉ぜんと欲す。是の故に我魔王波旬に般涅槃せずと告ぐ。

(一〇一)善男子、涅槃と名けて大涅槃に非ざる有り。云何が涅槃にして大涅槃に非ざる。佛性を見ずして而も煩惱を斷ず。是を涅槃にして大涅槃に非ずと名く。佛性を見ざるを以ての故に、無常無我、唯樂淨有り。是の義を以て

---

の木の果より生れたる故此の名あり。摩竭陀國の頻婆娑羅王の妃となりて耆婆を生み、後佛に歸依して園寺を作れり。

【八七】須那刹多(Sunakṣatra)。好星と譯す、比丘の名。

【八八】尼犍子(Nirgranthaputra)離繫徒と譯す。尼犍は克己主義の名、子は此の主義を奉ずる徒又は派の意なり、六大外道の一。

【八九】波羅奈(Vārāṇasī)。ベナレスの聖都。

【九〇】耶奢(Yaśas)。名稱と譯す。

【九一】富那は具さに富樓那彌多羅尼子(Pūrṇa Maitrāyaṇīputra)といひ、滿慈子と譯す。

【九二】毗摩羅闍(Vimala)。離垢と譯す。

【九三】憍梵波提(Gavāṃpati)。牛王と譯す。

の故に、煩惱を斷ずと雖も名けて大般涅槃と爲すを得ず。若し佛性を見て能く煩惱を斷ずれば是則ち名けて大般涅槃と爲す。佛性を見るを以ての故に名けて常樂我淨と爲すを得。是の義を以ての故に煩惱を斷除するを、亦稱して大般涅槃と爲すを得。(一〇二)善男子、(一〇三)涅とは不と言ひ、(一〇四)槃とは滅と言ふ、不滅の義を名けて涅槃と爲す。又槃は覆と言ふ、不覆の義乃ち涅槃と名く。槃は去來と言ふ、不去不來乃ち涅槃と名く。槃は取と言ふ、不取の義乃ち涅槃と名く。槃は不定と言ふ、定にして不定無きは乃ち涅槃と名く。槃は新故と言ふ、新故無きの義乃ち涅槃と名く。槃は障閡と言ふ、無障閡の義乃ち涅槃と名く。善男子、(一〇五)優樓迦(一〇六)迦毗羅の弟子等有りて言はく、「槃とは相と名く、無相の義乃ち涅槃と名く。善男子、槃とは有と言ふ、有無きの義乃ち涅槃と名く。槃とは和合と名く、無和合の義乃ち涅槃と名く。槃とは苦と言ふ、無苦の義乃ち涅槃と名く。善男子、煩惱を斷ずる者は涅槃と名けず、煩惱を生ぜざるを乃ち涅槃と名く。善男子、諸佛如來は煩惱起らず、是を涅槃と名く。所有の智慧は法に於て無閡なり、是を如來と爲す。如來は是凡夫、聲聞、緣覺、菩薩に非ず、是を佛性と名く。如來の身心智慧は無量無邊

---

【九四】須婆陀(スバーフ [illegible])[illegible]

【九五】[illegible](ウグラ [illegible])[illegible]德と譯す。

【九六】優樓頻螺迦葉(ウルビルバーカーシャパ Urubilva-kāśyapa)。優樓頻螺は木瓜と譯し、迦葉は飲光と譯す。

【九七】那提迦葉(ナディーカーシャパ Nadī-kāśyapa)。那提は河と譯す。

【九八】伽耶迦葉(ガヤーカーシャパ Gayā-kāśyapa)。伽耶は象頭山と譯す。

【九九】舍利弗(シャーリプトラ Śāri-putra)。身子と譯す。

【一〇〇】目犍連。具さに摩訶目犍連(マハーマウドガリヤーヤナ Mahāmaudgalyāyana)といひ、大讚誦と譯す。

【一〇一】次に第三中間[illegible]處涅槃に[illegible]すと難ずるを答ふ。之に二義ありて初に是非を分別す。

【一〇二】次に[illegible]て大涅槃を[illegible]す。

【一〇三】涅(ニル)不又は無の義。

【一〇四】槃(ヴァーナ)[illegible]、去る等の義。

阿僧祇の上に徧滿して障閡する所無し、是を虛空と名く。如來の常住にして變易有る無きを名けて實相と曰ふ。是の義を以ての故に如來は實に畢竟涅槃せず。(一〇七)是を菩薩大涅槃微妙の經典を修して、第七の功德を具足し成就すと名く。

(一〇八)善男子、云何か菩薩摩訶薩大涅槃微妙の經典を修して第八の功德を具足し成就する。

(一〇九)善男子、菩薩摩訶薩大涅槃を修して五事を除斷し、五事を遠離し、六事を成就し、五事を修習し、一事を守護し、四事に親近し、一實に信順し、心善解脫し、慧善解脫す。(一一〇)善男子、云何が菩薩五事を除斷する。所謂五陰の色、受、想、行、識なり。言ふ所の陰とは其の義何の謂ぞ。能く衆生をして生死相續せしめ、重擔を離れず、分散聚合し、三世に攝せられ、其の實義を求むるに了に得べからず。是の諸義を以ての故に名けて陰と爲す。(一一一)菩薩摩訶薩(一一二)色陰を見ると雖も其の相を見す。何を以ての故に。十色の中に於て其の性を推求するに悉く得べからず。世界の爲の故に說きて言つて陰と爲す。(一一三)受に百八有り、受陰を見ると雖も初て受の相無し。何を以ての故

【一〇五】憂樓迦(Ulūka)。鵂鶹と譯す、勝論の開祖。六句義を說く。

【一〇六】迦毘羅(Kapila)。黃頭と譯す、數論の開祖。二十五諦を說く。

【一〇七】是より第三に結。

【一〇八】是より第八の功德を釋す。之に標、釋、結の三段ありて初に標。

【一〇九】次に釋。之に二段あり、其中初に功德を明す。之に又二段ありて初に九事の章門を列す。

【一一〇】次に次第に釋す。之に九段あり、其中初に第一章五事を除斷するを釋す。之に總、別の二釋ありて初に總。

【一一一】次に別。

【一一二】五根五塵は皆色法、故に十色と云ふ。十色並[illegible]に[illegible]の[illegible]に性を得すと云ふ。

【一一三】受に百八有り等。之に二說あり。一に受陰中百八の語なし、[illegible]して行陰の九十八使[illegible]

に、受百八と雖も現定實無し。是の故に菩薩受陰を見す。想、行、識等も亦復是の如し。菩薩摩訶薩深く五陰は是煩惱諸惡を生ずるの根本なるを見る。是の義を以ての故に方便して斷ぜしむ。（二四）云何が菩薩五事を遠離する。所謂五見なり。何等をか五つと爲す。一つには身見、二つには邊見、三つには邪見、四つには戒取、五つには見取なり。是の五見に因りて（二五）六十二見を生じ、是の諸見に因りて生死絶えず。是の故に菩薩防護して近けず。（二六）云何が菩薩六事を成就する。六念處を謂ふ。何等をか六つと爲す。一つには念佛、二つには念法、三つには念僧、四つには念天、五つには念施、六つには念戒なり。是を菩薩六事を成就すと名く。（二七）云何が菩薩五事を修習する。所謂五定なり。一つには（二八）知定、二つには寂定、三つには身心受快樂定、四つには無樂定、五つには首楞嚴定なり。是の如き五種の定心を修習すれば、則ち大般涅槃に近くことを得。是の故に菩薩勤心に修習す。（二九）云何が菩薩一事を守護する。菩提心を謂ふ。菩薩摩訶薩常に勤めて是の菩提心を守護すること、猶し世人の一子を守護するが如く、亦瞎者の餘の一目を護るが如し。曠野に行くに導者を守護するが如く、菩薩菩提の心を

---

と十纏とを合すれば百八なり。二に釋論に依るに受に自ら百八あり。通じて六根に約するに一根に三あれば十八を成す。一根に就て復た善不善あれば、三十六を成す。復た三世に約するに合して百八ありと。

【二四】次に第二章五事を遠離するを釋す。

【二五】六十二見に就て、我邊二見を合して六十二となすと、但だ邊見に約して六十二となすとの二義あり。

【二六】次に第三章六事を成就するを釋す。

【二七】次に第四章五事を修習するを釋す。

【二八】知定は即ち初禪、覺觀あるが故に。寂定は即ち二禪、覺觀なきが故に。快樂は即ち三禪、樂受の極なるが故に。無樂は即ち四禪、苦樂を斷じて唯だ捨受のみなるが故に。

守護することも亦復是の如し。是の如く菩提心を護るに因るが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得。阿耨多羅三藐三菩提を得るに因るが故に、常、樂、我、淨具足して有り、卽ち是無上大般涅槃なり。是の故に菩薩一法を守護す。

（一三〇）云何が菩薩四事に親近する。四無量心を謂ふ。何等をか四つと爲す。一つには大慈、二つには大悲、三つには大喜、四つには大捨なり。是の四心に因りて能く無量無邊の衆生をして菩提心を發さしむ。是の故に菩薩心を繫けて親近す。（一三一）云何が菩薩一實に信順する。菩薩了知す、「一切衆生皆一道に歸す」と。一道とは大乘を謂ふなり。諸佛菩薩衆生の爲の故に之を分ちて三つと爲す、是故に菩薩信順して逆はず。（一三二）云何が菩薩心善く解脫する。貪、恚、癡の心永く斷滅するが故に、是を菩薩心善く解脫すと名く。（一三三）云何が菩薩慧善く解脫する。菩薩摩訶薩一切法に於て知りて障閡無し、是を菩薩の慧善解脫と名く。慧解脫するに因りて、昔聞かざる所而も今（一三四）聞くことを得、昔見ざる所而も今得ることを得、昔至らざる所而も今至ることを得。」

（一三五）爾の時に光明徧照高貴德王菩薩摩訶薩の言さく、「世尊、佛の所說の心解脫の如きは、是の義然らず。（一三六）何を以ての故に。心本繫無し。所

---

•••首楞嚴は通じては十地乃至地前、別しては十地に於て更に百八三昧を修して得るなり。この五定の中前四は禪定、後一は般若なり。

【一二九】次に第五章一事を守護するを釋す。

【一三〇】次に第六章四事に親近するを釋す。

【一三一】次に第七章一實に信順するを釋す。

【一三二】次に第八章心善く解脫するを釋す。此の心解脫と次の慧解脫の相異を辨ずるに二解あり。一に俗諦の故に心、眞諦の故に慧、二に煩惱の故に心、無明の故に慧なりとす。

【一三三】次に第九章慧善く解脫するを釋す。

【一三四】聞•…見•…至•。之に二解あり。一に天耳の故に聞•、天眼の故に見•、身通の故に至•。二

以は何ん。是の心本性、貪欲、瞋恚、愚癡の諸結に縛せられず。若本繫無くば、云何ぞ而も心善く解脫すと言はん。(二七)世尊、若心本性貪結に繫せられずば、何等の因緣か、而も能く繫することを得ん。人角より犂らんに本乳相無ければ、功力を加ふと雖も乳の出づるに由無し。乳を犂る者は、則ち是の如くならず。功を加ふること少しと雖も、乳則ち多く出づるが如く、心も亦是の如し、本貪無くば、今云何ぞ有らん。若本貪無く、後方に有らば、諸佛菩薩本貪相無くして、今悉く有るべし。世尊、譬へば石女は本子相無し。功力無量の因緣を加ふと雖も、子得べからざるが如く、心も亦是の如し。本貪相無し、衆緣を造ると雖も、貪生ずるに由無し。世尊、溼木を鑽るに火得べからざるが如く、心も亦是の如し、復鑽求すと雖も貪得べからず。云何ぞ貪結能く心を繫がん。世尊、譬へば沙を壓して油得べからざるが如く、心も亦是の如し、復之を壓すと雖も貪得べからず。當に知るべし、貪心二理各異なり。設ひ復之有りとも、何ぞ能く心を汙さん。(二八)世尊、譬へば人有りて橛を空に安ずれば、終に住することを得ざるが如く、貪を心に安ずるも亦復是の如し、種種の因緣、貪をして心を繫縛せしむること能はず。(二九)世尊、若心貪無きを解脫と名くとは、諸佛菩薩何か

---

に九地の故に開、十[illegible]の故に見、佛地の故に至と[illegible]。

【二五】是より論義。之に問、答の二段あり、其中初の問に又二段ありて初に旨を[illegible]じて[illegible]非す。

【二六】次に正しく問ふ。之に二段あり、其中初に本無に約て[illegible]難す。之に二段ありて[illegible]に心の無縛無脫を明す。

【二七】次に五の中偏に無縛を明す。之に二段ありて初に所縛無きを明す。

【二八】次に能縛無きを明す。

【二九】次に偏に無脫を明す。之に三段ありて初に無解を明す。

故ぞ廬舍中の刺を拔かざる。(三〇)世尊、過去世の心を解脱と名けず、未來世の心も亦解脱無く、現在世の心も道と共ならず。何等の世の心か解脱を得と名けん。(三一)世尊、過去の燈闇を滅すること能はず、未來世の燈も亦闇を滅せず、現在世の燈も復闇を滅せざるが如し。何を以ての故に。明と闇との二つ並ばざるが故なり。心も亦是の如し。云何ぞ而も心解脱を得と言はん。

(三二)世尊、貪も亦是有なり。若貪無くば、女相を見る時貪を生ずべからず、若女相に因りて而も生ずるを得ば、當に知るべし、是の貪は眞實に有なり。貪有るを以ての故に三惡道に墮す。世尊、譬へば人有りて畫女像を見て亦復貪を生ず。貪を生ずるを以ての故に種種の罪を得るが如く、若本貪無くば、云何ぞ畫を見て而も貪を生ぜん。若心に貪無くば、云何ぞ如來說きて菩薩心解脱を得と言はん。若心に貪有らば、云何ぞ相を見て然して後方に生じ、相を見ざる者則ち生ぜざるや。我今現見す。惡果報有り、當に貪有るを知るべし。瞋恚、愚癡も亦復是の如し。(三三)世尊、譬へば衆生有身無我なり、而も諸の凡夫横に我想を計す。我想有りと雖も三趣に墮せざるが如し、云何ぞ貪者無女相に於て、而も女相を起して三惡道に墮する。(三四)世尊、譬へば火を鑽りて而も火を生ずるが如し。然るに是の火性衆緣の中に無し、何の因緣を以て而も生ずることを得るや。世尊、貪も亦是の如し、色中に貪無く、香、味、觸、法も亦復貪無し。云何ぞ色、

【三〇】次に得解者無きを明す。
【三一】次に得解の道無きを明す。
【三二】次に本有に就て縱難す。之に二段あり、其中初に善心の中に貪有るべきを明す。之に二段ありて初に法說。
【三三】次に二譬。
【三四】次に前境の中に貪有るべきを明す。

香、味、觸、法に於て而も貪を生ずるや。若衆縁の中に悉く貪無くば、云何ぞ衆生獨貪を生じて、諸佛菩薩は而も生ぜざるや。(一三五)世尊、心も亦不定なり、若心定ならば貪欲、瞋恚、愚癡有ること無けん。若不定ならば云何ぞ心解脫を得と言はん。(一三六)貪も亦不定なり、若不定ならば云何ぞ之に因りて三惡趣に生ぜん。(一三七)貪者、境界、二つ倶に不定なり。何を以ての故に。倶に一色を縁じて或は貪を生じ、或は瞋を生じ、或は愚癡を生ず。是の故に貪者及與境界二つ倶に不定なり。若倶に不定ならば何が故ぞ如來說きて、「菩薩大涅槃を修して心解脫を得」と言ふ。』

(一三八)爾の時に世尊、光明徧照高貴德王菩薩摩訶薩に告げて言はく『「善い哉善い哉善男子、心も亦貪結に繫がれず、亦繫がれざるに非ず。是解脫に非ず、解脫せざるに非ず。有に非ず、無に非ず。現在に非ず、過去に非ず、未來に非ず。何を以ての故に。善男子、一切の諸法は自性無きが故なり。(一三九)善男子、諸の外道有りて、是の如きの言を作さく、「因縁和合すれば則ち果生ずること有り。若衆縁の中、本生性無くして而も能く生ずれば、虛空不生、亦果を生ずべし。虛空不生是因に非ざるが故なり、衆縁の中本果性有るを以てなり。是の故に合集して而も果を生ずることを得。所以は何ん。(一四〇)提婆達牆壁を造らんと欲すれば、則ち泥土を取りて采色を取らず、畫像

【一三五】次に不定に就て難ず。之に三段ありて初に心不定を明す。
【一三六】次に貪不定を明す。
【一三七】次に貪、境倶に不定を明す。
【一三八】是より佛答。之に三段ありて初に正義に據る。
【一三九】次に定執を破す。之に二段あり、其中初に有を計するを破す。之に又二段ありて初に廣く所計を出す。
【一四〇】提婆達(Devadatta)。天授、天熱と譯す、略して單に提婆とも謂ふ。

を造らんと欲すれば、則ち采色を集めて草木を取らず、衣を作るに縷を取りて泥木を取らず、舍を作るに泥を取りて縷綖を取らざるが如し。人取るを以ての故に、當に知るべし、是の中各各能く果を生ず。能く果を生ずるを以ての故に、當に知るべし、因中必ず先より性有り、若性無ければ一物の中應當に一切諸物を出生すべし。若是取るべく、作るべく、出すべくば、當に知るべし、是の中必ず先より果有らん。若果無くば、人則ち取らず、作らず、出さず。唯虛空有りて取ること無く、作ること無し、故に能く一切萬物を出生す。因有るを以ての故に、〔一二一〕尼拘陀子は、尼拘陀樹に作し、乳に醍醐有り、縷の中に布有り、泥の中に瓶有るが如し。〔一二二〕善男子、一切の凡夫は無明に盲せらる。是の定說を作す、「色に著義有り、心に貪性有り」と。復言ふ、「凡夫の心貪性有るも亦解脫性なり。貪因緣に遇へば心則ち貪を生じ、若解脫に遇へば心則ち解脫す」と。此の說を作すと雖も是の義然らず。〔一二三〕諸の凡夫有り、復是の言を作さく、「一切の因中に悉く果有ること無し。因に二種有り。一つには微細、二つには麤大なり。細は則ち是常、麤は則ち無常なり。微細の因より轉じて麤因を成す、此の麤因より轉じて復果を成す。麤無常の故に果復無常なり。善男子、諸の凡夫有り、復是の言を作さく、心も亦因無く、貪も亦因無し。時節を以ての故に則ち貪心を生ず。〔一二四〕是の如き等の輩心因緣を知ること能はざ

【一二一】尼拘陀子（ニヤグローダ・プトラ）。尼拘陀は、榕樹又は楡樹と譯す。この樹より生じたる子種を尼拘陀子と云ふ。

【一二二】次に過を結して對す。

【一二三】次に無を對す。之に二段ありて初に對、二に…す。

【一二四】次に正しく結過を對責す。之に二段ありて初に法…

るを以ての故に、六趣に輪回して具さに生死を受く。(一四五)善男子、譬へば犬に枷して之を柱に繋ぐに、終日柱を繞りて離るることを得ること能はざるが如く、一切の凡夫も亦復是の如し、無明の枷を被り、生死の柱に繋がれ、二十五有を繞りて離るることを得ること能はず。善男子、譬へば人有りて圊廁に墮し、既に出づることを得已りて、而も復還つて入るが如く、人病差え、還つて病因を爲すが如く、人路を渉るに空曠の處に値ひ、既に過ぐることを得已りて、而も復還り來るが如く、又淨洗して還つて泥土を塗るが如く、一切凡夫も亦復是の如し。已に無所有處を解脱することを得、唯未だ非非想處を脱することを得ず、而も復還來して三惡趣に至る。何を以ての故に。一切の凡夫は唯果を觀じて因緣を觀せず。犬の塊を逐ひて人を逐はざるが如く、凡夫の人も亦復是の如し、唯果を觀じて因緣を觀ぜず。觀ぜざるを以ての故に、非想より退して三惡趣に還る。

(一四六)善男子、諸佛菩薩は終に因中に果有り、因中に果無く、及び有無果、非有非無果を定說せず。(一四七)若し因中先より定んで果有り、及び定んで果無く、定んで有無果、定んで非有非無果と言はば、當に知るべし、是等は皆魔の伴黨なり。魔に繫屬す、即ち是愛人なり。是の如き愛人は永く生死の繫縛を斷ずること能はず、心相及以貪想を知らず。(一四八)善男子、諸佛菩薩に中道を顯示す。

---

【一四五】次に譬。
【一四六】次に廣く中道因緣義の定執する所無きを說く。之に二段あり、其中初に因果の諸法は有に非ず無に非ず因緣の故に有なることを明す。之に又三段ありて初に四句を遮することを明す。
【一四七】次に定執を非す。
【一四八】次に正しく中道の法を顯はす。

何を以ての故に。諸法は非有非無と說くと雖も、而も決定せず。所以は何ん。眼に因り、色に因り、明に因り、心に因り、念に因りて識則ち生ずることを得。是の識決定して眼の中、色の中、明の中、心の中、念の中に在らず、亦中間に非ず、有に非ず無に非ず。緣より生ずるが故に之を名けて有と爲し、自性無きが故に之を名けて無と爲す。是の故に如來は說きて「諸法非有非無」と言ふ。

(一四九)善男子、諸佛菩薩は終に心に淨性及び不淨性有りと定說せず。淨、不淨の心住處無きが故に。緣よりの貪を生ず、故に非無と說く。本貪性無し、故に非有と說く。(一五〇)善男子、因緣に從るが故に、心則ち貪を生じ、因緣に從るが故に、心則ち解脫す。(一五一)善男子、因緣に二つ有り。一つには生死に隨ひ、二つには大涅槃に隨ふ。(一五二)善男子、因緣有るが故に、心貪と共にして生じ、貪と共にして倶に滅す。貪と共にして生じ貪と共にして滅せざる有り。貪と共にせずして生じ貪と共にして倶に滅する有り。貪と共にせずして生じ貪と共にせずして滅する有り。云何が心共貪生共貪倶滅なる。善男子、若凡夫未だ貪心を斷せずして貪心を修習する有らば、是の如きの人は心貪と共にして生じ、心貪と共にして滅す。一切衆生貪心を斷せず。心貪と共にして生じ、心貪と共にして滅す。欲界の衆生一切皆初地の味禪有り。若は修不修常に成就するを得。因緣に遇ふが故に即便之を得るが如し。因緣と言ふは火災を謂ふなり。一切の凡夫も亦復是の如し。若は修、

【一四九】次に心の貪有るは有に非ず無に非ず、因緣の故に有なるを明す。之に二段あり、且中初に心性本淨不淨、有に非ず無に非ざることを明す。之に標、釋、結の三段ありて初に標。
【一五〇】次に釋す。之に二段ありて初に兩緣門、[illegible]
【一五一】次に兩緣門を釋す。
【一五二】次に四句料簡。

不修、心貪と共にして生じ、心貪と共にして滅す。何を以ての故に。貪を斷ぜざるが故なり。云何が心共貪生不共貪滅なる。聲聞弟子、因緣有るが故に貪心を生ず。貪心を畏るるが故に白骨觀を修す。是を心貪と共にして生じ、貪と共にして滅せずと名く。復心共貪生不共貪滅有り。聲聞の人未だ四果を證せず、因緣有るが故に貪心を生じ、四果を證する時貪心滅することを得るが如し。是を心貪と共に生じ、貪と共に滅せずと名く。菩薩摩訶薩不動地を得る時、心貪と共に生じ、貪と共に滅せず。云何が不共貪生共貪倶滅なる。若菩薩摩訶薩貪心を斷じ已りて、衆生の爲の故に貪有るを示現す。示現を以ての故に、能く無量無邊の衆生をして善法を咨受し、具足し、成就せしむ。是を貪と共に生ぜず、貪と共に倶に滅すと名く。云何が不共貪生不共貪滅なる。阿羅漢、緣覺、諸佛、不動地を除きて其の餘の菩薩を謂ふ。是を貪と共に生ぜず、貪と共に滅せずと名く。(二五三)是の義を以ての故に、諸佛菩薩決定して心性本淨、性本不淨と說かず。(二五四)善男子、是の心貪結と和合せず、亦復瞋癡と和合せず。善男子、譬へば日月、烟塵、雲霧の爲に、及び羅睺羅に覆蔽せらる。是の因緣を以て諸の衆生をして見ることを得ること能はざらしむと雖も、見るべからずと雖も、日月の性終に彼の五翳と和合せざるが如く、心も亦是の如し、因緣を以ての故に貪結を生ず。衆生心貪と合すと說くと雖も、而も是の心性實に與合せず。若是貪心卽ち是貪性、若是不貪卽ち不貪性ならば不貪の心貪と爲すこと能

【二五三】次に結。
【二五四】次に心性本淨の故に和合有ること無きを明す。之に二段あり、其中初に和合無きことを明す。

はず、貪結の心不貪なること能はず。善男子、是の義を以ての故に、貪欲の結は心を汚すこと能はず。

（一五五）諸佛菩薩永く貪結を破す。是の故に說きて心解脱を得と言ふ。一切衆生因緣に從るが故に貪結を生じ、因緣に從るが故に心解脱を得。

（一五六）善男子、譬へば（一五七）雪山の懸峻の處の如し。人と獼猴と倶に行くこと能はず、或は復處有りて獼猴能く行き人行くこと能はず、或は復處有りて人と獼猴と二つ倶に能く行く。善男子、人と獼猴と能く行く處は、諸の獵師純ら黐膠を以て之を案上に置き、用ひて獼猴を捕ふ。獼猴癡なるが故に往きて手之に觸る。觸れ已りて手を黏す。手を脱せんと欲するが故に脚を以て之を蹹む。脚復隨つて著す。脚を脱せんと欲するが故に口を以て之を齧む。口復黏著す。是の如きの五處悉く脱することを得ること無し。是に於て獵師杖を以て之を貫き、負ひて家に還歸するが如し。（一五八）雪山の險處は佛、菩薩の所得の正道を譬へ、獼猴とは諸の凡夫を譬へ、獵師とは魔波旬を譬へ、黐膠とは貪欲結を譬へ、人と獼猴と倶に行くこと能はざるは、諸の凡夫、魔王波旬倶に行ずること能はざるを譬へ、獼猴能く行き、人能はずとは、諸の外道智慧有る者、諸の惡魔等五欲を以てすと雖も繫縛すること能はざるを譬ふ。

【一五五】次に因緣和合の故に縛脱有ることを明す。之に二段あり、其中初に縛脱の境を明す。之に二段ありて初に標。

【一五六】次に釋。之に二段あり、其中初に縛境を釋す。之に又三段ありて初に譬。

【一五七】山は八正道、懸峻は難行苦行、人は魔、獼猴は外道、獵師は魔邪、黐膠は愛欲の境、置案上は五欲果報の上に置き衆生を誑かす、手觸は眼耳等の色聲等に觸る、黏手は行心中に業著を起す、五處皆著は五根染を起す、杖貫は魔邪化行、負還歸は將て三塗に入るに喩ふ。

【一五八】次に合。

人と獼猴と倶に能く行くとは、一切の凡夫及び魔波旬、常に生死に處して修行すること能はず。凡夫の人五欲に縛せられ、魔波旬をして自在に將去せしむ。彼の獵師の獼猴を黐捕して之を負ひて家に歸るが如し。(二五九)善男子、譬へば國王己界に安住すれば身心安樂、若他界に至れば則ち衆苦を得るが如く、一切衆生も亦復是の如し。若能く自ら己境界に住すれば則ち安樂を得、若他界に至れば、則ち惡魔に遇ひて諸の苦惱を受く。自境界とは四念處を謂ひ、他境界とは五欲を謂ふなり。(二六〇)云何が名けて魔に繫屬すと爲す。諸の衆生有りて無常を常と見、常を無常と見、苦を樂と見、樂を苦と見、不淨を淨と見、淨を不淨と見、無我を我と見、我を無我と見、實の解脫に非ざるを妄りに解脫と見、眞實の解脫を非解脫と見、非乘を乘と見、乘を非乘と見る。是の如きの人は、魔に繫屬すと名く。魔に繫屬する者は心清淨ならず。

(二六一)復次に善男子、若諸法眞實に是有、總別定相と見ば、當に知るべし、是人若色を見る時、便ち色相を作す。乃至識を見れば亦識相を作す。男を見るに男相、女を見るに女相、日を見るに日相、月を見るに月相、歲を見るに歲相、陰を見るに陰相、入を見るに入相、界を見るに界相なり。是の如く見る者を魔に繫屬すと名く。魔に繫屬する者は心清淨ならず。(二六二)復次に善男子、若我は是色、色の中に我有り、我中に色有り、色我に屬すと見る。乃至、我は是識、識中に我有り、我中に識有り、識我に屬すと見る。是

【二五九】次に解を得る境を釋す。
【二六〇】次に繫脫の人を明す。之に二段あり、其中初に縛人を明す。之に又四段ありて初に倒を起すが故に縛。
【二六一】次に相を取るが故に縛。
【二六二】次に我見の故に縛。

是の如く見る者は魔に繫屬す、我が弟子に非ず。（一六三）善男子、我が聲聞の弟子、如來の十二部經を遠離して外道の種種の典籍を修習し、出家寂滅の業を修せずして純ら世俗在家の事を營む。何等をか名けて在家の事と爲す。一切不淨の物、奴婢、田宅、象馬、車乘、驢騾、鷄犬、獼猴、豬羊、種種の穀麥を受畜し、師僧に遠離して白衣に親附し、聖教に違反して諸の白衣に向ひて是の如きの言を作さく、「佛、比丘に種種不淨の物を受畜することを聽す」と。是を在家の事を修習すと名く。諸の弟子有りて涅槃の爲にせず、但利養の爲に十二部經を親近し聽受し、招提僧物及び僧鬘物、衣著貪噉自己の有の如し。他家及以稱譽を慳惜し、國王及び諸の王子に親近し、吉凶を卜筮し、盈虛を推步す。圍棊六博、樗蒲投壺なり。比丘尼及び諸の處女に親み、二沙彌を畜ふ。常に屠獵、沽酒の家、及び旃陀羅所住の處に遊び、種種販賣し、手自ら食を作り、使を鄰國に受けて信命を通致す。是の如きの人は、當に知るべし、卽ち是魔の眷屬にして我が弟子に非ず。是の因緣を以て心貪と共に生じ、心貪と共に滅す。乃至癡心、共生共滅も亦復是の如し。善男子、是の因緣を以て心性淨に非ず、亦不淨に非ず。是の故に我心解脫を得と說く。（一六四）若し一切の不淨の物を畜へず受けず、大涅槃の爲に十二部經を受持、讀誦し、書寫、解說する有らば、當に知るべし、是等は眞に我が弟子なり。惡魔波旬の境界を行ぜず、卽ち是三十七品を修習す。修習を以ての故に貪と共に生ぜず、貪と共に滅せず。（一六五）是を菩薩大涅槃微妙の經典を修して第八の功德を具足し成就すと名く。」

【一六三】次に非法の畜に約す。
【一六四】次に得解の人を明す。
【一六五】是より第三に結。

# 卷の第二十四

## 高貴德王菩薩品の六

(一)「復次に善男子、云何が菩薩摩訶薩大涅槃微妙の經典を修して、第九の功德を具足し成就する。(二)善男子、菩薩摩訶薩大涅槃微妙の經典を修して、初めて五事を發して悉く成就を得。何等をか五つと爲す。(三)一つには信、二つには直心、三つには戒、四つには親近善友、五つには多聞なり。

(四)云何が信と爲す。菩薩摩訶薩三寶、及に果報有るを信す。二諦、一乘の道、更に異趣無し。諸の衆生の速かに解脫を得るが爲に、諸佛菩薩分別して三と爲すを信す。(五)第一義諦を信じ、善方便を信す。是を名けて信と爲す。(六)是の如く信する者は、若は諸の沙門、若は婆羅門、若は天、魔、梵、一切衆生壞すること能はざる所なり。是の信に因るが故に、聖人の性を得。布施を修行する、若は多、若は少、悉く大般涅槃に近き、生死に墮せざることを得。戒聞智慧も亦復是の如し、是を名けて信と爲す。是の信有りと

【一】是より第九の功德を明す。之に標、釋、結の三段あり。其中初に標。

【二】次に釋。これに明五事、歎義の二段あり、其中初の五事の中列、釋、結の三段あり。列に又三段あり初に標。

【三】次に列名。[illegible]

【四】次に釋。之に五段あり、其中初に信。之に又三段あり、一に先づ信體を出す。體に五あり、三寶、因果、二諦、一乘、三諦なり。

説くを聞かば、能く阿耨多羅三藐三菩提の心を發す、如其遇はざれば、則ち發すこと能はず。所謂須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛なり。二つには善友、諸佛菩薩に遇ひて妙法を説くを聞くと雖も、亦發すこと能はず、若其遇はざるも亦發すこと能はず。一闡提を謂ふ。三つには、若は遇、不遇、一切悉く能く阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。所謂菩薩なりと。(一三)若遇と不遇と悉く阿耨多羅三藐三菩提の心を發すと言はゞ、如來今者云何ぞ説きて「佛性を讃ずるに因りて、諸の衆生をして阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしむ」と言ふ。(一四)世尊、若善友、諸佛菩薩に遇ひて妙法を説くを聞き、及以不遇悉く阿耨多羅三藐三菩提の心を發すこと能はざれば、當に知るべし、是の義も亦復然らず。(一五)何を以ての故に。是の如きの人は、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきが故に。一闡提の輩佛性を以ての故に、若は聞、不聞、悉く亦當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきが故なり。(一六)世尊、佛の所説の如き、何等をか名けて一闡提と爲すや、斷善根を謂ふと。是の如きの義も亦復然らず。(一七)何を以ての故に。佛性を斷せざるが故なり。是の如く佛性理は斷ずべからず、云何ぞ佛諸の善根を斷ずと説きたまふ。(一八)佛往昔十二部經を説きたまふが如く、善に二種有り。一つには常、二つには無常なり。常とは不斷、無常

【一三】 問の中の第二に又兩段あり、初に旨を領じて仰非す。
【一四】 次に正難。
【一六】 次に第二の兩難は初の功德より生ず。第三十卷の中に五難を明す。初に兩難は四種の罪人に據り中の兩難は闡提に據り、後の一難は不定に據る。佛答の中に佛性内に非ず、外に非ず、常に非ず、無常に非ず、故に斷せざることを明す。今還た此に因つて問を生ず。初に旨を領じて仰非す。
【一七】 次に正難。之に二段ありて初に前難。
【一八】 次に後難。

とは斷なり。無常は斷すべし、故に地獄に墮す。常は斷すべからず、何が故ぞ遮せざる。佛性斷せざれば一闡提に非ず。如來何が故ぞ是の如きの說を作して一闡提と言ふ。(一九)世尊、若佛性に因りて阿耨多羅三藐三菩提を發す。何が故ぞ如來廣く衆生の爲に十二部經を說きたまふ。世尊、譬へば四河阿耨達池より出で、若天人、諸佛世尊說きて是の河大海に入らず、當に本源に還るべしと言ふ有らば、是の處有ること無きが如く、菩提の心も亦復是の如し。佛性有る者、若は聞不聞、若は戒非戒、若は施非施、若は修不修、若は智非智、悉く皆阿耨多羅三藐三菩提を得べし。世尊、(二〇)優陀延山、日中よりして出で、正南に至るに日若念じて「我西に至らず東方に還る」と言はば、是の處有ること無きが如く、佛性も亦爾なり。若は不聞、不戒、不施、不修、不智、阿耨多羅三藐三菩提を得ざれば、是の處有ること無し。(二一)世尊、諸佛如來は、因果の性非有、非無と說きたまふ。是の如きの義、是亦然らず。何を以ての故に。其の乳の中に酪の性無ければ、則ち酪有ること無し。尼拘陀子五丈の性無ければ、則ち五丈の質を生ずること能はざるが如し。若佛性の中に阿耨多羅三藐三菩提の樹無ければ、云何ぞ能く阿耨多羅三藐三菩提の樹を生ぜん。是の義を以

【一九】次に第三に又兩難あり、初に詰難。

【二〇】優陀延(Udayana)。顯現と譯す、山の名。

【二一】次に譬喩。

【二二】次に佛答。之に喩、答の二段あり。初の喩に又二段ありて初に喩同。

【二三】不行不修業。慳悪を以て悼となす、我能く之を制す。故に悪を行ぜず。常我を障ふ、我れ其の善を知り從はずして自ら能く住つ、故に業を修し。

【二四】作黑黑業。自己のために生死道を貪る、之を黑黑といひ。他人のために之を作す、之を作黑といふ。最有の故に有、無明の故に故、新を以て新を成る故に造新、故を以て故

ての故に、因果非有非無と說く所、是の如きの義と云何ぞ相應せん。』

(二二)爾の時に世尊、讃じて言はく、『善い哉善い哉善男子、世に二人有りて甚だ希有爲ること優曇華の如し。(二三)一つには惡法を行ぜず、二つには罪あれば能く悔ゆ。是の如きの人甚希有と爲す。復二人有り。一つには(二四)作恩、二つには念恩なり。復二人有り。一つには新法を咨受し、二つには故きを溫ねて忘れず。復二人有り。一つには造新、二つには修故なり。復二人有り。一つには樂聞法、二つには樂說法なり。復二人有り。一つには(二五)善問難、二つには善能答なり。善問難とは汝が身是なり。善能答とは如來を謂ふなり。(二六)善男子、是の善問に因りて卽ち無上の法輪を轉ずることを得、(二七)能く(二八)十二因緣の大樹を枯らし、能く無邊生死の大海を度し、(二九)能く魔王波旬と共に戰ひ、能く波旬所立の勝幢を摧く。(三〇)善男子、我上に三種の病人を說くが如き、良醫、瞻病、好藥に値遇し、及以遇はざる、病悉く差ゆることを得とは、是の義云何。若得、不得とは定壽命を謂ふ。所以は何ん。是の人已に無量世中に於て三種の善を修す、上、中、下を謂ふ。是の如きの三種の善を修するを以ての故に定壽命を得。鬱單越の人壽命千

---

を破る故に錯亂といふ。

【二五】問難能答。六雙二人の善男子の中、この能問、能答い二人を正意とす。蓋し前の五雙は乃ち錯亂の爲めなり。然るに善問は是れ汝が身、善答は卽ち我なり、若し汝が精問なくば何ぞ我が善解を得ん。若し我が巧答なくば何ぞ汝い能問を得ん。此因緣を以て能問能答を以て正意となす。

【二六】次に五句を以て功用を歎ず。これに二段ありて初に生善を歎ず。

【二七】次に滅惡を歎ず。之に二段ありて初に能く惡を滅することを歎ず。

【二八】十二因緣等。十二因緣の枝條は森聳す、故に之を大樹に喩ふ。善問の人は能く此の樹を摧枯して華葉を生ぜしめず。またこの人は畏るべき生死海に於て驚懼を免れ彼岸に

年の如し。病に遇ふ有らば、若は良醫、好藥、瞻病を得、及以得ざる、悉く皆差ゆることを得。何を以ての故に。定命を得るが故なり。善男子、我が「若病人有りて良醫、好藥、瞻病に遇ふことを得ば、病除差することを得、若遇はざれば、則ち差ゆることを得ず」と說く所の如き、是の義云何。善男子、是の如きの人は壽命不定なり。命盡きずと雖も、九因緣の能く其の壽を夭する有り。何等をか九つと爲す。一つには食の不安を知りて而も反つて之を食す。二つには多食、三つには宿食未だ消せざるに而も復更に食す、四つには大小便利時節に隨はず、五つには病時醫教に隨はず、六つには瞻病の敎敕に隨はず、七つには強く耐へて吐かず、八つには夜行なり、夜行を以ての故に惡鬼之を打つ、九つには房室過差なり。是の緣を以ての故に。我病者若醫藥に遇はば病則ち差ゆべく、若遇はざれば則ち愈ゆべからずと說く。善男子、我上に、若は遇、不遇倶に差えずと說くが如きは、是の義云何。人有りて命盡くれば、若は遇、不遇悉く差ゆべからず。何を以ての故に。命盡くるを以ての故なり。是の義を以ての故に、我「病人、若は醫藥に遇ひ及以遇はざるも、悉く差ゆることを得ず」と說く。衆生も亦爾なり。菩提心を發す者、若は善友、諸佛菩薩に遇ひて深法を咨受し、若は之に遇はざるも皆悉く當に成ずべし。何を以ての故に。其能く菩提心を發すを以ての故なり。鬱單越の人の定壽命を得るが如し。我が所說の如く須陀洹より辟支佛に至りて、若

至る。

【二九】次に能く惑を摧くことを歎す。

【三〇】次に答に就き次第に三雙六問を答ふ。其中初に前三病人の兩問を答ふ。

善友、諸佛菩薩所說の深法を聞くときは、則ち阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。若諸佛菩薩に値遇して深法を說くを聞かざれば、則ち阿耨多羅三藐三菩提を發すこと能はずとは、不定命の九因緣を以て命則ち中天するが如く、彼の病人醫藥に値遇すれば病則ち差ゆることを得、若遇はざれば病則ち差えざるが如し。是の故に我「佛菩薩に遇ひて深法を說くを聞くときは、則ち能く心を發す、若値遇せざれば則ち發すこと能はず」と說く。我上に、「若は善友、諸佛菩薩に遇ひて深法を說くを聞き、若値遇せず俱に發すこと能はず」と說くが如き、是の義云何。善男子、一闡提の輩若善友、諸佛菩薩に遇ひて深法を說くを聞き、及以遇はざる、俱に一闡提の心を離るることを得ず。何を以ての故に。善法を斷ずるが故なり。一闡提の輩も亦阿耨多羅三藐三菩提を得ん。所以は何ん。若能く菩提の心を發せば、則ち復一闡提と名けざるなり。善男子、何の因緣を以ての故に、一闡提も阿耨多羅三藐三菩提を得んと說く。一闡提の輩實に阿耨多羅三藐三菩提を得ず、命盡くる者の良醫、好藥、瞻病に遇ふと雖も差ゆることを得ること能はず。何を以ての故に。命盡くるを以ての故なりの如し。〔三〕善男子、一闡は信と名け、提は不具と名く、信不具の故に一闡提と名く。佛性は信に非ず、衆生は具に非ず、不具を以ての故に云何ぞ斷ずべけん。一闡は善方便と名け、提は不具と名く、善方便を修すること具足せざるが故に一闡提と名く。佛性は是善方便を修するに非ず、衆生は具に非ず、不具を以ての故に云何ぞ斷ずべけん。

【三】次に初功德の兩問を答ふ之に二段ありて初に第三難を答ふ。

一闡は進と名け、提は不具と名く、進不具の故に一闡提と名く。佛性は進に非ず、衆生は具に非ず、不具を以ての故に云何ぞ斷ずべけん。一闡は念と名け、提は不具と名く、念不具の故に一闡提と名く。佛性は念に非ず、衆生は具に非ず、不具を以ての故に云何ぞ斷ずべけん。一闡は定と名け、提は不具と名く、定不具の故に一闡提と名く。佛性は定に非ず、衆生は具に非ず、不具を以ての故に云何ぞ斷ずべけん。一闡は慧と名け、提は不具と名く、慧不具の故に一闡提と名く。佛性は慧に非ず、衆生は具に非ず、不具を以ての故に云何ぞ斷ずべけん。一闡は無常善と名け、提は不具と名く、無常の善具足せざるを以ての故に一闡提と名く。佛性は是常、善に非ず不善に非ず。何を以ての故に。善法は要らず方便よりして得、而も是の佛性は方便得に非ず、是の故に善に非ず。何が故ぞ復不善に非ずと名くるや。能く善果を得るが故に。善果は即ち是阿耨多羅三藐三菩提なり。又善法とは生已得の故に。而も是の佛性は生已得に非ず、是の故に善に非ず。生得の諸善法を斷ずるを以ての故に一闡提と名く。(三)善男子、汝が言ふ所の如く、若一闡提佛性有らば、云何ぞ地獄の罪を遮せずとは、善男子、一闡提の中に佛性有ること無し。(三)善男子、譬へば王有りて箜篌の音を聞くに其の聲清妙なり。心即ち耽着し、喜樂愛念して情捨離すること無し。即ち大臣に告げたまはく、是の如きの妙音何れの處より

【三】次に第四難を答ふ。之に法、譬、合の三段ありて初に法。

【三】次に譬。この文の中王は衆生に、箜篌は衆生身に、聲は佛性に、大臣は佛菩薩善く之を說くに、斷絃は此身盡き命終るに、皮木[illegible]は五根四大に[illegible]、之を求むるに得難けれど[illegible]方便なる故に得る[illegible]

出づる。」大臣王に答ふ、「是の如きの妙音箜篌より出づ。」王復語りて言はく、「是の聲を持ち來れ。」爾の時に大臣卽ち箜篌を持ちて王の前に置きて是の言を作さく、「大王當に知るべし、此卽ち是聲」と。王箜篌に語らく、「聲を出せ聲を出せ」と。而も是の箜篌聲亦出でず。爾の時に大王卽ち其の絃を斷つに聲亦出でず。其の皮木を取りて悉く皆析裂し、其の聲を推求するに了に得る能はず。爾の時に大王卽ち大臣を瞋り、「云何ぞ乃ち是の如き妄語を作す。」大臣王に白さく、「夫聲を取る者は法是の如くならず。衆緣善巧方便を以て聲乃ち出づべき耳」の如く、（三四）衆生の佛性も亦復是の如し。住處有ること無く、善方便を以ての故に見るべきを得。見るべきを以ての故に阿耨多羅三藐三菩提を得。一闡提の輩は佛性を見ず、云何ぞ能く三惡道の罪を遮せん。善男子、若一闡提佛性有るを信せば、當に知るべし、是の人三趣に至らず、是亦一闡提と名けざるなり。自ら佛性有るを信せざるを以ての故に、卽ち三趣に墮す、三趣に墮するが故に一闡提と名く。（三五）善男子、汝の「若乳に酪性無ければ酪を出すべからず。尼拘陀子に五丈の性無ければ、則ち五丈の質有るべからず」と說く所の如き、愚癡の人は是の如きの說を作せども、智者は終に是の如きの言を發さず。何を以ての故に。性無きを以ての故なり。善男子、如其の乳の中に酪性有らば、復衆緣の力を假るべからざるなり。善男子、水乳雜へ臥して一月に至るも、終に酪と成らず。若一渧の（三六）頗求樹の汁を以てこれを中に投ずれば、卽便酪と成るが如し。若本

【三四】 次に合。

【三五】 次に第五、第六の兩難に定性有るべしと明すを答ふ。

【三六】 頗求（？）。

酪有らば、何が故ぞ緣を待ん。衆生の佛性も亦復是の如し。衆緣を假るが故に卽便見るべし。衆緣を假るが故に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得。若衆緣を待ちて然して後成せば、卽ち是性無し。性無きを以ての故に、能く阿耨多羅三藐三菩提を得。善男子、是の義を以ての故に、菩薩摩訶薩常に人の善を讃じて彼の缺を訟へず、質直心と名く。（三七）復次に善男子、云何が菩薩の質直心なるや。菩薩摩訶薩常に惡を犯さず。設ひ過失有るも、卽時に懺悔し、（三八）師同學に於て終に覆藏せず。（三九）慙愧自ら責めて敢て復作さず、輕罪の中に於て極重の想を生ず。若人詰問するに、答へて「實犯」と言ふ。復「是非、好不好と爲んや」と問ふに、答へて「不好」と言ふ。復「是の罪善、不善と爲んや」と問ふに、答へて「不善」と言ふ。復「是の罪是善果、不善果なるや」と問ふに、答へて「是の罪實に善果に非ず」と言ふ。又「是の罪誰の所造、將諸佛法僧の所作に非ずや」と問ふに、答へて「佛法僧に非ず、我が所作なり」と言ふ。乃ち是煩惱の備集する所なり、直心を以ての故に、佛性有るを信ず。佛性を信ずるが故に、則ち一闡提と名くることを得ず、直心を以ての故に佛弟子と名く。若衆生の衣服、飮食、臥具、醫藥、種各十萬を受くとも多と爲すに足らず。（四〇）是を菩薩の質直心と名く。

（四一）云何が菩薩、戒を修治する。菩薩摩訶薩禁戒を受持する、天に生ずるが爲ならず、恐怖の爲なら

【三七】次に懺悔を以て直心と爲すを明す。之に三段ありて初に正しく懺悔。
【三八】次に發露。
【三九】次に相續心を斷す。
【四〇】次に結。
【四一】次に第三に戒を釋す。之に二段ありて初に惡戒を離る。

す、乃至、狗戒、鷄戒、牛戒、雉戒を受けず。破戒を作さず、缺戒を作さず、瑕戒を作さず、雜戒を作さず、聲聞戒を作さず。(四二)菩薩摩訶薩の戒、尸羅波羅蜜戒を受持し、具足戒を得て憍慢を生ぜず。是を菩薩大涅槃を修して第三の戒を具すと名く。

(四三)云何が菩薩善友に親近する。菩薩摩訶薩常に衆生の爲に善道を歎說して惡道を說かず、惡道を善果報に非ずと說く。(四四)善男子、我が身即ち是一切衆生の眞善知識なり。是の故に能く富伽羅婆羅門の所有の邪見を斷ず。善男子、若衆生我に親近する者有らば、地獄に生ずべき因緣有りと雖も即ち天に生ずるを得、(四五)須那刹多等地獄に墮すべきも、我を見るを以ての故に、即ち地獄の因緣を斷除して色天に生ずるを得るが如し。(四六)舍利弗、目犍連等有りと雖も衆生の眞の善知識と名けず。何を以ての故に。一闡提の心を生ずる因緣の故なり。(四七)善男子、我昔波羅奈國に住す。時に舍利弗二弟子を教ふ。一りには白骨を觀ぜしめ、一りには息を數へしむ。多年を經歷すれども皆定を得ず。是の因緣を以て、即ち邪見を生じて「涅槃無漏の法無し。若其有らば我之を得べし。何を以ての故に。我能善く所受の戒を持つ

---

【四二】次に眞戒を[illegible]。

【四三】次に第四に善友に親近するを釋す。之に四段あり、其中初に是を明す。後に稱ひ稍〻知りて藥を識る、之を是となす。之に又二段ありて初に菩薩の是。

【四四】次に如來の是。次の中、富伽羅(Pudgala)。は舊に人又は衆生、新に數取趣と譯す。

【四五】須那刹多…天に生ずとは二解あり。一に上定を得ば必ず天に生ずるを得、今見佛の力を以て昔の修定を發す故に生ずるを得と、こは數の義なり。二に但だ下界の惑を伏せしめば散善有るに從つて皆天に生ずるを得と、こは論の義なり。

【四六】次に非を辨す。未だ機を識らざれば緣に稱ふ能はず、之を非となす。

が故なり」と言ふ。我爾の時に於て是の比丘の此の邪心を生ずるを見、舍利弗を喚びて之を訶責す、「汝善く敎へず。云何ぞ乃ち是の二弟子の爲に顚倒して法を說く。汝が二弟子其性各異なり。一りは(四八)澣衣を主り、一りは是金師なり。金師の子數息を敎ふべく、澣衣の人骨觀を敎ふべし。汝錯り敎ふるを以て是の二人をして惡邪を生ぜしむ。我爾の時に於て、是の二人の爲に應の如く法を說く。二人聞き已りて阿羅漢果を得たり。是の故に我一切衆生の眞善知識爲り、舍利弗、目犍連等に非ず。(四九)若衆生極重結有りて我に遇ふことを得しめば、我方便を以て卽ち爲に之を斷ず。我が弟難陀極重の欲有り、我種種の善巧方便を以て而も爲に之を除く。鴦掘魔羅重瞋恚有り、我を見るを以ての故に瞋恚卽ち斷ず。阿闍世王重愚癡有り、我を見るを以ての故に、癡心卽ち滅するが如く、(五〇)婆熙伽長者無量劫に於て、極重の煩惱を積集し成就す、我を見るを以ての故に、卽便斷滅するが如く、設ひ弊惡斯下の人有りとも、我に親近して弟子と作らば、是の因緣を以て一切の人天恭敬愛念せん。(五一)尸利毱多の邪見熾盛なる、我を見るに因るが故に邪見卽ち滅し、我を見るに因るが故に、地獄の因を斷じ生天の緣を作す。氣嘘旃陀羅の命終に垂んたる時、我を見るに因るが故に、還つて壽命を得るが如し。憍尸迦の狂心錯亂す、我を見るに因るが故に、

【四七】次に非を譏す。

【四八】澣衣金師等。澣衣の人は穢を厭ふ、故に背捨し易し。上の白骨を觀るとは卽ちこの背捨禪を指す。金師の子は善く調息を解す。故に其の習を其くるに宜し、上の息を數ふは卽ちこの數息根本禪を示す。

【四九】次に是を讚す。この中、鴦掘魔羅(Angulimalya)とは指鬘と譯す。舍衛國の人。

【五〇】婆熙伽(?)

【五一】尸利毱多(Śrīgupta)は吉護と譯す。王舍城の人。

還つて本心を得るが如し。瘦瞿曇彌の屠家の子常に惡業を作す、我を見るを以ての故に、即便捨離するが如し。闡提比丘の我を見るに因るが故に、寧ろ身命を捨つとも禁戒を毀ざること、草繫比丘の如くなるが如し。是の義を以ての故に、阿難比丘半梵行を善知識と名くと說く。我は爾らず、具足梵行を乃ち善知識と名くと言ふ。是を菩薩大涅槃を修して第四の親善知識を具足すと名く。

(五二)云何が菩薩摩訶薩多聞を具足する。菩薩大涅槃の爲に十二部經を書寫、讀誦し、分別、解說す。是を菩薩多聞を具足すると名く。(五三)十一部經を除きて、唯毗佛略を受持、讀誦し、書寫、解說する、亦菩薩の具足多聞と名く。(五四)十二部經を除きて、若能く是の大涅槃微妙の經典を受持し、書寫、讀誦し、分別、解說する、是を菩薩多聞を具足すと名く。是の經典の具足全體を除きて、若能く一つの四句の偈を受持し、(五五)復是の偈を除きて、若能く如來常住性の變易無きを受持せば、是を菩薩の具足多聞と名く。(五六)復是の事を除きて、若如來常に說法せずと知るも、亦菩薩多聞を具足すと名く。何を以ての故に。法性無きが故に。如來一切諸法を說くと雖も、常に說く所無し。是を菩薩の大涅槃を修して第五の具足多聞を成就すと名く。

(五七)善男子、若善男子、善女人有りて、大涅槃の爲に、是の如きの五事を具足し、成就せんとして、

【五二】次に第五に多聞を釋す。之に五段あり、此中前の一は文言に就き、後の四は義理に就く、今初に十二部經に約す。
【五三】次に毗佛略に約す。毗佛略(Vaipulya)は、方廣經と譯す。方正廣大の經典を指す、大乘の華嚴法華等の諸經是なり。
【五四】次に大涅槃及四句に約す。
【五五】次に常住に約す。
【五六】次に寂默に約す。
【五七】是より第三に稱歎。之に二段あり、其中初は法說歎。之に又二段ありて初は三章門。

作し難きを能く作し、忍び難きを能く忍び、施し難きを能く施す。(五八)云何が菩薩難作を能く作す。若し人一つの胡麻を食して阿耨多羅三藐三菩提を得る者有りと聞かば、是の語を信ずるが故に、乃至無量阿僧祇劫常に一麻を食す。若し火に入りて阿耨多羅三藐三菩提を得る者を聞かば、無量劫に於て阿鼻獄に在りて熾なる火聚に入る。是を菩薩の難作能作と名く。云何が菩薩難忍を能く忍ぶ。若し苦を手杖、刀石をもつて斫打するの因縁に受くれば大涅槃を得と聞き、即ち無量阿僧祇劫に於て、身具さに之を受けて以て苦と為さず。是を菩薩の難忍能忍と名く。云何が菩薩難施を能く施す。若し能く國城、妻子、頭目、髄腦を以て人に惠施すれば、阿耨多羅三藐三菩提を得といふを聞き、即ち無量阿僧祇劫に於て其の所有の國城、妻子、頭目、髄腦を以て人に惠施す。是を菩薩の難施能施と名く。(五九)菩薩復作し難きを能く作すと雖も、終に念言せず、「是我が作す所」と。難忍、難施も亦復是の如し。(六〇)善男子、譬へば父母に唯一子有りて之を愛すること甚重なり。好衣、上妙の甘膳を以て、時に隨ひて將養して乏しき所無からしむ。設ひ其の子をして父母の所に於て、輕慢心を起して惡口罵辱せしむとも、父母愛するが故に瞋恨を生ぜず。亦我れ「是の兒に衣服、飲食を與ふ」と念言せざるが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如し、諸の衆生を視ること猶一子の如し。(六一)若し子病に遇はば、父母も亦病み、爲に醫藥を求め、勤めて救療を加ふ。病既に差え已

【五八】次に[illegible]し、之に二段あり て初に三事を釋す。
【五九】次に著を存せず。
【六〇】次に譬説類、之に三段あり、其中初に[illegible]に[illegible]し 之に[illegible]、合の二段あり。
【六一】次に難忍難作の行に[illegible]ふ 之に[illegible]、合の二段あり。

りて、終に念を生ぜず、「我是の見の爲に病苦を療治す」と。菩薩も亦爾なり、諸の衆生煩惱の病に纏ふを見て、愛念心を生じて而も爲に法を說く。法を聞くを以ての故に諸の煩惱斷ず、煩惱斷じ已りて、終に「我衆生の爲に諸の煩惱を斷ず」と念言せず。若此の念を生ぜば、終に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得ず。唯是の念を作す、「一衆生の我が爲に說法して煩惱を斷ぜしむる無し」と。(六二)菩薩摩訶薩諸の衆生に於て不瞋、不喜なり。何を以ての故に。善能く空三昧を修習するが故なり。菩薩若空三昧を修すれば、當に誰の所に於てか瞋を生じ喜を生ずべき。善男子、譬へば山林の猛火に焚かれ、若は人に斫伐せられ、或は水に漂はされんに、而も是の林木當に誰の所に於てか瞋を生じ喜を生ずべきが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如し、諸の衆生に於て瞋無く喜無し。何を以ての故に。空三昧を修するが故なり。」

(六三)爾の時に光明徧照高貴德王菩薩佛に白して言さく、『世尊、一切の諸法は性自ら空なりや、空をもつて空ずるが故に空なりや。(六四)若性自ら空ならば、空を修して然して後空を見るべからず。云何ぞ如來空を修するを以て空を見ると言ふや。若性自ら空ならざれば、復空を修すと雖も空ならしむること能はず。(六五)善男子、一切の諸法は性本自ら空なり。(六六)何を以ての故に。一切の諸法は性得べからざるが故なり。善男子、色の性は不可得なり。云何が色性なる。色とは地、水、火、風に非ず、

【六二】次に無著の爲に答ふ。之に法、譬、合の三段あり。
【六三】第二に論義。兩番の問答。初の問に二段、先づ兩定。
【六四】次に兩難。
【六五】次に答。之に二段、初に初定。之に又三段、先づ略標。
【六六】次に廣釋。

地、水、火、風を離れず、青、黄、赤、白に非ず、青、黄、赤、白を離れず。有に非ず無に非ず。云何ぞ當に色自性有りと言ふべき。性不可得を以ての故に說きて空と爲す。一切の諸法も亦復是の如し。（六七）相似し相續するを以ての故に、凡夫見已りて、說きて「諸の法性空寂ならず」と言ふ。（六八）菩薩摩訶薩五事を具足す、是の故に法の性本空寂と見る。（六九）善男子、若沙門及び婆羅門一切の法性空ならずと見る者有らば、當に知るべし、是の人は是沙門に非ず、婆羅門に非ず。般若波羅蜜を修習することを得ず、大般涅槃に入ることを得ず、現に諸佛菩薩を見ることを得ず、是魔の眷屬なり。（七〇）善男子、一切の諸法は性本自ら空なり、亦菩薩空を修習するに因るが故に諸法の空を見る。（七一）善男子、一切の法性無常の故に滅能く之を滅す、若無常に非ずんば滅滅すること能はず。有爲の法は生相有るが故に生能く之を生ず、滅相有るが故に滅能く之を滅す。一切の諸法は苦相有るが故に苦能く苦ならしむるが如し。（七二）善男子、鹽は性鹹、能く異物を鹹くし、石蜜は性甘、能く異物を甘くし、苦酒は性酢、能く異物を酢くし、薑木は性辛、能く異物を辛くし、（七三）訶梨勒は苦、能く異物を苦くし、（七四）菴羅果は淡、能く異物を淡くす。赤

【六七】次に得失を擧げて結を成す。之に三段ありて初に凡夫の失。

【六八】次に菩薩の得。

【六九】次に更に凡夫の失を呵す。

【七〇】次に第二の定を答ふ。之に法、譬、合の三段ありて初に法。

【七一】次に譬。之に二段ありて初に内法を擧げて譬と爲す。

【七二】次に外法を擧げて譬と爲す。

【七三】訶梨勒 Harītakī [illegible]

【七四】菴羅 [illegible]

【七五】次に合。

の性は能く害す、異物をして害せしめ、甘露の性は人をして死せざらしむ、若異物に合すれば亦能く死せざらしむるが如く、(七五)菩薩の空を修するも亦復是の如し、空を修するを以ての故に、一切法性の皆空寂なるを見る。」

(七六)光明徧照高貴徳王菩薩復是の言を作さく、「世尊、若空能く鹹に非ざるを鹹と作さしめ、空三昧を修するに、若是の如くならば、當に知るべし、是定んで善に非ず、妙に非ず、(七七)其の性顛倒す。(七八)若空三昧、唯空を見る者、(七九)空は是無法なり、何の見る所と爲さん。」(八〇)「善男子、是の(八一)空三昧、不空の法を見て能く空寂ならしむ、然も顛倒に非ず。鹽の非鹹をして鹹と作すが如し。是の空三昧も亦復是の如し、不空を空と作す。(八二)善男子、貪は是有性是空性に非ず。貪若是空ならば、衆生是の因緣を以て地獄に墮すべからず。若地獄に墮すれば、云何ぞ貪性當に是空なるべけんや。(八三)善男子、色性は是有なり。何等か是性なる。所謂顛倒なり。顛倒を以ての故に衆生貪を生ず。若是の(八四)色性顛倒に非ざれば、云何ぞ能く衆生をして貪を生ぜしむる。貪を生ずるを以ての故に、當に知るべし、色性は是有ならざるに非ざることを。(八五)是の義を以ての故に、空三昧を修する、顛倒に非

---

【七六】次に第二番の意義。之に問、答の二段あり。問に又二段ありて初に空を觀ずる是れ顛倒なるを問ふ。

【七七】其性顛倒とは法は本來空ならず、而も空を修して空を見ば、見は本來に於て空なるなり、これ顛倒に非ずして何ぞ。

【七八】次に空觀に見る無法、何の見る所ぞと問ふ。

【七九】空は是無法等。空は見る可くに倒るに非ず、空し見る可らざれば見ると言ふ可らず。

【八〇】次に佛の答兩問。之に二章あり。その中初の問を答ふる中、又三段ありて初に總じて標す。

【八一】空三昧不空等。不定の法を見て能く其れをなして空ならしむ、而かも顛倒に非ず。但だ理に就て論ずれば空に非ざ

ざるなり。(八六)善男子、一切の凡夫若し女人を見ば即ち女相を生ず。菩薩は爾らず、女人を見ると雖も女相を生ぜず。相を生ぜざるを以て貪則ち生ぜず。貪生ぜざるが故に顛倒に非ざるなり。世間の人女有るを見るを以ての故に、菩薩隨つて說きて「女人有り」と言ふ。若し男を見る時說きて「是女」と言はば、則ち是顛倒なり。是の故に我(八七)闍提が爲に說きて言はく、「汝婆羅門、若し晝を以て夜と爲さば是れ即ち顛倒なり、夜を以て晝と爲すも是亦顛倒なり。晝を晝相と爲し夜を夜相と爲す、云何ぞ顛倒ならん。」(八八)善男子、一切の菩薩九地に住せば、法の性有るを見、是の見を以ての故に佛性を見ず。若し佛性を見ば則ち復一切法の性を見ず。是の如き(八九)空三昧を修するを以ての故に、法の性を見ず。見ざるを以ての故に則ち佛性を見る。(九〇)諸佛菩薩に二種の說有り。一つには有性、二つには無性なり。衆生の爲の故に法の(九一)性有りと說き、諸の賢聖の爲に法の性無しと說く。不空の者の法空を見しめん爲の故に、空三昧を修して空を見ることを得しむ。無法性の者も亦空を修するが故に空なり。是の義を以ての故に、空を修して空を見る。(九二)善男子、汝空を見ば空は是無法、何の所見と爲さんと言ふは、(九三)善男子、是の

[illegible]

【八三】次に色性に於て是有を明す。

【八四】[illegible]貪著せん、今非空を空とならしむと言ふは是の法皆空なればなり。

【八五】[illegible]

【八六】[illegible]す。

【八七】[illegible]

如し。是の如く、菩薩摩訶薩は見る所無し。無所見とは即ち所有無し、無所有とは即ち一切法なり。菩薩摩訶薩大涅槃を修すれば、一切法に於て悉く見る所無し。若し見る有る者は佛性を見ず、般若波羅蜜を修習すること能はず、大般涅槃に入ることを得ず。是の故に菩薩は一切法性所有無きを見て、善男子、菩薩但見三昧に因りて觀じて空を見たるのみにあらざるなり、般若波羅蜜も亦空、禪波羅蜜も亦空、毘梨耶波羅蜜も亦空、羼提波羅蜜も亦空、尸波羅蜜も亦空、檀波羅蜜も亦空、色も亦空、眼も亦空、識も亦空、如來も亦空、大般涅槃も亦空なり。是の故に菩薩一切法皆悉く是空と見る。

【九三】是の故に我迦毘羅城に在りし、阿難に告げて言はく、「汝愁惱し悲號啼哭すること莫れ」と。阿難即ち言さく、「如來世尊、我今親屬悉く皆殄滅す、云何ぞ當に悲泣せざることを得べきや。如來我と倶に此の城に生れて倶に釋種の親戚眷屬を同じうす、云何ぞ如來獨り愁惱せず、光顏更に顯なる」と。善男子、我復告げて言はく、「阿難、汝は迦毘羅眞實是有と見、我は空寂にして悉く所有無しと見る。【九四】汝は釋種悉く是れ親戚と見、我は空を修するが故に悉く見る所無し。是の因緣を以て、汝は愁苦を生じ、我が身は容顏益々更に

---

【八八】[illegible]

【八九】[illegible]●●●●を修す等。總じて[illegible]

[illegible]法の有性を見る。佛に此[illegible]れば究竟空に歸すと雖も亦方[illegible]に空あり。

【九〇】次に重ねて結す。

【九一】性あり性無し等。佛時ありて法は有なりと云ひ、又無なりと云ふ、こは緣の爲なり。而も今[illegible]說いて以て[illegible]となす。

【九二】次に第二に後の問を[illegible]之に二段ありて初に問を[illegible]す

【九三】次に正答。之に二段ありて[illegible]に正答。

【九四】次に昔を引いて[illegible]

【九五】是より第三に結。

【九六】是より第十[illegible]

光顯なり。諸佛菩薩是の如きの空三昧を修習するが故に愁惱を生ぜず。(九五)是を菩薩の大涅槃微妙の經典を修して、第九の功德を成就し具足すと名く。

(九六)復次に善男子、云何が菩薩大涅槃微妙の經典を修して最後の第十の功德を具足する。(九七)善男子、菩薩三十七品を修習し大涅槃の常、樂、我、淨に入り、諸の衆生の爲に大涅槃經を分別解說して佛性を顯示す。(九八)若須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、菩薩、是の語を信ずる者は、悉く大般涅槃に入ることを得。若不信の者は、生死に輪囘す。」

(九九)佛の時に光明遍照高貴德王菩薩佛に白して言さく、『世尊、何等の衆生か是の經中に於て誹謗を生ぜざる。』(一〇〇)善男子、我が涅槃の後聲聞の弟子有り。愚癡、破戒、喜んで鬪諍を生ず。十二部經を捨て、種種外道の典籍を讀誦し、文頌手筆し、一切不淨の物を受畜して是佛の聽したまふと言ふ。(一〇一)是の如きの人妙栴檀を以て凡木に貿易し、金を以て鍮石に易へ、銀を白鑞に易へ、絹を𣰽毼に易へ、甘露味を以て惡毒に易ふ。(一〇二)云何が栴檀を凡木に貿易する、我が弟子供養の爲の故に、諸の白衣に向ひて經法を演說す、白衣は高きに處り、比丘は下きに在り。兼ねて種種の肴膳飲食

---

す。之に標、釋の二段ありて初に標。

【九七】次に釋。これに二段あり、其中初に功德を明す。之に又二段ありて初に道品涅槃に入ることを明す。三十七品は即ち道品、八大涅槃は即ち中道、爲衆生分別は俗諦。亦た一心三諦にして始終具足ならす。

【九八】次に得失を簡ぶ。

【九九】次に請疑。之に問、答あり。二段ありて初に問。

【一〇〇】次に答。これに二段あり、初中初に惡人を擧げて惡を顯し、之に又三段ありて初に破戒。

【一〇一】次に正譬。

【一〇二】次に亦た正譬を合す。之に前、後の二ありて初に前合。

を以て之に供給するに、猶背て聽かざるが如し。是を栴檀を凡木に貿易すと名く。云何が金を以て鍮石に貿易す。鍮石は色、聲、香、味、觸を譬へ、金は以て戒を譬ふ。我が諸の弟子、色の因緣を以て受くる所の戒を破す。是を金を以て鍮石に貿易すと名く。云何が銀を以て白鑞に易ふる。銀を十善に譬へ、鑞を十惡に譬ふ。我が諸の弟子十善を放捨して十惡法を行ず。是を銀を以て白鑞に貿易すと名く。云何が絹を以て氀毼に貿易する。氀毼は以て無慚無愧を譬へ、絹は慚愧を譬ふ。我が諸の弟子慚愧を放捨し無慚愧を習ふ。是を絹を以て氀毼に貿易すと名く。云何が甘露を毒藥に貿易する。毒藥を以て種種の供養を譬へ、甘露を以て諸の無漏法を譬ふ。我が諸の弟子、利養の爲の故に諸の白衣に向ひて苦ろに自ら譽讚して無漏を得と言ふ。是を甘露を毒藥に貿易すと名く。【一〇四】是の如き等の惡比丘を以ての故に、是の大涅槃微妙の經典は閻浮提に廣行流布せんも、是の時に當りて諸の弟子の是の經を受持、讀誦、書寫し、演說、流布する有らば、當に是の如き諸の惡比丘に殺害せらるべし。時に惡比丘、相與に聚會して共に嚴制を立つ、若大涅槃經を受持し、書寫、讀誦し、分別して說く有らば、一切共住、共坐して談論語言することを得ず。何を以ての故に、涅槃經は佛の所說に非ず、邪見の所造なり。邪見の人は卽ち是六師なり、六師の所說は佛の經典に非ず。所以は何ん。一切の諸佛は悉く諸法無常、無我、無樂、無淨と說く。若諸法常、樂、我、淨と言はば、云何ぞ當に是佛所說の經なるべき。諸佛菩薩は諸の比丘に種種の物を畜ふることを聽

【一〇三】次に總合。

す、六師の所說は弟子に一切の物を畜ふるを聽さず。是の如きの義、云何ぞ當に是佛の所說なるべき。諸佛菩薩は弟子に牛の五味及以食肉を斷ずることを制せず、六師は五種の牛味、及以脂血を食することを聽さず。若是を斷ずれば云何ぞ當に是佛の正典なるべき。諸佛菩薩は三乘を演說す。而るを是の經の中、純ら一乘を說く、大涅槃を謂ふ。此の如きの言、云何ぞ當に是佛の正典なるべき。諸佛畢竟涅槃に入る。是の經に、佛常、樂、我、淨、涅槃に入らずと言ふ。是の經は十二部の數に在らず。卽ち是魔說なり、是佛說に非ず。善男子、是の如きの人は我が弟子と雖も是の涅槃經を信順すること能はず。(一〇四)善男子、爾の時に當りて、若衆生の此の經典の乃至半句を信ずる有らば、當に知るべし、是の人は眞に我が弟子なり。是の如きの信に因りて、卽ち佛性を見、涅槃に入る。」

(一〇五)爾の時に光明遍照高貴德王菩薩佛に白して言さく、「世尊、善い哉善い哉、如來今日能善く大涅槃經を開示す。世尊、我是の事に因りて卽ち大涅槃經の一句半句を悟解することを得。一句、半句に至るを解するを以ての故に、少しく佛性を見ること佛の所說の如し。我も亦當に大涅槃に入ることを得べし。(一〇六)是を菩薩大涅槃微妙の經典を修して、第十の功德を具足し成就すと名く。」

【一〇四】次に善人を擧げて勸を明す。
【一〇五】是より第二に領解。
【一〇六】是より第三に總じて結す。

# 卷の第二十五

## 師子吼菩薩品第二十三の一

（一）爾の時に佛一切の大衆に告げたまはく、『諸の善男子、汝等若し有佛無佛、有法無法、有僧無僧、有苦無苦、有集無集、有滅無滅、有道無道、有實無實、有我無我、有苦無苦、有淨無淨、有常無常、有乘無乘、有性無性、有衆生無衆生、有有無有、有眞無眞、有因無因、有果無果、有作無作、有業無業、有報無報を疑はば、（二）今汝が問を恣にす。吾當に汝が爲に分別して解說すべし。（三）善男子、我實に若は天、若は人、若は魔、若は梵、若は沙門、若は婆羅門來りて我に問ふ有らんに、答ふること能はざるを見ず。』

（四）爾の時に會中に一りの菩薩有りて師子吼と名く、即ち座より起ちて容を斂め服を整へ、前みて佛足を禮し、長跪叉手して（五）佛に白して言さく、『世尊、我適問はんと欲す、如來大慈復聽許を垂れたまへ。』

（六）爾の時に佛諸の大衆に告げて言はく、『諸の善男子、汝等今當に是の

【一】是より章門に師子吼品の義を問答す。之に問佛性、歎經の二段ありて初に佛性を問す。之に佛性、中道、涅槃、修道を明すの四段あり、之が中初の佛性を問ふ中に又問、答の二段ありて初に問の文。之に又四段ありて初に問を勸む。其中に又二段ありて初に諸の法門。之に六門あり、一に二諦、二に四諦、三に實諦、四に四德、五に五佛性、六に因果是なり。

【二】次に正勸。之に二段ありて初に正しく勸む。

【三】次に教く勸む。

菩薩に於て、深く恭敬を生じて尊重讃歎すべし。種種の香華、伎樂、瓔珞、幡蓋、衣服、飲食、臥具、醫藥、房舍、殿堂を以て之を供養し、來を迎へ、去を送るべし。(七)所以は何ん、是の菩薩已に過去の諸佛に於て、深く善根を種ゑ福德成就す。(八)是の故に今、我が前に於て師子吼せんと欲す。(九)善男子、師子王の如し。自ら(一〇)身力を知り、牙齒鋒芒、四足地に據し、巖穴に安住し、尾を震ひて聲を出す。若し能く是の如きの諸相を具する有らば當に知るべし、是れ則ち能く師子吼す。眞の師子王、(一一)晨朝に(一二)穴を出でて(一三)頻伸欠呿し、四向に顧望し、聲を發して震吼す。十一事の爲にす。何等か十一なる。一つには實は師子に非ずして、詐りて師子と作るを壞せんと欲するが爲の故に、二つには自の身力を試みんと欲するが爲の故に、三つには住處をして淨からしめんと欲するが爲の故に、四つには諸子に處所を知るが爲の故に、五つには羣輩怖心無きが爲の故に、六つには眠る者覺寤を得るが爲の故に、七つには一切放逸の諸獸放逸ならざるが爲の故に、八つには諸獸來り依附せんが爲の故に、九つには大香象を調へんと欲するが爲の故に、十には諸の子息を教へ告ぐるが爲の故に、十一には自の眷屬を

【四】第二に問を求む。之に二段あり。[illegible]
【五】次に正しく言を發す。
【六】第三に問を許す。之に二段あり、其中初に供養を勸む。之に又三段ありて初に正しく勸む。文の中、意業の故に尊重、口業の故に讃歎、身業の故に迎送なり。
【七】次に釋。これに法、譬、合の三段あり。初の法に又二段あり[illegible]
【八】次に現在の[illegible]。
【九】次に譬。これに二段あり、其中初に[illegible]を作す。之に又二段あり。其中初に[illegible]身の[illegible]、[illegible]二段あり。
【一〇】身力を知り等。身は六度に、力は十力に、牙齒は煩惱を斷ずる智慧に、四足は四如意に、巖は尸羅に、巖穴は禪定境に、尾は大悲[illegible]する事

莊嚴せんと欲するが故なり。(一四)一切の禽獸師子の吼ゆるを聞き、(一五)水性の屬は深淵に潛沒し、陸行の類は窟穴に藏伏し、飛者は墮落し、諸大香象は怖走失糞す。(一六)諸の善男子、彼の野干の師子を逐うて百年に至ると雖も、終に師子の吼を作すこと能はざるが如きなり。(一七)若師子の子、始めて三年を滿ずれば、則ち能く哮吼すること師子王の如し。(一八)善男子、如來正覺智慧の牙爪、四如意の足、六波羅蜜滿足の身、十力雄猛、大悲を尾と爲し、四禪の清淨窟宅に安住して、諸の衆生の爲に師子吼して魔軍を摧破し、衆に十力を示して佛の行處を開く。諸の邪見の爲に歸依所と作り、生死怖畏の衆を安撫し、無明睡眠の衆生を覺寤し、惡法を行ずる者、爲に悔心を作し、邪見の一切衆生に開示して、六師の師子吼に非ざるを知らしむるが故に、(一九)富蘭那等の憍慢心を破するが故に、二乘をして悔心を生ぜしむるが爲の故に、五住の諸の菩薩等を敎へて大力心を生ずるが爲の故に、正見の四部の衆をして、彼の邪見四部の徒黨に於て怖畏を生ぜざらしむるが爲の故なり。(二〇)聖行、梵行、天行の窟宅より頻伸して出づ。彼の諸の衆生等をして憍慢を破せしめんと欲するが爲の故に、欠呿は諸の衆生等をして善法

---



尾の下垂の如ければ大悲に、聲は八音の法に喩ふ。

【一一】次に[illegible]身の方便を明す。之に三段ありて初に正應。

【一二】次に法身より起る。

【一三】頻伸・欠呿等。頻伸を滅惡に、欠呿を生善に、四望を四無礙に、[illegible]辯を説法に喩ふ。

【一四】次に衆生の得道。

【一五】水性の屬等。水性は凡夫の愛染に、陸行は二乘の高原に、飛者は衆魔を降すに、香象は外道を制するに譬ふ。

【一六】第二に菩薩の爲に譬を作す。之に二段ありて初に非の文。

【一七】次に是の文。

【一八】次に合。之に二段あり、一中初に佛の譬を合す。之に又二段ありて初に妙本衆生の爲にするを合す。

【一九】富蘭那。具さに富蘭那迦葉波（Pūrana kāsyapa）なり。

を生せしむるが爲の故に、四向に顧望するは衆生をして四無閡を得しむるが爲の故に、四足地に據るは、衆生をして尸波羅蜜を具足し安住せしむるが爲の故に、故に師子吼す。(二〇)師子吼とは、決定して一切衆生悉く佛性有り、如來常住にして變易有ること無しと說くを名く。(二一)善男子、聲聞、緣覺は復如來世尊に隨逐すること無量百千阿僧祇劫と雖も、而も亦師子吼を作すこと能はず。(二二)十住の菩薩若能く是の三行處を修行すれば、當に知るべし、是則ち能く師子吼す。(二三)諸の善男子、是の師子吼菩薩、今是の如く大師子吼せんと欲す。是の故に汝等應當に深心に供養、恭敬し、尊重、讚歎すべし。』

(二五)爾の時に世尊、師子吼菩薩摩訶薩に告げて言はく、『善男子、汝若問はんと欲せば、今意に隨ふべし。』(二六)師子吼菩薩摩訶薩佛に白して言さく、『世尊、云何が佛性と爲す。何の義を以ての故に、名けて佛性と爲す。何が故ぞ復常、樂、我、淨と名くる。(二七)若一切衆生佛性有らば、何が故ぞ一切衆生の所有の佛性を見ざる。(二八)十住の菩薩何等の法に住して了了に見ざる。佛何の法に住して而も了了に見たまふ。(二九)十住の菩薩何等の眼を以て了了に見ざる。佛何の眼を以て而も了了に見たまふや。』



---

富蘭那には究竟と譯す、其の本名なり。迦葉は飲光又は護光と譯す、姓氏の名なり。六師外道中の常見外道なり。

【二〇】第二に正應を合す。之に二段ありて初に法身より起るを合す。

【二一】次に前の衆生の得益を合す。

【二二】次に菩薩の譬を合す。之に二段ありて初に非の文を合す。

【二三】次に是の文を合す。

【二四】第三に供養を勸むるを結す。

【二五】次に正しく問を許す。

【二六】第四に正しく問ふ。凡て六問を發す。但し兩意を含む、前の三問は法を問ひ、後の三問は人を問ふ。前の問に直に佛性體、分佛性義、究竟佛性名を問ふの三段あり。

【二七】次に問人に二段ありて初

(二〇)佛の言はく、『善い哉善い哉善男子、若人有りて能く法の爲に咨啓すれは、則ち二種の莊嚴を具足すと爲す。一つには智慧、二つには福德なり。(二一)若菩薩是の如きの二莊嚴を具足する者有らば、則ち佛性を知り、亦復名けて佛性と爲すを解知す。乃至能く十住の菩薩何の眼を以て見、諸佛世尊何の眼を以て見たまふを知る。』(二二)師子吼菩薩の言さく、『世尊、云何が名けて智慧莊嚴と爲し、云何が名けて福德莊嚴と爲す。』(二三)『善男子、慧莊嚴とは、一地より乃至十地を謂ひ、福德莊嚴とは、檀波羅蜜乃至般若を謂ふ、般若波羅蜜に非ず。復次に善男子、慧莊嚴とは所謂諸佛菩薩なり。福德莊嚴とは聲聞、緣覺、九住の菩薩を謂ふ。復次に善男子、福德莊嚴は有爲、有漏、有有、有果報、有閡、非常、是凡夫法なり。慧莊嚴とは無爲、無漏、無有、無果報、無閡、常住なり。(二四)善男子、汝今是の二莊嚴を具足す、是の故に能く甚深の妙義を問ふ。我も亦是の二莊嚴を具足し、能く是の義を答へん。』

(二五)師子吼菩薩摩訶薩の言さく、『世尊、若菩薩是の如きの二莊嚴を具足する有らば、則ち一種、二種を問ふべからず。云何ぞ世尊、說きて能く一種、二種を答ふと言ふ。(二六)所以は何ん。一切諸法は一二種無し。(二七)一種一二

---

に不見[illegible]の人を問ふ、

【一八】次に見者の人を問ふ。之に二段ありて初に何の法に了、不了有るかを問ふ。

【一九】次に何の眼にて了、不了有るかを問ふ。

【二〇】是より佛答。之に二段あり、其中初に問を歎ず。之に又二段あり、その中初に歎。之に又二段ありて初に二莊嚴の歎。

【二一】次に六義を備ふる歎。

【二二】第二に前義。之に兩番の問答あり。其中初の問。

【二三】次に答。之に二段ありて初に前の三に勝劣の義に就て釋す。

【二四】初に後の一は平等に就て[illegible]。

【二五】次に第二番の問答。其中問に二段ありて初に正難の文。

【二六】次に釋難。

種は是凡夫の相なり。』(三八)佛の言はく、『善男子、若菩薩二種の莊嚴無き有らば、則ち一種、二種を知ること能はず。若し菩薩二莊嚴を具する有らば、則ち能く一種二種を解知す。(三九)若諸法一二無しと言はば、是の義然らず。何を以ての故に。若一二無ければ、云何ぞ一切諸法一無く二無しと說くことを得ん。(四〇)善男子、若(四一)一二は是凡夫の相と言はば、是乃ち名けて十住の菩薩と爲す、凡夫に非ざるなり。何を以ての故に。一とは名けて涅槃と爲し、二とは名けて生死と爲す。(四二)何が故ぞ一とは名けて涅槃と爲す。其の常なるを以ての故なり。何が故ぞ二とは名けて生死と爲す。愛無明の故なり。常涅槃とは凡夫の相に非ず、生死二とは亦凡夫の相に非ず。是の義を以ての故に、二莊嚴を具すれば能く問ひ能く答ふ。(四三)善男子、汝云何が佛性と爲すと問はば、諦かに聽き諦かに聽け、吾當に汝が爲に分別し、解說すべし。(四四)善男子、佛性とは(四五)名けて第一義空と爲し、第一義空は(四六)名けて智慧と爲す。(四七)言ふ所の空とは空と不空とを見ず。(四八)智とは(四九)空及與不空、常と無常と、苦と樂と、我と無我とを見る。空とは一切の生死なり、不空とは大涅槃を謂ふ。乃至無我とは即ち是生死なり、我とは大

【三七】次に結過。
【三八】次に佛答。之に三段あり[illegible]に正義を[illegible]。
【三九】次に[illegible]。
【四〇】次に結過を[illegible]、之に二段ありて初に兩[illegible]。
【四一】一二は是れ凡夫の相、[illegible]
【四二】次に解釋。
【四三】是より第二に正しく五問を答へ兼て一問を答ふ。[illegible]を答ふるに又二、初に問に[illegible]して[illegible]を[illegible]む。
【四四】次に正しく初問を答ふ。之に二段あり、其中[illegible]に佛性の體を明す。之に三段ありて

涅槃を謂ふ。一切空を見て不空を見ざれば中道と名けず、乃至一切無我を見て我を見ざれば、中道と名けず。(五〇)中道とは名けて佛性と爲す。是の義を以ての故に、佛性は常恆、變易有ること無し。(五一)無明覆ふが故に諸の衆生をして見ることを得ること能はざらしむ。聲聞、緣覺一切空を見て不空を見ず、乃至一切無我を見て我を見ず。是の義を以ての故に第一義空を得ず。第一義空を得ざるが故に中道を行ぜず、中道無きが故に佛性を見ず。

(五二)善男子、中道を見る者凡そ三種有り。一つには定樂行、二つには定苦行、三つには苦樂行なり。定樂行とは所謂菩薩摩訶薩一切の諸の衆生を憐愍するが故に、復阿鼻地獄に處在すと雖も三禪の樂の如し。定苦行とは諸の凡夫を謂ひ、苦樂行とは聲聞、緣覺を謂ふ。聲聞、緣覺苦樂を行じて中道の想を作す、是の義を以ての故に、佛性有りと雖も而も見ること能はず。(五三)善男子、汝の言ふ所の如き、何の義を以ての故に佛性と名くとは、(五四)善男子、(五五)佛性とは即ち是一切諸佛の阿耨多羅三藐三菩提中道の種子なり。

(五六)復次に善男子、道に三種有り。(五七)下、上、中を謂ふ。(五八)下とは梵天無常、謬りて是常と見る、上とは生死無常、謬りて是常と見る、三寶是

---

初に名を釋す。

【四五】名けて第一義空と爲す。智慧は是れ有、空に即して有、有に即して空。空なれば則ち三諦皆空、一空一切空なり。乃ち是を第一義空となす。

【四六】名けて智慧と爲す。三諦皆照す、一切一切照、乃ち是れ智慧なり。知るべし、空有、非空、非有、三に即して一、一に即して三。即ち三に非ず、一に非ず。空に即するが故に一切の相無き、智に即するが故に一切の境を照すことを。之を第一義空と爲し、智慧と爲し、佛性となす。

【四七】次に相を釋す。之に二段において初に空を釋す。

【四八】次に智を釋す。

【四九】空及與不空、空を見るは是れ邊を見る、不空を見るは是れ中を見る、邊を見中を見るを之を第一義・智慧と爲す。是

常、横に無常と計す。何が故ぞ上と名づくる。能く最上の阿耨多羅三藐三菩提を得るが故なり。中とは第一義空と名く、無常を無常と見、常を常と見る。第一義空を名けて下と爲さず。何を以ての故に。一切の凡夫得ざる所なるが故に。名けて上と爲さず。何を以ての故に。卽ち是上なるが故なり。諸佛菩薩所修の道、不上、不下なり。是の義を以ての故に、名けて中道と爲す。(五九)復次に善男子、生死の本際凡て二種有り。一つには無明、二つには有愛なり。是の二つの中間に則ち生、老、病、死の苦有り、是を中道と名く。(六〇)是の如く中道は能く生死を破す、故に名けて中と爲す。(六一)是の義を以ての故に、中道の法を名けて佛性と爲す、是の故に佛性は常、樂、我、淨なり。(六二)諸の衆生見るこ

---

の如く空と智と前後なく淺深なく、空に卽して智、智に卽して空なり。又た不空は是れ四德、空は是れ二邊と見るも可なり。

【五〇】次に體を結す。

【五一】第二に不見を簡ぶ。之に二段ありて初に二乘異の故に見ざるを簡ぶ。

【五二】次に中道の見を起すが故に見ざるを簡ぶ。

【五三】次に正しく第二問を答ふ。之に二段あり、其中初に第二の問を答ふ。之に又二段ありて初に問を牒す。

【五四】次に正しく答ふ。之に三段ありて初に總じて闕の義を出す。

【五五】佛性…中道。佛は是れ圓人、性は是れ圓法、人法皆常なる故に佛性と云ふ、佛性は因果の理に契ひて顯現す。然るに中道は非因非果なり、而して中道の理顯現するは悉く佛性を種子卽ち原因と爲すに由るなり。

【五六】次に別して偏の義を出す。之に四段ありて、その中初に不上不下を明す。之に又二段ありて初に三章門を唱ふ。

【五七】下上中不下等。外道の邪見墮つて梵天を涅槃と云ふ、實は涅槃に非で生死の法なり故に下となす。凡夫は八倒を免れず、無常を常と計す、常は是れ上法、故に凡夫を上と名く。然るに中道見諦の者は常を常とし無常を無常とす、この見外道と同じからず、故に下と名けず。凡夫と同じからず、故に上と名けず、是の兩邊の上なれば是れ上となす。

【五八】次に解釋す。

【五九】第二に不生不死の中道の義を明す。之に二段あり、其中初に中道を明す。之に三段

と能はざるを以ての故に、常無く、樂無く、我無く、淨無し。佛性は實に無常、無樂、無我、無淨に非ず。(六三)善男子、譬へば貧人家に寶藏有りて是の人見ず。見ざるを以ての故に常無く、樂無く、我無く、淨無し。善知識有りて而も之に語りて言はく、「汝が舍宅の中に金寶藏有り、何が故ぞ是の如く貧窮困苦し、無常、無樂、無我、無淨なる。」即ち方便を以て彼をして見ることを得しむ。見ることを得るを以ての故に、是の人即ち常、樂、我、淨を得るが如し。(六四)佛性も亦爾なり、衆生は見ず。見ざるを以ての故に無常、無樂、無我、無淨なり。善知識、諸佛菩薩有りて、諸の方便、種種の教誨を以て、彼をして見ることを得しむ。見ることを得るを以ての故に、衆生即ち常、樂、我、淨を得。

(六五)復次に善男子、衆生の起見に凡そ二種有り。一つには常見、二つには斷見なり。是の如きの二見は中道と名けず。常無く斷無し、乃至中道と名く。無常無斷は即ち是十二緣を觀照する智なり。是の如きの觀智、是を佛性と名く。二乘の人は因緣を觀ずと雖も、猶亦名けて佛性と爲すことを得ず。(六六)佛性は常と雖も、諸の衆生無明覆ふを以ての故に見ることを得ること能はず。(六七)又未だ十二緣の河を度ること能はざること、猶し兎馬の如し。何を以ての故に。佛性を見ざるが故なり。(六八)善男子、是の十二因緣を觀ずる智慧は、即ち是阿耨多羅三藐三菩提の種子なり。

ありて初に中道を唱ふ。
【六〇】次に能く生死を破するを明す。
【六一】次に結して佛性と爲す。
【六二】第二に喩意。之に三段ありて初に法。
【六三】次に譬。
【六四】次に合。
【六五】第三に不斷不常の中道を明す。之に三段ありて初に章門を唱ふ。
【六六】次に釋。之に三段ありて初に凡夫。
【六七】次に二乘。
【六八】次に菩薩。

(六九)是の義を以ての故に、十二因緣を名けて佛性と爲す。善男子、譬へば胡瓜を名けて熱病と爲す。何を以ての故に。能く熱病の爲に因緣と作るが故の如し。十二因緣も亦復是の如し。(七〇)善男子、佛性とは因有り因因有り、果有り果果有り。有因とは即ち十二因緣なり、因因とは即ち是智慧なり。有果とは即ち是阿耨多羅三藐三菩提なり、果果とは即ち是無上の大般涅槃なり。(七一)善男子、譬へば無明を因と爲し、諸行を果と爲す。行は因、識は果なり。是の義を以ての故に、彼の無明の體も亦因、亦因因、識も亦果、亦果果の如し。佛性も亦爾なり。(七二)善男子、是の義を以ての故に十二因緣、不出不滅、不常不斷、非一非二、不來不去、非因非果なり。(七三)善男子、是因にして果に非ざるは佛性の如く、是果にして因に非ざるは大涅槃の如く、是因是果は十二緣所生の法の如し。非因非果を名けて佛性と爲す、因果に非ざるが故に常恆にして變ずること無し。(七四)是の義を以ての故に、我經中に說く、「十二因緣其の義甚深なり。知ること無く、見ること無く、思惟すべからず。乃ち是諸佛菩薩の境界なり。諸の聲聞、緣覺の及ぶ所に非ず」と。(七五)何の義を以ての故に甚深甚深なる。衆生の業行(七六)不常、不斷にして而も

【六九】次に結。
【七〇】第四に因果に約して中道を明す。之に三段あり、其中初に有因有果を明す。之に又二段ありて初に法。
【七一】次に譬。
【七二】第二に非因非果を明す。
【七三】第三に亦因果亦非因果を明す。
【七四】第三に結して甚深を歎す。之に三段ありて初に略して歎す。
【七五】次に廣く歎す。之に六段ありて初に因緣甚深を明す。
【七六】不常不斷等。不常不斷は[illegible]何して中道と作して以て甚深を明す。雖念念滅は不常、而無所失は不斷、不斷不常は中道甚深、雖無作者は不有、而有作業は不無、即ち不可思議中道の甚深を明す。

ち果報を得、念念に滅すと雖も而も失する所無し。作者無しと雖も而も作業有り、受者無しと雖も而も果報有り。受者滅すと雖も果敗亡せず、慮知有ること無けれども和合して有り。(七七)一切の衆生十二因縁と共行すと雖も而も見知せず、見知せざるが故に終始有ること無し。(七八)十住の菩薩は唯其の終を見て其の始を見ず、諸佛世尊は始を見終を見る。是の義を以ての故に諸佛了了に佛性を見ることを得。

(七九)善男子、一切衆生十二因縁を見ること能はず、是の故に輪轉す。善男子、蠶の繭を作りて自ら生じ自ら死するが如く、一切衆生も亦復是の如し。佛性を見ざるが故に自ら結業を造り、生死に流轉すること猶し毱を拍つが如し。(八〇)善男子、是の故に我諸經の中に於て說く、「若人の十二因縁を見る有らば即ち是法を見る、法を見る者は即ち是佛を見る、佛とは即ち是佛性なり。何を以ての故に。一切の諸佛は此を以て性と爲せばなり。」(八一)善男子、十二縁を觀ずる智に凡そ四種有り。一つには下、二つには中、三つには上、四つには上上なり。(八二)下智觀の者は佛性を見ず、不見を以ての故に聲聞の道を得。中智觀の者も佛性を見ず、見ざるを以ての故に緣覺の道を得。上智觀の者は見れども了了ならず、不了了の故に十住地に住す。上上智の者は見ること了了なるが故に阿耨多羅三藐三菩提の道を得。(八三)是の義を以ての故に十二因縁を名けて佛性と爲す、佛性とは即ち第一義空なり。第一義空は名

【七七】次に凡夫の見ざるを明す
【七八】次に唯佛のみ能く見るを明す。
【七九】次に重ねて甚深にして見難きを明す。
【八〇】次に重ねて能見を明す。
【八一】次に雙じて見と不見とを明す。之に二段ありて初に四章門を唱ふ。
【八二】次に四章を釋す。
【八三】第三に甚深の總結。

けて中道と爲す、中道とは即ち名けて佛と爲す、佛とは名けて涅槃と爲す。」

（八四）師子吼菩薩摩訶薩佛に白して言さく、「世尊、若し佛と佛性と差別無ければ、一切衆生何ぞ道を修することを用ひん。」（八五）佛の言はく、「善男子、汝が問ふ所の如き、是の義然らず。（八六）佛と佛性と差別無しと雖も、然も諸の衆生悉く（八七）未だ具足せず。（八八）善男子、譬へば人有りて惡心に母を害し、害し已りて悔を生じ、三業善なりと雖も、是の人故地獄の人と名くるが如きなり。何を以ての故に。是の人定んで當に地獄に墮すべきが故に。是の人地獄の陰界諸入無しと雖も、猶故名けて地獄の人と爲すことを得。（八九）善男子、是の故に我諸經の中に於て説く、『若し人の善を修行する者有るを見ば、天人を見ると名け、惡を修行する者は地獄を見ると名く。何を以ての故に。定んで報を受くべきが故なり。』（九〇）善男子、一切衆生定んで阿耨多羅三藐三菩提を得るが故に、是の故に我『一切衆生悉く佛性有り』と説く。一切衆生、眞實は未だ三十二相、八十種好有らず。（九一）是の義を以ての故に、我此の經に於て而も是の偈を説く、

「本有りて今無く、本無くして今有り、

【八四】次に第二に論義。之に問答の二段ありて初に問。
【八五】次に佛答。之に三段ありて初に問を非す。
【八六】次に正しく答ふ。之に二段ありて初に無差別また差別有ることを答ふ。之に又三段あり、其中初に正しく答ふ。之に二段ありて初に法。
【八七】未だ具足せずとは但だ其の理ありて事用未だ足らざるをいふ、悉く無きを云ふには非す。
【八八】次に譬。之に譬、合の二段ありて初に譬。之に又二段ありて初に惡譬。
【八九】次に善惡の例。
【九〇】次に合。
【九一】次に偈を引いて答ふ。之に偈を引いて答ふ、長行釋の二段あり。

三世有法。是の處有ること無し。」

善男子、有とは凡そ三種有り。一つには未來有、二つには現在有、三つには過去有なり。一切衆生未來の世に當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし、是を佛性と名く。一切衆生現在悉く煩惱諸結有り、是の故に現在三十二相、八十種好有ること無し。一切衆生過去の世に煩惱を斷ずる有り、是の故に現在に佛性を見ることを得。是の義を以ての故に、我常に一切衆生悉く佛性有り、乃至一闡提等も亦佛性有りと宣說す。一闡提等善法有ること無し、佛性も亦善なり、未來有るを以ての故に。一闡提等悉く佛性有り。何を以ての故に。一闡提等定んで當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べきが故に。(九二)善男子、譬へば人有りて家に乳酪有り。人問ひて「汝酥有りや」と言ふに、答へて「我有り」と言はん。酪實は酥に非ず、巧みに方便して、定んで當に得べきを以ての故に、故に酥有りと言ふが如く、衆生も亦爾なり、悉く皆心有り。凡そ心有る者、定んで當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。是の義を以ての故に、我常に一切衆生悉く佛性有りと宣說す。(九三)善男子、畢竟に二種有り。一つには莊嚴畢竟、二つには究竟畢竟なり。一つには世間畢竟、二つには出世畢竟なり。(九四)莊嚴畢竟とは六波羅蜜、究竟畢竟とは一切衆生所得の一乘なり、一乘とは名けて佛性と爲す。是の義を以ての故に、我

【九二】次に乳酪の譬。

【九三】第二に須く道を修すべし正しく前の何ぞ修道を用ひんの問を答ふ。之に二段ありて初に章門を唱ふ。

【九四】次に解釋。これに二段あり、其中初に六度を以て莊嚴と爲し一乘を究竟と爲すを釋す。之に又三段ありて初に法。

一切衆生悉く佛性有りと說く。一切衆生悉く一乘有り、無明覆ふを以ての故に見ることを得ることと能はず。(九五)善男子、鬱單越三十三天、果報覆ふが故に、此の閒の衆生見ることを得ること能はざるが如く、(九六)佛性も亦爾なり、諸結覆ふが故に衆生は見ず。(九七)復次に善男子、佛性とは卽ち首楞嚴三昧なり。性は醍醐の如し、卽ち是一切諸佛の母なり。首楞嚴三昧の力を以ての故に、而も諸佛をして常、樂、我、淨ならしむ。一切衆生悉く首楞嚴三昧有り。修行せざるを以ての故に、見ることを得ること能はず。是の故に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得ず。(九八)善男子、首楞嚴三昧とは五種の名有り。一つには首楞嚴三昧、二つには般若波羅蜜、三つには金剛三昧、四つには師子吼三昧、五つには佛性なり。其の所作に隨ひて處處に名を得。(九九)善男子、一つの三昧の種種の名を得るが如く、禪には四禪と名け、根には定根と名け、力には定力と名け、(一〇〇)覺には定覺と名け、正には正定と名く。八大人覺には名けて定覺と爲すが如く、首楞嚴定も亦復是の如し。(一〇一)善男子、一切衆生は三定を具足す。上、中、下を謂ふ。上とは佛性を謂ふなり。是を以ての故に、一切衆生は悉く佛性有りと言ふ。中とは一切衆生初禪を具足す。因緣有る時は則ち能く修習す、若因緣無ければ

【九五】次に譬。
【九六】次に合。
【九七】次に世間出世間を釋す。之に二段あり、其中初に偏に出世畢竟を釋す。之に又二段ありて初に出體。
【九八】次に釋名。
【九九】次に擧類。
【一〇〇】覺には定覺等。定覺は七覺分中の定覺分、正定は八正道中の正定なり。また定覺は八大人中の定覺と爲すことあり、楞嚴亦た爾り。之に五種の名あり。
【一〇一】次に雙じて世出世の兩畢竟を釋す。之に二段ありて初に具さに三定を釋す。

ば則ち修すること能はず。因緣に二種あり。一つには火災を謂ひ、二つには破欲界結を謂ふ。是を以ての故に、一切衆生は悉く中定を具すと言ふ。下定とは、十大地の中の心數定なり。是を以ての故に一切衆生は悉く下定を具すと言ふ。〔一〇二〕一切衆生は悉く佛性有れども、煩惱覆ふが故に見ることを得ること能はず。十住の菩薩一乘を見ると雖も、如來是常住法を知らず。是を以ての故に十地の菩薩佛性を見ると雖も、而も明了ならずと言ふ。善男子、首楞とは一切事畢竟と名け、嚴とは堅と名く、一切畢竟じて而も堅固を得るを首楞嚴と名く。是を以ての故に首楞嚴定を名けて佛性と爲すと言ふ。

〔一〇三〕善男子、我一時に於て尼連禪河に住し、阿難に告げて言はく、「我今洗はんと欲す。汝衣及以澡豆を取るべし。」我既に水に入る、一切の飛鳥、水陸の屬悉く來りて我を觀る。〔一〇四〕爾の時に復五百の〔一〇五〕梵志有り、來りて河邊に在り。因つて我が所に到りて各相謂つて言はく、「云何が而も金剛の身を得る。若瞿曇をして斷見を說かざらしめば、我當に其に從ひて受齋法を啓くべし。」善男子、我爾の時に於て他心智を以て、是の梵志の心の所念を知り、梵志に告げて言はく、「云何が我斷見を說くと謂ふ。」諸の梵志の言はく、「瞿曇先に處處の經中に於て、諸の衆生悉く我有ること無しと說く。既に無我と言ふ、云何ぞ而も斷見に非ずと言はんや。若無我ならば、持戒者は

【一〇二】次に重ねて上定を釋す。

【一〇三】第三に譬を引いて答ふ。之に二段あり、其中初に正しく昔を引いて今を證す。之に二段あり、初に昔を引く。之に又三段ありて初に洗浴を明す。

【一〇四】次に外道の論義。

【一〇五】梵志（Brahmacārin）。淨行と譯す、梵天の法を志求する者の義。又た凡ての出家の外道を總稱して云ふ。

誰、破戒者は誰。」佛の言はく、「我も亦一切衆生悉く我有ること無しと說かず。我常に一切衆生悉く佛性有りと宣說す。佛性とは、豈我に非ずや。是の義を以ての故に、我斷と說かず。一切衆生佛性を見ず、故に無常、無我、無樂、無淨なり。是の如きは則ち斷見と說くと名くるなり。」

（一〇六）時に諸の梵志佛性は即ち是我と說くを聞くが故に、即ち阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、尋いで時に出家して菩提道を修す。一切の飛鳥、水陸の屬も亦無上菩提の心を發し、既に發心し已りて尋いで身を捨つることを得。

（一〇七）善男子、是の佛性は實は我に非ざるなり、衆生の爲の故に名けて我と爲すと說く。（一〇八）善男子、如來因緣有るが故に（一〇九）無我を說きて我と爲す、眞實には我無し。是の說を作すと雖も、虛妄有ること無し。善男子、因緣有るが故に我を說きて無我と爲す、而も實は我有り。世界を爲すの故に、無我と說くと雖も而も虛妄無し。佛性は我無し。如來は我と說きたまふ。是常を以ての故に、如來是我なり。而も無我と說く、自在を得るが故なり。」

（一一〇）爾の時に師子吼菩薩の言さく、「世尊、若一切衆生悉く佛性有ること金剛力士の如くならば、何の義を以ての故に、一切衆生見ることを得ることを能はざる。」（一一二）佛の言はく、「善男子、譬へば（一一三）色法に青、黃、赤、白、長、短の質像有りと雖

【一〇六】次に時衆の得益。

【一〇七】次に今を證す。

【一〇八】次に更に會通す。

【一〇九】無我を說きて我となすは之れ如來の無礙說法の自在を現はす。然るに一說に依れば佛性は因にありて無我と言ひ果にありて我となすとす。

【一一〇】第三に上の第四問を答ふ之に二段ありて初に申問。

【一一一】次に正答。之に二段あり、其中初に正答。之に又三段あり、其中初の一段は有れども見ざるを譬ふ。之に又三段あり、初に盲人の譬。之に譬、合の二段あり。

【一一三】色法等。色法は佛性に譬ひ、盲者は地下の凡夫に譬ふ、

も、盲者は見ず。復見ずと雖も、亦青、黄、赤、白、長、短の質像無しと言ふことを得ず。何を以ての故に。盲は見ずと雖も、目有らば見るが故なりの如く、佛性も亦爾なり。一切衆生は見ること能はずと雖も、十住の菩薩は少分を見るが故に、如來は全く見る。十住の菩薩の見る所の佛性は夜色を見るが如く、如來の所見は晝色を見るが如し。(一三)善男子、(一四)眼膚翳すれば色を見ること了ならず、善良の醫有りて而も爲に之を治す。藥力を以ての故に了了に見ることを得るが如く、十住の菩薩も亦復是の如し、佛性を見ると雖も明了なること能はず。首楞嚴三昧の力を以ての故に能く明了を得。善男子、若人の一切諸法の無常、無我、無樂、無淨を見、非一切の無常、無樂、無我、無淨を見る有らば、是の如きの人は佛性を見ず。一切とは名けて生死と爲し、非一切とは名けて三寶と爲す。聲聞、緣覺は一切法の無常、無我、無樂、無淨を見、非一切法も亦無常、無我、無樂、無淨を見る。是の義を以ての故に佛性を見ず。十住の菩薩は一切法の無常、無我、無樂、無淨を見、非一切法は分に常、樂、我、淨を見る。是の義を以ての故に、十分の中に一分を見ることを得。諸佛世尊は一切法の無常、無我、無樂、無淨を見、非一切法は常、樂、我、淨を見る。是の義を以ての故に、佛性を見ること掌中の阿摩勒果を觀るが如し。是の義を以ての故に、首楞嚴定を名けて畢竟と爲す。(一五)善男子、譬へば初月の見るべからずと雖も、無しと言

【一三】次に眼病の譬。之に譬、合の二段あり。

【一四】眼膚翳等。眼膚翳は諸菩薩に、色は佛性に譬ふ。

【一五】次に月の譬。之に譬、合の二段あり。譬の中月は衆生に、可見は斷惑者に、不得言無は斷惑の者に譬ふ。

ふことを得ざるが如く、佛性も亦爾なり、一切の凡夫は見ることを得ずと雖も、亦佛性無しと言ふことを得ざるなり。善男子、佛性とは所謂十力、四無所畏、大悲、三念處なり。一切衆生悉く（二六）三種の破煩惱有るが故に、然して後見ることを得。一闡提等は一闡提を破して、然して後能く十力、四無所畏、大悲、三念處を得。是の義を以ての故に、我常に一切衆生悉く佛性有りと宣說す。（二七）善男子、十二因緣は一切衆生等しく共に之有り。亦內亦外なり。（二八）何等か十二なる。過去の煩惱を名けて無明と爲し、過去の業は是を名けて行と爲す。現在世の中初始めて胎を受く、是を名けて（二九）識と爲す。入胎の（三〇）五分、四根未だ具せず、名けて（三一）名色と爲す。四根を具足して未だ觸と名けざる時、是を六入と名く。未だ苦樂を別たざる、是を名けて觸と爲す。一愛に染習す、是を名けて受と爲す。五欲に習近す、是を名けて愛と爲す。內外に貪り求む、是を名けて取と爲す。內外の事の爲に身、口、意業を起す、是を名けて有と爲す。現在世の識を未來の生と名け、現在の名色、六入、觸、受を、未來世の老、病死と名くるなり。是を十二因緣と名く。（三二）善男子、一切衆生は是の如きの十二

【二六】三種の破煩惱。一に七地に方便を修し、八地に道觀雙流し、無明を破し佛性を見る、之は別接通に約す。二に十回向に無明を伏し、十地に登つて無明を破し佛性を見る、之は別教に約す。三に初住に登る時無明の惑を破し煩惱卽菩提と知る、之は圓教に約す。

【二七】次の一譬は平等に皆有るを譬ふ。之に二段あり、其中初に譬。之に四段ありて初に等有を唱ふ。

【二八】次に因緣の體を出す。

【二九】識と爲す。之に二釋あり一は初受胎の七日となし、二は託胎の初念となす。後說勝れたるが如し。

【三〇】五分とは二手、二脚、頭をいふ。

【三一】名色と爲す。之に二釋あり。一は名は四陰、色は色陰とす、二は此の色に衆生の名

因緣有りと雖も、或は未具有り、(一三三)歌羅羅の時死すれば則ち十二無きが如し。生より乃し老死に至りて十二を具することを得。色界の衆生は三種の受、三種の觸、三種の愛無く、老病有ること無し。亦名けて十二を具足すと爲すことを得。無色の衆生は色無く、乃至老死有ること無けれども、亦名けて十二を具足すと爲すことを得。(一三四)定得を以ての故に、故に衆生平等に十二因緣を具有すと名く。(一三五)善男子、佛性も亦爾なり、一切衆生定んで當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べきが故に、是の故に我一切衆生悉く佛性有りと說く。(一三六)善男子、雪山に草有り名けて忍辱と爲す。牛若食すれば則ち醍醐を出す。更に異草有り、牛若食すれば則ち醍醐無し、醍醐無しと雖も說きて雪山の中忍辱草無しと言ふべからず。(一三七)佛性も亦爾なり。雪山とは名けて如來と爲し、忍辱草とは大涅槃と名け、異草とは十二部經なり。衆生若能く大般涅槃を聽受し咨啓すれば、則ち佛性を見る。十二部の中に有るを聞かずと雖も、說きて佛性無しと言ふべからざるなり。(一三八)善男子、佛性とは亦色、非色、非色非非色なり。亦相、非相、非相非非相なり。亦一、非一、非一非非一なり。非常、非斷、非非常非非斷なり。亦有亦無、非有非無なり。亦盡、非盡、非盡非非盡なり。亦因亦果、非因非果なり。亦義、非義、非

な與ふ義に有色とす。

【一三二】次に具不具有ることを明す。

【一三三】歌羅羅（Kalala）、凝滑と譯す。受胎の初より七日の間の位、胎内五位の一。

【一三四】次に結。

【一三五】第二に譬を合す。

【一三六】第三に三譬は緣聲待ちて方に見るを明す。之に三段あり、其中初に雪山の譬。之に譬、合の二段ありて初に譬。

【一三七】次に合。之に二段ありて次に正合。

【一三八】次に明理。之に三段ありて初に九章門。

義非非義なり。亦字、非字、非字非非字なり。（三九）云何が色と爲す。金剛身の故に。云何が非色なる。十八不共非色法の故に。云何が非色非非色なる。色非色定相無きが故に。云何が相と爲す。三十二相の故に。云何が非相なる。一切衆生相現せざるが故に。云何が非相非非相なる。相非相決定せざるが故に。云何が一つと爲す。一切衆生悉く一乘の故に。云何が非一なる。三乘を説くが故に。云何が非一非非一なる。數法無きが故に。云何が非常なる。縁に從りて見るが故に。云何が非斷なる。斷見を離るるが故に。云何が非非常非非斷なる。終始無きが故に。云何が有と爲す。一切衆生悉く皆有るが故に。云何が無と爲す。善方便に從りて見ることを得るが故に。云何が非有非無なる。虛空性の故に。云何が盡と名くる。首楞嚴三昧を得るが故に。云何が非盡なる。其の常を以ての故に。云何が非盡非非盡なる。一切の盡相斷するが故に。云何が因と爲す。了因を以ての故に。云何が果と爲す。果決定の故に。云何が非因非果なる。其の常を以ての故に。云何が義と名くる。悉く能く義無閡に攝取するが故に。云何が非義なる。不可説の故に。云何が非義非非義なる。畢竟空の故に。云何が字と爲す。名稱有るが故に。云何が非字なる。名名無きが故に。云何が非字非非字なる。一切の字を斷するが故に。云何が非苦非樂なる。一切の受を斷するが故に。云何が非我なる。未だ具さに八自在を得ること能はざるが故に。云何が非非我なる。其の常を以ての故に。云何が非我非非我なる。不作不受の故に。云何が空と爲す。第一義空の故に。云

【三九】次に[illegible]釋。

何が非空なる。其の常を以ての故に。云何が非空非非空なる。能く善法の爲に種子と作るが故なり。(二三〇)善男子、若人の能く大涅槃經の是の如きの義を思惟し解了する有らば、當に知るべし、是の人は則ち佛性を見る。佛性は思議すべからず。乃ち是諸佛如來の境界なり。諸の聲聞、緣覺の知る所に非ず。善男子、佛性は陰界入に非ず、本無今有に非ず、已有還無に非ず。善因緣に從りて衆生見ることを得。(二三一)譬へば黑鐵の、火に入るときは則ち赤く、出し冷むれば還つて黑きが如し。而も是の黑色內に非ず外に非ず、因緣の故に有なり。(二三二)佛性も亦爾なり、一切衆生煩惱の火滅すれば則ち聞見することを得。(二三三)善男子、種の滅し已りて芽則ち生ずることを得、而も是の芽性內に非ず外に非ざるが如く、乃至華果も亦復是の如し、緣に從るが故に有なり。(二三四)善男子、是の大涅槃微妙の經典は無量の功德を成就し具足す。佛性も亦爾なり、悉く是無量無邊の功德の成就する所なり。』

(二三五)爾の時に師子吼菩薩摩訶薩の言さく、『世尊、菩薩幾法を具足し成就して、佛性を見ることを得て而も明了ならざる。諸佛世尊幾法を成就して了了に見ることを得る。』

(二三六)『善男子、菩薩具足して十法を成就すれば、佛性を見ると雖も而も明了ならず。云何が十と爲す。一つには少欲、二つには知足、三つには寂靜、四つには精進、五つには正念、六つには正定、七つに

【二三〇】次に總結。
【二三一】第二に黑鐵の譬。之に二段ありて初に譬。
【二三二】次に合。
【二三三】第三に種子の譬。
【二三四】第二に結歎。
【二三五】是より第五の問を答ふ。之に二段、初に前の兩門の勝。
【二三六】次に兩答を作して以て前の兩門を答ふ。之に二段ありて初に十章。

は正慧、(三七)。八つには解脱、九つには讃歎解脱、十には大涅槃を以て衆生を敎化す。』

(三八)師子吼菩薩の言さく、『世尊、少欲知足何の差別か有る。』(三九)『善男子、少欲とは不求不取、知足とは少を得るの時心悔恨せず。少欲とは少く所欲有り、知足とは但法事の爲に心愁惱せず。善男子、欲に三種有り。一つには惡欲、二つには大欲、三つには欲欲なり。惡欲とは、若比丘有りて心に貪欲を生じて、一切大衆の上首と爲り、一切の僧をして我が後に隨逐せしめ、諸の四部をして悉く皆我を供養、恭敬し、讃歎、尊重せしめ、我をして先に四衆の爲に說法せしめ、皆一切をして我が語を信受せしめ、亦國王、大臣、長者をして皆我を恭敬せしめ、我をして大に衣服、飮食、臥具、醫藥、上妙の屋宅を得しめんと欲す。生死の爲の欲なり、是を惡欲と名く。云何が大欲なる。若比丘有りて欲心を生ず。云何がして、當に四部の衆をして悉く皆、我初住の地、乃至十住を得、阿耨多羅三藐三菩提を得、阿羅漢果、乃至須陀洹果を得、我四禪、乃至四無閡智を得と知らしむべしと利養の爲にする、是を大欲と名く。欲欲とは、若比丘有りて梵天、魔天、自在天、轉輪聖王、若は刹利、若は婆羅門に生じて皆自在を得んと欲す。利養の爲の故に、是を欲欲と名く。若是の三種の惡欲に害せられざれば、是を少欲と名く。欲とは名けて二十五愛と爲す。是の如きの二十五

【三七】八には解脱とは八大人覺を指す。是れ自行に屬す。後の二者は化他に屬す。八覺は小乘の名數なれども今大涅槃を以て修するが故に小乘と異なること知るべし。

【三八】次に十法の解釋。之に五番あり、初番に又九段あり、其中初に第一少欲、第二知足。之に二段ありて初に問。

【三九】次に答。之に二段ありて初に善惡に約して共解す。

の愛有ること無き、是を少欲と名く。未來の所欲の事を求めざる、是を少欲と名け、得て而も著せざる、是を知足と名く。恭敬を求めざる、是を少欲と名け、得れども積聚せざる、是を知足と名く。

(四〇)善男子、少欲にして知足と名けざる有り、知足にして少欲と名けざる有り、亦少欲亦知足なる有り、不少欲不知足なる有り。少欲とは須陀洹を謂ひ、知足とは辟支佛を謂ふ。少欲知足とは阿羅漢を謂ひ、不少欲不知足とは所謂菩薩なり。善男子、少欲知足に復二種有り。一つには善、二つには不善なり。不善とは所謂凡夫、善とは聖人、菩薩なり。一切の聖人は道果を得と雖も自ら稱說せず、稱說せざるが故に心惱恨せず。是を知足と名く。善男子、菩薩摩訶薩大乘大涅槃經を修習して佛性を見んと欲す。是の故に少欲知足を修習す。

【四〇】次に小大に約して共解す
【四一】次に第三の寂靜。

(四一)云何が寂靜なる。寂靜に二つ有り。一つには心靜、二つには身靜なり。身寂靜とは、終に作身の三種の惡を造らず、心寂靜とは、亦作意の三種の惡を造らず。是を則ち名けて身心寂靜と爲す。身寂靜とは、四衆に親近せず、四衆所有の事業に預らず、心寂靜とは、終に貪欲、恚癡を修習せず。是を則ち名けて身心寂靜と爲す。或は比丘有りて身寂靜と雖も心寂靜ならず。心寂靜にして身寂靜ならざる有り。身心寂靜なる有り。又身心俱に寂靜ならざる有り。身寂靜心不寂靜とは、或は比丘靜處に坐禪して四衆を遠離し、心常に貪欲、恚癡を積習する有り。是を身寂靜、心不寂靜と名く。心寂靜身不寂靜とは、或は比丘四衆、國王、大臣に親近し、貪、恚、癡を斷ずる有り。是を心寂靜身不寂靜と名く。身心寂靜とは、

佛、菩薩を謂ひ、身心不寂靜とは、諸の凡夫を謂ふ。何を以ての故に。凡夫の人は身心靜と雖も深く無常、無樂、無我、無淨を觀ずること能はず。是の義を以ての故に、凡夫の人は身、口、意業を寂靜にすること能はず。一闡提の輩、犯四重禁、作五逆罪、是の如きの人も亦身心寂靜と名くることを得ず。

(一四二)云何が精進なる。若比丘、身、口、意業をして清淨ならしめんと欲して一切の諸不善業を遠離し、一切の諸善業を修習する者有り、是を精進と名く。(一四三)是の勤進の者は念を六處に繫く。所謂佛、法、僧、戒、施、天なり、是を正念と名く。(一四四)正念を具する者の得る所の三昧、是を正定と名く。(一四五)正定を具する者は、諸法猶し虚空の如しと觀見す、是を正慧と名く。(一四六)正慧を具する者は一切の煩惱諸結を遠離す、是を解脱と名く。(一四七)解脱を得る者は諸の衆生の爲に解脱を稱美して、是の解脱は常恆不變と言ふ。是を讃歎解脱と名く、即ち是無上の大般涅槃なり。(一四八)涅槃とは即ち是煩惱諸結の火滅す。又涅槃とは名けて屋宅と爲す。何を以ての故に。能く煩惱の惡風雨を遮ふが故に。又涅槃とは名けて歸依と爲す。何を以ての故に。能く一切の諸怖畏を過ぐるが故に。又涅槃とは名けて洲渚と爲す。何を以ての故に。四大暴河も漂はす能はざるが故に。何等をか四つと爲す。一つには欲暴、二つには有暴、三つには見暴、四つには無明暴なり。是の故に

【一四二】次に第四の精進。
【一四三】次に第五の正念。
【一四四】次に第六の正定。
【一四五】次に第七の正慧。
【一四六】次に第八の解脱。
【一四七】次に第九の讃歎解脱。解脱即無上涅槃に就て二説あり、開善は解脱を無累と翻し、涅槃を滅度とす。觀師は因德を解脱とし、果德を涅槃とし、斯くて二法を同體なりとす。
【一四八】次に第十の涅槃を以て衆生を化するを釋す。

涅槃は名けて洲渚と爲す。又涅槃とは畢竟歸と名く。何を以ての故に。能く一切の畢竟樂を得るが故に。若菩薩摩訶薩是の如きの十法を成就し具足する有らば、佛性を見ると雖も、而も明了ならず。

(一四九)復次に善男子、出家の人に四種の病有り、是の故に四沙門果を得ず。何等か四病なる。四つの悪欲を謂ふ。一つには爲衣欲、二つには爲食欲、三つには爲臥具欲、四つには爲有欲なり。是を四悪欲と名く。是出家の病なり。四良藥有りて能く是の病を療す。糞掃衣の能く比丘の爲衣悪欲を治し、乞食の能く爲食悪欲を破し、樹下の能く臥具悪欲を破し、身心寂靜の能く比丘の爲有悪欲を破するを謂ふ。是の四藥を以て是の四病を除く、是を聖行と名く。是の如き聖行は則ち名けて少欲知足と爲すことを得。(一五〇)寂靜とは四種の樂有り。何等をか四つと爲す。一つには出家樂、二つには寂靜樂、三つには永滅樂、四つには畢竟樂なり。是の四樂を得るを名けて寂靜と爲す。(一五一)四つの精進を具す、故に精進と名く。(一五二)四つの念處を具す、故に正念と名く。(一五三)四禪を具するが故に、故に正定と名く。(一五四)四聖實を見るが故に、故に正慧と名く。(一五五)永く一切の煩惱結を斷ずるが故に、故に解脱と名く。(一五六)一切煩惱の過を訶責するが故に、是を讃歎解脱と名く。善男子、菩薩摩訶薩是の如きの十法に安住し具足すれば、佛性を見ると雖も而も明了ならず。

(一五七)復次に善男子、菩薩摩訶薩是の經を聞き已りて、親近修習して一切

---

【一四九】第二番、出家の人に約して十法を釋す。八段ある中初に第一の少欲、第二の知足。
【一五〇】次に第三の寂靜。
【一五一】次に第四の精進。
【一五二】次に第五の正念。
【一五三】次に第六の正定。
【一五四】次に第七の正慧。
【一五五】次に第八の解脱。
【一五六】次に第九の讃歎解脱。
【一五七】第三番、菩薩に約して十

世間の事を遠離す、是を少欲と名く。(一五八)既に出家し已りて悔心を生ぜず、是を知足と名く。(一五九)既に知足し已りて空閑處に近き憒鬧を遠離す、是を寂靜と名く。(一六〇)不知足者は空閑を樂はず、夫知足者は常に寂靜を樂ふ。空寂の處に於て常に是の念を作さく、「一切世間悉く我沙門の道果を得と謂ふ。然るに我今者實に未だ得る能はず。我今云何ぞ人を誑惑せん」。是の念を作し已りて、精勤して沙門の道果を修習す、是を精進と名く。(一六一)大涅槃に親近し修習する者、是を正念と名く。(一六二)天行に隨順する、是を正定と名く。(一六三)是の定に安住して正見、正知する、是を正慧と名く。(一六四)正見知の者は、能く煩惱結縛を遠離することを得、是を解脫と名く。(一六五)十住の菩薩衆生の爲の故に涅槃を稱美す、是を則ち名けて讃歎解脫と爲す。善男子、菩薩摩訶薩是の如きの十法に安住し具足すれば、佛性を見ると雖も、而も明了ならず。

(一六六)復次に善男子、夫少欲とは、諸比丘有りて空寂處に住し、端坐して臥せず。或は樹下に住し、或は塚間に在り、或は露處に在り、草地に有るに隨ひて其の上に坐す。食を乞ひて食し、得るに隨って足んぬと爲す。或は一坐食、一食に過ぎず。唯三衣を畜へ、糞衣、毳衣なり、是を少欲と名く。(一六七)既に是の事を行じて心に悔を生ぜず、是を知足と名く。(一六八)空三昧を修す、是を寂靜と名く。(一六九)四果を得已りて

---

法を解す。之に九段ありて初に少欲。
【一五八】次に知足。
【一五九】次に寂靜。
【一六〇】次に精進。
【一六一】次に正念。
【一六二】次に正定。
【一六三】次に正慧。
【一六四】次に解脫。
【一六五】次に讃歎解脫。
【一六六】第四番、之に十段ありて初に少欲。
【一六七】次に知足。
【一六八】次に寂靜。
【一六九】次に精進。

阿耨多羅三藐三菩提に於て、心休息せず、是を精進と名く。(一七〇)心を繫けて如來常住にして變易有ること無きを思惟す、是を正念と名く。(一七一)八解脫を修す、是を正定と名く。(一七二)四無閡を得る、是を正慧と名く。(一七三)七漏を遠離す、是を解脫と名く。(一七四)涅槃は十相有ること無きを稱美す、歎解脫と名く。(一七五)十相とは生、老、病、死、色、聲、香、味、觸、無常を謂ふ、十相を遠離するを大涅槃と名く。善男子、是を菩薩摩訶薩是の如き十法に安住し具足すれば、佛性を見ると雖も而も明了ならずと名く。

(一七六)復次に善男子、多欲の爲めの故に、國王、大臣、長者、刹利、婆羅門、毗舍、首陀に親近し、自ら「我は須陀洹果より阿羅漢果に至るを得」と稱す。利養の爲の故に、行、住、坐、臥、乃至大小便利す。若檀越を見ば、禮拜恭敬を行じ、接引語言す。惡欲を破する者は、名けて少欲と爲す。(一七七)未だ諸結煩惱を壞すること能はずと雖も、而も能く如來の行處に同ず、是を知足と名く。(一七八)善男子、是の如きの二法は乃ち是念定の近因緣なり、常に師宗同學に讃せらる。我も亦常に處處の經中に於て是の如きの二法を稱美し讃歎す。若能く是の二法を具足する者は、則ち大涅槃門に近くことを得、五種の樂に及ぶ、是を寂靜と名く。(一七九)堅く戒を持する者、名けて精進と爲す。(一八〇)慙愧有る者、名けて正念と爲す。(一八一)心相を見ざるを、名けて正定と爲す。(一八二)諸法の性相

【一七〇】次に正念。
【一七一】次に正定。
【一七二】次に正慧。
【一七三】次に解脫。
【一七四】次に讃歎解脫。
【一七五】次に大涅槃。
【一七六】第五番、之に九段ありて初に少欲。
【一七七】次に知足。
【一七八】次に寂靜。
【一七九】次に精進。
【一八〇】次に正念。
【一八一】次に正定。
【一八二】次に正慧。

心に信を生せざれば、聞見と名けざるなり。』

九地には佛性を聞見す。菩薩若し一切衆生の悉く佛性有るを聞きて、

# 巻の第二十六

## 師子吼菩薩品の二

(一)『善男子、若善男子、善女人の如來を見んと欲する有らば、應當に十二部經を修習し、受持、讀誦し、書寫、解說すべし。』

(二)師子吼菩薩摩訶薩の言さく、『世尊、一切衆生如來の心相を知ることを得ること能はず、當に云何が觀じて而も知ることを得べきや。』(三)『善男子、一切衆生は實に如來の心相を知ること能はず。(四)若し觀察して而も知ることを得んと欲せば、二因緣有り。一つには(五)眼見、二つには聞見なり。(六)若し如來の所有の身業を見ば、當に知るべし、是則ち如來と爲すなり、是を眼見と名く。若し如來の所有の口業を觀ば、當に知るべし、是則ち如來と爲すなり、是を聞見と名く。(七)若し色貌の一切衆生與に等しき者無きを見ば、當に知るべし、是則ち如來と爲すなり、是を眼見と名く。若し音聲の微妙最勝にして衆生の所有の音聲に同じからざるを聞かば、當に知るべし、是則ち如

【一】是より第二に修を勸む。之に二段あり、其中初に標修。

【二】次に論義。之に六番の問答あり、初の一番は見の義を問し、中間の四番は能見の行を明し、後の一番は結成。是の義を明すに二段ありて初に問。

【三】次に答。之に二段ありて初に知るべからざることを明す。

【四】次に亦知るべきこと有るを明す。之に三段ありて初に章。

【五】眼見聞見章。上は[illegible]に就て眼見を立し、分[illegible]を開

來と爲すなり、是を聞見と名く。(八)若如來所作の神通を見、衆生の爲と爲し、利養の爲と爲さんや。若衆生の爲にして利養の爲にせざれば、當に知るべし、是則ち如來と爲すなり、是を眼見と名く。若如來を觀ず、他心智を以て衆生を觀る時、利養の爲に說き、衆生の爲に說くや。若衆生の爲にして利養の爲にせざれば、當に知るべし、是則ち如來と爲すなり、是を聞見と名く。(九)云何が如來而も是の身を受くる、何が故ぞ身を受くる、誰が爲に身を受くる、「是を眼見と名く」。若如來云何が法を說き、何が故ぞ法を說き、誰が爲に法を說きたまふと觀ず、是を聞見と名く。(一〇)身の惡業を以て之に加ふるに瞋らず、當に知るべし、是則ち如來と爲すなり、是を眼見と名く。口の惡業を以て之に加ふるに瞋らず、當に知るべし、是則ち如來と爲すなり、是を聞見と名く。(一一)若菩薩初生の時、十方面に於て各行くこと七步、(一二)摩尼跋陀、(一三)富那跋陀鬼神大將、旛蓋を執持し、無量無邊の世界を震動し、金光晃曜虛空に彌滿す。難陀龍王及び婆難陀、神通力を以て菩薩の身を浴す。諸天の形像承迎禮拜し、(一四)阿私陀仙合掌恭敬す。盛年欲を捨つること涕唾を棄つるが如くし、世樂に迷惑せられず、出家し道を修して閑寂を



見と爲す。今は凡夫修習の中に於して聞見得道の力は强く、色身を眼見するは弱きを取る。上の德王品には佛の初生出家を見て妙本に達せず、悉く是れ曲見なるを明かし。今は如來七步に行ずるは是れ方便なりと知るは佛を見る[illegible]得と明かす、各各當[illegible]に得べからず。

【六】次に解釋し、之に六段あり[illegible]て初には身口二業。

【七】次に形聲兩勝。

【八】次に身通心通。

【九】次に受身說法。

【一〇】次に身口二忍。

【一一】次に身形聲說。

【一二】摩尼跋陀(Manibhadra)。寶賢と譯す、天の名。夜叉八大將の一。

【一三】富那跋陀(Purṇabhadra)。滿賢と譯す、神將の名。

等しく、邪見を破らんが為に六年苦行す。諸の衆生に於て平等にして二つ無く、心常に定に在りて初て散亂無し。相好嚴麗にして其の身を莊嚴す。所遊の處丘墟皆平かなり。衣服身を離るること四寸にして墮せず、行く時直に見て左右を顧みず。所食の物物完過無く、坐起の處草木動搖せず。衆生を調ふるが爲に故に往いて法を說き、心に憍慢無きを見る。是を眼見と名く。若菩薩七歩を行き已りて是の如きの言を唱ふ、「我今此の身最も是後邊」と。阿私陀仙合掌して言く、「大王當に知るべし、悉達太子定んで當に阿耨多羅三藐三菩提を成することを得べし。終に家に在りて轉輪王と作りたまはず。何を以ての故に。相明了の故なり。轉輪聖王は相明了ならず、悉達太子は身相炳著なり。是の故に必ず阿耨多羅三藐三菩提を得たまはん」。老、病、死を見て復是の言を作さく、「一切衆生甚だ憐愍すべし、常に是の如きの生、老、病、死と共に相隨逐して、而も觀ずること能はずして常に苦を行す。我當に之を斷ずべし」と。阿羅邏五通仙人に從ひて無想定を受く。既に成就し已りて後に其の過を說く。鬱陀仙に從ひて非有想非無想定を受く、既に成就し已りて涅槃に非ず是生死の法と說く。六年の苦行克く得る所無し、即ち是の言を作さく、「是の苦行を修す、空しく所得無し。若是實ならば我之を得べし。虛妄を以ての故に我得る所無し。是を邪術と名く、正道に非ざるなり」。既に成道し已るに梵天勸請す、「唯願はくは如來、當に衆生の爲に廣く甘露を開き、無上法を說きたまふべし」。佛の言はく、(三五)

【三四】 阿私陀（アシタ）。無比と譯す、仙人の名。

【三五】 是王の爲めに中道を說く [illegible]

「梵王、一切衆生常に煩惱に障覆せらる、我が正法の言を受くること能はず。」梵王復言さく、「世尊、一切衆生に凡そ三種有り。利根、中根、鈍根なり。利根は能く受く、唯願はくは爲に說きたまへ。」佛の言はく、「梵王、諦かに聽き、諦かに聽け、我今當に一切衆生の爲に甘露門を開くべし。」即ち波羅奈國に於て正法輪を轉じ、(一六)中道を宣說す。一切衆生諸結を破せず、破すること能はざるに非ず、不破に非ず、故に中道と名く。衆生を度せず、度すること能はざるに非ず、是を中道と名く。一切成に非ず、亦不成に非ず、是を中道と名く。凡そ說く所有れば、自ら師と言はず、弟子と言はず、是を中道と名く。說は利の爲にせず、果を得ざるに非ず、是を中道と名く。正語、實語、時語、眞語なり。言虛發せず、微妙第一なり。是の如き等の法を聞く、是を聞見と名く。(一七)善男子、如來の心相は實に見るべからず。若善男子、善女人の如來を見たてまつらんと欲する有らば、應當に是の二種の因緣に依るべし。』

(一八)爾の時に師子吼菩薩佛に白して言さく、『世尊、先に說きたまふ所の菴羅果に四種の人等を喩ふるが如き、人行細にして心正實ならざる有り、人心細にして行正實ならざる有り、人心細にして行も亦正實なる有り、人

---

【一六】中道を明かすに五番あり。初に雙捨、之は藏通二教に約す。次に相成、之は別教に約す。次に雙照、之は圓教に約す。文に在て尋ぬ可し。

【一七】次に結成。

【一八】是より第二に四番の問答によりて能見の行を明す。其初番の中先には問、次には答。問に又三段ありて初に偕實を以て問ふ。

【一九】次に佛說を以て難す。

【二〇】次に佛答。之に偕、佛を答ふるの二段あり、偕を答ふるの中に三段ありて初に問を結す。

心細ならず、行も亦正實ならざる有り。是の初の二種云何が知るべき。(一九)佛の所說の唯是の二つに依るが如き、知ることを得べからず。」(二〇)佛の言はく、「善い哉善い哉善男子、譬へば二種の人等を喩ふ、實に知るべきこと難し。(二一)知り難きを以ての故に、我經中に說かく、當に與に共に住すべし。住若知らざれば、當に與に久しく處すべし。久しく處して知らざれば、當に智慧を以てすべし。智慧知らざれば、當に深く觀察すべし。觀察を以ての故に、則ち持戒及以破戒を知る。(二二)善男子、是の四事の共住久處、智慧觀察を具して然して後持戒、破戒を知ることを得。(二三)善男子、戒に二種有り。持者も亦二つあり。一つには究竟、二つには不究竟なり。人因緣を以ての故に禁戒を受持する有らば、智者當に是の人の持戒、利養の爲と爲さんや、究竟持と爲さんやと觀ずべし。善男子、如來の戒とは、因緣有ること無し、是の故に名けて究竟戒と爲すことを得。是の義を以ての故に、菩薩諸の惡衆生に傷害せらると雖も、恚閙を生ぜず。是の故に如來畢竟持戒、究竟持戒を成就すと名くることを得。善男子、我昔一時舍利弗及び五百弟子と、俱共に摩伽陀國(二四)瞻婆大城に止住す。時に獵師有りて一鴿を追逐す。是の鴿驚怖して舍利弗の影に至るに、猶故戰慄すること芭蕉樹の如く、我が影中に至りて、身心安隱にして恐怖除くことを得。是の故に當に知るべし、如來世尊畢竟持戒乃至身影猶是の力有り。善男子、不究

【二一】次に四緣を以ての故に知る。

【二二】次に知る可きを結成す。

【二三】次に佛の答問。これに六番ありて初番は持戒の究竟と不究竟。

【二四】●●瞻婆(チャンパー)(一三三五)。瞻婆は黃華と譯す、木の名なり。木の名を取りて城に名く。中印度恆河に臨めり。

覺戒は尚ほ聲聞、緣覺を得ること能はず、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提を得んをや。(二五)復二種有り。一つには利養の爲、二つには正法の爲なり。利養の爲の故に禁戒を受持す、當に知るべし、是の戒佛性及以如來を見ず、佛性及以如來の名を聞くと雖も、猶名けて聞見と爲すことを得ざるなり。若し正法の爲に禁戒を受持せば、當に知るべし、是の戒能く佛性及以如來を見る、是を眼見と名け、亦聞見と名く。(二六)復二種有り。一つには根深くして拔き難く、二つには根淺くして動じ易し。若し能く空、無相の願を修習せば、是を根深難拔と名く。若し是の三つの三昧を修習せず、復修習すと雖も、二十五有の爲にせば、是を根淺易動と名く。(二七)復二種有り。一つには自身の爲にし、二つには衆生の爲にす。衆生の爲にせば、能く佛性及以如來を見る。(二八)持戒の人に復二種有り。一つには性自ら能く持ち、二つには他の教勅を須つ。若し戒を受け已りて無量世を經るに、初て漏失せず。或は惡國に値ひ、惡知識に遇ふ。惡時、惡世、邪惡の法を聞き、邪見と同止す。爾の時に受戒の法無しと雖も、修持本の如くにして毀犯する所無し。是を性自能持と名く。若し師僧、白四羯磨に因りて然して後戒を得。得戒し已ると雖も、要らず和上諸師、同學善友の諫論に憑りて乃ち進止を知る、聽法說法、諸の威儀を備ふ。是を須他教勅と名く。善男子、性能く持する者、佛性及以如來を眼見す、亦聞見と名く。(二九)復二種有り。一つには聲聞戒、二つには菩薩戒なり。初發心より乃至阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを

【二五】次に爲利不爲利。
【二六】次に根深根淺。
【二七】次に爲自爲衆生。
【二八】次に自持須他教。
【二九】次に聲聞菩薩。

得、是を菩薩戒と名く。若白骨を觀ずるより乃至阿羅漢果を證得す、是を聲聞戒と名く。若聲聞戒を受持する者有らば、當に知るべし、是の人、佛性及以如來を見ず。若菩薩戒を受持する者有らば、當に知るべし、是の人阿耨多羅三藐三菩提を得、能く佛性、如來、涅槃を見る。』

〔三〇〕師子吼菩薩の言さく、『世尊、何の因緣の故に禁戒を受持する。』〔三一〕佛の言はく、『善男子、心悔いざるを爲ての故なり。何が故ぞ悔いざる。樂を受くるを爲ての故に。何が故ぞ樂を受くる。遠離を爲ての故に。何が故ぞ遠離する。安隱を爲ての故に。何が故ぞ安隱なる。禪定を爲ての故に。何が故ぞ禪定する。實知見を爲ての故に。何が故ぞ實知見と爲す。生死の諸の過患を見るを爲ての故に。何が故ぞ生死の過患を見ると爲す。心貪著せざるが爲の故に。何が故ぞ心貪著せざると爲す。解脱を得るを爲ての故に。何が故ぞ解脱を得ると爲す。無上大涅槃を得るを爲ての故に。何が故ぞ大般涅槃を得ると爲す。常、樂、我、淨の法を得るを爲ての故に。何が故ぞ常、樂、我、淨を得ると爲す。不生、不滅を得るを爲ての故に。何が故ぞ不生不滅を得ると爲す。佛性を見るを爲ての故なり。是の故に菩薩性自ら能く究竟淨戒を持す。〔三二〕善男子、持戒の比丘は願を發して不悔心を求めずと雖も、不悔の心自然にして得。何を以ての故に。法性爾るが故なり。遠離安隱を[illegible]、禪定知見し、生死の過を見、心貪著せず、解脱涅槃、常樂我淨、不生不滅、佛性を見ることを求めずと雖

〔三〇〕 宋本には二[illegible]の四[illegible]有りて其中初に[illegible]。
〔三一〕 宋本[illegible]、之に三[illegible]有りて、初に十[illegible]を[illegible]。
〔三二〕 宋本に宋起の作。
〔三三〕 宋本に[illegible]、其中初に問、之に三[illegible]有りて初に

り、而も自然に得。何を以ての故に。法性爾るが故なり。』

(三三)師子吼菩薩の言さく、『世尊、若し持戒に因りて不悔果を得、解脱に因りて涅槃果を得る者、(三四)戒は則ち因無く、涅槃は果無し。戒若し因無ければ則ち名けて常と爲し、涅槃因有れば則ち是無常ならん。(三五)若し爾らば涅槃は則ち本無今有と爲し、若し本無今有ならば是を無常と爲す、猶し然燈の如し。涅槃若し爾らば、云何ぞ我、樂、淨と名くることを得んや。』(三六)佛の言はく、『善い哉善い哉善男子、汝已に曾て無量佛の所に於て、諸の善根を種ゑ、能く如來に是の如きの深義を問ふ。(三七)善男子、本念を失はずして乃ち是の如く問ふ。我憶す、往昔無量劫を過ぎて波羅奈城に佛有りて世に出で、號けて善得と曰ふ。爾の時に彼の佛三億歳の中に是の如き大涅槃經を演說す。我時に汝と倶に彼の會に在り、我是の事を以て彼の佛に諮問す。爾の時に如來、衆生の爲の故に三昧正受して未だ此の義を答へたまはず。「善い哉大士、乃ち能く是の如きの本事を憶念す。」(三八)諦かに聽き諦かに聽け、當に汝が爲に說くべし。(三九)戒も亦因有り、正法を聽くに因る。正法を聽く者是亦因有り、善友に近くに因る。善友に近く者是亦因有り、信心有るに因る。信心有る者是亦因有り、因に二種有り。一つには聽法、二つには義を思惟す。(四〇)善男子、信心は聽法に因り、聽法は信心に因る。是の如

---

節析

【三三】次に作意。

【三四】次に論難。

【三五】次に結。之に難、答の二段あり。難の中に又三段ありて初に問難を擧ぐ、次す。

【三七】次に問を歎す。

【三八】次に聽を誡む。

【三九】次に佛答。之に二段あり、其中者に持戒無因の問を答ふ。之に法、譬、合の三段あり。法中に又二段あり、初に有因を明ふ。

【四〇】次に無窮を顯す。

きの二法は亦因亦因因、亦果亦果果なり。(四一)善男子、譬へば尼乾拄を立て瓶を擧げ、互に因果と爲し、相離るることを得ざるが如し。(四二)善男子、無明、行に緣とし、行無明に緣たり。是の無明、行も亦因亦因因、亦果、亦果果なり。乃至生老死に緣とし、老死生に緣たり。是の生、老死も亦因、亦因因、亦果、亦果果なるが如し。(四三)善男子、生能く法を生ず、自生すること能はず。自ら生ぜざるが故に、生生に由りて生ず。生生自ら生ぜず、生に賴るが故に生ず。是の故に二生も亦因、亦因因、亦果、亦果果なり。(四四)善男子、信心聽法も亦復是の如し。(四五)善男子、是果にして因に非ず、大涅槃なり。(四六)何が故ぞ果と名くる。是上果の故に、沙門果の故に、婆羅門果の故に、生死を斷ずるが故に、煩惱を破するが故に。是の故に果と名く。諸の煩惱に訶責せらる。是の故に涅槃を果と名く。煩惱とは名けて過過と爲す。(四七)善男子、涅槃は因無くして而も體是果なり。何を以ての故に。(四八)生滅無きが故に、所作無きが故に、有爲に非ざるが故に、是無爲の故に、常不變の故に、處所無きが故に、始終無きが故なり。(四九)善男子、若涅槃(五〇)因有らば則ち稱して涅槃と爲すことを得ざるなり。槃とは因と言ひ、

【四一】次に譬。之に三譬ありて初に拄瓶互立の譬。
【四二】次に十二因緣の譬。
【四三】次に小乘中の八相を以て譬ふ。
【四四】次に合。
【四五】第二に涅槃有因の難を答ふ。之に三段ありて初に兩章門。
【四六】次に兩章門を釋す。之に二段ありて初に是果章門。
【四七】次に非因章門。
【四八】生滅無き等　世間の因なき故に生滅なし、報因なき故に所作なし、生因なき故に有爲に非ず、相待因なき故に常なり、無處所なり、無始終なり。
【四九】次に無因の義を結す。
【五〇】因有らば等　了因あり、既に有因と言ふ。生因無因なし、故に無因と言ふ。

因縁涅槃は無と言ふ。因有ること無きが故に、故に涅槃と稱す。」

（五一）師子吼菩薩の言さく、『佛の說きたまふ所の涅槃無因の如き、是の義然らず。（五二）若無と言はば、則ち六義に合す。一つには畢竟無の故に、故に名けて無と爲す、一切法我無く我所無きが如し。二つには有時無の故に、故に名けて無と爲す、世人「河池に水無く、日月有ること無し」と言ふが如し。三つには少きが故に、故に名けて無と爲す。世人の言に「食の中に鹹少ければ名けて無鹹と爲し、甘漿に甜少ければ名けて無甜と爲す」が如し。四つには受くること無きが故に、故に名けて無と爲す。旃陀羅は婆羅門の法を受持すること能はず、是の故に名けて婆羅門無しと爲すが如し。五つには惡法を受くるが故に、故に名けて無と爲す。世間の言に「惡法を受くる者、沙門及び婆羅門と名けず。是の故に、名けて沙門及び婆羅門有ること無し」と爲すが如し。六つには不對の故に、故に名けて無と爲す。譬へば白無きを之を名けて黑と爲し、明有ること無きが故に、名けて無明と爲すが如し。

（五三）世尊、涅槃も亦爾なり、有る時は因無し、故に涅槃と名く。』

（五四）佛の言はく、『善男子、汝今說く所の是の如きの六義は、何が故ぞ、

---

【五一】次に第四番の問答。其中初に問、之に三段ありて初に指、二に難じて仰非す。

【五二】次に六無を以て難を爲す。

【五三】次に結し。

【五四】次に答。之に二段あり、其中初に無因。之に又三段ありて初に標、釋して一に就く。

【五五】次に六喩もて併非す。

【五六】次に無因を結す。又其中諸法は一に生死と云ひ生滅の法なり、皆生滅の故に因あり。涅槃は一に出世法とも云ひ、恒常不變の法なり、雖不滅の故に因なし。こは二法の當體面に就て論ず、若し主觀面に就かば生死は畢竟我なし、涅槃は畢竟我あり。之を修行の目標とす、故に果あり。

【五七】第二に有因。之に標、釋の二段ありて初に標章。

畢竟無の者を引いて以て涅槃を喩へずして、乃ち有時無を取る。善男子、涅槃の體、畢竟因無し。猶し我無く及び我所無きが如く、(五五)善男子、世法と涅槃と終に相對せず。是の故に六事は喩を爲すことを得ず。(五六)善男子、一切諸法は悉く我有ること無し、而も此の涅槃は眞實に我有り。是の義を以ての故に、涅槃は因無くして而も體是果なり。(五七)是因にして果に非ず、名けて佛性と爲す。因生に非ざるが故に、是因にして果に非ず。沙門果に非ず、故に非果と名く。何が故ぞ因と名くる、了因なるを以ての故なり。(五八)善男子、因に二種有り。一つには生因、二つには了因なり。(五九)能く法を生ずる者は、是を生因と名け、燈能く物を了にす、故に了因と名く。煩惱諸結是を生因と名け、衆生父母是を了因と名く。穀子等の如きは、是を生因と名け、地、水、糞等は、是を了因と名く。(六〇)復生因有り、六波羅蜜阿耨多羅三藐三菩提を謂ふ。復了因有り、佛性阿耨多羅三藐三菩提を謂ふ。(六一)復了因有り、六波羅蜜佛性を謂ふ。復生因有り、首楞嚴三昧阿耨多羅三藐三菩提を謂ふ。(六二)復了因有り、八正道阿耨多羅三藐三菩提を謂ふ。復生因有り、信心六波羅蜜を謂ふ。」

(六三)師子吼の言さく、『世尊、佛所說の如來及以佛性を見るの如き、是の義云何。世尊、如來の身相貌有ること無し。非長非短、非白非黑、方所有ること無し。三界に在らず、有爲相に非ず、眼識識る

【五八】次に釋。之に三段ありて初に生了二因有るを明す。
【五九】次に三譬を以て之を喩ふ。
【六〇】次に三法を以て之を合す。之に三段ありて初に事理相對。
【六一】次に散定相對。
【六二】次に橫竪相對。
【六三】是より第三に一番の問答ありて本宗を結成す。初に問。

に非ず。云何ぞ見るべけん。佛性も亦爾なり。』

（六四）佛の言はく、『善男子、佛身に二種あり。一つには常、二つには無常なり。無常とは一切衆生を度脱せんと欲するが爲に、方便して示現す。是を眼見と名く。常とは如來世尊の解脱の身なり。亦眼見と名け、亦聞見と名く。佛性も亦二種あり。一つには可見、二つには不可見なり。可見とは十住の菩薩、諸佛世尊なり。不可見とは、一切衆生なり。眼見とは、十住の菩薩、諸佛如來、衆生の所有の佛性を眼見するを謂ひ、聞見とは、一切衆生九住の菩薩、佛性有るを聞く。如來の身復二種有り。一つには是色、二つには非色なり。色とは如來解脱、非色とは如來永く諸の色相を斷ずるが故なり。佛性に二種あり。一つには是色、二つには非色なり。色とは阿耨多羅三藐三菩提なり。非色とは凡夫、乃至十住の菩薩なり。十住の菩薩は見ること了了ならず。故に非色と名く。善男子、佛性とは復二種有り。一つには是色、二つには非色なり。色とは佛菩薩を謂ひ、非色とは一切衆生なり。色とは名けて眼見と爲し、非色とは名けて聞見と爲す。（六五）佛性とは、内に非ず外に非ず。内外に非ずと雖も、（六六）然も失壞に非ず。（六七）故に衆生悉く佛性有りと名く。』

（六八）師子吼菩薩の言さく、『世尊、佛の所說の如き、一切衆生悉く佛性有り。乳の中に酪有り、金剛力士の如し。諸佛の佛性は清める醍醐の如し

【六四】次に答。

【六五】是より此品の中の第二の大段。前に佛性と作して說き、此に中道と作して說く。之に三段ありて初に略して中道を標す。之に又三段ありて初に雙非を標す。文の中、**内に非ず外に非ず**とは衆生の五陰は

と。云何ぞ如來說きて佛性は非內非外と言ふや。』(六九)佛の言はく、『善男子、我も亦乳の中に酪有りと說かず。酪は乳より生ず、故に酪有りと言ふ。』

(七〇)『世尊、一切の生法は各時節有り。』(七一)『善男子、乳の時に酪無く、亦生酥、熟酥、醍醐無し。一切衆生も亦是乳と謂ふ。是の故に我乳の中に酪無しと言ふ。(七二)如し其有らば、何が故ぞ二種の名字を得て、人の二能金鐵師と言ふが如くならざる。酪の時乳無く、生熟酥、及以醍醐に非ず。衆生も亦是酪にして乳に非ず、生熟酥、及以醍醐に非ずと謂ふ。乃至醍醐も亦復是の如し。(七三)善男子、因に二種有り。一つには正因、二つには緣因なり。正因とは乳の酪を生ずるが如く、緣因とは醪煖等の如し。乳より生ずるが故に、故に乳の中而も酪性有りと言ふ。』

(七四)師子吼の言さく、『世尊、若乳に酪性無ければ、角の中にも亦無し。何が故ぞ角の中より生ぜざるや。』(七五)『善男子、角も亦酪を生ず。何を以ての故に。我も亦說きて言ふ、緣因に二種有り。一つには醪、二つには煖なり。角性は煖なるが故に亦能く酪を生ずと。』

(七六)師子吼の言さく、『世尊、若角能く酪を生ぜば、酪を求むるの人、何

---

是れ因緣所生なれば是れ常に非ずして俗諦にあらず、故に外に非ずといふ。又た此の法は卽ち假にして眞諦にあらず、故に內に非ずといふ。次に、內外に非ずと言ふとは、此の句上に內外を雙非す、而かも復た中の故に不壞といふ、而して復た雙照す、故に不失といふ。

【六六】次に不失を標す。

【六七】次に悉有を標す。この文は前の非內非外を釋す。

【六八】是より第二に廣く難意を破す。之に二段あり、其中初に因中有果の執を破す。之に問答あり、其中初に當救に據る。之に六番の問答有り。初番に品の初めの如來性品を引いて問ふ。

【六九】次に佛答。

【七〇】次に第二番の問答。初に問。

が故ぞ乳を求めて而も角を取らざる。』(七七)佛の言はく、『善男子、是の故に我正因、緣因を說く。』

(七八)師子吼の言さく、『若乳の中に本酪性無し、今方に有らしむれば、乳の中に本菴摩羅樹無し、何が故ぞ生ぜざる。二つ倶に無きが故なり。』(七九)『善男子、乳も亦能く菴摩羅樹を生ず。若乳を以て灌がば、一夜の中增長すること五尺なり。是の義を以ての故に、我二因を說く。(八〇)善男子、若一切法一因より生ぜば、難じて乳の中何が故ぞ菴摩羅樹を出生すること能はざると言ふことを得べき。善男子、猶し四大、一切の色の、而も因緣と作る、然るに色各異に差別して同じからざるが如し。是の義を以ての故に、乳の中に菴摩羅樹を生ぜず。』

(八一)『世尊、佛の所說の如き、二種の因有り、正因、緣因なり。衆生の佛性は是何の因と爲さん。』(八二)『善男子、衆生の佛性も亦二種の因あり。一つには正因、二つには緣因なり。正因とは諸の衆生を謂ひ、緣因とは六波羅蜜を謂ふ。』

(八三)師子吼の言さく、『世尊、我今定んで乳に酪性有るを知る。何を以て

---

【七一】次に佛答。之に三段ありて初に卽空と作して牽破す。
【七二】次に縱答を作す。
【七三】次に更に示す。
【七四】次に第三番の問答。初に問。
【七五】次に佛答。
【七六】次に第四番の問答。初に問。
【七七】次に佛答。
【七八】次に第五番の問答。初に問。
【七九】次に佛答。之に二段ありて初に縱答。
【八〇】次に奪答。
【八一】次に第六番の問答。初に問。
【八二】次に佛答。
【八三】第二に世情に據る。之に二段あり、其中初に正しく執を破す。之に又二段あり、其中初に三番を作す。其中初番の問。

の故に、我世間の酪を求むる人を見るに、唯乳を取りて終に水を取らず。是の故に當に知るべし、乳に酪性有ることを。』(八四)『善男子、汝が所問の如く、是の義然らず。何を以ての故に。一切衆生面像を見んと欲して即便刀を取る。』

(八五)師子吼の言さく、『世尊、是の義を以ての故に乳に酪性有り。若刀に面像無ければ何が故ぞ刀を取る。』(八六)佛の言はく、『善男子、若此の刀の中に定んで面像有らば、何が故ぞ顛倒する。竪は則ち長を見、横は則ち闊を見る。若是自の面ならば、何が故ぞ長を見る。若是他の面ならば、何ぞ稱して是己が面像と言ふことを得ん。若己面に因りて他面を見ば、何が故ぞ驢馬の面像を見ざる。』

(八七)『世尊、眼光彼に到れる故に面長を見る。』(八八)『善男子、而も此の眼光實は彼に到らず。何を以ての故に。近遠一時倶に見ることを得るが故に。中間の所有物を見ざるが故なり。(八九)善男子、光若彼に到りて而も見ることを得ば、一切衆生悉く火を見て何が故ぞ燒けざる。人遠く白物を見るが如く、疑を生ずべからず。鵠か、幡か、人か、樹かと。若光到らば云何ぞ水精の中の物、淵中の魚石を見ることを得ん。若到らずして見ば、何が故ぞ水精中の物を見ることを得て、而も壁外の色を見ることを得ざる。(九〇)是の

【八四】次に佛答。之に先問、并難の二段あり。
【八五】次に第二番の問答。初に問。
【八六】次に佛答。
【八七】次に第三番の問答。初に問。
【八八】次に佛答。之に三段あり。初に光の實に到らざるを顯す。
【八九】次に假ひ到るも過有りと縦破す。之に四番の縦破あり。
【九〇】次に奪して結す。

故に若眼光彼に到りて而も長を見ると言ふは、是の義然らざるなり。(九一)善男子、汝が言ふ所の如き乳に酪有りとは、何が故ぞ乳を賣るの人、但乳の價を取りて酪の直を責めざる。譬馬を賣らば、但馬の價を取りて駒の直を責めざる。(九二)善男子、世人子無し、是の故に婦を聘す、婦若懷妊せば、女と言ふことを得ず。若是の女に兒性有るが故に、故に聘すべしと言はば、是の義然らず。何を以ての故に。若兒性有らば、亦孫有るべし。若孫有らば、則ち是兄弟ならん。何を以ての故に。一腹生の故なり。是の故に我女に兒性無しと言ふ。若其の乳中に酪性有らば、何が故ぞ一時に五味を見ざる。(九三)若樹子の中に(九四)尼拘陀五丈の質有らば、何が故ぞ一時に芽莖、枝葉、華果形色の異を見ざる。(九五)善男子、(九六)乳色時に異なり、味異なり、果異なる。乃至醍醐も亦復是の如し、云何ぞ乳に酪性有りと説くべけん。(九七)善男子、譬へば人有りて明當に酥を服すべきに、今已に臭を患はんが如し。若乳中に定んで酪性有りと言ふも亦復是の如し。

(九八)善男子、譬へば人有りて筆、紙、墨和合して字を成すこと有るが如し、而も是の紙中に本字有ること無し。本無を以ての故に緣を假りて成ず。若

【九一】次に更に重ねて破す。之に譬、合、結の三段あり。譬に又三段ありて初に醍醐を責むべしと示す。

【九二】次に子孫を懷くべしと示す。

【九三】次に五丈を含むべしと示す。

【九四】尼拘陀（Nyagrodha）。縱横葉と譯す、所謂榕樹（Ficus Indica）なり。

【九五】次に合譬。

【九六】乳色異り味異なり等。乳は白、酪は黄、故に色異れりと。乳は甜、酪は酢、故に味異る。乳は熱を治し、酪は冷を治す、故に果異る。

【九七】次に結呵。

【九八】次に第二に正義を示す。之に四段あり、其中初に譬を以て正義を示す。之に又二段ありて初に三譬。

本有らば、何ぞ衆緣を須ひん。譬へば青、黃合して綠色を成ずるが如し。當に知るべし、是の二つ本綠性無し。若し本有らば、何ぞ合して成ずることを須ひん。善男子、譬へば衆生食に因りて命を得るが如し、而も此の食中實に命有ること無し。若し本命有らば、未だ食せざるの時食是命なるべし。(九九)善男子、一切諸法、本性有ること無し。(一〇〇)是の義を以ての故に、我是の偈を說く、

「本無今有、本有今無、
三世有法、是の處有ること無し。」

と。善男子、一切諸法因緣の故に生じ、因緣の故に滅す。(一〇一)善男子、若し諸の衆生內に佛性有らば、一切衆生佛身有ること我が今の如くなるべきなり。衆生の佛性は不離、不壞、不牽、不捉、不繫、不縛なり。(一〇二)衆生の中の有らゆる虛空の如し。一切衆生悉く虛空有り、罣閡無きが故に、各自ら此の虛空有るを見ず。若し衆生をして虛空無からしめば、則ち去、來、行、住、坐、臥無く、生せず、長せず。是の義を以ての故に、我經中に一切衆生虛空界有りと說く。虛空界とは是を虛空と名く。(一〇三)衆生の佛性も亦復是の如し、(一〇四)十住の菩薩少しく能く之を見ること、(一〇五)金剛珠の如し。(一〇六)善男子、衆生の佛性は、諸佛の境界にして、是

【九九】次に合。
【一〇〇】次に偈を引いて證成す。
【一〇一】次に衆生身の空に約して正義を示す。之に四段ありて初に法。
【一〇二】次に譬。
【一〇三】次に合。
【一〇四】次に重譬。
【一〇五】金剛珠（ヴァジュラ・アクシャ）金剛は一種の寶樹といひ、其の種子を金剛子と稱す。念珠を製するに用ふ。又金剛子の名あり。
【一〇六】次に高く佛境に約す。

聲聞、緣覺の知る所に非ず。一切衆生佛性を見ず。是の故に常に煩惱に繫縛せられて生死に流轉す。佛性を見るが故に、諸結煩惱繫ぐこと能はざる所、生死を解脫し大涅槃を得。』

(一〇七)師子吼菩薩の言さく、『世尊、一切衆生佛性の性有ること、乳の中の酪性の如し。若し乳に酪性無ければ、云何ぞ佛二種の因有りと說きたまはん、一つには正因、二つには緣因なり。緣因とは、一つには醪、二つには煖なり。虛空は性無きが故に緣因無し。』(一〇八)佛の言はく、『善男子、若乳の中に定んで酪性有らしめば、何ぞ緣因を須ひん。』

(一〇九)師子吼菩薩の言さく、『世尊、性有るを以ての故に、故に緣因を須ひん。何を以ての故に。明かに見んと欲するが故なり。緣因とは卽ち是了因なり。世尊、譬へば闇中先より諸物有り、見んと欲するが爲の故に燈を以て照了するが如し。若本無なれば、燈何の照す所あらん。泥中に缾有り、故に人水輪、繩杖等を須ひて而も了因と爲すが如く、尼拘陀子の地、水、糞を須ひて而も了因と作すが如し。(一一〇)乳中の醪煖も亦復是の如し、了因と作すべし。是の故に先より性有りと雖も、要ず了因を假りて然して後見ることを得。是の義を以ての故に、定んで知る、乳中先より酪性の有ることを。』(一一一)『善男子、若乳の中に定んで酪性有らば、卽ち是了因なり。若是了因ならば、復何ぞ了を須ひん。(一一二)善

【一〇七】第三に緣因に據る。之に五番の問答あり。其中第一番の問答。初に問。
【一〇八】次に佛答。
【一〇九】次に第二番の問答。初に問。之に二段ありて初に三喩。
【一一〇】次に乳煖を引いて合す。
【一一一】次に佛答。之に四段ありて初に性は是了因なるを明す。
【一一二】次に了自ら了すべきを明す。

男子、若是了因性是了ならば常に自ら了すべし。若自ら了せざれば、何ぞ能く他を了せん。〔二三〕若了因に二種の性有り。一つには自ら了し、二つには他を了すと言はば、是の義然らず。何を以ての故に。了因一法なり、云何ぞ二つ有らん。〔二四〕若二つ有らば、乳も亦二つなるべし。若乳の中に二相無からしめば、云何ぞ了因而も猶二つ有らん。』

〔二五〕師子吼の言さく、『世尊、世人、〔二六〕我八人と共なりと言ふが如く、了因も亦爾なり、自ら了し他を了す。』〔二七〕佛の言はく、『善男子、了因若爾らば則ち了因に非ず。何を以ての故に。數ふる者は能く自色、他色を數ふ、故に八つと言ふことを得。而して此の〔二八〕色性自ら了相無し。了相無きが故に、要す智性を須ひて乃ち自他を數ふ。是の故に了因は自ら了することを能はず、亦他を了せず。〔二九〕善男子、一切衆生佛性有らば、何が故ぞ無量の功德を修習する。若修習是了因と言はば、已に酪に同ずることを壞す。若因中に定んで果有りと言はば、戒、定、智慧則ち增長すること無し。我世人本禁戒、禪定、智慧無し。師に從ひ受け已りて漸漸增益するを見る。若師教是了因と言はば、師教ふる時に當りて、受者未だ戒、定、智慧有ら

【二三】次に能く兩了すべきを明す。

【二四】次に正因を以て結を爲す。

【二五】次に第三番の問答。初に問。

【二六】我八人と共なり等、他を數へて七と爲し、已れをも加へて八となすが如し。此は自ら數へ、他を數ふ。他亦是の如く數ふ、故に自ら了し他を了す。

【二七】次に佛答し、之に二段あり、其中初に執を破す。之に破、釋の二段あり。

【二八】色性智性。智は能く自他を數ふるも、色は之を爲す能はず、了因も色の如し。故に別に一法ありて自他を了す、之を了因自了せずといふ。

【二九】次に正義を示す。

ず。若是了ならば、未有を了すべし。云何ぞ乃ち戒、定、智慧を了して增長を得しめん。』

(二〇)師子吼菩薩の言さく、『世尊、若了因無ければ、云何ぞ乳に有り酪有りと名くることを得ん。』(二一)『善男子、世間に難を答ふるに、凡そ三種有り。一つには轉答なり。上に說く所の、「何が故ぞ戒を持する、不悔を以ての故に、乃至大涅槃を得るが爲の故」の如し。二つには默然答なり。梵志有り來りて我に問ひて「我は是常なりや」と言ふ、我時に默然するが如し。三つには疑答なり。此の經の中の「若了因二つ有らば、乳の中何が故ぞ二つ有ることを得ざる」の如し。(二二)善男子、我今轉答す。世人乳有り酪有りと言はば、定んで得るを以ての故に、是の故に乳有り酪有りと名くることを得るが如く、佛性も亦爾なり、衆生有り佛性有り、當に見るべきを以ての故なり。』

(二三)師子吼の言さく、『世尊、佛の所說の如き、是の義然らず。(二四)過去已に滅し、未來未だ到らず、云何ぞ有と名けん。若當有名けて有と爲すと言はば、是の義然らず。世間の人兒息無きを見て便ち兒無しと言ふが如し。一切衆生佛性無き者、云何ぞ說きて一切衆生悉く佛性有りと言はん。』(二五)佛の言はく、『善男子、過去を有と名く。譬へば橘を種ゑて芽生じ子滅するに、芽も亦甘甜、乃至生果味も亦是の如し、熟し已りて乃ち醋きが如し。善男

【二〇】次に第四番の問答。初に問。

【二一】次に佛答。之に二段ありて初に泛く三答を出す。

【二二】次に正しく轉答を用ふ。

【二三】次に第五番の問答。初に問。之に二段ありて初に仰非す。

【二四】次に正しく問ふ。之に法、譬、合の三段あり。

【二五】次に佛答。之に譬、合の二段あり。初の譬に又四段ありて初に過去有を明す。

子、而して是の酢味は子芽、乃至生果に悉く無し。本に隨ひて熟する時に形色相貌ありて則ち酢味を生ず、而も是の酢味本無今有なり。本無今有と雖も、本に因らざるに非ず。是の如く本子復過去すと雖も、故に有と名くることを得。是の義を以ての故に、過去有と名く。(二三六)云何が復未來を名けて有と爲す。譬へば人有りて胡麻を種植す。人有り問ひて「何が故ぞ此を種うる」と言ふに、答へて「油有り」と言ふが如し。實は未だ油有らざれども、胡麻熟し已りて子を取りて熬蒸し、擣壓して乃ち得。當に知るべし、是の人虚妄に非ざるなり。是の義を以ての故に、未來有と名く。(二三七)云何が復過去有と名くるや。善男子、譬へば人有りて私に王を罵り、年歲を經歷して王乃ち之を聞く。聞き已りて卽ち問ふ「何が故ぞ罵る。」答へて言さく「大王、我罵らざるなり。何を以ての故に。罵者已に滅す。」王の言はく「罵者我が身二つ倶に在存す、云何ぞ滅と言はん。」是の因緣を以て身命を喪失するが如し。善男子、是の二つ實に無くして而も果滅せず、是を過去有と名く。(二三八)云何が復未來有と名くるや。譬へば人有りて陶師の所に往き、「瓶有りや否や」と問ふ。答へて「瓶有り」と言ふ。而も是の陶師實は未だ瓶有らず。泥有るを以ての故に、故に瓶有りと言ふが如し。當に知るべし、是の人妄語に非ざるなり。乳の中に酪有り。(二三九)衆生の佛性も亦復是の如し。佛性を見んと欲せば、應當に時節、形色を觀察すべし。是の故に我一切衆生悉く佛

【二三六】次に未來有を明す。
【二三七】次に重ねて過去有を明す。
【二三八】次に重ねて未來有を明す。
【二三九】次に合。
【二四〇】是より[illegible]に正因に約り「有」を顯す。之に四番の問答あり。初番の問に又法、譬、合、後の問答ありて初に法。

性有りと說く、實にして虛妄ならず。』

(一三〇)師子吼の言さく、『一切衆生佛性無くば、云何ぞ而も阿耨多羅三藐三菩提を得ん。正因を以ての故に、故に衆生をして阿耨多羅三藐三菩提を得しむ。何等か正因なる、所謂佛性なり。(一三一)世尊、若尼拘陀子に尼拘陀樹無ければ、何が故ぞ名けて尼拘陀子と爲して、而も名けて(一三二)佉陀羅子と爲さざる。(一三三)世尊、瞿曇姓稱して(一三四)阿低耶姓と爲すことを得ず、阿低耶姓も亦復瞿曇姓と稱することを得ざるが如く、(一三五)尼拘陀子も亦復是の如し、稱して佉陀羅子と爲すことを得ず、佉陀羅子、稱して尼拘陀子と爲すことを得ず、(一三六)猶し世尊、瞿曇種姓を捨離したまふことを得ざるが如し。(一三七)衆生の佛性も亦復是の如し。(一三八)是の義を以ての故に、當に知るべし、衆生悉く佛性有りと。』(一三九)佛の言はく、『善男子、若子の中に尼拘陀有りと言はば、是の義然らず。如其有らば、何が故ぞ見ざる。善男子、世閒の物因緣有るが故に、見ることを得べからざるが如し。云何が因緣なる。謂はく、遠くして見るべからず、空中の鳥迹の如し。近くして見るべからず、人の眼睫の如し。壞するが故に見ず、根敗の者の如し。亂想の故に見ず、心專一ならざるが如し。細の故に見ず、小微塵の如し。障ふるが故に見ず、

【一三一】次に譬。之に四段ありて、初に譬。
【一三二】佉陀羅(Khadira)。檐木と譯す。其の種子(akṣa)、又は苦革(putra)を稱して子と云ふ。
【一三三】次に傍に瞿曇姓を出す。
【一三四】阿低耶(Atreya)。アトリ(Atri)の後裔の姓。アトリは呑食と譯し、吠陀神話の作者として知らる。
【一三五】次に合。
【一三六】次に譬を以て姓に帖して難を爲す。
【一三七】次に合。
【一三八】次に結。
【一三九】次に佛答。之に二段ありて初に八事不可見。

雲表の星の如し。多きが故に見ず、稲聚の中の麻の如し。相似るが故に見ず、豆の豆聚に在るが如し。尼拘陀樹は是の如きの八種の因縁に同じからず、如し其有ならば何が故ぞ見ざらん。(一四〇)若細障の故に見ずと言はば、是の義然らず。(一四一)何を以ての故に。樹相麁なるが故なり。若性細と言はば、云何ぞ増長せん。若障の故に見るべからずと言はば、常に見るべからず。本麁相無し、今則ち麁を見ば、當に知るべし、是の麁本其の性無し、本見性無し、今則ち見るべし。當に知るべし、是の見も亦本性無し。子も亦是の如し、本樹有ること無し、今則ち之有り、當に何の咎か有るべき。』

(一四二)師子吼の言さく、『佛の所説の如き、二種の因有り。一つには正因、二つには了因なり。尼拘陀子地、水、糞を以て了因と作すが故に、細をして麁を得しむ。』(一四三)佛の言はく、『善男子、若本有ならば、何ぞ了因を須ひん。若本性無ければ、了何の了する所ぞ。(一四四)若尼拘陀の中本麁相無く、了因を以ての故に乃ち麁を生ずれば、何が故ぞ佉陀羅樹を生ぜざる。二つ倶に無なるが故なり。(一四五)善男子、若細見るべからざれば、麁見るべし。譬へば一塵は則ち見るべからず、多塵和合すれば則ち見るべきが如し。是の如き子の中麁見るべし。何を以ての故に。是の中已に芽莖、花果有り、一一の果中に無量の子有り、一一の子中に無量の樹有り。是の故に麁と名く。是の

【一四〇】次に二事を破す。之に二段ありて初に總非。
【一四一】次に正しく破す。之に細、障を破すの二段あり。
【一四二】次に第二番の問答。初に問。
【一四三】次に佛答。之に五段ありて初に本有本無皆了を須ひざることを明す。
【一四四】次に非果を出して難を爲す。
【一四五】次に麁にして見るべきなると難ず。

麤有るが故に、故に見るべし。(一四六)善男子、若尼拘陀子に尼拘陀の性有りて、而も樹を生ずれば、是の子火に燒かるるを眼見す。是の如く燒性も亦本有なるべし。若本有ならば、樹生ずべからず。(一四七)若一切法本生滅有らば、何が故ぞ先に生じ、後に滅して一時ならざるや。是の義を以ての故に、當に知るべし、性無きことを。』

(一四八)師子吼菩薩の言はく、『世尊、若尼拘陀子本樹性無けれども、而も樹を生ずれば、是の子何が故ぞ油を出さざる。二つ倶に無なるが故なり。』

(一四九)『善男子、是の如く子中も亦能く油を出す。本性無しと雖も、因緣の故に有なり。』

(一五〇)師子吼の言さく、『何が故ぞ胡麻油と名けざるや。』(一五一)『善男子、胡麻に非ざるが故なり。善男子、火緣火を生じ、水緣水を生ずるが如く、倶に緣に從ふと雖も、相有ること能はず。尼拘陀子及び胡麻油も亦復是の如し。倶に緣に從ふと雖も、各相生せず。尼拘陀子は性能く冷を治し、胡麻油は性能く風を治す。善男子、譬へば甘蔗因緣の故に石蜜、黑蜜を生ず。倶に一緣と雖も、色貌各異なり。石蜜は熱を治し、黑蜜は冷を治するが如し。』

(一五二)師子吼菩薩の言さく、『世尊、如其乳の中に酪性有ること無く、麻に油性無く、尼拘陀子に樹性

【一四六】次に麤相を以て並難を爲す。
【一四七】次に更に意を取りて其先生後滅を破す。
【一四八】次に第三番の問答。初に問。
【一四九】次に佛答。
【一五〇】次に第四番の問答。初に問。
【一五一】次に佛答。
【一五二】是より第二に因中無果の執を破す。之に一番の問答あり。問に三段ありて初に旨を領して仰非す。

有ること無く、泥に缾性無く、一切衆生に佛性無ければ、佛土に一切衆生悉く佛性有り、是の故に阿耨多羅三藐三菩提を得べしと說きたまへるが如きは、是の義然らず。(一五三)何を以ての故に。人天性無し。無性を以ての故に、人天と作るべく、天人と作るべし。業緣を以ての故に、性を以ての故にせず。菩薩摩訶薩業緣を以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提を得。(一五四)若し諸の衆生佛性有らば、何の因緣の故に、一闡提等善根を斷壞して地獄に墮する。若菩提心是佛性ならば、一闡提等能く斷ずべからず。若し斷ずべくば、云何ぞ佛性是常と言ふことを得ん。若非常ならば佛性と名けじ。(一五五)若し諸の衆生佛性有らば、何が故ぞ名けて初發心と爲すや。(一五六)云何ぞ而も是(一五七)毘跋致、阿毘跋致と言ふ。毘跋致ならば、當に知るべし、是の人佛性有ること無し。(一五八)世尊、菩薩摩訶薩一心に阿耨多羅三藐三菩提に趣向し、大慈大悲生、老、死、煩惱の過患を見、大涅槃、生、老、死、煩惱、諸過無きを觀じ、三寶及び業果報を信じ、禁戒を受持す。是の如き等の法を名けて佛性と爲す。若是の法を離れて佛性有らば、何ぞ是の法を須ひて、而も因緣と作さん。世尊、乳は緣を假らずして必ず當に酪と成るべく、生酥は爾らず、要ず因緣を得るが如し。所謂人功、水甁、鑽繩なり。衆生も亦爾なり、佛性有らば因緣を離れて、阿耨多羅三藐三菩提を得べし。

【一五三】次に正[illegible]。之に七段ありて初に[illegible]行に就く。

【一五四】次に斷善に就く。

【一五五】次に發心に據る。

【一五六】次に四不退に據る。

【一五七】毘跋致・阿毘跋致等。若し本より佛性あらば、退卽ち毘跋致(Vaivarti)なる可らずして、只だ不退卽ち阿毘跋致(Avaivarti)なるべし。然るに不退なるべきに旣に退あり、是あらば卽ち佛性無きを知るべし。

【一五八】次に萬行に據る。

(一五九)若定んで有ならば、行人何が故ぞ三惡の苦、生、老、病、死を見て、而も退心を生ずる。亦六波羅蜜を修するを須ひずして、即ち阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。乳の緣に非ずして酪と成ることを得るが如し。然るに六波羅蜜に因らずして、而も阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得るに非ず。是の義を以ての故に、當に知るべし、衆生悉く佛性無し、(一六〇)佛上に僧寶是常と說きたまふが如し。如其常ならば則ち無常に非ず。無常に非ざれば、云何ぞ而も阿耨多羅三藐三菩提を得ん。僧若常ならば云何ぞ復一切衆生悉く佛性有りと言はん。(一六一)世尊、若衆生をして本より已來菩提心無く、亦阿耨多羅三藐三菩提の心無くして、後方に有らしめば、衆生も佛性も亦是の如く本無後有なるべし。是の義を以ての故に、一切衆生佛性無かるべし。』

(一六二)佛の言はく、『善い哉善い哉善男子、汝已に久しく佛性の義を知る。衆生の爲の故に是の如きの問を作す。「一切衆生實に佛性有り。」(一六三)汝、衆生若佛性有らば、初發心有りと言ふべからずと言ふは、(一六四)善男子、心佛性に非ず。何を以ての故に。心は是無常、佛性は常なるが故なり。(一六五)汝何が故ぞ退心有ると言ふ、實は退心無し。心若退有らば、終に阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。遲く得るを以ての故に、之を名けて退と爲す。(一六六)此の菩提心は實に佛性に非ず。何を以ての故

【一五九】次に萬行を退すに據る。
【一六〇】次に僧寶に據る。
【一六一】次に結難。
【一六二】次に答。之に七段ありて初に第一の業行の問を答ふ。
【一六三】次に第三の發心の問を答ふ。之に二段ありて初に牒問。
【一六四】次に正答。
【一六五】次に第六の退行の問を答ふ。
【一六六】次に第二の斷善の問を答ふ。

に、一闡提等善根を斷じて地獄に墮するが故なり。若菩提心是佛性ならば、一闡提の輩は則ち一闡提と名くることを得ざるなり。菩提の心も亦名けて無常と爲すことを得ざるなり。是の故に定んで知んぬ、菩提の心實に佛性に非ず。（二六七）善男子、汝衆生若佛性有らば緣を假るべからず。乳の酪と成るが如しと言ふは、是の義然らず。何を以ての故に。五緣生酥を成ずと言ふが若し。當に知るべし、佛性も亦復是の如し。譬へば衆石に金有り、銀有り、銅有り、鐵有り、倶に四大を稟け、一名一實にして而も其の所出各各同じからず。要ず衆因緣衆生の福德、爐冶、人功を假りて然して後出生するが如し。是の故に當に知るべし、本金性無し。衆生の佛性名けて佛と爲さず、諸の功德因緣和合を以て佛性を見ることを得て然して後佛を得。（二六八）汝、衆生悉く佛性有り、何が故ぞ見ざると言ふは、是の義然らず。何を以ての故に。諸の因緣未だ和合せざるを以ての故なり。善男子、是の義を以ての故に、我二因の正因、緣因を說く。正因とは名けて佛性と爲し、緣因とは發菩提心なり。二因緣を以て阿耨多羅三藐三菩提を得る、石の金を出すが如しと說けり。（二六九）善男子、汝僧常に一切衆生佛性無しと言ふは、僧は和合と名く。和合に二種有り。一つには世和合、二つには第一義和合なり。世和合とは聲聞僧と名け、義和合とは菩薩僧と名く。世僧は無常、佛性は是常なり。佛性常なるが如く、義僧も亦常なり。（二七〇）

【二六七】次に第五の萬行の問を答ふ。これに二段ありて初に正答。

【二六八】次に更に意を取りて難ず。

【二六九】次に第七の僧寶の問を答ふ。之に四段ありて初に二種の和合。

【二七〇】次に十二因緣の和合し

復次に僧有り法和合を謂ふ。法和合とは十二部經を謂ふ。十二部經は常なり。是の故に我僧は是常と說法す。(一七一)善男子、僧を和合と名く、和合とは十二因緣と名く。十二因緣の中亦佛性有り、十二因緣常なれば佛性も亦常なり。是の故に我僧に佛性有りと說く。(一七二)又復僧とは、諸佛和合なり。是の故に我僧に佛性有りと說く。(一七三)善男子、汝、衆生若佛性有らば、云何ぞ退有り不退有りやと言ふは、諦かに聽け諦かに聽け、我當に汝が爲に分別解說すべし。

(一七四)善男子、菩薩摩訶薩十三法有るときは、則便退轉す。何等か十三なる。一つには心不信、二つには不作心、三つには疑心、四つには身財を吝惜す、五つには涅槃の中に於て大怖畏を生ず、云何ぞ乃ち衆生をして永く滅せしむる。六つには心堪忍せず、七つには心調柔せず、八つには愁惱、九つには不樂、十には放逸、十一には自ら己身を輕んず、十二には自ら煩惱能く壞する者無しと見る、十三には菩提の法に進趣するを樂はず。善男子、是を十三法諸の菩薩をして菩提を退轉せしむと名く。(一七五)復六法有りて菩提心を壞す。何等をか六つと爲す。一つには吝法、二つには諸衆生に於て不善心を起す、三つには惡友に親近す、四つには精進を勤めず、五つには自ら大いに憍慢なり、六つには(一七六)世業を營務す。是の如き六法は則ち能く菩提の心

【一七一】次に十二因緣の和合。
【一七二】次に諸佛の和合。
【一七三】次に第四の退不退の問を答ふ。之に二段ありて初に問を牒して聽を誡む。
【一七四】次に正しく答ふ。之に四段あり、其中初に退轉行。之に又四段ありて初に十三法。
【一七五】次に六法。
【一七六】世業を營務す。出家の學道にありて俗法を經營するをいふ。俗法とは眞修の外をいふ。

を壞す。善男子、人有りて諸佛世尊は是人天師なり、衆生の中に於て最上にして比無く、聲聞、辟支佛等に勝る。法眼明了にして法を見ること閡無く、能く衆生を大苦海に度すと聞くことを得、聞き已りて則ち復大誓願を發す「如其世間に是の如きの人有らば、我も亦當に得べし」。是の因緣を以て阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。或は復他に敎誨せられて菩提心を發す。或は菩薩阿僧祇劫に苦行を修行して、然して後乃ち阿耨多羅三藐三菩提を得と聞き、聞き已りて思惟す「我今是の如きの苦行に堪へず、云何ぞ能く得ん」と。是の故に退有り。(一七七)善男子、復五法の菩提心を退する有り。何等をか五つと爲す。一つには外道に在りて出家せんことを樂ふ、二つには大慈の心を修せず、三つには好んで法師の過罪を求む、四つには常に生死に處在することを樂ふ、五つには十二部經を受持、讀誦、書寫、解說することを喜ばず。是を五法菩提心を退すと名く。(一七八)復二法の菩提心を退する有り。何等をか二つと爲す。一つには五欲を貪樂す、二つには三寶を恭敬し尊重すること能はず。是の如き等の衆因緣を以ての故に菩提心を退す。

(一七九)云何が復不退の心と名く。人有り、佛能く衆生の生、老、病、死を除くと聞き、師に從ひて諮はず、自然に修習して阿耨多羅三藐三菩提を得と聞く。若し菩提道是れ得べくば、我當に修習して必ず之を得しむべし。是の因緣を以て菩提心を發し、所作の功德、若は多、若は少、悉く以て阿耨多羅三藐三菩提に回向す。是の誓願を作す「願はくは我常に諸佛、及び佛弟子に親近することを得、常に深法を聞き、

【一七七】次に五法。
【一七八】次に二法。
【一七九】第二に不退の類。

五情完具し、若苦難に遇ふとも是の心を失はず。復願はくは諸佛及び佛弟子、常に我が所に於て歡喜心を生じ五善根を具す、若諸の衆生我が身を斫伐し、手足、頭目、支節を斬截せば、常に是の人に於て大慈心を生じて深く自ら慶喜すべし。是の如きの諸人我が菩提を増長する因緣と爲る。若是無ければ、我當に何に緣りてか而も阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得べき。」復是の願を發す「我をして無根、二根、女人の身を得しむること莫れ。屬人に繋がれず、惡王に遭はず、惡王に屬せず、惡國に生ぜず。若好身を得ば種性眞正なり。財寶に多饒にして憍慢を生ぜず。我をして常に十二部經を聞きて受持、讀誦、書寫、解說せしむ。若衆生の爲に演說する所有らんに、願はくは受者をして敬信して疑無からしめん。常に我が所に於て惡心を生ぜず、寧ろ常に少しく聞きて多く義味を解すべし、多く聞きて義に於て了ならざることを願はず。願はくは（一八〇）心の師と作りて心を師とせず、身、口、意業惡と交らず、能く一切衆生に安樂を施さん。身戒、心慧動ぜざること山の如く、無上正法を受持せんと欲するが爲に、身、命、財に於て慳吝を生ぜず、不淨の物邪業を爲さず、正命自活して心に邪諂無く、受恩常に念じて「小恩も大に報ぜん」と。善く世中の所有の事業を知り、善く衆生方俗の言を解し、十二部經を讀誦、書寫し、懈怠、懶惰の心を生ぜず。若諸の衆生聽聞を樂はざれば、方便引接して後をして樂聞せしむ。言常に柔耎にして口惡を宣べず、不

【一八〇】心の師となるに就て二解あり、一に前心惡を起し後心能く止む、二に所作人を假つて心に隨はずと。上の文に「諸佛の師とする所は謂ゆる法なり」といふを案じて知るべし。

和合の衆を能く和合せしむ。憂怖の者有らば憂怖を離れしめ、饑饉の世には豊足を得しめ、疫病の世に大醫王と作り、妙藥所須の財寶自在にして疾病者をして悉く除愈を得しむ。刀兵の劫に大力勢有らば、其の戰害を斷じて還つて怨無からしめ、能く衆生の種種の畏を斷ず。所謂死畏、鬪諍、打擲、水火、王賊、貧窮、債負、惡名、三塗、是の如き等の畏、悉く當に之を斷ずべし。父母、師長に深く恭敬を生じ、怨憎の中に大慈心を生ず。常に六念、空三昧門、十二因縁、生滅等の觀、出息、入息、天行、梵行、及以聖行、金剛三昧、首楞嚴定を修し、三寶無き處に我をして自ら寂靜の心を得しむ。若其身心に大苦を受くる時、無上菩提の心を失ふこと莫れ。聲聞、辟支佛の心を以て知足を生ずること莫れ。三寶無き處常に外道の法の中に在りて出家し、邪見を壞せんが爲にして其道を習はず。法自在を得、心自在を得、有爲法に於て了了に過を見る。我をして二乘の道果を怖畏すること命を惜む者の身を捨つるを怖畏するが如くならしむ。衆生の爲の故に寧ろ耐へて三惡に處ること諸の衆生の利益を與ふるが如く、一一の人の爲に無量劫に於て、地獄の苦を受けて心悔を生ぜず、他の利を得るを見て嫉心を生ぜず。常に歡喜を生ずること自ら樂を得るが如し。若三寶に値はば常に衣服、飲食、臥具、房舍、醫藥、燈明、香花、伎樂、幡蓋、七寶を以て供養すべし。若佛戒を受くれば堅固に護持し、終に毀犯の想を生ぜず。若菩薩の修行苦行を聞かば、其の心歡喜して悔恨を生ぜず。自ら往世宿命の事を識り、終に五逆、闡提、謗法の業を造作せず、果報の爲に因縁を習はず、現在の樂に於て貪著を生ぜず。善男子、若能く是

是の如きの願を發す者有らば、是を菩薩終に菩提の心を退失せずと名け、亦施主と名く。能く如來を見佛性を明了にし、能く衆生を調へて生死を度脱す。善能く無上正法を護持し、能く六波羅蜜を具足することを得。善男子、是の義を以ての故に、不退の心を佛性と名けず。

（一八二）善男子、汝退心有るを以ての故に、諸の衆生佛性有ること無しと言ふべからず。譬へば二人倶に聞く、他方に七寶山有り。山に清泉有りて其の味甘美、能く到る者有らば永く貧窮を斷ち、其の水を服する者は壽命萬歲なり。唯路懸遠險阻にして難多しと。時に彼の二人倶に共に往かんと欲す。一人は種種の行具を莊嚴し、一は則ち空しく往きて齎持する所無し。相與に前進して路に一人に逢ふ、多く寶貨を齎し七珍具足す。二人便ち前んで問ひて言はく「仁者、彼の土實に七寶山有りや。」其の人答へて言はく「實に有りて虛ならず、我已に寶を獲、其の水を飲服す。唯患ふ、路險にして多く盜賊、砂礫、棘刺有り、水草に乏し。往く者千萬、達する者甚だ少し。」是の事を聞き已りて、一人は即ち悔い尋いで是の言を作さく「路既に懸遠にして艱難一に非ず、往く者無量、達する者幾も無し。而も我云何ぞ當に能く彼に到るべき。我今產業粗自ら供足す。若し斯の路を涉らば或は身命を失せん。身命全からざれば長壽安にか在らん。」一人は復言はく「人の能く過ぐる有り、我亦能く過ぎん。若し果して達することを得ば、則ち願の如く珍寶を采取し、甘水を飲服することを得ん、如其達せざれば死を以て期と爲す。」是の時二

【一八二】第三に譬じて退不退の兩人を明して並し、其間に開ゆ。之に二段ありて初に譬。

人二りは則ち悔いて退き、一りは則ち前進して彼の山所に到り、多く財寶を獲、願の如く、水を服し、多く所有を齎して其の所止に還り、父母に奉養し宗親に供給す。時に悔いて還れる者見の事を見已りて、心に復熱を生ず、彼去りて已に還る、我何ぞ住るを爲さん。即便莊嚴して路を渉り去るが如し。(一八二)七寶山とは大涅槃を喩へ、甘味の水は佛性を喩へ、其の二人は二菩薩の初發心者を喩へ、險惡道は生死を喩へ、逢ふ所の人は佛世尊を喩へ、有盗賊は四魔を喩へ、砂礫棘刺は諸の煩惱を喩へ、無水草とは菩提道を修せざるを喩へ、一人還るは退轉の菩薩を喩へ、一人往くは不退轉の菩薩を喩ふ。善男子、衆生の佛性常住にして變せず、猶彼の險道の說きて、一人悔いて還るが故に道をして無常ならしむと言ふ可らざるがごとく、佛性も亦爾なり。善男子、菩提道中終に退者無し。善男子、向の悔者其の先伴の寶を獲て還りて勢力自在、父母に供養し、宗親に給足し、多く安樂を受くるを見る。是の事を見已りて心中熱を生じ、即ち復莊嚴して道を復して還り去り、身命を惜まず艱難に堪忍し、遂に便ち彼の七寶山中に到るが如く、退轉の菩薩も亦復是の如し。善男子、一切衆生定んで當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得べし。是の義を以ての故に、我經中に「一切衆生、乃至五逆、犯四重禁、及び一闡提悉く佛性有り」と說く。』

(一八三)師子吼の言さく、『世尊、云何が菩薩退不退有る。』(一八四)『善男子、若し菩薩、如來の三十二相の業因緣を修習する有らば不退と名くるを得、菩薩摩訶薩と名くるを得。不動轉と名け、名けて一切衆生を憐

【一八二】次に合す。

【一八三】第四に重ねて不退行を明す。此中先づ問。

【一八四】次に答。

憫すと爲す。一切の世間、[illegible]に勝ると名け、阿毗曇鼓と名く。善男子、若菩薩摩訶薩持戒動せず、其心移らず、實語に安住する須彌山の如し。是の業縁を以て足下平如奩底相を得。若菩薩摩訶薩其の父母、和上、師長、乃至畜生に於て、如法の財を以て供養供給す。是の業縁を以て足下千輻輪相を成ずるを得。若菩薩摩訶薩不殺、不盜、父母、師長に於て常に歡喜を生ず。是の業縁を以て三相を成ずるを得。一つに手指纖長、二つに足跟長、三つに其の身方直なり。是の如き三相同一業縁なり。若菩薩摩訶薩四攝法を修して衆生を攝取す。是の業縁を以て網縵指の白鵞王の如くなるを得。若菩薩摩訶薩父母、師長、若は病苦の時自手洗拭し、捉持按摩す。是の業縁を以て手足耎を得。若菩薩摩訶薩持戒、聞法、惠施厭ふ無し。是の業縁を以て、節踝䏶滿身毛上靡を得。若菩薩摩訶薩專心に法を聽き、正教を演說す。是の業縁を以て鹿王䏶を得。若菩薩摩訶薩衆生に於て害心を生ぜず、飲食足るを知り、常に惠施を樂み、病を瞻て藥を給す。是の業縁を以て其の身圓滿にして尼拘陀樹の如く、立手過膝、頂に肉髻、無見頂相有り。若菩薩摩訶薩怖畏を見て爲に救護を作し、裸跣の者を見て衣服を施與す。是の業縁を以て陰藏相を得。若菩薩摩訶薩智者に親近し、愚人を遠離し、善く喜び問答し、行路を掃治す。是の業縁を以て皮膚細耎、身毛右旋す。若菩薩摩訶薩常に衣服、飲食、臥具、醫藥、香華、燈明を以て人に施す。是の業縁を以て身金色常光明曜を得。若菩薩摩訶薩施を行ずる時、所珍の物能く捨て吝まず、福田及び非福田を觀ず。是の業縁を以て七處滿相を得。若菩薩摩訶薩布施の時、心に疑を生ぜず。是の業縁を以て柔耎聲を得。若菩薩摩訶薩

如法に財を求め以用て布施す。是の業縁を以て缺骨充滿、師子上身、臂肘傭纖を得。若菩薩摩訶薩兩舌、惡口、恚心を遠離す。是の業縁を以て四十齒白淨齊密を得。若菩薩摩訶薩諸の衆生に於て大慈悲を修す。是の業縁を以て二牙相を得。若菩薩摩訶薩常に是の願を作す、「來り求むる有らば意に隨ひて給與せん」と。是の業縁を以て師子頰を得。若菩薩摩訶薩諸の衆生の所須の飲食に隨ひて悉く皆之を與ふ。是の業縁を以て味中上味を得。若菩薩摩訶薩自ら十善を修し、兼ねて以て人を化す。是の業縁を以て廣長舌を得。若菩薩摩訶薩彼の短を訟へず、正法を謗らず。是の業縁を以て梵音聲を得。若菩薩摩訶薩諸の怨憎を見て喜心を生ず。是の業縁を以て目睫紺色を得。若菩薩摩訶薩他徳を隱さず、其の善を稱揚す。是の業縁を以て白毫相を得。善男子、菩薩摩訶薩是の如き三十二相の業因縁を修習する時、則ち菩提の心を退かざることを得。

【一八五】善男子、【一八六】一切衆生思議すべからず、諸佛境界、業果、佛性亦思議すべからず。何を以ての故に、是の如き四法は皆悉く是常なり。是の常を以ての故に思議すべからず。一切衆生煩惱覆障す、故に名けて常と爲す。斷常煩惱。故に無常と名く。若一切衆生常と言はば、何が故ぞ八聖道分を修習して衆苦を斷せんが爲にする。衆苦若し斷せば、則ち無常と名く。所受の樂則ち名けて常と爲す。是の故に我「一切衆生煩惱覆障して佛性を見ず、見ざるを以ての故に涅槃を得ず」と言ふ。」

【一八五】是より第三に佛性を結歎す。

【一八六】一切衆生等。是の文五種佛性を具す、衆生は正因、諸佛境界は果性と果果性、業果は了因、佛性は境界性となり。又一説に衆生を正因、佛境界を境界性、業を了因、果を果性及び果果性とし、佛性を但だ總結なりとす。

# 巻の第二十七

## 師子吼菩薩品の三

(一)師子吼の言さく、「世尊、佛の所說の如き、一切諸法に二種の因有り。一つには正因、二つには緣因なり。是の二因を以て縛解無かるべし。(二)是の五陰は念念生滅す。如其生滅せば誰か縛り誰か解かん。世尊、此の五陰に因りて後の五陰を生ず。此の陰自ら滅して彼の陰に至らず、彼に至らずと雖も能く彼の陰を生ず。子に因りて芽を生じ、子芽に至らず。芽に至らずと雖も而も能く芽を生ずるが如く、衆生も亦爾なり。云何ぞ縛解せん。」(三)「善男子、諦かに聽き諦かに聽け。我當に汝が爲に分別解說すべし。(四)善男子、人命を捨て大苦を受くる時の如き、宗親圍繞して號哭懊惱し、其の人惶怖して依救を知ること莫く、五情有りと雖も覺知する所無し。支節戰動して自ら持すること能はず。身體虛冷、煗氣盡きんと欲す。先より修する所の善惡の報相を見る。(五)善男子、日の沒するに垂んとし、山陵、堆阜影現して東に移り、理西に

---

【一】是より第三に縛解を明す。之に五番の問答あり。初番の問答の中、問に二段ありて初に皆な有して無を唱ふ。

【二】次に生滅を以て難じ答す。中に法、譬、合の三段あり。

【三】次に佛答。之に二段ありて初に聽を誡む。

【四】次に正答。これに二段あり、其中初に譬。之に又三段あり、初には死險。之に法、譬、合の三段ありて初に法。

【五】次に譬。

逝くこと無きが如く、(六)衆生の業果も亦復是の如し。此の陰滅する時、彼の陰續き生ず。燈生ずれば闇滅し、燈滅すれば闇生ずるが如し。(七)善男子、蠟印泥に印する、印泥と合し、印滅して文成る。而も是の(八)蠟印變じて泥に在らず。文泥より出づるに非ず、餘處より來らず。印の因緣を以て而も是の文を生ずるが如し。(九)現在の陰滅して中陰の陰生ず。是の現在の陰終に變じて中陰の五陰と爲らず。中陰の五陰も亦自生に非ず、餘より來らず。現陰に因るが故に中陰の陰を生ず。印泥に印し印壞して文成る。名差ふこと無しと雖も、而も、時節各異るが如し。(一〇)是の故に我說く、「中陰の五陰は肉眼の見に非ず、天眼の所見なり。」是の中陰の中に三種の食有り。一つには思食、二つには觸食、三つには意食なり。中陰に二種あり。一つには善業果、二つには惡業果なり。善業に因るが故に善覺觀を得、惡業に因るが故に惡覺觀を得。(一一)父母交會牉合の時、業因緣に隨ひて受生の處に向ふ。母に於て愛を生じ、父に於て瞋を生ず。父の精出づる時是己が有と謂ふ、見已りて心悅んで而も歡喜を生ず。是の三種の煩惱因緣を以て、中陰の陰壞して後の五陰を生ず。印泥に印し印壞して文成るが如し。生ずる時諸根具、不具有り、具する者色を見ば則ち貪を生ず。貪を生ずるが故に則ち名けて愛と爲す。狂の故に

【六】次に合。之に正合、更に譬を引くの二段あり。

【七】第二に中陰。之に二段ありて初に譬。

【八】蠟は死陰を、泥は中陰を、印滅文成は死陰若し滅すれば中陰起るを喩ふ。文非泥出とは此身中陰の所出に非ず、無因に非ず、亦餘來せず、但だ因緣の所生なるを示す。

【九】次に合。之に三段ありて初に正しく合す。之に又正合、譬を以て結合するの二段あり。

【一〇】次に二種に食を料簡す。

【一一】第三に中陰。

貪を生ず、是を無明と名く。貪愛、無明の二因緣の故に、見る所の境界皆悉く顚倒す。無常を常と見、無我を我と見、無樂を樂と見、無淨を淨と見る。顚倒を以ての故に、善惡の行を作す。煩惱業を作り、業煩惱を作る、是を繫縛と名く。是の義を以ての故に、五陰生と名く。(一二)是の人若佛、及び佛弟子、諸の善知識に親近することを得、便ち十二部經を聞受することを得れば、法を聞くを以ての故に、善境界を觀る。善境界を觀るが故に、大智慧を得。大智慧とは正知見と名く。知見を得るが故に、生死の中に於て而も悔心を生ず。悔心を生ずるが故に歡喜を生ぜず。歡喜を生ぜざるが故に能く貪心を破す。貪心を破するが故に八聖道を修す。八聖道を修するが故に生死無きことを得。生死無きが故に解脫を得と名く。火の薪に遇はざる、之を名けて滅と爲すが如く、生死を滅するが故に名けて滅度と爲す。是の義を以ての故に五陰滅と名く。』

(一三)師子吼の言さく、『空の中に刺無し、云何ぞ拔くと言はん。(一四)陰繫ぐ者無し、云何ぞ繫縛せん。』(一五)佛の言はく、『善男子、煩惱の鎖を以て五陰を繫縛す。五陰を離れ已りて別の煩惱無く、煩惱を離れ已りて別の五陰無し。(一六)善男子、柱の屋を持する、(一七)屋を離れて柱無く、柱を離れて屋無きが如く、衆生の五陰も、亦復是の如し、煩惱有るが故に

【一二】次に第二に譬。
【一三】是より第二の問答。初に問。之に二段ありて初に逆答。
【一四】次に論義者の無。
【一五】第二に佛答。之に二段ありて初に法。
【一六】次に譬。
【一七】屋と柱と、屋を擧げ柱を擧ぐれば常合する時に約して譬を論じ、常離るる時を論ず、柱と合はざる時は不常不斷を論ず、離は假、離は眞、不離不離は中道に譬す。是れ三諦相卽の相なり。

名けて繫縛と爲し、煩惱無きが故に名けて解脫と爲す。善男子、拳の掌を合する、繫縛等の三、合散生滅更に別法無きが如く、衆生の五陰も亦復是の如し、煩惱有るが故に名けて繫縛と爲し、煩惱無きが故に名けて解脫と爲す。善男子、名色衆生を繫縛すと說くが如き、名色若滅すれば則ち衆生無し。名色を離れ已りて別の衆生無し、衆生を離れ已りて別の名色無し。亦名色衆生を繫縛すと名け、亦衆生名色を繫縛すと名く。』

〔一八〕師子吼の言さく、『世尊、眼の自ら見ざる、指の自ら觸れざる、刀の自ら割かざる、受の自ら受けざるが如く、云何ぞ如來說きて「名色名色を繫縛す」と言ふ。何を以ての故に。名色と言ふは即ち是衆生なり、衆生と言ふは即ち是名色なり。若名色衆生を繫縛すと言はば、即ち是名色名色を繫縛するなり。』〔一九〕佛の言はく、『善男子、二手合する時更に異法の來合する無きが如きなり。名と色とも亦復是の如し。是の義を以ての故に、我れ「名色衆生を繫縛す」と言ふ。若名色を離るれば則ち解脫を得。是の故に我「衆生解脫」と言ふ。』

〔二〇〕師子吼の言さく、『世尊、若名色の是繫縛する有れば、諸の阿羅漢未だ名色を離れず、亦繫縛すべし。』〔二一〕『善男子、解脫に二種、一つには子斷、二つには果斷なり。子斷と言ふは斷煩惱と名く。阿羅漢等已に煩惱を斷じ、諸結壞す。是の故に子結繫縛すること能はず。未だ果を斷ぜざるが故に果繫縛

【一八】是より第三番の問答。初に問。

【一九】次に佛答。

【二〇】是より第四番の問答。初に問。

【二一】次に佛答。之に三段あり、初に法。

と名く。諸の阿羅漢佛性を見ず。不見を以ての故に阿耨多羅三藐三菩提を得ず。是の義を以ての故に果繫と言ふべし。説きて名色繫縛と言ふことを得ず。(三二)善男子、譬へば燃燈の油未だ盡きざる時は明則ち滅せず、油若し盡くれば滅すること則ち疑ふこと無きが如し。(三三)善男子、言ふ所の油とは諸の煩惱を喩へ、燈は衆生を喩ふ。一切衆生煩惱の油の故に涅槃に入らず、若し斷ずることを得ば則ち涅槃に入る。」

(三四)師子吼の言さく、『世尊、燈と油との二性各異なり。衆生、煩惱は則ち是の如くならず、衆生即ち是煩惱、煩惱即ち是衆生なり。衆生を五陰と名け、五陰を衆生と名く。五陰を煩惱と名け、煩惱を五陰と名く。云何ぞ如來之を燈に喩ふるや。』(三五)佛の言はく、『善男子、喩に八種有り。一つには(三六)順喩、二つには逆喩、三つには現喩、四つには非喩、五つには先喩、六つには後喩、七つには先後喩、八つには徧喩なり。云何が順喩なる。經中に説くが如く、天大雨を降して溝瀆皆滿ず。溝瀆滿ずるが故に小阬滿す。小阬滿ずるが故に大阬滿ず。大阬滿ずるが故に小泉滿ず。小泉滿ずるが故に大泉滿ず。大泉滿ずるが故に小池滿ず。小池滿ずるが故に大池滿ず。大池滿ずるが故に小河滿ず。小河滿ずるが故に大河滿ず。大河滿ずるが故に大海滿ず。如來の法雨も亦復是の如し、衆生戒滿ず、戒滿足するが故に不悔心滿ず。

【三二】次に釋。

【三三】次に合。

【三四】是より第五番の問答。佛に問ふ。

【三五】次に佛答。之に二段あり、其中初に順、逆、現、非、先、後、先後、徧喩の八喩あり。これに列章、解釋の二段あり。

【三六】順喩等。從小向大を順、從大向小を逆、現事を取るを現、順逆及び現に非ざるを非、先喩後合を先、先結後用を後、或は先或は後を先後、其の始末を盡すを徧となす。

不悔心満ずるが故に歡喜満ず。歡喜満ずるが故に遠離満ず。遠離満ずるが故に安隱満ず。安隱満ずるが故に三昧満ず。三昧満ずるが故に正知見満ず。正知見満ずるが故に厭離満ず。厭離満ずるが故に訶責満ず。訶責満ずるが故に解脱満ず。解脱満ずるが故に涅槃満ず。是を譬喩と名く。云何が逆喩なる。大海本有り、所謂大河なり。大河本有り、所謂小河なり。小河本有り、所謂大池なり。大池本有り、所謂小池なり。小池本有り、所謂大泉なり。大泉本有り、所謂小泉なり。小泉本有り、所謂大陂なり。大陂本有り、所謂小陂なり。小陂本有り、所謂溝瀆なり。溝瀆本有り、所謂大雨なり。涅槃本有り、所謂解脱なり。解脱本有り、所謂訶責なり。訶責本有り、所謂厭離なり。厭離本有り、所謂正知見なり。正知見本有り、所謂三昧なり。三昧本有り、所謂安隱なり。安隱本有り、所謂遠離なり。遠離本有り、所謂喜心なり。喜心本有り、所謂不悔なり。不悔本有り、所謂持戒なり。持戒本有り、所謂法明なり。是を逆喩と名く。云何が現喩なる。經中に說くが如し、衆生の心性猶し獼猴の若し。獼猴の性一を捨てて一を取る。衆生の心性も亦復是の如し、色、聲、香、味、觸、法に取著して暫くも住する時無し。是を現喩と名く。云何が非喩なる。我昔波斯匿王に告ぐるが如し、「大王、親信の人有り四方より來りて各是の言を作さく、大王、四大山有り、四方より來りて人民を害せんと欲すと。王若聞かば當に何の計をか設くべき。」王の言さく、「世尊、設ひ此に來る有るも逃避の處無し。唯當に專心に持戒、布施すべし。」我即ち讚じて言はく、「善い哉大王、我四山を說く、即ち是衆生の生、老、病、死なり。生、

老、病、死は常に來りて人に切る。云何ぞ大王戒施を修せざらん。」王の言さく、「世尊、持戒、布施何等の果をか得る。」我言はく、「大王、人天の中に於て多く快樂を受く。」王の言さく、「世尊、尼拘陀樹持戒、布施せば、亦人天に於て安樂を受けんや。」我言はく、「大王、尼拘陀樹は戒を持し布施を修行すること能はず。如其能くせば則ち受くること異なること無けん。是を非喩と名く。云何が先喩なる。我經中に說く、譬へば人有りて妙華に貪著し、采取の時水に漂はさるるが如く、衆生も亦爾なり、五欲に貪著して生、老、死に漂沒せらる。是を先喩と名く。云何が後喩なる。法句經に說くが如し、

「小惡を輕んじて、以て殃無しと爲すこと莫れ。
水滴微なりと雖も、漸く大器に盈つ。」

是を後喩と名く。云何が先後喩なる。譬へば芭蕉の果を生ずれば則ち死るるが如く、愚人養を得るも亦復是の如し。騾の懷妊すれば命久しく全からざるが如し。云何が偏喩なる。經中に說くが如し。(二七)三十三天に(二八)波利質多樹有り。其の根地に入り深きこと五由旬、高さ百由旬、枝葉四に布くこと五十由旬、葉熟すれば則ち黃なり、諸天見已りて心に歡喜を生ず。是の葉久しからずして必ず當に墮落すべし。其の葉既に落つれば復歡喜を生ず。是の枝久しからずして必ず當に色を變ずべし。枝既に色を變ずれば復歡喜を生ず。是の色久しからずし

【二七】三十三天は忉利天（Trāyastriṃśa）の譯。欲界六欲天の第二、須彌山の頂、閻浮提の上、八萬由旬の處にあり。

【二八】波利質多（Pārijāta）。圓生と譯す、忉利天歡喜園に在る樹の名。

て必ず當に飽を生ずべし。見已りて復喜ぶ。是の飽久しからずして必ず當に觜を生ずべし。見已りて復喜ぶ。是の觜久しからずして必ず當に開敷すべし。開敷の時香氣周偏すること五十由旬、光明遠く照すこと八十由旬なり。爾の時に諸天夏三月の時下に在りて樂を受く。善男子、我が諸の弟子も亦復是の如し。葉色黄とは我が弟子出家を念欲するを喩へ、其の葉落つとは我が弟子鬚髪を剃除するを喩へ、其の色變ずとは我が弟子白四羯磨して具足戒を受くるを喩へ、初飽を生ずるは我が弟子阿耨多羅三藐三菩提の心を發すを譬へ、觜とは十住の菩薩佛性を見ることを得るを譬へ、開敷とは菩薩阿耨多羅三藐三菩提を得るを譬へ、香とは十方無量の衆生禁戒を受持するを譬へ、光とは如來の名號無礙にして十方に周偏するを譬へ、夏三月とは三三昧を譬へ、三十三天快樂を受くるは、諸佛大涅槃に在りて常、樂、我、淨を得るを譬ふ。是を徧喩と名く。

【二九】次に燈喩を合す。

善男子、凡そ引く所の喩必ずしも盡取せず。或は少分を取り、或は多分を取り、或は復全く取る。「如來の面は滿月の如し」と言ふが如し。是を少分と名く。善男子、譬へば人有りて初より乳を見ず。轉た他に問ひて言はく、「乳は何の類と爲す。」復の人答へて言はく、「水、蜜、貝の如し」と。水は則ち濕相、蜜は則ち甜相、貝は則ち色相なり。三譬を引くと雖も未だ即ち乳の實ならざるが如し。善男子、我今喩衆生を喩ふと言ふも亦復是の如し。善男子、水を離れて河無く、衆生も亦爾なり、五陰を離れ已りて別の衆生無し。善男子、車輿、輪軸、轂輻を離れて更に別の車無きが如く、衆生も亦爾なり。二九善

男子、若彼の燈喩を合することを得んと欲すれば、諦かに聽き諦かに聽け、我今當に說くべし、炷とは二十五有を譬へ、油とは愛を喩へ、明とは智慧を喩へ、破は黑闇を除き無明は破するを喩へ、燋は聖道を喩ふ。燈油盡くれば明焰則ち滅するが如し。衆生愛盡くれば則ち佛性を見る。名色有りと雖も繫縛すること能はず。復二十五有に處在すと雖も、諸有に汚染せられず。』

（三〇）師子吼の言さく、『世尊、衆生の五陰空にして所有無し。誰か敎を受けて道を修習する者有らん。』（三一）佛の言はく、『善男子、一切衆生皆念心、慧心、發心、勤精進心、信心、定心有り。是の如き等の法、念念生滅すと雖も、猶故相似相續して斷せず。故に修道と名く。』

（三二）師子吼の言さく、『世尊、是の如き等の法皆念念に滅す。是の念念の滅も亦相似相續す。云何ぞ修習せん。』（三三）佛の言はく、『善男子、燈の念念に滅すと雖も而も光明有りて闇冥を除破するが如く、念等の諸法も亦復是の如し。善男子、衆生の食念念に滅すと雖も、亦饑者をして飽滿を得しむるが如し。譬へば上藥念念に滅すと雖も、亦能く病を愈し、日月の光明念念に滅すと雖も、亦能く樹林、草木を增長するが如し。（三四）善男子、「汝念念に滅す、云何が增長せん」と言ふは、心斷せざるが故に、名けて增長と爲す。（三五）善男子、人の書を誦する、誦する所の字句

【三〇】是より第四に修道を明す。之に四段あり、其中初に道の修すべきを明す。之に三番の問答あり。先づ初番の問。
【三一】次に佛答。
【三二】次に第二番の問答。初に問。
【三三】次に佛答。之に三段ありて初に修道を論ずることを得。
【三四】次に意を取りて解す。
【三五】次に六譬を以て增長を明す。

一時なることを得ず。前中に至らず。中後に至らず。人と字と及以心想、倶に念念に滅す。久しく修するを以ての故に、而も通利を得るが如し。善男子、譬へば金師の初、作を習ふより皓首に至るまで、念念滅の前、後に至らずと雖も、積習を以ての故に所作遂に妙なり。是の故に善好金師と稱することを得るが如く、經書を讀誦することも亦復是の如し。善男子、譬へば種子、地も亦「汝當に芽を生ずべし」と教へざれども、法性を以ての故に芽則ち自ら生じ、乃至華も亦「汝當に果を作すべし」と教へざれども、法性を以ての故に果自ら生ずるが如く、衆生の修道も亦復是の如し。善男子、譬へば數法、一は二に至らず、二は三に至らず、念念に滅すと雖も而も千萬に至るが如く、衆生の修道も亦復是の如し。善男子、燈の念念に滅する、初滅の餤後餤に「我滅す、汝生じて當に諸闇を破すべし」と教へざるが如し。善男子、譬へば犢子の生ずれば便ち乳を求む。乳を求むるの智、實に人の教ふる無し。念念に滅すと雖も而も初饑、後飽するが如し。是の故に當に知るべし、相似るべからず、若相似ば、異生すべからず。衆生の修道も亦復是の如し、初め未だ曾てせずと雖も、久修を以ての故に則ち能く一切の煩惱を破壞す。」

（三六）師子吼の言さく、『世尊、佛の所說の如く、須陀洹の人果證を得已らば、惡國に生ずと雖も猶故戒を持して殺、盜、婬、兩舌、飮酒せず。須陀洹の陰は即ち此處に滅して惡國に至らず、修道も亦爾なり、惡國に至らず。若相似ば、何が故ぞ淨妙の國土に生ぜざらん。若惡國

【三六】次に第三番の問答。初に問。

の陰須陀洹の陰に非ざれば、云何ぞ惡業を作さざることを得んや。』(三七)佛の言はく、『善男子、須陀洹の者惡國に生ずと雖も、終に須陀洹の名を失はず。陰は相似ず、是の故に我種子を引きて喩と爲す。須陀洹の人惡國に生ずと雖も、道力を以ての故に惡業を作らず。(三八)善男子、譬へば(三九)香山に師子王有り。是の故に一切の飛鳥、走獸迹を此の山に絕して敢て近く者無し。時有りて是の王雪山の中に至るに、一切の鳥獸猶故住せざるが如く、須陀洹の人も亦復是の如し、道を修せずと雖も、道力を以ての故に諸惡を作さず。善男子、譬へば人有りて甘露を服食すれば、甘露滅すと雖も其の力勢を以て能く是の人をして不生、不死ならしむるが如し。善男子、須彌山に上妙の藥有りて(四〇)楞伽利と名く。人の之を服する有らば念念に滅すと雖も、藥力を以ての故に患害に遇はざるが如し。善男子、轉輪王所坐の處、王在らずと雖も人の敢て近く無し。何を以ての故に。王の威力の故なるが如く、須陀洹の人も亦復是の如し、惡國に生じ、道を修習せずと雖も、道力を以ての故に惡業を作さず。善男子、須陀洹の陰此に於て滅して異陰を生ずと雖も、猶故須陀洹の陰を失はず。善男子、譬へば衆生果實の爲の故に、種子の中に於て多く役して業を作し、糞治漑灌す。未だ果實を得ざるに而も子復滅すれども、亦名けて子に因りて果を得ると爲すことを得るが如く、須陀洹の陰も亦復是の如し。善男

【三七】次に佛答。之に二段ありて初に法。
【三八】次に六譬。
【三九】香山は初身、師子は見諦無漏、雪山は五陰、飛鳥走獸に諸惡法に譬ふ。又曰く香山に善陰に、雪山は惡陰に、鳥獸不住は善惡兩國中に在りて皆惡法を生ぜざるに喩ふとす。
【四〇】楞伽利(Laṅgali)。ココアの樹名。

子、譬へば人有りて資產巨富なり。(四一)唯一子有りて(四二)先に已に終沒す。其の子子有りて復(四三)他土に在り。其の人忽然として奄便(四四)終沒す。孫是を聞き已りて還って產業を收む。財貨其の所在に非ずと知ると雖も、然も其の收取遮護する者無し。何を以ての故に。性一なるを以ての故なるが如く、須陀洹の陰も亦復是の如し。』

(四五)師子吼菩薩佛に白して言さく、『世尊、佛所說の偈の如く、

「比丘若し戒定及び智慧を修習せば、
當に知るべし是不退、大涅槃に親近す。」

と。(四六)世尊、云何が戒を修し、云何が定を修し、云何が慧を修せん。』(四七)佛の言はく、『善男子、若人有りて禁戒を受持するに、但自利人天受樂の爲にして一切衆生を度脫するが爲にせず、無上正法を護持するが爲にせず。但利養、三惡道を畏るるが爲にし、命色力安無閡辯、王法、惡名、譏嫌を畏避するが爲にし、世の事業の爲にす。是の如き護戒は、則ち戒を修習すと名くることを得ざるなり。(四八)善男子、云何が名けて眞に戒を修習すと爲す。戒を受持する時、若一切衆生を度脫せんが爲に、正法を護るが爲に、

---

【四一】唯だ一子ありとは四果中の初果なり、又た見思兩道中に唯だ見道なれば一子とすとの說あり。

【四二】先に已に終沒すとは見諦無漏現前せず、觀を出づれば則ち無きをいふ。其の子子有りとは思惟の無漏見諦に因って生ずるをいふ。

【四三】他土に在りとは思惟の無漏が見諦に望むるが故なり。

【四四】終沒等。須陀洹の人は七生にて沒す。思惟道の中還た前の見諦の功を承接す故に產業を收むといふ。見諦の無漏は思惟中の無漏の所有に非ず故に所有に非ず。見思諦と雖も同一の無漏、故に遮護無し。

【四五】是より第二に修道を明す之に二段あり、其中初に修道を明す。之に又釋、論義の二段ありて初に釋。釋に又問、答あり、問に又二段ありて初

未度を度するが故に、未解を解するが故に、未歸を歸するが故に、未だ涅槃に入らざるをして入ることを得しむるが故に。是の如く修する時、戒を見ず、戒相を見ず、持者を見ず、果報を見ず、毀犯を觀ず。善男子、若能く是の如くば、是を則ち名けて戒を修習すと爲すなり。(四九)云何が復三昧を修習すと名くる。三昧を修する時、自ら度脫の爲にし、利養の爲にして、衆生の爲にせず、護法の爲にせず、貪欲、穢食等の過、男女等の根、九孔不淨、鬪諍、打刺、互相殺害を見るを爲て、若此の事の爲に三昧を修する者、是則ち三昧を修習すと名けず。(五〇)善男子、云何が復眞に三昧を修すと名くる。若衆生の爲に三昧を修習して、衆生の中に於て平等心を得、衆生をして不退法を得しむるが爲に、衆生をして聖心を得しむるが爲の故に、衆生をして大乘を得しむるが爲の故に、無上法を護持せんと欲するが爲の故に、衆生をして菩提を退かざらしむるが爲の故に、衆生をして首楞嚴を得しむるが爲の故に、衆生をして金剛三昧を得しむるが爲の故に、衆生をして(五一)陀羅尼を得しむるが爲の故に、衆生をして四無閡を得しむるが爲の故に、衆生をして佛性を見しむるが爲の故に、是の行を作す時、三昧を見ず、三昧の相を見ず。修者を見ず、果報を見ず。善男子、若能く是の如くば、是則ち名けて三昧を修習す

---



に偈を說して問ふ。

【四六】次に一一に答を書す。

【四七】次に佛答。之に三段あり、其中初に眞僞對辨。之に又戒、定、慧の三段ありて初に戒に又二段ありて初に僞。

【四八】次に眞。

【四九】次に定。二段あり初に僞。

【五〇】次に眞。

【五一】陀羅尼(Dhāraṇī)。總持と譯す。善法を修して散ぜしめず、惡法を持して起らしめざる力用に名く。又た四陀羅尼中の呪陀羅尼なり、禪定より發する祕密の言句をいふ。今正に之を指す。

と爲す。(五二)云何が復智慧を修すと名くる。若修者有りて是の思惟を作さく、「我若是の如き智慧を修習せば、則ち解脫を得て三惡道を度せん。誰か能く一切衆生を利益し、誰か能く人を生死の道に度せん。佛の出世の難きこと優曇華の如し。我今能く諸の煩惱結を斷ず、必ず解脫果を得ん。是の故に我當に智慧を勤修して速かに煩惱を斷じ、早く度脫を得べし」。是の如く修する者は、名けて智慧を修習すと爲すことを得ず。(五三)云何が名けて眞に智を修習すと爲す。智者若生、老、死の苦を觀ず。一切衆生無明に覆はれて無上正道を修習することを知らず。願はくは我が此の身悉く衆生に代りて大苦惱を受けん。衆生の有らゆる貧窮、下賤、破戒の心、貪、瞋、癡業、願はくは皆悉く來りて我が身に集る。願はくは諸の衆生貪取を生せず、名色に繫縛せられず。願はくは諸の衆生早く生死を度し、我が一身をして之に處して厭はざらしめよ。願はくは一切をして皆阿耨多羅三藐三菩提を得しめよ。是の如く修する時、智慧を見ず、智慧相を見ず、修者を見ず、果報を見ず、是則ち名けて智慧を修習すと爲す。善男子、是の如き戒、定、智慧を修習すれば、是を菩薩と名く。是の如く戒、定、慧を修すること能はざれば、是を聲聞と名く。(五四)善男子、云何が復戒を修習すと名く。若能く一切衆生の十六惡律儀を破壞す。何等か十六なる。一つには利の爲に羔羊を養食し、肥し已りて轉賣す。二つには利の爲に買ひ已りて屠殺す。三つには利の爲に豬豚を養食し、肥え已りて轉賣す。四つには利の爲に買

【五二】次に慧、之に二段ありて初に僞て

【五三】次に眞。

【五四】次に偏に破惡の爲にす。

ひ已りて屠殺す。五つには利の爲に牛犢を養食し、肥え已りて轉賣す。六つには利の爲に買ひ已りて屠殺す。七つには利の爲に鷄を養ひて肥えしめ、肥え已りて轉賣す。八つには利の爲に買ひ已りて屠殺す。九つには鉤魚、十には獵師、十一には劫奪、十二には(五五)魁膾、十三には網捕飛鳥、十四には兩舌、十五には獄卒、十六には呪龍、能く衆生の爲に永く是の如きの十六惡業を斷ず。是を修戒と名く。云何が修定なる。能く一切の世間三昧を斷ず。所謂(五六)無身三昧、能く衆生をして顚倒心を生じて是涅槃と謂はしむ。又無邊心三昧、淨聚三昧、世邊三昧、世斷三昧、世性三昧、世丈夫三昧、非想非非想三昧、是の如き等の定、能く衆生をして顚倒心を生じて是涅槃と謂はしむ。若し能く永く是の如きの三昧を斷ずれば、是則ち名けて三昧を修習すと爲す。云何が復智慧を修習すと名くる。能く世間所有の惡見を破す。一切衆生悉く惡見有り、所謂色卽ち是我、亦是我所なり。色の中に我有り、我の中に色有り。乃至識も亦是の如し。色卽ち是我、色滅して我存す。色卽ち是我、色滅して我滅す。復有人の言はく、「作者を我と名け、受者を色と名く。」復有人の言はく、「作者を色と名け、受者を我と名く。」復有人の言はく、「作無く受無し、自生し自滅す、悉く因緣に非ず。」復有人の言はく、「作無く受無し、悉く是自在の造作する所なり。」復有人の言はく、「作者有る

【五五】魁膾。安註曰く「舊に云く、是れ魚肉を賣り、軍を典どるの人と。又云く是れ杖を行ずるもの」と。

【五六】無身無邊心等。空處色を滅するを無身、識處定を無邊心、不用處を淨聚、非想を世邊、八萬劫の外既に知る能はざるを世斷、冥初世の本性を世性、定力能く初の水中の丈夫を見る韋紐天を世丈夫、存亡觀を定體とするを非想非非想といふ。

こと無く、受者有ること無し、一切悉く是時節の所作なり。」復有人の言はく、「作者、受者悉く所有無し。地等の五大名けて衆生と爲す。善男子、若能く一切衆生の是の如きの惡見を破壞すれば、是則ち名けて智慧を修習すと爲す。(五七)善男子、戒を修習するは、身の寂靜の爲なり、三昧を修習するは、心の寂靜の爲なり、智慧を修習するは、疑心を壞るが爲なり。疑心を壞るは、道を修習するが爲なり、道を修習するは、佛性を見んが爲なり。佛性を見るは、阿耨多羅三藐三菩提を得んが爲の故なり。阿耨多羅三藐三菩提を得るは、無上の大涅槃を得んが爲の故なり。大涅槃を得るは、衆生の一切の生死、一切の煩惱、一切の(五八)諸有、一切の諸界、一切の諸諦を斷せんが爲の故なり。生死を斷じ、乃至諦を斷するは、常、樂、我、淨の法を得んが爲の故なり。』

(五九)師子吼の言さく、『世尊、佛の所說の如く若不生滅を大涅槃と名くれば、生も亦是の如く不生不滅なり。何が故ぞ名けて涅槃と爲すことを得ざる。』(六〇)『善男子、是の如く是の如し、汝が言ふ所の如し。是の生復不生不滅と雖も、而も始有り。』(六一)『世尊、是の生死の法も亦始終無し。若始終無きことは則ち名けて常と爲す。常は即ち涅槃なり。何が故ぞ生死を名けて涅槃と爲さざるや。』

---

【五七】第三に偏に生善のためにす。

【五八】諸有諸界等。諸有は即ち二十五有、諸界は即ち三界及び十八界、諸諦は即ち六諦及び二十五諦なり。

【五九】次に第二に論義。前の修道の故に佛性を見、菩提涅槃を得るに因つて、今涅槃及び佛性を難ず。これに七番の問答あり。初の三番は涅槃を難じ、次の四番は佛性を難ず。その中、先づ初番に問答。初に問。

【六〇】次に佛答。

【六一】次に第二番の問答。初に問。

(六二)『善男子、是の生死の法、悉く因果有り。因果有るが故に、之を名けて涅槃と爲することを得ざるなり。何を以ての故に。涅槃の體は因果無きが故なり。』(六三)師子吼の言さく、『世尊、夫れ涅槃は亦因果有り、佛の所說の如し、

「因に從るが故に天に生じ、因に從りて惡道に墮す、
因に從るが故に涅槃す、是の故に皆因有り。」

佛往昔諸の比丘に告げたまふが如く、我今當に沙門の道果を說くべし。沙門と言ふは、能く具さに戒、定、智慧を修するを謂ひ、道とは八聖道を謂ひ、沙門果とは所謂涅槃なり。世尊、涅槃は是の如し、豈果に非ずや。云何ぞ說きて涅槃の體は因無く果無しと言ふ。』(六四)『善男子、我が宣說する所の涅槃因とは、所謂佛性なり。佛性の性は涅槃を生ぜず、是の故に我涅槃に因無しと言ふ。能く煩惱を破するが故に大果と名く。道に從ひて生ぜず、故に果無しと名く。是の故に涅槃は因無く果無し。』(六五)師子吼の言さく、『世尊、衆生の佛性は悉く共有と爲んや。各各有と爲んや。若共有ならば、一人阿耨多羅三藐三菩提を得る時、一切衆生も亦同じく得べし。世尊、二十人同じく一怨有り。若一人能く除かば、餘の十九人も皆亦同じく除くが如し。佛性若爾らば、一人得る時餘も亦得べし。若各各有らば則ち是無常なり。何を以ての故に。算數すべきが故に。然るに佛の所說、衆生の佛性一なら

【六二】次に佛答。
【六三】次に第三番の問答。初に問。
【六四】次に佛答。
【六五】第二に佛性を難ず。之に四番の問答あり、先づ初番の問答。初に問。之に標、釋の二段あり。

す、二ならず。若各各有らば、説きて諸佛平等と言ふべからず、亦佛性空の如しと説くべからず。』

(六六)佛の言はく、『善男子、衆生の佛性は不一、不二なり、諸佛平等猶ほ虚空の如し。一切の衆生同じく共に之有り。若能く八聖道を修する者有らば、當に知るべし、是の人は則ち明見を得。(六七)善男子、雪山に草有り名を忍辱と曰ふ。牛若之を食へば則ち醍醐を成ず、衆生の佛性も亦復是の如し。』(六八)師子吼の言さく、『佛の所説の如き忍辱草とは、一なりや多なりや。如其一ならば、牛食へば則ち盡きん。如其多ならば、云何ぞ衆生の佛性も亦是の如しと言はんや。佛の所説の如き、若八聖道を修習する者有らば、則ち佛性を見るとは、是の義然らず。何を以ての故に。道若一ならば、忍辱草の如く則ち盡くること有るべし。如其盡くること有らば、一人修し已らば餘は則ち分無けん。道若多ならば、云何ぞ具足修習と言ふことを得ん。亦(六九)薩婆若智と名くることを得ず。』(七〇)佛の言はく、『善男子、平坦の路、一切衆生の悉く中に於て行くに障礙する者無く、中路に樹有り、其の蔭清涼なり。行人下に在り暫く憩ひて止息す。然るに其の樹陰常に住して異ならず、亦消壞せず、持ち去る者無きが如し。路は聖道に喩へ、蔭は佛性に喩ふ。善男子、譬へば大城に唯一門有り。多人入出する有りと雖も、亦能く障閡を作す者有ること無し。亦復人の破壞毀落

【六六】次に佛答。之に二段ありて初に法。

【六七】次に譬。

【六八】次に第二番の問答。初に問。

【六九】薩婆若(Sarvajñāna)。一切智と譯す。世間、出世間、有爲、無爲等有ゆる諸法・諸義の認識に通達せる智を稱して[illegible]、是[illegible]佛[illegible]、薩婆若智は即ち佛智なり。

【七〇】次に佛答。

して齎持し去ること無きが如し。善男子、譬へば橋梁行人の所由も亦人の遮止、障礙し、毀壞して持ち去ること有ること無きが如し。善男子、譬へば良醫の徧く衆の病を療す。亦能く是の醫を遮止して、此を治し彼を捨てしむること有ること無きが如く、聖道佛性も亦復是の如し。』(七一)師子吼の言さく、『世尊、引く所の諸喩、義是の如くならず。何を以ての故に。先者路に在れば後に於て則ち妨ぐ、云何ぞ障礙有ること無しと言はん。餘も亦皆爾なり。聖道佛性若是の如くならば、一人修する時餘の者を妨ぐべし。』(七二)佛の言はく、『善男子、汝が所說の如き、義、相應せず。我が道を喩ふる所、是少分の喩、一切に非ざるなり。善男子、世間の道は、則ち障礙有り。此彼の異、平等有ること無し。無漏道とは、則ち是の如くならず、能く衆生をして障礙有ること無からしむ。平等無二にして方處、此彼の異有ること無し。是の如く正道は能く一切衆生の佛性の爲に了因と作りて生因と作らず、猶し明燈の物を照了するが如し。善男子、一切衆生皆同じく無明行に因緣たり。說きて一人無明行に因緣し已れば、其の餘は無かるべしと言ふべからず。一切衆生悉く無明行に因緣たる有り。是の故に說きて十二因緣一切平等と言ふ。衆生所修の無漏の正道も亦復是の如し、等しく衆生の煩惱、四生諸界有道を斷ず。是の義を以ての故に、名けて平等と爲す。其證する者有らば、彼此の知見障礙有ること無し。是の故に薩婆若智と名くることを得。』(七三)師子吼の言さく、『一切衆生身一種な

【七一】次に第三番の問答。初に問。
【七二】次に佛答。
【七三】次に第四番の問答。初に問。

らず。或は天身有り、或は人身有り。畜生、餓鬼、地獄の身、是の如き多身差別一に非ず、云何ぞ佛性一と爲すと言はん。』(七四)佛の言はく、『善男子、譬へば人有りて毒を乳の中に置けば、乃至醍醐皆悉く毒有り、乳酪と名けず、酪乳と名けず。乃至醍醐も亦復是の如し、名字變ずと雖も毒性失はず。五味の中に徧じて皆悉く是の如し。若し醍醐を服するも亦能く人を殺す。實に毒を醍醐の中に置かざるが如く、衆生の佛性も亦復是の如し。五道に處して別異の身を受くと雖も、而も是の佛性常一にして變ること無し。』

(七五)師子吼の言さく、『世尊、十六大國に六大城有り。所謂舍婆提城、(七六)婆枳多城、瞻婆城、毘舍離城、波羅奈城、王舍城なり、是の如き六城は世中最大なり。何が故ぞ如來之を捨てて、此の邊地弊惡、極陋陿小の拘尸城に在して般涅槃に入りたまへる。』(七七)『善男子、汝拘尸城を邊地弊惡、極陋陿小と言ふべからず。是の城は微妙功德の莊嚴する所と言ふべし。何を以ての故に。諸佛菩薩の所行の處なるが故なり。善男子、賤人の舍に王者過ぐれば則ち是の舍今來、福德成就し、乃ち大王をして駕を回らし、臨顧せしむと讚歎すべきが如し。善男子、人重病にして穢弊の藥を服す。服し已りて病愈ゆれば即ち歡喜して、是の藥は最上最妙、能く

【七四】次に佛答。
【七五】是より第二に道を修するの因緣を明す。之に二段あり、其中初に道緣を明す。之に又處、時、人緣の三段あり。初の處緣に又城、樹、處の三段あり。城處に又問、答の二段あり。今は初に問。
【七六】婆枳多は恐らく娑枳多の誤書ならん、娑枳多に正すべし。娑枳多(Sāketa)は、阿踰闍(Ayodhyā)の都市の名、拘薩羅國に在り。
【七七】次に佛答。之に標、釋の二段ありて初に標。

我が病を愈すと讃歎すべきが如し。善男子、人船に乗りて大海の中に在り。其の船卒かに壞れて依倚する所無く、死尸に因倚して彼岸に到ることを得。彼岸に到り已りて、大いに歡喜して是の尸に親に相遇ひて安隱を得と讃歎すべきが如く、拘尸城も亦復是の如し。乃ち是諸佛菩薩の行處なり、云何ぞ邊地弊惡、陜陋小城と言はん。

(七八)善男子、我念ず、往昔恆沙の劫を過ぎて劫を善覺と名く。時に聖王有り、姓は憍尸迦なり。七寶成就し、千子具足す。其の王始初て此の城を造立す。周币縱廣十二由旬なり、七寶莊嚴し土多く河有り。其の水清淨柔耎にして甘美なり。所謂(七九)尼連禪河、(八〇)伊羅跋提河、(八一)熈連禪河、(八二)伊搜末提河、(八三)毗婆舍耶河なり。是の如き等の河其の數五百、河の此彼岸樹木繁茂し、華果鮮潔なり。爾の時に人民壽命無量なり。時に轉輪聖王百年を過ぎ已りて是の唱言を作さく「佛の所說の如く一切諸法皆悉く無常なり。若能く十善法を修習する者は、能く是の如きの無常大苦を斷ず。」人民聞き已りて咸く共に十善の法を奉修す。我爾の時に於て、佛の名號を聞き十善を受持し、思惟修習して初めて阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。是の心を發し已りて、復是の法を以て、轉じて無量無邊の衆生を敎へて、一切法を無常變壞と言ふ。

【七八】次に正しく釋す。之に三段あり、其中初に地恩に報す。之に又二段ありて初に發心に報す。

【七九】尼連禪（Nairañjanā）。不樂著河と譯す。伽耶城の東方を北流する河の名なり。佛成道せんとして先づ此の河に浴し給ひし由緒あり。

【八〇】伊羅跋提（Airavati）。

【八一】熈連禪（Hiraṇyavati）。金河と譯す。佛この河に涅槃し給ふ。末羅國拘尸那の傍を流る。

【八二】伊搜末提（Usmodaka ?）。

【八三】毗婆舍耶（Vipasa）。五河の一。

是の故に我今此の處に續けて亦諸法無常變壞と説き、唯佛身是常住法と説く。我往昔の所行因緣を憶す。是の故に今來此に在りて涅槃し、亦此の地の往恩を酬報せんと欲す。是の義を以ての故に、我經中に説かく「我が眷屬の者、恩を受けて能く報ず」と。(八四)復次に善男子、往昔衆生壽無量の時、爾の時に此の城(八五)拘舍跋提と名く、周市縦廣五十由旬なり。時に閻浮提居民鄰接し、鷄飛相及び轉輪王有り、名を善見と曰ふ。七寶成就し、千子具足し、四天下に王たり。第一の太子正法を思惟して辟支佛を得。時に轉輪王其の太子の辟支佛と成り、威儀詳序、神通希有なるを見る。是の事を見已りて即ち王位を捨つること涕唾を棄つるが如し。出家して此の婆羅樹の間に在り。八萬歳の中慈心を修習す。悲、喜、捨心、各八萬歳なり。善男子、爾の時の善見聖王を知らんと欲せば、則ち我が身是なり。是の故に我今常に樂んで、是の如きの四法に遊止す。是の四法は名けて三昧と爲す。是の義を以ての故に、如來の身は常、樂、我、淨なり。善男子、是の因緣を以て今來此の拘尸城、娑羅樹間に在りて三昧正受す。(八六)善男子、我念ずらく、往昔無量劫を過ぎて此の城爾の時に迦毗羅衛と名く。其の城に王有り名を白淨と曰ひ、其の王の夫人名を摩耶と曰ふ。王に一子有り悉達多と名く。爾の時の王子師教に由らずして、自然に思惟して阿耨多羅三藐三菩提を得。二弟子有り。一は舍利弗と名け、二は大目犍連と名く。給侍の弟子名を阿難と曰ふ。爾の時に雙樹の間に在りて是の如きの大涅槃經を演

【八四】次に因無量に報す。
【八五】拘舍跋提(Kuśāvatī)。有茅草と譯す、恐らく、拘尸那城と異名同體か。
【八六】次に弘誓に報す。

說す。我時に會に在りて斯の事に預ることを得たり。諸の衆生悉く佛性有るを聞く、是の事を聞き已りて卽ち菩提に於て不退轉を得、尋いで自ら願を發さく、「願はくは未來世成佛の時、父母、國土、名字、弟子、侍使の人說法敎化する、今の世尊の如く等しくして異有ること無けん」と。是の因緣を以て今來此に在りて大涅槃經を敷揚し演說す。

（八七）善男子、我初出家して未だ阿耨多羅三藐三菩提を得ざるの時、頻婆娑羅王使を遣して言さく、「悉達太子、若聖王と爲らば我當に臣屬すべく、若家を樂はずして阿耨多羅三藐三菩提を得ば、願はくは先に此の王舍城に來至し、法を說きて人を度し、我が供養を受けんことを。」我時に默然として已に彼の請を受く。善男子、我初めて阿耨多羅三藐三菩提を得已りて（八八）竭闍國に向ふ。時に（八九）伊連禪河に婆羅門姓迦葉氏有り、五百の弟子と彼の河側に在りて無上道を求む。我是の人の爲に故らに往いて法を說く。迦葉の言はく、「瞿曇、我今年邁して已に百二十なり。摩伽陀國の所有の人民及び其の大臣頻婆娑羅、悉く我已に羅漢果を證すと謂ふ。我今若當に汝の前に在りて法を聽受せば、一切の人民或は倒心を生ぜん、大德迦葉は羅漢に非ずやと。幸願はくは瞿曇速かに餘處に往け。若此の人民、定んで瞿曇の功德我に勝ることを知らば、我等復供養を得るに由無し。」我時に答へて言はく、「迦葉、汝若我に於て

【八七】第二に邪黨を闢る。之に二段あり、其中初に六大城に徧きを明す。之に六段ありて王舍に至る。

【八八】竭闍(Kosala)。工巧と譯す國の名。通途憍薩羅と書く。

【八九】伊連河は地理に依りて類推するに恐らく上に出づる伊羅跋提と同じか。

殷重の大瞋恨を生ぜずば、一宿を容れられよ。明當に早く去るべし。」迦葉の言さく、「瞿曇、我が心他無し、深く相愛重す。但我が住所に一毒龍有り、其の性暴惡なり、恐らくは相危害せん。」我言はく、「迦葉、毒中の毒は三毒に過ぎじ。我今已に斷ず。世間の毒は我の畏れざる所なり。」迦葉復言はく、「苟も能く畏れざれば、善い哉住することを聽す。」善男子、我爾の時に於て故らに迦葉の爲に十八變を現ず、經中に說くが如し。爾の時に迦葉及び其の眷屬五百等の輩、是を見聞し已りて羅漢果を證す。是の時迦葉復二弟有り。一は伽耶迦葉と名け、二は那提迦葉と名く。師徒眷屬復五百有り、亦皆阿羅漢果を證得す。是に王舍城六師の徒、是の事を聞き已りて卽ち我が所に於て大惡心を生ず。我時に信に赴き彼の王の請を受けて王舍城に詣る。未だ至らざるの中路、王無量百千の衆と悉く來りて奉迎す。我爲に法を說く。時に法を聞き已りて、欲界の諸天八萬六千阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。頻婆娑羅王將ゐる所の營從十二萬人須陀洹果を得、無量の衆生忍心を成就す。旣に城に入り已りて舍利弗大目犍連及び其の眷屬二百五十を度し、本心を捨てて出家學道せしむ。我卽ち彼に住して王の供養を受く。外道六師相與に集聚して舍衞城に詣る。(九〇)時に彼の城の中に一りの長者有りて須達多と名く。兒の爲に婦を聘して王舍城に詣る。旣に彼の城に達して長者(九一)珊檀那が舍に寄止す。時に此の長者中夜にして起ち諸の眷屬に告ぐらく、「仁等起つべし、速かに共に莊嚴し、宅舍を掃治し香饍を辦

【九〇】 次に舍衞に至る。之に二段ありて初に城の緣起。

【九一】 珊檀那(Saṃdhana サンダーナ)。廣施と譯すか。章安曰く、「是れ護彌と譯す、王舍城の人」と。

具せよ。」須達聞き已り、尋いで自ら思惟すらく、「將摩伽王を請せんと欲すること無きや。婚姻歡樂の會有りと爲すや。」是を思惟し已りて尋いで前んで問ひて言はく、「大王、摩伽陀王頻婆娑羅を請せんと欲するや、婚姻歡樂の會有りと爲すや、怱務安んせざること乃ち是の如くなるや。」長者答へて言はく、「不なり居士、我明佛無上法王を請ず。」須達長者初めて佛名を聞きて身毛皆竪ち、尋いで復問ひて言はく、「何等を佛と名く。」長者答へて言はく、「汝聞かずや、迦毘羅城に釋種の子有り悉達多と字す。姓は瞿曇氏、父を白淨と名く。其の生未だ久しからずして相師之を占す。定んで當に轉輪聖王と作ることを得べし、菴羅果の已に手中に在るが如し。心に樂を願はず、之を捨てて出家し、無師自覺して阿耨多羅三藐三菩提を得。貪、恚、癡盡きて常住變ずること無く、不生不滅にして憂畏有ること無し。諸の衆生に於て其の心平等なり、猶し父母の等しく一子を視るが如し。所有の身心衆中最勝なり。一切に勝ると雖も而も憍慢無く、塗割の二事其の心二つ無く、智慧通達して法に於て閡無し。十力、四無所畏、五智、三昧、大慈大悲及び三念處を具足す、故に號して佛と爲す。明我が請を受けたまふ。是の故に怱怱として未だ相瞻るに暇あらず。」須達多の言はく、「善い哉大士、言ふ所の佛とは功德無上なり、今何の處にか在す。」長者答へて言はく、「今此の閼王舍大城に在りて(九二)迦蘭陀竹林精舍に住す。」時に須達多一心に佛の所有の功德十力、無畏、五智三昧、大慈大悲、及び三念處を念ず。

【九二】迦蘭陀竹林(Karanda-veṇuvana)。迦蘭陀長者の所有に係る僧房の名。後長者之を佛に奉れり、これ印度寺院の始とす。所謂竹林精舍是なり。

是の念を作す時、忽然として大いに明かなり、其の明猛盛にして猶し白日の如し。即ち光を尋ねて出で城門の下に至る。佛の神力の故に門自然に開く。既に門を出で已りて路に天祠有り。須達經過し、禮拜して敬を致す。尋いで還つて黑闇なり。心に惶怖を生じ、復所止の處に還返せんと欲す。時に彼の城門に一りの天神有り須達に告げて言はく、「仁者、若如來の所に往かば多く善利を獲ん。」須達多言はく、「云何が善利なる。」天の言はく、「長者假使人有りて眞寶交絡せる駿馬百匹、香象百頭、寶車百乘、金を鑄て人と爲し其の數復百、端正の女人身に瓔珞を佩び、衆寶廁塡せる上妙の宮宅、殿堂、屋宇の彫文刻鏤、金槃に銀粟、銀槃に金粟、數各一百、以て一人に施し、是の如く展轉して閻浮提を盡さん。所得の功德人有りて發意一步、如來の所に詣るに如かず。」須達多の言はく、「善男子、汝は是誰ぞや。」天の言はく、「長者、我は是勝相婆羅門の子なり。是汝が往昔の善知識なり。我往日舍利弗、大目犍連を見て心に歡喜を生ずるに因り、身を捨てて北方天王毘沙門の子と作ることを得、此の王舍城を專知し守護す。我舍利弗等を禮拜し、歡喜心を生ずるに因りて尙是の如き妙好の身を得たり。況や當に如來大師を見たてまつり禮拜供養することを得べきをや。」須達長者是の事を聞き已り、即ち還つて道を復して我が所に來詣す。到り已りて頭面に我が足を敬禮す。我時に即ち爲に應の如く法を說く。長者聞き已りて須陀洹果を得。既に果證を獲、復我を請じて言はく、「如來大慈唯願はくは臨顧し、舍衛城に至りて我が微供を受けんことを。」我卽ち問ひて言はく、「卿の舍衛城頗し精舍の相容受す

る有りや不や。」須達多の言はく、「若佛哀憫して必ず垂顧せらるれば、便ち當に自ら竭して營辦成立すべし。」善男子、我爾の時に於て默然として請を受く。須達長者已に聽許を蒙り、卽ち我に白して言さく、「我昔より來た未だ此の事を爲さず。唯願はくは如來、舍利弗を遣して儀則を指授せんことを。」我卽ち願命し、敕して營佐せしむ。時に舍利弗須達多と共に一車に載りて舍衞城に往く。我が神力の故に、一日夜を經て便ち所止に到る。時に須達多舍利弗に白す、「大德、此の大城の外何れの處にか地有り。近からず遠からず、泉池に多饒にして好林樹の華果蔚茂し、清淨閑曠なる有る。我當に中に於て佛世尊及び比丘僧の爲に精舍を造立すべし。」舍利弗の言はく、「祇陀の園林不近不遠、清淨寂寞にして、多く泉流有り、樹木、華果時に隨ひて有り。此の處最勝にして精舍を立つべし。」時に須達多是の語を聞き已りて、卽ち（九三）祇陀大長者の所に往き、祇陀に語りて言はく、「我今無上法王の爲に僧坊を造立せんと欲す。唯仁の園地以て造立すべし。吾今買はんと欲す、能く與へられんや不や。」祇陀答へて言はく、「設ひ眞金を以て徧く其の地に布くとも猶相與へず。」須達多の言はく、「善い哉祇陀、林地我に屬す、汝便ち金を取れ。」祇陀答へて言はく、「我が園賣らず、云何ぞ金を取らん。」須達多の言はく、「若意不了ならば、當に共に斷事人の所に往詣すべし。」時に二長者卽ち共に倶に往く。斷事者の言はく、「園は須達に屬す、祇陀は金を取れ。」須達長者卽時に人をして車馬に載負せしめ、集るに隨ひて地に布く。一日の中に唯五百步金未だ周徧

【九三】 祇陀（Jeta）。勝と譯す、長者の名。

せず。」祇陀言ひて曰はく、「長者若悔いば意に隨ひて止むことを聽す。」須達多の言はく、「吾悔いざるなり。」自ら當に何れの藏金を出して足るべきかを念ず。祇陀念言すらく、「如來法王眞實に無上なり、所說の妙法淸淨無染なり。故に斯の人をして寶を輕んずること乃ち爾せしむ。」卽ち須達に語らく、「餘未だ徧からざる者、復金を須ひず、請ふ以て與へられん。我自ら佛の爲に門樓を造立して、常に如來をして經由出入せしめん。」祇陀長者自ら門坊を造り、須達長者七日の中に大房を成立して三百閒に足る。禪房靜處六十三所、冬屋、夏堂各各別異なり。厨坊、浴室、洗脚の處、大小圊廁備足せざる無し。所設已に訖り、卽ち香鑪を執りて王舍城に向ひて遙かに是の言を作さく、「所設已に辦ず。唯願はくは如來、慈哀憐愍し、諸の衆生の爲に是の住處を受けんことを。」我時に懸かに是の長者の心を知り、卽ち大衆と王舍城を發つ。譬へば壯士の臂を屈伸する頃の如きに舍衞城、祇陀園林、須達精舍に至る。我既に到り已りて須達長者其の所設を以て我に奉施す。我時に受け已りて卽ち其の中に住す。」

# 卷の第二十八

## 師子吼菩薩品の四

（一）『是の時六師心に嫉妬を生じ、悉く共に波斯匿王に集り詣で、是の如きの言を作さく、「大王當に知るべし、王の土境淸夷閑靜、眞に是出家住止の處たり。是の故に我等斯の事の爲の故に來りて此に至る。大王正法を以て治めて民の爲に患を除け。（二）沙門瞿曇（三）年既に幼稚に、學日又淺ければ、道術施すこと無し。此の國先より耆舊宿德、自ら王種を怙みて恭敬を生ぜず。若是王種は法民を治すべし、如其出家ならば宿德を敬すべし。大王善く聽け、沙門瞿曇眞實は王種の中に生ぜず。瞿曇沙門若父母有らば、何に由りてか他人の父母を劫奪する。大王、我が經中に說く、「千歲を過ぎ已りて一つの妖祥幻化の物出づる有らん」と。所謂沙門瞿曇是なり。是の故に當に知るべし、沙門瞿曇は父無く母無し。若父母有らば、云何ぞ說きて「諸法無常、苦空、無我、無作、無受」と言はん。幻術を以ての故に衆生を誑惑

---

【一】是より第二に城に入りて共に神力を試むるを明す。之に試業、重試、衆會の三段あり、初に試業。之に四段あり、其中初に試を求む。之に又二段ありて、初に王を讒して言を巧にし色を令す。

【二】次に實を陳推して勤容勸請す。

【三】年既に幼稚にとは、佛既に三十にして成道したまふを表す。眞實不生なるが故に淺しといひ、彼れ佛は是れ幻化、必ず王種に非ずとなせば不生王種中といひ、佛敎へて人をして離俗出家せしめ、他の父

す。愚者は信受し、智者は之を捨つ。大王、夫人王は天下の父母なり。稱の如く、地の如く、風の如く、火の如く、道の如く、河の如く、橋の如く、燈の如く、日の如く、月の如し。法の如く事を斷じて怨親を擇ばず。沙門瞿曇我が活を聽さず、我が去處に隨ひて逐逐して捨てず。唯願はくは大王、我彼と其の道力を捔することを聽したまへ。若し彼我に勝たば、我當に彼に屬すべく、我若し彼に勝たば、彼當に我に屬すべし。」【四】王言はく、「大德、汝等各各自ら行法有り、止住の處亦各同じからず。我今定めて、如來世尊汝に於て妨無きことを知る。」【五】六師答へて言さく、「云何ぞ妨無けん。沙門瞿曇幻術法を以て諸人及び婆羅門を誘誑して、歸伏已に盡く。王若し我に與に道力を捔するを聽さば、王の善名八方に流布せん、如其不ならば惡聲路に盈ちん。」王の言はく、「大德、汝等未だ如來の道力威神巍巍たるを知らず、故に捔試を求む。若し定んで知らば、恐らくは能はざるなり。」「大王、汝今已に瞿曇の幻を受くるや。唯願はくは大王、神を留め聽察して、我等を輕んずること莫れ。之を虛言に構ふるは、之を驗するに實を以てすることに如かず。」【六】王の言はく、「善い哉善い哉」と。六師の徒歡喜して出づ。時に波斯匿王、卽ち嚴駕を敕して我が所に來至し、頭面禮敬し、右繞三匝し、退いて一面に坐して我に白して言さく、「世尊、六師向來して道力を捔せんことを求む。我量度せずして敢て以て之を許す。」【七】佛の言はく、「大

母の子の胤を斷ぜしめ、妻娶を許さざれば他人の父母を勢稱すといふ。

【四】次に王の不許。

【五】次に重ねて求む。

【六】次に王の許。

【七】第二に正しく試む。之に二段ありて初に王に多造を命す。

王、善い哉善い哉、但當に更に此國の處處に於て僧坊を造立すべし。何を以ての故に。我若彼と其の神力を捔せば、彼の衆の中受化の者多くして、此の處偏小云何ぞ容受せん。」(八)善男子、我爾の時に於て六師の爲の故に、初一日より十五日に至りて大希有の神通變化を現ず。(九)是の時に當りてや、無量の衆生阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、無量の衆生三寶の所に於て信を生じて疑はず。六師の徒衆其の數無量なり。邪見の心を破して正法に出家す。無量の衆生菩提の中に於て不退心を得、無量の衆生陀羅尼諸三昧門を得、無量の衆生須陀洹より阿羅漢果に至るを得たり。

(一〇)爾の時に六師內心に慙愧し、相與に圍繞して婆枳多城に至り、彼の人民を教へて邪法を信受せしむ。「瞿曇沙門但空事を說く」と。善男子、我時に母の爲に忉利天の波利質多樹に處し安居して法を說く。是の時六師心大いに歡喜して唱へて言はく、「善い哉、瞿曇の幻術今已に滅沒す。」復無量無數の衆生を教へて邪見を增長せしむ。爾の時に頻婆娑羅、波斯匿王、及び四部衆、目連に白して言さく、「大德、此の閻浮提邪見增長す。衆生憫むべし大黑闇に行く。唯願はくは大德、彼の天上に至り、世尊に稽首して我が言の如く曰へ、「譬へば犢子の其の生れて未だ久しからざるに、若乳を得ずば必ず死なんこと疑無きが如く、我等衆生も亦復是の如し。唯願はくは如來、衆生を哀愍し、還來して此に住したまへ。」時に目犍連默然として許し、大力士の臂を屈伸する頃の如きに彼の天上に往き、世尊の所に至りて佛に白して言さ

【八】次に正しく神變を現ず。
【九】第三に時衆の得益。
【一〇】是より第三に佛復た彼の城に向ふ。

く、「閻浮提の中の所有の四衆、如來を渴仰し、見えて法を聞かんことを思ふ。頻婆娑羅、波斯匿王、及び四衆等足下に稽首す。此の閻浮提の所有の衆生、邪見增長して大黑闇を行く、甚だ憐愍すべし。譬へば犢子の其の生れて未だ久しからざるに、若乳を得ずば必ず死せんこと疑はざるが如く、我等も亦爾なり。唯願はくは如來、衆生の爲の故に還來して此の閻浮提の中に在ませ。」佛目連に告げたまはく、「汝今速かに還りて閻浮提に至り、諸の國王及び四部衆に告げよ。卻後七日我當に還り下るべし。六師の爲の故に復當に彼の婆枳多城に至るべし。」七日を過ぎ已りて、佛釋天、梵天、魔天、無量の天子、及び首陀會一切天人と、前後圍繞して婆枳多城に至り、大師子吼して

【三】次に第四に毘舍離に向ふ

是の如きの言を作さく、「唯我が法中に獨沙門及び婆羅門有り、一切諸法無常無我なり。涅槃寂靜にして諸の過患を離る。若他法も亦沙門及び婆羅門有り、常有り、我有り、涅槃有りと言はば、是の處有ること無し。」爾の時に無量無邊の衆生阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。是の時六師各相謂つて言はく、「若我が法の中に實に沙門、婆羅門無くば、云何が世間の供養を得ん。」

(三)是に於て六師復共に集聚して毘舍離に詣る。善男子、我一時に於て毘舍離の菴羅林の間に住す。時に菴羅女我の中に在るを知りて我が所に來らんと欲す。我爾の時に於て諸比丘に告ぐ、「當に念處を觀じ善く智慧を修すべし。修習する所に隨ひて心放逸なること莫れ。云何が名けて念處を觀ずと爲す。若比丘有りて、內身を觀察して我及以我所を見ず。外身及び內外身を觀察して我及以我所を見ず、

受心法を觀ずるも亦復是の如し、是を念處と名く。云何が名けて修習智慧と爲す。若比丘有りて眞實に苦、集、滅、道を見る、是を比丘智慧を修習すと名く。云何が名けて心不放逸と爲す。若比丘有りて佛を念じ、法を念じ、僧を念じ、戒を念じ、捨を念じ、天を念ず。是を比丘心放逸せずと名く。」時に菴羅女卽ち我が所に至り、頭面に禮を作し、右繞三帀し、敬を修すること已に畢りて、卻つて一面に坐す。善男子、我爾の時に於て菴羅女の爲に應ずるが如く法を說く。是の女聞き已りて阿耨多羅三藐三菩提心を發す。時に彼の城中に【三】梨車子有り其の數五百、我が所に來至し、頭面作禮し右繞三帀し、修敬し已畢りて卻つて一面に住す。我時に復諸の梨車子の爲に應の如く法を說く、「諸の善男子、夫放逸の者は五事の果有り。何等をか五つとなす。一つには自在財利を得ず、二つには惡名外に流布す、三つには窮乏に惠施することを樂はず、四つには四衆を見ることを樂はず、五つには諸天の身を得ず。諸の善男子、不放逸に因りて能く世法、出世間法を生ず。若阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲する者有らば、應當に不放逸法を勤修すべし。夫放逸は復十三の果報を得。何等か十三なる。一つには樂ひて世間の爲に業を作す、二つには樂ひて無益の言を說く、三つには常に樂ひて久寢睡眠す、四つには樂ひて世間の事を說く、五つには常に樂ひて惡友に親近す、六つには懈怠懶惰なり、七つには常に他人に輕んせらる、八つには所聞有りと雖も尋いで復忘失す、九つには樂ひて邊地に處す、十に

【三】梨車子（リッチャボー・プトラ Licchavi-putra）。梨車は薄皮と譯す、毗舍離城に於ける剎帝利種の名なり。子は其れ等の子を云ふ。

は諸根を調伏すること能はず、十一には食足ることを知らず、十二には空寂を樂はず、十三には所見不正なり。是を十三と名く。善男子、夫放逸は佛及び佛弟子に近くことを得と雖も、猶故遠しと爲す。」諸の梨車の言はく、「我等自ら知る、是放逸の人なり。何を以ての故に。如其我等不放逸ならば如來法王當に我が土に出づべし。」時に大會の中に婆羅門子有り名を無勝と曰ふ。諸の梨車に語らく、「善い哉善い哉、汝の言ふ所の如し、頻婆娑羅王已に大利を獲。如來世尊其の國土に出づ、猶し大池の妙蓮華を生ず、生じて水に在りと雖も、水汙すこと能はざるが如し。諸の梨車子、佛も亦是の如し、彼の國に生ずと雖も、世法に滯閡せられず。諸佛世尊出無く入無し、衆生の爲の故に世に出現し、世法に滯閡せられず。仁等自ら迷ひて五欲に耽荒し親近して如來の所に往くことを知らず。是の故に名けて放逸の人と爲す。佛摩伽陀國に出づれば放逸と名くるに非ざるなり。何を以ての故に。如來世尊は猶し彼の日月のごとし、一人二人の爲に世に出づるに非ず。」時に諸の梨車是の語を聞き已りて、尋いで阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、復是の言を作さく、「善い哉善い哉無勝童子、快く是の如きの善妙の言を說く。」時に諸の梨車各各身に著する所の一衣を脱ぎて以て無勝に施す。無勝受け已り轉じて以て我に奉る。復是の言を作さく、「世尊、我梨車より是の衣物を得。唯願はくは如來、衆生を哀愍して我が獻る所を受けたまへ。」我爾の時に於て彼の無勝を愍み、即ち爲に納受す。諸の梨車同時に合掌して是の如きの言を作さく、「唯願はくは如來、此の土地に於て一時安居して我が微供を受けたまへ。」

我時に默然として黎車の請を受く。

（一三）是の時六師是の事を聞き已りて、師宗相與に波羅奈に詣る。爾の時に我復波羅奈に往いて波羅河邊に住す。時に波羅奈に長者子有り、名を寶稱と曰ふ。五欲に耽荒して非常を知らず。我の到るを以ての故に自然に白骨觀の法を得、其の殿舍、宮人、采女悉く白骨と爲るを見る。心怖懼を生ずること刀、毒蛇の如く、賊の如く、火の如し。即ち其の舍を出でて我が所に來詣し、路に隨ひて言はく、「瞿曇沙門、我今賊に追逐せらるるが如く、甚だ大いに怖懼す。願はくは救濟せられよ。」佛の言はく、「善男子、佛法、衆僧安隱にして懼無し。」長者子の言さく、「若三寶の中に畏るる所無ければ、我も今亦當に無所畏を得べし。」我即ち其出家して道を爲すを聽す。時に長者子復同友有り其の數五十なり、遙かに寶稱の厭離して出家するを聞いて、即ち共に和順して相共に出家す。

（一四）六師聞き已りて展轉して復（一五）瞻婆大城に詣る。時に瞻婆國の一切人民、悉く共に六師の徒に奉事して、初めより未だ曾て佛、法、僧の名を聞かず、多く諸人の極惡業を作る有り。我爾の時に於て衆生の爲の故に瞻婆城に往く。時に彼の城中に大長者有りて繼嗣有ること無し。六師に供事して以て子息を求む。後久しからずして其の婦懷妊す。長者知り已りて六師の所に往き、歡喜して言さく、「我

【一三】次に第五に復た波羅奈城に至る。

【一四】次に第六に復た瞻婆城に至る。

【一五】瞻婆（Campā）。藤嘉と譯す、本と樹の名。樹名を以て國名となす。中印度に在りて恒河に面し、その首都を瞻婆大城と云ふ。

が婦懷妊す、男なりや女なりや。」六師答へて言はく、「生必ずや是女。」長者聞き已りて心に愁惱を生ず。復知識有り來りて長者に謂へらく、「何が故ぞ愁惱すること乃ち是に至るや。」長者答へて言はく、「我が婦懷妊す、未だ男女を知らず、故に六師に問ふ。六師語らく、『我が相法の如くんば生必ず是女』」と。我是の語を聞きて自ら惟ふ、『年老いて財富無量なり、如其男に非ざれば付囑する所無し、』是の故に我愁ふ。」知識復言はく、「汝智慧無し先より聞かずや、優樓頻螺迦葉兄弟誰の弟子と爲す。佛なりや、六師なりや。六師若是一切智ならば、迦葉何が故ぞ之を捨てて佛の弟子と爲る。又舍利弗、目犍連等、及び諸の國王、頻婆娑羅等、諸王の夫人末利夫人等、諸國の長者須達多等、是の如きの諸人は佛の弟子に非ずや。曠野の鬼神、阿闍世王の護財醉象、(一六)鴦掘摩羅惡心熾盛にして其の母を害せんと欲する、是の如き等の輩、斯如來に調伏せらるるに非ずや。長者、如來世尊一切法に於て知見無閡なり、故に名けて佛と爲す。發言二つ無し、故に如來と名く。煩惱を離するが故に(一七)阿羅訶と名く。世尊の所說は終に二つ有ること無し。六師は爾らず、云何が信ずべけん。如來今者近く此に在りて住す、若實に知らんと欲せば、當に佛所に詣るべし。」爾の時に長者即ち是の人と我が所に來詣し、頭面作禮し、右繞三帀し、合掌長跪して是の言を作さく、「世尊、諸の衆生に於て平等にして二つ無し、怨親一相なり。我愛結に繋縛せられて怨親の中に於

【一六】鴦掘摩羅(Aṅgulimālya)。指鬘と譯す。釋尊在世の時、舍衛國に住せし人。初め惡道に溺しみ、後心機一轉、佛門に入りて羅漢果を得たり。

【一七】阿羅訶(Arhat)。應供と譯す、通常略して羅漢と云ふ。

て未だ無二なること能はず。我今如來に世事を問はんと欲し、深く自ら愧懼して未だ敢て發言せず、世尊、我が婦懷妊す。六師相して言はく、「生必ず是女」と。是の事云何ん。佛の言はく、「長者、汝が婦懷妊す。是男たる疑ふこと無し。其の兒生じ已りて福德比無し。」爾の時に長者、是の語を聞き已りて大歡喜を生じ、便ち退きて家に還る。爾の時に六師、我が生るる者必ず男にして大福德有りと懸記するを聞き、心に嫉妬を生じ、菴羅果を以て毒藥を和合し、持ちて其の家に往いて長者に語りて言はく「快い哉瞿曇善く其の相を說けり。汝が婦の臨月此の藥を服すべし。此の藥を服し已らば、兒則ち端正にして產者患無けん。」長者歡喜して其の毒藥を受け、婦に與へて服せしむ。服し已りて尋いで死す。六師歡喜し、城市に周徧して高聲に唱へて言はく、「沙門瞿曇彼の長者婦當に男を生ずべく、其の兒福德天下に勝る無しと記す。今兒未だ生せず、母已に命を喪ふ。」爾の時に長者復我が所に於て不信の心を生ず。卽ち世法に依りて殯斂棺蓋し、送りて城外に至り、多く乾薪を積み、火を以て之を焚く。我道眼を以て此の事を明見し、阿難に顧み命ず「我が衣を取り來れ。吾彼に往いて邪見を摧滅せんと欲す。」時に毗沙門天摩尼跋陀大將に告げて言はく、「如來今彼の塚間に詣らんと欲したまふ。卿速かに往いて平治掃灑し、師子座を安じ、妙香華を求めて其の地を莊嚴すべし。」爾の時に六師遙かに我が往くを見て各相謂つて言はく、「瞿曇沙門此の塚間に至る、肉を噉はんと欲するか。」爾の時に多く未だ法眼を得ざる諸の優婆塞有り。各愧懼を懷いて我に白して言さく、「彼の婦已に死す、願はくは往くべか

らず。」爾の時に阿難諸人に語りて言はく、「且く須臾を待て、如來久しからずして當に廣く諸佛の境界を開闡したまふべし。」我時に到り已りて師子座に坐す。長者難じて言はく、「所言無二なるを世尊と名くべし。母已に終亡す、云何が子を生ぜん。」我言はく、「長者、爾の時に於て都て母命の脩短を問はれず。但所懷是男女と爲んやを問ふ。諸佛如來は發言無二なり。」是の故に當に知るべし、定んで必す子を得。」是の時死尸火に燒けて腹裂け、子中より出でて火中に端坐す、猶し鴛鴦の蓮華臺に處るが如し。六師見已りて復是の言を作さく、「妖なる哉瞿曇、善く幻術を爲す。」長者見已りて心に復歡喜し、六師を訶責す、「若幻と言はば汝何ぞ作さざる。」我爾の時に於て尋いで耆婆に告ぐ、「汝火中に往いて是の兒を抱き來れ。」耆婆往かんと欲す。六師前んで牽ゐて耆婆に語りて言はく、「沙門瞿曇所作の幻術、未だ必ずしも常に爾らず、或は能、不能あり。如其不能にして、脫れば能く相害せん。汝今云何ぞ其の語を信受する。」耆婆答へて言はく、「如來阿鼻地獄に入らしむ。猛火尚燒くこと能はず。況や世間の火をや。」爾の時に耆婆前んで火聚に入る、猶し清涼の大河水の中に入るが如し。是の兒を抱持して我が所に還詣し、兒を授けて我に與ふ。我兒を受け已り長者に告げて言はく、「一切衆生壽命定らず、水上の泡の如し。衆生若重業の果報有らば、火も燒くこと能はず、毒も害すること能はず。是の兒の業報にして我が所作に非ず。」時に長者の言さく、「善い哉世尊、是の兒若其の天命を盡すことを得は、唯願はくは如來爲に名字を立てたまへ。」佛の言はく、「長者の是の兒猛火の中に生ず、火は樹提と名く

れば樹提と名くべし。」爾の時に會中我が神化を見、無量の衆生阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。

（一八）爾の時に六師、六城に周徧して足を停むることを得ず、慙愧低頭して復此の拘尸城に來至す。旣に此に至り已りて是の如きの言を唱ふ、「諸人當に知るべし、沙門瞿曇は是大幻師なり、天下を誑惑して六大城に徧うす。譬へば幻師の四兵、所謂車兵、馬兵、象兵、步兵を幻作し、又復種種の瓔珞、城郭、宮宅、河池、樹木を幻作するが如く、沙門瞿曇も亦復是の如し。王身を幻作し、說法の爲の故に、或は沙門、婆羅門身、男身、女身、小身、大身と作り、或は畜生、鬼神の身と作る。或は無常と說き、或は有常と說く。或時に苦と說き、或は復樂と說く。或は有我と說き、或は無我と說く。或は有淨と說き、或は無淨と說く。或時に有と說き、或時に無と說く。爲す所虛妄の故に名けて幻と爲す。譬へば子に因り子に隨ひて果を得るが如く、瞿曇沙門も亦復是の如し。摩耶の所生母旣に是（一九）幻、子非ざることを得ず、沙門瞿曇實知見無し。諸の婆羅門年を經歲を積みて苦行を修習し、禁戒を護持す。尙言ふ未だ眞實の知見有らずと、何に況や瞿曇年少く學淺く苦行を修せず、云何ぞ眞實の知見有らん。若能く具さに七年の苦行を滿ずるも、見猶多からず、況や修習する所六年を滿せず。愚人智無くして其の教を信受す。大幻師の愚者を誑惑するが如く、沙門瞿曇も亦復是の如し。」善男子、是の如く六師、此の城中に於て大いに衆生の爲に邪見を

【一八】是より第二に拘尸に至るを明す。之に三段ありて初に邪教。

【一九】幻子に非ざるを得ず。人の生法自ら常儀あり、然るに佛右脇より生じ給ふとせば、定んでこれ幻子なるべしとの意なり。

增長す。(二〇)善男子、我是の事を見て心に憐愍を生じ、其の神力を以て十方の諸の大菩薩を請召して此の林に雲集し、周市彌滿すること四十由旬、今此の中に於て大師子吼す。善男子、空處に於て多く說く所有りと雖も、則ち師子吼と名くることを得ざるなり。此の智人大衆の中に於ける、眞に名けて大師子吼と爲すことを得。師子吼とは一切法は悉く無常、苦、無我、不淨と說き、唯如來は常、樂、我、淨と說く。

(二一)爾の時に六師復是の言を作さく、「若瞿曇我有らば我も亦我有り。言ふ所の我とは、見を我と爲す。瞿曇、譬へば人有りて向の中に物を見るが如く、我も亦是の如し。向は眼を喩へ見は我を喩ふ。」(二二)佛六師に告げたまはく、「若見は我と名くと言はば、是の義然らず。何を以ての故に。汝引く所の喩は向に因りて見るとは、人一向に在りて六根俱に用ふ。若定んで我有り眼に因りて見ば、何ぞ彼の如く一根の中に俱に諸塵を伺はざる。若一根の中に一時に六塵を聞見すること能はざれば、當に知るべし我無きことを。(二三)引く所の向喩は百年を經と雖も、見る者之に因りて所見異ること無けん。眼根若爾らば年邁根熟するも亦異なること無かるべし。(二四)人向異なるが故に內を見、外を見る。眼根若し爾らば、亦內外一時に俱に見るべし。若見ざれば、云何ぞ我有らん。」

【二〇】次に正教。

【二一】次に邪正合論。之に七番の問答あり、前の六番は正論、後の一番は降伏。初の正論の中初番に二段ありて初に邪教を立す。

【二二】次に佛破。之に三段ありて初に六根をなして俱に用ひしむ。

【二三】次に老少をなして殊ならざらしむ。

【二四】次に內外をなして俱に見しむ。

(二五)六師復言はく、「瞿曇、若我無ければ誰か能く見るや。」(二六)佛の言はく色有り、明有り、心有り、眼有り。此の四和合の故に名けて見と爲す。是の中實は見者、受者無し、衆生顚倒して見者及以受者有りと言ふ。是の義を以ての故に、一切衆生は所見顚倒し、諸佛菩薩は所見眞實なり。(二七)六師若色是我と言はば、是も亦然らず。(二八)何を以ての故に。色は實に(二九)我に非ず、色若是我ならば、醜陋の形貌を得べからず。何が故ぞ復四姓の差別有りて、悉く一種の婆羅門ならざる。何が故ぞ他に屬して自在を得ず、諸根缺陋生具足せざる。何が故ぞ諸天の身と作らずして而も地獄、畜生、餓鬼、種種の諸身を受くるや。若意に隨ひて作すことを得ること能はざれば當に知るべし必定我有ること無きなり。(三〇)我無きを以ての故に名けて無常と爲す、無常の故に苦なり、苦を以ての故に空なり、空の故に顚倒なり、顚倒を以ての故に一切衆生生死に輪轉す。受、想、行、識も亦復是の如し。(三一)六師、如來世尊永く色縛、乃至識縛を斷ず。是の故に名けて常、樂、我、淨と爲す。(三二)復次に色とは、卽ち是因縁なり。若(三三)因縁なる者は則ち無我と名く、無我は名けて苦空と爲す。如來の身は是因縁に非ず。非因

---

【二五】次に第二番の問答。初に問。

【二六】次に佛答。之に三段ありて初に因縁を示す。

【二七】次に若我を破す。之に三段ありて初に不然の標唱。

【二八】次に別して諸過を出す。

【二九】我に非ず…婆羅門等。我は自在を以て義となす。然るに只だ同一婆羅門種なるべきに何が故ぞ六道輪廻の不同あるや。色既に我なし、受想行識悉く我あることなし。

【三〇】次に過を結す。

【三一】第三に正我を結示す。之に二段ありて初に略示。

【三二】次に討釋。

【三三】因縁なる者は無我等。外道の謂ふ我は皆因縁生なり、是の故に我と言ふも實は是れ無常の法なり。如來の我は因縁所得に非ず、故に常樂淨の法なり。

縁の故に則ち有我と名く。有我は卽ち常、樂、淨なり。」

(三四)六師の言はく、「瞿曇、色も亦我に非ず、乃至識も亦我に非ず。我とは一切處に徧ず、猶し虛空の如し。」(三五)佛の言はく、「若徧じて有らば、則ち我初め見ずと言ふべからず。若初見ざれば、則ち知る、是の見本無今有なり。若本無今有ならば、是を無常と名く。若無常ならば云何ぞ徧と言はん。若徧有ならば、五道の中具さに身有るべし。若身有らば各報を受くべし。若各報を受くれば、云何ぞ轉じて人天を受くと言はん。(三六)汝徧ずと言はば、一なりや多なりや。(三七)我若一ならば、則ち父子怨親中人無し、我(三八)若多ならば、一切衆生所有の五根悉く平等なるべし。所有の業慧も亦是の如くなるべし。若是の如くば、云何ぞ說きて根に具足、不具足なる者有り、善業、惡業、愚智差別すと言はん。」

(三九)「瞿曇、衆生の我は邊際有ること無く、法と非法とは則ち分齊有り。衆生法を修すれば則ち好身を得、若非法を行ずれば則ち惡身を得。是の義を以ての故に、衆生の業果差無きことを得ず。」(四〇)佛の言はく、「六師、法と非法と若是の如くならば、我則ち徧せず。我若徧せば則ち悉く到るべし。如其到らば、修善の人も亦惡有るべく、行惡の人も亦善有るべし。若徧らざれば、

【三四】次に第三番の問答。之に二段、初に外道の救宗。

【三五】次に佛破。之に二段ありて初に直に徧に就て破す。之に又兩段の責徧あり。

【三六】次に更に一異に就て檢す之に二段ありて初に兩章門を唱ふ。

【三七】次に隨釋。之に一責に就く、多責に就くの二段あり。

【三八】若し多ならば等。一一身中各各一我あり。我は是れ自在の法ならば、云何んが利鈍愚智の不同あらんや。

【三九】次に第四番の問答。初に外道の救宗。

【四〇】次に佛破。

云何ぞ徧と言はん。」

（四一）「瞿曇、譬へば一室に百千燈を燃すに、各各自ら明かにして相妨閡せざるが如く、衆生の我なる者も亦復是の如し、修善、行惡相雜合せず。」

（四二）「汝等若我燈の如しと言はば、是の義然らず。（四三）何を以ての故に。彼の燈の明かなる緣よりして有り、燈增長の故に明も亦增長す。衆生の我なる者は、則ち是の如くならず。（四四）明燈よりして出でて異處に住在す。衆生の我は、是の如く身よりして出でて異處に住在することを得ず。（四五）彼の燈の光明闇と共に住す。何を以ての故に。闇室の中に一燈を然す時、照すこと則ち了かならず、乃至多燈、乃ち明了を得るが如し。若初燈闇を破せば、則ち後燈を須ひず。若後燈を須ふれば、當に知るべし、初明闇と共に住す。」

（四六）「瞿曇、若無我ならば誰か善惡を作さん。」（四七）佛の言はく、（四八）「若我作さば、云何ぞ常と名けん。如其常ならば、云何ぞ時有りて善を作し、時有りて惡を作すことを得ん。若時有りて善惡を作すと言はば、云何ぞ復我無邊と言ふことを得ん。若我作さば、何が故ぞ復惡法を習行する。如其我是作者、知者ならば、何が故

【四一】次に第五番の問答。初に外道復救ふに然燈の譬を以てす。
【四二】次に佛破。之に二段ありて初に不然を唱ふ。
【四三】次に三種の破。其中初に緣に從ふ。
【四四】次に明出の異處に就く。
【四五】次に明暗共住に就く。
【四六】次に第六番の問答。初に更に請問す。
【四七】次に佛答。之に二段ありて初に邪我を破す。
【四八】若し我作さば等。我既に常ならば云何んが能く作さん。常何ぞ作さらん。設ひ作ありとするも、何ぞ善を作さずして或は惡を作す。既に善惡不定ならば則ち無常なり。

ざ疑を衆生無我に生ぜん。是の義を以ての故に、外道の法の中に定んで我有ること無けん。(四九)若我と言ふは、則ち是如來なり。何を以ての故に。身無邊の故に、疑網無きが故なり。不作、不受の故に名けて常と爲し、不生、不滅の故に名けて樂と爲し、煩惱垢無きが故に名けて淨と爲し、十相有ること無きが故に名けて空と爲す。是の故に如來は常、樂、我、淨、空にして諸相無し。」

(五〇)諸の外道の言は、「若如來は常、樂、我、淨、無相の故に空と言はば、當に知るべし、瞿曇所說の法は則ち空に非ざるなり。是の故に我今頂戴受持す。」爾の時に外道其の數無量なり、佛法の中に於て信心出家す。(五一)善男子、是の因緣を以ての故に、我此の娑羅雙樹に於て大師子吼す、師子吼とは大涅槃と名く。(五二)善男子、(五三)東方の雙とは、無常を破し常を獲得す、(五四)乃至北方の雙とは、不淨を破して淨を得。(五五)善男子、此の中の衆生、雙樹の爲の故に娑羅林を護りて外人をして其の枝葉を取り、斫截破壞せしめず。我も亦是の如し、四法の爲の故に、諸の弟子をして佛法を護持せしむ。何等をか四つと爲す。常、樂、我、淨なり。此の四雙樹は四王

---

【四九】次に正我を明す。

【五〇】第二に後の一番は外道の歸佛。

【五一】是より第二に樹處を明す之に二段あり、其中初に前を結して後を生ず。

【五二】次に正しく樹處を明す。之に三段ありて初に理を表す。

【五三】東方の雙等。理は卽ち四德、何を以て常、無常に譬へしかに就て二說あり。一は趣に一事を取る、的在する所なしと。二は河西の說、外道の事ふる所の大自在天は東方に在りて住し、教へて西に行かしむ。今佛法の常は其の無常を破するが故にと。

【五四】乃至北方の雙等。河西に依れば乃至は南方に於ける我用自在と西方に於ける常樂とを略稱す。北方の雙とは北方は是れ淨方、又是れ出家の處、

典掌す。我四王の我が法を護持するが爲に、是の故に中に於て般涅槃す。(五六)善男子、娑羅雙樹は華果常に茂り、常に能く無量の衆生を利益す。我も亦是の如し、常に能く聲聞、緣覺を利益す。華とは我を喩へ、果とは樂を喩ふ。是の義を以ての故に、我此の間娑羅雙樹に於て大寂定に入る。大寂定は大涅槃を名く。』

(五七)師子吼の言さく、『世尊、如來何が故ぞ二月涅槃したまふ。』(五八)『善男子、(五九)二月は春と名く。春陽の月は萬物生長し、種植根栽し華果苓榮し、江河盈滿し、百獸孚乳す。是の時衆生多く常想を生ず。衆生の是の如きの常心を破せんが爲に、一切法悉く是無常と說き、唯如來は常住不變と說く。善男子、(六〇)六時の中に於て孟冬枯悴は衆愛樂せず。陽春和液は人の貪愛する所なり。衆生の世間の樂を破せんが爲の故に、常、樂、我、淨も亦爾なり。如來は世我、世淨を破せんが爲の故に、如來眞實我淨と說きたまふ。(六一)二月と言ふは、如來(六二)二種の法身を喩ふ。冬不樂とは、智者如來の無常、涅槃に入るを樂はず。二月樂とは、智者如來の常、樂、我、淨を愛樂するを喩ふ。種植とは、諸の衆生法を聞きて歡喜し、便ち阿

---

故に佛法中の淨を表すと。
【五五】次に喩説。
【五六】次に法喩利益。
【五七】是より第二に時緣。之に二段あり、其中初に月時。之に問答ありて初に問。
【五八】次に佛答。之に二段ありて初に喩を以て事を明す。
【五九】二月…常想を生ず。若し夏の曆に依らば卽ち二月、若し周の曆に依らば卽ち四月なり。これ衆生悦ぶ時、卽ち昔常想を保つ。
【六〇】六時の中に就て二說あり、河西の說は、外國には二月を一時となし、年に六時あり。是れ則ち春夏冬の三時各各前後あるを示すと。招提の說は、春冬の兩時各各孟仲季あり、故に六時となすと。然るに金光明經には、二二にして說かば六時を滿足す、三三にして說かば一歲四時となすと。

阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、諸の善根を種うるを喩ふ。河とは、十方の諸の大菩薩我が所に來詣して、是の如きの大涅槃眞を咨受するを喩ふ。百味乳とは、我が弟子諸の善根を生ずるを喩ふ。華は七覺を喩へ、(六三)果は四果を喩ふ。是の義を以ての故に、我二月に於て大涅槃に入る。』(六四)師子吼の言さく、『如來初生、出家、成道、轉妙法輪、皆八日を以てす。何が故ぞ涅槃獨り(六五)十五日なるや。』(六六)佛の言はく、『善い哉善い哉善男子、十五日は月斷盈無きが如く、諸佛如來も亦復是の如し。大涅槃に入りて斷盈有ること無し。是の義を以ての故に、十五日に於て般涅槃に入る。(六七)善男子、十五日月盛滿の時の如き十一事有り。何等か十一なる。一つには能く闇を破す、二つには衆生をして道、非道を見しむ、三つには衆生をして道の邪正を見しむ、四つには鬱蒸を除きて清涼の樂を得、五つには能く螢火の高心を破壞す、六つには一切賊盜の想を息む、七つには衆生の畏惡獸の心を除く、八つには能く優鉢羅華を開敷す、九つには蓮華を合す、十には行人の路に進むの心を發す、十一には諸の衆生をして五欲を樂受し、多く快樂を獲しむ。善男子、如來滿月も亦復是の如し。一つには無明の大闇を破壞す、二つには正道、邪道を演說す、三つには生死

【六一】次に譬を合して理を明す。
【六二】二種法身とは眞應二身をいふ。河西の云く、是れ常身無常身なり、俱に爲めに因を顯すと。
【六三】果は四果を喩ふ。四果に就て二解あり。一に是れ小乘の四果、大能く小を兼ぬるが故にと。二に是れ四德と。
【六四】第二に日時を明す。之に問答ありて初に問。
【六五】十五日。長阿含には、八日出家、八日入滅と云ひ、今は十五日といふ。此の異蓋し意見の不同に由る、亦た是れ如來の字壽自在なるがためなり。
【六六】次に佛答。之に二段ありて初に本に就く。
【六七】次に德に就く。

の邪險、涅槃の平正を開示す、四つには人をして貪欲、瞋恚、癡の熱を遠離せしむ、五つには外道の無明を破壞す、六つには煩惱結の賊を破壞す、七つには五蓋を畏るる心を除滅す、八つには衆生の善根を種うる心を開發す、九つには衆生の五欲の心を覆蓋す、十には衆生進修して大涅槃に趣向する行を發起す、十一には諸の衆生をして解脱を樂修せしむ。是の義を以ての故に、十五日に於て大涅槃に入る、而も我眞實には涅槃に入らず。我が弟子の中の愚癡惡人、定んで如來涅槃に入ると謂ふ。譬へば母人に多く諸子有り、其の母捨て行きて他の國土に至る。未だ還らざるの頃、諸子各「我が母已に死す」と言ふ、而も是の母人實には死せざるが如きなり。』

（六八）師子吼菩薩の言さく、『世尊、何等の比丘か能く此の娑羅雙樹を莊嚴する。』（六九）『善男子、若し比丘有りて十二部經を受持、讀誦し、其の文句を正し、深義に通達し、人の爲に解說するに初、中、後善あり。無量の衆生を利益せんと欲するが爲に梵行を演說す。是の如き比丘、則ち能く娑羅雙樹を莊嚴す。』師子吼の言さく、『世尊、我が佛所說の義を解するが如くならば、阿難比丘即ち其の人なり。何を以ての故に。阿難比丘十二部經を受持、讀誦し、人の爲に正語、正義を開說す、猶し水を瀉して之を異器に置くが如し。阿難比丘も亦復是の如し、佛に從ひて聞く所、聞くが如く轉じて說く。』『善男子、若し比丘有り淨天眼を得、

【六八】是より第三に人緣。之に二段あり、其中初に人緣。之に問答ありて初に問。

【六九】次に佛答。之に二段ありて初に因中の六人。この六人或は是れ略說、或は是れ物宜、或は是れ上の六師に對するなり。

十方三千大千世界の所有を見ること、掌中の菴摩勒果を觀るが如し。是の如く比丘も亦能く娑羅雙樹を莊嚴す。』師子吼の言さく、『世尊、若是の如きは、(七)阿尼樓駄比丘即ち其の人なり。何を以ての故に。阿尼樓駄天眼に三千大千世界の所有を見る。乃至中陰悉く能く明了にして障閡無きが故に。善男子、若比丘有りて少欲知足にして心に寂靜を樂ひ、勤行精進、念定慧解なり。是の如きの比丘は、則ち能く娑羅雙樹を莊嚴す。』師子吼の言さく、『世尊、若是の如きは、迦葉比丘即ち其の人なり。何を以ての故に。迦葉比丘善く少欲知足等の法を修す。善男子、若比丘有りて、衆生を益せんが爲にして利養の爲にせず。無諍三昧、聖行、空行に修習通達す。是の如き比丘は則ち能く娑羅雙樹を莊嚴す。』師子吼の言さく、『世尊、若是の如きは須菩提比丘、即ち其の人なり。何を以ての故に、須菩提は善く無諍聖行、空行を修するが故なり。』『善男子、若比丘有りて善く神通を修し、一念の中に能く種種の神通變化を作し、一心一定にして能く二果を作す、所謂水火なり。是の如き比丘は則ち能く娑羅雙樹を莊嚴す。』師子吼の言さく、『世尊、若是の如きは目連比丘、即ち其の人なり。何を以ての故に。目犍連は善く神通無量の變化を修するが故なり。』善男子、若比丘有りて善く大智、利智、疾智、解脱智、甚深智、廣智、無邊智、無勝智、實智を修して是の如き慧根を具足成就し、怨親中に於て心に差別無し。』『若如來の涅槃無常を聞きて心に憂慼せず、若常住して涅槃に入らざるを聞くも欣慶を生ぜず。是

【七】阿尼樓駄(Aniruddha)。舊に如意無貪、新に無滅と譯す。佛の從弟にして迦毘羅城の釋氏なり、佛十大弟子の一。

の如きの比丘は則ち能く婆羅雙樹を莊嚴す。』師子吼の言さく『世尊、若是の如きは、舍利弗比丘即ち其の人なり。何を以ての故に。舍利弗は善能く是の如き大智慧を成就し具足するが故なり。』(七一)『善男子、若比丘有りて能く衆生悉く佛性有りと說く。金剛身を得、邊際有ること無し。常、樂、我、淨なり。身心無閡にして八自在を得。是の如き比丘は則ち能く婆羅雙樹を莊嚴す。』師子吼の言さく『世尊、若是の如きは、唯如來のみ有り、是其の人なり。何を以ての故に。如來の身は金剛無邊、常樂我淨、身心無閡、八自在を具するが故なり。世尊、唯如來のみ有りて乃ち能く婆羅雙樹を莊嚴す、如其無き者は則ち端嚴ならず。(七二)唯願はくは大慈、莊嚴の爲の故に常に此の婆羅樹林に住したまへ。』

(七三)佛の言はく、『善男子、一切諸法は性無住住なり。汝云何ぞ願如來住と言ふ。(七四)善男子、凡そ住と言ふは、名けて色法と爲す。因緣より生ず、故に名けて住と爲し、因緣無處の故に無住住と名く。如來已に一切の色縛を斷ず、云何ぞ當に願如來住と言ふべきや。受、想、行、識も亦復是の如し。善男子、住は憍慢と名く。憍慢を以ての故に解脫を得ず。解脫を得ざるが故に名けて住と爲す。誰か憍慢有り、何れの處より來る、是の故に名けて無住住と爲す。如來永く一切憍慢を斷ず、云何ぞ願如來住と言はん。住は有爲法と名く。如來已に有爲の法を斷ず、是の故に不住なり。住とは名けて

【七一】次に果人。
【七二】次に第二に論義。之に三番の問答あり。初番の中先づ問。
【七三】次に佛答。之に二段あり、其中初に本を明す。之に又二段ありて初に略無住。
【七四】次に廣無住。之に法、譬の二段あり。初の法に又二段ありて初に住を釋す。

空法と爲す、如來已に是の如き空法を斷ず。是の故に常、樂、我、淨を獲得す、云何ぞ願如來住と言ふ。住とは名けて二十五有と爲す。如來已に二十五有を斷ず、云何ぞ願如來住と言はん。住とは卽ち是一切の凡夫なり。諸聖は無去、無來、無住なり。如來已に去來住相を斷ず、云何ぞ住と言はん。（五五）夫無住とは無邊身と名く。身無邊の故に。云何ぞ、「唯願はくは如來娑羅林に住せよ」と言はん。若此の林に住せば則ち是有邊なり。身若邊有らば則ち是無常なり。如來は是常、云何ぞ住せよと言はん。夫無住とは名けて虛空と曰ふ。如來の性は虛空に同じ、云何ぞ住と言はん。又無住とは金剛三昧と名く。金剛三昧は一切の住を壞す。金剛三昧は卽ち是如來なり、云何ぞ住と言はん。又無住とは則ち名けて幻と爲す。如來は幻に同じ、云何ぞ住と言はん。又無住とは無始終と名く。如來の性は始終有ること無し、云何ぞ住と言はん。又無住とは無邊法界と名く。無邊法界は卽ち是如來なり、云何ぞ住と言はん。又無住とは首楞嚴三昧と名く。首楞嚴三昧は一切法を知りて著する所無し。無著を以ての故に首楞嚴と名く。如來首楞嚴定を具足す、云何ぞ住と言はん。又無住とは處非處力と名く。如來處非處力を成就す、云何ぞ住と言はん。又無住とは檀波羅蜜と名く。檀波羅蜜若住有らば、則ち尸波羅蜜、乃至般若波羅蜜に至ることを得ず。是の義を以ての故に、檀波羅蜜を名けて無住と爲す。如來は乃至般若波羅蜜に住せず、云何ぞ願じて如來常に娑羅樹林に住せよと言はん。又無住とは四念處を修すと名く。如來若四念處に住せば、則ち阿耨多

【五五】次に無住を釋す。

羅三藐三菩提を得て不住住と名くること能はず。又無住とは無邊衆生界と名く。如來は悉く一切衆生の無邊の界分に到りて住する所無し。又無住とは屋宅無しと名く、無屋宅とは名けて有ること無しと爲す、無有とは名けて生ずること無しと爲す、無生とは名けて死すること無しと爲す、無死とは名けて相無しと爲す、無相とは名けて繫がること無しと爲す、無繫とは名けて著すること無しと爲す。無著とは名けて漏ること無しと爲す。無漏は卽ち善なり、善は卽ち爲すこと無し。無爲とは卽ち大涅槃常なり、大涅槃常とは卽ち我なり、我とは卽ち淨なり、淨とは卽ち樂なり、常樂我淨は卽ち是如來なり。

(七六)善男子、譬へば虛空は東方、南西北方、四維、上下に住せざるが如く、(七七)如來も亦爾なり、東方、南西北方、四維、上下に住せず。善男子、若し說きて身口意、惡善果を得と言ふ有らば是の處有ること無し。身口意、善惡果を得とは亦是の處無し。若凡夫佛性を見ることを得、十住の菩薩見ることを得ずと言はば、亦是の處無し。一闡提の輩、犯五逆罪、謗方等經、毀四重禁、阿耨多羅三藐三菩提を得とは、亦是の處無し。六住の菩薩煩惱の因緣にて三惡道に墮せば、亦是の處無し。菩薩摩訶薩眞の女身を以て阿耨多羅三藐三菩提を得とは、亦是の處無し。一闡提常、三寶無常とは、亦是の處無し。如來拘尸城に住せば、亦是の處無し。(七八)善男子、如來今此の拘尸城に於て大三昧深禪定窟に入りたまふ、衆見ざるが故に大涅槃と名く。」

【七六】次に譬に就て無住を說く。之に二段ありて初に譬。
【七七】次に合。
【七八】第二に辯過。

(七九)師子吼の言さく、『如來何が故ぞ禪定窟に入りたまふや。』(八〇)『善男子、諸の衆生を度脫せんと欲するが爲の故に、未だ善根を種ゑざるに種うることを得しむるが故に、已に善根を種うるに增長を得るが故に、善果未熟に熟を得しむるが故に、已熟者の爲に說きて阿耨多羅三藐三菩提に趣くが故に、善法を輕賤する者に尊貴を生ぜしむるが故に、諸有放逸の者に放逸を離れしむるが故に、文殊師利等の諸大香象と共に論議せんが爲の故に、樂んで讀誦する者を教化して深く禪定を愛せしめんと欲するが爲の故に、聖行、梵行、天行を以て衆生を化するが爲の故に、不共深法藏を觀ずるが爲の故に、放逸の弟子を訶責せんと欲するが爲の故に、如來の常寂なる猶尚定を樂ひたまふ。況や汝等の煩惱未だ盡きず、放逸を生する。諸の惡比丘八種の不淨の物を受畜し、及び不少欲、不知足を訶責せんと欲するが爲の故に、衆生をして所聞の禪定法を尊重せしむるが爲の故に。是の因緣を以て禪定窟に入りたまふ。』

(八一)師子吼の言さく、『世尊、無相定は大涅槃と名く、是の故に涅槃を名けて無相と爲す。何の因緣を以てか名けて無相と爲す。』(八二)『善男子、十相無きが故なり。何等をか十と爲す。所謂色相、聲相、香味觸相、生住壞相、男相、女相なり。是を十相と名く。是の如きの相無し、故に無相と名く。(八三)善男子、夫れ著相の者は、則ち能く癡を生す。癡の故に愛を生じ、愛の故に繫縛し、繫縛の故に生を受け、

【七九】次に第二番の問答。初に問。
【八〇】次に佛答。
【八一】次に第三番の問答。初に問。
【八二】次に佛答。之に三段ありて初に直ちに十相無きを明す。
【八三】次に有相の失を明す。

生あるが故に死有り、死の故に常無し。（八四）相に著せざれば則ち癡を生ぜず、癡を生ぜざるが故に則ち愛有ること無し、愛有ること無きが故に則ち繫縛無し、繫縛無きが故に則ち生を受けず、生を受けざるが故に則ち死有ること無し、死有ること無きが故に則ち名けて常と爲す。是の義を以ての故に涅槃を常と名く。』

（八五）師子吼の言さく、『世尊、何等の比丘か能く十相を斷ずる。』（八六）佛の言はく、『善男子、若比丘有りて時時三種の相を修習すれば、則ち十相を斷ず。時時三昧（八七）定相を修習し、時時智慧の相を修習し、時時捨相を修習す。是を三相と名く。』（八八）師子吼の言さく、『世尊、云何が名けて定、慧、捨の相と爲す。（八九）定是三昧ならば、一切衆生皆三昧有り、云何ぞ方に三昧を修習すと言はん。（九〇）若心一境に在らば則ち三昧と名け、若更に餘緣せば則ち三昧と名けず。如其定ならざれば一切智に非ず、一切智に非ずんば云何ぞ定と名けん。（九一）若一行を以て三昧と名くることを得ば、其の餘の諸行も亦三昧に非ず。若三昧に非ざれば則ち一切智に非ず、若一切智に非ざれば、云何ぞ三昧と名けん。（九二）慧捨の二相も亦復是の如し。』

---

【八四】次に無相の得を明す。

【八五】是より第二に資因を明す。之に三段あり、其中初に三法を明す。之に又二段あり、初に略して問答す。先づ問。

【八六】次に佛答。

【八七】定相智慧相捨相。若し單行を云はば戒定慧を以て三法と爲すも、今文は定慧捨を以て三法とし、而して定慧を正とし捨を傍とす。捨は是れ調停の義なり。

【八八】次に廣く問答す。初に問。之に二段ありて初に通じて問ふ。

【八九】次に別して問ふ。之に二段あり、其中初に廣く定に約して問ふ。之に又三段ありて初に本有に據る。

【九〇】次に一境に就く。

【九一】次に一行に就く。

【九二】次に慧捨を以て例す。

(九三)佛の言はく、「善男子、汝が言ふ所の如く、一境を緣するを三昧と名くることを得ば、其の餘の諸緣は三昧と名けずとは、是の義然らず。何を以ての故に。是の如き餘緣も亦一境の故なり。行も亦是の如し。(九四)又衆生先より三昧有りて修することを須ひずと言ふは、是も亦然らず。所以は何ん。三昧と言ふは善三昧と名く。一切衆生は眞實に未だ有らず、云何ぞ修習すべからずと言ふ。(九五)是の如き善三昧の中に住して一切法を觀ずるを以て、善慧の相と名く。(九六)三昧智慧の異相を見ず、是を捨相と名く。

(九七)復次に善男子、若色相を取りて色の常、無常相を觀ずること能はず、是を三昧と名く。(九八)若能く色の常、無常相を觀ずる、是を慧相と名く。(九九)三昧慧等しく一切法を觀ず、是を捨相と名く。善男子、善御駟を駕して遲疾所を得。遲疾所を得るが故に捨相と名くるが如く、菩薩も亦爾なり。若三昧多き者は則ち慧を修習す。若慧多き者は則ち三昧を修習す。三昧慧等しければ則ち名けて捨と爲す。善男子、十住の菩薩智慧力多く三昧力少し。是の故に明かに佛性を見ることを得ず。聲聞、緣覺三昧力多く智慧力少し。是の因緣を以て佛性を見ず。諸佛世尊定慧等しきが故に明かに佛性を見る、了了にして礙無きこと、掌中の菴摩勒果を觀るが如し。佛性を見る者名けて捨相と爲す。

【九三】第二に佛答。之に二段あり、其中初に別問に答ふ。之に又二段あり、其中初に定を答ふ。其中先に第二問を答へ第三問を以て例す。

【九四】次に追て第一問を答ふ。

【九五】次に慧捨を答ふ。之に二段ありて初に慧相。

【九六】次に捨相。

【九七】第二に通問に答ふ。之に四段あり、其中初に略して三法の體を標す。之に又三段ありて初に定體を標す。

【九八】次に慧體を出す。

【九九】次に捨體を明す。之に法、譬、合の三段あり。

(一〇〇)奢摩他とは名けて能滅と爲す、能く一切の煩惱結を滅するが爲の故に。又奢摩他とは名けて能調と曰ふ、能く諸根の惡不善を調ふるが故に。又奢摩他とは名けて寂靜と曰ふ、能く三業をして寂靜ならしむるが故に。又奢摩他とは名けて遠離と曰ふ、能く衆生をして五欲を離れしむるが故に。又奢摩他とは名けて能淸と曰ふ、能く貪欲、瞋恚、愚癡の三濁法を淸むるが故に。是の義を以ての故に、故に定相と名く。(一〇一)毘婆舍那は名けて正見と爲し、亦了見と名く。名けて能見と爲し、名けて徧見と曰ふ。次第見と名け、別相見と名く。是を名けて慧と爲す。(一〇二)優畢叉とは名けて平等と曰ひ、亦不諍と名く。又不觀と名け、亦不行と名く。是を名けて捨と爲す。

(一〇三)善男子、奢摩他に二種有り。一つには世間、二つには出世間なり。復二種有り。一つには成就、二つには不成就なり。成就とは所謂諸佛、菩薩、不成就とは所謂聲聞、辟支佛等なり。復三種有り。下、中、上なり。下とは諸の凡夫を謂ひ、中とは聲聞、緣覺、上とは諸佛、菩薩なり。復四種有り。一つには退、二つには住、三つには進、四つには能大利益なり。復五種有り。所謂五智三昧なり。何等をか五つと爲す。一つには無食三昧、二つには無過三昧、三つ

【一〇〇】次に三法の名を釋す。定の中、奢摩他(Śamatha)には、止と譯し、本文には能滅・能調・寂靜等の諸義を出す。心を攝して緣に住し、散亂を離るる狀態に名づく。禪定七名の一。
【一〇一】毘婆舍那(Vipaśyanā)。觀と譯し、本文には正見・了見・能見等の諸義を出す。定を所依として生ずる事理の觀智に名づく。
【一〇二】優畢叉(Upekṣā)。捨又は平等と譯す。心を平等に持し、一方に偏せざる狀態に名く。
【一〇三】次に更に廣く三法の體を出す。之に二段ありて初に廣く定體を出す。

には身意清淨一心三昧、四つには（一〇四）因果俱樂三昧、五つには常念三昧なり。復六種有り。一つには觀骨三昧、二つには慈三昧、三つには觀十二因緣三昧、四つには（一〇五）阿那婆那三昧、五つには（一〇六）念覺觀三昧、六つには觀生滅三昧なり。復七種有り、所謂七覺分なり。一つには念覺分、二つには擇法覺分、三つには精進覺分、四つには喜覺分、五つには除覺分、六つには定覺分、七つには捨覺分なり。復七種有り。一つには須陀洹三昧、二つには斯陀含三昧、三つには阿那含三昧、四つには阿羅漢三昧、五つには辟支佛三昧、六つには菩薩三昧、七つには如來覺知三昧なり。復八種有り。八解脫三昧を謂ふ。一つには色觀色解脫三昧、二つには內無色相外觀色解脫三昧、三つには淨解脫身證三昧、四つには空處解脫三昧、五つには識處解脫三昧、六つには無所有處解脫三昧、七つには非有想非無想處解脫三昧、八つには滅盡定解脫三昧なり。復九種有り、所謂九次第定なり。四禪、四空、及び滅盡定三昧なり。復十種有り、所謂（一〇七）十一切處三昧なり。何等をか十と爲す。一つには地一切處三昧、二つには水一切處三昧、三つには風一切處三昧、四つには青一切處三昧、五つには黃一切處三昧、六つに

---

【一〇四】因果俱樂とは河西云く、謂ゆる佛所得の定、入出自在にして始終常樂なりと。

【一〇五】阿那婆那（Ānāpāna）。數息と譯す（正しくは入出息）。出息・入息を數ふる觀法の名。

【一〇六】念覺觀。念・覺・觀は即ち言語の覺觀、俱に是れ過患。觀生滅とは生滅に於て斷常の觀を起すに名づく。

【一〇七】十一切處。但だ地・水・風を列ねて火を明さざるは、有人の言く、經本誤つて火の字を失すと。招提に依れば火大は三大に比し恆ならず常に薪を緣とせざれば火發せざる故に擧げずといふ。然るに河西に依れば骨肉等は是れ地、涕唾等は是れ水、氣息は是れ風、此の三大は恆なれども、獨り火大は有りて少時あり、故に但だ三なるのみと。河西の說

は赤一切處三昧、七つには白一切處三昧、八つには空一切處三昧、九つには識一切處三昧、十には無所有一切處三昧なり。復無數種有り、所謂諸佛、菩薩なり。善男子、是を三昧の相と名く。(一〇八)善男子。慧に二種有り。一つには世間、二つには出世間なり。復三種有り。一つには(一〇九)般若、二つには毗婆舍那、三つには(一一〇)闍那なり。般若とは一切衆生と名け、毗婆舍那とは一切聖人、闍那とは諸佛菩薩なり。又般若とは名けて別相と爲し、毗婆舍那は名けて總相と爲し、闍那とは名けて破相と爲す。復四種有り、所謂四眞諦を觀ず。(一一一)善男子、三事の爲の故に奢摩他を修す。何等をか三つと爲す。一つには不放逸の故に、二つには大智を莊嚴するが故に、三つには自在を得るが故なり。復次に三事の爲の故に毗婆舍那を修す。何等をか三つと爲す。一つには生死の惡果報を觀ずるが爲の故に、二つには諸の善根を增長せんと欲するが爲の故に、三つには一切の諸の煩惱を破するが爲の故なり。」

得たりと云ふべし。

【一〇八】次に廣く慧體を出す。

【一〇九】般若毗婆舍那等。般若は正に慧、一切衆生の數を知るの義。毗婆舍那は正に觀、三昧慧の能く總知するの義。闍那は正に智、決斷最勝にして諸佛に在り。智は慧の積極的なると異り、消極的なり、故に破相と爲すといふ。此の三慧各各所緣を異にせり、文の如し。

【一一〇】闍那(Jñāna ジニャーナ)。智又は憶念と譯す。

【一一一】次に功用を明す。

# 卷の第二十九

## 師子吼菩薩品の五

(一)師子吼の言さく、「世尊、經中に說くが如く、若毘婆舍那能く煩惱を破せば、何が故ぞ復奢摩他を修せんや。」

(二)佛の言はく、「善男子、汝毘婆舍那煩惱を破すと言はば、是の義然らず。(三)何を以ての故に。智慧有る時は則ち煩惱無く、煩惱有る時は則ち智慧無し。云何ぞ毘婆舍那能く煩惱を破すと言はん。(四)善男子、譬へば明時に闇無く、闇時に明無きが如し。若說きて「明能く闇を破す」と言ふ有らば、是の處有ること無し。(五)善男子、誰か智慧有り誰か煩惱有りて、而も智慧能く煩惱を破すと言はん。(六)如其無くば則ち破する所無けん。(七)善男子、若智慧能く煩惱を破すと言はば、到るが故に破すと爲んや、到らざるが故に破すや。若到らずして破せば、凡夫衆生は則ち能く破すべし。若到るが故に破せば、初念破すべし。若初念破せざれば、後も亦破せず。若初に到りて便ち破せ

【一】是より第二に定慧相資を明す。之に問、答の二段ありて初に問。
【二】次に佛答。之に總、別二破ありて初に總破。
【三】次に別破。之に二段あり。之此中初に法を以て科簡す。之に七段ありて初に無異に約して以て破す。此中先に體同なるを明す。
【四】次に譬もて體同を喩ふ。
【五】第二に無有に約して以て破す。之に二段ありて初に人法を責む。
【六】次に無有を結す。
【七】第三に到不に約して以て

ば、是則ち不到なり。云何ぞ說きて智慧能く破すと言はん。(八)若到と不到と而も能く破すと言はゞ、是の義然らず。(九)復次に毗婆舍那煩惱を破すとは、獨能く破すと爲ん、伴の故に破すと爲んや。若獨能く破せば、菩薩何が故ぞ八聖道を修する。若伴の故に破せば、當に知るべし、獨は則ち破すること能はざるなり。若獨能はざれば伴も亦能はず。(一〇)一りの盲人色を見ること能はず、衆盲を伴ふと雖も亦見ること能はざるが如く、毗婆舍那も亦復是の如し。(一一)善男子、地の堅性、火の熱性、水の濕性、風の動性の如し。地の堅性、乃至風の動性は因緣作に非ず、其の性自ら爾なり。四大の性の如く、煩惱も亦爾なり、性自ら是斷なり。若是斷ならば云何ぞ智慧能く斷ずと言はん。(一二)是の義を以ての故に、毗婆舍那決定して諸の煩惱を破すること能はず。(一三)善男子、鹽の性は鹹、異物をして鹹からしめ、蜜の本性は甘、異物をして甘からしめ、水の本性は濕、異物をして濕らしむるが如く、智慧の性は滅、法をして滅せしむとは、是の義然らず。何を以ての故に。若法滅する無くば云何ぞ智慧强ひて能く滅せしめんや。(一四)若鹽鹹異物をして鹹からしむ。慧滅も亦爾なり、異法をして滅せしむと言ふは是亦然らず。何を以ての故に。智慧の性念念に滅するが故に。若念念に滅せば、云何ぞ能く他法を滅すと言はん。是の義を以ての故に、智慧の性は煩惱を

破す。之に二段ありて初に雙べて不到到を明す。
【八】次に雙べて無破を結す。
【九】第四に無欲に約して以て破す。之に二段ありて初に法に約して正しく破す。
【一〇】次に譬。
【一一】第五に無因に約して以て破す。之に二段ありて初に類を出して破す。
【一二】次に結。
【一三】第六に無能に約して以て破す。之に四段ありて初に法。
【一四】次に譬。

破せず。(二五)善男子、一切諸法に二種の滅有り。一つには性滅、二つには畢竟滅なり。若性滅ならば云何ぞ智慧能く滅すと言はん。(二六)若智慧能く煩惱を滅す、火の物を燒くが如しと言はば、是の義然らず。何を以ての故に。火の物を燒くが如きは則ち遺燼有り。智慧若爾らば餘燼有るべし。斧の樹を伐るに破處見るべきが如く、智慧若爾らば何の見るべき有らん。智若能く煩惱をして離れしめば、是の如き煩惱餘處に現ること、諸の外道の六大賊を離れて拘尸城に現るが如くなるべし。若是煩惱餘處に現れざれば、則ち知る、智慧離れしむること能はざることを。(二七)善男子、一切諸法の性若自ら空ならば、誰か能く生ぜしめ、誰か能く滅せしめん。生異、滅異造作の者無し。(二八)善男子、若定を修習すれば、則ち是の如きの正智正見を得。(二九)是の義を以ての故に、我經中に說く、「若比丘の定を修習する者有らば、能く五陰出滅の相を見る」と。善男子、若定を修せざれば、世間の事尚了すること能はず、況や出世に於てをや。若定無き者は平地に顚墜せん。心異法を緣し、口異言を宣べ、耳異聲を聞き、心異義を解せん。異字を造らんと欲して手異文を書し、異路を行かんと欲して身異徑を游らん。(三〇)若三昧定を修習する者有らば則ち大いに利益し、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至る。

(三一)善男子、菩薩摩訶薩二法を具足して能く大いに利益す。一つには定、二つには智なり。善男子、菅草を刈るに、執ること急なれば則ち斷ずるが

【二五】次に[illegible]。
【二六】次に[illegible]。
【二七】第七に[illegible]に約して[illegible]
【二八】次に第三に[illegible]の定[illegible]を示す。之に[illegible]あり、[illegible]之を[illegible]、之に又二種ありて先づ定に即して慧を具す。

如く、菩薩摩訶薩是の二法を修するも亦復是の如し。善男子、堅木を拔くに、先に手を以て動かせば後則ち出で易きが如し。菩薩の定慧も亦復是の如し、先に定を以て動し、後智を以て拔く。善男子、垢衣を浣ふに先に灰汁を以てし、後に清水を以てすれば衣則ち鮮潔なるが如く、菩薩の定慧も亦復是の如し。善男子、先に讀誦し、後則ち義を解るが如く、菩薩の定慧も亦復是の如し。善男子、譬へば勇人の先に鎧仗を以て牢く自ら莊嚴し、然して後陣を禦ぐに能く怨賊を壞るが如く、菩薩の定慧も亦復是の如し。善男子、譬へば工匠の鉗鑷に金を盛り、自在に意に隨ひて提拔融消するが如く、菩薩の定慧も亦復是の如し。善男子、譬へば明鏡の面像を照了するが如く、菩薩の定慧も亦復是の如し。善男子、先に地を平げ、然して後種を下すに、先に師に從ひて受け、後に義を思惟するが如く、菩薩の定慧も亦復是の如し。是の義を以ての故に、菩薩摩訶薩是の二法を修すれば能く大いに利益す。(二二)善男子、菩薩摩訶薩是の二法を修して、五根を調攝し衆苦を堪忍す。所謂飢渴、寒熱、打擲、罵辱、惡獸に齧まれ蚊蝱に螫され、常に其の心を攝して放逸せしめず、利益の爲に非法を行せず、客塵煩惱の汙すこと能はざる所、諸邪の異見に惑はされず。常に能く諸の惡覺觀を遠離し、久しからずして阿耨多羅三藐三菩提を成就せん。衆生を成就し利益せんと欲するが爲の故なり。(二三)善男子、菩薩摩訶薩是の二法を修す

【一九】次に七に世間の十譬喩等の法を出す。
【二〇】次に三菩提を具す。
【二一】第二に定慧相即し之に二段ありて、初に定に即して慧を明す。
【二二】次に慧に即して而も定、之に二段あり、初に正明。
【二三】次に功能。

れば、四倒の暴風吹動すること能はず、須彌山の四風に吹鼓せらると雖も、動せしむること能はざるが如し。外道邪師に拔かれず、帝釋幢の移轉すべからざるが如し。衆邪の異術も誑惑すること能はず、常に微妙第一安樂を受け、能く如來の深祕密義を解す。樂を受くるも欣ばず、苦に逢ふも感えず。諸天、世人恭敬讃歎す。(二三)明かに生死、及び非生死を見、善能く法界法性、身に常、樂、我、淨の法有るを了知す。是を則ち名けて大涅槃の樂と爲す。(二四)善男子、定相とは空三昧と名け、慧相とは無願三昧と名け、捨相とは無相三昧と名く。(二五)善男子、若菩薩摩訶薩有りて善く定の時、慧の時、捨の時を知り、及び非時を知る。是を菩薩摩訶薩菩提道を行ずと名く。』

(二六)師子吼の言さく、『世尊、云何が菩薩、時、非時を知る。』(二七)『善男子、菩薩摩訶薩樂を受くるに因りて大憍慢を生じ、或は說法に因りて憍慢を生じ、或は精勤に因りて憍慢を生じ、或は解義に因りて問答を善くする時憍慢を生じ、或は惡知識に親近するに因るが故に憍慢を生じ、或は重んずる所の物を布施するに因りて憍慢を生じ、或は世間の善法功德に因りて憍慢を生じ、或は世間豪貴の人に恭敬せらるるに因るが故に憍慢を生ず。當に知るべし、爾の時に智を修するに宜しからず、宜しく定を修すべし。是を菩薩、時、非時を知ると名く。若菩薩有りて精進に勤修して未だ利益涅槃の樂を得ず。得ざるを以ての故に悔心を生じ、鈍根なるの故に五情の諸根を調伏する能はず。諸垢、煩惱の勢力盛なるが故に、自ら戒律の

【二四】第三に定慧の二相。
【二五】第四に自在適時を明す。之に二段ありて初に時非時を唱ふ。
【二六】次に更に問答す。初に問。
【二七】次に佛答。

攝有りと疑ふが故に。當に知るべし、爾の時に定を修するに宜しからず、宜しく智を修すべし。是を菩薩、時、非時を知ると名く。善男子、若し菩薩有りて定、慧二法平等ならざれば、當に知るべし、爾の時に捨を修するに宜しからず。二法若し等しければ則ち宜しく之を修すべし。是を菩薩、時、非時を知ると名く。善男子、若し菩薩有りて定慧に修習して煩惱を起さば、當に知るべし、爾の時に捨を修すべからず。宜しく十二部經を讀誦、書寫、解說し、佛を念じ、法を念じ、僧を念じ、戒を念じ、天を念じ、捨を念ずべし。是を捨を修すと名く。

（二八）善男子、若し菩薩是の如き三法相を修習する者有らば、是の因緣を以て無相涅槃を得。」

（二九）師子吼の言さく、『世尊、十相無きが故に大涅槃を名けて無相と爲すとは、復何の緣を以て名けて無生、無出、無作、屋宅、洲、歸、安隱、滅度、涅槃、寂靜、無諸病苦、無所有と爲すや。』（三〇）佛の言はく、『善男子、因緣無きが故に、故に無生と名く。無爲を以ての故に、故に無出と名く。造業無きが故に、故に無作と名く。五見を入れず、故に屋宅と名く。四暴水を離る、故に名けて洲と爲す。衆生を調ふるが故に、故に歸依と名く。結賊を壞するが故に、故に安隱と名く。諸結の火滅す、故に滅度と名く。覺觀を離るるが故に、故に涅槃と名く。慣鬧を遠かるが故に、名けて寂靜と爲す。永く必死を斷ず、故に無病と

【二八】是より第三に修道の力用を明す。之に二段あり、其中初に業を感じ涅槃を得ることを明す。之に又二段ありて初に涅槃を得ることを明す。

【二九】次に論義。之に兩番の問答あり。其中初番の中の問。

【三〇】次に佛答。

名く。一切無きが故に、無所有と名く。善男子、若菩薩是の觀を作す時、卽ち明了に佛性を見ること
を得。』

（三一）師子吼の言さく、『世尊、菩薩摩訶薩幾法をか成就して能く是の如きの無相涅槃、無所有に至る
を見るや。』（三二）佛の言はく、『善男子、菩薩摩訶薩十法を成就すれば、則ち能く明かに涅槃無相、無所
有に至るを見る。（三三）何等をか十と爲す。一つには信心具足なり。云何が名けて信心具足と爲す。深く
佛、法、衆僧是常、十方の諸佛方便示現し、一切衆生及び一闡提悉く佛性有るを信ず。如來生、老、病
死、及び修苦行、提婆達多眞實に僧を破し佛身の血を出すも、如來畢竟じて
涅槃に入り正法滅盡するを信ぜず。是を菩薩の信心具足と名く。二つには
淨戒具足なり。云何が名けて淨戒具足と爲す。善男子、若菩薩有りて自ら
戒淨と言ふ。彼の女人と和合せずと雖も、女人を見る時、或は共に嘲調し、
言語戲笑す。是の如きの菩薩欲法を成就し、淨戒を毀破し、梵行を汙辱し、戒をして雜穢ならしむ。
名けて淨戒具足と爲すことを得ず。復菩薩有りて自ら戒淨と言ふ。彼の女人と身合し、嘲調戲笑せず
と雖も、壁障の外に於て遙かに女人の瓔珞、環釧、種種の諸聲を聞きて心に愛著を生ず。是の如き菩
薩欲法を成就し、淨戒を毀破し、梵行を汙辱し、戒をして雜穢ならしむ。名けて淨戒具足と爲すこと
を得ず。復菩薩有りて自ら戒淨と言ふ。復女人と和合し、言語嘲調し、其の音聲を聽かずと雖も、然

【三一】次に第二番の問答。初に問。
【三二】次に佛答。之に三段ありて初に標。
【三三】次に釋。

き、男子の女に隨逐するを見る時、或は女人の男に隨逐するを見る時、便ち貪著を生ず。是の如きの菩薩欲法を成就し、淨戒を毀破し、梵行を汚辱し、戒をして雜穢ならしむ。名けて淨戒具足と爲すことを得ず。復菩薩有りて自ら戒淨と言ふ。復女人と和合し、言語嘲調し、其の音聲を聽き、男女相隨ふを見ずと雖も、然も天に生じて五欲の樂を受くるが爲にす。是の如きの菩薩欲法を成就し、淨戒を毀破し、梵行を汚辱し、戒をして雜穢ならしむ。名けて淨戒具足と爲すことを得ず。善男子、若菩薩有りて清淨持戒、而も戒の爲にせず、尸波羅蜜の爲にせず、衆生の爲にせず、利養の爲にせず、菩提の爲にせず、涅槃の爲にせず、聲聞、辟支佛の爲にせず、唯最上第一義の爲の故に禁戒を護持す。善男子、是を菩薩の淨戒具足と名く。三つには諸の善知識に親近するなり。善知識とは、若能く信戒、多聞、布施、智慧を説きて、人をして受行せしむる有らば、是を菩薩の善知識と名くるなり。四つには寂靜を樂ふなり。寂靜とは所謂身心寂靜にして諸法の甚深法界を觀察す。是を寂靜と名く。五つには精進なり。精進とは、所謂心を繫けて四聖諦を觀ず。設ひ頭火然ゆとも終に放捨せず。是を精進と名く。六つには念具足なり。念具足とは、所謂念佛、念法、念僧、念戒、念天、念捨なり。是を念具足と名く。七つには耎語なり。耎語とは所謂實語、妙語、意に先じて問訊す、時語、眞語なり。是を耎語と名く。八つには護法なり。護法とは、所謂正法を愛樂し、常に樂んで演說し、讀誦、書寫し、其の義を思惟し、廣宣敷揚して其をして流布せしむ。若人の書寫、解說、讀誦、讃歎し、義を思惟する者有るを見ば、爲

受くれば、是の報盡くること無し。何れの時か當に阿耨多羅三藐三菩提を得べき。(三八)世尊、經中に復說かく、『若人重心に善惡の業を造れば必ず果報を得、若は現世に受け、若は次生に受け、若は後世に受く。(三九)純陀は善業重心に作すが故に、當に知るべし、是の業必定して報を受けん。若定んで報を受くれば、云何ぞ阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得、云何ぞ復佛性を見ることを得ん。』(四〇)世尊、經中に復說かく、『三種の人に施す、果報盡くること無けん。一つには病人、二つには父母、三つには如來なり。』(四一)世尊、經中に復說かく、『佛阿難に告ぐ、一切衆生如其欲界の業有ること無ければ、即ち阿耨多羅三藐三菩提を得、色無色の業も亦是の如し。』世尊、法句の偈の如し、

「空に非ず海中に非ず、山石間に入るに非ず、
地方所有ること無し、之を脫るれば業を受けず。」

(四二)又阿尼樓馱の言さく、「世尊、我憶す、往昔一食を以て施して八萬劫の中三惡に墮せず」と。世尊、一食の施尙是の報を得、何に況や純陀信心もて佛に施し、檀波羅蜜を具足し成就せるをや。(四三)世尊、若善果報盡くべからざれば、謗方等經、犯五逆罪、一闡提の輩云何ぞ盡すべけん。若盡すべからざれば、云何ぞ能く佛性を見、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得ん。』(四四)佛の言はく、『善い哉善い哉善男子、唯二人有り、能く無量無邊の功德を得て稱計すべからず、

【三九】次に正問。
【四〇】次に重ねて無窮を明す。
【四一】次に重ねて必定を明す。
【四二】次に況を以て問を結す。
【四三】第二に惡業を問ふ。
【四四】次に第二に佛答。之に二段ありて初に讃問。

宣説すべからず。能く生死の漂流暴河を竭し、怨敵を降伏し、魔の勝旛を摧き、能く如來の無上法輪を轉ず。一つには善聞、二つには善答なり。

(四五)善男子、佛の十力の中に業力最も深し。(四六)善男子、諸の衆生有りて業緣の中に於て心に輕んじて信せず、彼を度するが爲の故に是の如きの説を作す。(四七)善男子、一切の作業に輕有り重有り。輕重の二業に復各二つ有り。一つには決定、二つには不決定なり。(四八)善男子、或は人惡業果無しと言ふ有り。若惡業定んで果有りと言はば、云何ぞ氣噓旃陀羅にして天に生ずることを得、鴦掘魔羅の解脱果を得る。是の義を以ての故に、當に知るべし、作業定んで果を得、定んで果を得ざる有りと。我是の如きの邪見を除斷せんが爲に、故に經中に於て是の如きの語を説かく「一切の作業果を得ざる無し」と。

(四九)善男子、或は重業の輕と作すことを得べき有り、或は輕業の重と作すことを得べき有り。一切の人に非ず、唯愚智有り。是の故に當に知るべし、一切の業悉く定んで果を得るに非ず、定んで得ずと雖も亦得ざるに非ず。

(五〇)善男子、一切の衆生は凡そ二種有り。一つには智人、二つには愚人なり。有智の人は智慧力を以て、能く地獄極重の業をして現世に輕く受けしめ、愚癡の人は現世の輕業、地獄に重く受く。』

【四五】次に答。之に二段ありて初に雙起。
【四六】次に正しく答ふ。之に四段ありて初に由[illegible]。
【四七】次に顯實。
【四八】次に雙釋。
【四九】次に雙[illegible]。之に二段ありて初に[illegible]智二人。
【五〇】次に雙べて二尊を出す。
【五一】是より第二番の問に。業

(五一)師子吼の言さく、「世尊、若是の如くならば則ち清淨梵行、及び解脫果を求むべからず。」(五二)佛の言はく、「善男子、若一切の業定んで果を得ば、則ち梵行、解脫を求むべからず。(五三)不定を以ての故に則ち梵行及び解脫果を修す。(五四)善男子、若能く一切の惡業を遠離すれば則ち善果を得、若善業を遠くれば則ち惡果を得。(五五)若一切業定んで果を得ば、則ち聖道を修習することを求むべからず。(五六)若道を修せざるときは則ち解脫無し。一切の聖人道を修する所以は、定業を壞して輕報を得んが爲の故なり、不定の業には果報無きが故なり。(五七)若一切業定んで果を得ば、則ち聖道を修習することを求むべからず。(五八)若人聖道を修習するを遠離して解脫を得ば、是の處有ること無し。解脫を得ずして涅槃を得ば、亦是の處無し。

(五九)善男子、若一切業定んで果を得ば、一世所作の純善の業、應當に永く已に常に安樂を受くべく、一世所作の極重惡業も亦、永く已に大苦惱を受くべし。(六〇)業果若爾らば、則ち修道、解脫、涅槃無し。(六一)人作、人受は婆羅門作、婆羅門受なり。若是の如くんば則ち下姓下有有るべからず、人は常に人なるべく、婆羅門は常に婆羅門なるべし。(六二)小時の作業は小時受くべく、

---

不定なるが故に道修すべきを明す。初に問、

【五二】次に佛答。之に四段あり、其中初に正しく業不定の故に道を修することを明す、之に正しく不定を明す、善惡相奪を明すの二段あり。前者の中又二段あり、先づ若し定ならば勞して道を修せざるを明す。

【五三】次に不定なるを以て道を修すべきを明す。

【五四】次に善惡相奪ふことを明す。

【五五】第二に業定なれば多過有ることを明す。之に二段あり、其中初に定ば則ち修道無きことを明す。之に略說、廣說の二段あり。略說中に又二段ありて初に若定ならば道を修すべからざることを明す。

【五六】次に若し道を修せざれば解脫無きことを明す。

【五七】次に廣說。これに二段あ

中年及び老時は受くべからず。老時の作惡地獄の中に生じて、地獄の初年は便ち受くべからず。老時を待ちて然して後乃ち受くべし。若老時の不殺、壯年に壽を得べからず。若壯壽無ければ云何ぞ老に至らん、業失すること無きが故なり。(六三)業若失すること無ければ、云何ぞ修道、涅槃有らん。

(六四)善男子。業に二種有り。定と及び不定なり。(六五)定業に二つ有り。一つには報定、二つには時定なり。或は報定にして時不定なる有り。(六六)緣合すれば則ち受け、或は三時に受く。所謂現受、生受、後受なり。(六七)善男子、若し定心に善惡等の業を作さば、作し已りて深く信心歡喜を生じ、若は誓願を發し、三寶を供養す。是を定業と名く。(六八)善男子、智者は善根深固にして動し難し。是の故に能く重業をして輕と爲さしむ。愚癡の人は不善深厚なれば、能く輕業をして重報と作さしむ。是の義を以ての故に、一切の諸業は決定と名けず。

(六九)菩薩摩訶薩地獄の業無し、衆生の爲の故に大誓願を發して地獄の中に生ず。(七〇)善男子、往昔衆生の壽百年の時、恆沙の衆生地獄の報を受く。我是を見已りて即ち大願を發して地獄の身を受く。菩薩爾の時に實に是の

---

りて、初に廣く定ならば修すべからざることを明す。

【五八】次に廣く若し修せざれば解脫の期無きことを明す。

【五九】第二に業定なるが故に多過有るを明す。之に二段あり、其中初に業定の過を明す。之に又二段ありて初に正しく過有ることを明す。

【六〇】次に修道無きを結す。

【六一】次に人時定の義を明す。之に二段あり、其中初に正しく過。之に又二段ありて初に人定の過。

【六二】次に時定の過。

【六三】次に修道涅槃の無きを結す。

【六四】第三に廣く業に定不定有ることを明す。之に二段あり、其中初に定不定の兩章。

【六五】次に章門を釋す。之に二段あり、其中初に定業。之に又二段ありて初に兩章の標。

【六六】次に釋す、之に二段あり、

業無し、衆生の爲の故に地獄の果を受く。我衛の時に於て地獄の中に在りて無量歳を經たり。諸の罪人の爲に十二部經を廣開分別す。諸人聞き已りて惡果報を壞し、地獄をして空しからしむ、一闡提を除く。是を菩薩摩訶薩現生後に非ずして是の惡業を受くと名く。(七一)復次に善男子、是の賢劫の中に無量の衆生、畜生の中に墮して惡業果を受く。我是を見已りて復誓願を發し、法を說きて衆生を度せんと欲するが爲の故に、或は麞鹿、羆僞、獼猴、龍蛇、金翅、魚鼈、狐兎、牛馬の身と作る。善男子、菩薩摩訶薩賓に是の如きの畜生の惡業無し、大願力を以て衆生の爲の故に是の身を受くるを現ず。是を菩薩摩訶薩現生後に非ずして是の惡業を受くと名く。復次に善男子、是の賢劫の中に復無量無邊の衆生有りて餓鬼の中に生ず。或は吐汁、脂肉、膿血、屎尿、涕唾を食ひ、壽命無量百千萬歳なり。初て曾て漿水の名を聞かず、況や復眼に見て飲むを得んや。設遙かに水を見、意を生じて往趣するに、到れば則ち變じて猛火、膿血と成る。或時は變ぜざるも、則ち多人有りて手に矛稍を執りて遮護捉持して前むことを得しめず、或は夏降雨身に至れば火と成る。是を惡業の果報と名く。善男子、菩薩摩訶薩賓は是の如き諸惡業果無し、衆生を化して解脫を得しむるが爲に、故に誓願を發して是の如きの身を受く。是を菩薩摩訶薩現生後に非ずして是の惡業を受くと名く。善男子、我賢劫に

初に報定時不定。

【六七】次に報定時俱定。之に三段あり。初に報定。之に又三段あり。初に定業。

【六八】次に復た不定。之に又三段あり。

【六九】次に疑を釋し實を證す。之に二段、初に疑を釋す。

【七〇】次に轉た證す。之に二段ありて初に除說。

【七一】次に讃說。

於て屠膾家に生じ、雞豬、牛羊を畜養し、捕獵、羅網、魚捕、〔一三〕旃陀羅舍、作賊劫盜、菩薩實に是の如き惡業無し。衆生を度して解脫を得しむるが爲に、大願力を以て是の如きの身を受く。是を菩薩摩訶薩現生後に非ずして是の惡業を受くと名く。善男子、是の賢劫の中復邊地に生じ、多く貪欲、瞋恚、愚癡を作し、非法を習行し、三寶後世の果報を信せず、父母、親老、耆舊、長宿を恭敬すること能はず。善男子、菩薩爾の時に實に是の業無し、衆生をして解脫を得しむるが爲の故に、大願力を以て其の中に生ず。是を菩薩摩訶薩現、生、後に非ずして是の惡業を受くと名く。善男子、是の賢劫の中に復女身、惡身、貪身、瞋身、癡身、妬身、慳身、幻身、誑身、黃蓋の身を受く。善男子、菩薩爾の時に亦是の業無し、但衆生の解脫を得るが爲の故に、大願力を以て願じて其の中に生ず。是を菩薩摩訶薩現、生、後に非ずして是の惡業を受くと名く。善男子、我賢劫に於て黃門の身、無根、二根、及び不定根を受く。善男子、菩薩摩訶薩實に是の如きの諸惡身業無し、衆生をして解脫を得しむるが爲の故に、大願力を以て願じて其の中に生ず。是を菩薩摩訶薩現、生、後に非ずして是の惡業を受くと名く。善男子、我賢劫に於て、復外道尼乾子の法を習ひ其の法を信受す。因無く、果無く、因果の報無し。善惡の業無く、善惡の報無し。現在世及び未來の世無く、此無し、彼無し、聖人有ること無く、變化身無く、道、涅槃無し。善男子、菩薩實に是の如きの惡業無し、但衆生をして解脫を得しむる

【一三】旃陀羅(Caṇḍāla) 屠者、[illegible]
[illegible]四姓外にあり
て賤業に從ふものの稱。婆羅
門を母とし、首陀羅を父とし
[illegible]

が爲に、大願力を以て是の邪法を受く。是を菩薩摩訶薩現、生、後に非ずして是の惡業を受くと名く。

(七三)善男子、我念ず。往昔提婆達多と倶に商主と爲り、各各自ら五百の賈人有り。利益の爲の故に大海の中に至りて珍寶を采取す。惡業緣の故に路に暴風に遇ひ、船舫を吹壞して伴黨死盡す。爾の時に我及び提婆達多、不殺の果報長壽の緣の故に風に吹かれて倶に陸地に至る。時に提婆達多寶貨を貪惜して大憂苦を生じ、聲を發して啼哭す。我時に語つて言はく、「提婆達多啼泣を須ひざれ。」提婆達多我に語りて言はく、「諦かに聽き諦かに聽け。譬へば人有りて貧窮困苦す。塚墓の間に至り手に死尸を提へて是の言を作さく、『願はくは汝今者我に死樂を施せ、我當に汝に貧窮壽命を施すべし。』爾の時に死尸即便起坐して貧人に語りて『善男子、貧窮壽命汝自ら之を受けよ、我今甚だ是の如き死樂を樂しむ。實に汝が貧窮にして生けるを欣ばず』と言はんが如し。然るに我今日既に死樂無く、兼ねて復貧窮なり。云何ぞ啼哭せざることを得んや。」我復慰喩す、「汝且つ愁ふること莫れ。今二珠有りて價直無量なり、當に一枚を分ちて以て相惠施すべし。」我即ち分與し、復之に語りて言はく、「有命の人能く此の寶を得、如其命無ければ誰か能く得んや。」我時に疲弊して一樹の下に止息眠臥す。提婆達多貪心熾盛にして餘の一珠の爲に即ち惡心を生じ、我が目を刺壞して我が珠を劫奪す。我時に痛を患へ聲を發して呻號す。時に一女有りて我が所に來至し、我に問うて言はく、「仁者何が故ぞ呻號すること是

> 【七三】次に時定を釋す。之に二段あり、其中初に現報。之に又二段ありて初に調達に縁らるるを明す。

の如くなるん。我即ち其が爲に廣く本事を說く。女人聞き已りて復重ねて我に問はく、「汝が名字は何。」我即ち答へて言はく、「名けて實語と爲す。」女の言はく、「云何ぞ汝を實語と爲すと知らんや。」我即ち誓を立つ、「若し我今提婆達多に於て惡心有らば、目當に是の如く永く盲瞎爲るべし、如其無くんば、當に還つて眼を得べし。」言已るに、其の目本復して故の如し。善男子、是を菩薩摩訶薩の現世果を說くと名く。(七四)善男子、我念ず、往昔南天竺(七五)富單那城の婆羅門の家に生ず。是の時王有りて(七六)迦羅富と名く。其の性暴惡、憍慢自大なり。年壯色美、五欲に耽著す。我爾の時に於て、衆生を度せんが爲に彼の城外に在りて寂默禪思す。爾の時に彼の王春木華茂に、其の眷屬、宮人、采女と城を出でて遊觀し、樹林の下に在りて五欲自ら娛む。其の諸の采女王を捨てて遊戲し、遂に我が所に至る。我時に爲に彼の貪を斷せんと欲するが故に、爲に法を說く。時に王尋いで來りて即ち我を見る時、便ち惡心を生じて我に問ひて言はく、「汝今已に阿羅漢果を得るや。」我言はく、「得ず。」復言はく、「不還果を獲るや。」我言はく、「得ず。」復是の言を作さく、「汝今若し未だ是の二果を得ずば、則ち貪欲の煩惱を具足すと爲す、云何ぞ自ら恣に我が女人を觀る。」我即ち答へて言はく、「大王當に知るべし、我今未だ貪欲結を斷せずと雖も、然も其の內心實に貪著無し。」王の言はく、「世間に諸仙有りて氣を服し果を食するも、色を見ば猶貪る。況や汝盛年未だ貪欲を斷せず。云何ぞ色を

【七四】次に迦羅富に截らるゝを明す。
【七五】富單那(Pûtana)。臭者と譯す。
【七六】迦羅富(Kalâpu)。臭地と譯す。

見て當に著せざるべきこと。」我言はく、「大王、色を見て著せざる、實に氣を服し果を食するに因らず、皆心を無常不淨に繫くるに由る。」王の言はく、「若他を輕じて誹謗を生ずる有らば、云何ぞ淨戒に能治すと名くることを得ん。」我言はく、「大王、若妬心有らば則ち誹謗有り、我妬心無し、云何ぞ謗と言はん。」王の言はく、「大德、云何が戒と名くる。」「大王、忍を名けて戒と爲す。」王の言はく、「若忍是戒ならば、當に汝が耳を截るべし。若能く忍ばば、汝が持戒を知らん。」即ち其の耳を截る。時に我截られて顏容變せず。時に王の羣臣是の事を見已りて、即ち王を諫めて言さく、「是の如き大士に害を加ふべからず。」王諸臣に告ぐ、「汝等云何ぞ是大士と知る。」諸臣答へて言さく、「苦を受くる時容色變せざるを見る。」王復語りて言はく、「我當に更に試みて變、不變を知るべし。」即ち其の鼻を劓ぎ、其の手足を刖る。爾の時に菩薩已に無量無邊世の中に於て慈悲を修習し、苦の衆生を憫む。時に四天王心に瞋忿を懷きて砂、礫、石を雨す。王是を見已りて心大いに怖畏し、復我が所に至り長跪して言はく、「惟願はくは哀愍して我に懺悔を聽せ。」我言はく、「大王、我が心瞋無く、亦貪無きが如し。」王の言はく、「大德、云何が心に瞋恨無きを知ることを得ん。」我即ち誓を立つ、「我若眞實に瞋恨無ければ、我此の身をして平復して故の如くならしめよ。」是の願を發し已るに、身即ち平復す、是を菩薩摩訶薩現世報を說くと名く。

【七七】次に[illegible]へて[illegible]を結す。之に二[illegible]、初に[illegible]

(七七)善男子、善業の生報、後報、及び不善業も亦復是の如し。菩薩摩訶薩阿耨多羅三藐三菩提を得

る時、一切の諸業悉く現報を得。不善惡業現報を得るは、王の作惡に天惡雨を降すが如し。亦人有りて僧師に賊の處、及び貴色の處を示して、其の手墮落するが如し。是を惡業現に果報を受くと名く。生報とは、一闡提、犯四重禁、及び五逆罪の如し。後報とは、持戒の人深く誓願を發すが如し、願はくは未來世常に是の如き淨妙の身を得ん。若衆生壽百年の時、八十年の時有らば、中に於て常に轉輪聖王と作りて衆生を教化すべしと。(七六)善男子、若業定んで現世報を得ば、則ち生報、後報を得ること能はじ。菩薩摩訶薩三十二大人の相業を修するは、則ち現世報を得ること能はざるなり。(七九)若業三種の報を得ざれば、是を不定と名く。

(八〇)善男子、若諸業定んで報を得と言はば、則ち梵行、解脫、涅槃を修習することを有ることを得ず。當に知るべし、是の人は我が弟子に非ず、是魔の眷屬なり。若諸業に定、不定有り。定とは現報、生報、後報なり。不定とは緣合すれば則ち受け、合せざれば受けず。是の義を以ての故に、梵行、解脫、涅槃有るべしと言ふは、當に知るべし、是の人は眞に我が弟子、魔の眷屬に非ず。(八一)善男子、一切衆生は不定業は多く決定業は少し。是の義を以ての故に、道を修習する有り。道を修習するが故に、決定の重業は輕く受けしむべく、不定の業は生報を受くるに非ず。

(八二)善男子、二種の人有り。一つには不定を定報と作し、現報を生報と作

【七六】[illegible]

【七九】[illegible]

【八〇】[illegible]有ることを結成す。[illegible]

【八一】[illegible]す。

し、輕報を重報と作す。人中に受くべきを地獄に在りて受く。二つには定を不定と作す。生に受くべき者を囘らして現受と爲し。重報を輕と作す。地獄に受くべきを人中に輕く受く。是の如き二人、一は愚、二は智なり。智者は輕しと爲し、愚者は重ならしむ。(八三)善男子、譬へば二人王に於て罪有り。眷屬多き者は其の罪則ち輕く、眷屬少き者は輕かるべきに更に重きが如く、(八四)愚智の人も亦復是の如し。智者は善業多きが故に、重きも則ち輕く受け。愚者は善業少きが故に、輕きも則ち重く受く。(八五)善男子、譬へば二人あり。一りは則ち肥壯、一りは則ち羸劣なり。倶に深泥に沒するに、肥壯は能く出で、羸者は則ち沒するが如し。(八六)善男子、譬へば二人倶共に毒を服するに、一りは呪力及び(八七)阿伽陀有り、一りは有ること無し。呪藥有る者は毒傷ること能はず、呪藥無き者は服する時卽ち死するが如し。(八八)善男子、譬へば二人倶に多く漿を飮むに、一りは火勢猛きに、一りは則ち微弱なり。火勢多き者は則ち能く消化し、火勢弱き者は則ち其の患を爲すが如し。(八九)善男子、譬へば二人王に繫がるるに、一りは智慧有り、一りは則ち愚癡なり。其の有智の者は則ち能く脫るるを得、愚癡の人は脫期有ること無きが如し。(九〇)善男子、譬へば二人倶に險路を渉るに、一りは則ち目有り。一りは則ち盲瞽なり。有目の人は直ちに過ぎて患無く、盲者は墜落

【八二】是より第二に能く障を轉ずる消息を明す。之に二段あり、其中初に轉障の人を明す。次に[illegible]
【八三】次に十二喩。[illegible]中の十喩は合無し。[illegible]初喩、其中初に喩。
【八四】次に合。
【八五】次に第二喩。
【八六】次に第三喩。
【八七】阿伽陀（Agada）。[illegible]
【八八】次に第四喩。
【八九】次に第五喩。
【九〇】次に第六喩。

して深坑の險に墮つるが如し。(九一)善男子、譬へば二人倶共に酒を飲むに、一りは則ち多く食し、一りは則ち少く食す。其の多食の者は飲むも則ち苦無く、其の少食の者は飲めば患を成ずるが如し。(九二)善男子、譬へば二人倶に怨陣に敵するに、一りは則ち鎧仗具足莊嚴し、一りは則ち自身なり。其の仗有る者は能く怨敵を破し、其の自身の者は自ら免るること能はざるが如し。(九三)復二人の糞穢の衣を汙す有りて、一りは覺りて尋いで滌ひ、一りは覺りて滌はず。其の尋いで滌ふ者は衣則ち淨潔、其の滌はざる者は垢穢日に增す。(九四)復二人倶共に車に乘る有りて、一つは副軸有り、一つは副軸無し。副軸有る者は意に隨ひて去り、副軸無き者は則ち處を移さず。(九五)復二人の倶に曠路を行く有りて、一りは資糧有り、一りは資糧無し。資糧有る者は則ち險を度ることを得、其の空しく往く者は則ち過ぐること能はず。(九六)復二人の賊に劫さるる有りて、一りは寶藏有り、一りは則ち藏無し。寶藏有る者は心に憂戚無く、其の藏無き者は心則ち愁惱す。(九七)愚智の人も亦復是の如し。善藏有る者は重業も輕く受け、善藏無き者は輕業も重く受く。

(九八)師子吼菩薩の言さく、世尊、佛所說の如く、一切業悉く定果を得るに非ず、亦一切衆生定んで受くるに非ずと。(九九)世尊、云何ぞ衆生現に輕業地獄に重く受け、地獄の重業現世に輕く受けしむるや。」

【九一】次に第七譬。
【九二】次に第八譬。
【九三】次に第九譬。
【九四】次に第十譬。
【九五】次に第十一譬。
【九六】次に第十二譬。其中初に譬。
【九七】次に合。
【九八】次に第二に轉障の行を明す。之に問、答の二段ありて初に領旨。
【九九】次に正問。

〔一〇〇〕佛の言はく、「一切衆生に凡そ二種有り。一つには有智、二つには愚癡なり。若し能く身戒、心慧を修習する。是を智者と名け、若し身戒、心慧を修すること能はざれば、是を愚癡と名く。〔一〇一〕云何が名けて身を修せずと爲す。若し五情の諸根を攝すること能はざれば、不修身と名け、七種の淨戒を受持すること能はざれば、不修戒と名く。心を調へざるが故に不修心と名け、聖行を修せざれば不修慧と名く。〔一〇二〕復次に不修身とは、清淨戒體を具足すること能はず、不修戒とは、八種不淨の物を受畜す。不修心とは、三種相を修習すること能はざるが故に、不修慧とは、梵行を修せざるが故なり。復次に不修身とは、身を觀ずること能はず、色を觀じ、及び色相を觀ずること能はず。身相を觀ぜず、身數を知らず。是の身此より彼に到るを知らず。非身の中に於て身相を生じ、非色の中に於て色相を作す。是の故に我が身身數に貪著す、不修身と名く。不修戒とは、若し下戒を受くれば修戒と名けず、邊戒、自利の爲の戒、自調の爲の戒を受持し、普く衆生を安樂にするが爲にすること能はず。無上の正法を護持するが爲に非ず。天上に生じて五欲の樂を受くるが爲にするは、修戒と名けず。不修心とは、若し心散亂して專一に自境界を守ること能はず。自境界とは四念處を謂ひ、他境界とは五欲を謂ふなり。若し四念處を修すること能はざれば不修心と名け、惡業の中に於て善く心を護らざるを不修慧と名く。復次に不修身とは、深く是の身無常、無住危脆、念念滅壞す、是れ魔境

【一〇〇】次に佛答。之に三段あり、其中初に愚智二人の輕重不定を出す。之に二段ありて初に二人。
【一〇一】次に法說。
【一〇二】次に六復次。

界と觀ずること能はざるなり。不修戒とは、尸波羅蜜を具足すること能はず、不修心とは、禪波羅蜜を具足すること能はず、不修慧とは、般若波羅蜜を具足する能はざるなり。復次に不修身とは、我身、及び我所身に貪著し、我身常恆變易有ること無しとす。不修戒とは、自身の爲の故に十惡業を作し、不修心とは、惡業の中に於て心を攝すること能はず、不修慧とは、不攝心を以て善惡等の法を分別すること能はず。復次に不修身とは我見を斷せず、不修戒とは戒取を斷せず、不修心とは貪瞋の業を作りて地獄に趣向し、不修慧とは癡心を斷せず。復次に不修身とは、身に過患有りと雖も、而も常に是[illegible]と觀ずること能はず。(一〇三)善男子、譬へば男子怨有りて常に逐ひて其の便を伺求す。智者覺り已りて心を繫けて愼護す。若し愼護せざれば則ち害せらるるが如く、一切衆生身も亦是の如し、常に飮食を以て冷暖將養す。若し是の如く將護守養せざれば、即ち當に散壞すべし。善男子、婆羅門の火天に奉事するに、常に香華を以て讚歎禮拜し、供養承事して壽百年を滿せん、若し一たび觸るる時は尋いで人の手を燒く。是の火是の如き供養を得と雖も、終に一念の事者の恩を報ずる無きが如く、一切衆生身も亦是の如し。多年に於て好香華、瓔珞、衣服、飮食、臥具、病瘦醫藥を以て之を供給すと雖も、若し内外の諸の惡因緣に遇はば即時に滅壞し、都て往日の供養、衣服の恩を憶念せず。善男子、譬へば王有り、四毒蛇を畜ひて之を一篋に置き、以て一人に付して瞻養を抑令す。是の四蛇の中に、設し一たび瞋を生すれば則ち能く人を害せん。是の人恐怖し、常に

【一〇三】本に十四の善男子を以て段落す。

飮食を求めて時に隨ひ守護するが如く、一切衆生の四大毒蛇も亦復是の如し、若一たび大いに瞋らば則ち能く身を壞す。善男子、人の久病應當に至心に醫を求めて療治すべし。若勤めて救はずんば必ず死せんこと疑はざるが如く、一切衆生身も亦是の如し。常に心を攝して放逸ならしめざるべし。若放逸なる者は則便滅壞す。善男子、譬へば坏缾の風雨、打擲、推壓に耐へざるが如く、一切衆生身も亦是の如し。飢渴、寒熱、風雨、打擊、惡罵に耐へず。善男子、癰の未熟なる、常に當に善く護りて、人をして觸れしめざるべく、設觸るる者有らば、則ち大苦痛するが如く、一切衆生身も亦是の如し。善男子、騾の懷妊すれば自ら其の軀を害するが如く、一切衆生身も亦是の如し、內に風冷有れば身則ち害を受く。善男子、譬へば芭蕉の實を生ずれば則ち枯るるが如く、一切衆生身も亦是の如し。善男子、亦芭蕉の內に堅實無きが如く、一切衆生身も亦是の如し。善男子、蛇、鼠、狼各各相常に怨心を生ずるが如く、衆生の四大も亦復是の如し。善男子、譬へば鵝王の塚墓を樂はざるが如く、菩薩も亦爾なり、身の塚墓に於て亦貪樂せず。善男子、旃陀羅の七世相繼ぎて其の業を捨てず。是の故に人に輕賤せらるるが如く、是の身の種子も亦復是の如し。種子、精血は究竟不淨なり。不淨を以ての故に、諸佛菩薩に訶責せらる。善男子、是の身は〔一四〕摩羅耶山の栴檀を生ずるが如くならず、亦優鉢羅華、芬陀利華、瞻婆華、摩利迦華、婆師迦華を生ずること能はず。九孔常に膿血不淨を流し、生處臭穢、醜陋惡むべし、常に諸蟲と

【一四】摩羅耶（Malaya）。[illegible]除と譯す。南方印度に在りて香木を出す山の名。

ざるが如く、二十五有に馳騁し周徧する、猶し疾風の〔一〇六〕兜羅苗を吹くが如く、求むべからざる所を求めて厭足無き、無智の人の熱無きに火を求むるが如く、常に生死を樂ひて解脫を樂はざる、〔一〇七〕絍婆蟲の絍婆樹を樂ふが如く、生死の臭穢に迷惑し愛著すること、猶し獄囚の獄卒の女を樂ふが如く、亦廁豬の樂んで不淨に處るが如し。若是の如く觀ずること能はざる者有らば、不修心と名く、不修慧とは、智慧大勢力有りて金翅鳥の如く、能く惡業を壞し無明の闇を壞すること、猶し日光の如し。能く陰樹を拔くこと水の物を漂すが如く、邪見を焚燒すること、猶し猛火の如し。慧は是一切善法の根本、佛菩薩母の種子なりと觀ぜず。若是の如く觀ずること能はざる者有らば修慧と名けず。善男子、第一義の中に若身身相、身因身果、身聚、身一身二、此身彼身、身滅身等、身修修者を見、若是の如きを見る者有らば不修身と名く。善男子、若戒戒相、戒因戒果、戒上戒下、戒聚、戒一戒二、此戒彼戒、戒滅戒等、戒修修者、戒波羅蜜を見、若是の如きを見る者有らば不修戒と名く。若心心相、心因心果、心聚、及び心數、心一心二、此心彼心、心滅心等、心修修者、上中下心、善心惡心を見、若是の如きを見る者有らば、不修心と名く。善男子、若慧慧相、慧因慧果、慧聚、慧一慧二、此慧彼慧、慧滅慧等、上中下慧、鈍慧利慧、慧修修者を見、若是の如きを見る者有らば不修慧と名く。善男子、若身戒心慧を修せざる有らば、是の如きの人は、小惡業に於て大惡報を得、恐怖を以ての故に、

【一〇六】兜羅(Tūla)。綿花と譯す、樹の名。

【一〇七】絍婆(Nimba)。結縛と譯す。樹の名。この樹を食する蟲を絍婆蟲といふ。

常に是の念を生ず、「我は地獄に屬す、地獄の行を作す。」智者の地獄の苦を說くを聞くと雖も、常に是の念を作さく、「鐵の鐵を打ち、石還つて石を打ち、木自ら木を打ち、火蟲火を願ふが如し。地獄の身還つて地獄に似れ。若し地獄に似ば何の苦事か有らん。」譬へば蒼蠅の唾に黏せられて自ら出づること能はざるが如く、是の人も亦爾なり、小罪の中に於て自ら出づること能はず。心都て悔無く、善を修して瑕疵を覆藏すること能はず。過去の一切善業有りと雖も、悉く是の罪に垢汚せらる。是の人所有の現受の輕報、轉じて地獄の極重惡果と爲る。善男子、小器の水に鹽一升を置かば、其の味鹹苦にして飲むことを得べきこと難きが如く、是の人の罪業も亦復是の如し。善男子、譬へば人有りて他の一錢を負ひて償ふこと能はざるが故に、身繫縛せられて多く衆苦を受くるが如く、是の人の罪業も亦復是の如し。」

〔一〇八〕獅子吼菩薩の言さく、「世尊、是の人何が故ぞ現の輕報をして、轉じて地獄を受けしむる。」〔一〇九〕佛の言はく、「善男子、一切衆生若し五事を具すれば、現の輕報をして轉じて地獄に受けしむ。何等をか五つと爲す。一つには愚癡の故に、二つには善根微少の故に、三つには惡業深重の故に、四つには不懺悔の故に、五つには本善業を修せざるが故なり。復五事有り。一つには惡業を修習するが故に、二つには戒財無きが故に、三つには善根を遠離するが故に、四つには身戒、心慧を修せざるが故に、五つ

【一〇八】次に第三に業轉の相を明す。[illegible]中初に有。

【一〇九】次に佛答。

には惡知識に親近するが故なり。善男子、是の故に能く現世の輕報をして地獄に重く受けしむ。」〔一〇〕師子吼の言さく、「世尊、何等の人が能く地獄の報を轉じて現世に輕く受くる。」〔一一〕『善男子、若身戒、心慧を修習する、上に說く所の如くなる有りて、能く諸法虛空に同如と觀じて智慧を見ず、智者を見ず、愚癡を見ず、愚者を見ず、修習及び修習者を見ず。是を智者と名く。是の如きの人は則ち能く身戒、心慧を修習す。是の人は能く地獄の果報をして現世に輕く受けしむ。是の人設ひ極重惡業を作るとも、思惟觀察して能く輕微ならしめ、是の念言を作さく、「我業重しと雖も善業に如かず。譬へば疊華復百斤と雖も、終に眞金一兩に敵すること能はざるが如く、恆河の中に一升の鹽を投ずるに、水に鹹味無く、飮者覺えざるが如く、巨富の者多く人の千萬の寶物を負ふと雖も、能く繫縛して其をして苦を受けしむること無きが如く、大香象の能く鐵鎖を壞して自在にして去るが如く、智慧の人も亦復是の如し。常に思惟して言はく、「我善力多く惡業羸弱なり。我能く發露懺悔して惡を除く。能く智慧を修すれば智慧力多く、無明力少し。」是の如く念じ已りて善友に親近して正見を修習し、十二部經を受持し、讀誦し、書寫し、解說す。受持、讀誦、書寫、解說する者有るを見ば、心に恭敬を生じ、兼ねて衣食、房舍、臥具、病藥、華香を以て之を供養し、讃歎尊重し、所至の到處、其の善を稱說して其の短を說かず。三寶を供養し、方等大涅槃經、如來常恆にして變易有ること無く、一切衆生悉く佛性有るを敬信す。是の人

〔一〇〕次に第二番の問答。初に問。
〔一一〕次に佛答。

能く地獄の重報をして現世に輕く受けしむ。善男子、是の義を以ての故に、一切の業悉く定果有るに非ず、亦一切衆生定んで受くるに非ず。』

# 卷の第三十

## 師子吼菩薩品の六

(一)師子吼菩薩の言さく、『世尊、若し一切の業定んで果を得ず、一切衆生悉く佛性有り、應當に八聖道を修習すべしとは、(二)何の因緣の故に、一切衆生悉く是の大般涅槃を得ざるや。世尊、若し一切衆生佛性有らば、卽ち當に定んで阿耨多羅三藐三菩提を得べし、何ぞ須らく八聖道を修習すべきや。(三)世尊、此の經の中に「病人有り、若し醫藥及び瞻病の人隨病の飮食を得、若しは得ざらしむるも、皆悉く除差ゆ。一切衆生も亦復是の如し、若しは聲聞及び辟支佛、諸佛菩薩、諸善知識に遇ひ、若しは說法を聞き、聖道を修習す。若しは遇はず、聞かず、道を修習せざるも、悉く當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。何を以ての故に。佛性を以ての故なり」と說くが如し。(四)世尊、譬へば日月は能く遮して(五)頞多山の邊に至ることを得ざらしむる有ること無きが如く、四大河の水大海に至らず、一闡提等も地獄に至

---

【一】是より第四に修を勸む。之に法勸、人勸の二段あり。初の法勸に中又問、答の二段あり。問の中又二段、其中初に佛性の力の故に同じく涅槃を得べし、何ぞ六道の差別有らんやと問ふ。之に二段。初に領旨。

【二】次に問。

【三】次に第二に既に佛性有らば自ら菩提を得べし、何ぞ道を修することを用ひんやと問ふ。之に二段ありて初に經を領す。

【四】次に譬。

【五】頞多([illegible])。

らす。(六)一切衆生も亦復是の如し、能く遮して阿耨多羅三藐三菩提に至ることを得ざらしむる有ること無し。何を以ての故に。佛性を以ての故なり。(七)世尊、是の義を以ての故に、一切衆生道を修習せず、佛性力を以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提を得べし。聖道を修習する力を以ひざるが故なり。(八)世尊、若し一闡提、犯四重禁、五逆罪等、阿耨多羅三藐三菩提を得ざれば、須らく修習すべし。佛性に因りて定んで當に得べきを以ての故に。修習に因りて然して後得るに非ざるなり。(九)世尊、譬へば磁石の鐵を去ること遠しと雖も、其の力を以ての故に鐵則ち隨ひ著くが如く、(一〇)衆生の佛性も亦復是の如し。是の故に須らく勤めて道を修習すべからず。』

(一一)佛の言はく、『善い哉善い哉善男子、恒河

【六】次に合。

【七】次に詰難。

【八】次に第三に既に佛性有り即ち能く菩提を得んと問ふ。之に三段あり、其中初に法。

【九】次に譬。

【一〇】次に合。

【一一】是より第二に佛答。之に正答、總結の二段あり。初の正答に又四段あり、其中初に同得涅槃の義を答ふ。譬、合、結の三段あり。譬に又二段ありて初に大意を總ぶ。文の中洗浴は出家の受戒清淨に、憑倚寶瓶は頓悟に譬ふ。采華は二釋あり。一に七淨華なりと、是れ因を求む。二に諸覺華に譬ふと、是れ果を求む。河中に入るは常途は「明來河を出づ」といふべし。然るに入るといふは生死涅槃超然として別ならず、生死の中に涅槃を求むべきを明さんとなり。

【一二】次に別して七人を列す。此の七人中前の二は是れ外凡、次の一は是れ内凡、後の四は是れ聖人。外凡は斷善の闡提。次は立たんとして退く、故に二人となす。内凡に三方便あり、同じく一と爲すは復た優劣ありと雖も倶に未だ眞を發せず。聖人を四と爲すは聲聞に習を侵さず、支佛に習を侵す。菩薩は習を侵し復た衆生を化す。佛は習氣盡く。故に四と爲す。詳しくは安註に辨ず。

【一三】沒す等。沒は即ち闡提、過去の善苗四重に盡く、現在信なし、故に浮を習はず。第二人は將に立たんとして退く。身力大とは過去の業深し。今生修せざれば浮を習はずとす。第三人は此の人前に善根を修す。第三人は即ち住することを得、以て内凡に喩ふ。沒已即出とは

の邊に七種の人有り。若は洗浴の爲に寇賊を恐怖し、或は華を采るが爲に則ち河中に入るが如し。(一二)第一の人は水に入れば則ち(一三)沒す。何を以ての故に。羸にして勢力無く、浮ぶを習はざるが故に。第二の人は沒すと雖も還つて出で、出で已りて復沒す。何を以ての故に。身力大なるが故に則ち能く還つて出づ。浮ぶを習はざるが故に出で已りて還つて沒す。第三の人は沒し已りて卽ち出で、出でて更に沒せず。何を以ての故に。身重きが故に沒し、力大なるが故に出づ。先より浮ぶを習ふが故に出で已りて卽ち住す。第四の人は入り已りて便ち沒し、沒し已りて還つて出で、出で已りて卽ち住して徧く四方を觀る。何を以ての故に。重きが故に則ち沒し、力大なるが故に還つて出で、浮ぶを習へば則ち住し、出處を知らざるが故に四方を觀る。第五の人は入り已りて則ち沒し、沒し已りて還つて出で、出で已りて卽ち住し、住し已りて方を觀、觀已りて卽ち去る。何を以ての故に。怖畏を爲すの故なり。第六の人は入り已りて卽ち去り、淺處に卽ち住す。何を以ての故に。賊の近遠を觀るが故なり。第七の人は旣に彼岸に至り、上りて大山に登り、復恐怖無く、諸の怨賊を離れて大快樂を受く。(一四)

---

昔日經て沒するをいふ。第四人に卽ち四果、四方を以て譬ふ。この人昔出處を知らざりしも、今旣に出處を知る、故に四方を觀すといふ。第五人は卽ち支佛なり、亦た觀方といふ。利根なるが故に四果を取らず、但だ自證の爲めにす、故に觀已卽去といふ。同じく生死を畏る、故に怖といふ。第六人は卽ち菩薩、入已卽去は生死に住せず。淺處住は心生死に安んず。其の心遠に從ふ、故に淺處とす、第七人の佛なるは先に辯する所の如し。

【一四】第二に譬を合す。之に二段ありて初に總合。次に中畏煩惱賊は前の怖畏に、發意欲度は前の入河に、出家剃髮は前の洗浴に、身披法服は前の采華に合す。

【一五】次に別合。これに四段あり、その中初に常沒を合す。

善男子、生死の大河も亦復是の如し。七種の人有り、煩惱の賊を畏るるが故に、意を發して生死の大河を渡らんと欲し、出家剃髮して身に法服を被く。(二五)既に出家し已りて惡友に親近し、其の教に隨順し、邪法を聽受す。所謂「衆生身とは即ち是五陰なり。五陰とは即ち五大と名く。衆生若死すれば永く五大を斷ず。五大を斷ずるが故に、何ぞ善惡の諸業を修習するを須ひん。是の故に當に知るべし、善惡及び善惡の報有ること無し。」是の如きは則ち一闡提と名くるなり。一闡提とは斷善根と名く。善根を斷ずるが故に生死の河に沒して出づることを得ること能はず。何を以ての故に。惡業重きが故に、信力無きが故なり、恆河の邊の第一人の如きなり。(二六)善男子、一闡提の輩は六因緣有り、三惡道に沒して出づることを得ること能はず。何等をか六つと爲す。一つには惡心熾盛の故に、二つには後世を見ざるが故に、三つには樂ひて煩惱を習ふが故に、四つには善根を遠離するが故に、五つには惡業障隔するが故に、六つには惡知識に親近するが故なり。復五事有りて三惡道に沒す。何等をか五つと爲す。一つには比丘の邊に於て非法を作すが故に、二つには比丘尼の邊に非法を作すが故に、三つには自在に僧祇物を用ふるが故に、四つには母邊に非法を作すが故に、五つには(二七)五部僧

之に又二段ありて初に略して合す。

【二六】次に廣く合す。

【二七】五部僧云云に就て二釋あり。一に云く五衆在家の邊に向つて更互に過を計くなり。二に云く是れ五部の律なり。佛滅後一百餘年阿育王會を設く、上座([illegible])の立義、(摩訶僧祇)大衆と同じからず、分ちて二となす。後上座部更に二部を生ず、雪山と薩婆多となり。雪山は後を絶つ、薩婆多更に僧祇に習ひて三部を生ず謂く彌沙塞、曇無德、迦葉遺なり。薩婆多、僧祇に並て五部となすとき如來五部に是非する事を預見して大集經に此意を示す、宗輪論は廣明して二十とす。

に於て互に是非を生ずるが故なり。復五事有りて三惡道に沒す。何等をか五つと爲す。一つには常に善惡の果無しと說くが故に、二つには菩提心を發せる衆生を殺すが故に、三つには喜んで法師の過失を說くが故に、四つには法を非法と說き、非法を法と說くが故に、五つには法の過ちを求むるが爲にして聽受するが故なり。復三事有りて三惡道に沒す。何等をか三つと爲す。一つには如來無常永滅すと謂ひ、二つには正法無常遷變すと謂ひ、三つには僧寶破壞すべしと謂ふが故なり。是の故に常に三惡道の中に沒す。(一八)第二の人は、意を發して生死の大河を度らんと欲するに、善根を斷ずるが故に沒して出づること能はず。言ふ所の出とは、善友に親近すれば則ち信心を得。信心とは施施果を信じ、善善果を信じ、惡惡果を信じ、生死の苦、無常、壞敗を信ず。是を名けて信と爲す。已に信心を得れば、淨戒を修習す。受持、讀誦、書寫、解說し、常に惠施を行じ、善く智慧を修す。鈍根を以ての故に復惡友に遇ふ。身戒、心慧を修習すること能はず、邪法を聽受す。或は惡時に値ひ、惡國土に處して諸善根を斷す。善根を斷ずるが故に常に生死に沒す。恆河の邊の第二人の如きなり。(一九)第三の人は、心を發して生死の大河を度らんと欲するに、善根を斷ずるが故に中に於て沈沒す。善友に親近するを名けて出と爲すことを得。(二〇)如來は是一切智、常恆にして變ずること無し、衆生の爲の故に無上道を說く。一切衆生悉く佛性有り。如來は滅に非ず、法僧も亦爾な

【一八】次に將に立たんとして還くを合す。
【一九】次に內凡得住の人を合す
【二〇】如來は……佛性有り等。この文一解に曰く、此れは是れ三乘の初業、法に愚ならざるなり、勝鬘に說くが如し。

り、滅壊有ること無し。一闡提等は其の法を斷せざれば、終に阿耨多羅三藐三菩提を得ず。要ず當に遠離して然して後乃ち得べしと信ず。信心を以ての故に淨戒を修習す。淨戒を修し已りて十二部經を受持、讀誦、書寫、解說し、諸の衆生の爲に廣宣流布す。惠施を樂み智慧を修習す。利根を以ての故に、堅く信慧に住して心退轉無し。恆河の邊の第三人の如きなり。

(三)第四の人は、意を發して生死の大河を度らんと欲するに、善根を斷ずるが故に中に於て沈沒す。善友に親近するが故に信心を得、是を名けて出と爲す。信心を得るが故に十二部經を受持、讀誦、書寫、解說し、衆生の爲の故に廣宣流布す。惠施を樂み智慧を修習す。利根を以ての故に、堅く信慧に住して心退轉無く、徧く四方を觀る。四方とは四沙門果なり。恆河の邊の第四人の如きなり。第五の人とは、意を發して生死の大河を度らんと欲するに、善根を斷ずるが故に、中に於て沈沒す。善友に親近するが故に信心を得、是を名けて出と爲す。信心を以ての故に十二部經を受持、讀誦、書寫、解說し、衆生の爲の故に廣宣流布す。惠施を樂しみ智慧を修習す。利根を以ての故に、堅く信慧に住して心退轉無し。退轉無きこと已りて即便前進す。前進とは辟支佛を謂ふ。自度を能くすと雖も衆生に及ばず。是を名けて出と爲す。恆河の邊の第五人の如きなり。第六の人とは、意を發して生死の大河を度らんと欲するに、善根を斷ずるが故に中に於て沈沒す。善友に親近して信

此の文は關はる所多し、若し如來は不變易にして衆生佛性あるを信ずるは則ち別義に似す、大涅槃心を以て方便行を修して方便位に入る、下文の須跋の得果は卽ち是れ其の義なりと。

【三二】次に四人を合す。

心を獲得す。信心を得るが故に之を名けて出と爲す。信心を以ての故に十二部經を受持、讀誦、書寫、解説し、衆生の爲の故に廣宣流布す。惠施を樂ひ智慧を修習す。利根を以ての故に堅く信慧に住して心退轉無し。退轉無きこと已りて即ち復前進して遂に淺處に到る。淺處に到り已りて即ち住して去らず。住して去らずとは、所謂菩薩諸の衆生を度脱せんと欲するが爲の故に、住して煩惱を觀ず。恆河の邊の第六人の如きなり。第七の人とは、意を發して生死の大河を度らんと欲するに、善根を斷ずるが故に中に於て沈沒す。善友に親近して信心を獲得す。信心を得已る、是を名けて出と爲す。信心を以ての故に十二部經を受持、讀誦、書寫、解説し、衆生の爲の故に廣宣流布す。惠施を樂ひ智慧を修習す。利根を以ての故に、堅く信慧に住して心退轉無し。退轉無きこと已りて即便前進す。既に前進し已りて彼岸に到ることを得。大高山に登りて諸の恐怖を離れ、多く安樂を受く。善男子、彼岸の山とは如來を喩へ、安樂を受くとは佛の常住を喩へ、大高山とは大涅槃を喩ふるなり。

〔三〕善男子、是の恆河の邊、是の如きの諸人は悉く手足を具すれども度すること能はず。一切衆生も亦復是の如し。實に佛寶、法寶、僧寶有り。如來常に諸法の要義を説く。八聖道、大般涅槃有り、諸の衆生悉く得ること能はず。此我が咎に非ず、亦聖道衆生等の過に非ず、當に知るべし、悉く是煩惱の過惡なり。是の義を以ての故に一切衆生涅槃を得ず。

〔三〕次に譬を結す。これに二段ありて初に修せざれば得ず、如來の咎に非ざることを明す。

(二三)善男子、譬へば良醫の病を知りて藥を説くに、病者服せざるは醫の咎に非ざるが如し。善男子、譬へば若し施主有りて其の所有を以て一切の人に施すに、受けざる者有らば施主の咎に非ず。善男子、譬へば日の出づれば幽冥皆明かなるに、盲瞽の人の道路を見ざるは、日の過に非ざるが如し。善男子、恆河の水の能く渇乏を除くも、渇者の飲まざるは水の咎に非ざるが如し。善男子、譬へば大地の普く果實を生ずること平等にして二つ無きに、農夫の種ゑざるは地の過ちに非ざるが如し。(二四)善男子、如來は普く一切衆生の爲に十二部經を廣開し、分別す、衆生の受けざるは、如來の咎に非ず。善男子、若し道を修する者は、即ち阿耨多羅三藐三菩提を得。

(二五)善男子、汝衆生悉く佛性有り、阿耨多羅三藐三菩提を得ることを磁石の如しと言ふは、善い哉善い哉、有佛性の因緣力を以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提を得。若し聖道を修することを須ひずと言はば、是の義然らず。(二六)善男子、譬へば人有りて曠野を行くに、渇乏して井に遇ふ。其の井極めて深くして水を見ずと雖も、當に必ず有るを知るべし。是の人方便して綆纏を求覓して汲み取るときは、則ち見るが如く、(二七)佛性も亦爾なり、一切衆生復之有りと雖も、

【二三】次に修すれば必ず得ることを明す。これに二段ありて初に譬。

【二四】次に合。

【二五】第二に菩提を汲取するの難を答ふ。これに二段ありその中、初めに問を牒して褒貶す。

【二六】次に正しく答ふ。之に二段あり、其中初に修者必得を答ふ。之に二段ありて初に譬。この中井は五陰身を、渇乏は厭苦求樂の心を、井深は佛性理遠くして見ずと雖も必ず有るを、汲取は修に因て性を見るを譬ふ。

【二七】次に合。

要ず無漏聖道を修習するを須ひて、然して後見ることを得。（二八）善男子、胡麻有れば則ち油を見ることを得、諸の方便を離るるときは則ち見ることを得ざるが如く、甘蔗も亦爾なり。善男子、三十三天の北鬱單越は、是有法と雖も、若善業、神通道力無ければ則ち見ること能はず。地中の草根及び地下の水も地覆ふを以ての故に衆生見ざるが如く、佛性も亦爾なり、聖道を修せざるが故に見ることを得ず。善男子、汝が所説の、世に病人の若は瞻病、良醫、好藥、隨病の飲食に遇ひ及以遇はざる、悉く差ゆることを得る有るの如きは、善男子、我（二九）六住の諸菩薩等の爲に是の如きの義を説く。（三〇）善男子、譬へば（三一）虚空の、諸の衆生に於て內に非ず、外に非ず、內外に非ざるが故に亦罣閡無きが如く、衆生の佛性も亦復是の如し。（三二）善男子、譬へば人有り、財異方に在りて現前せずと雖も意に隨ひて受用す。人の之を問ふ有らば、則ち我が許と言ふが如し。何を以ての故に。定んで有るを以ての故なり。衆生の佛性も亦復是の如し、此に非ず彼に非ず。定得を以ての故に一切有と言ふ。（三三）善男子、譬へば衆生の諸業を造作するが如し。若は善若は惡、內に非ず外に非ず。是の如きの業性有に

---

【二八】第三に修道を須ひざるの難を答ふ。之に二段ありて初に經を引くの譬を呵す。

【二九】六住を釋すること同じからず、略して二說とすべし、一に云く、是れ十住中の第六住と。二に云く、是れ十地中の第六地、此地に般若現前すれば自ら差なるの義ありと。

【三〇】次に正しく答ふ。之に三譬あり。其中初に虚空の譬。

【三一】虚空等の文に付きて二解あり。一義に世間の眼所見の空を以て喩と爲すと。一義に云く、眞諦の空を取つて喩と爲すと。取捨情に任じて可なり。

【三二】次に財物の譬。其の意に曰く、財他方に在りて現に用ゐずと雖も往いて取れば則ち得、佛性また能く見ずと雖も

非ず無に非ず。亦復是本無今有に非ず、無因出に非ず。此作此受、此作彼受、彼作彼受、無作無受に非ず。時節和合して果報を得。（三四）衆生の佛性も亦復是の如し。亦復是本無今有に非ず、內に非ず外に非ず。有に非ず無に非ず。此に非ず彼に非ず。餘處より來るに非ず、無因緣に非ず。亦一切衆生見ざるに非ず。諸の菩薩、時節、因緣和合して見ることを得。時節とは所謂十住の菩薩摩訶薩八聖道を修して、諸の衆生に於て平等心を得。爾の時に見ることを得、名けて作と爲さず。

（三五）善男子、汝磁石の如しと言ふは、是の義然らず。（三六）何を以ての故に。石は鐵を吸はず。所以は何ん。心業無きが故に。善男子、異法有るが故に異法出生し、異法無きが故に異法滅壞す。作す者有ること無く壞する者有ること無し。（三七）善男子、猶し猛火の薪を焚くこと能はず、火出でて薪壞るるを名けて薪を焚くと爲すが如し。善男子、譬へば葵藿の日に隨ひて轉ず。而も是の葵藿は亦敬心無く、識無く業無し。異法性の故に自ら回轉するが如し。善男子、芭蕉樹の雷に因りて增長するが如し。是の樹耳無く心意識無し。異法有るが故に異法增長し、異法無きが故に異法滅壞す。善男子、（三八）阿叔迦樹の女人摩觸すれば華之が爲に出づるが如き、是の樹心無く、亦觸を覺

---

これを解すれば則ち會することを得。

【三三】次に造業の譬。之に二段ありて初に譬。これにまた造業、修者必得の二段あり。

【三四】次に合、此の中、衆生の下初に造業を合し、非此の下次ぎに修者必得を合す。

【三五】第四に重ねて吸取の難を答ふ。之に二段ありて初に其の問を非す。

【三六】次に正しく答ふ。之に釋、譬の二段ありて初に釋。

【三七】次に譬。之に二段ありて初に釋。

【三八】阿叔迦（Aśoka）。新に阿輸伽。無憂樹と譯す。

すること無し。異法有るが故に異法出生し、異法無きが故に異法滅壞す。善男子、橘の尸を得ば果則ち滋多きが如き、而も是の橘樹心無く觸無し。異法有るが故に異法滋多く、異法無きが故に異法滅壞す。善男子、安石榴の甎骨糞の故に果實繁茂するが如く、安石榴樹も亦心、觸無し。異法有るが故に異法出生し、異法無きが故に異法滅壞す。(三九)善男子、磁石の鐵を吸ふも亦復是の如し。異法有るが故に異法出生し、異法無きが故に異法滅壞す。(四〇)衆生の佛性も亦復是の如し、阿耨多羅三藐三菩提を吸得すること能はず。(四一)善男子、無明諸行を吸取すること能はず。行も亦識を吸取すること能はざるなり。亦名けて無明行に緣たり、行識に緣たりと爲すことを得。(四二)佛有り佛無きも、法界は常住なり。

(四三)善男子、若佛性衆生の中に住すと言はば、善男子、常法は住無し、若住する處有らば、卽ち是無常なり。(四四)善男子、十二因緣定住の處無く、若住處有らば十二因緣常と名くることを得ざるが如く、如來法身も亦住處無く、法界法入、法陰虛空、悉く住處無し。(四五)佛性も亦爾なり、都て住處無し。

---

【三九】次に合。之に二段ありて初に譬を以て譬を合す。

【四〇】次に更に法を以て合す。之に三段、其中初に因果を吸せざるを明す。之に又三段ありて初に正しく磁石の譬を合す。

【四一】次に十二因緣を以て無明の義を顯す。無明を因とし、諸行を果とし、乃至生を因とし、死を果とす。無明豈能く諸行を吸せんや、佛性の涅槃を吸する能はざるも亦是の如し。

【四二】次に正しく不吸を顯す。

【四三】第二に佛性住處無きを明す。之に法、譬、合の三段あり。其中初に法。

【四四】次に譬。

【四五】次に合。

【四六】第三に廣く佛性を辨す。

(四六)善男子、譬へば四大力均等と雖も、堅有り、熱有り、濕有り、動有り、(四七)輕有り、重有り、赤有り、白有り、黃有り、黑有るが如し。是の四大も亦業有ること無し、異法界の故に各相似ず。佛性も亦爾なり、異法界の故に、時至れば則ち現ず。善男子、一切衆生佛性を退かず。故に之を名けて有と爲す。阿毗跋致の故に、當有を以ての故に、決定得の故に、定んで當に見るべきが故に。是の故に名けて一切衆生悉く佛性有りと爲す。

(四八)善男子、譬へば王有り一りの大臣に告げたまはく、「汝一象を牽ゐて以て盲者に示せ。」爾の時に大臣王勅を受け已りて、多く衆盲を集め象を以て之に示す。時に彼の衆盲各手を以て觸る。大臣卽ち還た王に白して言さく、「臣已に示し竟んぬ。」爾の時に大王、卽ち衆盲を呼び、各各に問ひて言はく、「汝象を見しや。」衆盲各言さく、「我已に見ることを得たり。」王の言はく、「象何の類と爲す。」其の牙に觸れし者は卽ち「象の形は萊菔根の如し」と言ひ、其の耳に觸れし者は「象は箕の如し」と言ひ、其の頭に觸れし者は「象は石の如し」と言ひ、其の鼻に觸れし者は「象は杵の如し」と言ひ、其の脚に觸れし者は、「象は木臼の如し」と言ひ、其の脊に觸れし者は「象は牀の如し」と言ひ、其の

---

之に四段あり、其中初に當に非ず現に非ずして當有を說くことを明す。之に譬、合の二段あり。文の中、四大力等とは、唯しき一業の能く地大を感じ、復た一業の能く火大を感ずること有るなく、四大の倶の二も亦た爾り。但だ業緣和じて能く感得するを聽るす。佛性も亦た爾り、時至れば卽ち現す。故に四大を以て譬となす。

【四七】堅輕赤白等。地火は輕く、地水は重し。火は赤、風は白、地は黃、水は黑なり。若し五行を配すれば火は赤、金は白、土は黃、水は黑、木は青となる。又小乘の中には風は色なしと明し、大乘は色あるを認む。

【四八】第三に佛性の非有非無を明す。之に二段あり初に譬。

腹に觸れし者は「象は甕の如し」と言ひ、其の尾に觸れし者は、「象は繩の如し」と言へり。善男子、彼の衆盲の如きは象體を說かず、亦說かざるに非ず。若是の衆相悉く象に非ざれば、是を離れて外、更に別の象無きが如し。

(四九)善男子、王は如來應正徧知を喩へ、臣は方等大涅槃經を喩へ、象は佛性を喩へ、盲は一切の無明の衆生を喩ふ。(五〇)是の諸の衆生佛說を聞き已りて、或は是の言を作さく、「色は是佛性なり。何を以ての故に。是の色は滅すと雖も次第に相續す。是の故に無上の如來の三十二相、如來の色常を獲得す。如來の色とは常にして斷せざるが故に。是の故に色を名けて佛性と爲す」と說く。譬へば眞金の質遷變すと雖も、色常に異ならず。或時釧を作り蛇を作り槃を作るに、然も其の黃色初て改易無きが如く、衆生の佛性も亦復是の如し。質は常無しと雖も、而も色は是常なり。是を以ての故に色を佛性と爲すと說く。(五一)或は說きて言ふ有り、「受は是佛性なり。何を以ての故に。受の因緣の故に如來の眞實の樂を獲得す。如來の受とは、畢竟受第一義受を謂ふ。衆生の受性は復無常と雖も、然も其れ次第相續して斷えず。是の故に如來の常受を獲得す。譬へば人有りて憍尸迦を姓とす。人無常と雖も而も姓は是常なり。千萬世を經て改易有ること無きが如く、衆生の佛性も亦復是の如し。是を以ての故に受を佛性と

【四九】次に合。之に二段ありて初に總じて合す。

【五〇】次に別して合す。之に三段あり、其中初に正しく合す。之に六段ありて初に色。之に正合、擧譬帖、結の三段あり。

【五一】次に受。之に正合、擧譬帖、結の三段あり。

爲す」と說く。(五二)又說きて言ふ有り、「想は是佛性なり。何を以ての故に。想の因緣の故に、如來の眞實の想を獲得す。如來の想とは無想の想と名く。無想の想とは衆生の想に非ず、男女の想に非ず、亦色、受、想、行、識の想に非ず。非想斷想なり。衆生の想は復無常と雖も、想次第相續して斷せざるを以て、故に如來の常恆の想を得。善男子、譬へば衆生の十二因緣の、衆生は滅すと雖も因緣は常なるが如く、衆生の佛性も亦復是の如し。是を以ての故に想を佛性と爲す」と說く。(五三)又說きて言ふ有り、「行を佛性と爲す。何を以ての故に。行を壽命と名く。壽因緣の故に如來の常住壽命を獲得す。衆生の壽命復無常と雖も、壽次第相續して斷せず、故に如來の眞實常壽を得。善男子、譬へば十二部經の聽者、說者復無常と雖も、是の經典常に存して變せざるが如く、衆生の佛性も亦復是の如し。是を以ての故に行を佛性と爲す」と說く。(五四)又說きて言ふ有り、「識を佛性と爲す。識の因緣の故に、如來の平等の心を獲得す。衆生の意識復無常と雖も、識次第相續して斷せず、故に如來の眞實常心を得。火の熱性なる、火は無常と雖も熱は無常に非ざるが如く、衆生の佛性も亦復是の如し。是を以ての故に識を佛性と爲す」と說く。(五五)又說きて言ふ有り、「陰を離れて我有り、我は是佛性なり。何を以ての故に。我の因緣の故に、如來の八自在我を獲得す。」諸の外道有り、說きて言ふ、「去來、見聞、悲喜、語說を我と爲す」と。是の如きの我相は

【五二】次に想。之に正合、擧譬帖、結の三段あり。
【五三】次に行。之に正合、擧譬帖、結の三段あり。
【五四】次に識。之に正合、擧譬帖、結の三段あり。
【五五】次に我。之に正合、擧譬帖の二段あり。

復無常と雖も如來の我は眞實に是常なり。善男子、陰入界は復無常と雖も是常と名くるが如く、衆生の佛性も亦復是の如し。(五六)善男子、彼の盲人の各各象を說くに、實を得ずと雖も象を說かざるに非ざるが如く、佛性を說く者も亦復是の如し。六法に卽するに非ず、六法を離れず。(五七)善男子、是の故に我衆生の佛性は色に非ず、色を離れず、乃至我に非ず、我を離れず」と說く。

(五八)善男子、諸の外道有り、我有りと說くと雖も實は我無し。(五九)衆生の我は卽ち是五陰なり。陰を離れて外更に別の我無し。善男子、譬へば莖葉、須臺合して蓮華と爲し、是を離れて外更に別の華無きが如く、衆生の我も亦復是の如し。善男子、譬へば牆壁、草木和合する、之を名けて舍と爲し、是を離れて外更に別の舍無きが如く、(六〇)佉陀羅樹、(六一)波羅奢樹、(六二)尼拘陀樹、(六三)鬱曇鉢樹の和合を林と爲し、是を離れて外更に別の林無し。譬へば車兵、象馬、步兵の和合を軍と爲し、是を離れて外更に別の軍無きが如く、譬へば五色雜綖の和合する、之を名けて綺と爲し、是を離れて外更に別の綺無きが如く、四姓の和合を名けて大衆と爲し、是を離れて外更に別の衆無きが如く、衆生の我も亦復是の如し、五陰を離れて外更に別我無し。

---

【五六】第二に本旨を出して結合す。
【五七】第三に結。
【五八】次に第三に邪正を簡ぶ。之に二段ありて初に邪我の非を簡ぶ。
【五九】次に正我を明す。之に二段ありて初に假我を明す。之に法、譬の二段あり。
【六〇】佉陀羅(Khadira)。檐木と譯す。
【六一】波羅奢(Palāśa)。藤華樹と譯す。
【六二】尼拘陀(Nyagrodha)。榕樹(Ficus Indica)と譯す。
【六三】鬱曇鉢(Udumbara)。具さに優曇鉢羅と書き、靈瑞華と譯す。

(二四)善男子、如來の常住則ち名けて我と爲し。如來の法身は無邊、無閡、不生、不滅、八自在を得、是を名けて我と爲す。衆生眞實に是の如きの我及以我所無く、但畢定當に畢竟第一義空を得べきを以て、故に佛性と名く。

(二五)善男子、大慈大悲を名けて佛性と爲す。何を以ての故に。大慈大悲は常に菩薩に隨ふ、影の形に隨ふが如し。一切衆生、畢定して當に大慈大悲を得べし。是の故に說きて「一切衆生悉く佛性有り」と言ふ。大慈大悲とは名けて佛性と爲す。佛性とは名けて如來と爲す。大喜大捨を名けて佛性と爲す。何を以ての故に。菩薩摩訶薩若二十五有を捨つること能はざれば、則ち阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。諸の衆生必ず當に得べきを以ての故に、是の故に說きて「一切衆生悉く佛性有り」と言ふ。大喜大捨とは卽ち是佛性なり、佛性とは卽ち是如來なり、佛性とは大信心と名く。何を以ての故に。信心を以ての故に、菩薩摩訶薩は則ち能く檀波羅蜜、乃至般若波羅蜜を具足す。一切衆生畢定して當に大信心を得べきが故に。是の故に說きて「一切衆生悉く佛性有り」と言ふ。大信心とは卽ち是佛性なり、佛性とは卽ち是如來なり。佛性とは一子地と名く。何を以ての故に。一子地の因緣を以ての故に。菩薩則ち一切衆生に於て平等心を得。一切衆生畢定して當に一子地を得べきが故に。是の故に說きて「一切衆生悉く佛性有り」

【二四】次に眞我を明す。眞我とは別なし、妄我を對破せるもの、是れ畢竟清淨、卽ち無我、無無我なり。

【二五】次に第四に廣く佛性を出す。之に三段ありて初に佛性を明す。

と言ふ。一子地とは卽ち是佛性なり、佛性とは卽ち是如來なり。佛性とは(六六)第四力と名く。何を以ての故に。第四力の因緣を以ての故に、菩薩則ち能く衆生を敎化す。一切衆生畢定して當に第四力を得べきが故に、是の故に說きて「一切衆生悉く佛性有り」と言ふ。第四力とは卽ち是佛性なり、佛性とは卽ち是如來なり。佛性とは十二因緣と名く。何を以ての故に。因緣を以ての故に如來常住なり、一切衆生定んで是の如き十二因緣有り。是の故に說きて「一切衆生悉く佛性有り」と言ふ。十二因緣は卽ち是佛性なり、佛性とは卽ち是如來なり。佛性とは四無閡智と名く。四無閡の因緣を以ての故に字義無閡を說く。字義無閡の故に能く衆生を化す。四無閡とは卽ち是佛性なり、佛性とは卽ち是如來なり。佛性とは頂三昧と名く。是の如き三昧を修するを以ての故に、則ち能く一切の佛法を總攝す。是の故に說きて「頂三昧は名けて佛性と爲す」と言ふ。十住の菩薩是の三昧を修して未だ具足を得ず、佛性を見ると雖も明了ならず。一切衆生畢定して得るが故に、是の故に說きて「一切衆生悉く佛性有り」と言ふ。(六七)善男子、上に說く所の如き種種の諸法は、一切衆生定んで當に得べきが故に、是の故に說きて「一切衆生悉く佛性有り」と言ふ。(六八)善男子、我若し色は是佛性と說かば、衆生聞き已りて則ち邪倒を生ぜん。邪倒を以ての故に、命終すれば則ち阿鼻地獄に生ず。如來の說法

【六六】第四力に就て兩解あり。一に云く十力中の第四の根力卽ち物の根緣を知る化導の要と。二に云く、別に名數あり、一に信力、二に忍力、三に定力、四に善權力。この中第四の善權力は正しく化導の便なるが故に第四力と名くと。

【六七】次に還た是常を結す。

【六八】次に五陰に非ざるを結す。

は地獄を斷ぜんが爲にす。是の故に色は是佛性と說かず。乃至識を說くも亦復是の如し。

(六九)善男子、若し諸の衆生佛性を了ずれば、則ち道を修すべからずとは、十住の菩薩八聖道を修して少しく佛性を見る、況や修せざる者而も見ることを得んや。善男子、文殊師利諸の菩薩等の如き、已に無量の世に聖道を修習して佛性を了知す、云何ぞ聲聞、辟支佛等能く佛性を知らん。(七〇)若し諸の衆生了了に佛性を知ることを得んと欲する者は、應當に一心に是の涅槃經を受持、讀誦し、書寫、解說し、供養、恭敬し、尊重、讚歎すべし。是の如く經を受持し、乃至讚歎する者有るを見ば、應當に好房舍、衣服、飲食、臥具、病瘦醫藥を以て之に供給し、兼ねて復讚歎、禮拜、問訊すべし。善男子、若し已に過去無量無邊世の中に於て、無量の諸佛に親近し供養して、深く善根を植うる有らば、然して後乃ち是の經の名を聞くことを得。(七一)善男子、佛性は思議すべからず、佛、法、僧寶も亦思議すべからず。一切衆生悉く佛性有りて而も知ること能はざる、是亦思議すべからず。如來の常、樂、我、淨の法も亦思議すべからず。一切衆生能く是の如く大涅槃經を信ずる、亦思議すべからず。」

(七二)師子吼菩薩の言さく、「世尊、佛の所說の如く『一切衆生能く是の如く大涅槃經を信ずる、思議すべからず』とは、世尊、是の大衆の中に八萬五千億の人、是の經の中に於て信心を生ぜざる有り。

【六九】是より第二に會通して前問に答ふ。之に三段ありて初に修道を須ひずと問ふを釋す。
【七〇】次に結勸。
【七一】次に結歎。之に二段ありて初に佛歎。
【七二】次に師子吼の讚。

是の故に能く是の經を信ずる者有らば、不可思議と名く。」『善男子、是の如き諸人未來世に於て、亦當に定んで是の經典を信ずることを得、佛性を見、阿耨多羅三藐三菩提を得べし。』（七三）師子吼の言さく、『世尊、云何が不退の菩薩、自ら決定して不退心有るを知らん。』

（七四）佛の言はく、『善男子、菩薩摩訶薩當に苦行を以て自ら其の心を試むべし。日に一つの胡麻を食して一七日を經、粳米、綠豆、麻子、粟禾、及以白豆も亦復是の如く、各一七日。一麻を食する時是の思惟を作さく、「是の如き苦行は都て利益無し。利益無き事尚能く之を爲す、況や利益有るを作さざるべきや。」無利益に於て、心能く堪忍して退せず轉せず。是の故に定んで阿耨多羅三藐三菩提を得ん。是の如き等の日苦行を修する時、一切皮肉消瘦皴減し、生瓠を斷じて之を日中に置くが如し。其の目卻つて陷ること井底の星の如く、肉盡き筋出づること朽ちたる草屋の如く、脊骨連り現ること重綖摶の如く、所坐の處馬蹄の迹の如し。坐せんと欲すれば則ち伏し、起きんと欲すれば則ち僵す。是の如く無利益の苦を受くと雖も、然も菩提の心を退せず。（七五）復次に善男子、菩薩摩訶薩樂苦を破し、安樂を施すが爲の故に、乃至能く内外の財物及び其の身命を捨つること芻草を捨つるが如し。若能く是の身命を惜まざれば、是の如き菩薩自ら畢定して不退心有るを知る。我定んで當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。復次に菩薩爲法の因緣、身を剜つて燈と爲し、氎皮肉を

【七三】是より第二に人を以て勸む。之に問、答の二段あり。初に問。

【七四】次に佛答。之に三段ありて初に自ら其心を試む。

【七五】次に物の爲に苦を受く。

纏ひ、酥油之を灌ぎ、燒きて以て炷と爲す。菩薩爾の時に是の大苦を受け、自ら其の心を訶して是の言を作さく、「是の如き苦は地獄の苦に於て百千萬分猶未だ一に及ばず。汝無量百千劫の中に於て大苦惱を受け都て利益無し。汝若是の輕苦を受くること能はざれば、云何ぞ能く地獄の中に於て苦の衆生を救はん。」菩薩摩訶薩是の觀を作す時、身に苦を覺えず、其の心退せず、動せず、轉せず。菩薩爾の時に深く自ら「我定んで當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」と知るべし。善男子、菩薩爾の時に煩惱を具足して未だ斷ずる者有らず。佛法の因緣能く頭目、髓腦、手足、血肉を以て衆生に施す。釘を以て身に釘ち、巖に投じ火に趣く。菩薩爾の時に是の如く無量の衆苦を受くと雖も、若心退せず、動せず、轉せずば、菩薩當に知るべし、「我今定んで不退の心有り、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」と。善男子、菩薩摩訶薩一切衆生の苦惱を破せんが爲に、願じて廣大の畜生の身と作り、身、血、肉を以て衆生に施す。衆生取る時復憐愍を作す。菩薩爾の時に氣を閉ぢて喘せず、死相を示作し、彼の取者をして殺害疑網の想を生ぜざらしむ。菩薩畜生の身を受くと雖も、終に畜生の業を造作せず。何を以ての故に。善男子、菩薩既に不退心を得已らば、終に三惡道の業を造作せず。菩薩摩訶薩若未來世に微塵等惡業の果報、定んで受けざる者有らば、大願力を以て、衆生の爲の故に悉く之を受く。譬へば狂人の鬼に著かれて身中に藏隱す。呪力を以ての故に即時に相現す。或は語り、或は喜び、或は瞋り、或は罵り、或は啼き、或は笑ふが如し。菩薩摩訶薩未來の世の三惡道の業も亦復是の如し。菩

薩摩訶薩羆身を受くる時、常に衆生の爲に正法を演說す。或は(七六)迦賓闍羅鳥の身を受け、諸の衆生の爲に正法を說くが故に、(七七)瞿陀身、鹿身、兎身、象身、羖羊、獼猴、白鴿、金翅鳥、龍蛇の身を受く。是の如き等の畜生身を受くるの時、終に畜生の惡業を造作せず。常に其の餘の畜生、衆生の爲に正法を演說す。彼をして法を聞き、速かに畜生の身を轉じ、離るることを得しむるが故に。菩薩爾の時に畜身を受くと雖も、惡業を作さざれば、當に知るべし、必定して不退心有りと。菩薩摩訶薩饑饉の世に於て饑衆生を見、大魚の身無量由旬と作る。復是の願を作さく、「願はくは諸の衆生我が肉を取る時、取るに隨ひ、隨つて生じ、我が肉を食するに因りて饑渇の苦を離れ一切悉く阿耨多羅三藐三菩提の心を發さん。」菩薩願を發さく、「若し我に因りて饑渇を離るる者有らば、未來の世速かに二十五有の饑渇の患を遠離することを得ん。」菩薩是の如きの苦を受くるに、心退せざる者、當に知るべし、必定して阿耨多羅三藐三菩提を得ん。復次に菩薩疾疫の世に於て、病苦の者を見、是の思惟を作さく、「藥樹王の、若し病者有りて根を取り、莖を取り、枝を取り、葉を取り、華を取り、果を取り、皮を取り、膚を取り、悉く病を差すことを得るが如し。願はくは我が此の身も亦復是の如くならん。若し病者有りて聲を聞き、身に觸れ、血肉、乃至骨髓を服食せんに病悉く除愈せん。願はくは諸の衆生我が肉を食する時、惡心を生ぜず、子の肉を食するが如くせん。我病を治し已りて常に爲に法を說かん

【七六】迦賓闍羅(Kapiñjala)。雉鳥と譯す。

【七七】瞿陀(Godhā)。蜴の一種なり。

に、願はくは彼信受し思惟し轉じて敎へん。」復次に善男子、菩薩煩惱を具足し、身に苦を受くと雖も、其の心退せず、動せず、轉せずば、當に知るべし、必定して不退心を得、阿耨多羅三藐三菩提を成す。復次に善男子、若し衆生鬼の爲に病さる有らんに、菩薩見已りて即ち是の言を作さく「願はくは鬼身、大身、健身、多作屬身と作りて、彼をして聞見して病除愈を得しめん。」若し衆生の爲の故に苦行を勤修するに、煩惱有りと雖も其の心を汙されず。(七八)復次に善男子、菩薩摩訶薩復六波羅蜜を修行すと雖も、亦復六度の果を求めず。無上の六波羅蜜を修行する時、是の願言を作さく「我今此の六波羅蜜を以て一切衆生に施す。一一の衆生我が施を受け已りて、悉く阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得しむ。我も亦自ら六波羅蜜の爲に、善行を勤作して諸の苦惱を受く。苦を受くる時に當りて願はくは我菩提の心を退せざらん。」善男子、菩薩是の相を作す時、是を菩提を退せざるの相と名く。

(七九)復次に善男子、菩薩摩訶薩思議すべからず。何を以ての故に、菩薩摩訶薩深く生死の諸の罪過多きを知り、大涅槃の大功德有るを觀じて、諸の衆生の爲に生死に處在し、種種の苦を受けて心退轉無し。是を菩薩の不可思議と名く。復次に善男子、菩薩摩訶薩因緣有ること無きに憐憫を生ず。實は恩を受けざれども常に恩を施す。恩を施すと雖も報を求めず、是の故に復不可思議と名く。復次に善

【七八】次に六度を以て偈を作すことを明す。

【七九】是より第二に歎經。之に三段あり、[illegible]

男子、或は衆生有りて、自の利益の爲に諸の苦行を修す。菩薩摩訶薩は衆生を利益するの爲の故に苦行を修行す、是を自利と名く。是の故に復不可思議と名く。復次に菩薩煩惱を具足して、怨親受くる所の諸苦を壞せんが爲に平等心を修す。是の故に復不可思議と名く。復次に菩薩、若諸惡不善の衆生を見ば、若は訶責し、若は軟語し、若は驅擯し、若は縱捨す。惡性有る者には現じて軟語を爲し、憍慢の者には現じて大慢と爲る。而も其の内心實に憍慢無し。是を菩薩方便不可思議と名く。復次に菩薩煩惱を具足す。財物少き時來り求むる者多きに、心迮小ならず。是を菩薩の不可思議と名く。復次に菩薩佛出の時に於て、佛の功德を知る。衆生の爲の故に無佛の處に於て邊地身を受く。盲の如く、聾の如く、跛の如く、躄の如し。是を菩薩の不可思議と名く。復次に菩薩深く衆生所有の罪過を知り、度脫の爲の故に常に與共に行ず。其の意に隨ふと雖も罪垢汙さず。是の故に復不可思議と名く。復次に菩薩了了に衆生相無く煩惱汙無く、道を修習して煩惱を離るる者無く、菩提の爲にすと雖も菩提行無し。亦菩提行を成就する者無く、苦を受け、及び苦を破る者有ること無きを知る。亦能く衆生の爲に苦を壞せんとして菩提行を行ず。是の故に復不可思議と名く。(八〇)復次に菩薩後邊身を受けて兜率天に處す。是亦名けて不可思議と爲す。何を以ての故に。(八一)兜率陀天は欲界中の勝なり。下天に在る者は其の心放逸、上天に在る者は諸根闇鈍なり。是の故に勝と名く。施を修し、戒を修して上下

【八〇】次に別して補處を敍す。
【八一】兜率天(三三三)。上足、妙足等と譯す。欲界の夜摩天と樂變化天の中間に在り。

の身を得、持戒、布施、定を修して兜率の身を得。一切菩薩諸有を毀呰し諸有を破壊す。終に兜率天の業を造作して彼の天身を受けず。何を以ての故に。菩薩若其の餘の諸有に處るも亦能く衆生を教化し成就す。實に欲心無くして欲界に生ず。是の故に復不可思議と名く。菩薩摩訶薩兜率天に生ずるに（八三）三事の勝有り。一つには命、二つには色、三つには名なり。菩薩摩訶薩實に命、色、名稱を求めず、求心無しと雖も所得勝る。菩薩摩訶薩深く涅槃を樂ひ、然も有の因も亦勝る。是の故に復不可思議と名く。菩薩摩訶薩是の如く三事諸天に勝ると雖も、諸天等菩薩の所に於て終に瞋心、妬心、憍慢の心を生ぜず、常に喜心を生ず。菩薩天に於ても亦憍慢せず。是の故に復不可思議と名く。菩薩摩訶薩命業を造らざれども、彼の天に於て壽命を畢竟す、是を命勝と名く。亦色業無けれども妙色身光明徧滿す、是を色勝と名く。菩薩摩訶薩の天宮に處して五欲を樂はず、唯法事を爲す。是の故に名稱十方に充滿す、是を名勝と名く。是の故に復不可思議と名く。菩薩摩訶薩兜率天より下るに、是の時大地六種に震動す。是の故に復不可思議と名く。何を以ての故に。菩薩下る時欲色の諸天悉く來り侍送し、天香華を散じて菩薩を讃歎す。口の風氣を以ての故に地動せしむ。復菩薩人中の象王有り、人中の象王と名けて閻王と爲す。閻王胎に入る時、諸の龍王の地の下に在る有りて、或は惱み、或は樂しむ。是の故に大地六種に震動す。是の故に復不可思議と名く。菩薩摩訶薩入胎の時、住時、

【八三】三事の勝。諸天の中に[illegible]天の名を[illegible]、人中に[illegible]命である。[illegible]之に比して三となす。

出時を知る。父を知り母を知り、不淨に汙れず。帝釋の髮、青色の寶珠の如し。是の故に復不可思議と名く。

(八三)善男子、大涅槃經も亦復是の如く思議すべからず。(八四)善男子、譬へば大海に八不思議有るが如し。何等をか八つと爲す。一つには漸漸に轉た深し。二つには(八五)深くして底を得難し。三つには同一の鹹味なり。四つには潮限を過ぎず。五つには種種の寶藏有り。六つには大身の衆生中に在りて居住す。七つには死尸を宿せず。八つには一切萬流、大雨之に投ずるに增さず減らず。善男子、漸漸轉深に三事有り。何等をか三つと爲す。一つには衆生の福力。二つには順風にして行く。三つには河水入るが故に。乃至不增、不減も亦各三つ有り。(八六)是の大涅槃微妙の經典も亦復是の如し、八つの不可思議有り。一つには漸漸深なり。所謂五戒、十戒、二百五十戒、菩薩戒なり。須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛果、菩薩果、阿耨多羅三藐三菩提果なり。是の涅槃經は是等の法を說く、是を漸漸深と名く。是の故に此の經は漸漸深と名く。二つには深難得底なり。如來世尊は不生不滅なり、阿耨多羅三藐三菩提を得ず、法輪を轉せず、不食、不受、惠施を行せず。是の故に名けて常、樂、我、淨と爲す。一切衆生悉く

【八三】第二に所安の法を歎す。之に二段あり、其中初に經を歎す。之に三段ありて初に法。

【八四】次に譬。

【八五】深くして底を得難し。一經に云く、大海譬に合すれば唯だ常樂我淨にして無常苦等有るを得ざるも偏に合すれば常無常等を具す、故に深難得底といふところの說不可なり。今謂く常無常、非常非無常一にあらず二にあらざれば思議すべからず、故に深といふ。

【八六】次に合。

佛性有り。佛性は色に非ず、色を離れず。受、想、行、識に非ず、乃至識を離れず。是常に見るべし、了因は作因に非ず。須陀洹、乃至辟支佛は當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。亦煩惱無く、亦住處無し。煩惱無しと雖も、名けて常と爲さず、是の故に深と名く。復甚深有り。是の經中に於て、或は時に我と說き、或は無我と說く。或は時に常と說き、或は無常と說く。或は時に淨と說き、或は不淨と說く。或は時に樂と說き、或は時に苦と說く。或は時に空と說き、或は不空と說く。或は一切有と說き、或は一切無と說く。或は三乘と說き、或は一乘と說く。或は五陰即ち是佛性、金剛三昧、及以中道なり。首楞嚴三昧、十二因緣、第一義空なり。慈悲諸の衆生に平等なり。頂智信心、知諸根力なり。一切法中無罣閡智を說き、佛性有りと雖も決定を說かず、是の故に深と名く。三つには同一鹹味なり。一切衆生同じく佛性有り、皆同じく一乘、同じく一解脫なり。一因一果、同一甘露なり。一切當に常、樂、我、淨を得べし。是を一味と名く。四つには潮限を過ぎず。是の經の中、諸の比丘を制す、八不淨物を受畜することを得ず。若し我が弟子能く是の大涅槃微妙の經典を受持、讀誦し、書寫、解說、分別する、寧ろ身命を失ふとも終に之を犯さざるが如し。是を潮限を過さずと名く。五つには種種の寶藏有り。是の經即ち是無量の寶藏なり。言ふ所の寶とは、謂はく四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分なり。嬰兒行、聖行、梵行、天行なり。諸の善方便、衆生佛性なり。菩薩の功德、如來の功德、聲聞の功德、緣覺の功德なり。六波羅蜜なり、無量の三昧、無量の智

慧なり。是を寶藏と名く。六つには大身衆生所居住の處なり。大身衆生とは、謂はく、佛菩薩大智慧の故に、大衆生と名く。大身の故に、大心の故に、大莊嚴の故に、大調伏の故に、大方便の故に、大說法の故に、大勢力の故に、大徒衆の故に、大神通の故に、大慈悲の故に、常にして不變の故に、一切衆生罣閡無きが故に、一切諸の衆生を容受するが故に、是を大身衆生所居の處と名く。七つには死尸を宿せず。死尸とは一闡提、犯四重禁、五無間罪、誹謗方等、非法說法、法說非法なり。八種不淨の物を受畜す。佛物、僧物意に隨ひて用ふ。或は比丘、比丘尼の所に於て非法事を犯ずるを謂ふ、是を死尸と名く。是の涅槃經は是の如き等を離る。是の故に名けて死尸を宿せずと爲す。八つには不增、不減なり。邊際無きが故に、始終無きが故に、非色の故に、非作の故に、常住の故に、不生滅の故に、一切衆生悉く平等の故に、一切性同一性の故に、是を無增減と名く。是の故に此の經は彼の大海の如く八不思議有り。』

(八七)師子吼の言さく、『世尊、若如來不生不滅を名けて深と爲すと言はば、一切衆生に四種の生有り。卵生、胎生、溼生、化生なり。是の四種の生は人中具さに有り。(八八)施婆羅比丘、(八九)優婆施婆羅比丘の如し。(九〇)彌迦羅長者母、(九一)尼拘陀長者母、(九二)半闍羅長者母、各五百子卵生に同じ。當に知るべ

---

【八七】次に料簡。之に問、答の二段あり。初に問。

【八八】施婆羅(Campala)。金色花と譯す、花名を取りて人名となす。

【八九】優婆施婆羅(Upacampala) 大金色花と譯す。

【九〇】彌迦羅(Mekhala)。金帶と譯す。

【九一】尼拘陀(Nyagrodha)。縱横葉と譯す、所謂榕樹なり。

し人中に則ち卵生有り。濕生とは佛の所說の如く、我往昔に於て菩薩と作りし時、頂生王及び手生王と作る。今の所說の【九三】菴羅樹女、【九四】迦不多樹女の如し。當に知るべし、人中に則ち濕生有り。劫初の時一切衆生皆悉く化生す。如來世尊、八自在を得、何の因緣の故に化生せざるや。」

【九五】佛の言はく、「善男子、一切衆生は四生の所生なり。聖法を得已れば本の卵生、濕生の如くなることを得ず。【九六】善男子、劫初の衆生皆悉く化生す。爾の時に當りて佛世に出でず。善男子、若衆生有りて病苦に遇ふ時、醫を須ひ藥を須ふ。劫初の時衆生化生す。煩惱有りと雖も其の病未だ發らず、是の故に如來世に出でず。劫初の衆生身心器に非ず。是の故に如來世に出でず。善男子、如來世尊所有の種姓、眷屬、父母諸の衆生に勝る。殊勝を以ての故に、凡そ所說の法は人皆信受す、是の故に如來化生を受けず。善男子、一切衆生父は子の業を作り子は父の業を作る。如來世尊若化身を受くれば則ち父母無し。若父母無ければ云何ぞ能く一切衆生をして諸の善業を作さしめん。是の故に如來化身を受けず。善男子、佛正法の中に二種の護有り。一つには內、二つには外なり。內護とは所謂禁戒、外護とは親族、眷屬なり。若佛如來化身を受くれば、則ち外護無し、是の故に如來化身を受けず。善男子、人有りて姓を恃んで憍慢を生ず。如來是の如き慢を破せんが爲の故に、貴姓に生在し

【九二】半闍羅(Pañjara)。籠又は網と譯す。
【九三】菴羅女(Āmra)、舊譯はマンゴウ樹なり。樹に依りて名を得。
【九四】迦不多(Kapittha or Ka-[illegible])、[illegible]の名。
【九五】次に佛答。之に二段ありて初に別して卵濕の二生を受けず。
【九六】次に別して化生を受けず

て化身を受けず。善男子、如來世尊は眞の父母有り。父を淨飯と名け母を摩耶と名く。而も猶ほ諸の衆生猶是幻と言ふ、云何ぞ當に化生の身を受くべきや。若化身を受くれば云何ぞ碎身舍利有ることを得ん。如來衆生の福德を益さんが爲に、故に其の身を碎きて供養せしむ。是の故に如來化身を受けず。一切諸佛に悉く化生無し、云何ぞ獨我をして化身を受けしめんや。』

(九七)爾の時に師子吼菩薩合掌長跪し、右膝を地に著け、偈を以て佛を讃ずらく、

『如來無量の功德聚、我今廣く宣說すること能はず、
今衆生の爲に一分を演ぶ、唯願はくは哀愍して我が說を聽け。
(九八)衆生無明の闇中に行く、具さに無邊百種の苦を受く、
世尊能く之を遠離せしめたまふ、是の故に世稱して大悲と爲す。
衆生往反生死の繩、放逸迷荒安樂無し、
如來能く樂に安樂を施したまふ、是の故に永く生死の繩を斷つ。
佛能く樂に安樂を施したまふが故に、自ら己樂に於て樂を貪らず、
諸の衆生の爲に苦行を修したまふ、是の故に世間供養を興す。
他の受苦を見て身戰動し、地獄に處在して痛を覺えず、
諸の衆生の爲に大苦を受けたまふ、是の故に勝る無く量り有ること無し。

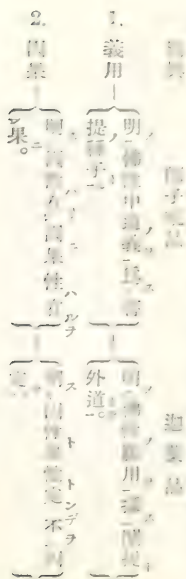
【九七】第三に說敎の主を歎ず。四十行の偈中初の二行は求說を請ひ、中の三十七行は歎じ、終の一行は結して更に求說を請ふ。

【九八】次に歎。

如來衆の爲に苦行を修し、成就具足して六度を滿にたまふ、
心邪風に處して傾動したまはず、是の故に能く世の大士に勝る。
衆生常に安樂を得んことを欲すれども、安樂の因を修することを知らず、
如來能く敎へて修習せしむる、猶し慈父の一子を愛するが如し、
佛衆生の煩惱の患を見たまひ、心苦むこと母の病子を念ふが如し、
常に病を離るる諸の方便を思ひたまふ、是の故に此の身他に繫屬す、
一切衆生諸苦を行ず、其の心顚倒して以て樂と爲す、
如來眞の苦樂を演說したまふ、是の故に稱號して大悲と爲す。
世間皆無明の殼に處す、智黠の能く之を破する有ること無し、
如來智黠能く沮壞したまふ、是の故に名けて最大子と爲す。
三世に攝持せられず、名字及び假號有ること無く、
涅槃甚深の義を覺知したまふ、是の故に佛を稱して大覺と爲す。
有河洄澓して衆生を沒す、無明に盲せられて出づることを知らず、
如來自ら度し能く彼を度したまふ、是の故に佛を大船師と稱す。
能く一切諸の因果を知り、亦復盡滅道に通達し、

常に衆生の病苦に藥を施したまふ、是の故に世に大醫王と稱す。
外道邪見苦行を說き、是に因りて能く無上の樂を得と、
如來眞樂行を演說して、能く衆生をして快樂を受けしむ。
如來世尊邪道を破し、衆生に正眞の路を開示したまふ、
是の道を行ずる者は安樂を得、是の故に佛を稱して導師と爲す。
自に非ず他の所作に非ず、亦共作無因作に非ず、
如來所說の苦受の事、一切の諸の外道に勝る。
戒定慧を成就し具足し、亦此の法を以て衆生を教へたまふ、
法を以て施したまふ時妬吝無し、是の故に佛を無緣悲と稱す。
造作する所無く因緣無し、無因無果の報を獲得したまふ、
是の故に一切諸の智者は、如來の報を求めたまはざるを稱說す。
常に世間の放逸の行に共して、而も身放逸に汙されず、
是の故に名けて不思議と爲す、世間の八法も汙すこと能はず。
如來世尊怨親無し、是の故に其の心常に平等なり。
（究）我師子吼して大悲を讚ず、能く無量の師子吼を吼す。』



究一　次に若。

尊、若善星比丘を救ふこと能はざれば、云何ぞ大慈憫有り、（九）大方便有りと名くることを得ん。』

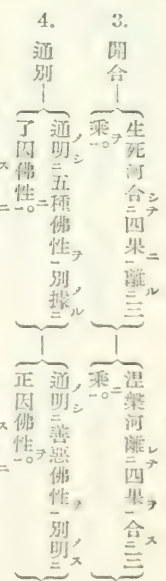
（一〇）佛の言はく、『善男子、譬へば父母に唯三子有るが如し。其の一子は、信順の心有りて父母を恭敬し、利根智慧、世閒の事に於て能く悉く了知す。其の第二子は父母を敬せず、信順の心無し。利根智慧、世閒の事に於て能く速かに了知す。其の第三子は父母を敬せず、信心有ること無く、鈍根にして智無し。父母若し教へ告げんと欲すれば、先に誰を教へ、先に誰を親愛すべく、當に先に誰を教へて世閒の事を知らしむべき。』

（一一）迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、先に信順心有りて父母を恭敬し、利根智慧、世事を知る者を教授すべし。其の次に第二乃ち第三に及ぶ。而して彼の二子は信順恭敬の心無しと雖も、

---

3. 開合──｛生死河合四果離三乘。｝──｛涅槃河離四果合三乘。｝

4. 通別──｛通明五種佛性別攝了因佛性。｝──｛通明善惡佛性別明正因佛性。｝

5. 一再──｛對善一人。｝──｛再對迦葉。｝

本文大段分つて二となす。初めに迦葉品の折惡、次に陳如品の攝邪なり、今は初なり。初の折惡段を更に分ちて佛性の用を明すと、經を歎ずとの二段とす。初の佛性の用を明す中又二段あり。其中初に斷善、次に生善。善を斷ずる中に三段ありて初に斷善の人を明す。之に問、答の二段あり。初の問中に又二段ありて初に緣起。之に又二段ありて初に佛の能化の德。これに二段ありて先づ內に慈悲有り。

【二】次に外に方便有り。

【三】第二に善星可化の緣有るを明す。之に二段ありて初に是れ子なり。

【四】次に三德を具す。この中出家の後は信戒、受持十二部經は慧、壞欲得禪は定なり。

【五】次に第二に正しく問ふ。之に二段あり、其中初に兩難、次に兩結。兩難の中又二段あり、其中初に何が故に是れ惡人と記するかと難す。之に又二段ありて初に何が故に是れ闡提と記するかと難す。卽ち惡因なり。

【六】次に何が故ぞ地獄に劫住すると難す。是れ惡果なり。

【七】次に何が故ぞ先に爲に法を說かざると難す。

【八】次に兩結。之に二段ありて初に初難を結し、慈悲無きことを明す。

慈念を以ての故に次に復之を敎へん。』(一二)『善男子、如來も亦爾なり。其の三子とは、初は菩薩を喩へ、中は聲聞を喩へ、後は一闡提を喩ふ。十二部經修多羅の中の微細の義の如き、我先に已に諸の菩薩の爲に說き、淺近の義は、聲聞の爲に說き、世間の義は一闡提、五逆罪の爲に說けり。現在世の中利益無しと雖も、憐愍を以ての故に後世の諸善種子を生ぜんが爲にす。

(一三)善男子、三種の田の如し。一つには渠流便易なり、諸の沙鹵、瓦石、棘刺無く、一つを種ゑて百を得。二つには沙鹵、瓦石、棘刺無しと雖も、渠流險難、實を收むること半を減ず。三つには渠流險難、諸の沙鹵、瓦石、棘刺多し、一つを種ゑて一つを得、藁草の爲の故なり。善男子、農夫春月先に何れの田に種ゑん。』(一四)『世尊、先に初の田に種ゑ、次に第二の田、後第三に及ばん。』(一五)『初は菩薩を喩へ、次に聲聞を喩へ、後は一闡提を喩ふ。

(一六)善男子、譬へば三器の如し。一つには完、二つには漏、三つには破なり。若乳、酪、酥水を盛り置かんと欲すれば、先に何者を用ひん。』(一七)『世尊、完者を用ふべし。次に漏者を用ひ、後に破者に及ばん。』(一八)『其の完淨の者は菩薩僧を喩へ、漏は聲聞を喩へ、破は一闡提を喩ふ。(一九)善男子、三

---

【九】次に後難を結し、方便無きことを明す。

【一〇】是より第二に佛答。之に兩難、兩結を答ふの二段あり。先には後を答へ後には前を答ふ。先に後を答ふる中凡て七譬あり、前の六譬は緣淺深有るが故に次第有ることを明し、後の一譬は佛心平等等しく說いて偏無きことを明す。前の六譬の中、初は三子を敎ふの譬。之に三段ありて初に譬を以て問ふ。

【一一】次に事を述べて奉答す。

【一二】次に譬を合して釋を作す。

【一三】第二に三田に種うる譬。之に三段ありて初に譬を以て問ふ。

【一四】次に事を述べて奉答す。

【一五】次に譬を合して釋を作す。

【一六】第三に三器を用ふの譬。之に三段ありて初に譬を以て

病人倶に醫所に至るが如し。一つには易治、二つには難治、三つには不可治なり。善男子、醫若治せば當に先に誰を治すべき。』(二〇)『世尊、先に易を治し、次に第二に及び、後に第三に及ぶべし。何を以ての故に。親屬の爲の故なり。』(二一)『其の易治は菩薩僧を喩へ、其の難治は聲聞僧を喩へ、不可治は一闡提を喩ふ。現在世の中に善果無しと雖も、憐愍を以ての故に後世の諸の善子を種うるが爲の故なり。(二二)善男子、譬へば大王に三種の馬有るが如し。一つには調壯大力、二つには不調齒壯大力、三つには不調羸老無力なり。王若乘御せば當に何者を先にすべき。』(二三)『世尊、應當に先に調壯大力に乘じ、次に第二に乘じ、後に第三に及ぶべし。』(二四)『善男子、調壯大力は菩薩僧を喩へ、其の第二は聲聞僧を喩へ、其の第三は一闡提を喩ふ。現在世の中利益無しと雖も、憐愍を以ての故に、後世の諸の善種子を種うるが爲なり。(二五)善男子、大施の時三人來る有るが如し。一つには貴族聰明持戒、二つには中姓鈍根持戒、三つには下姓鈍根毀戒なり。善男子、是の大施主先に誰にか施すべき。』(二六)『世尊、貴姓利根持戒を先にし、次に第二に及び、後に第三に及ぶべし。』(二七)『第一は菩薩僧を喩へ、第二は聲聞僧を喩



問ふ。
【一七】次に事を述べて奉答す。
【一八】次に譬を合して解を作す
【一九】第四に三病を治する譬。之に三段ありて初に譬を以て問ふ。
【二〇】次に事を述べて奉答す。
【二一】次に譬を合して解を作す
【二二】第五に三馬に乘する譬。之に三段ありて初に譬を以て問ふ。
【二三】次に事を述べて奉答す。
【二四】次に譬を合して解を作す
【二五】第六に三人に施すの譬。之に三段ありて初に譬を以て問ふ。
【二六】次に事を述べて奉答す。
【二七】次に譬を合して解を作す 次の中第一は菩薩僧を喩ふは佛の教化意を以て見るに二途あり。一は佛成道初七日を過ぎて提謂文鱗等の爲めに人天の五戒を說き、次に第二七日

へ、第三は一闡提を喩ふ。(二八)善男子、大師子の香象を殺す時、皆其の力を盡し、兎を殺すも亦爾なり、輕想を生ぜざるが如く、諸佛如來も亦復是の如し、諸の菩薩及び一闡提の爲に法を演說する時功用二つ無し。

(二九)善男子、我一時に於て王舍城に住す、善星比丘我が給使と爲る。我初夜に於て天帝釋の爲に法要を演說す。弟子の法、師に後れて眠るべし。爾の時に善星我が久しく坐するを以て心に惡念を生ず。時に王舍城の小男、小女若し啼きて止めざれば、父母則ち語つて言はく「汝若止めざれば、當に汝を將て薄拘羅鬼に付すべし。」爾の時に善星拘執を反被して我に語りて言はく「速に禪室に入れ、薄拘羅來る」と。我言はく「癡人、汝當に如來世尊畏るる所無きを聞かずや。」爾の時に帝釋、即ち我に語りて言はく「世尊是の如き人等も亦復佛法の中に入ることを得るや。」我即ち語りて言さく「憍尸迦、是の如きの人は佛法に入ることを得。亦佛性有り、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。」我是の善星が爲に法を說くと雖も、而も彼都て信受の心無し。

(三〇)善男子、我一時に於て(三一)迦尸國尸婆富羅城に在り、善星比丘我が給使と爲る。我時に彼の城に入りて乞食せんと欲す。無量の衆生虛心渴仰し

---

鹿苑に趣きて二乘人の爲めに四諦の法を轉じ、後徐徐に方等を明して諸菩薩を教ふ。こは小に約して初を立つ。二は成道初七日（華嚴には第二七日とす）舍那教を以て初め山王を照し、次に平地を照す。こは大に約して初を立つ。これ等二途ある中、今此の文意は始終を包括して山王を以て初となし、文鱗を中となし、雙林を後となす。而して第三子即ち一闡提復た穢蟲と雖も濃同を以ての故に是の故に須く教ふ可きこと、恰かも下田瘠せたりと雖も家業を以ての故に廢すべからざるが如し。

【二八】第二の一譬は佛心平等等しく說いて偏なきを明す。

【二九】次に第二に追うて前起惡人の難を答ふ。之に二段ありて初に闡提を答へ、次に犯の意を答ふ。初の中三段ありて

て我が迹を見んと欲す。善星比丘尋いで我が後に隨ひて之を毀滅す。既に滅すること能はざれども、而も衆生をして不善心を生ぜしむ。我城に入り已り、酒家舍に於て一りの尼乾の脊を卷き地に蹲りて酒糟を餐食するを見る。善星比丘見已りて言さく、「世尊、世間に若阿羅漢有らば、是の人最勝なり。何を以ての故に。是の人の所說無因無果なり。」我言はく、「癡人、汝常て聞かずや、阿羅漢は酒を飲まず、人を害せず、欺誑せず、不盜、不婬なりと。是の如きの人は父母を殺害し、酒糟を食噉す、云何ぞ而るを是阿羅漢と言はん。是の人身を捨てて必定して當に阿鼻地獄に墮つべし。阿羅漢は永く三惡を斷ず、云何ぞ而るを是阿羅漢と言はん。」善星即ち言さく、「四大の性猶轉易すべきも、是の人をして必ず阿鼻に墮せしめんと欲せば、是の處有ること無し。」我言はく、「癡人、汝常て聞かずや、諸佛如來には誠言二つ無しと。」我是の善星が爲に法を說くと雖も、而も彼絕えて信受の心無し。

(三二)善男子、我一時に於て善星比丘と王舍城に住す。爾の時に城中に一りの(三三)尼乾有り、名を苦得と曰ふ。常に是の言を作さく、「衆生の煩惱は因無く緣無し、衆生の解脫も亦因緣無し。」善星比丘復是の言を作さく、「世尊、世間若阿羅漢有らば、苦得を上と爲す。」我言はく、「癡人、苦得尼乾は實に阿羅

初に無信を明す。之に又三段ありて初に佛は是れ無所畏の人なるを信ぜず。

【三〇】次に佛は是れ無妄語の人なるを信ぜず。

【三一】迦尸國尸婆富羅城 (Kāśi Śivapura)。迦尸は摩伽陀の西方に在る國名、尸婆富羅は其の都城ベナレス是なり。

【三二】次に佛は是れ無嫉妬人なることを信ぜず。

【三三】尼乾 (Nirgrantha)。離繫と譯す。闍那敎 (Jainism) の一派。印度苦行派の名。

漢に非ず、阿羅漢道を解了すること能はず。」善星復言さく、「何が故ぞ羅漢は阿羅漢に於て妬嫉を生ずる。」我言はく、「癡人、我羅漢に於て妬嫉を生ぜず、而も汝自ら惡邪見を生ずるのみ。若し苦得是羅漢と言はば、却後七日當に宿食を患ひ、腹痛して死し、死し已りて食吐鬼の中に生ずべく、其の同學の輩は當に其の尸を輿きて寒林の中に置くべし。」爾の時に善星即ち苦得尼乾子の所に往きて語りて言はく、「長老汝今知るや否や。沙門瞿曇汝を記す、七日當に宿食を患ひ腹痛みて死し、死し已りて食吐鬼の中に生ずべし。同學、同師當に汝が尸を輿きて寒林の中に置くべし。長老、好善く思惟し、諸の方便を作して、當に瞿曇をして妄語の中に墮せしむべし。」爾の時に苦得是の語を聞き已りて即便食を斷つ。初一日より乃ち六日に至り、七日を滿じ已りて便ち黑蜜を食す。黑蜜を食し已りて復冷水を飲む。冷水を飲み已りて腹痛みて死す。死し已りて同學其の尸を輿き喪して寒林の中に置き、即ち食吐餓鬼の形を受け其の尸の邊に在り。善星比丘是の事を聞き已りて寒林の中に至る。苦得の身食吐の形を受け、其の尸邊に在りて脊を巻き地に蹲るを見る。善星語りて言はく、「大德死するや。」苦得答へて言はく、「我已に死せり。」「云何が死するや。」答へて言はく、「腹痛に因りて死す。」「誰か汝が尸を出す。」答へて言はく、「同學。」「出して何れの處にか置く。」答へて言はく、「癡人、汝今是寒林を識らずや。」「何等の身を得る。」答へて言はく、「我食吐鬼の身を得。」善星諦かに聽け、如來は善語、眞語、時語、義語、法語なり。善星、如來は口に是の如きの實語を出したまふ。汝爾の時に於て云何ぞ信せざる。若し

衆生如來の眞實の言を信ぜざる者有らば、彼も亦當に我が此の身の如きを受くべし。」爾の時に善星即ち我が所に還りて是の如き言を作さく、「世尊、苦得尼乾命終の後三十三天に生ず。」我言はく、「癡人、阿羅漢は生處有ること無し、云何ぞ苦得三十三天に生ずと言はん。」世尊、實に言ふ所の如く、苦得尼乾は實に三十三天に生ぜず、今食吐餓鬼の身を受く。」我言はく、「癡人、諸佛如來は誠言にして二つ無し。若如來二言有りと言はば、是の處有ること無し。」善星即ち言はく、「如來爾の時に是の說を作したまふと雖も、我是の事に於て都て信を生ぜず」と。善男子、我も亦常に善星比丘の爲に眞實の法を說くとも、而も彼絕えて信受の心無し。(三四)善男子、善星比丘復十二部經を讀誦し、四禪を獲得すと雖も、乃至一偈、一句、一字の義を解せず。(三五)惡友に親近して四禪を退失す。(三六)禪定を退し已りて惡邪見を生じて是の如きの說を作さく、「佛無く法無く、涅槃有ること無し。沙門瞿曇善く相法を知る、是の故に能く他人の心を知ることを得。」我爾の時に於て善星に告げて言はく、「我が說く所の法、初中後善なり。其の言巧妙、字義眞正、所說無雜なり。清淨の梵行を具足成就す。」善星比丘復是の言を作さく、「如來復我が爲に法を說くと雖も、而も我眞實に因果無しと謂へり。」(三七)善男子、汝若是の如きの事を信ぜずんば、善星比丘今者近く尼連禪河に在り、共に往いて問ふべし。」

【三四】次に無慧。

【三五】次に無定。之に二段ありて初に得と雖も後に失ふ故に無定と言ふ。

【三六】次に總じて邪を起す故に之を記すを結す。

【三七】第二に其前に記の意を問ふを答ふ。之に二段ありて初に記の意を明す。

爾の時に如來即ち迦葉と善星が所に往きたまへるを見、見已りて即ち惡邪の心を生ず。惡心を以ての故に生身陷入して阿鼻獄に墮す。(三八)善男子、善星比丘佛法の無量寶聚に入ると雖も、空にして獲る所無く、乃至一法の利を得ず。放逸を以ての故に、惡知識の故なり。(三九)譬へば人有り、大海に入りて多く衆寶を見ると雖も、而も得る所無きは放逸を以ての故なるが如く、又海に入りて寶聚を見ると雖も自ら戮して死し、或は羅刹惡鬼に殺さるるが如し。(四〇)善星比丘も亦復是の如し、佛法に入り已りて惡知識の羅刹大鬼に殺害せらる。(四一)善男子、是の故に如來、憐愍を以ての故に常に善星に諸の放逸多きを説きたまふ。善男子、若本貧窮なるは、是の人の所に於て憐愍を生ずと雖も、其の心則ち薄く、若本巨富にして後財物を失し、是の人の所に於て憐愍を生ずるは、其の心則ち厚し。(四二)善星比丘も亦復是の如し、十二部經を受持、讀誦し、四禪を獲得し、然して後退失す、甚だ憐愍すべし。是の故に我説かく、善星比丘は諸の放逸多し、放逸多きが故に諸の善根を斷ず。我が諸の弟子見聞する者有らば、是の人の所に於て重く憐愍の心を生ぜざる無し。(四三)初巨富にして後財を失する者の如く、我多年に於て常に善星と共に相隨逐すれども、而も彼自ら惡邪の心を生じ、惡邪を以ての故に惡見を捨てず。

【三八】次に治すべからざるを明す。之に法、譬、合の三段ありて初に法。
【三九】次に譬。
【四〇】次に合。之に二番ありて各二段あり。先づ初番の中、正しく合す。
【四一】次に譬を以て結合す。
【四二】次に第二番。之に二段ある中、初に正しく合す。
【四三】次に譬を以て結合す。

(四四)善男子、我昔より來た、是の善星少しく善根の毛髪許りの如き有るを見れば、終に彼善根を斷絕す。是一闡提、斷下の人なり、地獄に劫住すと記せず。其の因無く果無く作業有ること無しと宣說するを以て、爾して乃ち彼永く善根を斷ず。是一闡提、斷下の人なり、地獄に劫住すと記す。(四五)善男子、譬へば人有りて圊廁の中に沒す。善知識有り手を以て之を撓らす。若は頭髪を得て便ち拔出せんと欲す。久しく求むるに得ざれば、爾して乃ち意を息るが如し。(四六)我も亦是の如し、善星が微少の善根を求覓して、便ち拔濟せんと欲す。終日之を求むるに、乃至毛髪許りの如きを得ず。是の故に其の地獄を拔くことを得ず。』

(四七)迦葉菩薩の言さく、『世尊、如來何が故ぞ彼當に阿鼻地獄に墮すべしと記する。』(四八)『善男子、善星比丘は多く眷屬有り。皆善星は是阿羅漢なり、是道果を得と謂ふ。我彼の惡邪心を壞せんと欲するが故に、彼の善星放逸を以ての故に地獄に墮すと記す。(四九)善男子、汝今當に知るべし、如來の所說は眞實にして二つ無し。何を以ての故に。若佛の當に地獄に墮すべしと記する所、若墮せざれば是の處有ること無し。聲聞、緣覺の記莂する所の者は、則ち二種有り、或は虛、或は實なり。目犍連摩伽陀國に在りて徧く諸人に告げらく、「卻後七日天當に雨を降すべし」と。時竟りて雨らず。後「牸牛

【四四】第二に其爾結を答ふ。之に二段ありて初に先づ慈悲心無しと結するを答ふる中又二段あり。初に正答、次に料簡。正答の中に又三段ありて初に法。
【四五】次に譬。
【四六】次に合。
【四七】第二に料簡。之に問、答の二段ありて初に問。
【四八】次に佛答。之に二段ありて初に正しく答ふ。
【四九】次に昔を引いて實を顯す

當に白癩を生ずべし」と記す。其の產する時に及びて乃ち駮犢を產す。男を生ずと記する者、後女を生ずるが如し。(五〇)善男子、善星比丘常に無量の諸の衆生等の爲に、一切善惡の果無しと宣說す。爾の時に永く一切の善根を斷じて、乃至毛髮許りの如き有ること無し。善男子、我久しく是の善星比丘當に善根を斷ずべきを知れども、猶故共住し、二十年を滿じて畜養共行す。我若遠く棄てて左右に近かざれば、是の人は當に無量の衆生を教へて惡業を造作すべし。是を如來の第五解力と名く。」

(五一)『世尊、一闡提の輩は何の因緣を以てか善法有ること無き。』(五二)『善男子、一闡提の輩は善根を斷ずるが故なり。(五三)衆生悉く信等の五根有り、而も一闡提の輩は永く斷滅するが故なり。是の義を以ての故に、螘子を殺害するは、猶殺罪を得、一闡提を殺すは殺罪有ること無し。』

(五四)『世尊、一闡提は終に善法無し、是の故に名けて一闡提と爲すや。』(五五)佛の言はく、『是の如く是の如し。』

(五六)『世尊、一切衆生に三種の善有り。過去、未來、現在なり。一闡提の輩も亦未來の善法を斷ずること能はず、云何ぞ說きて諸の善法を斷ずる

---

【五〇】第二に後の方便無きの結を答ふ。

【五一】是より第二に斷善の相を明す。之に三段あり、其中初に正しく斷善。之に五番の問答あり、初に初番中先の問。

【五二】次に佛答。文の中善根を斷ずに就て兩解あり。一に云く曾て善を作し、後惡友に遇つて此の善を斷ず。二に云く、向時惡を作して全く未だ善あらず、後惡業將に滅し、善業生ぜんとして復た障を起す、故に善起らず。

【五三】衆生信等の五根あり等に就て相承の說には衆生は理內の故に五根あり、闡提理外の故に無しといふ。章安此說を斥け、理外も亦た信等あり、闡提既に是れ理外、惡を起して此の五根を斷ず。義として闡提當す五根ありと說くべしと。

を一闡提と名くと言はん。』

(五七)『善男子、斷に二種有り。一つには現在滅、二つには現在未來を障ふ。一闡提の輩は是の二斷を具す。是の故に我諸の善根を斷ずと言ふ。善男子、譬へば人有りて圊廁の中に沒し、唯一髮毛頭の未だ沒せざる有り。復一髮毛頭の未だ沒せずと雖も、而も一毛頭の身に勝ること能はざるが如く、一闡提の輩も亦復是の如し。未來世に當に善根有るべしと雖も、而も地獄の苦を救ふこと能はず、未來の世救拔すべしと雖も、現在の世は之を如何ともすること無し。是の故に名けて救濟すべからずと爲す。佛性の因緣を以てせば則ち救ふことを得べし。佛性は過去に非ず、未來に非ず、現在に非ず。是の故に佛性は斷ずることを得べからず。朽敗子の芽を生ずること能はざるが如く、一闡提の輩も亦復是の如し。』

(五八)『世尊、一闡提の輩佛性を斷せず。佛性も亦善、云何ぞ說きて一切の善を斷ずと言はんや。』(五九)『善男子、若し諸の衆生、現在世の中に佛性有らば、則ち一闡提と名くることを得ざるなり。(六〇)世間の中衆生の我性の如し。佛性は是常、三世攝せず。三世若し攝せば名けて無常と爲す。佛性は未

【五四】次に第二番の問答。初に問。

【五五】次に佛答。

【五六】次に第三番の問答。初に問。

【五七】次に佛答。

【五八】次に第四番の問答。初に問。

【五九】次に佛答。

【六〇】世間の中の衆生の我性に就て三說あり。第一は我性とは外道の我を借りて云ふ、佛て邪我なし。故に三世に攝せず、眞我は是れ常、三世の攝に非ずといふ。第二は是れ世間衆生の我性即ち佛性を指す、是れ佛性の故に三世の攝に非ずと。第三は即ち是れ眞我なり、語勢牽いて佛性是れ常とならしむと。

【六一】次に第五番の問答。初に問。之に二段ありて初に佛性を問ふ。

來當見を以ての故に、故に衆生悉く佛性有りと言ふ。是の義を以ての故に、十住の菩薩具足莊嚴して乃ち少しく見ることを得。』

（六一）迦葉菩薩の言さく、『世尊、佛性とは常なり、猶し虛空の如し、何が故ぞ如來說きて未來と言ふ。（六二）如來若一闡提の輩善法無しと言はば、一闡提の輩は其の同學、同師、父母、親族、妻子に於て、豈當に愛念の心を生ぜざるべきや。如其生ぜば是善に非ずや。』（六三）佛の言はく、『善い哉善い哉善男子、快く斯の問を發す。佛性とは猶し虛空の如し、過去に非ず、未來に非ず、現在に非ず。一切衆生三種の身有り、所謂過去、未來、現在なり。衆生未來に清淨の身を具足し莊嚴して佛性を得、是の故に我佛性は未來と言ふ。善男子、我衆生の爲に、或時に因を說きて果と爲し、或時に果を說きて因と爲す。是の故に經中に命を說きて食と爲し、色を見て觸と名く。未來身淨なり、故に佛性と說く。』

（六四）『世尊、佛の所說の如く義是の如くならば、何が故ぞ說きて、「一切衆生悉く佛性有り」と言ふ。』

『善男子、衆生の佛性現在無しと雖も無しと言ふべからず、虛空の性現在する無しと雖も、無しと言ふを得ざるが如し。一切衆生復無常と雖も、而も是の佛性は常住にして變ずること無し。是の故に我此の經中に於て、「衆生の佛性は內に非ず外に非ず、猶し虛空の非內非外の如し」と說く。如其虛空に內

【六二】次に闡提を問ふ。

【六三】第二に答。之に初問を答へ、次に次問を答ふの二段あり。初問を答ふる中又二段あり、初に問を答へ、次に論義。初の問を答ふる中に歎問、正答の二段あり。

【六四】次に論義。之に問、答の二段あり。

外有らば、虚空を名けて一と爲し常と爲さず、亦一切處に有りと言ふことを得ず。虚空は復内に非ず外に非ずと雖も、而も諸の衆生悉く皆之有り。衆生の佛性も亦復是の如し。(六五)汝が言ふ所の如き、一闡提の輩善法有りとは、是の義然らず。(六六)何を以ての故に。一闡提の輩若し身業、口業、意業、(六七)取業、求業、施業、解業有らば、是の如き等の業悉く是邪業なり。何を以ての故に。因果を求めざるが故なり。(六八)善男子、訶梨勒果の根莖、枝葉、華實悉く苦きが如く、一闡提の業も亦復是の如し。(六九)善男子、如來は知諸根力を具足したまへり、是の故に善能く衆生の上、中、下根を分別す。能く是の人(七〇)下を轉じて中と作すを知り、(七一)能く是の人中を轉じて上と作すを知り、能く是の人上を轉じて中と作すを知り、能く是の人中を轉じて下と作すを知る。(七二)是の故に當に知るべし、衆生の根性決定有ること無し。(七三)定ること無きを以ての故に、或は善根を斷じ、斷じ已りて還つて生ず。(七四)若し諸の衆生の根性定らば、終に先に斷じ、斷じ已りて復生ぜず。亦一闡提の輩地獄に墮し、壽命一劫と説くべからず。(七五)善男子、是の故に如來一切の法定相有ること無しと説きたまへり。」

【六五】第二に次の問を答ふ。之に二段ありて初に問を牒して之を非す。

【六六】次に正しく答ふ。之に法譬、合の三段あり。

【六七】取業、求業とは善に翻對す。善い行はるるに二個の條件あり、先に起る善欲を以て取業に對し、次に生ずる善思を以て求業に對す。是れ等の業は並びに皆無記性なり。

【六八】一闡提の徒重罪邪業なるを喩示す。然るに前に闡提も猶ほ憐愛の善ありといふ、是れ會通の要ある所以なり。之に就て三説あり。第一に莊嚴會して曰く、出世の善なきも、世間憐愛の善のみありと。第二に光宅は曰く、設ひ憐愛あるも並びに無記、善性と名けざると棊書の工巧無記に屬するが如しと。第三に開善は曰

(七六)迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、如來知諸根力を具足して、定んで善星當に善根を斷ずべきを知る。何の因縁を以てか其が出家を聽すや。』(七七)佛の言はく、『善男子、我往昔に於て初め出家の時、吾が弟難陀、從弟阿難、提婆達多、子羅睺羅、是の如き等の輩皆悉く我に隨ひて出家して道を修す。我若善星が出家を聽さざれば、其の人次に當に王位を紹ぐことを得べく、其の力自在にして當に佛法を壞すべし。是の因縁を以て我便ち其が出家修道を聽せり。(七八)善男子、善星比丘若は出家せざるも、亦善根を斷じて無量世に於て都て利益無けん。今出家し已りて善根を斷ずと雖も、能く戒を受持し、耆舊、長宿、有徳の人を供養恭敬し、初禪乃至四禪を修習す、是を善因と名く。是の如き善因は能く善法を生ず。善法既に生ずれば能く道を修習す。既に道を修習すれば、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。是の故に我善星が出家を聽す。(七九)善男子、若我善星比丘が出家受戒を聽さざれば、則ち我を稱して如來十力

く、設ひ轉變あるも、既に善を斷じて惡を作す、並びに惡邪に屬するが故に何ぞ善あるを得んや。觀師亦開善に同じて、重惡身に居る、苦獄を種うるに根業悉く苦なるが如しと。

【六九】次に第二に根性不定の故に善を斷ずるを明す。之に正しく不定を明し、問答論義するの二段あり。初め正しく不定を明す中、又二段ありて初に不定。之に三段ありて先づ不定の根を知る。

【七〇】熏習の者は利にして下を轉じて中上と爲し、不習の者は鈍にして上を轉じて中下と爲す。

【七一】次に不定の相。

【七二】次に不定を結す。

【七三】第二に善業を斷ず。之に三段ありて初に不定善を斷ず。

【七四】次に若定ならば斷らず。

【七五】次に不定を證す。

【七六】次に第二に問答論義。之に問、答の二段ありて初に問。

【七七】次に佛答。之に二段あり、其中初に善星に就て答ふ。之に又三段ありて初に其れ王位に居らば卽ち能く破滅せん。

【七八】次に出家不出家倶に能く善を斷ず。

【七九】次に知根力を結す。

を具足すと爲すことを得ず。(八〇)善男子、佛衆生は善法及び不善法を具足するを觀ず。是の人是の如き二法を具すと雖も、久しからずして能く一切の善根を斷じ、不善根を具す。(八一)何を以ての故に。是の如き衆生善友に親近せず、正法を聽かず、善思惟せず、法の如く行ぜず。(八二)是の因縁を以て能く善根を斷じ不善根を具す。(八三)善男子、如來復是の人現世、若は未來世少、壯、老の時、當に善友に近き、正法、苦、集、滅、道を聽受すべし。爾の時に則ち能く還つて善根を生ずるを知る。(八四)善男子、譬へば泉有り村を去ること遠からず、其の水甘美にして八功德を具す。人有り熱渴して泉所に往かんと欲す。邊に智者有り、是の渴人必定疑無し、當に水所に至るべし。何を以ての故に。異路無きが故なりと觀ずるが如し。(八五)如來世尊、諸の衆生を觀ずることも亦復是の如し、是の故に如來を名けて知諸根力を具足すと爲す。』

(八六)爾の時に世尊地の少土を取りて之を爪上に置き、迦葉に告げて言はく、『是の土多きや、十方世界の地の土多きや。』(八七)迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、爪上の土は、十方の所有の土に比せざるなり。』(八八)『善男子、人身を捨てて還つて人身を得、三惡の身を捨てて人身を受くることを得、

【八〇】第二に餘人に就て答ふ。之に不定、昇沈の二段あり、初の不定の中又二段あり、其中初に善を斷ず。之に三段ありて先づ正しく善を斷す。
【八一】次に斷善の行。
【八二】次に斷善を結す。
【八三】次に生善を明す。之に三段ありて初に法。
【八四】次に譬。この中泉は佛性、村は陰身、熱渴は菩適、欲往は求樂心、邊智者は佛菩薩を譬ふ。
【八五】次に合。之に合、知根力を結すの二段あり。
【八六】第二に昇沈。之に三段ありて初に事を以て問ふ。
【八七】次に旨を領して奉答す。
【八八】次に合。これに三段あり

諸根完具して中國に生じ、正信を具足し能く道を修習し、道を修習し已りて能く正道を修し、正道を修し已りて能く解脱を得、解脱を得已りて能く涅槃に入る有るは、爪上の土の如く、人身を捨て已りて三惡の身を得、三惡の身を捨てて三惡の身を得、身根具せず、邊地に生じ、邪倒の見を信じ、邪道を修習し、解脱、常樂涅槃を得ざるは、十方界の所有の地土の如し。

(八九)善男子、禁戒を護持して精勤して懈らず、四重を犯さず、五逆を作さず、僧祇物を用ひず、一闡提と作らず、善根を斷せず。是の如き等の涅槃の經典を信ずるは爪上の土の如し。毀戒懈怠、四重禁を犯し、五逆罪を作り、僧祇物を用ひ、一闡提と作り、諸の善根を斷じ、是の經を信ぜざるは十方界の所有の地土の如し。

(九〇)善男子、如來は善く衆生の是の如き上、中、下根を知りたまふ。是の故に佛は知根力を具すと稱す。』

(九一)迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、如來は是の知根力を具足す。是の故に能く一切衆生の上、中、下根の利鈍の差別を知り、現在世の衆生の諸根を知り、亦未來の衆生の諸根を知りたまふ。(九二)是の如き衆生、佛の滅後に於て是の如きの說を作さく、「如來畢竟じて涅槃に入り、或は畢竟じて涅槃に入りたまはず。」或は有我と說き、或は無我と說く。或は中陰有り、或は中陰無し。或は有退と說き、

て初に果に就て合す。

【八九】次に因に就て合す。

【九〇】次に知根力を結す。

【九一】是より第三に說數不定の故に善を斷す。之に問、答の二段あり。初の問の中に又三段ありて初に知根。

【九二】次に說諍。聞書此の說諍を綜括して二十諍論とし、治域は二十一諍論とす。

或は無退と説く。或は如來身は是有爲と言ひ、或は如來身は是無爲と言ふ。或は説きて十二因緣は是有爲法と言ふ有り、或は因緣は是無爲法と説く。或は心は是有常と説き、或は心は是無常と説く。或は説きて、五欲の樂を受くれば能く聖道を障ふと言ふ有り。或は不遮と説き、或は世第一法は唯是欲界と説き、或は三界と説き、或は布施は唯是意業と説く。或は説きて、即ち是五陰と言ふ有り、或は説きて、三無爲有りと言ふ有り。或は説きて、三無爲無しと言ふ有り。復説きて、或は造色有りと言ふ有り。復説きて、或は造色無しと言ふ有り。或は説きて、無作色有りと言ふ有り、或は説きて、無作色無しと言ふ有り。或は説きて、心數法有りと言ふ有り、或は説きて、心數法無しと言ふ有り。或は説きて、五種の有有りと言ふ有り。或は説きて、六種の有有りと言ふ有り。或は説きて、八戒齋法、優婆塞戒具足して受くれば得と言ふ有り、或は説きて、具さに受けずして得と言ふ有り。或は比丘四重を犯し已りて比丘戒有りと説き、或は有らずと説く。或は説きて、須陀洹の人、斯陀含の人、阿那含の人、阿羅漢の人皆佛道を得と言ふ有り、或は得ずと言ふ。或は佛性衆生に即して有りと説き、或は佛性衆生を離れて有りと説く。或は説きて、四重禁を犯し、五逆罪を作り、一闡提等皆佛性有りと言ふ有り、或は説きて無しと言ふ。或は説きて、十方佛有りと言ふ有り、或は説きて、十方佛無しと言ふあらん。〔九一〕如其如來知根力を具足し成就せば、何が故ぞ今日決定して説かざるや。」

【九三】次に問の結。

(九四)佛迦葉に告げたまはく、「善男子、是の如きの義眼識の知るに非ず、乃至意識の知るに非ず。乃ち是智慧の能く知る所なり。(九五)若有智の者には、我是の人に於て終に二つと作さず、是亦我二說を作さずと謂ふ。(九六)無智の者に於て不定說を作し、是の無智も亦復我不定の說を作すと謂ふ。(九七)善男子、如來の所有の一切善行は、悉く諸の衆生を調伏せんが爲の故なり。(九八)譬へば醫王所有の醫方は、悉く一切の病苦を療治するが爲なるが如し。(九九)善男子、如來世尊(一〇〇)國土の爲の故に、時節の爲の故に、他語の爲の故に、爲人の故に、衆根の爲の故に。一法の中に於て二種の說を作す。(一〇一)一名の法に於て無量の名を說き。一義の中に於て無量の名を說き、無量の義に於て無量の名を說きたまふ。(一〇二)云何が一名無量の

【九四】是より第二に佛具さに三問を答ふ。此卷內に前の兩問を答へ、後の卷の初に第三問を答ふ。初を答ふるに二段ありて初には正しく說教不定を明し、次には廣く不定の法を明す。初の說教不定を明す中に又三段ありて初に理深くして解し難し。

【九五】次に愚智の兩人を出す。之に二段ありて初に智。

【九六】次に愚。

【九七】次に不定に說くことを須ふ。之に三段ありて初に法、

【九八】次に譬。

【九九】次に合。

【一〇〇】國土時節他語爲人・國土とは譬へば多衆國には[illegible]用ゐ、[illegible]が如し、時節とは[illegible]の時を以て唯だ[illegible]、他語とは[illegible]、[illegible]には不見と言ひ、十住は少見と言ふ如し、爲人とは人の根性に隨ふが如し。是くの如く種種の義ありて一種なる可らず。

【一〇一】第二に廣く不定の法を明す。之に三段あり、其中初に正しく不定の法を明す。之に名義、[illegible]の二不定あり。初の名義不定の中又二段ありて先づ章門を列す。此に三句を列せるも、具さには六句あり。即ち一名對無量名、一義對無量名、無量義對一名、一名、[illegible]名、無量名對無量義なり。今文略して一邊を舉ぐ。

【一〇二】次に解釋。之に三章門を釋すと、重ねて第二門を釋するとの二段あり。初の三章門を釋する中又三段、初に涅槃の一名衆名を具含するを釋す。大亮曰く涅槃は八味の都名、

名を說く。猶し涅槃も亦涅槃と名け、亦無生と名け、亦無出と名け、亦無作と名け、亦無爲と名け、亦歸依と名け、亦窟宅と名け、亦解脫と名け、亦光明と名け、亦燈明と名け、亦彼岸と名け、亦無畏と名け、亦無退と名け、亦安處と名け、亦寂靜と名け、亦無相と名け、亦無二と名け、亦一行と名け、亦清涼と名け、亦無闇と名け、亦無礙と名け、亦無諍と名け、亦無濁と名け、亦廣大と名け、亦甘露と名け、亦吉祥と名くるが如し。是を一名無量の名を作すと名く。(一〇三)云何が一義無量の名を說く。猶し帝釋の亦帝釋と名け、亦憍尸迦と名け、亦(一〇四)婆蹉婆と名け、亦富蘭陀羅と名け、亦(一〇五)摩佉婆と名け、亦(一〇六)因陀羅と名け、亦千眼と名け、亦(一〇七)舍脂夫と名け、亦金剛と名け、亦寶頂と名け、亦寶幢と名くるが如し。是を一義無量の名を說くと名く。(一〇八)云何が無量の義に於て無量の名を說く。佛如來の如し、名けて如來と爲す、義異に名異なり。亦(一〇九)阿羅訶と名く、義異に名異なり。亦三藐三佛陀と名く、義異に名異なり。亦船師と名け、亦導師と名け、亦正覺と名け、亦明行足と名け、亦大師子王と名け、亦沙門と名け、亦婆羅門と名け、亦寂靜と名け、亦施主と名け、亦到彼岸と名け、亦大醫王と名け、亦大象王と名け、亦大龍王と名け、亦施眼と名け、亦

---

衆徳の總稱と。

【一〇三】次に一義の無量名を說くを釋す。憍尸迦已下の諸皆帝釋の異名なり。

【一〇四】婆蹉婆(Vāsava)。梵文には衣と譯す。有說には財寶神と譯せり。富蘭陀羅(Purandara)は、破家又は壞邑と譯す。

【一〇五】摩佉婆(Maghavat)。自在と譯す。

【一〇六】因陀羅(Indra)。帝釋と譯す。

【一〇七】舍脂(Śacī)。樂供と譯す。

【一〇八】次に無量義の無量名を說くを釋す。

【一〇九】阿羅訶(Arhat)。應又は應供と譯し、普通羅漢と略稱す。

大力士と名け、亦大無畏と名け、亦寶聚と名け、亦商主と名け、亦得脱と名け、亦大丈夫と名け、亦天人師と名け、亦（二〇）芬陀利と名け、亦獨無等侶と名け、亦大福田と名け、亦大智慧海と名け、亦無相と名け、亦具足（二一）八智と名く。是の如き一切の義異に名異なり。是を無量義の中無量の名を說くと名く。（二二）復一義無量の名を說く有り。所謂陰の如きは亦名けて（二三）陰と爲し、亦顚倒と名け、亦名けて諦と爲し、亦名けて四念處と爲し、亦四食と名け、亦四識住處と名け、亦名けて有と爲し、亦名けて道と爲し、亦名けて時と爲し、亦衆生と名け、亦名けて世と爲し、亦第一義と名け、亦三修と名け、身戒心と謂ふ。亦因果と名け、亦煩惱と名け、亦解脱と名け、亦十二因緣と名け、亦聲聞、辟支佛と名け、亦地獄、餓鬼、畜生、人天と名け、亦過去、現在、未來と名く。是を一義無量の名を說くと名く。

【二〇】芬陀利（Puṇḍarīka）。白蓮華と譯す。

【二一】八智に就て三說あり。一に常等と無常等との八。二に四諦に各法と比とあり、八を成す。數人は横に欲界に法を論じ、色無色に比を論ず。論人は之に反し、縦に現在に法を論じ、過未に比を論す。三に優婆塞戒經に八智あり、七智は上の梵行品七善法の下に出づ、第八は即ち知根なり。

【二二】第二に重ねて第二門を釋す。第一門は善の義に就て無量の名あるを示すも、名皆に通ぜず、今斯の意を顯さんが爲めに重ねて五陰に約す。

【二三】陰と爲し、亦た顚倒と名くる。陰は是れ有漏の故に顚倒す、陰は又た苦諦の境、念處の所觀となる。所謂色は不淨、受は苦想、行は無我、識は無常なれば陰を四念處と名く。但だ色識を除ける餘の四陰は識の住處なり。又陰は内外に通ず、故に四食と名く。陰能く通ず、故に道といふ。實法に因て假名の時あり、故に時となす。陰の體即ち無相なる故に第一義と名く。三修とは身戒心を總稱す。正しく行陰に在りて煩惱と名け、有爲解脱に就て解脱と名く。陰を以て因緣の體と爲す、故に十二因緣と名け、陰能く三乘の身を成す、故に亦た三乘と名く。餘は皆準じて知るべし。

（二四）善男子、如來世尊衆生の爲の故に廣の中に略を說き、略の中に廣を說く。第一義諦を說きて世諦と爲し、世諦の法を說きて第一義諦と爲す。（二五）云何が名けて廣中略を說くと爲す。比丘に告ぐるが如し、「我今十二因緣を宣說せん。云何が名けて十二因緣と爲す。所謂因果なり」と。云何が名けて略中廣を說くと爲す。比丘に告ぐるが如し、「我今苦、集、滅、道を宣說せん。苦とは所謂無量の諸苦なり、集とは所謂無量の煩惱なり、滅とは所謂無量の解脫なり、道とは所謂無量の方便なり」と。云何が名けて第一義諦を說きて世諦と爲すと爲す。比丘に告ぐるが如し、「吾が今此の身老、病、死有り」と。云何が名けて世諦を說きて第一義諦と爲すと爲す。憍陳如に告ぐるが如し、「汝法を得るが故に阿若憍陳如と名く。」（二六）是の故に人に隨ひ、意に隨ひ、時に隨ふ、故に如來の知諸根力と名く。（二七）善男子、我若當に是の如き等の義に於て定說を作すべしとせば、則ち我を稱して如來知根力を具すと爲すことを得ず。善男子、有智の人は當に知るべし、香象の負ふ所驢の勝る所に非ず。一切衆生所行無量なり。是の故に如來種種爲に無量の法を說きたまふ。（二八）何を以ての故に。衆生多く諸の煩惱有るが故に。若如來をして一行を說かしめば、如來知諸根力を具足し成就すと名けず。是の故に我餘經の中に於て說かく、「五種の衆生還つて爲に五種の法を說くべからず、不信者の爲に正信を讚せず、

【二四】次に第二に廣略不定を明す。之に二段ありて初に四章門。
【二五】次に釋出。
【二六】次に結。之に二段ありて初に不定の結。
【二七】次に知根の結。之に二段ありて初に佛智は淺識の知る所に非ず。
【二八】次に人の爲に不定なり。

毀禁者の爲に持戒を讃せず、慳貪者の爲に布施を讃せず、懈怠者の爲に多聞を讃せず、愚癡者の爲に智慧を讃せず。何を以ての故に。智者若是の五種の人の爲に是の五事を說かば、當に知るべし、說者諸根力を具足することを得ず。亦衆生を憐愍すと名くることを得ず。何を以ての故に。是の五種の人是の事を聞き已りて、不信の心、惡心、瞋心を生じ、是の因緣を以て無量世に於て苦果報を受けん、是の故に衆生を憐愍し、知根力を具すと名けず。（二九）是の故に我先に餘經の中に於て舍利弗に告ぐ、汝愼んで利根の人の爲に廣く法語を說き、鈍根の人に略して法を說くこと勿れ。舍利弗の言さく、「世尊、我但憐愍の爲の故に說く、是根力を具足するが故に說くに非ず。」（三〇）善男子、廣略の說法是佛の境界なり。諸の聲聞、緣覺の知る所に非ず。（三一）善男子、汝が言ふ所の如き、佛涅槃の後諸の弟子等各異說すとは、是の人皆顛倒の因緣を以て正見を得ず、是の故に自ら利し他を利すること能はず。善男子、是の諸の衆生、唯一性、一根、一行、一國土、一善知識に非ず、是の故に如來彼が爲に種種法要を宣說す。是の因緣を以て十方三世の諸佛如來、衆生の爲の故に十二部經を開示演說す。善男子、如來是の十二部經を說きたまふ、自利の爲に非ず、但利他の爲にす。是の故に如來の（三二）第五力は、名けて解力と爲す。是の二力の故に、如來深く是の人現在能く善根を斷じ、是の人後

【二九】第二に引證。
【三〇】第三に二乘の知る所に非ざるを結す。
【三一】是より第二に難詰の問に答ふ。之に略、廣の二答あり。初に略答。
【三二】第五力とは第五の解力と名く、是れ衆生の欲解の法を知る。二力とは第四の根力と、第五の解力とを云ふ。

世能く善根を斷じ、是の人現在能く解脫を得、是の人後世能く解脫を得るを知らん、是の故に如來を無上力士と名く。(二三)善男子、若如來(二四)畢竟涅槃す、畢竟涅槃せずと言はば、是の人如來の意を解せざるが故に、是の如きの說を作す。(二五)善男子、是の香山の中諸の仙人五萬三千有り、皆過去迦葉佛の所に於て諸の功德を修す。未だ正道を得ず、諸佛に親近し、正法を聽受せり。如來是等の人の爲にせんと欲するが故に、阿難に告げて「三月を過ぎ已りて吾當に涅槃すべし」と言ふ。諸天聞き已りて其の聲展轉して乃ち香山に至る。諸仙聞き已りて卽ち悔心を生じて是の如きの言を作さく「云何ぞ我等人中に生ずることを得て佛に親近せざる。諸佛如來は出世甚だ難きこと優曇華の如し。我今當に往いて世尊の所に至りて正法を聽受すべし。」善男子、爾の時に五萬三千の諸仙卽ち我が所に來る。我時に卽ち爲に應の如く法を說かく「諸大士、色は是無常なり。何を以ての故に。色の因緣は是無常の故に。無常の因より生ず、色云何ぞ常ならん。乃至識も亦是の如し」。爾の時に諸仙是の法を聞き已りて、卽時に阿羅漢果を獲得す。(二六)善男子、拘尸那竭(羅城)に諸力士三十萬人有り。繫屬する所無く、

【二三】次に眞善に佛意に趣きて畢竟するに寂中歸せずして諍論を成すことを歎す。凡そ二十一段あり、この中第一の諍論、涅槃不涅槃を明す。之に二段ありて初に章門。

【二四】畢竟涅槃不畢竟涅槃。婆多は事に約りて畢竟涅槃を指し、曇無德及び僧祇は理に約りて不畢竟涅槃を明す。古來此の兩說を評して、婆多は非にして短、曇無德は是にして長と云ふ。されど並びに佛意を失す。河西云く、畢竟は是れ斷、不畢竟は是れ常と。斷常と言ふは豈是れ斷常ならんや、乃ち是れ非斷非常能斷能常なり、斷を言ひて常に違はず、常を言ひて斷に違はず、斷常相違せず、斷常俱に圓通す。觀師云く、佛機に趣いて說く、何ぞ是非して佛意を失ふ事な

自ら恃んで憍恣、色力命財、狂醉亂心なり。善男子、我諸の力士を調伏するを爲ての故に、目連に告げて言はく、「汝當に是の如き力士を調伏すべし。」時に目犍連我が教を敬順して、五年中に於て種種教化するに、乃至一力士をして法を受け、調伏せしむること能はず。是の故に我復彼の力士の爲に、阿難に告げて「三月を過ぎ已りて吾當に涅槃すべし」と言ふ。善男子、時に諸の力士是の語を聞き已りて、相與に集聚して道路を平治す。三月を過ぎ已りて、我時に便ち毗舍離國より拘尸城に至り、中路遙かに諸の力士の輩を見る。即ち自ら身を化して沙門の像と爲り、力士の所に往いて是の如きの言を作さく、「諸の童子、何事を作すや。」力士聞き已りて皆瞋恨を生じて是の如きの言を作さく、「沙門、汝今云何ぞ我等の輩を謂つて童子と爲すや。」我時に語りて言はく、「汝等大衆三十萬人、其の身力を盡すも此の微小の石を移すこと能はじ、云何ぞ名けて童子と爲ざらんや。」諸の力士の言はく、「汝若我を謂つて童子と爲さば、當に知るべし、汝は即ち是大人ならん。」善男子、我爾の時に於て足の二指を以て此の石を擲出す。是の諸の力士是の事を見已りて、即ち己身に於て輕劣の想を生じ、復是の言を作さく、「沙門、汝今復能く此の石を移徙して道を出さしむるや不や。」我言はく、「童子、何の因緣の故に此の路を嚴治するや。」諸の力士の言はく、「沙門、汝知らずや、釋迦如來當に此の路に由り娑羅林に至りて涅槃に入りたまふべし。是の因

得んやと。

【三五】次に解釋。之に二段ありて初に定んで涅槃すと執するを釋す。之に釋、結の二段あり。初の釋中に又五段ありて先づ諸仙の爲にす。

【三六】次に力士の爲にす。

縁を以て我等平治す。」我時に讃じて言はく、「善い哉童子、汝等已に是の如き善心を發す、吾當に汝が爲に此の石を除去すべし。」我時に手を以て擧擲するに高く阿迦尼陀に至る。時に諸の力士石の空に在るを見て皆驚怖を生じ、尋いで四に散せんと欲す。我復告げて言はく、「諸の力士等、汝今恐怖心を生じて各散去せんと欲すべからず。」諸の力士の言はく、「沙門若能く我を救護せば、我當に安住すべし。」爾の時に我復手を以て石に接して之を右掌に置く。力士見已りて心に歡喜を生じて復是の言を作さく、「沙門、此の石は常なりや、是無常なりや。」我爾の時に於て口を以て之を吹くに、石即ち散壞すること猶し微塵の如し。力士見已りて唱へて言はく、「沙門、此の石無常なり。」即ち愧心を生じて自ら考責すらく、「云何ぞ我等自在色力、命財を恃怙みて憍慢を生ずる。」我其の心を知り、即ち化身を捨て本形に還復して爲に法を説く。力士見已りて一切皆菩提の心を發す。

(一三七) 善男子、拘尸那竭に一りの工巧有り、名を純陀と曰ふ。是の人先に迦葉佛の所に於て大誓願を發さく、「釋迦如來涅槃に入りたまふの時、我當に最後の飲食を奉施すべし。」是の故に我毘舍離國に於て比丘、(一三八) 優婆摩那に顧み命ず、「善男子、三月を過ぎ已りて吾當に彼の拘尸那竭娑羅雙樹に於て般涅槃に入るべし、汝往いて純陀に告げて知らしむべし。」

(一三九) 善男子、王舍城の中に五通仙有り、須跋陀と名く。年百二十、常に自ら是一切智人と稱し、大

【一三七】次に純陀の爲にす。
【一三八】優婆摩那(Upamāna)。喩晶と譯す、
【一三九】次に須跋の爲にす。須跋陀(Subhadra)は善賢と譯す。

憍慢を生ず。已に過去の無量の佛所に於て諸の善根を種う。我も亦彼を調伏せんと欲するが爲の故に阿難に告げて「三月を過ぎ已りて吾當に涅槃すべし」と言ふ。須跋聞き已りて當に我が所に來りて信敬の心を生ずべし。我當に彼が爲に種種の法を説くべし。其の人聞き已りて當に漏を盡すことを得べし。〔二三〇〕善男子、羅閱祇王頻婆娑羅、其の王の太子名を善見と曰ふ。業因緣の故に惡逆の心を生じ、其の父を害せんと欲するに便を得ず。爾の時に惡人提婆達多、亦過去の業因緣に因るが故に、復我が所に於て不善心を生じて我を害せんと欲す。即ち五通を修し久しからずして獲得す。善見太子と共に親厚を爲す。太子の爲の故に種種の神通の事を現作す。非門より出で門よりして入り、門よりして出で非門よりして入る。或時象馬、牛羊、男女の身を示現す。善見太子、見已りて即ち愛心、喜心、敬信の心を生ず。是の事の爲の故に種種の供養具を嚴設して之を供養す。又復白して言さく、「大師聖人、我今〔二三一〕曼陀羅華を見んと欲す。」時に提婆達多即便三十三天に往至し、彼の天人に從って之を求索す。其の福盡くるが故に都て與ふる者無し。既に華を得ず、是の思惟を作す、「曼陀羅樹は我我所無し。我若し自ら取る、當に何の罪か有るべき。」即ち前んで取らんと欲するに便ち神通を失し、還って己身王舍城に在るを見る。心に慚愧を生じて復善見太子に見ゆる能はず。復是の念を作す、「我今當に往いて如來の所に至り、大衆を求索すべし。佛若し聽したまはば、我當に意に隨ひ

【二三〇】次に闍王の事に[illegible]す。羅閱祇（Rājagṛha）は王舍城の梵名。善見（Sudarśana）は阿闍世王の幼名。
【二三一】曼陀羅（Mandārava）は天華と譯す。

て舍利弗等を教詔教使すべし。」爾の時に提婆達多便ち我が所に來りて是の如きの言を作す、「唯願はくは如來、此の大衆を以て我に付囑したまへ、我當に種種說法教化して其をして調伏せしむべし。」我言ふ「癡人、舍利弗等の聰明大智にして世の信伏する所、我猶大衆を以て付囑せず、況や汝癡人唾を食する者をや。」時に提婆達多復我が所に於て、倍惡心を生じて是の如きの言を作す、「瞿曇、汝今復大衆を調伏すと雖も、勢亦久しからずして當に磨滅を見るべし。」是の語を作し已るに、大地即時に六反震動す。提婆達多尋時に地に躃き、其の身邊に於て大暴風を出し、諸の塵土を吹きて之を汙坌す。提婆達多惡相を見已りて復是の言を作す、「若我が此の身現世に必ず阿鼻地獄に入らば、我要ず當に是の如きの大怨を報ずべし。」時に提婆達多尋いで起ちて善見太子の所に往至す。善見見已りて即ち問ふ、「聖人何が故ぞ顏容憔悴し憂色有るや。」提婆達の言はく、「我常に是の如し、汝知らざるか。」善見答へて言はく、「願はくは其の意を說け、何の因緣もて爾るや。」提婆達の言はく、「我今汝と極めて親愛を成す。外人汝を罵り以て非理と爲す。我是の事を聞く、豈憂へざるを得んや。」善見太子復是の言を作さく、「國人云何が我を罵辱する。」提婆達言はく、「國人汝を罵りて未生怨と爲す。」善見復言はく、「何が故ぞ我を名けて未生怨と爲す、誰か此の名を作す。」提婆達の言はく、「汝未生の時一切の相師皆是の言を作さく、是の兒生じ已りて當に其の父を殺すべしと。是の故に外人皆悉く汝を號して未生怨と爲す。一切の內人汝が心を護るが故に謂つて善見と爲すと。(三二)毗

【三二】毗提は具さに毗提希(Vaidehī)。普通韋提希と書き、思

提夫人是の語を聞き已りて、既に汝が身を生じて高樓の上に於て之を地に棄て、汝が一指を壞す。是の因緣を以て人復汝を號して（一三）婆羅留枝と爲す。我是を聞き已りて心に愁憒を生ずれども、而も復汝に向ひて之を說く能はず。提婆達多是の如き等の種種の惡事を以て敎へて父を殺さしむ。若し汝が父死せば、我も亦能く瞿曇沙門を殺さん。」善見太子一りの大臣の名を雨行と曰ふに問はく、「大臣何が故ぞ我が爲に字を立てて未生怨と作す。」大臣即ち爲に其の本末を說き、提婆達の所說の如く異なる無し。善見聞き已りて即ち大臣と共に父王を收めて之を城外に閉ぢ、四種の兵を以て之を守衛す。韋提夫人是の事を聞き已りて即ち王の所に至る。王を守る所の人遮りて入ることを聽さず。爾の時夫人瞋恚心を生じて便ち之を訶罵す。時に諸の守人即ち太子に告ぐらく、「大王、夫人父王を見んと欲す、不審し聽さんや不や。」善見聞き已りて復瞋嫌を生じ、即ち母の所に往き、前んで母の髮を牽き、刀を拔きて斫らんと欲す。爾の時耆婆白して言さく、「大王、國有りて已來罪極重なりと雖も女人に及ばず、況や所生の母をや。」善見太子是の語を聞き已りて、耆婆の爲の故に即便放捨し、父王の衣服、臥具、飲食、湯藥を遮斷す。七日を過ぎ已りて王の命便ち終る。善見太子父の喪を見已りて方に悔心を生ず。雨行大臣復種種の惡邪の法を以て爲に之に說く、「大王、一切の業行都て罪有ること無し、何が故ぞ今者悔心を生ぜん。」耆婆復言はく、「大王、當に

惟と譯す。王舍城頻婆娑羅王の后妃なり。

【一三】婆羅留枝（Vararuci）。折指と譯す。本とボクラマ（Vikrama）王朝九官の名なるも語義に由りて阿闍世王の別名とす。またパーニニ（Pāṇini）の註師もバールチ（Vararuci）と云ひ、作者迦旃延と同一なりといふ。

知るべし。是の如きの業に罪二重を兼ぬ。一つには父王を殺害し、二つには須陀洹を殺す。是の如きの罪は佛を除きて更に能く除滅する者無し。善見王の言はく、「如來淸淨にして穢濁有ること無し、我等罪人云何ぞ見ることを得ん。善男子、我是の事を知るが故に阿難に告ぐ、「三月を過ぎ已りて吾當に涅槃すべし」と。善見聞き已りて卽ち我が所に來る。我爲に法を說き、重罪薄きことを得て無根信を獲。(二三四)善男子、我が諸の弟子、是の說を聞き已りて、我が意を解せざるが故に是の言を作さく、「如來定んで畢竟じて涅槃すと說く」と。

(二三五)善男子、菩薩に二種あり。一つには實義、二つには假名なり。假名の菩薩、我が三月當に涅槃に入るべしといふを聞き、皆退心を生じて是の言を作さく、「如其如來無常にして住せざれば、我等何爲ぞ是の事の爲の故に、無量世の中大苦惱を受けん。如來世尊無量の功德を成就し具足する、尙是の如き死魔を壞すること能はず。況や我等が輩當に能く壞すべきや。」善男子、是の故に我是の如き菩薩の爲に是の言を作さく、「如來常住にして變易有ること無し」と。(二三六)善男子、我が諸の弟子是の說を聞き已りて、我が意を解せずして、「定んで如來終に畢竟じて涅槃に入らず」と言ふ。

(二三七)善男子、諸の衆生斷見を生じて是の如きの言を作す有り、「一切衆生身滅の後、善惡の業受くる

【二三四】第二に總結。
【二三五】次に第二に定んで涅槃せずと執するを釋す。之に二段ありて初に釋。
【二三六】次に結。
【二三七】次に第二の計常、有我無我。之に有我、無我の二段あり。初の有我中又二段ありて初に相續假我を以て斷見の無我を破す。

者有ること無し」と。我是の人の爲に是の如きの言を作さく、「善惡の果報實に受くる者有り。云何が有と知る。善男子、過去の世拘子那竭に王有りて名を善見と曰ふ。童子と作るの時八萬四千歳を經、太子と作るの時八萬四千歳、王位に登るに及んで亦八萬四千歳なり。獨處に於て坐して是の思惟を作す、「衆生薄福にして壽命短促なり。常に四怨有りて之に隨逐すれども自ら覺知せずして猶故放逸す。是の故に我當に出家し道を修して四怨、生老病死を斷絕すべし。」即ち有司に勅して其の城外に於て七寶の堂を作る。作り已りて便ち羣臣、百官、宮內妃后、諸子眷屬に告ぐ、「汝等當に知るべし我出家せんと欲す、能く聽かるるや不や。」爾の時に大臣及び其の眷屬各是の言を作さく、「善い哉大王、今正に是時なり。」時に善見王一りの使人を將ゐて獨堂上に往き、復八萬四千年を經て慈心を修習す。是の慈の因緣、後の八萬四千世に於て次第に轉輪聖王と作ることを得。三十世の中に釋提桓因と作り、無量世の中に諸小王と作る。善男子、爾の時の善見豈異人ならんや、斯の觀を作すこと莫れ。即ち我が身是なり。」「善男子、我が諸の弟子是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來定んで我有り及び我所有りと說く」と言ふ。（二三八）又我一時諸の衆生の爲めに說きて言ふ、（二三九）「我とは即ち是性なり、所謂內外の因緣、十二因緣、衆生五陰、心界世間（二四〇）、功德業行、自在天世、即ち名け

【二三八】次に因成我。之に二段ありて初に正しく因成。

【二三九】我とは即ち是れ性に就て舊に二解あり。一に云く、是れ佛當の性、前文に二十五有我あるの者とい[illegible]ふを引[illegible]二に云く、[illegible]假名の[illegible]我性[illegible]性は即ち[illegible]體は即ち因成[illegible]因成是[illegible]用なり[illegible]內外の十二因緣[illegible]

て我と爲す。」我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來定んで我有りと說く」と言ふ。(一四一)善男子、復異時に於て一比丘有り、我が所に來至して是の如きの言を作さく「世尊、云何が我と名くるや、誰か是我なるや。何の緣の故に我なるや。」(一四二)我時に卽ち比丘の爲に說きて言はく「比丘我我所無し。眼とは卽ち是本無今有、已有還無なり。其の生ずるの時從ひ來る所無く、其の滅する時に及んで亦至る所無し。業果有りと雖も作者有ること無く、陰を捨て及び陰を受くる者有ること無し。(一四三)汝が問ふ所の如く、云何が我とは、(一四四)我は卽ち期なり。誰か是我とは、卽ち是(一四五)業なり。何の緣にして我とは、卽ち是愛なり。(一四六)比丘、譬へば二手相拍ちて聲其の中より出づるが如く、我も亦是の如し、衆生、業、愛の三因緣の故に之を名けて我と爲す。(一四七)比丘、一切衆生色は是我ならず、我の中に色無く、色の中に我無く、乃至識も亦是の如し。(一四八)比丘、諸の外道の輩我有りと說くと雖も、終に(一四九)陰を離れず、若陰を離れて別に我有りと說かば、是の處有ること無し。(一五〇)一切衆生の行は幻化、熱時の燄の如し。比丘、五陰は皆是無常、無樂、無我、無淨なり。」(一五一)善男子、爾



は、內は四陰、外は四大、十二因緣は色心の總名、衆生とは假名の性、此等に由りて身を集成す、卽ち因成假たる所以なり。心界は五陰中の心王なり。

【一四一】次に因成の所成。

【一四二】第二に無我。之に佛說、起執の二段あり。初の佛說の中又三段ありて初に假問。之に問名、問體、問我の三段あり。

【一四三】次に假答。之に三段ありて初に大章を總じて答ふ。之に章門、釋出の二段あり。

【一四三】次に別答。之に假名、假體、假因緣に答ふるの三段あり。

【一四四】我は卽ち期なり。河西の云く、人の期契の如く聞に應じて來るは卽ち是れ合の義、聞に應ぜざるは不合の義、五陰和合すれば卽ち假名を成す

りて我が意を解せず、唱へて「如來中陰有りと說く」と言ふ。(二五四)善男子、我復彼の逆罪の衆生の爲に是の言を作さく、「五逆を造る者、身を捨てて直ちに阿鼻地獄に入る。」我復說きて言はく、(二五五)「曇摩留枝比丘、身を捨てて直ちに阿鼻地獄に入る、其の中間に於て止宿する處無し。」我復彼の(二五六)犢子梵志の爲に說きて言はく、「梵志、若中陰有らば、則ち六有有らん。」我復說きて言はく、「無色の衆生中陰有ること無し」と。善男子、我が諸の弟子是の說を聞き已りて我が意を解せず。唱へて「佛定んで中陰無しと說く」と言ふ。

(二五七)善男子、我經中に於て「復退有り」と說く。何を以ての故に。無量の懈怠懶惰の諸の比丘等道を修せざるに因るが故なり。退を說くに五種あり。一つには多事を樂む、二つには樂みて世事を說く、三つには睡眠を樂む、四つには在家に近くことを樂ふ。五つには樂みて多く遊行す。是の因緣を以て比丘をして退かしむ。(二五八)退因緣を說くに復二種有り。一つには內、二つには外なり。阿羅漢の人、內因を離ると雖も外因を離れず、外の因緣を以ての故に煩惱を生ず、煩惱を生ずるが故に則便退失す。復比丘名を(二五九)瞿坻と曰ふ有り、六反退失す。退し以て慚愧し、復更に進修して第七に卽ち得。得已りて失を恐れ、刃を以て自ら害す。(二六〇)我復或は時解脫有りと說き、或は六種の阿羅漢等を說く。我

【二五七】次に第四の諍論、有退無退。之に退、無退の二段あり。初の退の中、又法、譬、合の三段あり。初の法中に又三段ありて先づ通じて比丘の退。之に通明、退緣の二段あり。

【二五八】次に別して羅漢の退。之に直に羅云有退と云ふと、別して瞿坻を出すの二段あり。

【二五九】瞿坻(?)。

【二六〇】次に通じて六人を出す。

が諸の弟子是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來定んで退有りと說く」と言ふ。(一六一)善男子、經の中に復說かく「譬へば焦炭の還つて木と爲らざるが如く、亦缾の壞して更に缾の用無きが如く、(一六二)煩惱も亦爾なり、阿羅漢の斷、終に還つて生ぜず。」亦說く、衆生煩惱を生ずる因に凡そ三種有り。一つには未だ煩惱を斷ぜず、二つには因緣を斷ぜず、三つには善く思惟せず。(一六三)而も阿羅漢は二因緣無し、煩惱を斷じ不善思惟無きを謂ふ。(一六四)善男子、我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來定んで無退と說く」と言ふ。善男子、我經中に於て如來身に凡そ二種有りと說く。一つには生身、二つには法身なり。生身と言ふは、卽ち是方便應化の身なり。是の如き身は是生老病死、長短黑白、是此是彼、是學無學と言ふことを得べし。我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來定んで、佛身は是有爲法と說く」と言ふ。(一六五)法身は卽ち是常、樂、我、淨なり、永く一切の生、老、病、死を離る。白に非ず黑に非ず。長に非ず短に非ず。此に非ず彼に非ず。學に非ず無學に非ず。若は佛出世及び不出世、常住にして動ぜず、變易有ること無し。善男子、我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來定んで佛身は是無爲法と說く」と言ふ。

【一六一】第二に譬。
【一六二】第三に合。
【一六三】次に第二に正しく無退を明す。
【一六四】次に第五の諍論、佛身有爲無爲。之に二段ありて初に有爲。
【一六五】次に無爲。

（一六六）善男子、我經の中に說かく「云何が名けて十二因緣と爲す。無明より行を生じ、行より識を生じ、識より名色を生じ、名色より六入を生じ、六入より觸を生じ、觸より受を生じ、受より愛を生じ、愛より取を生じ、取より有を生じ、有より生を生じ、生より則ち老死憂苦有り。」善男子、我が諸の弟子是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來十二緣定んで是有爲と說く」と言ふ。（一六七）我又一時比丘に告喩して是の言を作さく「十二因緣は、有佛無佛性相常住」と。（一六八）善男子、十二緣は緣より生ぜざる有り、緣より生じて十二緣に非ざる有り、緣より生じて亦十二緣なる有り、緣生に非ず、亦十二緣に非ざる有り。（一六九）十二緣緣生に非ざる有りとは、未來世の十二支を謂ふなり。緣より生じて十二緣に非ざる有りとは、阿羅漢の所有の五陰を謂ふ。緣より生じて亦十二緣なる有りとは、凡夫人の所有の五陰の十二因緣を謂ふ。緣生に非ず十二緣に非ざる有りとは、虛空涅槃を謂ふ。善男子、我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來十二緣定んで是無爲と說く」と言ふ。

（一七〇）善男子、我經中に說かく「一切衆生善惡の業を作り、身を捨つるの時、四大此に於て卽時に散壞す。純善業の者は心卽ち上行し、純惡業の者は心卽ち下行す」と。善男子、我が諸の弟子、是の

【一六六】次に第六の諍論、十二因緣の有爲無爲。之に明執、解釋の二段あり。初の執の中又二段ありて初に有爲。
【一六七】次に無爲。
【一六八】第二に解釋。之に二段ありて初に章門。
【一六九】次に釋。
【一七〇】次に第七の諍論、心の常無常。之に二段ありて初に心常。小乘の僧祇部及び成論は心に相續ありとする所謂常論なり。

說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來心定んで常と說く」と言ふ。(一七一)善男子、我一時に於て頻婆娑羅王の爲に是の言を作さく、「大王當に知るべし、色は是無常なり。何を以ての故に。無常の因よりして生ずることを得るが故に。是の色若無常の因より生ぜば、智者云何ぞ說きて是常と言はん。若色是常ならば壞滅して諸の苦惱を生ずべからず。今是の色散滅破壞するを見る。是の故に當に知るべし、色は是無常なることを、乃至識も亦是の如し。」善男子、我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來心定んで斷すと說く」と言ふ。(一七二)善男子、我經中に說かく、「我が諸の弟子、諸の香華、金銀、寶物、妻子、奴婢、八不淨物を受けて正道を獲得す、正道を得已りて亦捨離せず」と。我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、「定んで如來五欲を受くる、聖道を妨げずと說く」と言ふ。又我一時復是の說を作さく、「在家の人正道を得ば、是の處有ること無し」と。善男子、我が諸の弟子是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來五欲を受くる、定んで正道を遮ると說く」と言ふ。

(一七三)善男子、我經中に說かく、「煩惱を遠離して未だ解脫を得ず、猶し欲界に世間第一法を修習するが如し」と。善男子、我が諸の弟子、是の說を

【一七一】次に無常。薩婆多部は心の相續を認めず、所謂無常論に屬す。

【一七二】次に第八の諍論、五欲道を障へ、道を障へず。薩婆多に道を障ふと云ひ、僧祇には障へずと云ふ、成論には障不障ありと云ふ。

【一七三】次に第九の諍論、世第一法欲界にあり、三界に[illegible]、薩婆多には色界の四根本禪に[illegible]世第一法を[illegible]すと[illegible]人は云く、色欲兩界[illegible]方便を發す、論じて無色界の方便を發すと明すものある無し。唯だ[illegible]に三界[illegible]

作すを聞きて我が意を解せず、唱へて「如來第一法は唯是欲界と說く」と言ふ。又復我「暖法、頂法、忍法、世第一法は初禪より第四禪に至るに在り」と說く。我が諸の弟子是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來第一法は色界に在りと說く」と言ふ。又復我說かく、「諸の外道等先に已に四禪の煩惱を斷つことを得。暖法、頂法、忍法、世第一法を修習し、四眞諦を觀じて阿那含果を得」と。我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來第一法は無色界に在りと說く」と言ふ。

(一七四) 善男子、我經中に說かく、「四種の施の中に三種淨有り。一つには施主因を信じ、果を信じ、施を信じ、受者は信せず。二つには受者因果の施を信じ、施主は信せず。三つには施主、受者二り倶に信有り。四つには施主、受者二り倶に信せず。是の四種の施、初の三種は淨なり」。我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來施唯意と說く」と言ふ。

(一七五) 善男子、我一時に於て復是の說を作さく、「施者施す時五事を以て施す。何等をか五つと爲す。一つには色を施し、二つには力を施し、三つには安を施し、四つには命を施し、五つには辯を施す。是の如きの因緣は施主還つて五事の果報を得。我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「佛施即ち五陰と說く」と言ふ。

いふ。

【一七四】 次に第十の諍論、施三業に通じ、三業に通ぜず。之に二段あり初に意に在るを執す。成論に云く、唯だ意地に在り、捨財相應の思を以て正體と爲し、亦た身口を以て之を輔ふと。毗曇には薩婆多の施定三業の說を承け、意地善なる故に身口も亦た善なりとす。

【一七五】 次に五陰に通す。

（二七六）善男子、我一時に於て宣說す、「涅槃は卽ち是遠離す。煩惱永く盡滅して遺餘無し、猶は燈滅して更に法生無きが如し。涅槃も亦爾なり。虛空と言ふは、卽ち有る所無し。譬へば世間の無所有の故に名けて虛空と爲すが如し。非智緣滅卽ち所有無し。如其有らば、因緣有るべし。因緣有るが故に盡滅有るべし。其無きを以ての故に盡滅有ること無し。」我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「佛三無爲無しと說く」と言ふ。善男子、我一時に於て目犍連の爲に是の言を作さく、「目連、夫涅槃とは、卽ち是章句、卽ち是足迹、是畢竟處、是無所畏、卽ち是大師、卽ち是大果、是畢竟智なり。卽ち是大忍、無閡三昧なり。是大法界、是甘露味、卽ち是難見なり。目連、若涅槃無しと說かば、云何ぞ人誹謗を生ずる者地獄に墮する有らん。」善男子、我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來涅槃有りと說く」と言ふ。復一時に於て我目連の爲に是の說を作さく、「目連、眼牢固ならず、身に至りて亦爾なり、皆牢固ならず、不牢固の故に名けて虛空と爲す。食下り回轉消化する處、一切の音聲皆虛空と名く。」我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來決定して虛空無爲有りと說く」と言ふ。復一時に於て目連の爲に說かく、「目連、人有りて未だ須陀洹果を得ず、忍法に住する時、無量三惡道の報を斷ず。當に知るべし、智緣に從ひて滅せず。」我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて

【二七六】次に第十一の諍論、三無爲有り、三無爲無し。成論の人は三無爲既に同じく是れ無爲、寧んぞ異體あらんやと。數人は之に反して三無爲別に異體ありとす。

「如來決定して非智緣滅有りと說く」と言ふ。

(一七七)善男子、我又一時(一七八)跋波比丘の爲に說かく「若比丘色を觀じ已り、若は過去、若は未來、若は現在、若は近、若は遠、若は麤、若は細、是の如き等の色は我我所に非ず、若比丘是の如く觀じ已りて能く色愛を斷ず。」跋波又言はく、「云何が色と名くる。」我言はく、「四大を色と名け、四陰を名と名く。」我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來決定して說きて色是四大と言ふ」と言ふ。(一七九)善男子、我復說きて言はく、「譬へば鏡に因りて則ち像現ることと有るが如く、色も亦是の如し、四大に因りて造す。所謂麤細澀滑、青黄赤白、長短方圓、邪角輕重、寒熱饑渴、烟雲塵霧なり、是を造色猶し響像の如しと名く。」我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來四大有らば、則ち造色有りと說く」と言ふ。(一八〇)或は四大造色有ること無き有り。

(一八一)善男子、往昔一時菩提王子是の如き言を作さく、「若比丘の禁戒を護持する有りて、若惡心を發さば、當に知るべし、是の時比丘戒を失せん。」我時に語りて言はく、「王子、戒に七種有り、身口に從ひて無作色有り。是の無作色の因緣を以ての故に、其の心惡無記の中に

【一七七】次に第十二の諍論、造色有り、造色無しとに有無を明すの二段あり。毘曇は定んで有り、四大に因るが故に影顯等の色ありとし、成論は則ち無しとす。初の造色有りの中に二段、初に能造の四大。

【一七八】跋波。具さに跋陀波羅(Bhadrapala)といひ、賢護と譯す。

【一七九】次に所造の色。

【一八〇】第二に造色無し。

【一八一】次に第十三の諍論、無作色有り、無作色無し。之に二段ありて初に有。薩婆多は定んで無作は色ありとす。

在りと雖も、失戒と名けず、猶持戒と名く。何の因緣を以て無作色と名くる。異色の因に非ず、異色因の果と作さず。善男子、我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「佛無作色有りと說く」と言ふ。

(一八二)善男子、我餘經に於て是の如きの言を作さく、「戒とは即ち是惡法を遮制す、若惡を作さざれば、是を持戒と名く。」我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來決定して無作色無しと宣說す」と言ふ。

(一八三)善男子、我經中に於て是の如きの說を作さく、「聖人の色陰、乃至識陰、皆是無明因緣の出す所、(一八四)一切の凡夫も亦復是の如し、無明より愛を生ず。當に知るべし、是の愛は即ち是無明なり。愛より取を生ず。當に知るべし、是の取は即ち是無明愛なり。取より有を生ず。當に知るべし、是の有は即ち是無明愛取なり。有より受を生ず。當に知るべし、是の受は即ち是行有なり。(一八五)受の因緣に從ひ名色、無明、愛、取、有、行、受、觸、識、六入等を生ず、是の故に受は即ち十二支」と。善男子、我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて、「如來心數無しと說く」

【一八二】次に無。成論及び曇無德は並びに定んで無作は色に非ずとす。

【一八三】次に第十四の諍論、心數有り、心數無し、有りの二段あり。僧祇には心數なしと說く、佛陀提婆(覺天)は異體の起なし、亦た相次で前起の心、後起の數とすといふ、成實之に同じ、終るに薩婆多は別に異體の心數ありて一時に俱起すとす。初の心數無しの中又二段ありて初に聖人の十二因緣を明す。

【一八四】次に正しく凡夫の十二因緣を明す。之に二段ありて初に後即ち前。

【一八五】次に前後を生す。

【一八六】第二に心數有り。

【一八七】次に第十五の諍論、五有六有。

【一八八】一・二・三・四・八九等、諸

と言ふ。(一八六)善男子、我經中に於て是の如きの說を作さく、「眼、色、明、惡欲の四法より則ち眼識を生ず。惡欲とは即ち是無明なり。欲性求むる時即ち名けて愛と爲す。愛因緣より取、取を名けて業と爲す。業因緣より識、識は名色に緣たり、名色は六入に緣たり、六入は觸に緣たり、觸は想、受、愛、信、精進、定、慧に緣たり。是の如き等の法は觸に因つて生じ、而も是觸なるに非ず」と。善男子、我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來心數有りと說く」と言ふ。

(一八七)善男子、我或時說かく、(一八八)「唯一有有り。或は二、三、四、五、六、七、八、九より二十五に至る」と說く。我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來五有有りと說き、或は六有と言ふ」と言ふ。

(一八九)善男子、我往一時迦毘羅衞尼拘陀林に住す。時に(一九〇)釋摩男我が所に來至して是の如きの言を作さく、「云何が名けて優婆塞と爲すや。」我即ち爲に說かく、「若善男子、善女人有りて、諸根完具し三歸依を受く、是を則ち名けて優婆塞と爲すなり。」釋摩男の言さく、「世尊、云何が名けて一分優婆塞と爲す。」我言はく、「若三歸を受け、及び一戒を受く、是を一分優婆塞と名くるなり。」我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來優婆塞戒不具受得と說く」と言ふ。(一九一)善男子、我

有を通稱して一といひ、二とは因果、善惡、三は三界、四は四生、五は五道（修羅を天に攝す）、六は六道（修羅を別開す）、七は七識處、八は八福、九は八禪及び欲界なり。

【一八九】次に第十六の諍論、五戒八戒の具受不具受。之に二段ありて初に五戒不具。成論は之に屬す。

【一九〇】釋摩男。斛飯王の長子拘利(Kolita)太子をいふ、出家して五比丘の一となる。

【一九一】次に八戒具受。薩婆多は之に屬す。

一時に於て恆河の邊に住す。爾の時に迦旃延、我が所に來至して是の如きの言を作さく、「世尊、我衆生を教へて齋法を受けしむ。或は一日、或は一夜、或は一時、或は一念、是の如きの人齋を成ずるや不や。我言はく、比丘、是の人善を得、齋を得と名けず。」我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來八戒齋を具さに受けて乃ち得と說く」と言ふ。

(一九二) 善男子、我經中に於て是の如きの說を作さく、「若比丘有りて四重を犯し已れば比丘と名けず、破比丘、忘失比丘と名く。復善芽種子を生ずること能はず。譬へば焦種の果實を生ぜざるが如く、多羅樹の頭若壞すれば則ち果を生ぜざるが如し、犯重の比丘も亦復是の如し」と。我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來諸の比丘重禁を犯し已れば、比丘戒を失すと說く」と言ふ。(一九三) 善男子、我經中に於て純陀の爲に四種の比丘を說く、「一つには畢竟到道、二つには示道、三つには受道、四つには汙道なり。四重を犯す者は卽ち是汙道」と。我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來諸の比丘、四重を犯し已りて、禁戒を失はずと說く」と言ふ。

(一九四) 善男子、我經中に於て諸の比丘に告ぐ、「一乘、一道、一行、一緣、是の如き一乘、乃至一緣は能く衆生の爲に大寂靜を作す。永く一切の繫縛愁苦、苦及び苦因を斷じ、一切衆をして一有に到ら

【一九二】次に第十七に犯重の失不失。之に二段ありて初に定んで失す。四卷の毗曇に犯重捨あり、卽ち是れ失とするなり。

【一九三】次に不失。雜心の毗曇之に屬す。

【一九四】次に第十八に一乘三乘。之に二段ありて初に皆佛道を得、卽ち是れ一乘なり。

しむ。」我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來須陀洹、乃至阿羅漢皆佛道を得と說く」と言ふ。（一九五）善男子、我經中に於て說かく「須陀洹は人間、天上七反往來して便ち般涅槃す。斯陀含の人は一たび人天を受けて便ち般涅槃す。阿那含の人は凡て五種有り。或は中間に般涅槃する者、乃至上流般涅槃の者有り。阿羅漢の人は凡て二種有り。一つには現在、二つには未來なり。現在も亦煩惱五陰を斷じ、未來も亦煩惱五陰を斷ず。」我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「如來須陀洹より阿羅漢に至り佛道を得ずと說く」と言ふ。

（一九六）善男子、我此の經に於て說きて言はく「佛性具さに六事有り。一つには常、二つには實、三つには眞、四つには善、五つには淨、六つには可見なり。」我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「佛衆生の佛性、衆生を離れて有りと說く」と言ふ。善男子、我又說きて言はく「衆生の佛性は猶し虛空の如し。虛空とは過去に非ず、未來に非ず、現在に非ず。內に非ず、外に非ず。色、聲、香、味、觸の攝に非ず。佛性も亦爾なり。」我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「佛衆生の佛性、衆生を離れて有りと說く」と言ふ。善男子、我又復「衆生の佛性は猶し貧女宅中の寶藏、力士額上の金剛寶珠、轉輪聖王甘露の泉の如し」と說く。我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「佛衆生の佛性、衆生を離れて有りと說く」と言ふ。善

【一九五】次に不得、即ち是れ三乘なり。

【一九六】次に第十九に佛性は衆生を離れ、衆生に即す。之に二段ありて初に解。

男子、我又復說かく、「犯四重禁、一闡提の人、謗方等經、作五逆罪、皆佛性有り。是の如きの衆生都て善法無し、佛性は是善なり。」我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「佛衆生の佛性、衆生を離れて有りと說く」と言ふ。

（一九七）善男子、我又復說かく、「衆生卽ち是佛性なり。何を以ての故に。若衆生を離るれば阿耨多羅三藐三菩提を得ず、是の故に我波斯匿王の與に象喩を說けり。盲の象を說くに象を得ずと雖も、然も象を離れざるが如し。衆生色を說き、乃至識は是佛性と說くも、亦復是の如し。佛性に非ずと雖も、佛性ならざるに非ず。我王の爲に箜篌喩を說くが如く、佛性も亦爾なり。」善男子、我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せずして種種の說を作す、「盲の乳を問ふが如く、佛性も亦爾なり」と。

（一九八）是の因緣を以て或は說きて「犯四重禁、謗方等經、作五逆罪、一闡提等悉く佛性有り」と言ふ有り、或は說きて「無し」と爲す。

（一九九）善男子、我處處の經中に於て說きて言はく、「一人世に出づれば多人利益す。一國土の中に二轉輪王、一世界の中に二佛世に出づるは、是の處有ること無し。一四天下に八つの四天下、乃至二つの他化自在天も、亦是の處無し。然して我、乃ち閻浮提阿鼻地獄より上（二〇〇）阿迦膩吒天に至る」と說く。

---

【一九七】次に卽。
【一九八】次に第二十に四重を犯す人に佛性有りや無きや。
【一九九】次に第二十一に十方佛有り、また十方佛無し。薩婆多は無しと明し、僧祇は有りとなす、成實は一界には則ち無し、多世界には有りとす。
【二〇〇】阿迦膩吒（Akaniṣṭha or [illegible]）、色究竟と譯す。色界頂上の天なり。

我が諸の弟子、是の說を聞き已りて我が意を解せず、唱へて「佛十方佛無しと說く」と言ふ。我亦諸の大乘經の中に於て十方佛有りと說けり。』

# 卷の第三十二

## 迦葉菩薩品の二

(一)『善男子、是の如き諍訟は是佛の境界なり。諸の聲聞、緣覺の知る所に非ず。(二)若人是に於て疑心を生ずれば、猶能く無量の(三)煩惱の須彌山の如きを摧壞せん。(四)若是の中に於て決定を生ずれば、是を執著と名く。』

(五)迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、云何が執著する。』(六)佛の言はく、『善男子、是の如きの人、若は他に從ふて聞き、若は自ら經を尋ね、若は他に故に敎ふ。著する所の事に於て放捨すること能はず、是を執著と名く。』

(七)迦葉復言さく、『世尊、是の如きの執著は、

【一】是より第三の結問。如來善く根性を知る何が故ぞ不定の說を作して其をして諍論せしむるやを酬ゆ。之に理深きを歎じ、疑執を簡ぶの二段あり。初の理深きを歎ずる中又二段ありて初に不定の說、是れ佛の境界なることを明す。

【二】次に誡勸。之に二段ありて初に疑を生ずるを勸む。

【三】煩惱の須彌山の如きを。之に二釋あり。一に云く煩惱高廣なること須彌の隆岡なるが如し、疑能く之を破す。二に云く、煩惱堅固なること須彌の安峙するが如し、疑能く之を拔く、故に以て喩となすと。

【四】次に執することを勿れと誡む。

【五】第二に疑執を簡ぶ。之に六番の問答あり。前の兩番は問執、後の四番は問疑。初の執を問ふ中、初番の問答。初に問。

【六】次に佛答。

【七】次に第二番の問答。初に問。

【八】次に佛答。

【九】第二に疑を問ふ。之に四番の問答あり。其中初番の問答。初に問。

是善と爲すや、是不善なりや。』(八)『善男子、是の如きの執著は、名けて善と爲さず。何を以ての故に。諸の疑網を摧壞すること能はざるが故なり。』(九)迦葉復言さく、『世尊、是の如き人は本自ら疑はず、云何ぞ說きて疑網を壞せずと言はん。』(一〇)『善男子、夫れ(一一)不疑者は卽ち是疑なり。』(一二)『世尊、若人有りて須陀洹の人三惡に墮せずと謂はん、是の人も亦當に著と名け疑と名くべし。』(一三)『善男子、是を定と名くべく、疑と名くることを得ず。(一四)何を以ての故に。善男子、譬へば人有りて先に人樹を見、後時に夜行して遙かに杌根を見、便ち疑想を人なりや樹なりやと生ずるが如く、善男子、人先に比丘梵志を見、後時に路に於て遙かに比丘を見て、卽ち疑想を是沙門なりや是梵志なりやと生ずるが如く、善男子、人先に牛と水牛とを見、後遙かに牛を見て、便ち疑想を彼は是牛なりや是水牛なりやと生ずるが如し。(一五)善男子、一切衆生先に二物を見、後に便ち疑心を生ず。(一六)何を以ての故に。心不了の故なり。我も亦須陀洹の人に、三惡に墮し三惡に墮せざる有りと說かず、是の人何が故ぞ疑心を生ぜん。』

(一七)迦葉の言さく、『世尊、佛の所說の如く、要ず先に見已りて然して後

---

【一〇】次に佛答。

【一一】不疑者卽ち是疑。生死を善と名く、涅槃は非善なり。其れ必ず善に因て以て非善を疑ふ。故に定んで非善は能く善を斷ずる有るかと答ふるなり。

【一二】次に第二番の問答。初に問。

【一三】次に佛答。之に四段ありて初に責。

【一四】次に疑心の相を出して以て不疑を顯す。

【一五】次に疑執の結定。

【一六】次に疑由の釋出。

【一七】次に第三番の問答。初に由。之に二段ありて初に涅槃を問ふ。

【一八】次に濁水を問ふ。

【一九】次に佛答。之に二段ありて初に涅槃を答ふ。

【二〇】次に濁水を答ふ。之に二段ありて初に問を牒して之を

疑ふとは、人有りて未だ二種の物を見ざるの時、亦復疑を生ず。何等か是なる、所謂涅槃なり。(一八)世尊、譬へば人有りて路に濁水に遇ふ。然るに未だ曾て見ざるも亦疑を生ずるが如し。是の如き水は、深きや淺きや。是の人未だ見ずして云何ぞ疑を生ずる。』(一九)『善男子、夫涅槃とは即ち是斷苦なり、非涅槃とは即ち是苦なり。一切衆生二種有るを見る、苦、非苦を見る。苦非苦とは、即ち是饑渇、寒熱、瞋喜、病瘦安隱、老壯、生死、繋縛解脫、恩愛別離、怨憎聚會なり。衆生見已りて即便疑を生ず、當に畢竟じて是の如き苦惱の事を遠離する有るべしや不や。是の故に衆生涅槃の中に於て疑を生ずるなり。(二〇)汝が意若是の人先より來た未だ濁水を見ず、云何ぞ疑と謂はんとは、是の義然らず。(二一)何を以ての故に。是の人先より餘處に見已る。是の故に此未だ曾て到らざる處に於て、而も復疑を生ず。』

(二二)『世尊、是の人先に深淺の處を見る時、已に疑を生ぜず。今に於て何が故ぞ而も復疑を生ずる。』(二三)佛の言はく、『善男子、本未だ行ぜざるが故に、所以に疑を生ず。是の故に我言ふ、「不了の故に疑ふ」と。』

(二四)迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、佛の所說の如く、「疑は即ち是著、著は即ち是疑」とは、是誰とか爲すや。』『善男子、斷善根者なり。』

---

非す。

【一一】次に正しく答ふ。

【一二】次に第四番の問答。初に問。

【一三】次に佛答。

【一四】是より第一に斷善の見を明す。之に三段ありて初に更に異人を出す。

迦葉の言さく、「世尊、何等の人輩か能く善根を斷ずる。」「善男子、若し聰明、黠慧、利根能く善く分別し、善友を遠離し、正法を聽かず、善く思惟せず、法の如く住せざる有らば、是の如きの人は能く善根を斷ず。(二五)是の四事を離れ、心自ら思惟す、「施物有ること無し。何を以ての故に。施とは卽ち是財物を捨す。若し施に報有らば、當に知るべし、施主は常に貧窮なるべし。何を以ての故に。子果相似るが故なり。是の故に說いて因無く果無しと言ふ。若し是の如く無因無果と說かば、是則ち名けて善根を斷ずと爲すなり。」復是の念を作さく、「施主、受者及以財物、三事常無く停住する有ること無し。若し停住する無ければ、云何ぞ說きて此は是施主、受者、財物と言はん。若し受者無ければ、云何ぞ果を得ん。是の義を以ての故に、因無く果無し。若し是の如く無因無果と說かば、當に知るべし、是の人は能く善根を斷ず。」復是の念を作さく、「施者施す時五事の施有り。受者受け已りて、或は時に善を作し、或は不善を作す。而も是の施主も亦復善、不善の果を得ず。世間の法子より果を生じ、果還た子と作るが如し。因は卽ち施主、果は卽ち受者なり。而して是の受者此の善、不善法を以て施主をして得しむる能はず。是の義を以ての故に、因無く果無し。若し是の如く無因、無果と說かば、當に知るべし、是の人は能く善根を斷ず。」復是の念を作さく、「施物有ること無

【二五】次に其起見を明す。之に四段ありて初に六復次有り施業無きを明す。この中第一の復次は子果相似を以て無因を明し。第二に能施、所受財物皆無し。第三は前人に施與するに前人善惡業を作して共に施主を資けず、第四は物は無記、施は善果を得ず。第五は施は意にありて不可見、見は但だ善惡業を見るのみ。第六は無作無受を示す。

し。何を以ての故に。施物無記なり。若是無記ならば、云何ぞ而も善果報を得んや。善悪の果無し、即ち是無記なり。財若し無記ならば、當に知るべし、則ち善悪の果報無し。是の故に施無く、因無く、果無し。若是の如く無因無果と說く。當に知るべし、是の人は能く善根を斷ず。」復是の念を作さく、「施とは即ち意なり。若是意ならば見無く對無し、是色法に非ず。若是色に非ずば、云何ぞ施すべけん。是の故に施無く、因無く、果無し。若是の如く無因無果と說かば、當に知るべし、是の人は能く善根を斷ず。」復是の念を作さく、「施主若佛像、天像、命過の父母の爲に施を行ずれば、則ち受者無し。若受者無ければ果報無かるべし。若果報無ければ是を無因と爲す。若無因ならば是を無果と爲す。若是の如く無因無果と說かば、當に知るべし、是の人は能く善根を斷ず。」

【三六】次に六復次に父母無きを明す。

(三六)復是の念を作さく、「父無く母無し。若父母是衆生の因衆生を生ずと言はば、理當に生じて斷絶有ること無かるべし。何を以ての故に。因當に有るが故なり。然るに常に生ぜず。是の故に當に知るべし、父母有ること無し。」復是の念を作さく、「父無く母無し。何を以ての故に。若衆生の身父母に因りて有らば、一人男女二根を具すべし。然るに具する者無し。當に知るべし、衆生は父母に因るに非ず。」復是の念を作さく、「父母に因りて衆生を生ずるに非ず。何を以ての故に。眼見す、衆生は父母に似ず。身色心、威儀、進止を謂ふ。是の故に父母は衆生の因に非ず。」復是の念を作さく、「一切世間に四種の無有り。一つには未生を無と名く、泥團の時未だ瓶用有らざるが如

し。二つには滅し已るを無と名く、爛壞し已る、是を名けて無と爲すが如し。三つには各異にして互に無なり、牛の中に馬無く馬の中に牛無きが如し。四つに畢竟を無と名く、兎角、龜毛の如し。衆生、父母も亦復是の如し。此の四は無に同じ。若父母、衆生の因と言はば、父母死する時子必ずしも死せず。是の故に父母は衆生の因に非ず。」復是の念を作さく、「若父母、衆生の因と言はば、父母に因りて常に衆生を生ずべし、然るに復化生、濕生有り。是の故に當に知るべし、父母に因りて衆生を生ずるに非ざるなり。」復是の念を作さく、「自ら衆生、父母に因るに非ずして而も生長を得る有り。譬へば孔雀の雷震の聲を聞きて便ち身を得るが如く、又青雀の雄雀の涙を飲みて便ち身を得るが如く、命命鳥の雄者の舞を見て卽便身を得るが如し。」是の念を作す時、如其善知識に遇はざるは、當に知るべし、是の人は能く善根を斷ず。

【三七】次に三に復次は因果無きを明す。

(三七)復是の念を作さく、「一切世間に善惡の果無し。何を以ての故に。諸の衆生十善法を具し、樂んで惠施を行じ、功德を勤修する有り。是の人も亦復疾病身に集り、中年に夭喪し、財物損失し、諸の憂苦多し。十惡を行じ、慳貪、嫉妬、懶惰、懈怠にして、諸善を修せざるに身安く病無く、年壽を終得し、財寶に多饒にして諸の愁苦無き有り。是の故に當に知るべし、善惡の果無きことを。」復是の念を作さく、「我も亦曾て諸の聖人の說を聞く。人善を修し命終りて三惡道に墮する有り、人惡を行じ命終りて人天の中に生ずる有りと。是の故に當に知るべし、善惡の果無きことを。」復是の念を作さく、

「一切の聖人は二種の説有り。或は殺生善の果報を得と説き、或は殺生惡の果報を得と説く。是の故に當に知るべし、聖説定らず。聖若不定ならば我云何ぞ定らん。是の故に當に知るべし、善惡の果無きことを。」

(三八)復是の念を作さく、「一切世間に聖人有ること無し。何を以ての故に。若聖人と言はば正道を得べし。一切衆生煩惱を具する時正道を修するは、當に知るべし、是の人は正道にして煩惱一時に俱有す。若一時に有らば、當に知るべし、正道は結を破する能はず。若煩惱無きに而も道を修すれば、是の如き正道は何の爲の所作ぞ。是の故に煩惱を具する者は道壞ふ能はず、煩惱を具せざれば道則ち用無し。是の故に當に知るべし、一切世間に聖人有ること無し。」復是の念を作さく、「無明行に緣とし、乃至生老死に緣たり。是の十二因緣一切衆生等しく共に之有り。八聖道は其の性平等にして亦是の如くなるべし。一人得る時一切得べく、一人修する時一切苦滅すべし。何を以ての故に。煩惱等しきが故なり。而も今得ず、是の故に當に知るべし、正道有ること無し。」復是の念を作さく、「聖人は皆凡夫法に同ずる有り。所謂飮食、行住坐臥、睡眠喜笑、饑渴寒暑、憂愁恐怖なり。若凡夫の是の如き事に同じくば、當に知るべし聖人は聖道を得ず。若聖道を得ば應當に永く是の如き等の事を斷ず。是の如き等の事如其斷ぜざれば、當に知るべし道無きことを。」復是の念を作さく、「聖人有身五欲樂を受け、亦復人を罵辱し撾打し、嫉妬、憍慢す。苦樂を受け善惡業を作

【三八】次に九復次は聖人無きを明す。

す。是の因緣の故に聖人無きことを知る。若道有らば、是の事を斷ずべし。是の事斷せざれば當に知るべし、道無きことを。」復是の念を作さく、「憐憫多き者名けて聖人と爲す。何の因緣の故に名けて聖人と爲す。道の因緣の故に名けて聖人と爲す。若道の性憐憫ならば、便ち一切衆生を憐念すべし。修し已るを待ちて然して後方に得るにあらず。如其憫無ければ、何が故ぞ聖人聖道を得るに因りて能く憐憫せんや。是の故に當に知るべし世に聖道無きことを。」復是の念を作さく、「一切の四大因より生せず。衆生等しく是の四大性有り。衆生是の邊には到るべし、彼には到るべからざるを觀ず。若聖道有らば、性是の如くなるべし。然るに今爾らず。是の故に當に知るべし、世に聖人無きことを。」復是の念を作さく、「若諸の聖人一涅槃有らば、當に知るべし是則ち聖人有ること無し。何を以ての故に。得べからざるが故に。常住の法理得べからず、取捨すべからず。若諸の聖人涅槃多ならば是則ち無常なり。何を以ての故に。可數法なるが故なり。涅槃若一ならば、一人得る時一切得べし。涅槃若多ならば是則ち邊有り、云何ぞ常と名けん。若說きて「涅槃體一、解脫是多なり、蓋是一つにして舌是多きが如し」と言ふ有らば、是の義然らず。何を以ての故に。一一の所得一切得に非ず、亦邊有るが故に是無常なるべし。若無常ならば云何ぞ名けて涅槃と爲すを得んや。涅槃若無ければ誰か聖人と爲さん。是の故に當に知るべし、聖人有ること無し。」復是の念を作さく、「聖人の道は因緣得に非ず。若聖人の道因緣得に非ざれば、何が故ぞ一切聖人と作さざる。若一切の人聖人に非ざれば、當に知るべし、

是則ち聖人及以聖道有ること無し。」復是の念を作さく、「聖說く、正見に二因緣有り。一つには他に從ひて法を聞き、二つには內自ら思惟す。是の二因緣、若緣より生せば、所從生の者、復緣より生せん。是の如く展轉無窮の過有り。若是の二事緣より生せざれば、一切衆生何が故ぞ得ざるや。」

(二九)是の觀を作す時、能く善根を斷ず。善男子、若衆生深く是の如く無因、無果と見る有らば、是の人は能く信等の五根を斷ず。(三〇)善男子、斷善根の者、是下劣愚鈍の人に非ず、亦天中及び三惡道に非ず。破僧も亦爾なり。」

(三一)迦葉菩薩佛に白して言さく、「世尊、是の如きの人は何れの時か當に能く還つて善根を生ずべき。」(三二)佛の言はく、「善男子、是の人二時還つて善根を生ず。初地獄に入り、地獄を出づるの時なり。」(三三)「善男子、善に三種有り。過去、現在、未來なり。(三四)若過去する者は其の性自ら滅す。因滅盡すと雖も、果報未だ熟せず。(三五)是の故に(三六)過去果を斷ぜしと名けず、(三七)三世の因を斷ず、故に名けて斷と爲す。」

(三八)迦葉菩薩佛に白して言さく、「世尊、若三世の因を斷ずるを善根を斷すと名けば、(三九)斷善根の人は即ち佛性有り。是の如き佛性は是過去とや爲

【二九】第三に能く善根を斷ず。之に二段ありて初に斷善。

【三〇】次に闡提を料簡す。

【三一】是より第二に生善。之に三段あり、其中初に更じて中道生善を明す。之に五番の問答あり、三段と爲すべし。其中初の一番は生善の時節を明す。初に問。

【三二】次に佛答。之に二段ありて初に時節。文の中初人は利根、出づるは鈍根なり。理として中根の人、中に在りて善を生ずるあるべきも、獄に在りて苦を受け偏く生ずるに暇なし、是の故に說かず。

【三三】次に生善。之に又三段ありて初に三世を明かす。

【三四】次に釋。

【三五】次に結す。之に過去善は斷すべからず、現善は斷す可しの二段あり。

ん、是現在とや爲ん、是未來とや爲ん。三世に徧すとや爲ん。(四〇)若過去ならば云何ぞ常と名けん。佛性は亦常なり。是の故に當に知るべし、過去に非ざるなり。(四一)若未來ならば、云何ぞ常と名けん。何が故ぞ、佛一切衆生必定して當に得べしと說きたまふ。若必定して得ば、云何ぞ斷と言はん。(四二)若現在ならば、復云何ぞ常ならん。何が故ぞ復必定して見るべしと言ふや。(四三)如來亦佛性に六つ有りと說きたまふ。一つには常、二つには眞、三つには實、四つには善、五つには淨、六つには可見なり。(四四)若善根を斷じて佛性有らば、則ち善根を斷ずと名くることを得ざるなり。(四五)若佛性無ければ、云何ぞ復一切衆生悉く佛性有りと言ふや。(四六)若佛性も亦有亦斷と言はば、云何ぞ如來復是常と說きたま

【三六】過去果。過去は過去の不斷を結し、果は未來の不斷を結す。

【三七】三世の因を斷ず等。現善の因滅せば即ち當の善なし、當の善起らざれば義說して斷とす。既に現未なし、過去も亦た息む、義說して斷とす。即ち是れ具さに三世の因を斷ずるなり。

【三八】次に第二番の問答、佛性不斷を明す。問の中に二段ありて初に佛性は是三世なりや否やと問ふ。之に又三段ありて初に旨を領す。

【三九】次に宗を定む。

【四〇】次に難を結す。之に三段ありて初に過去。其の意に云く、佛性若し常ならば即ち過去に非す、云何ぞ過去斷と言ふやとなり。

【四一】次に未來。若し未來とせば兩難あり。一には未來に非ざらしむ。二には未來に在らしむ。佛性既に常ならば常は未來に非す、若し未來に非すとせば未來は皆當に三菩提を得べし、豈未來に非ずやとなり。

【四二】次に現在。現在亦た兩難あり。一には現在に非ざらしむ、常を以ての故なり。二には是れ現在ならしむ、性既に見るべく、寧ろ現在に非ずやとなり。

【四三】第二に佛性は是可斷なりや否やと問ふ。之に又二問ありて初に六事。此の六の義に兩解あり。一に是れ了因と。二に正因と。

【四四】次に方に正しく問ふ。之に三段ありて初に闡提若し佛性有らば善を斷ずべからずと問ふ。

【四五】次に若し佛性を斷ぜば云何ぞ說いて、一切悉有と言は

ふや。』

(四七)佛の言はく、『善男子、如來世尊、衆生の爲の故に四種の答有り。一つには定答、二つには分別答、三つには隨問答、四つには置答なり。(四八)善男子、云何が定答なる。若惡業、善果を得るや、不善果なりやと問はば、是不善果を得と定答すべし。善も亦是の如し。若如來一切智なりや、不やと問はば、是、是一切智と定答すべし。若佛法是清淨なりや不やと問はば、是必定清淨と定答すべし。若如來の弟子如法に住するや不やと問はば、是如法住有りと定答すべし。是を定答と名く。(四九)云何が分別答なる。我が所說の四眞諦法の如し。云何が四つと爲す。苦、集、滅、道なり。何をか苦諦と謂ふ。八苦有るが故に名けて苦諦と曰ふ。云何が集諦なる。五陰の因の故に、名けて集諦と爲す。云何が滅諦なる。貪欲、瞋癡、畢竟じて盡くるが故に名けて滅諦と爲す。云何が道諦なる。三十七の助道法を名けて道諦と爲す。是を分別答と名く。(五〇)云何が隨問答なる。我が說く所の一切法無常の如し。復問うて「如來世尊何の法の爲の故に無常と說きたまふ」と言ふ有らば、答へて「如來有爲法の爲の故に無常と說く」と言ふ。無我も亦爾なり、我が一切法燒と說く所の如し。他又問うて「如來世尊何の法の爲の故に一切燒と說きたまふ」と言はば、答へて「如來貪、瞋、癡の爲に一切燒と說く」と言ふ。

んやと問ふ。

【四六】次に懸に答の意を取て述す。

【四七】第二に佛答。之に二段ありて初に四章門。

【四八】次に解釋。之に三段あり其中初に三門を解す。之に又三段ありて先づ定答を解す。

【四九】次に分別答を解す。

【五〇】次に隨問答を解す。

（五一）善男子、如來の十力、四無所畏、大慈大悲、三念處、首楞嚴等の八萬億の諸の三昧門、三十二の相、八十種の好、五智印等の三萬五千の諸の三昧門、金剛定等の四千二百の諸の三昧門、方便三昧無量無邊なり。是の如き等の法、是佛の佛性なり。是の如き佛性は則ち七事有り。一つには常、二つには我、三つには樂、四つには淨、五つには眞、六つには實、七つには善なり。是を分別答と名く。（五二）善男子、後身の菩薩の佛性に六つ有り。一つには常、二つには淨、三つには眞、四つには實、五つには善、六つには少見なり。是を分別答と名く。（五三）汝先に「斷善根の人佛性有りや」と問ふが如きは、（五四）亦如來の佛性有り、亦後身の佛性有り。是の二佛性は未來を障ふるが故に名けて無と爲すことを得、畢定して得るが故に、名けて有と爲すことを得。是を分別答と名く。（五五）如來の佛性は過去に非ず、現在に非ず、未來に非ず。（五六）後身の佛性は現在、未來なり。少しく見るべきが故に現在と名くることを得、未だ具さに見ざるが故に名けて未來と爲す。（五七）如來未だ阿耨多羅三藐三菩提を得ざるの時、佛性因なるが故に亦是過去、現在、未來なり。果は則ち爾らず、是三世なる有り、三世に非ざる有り。

---

【五一】第二に重ねて問答を明すに就て正しく用て問を遮る、所以に重ねて釋す。之に二段あり、前には後の問を答へ、後には前の問を答ふ。初に後の問を答ふる中に四段ありて先づ佛性の七事。

【五二】次に後身の六事。

【五三】次に正しく問を牒す。

【五四】次に正しく答ふ。

【五五】次に第二に進うで前の三世の問に答ふ。之に五段ある中、初に如來及び後身の佛性、之に又四段あり、初に如來の性は則ち三世に非ず。

【五六】次に後身の性は則ち三世に有り。

【五七】次に重ねて如來の因は是れ三世、果は然らず。

【五八】次に重ねて後身は皆是れ三世なり。

【五九】第二に九住の佛性。

(五八)後身の菩薩佛性因なるが故に、亦是過去、現在、未來なり。果も亦是の如し。是を分別答と名く。(五九)九住の菩薩の佛性六種あり。一つには常、二つには善、三つには眞、四つには實、五つには淨、六つには可見なり。佛性因なるが故に亦是過去、現在、未來なり。果も亦是の如し。是を分別答と名く。(六〇)八住の菩薩、下六住に至る佛性に五事あり。一つには眞、二つには實、三つには淨、四つには善、五つには可見なり。佛性因なるが故に、亦是過去、現在、未來なり。果も亦是の如し。是を分別答と名く。(六一)五住の菩薩下初住に至る佛性に五事あり。一つには眞、二つには實、三つには淨、四つには可見、五つには善不善なり。(六二)善男子、是の五種の佛性、六種の佛性、七種の佛性は、斷善根の人必ず當に得べきが故に、故に有と言ふことを得、是を分別答と名く。(六三)若說きて『斷善根の者は定んで佛性有り、定んで佛性無し』と言ふ有らん。是を置答と名く。』(六四)迦葉菩薩の言さく『世尊、我答へざるを乃ち置答と名くるを聞く。如來今者何の因緣ぞ答へて而も置答と名けたまふや。』(六五)『善男子、我は亦說かず、置いて答へざるを乃ち置答と說くと。善男子、是の如き置答に復二種有り。一つに

---

【六〇】次に八住より六住に至る

【六一】次に五住より初住に至る

【六二】次に所問を結す。

【六三】次に第三に置答を釋す。之に二段ありて初に正釋。

【六四】次に問答。初に問。

【六五】次に佛答。

【六六】是より第三に佛性に因りて善を生ず。之に三番の問答あり。初には因果の性、次には正しく性に因て善を生ず、次には更に釋す、初の因果の性の中、初に問。

【六七】次に佛答。之に二段あり。共中初に正答。之に又三段あり、先づ因果の二性是れ三世なる有り、三世に非ざる有るを分別す。之に因果章、解釋の二段あり。

【六八】五陰に因果の二ありとは五陰中惑業を因とし、善陰を果とす。因の中二乘は卽ち是れ三世、若し大菩提は則ち三

は遮止、二つには莫著なり。是の義を以ての故に置答と名くることを得。』

(六六)迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、佛の所說の如き、云何が因は亦是過去、現在、未來。果は亦過去、現在、未來、是過去、現在、未來に非ずと名けたまふや。』(六七)佛の言はく、『善男子、(六八)五陰に二種あり。一つには因、二つには果なり。(六九)是の因の五陰は、是過去、現在、未來なり。是の果の五陰は亦是過去、現在、未來。亦過去、現在、未來に非ず。(七〇)善男子、一切の無明煩惱等の結は悉く是佛性なり。何を以ての故に。佛性の因なるが故なり。(七一)無明行、及び諸の煩惱より善の五陰を得、是を佛性と名く。善の五陰より乃至阿耨多羅三藐三菩提を獲得す。(七二)是の故に我經中に於て先に「衆生の佛性は雜血乳の如し」と說けり。血とは卽ち是無明行等の一切の煩惱、乳とは卽ち是善の五陰なり。(七三)是の故に我說かく、「諸の煩惱及び善の五陰より阿耨多羅三藐三菩提を得。衆生身皆精血よりして成就を得るが如く、佛性も亦爾なり。須陀洹の人、斯陀含の人、少しき煩惱を斷ずる佛性は乳の如く、阿那含の人の佛性は酪の如く、阿羅漢の人は猶し生酥の如く、辟支佛より十住の菩薩に至りては猶し熟酥の如く、如來の

世に非ず。前文の「如來菩提を得ずして…過まられざるあり」といへるに今方に轉す。

【六九】因果等。因とは一切の無明煩惱結業なり。惡の五陰は、因、佛性なり。無明煩惱等より生ずる善の五陰とは即ち是れ果性。惡法の五陰は一向に因性、善法の五陰は即ち因果に通ず。因は即ち三世、果は三世に非ず。

【七〇】次に因果の性體。之に二段ありて、初に因體。

【七一】次に果體。之に善陰の果性は因に通じ、陰果は唯果に在りの二段あり。

【七二】第三に引證。之に二段あり、其中初に因を證す。之に法、譬、合の三段あり。

【七三】次に證果。之に法、譬、合の三段あり。

【七四】次に第二に性惑に隱さるるを結す。之に法、譬、合の

佛性は猶し醍醐の如し。

(七四)善男子、現在の煩惱障を作すが爲の故に、諸の衆生をして覩見することを得ざらしむ。香山の中に忍辱草有りて、一切の牛皆能く食することを得るに非ざるが如く、佛性も亦爾なり。是を分別答と名く。」

(七五)迦葉菩薩佛に白して言さく、「世尊、五種、六種、七種の佛性若未來に有らば、(七六)云何ぞ說きて「斷善根の人佛性有り」と言はんや。」(七七)佛の言はく『善男子、諸の衆生過去の業有り、是の業に因るが故に、衆生現在に果報を受くることを得。(七八)未來の業有り、未生を以ての故に終に果を生ぜざる如し。(七九)現在の煩惱有り、(八〇)若煩惱無ければ、一切の衆生應當に了了に佛性を現見すべし。(八一)是の故に斷善根の人、現在世の煩惱の因緣を以て能く善根を斷じ、未來の佛性力の因緣の故に還善根を生ず。』

(八二)迦葉の言さく、『世尊、未來云何ぞ能く善根を生ぜん。』(八三)『善男子、猶し燈日の復未だ生ぜず

三段あり。

【七五】次に第二に正しく性に因て善を生ず。初に問。之に二段ありて初に前の五六七の佛性を牒す。

【七六】次に正問。

【七七】次に佛答。之に三段あり、其中初に雙じて譬ふ。之に又二段ありて初に過去の業の故に現に樂報を受く。

【七八】次に未來の業は未だ生ぜざるが故に終に果を生ぜず。

【七九】第二に雙合。之に二段あり、初に前の過去の業・現在の樂果を合す。即ち現在の煩惱を以ての故に能く善を斷ぜしむるは、必ず過去に由るを合す。現在の煩惱とは、本と是れ過去なるも今現在に寄せてかく云ふなり。

【八〇】次に未來の業未だ生ぜず終に果を生ぜざるを合す。

【八一】第三に雙結。

【八二】次に第三に疑を釋す。初に問。

【八三】次に佛答。之に二段ありて初に譬。

雖も、亦能く闇を破す、未來の生能く衆生を生ずるが如し。(八四)未來の佛性も亦復是の如し、是を分別答と名く。』

(八五)迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、若五陰は是佛性と言はば、云何ぞ説きて、「衆生の佛性内に非ず外に非ず」と言はん。』(八六)佛の言はく、『善男子、何の因縁の故に是の如く意を失ふや。我先に衆生の佛性は是中道と説かずや。』

(八七)迦葉の言さく、『世尊、我實は意を失はず。直ちに衆生此の中道に於て解すること能はざるを以ての故に、故に斯の問を發す。』(八八)『善男子、衆生は即ち是中道を解せず。或時は解する有り、或は解せざる有り。(八九)善男子、我衆生開解を得るが爲の故に、説きて、「佛性は内に非ず外に非ず」と言ふ。何を以ての故に。凡夫衆生、或は佛性は五陰の中に住す、器中に果有るが如しと言ひ、或は「陰を離れて有り、猶し虚空の如し」と言ふ。是の故に如來中道と説きたまふ。衆生の佛性は(九〇)内の六入に非ず、外の六入に非ず、内外合するが故に名けて中道と爲す。(九一)是の故に如來宣説すらく、「佛性は即ち是中道なり。非内、非外、故に中道と名く」と。是を分別答

---

【八四】次に合。
【八五】是より第二に單に中道を明す。之に三段あり、其中初に非内非外の中道。之に兩番の問答あり。先に初番の問。
【八六】次に佛答。
【八七】次に第二番の問答。初に迦葉の自申。
【八八】次に佛答。之に二段あり、其中初に略して大意を明す。之に又三段ありて初に中道の標。
【八九】次に釋。
【九〇】内に非ず外に非ず。内の六根に非ず、故に内に非ず、外の六塵に非ず、故に外に非ずといふ。
【九一】次に結。
【九二】次に第二に廣く中道を明す。之に五復次あり、皆非内非外なり。中に於て二段あり初の一復次は先づ二執。

と名く。

(九二)復次に善男子、云何が名けて非内、非外と爲す。善男子、或は言ふ、「佛性は即ち是外道なり。何を以ての故に。菩薩摩訶薩無量劫に於て外道の中に在りて諸の煩惱を斷じ、其の心を調伏し、衆生を敎化し、然して後乃ち阿耨多羅三藐三菩提を得。是を以て佛性は即ち是外道」と。或は言ふ、「佛性は即ち是内道なり。何を以ての故に。菩薩無量劫の中に於て外道を修習すと雖も、若内道を離るれば、則ち阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。是を以て佛性は即ち是内道」と。是の故に如來此の二邊を遮し、說きて、「佛性は非内非外、亦内外と名く、是を中道と名く」と言ふ。分別答と名く。

(九三)復次に善男子、或は言はく、「佛性は即ち是如來金剛の身、三十二相、八十種好なり。何を以ての故に。不虛誑の故に。」或は言はく「佛性は即ち是十力、四無所畏、大慈大悲及び三念處、首楞嚴等の一切三昧なり。何を以ての故に。是の三昧に因つて金剛身、三十二相、八十種好を生ずるが故に。」是の故に如來、此の二邊を遮し、說いて、「佛性は非内非外、亦内外と名く、是を中道と名く」と言ふ。

(九四)復次に善男子、或は說きて言ふ有り、「佛性は即ち是内の善思惟なり。何を以ての故に。善思惟を離るれば、則ち阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はざるが故に。是の故に佛性は即ち是内の善思惟

【九三】次に四復次は正しく中道を結す。其中の二は初に果の内外に就く。

【九四】次に三は内外因緣に就く。

なり。」或は說いて言ふ有り、「佛性は卽ち是他に從つて法を聞く。何を以ての故に。他に從つて法を聞くは、則ち內善思惟を能くす。若法を聞かざれば則ち思惟無し。是を以て佛性は卽ち是從他聞法」と。是の故に如來此の二邊を遮し、說いて、「佛性は非內非外、亦內外と名く、是を中道と名く」と言ふ。

（九五）復次に善男子、復說いて言ふ有り、「佛性は是外、檀波羅蜜を謂ふ。檀波羅蜜より阿耨多羅三藐三菩提を得。是を以て說いて檀波羅蜜は卽ち是佛性と言ふ」と。或は說いて言ふ有り、「佛性は是內、五波羅蜜を謂ふ。何を以ての故に。是の五事を離るれば、當に知るべし、則ち佛性の因果無し。是を以て說いて五波羅蜜は卽ち是佛性と言ふ」と。是の故に如來此の二邊を遮し、說いて「佛性は非內非外、亦內亦外、是を中道と名く」と言ふ。

（九六）復次に善男子、或は說いて言ふ有り、「佛性は內に在り。譬へば力士の額上にある寶珠の如し。何を以ての故に。常、樂、我、淨は寶珠の如くなるが故に。是を以て說いて佛性は內に在り」と言ふ。或は說いて言ふ有り「佛性は外に在り、貧の寶藏の如し。何を以ての故に。方便して見るが故に。佛性も亦爾なり、衆生の外に在り。方便を以ての故に而も之を見ることを得。」是の故に如來は此の二邊を遮し、說いて「佛性は非內非外、亦內亦外なり、是を中道と名く」と言ふ。

【九五】次に四は內外の行に就く。

【九六】次に五は身の內外に就く。

(九七)善男子、衆生の佛性は有に非ず無に非ず。所以は何ん。佛性は有と雖も虚空の如きに非ず。何を以ての故に。世間の虚空は無量の善巧方便を以てすと雖も、見ることを得べからず、佛性は見るべし。是の故に有と雖も虚空の如きに非ず、佛性は無と雖も兎角に同じからず。何を以ての故に。龜毛、兎角は無量の善巧方便を以てすと雖も生ずることを得べからず。佛性は生ずべし、是の故に無と雖も兎角に同じからず。是の故に佛性は有に非ず無に非ず、(九八)亦有亦無なり。(九九)云何が有と名くる。一切悉く有なり。是の諸の衆生断せず滅せざること、猶し燈燄の如くにして、乃ち阿耨多羅三藐三菩提を得るに至る、是の故に有と名く。云何が無と名くる。一切衆生現在未だ一切の佛法、常、樂、我、淨有らず、是の故に無と名く。(一〇〇)有無合するが故に即ち是中道なり。(一〇一)是の故に佛、衆生の佛性は非有非無と説きたまふ。

(一〇二)善男子、若人の「是の種子の中果有りや果無きや」と問ふ有らば、定んで答へて「亦有亦無」と言ふべし。何を以ての故に。子を離るるの外果を生ずること能はず、是の故に有と名け、子未だ芽を出さず、是の故に無と名く。是の義を以ての故に亦有亦無なり。所以は何ん。時節異有れども其の體は是一つなり。(一〇三)衆生の佛性も亦復是の如

【九七】是より第二に非有非無の中道。之に二段あり、其中初に宗、次に廣く執を破す。初の宗の中、又三段ありて初に非有非無。之に唱、釋、結の三段あり。
【九八】次に亦有亦無。之に三段ありて初に雙唱。
【九九】次に雙釋。
【一〇〇】次に雙結。
【一〇一】次に非有非無を結す。
【一〇二】第二に廣く中に乖くの執を破す。これに三段あり、その中初に種子の譬を以て破す。これにまた三段ありて初に譬。
【一〇三】次に合。之に示、釋の二段あり。

し。若衆生の中、別に佛性有りと言はば、是の義然らず。何を以ての故に。衆生は卽ち佛性、佛性は卽ち衆生なり。直に時異なるを以て淨、不淨有り。(一〇四)善男子、若問うて、「是の子能く果を生ずるや不や。是の果、能く子を生ずるや不や」と言ふ有らば、定んで答へて「亦生、不生」と言ふべし。』

(一〇五)『世尊、世人乳の中に酪有りと說くが如き、是の義云何。』(一〇六)『善男子、若說いて「乳の中に酪有り」と言ふ有らば、是を執著と名け、若「酪無し」と言はば是を虛妄と名く。是の二事を離るれば定んで說いて、「亦有亦無」と言ふべし。何が故ぞ有と名くる。乳より酪を生ず、因は卽ち是乳、果は卽ち是酪なり。是を以て有と爲す。云何が無と名くる。色味各異り、服用同じからず、熱病に乳を服し、下病に酪を服す。乳は冷病を生じ、酪は熱病を生ず。(一〇七)善男子、若乳の中に酪性有りと言はば、乳は卽ち是酪、酪は卽ち是乳なり、其の性是一つなり。何の因緣の故に乳先に在りて出で、酪先に生せざる。若因緣有らば、一切世人何が故ぞ說かざる。若因緣無ければ、何が故ぞ酪先に出でざる。若酪先に出でざれば、誰か次第を乳、酪、生酥、熟酥、醍醐と作る。是の故に知る、「酪先無今有」と。若先無今有ならば是無常の法なり。(一〇八)善男子、若說いて「乳に酪の性有れば能く酪を生じ、水に酪の性無ければ、故に酪を生せず」と言ふ有らば、是の義然らず。何

【一〇四】次に結。
【一〇五】第二に乳酪の譬を以て破す。之に三段あり、其中初に正しく中道を定む。初に問。
【一〇六】次に佛答。之に定む、釋に說くを結す、釋すの三段あり。
【一〇七】次に偏執を破す。之に三段ありて初に因果同時在出の難。
【一〇八】次に因中有果の難。之に二段ありて初に何故。

を以ての故に。水草も亦乳酪の性有り。所以は何ん。水草に因るときは則ち乳酪を出す。若乳の中に
は定んで酪性有り、水草には無しと言はば、是を虚妄と名く。(一〇九)何を以ての故に。心不等の故に、
故に虚妄と名く。(一一〇)善男子、若乳の中に定んで酪有りと言はば、酪の中
にも亦定んで乳の性有るべし。何の因縁の故に、乳の中に酪を生じ、酪は
乳を出さざる。(一一一)若因縁無ければ、當に知るべし、是の酪は本無今有な
ることを。是の故に智者、乳の中に酪性有るに非ず、酪性無きに非ずと言
ふべし。

(一一二)善男子、是の故に如來、是の經中に於て是の如きの言を説きたまふ、
「一切衆生定んで佛性有らば、是を名けて著と爲し、若佛性無ければ、是
を虚妄と名く」と。(一一三)智者「衆生の佛性も亦有亦無」と説くべし。(一一四)善
男子、四事和合して眼識を生ず。何等をか四つと爲す。眼、色、明、欲な
り。是の眼識の性は眼に非ず、色に非ず、明に非ず、欲に非ず。和合に依
るが故に便ち出生を得。是の如く眼識は本無今有、已有還無なり。是の
故に當に知るべし、本性有ること無し。(一一五)乳中の酪性も亦復是の如し。
(一一六)若説きて「水は酪性無きが故に酪を出さず。是の故に乳の中に定んで酪性有り」と言ふ有らば、

【一〇九】次に例ならざるを難ず。
【一一〇】次に果中有因例並の難。之に二段ありて初に正難。
【一一一】次に難を結す。之に本無、非有非無を結するの二段あり。
【一一二】第三に性無に就くを結す。之に二段ありて初に偏を遣るを結す。
【一一三】次に中道を結す。
【一一四】第二に更に乳の爲に生識の譬を作す。之に二段ありて初に正しく生識の譬。
【一一五】次に還た乳酪を以て譬を合す。之に二段ありて初に正しく合す。
【一一六】次に執を破す。之に又二段ありて初に執を牒す。

(二七)是の義然らず。何を以ての故に。一切諸法は異因異果なり。(二八)亦一因は一切の果を生ずるに非ず、一切の果は一因より生ずるに非ず。(二九)善男子、是の如く四事は眼識を生じ、復此の四事より耳識を生ずべしと說くべからず。善男子、方便を離れて乳中に酪を得、酪生酥を出すは是の如くなることを得ず。要ず方便を須つ。善男子、智者は方便を離れて乳より酪を得るを見て、「生酥を得るも、亦是の如く方便を離れて得べし」と謂ふべからず。(三〇)善男子、是の故に我是の經中に於て說かく、「因生ずるが故に法有り、因滅するが故に法無し」と。

(三一)善男子、鹽性は鹹く、能く鹹きに非ざるをして鹹からしむるが如き、若非鹹の物先より鹹性有らば、世人何が故ぞ更に鹽を求むるや。若先より無なれば、當に知るべし、先無今有、餘緣を以ての故に鹹きを得るなり。(三二)若一切不鹹の物皆鹹性有りて微なるが故に知らず、此の微性に由りて鹽能く鹹からしむ。若本性無ければ、復鹽有りと雖も鹹からしむること能はず。譬へば種子自ら四大有り、外の四大に緣りて芽莖、枝葉を增長することを得るが如く、(三三)鹽性も亦爾なりと言ふ。是の義然らず。(三四)何を

【二七】次に正しく破す。之に二段あり、其中初に前章門。之に又二段ありて、初の異因異果は是れ初章門。

【二八】次の第一因生一切果は是れ次章門。

【二九】次に章門を釋す。之に二段ありて初に後の章を釋す。

【三〇】追て前章を釋す。

【三一】第三に鹽鹹の譬を以て破す。之に二段ありて初に譬。

【三二】次に更に執を破す。之に二段ありて初に執を牒す。之に鹽中に鹹有るの執、種子中に四大有るの執を牒すの二段あり。

【三三】次に正しく破す。之に二段あり、其中初に不鹹の中に鹹有るを破す。之に又二段ありて初に非。

【三四】次に正しく破す。之に責難、餘物を例すの二段あり。

以ての故に。不鹹の物先より鹹性有らば、鹽も亦微不鹹の性有るべし。是の鹽若是の如き二性有らば、何の因緣の故に、不鹹物を離れて獨用すべからず。是の故に鹽本二性無きことを知る。鹽の如く一切不鹹の物も亦復是の如し。(二三五)若外の四大種方能く內の四大を增長すと言ふは、是の義然らず。何を以ての故に。次第に說くが故に方便に從はず。(二三六)乳の中に酪を得、生酥乃至一切諸法、皆是の如くならず。方便得に非ず。四大も亦復是の如し。若外の四大に從ひて內の四大を增すと說かば、內の四大に從ひて外の四大を增すを見ず。(二三七)尸利沙果は先に形質無し、昴星を見る時果則ち出生して長さ五寸に足るが如し。是の如く果實外の四大に因りて增さず。

(二三八)善男子、我が所說の十二部經の如き、或は自意に隨ひて說き、或は他意に隨ひて說き、或は自他意に隨ひて說く。

(二三九)云何が名けて隨自意說と爲す。五百の比丘舍利弗に問はく、大德、佛身因を說きたまふ、何物か是なるや。舍利弗の言はく、諸の大德、汝等も亦各正解脫を得、自ら之を識るべし。何に緣りてか方に是の如きの問を作すや。比丘有りて言はく、大德、我未だ正解脫を獲得せざるの時、無明は即ち是身因と意謂ふ、是の觀を作す時阿羅漢果

【二三五】次に四大を破す。之に二段ありて初に破す。

【二三六】次に[illegible]。

【二三七】尸利沙（シーリシャ）（[illegible]）樹と譯す、[illegible]名に[illegible]。昴星は梵に（クリツテイカー）[illegible]火神の主宰に屬す、西方七星の一。

【二三八】是より第三に說法に約して廣く中道を明す。之に三段あり、其中初に理に依て教を起すの用、之に二段、初に明[illegible]

【二三九】次に[illegible]、之に二段あり、其中初に[illegible]にて三語を明す。之に又二段ありて初に昔教に就く、[illegible]初に[illegible]

を得。」復說いて言ふ有り、「大德、我未だ正解脱を獲得せざるの時、愛無明は卽ち是身因と謂ふ、是の觀を作す時阿羅漢果を得。」或は復說いて「行、識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、飮食、五欲は卽ち是身因」と言ふ。爾の時に五百の比丘各各自ら己が解する所を說き已りて共に佛所に往き、佛足を稽首し、右繞すること三帀、禮拜已りて却つて一面に坐し、各上の如く、己が所解の義を以て佛に向つて之を說きたてまつる。舍利弗佛に白して言さく、「世尊、是の如き諸人誰か是正說、誰か正說ならざるや。」佛舍利弗に告げたまはく、「善い哉善い哉、一一の比丘正說に非ざる無し。」舍利弗の言さく、「世尊、佛意は云何。」佛の言はく、「舍利弗、我欲界の衆生の爲に說いて、父母は卽ち是身因と言ふ」か如し。是の如き等の經を（三〇）隨自意說と名く。

（三一）云何が名けて隨他意說と爲す。把吒羅長者我が所に來至して、是の如きの言を作さく、「瞿曇、汝幻を知るや不や。若幻を知る者は卽ち大幻人なり。若知らざる者は一切智に非ず。」我言はく、「長者、幻を知るの人を幻人と名けんや。」長者言はく、「善い哉善い哉、知幻の人は卽ち是幻人なり。」佛の言はく、「長者、舍衞國內波斯匿王に旃陀羅の名を氣歔と曰ふ有り、汝知るや不や。」長者答へて言はく、「瞿曇、我久しく之を知る。」佛の言はく、「汝久しく知らば、卽ち是旃陀羅なることを得べきや不や。」長者の言はく、「瞿曇、我是の旃陀羅を知ると雖も、然も我が此の身は旃陀羅

【三〇】隨自意說。諸比丘各各身因を說き、佛亦た自ら說くが故に隨自意なり。

【三一】次に隨他意說。文の中、把吒羅（Pāṭala）とは、灰色と譯す。

に非ず。」佛の言はく、「長者、汝是の義、旃陀羅を知れども旃陀羅に非ざるを得。我今何が故ぞ幻を知れども幻に非ざるを得ざらん。長者、我實に幻を知り幻人を知り、幻の果報を知り、幻の技術を知る。我殺を知り、殺人を知り、殺の果報を知り、殺の解脫を知る。乃至邪見を知り、邪見の人を知り、邪見の果報を知り、邪見の解脫を知る。長者、若非幻の人を說きて名けて幻人と爲し、非邪見の人を邪見人と說かば無量の罪を得ん。」長者の言はく、「瞿曇、汝の所說の如くば、我大罪を得ん。我今所有の悉くを以て相上る。幸はくは彼の波斯匿王をして我が此の事を知らしむること莫れ。」佛の言はく、「長者、是の罪の因緣必ずしも財を失はず、乃ち當に是に因りて三惡道に墮すべし。」是の時に長者、惡道の名を聞きて心に恐怖を生じ、佛に白して言さく、「聖人、我今意を失ひ、大罪を獲得す。聖人は今者是一切智なり、應當に解脫を獲得することを了知すべし。我當に云何が地獄、餓鬼、畜生を脫することを得べき。」爾の時に我爲に四眞諦を說けり。長者聞き已りて須陀洹果を得、心に慚愧を生じ、佛に向ひて懺悔す、「我本愚癡、佛幻人に非ざるを而も是幻と言ふ、我今日より三寶に歸依せん。」佛「善い哉善い哉長者」と言ふが如し。(一三〇)是を隨他意說と名く。

(一三一)云何が名けて隨自他意說と爲す。我が所說の如く、一切世間の智者有と說かば、我も亦有と說き、智者無と說かば我も亦無と說き、世間の智人五欲樂は無常、苦、無我、可斷有りと說かば我も亦有と

【一三〇】隨他意語。長者幻と稱し、佛其れに隨て幻を說くが如きは、即ち隨他意なり。

【一三一】次に隨自他意。

【一三二】第三に今教に續く。之に二段ありて初に隨他語。

說き、世間の智人五欲樂は常、我、淨有らば是の處有ること無しと說かば、我も亦是の如く是の處無しと說くが如し。是を隨自他意說と名く。

（二三四）善男子、我が所說の如く「十住の菩薩少しく佛性を見る」と、是を隨他意說と名く。何が故ぞ少見と名くる。十住の菩薩首楞嚴等の三昧、三千の法門を得。是の故に了了に自ら當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきを知る。一切衆生定んで阿耨多羅三藐三菩提を得るを見ず。是の故に我「十住の菩薩少分佛性を見る」と說く。

（二三五）善男子、我常に「一切衆生悉く佛性有り」と宣說す。是を隨自意說と名く。一切衆生不斷、不滅、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得、是を隨自意說と名く。

（二三六）一切衆生悉く佛性有り、煩惱覆ふが故に見ることを得ること能はず。我が說は是の如く、汝が說も亦爾なり。是を隨自他意說と名く。

（二三七）善男子、如來或時一法の爲の故に無量の法を說きたまふ。經中に「一切の梵行は善知識に因る」と說くが如し。一切の梵行の因は無量と雖も、善知識と說かば、則ち已に攝し盡す。我が一切の惡行邪見を因と爲すと說く所の如し。一切の惡行の因無量と雖も、若邪見と說くときは則ち已に攝し盡す。或は阿耨多羅三藐三菩提、信心を因と爲すと說く。是の菩提の因は復無量と雖も、若信心と說くとき

【二三五】次に隨自語。
【二三六】次に隨自他語。
【二三七】第二に別して隨自意語を明す。之に三段ありて初に廣略の隨自意。

波利質多羅樹、七寶聚、大海、須彌山、大地、大雨、船師、導師、調御丈夫、力士、牛王、婆羅門、沙門、大城、(一四四)多羅樹、是の如きの喩經を名けて隨語と爲す。(一四五)云何が不應語なる。我經中に說かく「天地合すべく、河海に入らず。波斯匿王の爲に四方より山來る」と說くが如し。(一四六)鹿子母優婆夷の爲に「若し(一四七)娑羅樹能く八戒を受くれば、則ち人天の樂を受くることを得ん」と說くが如し。寧ろ十住の菩薩退轉の心有りと說けども、如來に二種の語有りと說かず。寧ろ須陀洹の人三惡道に墮すと說けども、十住退轉心有りと說かず。是を不應語と名く。(一四八)云何が世流布語なる。佛の所說の如く男女、大小、去來、坐臥、車乘、房舍、缾衣、衆生なり、常樂我淨なり、軍林城邑なり、幻化合散なり。是を世流布語と名く。(一四九)云何が如意語なる。我毀禁の人を呵責して、彼をして自ら責めて禁戒を護持せしむるが如し。我須陀洹の人を讃歎して、諸の凡夫をして善心を生ぜしむ。菩薩を讃歎して、衆生をして菩提心を發さしむるが爲にす、三惡道の所有の苦惱を說いて諸の善法を修習せしむるが爲の故に。一切燒と說く、唯一切有爲法の爲の故に。無我も亦爾なり、諸の衆生悉く佛性有りと說く、一切をして放逸せざらしむるが爲の故なるが如し。是を如意語と名く。

---

【一四四】多羅(Tāla)。高竦樹と譯す。

【一四五】次に不應語。

【一四六】鹿子母は梵名蜜利伽羅磨多(Mṛgāramātā)の譯。

【一四七】娑羅(Sāla)。堅固樹と譯す。

【一四八】次に世流布語。

【一四九】次に如意語。

【一五〇】第三に有無隨自意。之に三段あり、其中初に正しく有無を明す。之に又如來の佛性の有無の二段あり、初の中、又有無、類例釋の二段あり、有無の中、初に有。

（二五〇）善男子、如來復隨自意語有り。如來の佛性は則ち二種有り。一つには有、二つには無なり。有とは所謂三十二相、八十種好、十力、四無所畏、三念處、大慈大悲、首楞嚴等の無量の三昧、金剛等の無量の三昧、方便等の無量の三昧、五智等の無量の三昧なり。是を名けて有と爲す。（二五一）無とは所謂如來の過去の諸の善、不善、無記、業因、果報、煩惱、五陰、十二因緣なり。是を名けて無と爲す。（二五二）善男子、有無、善不善、有漏無漏、世間非世間、聖非聖、有爲無爲、實不實、寂靜非寂靜、諍非諍、界非界、煩惱非煩惱、取非取、受記非受記、有非有、三世非三世、時非時、常無常、我無我、樂無樂、淨無淨、色受想行識非色受想行識、內入非內入、外入非外入、十二因緣非十二因緣の如し。是を如來の佛性の有無と名く。（二五三）乃至一闡提の佛性の有無も亦復是の如し。

（二五四）善男子、我說いて、「一切衆生悉く佛性有り」と言ふと雖も、衆生は佛の是の如き等の隨自意語を解せず。（二五五）善男子、是の如きの語は後身の菩薩尚解する能はず。況や二乘及び其の餘の菩薩に於てをや。（二五六）善男子、我往一時耆闍崛山に在りて彌勒菩薩と共に世諦を論ず。（二五七）舍利弗

---

【二五一】次に無。

【二五二】次に類例釋。

【二五三】次に闡提の佛性の有無。

【二五四】第二に衆生は如來の是の語を解せざることを明す。之に正しく不解を出し、昔を引て證するの二段あり。初の不解を出す中、又二段ありて初に不解。

【二五五】次に深を擧げて淺を況す。

【二五六】次に引證。

【二五七】聲聞世諦を解せず。之に二解あり。一に世諦種別にして事闕く、業行因果深隱なるが故に。二に應身を世諦となす、故に二乘了ぜず。

【二五八】第三に四句分別を作る。之に二段ありて初に正しく四句に約す。一闡提には有り、善根人には無し等とは、舊解は此の四句を三性に約して論ず。河西は五陰の三性に約して辨ぜるも舊解と語異意同の

等の五百の聲聞、是の事中に於て都て識知せず、何に況んや出世の第一義諦をや。(二五八)善男子、或は佛性一闡提には有り、善根の人には無き有り、或は佛性善根の人には有り、一闡提には無き有り。或は佛性二人倶に有る有り、或は佛性二人倶に無き有り。(二五九)善男子、我が諸の弟子若し是の如きの四句の義を解する者、難じて「一闡提の人定んで佛性有りや定んで佛性無きや」と言ふべからず。若し「衆生悉く佛性有り」と言はば、是を如來の隨自意語と名く。如來の是の如き隨自意語、衆生云何ぞ一向に解を作さん。

(二六〇)善男子、恆河の中に七衆生有るが如し。一つには常に沒す、二つには暫く出でて還沒す、三つには出で已りて則ち住す、四つには出で已りて徧く四方を觀る、五つには徧く觀已りて行く、六つには行き已りて復住す、七つには水陸倶に行く。常に沒すとは、所謂大魚の大惡業を受け、身重く處深し、是の故に常に沒す。暫く出でて還沒すとは、是の如き大魚惡業を受くるが故に、身重く處淺くして暫く光明を見る。光に因るが故に暫く出で、重きが故に還沒す。出で已りて則ち住すとは、謂はく(二六一)坻彌魚なり。身淺水に處し、樂みて光明を見る、故に出で已りて住す。徧く四方を觀



今。[illegible]此を[illegible]するに一句よりと句に至り、次三[illegible]作[illegible]三[illegible]は一に總じて諸[illegible]、二は[illegible]門外に就くと、三に[illegible]門内に就く、となり、此の[illegible]な出せり。然るに章安の意は、出沒三諦の二釋なり。出沒とは闡提有るは但だ沒あり、善根人有るは但だ出に於てす、二人倶有は倶に恆河に在り、二人倶無は倶に岸に到らずとす。次に三諦とは、闡提有るは世諦の惡因、善根人有るは出世の善因、二人倶有は世諦果報の身あり、二人倶無は倶に中道の因果なしとするなり。

【二五九】次に分別を勸む。

【二六〇】是より第二に因を修して果に趣くの用。亦是れ譬に約して中道を明す。之に譬、合、結の三段あり。初に譬。之に

るとは、所謂時魚なり。食を求むるが爲の故に徧く四方を觀る。是の故に方を觀る。觀已りて行くとは、謂はく是の時魚遙かに餘物を見て是れ食ふべしと謂ひて、疾く行きて之に趣く。故に觀已りて行く。行き已りて復住すとは、是の魚趣き已りて既に食すべきを得ば、即便停住す。故に行き已りて復住す。水陸倶に行くとは、即ち是れ龜なり。(一六二)善男子、是の如き微妙の大涅槃河は、其の中亦七種の衆生有り。初の常沒より乃至第七なり。或は入り或は出づ。(一六三)常に沒すとは、人有りて「是の大涅槃經の如來常住にして變易有ること無く、常、樂、我、淨なり。終に畢竟して涅槃に入らず。一切衆生悉く佛性有り。一闡提の人は、謗方等經、作五逆罪、犯四重禁なり、必ず當に菩提の道を成ずることを得べし。須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛等は、必ず當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べき」を聞く。是の語を聞き已りて、不信心を生じて即ち是の念を作す。(一六四)是の念を作し已りて便ち是の言を作さく、「是の涅槃典は即ち外道の書なり、是れ佛經に非ず」と。是の人爾の時に善友を遠離し、正法を聞かず、時に聞くことを得と雖も思惟すること能はず、設ひ思惟すと雖も、善を思惟せず。(一六五)惟善を思はざるが故に惡法の如く住す。惡法住とは即ち六種有り。一つには惡、二つには無善、三つには汙法、四つには増有、五つには熱惱、六つには受惡果なり。是を名けて沒と爲す。何が故ぞ沒と名くる。

---

總別の二段あり。

【一六一】坻彌（テイミ）。大魚の名。

【一六二】次に合す。之に二段ありて初に總合す。

【一六三】次に別合。之に七段あり、其中初に常沒を合す。之に又四段ありて初に常沒を合す。

【一六四】次に惡に向ふを合す。

【一六五】次に生惡を合す。

善心無きが故に、常に惡を行ずるが故に、對治を修せざるが故に、是を名けて沒と爲す。惡とは、惡人呵責するが故に、心怖畏を生ずるが故に、善人を遠離するが故に、衆生を益せざるが故に、是を名けて惡と爲す。無善とは、能く無量の惡果報を生ずるが故に、常に無明に纏繞せらるるが故に、樂んで惡人と等侶と爲るが故に、善の諸の方便を修すること有ること無きが故に、其の心顚倒し常に錯謬するが故に、是を無善と名く。汙法とは、常に身口を汙すが故に、淨衆生を汙すが故に、不善業を增すが故に、善法を遠離するが故に、是を汙法と名く。增有とは、上の如きの三人所行の法は、能く地獄、畜生、餓鬼を增す。解脫の法には修習すること能はず。身、口、意業諸有を厭はず。是を增有と名く。惱熱とは、是の人具さに上の如きの四事を行じて、能く身心をして二事煩惱し、寂靜を遠離せしむ、則ち名けて熱と爲す。地獄の報を受く、故に名けて熱と爲す。諸の衆生を燒く、故に名けて熱と爲す。諸の善法を燒く、故に名けて熱と爲す。善男子、信心清涼是の人具せず、是の故に熱と名く。受惡果とは、是の人具足して上の五事を行じ、死して地獄、餓鬼、畜生に墮す。善男子、三惡事有りて復惡果と名く。一つには煩惱惡、二つには業惡、三つには報惡なり。是を受惡果報と名く。(一六六)善男子、是の人上の如きの六事を具足すれば、能く善根を斷じ、五逆罪を作り、能く四重禁を犯し、能く三寶を謗り、衆の僧物を用ひ、能く種種非法の事を作す。是の因緣の故に沈沒して阿鼻地獄に在り、所受の身形廣縱八萬四千由延なり。是の人

【一六六】次に斷善人を合す。

身、口、意業重きが故に出づることを得ること能はず。何を以ての故に。其の心善法を生ずること能はざるが故に。無量の諸佛世に出づる有りと雖も、聞かず、見ず。故に常沒と名く。恆河中の大魚の如し。(二六七)善男子、我復「一闡提等を名けて常沒と爲す」と說くと雖も、復常沒の一闡提に非ざる有り。何者か是なるや。人有の爲に施、戒、善を修するが如し。是を常沒と名く。善男子、四つの善事の惡果を獲得する有り。何等をか四つと爲す。一つには他に勝るが爲の故に經典を讀誦す、二つには利養の爲の故に禁戒を受持す、三つには他屬の爲の故に布施を行ず、四つには非想非非想處の爲の故に繫念思惟す。是の四善事は惡果報を得。若人是の如きの四事を修集すれば、是を沒し已りて還出で、出で已りて還沒すと名く。(二六八)何が故ぞ沒と名くる。三有を樂むが故に。何が故ぞ出と名くる。明を見るを以ての故なり。明とは即ち是聞、戒、施、定なり。何が故ぞ還沒する。邪見を增長し憍慢を生ずるが故に。是の故に我經中に於て偈を說かく、

「苦樂生有りて諸有を樂ひ、有の爲に善惡業を造作せば、
是の人涅槃道を迷失す、是を暫出還復沒と名く、
黑闇生死海を行き、解脫を得煩惱を離ると雖も、
是の人還惡果報を受く、是を暫出還復沒と名く。」

【二六七】次に第二に暫出還沒の人を合す。之に四段ありて初に起行の理に背く。

【二六八】次に出沒の義を釋す。

善男子、彼の大魚の光を見るに因るが故に、稍く水を出づることを得、其の身重きが故に還復た沒するが如し。上の如きの二人も亦復是の如し。善男子、或は復人有りて三有に樂著す、是を名けて沒と爲す。是の如き大涅槃經を聞くことを得て信心を生ず、是を名けて出と爲す。何の因緣の故に之を名けて出と爲す。是の經を聞き已りて惡法を遠離し、善法を修習す。是を名けて出と爲す。（一六九）是の人信ずと雖も亦具足せず。何の因緣の故に信具足せざる。是の人大般涅槃、常、樂、我、淨を信ずと雖も、如來身は無常、無我、無樂、無淨と言ふ。如來は則ち二種の涅槃有り。一つには有爲、二つには無爲なり。有爲涅槃は常、樂、我、淨無く、無爲涅槃は常、樂、我、淨有り。佛性は是衆生有と信ずと雖も、必ずしも一切皆悉く之有らず。是の故に名けて信不具足と爲す。善男子、信に二種有り。一つには信、二つには求なり。是の如きの人復信有りと雖も、推求すること能はず。是の故に名けて信不具足と爲す。信復二つ有り。一つには聞より生じ、二つには思より生ず。是の人の信心聞より生じて思より生ぜず。是の故に名けて信不具足と爲す。復二種有り。一つには有道を信じ、二つには得者を信ず。是の人の信心唯有道を信じて、都て得道の人有るを信ぜず。是の故に名けて信不具足と爲す。復二種有り。一つには正を信じ、二つには邪を信ず。因果有り、佛、法、僧有りと言ふ、是を信正と名く。因果無く、三寶性異と言ふ。諸の邪語、（一七〇）富蘭那等を信ず、是を信邪と名く。是の

【一六九】次に行の不具足。之に正しく其人を出し、結するの二段あり。正しく其人を出すの中又五段ありて初に信不具。

【一七〇】富蘭那に具さに富蘭那迦

人、佛、法、僧寶を信ずと雖も、三寶同一性相を信ぜず、因果を信ずと雖も得者を信ぜず。是の故に名けて信不具足と爲す。（一七二）是の人不具足信を成就し、受くる所の禁戒も亦具足せず。何の因緣の故に不具足と名くる。不具に因るが故に所得の禁戒も亦具足せず。復何の因緣か不具足と名くる。戒に二種有り。一つには威儀戒、二つには從戒戒なり。是の人威儀等の戒を具すと雖も從戒戒を具せず。是の故に名けて戒不具足と爲す。復二種有り。一つには作戒、二つには無作戒なり。是の人作戒を具すと雖も無作戒を具せず。是の故に名けて戒不具足と爲す。復二種有り。一つには身口に從ひて正命を得、二つには身口に從ひて正命を得ず。是の人身口に從ふと雖も正命を得ず。是の故に名けて戒不具足と爲す。復二種あり。一つには求戒、二つには捨戒なり。是の人有を求むるの戒を具すと雖も捨戒を得ず。是の故に名けて戒不具足と爲す。復二種有り。一つには隨有、二つには隨道なり。是の人隨有の戒を具すと雖も、隨道を具せず。是の故に名けて戒不具足と爲す。復二種有り。一つには善戒、二つには惡戒なり。身、口、意善、是を善戒と名け、牛戒、狗戒、是を惡戒と名く。是の人深く是の二種の戒俱に善果有りと信ず。是の故に名けて戒不具足と爲す。（一七三）是の人信、戒二事を具せざれば、所修の多聞も亦具足せず。云何が名けて聞不具足と爲す。如來所說の十二部經、唯六部を信じて六部を信ぜず。是の故に名けて聞不具足と爲す。復是の六部經を受持すと

葉波。迦葉（Kāśyapa）は飲光又は龜光（西藏譯）と譯し、母の名。富蘭那（Pūraṇa）は滿と譯し、其の本名なり。空見外道の祖。

【一七二】次に戒不具足。

【一七三】次に聞不具足。

雖も、讀誦し、他の爲に解說する能はず、利益する所無し。是の故に名けて聞不具足と爲す。又復是の六部經を受け已りて、論議の爲の故に、勝他の爲の故に、利養の爲の故に、諸有の爲の故に、持讀誦說す。是の故に名けて聞不具足と爲す。善男子、我經中に於て聞具足を說く。云何が具足する。若し比丘有りて身、口、意善なり。先能く和上諸師、有德の人を供養す。是の諸師等是の人の所に於て愛念心を生じ、是の因緣を以て經法を敎授す。是の人至心に受持し誦習す。(受)持、誦習し已りて智慧を獲得す。智慧を得已りて能善く思惟し如法に住す。善く思惟し已れば則ち正義を得。正義を得已りて身心寂靜なり。身心寂し已れば則ち喜心生ず。喜心の因緣心則ち定を得。得定に因るが故に正知見を得。正知見し已れば諸有の中に於て心厭悔を生ず。諸有を悔ゆるが故に能く解脫を得。是の人是の如き等の事有る無し。是の故に名けて聞不具足と爲す。(一七三)是の人是の如きの三事を具せざれば施も亦具せず。施に二種有り。一つには財施、二つには法施なり。是の人復財施を行ずと雖も、有を求むるが爲の故に法施を行ずと雖も亦具足せず。何を以ての故に。祕して盡く說かず、他の勝を畏るるが故なり。是の故に名けて施不具足と爲す。財法の二施各二種有り。一つには聖、二つには非聖なり。聖は施し已りて果報を求めず、非聖は施し已りて果報を求む。聖者の法施は法を增長するが爲にし、非聖の法施は諸有を增すが爲にす。是の如きの人は財を增すが爲の故に財施を行じ、有を增すが爲の故に法施を行ず。是の故に名けて施不具足と爲す。

【一七三】次に施不具足。

復次に是の人は六部經を受く。受法の者を見れば之に供給し、不受法の者には則ち供給せず。是の故に名けて施不具足と爲す。（一四）是の人上の如き四事を具せざれば所修の智慧も亦具足せず、智慧の性性能く分別す。是の人如來是常、無常を分別する能はず。如來は此の涅槃經中に於て、說いて「如來は即ち是解脫、解脫は即ち是如來、如來は即ち是涅槃、涅槃は即ち是解脫」と言ふ。是の義中に於て分別する能はず。梵行は即ち是如來、如來は即ち是慈悲喜捨、慈悲喜捨は即ち是解脫、解脫は即ち是涅槃、涅槃は即ち是慈悲喜捨なり。是の義中に於て分別する能はず。是の故に名けて智不具足と爲す。復次に佛性は即ち是如來と分別する能はず。如來は即ち是一切不共の法、不共の法は即ち是解脫、解脫は即ち是涅槃、涅槃は即ち是不共の法なり。是の義中に於て分別する能はず。是の故に名けて智不具足と爲す。復次に四諦苦集滅道を分別する能はず。四眞諦を分別する能はざるが故に聖行を知らず、聖行を知らざるが故に如來を知らず、如來を知らざるが故に解脫を知らず、解脫を知らざるが故に涅槃を知らず。是の故に名けて智不具足と爲す。

（一五）是の人是の如きの五事を具せざれば二種有り。一つには增善法、二つには增惡法なり。云何が名けて惡法を增長すと爲す。是の人己不具足を見ず、自ら具足と言ひて著心を生じ、同行中に於て自ら謂つて勝と爲す。是の故に己に同ずる惡友に親近す。即ち親近し已りて復更に不具足法を聞くを得。聞き已りて心喜び、其の心染著し驕慢を起して多く放逸を行ず。放逸に因るが故に在家に親近す。亦

【一四】次に智不具足。
【一五】次に轉じ

樂ひて在家の事を開說し、清淨出家の法を遠離す。是の因緣を以て惡法を增長す。惡法を增すが故に身、口、意等の不淨業を起す。三業不淨の故に地獄、畜生、餓鬼を增長す。是を暫出還沒と名く。(一七六)暫出還沒とは我が佛法の中其誰か是なる。謂く提婆達多、(一七七)瞿伽離比丘、剜手比丘、善星比丘、(一七八)坻舍比丘、滿宿比丘、慈地比丘尼、曠野比丘尼、方比丘尼、慢比丘尼、淨潔長者、求有優婆塞、(一七九)舍勒釋種、象長者、名稱優婆夷、光明優婆夷、難陀優婆夷、軍優婆夷、鈴優婆夷なり。是の如き等の人を名けて暫出還沒と爲す。譬へば大魚の明を見るが故に出で、身重きが故に沒するが如し。

(一八〇)第二の人は深く自ら行の具足せざるを知見す。不具足の故に善友に近くを求む。善友に近くが故に、樂ひて未聞を咨ふ。聞き已りて樂受す。受け已りて樂んで善く思惟す。善く思惟し已りて能く法の如く住す。如法に住するが故に善法を增長す。善法を增すが故に終に復沒せず。是を名けて住と爲す。(一八一)我が佛法の中に其誰か是なるや。謂はく舍利弗、大目揵連、阿若憍陳如等の五比丘、耶舍等の五比丘、阿㝹樓陀、童子迦葉、摩訶迦葉、十力迦葉、瘦瞿曇彌比丘尼、波羅華比丘尼、勝比丘尼、實義比丘尼、意比丘尼、跋陀比丘尼、淨比丘尼、不退轉比丘尼、頻婆娑羅王、郁伽長者、須達多長者、釋摩男、貧須達多、鼠狼長者子、名稱長者、具足長者、師子

【一七六】次に別して人を出す。
【一七七】瞿伽離(Kokālika)。牛守と譯す、惡逆者提婆の弟子。邪信を抱く。
【一七八】坻舍(Tiṣya)。圓滿と譯す星に因て名を立つ。
【一七九】舍勒(?)。安註曰く、「內衣、裙と譯す、また涅槃僧の名あり。」
【一八〇】次に第三に得住の人を合す。之に四段、初に本起。
【一八一】次に得住。

將軍、優波離長者、刁長者、無畏優婆夷、善住優婆夷、愛法優婆夷、勇健優婆夷、天得優婆夷、善生優婆夷、具身優婆夷、牛得優婆夷、曠野優婆夷、(一八二)摩訶斯那優婆夷なり。是の如き等の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を名けて住と爲すことを得。云何か住と爲す。常に樂ひて善光明を視見するが故に。是の因緣を以て、若は佛出世し、若は出世せざるも、是の如き等の人終に惡を造らず。是を名けて住と爲す。(一八三)坻彌魚の樂ひて光明を見、沈まず沒せざるが如く、是の如き等の衆も亦復是の如し。是の故に我經中に於て偈を說かく、

「若人善能く義を分別して、至心に沙門果を求め、
若能く一切有を呵責せば、是の人を名けて如法住と爲す、
若能く無量の佛を供養せば、則ち能く無量世に道を修す、
若世樂を受けて放逸せずんば、是の人を名けて如法住と爲す、
善友に親近して正法を聽き、內に善く思惟して如法に住し、
樂ひて光明を見道を修習せば、解脫を獲得して安隱に住す」と。』

【一八二】摩訶斯那(Mahāsena)。大軍と譯す。
【一八三】坻彌(Timi)。大魚の名。

# 卷の第三十三

## 迦葉菩薩品の三

（一）『善男子、智不具足は凡て（二）五事有り。是の人知り已りて善友に近く、何ことを求む。（三）是の如きの善友當に是の人の貪欲、瞋恚、愚癡、思覺、何者か偏に多きを觀ずべし。若し是の人貪欲多きを知らば、即ち爲に不淨觀法を說くべし。瞋恚多き者には爲に慈悲を說き、思覺多き者には教へて數息せしめ、著我多き者には、當に爲に十八界等を分析すべし。是の人聞き已りて至心に受持し、心に受持し已りて法の如く修行す。（四）法の如く行じ已りて次第に（五）四念處觀、身受心法を獲得す。（六）是の觀を得已りて次第に復十二因緣を觀ず。（七）是の如く觀じ已りて次に煖法を得。』

（八）迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、一切衆生悉く煖法有り。（九）何を以ての故に。佛の所說の如く三法和合を名けて衆生と爲す。一つには壽、二つには煖、三つには識なり。若し是の義に從はば、一切衆生先より煖有る

---

【一】是より前聞に行法の文。之に修行、通別、名義、八義、結住の五段あり。其中前の修行に又四段ありて、先づ不淨[illegible]、之に二段あり、前に[illegible]なり。

【二】五事とは信、戒、施、聞、慧なり。

【三】次に四法。

【四】次に念處觀。

【五】身受心法の四觀念を對象として之を次第の如く不淨、苦、無常、無我なりと觀ずる方法に四念處といふ、處は對象の義なり。而してかく一對象に就て一觀念を得るを法の別相念處と云ふ。反之同時

べし。云何ぞ如來說きて「煗法善友に因りて生ず」と言ふ。』

（一〇）佛の言はく、『善男子、汝が問ふ所の「煗法有り」の如きは、一切衆生一闡提に至りて皆悉く之有り。我が今者說く所の煗法の如きは、要ず方便に因りて然して後乃ち得。本無今有なり。是の義を以ての故に、諸の衆生一切先より有るに非ず。是の故に汝今難じて「一切衆生皆煗法有り」と言ふべからず。（一一）善男子、是の如く煗法は是色界法にして欲界の有に非ず。若し一切衆生有りと言はば、欲界の衆生も亦皆有るべし。欲界に無きが故に、當に知るべし、一切必ずしも悉く有らず。（一二）善男子、色界は有りと雖も、一切有るに非ず。何を以ての故に。我が弟子には有り、外道には則ち無し。是の義を以ての故

---

に四概念に就て不淨なりと觀ずるを法の總相を觀ずといふ。乃至苦、[illegible]亦是の如し。これ等の[illegible]の[illegible]を別相念處・總相念處といふ、共に四念處觀に於ける[illegible]式の差なり。[illegible]して[illegible]觀は深く、別[illegible]は[illegible]しと云ふを得。

【六】次に因緣觀。

【七】次に煗法觀。

【八】次に第二に通別に煗法を料簡す。之に問、答の二段あり。初の問に又二段ありて、[illegible]法に[illegible]して、人通するの問を爲す。

【九】次に引證。

【一〇】次に佛答。之に二段あり。初に問を非す。

【一一】次に正答。之に二段ありて初に地別。即ち色界には有、欲界には無なりと說く。煗法の色有欲無に付て安註三義を出す。一に、多く色定を用つて善法の觀を發すれば多に從つて言を爲す。二に中間に據る、即ち三界皆能く善法を發す、色界は三界の中間に居するが故に言を爲す。三に、勝處に據る、即ち色界は觀を發すること易にして、欲界は難き[illegible]故に言を爲す。

【一二】次に人別。即ち我が弟子には有、外道には則ち無なるを說く。

【一三】六行十六行。六行とは、上の[illegible]出[illegible]欣[illegible]し、下の苦[illegible]障を厭離するを云ふ。十六行とは即ち四諦の下の十六。亦た是れ苦法忍、苦法智、苦比忍、苦比智等なり。

【一四】次に第三に名體を定む。之に問、答の二段あり、其中初の問に名を問ふ、體を問ふの二段あり。

【一五】次に佛答。之に二段ありて先には後の問を答へ、後に

に、一切衆生必ずしも悉く有らず。善男子、一切外道は唯(一三)六行を觀じ、我が諸の弟子は十六を具足す。是の十六行は一切衆生必ずしも悉く有らず。』

(一四)迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、言ふ所の煖法は云何が煖と名くる。自性煖とや爲ん、他の故に煖とや爲ん。』(一五)佛の言はく『善男子、是の如きの煖法は自性是煖、他の故に煖なるに非ず。』(一六)迦葉菩薩の言さく、『世尊、如來先に說きたまふに(一七)馬師(一八)滿宿は、煖法有ること無し。何を以ての故に。三寶の所に於て信心無きが故に、是の故に煖無し。當に知るべし、信心は卽ち是煖法なることを。』(一九)『善男子、信は煖法に非ず。何を以ての故に。信心に因りて後煖を得るが故なり。善男子、夫煖法とは卽ち是智慧なり。何を以ての故に。四諦を觀ずるが故に。是の故に之を名けて十六行と爲す、行は卽ち是智なり。(二〇)善男子、汝が問ふ所の如き、何の因緣の故に名けて煖と爲すとは、善男子、夫煖法とは卽ち是八聖道の火相なり、故に名けて煖と爲す。(二一)善男子、譬へば火を鑽るに、先に煖氣有り、次に火生すること有り、後に則ち煙出づるが如く、是の無漏道も亦復是の

---

は前の問を答ふ。後の問を答ふる中に又二段ありて初に正答。

【一六】次に料簡。之に二段ありて初に問。

【一七】馬師。梵名阿說示(Aśvajit)の譯、六群比丘の一。

【一八】滿宿。梵名補那羅婆素(Punarvasu)の譯、六群比丘の一。

【一九】次に佛答。文の中、信は是れ煖の因、因果の異あるが故に煖法に非ず。又た煖は四諦を觀ずる智より生ず、故に煖法は卽ち智慧なり。

【二〇】第二に名を答ふ。之に二段あり、其中初に正答。之に又二段ありて先づ煖を牒し略して答へ、譬に從ひて名を得るを明す。

【二一】次に廣答。之に譬、合の二段あり。

【二二】第二に重ねて論す。之に

如し。煗とは即ち是十六行なり。火とは即ち是須陀洹果なり。煙とは即ち是修道斷結なり。』(三二)迦葉菩薩復佛に白して言さく、『世尊、是の如きの煗法も亦是有法、亦是有爲なり。是の法は(三三)色界の五陰を報得す、是の故に有と名く、是の因縁の故に復有爲と名く。(三四)若是有爲ならば、云何ぞ能く無漏道の相と爲ん。』(三五)佛の言はく、『善男子、是の如く是の如し、汝が說く所の如し。(三六)善男子、是の如く煗法は是有爲、有法と雖も、還能く有爲、有法を破壞す、是の故に能く無漏道の相と爲す。善男子、人の馬に乘るに、亦愛し亦策つが如し。煗心も亦爾なり、愛の故に生を受け、厭の故に觀行す。是の故に復有法、有爲と雖も、能く彼の正道の與に相と作る。(三七)煗法を得る人七十三種、欲界十種、是の人一切の煩惱を具足す。一分を斷ずるより九分に至る。欲界の如く初禪、乃至無所有處も亦復是の如し。是を七十三

---

問、答の二段あり。問に又二段ありて初に旨を領す。

【三三】色界の五陰に就て二説あり。數師は實に煗法を用つて色界の報を受く、是れ無漏業の爲めにして受身の爲めならず、即ち是れ滅報なりとす。次に論師は、煗は生死を焦して復た報を受けず、但だ是れ色定の報なりとす。要言すれば、毘曇は智慧所得とし、成實は禪定所得とするの相違なり。

【三四】次に正問。

【三五】次に佛答。之に二段ありて初に然問。

【三六】次に正答。之に法、譬、合の三段あり。

【三七】次に第四に人數。文の中七十三人に就て多説あり、安註に略して三説を出す。即ち莊嚴の説、開善の説、數人の説なり。數人の説に二種あり、現定斷と、當定斷との相異なり。今三説の異同を示さば左の如し。

(一)　莊嚴の説
4(色界四禪)+3(無色三空)=7
7×9(九定九惑斷)=63
63+10(九定+欲界電光定)=73(人)

(二)　開善の説
9(九品惑)×8(九定八惑斷)=72
72+1(非想定)=73(人)

(三)　數人の説
(1) 63+10(九品+具煩惱性)=73(人)
(2) 10+63(九品未來定九惑斷)=73(人)

種と名く。(二八)是の如き等の人煖法を得已るときは、則ち復能く善根を斷じ、五逆罪を作り、四重禁を犯さず。(二九)是の人に二種あり。一つには善友に遇ひ、二つには惡友に遇ふ。惡友に遇ふ者は暫く出で還つて沒し、善友に遇ふ者は、徧く四方を觀ず。(三〇)觀四方とは、即ち是頂法なり。是の法は復性是五陰と雖も、亦四諦を緣ず。是の故に徧く四方を觀ずと名くることを得。頂法を得已りて次に忍法を得、是の忍も亦爾なり。性も亦五陰、亦四諦を緣ず。是の人次に世第一法を得、是の法復性是五陰と雖も、亦四諦を緣ず。是の人次第に苦法忍を得。忍性は是慧。一諦を緣ず。是の如く忍法一諦を緣じ已りて、乃至見斷煩惱須陀洹果を得。是を第四の徧觀四方と名く。四方とは即ち是四諦なり。」

(三一)迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、佛先に說きたまふが如く、「須陀洹の人は所斷煩惱猶し廣縱(三二)四十里水の如く、其の餘の在者一毛渧の如し」と。此の中云何ぞ三結を斷ずるを說きて須陀洹と名くる。一つには我見、二つには非因、見因、三つには疑網なり。(三三)世尊、何の因緣の故に須陀洹は徧く四方を觀ずと名け、(三四)復何の因緣か須陀洹と名け、(三五)復何の因緣か須陀洹を喩ふるに鯖魚

【二八】次に第五の種性の人を出だす。善根を斷ぜず、四善に退するを釋す。
【二九】是より第四に觀方の人を合す。これに觀方人の種々を列ね、更に問答して初果の義を合するの二段あり。初の觀方人の觀を列ぬる中に又二段ありて初に標論。
【三〇】次に正答。
【三一】是より第二に更に初果の義を問答す。之に三番の問答あり、其中初番の問答中、初に問。之に四段ありて先づ斷惑。
【三二】四十里水。池喩經に廣說す。
【三三】次に觀方。
【三四】次に名義。
【三五】次に譬喩。

方便して(四五)三と說く。(四六)汝が問ふ所の如き、何の因緣の故に須陀洹の人は四方を觀ずるに喩ふるとは、(四七)善男子、須陀洹の人四諦を觀じて四事を獲得す。一つには堅固の道に住す、二つには能く徧く觀察す、三つには能く實の如く見る、四つには能く大怨を壞す。堅固道とは、是須陀洹所有の(四八)五根能く動す者無し、是の故に名けて住堅固道と爲す。能徧觀とは、悉く能く內外の煩惱を呵責す。如實見とは、即ち是忍智なり。壞大怨とは、四顚倒を謂ふ。(四九)汝が問ふ所の如き、何の因緣の故に須陀洹と名くるとは、(五〇)善男子、須は無漏と名け、陀洹は修習と名く。無漏を修習す、故に須陀洹と名く。(五一)善男子、復須とは流と名くる有り。流に二種有り。一つには順流、二つには逆流なり。流に逆ふを以ての故に須陀洹と名く。

(五二)迦葉菩薩の言さく、『世尊、若是の義に從はば、何の因緣の故に斯陀含の人、阿那含の人、阿羅漢の人は、名けて須陀洹と爲すことを得ざる。』

(五三)『善男子、須陀洹より乃至諸佛をも亦名けて須陀洹と爲すことを得。若斯陀含、乃至諸佛は須陀洹無ければ、云何ぞ斯陀含、乃至佛と名くることを得ん。一切衆生の名に二種有り。一つには舊、二つには客なり。凡夫の



是の故に三と說く。

【四六】次に第二に觀方を答ふ。之に二段ありて初に徵問。

【四七】次に正答。

【四八】五根は信等の五根。內外の煩惱とは三毒を內惑とし、疑及び諸見を外惑とす。

【四九】次に第三に名義を答ふ。之に正答、重顯の二段あり。初の正答の中又二段ありて先づ徵問。

【五〇】次に正答。之に二段ありて初に修無漏の名を釋す。

【五一】次に逆流の名を釋す。文の中順逆二流とは、須陀洹の人は涅槃の流に順入し、生死の流を逆出す。衆生は之に反し、涅槃の流に逆し、生死の流に順す。故に流に二種有りと言ふ。

【五二】第二に論義もて重ねて顯す。問、答の二段あり初に問。

【五三】次に佛答。之に正答、根

時、世の名字有り。既に道を得已らば更に爲に名を立て、須陀洹と名く。先に得るを以ての故に須陀洹と名け、後に得るを以ての故に斯陀含と名く。是の人も亦須陀洹と名け、亦斯陀含と名く、乃至佛も亦復是の如し。(五四)善男子、流に二種有り。一つには解脫、二つには涅槃なり。一切の聖人皆是の二有れば亦須陀洹と名け、亦斯陀含と名くることを得べし、乃至佛も亦復是の如し。(五五)善男子、須陀洹は亦菩薩と名く。何を以ての故に。菩薩とは卽ち是盡智、無生智なり。須陀洹の人も亦復是の如きの二智を求索す。是の故に當に知るべし、須陀洹の人は菩薩と名くることを得、(五六)須陀洹の人も亦覺と名くることを得。何を以ての故に。正しく見道を覺して煩惱を斷ずるが故に、正しく因果を覺するが故に、正しく共道及び不共道を覺するが故なり。斯陀含、乃至阿羅漢も亦復是の如し。(五七)善男子、是の須陀洹は凡そ二種有り。一つには利根、二つには鈍根なり。(五八)鈍根の人は人天に七反す。是の鈍根の人は復五種有り。或は六反、五、四、三、二有り。(五九)利根の人は現在に須陀洹果より阿羅漢果に至るを獲得す。

(六〇)善男子、汝が問ふ所の如き、何の因緣の故に須陀洹の人を喩ふるに鯖

---

別の二段あり。正答の中二段、其中初に下の名上に通ずるを明す。之に又二段ありて初に修無漏の名の通ずるを明す。

【五四】次に道流の名の通ずるを明す。

【五五】次に上の名下に通ずるを明す。之に二段ありて初に菩薩の名の下に通ずるを明す。

【五六】次に佛の名下に通ずるを明す。文の意は佛に只だ是れ覺、能く理を見るが故に。今須陀洹の人は諸法を覺知し、惑を斷じて理を見る、豈佛と名けざらんやとなり。

【五七】第二に根別を明す。之に二段ありて初に兩根を唱ふ。

【五八】次に別釋。之に二段ありて初に鈍根。

【五九】次に利根。

【六〇】次に第四に譬喩を答ふ。之に二段ありて初に徵問。

【六一】次に釋。之に又二段あり

魚を以てするとは、(六一)善男子、䱜魚に四事有り。一つには骨細きが故に輕し、二つには翅有るが故に輕し、三つには光明を見ることを樂ふ、四つには物を銜んで堅く持す。(六二)須陀洹の人も亦四事有り。骨細とは煩惱微なるを喩へ、有翅とは(六三)奢摩他、毗婆舍那を喩へ、樂見光明とは見道を喩へ、銜物堅持とは如來の無常、苦、無我、不淨を說きたまふを聞きて堅く持して捨てざること、猶し魔王の化して佛像と作り、(六四)首羅長者見已りて心驚き、魔長者の其の心動ずるを見已りて、卽ち長者に語らく、「我先に說く所の四眞諦とは、是の說眞ならず。今當に汝が爲に更に五諦、六陰、十三入、十九界を說くべし。」長者聞き已りて法相を尋觀するに都て此の理無し、是の故に堅く持して其の心動せざるが如きに喩ふ。』

(六五)迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、是の須陀洹は先に道を得るが故に須陀洹と名くるや、初果なるを以ての故に須陀洹と名くるや。(六六)若先に道を得るを須陀洹と名くとは、苦法忍を得るの時、何が故ぞ須陀洹と名くることを得ずして、乃ち名けて向と爲すや。(六七)若初果を以て須陀洹と名くれば、外道の人先に煩惱を斷じて無所有處に至り、無漏道を修して阿那含

---

て初に標。

【六一】 次に釋す。

【六三】 奢摩他・毗婆舍那。奢摩他(Śamatha)は止と譯し、毗婆舍那(Vipaśyanā)は觀と譯す、佛道修行の二個の德目なり。今天台の意に依りて此の二概念の差を論ぜば次の如し。奢摩他は德に約すれば寂なり、物に和して爭ふ所なきの義なり。又た用に約せば靜なり、物と爭はず動念なきが故なり。若し行に約すれば則ち止といふ、寂靜の理に稱ふの意なり。次に毗婆舍那は、德に約して照といふ、情を離れて理に違せざるの義なり。又た用に約して明といふ、理に違せず所昏なきが故なり。終りに行に約して觀といふ、照明の理に稱ふの意なり。

【六四】 首羅(Sūra)。勇と譯す。

【六五】 是より第二番の問答。之

果を得。何が故ぞ名けて須陀洹と為さざるや。』
(六八)『善男子、初果を以ての故に須陀洹と名く。(六九)汝が問ふ所の如き、外道の人先に煩惱を斷じて無所有處に至り、無漏道を修して阿那含を得ば何が故ぞ須陀洹と名けざるとは、(七〇)善男子、初果を以ての故に須陀洹と名く、是の人爾の時に八智及び十六行を具足す。』

(七一)迦葉の言さく、『世尊、阿那含を得るも亦復是の如し、亦八智を得、十六行を具す、何が故ぞ須陀洹と名くることを得ざるや。』(七二)『善男子、有漏の十六行に二種有り。一つには(七三)共、二つには不共なり。無漏の十六行も亦二種有り。一つには(七四)向果、二つには得果なり。(七五)八智も亦二つ。一つには向果、二つには得果なり。須陀洹の人は共の十六行を捨てて不共の十六行

---

に問、答の二段あり。初の問に又二段ありて先づ問定。

【六六】次に問難の結。之に二段ありて先づ問難の結。

【六七】次に後難の結。

【六八】第二に佛答。之に二段ありて先づ初難を答ふ。

【六九】次に後難を答ふ。之に二段ありて初に反問。

【七〇】次に正答。

【七一】次に第三番の問答。初に問。

【七二】次に佛答。之に二段ありて初に行の異。

【七三】共不共に就て三解あり。第一に興皇の意は前の十五心は共じて十六を觀じ、共じて一時に俱に觀ぜず、故に共と言ふ。若し十六心を得ば一時に俱に十六諦を觀ず、故に不共と言ふと。第二に灌頂の意は有漏の十六は凡夫と共じ、無漏の十六は凡夫と共ぜずと云ふに在り。章安此の説を破して曰く、經文「有漏に共あり不共あり」と云ふ、何ぞ無漏を以て之を釋せんやと。安の破可なりといふべし。第三に河西の意に依らば七方便中の前三方便は亦た十六を觀ずるを以て共と名け、後の四方便は則ち不共と名く。若し初果の中、次第行の人は備さに七方便を作さば共を捨てて不共を得。若し超越行の人は、但だ後の四方便を作して仍り三果を證す、故に不共といふと。

【七四】向果得果。之に就て論數二家の解釋を見る。論家は云く、初果は前に未だ果あらず、故に向を捨てて果を得。阿那含は前に已に二果あり。[illegible]の人は[illegible]と雖も皆中より[illegible]て、故に不得果と云ふと。數家は云く、[illegible]の人は[illegible]に阿那含を得るも亦た前の二果を

を得、向果の八智を捨てて得果の八智を得。阿那含の人は則ち是の如くならず、是の故に初果を須陀洹と名く。(七六)善男子、須陀洹の人は(七七)四諦を緣じ、阿那含の人は唯一諦を緣ず、是の故に初果を須陀洹と名く。是の因緣を以て喩ふるに鯌魚を以てす。

(七八)徧觀已行とは、即ち是斯陀含なり。心を繫け道を修して貪欲、瞋癡、憍慢を斷ぜんが爲に、(七九)彼の鯌魚の、徧く方を觀じ已りて食の爲の故に行くが如し。

(八〇)行已復住とは、阿那含の食を得已りて住するを喩ふ。是の阿那含に凡そ二種有り。一つには現在に阿那含を得、進修して即ち阿羅漢果を得。二つには色界、無色界中の寂靜三昧に貪著す。是の人欲界の身を受けざるが故に阿那含と名く。(八一)是の阿那含に復五種有り。一つには中般涅槃、二つには受身般涅槃、三つには行般涅槃、四つには無行般涅槃、五つには上流般涅槃なり。(八二)復六種有り、五つは上の如く、六つには現在般涅槃なり。(八三)復七種有り。六つは上の如く、七つには無色界般涅槃な

---

りして過ぎざれば則ち方便道より十六心に入る。十五心は是れ那含向、十六心は那含果を證す、亦た是れ向を捨て果を得と。安詳して此の說便ならずと。

【七五】八智とは四諦に各各比と現との二種の別あり、故に八を成す。十智中の八を云ふに非ず。

【七六】次に境の異。

【七七】四諦一諦等。初果は入道の初なれば、方便の時具さに十六行を遊觀す、故に四諦を緣す。阿那含は思惟道に在りて擇法覺支、一諦を智るに隨て緣と爲す、故に一諦を緣す。

【七八】是より第五に徧觀已行を合す。之に二段ありて初に正合。

【七九】次に帖嘗。

【八〇】是より第六に行已復住を合す。之に四段あり、其中第一に章門を釋す。之に四段ありて初に二人。

【八一】次に五人。

【八二】次に六人。

【八三】次に七人。

り。(八四)行般涅槃は復二種有り。或は二身を受け、或は四身を受く。若二身を受くれば、是を利根と名け、若四身を受くれば、是を鈍根と名く。(八五)復二種有り。一つには精進にして自在定無く、二つには懈怠にして自在定有り。復二種有り。一つには精進定を具し、二つには具せず。(八六)善男子、欲界の衆生に二種の業有り。一つには作業、二つには受生業なり。中涅槃の者は唯作業有りて受生業無し、是の故に中に於て般涅槃す。(八七)欲界の身を捨て未だ色界に至らず、利根を以ての故に中に於て涅槃す。(八八)是の中涅槃阿那含の人は四種の心有り、一つには(八九)非學非無學、二つには學、三つには無學、四つには非學非無學涅槃に入る。云何が中般涅槃と名くることを得る。善男子、是の阿那含は四種心の中、二つは是涅槃、二つは涅槃に非ず、是の故に名けて

【八四】次に第二に章門を釋す。之に二段あり、其中初に二人を釋す。之に又二段ありて先づ身數。文の中、行般は上流の者、色無色に貪著するに就く。二身を受くとは初禪に死して二禪に生ず、故に二を成す。四身とは四禪に徧く生を受く、故に四を成す。

【八五】次に行別。

【八六】次に五人を釋す。之に五段あり、其中初に中間滅の人を釋す。之に又三段、先づ兩業。文の中作業は下界の散業、受生業は上界の定業に名く。

【八七】次に中陰の名を釋す。中陰とは欲色兩界の中間なり。

【八八】次に入滅の心を明す。

【八九】非學非無學等。此の四心に就て二解あり、四種心所有の人を定むるの相異に由る。即ち一は四種中前の二は那含果の證有二心、後の二は羅漢果の證有二心に就くとす。二は四心同じく那含果の上に就くとす。斯かる所有人に就きての相異は亦た四種心解釋の相違を來せり。第一説は曰く、(一)非學非無學は那含の世諦を緣ずる心。(二)學は那含の眞諦を緣ずる心。(三)無學は羅漢の緣眞諦心。(四)非學非無學涅槃は羅漢の緣世諦心とす。第二説は曰く、(一)非學非無學は緣俗心。(二)學は緣眞心。(三)無學は修習心。(四)非學非無學涅槃は失念心とす。有人此解不可なり、其の文見はに阿那含の四心と云ふ。前解、理に當れりと評す。

中般涅槃と爲す。(九〇)受身涅槃に復二種有り。一つには作業、二つには生業なり。是の人欲界の身を捨て色界の身を受く、精勤して道を修し、其の壽命を盡して涅槃に入る。」

(九一)迦葉の言さく、「世尊、若命を盡して涅槃に入ると言はば、云何で受身涅槃と言ふ」。佛の言はく、『善男子、是の人身を受けて然して後乃ち三界の煩惱を斷ず。是の故に名けて受身涅槃と爲す。(九二)行般涅槃とは、常に道を修行し、有爲三昧力の故に能く煩惱を斷じて涅槃に入る。是を行般涅槃と名く。(九三)無行涅槃とは、是の人定んで當に涅槃を得べきを知る、是の故に懈怠す。亦有爲三昧力を以ての故に、壽盡くるに則ち涅槃に入ることを得。是を無行般涅槃と名く。(九四)上流般涅槃とは、若人有りて第四禪を得已りて、是の人初禪の愛心を生ず、是の因緣を以て退して初禪に生ず。是に二流有り。一つには煩惱流、二つには道流なり。道流を以ての故に、是の人壽盡きて二禪の愛を生ず、愛の因緣を以て二禪に生ず。第四禪に至るも亦復是の如し。(九五)是の四禪の中復二種有り。一つには無色界に入り、二つには五淨居に入る。是の如き二人、一は三昧を樂ひ、二は智慧を樂ふ。智慧を樂ふ者は五淨居に入り、三昧を樂ふ者は無色界に入る。是の如き二人、一つは第四禪を修するに五つの階差有り、二つには修せず。云何が五つと爲す。下、中、上、上の中、上の上なり。上の上を修する

【九〇】第二に受身涅槃を釋す。之に二段ありて初に正釋。
【九一】次に問難。之に問、答の二段あり。
【九二】第三に行滅を釋す。
【九三】第四に無行滅を釋す。
【九四】第五に上流滅を釋す。之に二段ありて初に單に色界に就く。
【九五】次に徧く上二界に就く。

者は無小天に處し、上の中を修する者は善見天に處し、上品を修する者は善可見天に處し、中品を修する者は無熱天に處し、下品を修する者は小廣天に處す。是の如き二人、一は論義を樂ひ、二は寂靜を樂ふ。樂寂靜者は無色界に入り、樂論義者は五淨居に處す。復二種有り。一つには、(九六)熏禪を修し、二つには熏禪を修せず。修熏禪者は五淨居に入り、不修熏禪者は無色界に生じて、其の壽命を盡して般涅槃す、是を上流般涅槃と名く。若無色界に入らんと欲する者は、則ち四禪の五差を修すること能はず、若五差を修すれば則ち能く無色界定を呵責す。」

(九七)迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、中涅槃の者は則ち是利根なり。若利根ならば、何ぞ現在に涅槃に入らざるや。何が故ぞ欲界には中涅槃有り、色界には則ち無きや。』(九八)佛の言はく、『善男子、是の人現在四大羸劣にして道を修すること能はず。(九九)比丘四大康健なる有りと雖も、房舍、飲食、衣服、臥具、醫藥有ること無し、衆緣具せず。是の故に現在に涅槃することを得ず。善男子、我昔一時舍衞國(一〇〇)阿那邠抵精舍に在り。一比丘有りて我が所に來至して是の如きの言を作さく、「世尊、我常に道を修すれども須陀洹果の阿羅漢果に

【九六】熏の義又た數論二家の爭點たり。數家は曰く、兩の無漏心一の有漏心を挾熏するなりと。論家は曰く、慈悲心を以て此の定を熏成するなりと。要するに數人は智熏の義、論人は悲熏の義の相違なり。

【九七】次に第三に中滅の料簡。之に問、答の二段あり。初の問に兩番あり。

【九八】次に佛答。之に二段あり其中初に初問を答ふ。之に又二段ありて初に羸劣。

【九九】次に衆緣に乏し。

【一〇〇】阿那邠抵(Anathapinda-da)。給孤獨と譯す、長者の名なり。長者所施の精舍なれば人に從つて寺名となす、または祇園精舍の名なり。

至るを得ること能はず。」我時に卽ち阿難に告げて言はく「汝今當に是の比丘の爲に諸の所須を具ふべし。」爾の時に阿難是の比丘を將て祇陀林に至り好房舍を與ふ。是の時比丘阿難に語りて言はく「大德、唯願はくは我が爲に房舍を莊嚴し、淨潔に修治し、七寶嚴麗に繒旛蓋を懸けよ。」阿難の言はく「世間の貧者乃ち沙門と名く、我當に云何ぞ能く是の事を辦ずべき。」是の比丘の言はく「大德、若能く我が爲に作さば善、若能はずば、我當に還つて往いて世尊の所に至るべし。」爾の時に阿難卽ち佛所に往いて是の如きの言を作さく「世尊、向者の比丘我に從ひて種種の莊嚴七寶の旛蓋を求索す、不審是の事當に云何がすべきや。」我爾の時に於て復阿難に告ぐ「汝今還り去つて比丘の意に隨へ、所須の物爲に之を辦具せよ。」爾の時に阿難卽ち房中に還り、是の比丘の爲に事事具辦す。比丘得已りて念を繫けて道を修し、久しからずして卽ち須陀洹果を得、阿羅漢果に至る。善男子、無量の衆生涅槃に入るべきに、乏しき所を以ての故に其の心を妨亂す、是の故に得ず。(一〇一)善男子、復衆生有りて多く敎化を喜ぶ。其の心怱務して定を得ること能はず、是の故に現在に涅槃することを得ず。(一〇二)善男子、汝が問ふ所の如き、何の因緣の故に欲界の身を捨つるには中涅槃有り、色界には無きとは、善男子、是の人欲界の煩惱因緣二つ有るを觀ず。一つには內、二つには外なり。色界の中には外因緣無く、欲界復二種の愛心有り。一つには欲愛、二つには食愛なり。是の二愛を觀じて

【一〇一】次に喜んで世俗の怱務等の事を作す。

【一〇二】第二に次の問を答ふ。之に二段あり初に緣別を明す。之に又二段ありて先づ欲界は多く緣にあり。

至心に呵責す。既に呵責し已りて涅槃に入ることを得。是の欲界の中能く諸の塵煩惱を呵責することを得、所謂慳貪、瞋妬、無慚、無愧なり。是の因縁を以て能く涅槃を得。(一〇三)又欲界道は其の性勇健なり。何を以ての故に。向果を得るが故なり。是の故に欲界には中涅槃有り、色界の中には無し。(一〇四)善男子、中涅槃とは凡そ三種有り。上、中、下を謂ふ。上とは身を捨て未だ欲界を離れずして、便ち涅槃を得。中とは始めて欲界を離れ、未だ色界に至らずして、便ち涅槃を得。下とは欲界を離れ已りて、色界の邊に至りて、乃ち涅槃を得。(一〇五)喩ふるに、鯌魚の食を得已りて住するを以てす、是の人も亦爾なり。云何が住と名くる。色界及び無色界に處在して身を受くることを得るが故に、是の故に住と名く。欲界の人天、地獄、畜生、餓鬼を受けず、是の故に住と名く。已に無量の諸の煩惱結を斷じて、餘少しく在るが故に、是の故に住と名く。復何の因縁か之を名けて住と爲す。終に共に凡夫の事を造作せず、是の故に住と名く。自ら畏るる所無く、他をして畏れしめず、是の故に住と名く。二愛、慳貪、瞋恚を遠離す、是の故に住と名く。(一〇六)善男子、到彼岸とは阿羅漢、辟支佛、菩薩、佛を喩ふ、猶し神龜の水陸倶に行くが如し。何の因縁の故に之を喩ふるに龜を以てする。善く五つを藏すが故なり。是の阿羅漢、乃至諸佛も亦復是の如し、善く五根を覆ふ。是の故に龜に喩ふ。水陸とは、水は世間を喩へ、陸は出世を喩ふ。是の諸聖等も亦復是の如し、能く一切

【一〇三】次に根性の勇健。
【一〇四】第二に根の不同。
【一〇五】次に第四に行已復住を釋す。
【一〇六】是より第七に到彼岸を釋す。

の惡煩惱を觀ずるが故に彼岸に到る。是の故に喩ふるに水陸俱行を以てす。(一〇七)善男子、恆河の中の七種の衆生、龜魚の名有りと雖も水を離れざるが如し。是の如く微妙の大涅槃の中、一闡提より上諸佛に至りて、異名有りと雖も然も亦佛性水を離れず。(一〇八)善男子、是の七衆生、若は(一〇九)善法、若は不善法、若は方便道、若は解脫道、若は次第道、若は因、若は果、悉く是佛性なり。是を如來の隨自意語と名く。』

(一一〇)迦葉菩薩の言さく、『世尊、若因有れば則ち果有り、若因無ければ則ち果無し。涅槃を果と名く、常の故に因無し。若因無ければ、云何ぞ果と名けんや。(一一一)是の涅槃も亦沙門と名け、沙門果と名く。云何が沙門、云何が沙門果なる。』

(一一二)『善男子、一切世間に七種の果有り。一つには方便果、二つには報恩果、三つには親近果、

【一〇七】是より第三に譬を結す。之に正しく譬を結し、得失を明し、同異を辨ずるの三段あり。初の正しく譬を結する中又三段あり、其中初に通じて七人を結す。之に又二段あり。其中初に七人を結する中に又譬、合の二段あり。

【一〇八】次に七法を結す。

【一〇九】善不善方便解脫等。この七法中、前後は知るべし。中閒の三者は卽ち婆沙の三道、方便は是れ似解、解脫は是れ解脫道、次第は是れ無礙道なり。七衆生悉く是佛性に二意あり。一には次第に上の七人に合し、二には總じて合す。第一の次第合とは善は第二人に合し、不善は第一の常沒人に、方便は第三の得住人に、解脫は第四の觀方人に、次第は第五の觀已行人に、因は第六の行已復住人に、果は第七の到彼岸四人に合す。第二の總合とは善不善は河中常沒及び出已沒の二人に、因は得住より阿那含に至る諸人に、果は羅漢等の四人に合す。是より前の方便道は並びに皆因位に屬す。

【一一〇】次に第二に更に論義。これに二番の問答あり。初番の問に二段ありて初に涅槃因無し那ぞ果と名くることを得んと問ふ。

【一一一】次に云何ぞ涅槃復た沙門果と名くるやと問ふ。

【一一二】次に佛答。之に二段あり先には初の問を答へ、次には後の問を答ふ。初に初問を答ふる中又二段、先づ七果。

四つには餘殘果、五つには平等果、六つには果報果、七つには遠離果なり。方便果とは、世間の人秋多く穀を藏め、咸相謂つて、「方便果を得」と言ふが如し。方便果とは、業行果を名く。是の如きの果は、二種の因有り。一つには近因、二つには遠因なり。近因とは所謂種子、遠因とは水糞人功を謂ふ、是を方便果と名く。報恩果とは、世間の人父母を供養す。父母咸、「我今已に恩養の果を得」と言ふ。子能く恩を報ずれば、之を名けて果と爲すが如し。是の如き果は、因も亦二種あり。一つには近因、二つには遠因なり。近とは卽ち是父母の過去純善の業、遠とは卽ち是所生の孝子なり、是を報恩果と名く。親近果とは、譬へば人有り善友に親近して、或は須陀洹果を得、阿羅漢果に至る。是の人唱へて、「我今已に親近の果報を得」と言ふが如し。是の如き果は、因に二種有り。一つには近因、二つには遠因なり。近とは信心、遠とは善友なり、是を親近果と名く。餘殘果とは、不殺に因りて第三身の年を延べ壽を益すを得るが如し、是を殘果と名く。是の如き果は、二種の因有り。一つには近因、二つには遠因なり。近とは卽ち是身、口、意淨、遠とは卽ち是延年益壽なり、是を殘果と名く。平等果とは世界器を謂ふ。是の如き果は亦二種の因あり。一つには近因、二つには遠因なり。近因とは所謂衆生十善業を修す、遠因とは所謂三災なり、是を平等果と名く。果報果とは、人淸淨身を獲得し已りて、身、口、意淸淨の業を修す、是の人卽ち「我報果を得」と說くが如し。是の如き果は、因に二種有り。一つには近因、二つには遠因なり。近因とは所謂現在の身、口、意淨、遠因とは所謂過去の

身、口、意淨なり、是を果報果と名く。遠離果とは卽ち是涅槃なり。諸の煩惱を離れ、一切の善業、是涅槃の因なり。復二種有り。一つには近因、二つには遠因なり。近因とは卽ち是三解脫門、遠因とは卽ち無量世所修の善法なり。(二三)善男子、世間の法、或は生因と說き、或は了因と說くが如し。出世の法も亦復是の如し、亦生因と說き亦了因と說く。善男子、三解脫門は三十七品なり。能く一切の煩惱の爲に不生生因と作り、亦涅槃の爲に了因と作る。善男子、煩惱を遠離すれば則ち了了に涅槃を見ることを得、是の故に涅槃は唯了因有りて生因有ること無し。(二四)善男子、汝が問ふ所の如き、云何が沙門、云何が沙門果とは、善男子、(二五)沙門那とは、卽ち八正道なり。沙門果とは、道に從ひ畢竟じて永く一切の貪、瞋、癡等を斷ず、是を沙門、沙門果と名く。』

(二六)迦葉菩薩の言さく、『世尊、何の因緣の故に八正道は沙門那と名くるや。』(二七)『善男子、世に言ふ、沙門は乏と名け、那とは道と名く。是の如き道は一切の乏を斷じ、一切の道を斷ず。是の義を以ての故に、八正道を名けて沙門那と爲す。是の道中に從ひて果を獲得するが故に沙門果と名く。善男子、又沙門那とは、世間の人樂靜者有らば亦沙門と名くるが如し。是の如き道は亦復是の如し、能く行者をして身、口、意の惡邪命等を離れて樂寂靜を得しむ、是の故に之を名けて沙門那と爲す。善男子、世の下人能く上人と作る、是を沙門と名くる

【二三】次に二因。
【二四】次に後の問を答ふ。
【二五】沙門那（Śramaṇa）沙門と略稱し、勤勞と譯す、出家の總稱。
【二六】第二問の問答。初に問。
【二七】次に佛答。

が如し。是の如きの道も亦復是の如し、能く下人をして上人と作さしむるが故に、是の故に名けて沙門那と爲すことを得。

（二八）善男子、阿羅漢の人、是の道を修すれば沙門果を得、是の故に彼岸に到ると名くるを得。阿羅漢果とは、卽ち是無學の五分法身なり、戒、定、慧、解脫、解脫知見なり。是の五分に因りて彼岸に到ることを得、是の故に名けて彼岸に到ると爲す。彼岸に到るが故に自ら說いて言はく、「我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、更に有を受けず」と。善男子、是の阿羅漢は永く三世の生因緣を斷ずるが故に、是の故に自ら「我が生已に盡く」と說く。亦三界の五陰身を斷ずるが故に、是の故に復「我が生已に盡く」と言ふ。所修の梵行の已に畢竟するが故に、是の故に唱へて「梵行已に立つ」と言ふ。又學道を捨つれば亦已に立つと名く。本求むる所の如く今日已に得、是の故に唱へて「所作已に辦ず」と言ふ。道を修して果を得れば、亦「已に辦ず」と言ふ。盡智、無生智を獲得するが故に、唱へて「我已に諸有結を盡す」と言ふ。是の義を以ての故に、阿羅漢は彼岸に到ることを得と名く。阿羅漢の如く辟支佛も亦復是の如し。（二九）菩薩及び佛は六波羅蜜を具足し成就すれば到彼岸と名く。是の佛、菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を得已るを、名けて六波羅蜜を具足すと爲す。何を以ての故に。六波羅蜜の果を得るが故に。果を得るを以ての故に、名けて具足と爲す。

【二八】次に第三に偏に到彼岸の四人を結す。之に二段あり。初に羅漢・支佛を結す。
【二九】次に菩薩・佛を結す。

(二〇)善男子、是の七衆生は身を修せず、戒を修せず、心を修せず、慧を修せず。是の如きの四事を修習すること能はざれば、則ち能く五逆重罪を造作し、能く善根を斷じ、四重禁を犯し、佛、法、僧を謗す、是の故に常沈沒と名くることを得。(二一)善男子、是の七人の中に能く善知識に親近する者有りて、至心に如來の正法を聽受し、內に善く思惟し、法の如くに住し、精勤に身、戒、心、慧を修習せば、是の故に生死河を度りて彼岸に到ると名くることを得。(二二)若し說いて「一闡提の人、阿耨多羅三藐三菩提を得」と言ふ者有らば、是を染著と名け、若し「得ず」と言はば、是を虛妄と名く。(二三)善男子、是の七種の人、或は一人七つを具する有り、或は七人各一つなる有り。

(二四)善男子、若し人心口、異想、異說して「一闡提阿耨多羅三藐三菩提を得」と言はば、當に知るべし。是の人は佛、法、僧を謗す。若し人心口、異想、異說して「一闡提阿耨多羅三藐三菩提を得ず」と言はば、是の人も亦佛、法、僧を謗すと名く。(二五)善男子、若し說いて「八聖道分は凡夫の所得」と言ふ有らば、是の人も亦佛、法、僧を謗すと名く。若し說いて「八聖道分は凡夫得に非ず」と言ふ有らば、是の人も亦佛、法、僧を謗すと名く。(二六)善男

---

【二〇】是より第三に得失。之に三段あり、其中初に更に中道の不定を結す。之に又四段ありて初に沒人。
【二一】次に出人。
【二二】次に偏執の不可。
【二三】次に正しく中道の不定。
【二四】次に第二に正しく得失を明す。之に單に失を明す、雙じて得失を明すの二段あり。初の單に失を明す中、又二段あり、其中初に三法に就て失を明す。之に又三段ありて先づ闡提に就く。
【二五】次に聖道に就く。
【二六】次に佛性に就く。
【二七】次に失を結す。之に四段ありて初に二人能く謗るを唱

子、若說いて「一切衆生定んで佛性有り、定んで佛性無し」と言ふ有らば、是の人も亦佛、法、僧を謗すと名く。（二二七）善男子、是の故に我契經の中に於て「二種の人有りて佛、法、僧を謗す」と說く。一つには不信瞋恚心の故に、二つには信ずと雖も義を解せざるが故なり。（二二八）善男子、若人信心にして智慧有ること無ければ、是の人は則ち能く無明を增長す。若智慧有りて信心有ること無ければ、是の人は則ち能く邪見を增長す。（二二九）善男子、不信の人は瞋恚の心の故に、說いて「佛、法、僧寶有ること無し」と言ふ。信者慧無ければ顚倒して義を解し、聞法の者をして佛、法、僧を謗せしむ。（二三〇）善男子、是の故に我不信の人は瞋恚心の故に、有信の人は智慧無きが故に、是の人能く佛、法、僧寶を謗すと說く。

（二三一）善男子、若說いて「一闡提等未だ善法を生ぜず、便ち阿耨多羅三藐三菩提を得」と言ふ有らば、是の人も亦佛、法、僧を謗すと名く。若復「一闡提の人一闡提を捨て、異身の中に於て阿耨多羅三藐三菩提を得」と言ふ有らば、是の人も亦佛、法、僧を謗すと名く。若復說いて「一闡提の人能く善根を生じ、善根を生じ已りて相續して斷ぜざれば、阿耨多羅三藐三菩提を得。故に一闡提は阿耨多羅三藐三菩提を得」と言ふ。當に知るべし、是の人は三寶を謗せず。（二三二）善男子、若人、「一切衆生定んで佛性有り、常、樂、我、淨不作不生なり、煩惱の因緣の故に見るべからず」と言ふ有らば、當に知る

ふ。

【二二八】次に信慧互無を唱ふ。

【二二九】次に皆是謗なるを結す。

【二三〇】次に互無を結す。

【二三一】第二に雙して得失を明す。之に二段ありて初に闡提の成佛不成佛に就く。

【二三二】次に衆生の有佛性無佛性に就く。

べし、是の人は佛、法、僧を謗す。若說いて「一切衆生都て佛性無く、猶し兎角の如し。方便より生す、本無今有、已有還無」と言ふ有らば、當に知るべし、是の人は佛、法、僧を謗す。若說いて「衆生の佛性は虛空の如き有るに非す、兎角の如き無きに非ず。何を以ての故に。虛空常なるが故に、兎角無きが故なり。是の故に亦有亦無と言ふを得。有の故に兎角を破し、無の故に虛空を破す」と言ふ有らば、是の如く說く者は三寶を謗せず。

(一三三)善男子、夫佛性とは一法を名けず、十法を名けず、百法を名けず、千法を名けず、萬法を名けず。(一三四)未だ阿耨多羅三藐三菩提を得ざる時、一切の善、不善、無記盡く佛性と名く。(一三五)如來或時因中に果を說き、果中に因を說く、(一三六)是を如來の隨自意語と名く。隨意語の故に名けて如來と爲し、隨意語の故に阿羅訶と名け、隨意語の故に三藐三佛陀と名く。』

(一三七)迦葉菩薩の言さく、『世尊、佛の所說の如き、「衆生の佛性は猶し虛空の如し」と。云何が名けて虛空の如しと爲すや。』(一三八)『善男子、虛空の性は過去に非ず、未來に非ず、現在に非ず。佛性も亦爾なり。善男子、虛空は過去に非ず。何を以ての故に。現在すること無きが故なり。法若現在せば過去を說くべし。現在無きを以ての故に過去無し、亦現在無し。何を以ての故に。未來無きが故なり。法若未來あらば現在を說

【一三三】次に第三に總じて大宗を結す。之に四段ありて初に佛性の理を明す。
【一三四】次に法に約して因中に果を說くことを明す。
【一三五】次に引證。
【一三六】次に隨自意語を結す。
【一三七】是より第三に同異を辨ず之に三段あり、其中初に佛性は虛空に同じきとを明す。之に問、答の二段ありて初に問。
【一三八】次に佛答。之に三段ありて、初に佛性は虛空に同じく三世の攝に非ず。

くべし。未來無きを以ての故に現在無し、亦未來無し。何を以ての故に。現在、過去無きが故なり。若現在、過去有らば、則ち未來有らん。過去、現在無きを以ての故に、則ち未來無し。是の義を以ての故に虛空の性三世の攝に非ず。善男子、虛空無きを以ての故に、三世有ること無し、有るを以ての故に三世無きにあらざるなり。虛空の華の是有に非ざるが故に、三世有ること無きが如し。虛空も亦爾なり、是有に非ざるが故に三世有ること無し。善男子、物無ければ即ち是虛空なり、佛性も亦爾なり。善男子、(一三九)虛空無なるが故に三世の攝に非ず、佛性常なるが故に三世の攝に非ず。善男子、如來已に阿耨多羅三藐三菩提を得ば、所有の佛性一切の佛法は常にして變易無し。是の義を以ての故に、三世有ること無く、猶し虛空の如し。(一四〇)善男子、虛空無なるが故に內に非ず外に非ず、佛性常なるが故に內に非ず外に非ず。故に「佛性は猶し虛空の如し」と說く。(一四一)善男子、世間の中罣閡無き處を名けて虛空と爲すが如く、如來阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、一切の佛法に於て罣閡有ること無し。故に佛性は猶し虛空の如しと言ふ。是の因緣を以て我「佛性は猶し虛空の如し」と說く。』

(一四二)迦葉菩薩佛に白して言さく、「世尊、如來、佛性、涅槃は三世の攝に非ずして名けて有と爲す。

【一三九】虛空無なるが故に三世の攝に非ず等。三世の期待是れ無、故に三世有ること無し。三世既に無なれば虛空は三世の攝に非ず。虛空は只是れ無。無は即ち常、佛性は是れ有、復た是れ常、故に三世の攝に非ず。

【一四〇】次に虛空に同じく內に非ず外に非ず。

【一四一】次に虛空に同じく罣閡無し。

【一四二】次に第二に虛空に異る義を明す。之に兩番の問答あり、初番の中初に問。

虛空も亦三世の所攝に非ず、何が故ぞ名けて有と爲すことを得ざるや。』(一四三)佛の言はく、『善男子、非涅槃の爲に名けて涅槃と爲し、非如來の爲に名けて如來と爲し、非佛性の爲に名けて佛性と爲す。(一四四)是云何が名けて非涅槃と爲すや。所謂一切の煩惱有爲の法なり。是の如き有爲煩惱を破せんが爲に、是を涅槃と名く。非如來とは一闡提より辟支佛に至るを謂ふ。是の如き一闡提等より辟支佛に至るを破せんが爲に是を如來と名く。非佛性とは所謂一切の牆壁、瓦石、無情の物なり。是の如き等の無情の物を離る、是を佛性と名く。(一四五)善男子、一切世間非虛空の虛空に對する無し。』

(一四六)迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、世間も亦非四大の對無けれども、猶四大是有と名くることを得。虛空の無對、何が故ぞ之を名けて有と爲すことを得ざる。』(一四七)佛の言はく、『善男子、若涅槃は三世の攝に非ず、虛空も亦爾なりと言はば、是の義然らず。(一四八)何を以ての故に。涅槃は是有、可見、可證、是色、是迹、章句、是有、是相、是緣、是歸依處、寂靜、光明、安隱、彼岸なり。是の故に三世の攝に非ずと名くることを得。虛空の性は是の如きの法無し、是の故に無と名く。(一四九)若是の如き等の法を離れて更に法有ること有らば、三世に攝すべし。虛空若同じく是有法ならば、

【一四三】次に佛答。之に三段ありて初に章門。
【一四四】次に解釋。
【一四五】次に結釋。
【一四六】次に第二番の問答。初に問。
【一四七】次に佛答。之に三段ありて初に問を牒して非す。
【一四八】次に解釋。
【一四九】次に正答。之に五段ありて、初に虛空若し有ならば四大に同じく三世に攝すること有るべきを明す。
【一五〇】次に虛空若し有ならば心數に同じかるべし。
【一五一】次に若し有法ならば是れ三世の攝なり。

是三世の所攝に非ざることを得ず。(一五〇)善男子、世人虚空を説いて名けて無色、無對、不可覩見と爲すが如し。若無色、無對、不可見ならば即ち心數法ならん。(一五一)虚空若心數法に同じくば、是三世の所攝にあらざることを得ず。(一五二)若三世に攝せば即ち是四陰なり。(一五三)是の故に四陰を離れ已らば虚空有ること無し。

(一五四)復次に善男子、諸の外道の言はく、「夫虚空とは即ち是光明」と。(一五五)若是光明ならば、即ち是色法なり。虚空若爾く是色法ならば、即ち是無常なり。是無常の故に三世に攝せらる、云何ぞ外道三世に非ずと説くや。若三世に攝せば即ち虚空に非ず、亦説いて虚空是常と言ふべけんや。

(一五六)善男子、復有人の言はく、「虚空とは即ち是住處」と。(一五七)若住處有らば即ち是色法なり。而して一切處は皆是無常、三世に攝せらる。虚空も亦常にして三世の攝に非ざらんや。(一五八)若處を説かば虚空無きことを知る。

(一五九)復説いて言ふ有り、「虚空とは即ち是次第」と。(一六〇)若是次第ならば、即ち是數法なり。若是數ふべくば、即ち三世に攝す。(一六一)若三世に攝せば、云何ぞ常と言はん。

【一五一】次に是れ四陰なるべし。
【一五三】次に非有を結す。
【一五四】次に第三に外道の虚空に執するを破す。之に正しく執を破し、同異を結する二段あり。初に執を破する中又二段ありて初に別して八執を破す。之に八段あり、先づ虚空是れ光明を破す。之に又二段ありて初に牒執。
【一五五】次に破。
【一五六】第二に虚空是れ住處を破す。之に三段あり、先づ牒執。
【一五七】次に破。
【一五八】次に結。光宅の云く、「説に諸事數あり」と言ふ、亦た虚空に處所ありと言ふ。東西の二室の一は滿、一は空なるが如し。當に知るべし、室所ありしに是れ亦た此の破に同ぜざるものといふべし」と。
【一五九】第三に虚空是れ次第を破す。之に二段あり初に牒執。

（一六二）善男子、若復說いて言はく、「夫虛空とは三法を離れず。一つには空、二つには實、三つには空實なり。（一六三）若空是と言はば、當に知るべし、虛空は是無常法なり。何を以ての故に。實處に無きが故なり。若實是と言はば、當に知るべし、虛空も亦是無常なり。何を以ての故に。空處に無きが故なり。若空實是ならば、當に知るべし、虛空も亦是無常なり。何を以ての故に。二處に無きが故なり。是の故に虛空は之を名けて無と爲す。」

（一六四）善男子、「虛空は是可作の法」と說くが如く、「樹を去り舍を去りて虛空を作す」と說くが如し。虛空を平作し、虛空を覆ひ、虛空を上り、虛空色を畫いて大海水の如くす。是の故に虛空は是可作の法なり。（一六五）一切の作法は皆是無常、猶し瓦缻の如し。虛空若爾らば、是無常なるべし。

（一六六）善男子、世間の人、「一切法の中無罣閡處を虛空と名く」と說かんに、（一六七）是の無閡處は一切所に於て具足有と爲し、分有と爲んや。（一六八）若具足有ならば、當に知るべし、餘處には則ち虛空無し。若

【一六〇】次に破。

【一六一】次第とは舊師の中及三門の兩門の如し。舊人の言く、窓の內にて外國の空を見る。先きに第一の窓櫺の中に於てし、復た第二第三の中に於て見ると。是れ次第の義なり。

【一六二】第四に虛空は三處に在るを破す。外道計して云ふ、一に空は還た空處に在り、有中には空なし。二に空は有處に在り、無處には空なし。三に空は有無處に在り、罣閡の物、當體、[illegible]が如しと。文の中に二段ありて初に牒執。

【一六三】次に破。

【一六四】第五に虛空是れ作法なるを破す。之に二段、初に牒執。

【一六五】次に破。

【一六六】第六に虛空は無礙處に在るを破す。之に二段ありて初に牒執。

【一六七】次に破。之に二段ありて初に兩句を以て定む。

【一六八】次に難。

分有ならば、則ち是彼此可數の法なり。若是數ふべくば、當に知るべし無常なりと。

(一六九)善男子、若人「虚空無關有と竝合す」と說く有り、又復說いて「虚空物に在り、器中の果の如し」と言ふ。(一七〇)二つ倶に然らず。(一七一)何を以ての故に。若竝合と言はば則ち三種有り。一つには異業合、飛鳥の樹に集まるが如し。二つには共業合、兩羊の相觸るが如し。三つには已合共合、二雙指合して一處に在るが如し。(一七二)若異業共合と言はば、異は則ち二つ有り。一つには是物業、二つには虚空業なり。若空業物に合せば空は則ち無常ならん。若物業空に合せば、物は則ち徧せず。如其徧せざれば、是亦無常なり。(一七三)若「虚空是常、其の性不動、動物と合す」と言はば、是の義然らず。何を以ての故に。虚空若常ならば物も亦常なるべく、物若無常ならば空も亦無常ならん。(一七四)若「虚空も亦常無常」と言はば、是の處有ること無し。(一七五)若共業合せば是の義然らず。(一七六)何を以ての故に。虚空を徧と名く。若業と合せば業も亦徧すべし。若是徧せば一切徧すべし。若一切徧せば一切合すべし、合と不合と有りと說くべからず。(一七七)若「已合共

【一六九】第七に雙じて兩執を破す。之に二段ありて初に兩執を牒す。

【一七〇】次に正破。之に二段ありて次に總じて不然を唱ふ。

【一七一】次に雙じて兩執を破す。之に空と有との竝ぶを破す、器中を破すの二段あり。初の中又二段ありて初に三章門。之に異業合、共業合、已合共合あり。

【一七二】次に次第に解釋す。これに三段あり、其中初に異業合を釋す。之に又三段ありて初に無常の難。

【一七三】次に常の難。之に執を牒して之を破す、正しく難ずるの二段あり。

【一七四】次に常無常の難。

【一七五】第二に共業合を釋す。之に二段ありて初に執を牒して非す。

【一七六】次に正破。

合す、二つの雙指合するが如し」と言はば、是の義然らず。（一七八）何を以ての故に。先より合有ること無し、後方に合するが故なり。先無後有ならば是無常の法なり、是の故に說いて「虚空は已合共合」と言ふことを得ず。世間の法は先無後有なり。是の物常無きが如し。虚空若し爾らば亦無常なるべし。（一七九）若「虚空物に在り、器中の果の如し」と言はば、是の義然らず。（一八〇）何を以ての故に。是の如き（一八一）虚空先に器無きの時、何れの處に在りてか住する。若（一八二）住處有らば虚空は則ち多からん。如其多ならば云何ぞ（一八三）常と言ひ、一と言ひ、徧と言はん。（一八四）若虚空をして空を離れて住すること有らしめば、有物も亦虚空を離れて住すべし。（一八五）是の故に當に知るべし、虚空有ること無し。

（一八六）善男子、若說いて「指住の處、名けて虚空と爲す」と言ふ有らば、（一八七）當に知るべし、虚空は

【一七七】第三に已合共合を釋す。之に二段ありて初に章門を牒して非す。

【一七八】次に正破。之に破、嘗、合の三段あり。

【一七九】次に第二に器中を破す。之に三段ありて初に執を牒して非す。

【一八〇】次に正難。之に二段ありて初に理責を作す。之に正しく責む、多空有るべしと難す、過を結するの三段あり。

【一八一】虚空器なき時等。若し器あれば空、器の中に在りと言はば、本と器なき時空何の處にか在ると難す。

【一八二】住處有らば虚空多からんとは、未だ器あらざる時、已に一空あり、後に器ある時復た一空あり、寧ろ多空に非ずやとなり。

【一八三】常と言ひ一と言ひ徧と言はん。一に先きは是れ器なきの空、今は是れ器ある空、寧ぞ是れ常と言はん。二に一と言ふ可らずとは解すべし。三に器ある時の空は器なき時の空に非ず、寧ぞ徧と言ふを得んや。

【一八四】次に並難。

【一八五】第三に結。

【一八六】次に第八に重ねて虚空是れ住處を破す。之に二段ありて初に牒執。

【一八七】次に破。

是無常法なり。何を以ての故に。指すに四方有り。若四方有らば、當に知るべし、虚空も、亦四方有らん。一切の常法都て方所無し、方有るを以ての故に虚空無常なり。若是無常ならば五陰を離れず。要ず五陰を離るれば是所有無し。(一八八)善男子、法の若因緣に從ひて住する者有らば、當に知るべし、是の法を名けて無常と爲す。善男子、譬へば一切衆生、樹木地に因りて住す。地無常の故に地に因るの物次第無常なるが如し。善男子、地水に因り、水無常の故に地も亦無常なるが如く、水風に因り、風無常の故に水も亦無常なるが如く、風虚空に依り、虚空無常の故に風も亦無常なり。若無常ならば、云何ぞ說いて「虚空は是常、一切處に徧す」と言はん。(一八九)虚空無なるが故に是過去、未來、現在に非ず、(一九〇)亦兎角是無物の故に、是過去、未來、現在に非ざるが如し。(一九一)是の故に我說かく、「佛性常なるが故に三世の攝に非ず、虚空無なるが故に三世の攝に非ず。」(一九二)善男子、我終に世間と共に諍はず。何を以ての故に。世智有と說かば我も亦有と說き、世智無と說かば我も亦無と說く。』

(一九三)迦葉菩薩の言さく、『世尊、菩薩摩訶薩幾法を具足して世と諍はず、世法に點汚せられざる。』(一九四)

【一八八】第二に總じて五大何を破す。

【一八九】次に第二に同異を結す。之に三段ありて初に常は三世に非ず。

【一九〇】次に兎角亦た非なり。

【一九一】次に同異を結す。

【一九二】是より第三に智慧の用。之に如來智解勝るが故に世と諍はざるを明す、諸菩薩等根智慧を除くを明すの二段あり。初の中に又三段ありて先に總釋。

【一九三】第二に合義。之に問答の二問答あり。其中問答の問。

【一九四】次に諸答。之に三段ありて初に十法章。

佛の言はく、『善男子、菩薩摩訶薩十法を具足して世と諍はず、世法に霑汙せられず。(一九五)何等をか十と爲す。一つには信心、二つには有戒、三つには善友に親近し、四つには內善く思惟し、五つには精進を具足し、六つには正念を具足し、七つには智慧を具足し、八つには正語を具足し、九つには正法を樂ひ、十には衆生を憐愍す。(一九六)善男子、菩薩是の如きの十法を具足すれば、世と諍はず、世法に霑汙せられざること優鉢羅華の如し。』

(一九七)迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、佛の所說の如く、世智有と說かば我も亦有と說き、世智無と說かば我も亦無と說くとは、何等を名けて世智の有無と爲す。』(一九八)佛の言はく、『善男子、世智者「色は是無常、苦、空、無我」と說き、乃至識も亦是の如し。善男子、是を世智有を說き我も亦有を說くと名く。(一九九)善男子、世智色は常樂我淨有ること無しと說く、受想行識も亦復是の如し。善男子、是を世智無を說けば我も亦無を說くと名く。』

(二〇〇)迦葉菩薩復佛に白して言さく、『世尊、世閒の智者は卽ち是菩薩一切の聖人なり。若諸の聖人色は是無常、苦、空、無我ならば、云何ぞ如來は佛の色身常恆無變と說く。世閒の智者の所說は無法なり、云何ぞ如來は說いて是有と言ふ。如來、世尊、是の如きの說を作して、云何ぞ復世と諍はず、世法に霑汙せられずと言ふや。』(二〇一)如來已に三種の顚倒を離る。所謂想倒、心倒、見倒なり。佛色實

---

【一九五】次に列。
【一九六】次に不諍を結す。
【一九七】次に第二番の問答。初に問。
【一九八】次に佛答。之に二段ありて初に有
【一九九】次に無。
【二〇〇】次に第三番の問答。初に問の中二段ありて、先づ正しく相違の問を作す。
【二〇一】次に佛に顚倒有るを結す

は是無常と說くべきに今乃ち常と說く。云何ぞ顚倒を遠離し、世と諍はずと名くることを得ん。』(二〇二)佛の言はく、『善男子、凡夫の色は煩惱より生ず。是の故に(世)智、色は是無常、苦、空、無我と說く。如來の色は煩惱を遠離す、是の故に是常恆無變と說く。』

(二〇三)迦葉菩薩の言さく、『世尊、云何が色は煩惱より生ずと爲す。』(二〇四)『善男子、煩惱に三種あり、所謂欲漏、有漏、無明漏なり。(二〇五)智者應當に是の三漏所有の罪過を觀ずべし。所以は何ん。罪過を知り已らば則ち能く遠離す。譬へば醫師の先に病脈を診、病の所在を知りて然して後に藥を授くるが如し。(二〇六)善男子、人盲を將ゐて棘林の中に至り之を捨てて還る。盲人後に於て甚だ出づることを得難く、設ひ出づることを得る者も身體壞し盡くるが如く、世間の凡夫も亦復是の如し、三漏の過患を知見すること能はざれば、則ち隨逐して行ず。如其見る者は則ち能く遠離す。罪過を知り已らば、果報を受くと雖も果報輕微なり。(二〇七)善男子、四種の人有り。一つには作業の時は重く受報の時は輕し、二つには作業の時は輕く受報の時は重し、三つには作業の時は重く受報も亦重し、四つには作業の時は輕く受報も亦輕し。(二〇八)善男子、若人能く煩惱の罪過を觀ずれば、是の人作業、

---

【二〇二】次に佛答。
【二〇三】次に第四番の問答。初に問。この問、佛答に由りて逆見するに二意を含む。一に色陰煩惱より生じて何ぞ常なるを得んや。二に色煩惱より生じて何ぞ常なるを得んやなり。
【二〇四】次に佛答。之に三段あり、其中初に觀と不觀とは常無常の本たることを明す。之に雙べて觀と不觀とを明す、單に觀者を明すの二段あり。初の中に又四段ありて初に三漏。是れ所觀の境。
【二〇五】次に能觀の人。
【二〇六】次に不能觀の人。
【二〇七】次に雙べて二人を出す。
【二〇八】第二に單に能觀の人を出す。之に二段ありて初に單に

受報俱に轉じ。(二〇九)善男子、有智の人是の如きの念を作さく、「我是の如き等の漏を遠離すべし、又復是の如き等の鄙惡の事を作すべからず。何を以ての故に。我今未だ地獄、餓鬼、畜生、人天の報を脫ることを得ざるが故に。我若道を修せば、當に是の力に因りて諸苦を破壞すべし。」是の人觀じ已りて貪欲、瞋恚、愚癡微弱なり。旣に貪欲、瞋、癡の輕きを見已りて、其の心歡喜す。(二一〇)復是の念を作さく、「我今是の如く皆修道の因緣力に由るが故に、我をして不善の法を離れ、善法に親近するを得しむ。是の故に現在に正道を見ることを得ん。應當に勤加して之を修習すべし。」是の人是の勤修道力に因りて無量の諸の惡煩惱を遠離し、及び地獄、餓鬼、畜生、人天の果報を離る。(二一一)是の故に我契經の中に於て說かく、「當に一切の有漏煩惱、及び有漏の因を觀ずべし。何を以ての故に。有智の人、若但漏を觀じて漏因を觀ぜざれば、則ち諸の煩惱を斷ずること能はざるなり。何を以ての故に。智者は漏の是の因より生ずるを觀ず。我今因を斷じて漏則ち生ぜず。」善男子、彼の醫師先に病因を斷ずれば、病則ち生ぜざるが如し。智者先に煩惱の因を斷ずる者も亦復是の如し。(二一二)有智の人先に當に因を觀じ、次に果報を觀ずべし。善因より善果を生ずるを知り、惡因より惡果を生ずるを知る。果報を觀じ已りて惡因を遠離す。(二一三)果報

---

人を出す。

【二〇九】次に廣く其人を明す。之に總、別の二段あり。初の總じて觀漏を明す中に又二段ありて初に正しく漏を觀するを明す。

【二一〇】次に自ら能く勤修することを明す。

【二一一】第二に別して觀漏を明す之に二段あり、其中初に正しく觀漏を明す。之に三段ありて初に因。之に法、譬、合の三段あり。

【二一二】次に果報。

【二一三】次に輕重。

を觀じ已らば復當に次に煩惱の輕重を觀ずべし。輕重を觀じ已りて先に重き者を離る。既に重きを離れ已らば輕き者は自ら去る。（二四）善男子、智者若し煩惱、煩惱の因、煩惱の果報、煩惱の輕重を知らば、是の人爾の時に精勤に道を修して息まず悔いず。善友に親近し、至心に法を聽く。是の如き諸の煩惱を滅するが爲の故なり。善男子、譬へば病者の自ら病輕くして必ず除差すべきを知らば、苦藥を得と雖も之を服して悔いざるが如く、有智の人も亦復是の如し。聖道を勤修し歡喜して愁へず、息まず、悔いず。

（二五）善男子、若し人能く煩惱、煩惱の因、煩惱の果報、煩惱の輕重を知り、煩惱を除くが爲の故に道を勤修せば、是の人煩惱より色を生ぜず、受、想、行、識も亦復是の如し。（二六）若し煩惱、煩惱の因、煩惱の果報、煩惱の輕重を知ること能はず、勤めて修習せざれば、是の人則ち煩惱より色を生ず、受、想、行、識も亦復是の如し。

（二七）善男子、煩惱、煩惱の因、煩惱の果報、煩惱の輕重を知り、煩惱を斷せんが爲に道を修行する者は、即ち是如來なり。是の因緣を以て如來の色は常なり、乃至識も常なり。（二八）善男子、煩惱、煩惱の因、煩惱の果報、煩惱の輕重を知らず、道を修する能はざれば即ち是凡

【二四】次に能く自ら勤修することを明す。之に法、譬、合の三段あり。

【二五】第二に正しく常無常の果を明す。之に二段ありて初に煩惱より生ぜざるを明す。則ち常の果を得。

【二六】次に煩惱より生ずるを明す。無常の果を得。

【二七】第三に所屬の人を結す。之に二段ありて初に常果を得るは即ち是れ如來なることを結す。

【二八】次に無常果を得るは即ち是れ凡夫なることを結す。

夫なり、是の故に凡夫の色は是無常なり、受、想、行、識は悉く無常なり。(二二九)善男子、世間の智者、一切の聖人、菩薩、諸佛、是の二義を説く、我も亦是の如く是の二義を説く。是の故に我「世間の智者と共に諍はず、世法に霑汙せられず」と説く。』

(二三〇)迦葉菩薩復佛に白して言さく、『世尊、佛の所説の如き三有漏とは、云何が名けて(二三一)欲漏、有漏、無明漏と爲すや。』(二三二)佛の言はく、『善男子、欲漏とは内の惡覺觀、外緣に因りて欲漏を生ず。(二三三)是の故に我昔王舍城に在りて阿難に告げて言はく、「阿難、汝今此の(二三四)女人所説の偈頌を受よ。是の偈は乃ち是過去諸佛の宣説する所なり。(二三五)是の故に一切の内の惡覺觀、外の諸因緣は之を名けて欲と爲す、是を欲漏と名く。(二三六)有漏とは、色無色界の内の諸の惡法、外の諸の因緣なり。(二三七)欲界中の外の諸の因緣、内の諸の覺觀を除く、(二三八)是を有漏と名く。(二三九)

【二二九】次に第三に還た不諍の用を結成す。

【二三〇】是より第二に諸菩薩の等觀解惑を除くを明す。之に四段あり、其中初に漏體を觀ず。之に三番の問答あり。初番の中先づ三漏體の問。

【二三一】欲漏有漏無明漏の三漏に就て、今品と前の德王品との所説同じからず。德王品は欲界の一切煩惱中無明を除いて欲漏とし、上二界の煩惱中無明を除いて有漏とし、三界の無明を總じて無明漏とせり。然るに今品所明は欲界中の愛を欲漏と名け、上二界の愛を有漏と名け、無明と我見とを合して無明漏と名く。異趣須く察すべきなり。

【二三二】次に佛答。之に三段あり、其中初に欲漏。之に又三段ありて初に出體。

【二三三】次に引證。

【二三四】女人所説の偈頌は出曜經に出づ。今文旨を略出すれば、『佛阿難を將ゐて共に行くに、一りの女人、兒を將て水を汲む。一りの男子を見て遂に染心を生じ、瞩目して已まず。因て兒の頸を繋ぎて井中に內れ乃ち偈を説き自ら責めて云く「欲欲。我れ汝の根本を知る。意の思想を以て生ず。我れ汝を思想せざれば。則ち汝生ずるを得ず」と。』

【二三五】次に結名。

【二三六】第二に有漏。之に三段ありて初に出體。

無明漏とは、我及び我所を了知する能はず、内外を別たざるを無明漏と名く。(三三〇)善男子、無明は卽ち一切諸漏の根本なり。何を以ての故に。一切の衆生無明の因緣もて、陰入界に於て憶想、作相するを名けて衆生と爲す、是を想倒、心倒、見倒と名く。是の因緣を以て一切の漏を生ず。是の故に我十二部經に於て「無明とは、卽ち是貪の因、瞋の因、癡の因」と說く。』

(三三一)迦葉菩薩の言さく、『世尊、如來昔十二部經に於て說いて、「不善思惟の因緣は貪欲、瞋、癡を生ず」と言ふ。今何の因緣か乃ち無明と說きたまふや。』(三三二)『善男子、是の如きの二法互に因果と爲り、互に相增長す。(三三三)不善思惟は無明を生じ、無明の因緣は不善思惟を生ず。(三三四)善男子、其能く諸の煩惱を生長する者は、皆悉く名けて煩惱の因緣と爲す。是の如きの煩惱の因緣に親近するを名けて無明不善思惟と爲す。(三三五)子の芽を生ずるに、子は是近因、四大は遠因なるが如く、煩惱も亦爾なり。』

(三三六)迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、佛の所說の如き、無明は卽ち漏なりと、云何ぞ復無明に因るが故に諸漏を生ずと言ふや。』(三三七)佛の言はく、『善男子、我が所說の如く無明漏とは是內の無明なり。無明に因りて諸漏を

---

【三二七】次に欲漏との簡異。
【三二八】次に結名。
【三二九】第三に無明漏。之に三段ありて初に出體。
【三三〇】次に能く諸漏を生ずることを明す。之に唱、釋、結の三段あり。
【三三一】次に第二番の問答。初に何を以て異說すと問ふ。
【三三二】次に佛答。之に三段あり、初に兩章門。
【三三三】次に釋。之に二段ありて先づ互に因果を爲すを釋す。
【三三四】次に增長を釋す。
【三三五】次に譬を以て結す。
【三三六】次に第三番の問答。初に問。
【三三七】次に佛答。之に三段ありて初に二無明。
【三三八】次に釋。之に二段ありて初に無明漏は是れ內漏なることを明す。
【三三九】次に纏生は是れ外漏なる

生ぜば是内外の因なり。(三三八)若無明漏と說かば、是を内倒にして無常、苦、空、無我を識らずと名く。(三三九)若一切の煩惱の因緣と說かば、是を外の我我所を知らずと名く。(三四〇)若(三四一)無明漏を說かば、是を無始、無終と名く。(三四二)無明より陰界入等を生ず。』

(三四三)迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、佛の所說の如き、「有智の人漏因を知る」と、云何が名けて漏因を知ると爲す。』(三四四)『善男子、智者當に「何の因緣の故に是の煩惱を生じ、何の行を造作して此の煩惱を生じ、何れの時中に於て此の煩惱を生じ、誰と共に住せる時此の煩惱を生じ、何れの處に止住して此の煩惱を生じ、何の事を觀已りて煩惱を生じ、誰の房舍、臥具、飮食、衣服、湯藥を受けて煩惱を生ずるや。(三四五)何の因緣の故に下を轉じて中と作し、中を轉じて上と作し、下業を中と作し、中業を上と作すや」と觀ずべし。(三四六)菩薩摩訶薩是の觀を作す時、則ち生漏の因緣を遠離することを得。是の如く觀ずる時、未生の煩惱は遮して生ぜざらしめ、已生の煩惱は便ち除滅するを得。(三四七)是の故に我契經の中に於て說かく、「智者當に煩惱を生ずる因を觀ずべし」と。』

---

を示す。

【三四〇】次に前果を結す。

【三四一】無明漏は無始無終と名く とは無始無終の果を得るを言ふ。十二因緣中無明は最初なり、能く行識等の果を生ず、是の如き因緣三世に輪轉せば無始無終と名く。若し中觀を得ば能く因緣を焦して有始有終を成じ、彼の生死を翻して涅槃の終に歸す。

【三四二】無明より陰界入を生ずとは、無明より諸漏を生じ、亦た陰果を招くをいふ。

【三四三】次に第二に漏因を觀ず。之に兩番の問答あり。初番の中先づ問。

【三四四】次に佛答。之に四段ありて初に外因。

【三四五】次に内因。

【三四六】次に觀を爲して益を得るを明す。

【三四七】次に引證。

(二四八)迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、衆生の一身、云何が能く種種の煩惱を起す。』(二四九)佛の言はく、『善男子、(二五〇)一器の中に種種の子有り、水雨を得已れば各各自ら生ずるが如く、(二五一)衆生も亦爾なり。器は是一つと雖も、愛の因緣の故に能く種種の煩惱を生長す。』

(二五二)迦葉菩薩の言さく、『世尊、智者云何が果報を觀ずる。』(二五三)『善男子、智者當に觀ずべし、「諸漏の因緣能く地獄、餓鬼、畜生を生ず。是の漏の因緣人天の身を得。卽ち是無常、苦、空、無我なり。是の身器の中に三種の苦、三種の無常を得。(二五四)是の漏の因緣、能く衆生をして五逆罪を作りて諸の惡報を受け、能く善根を斷じ、四重禁を犯し、三寶を誹謗せしむ。智者當に、我旣に是の如きの身を受得し、是の如きの煩惱を生起して諸の惡果を受くべからず」と觀ずべし。』

(二五五)迦葉菩薩の言さく、『世尊、無漏の果有り、(二五六)復智者諸の果報を斷ずと言ふ。(二五七)無漏の果報は斷の中に在りや不や。』(二五八)諸の得道の人は無漏果有り。(二五九)如其智者無漏果を求めば、云何ぞ佛

【二四八】次に第二番の問答。初に問。

【二四九】次に佛答。之に二段ありて初に譬。

【二五〇】一器の中等。一器は一心に譬ふ。種種子は煩惱を成就するに、得雨各生は業相を得て各各自ら相ひ生ずるに譬ふ。卽ち好相を取らば貪を生じ、惡相を取らば瞋を生ずるなるが如し。

【二五一】次に合。

【二五二】次に第三に漏果を觀ず。之に兩番の問答あり。先づ初番の問。

【二五三】次に佛答。之に二段ありて初に觀果。

【二五四】次に智果。

【二五五】次に第二番の問答。初に問。之に略、廣の二段あり。初の略問に又三段ありて先づ無漏果有るを明す。

【二五六】次に智者は果を斷するなりと明す。

【二五七】次に無漏果は斷すべきや否やを問ふ。

【二五八】次に廣問。之に又三段、初に無漏の果有るを明す。

【二五九】次に云何ぞ修すと言ふやと問す。

一切智者果報を斷すべしと說きたまふや。(二六〇)如其斷せば、今諸の聖人云何ぞ有ることを得ん。』

(二六一)『善男子、如來或時因中に果を說き果中に因を說きたまふ。(二六二)世間の人の泥卽ち餅、縷卽ち是衣と說くが如し、是を因中に果を說くと名く。果の中に因を說くとは、牛は卽ち是水草、人は卽ち是食なり。(二六三)我も亦是の如く因中に果を說く。先に經中に於て是の說を作して言はく、「我心に從りて身梵天の邊に至る」と、是を因中說果と名く。果中に因を說くとは、「此の六入は過去業と名く、」是を果中說因と名く。(二六四)善男子、一切の聖人眞實は(二六五)無漏の果報有る無く、一切の聖人修道の果報更に漏を生ぜず、是の故に名けて無漏果報と爲す。(二六六)善男子、有智の人是の如く觀ずる時、則ち永く煩惱の果報を滅することを得。(二六七)善男子、智者觀じ已りて是の如く煩惱の果報を斷せんが爲に聖道を修習す。(二六八)聖道とは、則ち空、無(相)無願なり。是の道を修し已れば、能く一切の煩惱の果報を滅す。』

【二六〇】次に云何ぞ有と言ふやを問ふ。
【二六一】第二に佛答。之に三段、初に因果互に說く。之に又三段、先づ如來の兩種の說。
【二六二】次に世人の說。
【二六三】次に如來の說。
【二六四】次に無漏果無し。
【二六五】無漏果報あるなしとは、三界の中は但だ漏業を以て報を得るが故なり。然るに因中說果を論ぜば此の無漏に因て能く佛果を生ず、因實に果に非ず、能く果を生ずるが故に、故に下文に無漏果報と爲すと曰ふ。
【二六六】次に煩惱の果無し。之に二段ありて初に斷惑。
【二六七】次に修道。
【二六八】次に第四に觀智を結す。

# 巻の第三十四

## 迦葉菩薩品の四

(一)迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、一切衆生皆煩惱に從うて果報を得。煩惱と言ふは所謂惡なり。惡煩惱よりして生ずる所の煩惱も亦名けて惡と爲す。是の如くば煩惱に則ち二種有り。一つには因、二つには果なり。因惡の故に果惡なり、果惡の故に子惡なり。(二)紝婆果の其の子苦きが故に、華果、莖葉の一切皆苦きが如く、猶し毒樹の其の子毒の故に果も亦是毒なるが如し。(三)因も亦衆生、果も亦衆生なり、因も亦煩惱、果も亦煩惱なり。(四)煩惱の因果は卽ち是衆生、衆生は卽ち是煩惱の因果なり。(五)若是の義に從はば、云何ぞ如來先に雪山にも亦毒草、微妙の藥王有るに喩ふるや。(六)若煩惱は卽ち是衆生、衆生は卽ち是煩惱と言はば、云何ぞ衆生の身中妙藥王有りと言はん。』(七)佛の言はく、『善い哉善い哉善男子、無量の衆生咸く此の疑を同うす、汝今能く爲に啓請して解を求む、我亦能く斷せん。

---

【一】是より第三に生善の文。之に兩番の問答あり。初番の問に三段あり、其中初に緣起。之に三段ある中先づ法。

【二】次に譬。紝婆(Nimba)は苦棟と譯す、樹の名。果實を紝婆果といひ、苦味を有す。

【三】次に合。

【四】煩惱の因果は卽是衆生。煩惱を用つても衆生と爲す、衆生の渾身復た是れ煩惱なればなり。煩惱を衆生と爲すは是れ因苦にして、衆生卽ち是れ煩惱と爲すは卽ち是れ果苦、善ならず。若し然らば倶に不善なり。故に衆生是れ煩惱の

諦かに聽き諦かに聽け、善く之を思念せよ。吾當に汝が爲に分別、解說すべし。(八)善男子、雪山喩とは即ち是衆生、毒草と言ふは即ち是煩惱、妙藥王とは即ち淨梵行なり。(九)善男子、若衆生、能く是の如きの清淨梵行を修する有らば、是を身中に妙藥王有りと名く。』

(一〇)迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、云何が衆生は清淨梵行有りや。』

(一一)『善男子、猶し世間子より果を生ずるに、是の果能く子の與に因と作ること能はざる者有り、能はざる者有り。能く作ること有る者は是を果子と名け、若作ること能はざるは、唯果と名くることを得て子と名くることを得ざるが如し。

(一二)一切衆生も亦復是の如く、皆二種有り。一つには煩惱果にして是煩惱因有り。二つには煩惱果にして煩惱因に非ざる有り。是煩惱果にして煩惱因に非ざるは、是則ち名けて清淨梵行と爲す。

(一三)善男子、衆生受を觀じて是一切漏の近因なるを知る、所謂内外の漏、受の因緣の故に斷絕すること能はず。一切の諸漏も亦三界の牢獄を出づること能はず。衆生受に因りて我我所に著して、心倒、想倒、見倒を生ず。是の故に衆生先に當に受を觀ずべし。是の如き受は一切の愛の爲に近因と

---

因果なりと爲すなり。

【五】次に正問。

【六】次に結問。

【七】第二に佛答。之に三段ありて初に歎問。

【八】次に前の譬を合す。

【九】次に能修の人を結す。

【一〇】次に第二番の問答。初に問。

【一一】次に佛答。之に二段あり、其中初に總じて所問を答ふ。之に又二段ありて初に譬。

【一二】次に合。

【一三】次に別して觀解を修することを答ふ。之に五段あり、初の四は五陰觀、後の一は因緣觀。初の五陰觀の中、先づ受觀。之に四段、初に受體の觀。文の中受は只だ是れ果報、近因とは受は是れ五果の末、此の處より復た三因を起し、諸煩惱を生ずるが故なり。

作る。是の故に智者愛を斷せんと欲せば當に先に受を觀ずべし。善男子、一切衆生十二因緣所作の善惡皆受の時に因る。是の故に我阿難の爲に說いて言はく、「阿難、一切衆生所作の善惡皆是受の時」と。是の故に智者先に當に受を觀ずべし。既に受を觀じ已らば、(一四)復當に更に觀ずべし。「是の如き受は何の因緣より生ぜる。若因緣より生ぜば是の如きの因緣復何より生ぜる。若無因にして生ぜば無因何が故ぞ無受を生ぜざる。」復觀ず、「是の受自在天に因りて生ぜず、士夫に因りて生ぜず、微塵に因りて生ぜず、時節生に非ず、想に因りて生ぜず、性に因りて生ぜず、自より生ぜず、他より生ぜず、自他生に非ず、無因生に非ず。是の受皆緣合に從つて生ず。因緣とは卽ち是愛なり。是の和合の中、受有るに非ず、受無きに非ず。是の故に我當に是の和合を斷ずべし。和合を斷ずるが故に、則ち受を生ぜず。」善男子、智者因を觀じ已らば、(一五)次に果報を觀ず。「衆生受に因りて地獄、餓鬼、畜生、乃至三界の無量の苦惱を受く。受の因緣の故に受に常樂無く、受の因緣の故に善根を斷じ、受の因緣の故に解脫を獲得す。」是の觀を作す時受因を作さず。云何が名けて受因を作さずと爲す。受を分別するを謂ふ。「何等の受か能く愛の因と作り、何等の愛か能く受の因と作る。」善男子、衆生若能く是の如く深く愛因、受因を觀ずれば、則便能く我及び我所を斷ず。(一六)「善男子、若人能く是の如き等の觀を作さば、則ち愛と受と何れの處に在りて滅するかを分別すべし。卽ち愛受少しく滅する處有るを見る。當に知るべし、亦畢竟滅有るべ

【一四】次に受因の觀。
【一五】次に受果の觀。
【一六】次に[illegible]

し。爾の時に卽ち解脫に於て信心を生ず。信心を生じ已りて、是の解脫處何に由りてか得る、八正從りすと知りて卽便修習す。云何が名けて八正道と爲すや。是の道は受に三種の相有るを觀す。一つには苦、二つには樂、三つには不苦不樂なり。是の如き三種倶に能く身と心を增長す。何の因緣の故に能く增長するや。觸の因緣なり。是の觸に三種あり、(一七)一つには無明觸、二つには明觸、三つには非明無明觸なり。明觸と言ふは卽ち八正道なり。其の餘の二觸は身心、及び三種の受を增長す、是の故に我二種の觸を斷ずべし、因緣の觸斷ずれば三受を生ぜず。善男子、是の如き受とは亦名けて因と爲し、亦名けて果と爲す。智者當に亦因亦果を觀ずべし。云何が因と爲す。受に因りて愛を生ず、之を名けて因と爲す。云何が果と名くる。觸に因りて生ずるが故に之を名けて果と爲す。是の故に此の受も亦因亦果なり。智者是の如く是の受を觀じ已りて、次に復愛を觀ず。果報を受くるが故に之を名けて愛と爲す。智者愛を觀ずるに復二種有り、一つには雜食、二つには無食なり。雜食愛とは生、老、病、死一切諸有に因たり。無食愛とは生、老、病、死一切諸有を斷じ、無漏道を貪る。智者復當に是の如きの念を作すべし、我若し是の雜食の愛を生せば、則ち生、老、病、死を斷ずること能はず。我今無漏の道を貪ると雖も、受因を斷せずんば則ち無漏道果を得ること能はず。是の故に應當に先に是の觸を斷ずべし。觸既に斷じ已れば、受則ち自

【一七】無明・明・非明無明の三觸。行心若し惡を作さば識受想の三を無明觸とし、行心善を起さば前の三心を名けて明觸とし、行若し無記卽ち非善非惡ならば前の三心を非明無明觸と名く。

ら滅す。受既に滅し已れば、愛も亦隨つて滅す、是を八正道と名く。善男子、若衆生能く是の如く觀ずる有らば、毒身有りと雖も、其の中亦微妙の藥王有り。雪山の中に毒草有りと雖も、亦妙藥有るが如し。善男子、是の如く衆生は煩惱に從つて果報を得と雖も、是の果報更に復煩惱の爲に因と作らず。是を則ち名けて清淨梵行と爲す。

【一八】復次に善男子、智者當に受愛の二事何の因緣より生ずるかを觀じて、想に因り生ずるを知るべし。何を以ての故に。衆生色を見亦貪を生ぜず、及び受の時を觀ずるに亦貪を生ぜず。若色中に於て顛倒の想を生じて色は卽ち是常、樂、我、淨、受は是常恆にして變易有ること無しと謂はば、是の倒想に因りて貪、瞋、癡を生ず。是の故に智者應當に想を觀ずべし。云何が想を觀ずる。當に是の念を作すべし、一切衆生未だ正道を得ず、皆倒想有り。云何が倒想なる。非常の中に於て常想を生じ、非樂の中に於て樂想を生じ、非淨の中に於て淨想を生じ、空法の中に於て我想を生じ、非男女、大小、晝夜、歲月、衣服、房舍、臥具に於て、男女より臥具に至るの想を生ず。是の想に三種あり。一つには小、二つには大、三つには無邊なり。小因緣の故に小想を生じ、大因緣の故に大想を生じ、無量緣の故に無量想を生ず。復小想有り、未入定を謂ふ。復大想有り、已入定を謂ふ。復無量想有り、十一切入を謂ふ。復小想有り、所謂欲界の一切想等なり。復大想有り、所謂色界の一切想等なり。復無量想有り、無色界の一切想等を

【一八】第二に想觀。之に四段あり其中初に想體を觀り、之に二段、初に正しく體を觀す。

謂ふ。三想滅するが故に受則ち自ら滅す、想と受と滅するが故に名けて解脱と爲す。」

〔一九〕迦葉菩薩の言さく、『世尊、一切法を滅するを名けて解脱と爲す、如來云何ぞ想受の滅を説きて解脱と名くるや。』〔二〇〕佛の言はく、『善男子、如來或時衆生に因りて説きたまふに、聞く者法を解し、或時法に因りて衆生を説くに、聞く者亦衆生を説くを解す。云何が名けて衆生に因りて説くに、聞く者法を解すと爲す。我先に大迦葉の爲に説くが如し、「迦葉、衆生滅する時善法則ち滅す」と、是を〔二一〕因衆生説聞者解法と名く。云何が法に因りて衆生を説くに、聞く者も亦衆生を説くを解する。我先に阿難の爲に説きて言ふが如し、「我も亦一切法に親近すと説かず、亦復一切法に親近せずとも説かず。若法近き已らば善法衰羸し、不善熾盛ならん。是の如き法は親近すべからず。若法近き已らば、不善衰滅し、善法増長せん。是の如き法は是親近すべし」と、是を〔二二〕因法説於衆生聞者亦解説於衆生と名く。善男子、如來想受二滅を説くと雖も、則ち已に一切の可斷を總説

〔一九〕次に問答。初に問。問のうち想受の滅を解脱と名くと云ふに就て、數論二家の異説あり、蓋し想受の所縁に就ての論爭なり。數家は云く、解脱を得るは但だ此の二心を滅するに非ず、一切の心を滅して乃ち解脱を得るなり。今偏へに二心を言ふは過患多きに從ふ、卽ち受心は色（禪）を修し、想心は無色を修す。受心は味禪、想心は無色を計して以て涅槃と爲すと。次に論家の説は如何といふに世諦を縁するを想受と名け、眞諦を縁するを慧心と名く、世諦の想心は滅して解脱を得べきも、眞諦慧心は滅すべからずと。今二家の相異を略言すれば想受の所縁の規定に於て、數家は二界に就くとし、論家は二諦に就くとす。

〔二〇〕次に佛答。

〔二一〕因衆生説、聞者解法とは、衆生を因とし縁として善惡等の法を説くに、聞いて卽ち解を得るを云ふ、卽ち衆生を中心とするなり。

〔二二〕因法説於衆生聽者解とは先に善法は近く

す。智者既に是の如きの想を觀じ已らば、(二三)次に想因を觀ず。是の無量の想何に因りて生ずる、觸に因りて生ずるを知る。是の觸二種あり。一つには煩惱に因る觸、二つには解脫に因る觸なり。無明に因りて生ずるを煩惱觸と名け、明に因りて生ずる者を解脫觸と名く。煩惱に因る觸は倒想を生じ、解脫に因る觸は不倒想を生ず。想因を觀じ已りて次に果報を觀ず。』

(二四)迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、若此の煩惱の想に因りて倒想を生ずるを以てす。一切の聖人實に倒想有りて煩惱無し、是の義云何ん。』(二五)佛の言はく、『善男子、云何が聖人而も倒想有る。』

(二六)迦葉菩薩の言さく、『世尊、一切の聖人牛に牛想を作し亦是牛と說き、馬に馬想を作し亦是馬と說く。男女、大小、舍宅、車乘、去來も亦爾なり。是を倒想と名く。』(二七)『善男子、一切の凡夫二種の想有り。一つには世流布想、二つには著想なり。一切の聖人は唯世流布想有りて著想有ること無し。一切の凡夫は惡覺觀の故に世流布に於て著想を生ず。一切の聖人は善覺觀の故に世流布に於て著想を生ぜず。是の故に凡夫は名けて倒想と爲し、聖人は知ると雖も倒想と名けず。智者は斯の如く想因を觀じ已りて(二八)次に果報を觀ず。是の惡想の果、地獄、餓鬼、畜生、人天の中に在りて受く。如我惡覺觀を斷ずるに因るが故に無明と觸とを斷ず、是の故に想斷す。想斷するに因るが故に果報も亦斷ず。(二九)

---

べく惡法は捨つべきを說く、衆生之を聞いて能く解を得るをいふ、卽ち法を中心とす。

【二三】次に想因觀。之に二段ありて初に正しく因を觀す。

【二四】次に兩番の問答。其中初番の問。

【二五】次に佛答。

【二六】次に第二番の問。

【二七】次に佛答。

【二八】次に想果の觀。

【二九】次に修道。

智者是の如き想因を斷せんが爲に八正道を修す。善男子、若能く是の如き等の觀を作す有らば、則ち名けて清淨梵行と爲すことを得。善男子、是を「衆生毒身の中に妙藥王有り。雪山の中に毒草有りと雖も亦妙藥有るが如し」と名く。

〔三〇〕復次に善男子、智者欲を觀ず。欲とは卽ち是色、聲、香、味、觸なり。善男子、卽ち是如來因中に果を說きたまふ。此の五事より欲を生ずるのみ、實は欲に非ざるなり。善男子、愚癡の人は之を受くることを貪求す。是の色中に於て顚倒想を生じ、乃至觸の中にも亦倒想を生じ、〔三一〕倒想の因緣便ち受を生ず。是の故に世間倒想に因りて十種の想を生ずと說く。欲の因緣の故に世間に在りて惡の果報を受く。惡を以て父母、沙門、婆羅門等に加ふ。作すべからざる所、故に之を作し、身命を惜まず。是の故に智者是の惡想の因緣、故に欲心を生ずるを觀ず。智者是の如く欲因を觀じ已りて、〔三二〕次に果報を觀ず。是の欲多く諸の惡果報有り、所謂地獄、餓鬼、畜生、人中、天上なり、是を果報を觀ずと名く。若是の惡想除滅するを得ば、終に此の欲心を生ぜざるなり。欲心無きが故に惡受を受けず。惡受無きが故に、則ち惡果無し。是の故に我先に惡想を斷ずべし。惡想を斷じ已れば、是の如き等の法自然にして滅す。〔三三〕是の故に智者惡想を滅せんが爲に八正道を修す、是則ち名けて清淨梵行と爲す。是を衆生毒身の中に妙藥王有り、雪山の中に毒草有りと雖も亦妙藥有るが如しと名く。

〔三〇〕第三に欲觀。之に四段ありて初に欲體を觀す。
〔三一〕次に欲因の觀。
〔三二〕次に欲果の觀。
〔三三〕次に修道。

期業とは身、口業を謂ふ。先に發するが故に意業と名け、意業より生ずるを身、口業と名く。是の故に意業は是を名けて正と爲す。智者業を觀じ已りて(四〇)次に業因を觀ず。業因とは卽ち無明觸なり。無明觸に因りて衆生有を求む。有を求むる因緣卽ち是愛なり。愛因緣の故に三種の身、口、意業を造作す。善男子、智者是の如く業因を觀じ已りて(四一)次に果報を觀ず。果報に四つ有り。一つには黑黑果報、二つには白白果報、三つには雜雜果報、四つには不黑不白不黑不白果報なり。黑黑果報とは、作業の時垢、果報も亦垢なり。白白果報とは、作業の時淨、果報も亦淨なり。雜雜果報とは、作業の時雜、果報も亦雜なり。不白不黑不白不黑果報とは、無漏業と名く。』

(四二)迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、先に無漏は果報有ること無しと說く、今云何ぞ不白不黑果報と言ふや。』(四三)佛の言はく、『善男子、是の義二つ有り。一つには亦果亦報、二つには唯果にして報に非ず。黑黑果報は亦名けて果と爲し、亦名けて報と爲す。黑因より生ずるが故に名けて果と爲すことを得。能く因と作るが故に復名けて報と爲す。淨、雜も亦爾なり。無漏果とは有漏に因りて生ず、故に名けて果と爲す。他の因と作らざれば、名けて報と爲さず、是の故に果と名け、名けて報と爲さず。』



業と名けて果と爲さず。

【三九】正業是れ意業等。意は正に一切の業の本體なれば意を正業とす。身口の二業は自在任運に符會し、期契あるが如し、故に身口を期業とす。

【四〇】次に業因の觀。

【四一】次に果報の觀。之に二段、初に正しく四業を解す。

【四二】次に兩番の問答。先づ初番の問。

【四三】次に佛答。

(四四)迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、是の無漏業は是黒法に非ず、何の因緣の故に名けて白と爲さざるや。』(四五)『善男子、報有ること無きが故に名けて白と爲さず。黒を對治するが故に、故に名けて白と爲す。我今乃ち說かく「果報を受くる者を名けて黒白と爲す。是の無漏業は報を受けざるが故に名けて白と爲さず、名けて寂靜と爲す。是の如き業は、定んで報を受くる處有り。十惡法の定んで地獄、餓鬼、畜生に在り、十善の業の定んで人天に在るが如し。(四六)十不善法は上、中、下有り。上因緣の故に地獄の身を受け、中因緣の故に畜生の身を受け、下因緣の故に餓鬼の身を受く。人業の十善に復四種有り。一つには下、二つには中、三つには上、四つには上上なり。下因緣の故に鬱單越に生じ、中因緣の故に弗婆提に生じ、上因緣の故に瞿陀尼に生じ、(四七)上上因緣は閻浮提に生ず。(四八)有智の人是の觀を作し已りて即ち是の念を作さく、「我當に云何が是の果報を斷ずべき。」復是の念を作さく、「是の業因緣は無明、觸より生ず。我若し無明と觸とを斷除せば、是の如き業果則ち滅して生せず。是の故に智者無明觸の因緣を斷ぜんが爲の故に八正道を修す、是を則ち名けて清淨梵行と爲す。善男子、是を衆生毒身の中に妙藥王有り、雪山の中に毒草有りと雖も亦妙藥有るが如しと名く。(四九)復次に善男子、智者業を觀じ煩惱を觀じ已

【四四】次に第二番の問。
【四五】次に佛答。
【四六】十不善法は上中下有り。上中下は十不善を當出し、三道もて之に配屬す。十不善中重果は地獄に入り、輕果は餓鬼に入り、不重不輕は畜生に入ること文の如し。
【四七】上上因緣は閻浮に生ず。閻浮貿は壽命短かく、最劣下業の果報なるも、今行善修道の勝過に就て言を爲す。
【四八】次に修道。
【四九】次に第二に十二因緣觀。之に四段あり、其中初に總觀。

りて次に是の二所得の果報を觀ず、是の二つの果報は即ち是苦なり。既に是の苦を知らば則ち能く一切の衆生を捨離す。智者復觀ず、(五〇)(一)煩惱の因緣煩惱を生ず、(二)業因緣の故に亦煩惱を生ず、(三)煩惱の因緣復業を生ず。(四)業の因緣苦を生じ、(五)苦の因緣の故に煩惱を生ず。(六)煩惱の因緣有を生じ。(七)有の因緣苦を生ず。(八)有の因緣有を生じ、(九)有の因緣業を生ず。(十)業の因緣煩惱を生じ、(十一)煩惱の因緣苦を生ず。(十二)苦の因緣苦を生ず」(五一)善男子、智者若能く是の如きの觀を作さば、當に知るべし、是の人能く業苦を觀ず。何を以ての故に。上の所觀の如き、即ち是生死十二因緣なり。若人能く是の如く生死十二因緣を觀せば、當に知るべし、是の人新業を造らず、能く故業を壞す。(五二)善男子、有智の人地獄の苦を觀ず。一つの地獄、乃至一百三十六所、一一の地獄種種の苦有り、皆是煩惱業の因緣より生

---

之に又四種ありて前に因果相生す。又二種あり、前に正しく相生を辨ず。又亦た四あり、謂く、煩惱と業と有と苦となり、この四に十地經の三道を長出す。十地經に十二因緣を分ちて煩惱業苦の三道と爲す、即ち無明愛取は是れ煩惱道、行有は是れ業道、識等及び老死は是れ苦道なり。

【五一】煩惱の因緣煩惱を生ず。已下の文具さに順逆兩生十六句あるも今十二句を略出す。先づ十二因緣中の無明は一切煩惱の根本、之より愛取を生ずる故に(一)煩惱煩惱を生ず。行能く無明を生ず、故に(二)業煩惱を生ず。無明行を生ず、故に(三)煩惱業を生ず。行生老死を生ず、故に(四)業苦を生ず。生老死より無明を生ず、故に(五)苦煩惱を生ず。無明識等を生ず、故に(六)煩惱有を生ず。識老死を生ず、故に(七)有苦を生ず、識六入等を生ず、故に(八)有有を生ず。識行を生ず、故に(九)有業を生ず。行無明を生ず、故に(十)業煩惱を生ず。無明生老死を生ず、故に(十一)煩惱苦を生ず。生老死を生ず、故に(十二)苦苦を生ず。

【五二】次に十二因緣を結す。

【五三】次に五道苦の觀。五道中具さに十二因緣中の煩惱等の因あり。地獄は是れ苦、煩惱は是れ煩惱、業は是れ業、觸は是れ有。

するを觀ず。地獄を觀じ已りて次に餓鬼、畜生等の苦を觀ず。是の觀を作し已りて復人天所有の諸苦を觀ず。是の如き衆苦皆煩惱業の因緣より生ず。善男子、天上は大苦惱の事無しと雖も、然も其の身體柔輭細滑なり、互相を見る時極めて大苦を受く。地獄の苦の如く等しくして差別無し。(五三)善男子、智者は深く三界の諸苦皆煩惱業の因緣より生ずるを觀ず。善男子、譬へば坏器は則ち破壞し易きが如く、衆生の受身も亦復是の如し。既に身を受け已らば是衆苦の器なり。譬へば大樹の華果繁茂するを衆鳥の能く壞するが如く、多くの乾草を小火の能く焚くが如し。衆生の受身共に壞らるることも亦復是の如し。(五四)善男子、智者若能く苦の八種を觀ずること聖行の中の如くならば、當に知るべし、是の人能く衆苦を斷ず。(五五)善男子、智者深く是の八苦を觀じ已りて次に苦因を觀ず。(五六)苦因とは卽ち愛無明なり。是の愛無明は則ち二種有り。一つには身を求め、二つには財を求む。求身、求財二つ倶に是苦なり。是の

【五三】次に三界皆苦の觀。三界は必ずしも皆苦ならず、唯だ三塗のみ是れ苦、人天乃至第三禪は皆樂、第四禪は是れ捨し。然れども今如來成道の時、普周の法界を觀ずるに皆苦たりしが故に三界皆苦と明す。

【五四】次に八苦の觀。

【五五】第二に苦因の觀。

【五六】苦因は卽ち愛無明。小乘の中には煩惱を苦因となす、大乘は卽ち愛無明を苦因と爲す。小乘には業を苦本とし、無明を傍とす。

【五七】愛無明に二種ありとは二種あり、文には具く愛の內外を出す。第一に愛の內外に二種あり、一は人に約し、一は法に約す。今法の內外二種の愛を辨ずるに、外の色境を見て心を生じて著想するを名けて外愛と爲し、自心染を起すを名けて內愛と爲す。次に人の內外二種の愛とは、他人の身に就く、之を外愛といひ、自己の身に就く、之を內愛といふ。第二に無明に內外とは、內心不了を內無明と名け、外事不了を外無明と名く。

【五八】次に果報の觀。

【五九】愛は卽ち因緣たりとは順緣起にして、順は愛に因緣た

故に當に知るべし、愛無明とは卽ち是苦因なり。善男子、是の(五七)愛無明は則ち二種有り。一つには內、二つには外なり。內は能く業を作り外は能く增長す。又復內は能く業を作り外は業果を作る。內愛を斷じ已らば業卽ち斷ずることを得、外愛を斷じ已らば果則ち斷ずることを得。內愛は能く未來世の苦を生じ、外愛は能く現在世の苦を生ず。智者は愛卽ち是苦因を觀す。旣に因を觀じ已りて(五八)次に果報を觀ず。苦の果報は卽ち是取なり、愛の果を取と名く。是の取の因緣卽ち內外に愛すれば則ち愛苦有り。善男子、智者當に觀ずべし、(五九)愛は取に因緣たり、取は愛に因緣たり。若我能く愛取二事を斷ぜば則ち業を造りて衆苦を受けず、(六〇)是の故に智者愛苦を斷ぜんが爲に八正道を修す。善男子、若人能く是の如く觀ずる者有らば、是則ち名けて淸淨梵行と爲す。是を衆生毒身の中に妙藥王有り、雪山の中に毒草有りと雖も亦妙藥有るが如しと名く。』

(六一)迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、云何が名けて淸淨梵行と爲す。』(六二)佛の言はく、『善男子、一切法是なり。』

(六三)迦葉菩薩の言さく、『世尊、一切法とは義不決定なり。何を以ての故に。如來或は是善、不善と說きたまふ。或時は說きて四念處觀と爲し、或は是十二入と說き、或は是善知識と說き、或は是十二

りとは逆緣起なり。

【六〇】次に修道。

【六一】是より第二に經を歎す。之に正しく歎に就て歎じ、佛に就て歎ずるの三段あり。初の正しく歎に就て歎ずる中、二番の問答あり、其中初番の問。

【六二】次に佛答。

【六三】次に第二番の問。

因縁と說き、或は是衆生と說き、或は是正見、邪見と說き、或は十二部經と說き、或は卽ち是二諦と說き、如來今は乃ち一切法を淨梵行と爲すと說きたまふ。悉く是何等の一切法なるや。』(六四)佛の言はく『善い哉善い哉善男子、是の如き微妙の大涅槃經は、乃ち是一切法の寶藏なり。(六五)譬へば大海の是衆寶の藏なるが如く、是の涅槃經も亦復是の如し。卽ち是一切字義の祕藏なり。善男子、須彌山の衆藥の根本なるが如く、是の經も亦爾なり、卽ち是菩薩戒の根本なり。善男子、譬へば虛空の是一切物の所住の處なるが如く、是の經も亦爾なり、卽ち是一切善法の住處なり。善男子、譬へば猛風の能く繫縛するもの無きが如く、一切の菩薩是の經を行ずる者も亦復是の如し。一切煩惱惡法に繫縛せられず。善男子、譬へば金剛の能く壞する者無きが如く、是の經も亦爾なり、外道惡邪の人有りと雖も破壞すること能はず。善男子、恆河の沙の能く數ふる者無きが如く、是の如き經義も亦復是の如し、能く數ふる者無し。善男子、是の經典は諸の菩薩の爲に法幢と作ること帝釋の幢の如し。善男子、是の經は卽ち是涅槃城に趣くの商主なり、大導師の諸の商人を引きて大海に趣向するが如し。善男子、是の經は能く諸の菩薩等の爲に法の光明と作ること、世の日月の能く諸闇を破するが如し。善男子、是の經は能く病苦の衆生の爲に大良藥と作ること、香山中の微妙の藥王の、能く衆病を治するが如し。善男子、是の經は能く一闡提の杖と爲ること、猶し羸人の之に因りて起つことを得るが如

【六四】次に佛答。之に二段ありて初に歎。

【六五】次に答。これに二段ありて初に二十五譬。

し。善男子、是の經は能く一切の惡人の爲に橋梁と作ること、猶し世橋の能く一切を度すが如し。善男子、是の經は能く五有を行ずる者の煩惱熱に遇ふが爲に陰涼と作ること、世閒の蓋の暑熱を遮り覆ふが如し。善男子、是の經は卽ち是大無畏王なり、能く一切煩惱の惡魔を壞すること、師子王の衆獸を降伏するが如し。善男子、是の經は卽ち是大神呪師なり、能く一切の煩惱の惡魔を壞すること、世の呪師の能く魍魎を去くが如し。善男子、是の經は卽ち是無上の霜雹なり、能く一切の生死果報を壞すること、世の雹雨の諸の果實を壞るが如し。善男子、是の經は能く戒目を壞る者の爲に大良藥と作ること、猶し世閒の（六六）安闍陀藥の能く眼痛を療するが如し。善男子、是の經は能く一切の善法を住むること、世閒の地の能く衆物を住むるが如し。善男子、是の經は卽ち是毀戒衆生の明鏡なり、世閒の鏡の諸の色像を見すが如し。善男子、是の經は能く無慙愧者の爲に衣服と作ること、世の衣裳の形體を障へ蔽ふが如し。善男子、是の經は能く善法に貧しき者の爲に大財寶と作ること、功德天の貧者を利益するが如し。善男子、是の經は能く渴法衆生の爲に甘露漿と作ること、八味水の渴者に充足するが如し。善男子、是の經は能く煩惱の人の爲に法牀と作ること、世の人の安隱の牀に遇ふが如し。善男子、是の經は能く初地の菩薩より十住の菩薩に至るが爲に、瓔珞、香華、塗香、抹香、燒香、清淨種性具足の乘と作る。一切六波羅蜜に過ぐ。是妙樂處なり、忉利天の（六七）波利質多羅樹の如し。

【六六】安闍陀(Ajata or Ajjhata) 學名 Flacourtia Cataphracta. 藥用植物の名。

【六七】波利質多羅 (Parijata) 圓生と譯す。

三菩提果を得ること能はず、佛性及び佛性果を見ず。(七二)是の因縁を以て梵行は即ち是三十七品なり。(七三)何を以ての故に。三十七品は性顚倒に非ず、能く顚倒を壞す。性惡見に非ず、能く惡見を壞す。性怖畏に非ず、能く怖畏を壞す。性是淨行なり、能く衆生をして畢竟じて清淨梵行を造作す。』

(七四)迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、有漏の法も亦復能く無漏法の因と作る。如來何が故ぞ有漏を淨梵行と爲すと說きたまはざるや。』(七五)『善男子、一切の有漏は即ち是顚倒なり。是の故に有漏を名けて清淨梵行と爲すを得ず。』

(七六)迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、世第一法は是有漏とや爲ん、是無漏とや爲ん。』(七七)佛の言はく、『善男子、是有漏なり。』

(七八)『世尊、是有漏なりと雖も、性は顚倒に非ず。何が故ぞ清淨梵行と名けざるや。』(七九)『善男子、世第一法は無漏の因の故に、無漏に似、無漏に向ふが故に顚倒と名けず。(八〇)善男子、清淨梵行は發心より相續して、乃至畢竟なり、世第一法は唯是一心なり。是の故に淨梵行と名くることを得ず。』

---

荘嚴は約住の道品に據り、開善は通修の道品に據る、皆是れ一途」と。

【七一】次に道果を障ふれば則ち果を得ざるを明す。

【七二】次に是を結す。

【七三】次に是の意を釋す。

【七四】第二に有漏則ち非なるを明す。之に四番の問答あり。其中初番の問。

【七五】次に佛答。

【七六】次に第二番の問。

【七七】次に佛答。

【七八】次に第三番の問。

【七九】次に佛答。之に二段あり。初に無漏に向ふが故に倒に非ざるを明す。

【八〇】次に唯一心は梵行に非ざるを明す。

【八一】次に第四番の問。

【八二】衆生の五識……顚倒に非ず。此の句に就て諸解同じからず。或は識陰未だ取相あら

(八一)迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊(八二)衆生の五識も亦是有漏にして、是顛倒に非ず、復(八三)一心に非ず。何が故ぞ清淨梵行と名けざるや。』(八四)『善男子、衆生の五識は一念に非ずと雖も、然も是有漏、復是顛倒なり。諸漏を增すが故に名けて有漏と爲す。體は眞實に非ず、著想の故に倒す。云何が名けて體非眞實、著想の故に倒と爲す。非男女の中に男女の想を生じ、乃至舍宅、車乘、瓶衣も亦復是の如し、是を顛倒と名く。(八五)善男子、三十七品は性顛倒無し。是の故に清淨梵行と名くることを得。(八六)善男子、若菩薩三十七品に於て(八七)根を知り、因を知り、攝を知り、增を知り、主を知り、導を知り、勝を知り、實を知り、畢竟を知る者有らば、是の如きの菩薩は則ち名けて清淨梵行と爲すこ

すと說き、或は識心相あり、但だ後三心より轉しと言ふ。而して今問者の五識非倒といふは、但だ一念境を得て未だ三性等の相を分別せざるが故に非倒と說くなり。

【八三】一心に非ずとは眼の色を見るは卽ち心心相續するが如きをいふ。若し是の如くならば梵行と名く可らず。

【八四】次に佛答。

【八五】第三に還た最是を結す。

【八六】次に第二に道品の因緣を明す、道品の因緣とは卽ち九義を知るなり。九義は是れ道品の用。婆婆の中、道品に九性ありと說く。一に戒(道品中の正語業命の三)、二に定(四如意根力覺正定の八)、三に慧(四念處根力擇法覺正見思惟の九)、四に念(根力正念念覺の四)、五に信(根力の二)、六に精進(四正勤根力正精進覺の八)。七に喜、八に倚(輕安)、九に捨(已上の三は七覺分の隨一)なり。此の文の下五段ありて初に名を列す。次に九義を出す、この中初の四は道品の因、中の三は道品の體、後の二は道品の果なり。

【八七】根因攝增等。根は發心して菩提を求めんと欲す。因は明無明、卽ち善因は明、惡因は無明なり。攝は是れ收攝して散失せざらしめず。增は思惟して善を作す。この四並びに因に屬す。次に主は是れ念。導は是れ定。勝は是れ慧と云ふ、この三倶に體に屬す。次に實は是れ解脫。畢竟は是れ涅槃。此の二皆道品の果に屬す、知るべし。

【八八】次に體を明す。之に問答の二段ありて初に問。

【八九】次に佛答。之に二段ありて初に讚問。

とを得。』〔八八〕迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、云何が名けて根を知り、乃至畢竟を知ると爲すや。』〔八九〕佛の言はく、『善男子、善い哉善い哉、菩薩の發問は二事の爲にす。一つには自知の爲の故に、二つには他知の爲の故なり。汝今已に知るも、但無量の衆生未だ解せざるが爲に是の事を咨請す。是の故に我今重ねて汝を讚歎す、善い哉善い哉、〔九〇〕善男子、三十七品の根本是欲なり。因を明觸と名け、攝取を受と名け、增を善思と名け、主を名けて念と爲し、導を名けて定と爲し、勝を智慧と名け、實を解脫と名け、畢竟を名けて大般涅槃と爲す。

〔九一〕善男子、善欲は卽ち是初發道心より、乃し阿耨多羅三藐三菩提に至るの根本なり、是の故に我欲を根本と爲すと說く。善男子、世間一切の苦惱は愛を根本と爲し、一切の疾病は宿食を本と爲し、一切の斷事は鬪諍を本と爲し、一切の惡事は虛妄を本と爲すと說くが如し。』〔九二〕迦葉菩薩佛に白して言さく、『世尊、如來先に此の經中に於て一切の善法は不放逸を本と爲すと說き、今は乃ち欲と說きたまふ、是の義云何。』佛の言はく、『善男子、若生因を言はば善欲是なり、若了因を言はば不放逸是なり。世間一切の果は子を其の因と爲すと說き、或は復子を生因と爲し、地を了因と爲すと說くこと有るが如し、是の義も亦爾なり。』

〔九三〕迦葉菩薩の言さく、『世尊、如來先に餘經の中に於て三十七品は佛是根本と說きたまふ、是の義

【九〇】次に征答。

【九一】第三に義釋、亦二あり。初に欲を根本と說くを釋す。之に二段、初に釋。

【九二】次に料簡。之に兩番の問答あり。先に初番の問答。

【九三】次に第二番の問答。

云何。』『善男子、如來先には衆生初三十七品を知ると說きたまふ、佛は是根本なり。若自ら證得するは欲を根本と爲す。』(九四)『世尊、云何が明觸之を名けて因と爲す。』『善男子、如來或時明を說きて慧と爲し、或は說きて信と爲す。善男子、信の因緣の故に善友に親近す、是を名けて觸と爲す。親近の因緣は正法を聞くことを得、是を名けて觸と爲す。正法を聞くに因りて身、口、意淨し、是を名けて觸と爲す。三業淨きに因りて正命を獲得す、是を名けて觸と爲す。正命に因るが故に淨根戒を得、淨根戒に因りて寂靜處を樂ふ。樂寂靜に因りて能く善思惟し、善思惟に因りて如法住を得、如法住に因りて三十七品を得。能く無量の諸の惡煩惱を壞す、是を名けて觸と爲す。(九五)善男子、受を攝取と名く。衆生は受の時能く善惡を作る、是の故に受を名けて攝取と爲す。善男子、受の因緣の故に諸の煩惱を生ず。三十七品能く之を破壞す、是の故に受を以て攝取と爲す。(九六)善思惟に因りて能く煩惱を破す、是の故に增と名く。何を以ての故に。勤めて修習するが故に、是の如き等の三十七品を得。(九七)若觀能く諸の惡煩惱を破するは、要ず專念に賴る、是の故に念を以て主と爲す。世間の中一切四兵の、主將の意に隨ふが如く、三十七品も亦復是の如し、皆念主に隨ふ。(九八)既に定に入り已らば、三十七品能善

【九四】次に觸を釋す。

【九五】次に攝受を釋す。前には受は是れ煩惱を生ずるの始めにて煩惱を攝取するの義とせり、今は受に道品を生ずるを明す、故に受を攝取と名く。

【九六】次に增を釋す。思惟に因る故に心智增進す、故に增といふ。文中唱、釋の二段あり。

【九七】次に主を釋す。之に法、譬、合の三段あり。

【九八】次に導を釋す。

【九九】次に勝を釋す。智は能く正斷す、故に勝といふ。文中法、譬、合の三段あり。

く一切の法相を分別す、是の故に定を以て導と爲す。(九九)是の三十七品法相を分別するに、智を最勝と爲す、是の故に慧を以て勝と爲す。是の如く智慧煩惱を知り已りて、智慧力の故に煩惱消滅す。世間の中に四兵怨を壞す。或は一、或は二、勇健者能くするが如く、三十七品も亦復是の如し、智慧力の故に能く煩惱を壞す、是の故に慧を以て勝と爲す。(一〇〇)善男子、三十七品を修習するに因りて四禪神通安樂を獲得すと雖も、亦實と名けず。若煩惱を壞して解脱を證する時、乃ち名けて實と爲す。是の三十七品發心修道して、世樂及び出世樂、四沙門果及以解脱を得と雖も、亦名けて畢竟と爲すことを得ざるなり。(一〇一)若能く三十七品所行の事を斷除すれば、是を涅槃と名く。是の故に我畢竟とは即ち大涅槃と説く。』

(一〇二)復次に善男子、善愛念心は即ち是欲なり。善愛念に因りて善友に親近す、故に名けて觸と爲し、是を名けて因と爲す。善友に近くに因るが故に名けて愛と爲す、是を攝取と名く。善友に近くに因りて能く善思惟す、故に名けて增と爲す。是の四法に因りて能く道を生長す、所謂欲、念、定、智なり。是を則ち名けて主導勝と爲す。是の三法に因りて二解脱を得。愛を除斷するが故に心解脱を得、無明を斷ずるが故に慧解脱を得。是を名けて實と爲す。是の如きの八法畢竟じて果を得、名けて涅槃と爲す、故に畢竟と名く。(一〇三)復次に善男子、

【一〇〇】次に實を釋す。之に定伏するは實に非ず、正しく智斷する是れ實なるを明すの二段あり。

【一〇一】次に畢竟を釋す。文の中三十七品所行の事を斷除すとは、得果の日、因中有爲の諸善を悉く捨するをいふ。

【一〇二】第四に法に約す。之に三段ありて初に法。

【一〇三】次に人。

欲とは即ち是發心出家なり、觸とは即ち是白四羯磨なり、是を名けて因と爲す。攝とは即ち是二種戒を受く。一つには波羅提木叉戒、二つには淨根戒なり。是を名けて受と爲す、是を攝取と名く。增とは即ち是四禪を修習す。主とは即ち是須陀洹果、斯陀含果、導とは即ち是阿那含果、勝とは即ち阿羅漢果、實とは即ち是辟支佛果、畢竟とは即ち是阿耨多羅三藐三菩提果なり。〔一〇四〕復次に善男子、欲を名けて識と爲し、觸を六入と名け、攝を名けて受と爲し、增を無明と名け、主を名色と名け、導を名けて愛と爲し、勝を名けて取と爲し、實を名けて有と爲し、畢竟を生老病死と名く。」〔一〇五〕迦葉菩薩の言さく、「世尊、根本、因、增、是の如きの三法云何が異有りや。」「善男子、言ふ所の根とは、即ち是初發なり、因とは即ち是相似て斷せず、增とは即ち是相似を滅し已りて能く相似を生ず。復次に善男子、根は即ち是作、因は即ち是果、增は即ち可用なり。善男子、

【一〇四】次に譬。文の中に明す九義と十二因緣中の九支との關係に就て異說あり。開善の意は、此れ十二因緣を擧ぐ、是れ九法（九義）の境、道品は此の境を所緣とすといふ。然るに今の所用に依れば、此れ實に就て九法の次第を明す、十二因緣の相生の如く、此の九法も亦た爾り、次第相生す。然るに所擧の十二因緣中、三事の難解あり。一には具足せす。二は識支重出す（一本には明の下に識を重出す）。三に次第せず。今此の三問難を釋ふるに、第一に不具なる所以は、正しく略を存する爲めなり、簡して行を略して無明を略せざるは無明は是れ因緣の根本なればなり。第二に識支重出せるは、一は正しく是れ識支、二は習を謂ひて識と爲す。第三に次第せざるは、因緣の輪轉無窮にして定んで次第せざるを明さんと欲するが爲めなり。

【一〇五】次に料簡。之に問、答の二段あり。答の文の中、根は初發とは解すべし、因は相似とは初後の兩心は相續して斷ぜざるなり。增は相似の滅と生とは前の相似心を滅して、更に後の相似心を生ずるをいふ。

未來の世果報有りと雖も、未だ受けざるを以ての故に、之を名けて因と爲し、其の受くる時に及ぶ、是を名けて增と爲す。復次に善男子、根は即ち是求、得は即ち是因、用は即ち是增なり。善男子、是の經中の根は即ち是見道、因は即ち修道、增は即ち是無學道なり。復次に善男子、根は即ち正因、因は即ち方便因なり。是の正因より果報を獲得す、名けて增長と爲す。』

(一〇六)迦葉菩薩の言さく、『世尊、佛の所說の如くば、畢竟とは即ち是涅槃と。是の如きの涅槃云何が得べけん。』(一〇七)『善男子、若は菩薩摩訶薩、若は比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、能く十想を修せば、當に知るべし、是の人は能く涅槃を得ん。(一〇八)云何が十と爲す。一つには無常想、二つには苦想、三つには無我想、四つには厭離食想、五つには一切世間不可樂想、六つには死想、七つには多過罪想、八つには(一〇九)離解脫想、九つには滅想、十には無愛想なり。善男子、菩薩摩訶薩、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷是の如き十種の想を修習すれば、是の人畢竟じて定んで涅槃を得ん。他心に隨はず、自ら能く善、不善等を分別せん。是を眞實に比丘の義に稱ひ、乃至優婆夷の義に稱ふを得」と名く。』(一一〇)迦葉菩薩の言さく、『世尊、云何

---

【一〇六】次に第二に十想、之に問、答の二段あり、初に問。

【一〇七】次に佛答。之に三段あり、其中初に總標。之に二段ありて初に十想の總標。

【一〇八】次に列。此の十想中、前の六は觀行を明し、後の四は出離を明す。前の六は更に分ちて二。初の三は正觀、後の三は相成。相成の義に就て通別の二說あり、今之を略す。

【一〇九】離解脫想と滅想との異に就て三解あり。一は因果に約し、二は分全に約し、三は伏斷に約す。

【一一〇】次に釋。之に三段あり、其中初に別して六想を解す。

可名けて菩薩、乃至優婆夷等無常想を修すと爲す。』（二二）『善男子、菩薩に二種あり、一つには初發心、二つには已行道なり。無常想とは亦復二種あり、一つには麤、二つには細なり。（二三）初心の菩薩無常想を觀ずる時是の思惟を作さく、「世間の物凡そ二種有り。一つには內、二つには外なり。是の如き內物は無常變異す。我生ずる時、小時、大時、壯時、老時、死時（等）、是の諸の時節各各不同なるを見る。是の故に當に知るべし、內物無常なり。」復是の念を作さく、「我衆生を見るに、或は肥鮮にして色力を具足し、去來、進止自在無閡なる有り。或は病苦にして色力毀頓し、顏貌瘦損して自在を得ざるを見、或は財富庫藏盈溢なるを見、或は貧窮事に觸れて斯乏なるを見、或は無量の功德を成就するを見、或は無量の惡法を具足するを見る。是の故に定んで內法無常と知る。復外法子の時、芽の時、莖の時、葉の時、華の時、果の時。是の如き諸時各各不同なるを觀ず。是の如き外法、或は具足する有り、或は不具足あり。是の故に當に知るべし、一切の外物定んで是無常なり。旣に法は是無常と觀見し已りて、復聞法を觀す、我聞く諸天極妙の快樂、神通自在を具足し成就すれども、亦五相有り。是の故に當に知るべし、卽ち是無常なり。復聞く劫初に諸の衆生有り。各各上妙の功德を具足し、身光自ら照して日月を假らず。無常力の故に光滅し德損ず。復聞く、昔轉輪聖王有りて四天下を統ぶ。七寶を成就し大自在を得、而も無常の相を壞すこと能はず。復觀ず、大地往昔の時、無量の衆生を安處布置して、厠客處車

之に又二段ありて初に標。

【二二】次に偈答。之に六段、初に無常想。之に二段、先づ標。

【二三】次に釋。二段あり初に麤。

輪許の如くなる無し。一切の妙藥を具足し生長し、叢林、樹木、果實滋茂す。衆生薄福にして今此の大地復勢力無し。所生の物遂に虛耗と成る。是の故に當に知るべし、內外の法一切無常なり、是を則ち名けて麤無常と爲す。既に麤を觀じ已りて（二三）次に細を觀ずとは、云何が細と名くる。菩薩摩訶薩一切內外の物、乃至微塵を觀ず。未來時に在りて已に是無常なり。何を以ての故に。破壞相を具足し成就するが故なり。若未來の色無常に非ざれば、色に十時の差別有りと言ふことを得ず。云何が十と爲す。一つには膜の時、二つには泡の時、三つには皰の時、四つには肉團の時、五つには肢の時、六つには嬰孩の時、七つには童子の時、八つには少年の時、九つには盛壯の時、十には衰老の時なり。菩薩觀ず、膜若無常に非ざれば泡に至るべからず。乃至盛壯は無常に非ざれば、終に老に至らず。若是の諸時念念滅に非ざれば、終に漸く長からず、應當に一時に成長具足すべし。是の事を以ての故に、是の故に當に知るべし、定んで念念微細の無常有るを。復人有りて諸根具足し顏色暐曄なるを見、復枯顇するを見る。復是の念を作さく、「是の人定んで念念無常有り。」復四大及び四威儀を觀ず。復（二四）內外各二つの苦因饑渴、寒熱を觀ず、復觀ず、是の四苦念念微細の無常無ければ亦是の如きの四苦を說くを得ず。若菩薩能く是の念を作す有らば、是を菩薩細無常を觀ずと名く。「內外色の如く、心法も亦爾なり。何を以ての故に。（二五）六處に行ずるが故なり。六

【二三】法に細。

【二四】內外二苦。二說あり。一は內に因て內苦を生じ、外に因て外苦を生ず。二は文中に出在す、卽ち饑渴を內とし、寒熱を外とす。

【二五】六處とは、六塵卽ち色聲香味觸法の六對象をいふ。

處に行する時、或は喜心を生じ、或は瞋心を生じ、或は愛心を生じ、或は貪心を生ず。展轉異生して一種なることを得ず。是の故に當に知るべし、一切色法及び非色法は悉く是無常なることを」と。善男子、菩薩若能く一念の中に於て一切法の生滅無常を見ば、是を菩薩無常想を具すと名く。善男子、智者無常想を修習し已りて、常慢、常倒、想倒を遠離す。(二六)次に苦想を修す。何の因緣の故に是の如きの苦有る。深く知る、是の苦無常に因り、(二七)無常に因るが故に生老病死を受け、生老病死の因緣の故に名けて無常と爲し、無常の因緣の故に、內外の苦を受く。饑渴寒熱、鞭打罵辱、是の如き等の苦皆無常に因ると。復次に智者深く此の身を觀ずるに、卽ち無常の器、是の器卽ち苦なり。器苦を以ての故に、受け盛る所の法も亦復是苦なりと。(二八)善男子、智者復觀ず「生は卽ち是苦、滅は卽ち是苦、苦生滅の故に卽ち是無常なり。我我所に非ず、無我想を修す。」智者復觀ず「苦は卽ち無常、無常は卽ち苦なり。苦苦無常ならば、智者云何ぞ說きて我有りと言はん。苦は是我に非ず、無常も亦爾なり。是の如く五陰も亦苦無常なり。衆生云何ぞ說いて我有りと言ふ。」復次に一切法を觀ずるに、異和合有り。一和合より一切法を生ぜず、亦一法は是一切和合の果に非ず。一切和合皆自性無く、亦一性無く、亦異性無く、亦物性無く、亦自在無

【二六】次に苦想。
【二七】無常に因るが故に生老病死を受くは、數論二家說を異にす。或は無常の力に逼切せらるる故に苦卽ち生老病死あり、若し無常に逼らるるなくんば苦ならずと。次に或は謂らく、苦は必ず無常なるも無常は未だ必ずしも苦ならず、三業を色とし、無記と並びに皆無常にして而も苦ならず、唯だ心の一事のみ苦なりといふ。
【二八】次に無我想。

し。諸法若是の如き等の相有らば、智者云何ぞ說いて有我と言はん。」復是の念を作さく、「一切法の中、一法の能く作者と爲る有ること無し。若一法をして能く作す者ならざらしめば、衆法和合も亦作すこと能はず、一切の諸法性、終に獨り生じ獨滅すること能はず、和合の故に滅し、和合の故に生ず。是の法生じ已りて衆生倒想して是和合、和合より生ずと言ふ。衆生想倒眞實有ること無し、云何ぞ眞實の我有らんや。」是の故に智者無我を觀ず。又復諦かに觀ず、「何の因緣の故に衆生我を說く。是の我若有らば一なるべし多なるべし。我若一ならば、云何ぞ刹利、婆羅門、毗舍、首陀、人天、地獄、餓鬼、畜生、大小老壯有る。是の故に我是一に非ざるを知るなり。我若多ならば云何ぞ說いて衆生の我は、是一、是遍、邊際有ること無しと言はん。若は一、若は多、二つ倶に我無し。」智者是の如く無我を觀じ已りて　(二九)次に復厭離食想を觀じ、是の念言を作さく、「若一切法無常、苦、無我ならば、云何ぞ食の爲に身、口、意の三種の惡業を起さん。若衆生食を貪るが爲の故に身、口、意の三種の惡業を起す有らば、所得の財物衆皆之を共にし、後苦果を受くるには共に分つ者無し。」善男子、智者復觀ず、「一切衆生飲食の爲の故に身心苦を受く。若樂苦よりして食を得ば、我當に云何ぞ是の食中に於て貪著を生ずべき、是の故に食に於て貪心を生ぜず。」復次に智者當に觀ずべし、「飲食に因りて身增長を得。我今出家し受戒して道を修するは、身を捨てんと欲するが爲なり。今此の食を貪る、云何ぞ當に此の身を捨つることを得べきや。是の如く觀じ已らば、

【二九】次に厭食想、之に二段ありて初に正明。

復食を受くと雖も、猶し曠野に其の子肉を食する、其の心厭惡して都て甘樂せざるが如し。深く（二〇）摶食を觀ずるに是の如きの過有り。次に觸食を觀ず、「剝せられし牛の、無量の蟲に唼食せらるるが如し。」次に「思食は大火聚の如く、識食は猶し三百の矟矛の如し」と觀す。智者是の如く四食を觀じ已らば、食に於て終に貪樂想を生ぜず。若猶貪を生ぜば、當に不淨を觀ずべし。何を以ての故に。貪愛を離るるが爲の故なり。一切の食に於て善能く不淨の想を分別し、諸の不淨に隨ひて與に相似せしむ。是の如く觀じ已らば、若は好食及以惡食を得るに、受くる時猶し瘡創に藥を塗るが如く、終に貪愛の心を生ぜず。善男子、智者若能く是の如く觀ずれば、是を厭離食想を成就すと名く。」

（二三）迦葉菩薩の言さく、「世尊、智者食を觀じて不淨想を作す、是實觀虛解觀と爲んや。若是實觀ならば所觀の食實に不淨に非ず。若是虛解ならば、是の法云何ぞ名けて善想と爲ん。」佛の言はく、「善男子、是の如き想は、亦是實觀、亦是虛解なり。能く貪食を壞す、故に名けて實と爲す。非蟲を蟲と見る、故に虛解と名く。善男子、一切の有漏は皆名けて虛と爲す、亦能く實を得。善男子、若比丘の心を乞食に發して、預め是の念を作す有らん、『我當に食を乞ふべし。願はくは好者を得ん、麁惡を得ること莫れ。願はくは必ず多く得ん、鮮少ならしむること莫れ。亦願はくは速かに得て、遲晚ならしむること莫れ』と。是の如き比丘、食に於て厭離想を得

【二二】摶食等。此の摶食・觸食・思食・識食、又下の文に四食と總稱す。摶食は正しく今時人の飯食、分段す可きが故なり。觸食は即ち依報の衣服田舍等の諸物、思食は是れ業食、識食は是れ意食なり。

【二三】次に實觀。

と名けず。所修の善法日夜に衰耗し、不善の法漸く當に増長すべし。善男子、若比丘有りて食を乞はんと欲する時、先當に願じて言ふべし「諸の乞者をして悉く飽滿を得しめん。其施食は無量の福を得ん、我若食を得ば爲に善身を療し、善法を修習して施主を利益せん。」是の願を作す時、所修の善法日夜に増長し、不善の法漸く當に消滅すべし。（三二）善男子、若比丘の能く是の如く修する有らば、當に知るべし、是の人は空しく國中の信施を食せず。（三三）善男子、智者是の如き四想を具足して能く世間不可樂想を修し、是の念言を作さく「一切世間處として生、老、病、死有らざる無し、而も我が此の身處として生ぜざる無し。若世間の中一處として當に生、老、病、死を離るることを得べきこと有ること無ければ、我當に云何ぞ世間を樂むべき。一切世間進み得て退失せざる有ること無し。是の故に世間定んで是無常なり。若是無常ならば、云何ぞ智人世を樂まん。一一の衆生周徧して一切世間を經歷して具さに苦樂を受く。復梵天の身、乃至非想非非想天を受くることを得と雖も、命終して、還三惡道の中に墮す。四王、乃至他化自在天の身と爲ると雖も、命終して畜生道の中に生ず。或は師子、虎兕、豺狼、象馬、牛驢と爲る。次に觀ず、「轉輪聖王四天下を統べて豪貴自在なるも、福盡くれば貧困にして衣食供せず。」智者深く是の如き事を觀じ已りて、世間不可樂想を生ず。智者復觀ず「世間の有法、所謂舍宅、衣服、飮食、臥具、醫藥、香華、瓔珞、種種の伎樂、財物、寶貨、是の如き等の事皆苦を離れんが爲にす。是の如き等の物體は

【三二】次に結成。
【三三】次に不可樂想。

即ち是苦なり。云何ぞ苦を以て苦を離れんと欲する。善男子、智者是の如く觀じ已らば、世間の物に於て愛樂を生じて樂想を作さず。善男子、譬へば人有りて身重病に嬰れば、種種の音樂、倡伎、華香、瓔珞有りと雖も、終に中に貪愛樂を生ぜざるが如し。智者觀じ已りて、亦復是の如し。善男子、智者深く一切世間を觀ず。歸依處に非ず、解脱處に非ず、寂靜處に非ず、可愛處に非ず、彼岸處に非ず、是れ常、樂、我、淨の法に非ず。若我是の如きの世間を貪樂せば、我當に云何ぞ是の法を離るることを得べき。人の闇に處するを樂はずして光明を求め、還つて復闇に歸するが如し。闇は即ち世間、明は即ち出世なり。若我世を樂はば黒闇を增長し光明を遠離す。闇は即ち無明、光は即ち智明なり。是の智明因は、即ち是世間不可樂想なり。一切の貪結是繫縛と雖も、然も我今は智明を貪りて世間を貪らず。智者深く是の如く法を觀じ已れば、世間不可樂想を具足す。善男子、有智の人已に世間不可樂想を修す。(二四)次に死想を修す、是の壽命を觀ずるに常に無量の怨讎に繞られ、念念損減して增長有ること無し。猶山瀑水の停り住ることを得ざるがごとく、亦朝露の勢久しく停まらざるが如く、囚の市に趣き歩歩死に近くが如く、牛羊を牽ゐて屠所に詣るが如しと。」(二五)迦葉菩薩の言さく、「世尊、云何が智者念念滅を觀ずる。」「善男子、譬へば四人皆射術を善くし、一處に聚り在りて、各一方に射す。倶に是の念を作さく『我等四箭倶に發し倶に墮す。』復一人有りて是の念を作して、『是の

【二四】次に死想。之に二段ありて初に大門の死。

【二五】次に念念の死。之に問、答の二段あり。

如きの四箭其の未だ地に墮せざるに及んで、我能く一時手を以て接取せん」と言ふが如し。善男子、是の如きの人疾しと說くべきや不や。」迦葉菩薩の言さく、「是の如し世尊。」佛の言はく、『善男子、地行鬼疾きこと復是の人より速かなり。飛行鬼有り、復地行より速かなり。四天王の疾きこと、復飛行より速かなり。日月神天、復四王より速かなり。行堅疾天、復日月より速かなり。衆生の壽命、復堅疾より速かなり。善男子、一息一眴に衆生の壽命四百生滅す。智者若能く命を觀ずること是の如くば、是を能く念念滅を觀ずと名くるなり。善男子、智者命を觀ず、死王に繫屬す。我若能く是の如き死王を離るれば、則ち永く無常の壽命を斷ずることを得。復次に智者是の壽命を觀ずるに、猶し河岸峻に臨む大樹の如し。亦人有りて大逆罪を作り、其の戮を受くるに及んで憐憫する者無きが如く、師子王の大饑困の時の如く、亦毒蛇の火風を吸ふ時の如く、猶し渴馬の水を護り惜む時の如く、大惡鬼の瞋恚の發する時の如く、衆生の死王も亦復是の如し。善男子、智者若能く是の如きの觀を作せば、是則ち名けて死想を修習すと爲す。善男子、智者復觀ず、「我今出家す。設ひ壽命七日七夜を得るも、我當に中に於て精勤に道を修し、禁戒を護持し、說法敎化して衆生を利益すべし、」是を智者死想を修すと名く。復七日七夜を以て多と爲す。若六日、五日、四日、三日、二日、一日、一時、乃至出息、入息の頃を得ば、我當に中に於て精勤に修道し、禁戒を護持し、說法敎化して衆生を利益すべし。是を智者善く死相を修すと名く。

（一三六）智者上の如き六想を具足すれば、即ち七想の因なり。何等をか七つと爲す。一つには常修想、二つには樂修想、三つには無瞋想、四つには無妬想、五つには善願想、六つには無慢想、七つには三昧自在想なり。善男子、若比丘是の七想を具する有らば、是を沙門と名け、婆羅門と名く。是を寂靜と名け、是を淨潔と名け、是を解脫と名く。是を智者と名け、是を正見と名く。到彼岸と名け、大醫王と名く。是大商主なり。是を善く如來の祕密を解すと名く。亦諸佛の七種の語を知り、正見知七種語中の所生の疑網を斷ずと名く。（一三七）善男子、若人上の如きの六想を具足せば、當に知るべし、是の人能く三界を呵し、三界を遠離し、三界を滅除し、三界の中に於て愛著を生ぜず。（一三八）是を智者十想を具足すと名く。若比丘十想を具足する有らば、則ち沙門の相に稱可することを得。』

（一三九）爾の時に迦葉菩薩、即ち佛前に於て偈を以て佛を讚ずらく、

『世間を憐憫する大醫王、身及び智慧倶に寂靜なり、
無我法の中に眞我有り、是の故に無上尊を敬禮す。
（一四〇）發心と畢竟と二つながら別ならず、是の如き二心は先心難し、
自ら未だ得度せずして先に他を度す、是の故に我初發心を禮す。

【一三六】第二に六想の總歎。
【一三七】次に四想の略標。四想とは、能呵三界は是れ過罪想、遠離三界は是れ離想、滅除三界は即ち滅想、不生愛著は即ち無愛想なり。
【一三八】次に第三に總結。
【一三九】是より第三に佛に就て歎ず。之に二段、初に總標。
【一四〇】次に正歎。

初發已に人天の師と爲り、聲聞及び緣覺に勝出す、
是の如きの發心は三界に過ぐ、是の故に最無上と名くることを得。
世救は要ず求めて然して後に得、如來は請無けれども歸と爲る、
佛は世間に隨ふ犢子の如し、是の故に大悲牛と名くることを得。
如來の功德十方に滿つ、凡下無智にして讚ずること能はず、
我今慈悲心を讚歎す、身口二種の業を報ぜんが爲にす。
世間の常樂は自ら利益す、如來は終に是の事を爲さず、
能く衆生の世果報を斷ず、是の故に我自他利を禮す。
世間親を逐うて作益厚し、如來の利益は怨親無し、
佛是の想の世人の如くなる無し、是の故に其の心等しうして二つ無し。
世間は說異に作業異なり、如來は說の如く業も差ふこと無し、
凡そ修行する所諸行を斷ず、是の故に名けて如來と爲すことを得。
先に已に煩惱の過を了知し、示現して之に處して衆生の爲にす、
久しく世間に於て解脫を得、樂うて生死に處するは慈悲の故なり。
天身及び人身を現ずと雖も、慈悲隨逐すること犢子の如し、

如來は卽ち是衆生の母、慈心は卽ち是小犢子なり。
自身苦を受けて衆生を念ず、憫悲念時心悔いず、
憐憫心盛にして苦を覺えず、故に我拔苦者を稽首す。
如來無量の福を作すと雖も、身口意業恆に淸淨なり、
常に衆生の爲にして己が爲にせず、是の故に我淸淨業を禮す。
如來苦を受けて苦を覺らず、衆の受苦を見ること己が苦の如し、
衆生の爲に地獄に處すと雖も、苦想及び悔心を生ぜず。
一切衆生異苦を受く、悉く是如來一人の苦なり、
覺り已りて其の心轉た堅固なり、故に能く無上道を勤修す。
佛は一味の大慈心を具す、衆生を憫念すること子想の如し、
衆生は佛の能く救ひたまふを知らず、故に如來及び法僧を謗ず。
世間は衆の煩惱を具し、亦無量の諸の過惡有りと雖も、
是の如き衆結及び罪過は、佛初發心に已に能く壞す。
(三二) 唯諸佛の有りて能く佛を讚ず、佛を除きて能く讚歎する者無し、
我今唯一法を以て讚ず、所謂慈心世間に遊ぶ。

【三】次に結歎し

如來は是慈大法聚、是の慈も亦能く衆生を度す、
即ち是無上眞解脫なり、解脫は即ち是大涅槃なり。』

# 巻の第三十五

## (一)憍陳如品第二十五の一

(二)爾の時に世尊憍陳如に告げたまはく、(三)色は是無常なり、是の色を滅するに因って解脱常住の色を獲得す。受、想、行、識も亦是無常なり、是の識を滅するに因りて解脱安樂の色を獲得す。受、想、行、識も亦復是の如し。憍陳如、色は即ち是空なり、空色を滅するに因りて解脱非空の色を獲得す。受、想、行、識も亦復是の如し。憍陳如、色は是無我なり、是の色を滅するに因りて解脱眞我の色を獲得す。受、想、行、識も亦復是の如し。憍陳如、色は是不淨なり、是の色を滅するに因りて解脱清淨の色を獲得す。受、想、行、識も亦復是の如し。憍陳如、色は是生、老、病、死の相なり、是の色を滅するに因りて解脱非生、老、病、死相の色を獲得す。受、想、行、識も亦復是の如し。憍陳如、色は是無明因なり、是の色を滅するに因りて解脱非無明因の色を獲得す。受、想、行、識も亦復是の如し。憍陳如、乃至色は是生因なり、是の色を滅するに因りて解脱非生因の色を獲得す。受、想、行、識も亦復是の如し。憍陳如、色は即ち是四顛倒の因

【一】憍陳如。具さに阿若憍陳如。阿若(Ājñāta)は名、已知・了本際と譯し、憍陳如(Kauṇḍinya)は姓、火器と譯す。章安憍陳如の四意を出す、見よ。

【二】是より第二に陳如品に異邪の用を明す。之に二段、其中初に正しく觀行を結す。之に又二段、初に觀行を辨す。

なり、顛倒色を滅するに因りて解脱非四倒因の色を獲得す。受、想、行、識も亦復是の如し。憍陳如、色は是無量惡法の因なり、所謂男子等の身なり。食愛、欲愛なり。貪、瞋、嫉妬なり。惡心、慳心なり。摶食、識食、思食、觸食なり。卵生、胎生、化生なり。五欲、五蓋なり。是の如き等の法皆色に因る。色を滅するに因るが故に解脱の是の如き等の無量の惡無き色を獲得す。受、想、行、識も亦復是の如し。憍陳如、色は即ち是縛なり、縛色を滅するに因りて解脱無縛の色を獲得す。受、想、行、識も亦復是の如し。憍陳如、色は即ち是流なり、流色を滅するに因りて解脱非流の色を獲得す。受、想、行、識も亦復是の如し。憍陳如、色は非歸依なり、是の色を滅するに因りて解脱歸依の色を獲得す。受、想、行、識も亦復是の如し、憍陳如、色は是瘡疣なり、是の色を滅するに因りて解脱無瘡疣の色を獲得す。受、想、行、識も亦復是の如し。憍陳如、色は非寂靜なり、是の色を滅するに因りて涅槃寂靜の色を獲得す。受、想、行、識も亦復是の如し。[三]憍陳如、若人能く是の如く知る者有らば、是を沙門と名け、婆羅門と名け、沙門、婆羅門の法を具足す。憍陳如、若佛法を離るれば、沙門及び婆羅門有る無く、亦沙門、婆羅門の法無し。一切外道虛假詐り稱して都て實行無し。復相を作して是の二つ有りと言ふと雖も、實に是の處無し。何を以ての故に。若沙門、婆羅門の法無ければ、云何ぞ而も沙門、婆羅門有りと言はん。我常に此の大衆の中に於て師子吼を作す、汝等も亦當に大衆の中に在りて師子吼を作すべし。』

【三】次に總じて褒貶を結す。
【四】是より第二に諸の邪說を破す。之に緣起、正破の二段あり。初の緣起の中に又二段ありて初に謀議。
【五】鬱頭藍弗(Udraka Rāma-putra)。又た鬱陀伽とも略稱

(四)爾の時に外道無量の人有り。是の語を聞き已りて心に瞋恚を生じ、瞿曇今說かく、我等が衆中に沙門及び婆羅門有る無く、亦沙門、婆羅門の法無しと。我當に云何が廣く方便を設けて瞿曇に語りて言ふべき、「我等の衆中に亦沙門有り、沙門法有り。婆羅門有り、婆羅門法有り」と。時に彼の衆中に一りの梵志有りて是の如き言を唱ふ、『諸仁者、瞿曇の言は狂の如く異なる無し、何ぞ檢校すべけん。世間の狂人は或は歌ひ、或は舞ひ、或は哭き、或は笑ひ、或は罵り、或は讚む。怨親の所に於て分別する能はず。沙門、瞿曇も亦復是の如し。或は我淨飯王の家に生ずと說き、或は生せずと言ふ。或は生じ已り行きて七步に至ると說き、或は行かずと說く。或は小より世事を習學すと說き、或は我は是一切智人と說く。或時は宮に處して樂を受け子を生じ、或時は厭患呵責惡賤す。或時は親しく苦行を修する六年、或時は外道の苦行を呵責す。或は彼(五)鬱頭藍弗、(六)阿羅羅等に從ひて未聞を稟承すと言ひ、或時は其知曉する所無しと說く。或時は說きて菩提樹の下に阿耨多羅三藐三菩提を得と言ひ、或時は說きて我樹に至らず尅獲する所無しと言ふ。或時は說きて我今此身即ち是涅槃と言ひ、或は身滅乃ち是涅槃に至ると言ふ。瞿曇の所說狂の如く異る無し、何が故ぞ此を以て驚愕せんや。』諸の婆羅門即便答へて言はく、『大士、我等今者何ぞ憂へざるを得ん。沙門瞿曇先に出家し已りて無常、苦、空、無我、不淨と說き、我が諸の弟子聞きて恐怖を生ず。云何ぞ衆生無常、苦、空、

し、猛熹子と譯す。釋尊彼より非想非非想定を稟け給ふと。

【六】阿羅羅。具さに阿羅羅迦羅摩(Aráḍakálāma)。通譯師遮羅と譯す、釋尊彼より無所有定の法を稟け給ふと。

無我、不淨ならん、其の語を受けず。今者瞿曇復此の娑羅林の中に來至して、諸の大衆の爲に常、樂、我、淨の法有りと說く。我が諸の弟子是の語を聞き已りて、悉く我を捨て去りて瞿曇の語を受く。是の因緣を以て大愁苦を生ず。』爾の時に復一婆羅門有り、是の如き言を作さく、『諸の仁者諦かに聽き諦かに聽け。瞿曇沙門は慈悲を修すと名く、是の言虛妄にして眞實に非ず。若慈悲有らば云何ぞ我が諸の弟子等を敎へて自ら其の法を受けしむる。慈悲の果とは他意に隨順す。今我が願に違す、云何ぞ有りと言はん。若說きて沙門瞿曇世間の八法に染められずと言ふ有らば、是亦虛妄なり。若瞿曇少欲知足と言はば、今者云何ぞ我等の利を奪ふ。若種姓是上族と言はば是亦虛なり。何を以ての故に。昔より已來大師子王の小鼠を殘害するを見ず、聞かず。若瞿曇是上種姓ならしめば、如何ぞ今者我等を惱亂せん。若瞿曇大勢力を具すと言はば、是亦虛妄なり。何を以ての故に。昔より已來亦金翅鳥王の烏と共に諍ふを見ず。若力大と言はば、復何事を以てか我と共に鬪はん。若瞿曇他心智を具すと言はば是亦虛妄なり。何を以ての故に。若此の智を具せば、何の因緣を以てか我が心を知らざる。諸の仁者、我昔曾て先舊、智人に從ひ是の事を說くを聞く、百年を過ぎ已りて世間當に一つの妖幻出づる有るべしと。卽ち是瞿曇ならん。是の如き妖惑、今此處娑羅林の中に於て將に滅せんとするに久しからず。汝等今者愁惱すべからず。』爾の時に復一りの尼犍子有りて言はく、『仁者我今愁苦する、自身の弟子供養するの爲ならず。但世間癡無眼にして福田及び非福田を識らず。先舊智婆羅門を棄捨して年少を供養する

が爲なり、以て愁と爲すのみ。瞿曇沙門大いに呪術を知る。呪術力に因りて能く一身をして無量身と作らしめ、無量身をして還一身と作らしむ。或は自身を以て男、女の像、牛、羊、象、馬と作る、我が力能く是の如きの呪術を滅せん。瞿曇沙門呪術既に滅せば、汝等當に還多く供養を得、安樂を受くべし。』爾の時に復一婆羅門有りて是の如きの言を作さく『諸の仁者、瞿曇沙門は無量の功德を成就し、具足す、是の故に汝等與に諍ふべからず。』大衆答へて言はく『癡人、云何ぞ說きて沙門瞿曇は大功德を具すと言ふ。其生れて七日即便ち命終す、是福德相と名くるを得べきや。』婆羅門の言はく『罵る時瞋らず、打つ時報いずんば、當に知るべし、即ち是大福德相なり。其の身三十二の相、八十種の好、無量の神通を具足す。是の故に當に知るべし、是福德相なり。心に憍慢無く意を先にして問訊し、言語柔輭初より麤獷無く、年志俱に盛に心率暴ならず。王國多財を愛戀する所無く、之を捨てて出家し、涕唾を棄つるが如し。是の故に我沙門瞿曇は無量の功德を成就し具足すと說く。』大衆答へて言はく『善い哉仁者、瞿曇沙門實に所說の如く、無量の神通變化を成就す。我彼と是の事を角試せん。瞿曇沙門受性柔軟なれば苦行に堪へず、深宮に生長すれば外事を綜べず。唯輭語すべく、技藝、書籍、論義を知らず、請ふ共に詳かに正法の要を辯ぜん。彼若し我に勝たば我當に給事すべく、我若し彼に勝たば彼當に我に事ふべし。』（七）爾の時に多くの無量の外道有り、和合して共に摩伽陀王阿闍世の所に往く。王見て便ち問はく『諸の仁者、汝等各各聖道を修習す。是出

【七】次に佛に角力を求む。

家の人なり、財貨及び在家の事を捨離す。我が國人民皆共に供養し、歡心に瞻覲して相犯觸する無し。何が故ぞ和合して此に來至する。諸の仁者、汝等各異法、異戒を受けて出家同じからず、亦復各各自ら戒法に隨ひて出家修道す。何の因緣の故に、今者心を一つにして共に和合すること、猶し葉落旋風に吹かれて一處に聚在するが如くなる。何の因緣を說かんとして此に來至する。我常に出家の人を擁護して、乃至身と命とを惜まず。(一)爾の時に一切の諸の外道衆咸是の言を作さく、「大王諦かに聽け、大王今者是大法橋なり。是大法礪、是大法稱なり。卽ち是一切の功德の器なり、一切の功德の眞實の性なり、正法の道路なり。卽ち是種子の良田なり、一切國土の根本なり、一切國土の明鏡なり、一切諸天の形像なり、一切國人の父母なり。大王、一切世間の功德寶藏、卽ち是王の身なり。何を以ての故に功德藏と名くる。王國事を斷ずるに親怨を擇ばず其の心平等にして、地、水、火、風の如し。是の故に王を名けて功德藏と爲す。大王、現在の衆生復壽短と雖も、王の功德は昔の長壽安樂時の王の如し。亦頂生、善見、忍辱、(八)那睺沙王、(九)耶耶諦王、(一〇)尸毗王、(一一)一叉鳩王の如し。是の如き等の王善法を具足す、大王今者亦復是の如し。大王、王の因緣を以て國土安樂、人民熾盛なり。是の故に一切出家の人此の國を慕樂し、持戒精勤し正道を修習す。大王、我經中に說かく、「若出家の人所住の國に隨つて持戒精勤し正道を修習せば、其の王も亦修

【八】那睺沙(Nahuṣa)。不事火と譯す。王の名。
【九】耶耶諦(Yayāti)。聚または業と譯す。
【一〇】尸毗(Śibi)。與と譯す。
【一一】一叉鳩(Ikṣvāku)。甘蔗と譯す。

嶮の分有り』と。大王、一切の盜賊は王已に整理し、出家の人都て畏懼無し。今者唯一りの大惡人瞿曇沙門有り。王未だ檢校せず、我等甚だ畏る。其の人自ら豪族、種姓、身色具足するを恃みて、又過去の布施の報に因りて多く供養を得。此の樂事を恃みて大憍慢を生じ、或は呪術に因りて憍慢を生ず。是の因緣を以て苦行すること能はず。細耎の衣服、臥具を受畜す、是の故に一切世間(中)の惡人なり。利益の爲の故に其の所に往き集り、眷屬と爲りて苦行する能はず。呪術力の故に、迦葉及び舍利弗、目犍連等を調伏す。今復我が所住の處娑羅林中に來至し、是の身常、樂、我、淨と宣說して我が弟子を誘ふ。大王、瞿曇先には無常、無樂、無我、無淨と說く、我能く之を忍ぶ。今乃ち常、樂、我、淨と宣說す、我實に忍びず。唯願はくは大王、我彼の瞿曇と論義するを聽せ。』王即ち答へて言はく、『諸の大士、汝等今者誰に教導せられて其の心をして狂亂定まらざらしむる、水の濤波、旋火の輪、猿猴樹に擲つが如き。是の事恥づべし。智人若聞かば則ち憐愍を生じ、愚人之を聞かば則ち嗤笑を生ぜん。汝等の所說出家の相に非ず。汝若病風、黃水の患ならば、吾悉く藥有り能く之を療治せん。如其鬼病ならば家兄耆婆善能く之を去らん。汝等今者手爪を以て須彌山を鉋せんと欲し、口齒を以て金剛を齩齧せんと欲す。諸の大士、譬へば愚人、師子王の饑時睡眠せるを見て之を寤まさんと欲するが如く、人指を以て毒蛇の口に置くが如く、手を以て灰覆火に觸れんと欲するが如し。汝等は今者亦復是の如し。善男子、譬へば野狐の師子吼を作すが如く、猶し蚊子の金翅鳥と共に行の遲疾を角ふが如く、兎

の海を度りて、其の底を盡さんと欲するが如し、汝等今者亦復是の如し。汝若夢に瞿曇に勝つを見ば、是の夢狂惑、未だ信ずべきに足らず。諸の大士、汝等今者是の意を興建す、猶し飛蛾の大火聚に投ずるが如し。汝我が語に隨ひ、更に說くべからず。汝我と平等にして、稱の如しと讃ずと雖も、外人をして復此語を聞かしむること勿れ。』爾の時に外道復是の言を作さく、『大王、瞿曇沙門所作の幻術、汝の邊に到らば、乃ち大王をして心に疑うて是等の聖人を信ぜざらしめん。大王、是の如く大士を輕懱すべからず。大王、是の月の增減、大海の鹹味、(二二)摩羅延山、是の如き等の事誰か所作ぞや、豈我等婆羅門に非ずや。大王、(二三)阿竭多仙十二年の中、恆河の水耳中に停りしを聞かざるや。大王、(二四)瞿曇仙人大いに神通を現じ、十二年の中釋身を變作し、並に釋身をして羝羊の形と作らしめ、千女根を作りて釋の身に在るを聞かずや。大王、(二五)耆兎仙人一日の中に四海水を飲みて大地をして乾かしむるを聞かずや。大王、(二六)婆藪仙人自在天と爲りて三眼を作すを聞かずや。大王、(二七)羅羅仙人(二八)迦羅富城を變じて鹵土と作すを聞かずや。大王、婆羅門の中是の如き等の大力諸仙有り。現に檢校すべし、大王云何ぞ輕懱せらるるや。』王の言はく、『諸の仁者、若信を見ざるが故に爲んと欲せば、如來正覺して今者近く婆羅林の中に在り、汝等往

【二二】摩羅延(Malaya)。[illegible]と譯す、南天竺の境に在る山。
【二三】阿竭多(Agasti)。甕生・[illegible]と譯す、印度神話に於て[illegible]に[illegible]へらるる仙人の名。
【二四】瞿曇(Gautama)。瞿曇は[illegible]勝と譯せり。
【二五】耆兎。具さに耆兎[illegible](...karna)、[illegible]耳と譯す。
【二六】婆藪(Vasu)。世と譯す、
【二七】羅羅は阿羅羅と同じく、前に出づ。
【二八】迦羅富(...)。臭地と譯す。

いて意に隨ひて問難すべし。如來も亦常に汝が爲に分別して汝が意に稱つて答ふべし。』爾の時に阿闍世王は、諸の外道の徒衆、眷屬と佛所に往至し、頭面に禮を作し、右繞三帀し、敬を修すること已に畢り卻つて一面に住し、佛に白して言さく、『世尊、是の諸の外道意に隨ひて問難せんと欲す。唯願はくは如來、意に隨ひて之を答へたまへ。』佛の言はく、『大王、且く止みね、我自ら時を知る。』

(一九)爾の時に衆中に婆羅門の(二〇)闍提首那と名くる有り、是の如きの言を作さく、『瞿曇、汝涅槃は是常法と說くや。』(二一)『是の如く是の如し、大婆羅門。』

(二二)婆羅門の言はく、『瞿曇、若涅槃は常なりと說かば、是の義然らず。(二三)何を以ての故に。世間の法子より果を生じ、相續して斷えず。泥より瓶を出し、縷より衣を得るが如し。瞿曇常に說かく、「無常想を修して涅槃を獲得す」と。因是無常ならば果云何ぞ常ならん。(二四)瞿曇又「欲貪を解脫する卽ち是涅槃なり、色貪及び無色貪を解脫す、卽ち是涅槃なり。無明等の一切の煩惱を滅す、卽ち是涅槃」と說く。欲より乃至無明煩惱皆是無常なり、因是無常なれば所得の涅槃も亦無常なるべし。(二五)瞿曇又說かく、「因に從るが故に天に生じ、因に從る

---

【一九】是より第二に正しく十仙を揀す、卽ち十段あり。初に第一の外道。之に論義、歸伏の二段あり。初の論義に又四段ありて先に宗義を定む。

【二〇】闍提首那。安註曰く、迦毘羅を宗とし、因に果有り因果同時なりと執すと。

【二一】次に宗を授く。

【二二】次に正難。之に三段ありて初に佛の義を非す。

【二三】次に正難。之に五難ありて其中初の四難は同じく常無からしめ、後の一難は但常無きのみに非ず亦樂、我、淨無からしむ。初に第一難。

【二四】次に第二難。

【二五】次に第三難。

か故に地獄に(生)じ、因に從りて解脫を得。是の故に諸法皆因より生ず」と。若因に從るが故に解脫を得ば云何ぞ常と言はん。(二六)瞿曇亦「色は緣より生ず、故に無常と名く。受、想、行、識も亦復是の如し」と說く。是の如く解脫若是色ならば、當に知るべし無常なり。受、想、行、識も亦復是の如し。若五陰を離れて解脫有らば、當に知るべし、解脫は卽ち是虛空なり。若是虛空ならば、說いて因緣より生ずと言ふことを得ず。何を以ての故に。是常、是一にして一切處に徧すればなり。」(二七)瞿曇亦說かく「因より生ずる者は、卽ち是苦なり」と。若是苦ならば、云何ぞ復解脫是樂と說かん。瞿曇又「無常は卽ち苦、苦は卽ち無我」と說く。若是無常、苦、無我ならば、卽ち是不淨なり。一切の因より生ぜる所の諸法は、皆無常、苦、無我、不淨なり、云何ぞ復涅槃は卽ち是常、樂、我、淨と說かん。

(二八)若瞿曇「亦常無常、亦苦亦樂、亦我無我、亦淨不淨」と說かば、是の如きは豈是二語に非ずや。我も亦曾て先舊の智人に從ひて是の語を說くを聞く、「佛若世に出づれば言則ち二無し」と。瞿曇今者二語を說き、「復佛は卽ち我が身是なり」と言ふ、是の義云何。』

(二九)佛の言はく、『婆羅門、汝が所說の如き、我今汝に問はん、汝が意に隨ひて答へよ。』婆羅門の言はく、『善い哉瞿曇。』佛の言はく「婆羅門、汝が性常なりや、是無常なりや。』婆羅門の言はく「我が

【二六】次に第四難。
【二七】次に第五難。
【二八】第五に意を取つて結す。
【二九】次に第四に通釋。之に二段あり、其中初に正難を答ふ。之に又二段ありて先に第一難を答ふ。

性是常なり。』『婆羅門、是の性能く一切内外法の因と作るや。』『是の如し瞿曇。』佛の言はく、『婆羅門、云何が因と作る。』『瞿曇、性より大を生じ、大より慢を生じ、慢より十六法を生ず、所謂地、水、火、風、空。五知根の眼、耳、鼻、舌、觸。五業根なる手、脚、口、聲、男女の二根。心平等根なり。是の十六法は五法より生ず、色、聲、香、味、觸なり。是の二十一法は根本三有り。一つには染、二つには麤、三つには黒なり。染とは愛と名け、麤とは瞋と名け、黒とは無明と名く。瞿曇、是の二十五法は皆性に因りて生ず。』『婆羅門、是の大等の法は常無常なりや。』『瞿曇、我が法性は常、大等諸法は悉く是無常なり。』『婆羅門、汝が法の中因常果無常なるが如し。若我が法の中、因無常と雖も果是常ならば、何等の過か有らん。(三〇)婆羅門、汝等が法の中に二因有りや不や。』答へて言はく、『有り。』佛の言はく、『云何が二と爲す。』婆羅門の言はく、『一つには生因、二つには了因なり。』佛の言はく、『云何が生因、云何が了因なる。』婆羅門の言はく、『生因とは泥の瓶を出すが如く、了因とは燈の物を照すが如し。』佛の言はく、『是の二種の因、因性是一なりや。若是一ならば生因をして了因と作らしむべく、了因をして生因と作らしむべきや不や。』『不なり、瞿曇。』佛の言はく、『若生因をして了因と作らず、了因をして生因と作らざらしめば、説きて是因相と言ふを得べきや不や。』婆羅門の言はく、『作に因らずと雖も、故因相有り。』『婆羅門、了因の所了卽ち了に同じきや不や。』『不なり瞿曇。』佛の言はく、『我が法無常より涅槃を獲得すと雖も而も無常に非ず。婆羅

【三〇】次に第三難を答ふ。

門、了因より得るが故に常、樂、我、淨なり、生因より得るが故に無常、無樂、無我、無淨なり。(三一)是の故に如來の所說に二つ有り。是の如きの二語二つ有ること無し、是の故に如來を無二語と名く。汝が所說の如く、曾て先舊の智人の邊に從ひて聞ける、「佛世に出でて、二語有ること無し」とは、是の言善い哉、一切十方三世の諸佛所說は差ふこと無し。是の故に說いて佛無二語と言ふ。云何が無差なる。有は同じく有と說き、無は同じく無と說く。故に一義と名く。婆羅門、如來世尊、名二語と雖も、一語を了せんが爲の故なり。云何が二語一語を了する。眼色二語、生識一語の如し、乃至意法も亦復是の如し。』

(三二)婆羅門の言はく、『瞿曇、善能く是の如きの語義を分別す、我今未だ所出の二語一語と了するを解せず。』(三三)爾の時に世尊、卽ち爲に四眞諦法を宣說す、『婆羅門、苦諦とは亦二亦一なり、乃至道諦も亦二亦一なり。』(三四)婆羅門の言はく、『世尊、我已に知り已る。』佛の言はく、『善男子、云何が知り已る。』婆羅門の言はく、『世尊、苦諦とは一切(三五)凡夫は二、是聖人は一なり、乃至道諦も亦復是の如し。』(三六)佛の言はく、『善い哉已に解す。』(三七)婆羅門の言はく、『世尊、我今法を聞きて已に正見を得。今當に佛、法、僧寶に

---

【三一】次に其意を取つて難を結するを破す。

【三二】第二に歸伏。之に六段ありて初に請。

【三三】次に說。文の中、苦諦とは亦二亦一に就て兩解あり。一に愛法師の云く、實法の苦樂を以て二となす。而して相續道の中、終に苦識を以て此の樂を研成す、故に是れ一義、故に亦二亦一と言ふ。道諦例して爾りと。二に有師は大品般若に依て說をなして云く、苦諦は是れ境、苦智は是れ智、世諦道の中、境智の二あり、若し無生を見ば境智の別あるを見ず、皆是れ一相、故に亦二亦一と。

【三四】次に述。

【三五】凡夫は二聖人は一。凡夫は境智の分別あり、故に二と

歸依すべし、唯願はくは大慈もて我に出家を聽したまへ。』(三八)爾の時に世尊、憍陳如に告げたまはく『汝當に是の闍提首那の爲に鬚髮を剃除し、其が出家を聽すべし。』時に憍陳如即ち佛敎を受け、其が爲に髮を剃る。手を下す時に即ち二種の落有り。一つには鬚髮、二つには煩惱なり。即ち坐處に於て(三九)阿羅漢果を得。

(四〇)復梵志の(四一)婆私吒を姓とする有り、復是の言を作さく『瞿曇、所說の涅槃は常なりや。』『是の如し梵志。』(四二)婆私吒の言はく『瞿曇、將煩惱無きを涅槃と爲すと說かずや。』『是の如し梵志。』(四三)婆私吒の言はく『瞿曇、世間の四種之を名けて無と爲す。一つには未出の法之を名けて無と爲す、瓶の未だ泥を出でざるの時を名けて瓶無しと爲すが如し。二つには已滅の法之を名けて無と爲す、瓶の壞し已るを名けて瓶無しと爲すが如し。三つには異相互に無き之を名けて無と爲す、牛の中馬無く、馬の中牛無きが如し。四つには畢竟じて無なるが故に之を名けて無と爲す、龜毛、兎角の如し。瞿曇、若煩惱を除き已るを以て涅槃と名けば、涅槃は即ち無なり。若是無ならば云何ぞ常、樂、我、淨有りと言はん。』佛の言はく『善男子、是の如き涅槃は是先無泥時の瓶に同じきに非ず。亦滅無、瓶壞無に同じきに非ず。

---

し、聖人は境智を忘ず、故に一とす。

【三六】次に印。

【三七】次に聽。

【三八】次に許。

【三九】阿羅漢果を得に就て二解あり。開善は是れ現遂とし、莊嚴は當得とす。

【四〇】次に第二の外道。之に論義、歸伏の二段あり。初の論義の中に四番の問答あり。先づ初番の問答。

【四一】婆私吒(Vāsiṣṭha)。安住と譯す。優樓・僧佉二仙人の學徒なり。

【四二】次に第二番の問答。

【四三】次に第三番の問答。

亦畢竟無、龜毛、兎角の如きに非ず、異無に同じ。善男子、汝が言ふ所の如く、牛の中に馬無しと說き、說いて「牛亦是無し」と言ふべからず。馬の中に牛無しと雖も、亦「馬亦是無し」と說くべからず。涅槃も亦爾なり、煩惱の中に涅槃無く、涅槃の中に煩惱無し、是の故に名けて（四四）異相互無と爲す。」

（四五）婆私吒の言はく、「瞿曇、若異無を以て涅槃と爲さば、夫れ異無とは常、樂、我、淨無し。瞿曇、云何が說いて涅槃は常、樂、我、淨と言ふ。」

（四六）佛の言はく、「善男子、汝が所說の如く是の異無に三種の無有り、牛馬は悉く是先無後有なり、是を先無と名く。已有還無は是を壞無と名け、異相無とは汝が所說の如し。善男子、是の三種の無は涅槃の中に無し。是の故に涅槃は常、樂、我、淨なり。（四七）世の病人の如し、一つには熱病、二つには風病、三つには冷病なり。是の三種の病は三藥能く治す。熱病有る者は酥能く之を治し、風病有る者は油能く之を治し、冷病有る者は蜜能く之を治す。是の三種の藥は能く是の如きの三種の惡病を治す。善男子、風の中に油無く、油の中に風無し、乃至蜜の中に冷無く、冷の中に蜜無し。是の故に能く治す。一切衆生も亦復是の如し、三種の病有り。一つには貪、二つには瞋、三つには癡なり。是の如きの三病に三種の藥有り。不淨觀は能く貪藥と爲り、慈心觀は能く瞋藥と爲り、觀因緣智は能く癡藥と爲る。善男

【四四】異相互無。此れ外道と對論するがために言を構ふ。若し正理を論ぜば全く互無に非ず。本と牛馬互無を以て名けて互無となすも、今生死の中本と涅槃あるを明せるなり。

【四五】次に第四番の問答。初に問。

【四六】次に佛答。之に三段ありて初に法說。

【四七】次に三病三藥の譬。

子、貪を除くが爲の故に非貪觀を作し、瞋を除くが爲の故に非瞋觀を作し、癡を除くが爲の故に非癡觀を作す。三種の病の中に三種の藥無く、三種の藥の中に三種の病無し。(四八)善男子、三種の病の中に三藥無きが故に、無常、無我、無樂、無淨なり。三種の藥の中に三種の病無し、是の故に常、樂、我、淨と稱することを得。』

(四九)婆私吒の言はく、『世尊、如來我が爲に常無常を說く。云何が常と爲し、云何が無常なる。』佛の言はく、『善男子、色は是無常、(五〇)解脫色は常、乃至識は是無常、解脫識は常なり。善男子、若善男子、善女人の能く色、乃至識は是無常と觀ずる者有らば、當に知るべし、是の人常法を獲得せん。』婆私吒の言はく、『世尊、我今已に常無常法を知る。』佛の言はく、『善男子、汝云何が常無常法を知る。』婆私吒の言はく、『世尊、我今我色に是無常、解脫を得るは常と知る、乃至識も亦是の如し。』佛の言はく、『善男子、汝今善い哉已に是の身に報ず。』憍陳如に告ぐ、『是の婆私吒已に阿羅漢果を證す。汝其に三衣、鉢器を施すべし。』時に憍陳如佛の敎する所の如く其に衣鉢を施す。時に婆私吒衣鉢を受け已りて是の如き言を作さく、『大德憍陳如、我今是の弊惡の身に因りて善果報を得。唯願はくは大德我が爲に意を屈して、世尊の所に往きて具さに我が心を宣てよ。我既に惡人如來に觸犯し瞿曇姓を稱す。唯願はくは我が爲に此の罪を懺悔せよ。

【四八】次に四句を以て果を明す。
【四九】第二に歸伏。
【五〇】解脫色は常に就て二解あり。一に色は既に無常、我れ色が解脫すれば則ち復た色なし、故に常なりと。二に解脫は卽ち色、色は卽ち是れ常なりと。

我も亦久しく毒身を住むること能はず、今涅槃に入らん。』時に憍陳如卽ち佛の所に往いて是の如きの言を作さく、『世尊、婆私吒比丘慙愧心を生じ、自ら言ふ「頑嚚にして如來に觸犯し瞿曇姓を稱す。久しく是の毒蛇の身を住むること能はず」と。今身を滅せんと欲して我に寄りて懺悔す。』佛の言はく、『憍陳如、婆私吒比丘已に過去の無量の佛所に於て善根を成就す。今我が語を受けて如法にして住す。法の如く住するが故に正果を獲得す。汝等應當に其の身を供養すべし。』爾の時に憍陳如佛に從うて聞き已り、其の身所に還つて供養を設く。時に婆私吒梵身の時に於て種種の神足を作す。諸の外道の輩是の事を見已りて高聲に唱へて言はく、『是の婆私吒已に瞿曇沙門の呪術を得、是の人久しからずして復當に彼の瞿曇沙門に勝るべし。』

（五一）爾の時に衆中に復梵志の名を（五二）先尼と曰ふ有り、復是の言を作さく、『瞿曇、我有りや。』如來（五三）默然たり。第二、第三も亦是の如く問ふに、佛皆默然たり。（五四）先尼の言はく、『瞿曇、若し一切衆生我有りて一切處に徧し、是一作者なり。瞿曇何が故ぞ默然として答へざる。』

（五五）佛の言はく、『先尼、汝是の我は一切處に徧すと說くや。』先尼答へて言

---

【五一】次に第三の外道。之に四段ありて初に[illegible]。

【五二】先尼（[illegible]）。有軍と譯す。

【五三】默然たりは三義あり。一に是れ默然答。二に定んで有無を問ふは是れ邪意なれば答へず。三に先づ所立の綱宗を出さしめて後破せんとするが故に答へず。

【五四】次に執を破す。之に二段ありて初に宗を立す。この中三義を立す。一に我は是れ徧なり。二に我は是れ一なり。三に我は是れ作者なり。

【五五】次に正しく破す。之に正しく前の三を破し、別して餘の三を破する二段あり。初の中に三段ありて、初に徧を破す。之に又四段ありて先づ彼の義を定む。

はく、『瞿曇、但我が說くのみにあらず、一切の智人も亦是の如く說けり。』(五六)佛の言はく、『善男子、若し我一切處に周徧せば、應當に五道一時に報を受くべし。若五道一時に受報する有らば、汝等梵志何の因緣の故に衆惡を造らずして地獄を遮するが爲にし、諸の善法を修して天身を受くるが爲にする。』先尼の言はく、『瞿曇、我が法中の我は則ち二種有り。一つには作身我、二つには常身我なり。作身我の爲に離惡法を修して地獄に入らず、諸の善法を修して天上に生ず。』(五七)佛の言はく、『善男子、汝我一切處に徧すと說くが如き、是の如き我は、若作身の中ならば當に知るべし無常なり。若作身に無くば云何ぞ徧と言はん。』『瞿曇、我が所立の我も亦作の中に在りて亦是常法なり。瞿曇、人火を失して舍宅を燒くの時、其の主出で去り、說いて(五八)「舍宅燒かるれば主も亦燒かる」と言ふべからざるが如く、我の法も亦爾なり。而も此の作身是無常と雖も、當に無常の時に當りて我則ち出で去る。是の故に我が我は亦徧亦常なり。』(五九)佛の言はく、『善男子、汝が「我は亦徧亦常」と說くが如き、是の義然らず。何を以ての故に。徧に二種有り。一つには常、二つには無常なり。復二種有り。一つには色、二つには無色なり。是の故に若一切有と言はば、亦常亦無常なり、亦色亦無色ならん。若舍主出づることを得れば無常と名けずと言はば、是の義然らず。何を以ての故に。舍は主と名けず。主は舍と名けず。異燒異出なり、故に是の如くなることを得。

【五六】次に正しく破す。
【五七】次に佛更に詰責する。
【五八】舍宅燒かるれば等の舍宅は作身に、舍主は常身に譬ふ。舍既に燒かるれば主卽ち出で去る、作身無常なれば常身卽ち去るが如しといふなり。
【五九】次に便ち遮うて破す。

我は則ち爾らず。何を以ての故に。我は則ち是色、色は即ち是我なり。無色は即ち我、我は即ち無色なり。云何ぞ色無常の時我則ち出づることを得と言はん。

（二〇）善男子、汝が意若し一切衆生同一の我と謂はば、是の如きは則ち世、出世の法に違す。何を以ての故に。世間の法父母、子女と名く。若し「我は是一、父は即ち是子、子は即ち是父、母は即ち是女、女は即ち是母なり。怨は即ち是親、親は即ち是怨なり。此は即ち是彼、彼は即ち是此なり。是の故に若し「一切衆生同一の我」と說かば、是則ち世、出世法に違背す。』先尼の言はく、『我も亦一切衆生一我を同ずと說かず、乃ち一人各一我有りと說く。』

（二一）佛の言はく、『善男子、若し一人各一我有りと言はば是多我と爲す、是の義然らず。何を以ての故に。汝先に「我は一切に徧す」と言ふが如き、若し一切に徧せば、一切衆生の業根同じかるべし。天見るを得る時、佛も亦見るを得、天作すを得る時佛も亦作すを得、天聞くを得る時佛も亦聞くを得ん。一切諸法は皆亦是の如し。若し天見るを得佛見るを得るに非ざれば、我一切處に徧すと說くべからず。若し徧せざれば、是即ち無常なり。』先尼の言はく、『瞿曇、一切衆生の我は一切に徧し、法と非法とは一切に徧せず。是の義を以ての故に、佛異を作し得天異を作すを得。是の故に瞿曇說いて「佛見るを得る時天見るを得べく、佛聞くを得る時天聞くを得べし」と言ふ可らず。』

（二二）佛の言はく、『善男子、法と非法とは業作に非ずや。』先尼の言はく、『瞿曇、是業の所作なり。』

【二〇】第二に一の義を破す。之に八番あり、先づ初番。
【二一】次に第二番。
【二二】次に第三番。

(六三)佛の言はく、『善男子、若法非法是業作ならば、即ち是同法なり、云何ぞ異と言はん。何を以ての故に。佛業を得るの處天我を得る有り。天業を得るの處佛我を得る有り、是の故に佛作を得る時、天亦作を得るなり。法と非法とは亦是の如くなるべし。善男子、是の故に一切衆生の法と非法と若是の如くならば、所得の果報も亦異ならざるべし。善男子、子より果を出す、是の子終に思惟分別せず。「我唯當に婆羅門の果と作るべく、刹利、毘舍、首陀の與に果と作らざるなり。」何を以ての故に。子より果を出す。終に是の如き四姓を障閡せず。法と非法とも亦復是の如し。我唯當に佛得の與に果と作るべく、天得の與に果と作らず。天得の果と作りて佛得の果と作らずと分別すること能はず。何を以ての故に。業平等の故なり。』先尼の言はく、『瞿曇、譬へば一室に百千の燈有りて炷異有りと雖も、明は則ち差無きが如し。燈炷則ち異なるは法、非法を喩へ、其の明の無差は衆生の我を喩ふ。』

【六三】次に第四番。
【六四】次に第五番。

(六四)佛の言はく、『善男子、汝燈明を說いて以て我を喩ふるは、是の義然らず。何を以ての故に。室異燈異なればなり。是の燈光明も亦炷の邊に在り、亦室中に徧す。汝が言ふ所の我若是の如くならば、法非法の邊倶に我有るべし。我の中に亦法非法有るべし。若法非法我に有ること無くして、說いて「一切處に徧す」と言ふことを得ず。若倶に有らば、何ぞ復燈明を以て喩と爲すことを得ん。善男子、汝が意若炷と明と眞實別異と謂はば、何の因緣の故に炷增せば明增し、炷衰ふれば明滅する。是の故に

法非法を以て燈灶に喩へ、光明無差もて我を喩ふべからず。何を以ての故に。法、非法、我の三事即ち一つなればなり。』先尼の言はく、『瞿曇、汝燈喩を引く、是の事不吉なり。何を以ての故に。燈喩若吉ならば、我已に先に引く、如其不吉ならば、何が故ぞ復説かん。』

(六五)『善男子、我喩を引く所都て亦吉及び不吉と作さず、汝が意に随ひて説くに、是の喩も亦灶を離れて明有り、灶に即して明有りと説くべし。汝が心等しからず。故に燈灶を説いて法非法を喩へ、明は則ち我を喩ふ。是の故に汝を責む、灶は即ち是明、灶を離れて明有りや。法は即ち我有り、我は即ち法有り、非法は即ち我、我は即ち非法なり。汝今何が故ぞ但一邊を受けて一邊を受けざると。是の如き喩は汝に於て不吉なり。是の故に我今還つて以て汝を破す。善男子、是の如き喩は即ち是非喩なり。是非喩の故に我に於ては則ち吉、汝に於ては不吉なり。善男子、汝が意若「若我不吉ならば汝も亦不吉」と謂はば、是の義然らず。何を以ての故に。世間の人自刀自ら害し、自ら作して他用ふるを見る。汝引く所の喩も亦復是の如し、我に於ては則ち吉、汝に於ては不吉なり。』先尼の言はく、『瞿曇、汝先に我を責む心不平等と、今汝の所説も亦不平等なり。何を以ての故に。瞿曇今者吉を以て己に向け、不吉を我に向く。是を以て之を推して是不平なるを見る。』

(六六)佛の言はく、『善男子、我が不平の如きは能く汝が不平を破す。是の故に汝が平我が不平は即ち是

【六五】次に第六番。
【六六】次に第七番。

害なり。我が不平汝が不平を破して、汝をして平を得しむ、即ち是我が平なり。何を以ての故に。諸の聖人に同じく平等を得るが故なり。』先尼の言はく、『瞿曇、我常に是平、汝云何ぞ我が不平を壞すと言ふ。一切衆生平等に我有り、云何ぞ我是不平と言はんや。』

(六七)『善男子、汝も亦說いて當に地獄を受くべく、當に餓鬼を受くべく、當に畜生を受くべく、當に人天を受くべしと言ふ。我若先より五道の中に徧せば、云何ぞ方に當に諸趣を受くべしと言ふ。汝も亦說いて父母和合して然して後子を生ずと言ふ。若子先より有らば、云何ぞ復和合し已りて有りと言はん。是の故に一人五趣の身有り。若是五處先より身有らば、何の因緣の故に身の爲に業を造る、是の故に平ならず。

(六八)善男子、汝が意若我是作者と謂はば、是の義然らず。何を以ての故に。若我作者ならば、何の因緣の故に自ら苦事を作す。然るに今衆生實に受苦有り。是の故に當に知るべし、我作者に非ず。若是の苦我の所作に非ず、因より生ぜずと言はば、一切諸法も亦當に是の如く因より生ぜざるべし。何の因緣の故に、我の作と說くや。(六九)善男子、衆生の苦樂實に因緣よりす。是の如く苦樂能く憂喜を作す。憂時喜無く喜時憂無し、或は喜或は憂なり。智人云何ぞ是常と說かれん。(七〇)善男子、汝我常と說く、若是常ならば、云何ぞ十時の別異有りと說かん。常法は(七一)歌羅羅、乃至老の時有るべからず。虛空常法尙一時無し、

【六七】次に第八番。
【六八】第三に作者を破す。之に六番ありて初に第一番。
【六九】次に第二番。
【七〇】次に第三番。
【七一】歌羅羅（Kalala）。凝滑と譯す、受生の初めより七日間の位。

況や十時有らんや。善男子、我は是歌羅羅時、乃至老時に非じ、云何ぞ十時の別異有りと說くや。(七二)善男子、若我作者ならば、是の我も亦盛時衰時有り、衆生も亦盛時衰時有り。若我衰ならば云何ぞ是常ならん。(七三)善男子、我若作者ならば、云何ぞ一人に利有り鈍有りや。(七四)善男子、我若作者ならば、是の我能く身業、口業、意業を作す。若是我の所作ならば、云何ぞ口に我有ること無しと說くや、云何ぞ自ら有か無かを疑ふや。

(七五)善男子、汝が意若眼を離れて見有りと謂はば、是の義然らず。何を以ての故に。若眼を離れ已りて別に見有らば、何ぞ此の眼を須ひん。乃至身根も亦復是の如し。汝が意若我能く見ると雖も要ず眼に因りて見ると謂はば、是亦然らず。何を以ての故に。人有りて(七六)須曼那華能く大村を燒く。云何が能く燒く。火に因つて能く燒くと言はんが如し。汝が我見ると立つるも亦復是の如し。』(七七)先尼の言はく、『瞿曇、人の鎌を執れば、則ち能く草を刈るが如し。我五根に因りて見聞し觸するに至るも亦復是の如し。』

(七八)『善男子、鎌人各異なり、是の故に鎌を執りて能く所作有り。根を離るる外更に別の我無し。云何ぞ說きて「我諸根に因りて能く作す所有り」と言はん。善男子、汝が意若

【七二】次に第四難。

【七三】次に第五難。

【七四】次に第六難。

【七五】第二に例して前の三義を破す。之に三段あり、其中初に見者を破す。之に又三段ありて初に正しく破す。文の中眼を離れて見ありとは外道の見解なり。その中衛世師(ヴァイシェーシカ)に、神は智を使つて知り而も神は智と異なるとす。次に僧佉師(サーンキャ)は、また大いに之と同じく、「神能く知る」と執す、故に之を破す。

【七六】須曼那(Sumanā)。善稱意花と譯す。

【七七】次に救。先尼(セーニカ)は、有軍、勝軍と譯す。

【七八】次に重破。

鎌を執りて能く刈り、我も亦是の如しと爾はば、是の我手有りや、手無しと爲んや。若手有らば何ぞ自ら執らざる。若手無ければ、云何ぞ說いて我は是作者と言はん。善男子、能く草を刈る者は即ち是鎌なり。我に非ず人に非ず。若我大能しせば、何が故ぞ鎌に因らん。善男子、人に二業有り。一つには則ち草を執り、二つには則ち鎌を執る。是の鎌に唯能斷の功有り。衆生法を見るも亦復是の如し。眼能く色を見る。和合より生ず。若因緣和合より見ば、智人云何ぞ說いて我有りと言はん。

(七九)善男子、汝が意若身作し我受くと謂はば、是の義然らず。何を以ての故に。世間に天得業を作し佛得果を受くるを見ず。若是身作に非ず、我非因にして受くと言はば、汝等何が故ぞ因緣に從うて解脫を求むるや。汝先より是の身非因緣にして生ぜば、解脫を得已りて亦非因にして更に身を生ずべし。身の如く一切の煩惱も亦是の如くなるべし。』(八〇)先尼の言はく、『世尊、我に二種有り。一つには有知、二つには無知なり。無知の我は能く身を得、有知の我は能く身を捨離す。猶坏瓶の既に燒かれ已らば、本色を失して更に復生ぜざるが如し。智者の煩惱も亦復是の如し。既に滅壞し已らば、終に更に生ぜじ。』(八一)佛の言はく、『善男子、汝が所の知とは、智能く知るや、我能く知るや。若智能く知らば、何が故ぞ說いて我是知ると言ふや。若我知らば、何が故ぞ方便して更に知を求むる。汝が意若「我智に因りて知る」と謂はば、並會に同じく壞す。善男子、譬へば刺樹の性自ら能く刺すが如し。

【七九】第二に受者是れ我を破す。
【八〇】次に知者是れ我を破す。之に二段有り、初に[illegible]、[illegible]に破す。
【八一】次に正破す。

説いて樹刺を執りて刺すと言ふことを得ず。智も亦是の如く智自ら能く知る、云何ぞ説いて我智を執りて知ると言はん。善男子、汝が法の中の如く我解脱を得るは、無知我得にや、知我得にや。若無知得ば、當に知るべし、猶故煩惱を具足せん。若知得ば、當に知るべし、已に五情諸根有り。何を以ての故に。根を離れて外別に更に知無し。若諸根を具せば、云何ぞ復解脱を得と名けんや。若是の我其の性清淨にして五根を離ると言はば、云何ぞ説いて五道に徧して有りと言はん。何の因縁を以て、解脱の爲の故に諸の善法を修するや。善男子、譬へば人有りて虚空の刺を拔くが如く、汝も亦是の如し。我若清淨ならば、云何ぞ復諸の煩惱を斷ずと言はん。汝が意若因縁に從はずして解脱を獲得すと謂はば、一切の畜生何が故ぞ得ざる。』

(八二)先尼の言はく、『瞿曇、若無我ならば誰か能く憶念せん。』佛先尼に告げたまはく、『若我有らば、何に縁りてか復忘るる。善男子、若念是我ならば、何の因縁の故に惡念を念じ、念ぜざる所を念じ念ずる所を念ぜざる。』

(八三)先尼復言はく、『瞿曇、若我無き者、誰か見誰か聞かん。』佛の言はく、『善男子、内に六入有り外に六塵有り、内外和合して六種の識を生ず。是の六種の識は因縁名を得。善男子、譬へば一火木に因りて得るが故に名けて木火と爲し、草に因りて得るが故に名けて草火と爲し、糠に因りて得るが故に名けて糠火と爲し、牛糞に因りて得れば牛糞火と名くるが如く、衆生の意識も亦得ること是の如し。

【八二】次に第三に論義。之に五番の問答。其中初番の問答。

【八三】次に第二番の問答。

眼に因り、色に因り、明に因り、欲に因る、名けて眼識と爲す。善男子、是の如き眼識は眼の中、乃至欲の中に在らず。四事和合の故に是の識を生ず。乃至意識も亦復是の如し。若是因緣和合の故に生ぜば、智は見は即ち是我、乃至觸は即ち是我と說くべからず。善男子、是の故に我は眼識、乃至意識なり、一切諸法は即ち是幻なりと說くなり。云何が如幻なる。本無今有、已有還無なり。善男子、譬へば酥麪、蜜薑、胡椒、蓽茇、蒲萄、胡桃、石榴、桵子、是の如きの和合を歡喜丸と名け、是の和合を離るれば歡喜丸無きが如し。內外六入、是を衆生我人士夫と名け、內外入を離るれば別の衆生我人士夫無し。』

（八四）先尼の云はく、『瞿曇、若無我ならば、云何ぞ說いて我見、我聞、我苦、我樂、我憂、我喜と言はん。』佛の言はく『善男子、若我見、我聞と言へば我有りと名くる者なり。何の因緣の故に世間復汝が所作の罪我が見聞に非ずと言ふ。善男子、譬へば四兵の和合を軍と名く。是の如き四兵を名けて一つと爲さざれども、而も亦說いて我が軍勇健、我が軍彼に勝ると言ふが如く、是の內外入和合の所作も亦復是の如し。是一つならずと雖も、亦說いて我作、我受、我見、我聞、我苦、我樂と言ふことを得。』

（八五）先尼の言はく、『瞿曇、汝の所言の如き內外の和合、誰か聲を出して我作我受と言ふ。』佛の言はく、『先尼、愛無明の因緣より業を生じ、業より有を生じ、有より無量の心數を出生し、心覺觀を生じ、

【八四】次に第三番の問答。
【八五】次に第四番の問答。

覺觀風を動し、風心に隨ひて喉、舌、齒、脣に觸る。衆生想倒聲出でて、說いて我作、我受、我見、我聞と言ふ。善男子、幢頭の鈴風因緣の故に便ち音聲を出す。風大なれば聲大、風小なれば聲小、作者有ること無きが如し。善男子、譬へば熱鐵之を水中に投ずれば種種の聲を出す。是の中實に作者有ること無きが如し。善男子、凡夫是の如きの事を思惟し分別すること能はざるが故に、說いて我有り、及び我所有り、我作、我受と言ふ。」

(八六)先尼の言はく、『瞿曇の說の如く我我所無くば、何に緣りてか常、樂、我、淨と說く。』佛の言はく、『善男子、我も亦內外六入、及び六識意常、樂、我、淨と說かず。我乃ち內外入所生の六識を滅する、之を名けて常と爲す。是の常を以ての故に之を名けて我と爲す。常我有るが故に之を名けて樂と爲す。常、我、樂の故に之を名けて淨と爲すと宣說す。善男子、衆生苦を厭ひて是の苦因を斷じ、自在遠離す。是を名けて我と爲す。是の因緣を以て我今常、樂、我、淨と宣說す。』

(八七)先尼の言はく、『世尊、唯願はくは大慈我が爲に宣說したまへ。我當に云何が是の如きの常、樂、我、淨を獲得すべき。』佛の言はく、『善男子、一切世間本より已來大慢を具足し、能く慢を增長し、亦復慢因、慢業を造作す。是の故に今者慢果報を受く。一切の煩惱を遠離して常、我、樂、淨を得ること能はず。若し諸の衆生一切の煩惱を遠離することを得んと欲せば、先當に慢を離るべし。』(八八)先

【八六】次に第五番の問答。
【八七】次に第四に歸伏。之に四段ありて第一に佛に常を請す。
【八八】第二に旨を領して重ねて說く。其中初に旨を領す。

尼の言はく、『世尊、是の如く是の如し、誠に聖教の如し。我先より慢有り。慢因縁に因る、故に如来を称するに瞿曇姓を覇す。我今已に是の如き大慢を離る。是の故に誠心啓請して法を求む。云何が當に常、楽、我、浄を得べき。』(八九)佛の言はく、『善男子、諦かに聴き諦かに聴け。今當に汝が為に分別解説すべし。善男子、若能く自に非ず、他に非ず、衆生に非ずば、是の法を遠離せん。』(九〇)先尼の言はく、『世尊、我已に知解して正法眼を得。』佛の言はく、『善男子、汝云何が知り已り解し已りて正法眼を得と言ふ。』(九一)『世尊、言ふ所の色とは自に非ず、他に非ず、諸の衆生に非ず、乃至識も亦復是の如し。我是の如く観じて正法眼を得。世尊、我今出家修道を奉ふ、願はくは聴許せられんことを。』佛の言はく、『善来比丘。』即時に清浄梵行を具足し、阿羅漢果を證す。

(九二)外道衆の中復梵志の姓(九三)遮葉氏なる有り、復是の言を作さく、『瞿曇、身は即ち是命なりや、身異命異なりや。』如来黙然たり。第二、第三も亦復是の如し。(九四)梵志復言はく、『瞿曇、若人身を捨て未だ復身を得ず。其の中間に於て豈身異命異と名けざるべきや。若是異ならば、瞿曇、何が故ぞ黙然として答へざる。』(九五)『善男子、我身命皆因縁よりす、因縁ならざる非ずと説く。身命の如く一切の法も

【八九】次に重ねて説く。之に誡、説の二段あり。
【九〇】第三に[illegible]を擧て責めて相を出さしむ。
【九一】答問に已に所解を出す。之に自法、佛意の二段あり。之の中、[illegible]正法眼は初果の位、[illegible]は初果向果の位なり。
【九二】次に事同の外道。之に三段ありて初に縁起。
【九三】遮葉(カーシャパ)。飲光又は[illegible]光と譯す。
【九四】次に請問。之に五番の問答あり。前に第一番の問答。[illegible]
【九五】次に佛答。

亦是の如し。』（九六）梵志復言はく、『瞿曇、我世間に法の因緣に從はざる有るを見る。』佛の言はく、『梵志、汝云何が世間に法の因緣に從はざる有るを見るや。』（九七）梵志の言はく、『我大火の樹木を焚燒するに、風絕燄を吹いて餘處に墮在するを見る、是豈無因緣と名けざるや。』佛の言はく、『善男子、我是の火も亦因より生ずと說く因に從はざるに非ず。』（九八）梵志の言はく、『瞿曇、絕燄去る時薪炭に因らず。云何ぞ而るを因緣に因ると言はん。』佛の言はく、『善男子、薪炭無しと雖も風に因りて去る、風の因緣の故に其の燄滅せず。』（九九）『瞿曇、若人身を捨て、未だ後身を得ざる中間の壽命、誰か因緣と爲さん。』佛の言はく、『梵志、無明と愛とを因緣と爲す。是の無明、愛の二因緣の故に壽命住することを得。善男子、因緣有るが故に身即ち是命、命即ち是身なり。因緣有るが故に身異命異なり、智者一向に身異命異と說くべからず。』

（一〇〇）梵志の言はく、『世尊、唯願はくは我が爲に分別解說して、我をして了了に因果を知ることを得しめよ。』（一〇一）佛の言はく、『梵志、因は即ち五陰、果も亦五陰なり。善男子、若衆生有りて火を然さざれば、是則ち煙無し。』（一〇二）梵志の言はく、『世尊、我已に知り已り、我已に解し已る。』佛の言はく、『善男子、汝云何が知る、云何が解する。』（一〇三）『世尊、火は即ち煩惱、能く地獄、餓鬼、畜生、人天に於て燒然す。煙とは即ち是煩惱の果報なり、無常、不淨、

【九六】次に第二番の問答。
【九七】次に第三番の問答。
【九八】次に第四番の問答。
【九九】次に第五番の問答。
【一〇〇】第三に歸伏。之に三段ありて初に讚め請す。之に又二段ありて初に請。
【一〇一】次に佛答。之に答、執を牒して之を非すの二段あり。
【一〇二】第二に領解し重ねて徵す
【一〇三】第三に委しく己解を陳す

臭穢惡むべし、是の故に煙と名く。若衆生の煩惱を作さざる有らば、是の人は則ち煩惱の果報無し、是の故に如來火を然さざれば則ち煙有ること無しと說きたまふ。世尊、我已に正見す。唯願はくは慈矜我が出家を聽したまへ。』爾の時に世尊憍陳如に告げたまはく、『是の梵志に出家受戒を聽せ。』時に憍陳如佛敎を受け已りて、衆僧を和合して其が出家を聽し具足戒を受けしむ。（一〇四）五日を經已りて阿羅漢果を得。（一〇五）外道衆の中に復梵志の名を（一〇六）富那と曰ふ有り、復是の言を作さく、『瞿曇、汝世間是常法を見已りて說いて常と言ふや。是の如き義は、實なりや虛なりや、常無常、亦常亦無常、非常非無常なりや、有邊無邊、亦有邊無邊、非有邊無邊なりや。是身是命、身異命異なりや、如來滅後如去不如去、亦如去不如去、非如去非不如去なりや。』佛の言はく、『富那、我世間常虛實なり、無常亦常無常非常非無常なり、有邊無邊亦有邊無邊非有邊非無邊なり、是身是命身異命異なり。如來滅後如去不如去亦如去不如去非如去非不如去と說かず。』（一〇七）富那復言はく、『瞿曇、今者何の罪過を見て是の說を作さざる。』佛の言はく、『富那、若人世間是常唯此實と爲し餘は妄語と說く有らば、是を名けて見と爲す。見の所見

---

【一〇四】五日を經て羅漢果を得とは其の證果の遲促、機悟の早晩を說く。

【一〇五】次に第五の外道。之に二段あり、其中初に論義。之に四番の問答ありて初に初番、六十二見を擧げて問ふ。然るに六十二見に就て兩釋あり。一は身見に歸るとし、一は但だ邊見に局るとす。之を表示すれば左の如し。

I　第一の說

4(身見)×5(陰)=20
20×2(欲色二界)=40
40+16(4陰×4執)=56
56+6(邊見)=62(見)

II　第二の說

4(邊見)×5(陰)=20
20×3(世)=60
60+2(斷常二見)=62(見)

【一〇六】富那。具さに富蘭那（Pūrṇa）。滿と譯す。

【一〇七】次に第二番の問答。

の處、是を見行と名け、是を見業と名け、是を見著と名け、是を見縛と名け、是を見苦と名け、是を見取と名け、是を見怖と名け、是を見熱と名け、是を見纏と名く。富那、凡夫の人は見に纏はれて生、老、病、死を遠離すること能はず。六趣に回流して無量の苦を受く。乃至非如去非不如去も亦復是の如し。富那、我是の見是の如きの過有るを見る、是の故に著せず。人の爲に說かず。』〔一〇八〕『瞿曇、若是の如き罪過を見て著せず說かざれば、瞿曇、今者何の見、何の著、何の宣說する所ぞ。』佛の言はく、『善男子、夫見著とは生死の法と名く。如來已に生死の法を離るるが故に、是の故に著せず。善男子、如來を名けて能見能說と爲し、名けて著と爲さず。』〔一〇九〕『瞿曇、云何が能く見、云何が能く說く。』〔一一〇〕佛の言はく、『善男子、我能く明かに苦、集、滅、道を見、分別して是の如きの四諦を宣說す。我是の如きを見る、故に能く一切の見、一切の愛、一切の流、一切の慢を遠離す。是の故に我淸淨の梵行無上の寂靜を具し、常身を獲得す。是の身も亦東、西、南、北に非ず。』富那の言はく、『瞿曇、何の因緣の故に、常身是東、西、南、北に非ざる。』佛の言はく、『善男子、我今汝に問はく、汝が意に隨うて答へよ。意に於て云何。汝が前に於て大火聚を然さんが如し。其の然ゆる時に當りて汝然ゆるを知らんや不や。』『是の如し瞿曇。』是の火滅する時、汝滅するを知るや不や。』『是の如し瞿曇。』『富那、若人汝が前の火聚、「然何くより來り、滅何の至る所ぞ」と問ふ有らば、

【一〇八】次に第三番の問答。

【一〇九】次に第四番の問答。之に二段、初に重ねて見說を責む。

【一一〇】次に佛の問答。これに正答と、反て責めて相を出さしむるとの二段あり。

當に云何が答ふべき。』『瞿曇、若し問者有らば我當に答へて言ふべし、「是の火生ずる時衆縁に賴る、本縁已に盡き新縁未だ至らざれば是の火則ち滅す。」若し復、是の火滅し已りて何の方所に至ると問ふ有らば、復云何が答へん。』『瞿曇。我當に答へて言ふべし、「縁盡くるが故に滅す、方所に至らず」と。』『善男子、如來も亦爾なり、若し無常色、乃至無常識有らば愛に因るが故に然ゆ。然とは即ち二十五有を受く。是の故に然ゆる時是の火東、西、南、北すと說くべし。現在の愛滅すれば、二十五有の果報然えず。然えざることを以ての故に、東西南北有りと說くべからず。善男子。如來已に無常の色、乃至無常の識を滅す、是の故に身常なり。身若し是常なれば東西南北有りと說くことを得ず。』

（二二）富那の言はく、『一喩を說かんと欲す、唯願はくは聽采したまへ。』佛の言はく、『善い哉善い哉、意に隨ひて之を說け。』『世尊、（二三）大村の外に娑羅林有り、中に一樹有り。林に先んじて生じて一百年に足る。是の時に林主之に灌ぐに水を以てし、時に隨ひて修治す。其の樹陳朽して皮膚、枝葉悉く皆脫落し、唯貞實在るが如く、如來も亦爾り。所有の陳故悉く已に除盡し、唯一切眞實法有り。世尊、我今出家して佛道を修學せんと欲す。』佛の言はく、『善來比丘』と。

是の語を說き已りたまふに、即時に出家し、漏盡きて阿羅漢果を證得す。

【二二】第二に歸伏。
【二三】大村の外は[illegible]生死に、娑羅林は衆生心に、一樹は佛性に、一百年は中道佛性の[illegible]に、林主は修治に善持の人に、隨時乃至[illegible]一切悉く除くるに、唯貞實は眞實に譬ふ。

# 巻の第三十六

## 憍陳如品の二

(一)復梵志の淨と名くる有り、是の如きの言を作さく、『瞿曇、一切衆生何の法を知らずして世間の常無常、亦常無常、非有常非無常、乃至非如去非不如去を見るや。』佛の言はく、『善男子、色を知らざるが故に、乃至識を知らざるが故に、世間の常、乃至非如去非不如去を見る。』(二)梵志の言はく、『瞿曇、衆生何の法を知るが故に、世間常、乃至非如去非不如去を見ざるや。』佛の言はく『善男子、色を知るが故に乃至識を知るが故に、世間常、乃至非如去非不如去を見ず。』

(三)梵志の言はく、『世尊、唯願はくは我が爲に世間の常無常を分別解說したまへ。』佛の言はく、『善男子、若人故を捨て新業を造らざれば、是の人能く常と無常とを知る。』梵志の言はく、『世尊、我已に知解す。』佛の言はく、『善男子、汝云何が見、汝云何が知る。』『世尊、(四)故は無明と愛とを名け、

【一】次に第六の外道、之に二段あり、其中初に論義して之に兩番の問答あり。先づ初番の問答。
【二】次に第二番の問答。
【三】第二に歸伏。
【四】故は無明と愛を名けず。之に多解あり。第一の說は無明と愛は是れ過去、故に故、取有は現在、故に新といふ。第二の說に依れば煩惱に據らば無明と愛とを新とし、業に依らば取有を故とすと。章安兩說を評して共に不可、第三を最も不可とす。第三に無明と愛は是れ身を起すの本。

著は取有を名く。若人是の無明、愛を遠離し、取有を作らざれば、是の人眞實に常無常を知らん。我今已に正法の淨眼を得、三寶に歸依す。唯願はくは如來、我に出家を聽したまへ』と。佛憍陳如に告げたまはく『是の梵志に出家受戒を聽せ。』時に憍陳如佛敕を受け已りて、將ゐて僧中に至り、爲に羯磨を作して出家を得しむ。(五)十五日の後諸漏永く盡きて阿羅漢果を得。

(六)犢子梵志復是の言を作さく、『瞿曇我今問はんと欲す、能く聽さるるや不や。』如來默然たり、第二、第三も亦復是の如し。(七)犢子復言はく、『瞿曇、我久しく汝と共に親友たり。汝と我と義二つ有ること無し。我諮問を欲す、何が故ぞ默然たる。』爾の時に世尊、是の思惟を作さく、『是の如し梵志、其の性儒雅、純善質直たり。常に知の爲の故に來りて諮啓す、惱亂の爲ならず。彼若問はば、當に意に隨ひて答ふべし。』佛の言はく、『犢子、善い哉善い哉、疑問する所に隨ひて吾當に之を答ふべし。』(八)犢子の言はく、『瞿曇、世に善有りや。』『是の如し梵志。』『不善有りや。』『是の如し梵志。』『瞿曇、願はくは我が爲に說きて、善、不善の法を知ることを得しめよ。』(九)佛の言はく、『善男子、我能く分別して廣く其の義を說く。今當に汝が爲

---

故に故、取は無明と愛とに從つて起れば是れ技末、故に新と。此說は前說の失なき安註所評の如し。章安云く「今三世に約するに現在を過去に望めば無明は是れ故、未來を現在に望めば愛は故」と。觀師と同じく三世說なることを知るべし。

【五】十五日の後は前に早晚あるを指す。

【六】次に第七の外道。之に三段ありて初に緣起。文の初犢子は梵名 Vatsīputrīya の譯、新譯に可住子と翻す。

【七】次に論義。之に二段ありて初に問端を開く。

【八】次に正しく論義す。之に二段あり。初の問法、問人の二段あり。初の法を問ふ中に又二段ありて先づ問ふ。

【九】次に佛答。之に二段ありて初に許す。

に簡略して之を說くべし。(一〇)善男子、欲を不善と名け、欲を解脫する者、之を名けて善と爲す。瞋恚、愚癡も亦復是の如し。殺を不善と名け、不殺を善と名く。乃至邪見も亦復是の如し。善男子、我今汝が爲に已に三種の善、不善法を說き、及び十種の善、不善法を說く。若し我が弟子能く是の如く三種の善、不善法、乃至十種の善、不善法を分別することを作さば、當に知るべし、是の人は能く貪欲、瞋恚、愚癡一切の諸漏を盡し、一切の有を斷ぜん。』

(一一)梵志の言はく、『瞿曇、是の佛法の中に頗し一比丘の能く是の如きの貪欲、瞋癡一切の諸漏一切の有を盡す有りや不や。』佛の言はく、『善男子、是の佛法の中に一、二、三、乃至五百に非ず、乃ち無量の諸比丘等、能く是の如きの貪欲、瞋癡一切の諸漏一切の諸有を盡す。』『瞿曇、一比丘を置く。是の佛法の中頗し一比丘尼の能く是の如きの貪欲、瞋癡一切の諸漏一切の有を盡す有りや不や。』佛の言はく、『善男子、是の佛法の中に一、二、三、乃至五百に非ず、乃ち無量の諸の比丘尼有り、能く是の如きの貪欲、瞋癡一切の諸漏(一二)一切の諸有を斷ず。』犢子の言はく、『瞿曇、一比丘、一比丘尼を置く。是の佛法の中に頗し一りの優婆塞の持戒精勤、梵行清淨、疑の彼岸に度り、疑網を斷ずる有りや。』佛の言はく、『善男子、我が佛法の中に一、二、三、乃至五百に非ず、乃ち無量の諸の優婆塞、持戒精

〔一〇〕次に正しく三種十種を答ふ。之に標釋、標結の二段あり。

〔一一〕第二に人を問ふ。

〔一二〕一切の諸有を斷ずとは、羅漢を明す、卽ち出家の二衆なり。

勤、梵行清淨なり。五下結を斷じて（一三）阿那含を得、疑の彼岸に度り、疑網を斷ずる有り。』犢子の言はく『瞿曇、一比丘、一比丘尼、一優婆塞を置く。是の佛法の中に頗し一優婆夷の持戒精勤、梵行清淨、疑の彼岸に度り疑網を斷ずる有りや不や。』佛の言はく『善男子、我が佛法の中に一、二、三、乃至五百に非ず、乃ち無量の諸の優婆夷、持戒精勤、梵行清淨なり。五下結を斷じて阿那含を得、疑の彼岸に度り疑網を斷ずる有り。』犢子の言はく『瞿曇、一比丘、一比丘尼の一切漏を盡し、一優婆塞、一優婆夷の持戒精勤、梵行清淨、疑網を斷ずるを置く。是の佛法の中に頗し優婆塞の五欲樂を受けて、心に疑網無き有りや不や。』佛の言はく『善男子、是の佛法の中に一、二、三、乃至五百に非ず、乃ち無量の優婆塞、三結を斷じて須陀洹を得、貪、恚、癡を薄うして斯陀含を得る有り。優婆塞の如く優婆夷も亦是の如し。』

（一四）『世尊、我今者に於て譬喩を說くことを樂ふ。』（一五）佛の言はく『善い哉善い哉、說かんと樂はば便ち說け。』（一六）『世尊、譬へば難陀、婆難陀龍王等しく大雨を降すが如く、如來の法雨も亦復是の如し、平等に優婆塞、優婆夷に雨す。（一七）世尊、若し諸の外道來りて出家せんと欲せば、不審如來幾月之を試むるや。』佛の言はく、『善男子、皆（一八）四月試む、必しも一種なら

【一三】阿那含を得は在家の二果を問ひ、疑の彼岸に度るは少分得度するを稱す。此中再び優婆塞を明すは離欲者あり、有妻子者あるが爲めなり。

【一四】第三に歸依。之に五段ありて初に請述。

【一五】次に佛許。

【一六】次に說已。

【一七】次に出家を請ふ。

【一八】四月試む、必しも一種ならず。世尊常途に必ず四月と言す、四月とは只だ是れ一時、根性不同なれば復た一

す。世尊、若し一種ならざれば、唯願はくは大慈我に出家を聽したまへ。』（一九）爾の時に世尊憍陳如に告げたまはく『是の犢子に出家受戒を聽せ。』時に憍陳如佛敕を受け已りて、衆僧の中に立ちて爲に羯磨を作す。出家の後に於て十五日を滿じて須陀洹果を得。既に果を得已りて復是の念を作さく『若し智慧の從つて學得する者有らば、我今已に得。佛を見るに堪任す。』即ち佛所に往いて頭面に禮を作し、敬を修すること已畢りて却つて一面に住して佛に白して言さく『世尊、諸の有智慧の從學得の者我今已に得。唯願はくは我が爲に重ねて分別し、説いて我をして無學の智慧を獲得せしめたまへ。』佛の言はく『善男子、汝勤めて精進して二法を修習せよ。一つには奢摩他、二つには毘婆舍那なり。善男子、若し比丘須陀洹果を得んと欲する有らば、亦當に是の如き二法を勤修すべし。若し復斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果を得んと欲せば、亦當に是の如き二法を修習すべし。善男子、若し比丘の四禪、四無量心、六神通、八背捨、八勝處、無諍智、頂智、畢竟智、四無閡智、金剛三昧、盡智、無生智を得んと欲する有らば、亦當に是の如き二法を修習すべし。善男子、若し十住地、無生法忍、無相法忍、不可思議法忍、聖行、梵行、天行、菩薩行、虛空三昧、智印三昧、空無相無作三昧、地三昧、不退三昧、首楞嚴三昧、金剛三昧、阿耨多羅三藐三菩提佛行を得んと欲せば、亦當に是の如き二法を修習すべし』と。犢子聞き已りて禮拜して出づ。娑羅林の中に在りて是の二法を修し、久しからずして即ち阿羅漢果を得。是の時復無量の比丘佛所に

種ならず、一種ならざるを聞いて即ち出家を求むるなり。

【一九】次に佛出家を聽す。

往かんと欲する有り。犢子見已り問うて言はく、『大德、何の所に至らんと欲する。』諸の比丘の言はく、『佛所に往かんと欲す。』犢子復言はく、『諸の大德、若佛所に至らば、願はくは爲に宣啓せよ、犢子梵志二法を修し已りて無學智を得、今佛恩を報じて般涅槃に入る」と。』時に諸の比丘佛所に至り已りて佛に白して言さく、『世尊、犢子比丘我等に語を寄す、世尊、犢子梵志二法を修習して無學智を得、今佛恩を報じて涅槃に入ると。』佛の言はく、『善男子、犢子梵志阿羅漢果を得、汝等往いて其の身を供養すべし。』時に諸の比丘佛敎を受け已りて、其の尸所に還りて大いに供養を設く。

(三〇)納衣梵志復是の言を作さく、『瞿曇、瞿曇の所說の如き、無量世の中に善、不善を作して、未來還善、不善の身を得とは、是の義然らず。(三一)何を以ての故に。瞿曇、說の如く煩惱に因るが故に是の身を獲得すればなり。

(三二)若煩惱に因りて一身を獲得すれば、身先に在りと爲すや、煩惱先に在りや。若煩惱先に在らば、誰か作る所ぞ、何れの處に住在する。若身先に在らば、云何ぞ說きて煩惱に因りて得と言ふや。是の故に若煩惱先に在りと言はば、是則ち不可なり。若身先に在るも是亦不可なり。(三三)若一時と言はば又亦不可なり。(三四)先後、一時義皆不可なり。是の故に我說かく、「一切諸法皆自性有り因緣に從らず」と。(三五)復次に瞿曇、堅是地の性、

【三〇】次に第八の外道。之に論義、歸伏の二段あり。初の論義の中に又執、破の二段あり。執に四段ありて初に因緣の義を執す。之に又二段あり。一に先に旨を領して非す。
【三一】次に煩惱を難ず。之に四段ありて初に旨を領す。
【三二】次に雙じて難ず。之に雙定、兩難、兩結の三段あり。
【三三】次に別難。
【三四】次に總結。
【三五】第二に第二の自性の義を立つ。之に二段ありて初に自性の義を立つ。

濕是水の性、熱是火の性、動是風の性なり。罣閡する所無き、是虛空の性なり。是の五大性は非因緣の有なり。若世間をして一法性の非因緣の有有らしめば、一切の法性も亦是の如く、非因緣の有なるべし。若一法の因緣に從りて有らば、何の因緣の故に五大の性因緣に從らざる。瞿曇、衆生の善身及び不善身の解脫を獲得する皆是自性にして因緣に從らず。是の故に我說かく「一切の諸法自性の故に有り因緣生に非ず」と。(二六)復次に瞿曇、世間の法用處定る有り。譬へば工匠の「是の如き木は車輿を作るに任へ、是の如きは門戶、牀几を作るに任ふ」と云ふが如し。亦金師の造作すべき所、額上に在る者、之を名けて鬘と爲し、頸下に在る者、之を名けて瓔と爲し、臂上に在る者、之を名けて釧と爲し、指上に在る者、之を名けて環と爲すが如し。用處定るが故に名けて定性と爲す。一切衆生も亦復是の如し、五道の性有り、故に地獄、餓鬼、畜生、人、天有り。若是の如くば云何ぞ說いて因緣に從ると言はん。復次に瞿曇、一切衆生其の性各異なり、是の故に名けて一切自性と爲す。龜の陸に生じ自ら能く水に入り、犢子の生じ已りて自ら能く乳を飮み、魚の鉤餌を見て自然に吞食し、毒蛇の生じ已れば自然に土を食ふが如し。是の如き等の事誰か敎ふる者有る。刺の生じ已れば自然に頭尖り、飛鳥の毛羽自然に色別なるが如し。世間の衆生も亦復是の如し、利有り鈍有り、富有り貧有り、好有り醜有り、解脫を得る有り、下有を得る有り。是の故に當に知るべし、一切法の中に各自性有り。(二七)復

【二六】次に前義の證成。
【二七】第三に重ねて正義を難す之に二段ありて初に佛旨を非す。

次に瞿曇、貪欲、瞋、癡は因縁より生じ、是の如き三毒は五塵に因縁ありと説かば是の義然らず。(二八)何を以ての故に。衆生睡る時五塵を遠離す。亦復貪欲、瞋、癡を生ず。胎に在るも亦爾なり、初出胎の時未だ五塵の好醜を分別する能はざれども、亦復貪欲、瞋、癡を生ず。諸仙、賢聖は閑寂の處に處して五塵有ること無けれども、亦能く貪欲、瞋、癡を生ず。亦復人の五塵に因りて不貪、不瞋、不癡を生ずる有り。是の故に必しも因縁に從りて一切法を生ぜず、自性を以ての故なり。(二九)復次に瞿曇、我世人の、五根不具にして財寶多饒に大自在を得、根具足して貧窮下賤、自在を得ず、人の僕使と爲る有るを見る。若因縁有らば何が故ぞ是の如くなる。是の故に諸法各自性有り、因縁に由らず。(三〇)復次に瞿曇、世間の小兒も亦復未だ五塵を分別すること能はざれども、或は笑ひ、或は啼く。笑ふ時喜を知り、啼く時愁を知る。是の故に當に知るべし、一切諸法各自性有ることを。(三一)復次に瞿曇、世法に二つ有り。一つには有、二つには無なり。有は即ち虛空、無は即ち兎角なり。是の如きの二法、一つは是有の故に因縁に從らず、二つは是無の故に亦因縁に非ず。是の故に諸法自性有るが故に因縁に從らず。』

【二八】次に作難の文。難に四意あり。一に難ず、人睡る時亦た塵に對せざるも欲貪を生ず。二に難ず、初生の小兒は分別する所なきも亦た復た貪を生ず。三に難ず、賢聖の山林に在りて五塵を離ると雖も、亦た復た貪を生ず。四に難ず、自ら塵に對して貪するあり、或は貪せざるあり、並びに是れ自性なり。

【二九】第四に重ねて自性を立つ之に三復次、先づ初復次。

【三〇】次に二復次。

【三一】次に三復次。

(三一)佛の言はく、「善男子、汝が言ふ所の如き『五大の性の如く一切諸法も亦是の如くなるべし』とは、是の義然らず。何を以ての故に。善男子、汝が法の中五大是常を以てす。何の因緣の故に、一切諸法悉く是常ならざる。若世間の物是無常ならば、是の五大性何の因緣の故に是無常ならざる。若五大常ならば、世間の物も亦是常なるべし。是の故に汝が說『五大の性自性有るが故に因緣に從らず。一切法をして五大に同せしむ』とは、是の處有ること無し。(三二)善男子、汝『用處定るが故に自性有り』と言ふは、是の義然らず。何を以ての故に。皆因緣に從りて名字を得るが故に。若因に從りて名を得ば、亦因に從ひて義を得ん。云何が名けて因に從りて名を得と爲す。額上に在る、之を名けて鬘と爲し、頸に在るを瓔と名け、臂に在るを釧と名け、車に在るを輪と名け、火草木に在れば草木火と名くるが如し。善男子、木初生の時、箭稍の性無し。因緣に從るが故に工造りて箭と爲し、因緣に從るが故に工造りて稍と爲す。是の故に一切法自性有りと說くべからざるなり。(三四)善男子、汝『龜の陸に生じて性自ら水に入り、犢子の生じ已りて性能く乳を飮むが如し』と言ふは、是の義然らず。何を以ての故に。若水に入るを因緣に非ずと言はば、俱に因緣に非ず、何ぞ火に入らざる。犢子生じ已りて性能く乳を噉ふ、因緣に從らざれば、俱に因緣に非ず、何ぞ角を噉はざる。(三五)善男子、若諸法悉く自性有り、數習を須ひず、增長有ること無しと言はば、是の義然

【三二】次に第二に破。之に八段あり、初に第二を答へて自性の義を破す。
【三三】第二に第三を答へて諸義を破す。
【三四】第三に第四の復次の中七事有るを破す。先に初事。
【三五】次に第二事。

らず。何を以ての故に。今教有り教に緣りて增長するを見る。是の故に當に知るべし、自性有ること無し。(三六)善男子、若一切法自性有らば、諸の婆羅門一切清淨身の爲に羊を殺して祀祠すべからず。若身の爲に祠らば、是の故に當に知るべし、自性有ること無きことを。(三七)善男子、世閒の語法凡そ三種有り。一つには欲作、二つには作時、三つには作已なり。若一切法自性有らば、何が故ぞ世中に是の三語有る。三語有るが故に、故に一切自性有ること無きを知る。(三八)善男子、若諸法自性有りと言はば、當に知るべし、諸法各定性有らん。若定性有らば、甘蔗の一物、何に緣りてか漿と作り、蜜、石蜜、酒、苦酒等と作る。若一性有らば、何が緣ぞ乃ち是の如き等の物を出す。若一物の中に是の如き等を出さば、當に知るべし、諸法は一定して各一性有ることを得ず。(三九)善男子、若一切法定性有らば、聖人何が故ぞ甘蔗漿を飲みて、石蜜、黑蜜は、酒の時飲まざる。後苦酒と爲さば復還飲むことを得ん。是の故に當に知るべし、定性有ること無し。若定性無ければ、云何ぞ因緣に因つて有らざらん。(四〇)善男子、汝一切法自性有りと說かば、云何ぞ喩を說かん。若喩ふること有らば、當に知るべし、諸法は自性有ること無し。若自性有らば、當に知るべし喩無きを。世閒の智者皆譬喩を說く。當に知るべし、諸法自性有ること無く、一性有ること無きを。(四一)善男子、汝身先に在りと爲すや、煩惱先に在りやと言はば是の

【三六】次に第三難。
【三七】次に第四難。
【三八】次に第五難。
【三九】次に第六難。
【四〇】次に第七難。
【四一】第四に追うて第一・二を破す。之に三段あり、其中初に身先に在るの難を答ふ。之に雙非、正答の二段あり。

義然らず。何を以ての故に。若我當に身先に在りと說くべくば、汝難言すべし、汝も亦我に同じく身先に在らずと。何の因緣の故に是の難を作すや。(四二)善男子、一切衆生の身及び煩惱、倶に先後無く、一時にして有り。一時に有りと雖も、要ず(四三)煩惱に因つて身有るを得、終に身に因りて煩惱有らざるなり。汝が意若人の二眼一時にして得、相因待せず。左は右に因らず、右は左に因らざるが如し。煩惱及び身も亦是の如しと謂はば、是の義然らず。何を以ての故に。世閒眼見して炷と明と復一時と雖も、明は要ず炷に因り、終に明に因りて炷有らざるなり。(四四)善男子、汝が意若身先に在らず、故に無因を知ると謂はば、是の義然らず。(四五)何を以ての故に。若身先にして、因緣無きを以ての故に名けて無と爲さば、汝一切法因緣有りと說くべからず。(四六)若見ざるが故に說かずと言はば、今餅等因緣に從りて出づるを見る。何が故ぞ餅の如く、身先の因緣も亦復是の如しと

【四二】次に一事の難を答ふ。之に一時を明す、前後を明す、更に意を取つて答ふの三段あり。文の中、身及び煩惱一時に在りとは、是れ衆生の業を用つて身を得るは必ず煩惱に由るを明す。煩惱に二種あり。一に潤業、二に潤生。今の所明は正しく潤生を取る。若し數解に依らば正しく生陰の初に染汙識あるを以て潤生の惑と爲す、卽ち一期の果報を結す、故に身及び煩惱一時に在り。この說義に於て便なり。若し靈味法師の若きは亦た生陰を以て初めて潤生の愛を起すと云ひ、意極めて當の義に似たり。其餘の師は並びに死陰の中、潤生の愛を起すといふ。

【四三】煩惱に因つて身あるを得等。章安云く、この文仍り理を帶して說く、故に上に雖無先後といふ。雖は是れ不盡の詞、不盡は是れ有餘の說、故に知る、實理却て是れ權道の有餘と。此れ煩惱と身との先後を實說に非ずとするなり。

【四四】次に煩惱の前に在るの難を答ふ。之に二段ありて初に彼の難を牒す。

【四五】次に正しく破す。之に二段ありて初に正しく破す。

【四六】次に復た彼の意を取つて之を破す。

說かざる。善男子、若は見るも見ざるも、一切の諸法、皆因緣に從り自性有ること無し。（四七）善男子、若一切法悉く、自性有り因緣無しと言はば、汝何の因緣五大を說く。是の五大性卽ち是因緣なり。善男子、五大因緣復是の如しと雖も、亦諸法皆同じく五大因緣と說くべからず。世人一切の出家精勤持戒すと說くが如き、旃陀羅等も亦是の如く精勤持戒すべきや。善男子、汝五大定んで堅性有りと言ふ。我是の性轉ずるが故に定らざるを觀ず。善男子、酥蠟、胡膠汝が法の中に於て之を名けて地と爲す。是の地不定なり。或は水に同じく、或は地に同じ、故に自性の故に堅と說くを得ず。善男子、白鑞、鉛、錫、銅、鐵、金、銀、汝が法中に於て之を名けて火と爲す。是の火四性あり。流るる時は水の性、動の時は風性、熱の時は火性、堅の時は地性なり。云何ぞ說いて定んで火性と名くと言はん。善男子、水性を流と名く。若水凍る時名けて地と爲さず、故水と名けば、何の因緣の故に波動の時名けて風と爲さざる。若動ずるを風と名けざれば、凍る時も亦名けて水と爲さざるべし。若是の二義因緣に從らば、何が故ぞ說いて一切諸法因緣に從らずと言はん。善男子、若五眼の性能く見、聞、覺、知、觸す。皆是自性因緣に從らずと言はば是の義然らず。何を以ての故に。善男子、自性の性は性轉すべからず。若眼性見ると言はば常に能く見るべし。見るあり見ざる時有るべからず。是の故に當に知るべし、因緣に從って見る、無因緣に非ざることを。（四八）善男子、汝五陰に因って貪を生じ、解脫するに非ずと言ふ。是の義然らず。何を以て

【四七】第五に重ねて第二の五大性の難を破す。
【四八】第六に第五を破す。

の故に。善男子、貪を生じ解脱する、復五塵の因縁に因らずと雖も、惡覺觀の故に則ち貪欲を生じ、善覺觀の故に則ち解脱を得。善男子、内因縁の故に貪を生じ解脱し、外因縁の故に則ち能く増長す。是の故に汝一切諸法各自性有り、五塵に因りて貪を生じ解脱せずと言ふは、是の處有ること無し。(四九)善男子、汝「諸根を具足して財物に乏しく自在を得ず。諸根殘缺して、財寶多饒に大自在を得。此に因りて以て自性有るが故に因縁に從らざることを明かす」と言ふは是の義然らず。何を以ての故に。善男子、衆生は業に從ひて果報有り。是の如き果報は則ち三種有り。一つには現報、二つには生報、三つには後報なり。貧窮、巨富、根具、不具、是の業各異なり。若自性有らば、諸根を具する者は財寶に饒なるべく。財寶に饒なる者は諸根を具すべし。今則ち爾らず。是の故に定んで知りぬ、自性有ること無く、皆因縁に從るを。(五〇)善男子、汝が言ふ所の如く、世間の小兒未だ五塵の因縁を分別すること能はざれども、亦啼き亦笑ふ。是の故に一切自性有りとは、是の義然らず。何を以ての故に。若自性ならば、笑ひ常に笑ふべく、啼き常に啼くべし、一たび笑ひ一たび啼くべからず。若一笑一啼ならば當に知るべし、一切悉く因縁に從る。是の故に一切法自性有るが故に因縁に從はずと説くべからず。』

(五一)梵志の言はく、『世尊、若一切法因縁に從りて有らば、是の如き身は、何の因縁に從る。』佛の言

---

【四九】第七に第六を破す。

【五〇】第八に第七を破す。破すと雖も全く破せず、之に就て二釋あり。一に開善の云く、第八は二種の無法、緣に從らざるなき時は勞しく破することなしと。二に治城の云く、此れ第七を破し竟れば、彼れ便ち領解す、是の故に破せずと。

【五一】次に第二に歸伏。之に二段ありて初に泛く解を求む。

はく、『善男子、是の身の因縁は煩惱と業となり。』梵志の言はく、『世尊、如其是の身煩惱と業とに從らば、是の煩惱と業とは斷ずべきや不や。』佛の言はく『是の如く是の如し。』（五二）梵志復言はく、『世尊、唯願はくは、我が爲に分別、解說して、我をして聞き已りて是の處を移さずして、悉く之を斷ずるを得しめたまへ。』佛の言はく、『善男子、若二邊、中閒無閡と知らば、是の人は則ち能く煩惱業を斷ず。』『世尊、我已に知解し正法眼を得。』佛の言はく、『汝云何が知る。』『世尊、二邊は即ち色及び色解脫、中閒は即ち是八正道なり。受、想、行、識も亦復是の如し。』佛の言はく、『善い哉善い哉善男子、善く二邊を知り煩惱、業を斷ず。』『世尊、唯願はくは我に出家受戒を聽したまへ。』佛の言はく、『善來比丘。』即時に三界の煩惱を斷除して阿羅漢果を得たり。

（五三）爾の時に復婆羅門の名を弘廣と曰ふ有り、復是の言を作さく、『瞿曇、我が今の所念を知るや不や。』佛の言はく、『善男子、涅槃は是常、有爲は無常なり。曲は即ち邪見、直は即ち聖道なりと。』婆羅門の言はく、『瞿曇、何の因縁の故に、是の如き說を作す。』『善男子、汝が意毎に乞食は是常、別請は無常なり。曲は是戶鑰、直は是帝幢と謂ふ。是の故に我涅槃は是常、有爲は無常、曲は邪見と謂ひ、直は八正を謂ふと說く。汝が先の思惟する所の如きに非ざるなり。』『婆羅門の言はく、『瞿曇、實に我が心を知る。是の八正道は悉く衆生をして盡滅を得しむるや不や。』爾の時に世尊默然として答へたまはず。婆羅門の言はく、『瞿曇、已に我心を知る、我が今の問ふ所何が故ぞ默

【五二】次に正しく歸伏す。
【五三】次に第九の外道。之に二段ありて初に論義。

然として答へられざる。』時に憍陳如即ち是の言を作さく、『大婆羅門、若世の有邊、無邊を問ふ有らば、如來常爾に默然として答へたまはず。八聖は是直、涅槃は是常なり。若八聖を修せば即ち滅盡を得、若修習せざれば即ち得る能はず。大婆羅門、譬へば大城の其の城四壁、都て孔竇無く唯一門有り。其の守門の者聰明にして智有り、能善く分別して放つべきは則ち放ち、遮るべきは則ち遮る。出入の多少を知ること能はずと雖も、定んで一切入出有る者皆此の門に由ることを知るが如し。善男子、如來も亦爾なり、城は涅槃を喩へ、門は八正を喩へ、守門の人は如來を喩ふ。善男子、如來今者、汝に盡、不盡を答へずと雖も、其の有盡は、要らず當に是の八正道を修習すべし。』

(五四)婆羅門の言はく、『善い哉善い哉、大德憍陳如。如來善能く微妙の法を說く。我今實に城を知り道を知り、自ら守門と作らんと欲す。』憍陳如の言はく、『善い哉善い哉、汝婆羅門、能く無上廣大の心を發す。』佛の言はく『止みなん止みなん憍陳如、是の婆羅門は適今日是の心を發すに非ざるなり。乃往過去に無量の佛を過ぎて佛世尊有り。普光明如來、應、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と名く。是の人先に已に彼の佛の所に於て阿耨多羅三藐三菩提心を發す。此の賢劫の中に當に佛と作ることを得べし。久しく已に法相を通達、了知す。衆生の爲の故に現じて外道に處し、所知無きを示す。是の因緣を以て、汝憍陳如、讃じて「善い哉善い哉、汝今能く是の如き大心を發す」と言ふべからず。』

【五四】次に歸伏。

（五五）爾の時に世尊、知り已りて即ち憍陳如に告げて言はく、『阿難比丘今所在と爲るや。』（五六）憍陳如の言さく、『世尊、阿難比丘娑羅林の外此の大會を去ること十二由旬に在り、六萬四千億の魔に嬈亂せらる。是の諸の魔衆悉く自ら身を變じて如來の像と爲る。或は「一切諸法因緣より生ず」と宣說する有り、或は說いて「一切諸法因より生ぜず」と言ふ有り、或は說いて「一切の因緣皆是常法なり、因緣より生ずる者は悉く是無常」と言ふ有り、或は說いて「五陰は是實」と言ふ有り、或は「虛假」と說き、入界も亦爾なりと。或は說いて「十二緣有り」と言ふ有り、或は說いて「正しく四緣有り」と言ふ有り、或は「諸法は幻の如く、化の如く、熱時の焰の如し」と說き、或は說いて「聞に因りて法を得」と言ふ有り、或は說いて「思に因りて法を得」と言ふ有り。或は說いて「修に因りて法を得」と言ふ有り、或は復不淨觀法を說く有り、或は復出息、入息を說く有り。或は復四念處觀を說く有り。或は復（五七）三種の觀義（五八）七種の方便を說く有り。或は復煖法、頂法、忍法、世間第一法、學、無學地、菩薩初住、乃至十住を說く有り。或は空、無相、無作を說く有り。或は復修多羅、祇夜、毘伽羅那、伽

【五五】次に第十の外道。有人曰く、此の章三あり、前と少しく異る。止だ外を化するのみならず、一に付囑の爲め、二に降魔のため、三に須跋陀を化せんがためなりと。章安此の說を排して曰く「今明すに然らず、皆外道を化す、前と語異り意同じ」と。此の章四段あり、其中初に阿難に喚命す。これ此の經を付囑し兼ねて須跋陀を化せんと欲す。文の中二段ありて初に問。

【五六】次に答。之に二段あり、其中初に衆魔の亂の文、之にまた二段ありて、先づ衆說の亂。

【五七】三種の觀義に多說あり。一に云く、常苦無我を觀す。二に云く、陰入界を觀す。三に云く、三[illegible]を觀す。

【五八】七種の方便に就て兩解。數人の說は、(一)不淨觀、(二)總

陀、憂陀那、尼陀那、阿波陀那、伊帝目多伽、闍陀伽、毘佛略、阿浮陀達摩、憂波提舍を說く有り。或は四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺、八聖道を說き、或は內空、外空、內外空、有爲空、無爲空、無始空、性空、遠離空、散空、自相空、無相空、陰空、入空、界空、善空、不善空、無記空、菩提空、道空、涅槃空、行空、得空、第一義空、空空、大空を說く。(五九)或は神通變化を示現する有り。身、水火を出し。或は身上水を出し身下火を出し、身下水を出し身上火を出し、左脅下に在りて右脅水を出し、右脅下に在りて左脅水を出す。一脅震雷し一脅降雨す。或は諸佛の世界を示現する有り、或は復菩薩の初生行きて七步に至り、深宮に處在して五欲を受くるの時、初始出家し苦行を修するの時、菩提樹に往いて三昧に坐するの時、魔軍衆を壞して法輪を轉ずるの時、大神通を示して涅槃に入るの時を示現す。

(六〇)世尊、阿難比丘是の事を見已りて是の念言を作さく、「是の如き神變は昔より來た未だ見ず。誰の所作ぞ、將世尊釋迦の作に非ずや。起たんと欲し、語らんと欲するに都て意に從はず、阿難比丘魔罥に入るが故なり。

---

相念處、(二)[illegible]相念處、(四)受、(五)頂、(六)忍、(七)世第一法とす。成實の說は、(一)色の苦を觀す。(二)苦の集を觀す。(三)苦の滅を觀す。(四)苦の道を觀す。(五)苦の過を觀す。(六)苦の出を觀す。(七)苦の入を觀すとす。

【五九】次に神通の亂。

【六〇】第二に阿難の受亂。阿難衆魔のために亂を受くるに二義あり。一には諍の中、受を現じて神呪の功力に能く魔を降すを表す。二には阿難暫に座に在らず、如來をして文殊に顧問し往復して其の德業を論じ、付囑を爲すに堪へしめんと欲す。然るに河西は別に五義を出す。是れ亦本經に缺く可らざる解釋なり。即ち一に陳如對揚して外道を化す、故に阿難來つて座に在らず。二

復是の念を作さく『諸佛の所說各各不同なり、我今者に於て當に誰の語を受くべき。』世尊、阿難今者極めて大苦を受く。如來を念ずと雖も能く救ふ者無し。是の因緣を以て此の大衆の中に來至せず。』

(六二)爾の時に文殊師利菩薩摩訶薩佛に白して言さく、『世尊、此の大衆の中に諸の菩薩有り。已に一生に於て阿耨多羅三藐三菩提心を發すより無量生に菩提心を發すに至る。已に能く無量の諸佛を供養す。其の心堅固、具足して檀波羅蜜、乃至般若波羅蜜を修行し功德を成就す。久しく已に無量の諸佛に親近して梵行を淨修し、菩提の心を退轉せざるを得、不退忍、不退轉持を得、如法忍、首楞嚴等の無量の三昧を得。是の如き等の輩大乘經を聞いて終に疑を生ぜず。善能く分別して三寶同一、性相常住不變を宣說す。不思議を聞いて驚怪を生ぜず、種種の空を聞いて心怖懼せず。了了に一切の法性に通達し、能く一切の十二部經を持して廣く其の義を解し、亦能く無量の諸佛の十二部經を受持す。何ぞ是の如きの大涅槃典を受持する能はざるを憂へん。(六三)何の因緣の故に憍陳如に阿難の所在を問ふ。』(六四)爾の時に世尊、文殊師利に告げたまはく『諦かに聽き諦かに聽け、善男子、我成佛し已りて三十年を過ぎて王舍城に住す。爾の時に我、諸の比丘に告げて言はく、『今此の衆中に誰か能く我が爲に如來の十二部

に魔は度を得、故に示して彼にあり。三に阿難の內德八事を顯はさんと欲す。四に阿難をして須跋陀を召さしめんと欲す。五に阿難の高心を折らんと欲す。

【六二】次に第二に更に論義もて疑を釋す。之に二段ありて初に問。之に又二段ありて先づ具さに菩薩自ら能く流通するを明す。

【六三】次に阿難のみ何爲れぞ獨り顧問を蒙ると問ふ。

【六四】次に佛答。之に二段ありて初に具さに本緣を兼ぶ。

經を受持し、左右所須の事を供給し、亦自身の善利を失はざらしむる。」時に憍陳如彼の衆中に在り、來りて我に白して言さく、「我能く十二部經を受持し、左右に供給し所作の自利益の事を失はず。」我言はく、「憍陳如、汝已に朽邁、當に使人を須ふべし、云何ぞ方に我が爲に給使することを欲せん。」時に舍利弗復是の言を作さく、「我能く佛の一切語を受持し、所須を供給し、所作の自利益の事を失はず。」我言はく、「舍利弗、汝已に朽邁、當に使人を須ふべし。云何ぞ方に我が爲に給使することを欲せん。」乃至五百の諸の阿羅漢皆亦是の如し、我悉く受けず。爾の時に目連、大衆の中に在りて是の思惟を作さく、「如來今者五百の比丘の給使を受けず、佛意誰をして作さしめんと欲すと爲んや。」是を思惟し已りて、卽便定に入りて如來の心阿難に在ること、日の初めて出でて西壁を光照するが如くなるを觀見す。是の事を見已りて、卽ち定より起ちて憍陳如に語らく、「大德、我如來阿難をして左右に給事せしめんと欲するを見る。」時に憍陳如五百の阿羅漢と阿難の所に往き、是の如きの言を作さく、「阿難、汝今當に如來の給使と爲るべし、請ふ是の事を受けよ。」阿難の言はく、「諸の大德、我實に如來に給事するに堪へず。何を以ての故に。如來は尊重なる師子王の如く、龍の如く火の如し。我今穢弱、云何ぞ能く辦ぜん。」諸の比丘の言はく、「汝我が語を受けて如來に給事せよ、大利益を得ん。」第二、第三も亦復是の如し。阿難の言はく、「諸の大德、我も亦大利益の事を求めず。實に左右に奉給するに堪任せず。」時に目犍連復是の言を作さく、「阿難、汝今未だ知らずや。」阿難の言はく、「大德唯願はくは之を說きたま

へ。」目犍連の言はく、「如來先日僧中に使を求む。五百の羅漢皆之を爲さんと求むるに、如來聽したまはず。我卽ち定に入りて如來の意汝をして作さしめんと欲するを見る。汝今云何ぞ反つて更に受けざる。」阿難聞き已りて合掌長跪して、是の如きの言を作さく、「諸の大德、若是の事有り、如來世尊我に三願を與へたまはば、當に僧命に順じて左右に給事すべし。」目犍連の言はく、「何等か三願なる。」阿難の言はく、「一つには如來設故衣を以て我に賜ふとも我が受けざるを聽し、二つには如來設檀越の別請を受くとも我が從はざるを聽し、三つには我が出入に時節有ること無きを聽したまへ。是の如き三事を、佛若聽したまはば當に僧命に順ずべし。」時に憍陳如(等)五百の比丘、我が所に還來して是の如きの言を作さく、「我等已に阿難比丘を勸むるに、唯三願を求む。若佛聽したまはば當に僧命に順ふべし、」文殊師利、我爾の時に於て阿難を讃じて言はく、「善い哉善い哉、阿難比丘、智慧を具足して豫め機嫌を見る。何を以ての故に。當に人の言有るべし、汝衣食の爲に如來に奉給すと。是の故に先に故衣を受けず、別請に隨はざることを求む。憍陳如、阿難比丘智慧を具足す。入出に時有るときは則ち廣く四部の衆を利益することを作すことを得ること能はず。是の故に出入に時無きことを欲するを求む。憍陳如、我阿難の爲に是の三事を開いて其の意願に隨ふ。時に目犍連阿難の所に還りて阿難に語りて言はく、「皆已に汝が爲に三事を啓請す。如來大慈皆已に聽許したまふ。」阿難の言はく、「大德、若佛聽したまはば、請ふ

【六四】次に現前稱歎。之に二段ありて初に八事不可思議を歎ず。

往いて給侍せん。」（四）文殊師利、阿難我に事ふること二十餘年、八種の不可思議を具足す。何等をか八つと爲す。一つには我に事ふるより已來二十餘年、初より我に隨ひて別請食を受けず。二つには我に事ふるより已來、初より我が陳故の衣服を受けず。三つには我に事ふるより來た我が所に至る時、終に非時ならず。四つには我に事ふるより來た煩惱を具足すれども、諸王、刹利、豪貴、大姓に入、出すること有るに隨ひて、諸の女人及び天龍の女を見て欲心を生ぜず。五つには我に事ふるより來た我が所說の十二部經を持し、一たび耳を經れば曾て再問せず。缾水を瀉して之を一缾に置くが如し、唯一問を除く。善男子、瑠璃太子諸の釋氏を殺し、迦毗羅城を壞す。阿難爾の時に心愁惱を懷き、聲を發して大いに哭す。我が所に來至して是の如き言を作さく、「我如來と俱に此の城に生れて同一の釋種たり。云何ぞ如來は光顏常の如く、我は則ち憔悴する。」我時に答へて言はく、「阿難我空定を修するが故に汝に同じからず」と。三年を過ぎ已り、還來りて我に問はく、「世尊、我往彼の迦毗羅城に於て曾て如來空三昧を修するを聞く、是の事虛、實なりや。」我言はく、「阿難、是の如く是の如し、汝が說く所の如し。」六つには我に事ふるより來た、未だ知他心智を獲ずと雖も、常に如來所入の諸定を知る。七つには我に事ふるより來た未だ願智を得ざれども、而も能く「是の如き衆生如來の所に到り、現在能く四沙門果を得、後得の者有り。人身を得る有り、天身を得る有る」を了知す。八つには我に事ふるより來た、如來の所有祕密の言を悉く了知す。善男子、阿難比丘是の如き八不思議を具足す。是の故に我

阿難比丘を稱して多聞藏と爲す。【六五】善男子、阿難比丘八法を具足して、能く具足して十二部經を持す。何等をか八つと爲す。一つには信根堅固、二つには其の心質直、三つには身に病苦無く、四つには常に勤めて精進し、五つには念心を具足し、六つには心に憍慢無く、七つには定意を成就し、八つには從聞生智を具足す。文殊師利、【六六】毘婆尸佛の侍者の弟子を【六七】阿叔迦と名く、亦復是の如きの八法を具足す。【六八】尸棄如來の侍者の弟子を【六九】差摩迦羅と名け、【七〇】毘舍浮佛の侍者の弟子を【七一】憂波扇陀と名け、【七二】迦羅鳩村大佛の侍者の弟子の名を【七三】拔提と曰ひ、【七四】迦那牟尼佛の侍者の弟子の名を蘇坻と曰ひ、【七五】迦葉佛の侍者の弟子を【七六】葉婆蜜多と名く、皆亦是の如きの八法を具足す。我が今の阿難も亦復是の如く、八法を具足す、是の故に我阿難比丘を稱して多聞藏と爲す。

【七七】善男子、汝が所說の如く、此の大衆の中に無量無邊の菩薩有りと雖も、是の諸の菩薩は皆重任有り、所謂大慈、大悲なり。是の如く慈悲の

【六五】次に希有に難す。

【六六】毘婆尸(Vipaśin)。勝觀と譯す、過去七佛の第一。

【六七】阿叔迦(Aśoka)。無憂と譯す。

【六八】尸棄(Śikhin)。持髻と譯す、過去七佛の第二。

【六九】差摩迦羅(Samakara)。集衆、作業と譯す。

【七〇】毘舍浮(Viśvabhū)。遍一切自在と譯す、第三十一劫中の第二佛の名。

【七一】憂波扇陀(Upaśānta)。安靜と譯す。

【七二】迦羅鳩村大(Krakucchanda)。通常倶留孫と書き、所應斷已斷と譯す。

【七三】拔提(Bhadrika)。賢と譯す。

【七四】迦那牟尼。具さに迦那迦牟尼(Kanakamuni)といふ、金寂と譯す、賢劫中の第二佛、過去七佛の第五。蘇坻(?)。

【七五】迦葉(Kāśyapa)。飲光と譯す、過去七佛の第六。

【七六】葉婆蜜多(?)。

【七七】第三に正しく二問に答ふ。此章菩薩能く流通するを顯も、各各重任ありて弘傳を闡依す、故に付囑せず。阿難は下卑、隨して侍者と爲り、多聞最上、故に之に付すことな

因緣の故に各各煩務し、脊屬を調伏し自身を莊嚴す。是の因緣を以て我が涅槃の後十二部經を宣通すること能はず。若し菩薩の、或は時に能く說く有るも、人信受せず。文殊師利、阿難比丘は（七八）是吾が弟なり。我に給事せしより來た二十餘年、聞くべき所の法具足して受持すること、喩へば水を瀉して之を一器に置くが如し。是の故に我今阿難を顧問す、何の所在と爲んと。是の涅槃經を受持せしめんと欲す。善男子、我が涅槃の後阿難比丘未だ（七九）聞かざる所の者は、弘廣菩薩當に能く流布すべし。阿難聞く所は自ら能く宣通せん。（八〇）文殊師利、阿難比丘今他處の、此の會を去る外十二由旬に在りて、六萬四千億の魔に惱亂せらる。汝彼に往いて大聲を發して言ふべし、「一切の諸魔諦かに聽き諦かに聽け。如來今（八一）

---

明す。長壽品の初めには、聞は堪へず、菩薩に受くるに堪ふと明す。然るに今阿難に付し菩薩に付せざるに就て三義あり。一に前には實行を聞き、故に堪へずと云ふ、今は是權を明す、故に堪ふと云ふ。二に大法を對揚し、深理を弘宣するは其れ即ち堪へず、教の文言に於て章段を受持するは即ち能くするに堪ふ。下文に「若し阿難の聞かざる所の者は弘廣菩薩自ら爲めに宣說せん」と云ふ、乃ち深義正理は菩薩に付するなり。三に辟開を明すに自ら與奪あり、奪ふが故に堪へず、與ふが故に堪ふと言ふ。

【七八】是れ吾が弟とは是れ實は從弟なりと雖も、親近の關係を示さんとて、直ちに吾が弟と云ふなり。

【七九】聞かざる所は弘廣等。此れに三義あり。一に舊說の云く、十外の數の中、迹第九に居す、實に是れ菩薩の故に。二に招提の云く、佛法中何ぞ出りて忽ち外道の名を取りて能く經を弘むと謂はんや、弘廣とは一人に依るに非す、但だ能く弘通敎化もて利益すれば、是れ弘廣なりと。三に既に外道に非ず、又た通說に非ず、別に菩薩の名あり、名けて弘廣と爲すと。

【八〇】次に第三に正しく阿難に命ず。之に五段ありて初に佛文殊に命ず。

【八一】大陀羅尼(Mahādhāraṇī)。陀羅尼は總持と譯す、亦た等持の譯あり、大は其の勝德を形容す。

【八二】次に如來の說呪。古來呪を譯せざるに五義あり一に是れ三寶の名、佛陀(佛 Buddha)と達摩(法 Dharma)と僧伽(僧

し、卻つて一面に住す。

（八六）佛阿難に告げたまはく、『是の娑羅林の外に一りの梵志有りて（八七）須跋陀と名く。年百二十、五通を得と雖も未だ（八八）憍慢を捨てず。非想非非想定を獲得し、一切智を生じ涅槃想を起す。汝彼に往いて須跋に語りて言ふべし、「如來の出世は優曇華の如し。今中夜に於て當に般涅槃すべし。若所作有らば時に及びて作すべし。後日に於て悔心を生ずること莫れ。」阿難、汝が說く所彼定んで信受せん。何を以ての故に。汝曾て往昔五百世の中に須跋陀が子と作る。其の人（八九）愛心習猶未だ盡きず。是の因緣を以て汝が語を信受せん。』（九〇）爾の時に阿難佛敕を受け已りて、須跋の所に往いて是の如きの言を作さく、『仁者當に知るべし、如來の世に出づるは優曇華の如し。今中夜に於て當に般涅槃すべし。所作有らんと欲せば、時に及んで作すべし。後日に於て悔心を生ずる莫れ。』（九一）須跋の言はく、『善い哉阿難、我今當に往いて如來の所に至るべし。』爾の時に阿難須跋陀と還佛所に至る。

（九二）時に須跋陀到り已りて問訊し、是の如きの言を作さく、『瞿曇、我今問はんと欲す、我が意に隨ひて答へよ。』（九三）佛の言はく、『須跋、今正に是

---

【八七】 須跋陀。具さに須跋陀羅（Subhadra）といひ、また須跋とも略稱す。善賢、好賢と譯す。

【八八】 憍慢を捨てず。之に二解あり。先づ數の義に依らば、慢は他使に從ひて起る。彼れ既に非想定を得、即ち彼の地を緣じて慢を起すなり。故に憍慢を捨てずといふ。次ぎに論解に依らば、慢は散心の煩惱、此は實に已に伏す、昔の非想地猶ほ慢の在るあり、且つ慢は本と自高に基く。而かも彼れ下定を得、我心殊に多し、我心有るを以て憍慢を捨てざるなりといふ。

【八九】 愛心習猶未だ盡きず。安註曰く、「之に二義あるべし。一に云く、此れは父慈子孝の愛を謂ふ、これは煩惱の愛に由て起る、此の善を起すこと數

時なり、汝が所問に隨はん。我當に方便して汝が意に隨ひて答ふべし。』(九四)『瞿曇、諸の沙門、婆羅門等有りて是の如きの言を作さく、「一切の衆生苦樂の報を受く、皆往日本業の因緣に隨ふ。是の故に若持戒精進して身心の苦を受くる有らば能く本業を壞す。本業既に盡くれば衆苦盡く滅す。衆苦盡滅すれば卽ち涅槃を得」と。是の義云何』(九五)佛の言はく、『善男子、若沙門、婆羅門等の是の說を作す者有らば、我憐愍の爲に常に當に是の如き人の所に往來すべし。既に彼に至り已りて、我當に之に問ふべし、「仁者、實に是の如きの說を作すや不や」と。彼若答ふるを見ん、「我是の如く說く。何を以ての故に、瞿曇、我衆生の諸惡を習行して、財寶多饒に、身自在を得るを見る。又善を修して、貧窮多乏、自在を得ざるを見る。又人有り、多く力用を役して財を求むるに得ざるを見る。又求めざるに自然に得る者を見る。又人有り、慈心不殺にして、反つて更に中夭なるを見る。又憙殺して年壽を終得するを見る。又人有り、淨く梵行を修し、精勤持戒するに、解脫を得る有り得ざる者有るを見る。是の故に我一切衆生苦樂の報を受くは、皆往日本業の因緣に由ると說く」と。須跋、我復當に問ふべし、「仁者、實に過去の業を見るや不や。若

---

數止まざるを云ふ。二に云く、此れ煩惱の習を論すと。煩惱の習は二解あり。舊に要らず永く伏斷して始めて之を起すといふ、此の說可なり。二に凡夫所起の習を指す、而して未盡といふは上地の定を得て重惑を伏すれども、餘の輕き者在るを以てなりと。

【九〇】次に阿難の奉命。

【九一】次に相隨うて來る。

【九二】次に第二に論義。これに業行を論す、解脫を論すの二段あり。初の業行を論する中に又四段ありて、初に聽を求む。

【九三】次に佛許。

【九四】次に佛に問ふ。

【九五】次に佛答。これに三段ありて初に彼の宗義を牒す。

是の業有らば、多、少と爲すや、現在の苦行能く多、少を破するや、能く是の業の已盡、不盡を知るや。是の業既に盡くれば一切盡くるや。」彼若「我實に知らず」と答ふるを見ば、我便ち當に彼の人の爲に喩を引くべし、「譬へば人有りて身に毒箭を被る。其の家の眷屬爲に醫師を請じて是の箭を拔かしむ。既に箭を拔き已りて身安隱を得。其の後十年、是の人猶憶すること了了分明なるが如し。是の醫我が爲に毒箭を拔出し、藥を以て塗り傅して我をして差ゆるを得、安隱に樂を受けしむ。仁既に過去の本業を知らず、云何ぞ能く現在の苦行定んで能く過去の業を破壞するを知らんや。」彼若復言はん、「瞿曇、汝今も亦過去の本業有り、何が故ぞ獨我が過去の業を責むるや。瞿曇の經中にも亦是の說を作す、若人の豪貴自在なる有るを見ば、當に知るべし、是の人の先世の好施を知るべしと。是の如きは過去の業と名けずや。」我復答へて言はん、「仁者、是の如く知るは名けて比知と爲し、眞知と名けず。我が佛法の中に或は因に由りて果を知る有り、或は果に從りて因を知る有り、我が佛法の中に過去業有り、現在業有り。汝は則ち爾らず、唯過去業有りて現在業無し。汝が法は方便に從りて業を斷せず。我が法は爾らず、方便に從りて斷ず。汝は業盡き已れば則ち苦盡を得。我は則ち爾らず、煩惱盡き已れば業苦則ち盡く。是の故に我今汝が過去の業を責む。」彼の人若「瞿曇、我實は知らず、師より之を受く。師是の說を作す、我實に咎無し」と言はば、(九六)我言はん、「仁者、汝が師は是誰ぞ。」彼若「是(九七)

【九六】次に彼の邪師を責む。
【九七】富蘭那。具さに富蘭那迦葉波(Pūraṇakāśyapa)、究竟飲光と譯す。究竟は實名、飲光は姓名なり(西藏譯は護光、蓋

富蘭那」と答ふるを見ば、我復語りて言はん「汝昔何ぞ一一大師に實に過去の業を知るや不やを咨問せざる。汝が師若我知らずと言はば、汝復云何ぞ是の師の語を受くる。若我知ると言はば、復問ひて言ふべし、下苦の因縁中、上の苦を受くるや不や、中苦の因縁下、上の苦を受くるや不や、上苦の因縁中、下の苦を受くるや不や。若不と言はば、復問ひて言ふべし、師云何ぞ苦樂の報は唯過去の業にして現在に非ずと說くや。復問ひて言ふべし、是の現在の苦は過去に有りや不や。若過去に有らば、過去の業は悉く已に都て盡きん、若都て盡きば、云何ぞ復今日の身を受くるや。若過去無く、唯現在有らば、云何ぞ復衆生の苦樂若過去の業と言はん。仁者、若現在の苦行能く過去の業を壞すと知らば、現在の苦行復何を以てか破するや。如其破せずば、苦は卽ち是常ならん。苦若是常ならば、云何ぞ說いて苦解脫を得と言はん。若更に行の苦行を壞する者有らば、過去已に盡く、云何ぞ苦有らん。仁者是の如く苦行能く樂業をして苦果を受けしむるや不や。復苦業をして樂果を受けしむるや不や。能く無苦無樂業をして不受果と作らしむるや不や。能く現報をして生報と作らしむるや不や。能く生報をして現報と作らしむるや不や。是の二報をして無報と作らしむるや不や。能く定報をして無報と作らしむるや不や。能く無報をして定報と作らしむるや不や。彼若復一一皆不能と言はば我復當に言ふべし、「仁者、如其能はずんば、何の因緣の故に、是の苦行を受くるや。仁者當に知るべし、定んで過去の業現在の因緣

し波一云に飲む・渡る二義あるに由る)、此名に從ひて名とす。常見外道の異なり。

有り。是の故に我煩惱に因つて業を生じ、業に因りて報を受くと言ふ。(九八)仁者、當に知るべし。一切衆生過去の業有り、現在の因有り。衆生過去の壽業有りと雖も、要ず現在の飮食因緣に賴る。仁者、若衆生苦を受け樂を受く、定んで過去の本業因緣に由ると說かば、是の事然らず。何を以ての故に。仁者、譬へば人王の爲に怨を除く有り、是の因緣を以て多く財寶を得、是の財寶に因りて現在の樂を受くるが如し。是の如きの人は現に樂因を作し、現に樂報を受く。譬へば人王の愛子を殺す有り、是の因緣を以て身命を喪失するが如し。是の如きの人は現に苦因を作し現に苦報を受く。仁者、一切衆生現在に四大時節、土地、人民に因りて苦を受け樂を受く。是の故に我一切衆生必しも盡く過去の本業に因りて苦樂を受けずと說くなり。(九九)仁者、若斷業の因緣力を以ての故に解脫を得ば、一切の聖人解脫を得ず。何を以ての故に。一切衆生過去の本業は始終無きが故なり。是の故に我聖道を修する時、是の道能く無始終の業を遮すと說く。仁者、若苦行を受けて便ち道を得ば、一切の畜生悉く道を得べし。是の故に先當に其の心を調伏し、身を調伏せざるべし。是の因緣を以て、我經中に說かく、此の林を斫伐せよ、樹を斫伐すること莫れ。何を以ての故に。林に從りて怖を生じ樹に從りて生ぜず。身を調伏せんと欲せば、先に當に心を調伏すべし。心は林に喩へ身は樹に喩ふ」と。』(一〇〇)須跋陀の言はく、『世尊、我已に先に心を調伏す。』(一〇一)佛の言はく、『善男子、汝今云

【九八】次に爲に正義を明す。
【九九】第二に解脫を論す。之に五段ありて初に正義を示す。
【一〇〇】次に述己。
【一〇一】次に重責。
【一〇二】次に先に調心を答ふ。
【一〇三】欲は是れ無常無樂等。外

何が能く先に心を調ふ。』(一〇二)須跋陀の言はく、『世尊、我先に(一〇三)欲は是無常、無樂、無淨と思惟し、色は即ち是常、樂、清淨と觀す。是の觀を作し已りて欲界の結斷じ、色處を獲得す。是の故に名けて先に心を調伏すと爲す。次に復色を觀ず。色は是無常、癰の如く、瘡の如く、毒の如く、箭の如し。無色、常、清淨、寂靜を見る。是の如く觀じ已りて色界の結盡きて無色處を得、是の故に名けて先に心を調伏すと爲す。次に復想を觀ず、即ち是無常、癰、瘡、毒、箭なり。是の如く觀じ已りて、後非想非非想處を得。是の非想非非想は即ち一切智、寂靜、清淨なり。墮墜有ること無く、常恆變せず、是の故に我能く其の心を調伏す。』(一〇四)佛の言はく、『善男子、汝云何が能く心を調伏するや。汝が今得る所の非想非非想定は猶名けて想と爲す。涅槃は無想なり、汝云何ぞ涅槃を獲得すと言ふ。善男子、汝已に先に能く麤想を呵責すと、今者云何ぞ細想に愛著して呵責するを知らざる。是の如きの非想非非想處は故名けて想と爲す。癰の如く、瘡の如く、毒の如く、箭の如し。善男子、汝が師鬱頭藍弗の利根聰明にして、尚是の如き非想非非想處を斷ずる能はずして、惡身を受く、況や其の餘の者をや。』(一〇五)『世尊、云何が能く一切諸有を斷ぜん。』(一〇六)佛の言はく、『善男子、若し(一〇七)實想を觀せば、是の

道の所觀は多く六行、謂ゆる苦・麤・障・止・妙・離なり。然るに佛法の弟子は八行觀をなす、曰く無常・苦・空・無我・不淨・知[illegible]・知苦・知集・知道なり、須跋陀無我を言はざるは外道は我のために禪を修し、我をして出離せしむるを以て無我觀なきなり。

【一〇三】次に重徴。

【一〇五】次に第三に降伏。之に三段、其中初に無想の法を說くを請す。又二段ありて初に請し

【一〇六】次に佛答。之に二段ありて初に略說。

【一〇七】實想は若し境に從て名を爲せば實相と云ふ、今智に從て名を爲す、故に實想と云ふ。想は是れ智、相は境の名なり。

人能く一切諸有を斷ず。』（一〇八）須跋陀の言はく『世尊、云何が名けて實想と爲す。』『善男子、無想の想を名けて實想と爲す。』『世尊、云何が名けて無想の想と爲す。』『善男子、一切の法は自相、他相、及び自他相無く、無因相無し、作相無く、受相無し、作者相無く、受者相無し。法、非法相無し。男、女相無く、士夫相無し。微塵相無く、時節相無し。爲自相無く、爲他相無く、爲自他相無し。有相無く、無相無し。生相無く、生者相無し。因相無く、因因相無し。果相無く、果果相無し。晝夜相無く、明闇相無し。見相無く、見者相無し。聞相無く、聞者相無し。覺知相無く、覺知者相無し。菩提相無く、得菩提者相無し。業相無く、業主相無し。煩惱相無く、煩惱主相無し。善男子、是の如き等の相（一〇九）所滅の處に隨ひて眞實想と名く。善男子、一切諸法は皆是虛假なり。其の滅する處に隨ひて是を名けて實と爲す。是を實想と名け、是を法界と名け、畢竟智と名け、（一一〇）第一義諦と名け、第一義空と名く。善男子、是の想は法界、畢竟智、第一義諦、第一義空なり。（一一一）下智觀の故に聲聞の菩提を得、中智觀の故に緣覺の菩提を得、上智觀の故に無上菩提を得。』

---

【一〇八】次に廣說。之に請、答の二段あり。

【一〇九】所滅の處。二義あり。一に眞實智を以て諸煩惱を斷ず。二に空を以て俗有を遣去す。

【一一〇】第一義諦第一義空。涅槃の果上にも亦た此の名あり、今は因中の名なり。

【一一一】下智觀の故に聲聞の菩提等。古來の解には之を三乘の異觀とするも、今の所用に非ず。今謂く、三乘同じく第一義空を觀ずるも智に下・中・上ありて三乘の別を成すを明す。例へば三獸同じく河を度るに水の深淺を得るが如く、三乘同じく中道を觀ずる中、深智は無上菩提を得、淺智は緣覺と聲聞の菩提を得るなり。

【一一二】第二に時衆の得益。

【一一三】一生實想二生法界。一生は十地補處の大士、二生は是

（二二）是の法を説く時、十千の菩薩（二三）一生實想を得、萬五千の菩薩二生法界を得、二萬五千の菩薩畢竟智を得、三萬五千の菩薩第一義諦を悟る。是の第一義諦は亦第一義空と名け、亦首楞嚴三昧と名く。四萬五千の菩薩虚空三昧を得。是の虚空三昧は、亦廣大三昧と名け、亦智印三昧と名く。五萬五千の菩薩不退忍を得。是の不退忍は、亦如法忍と名け、亦如法界と名く。六萬五千の菩薩陀羅尼を得、是の陀羅尼は、亦大念心と名け、亦無閡智と名く。七萬五千の菩薩師子吼三昧を得。是の師子吼は、亦金剛三昧と名け、亦五智印三昧と名く。八萬五千の菩薩平等三昧を得。是の平等三昧は、亦大慈大悲と名く。無量恆河沙等の衆生阿耨多羅三藐三菩提心を發し、無量恆河沙等の衆生緣覺心を發し、無量恆河沙等の衆生聲聞心を發す。人女、天女二萬億の人、現に女身を轉じて男子の身を得。（二四）須跋陀羅阿羅漢果を得たり。

れ[illegible]の菩薩を指す。若し具さに論ずれば、法華經の損生義の如し。

【二四】[illegible]「斯より巳後、幾くか[illegible]」[illegible]

# 大般涅槃經卷第十九

〔麗多〕〔宋輔〕〔元公〕〔明在〕

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

## 光明遍照高貴德王菩薩品第二十二之一

品日明無光明遍照四字宋元俱無之一二字

藏宋元俱作義

無同作不

伎同作技下同

（薄宋同作博食

爾時世尊。告光明遍照高貴德王菩薩摩訶薩言。善男子。若有菩薩摩訶薩修行如是大涅槃經。得十事功德。不與聲聞辟支佛共。不可思議聞者驚怪。非內非外。非難非易。非相非非相。非是世法。無有相貌。世間所無。何等為十。一者有五。何等為五。一者所不聞者而能得聞。二者聞已能為利益。三者能斷疑惑之心。四者慧心正直無曲。五者能知如來密藏。是為五事。何等不聞而能得聞。所謂甚深微密之藏。一切衆生悉有佛性。佛法衆僧無有差別。三寶性相常樂我淨。一切諸佛無有畢竟入涅槃者。常住無變。如來涅槃非有非無。非有為非無為。非有漏非無漏。非色非不色。非名非不名。非相非不相。非有非不有。非物非不物。非因非果。非待非不待。非明非闇。非出非不出。非常非不常。非斷非不斷。非始非終。非過去非未來非現在。非陰非不陰。非入非不入。非界非不界。非十二因緣非不十二因緣。如是等法甚深微密。昔所不聞而能得聞。復有不聞。所謂一切外道經書。四毘陀論。毘伽羅論。衛世師論。迦毘羅論。一切呪術。醫方。伎藝。日月薄蝕。星宿運變。圖書讖記。如是等經。初未曾聞祕密之義。今於此經而得知之。復有十一部經。除毘佛略。亦無如是深密之義。今因此經而得知之。善男子。是名不聞而能得聞。聞已利益者。若能聽受是大涅槃經。悉能具知一切方等大乘經典甚深義味。譬如男女於明淨鏡見其色像。了了分明。大涅槃鏡亦復如是。菩薩執之悉得明見大乘經典甚深之義。亦如有人在闇室中執大炬火悉見諸物。大涅槃炬亦復如是。菩薩執之得見大乘深奧之義。亦如日出有千光明悉能照了諸山幽闇。令一切人遠見諸物。是大涅槃清淨慧日亦復如是。照了大乘深邃之處。令二乘人遠見佛道。所以者何。以能聽受是大涅槃微妙

礙三本俱作閡下同

實同作眞

提下同無人字

經故。善男子。若有菩薩摩訶薩。聽受如是大涅槃經。得知一切諸法名字。若能書寫讀誦通利爲他廣說思惟其義。則知一切諸法義理。善男子。其聽受者唯知名字不知其義。若能書寫受持讀誦爲他廣說思惟其義則能知義。復次善男子。聽是經者聞有佛性未能得見。書寫讀誦爲他廣說思惟其義則得見之。聽是經者聞有檀名。未能得見檀波羅蜜。書寫讀誦爲他廣說思惟其義則能得見檀波羅蜜。乃至般若波羅蜜亦復如是。善男子。菩薩摩訶薩若能聽是大涅槃經。則知法知義具二無礙。於諸沙門婆羅門等若天魔梵一切世中。得無所畏開示分別十二部經。演說其義無有差違。不從他聞而能自知。近於阿耨多羅三藐三菩提。善男子。是名聞已能爲利益。斷疑心者。疑有二種。一者疑名。二者疑義。聽是經者斷疑名心。思惟義者斷疑義心。復次善男子。疑有五種。一者疑佛定涅槃不。二者疑佛是常住不。三者疑佛是眞樂不。四者疑佛是眞淨不。五者疑佛是實我不。聽是經者疑佛涅槃則得永斷。書寫讀誦爲他廣說思惟其義四疑永斷。復次善男子。疑有三種。一疑聲聞爲有爲無。二疑緣覺爲有爲無。三疑佛乘爲有爲無。聽是經者如是三疑永滅無餘。書寫讀誦爲他廣說思惟其義。則能了知一切衆生悉有佛性。復次善男子。若有衆生不聞如是大涅槃經疑心甚多。所謂若常無常若樂不樂若淨不淨若我無我若命非命若衆生非衆生若畢竟不畢竟若他世若過世若有若無若苦若非苦若集若非集若道若非道若滅若非滅若法若非法若善若非善若空若非空。聽是經者如是諸疑悉得永斷。復次善男子。若有不聞如是經者。復有種種衆多疑心。所謂色是我耶。受想行識是我耶。眼能見耶我能見耶。乃至識能知耶我能知耶。色受報耶我受報耶。乃至識受報耶我受報耶。色至他世耶我至他世耶。乃至識亦如是。生死之法有始有終耶。無始無終耶。聽是經者如是等疑亦得永斷。復有人疑。一闡提人犯四重禁作五逆罪謗方等經。如是等輩有佛性耶。無佛性耶。聽是經者如是等疑悉得永斷。復有人疑。世間有邊耶。世間無邊耶。有十方世界耶。無十方世界耶。聽是經者如是等疑亦得永斷。是名能斷疑惑之心。慧心正直無邪曲者。心若有疑則所見不正。一切凡夫若不得聞是大涅槃微妙經典所見邪曲。乃至聲聞辟支佛人所見亦曲。云何名爲一切凡夫所見邪曲。於有漏中見常樂我淨。於如來所見無常苦不淨無我。見有衆生壽命知見。計非有想非無想處以爲涅槃。見自在天有八聖道。

邪元明俱作耶○耶三本俱作邪○乘元明俱作成○曰三本俱作名○而浴三本俱作浴之
邏三本俱作羅
到同作至下同
糜同作粲○㮈同作奈○尸下同無那字次同

有見斷見如是等見名爲邪曲。菩薩摩訶薩若得聞是大涅槃經。修行聖行則得斷除如是邪曲。云何名爲聲聞緣覺邪曲見耶。見於菩薩。從兜率下化乘白象降神母胎。父名淨飯母曰摩耶。迦毘羅城處胎滿足十月而生。生未至地帝釋捧接。難陀龍王及婆難陀吐水而浴。摩尼跋陀大鬼神王。執持寶蓋隨後侍立。地神化花以承其足。四方各行滿足七步。至於天廟令諸天像悉起承迎。阿私陀仙抱持占相。既占相已生大悲苦。自傷當終不覩佛興。詣師學書算計射御圖讖伎藝。處在深宮六萬婇女娛樂受樂。出城遊觀至迦毘羅園。道見老人乃至沙門法服而行。還至宮中見諸婇女形體狀貌。猶如枯骨。於有宮殿塚墓無異。厭惡出家夜半踰城。至鬱陀伽阿羅邏等大仙人所。聞說識處及非有想非無想處。既聞是已諦觀是處。是非常苦不淨無我。捨至樹下具修苦行滿足六年。知是苦行不能得成阿耨多羅三藐三菩提。爾時復到阿夷羅跋提河中洗浴。受牧牛女所奉乳糜。受已轉至菩提樹下。破魔波旬得成阿耨多羅三藐三菩提。於波羅㮈爲五比丘初轉法輪。乃至於此拘尸那城入般涅槃。如是等見。是名聲聞緣覺曲見。善男子。菩薩摩訶薩聽受如是大涅槃經。悉得斷除如是等見。若能書寫讀誦通利爲他演說思惟其義。則得正直無邪曲見。善男子。菩薩摩訶薩修行如是大涅槃經。諦知菩薩無量劫來不從兜率降神母胎乃至拘尸那城入般涅槃。是名菩薩摩訶薩正直之見。能知如來深密義者。所謂即是大般涅槃。一切衆生悉有佛性。懺四重禁。除謗法心。盡五逆罪。滅一闡提。然後得成阿耨多羅三藐三菩提。是名甚深祕密之義。復次善男子。云何復名甚深之義。雖知衆生實無有我。而於未來不失業果。雖知五陰於此滅盡。善惡之業終不敗亡。雖有諸業不得作者。雖有至處無有去者。雖有繫縛無受縛者。雖有涅槃亦無滅者。是名甚深祕密之義。爾時光明遍照高貴德王菩薩摩訶薩白佛言。世尊。如我解佛所說聞不聞義。是義不然。何以故。法若有者便應定有。法若無者便應定無。無不應生有不應滅。如其聞者是則爲聞。若不聞者則爲不聞。云何而言聞所不聞。世尊。若不可聞是爲不聞。若已聞者則更不聞。何以故。已得聞故。云何而言聞所不聞。譬如去者到則不去去則不到。亦如生已不生不生不生。得已不得不得不得。聞已不聞不聞不聞亦復如是。世尊。若不聞聞者。一切衆生未有菩提即應有之。未得涅槃亦應得之。未見佛性應見佛性。云何復言十住菩薩雖見佛性未得明了。世尊。若

或下同無有字
青明作清
薩下三本俱無摩訶薩三字
文上同無文殊師利言五字
旬同作延

不聞聞者。如來往昔從誰得聞。若言得聞。何故如來於阿含中復言無師。若不聞不聞。如來得成阿耨多羅三藐三菩提者。一切衆生不聞不聞。亦應得成阿耨多羅三藐三菩提。如來若當不聞如是大涅槃經見佛性者。一切衆生不聞是經亦應得見。世尊。凡是色者或有可見或不可見。聲亦如是或是可聞或不可聞。是大涅槃非色非聲。云何而言可得見聞。世尊。過去已滅則不可聞。未來未至亦不可聞。現在聽時則不名聞。聞已聲滅更不可聞。是大涅槃亦非過去未來現在。若非三世則不可說。若不可說則不可聞。云何而言菩薩修是大涅槃經聞所不聞。爾時世尊讚光明遍照高貴德王菩薩摩訶薩言。善哉善哉善男子。汝今善知一切諸法如幻如焰如乾闥婆城畫水之迹。亦如泡沫芭蕉之樹空無有實。非命非我無有苦樂。如十住菩薩之所知見。時大衆中忽然之頃有大光明。非青見青非黃見黃非赤見赤非白見白非色見色非明見明非見而見。爾時大衆遇斯光已身心快樂。譬如比丘入師子王定。爾時文殊師利菩薩摩訶薩白佛言。世尊。今此光明誰之所放。爾時如來默然不說。迦葉菩薩復問文殊師利。何因緣故有此光明照於大衆。文殊師利默然不答。爾時無邊身菩薩復問迦葉菩薩。今此光明誰之所有。迦葉菩薩默然不說。淨住王子菩薩復問無邊身菩薩。何因緣故是大衆中有此光明。無邊身菩薩默然不說。如是五百菩薩皆亦如是。雖相諮問然無答者。爾時世尊問文殊師利言。文殊師利。何因緣故是大衆中有此光明。文殊師利言世尊。如是光明名爲智慧。智慧者即是常住。常住之法無有因緣。云何佛問何因緣故有是光明。是光明者名大涅槃。大涅槃者則名常住。常住之法不從因緣。云何佛問何因緣故有是光明。是光明者即是如來。如來者即是常住。常住之法不從因緣。云何如來問於因緣。光明者名大慈大悲。大慈大悲者名爲常住。常住之法不從因緣。云何如來問於因緣。光明者即是念佛。念佛者是名常住。常住之法不從因緣。云何如來問於因緣。光明者即是一切聲聞緣覺不共之道。聲聞緣覺不共之道即名常住。常住之法不從因緣。云何如來問於因緣。世尊。亦有因緣。因滅無明則得熾然阿耨多羅三藐三菩提燈。佛言。文殊師利。汝今莫入諸法甚深第一義諦。應以世諦而解說之。文殊師利言。世尊。於此東方過二十恒河沙等世界。有佛世界名曰不動。其佛住處縱廣正等足滿一萬二千由旬。其地七寶無有土石。平正柔軟無諸溝坑。其諸樹木四寶所成。金銀琉璃及

無同作不
遊同作游○中
同作上

愍三本俱作憫
下同○薩下宋
無摩訶薩三字
○經下三本俱
無佛字○皆悉
同作悉皆○薩
下同無摩訶薩
三字下同○蕀
同作棘○熱同
作暑○修同作
脩次同○穀米
同作五穀○純
同作淳

以頗梨。花果茂盛無時不有。若有衆生聞其花香身心安樂。譬如比丘入第三禪。周帀復有三千大河。其水微妙八味具足。若有衆生在中浴者所得喜樂。譬如比丘入第二禪。其河多有種種諸花。優鉢羅花波頭摩花拘物頭花分陀利花。香花大香花微妙香花常花一切衆生無遮護花。其河兩岸亦有衆花。所謂阿提目多伽花占婆花波吒羅花婆師羅花摩利迦花大摩利迦花新摩利迦花須摩那花由提迦花檀𦶟迦利花常花一切衆生無遮護花。底布金沙。有四梯陛金銀琉璃雜色頗梨。多有衆鳥遊集其中。復有無量虎狼師子諸惡鳥獸。其心相視猶如赤子。彼世界中一切無有犯重禁者誹謗正法及一闡提五逆等罪。其土調適無有寒熱飢渴苦惱。無貪欲恚放逸嫉妬。無有日月晝夜時節。猶如第二忉利天上。其土人民等有光明。各各無有憍慢之心。一切悉是菩薩大士。皆得神通具大功德。其心悉皆尊重正法。乘於大乘愛念大乘。貪樂大乘護惜大乘。大慧成就得大摠持。心常憐愍一切衆生。其佛號曰滿月光明如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。隨所住處有所講宣。其土衆生無不得聞。爲琉璃光菩薩摩訶薩。講宣如是大涅槃經佛言。善男子。菩薩摩訶薩若能修行大涅槃經。所不聞者皆悉得聞。彼琉璃光菩薩摩訶薩問滿月光明佛。亦如此問光明遍照高貴德王菩薩摩訶薩所問等無有異。彼滿月光明佛卽告琉璃光菩薩言。善男子。西方去此二十恒河沙佛土。彼有世界名曰娑婆。其土多有山陵堆阜土沙礫石荊蕀惡刺周遍充滿。常有飢渴寒熱苦惱。其土人民不能恭敬沙門婆羅門父母師長。貪著非法欲於非法。修行邪法不信正法。壽命短促有行姦詐。王者治之。王雖有國不知滿足。於他所有生貪利心。興師相伐枉死者衆。王者修行如是非法。四天善神心無歡喜故降災旱。穀米不登人民多病苦惱無量。彼中有佛號釋迦牟尼如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。大悲純厚愍衆生故。於拘尸那城娑羅雙樹間。爲諸大衆敷演如是大涅槃經。彼有菩薩名光明遍照高貴德王。已問斯事如汝無異。佛今答之。汝可速往自當得聞。世尊。彼琉璃光菩薩聞是事已。與八萬四千菩薩摩訶薩欲來至此。故先現瑞以是因緣有此光明。是名因緣亦非因緣。爾時琉璃光菩薩與八萬四千諸菩薩俱。持諸幡蓋香花瓔珞種種伎樂倍勝於前。俱來至此拘尸那城娑羅雙樹間。以己所持供養之具供養於佛。頭面禮足合掌恭敬右

誡宋作戒
渡三本俱作度
想宋作相次同

繞三帀.修敬已畢却坐一面.爾時世尊問彼菩薩.善男子.汝爲到來爲不到來.琉璃光菩薩言世尊.到亦不來.不到亦不來.我觀是義都無有來.世尊.諸行若常亦復不來.若是無常亦無有來.若人見有衆生性者有來不來.我今不見衆生定性.云何當言有來不來.有憍慢者見有去來.無憍慢者則無去來.有取行者見有去來.無取行者則無去來.若見如來畢竟涅槃則有去來.不見如來畢竟涅槃則無去來.不聞佛性則有去來.聞佛性者則無去來.若見聲聞辟支佛人有涅槃者則有去來.不見聲聞辟支佛人有涅槃者則無去來.若見聲聞辟支佛人常樂我淨則有去來.若不見者則無去來.若見如來無常樂我淨則有去來.若見如來常樂我淨則無去來.世尊.且置斯事.欲有所問.唯垂哀愍少見聽許.佛言.善男子.隨意所問今正是時.我當爲汝分別解說.所以者何.諸佛難值如優曇花.法亦如是難可得聞.十二部中方等復難.是故應當專心聽受.時琉璃光菩薩摩訶薩.旣蒙聽許兼被誡勅.卽白佛言.世尊.云何菩薩摩訶薩有能修行大涅槃經聞所不聞.爾時如來讚言.善哉善哉.善男子.汝今欲盡如是大乘大涅槃海.正復值我能善解說.汝今所有疑網毒箭.我爲大醫能善拔出.汝於佛性猶未明了.我有慧炬能爲照明.汝今欲渡生死大河.我能爲汝作大船師.汝於我所生父母想.我亦於汝生赤子心.汝心今者貪正法寶.值我多有能相惠施.諦聽諦聽.善思念之.吾當爲汝分別宣釋.善男子.欲聽法者今正是時.若聞法已當生敬信至心聽受恭敬尊重.於正法所莫求其過.莫念貪欲瞋恚愚癡.莫觀法師種性好惡.旣聞法已莫生憍慢.莫爲恭敬名譽利養.當爲度世甘露法利.亦莫生念.我聽法已先自度身然後度人.先自解身然後解人.先自安身然後安人.先自涅槃然後令人而得涅槃.於佛法僧應生等想.於生死中生大苦想.於大涅槃應生常樂我淨之想.先爲他人然後爲身.當爲大乘莫爲二乘.於一切法當無所住.亦莫專執一切法相.於諸法中莫生貪想.常生知法見法之想.善男子.汝能如是至心聽法.是則名爲聞所不聞.善男子.有不聞聞.有不聞不聞.有聞不聞.有聞聞.善男子.如不生生不生不生生不生生生.如不到到不到不到到不到到.世尊.云何不生生.善男子.安住世諦初出胎時.是名不生生.云何不生不生.善男子.是大涅槃無有生相.是名不生不生.云何生不生.善男子.世諦死時是名生不生.云何生生.善男子.一切凡夫是名生生.何以故.生生不斷故.一切有漏念念生故.是名生生.

牙元明俱作芽下同〇不三本俱作未

不元明俱作未

六同作八〇萬下三本俱無夾註

四住菩薩名生不生。何以故。生自在故是名生不生。善男子。是名內法。云何外法。未生生。未生未生。生未生。生生。善男子。譬如種子未生牙時。得四大和合人功作業然後乃生。是名未生生。云何未生未生。譬如敗種及未遇緣。如是等輩名未生未生。云何生未生。如牙生已而不增長。是名生未生。云何生生。如牙增長。若生不生則無增長如是一切有漏是名外法生生。琉璃光菩薩摩訶薩白佛言。世尊。有漏之法若有生者。爲是常耶是無常乎。生若是常有漏之法則無有生。生若無常則有漏是常。世尊。若生能自生生無自性。若能生他以何因緣不生無漏。世尊。若未生時有生者。云何於今乃名爲生。若未生時無生者。何故不說虛空爲生。佛言。善哉善哉。善男子。不生生不可說。生生亦不可說。生不生亦不可說。不生生亦不可說。不生不生亦不可說。生亦不可說。不生亦不可說。有因緣故亦可得說。云何不生生不可說。不生名爲生云何可說。何以故。以其生故。云何生生不可說。生生故生生生故不生亦不可說。云何生不生不可說。生即名爲生。生不自生故不可說。云何不生。不生不可說。不生者名爲涅槃。涅槃不生故不可說。何以故。以修道得故。云何生亦不可說。以生無故。云何不生不可說。以有得故。云何有因緣故亦可得說。十因緣法爲生作因。以是義故亦可得說。善男子。汝今莫入甚深空定。何以故。大衆鈍故。善男子。有爲之法生亦是常。以住無常生亦無常。住亦是常。以生生故住亦無常。異亦是常。以法無常異亦無常。壞亦是常。以本無今有故壞亦無常。善男子。以性故生住異壞皆悉是常。念念滅故。不可說常。是大涅槃能斷滅故。故名無常。善男子。有漏之法未生之時。已有生性故生能生。無漏之法本無生性。是故生不能生。如火有本性遇緣則發。眼有見性因色因明因心故見。衆生生法亦復如是。由本有性遇業因緣父母和合則便有生。爾時琉璃光菩薩摩訶薩及八萬四千菩薩摩訶薩聞是法已。踊在虛空高七多羅樹。恭敬合掌而白佛言。世尊。我蒙如來慇懃教誨。因大涅槃始得悟解開所不開。亦令八萬四千菩薩深解諸法不生生等。世尊。我今已解斷諸疑網。然此會中有一菩薩名曰無畏。復欲諮稟唯垂聽許。爾時世尊告無畏菩薩。善男子。隨意問難。吾當爲汝分別解說。爾時無畏菩薩與六萬(一本云與八萬)四千諸菩薩等。俱從座起更整衣服。長跪合掌而白佛言。世尊。此土衆生當造何業而得生彼不動世界。其土菩薩云何而得智慧成就。人中象王有大威德。具修諸行利智捷疾聞則能解。爾時世尊即說偈言。

坊明作房

殖菓三本倶作植果

菓三本倶作果下同〇於佛物同作佛財供

先同作上〇修元明倶作脩

---

不害衆生命　堅持諸禁戒　受佛微妙教　則生不動國　不奪他人財　常施惠一切　造招提僧坊
則生不動國　不犯他婦女　自妻不非時　施持戒臥具　則生不動國　不爲自他故　求利及恐怖
愼口不妄語　則生不動國　莫壞善知識　遠離惡眷屬　口常和合語　則生不動國　如諸菩薩等
常離於惡口　所說人樂聞　則生不動國　乃至於戲笑　不說非時語　謹愼常時語　則生不動國
見他得利養　常生歡喜心　不起嫉妬結　則生不動國　不惱於衆生　常生於慈心　不生方便惡
則生不動國　邪見言無施　父母及去來　不起如是見　則生不動國　曠路作好井　種殖菓樹林
常施乞者食　則生不動國　若於佛法僧　供養一香燈　乃至獻一華　則生不動國　若爲恐怖故
利養及福德　書是經一偈　則生不動國　若爲悕利福　能於一日中　讀誦是經典　則生不動國
若爲無上道　一日一夜中　受持八戒齋　則生不動國　不與犯重禁　同共一處住　訶謗方等者
則生不動國　若能施病者　乃至於一菓　歡喜而瞻視　則生不動國　不犯僧鬘物　善守於佛物
塗掃佛僧地　則生不動國　造像若佛塔　猶如大拇指　常生歡喜心　則生不動國　若爲是經典
自身及財寶　施於說法者　則生不動國　若能聽書寫　受持及讀誦　諸佛祕密藏　則生不動國

爾時無畏菩薩摩訶薩白佛言。世尊。我今已知所造業緣得生彼國。是光明遍照高貴德王菩薩摩訶薩。普爲憐愍一切衆生。先所諮問。如來若說則能利益安樂人天阿修羅乾闥婆迦樓羅緊那羅摩睺羅伽等。爾時世尊卽告光明遍照高貴德王菩薩。善哉善哉。善男子。汝今於此當至心聽。吾當爲汝分別解說。有因緣故未到不到。有因緣故不到到。有因緣故到不到。有因緣故到到。何因緣故未到不到。善男子。夫不到者。是大涅槃凡夫未到。以有貪欲瞋恚愚癡故。身業口業不淸淨故。及受一切不淨物故。犯四重故。謗方等故。一闡提故。五逆罪故。以是義故未到不到。善男子。何因緣故不到到。不到者名大涅槃。何義故到。永斷貪欲瞋恚愚癡身口惡故。不受一切不淨物故。不犯四重故。不謗方等經故。不作一闡提故。不作五逆罪故。以是義故名不到到。須陀洹者八萬劫到。斯陀含者六萬劫到。阿那含者四萬劫到。阿羅漢者二萬劫到。辟支佛者十千劫到。以是義故名不到到。善男子。何

是三本俱作名
常元明俱作平
薩下三本俱無摩訶薩言四字
熏同作勳
了同作燎

因緣故名到不到。到者名爲二十五有。一切衆生常爲無量煩惱諸結之所覆蔽。往來不離猶如輪轉。是名爲到。聲聞緣覺及諸菩薩已得永離。故名不到。爲欲化度諸衆生故示現在中。亦名爲到。善男子。何因緣故名爲到到。到者卽是二十五有。一切凡夫須陀洹乃至阿那含煩惱因緣故名到到。善男子。聞所不聞亦復如是。有不聞聞。有不聞有聞。有聞不聞。有聞聞。云何不聞聞。善男子。不聞者名大涅槃。何故不聞。非有爲故。非音聲故。不可說故。云何亦聞。得聞名故。所謂常樂我淨。以是義故名不聞聞。爾時光明遍照高貴德王菩薩摩訶薩白佛言。世尊。如佛所說。大涅槃者不可得聞。云何復言常樂我淨而可得聞。何以故。世尊。斷煩惱者名得涅槃。若未斷者名爲不得。以是義故涅槃之性本無今有。若世間法本無今有則名無常。譬如瓶等本無今有。已有還無故名無常。涅槃若爾云何說言常樂我淨。復次世尊。凡因莊嚴而得成者。悉名無常。涅槃若爾應是無常。何等因緣。所謂三十七品六波羅蜜四無量心觀於骨相阿那波那六念處破析六大。如是等法皆是成就涅槃因緣故名無常。復次世尊。有名無常。若涅槃是有亦應無常。如佛昔於阿含中說。聲聞緣覺諸佛世尊皆有涅槃。以是義故名爲無常。復次世尊。可見之法名爲無常。如佛先說。見涅槃者則得斷除一切煩惱。復次世尊。譬如虛空於諸衆生等無障礙故名無常。若使涅槃是常等者。何故衆生有得不得。涅槃若爾於諸衆生不平等者則不名常。世尊。譬如百人共有一怨若害此怨則多人受樂。若使涅槃是平等法。一人得時應多人得。一人斷結應多人亦斷。若不如是云何名常。譬如有人恭敬供養尊重讚歎國王王子父母師長則得利養。是不名常。涅槃亦爾不名爲常。何以故。如佛昔於阿含經中告阿難言。若有人能恭敬涅槃。則得斷結受無量樂。以是義故不名爲常。世尊。若涅槃中有常樂我淨名者。不名爲常。如其無者云何可說。爾時世尊告光明遍照高貴德王菩薩摩訶薩言。涅槃之體非本無今有。若涅槃體本無今有者。則非無漏常住之法。有佛無佛性相常住。以諸衆生煩惱覆故不見涅槃。便謂爲無。菩薩摩訶薩以戒定慧熏修其心。斷煩惱已便得見之。當知涅槃是常住法非本無今有。是故爲常。善男子。如闇室中井種種七寶。人亦知有闇故不見。有智之人善知方便。然大明燈持往照了悉得見之。是人於此終不生念。水及七寶本無今有。涅槃亦爾本自有之非適今也。煩惱闇故衆生不見。大智如來以善方便燃智慧燈。令諸菩薩

得見涅槃常樂我淨。是故智者於此涅槃不應說言本無今有。善男子。汝言因莊嚴故得成涅槃應無常者。是亦不然。何以故。善男子。涅槃之體非生非出非實非虛。非作業生。非是有漏有爲之法。非聞非見。非墮非死。非別異相亦非同相。非往非還非去來今。非一非多非長非短。非圓非方非尖非斜。非有相非無相。非名非色。非因非果。非我我所。以是義故涅槃是常恒不變易。是以無量阿僧祇劫修集善法以自莊嚴然後乃見。善男子。譬如地下有八味水一切衆生而不能得。有智之人施功穿掘則便得之。涅槃亦爾。譬如盲人不見日月良醫療之則便得見。而是日月非是本無今有。涅槃亦爾。先自有之非適今也。善男子。如人有罪繫之囹圄久乃得出還家得見父母兄弟妻子眷屬。涅槃亦爾。善男子。汝言因緣故涅槃之法應無常者。是亦不然。何以故。善男子。因有五種。何等爲五。一者生因。二者和合因。三者住因。四者增長因。五者遠因。云何生因。生因者。卽是業煩惱等及外諸草木子。是名生因。云何和合因。如善與善心和合。不善與不善心和合。無記與無記心和合。是名和合因。云何住因。如下有柱屋則不墮。山河樹木因大地故而得住立。內有四大無量煩惱衆生得住。是名住因。云何增長因。因緣衣服飲食等故令衆生增長。如外種子火所不燒鳥所不食則得增長。如諸沙門婆羅門等依因和上善知識等而得增長。如因父母子得增長。是名增長因。云何遠因。譬如因呪鬼不能害毒不能中。依憑國王無有盜賊。如芽依因地水火風等。如水攢及人爲酥遠因。如明色等爲識遠因。父母精血爲衆生遠因。如時節等悉名遠因。善男子。涅槃之體非是如是五因所成。云何當言是無常因。復次善男子。復有二因。一者作因。二者了因。如陶師輪繩。是名作因。如燈燭等照闇中物。是名了因。善男子。大涅槃者不從作因而有。唯從了因。了因者。所謂三十七助道法六波羅蜜。是名了因。善男子。布施者是涅槃因非大涅槃因。檀波羅蜜乃得名爲大涅槃因。三十七品是涅槃因非大涅槃因。無量無邊阿僧祇劫菩提法乃得名爲大涅槃因。爾時光明遍照高貴德王菩薩摩訶薩白佛言。世尊。云何布施不得名爲檀波羅蜜。云何布施而得名之檀波羅蜜。乃至般若云何不得名爲般若波羅蜜。云何得名爲般若波羅蜜。云何名涅槃。云何名大涅槃。佛言。善男子。菩薩摩訶薩修行方等大般涅槃。不聞布施不見布施。不聞檀波羅蜜不見檀波羅蜜。乃至不聞般若不見般若。不聞般若波羅蜜不見般若波羅蜜。不聞涅槃不見涅

斜乃至相七字同作邪非相非想五字○集同作習

是下同無本無二字

芽三本俱作牙○攢元明俱作鑽○精血三本俱作遺體○是如是同作如是等

量下同無無邊二字○之同作爲○名下同無爲字次同

合明作含
炎三本俱作燄〇虛空同作空虛
施上同有布字次同
勇宋明俱作踊元作涌〇如下三本俱無佛字
罪同作禁

槃.不聞大涅槃不見大涅槃.菩薩摩訶薩修大涅槃知見法界.解了實相空無所有.無有和合覺知之相.得無漏相無所作相.如幻化相熱時炎相乾闥婆城虛空之相.菩薩爾時得如是相.無貪恚癡不聞不見.是名菩薩摩訶薩眞實之相安住實相.菩薩摩訶薩自知.此是檀此是檀波羅蜜.乃至此是般若此是般若波羅蜜.此是涅槃此是大涅槃.善男子.云何是施非波羅蜜.見有乞者然後乃與.是名爲施非波羅蜜.若無乞者開心自施.是則名爲檀波羅蜜.若時時施是名爲施非波羅蜜.若修常施是則名爲檀波羅蜜.若施他已還生悔心.是名爲施非波羅蜜.施已不悔是則名爲檀波羅蜜.菩薩摩訶薩於財物中生四怖心.王賊水火.歡喜施與是則名爲檀波羅蜜.若望報施是名爲施非波羅蜜.施不望報是則名爲檀波羅蜜.若爲恐怖名聞利養家法相續天上五欲.爲憍慢故.爲勝慢故.爲知識故.爲來報故.如市易法.善男子.如人種樹爲得蔭涼爲得花菓及以材木.若人修行如是等施.是名爲施非波羅蜜.菩薩摩訶薩修行如是大涅槃者.不見施者受者財物.不見時節.不見福田及非福田.不見因不見緣.不見果報.不見作者.不見受者.不見多不見少.不見淨不見不淨.不輕受者己身財物.不見見者不見不見者.不計己他.唯爲方等大般涅槃常住法故修行布施.爲利一切諸衆生故而行布施.爲斷一切衆生煩惱故行於施.爲諸衆生不見受者施者財物故行於施.善男子.譬如有人墮大海水抱持死屍則得度脫.菩薩摩訶薩修大涅槃.行布施時亦復如是如彼死屍.善男子.譬如有人閉在深獄門戶堅牢唯有廁孔便從中出到無礙處.菩薩摩訶薩修大涅槃.行布施時亦復如是.善男子.譬如貴人恐怖急厄更無恃怙依旃陀羅.菩薩摩訶薩修大涅槃.行於布施亦復如是.善男子.譬如病人爲除病苦得安樂故服食不淨.菩薩摩訶薩修大涅槃.行於布施亦復如是.善男子.如婆羅門値穀勇貴爲壽命故食噉狗肉.菩薩摩訶薩修大涅槃.行於布施亦復如是.善男子.大涅槃中如是之事.從無量劫來不聞而聞.尸羅尸羅波羅蜜.乃至般若般若波羅蜜.如佛雜花經中廣說.善男子.云何菩薩摩訶薩修大涅槃不聞而聞.十二部經其義深邃昔來不聞.今因是經得具足聞.先雖得聞唯聞名字.而今於此大涅槃經乃得聞義.聲聞緣覺唯聞十二部經名字不聞其義.今於此經具足得聞.是名不聞而聞.善男子.一切聲聞緣覺經中.不曾聞佛有常樂我淨不畢竟滅.三寶佛性無差別相.犯四重罪謗方等經作五逆

罪及一闡提悉有佛性.今於此經而得聞之.是名不聞而聞



大般涅槃經卷第十九

品目之上明有第二十二四字下四品同○光上三本俱無爾時二字○薩下同無摩訶薩三字下同

從同作得

愍三本俱作憫

# 大般涅槃經卷第二十

〔麗多〕〔宋輔〕〔元公〕〔明在〕

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

## 高貴德王菩薩品之二

爾時光明遍照高貴德王菩薩摩訶薩白佛言。世尊。若犯重禁謗方等經作五逆罪一闡提等有佛性者。是等云何復墮地獄。世尊。若使是等有佛性者。云何復言無常樂我淨。世尊。若斷善根名一闡提者。斷善根時所有佛性云何不斷。佛性若斷云何復言常樂我淨。如其不斷何故名為一闡提耶。世尊。犯四重禁名為不定。謗方等經作五逆罪。及一闡提悉名不定。如是等輩若決定者。云何得成阿耨多羅三藐三菩提。從須陀洹乃至辟支佛亦名不定。若須陀洹至辟支佛是決定者。亦不應成阿耨多羅三藐三菩提。世尊。若犯四重不決定者。須陀洹乃至辟支佛亦不決定。如是不定諸佛如來亦復不定。若佛不定涅槃體性亦復不定。至一切法亦復不定。云何不定。若一闡提除一闡提則成佛道。諸佛如來亦應如是入涅槃已。亦應還出不入涅槃。若如是者涅槃之性則為不定。不決定故。當知無有常樂我淨。云何說言一闡提等當得涅槃。爾時世尊告光明遍照高貴德王菩薩摩訶薩言。善哉善哉。善男子。為欲利益無量眾生令得安樂。憐愍慈念諸世間故。為欲增長發菩提心諸菩薩故。作如是問。善男子。汝已親近過去無量諸佛世尊。於諸佛所種諸善根。久已成就菩提功德。降伏眾魔令其退散。已教無量無邊眾生。悉令得至阿耨多羅三藐三菩提。久已通達諸佛如來所有甚深祕密之藏。已問過去無量無邊恒河沙等諸佛世尊如是甚深微密之義。我都不見一切世間若人若天沙門婆羅門若魔若梵有能諮問如來是義。今當誠心諦聽諦聽。吾當為汝分別演說。善男子。一闡提者亦不決定。若決定者是一闡提。終不能得阿耨多羅三藐三菩提。以不決定是故能得。如汝所言。佛性不斷云何一闡提斷善根者。善男子。善根有二種。一者內。二者

而同作於
實明作中
澗三本俱作磵
見同作是
尸下三本俱無那字次同〇修同作脩
儭宋作櫬元明俱作櫬〇二下明有者字〇畢三本俱作必

外佛性非內非外。以是義故佛性不斷。復有二種。一者有漏。二者無漏。佛性非有漏非無漏。是故不斷。復有二種。一者常。二者無常。佛性非常非無常。是故不斷。若是斷者則應還得。若不還得則名不斷。若斷已得名一闡提。犯四重者亦是不定。若決定者犯四重禁終不能得阿耨多羅三藐三菩提。謗方等經亦復不定。若決定者謗正法人終不能得阿耨多羅三藐三菩提。作五逆罪亦復不定。若決定者五逆之人終不能得阿耨多羅三藐三菩提。色與色相二俱不定。香味觸相生相至無明相陰入界相二十五有相。四生乃至一切諸法皆亦不定。善男子。譬如幻師在大衆中。化作四兵車步象馬。作諸瓔珞嚴身之具城邑聚落山林樹木泉池河井。而彼衆中有諸小兒無有智慧。覩見之時悉以爲實。其中智人知其虛誑。以幻力故惑人眼目。善男子。一切凡夫乃至聲聞辟支佛等。於一切法見有定相亦復如是諸佛菩薩於一切法不見定相。善男子。譬如小兒於盛夏月見熱時焰謂之爲水。有智之人於此熱焰終不生於實水之想。但是虛焰誑人眼目非實是水。一切凡夫聲聞緣覺見一切法亦復如是悉謂是實。諸佛菩薩於一切法不見定相。善男子。譬如山澗因聲有響小兒聞之謂是實聲。有智之人解無定實。但有聲相誑於耳識。善男子。一切凡夫聲聞緣覺於一切法亦復如是見有定相。諸菩薩等解了諸法悉無定相。見無常相空寂等相無生滅相。以是義故。菩薩摩訶薩見一切法是無常相。善男子。亦有定相。云何爲定。常樂我淨。在何處耶。所謂涅槃。善男子。須陀洹果亦復不定。不決定故經八萬劫得阿耨多羅三藐三菩提心。斯陀含果亦復不定。不決定故經六萬劫得阿耨多羅三藐三菩提心。阿那含果亦復不定。不決定故經四萬劫得阿耨多羅三藐三菩提心。阿羅漢果亦復不定。不決定故經二萬劫得阿耨多羅三藐三菩提心。辟支佛道亦復不定。不決定故經十千劫得阿耨多羅三藐三菩提心。善男子。如來今於拘尸那城娑羅雙樹間。示現倚臥師子之牀欲入涅槃。令諸未得阿羅漢果衆弟子等及諸力士生大憂苦。亦令天人阿修羅乾闥婆迦樓羅緊那羅摩睺羅伽等大設供養。欲使諸人以千端氎纏裹其身七寶爲棺盛滿香油積諸香木以火焚之。唯除二端不可得燒。一者儭身。二最在外。爲諸衆生分散舍利以爲八分。一切所有聲聞弟子。咸言如來入於涅槃。當知如來亦不畢定入於涅槃。何以故。如來常住不變易故。以是義故如來涅槃亦復不定。善男子。當知如來亦復不定。如來非天。何

天下同無者字

義天也同作是義天

衆上同無諸字

遠三本俱作捨

已宋作以○師下三本俱無羅字

以故。有四種天。一者世間天。二者生天。三者淨天。四者義天。世間天者如諸國王。生天者從四天王乃至非有想非無想天。淨天者從須陀洹至辟支佛。義天者十住菩薩摩訶薩等。以何義故十住菩薩名爲義天。以能善解諸法義故。云何爲義。見一切法是空義故。善男子。如來非王亦非四天。乃至非有想非無想天從須陀洹至辟支佛十住菩薩。以是義故如來非天。然諸衆生亦復稱佛爲天中天。是故如來非天非非天。非人非非人。非鬼非非鬼。非地獄畜生餓鬼非非地獄畜生餓鬼。非衆生非非衆生。非法非非法。非色非非色。非長非非長。非短非非短。非相非非相。非心非非心。非有漏非無漏。非有爲非無爲。非常非無常。非幻非非幻。非名非非名。非定非非定。非有非無。非說非非說。非如來非不如來。以是義故如來不定。善男子。何故如來不名世天。世天者卽是諸王。如來久於無量劫中已捨王位。是故非王。非非王者如來生於迦毘羅城淨飯王家。是故非非王。非生天者如來久已離諸有故。是故非生天。非非生天。何以故。昇兜率天下閻浮提故。是故如來非非生天。亦非淨天。何以故。如來非是須陀洹。乃至非辟支佛。是故如來非是淨天。非非淨天。何以故。世間八法所不能染。猶如蓮花不受塵水。是故如來非非淨天。亦非義天。何以故。如來非是十住菩薩故。是故如來非義天也。非非義天。何以故。如來常修十八空義故。是故如來非非義天。如來非人。何以故。如來久於無量劫中離人有故。是故非人。亦非非人。何以故。生於迦毘羅城故。是故非非人。如來非鬼。何以故。不害一切諸衆生故。是故非鬼。亦非非鬼。何以故。亦以鬼像化衆生故。是故非非鬼。如來亦非地獄畜生餓鬼。何以故。如來久離諸惡業故。是故非地獄畜生餓鬼。亦非非地獄畜生餓鬼。何以故。如來亦復現受三惡諸趣之身化衆生故。是故非非地獄畜生餓鬼。亦非衆生。何以故。久已遠離衆生性故。是故如來非衆生。亦非非衆生。何以故。或時演說衆生相故。是故如來非非衆生。如來非法。何以故。諸法各各有別異相。如來不爾唯有一相。是故非法。亦非非法。何以故。如來法界故。是故非非法。如來非色。何以故。十色入所不攝故。是故非色。亦非非色。何以故。身有三十二相八十種好故。是故非非色。如來非長。何以故。斷諸色故。是故非長。亦非非長。何以故。一切世間無有能見頂髻相故。是故非非長。如來非短。何以故。久已遠離憍慢結故。是故非短。亦非非短。何以故。爲瞿師羅長者示三尺身故。是故非非短。如來非相。何以故。久已遠離諸相相故。是

四下明有威字

性三本俱作姓下同

礙同作閡

女上同無童字

故非相。亦非非相。何以故。善知諸相故。是故非非相。如來非心。何以故。虛空相故。是故非心。亦非非心。何以故。有十力心法故。亦能知他衆生心故。是故非非心。如來非有爲。何以故。常樂我淨故。是故非有爲。亦非無爲。何以故。有來去坐臥示現涅槃故。是故非無爲。如來非常。何以故。身有分故。是故非常。云何非常。以有知故。常法無知猶如虛空。如來有知。是故非常。云何非常。有言說故。常法無言亦如虛空。如來有言。是故無常。有姓氏故名曰無常。無姓之法乃名爲常。虛空常故無有姓氏。如來有姓姓瞿曇氏。是故無常。有父母故名曰無常。無父母者乃名曰常。虛空常故無有父母。佛有父母是故無常。有四威儀名曰無常。無四威儀乃名曰常。虛空常故無四威儀。佛有四儀是故無常。常住之法無有方所。虛空常故無有方所。如來出在東天竺地住舍婆提或王舍城。是故無常。以是義故如來非常。亦非非常。何以故。生永斷故。有生之法名曰無常。無生之法乃名爲常。如來無生。是故爲常。常法無性。有性之法名曰無常。如來無生無性。無生無性故常。有常之法遍一切處。猶如虛空無處不有。如來亦爾遍一切處。是故爲常。無常之法或言此有或言彼無。如來不爾。不可說言是處有彼處無。是故爲常。無常之法有時是有有時是無。如來不爾。有時是有有時是無。是故爲常。常住之法無名無色。虛空常故無名無色。如來亦爾無名無色。是故爲常。常住之法無因無果。虛空常故無因無果。如來亦爾無因無果。是故爲常。常住之法三世不攝。如來亦爾三世不攝。是故爲常。如來非幻。何以故。永斷一切虛誑心故。是故非幻。亦非非幻。何以故。如來或時分此一身爲無量身。無量之身復爲一身。山壁直過無有障礙。履水如地入地如水。行空如地。身出煙焰如大火聚。雲雷震動其聲可畏。或爲城邑聚落舍宅山川樹木。或作大身或作小身。男身女身童男童女身。是故如來亦非非幻。如來非定。何以故。如來於此拘尸那城娑羅雙樹間。示現入於般涅槃故。是故非定。亦非非定。何以故。常樂我淨故。是故如來亦非非定。如來非有漏。何以故。斷三漏故。故非有漏。三漏者欲界一切煩惱除無明。是名欲漏。色無色界一切煩惱除無明。是名有漏。三界無明名無明漏。如來永斷是故非漏。復次一切凡夫不見有漏。云何凡夫不見有漏。一切凡夫於未來世悉有疑心。未來世中當得身耶不得身耶。過去世中身本有耶爲本無耶。現在世中是身有耶是身無耶。若有我者。是色耶。非色耶。色非色耶。非色非非色耶。想耶。非想耶。想非想耶。非想

陀下三本俱無羅字

佷㑌同作很戾

非非想耶。是身屬他耶。不屬他耶。屬不屬耶。非屬非不屬耶。有命無身耶。有身無命耶。有身有命耶。無身無命耶。身之與命有常耶。無常耶。常無常耶。非常非無常耶。身之與命自在作耶。時節作耶。無因作耶。世性作耶。微塵作耶。法非法作耶。士夫作耶。煩惱作耶。父母作耶。我住心耶。住眼中耶。遍滿身中耶。從何來耶。去何至耶。誰生耶。誰死耶。我於過去是婆羅門姓耶。是刹利姓耶。是毘舍姓耶。是首陀羅姓耶。當於未來得何姓耶。我此身者過去之時。是男身耶。是女身耶。畜生身耶。若我殺生。當有罪耶。當無罪耶。乃至飲酒。當有罪耶。當無罪耶。我自作耶。爲他作耶。我受報耶。身受報耶。如是疑見無量煩惱覆衆生心。因是疑見生六種心。決定有我。決定無我。我見我。我見無我。無我見我。我作我受我知。是名邪見。如來永拔如是無量見漏根本。是故非漏。善男子。菩薩摩訶薩於大涅槃修聖行者。亦得永斷如是諸漏。諸佛如來常修聖行。是故無漏。善男子。凡夫不能善攝五根則有三漏。爲惡所牽至不善處。善男子。譬如惡馬其性佷㑌能令乘者至險惡處。不能善攝此五根者亦復如是。令人遠離涅槃善道至諸惡處。譬如惡象心未調順。有人乘之不隨意去。遠離城邑至空曠處。不能善攝此五根者亦復如是。將人遠離涅槃城邑。至於生死曠野之處。善男子。譬如佞臣教王作惡。五根佞臣亦復如是。常教衆生造無量惡。善男子。譬如惡子不受師長父母教勅則無惡不造。不調五根亦復如是。不受師長善言教勅無惡不造。善男子。凡夫之人不攝五根。常爲地獄畜生餓鬼之所賊害。亦如怨盜害及善人。善男子。凡夫之人不攝五根馳騁五塵。譬如牧牛不善守護犯人苗稼。凡夫之人不攝五根。常在諸有多受苦惱。善男子。菩薩摩訶薩修大涅槃行聖行時。常能善調守攝五根。怖畏貪欲瞋恚愚癡憍慢嫉妬。爲得一切諸善法故。善男子。若能善守此五根者則能攝心。若能攝心則攝五根。譬如有人擁護於王則護國土。護國土者則護於王。菩薩摩訶薩亦復如是。若得聞是大涅槃經則得智慧。得智慧故則得專念。五根若散念則能止。何以故。是念慧故。善男子。如善牧者設牛東西噉他苗稼則便遮止不令犯暴。菩薩摩訶薩亦復如是。念慧因緣故守攝五根不令馳散。菩薩摩訶薩有念慧者。不見我相不見我所相。不見衆生及所受用。見一切法同法性相。生於土石瓦礫之相。譬如屋舍從衆緣生無有定性。見諸衆生四大五陰之所成立。推無定性。無定性故菩薩於中不生貪著。一切凡夫見有衆生故起煩惱。菩薩摩訶薩

篋三本俱作炭○菓同作果○鳥同作鳥○次下同無善男子三字○目明作日○以爲三本俱作爲寸○摶宋元俱作丸明作凡

衆三本俱作界

良三本俱作明

却後七同作後二十○淨元明俱作得

修大涅槃有念慧故。於諸衆生不生貪著。復次菩薩摩訶薩修大涅槃經者。不著衆生相作種種法相。善男子。譬如畫師以衆雜彩畫作衆像。若男若女若牛若馬。凡夫無知見之則生男女等相。畫師了知無有男女。菩薩摩訶薩亦復如是。於法異相觀於一相。終不生於衆生之相。何以故。有念慧故。菩薩摩訶薩修大涅槃。或時覩見端正女人。終不生於貪著之心。何以故。善觀相故。善男子。菩薩摩訶薩知五欲法無有歡樂不得暫停。如犬嚙枯骨。如人持火逆風而行。如篋毒蛇夢中所得路邊菓樹多人所擲。亦如段肉衆鳥競逐。如水上泡畫水之迹。如織經盡。如囚趣市。猶如假借勢不得久。觀欲如是多諸過惡。復次善男子。菩薩摩訶薩觀諸衆生。爲色香味觸因緣故。從昔無數無量劫來常受苦惱。一一衆生一劫之中。所積身骨如王舍城毘富羅山。所飲乳汁如四海水。身所出血復多於是。父母兄弟妻子眷屬。命終哭泣所出目淚多四大海。盡地草木斬以爲籌。以數父母亦不能盡無量劫來或在地獄畜生餓鬼。所受行苦不可稱計。摶此大地猶如棗等易可窮極。生死無量不可得盡。菩薩摩訶薩如是深觀一切衆生欲因緣故受苦無量。菩薩以是生死行苦故不失念慧。善男子。譬如世間有諸大衆滿二十五里。王勅一臣持一油鉢。經由中過莫令傾覆。若棄一渧當斷汝命。復遣一人拔刀在後隨而怖之。臣受王教盡心堅持。經歷爾所大衆之中。雖見可意五邪欲等。心常念言。我若放逸著彼邪欲。當棄所持命不全濟。是人以是怖因緣故。乃至不棄一渧之油。菩薩摩訶薩亦復如是。於生死中不失念慧。以不失故雖見五欲心不貪著。若見淨色不生色相。唯觀苦相。乃至識相亦復如是。不作生相不作滅相。不作因相觀和合相。菩薩爾時五根清淨。根清淨故護根戒具。一切凡夫五根不淨不能善持。名曰根漏。菩薩永斷是故無漏。如來拔出永斷根本。是故非漏。復次善男子。復有離漏。菩薩摩訶薩欲爲無上甘露佛果故離於惡漏。云何爲離。若能修行大涅槃經書寫受持讀誦解說思惟其義。是名爲離。何以故。善男子。我都不見十二部經能離惡漏如此方等大涅槃經。善男子。譬如良師教諸弟子。諸弟子中有受敎者心不造惡。菩薩摩訶薩修大涅槃微妙經典。亦復如是心不造惡。善男子。譬如世間有善呪術。若有一聞却後七年不爲一切毒藥所中。蛇不能螫。若有誦者乃至命盡無有衆惡。善男子。是大涅槃亦復如是。若有衆生一經耳者。却後七劫不墮惡道。若有書寫讀誦解說思惟其義。必得阿耨多羅三藐三

槃下明有經字

施下三本俱無之物二字〇天像同作諸天

延同作旬如同作若

其心同作心中〇欲自同作周行〇便同作復〇能同作者〇中同作大〇我同作郎、假同作惠〇當許同作聽汝

有明作能

菩提。淨見佛性如彼聖王得甘露味。善男子。是大涅槃有如是等無量功德。善男子。若有人能書寫是經。讀誦解說爲他敷演思惟其義。當知是人眞我弟子善受我敎。是我所見我之所念。是人諦知我不涅槃。隨如是人所住之處若城邑聚落山林曠野房舍田宅樓閣殿堂。我亦在中常住不移。我於是人常作受施。或作比丘比丘尼優婆塞優婆夷婆羅門梵志貧窮乞人。云何當令是人得知如來受其所施之物。善男子。是人或於夜臥夢中夢見佛像。或見天像沙門之像國主聖王師子王像蓮花形像優曇花像。或見大山。或大海水。或見日月。或見白象及白馬像。或見父母得花得菓金銀琉璃頗梨等寶五種牛味。爾時當知即是如來受其所施。寤已喜樂尋得種種所須之物。心不念惡樂修善法。善男子。是大涅槃悉能成就如是無量阿僧祇等不可思議無邊功德。善男子。汝今應當信受我語。若有善男子善女人。欲見我者欲恭敬我。欲同法性而見於我。欲得空定。欲見實相。欲得修習首楞嚴定師子王定。欲破八魔。八魔者。所謂四魔無常無樂無我無淨。欲得人中天上樂者。見有受持大涅槃經書寫讀誦爲他解說思惟義者。當往親近依附諮受供養恭敬尊重讚歎。爲洗手足布置牀席四事供給令無所乏。若從遠來應十由延路次奉迎。爲是經故所重之物應以奉獻。如其無者應自賣身。何以故。是經難遇過優曇花。善男子。我念過去無量無邊那由他劫。爾時世界名曰娑婆。有佛世尊號釋迦牟尼如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。爲諸大衆宣說如是大涅槃經。我於爾時從善友所。轉聞彼佛當爲大衆說大涅槃。我聞是已其心歡喜。欲設供養居貧無物。欲自賣身薄福不售。即欲還家路見一人。而便語言。吾欲賣身君能買不。其人答言。我家作業人無堪者。汝設能爲我當買汝。我即問言。有何作業人無堪能。其人答言。吾有惡病良醫處藥。應當日服人肉三兩。卿若能以身肉三兩日日見給。便當與汝金錢五枚。我時聞已心中歡喜。我復語言。汝與我錢假我七日。須我事訖便還相就。其人答言。七日不可。審能爾者當許一日。善男子。我於爾時即取其錢。還至佛所頭面禮足。盡其所有而以奉獻。然後誠心聽受是經。我時闇鈍雖得聞經。唯能受持一偈文句

如來證涅槃　永斷於生死　若有至心聽　常得無量樂

洄澓宋作回復

長三本俱作者

樂我同作我樂

渡同作度下同

〇差同作蠚

怖懼同作恐怖

受是偈已。卽便還至彼病人家。善男子。我時雖復日日與三兩肉。以念偈因緣故不以爲痛。日日不廢足滿一月善男子。以是因緣其病得差。我身平復亦無瘡痍。我時見身具足完具。卽發阿耨多羅三藐三菩提心。一偈之力尙能如是。何況具足受持讀誦。我見此經有如是利。復倍發心。願於未來成得佛道。字釋迦牟尼。善男子。以是一偈因緣力故。令我今日於大衆中爲諸天人具足宣說。善男子。以是因緣是大涅槃不可思議。成就無量無邊功德。乃是諸佛如來甚深祕密之藏。以是義故。能受持者斷離惡漏。所謂惡者惡象惡馬惡牛惡狗毒蛇住處。惡刺土地懸崖險岸暴水洄澓惡人惡國惡城惡舍惡知識等。如是等輩。若作漏因菩薩卽離。若不能作則不遠離。若增有漏則便離之。若不增長則不遠離。若作惡法則便離之。若能作善則不遠離。云何爲離。不持刀杖常以正慧方便而遠離之。是故名爲正慧遠離。爲生善法則離惡法。菩薩摩訶薩自觀其身。如病如瘡如癰如怨。如箭入體是大苦聚。悉是一切善惡根本。是身雖復不淨如是。菩薩猶故瞻視將養。何以故。非爲貪身爲善法故。爲於涅槃不爲生死。爲常樂我淨不爲無常無樂我淨。爲菩提道不爲有道。爲於一乘不爲三乘。爲三十二相八十種好微妙之身。不爲乃至非有想非無想身。爲法輪王不爲轉輪王。善男子。菩薩摩訶薩常當護身。何以故。若不護身命則不全。命若不全則不能得書寫是經受持讀誦爲他廣說思惟其義。是故菩薩應善護身。以是義故。菩薩得離一切惡漏。善男子。如欲渡水善護船栰。臨路之人善護良馬。田夫種植善護糞穢。如爲差毒善護毒蛇。如人爲財護旃陀羅。爲壞賊故養護健將。亦如寒人愛護於火。如癩病者求於毒藥。菩薩摩訶薩亦復如是。雖見是身無量不淨具足充滿。爲欲受持大涅槃經故。猶好將護不令乏少。菩薩摩訶薩觀於惡象及惡知識等無有二。何以故。俱壞身故。菩薩摩訶薩於惡象等心無怖懼。於惡知識生畏懼心。何以故。是惡象等唯能壞身不能壞心。惡知識者二俱壞故。是惡象等唯壞一身。惡知識者壞無量善身無量善心。是惡象等唯能破壞不淨臭身。惡知識者能壞淨身及以淨心。是惡象等能壞肉身。惡知識者壞於法身。爲惡象殺不至三趣。爲惡友殺必至三趣。是惡象等但爲身怨。惡知識者爲善法怨。是故菩薩常當遠離諸惡知識。如是等漏凡夫不離。是故生漏。菩薩離之則不生漏。菩薩如是尙無有漏。況於如來。是故非漏。云何親近漏。一切凡夫受取衣食臥具醫藥。爲身心樂求如是物造

味三本俱作患

蘇元明俱作酥次同○瘡愈三本俱作愈瘡○膿同作濃○受取同作摩訶薩受四字○磨宋作摩

慧眼三本俱作眼根○顚宋元俱作傎下同

是三本俱作爲○綴宋作輟○糞穢三本俱作穢汚

種種惡。不知過味輪迴三趣。是故名漏。菩薩摩訶薩見如是過則便遠離。若須衣時即便受取。不爲身故但爲於法。不長憍慢心常卑下。不爲嚴飾但爲羞恥。障諸寒暑惡風惡雨惡蟲蚊虻蠅 蝮螫。雖受飲食心無貪著。不爲身故。常爲正法不爲膚體。但爲衆生不爲憍慢。爲身力故不爲怨害。爲治飢瘡。雖得上味心無貪著。受取房舍亦復如是。貪慢之結不令居心。爲菩提舍遮止結賊。障惡風雨故受屋舍。求醫藥者心無貪慢。但爲正法不爲壽命。爲常命故。善男子。如人病瘡爲蘇麨塗以衣裹之。爲出膿血蘇麨塗傅。爲瘡愈故以藥坌之。爲惡風故在深屋中。菩薩摩訶薩亦復如是。觀身是瘡故以衣覆。爲九孔膿求索飲食。爲惡風雨受取房舍。爲四毒發求覓醫藥。菩薩受取四種供養。爲菩提道非爲壽命。何以故。菩薩摩訶薩作是思惟。我若不受是四供養。身則磨滅不得堅牢。若不堅牢則不忍苦。若不忍苦則不能得修習善法。若能忍苦則得修習無量善法。我若不能堪忍衆苦。則於苦受生瞋恚心。於樂受中生貪著心。若求樂不得則生無明。是故凡夫於四供養生於有漏。菩薩摩訶薩能深觀察不生於漏。是故菩薩名爲無漏。云何如來當名有漏。是故如來不名有漏。復次善男子。一切凡夫雖善護身心。猶故生於三種惡覺。以是因緣雖斷煩惱得生非想非非想處。猶故還墮三惡道中。善男子。譬如有人渡於大海垂至彼岸沒水而死。凡夫之人亦復如是。垂盡三有還墮三塗。何以故。無善覺故。何等善覺。所謂六念處。凡夫之人善心羸劣不善熾盛。善心羸故慧心薄少。慧心薄故增長諸漏。菩薩摩訶薩慧眼清淨見三覺過。知是三覺有種種患。常與衆生作三乘怨。三覺因緣乃令無量凡夫衆生不見佛性。無量劫中生顚倒心。謂佛世尊無常樂我唯有一淨。如來畢竟入於涅槃。一切衆生無常無樂無我無淨。顚倒心故言有常樂我淨。實無三乘。顚倒心故言有三乘。一實之道眞實不虛。顚倒心故言無一實。是三惡覺常爲諸佛及諸菩薩之所呵責。是三惡覺常害於我或亦害他。有是三覺一切諸惡常來隨從。是三覺者即是三縛。連綴衆生無邊生死。菩薩摩訶薩常作如是觀察三覺。菩薩或時有因緣故應生欲覺。默然不受。譬如端正淨潔之人不受一切糞穢不淨。如熱鐵丸人無受者。如婆羅門性不受牛肉。如飽滿人不受惡食。如轉輪王不與一切旃陀羅等同坐一牀。菩薩摩訶薩惡賤三覺不受不住亦復如是。何以故。菩薩思惟。衆生知我是良福田。我當云何受是惡法。若受惡覺則不任爲衆生福田。我自不言

我明作或○怨讐三本俱作讐怨○報下同無故字

直同作而○遊同作游○卑陋同作婢使

云同作如

學同作覺○沙門也同作爲沙門

命明作念○遇三本俱作値

是良福田。衆生見相便言我是。我今若起如是惡覺。則爲欺誑一切衆生。我於往昔以欺誑故。無量劫中流轉生死墮三惡道。我若惡心受人信施。一切天人及五通仙悉當證知而見呵責。我若惡覺受人信施。或令施主果報減少或空無報。我若惡心受檀越施。則與施主而爲怨讐。一切施主恒於我所起赤子想。我當云何欺誑於彼而生怨想。何以故。或令施主不得果報或少果報故。我常自稱爲出家人。夫出家者不應起惡。若起惡者則非出家出家之人身口相應。若不相應則非出家。我棄父母兄弟妻子眷屬知識出家修道。正是修習諸善覺時。非是修習不善覺時。譬如有人入海求寶不取眞珠直取水精。亦如有人棄妙音樂遊戲糞穢。如捨寶女愛念卑陋。如棄金器而用瓦盂。如棄甘露服食毒藥。如捨親舊賢善良醫反從怨憎求藥自療。我亦如是。捨離大師如來世尊甘露法味。而服魔怨種種惡覺。人身難得如優曇花。我今已得。如來難値過優曇花。我今已値。清淨法寶難得見聞。我今已聞。猶如盲龜値浮木孔。人命不停過於山水。今日雖存明亦難保。云何縱心令住惡法。壯色不停猶如奔馬。云何恃怙而生憍慢。猶如惡鬼伺求人過。四大惡鬼亦復如是。常來伺求我之過失。云何當令惡覺發起。譬如朽宅垂崩之屋。我命亦爾云何起惡。我名沙門。沙門之人名學善覺。我今乃起不善之覺。云何當得名沙門也。我名出家。出家之人名修善道。我今行惡。云何當得名爲出家。我今名爲眞婆羅門。婆羅門者名修淨行。我今乃行不淨惡覺。云何當得名婆羅門。我今亦名刹利大姓。刹利姓者能除怨敵。我今不能除惡怨敵。云何當得名刹利姓。我名比丘。比丘之人名破煩惱。我今不破惡覺煩惱。云何當得名爲比丘。世有六處難可値遇。我今已得。云何當令惡覺居心。何等爲六。一佛世難遇。二正法難聞。三怖心難起。四中國難生。五人身難得。六諸根難具。如是六事難得已得。是故不應起於惡覺。菩薩爾時修行如是大涅槃經。常勤觀察是諸惡心。一切凡夫不見如是惡心過患故受三覺。名爲受漏。菩薩見已不受不著放捨不護。依八聖道推之令去。斬之令斷。是故菩薩無有受漏。云何當言如來有漏。以是義故。如來世尊非是有漏

# 大般涅槃經卷第二十

此卷增上寺宋本闕

品目同無光明遍照四字

還來同作來還

逡同作漸

者同作善〇渡元作度〇所元明俱作損〇既同作卽

姓同作性

# 大般涅槃經卷第二十一

〔麗士〕〔宋輔〕〔元輔〕〔明樹〕

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

## 光明遍照高貴德王菩薩品之三

復次善男子。凡夫若遇身心苦惱起種種惡。若得身病。若得心病。令身口意作種種惡。以作惡故輪迴三趣具受諸苦。何以故。凡夫之人無念慧故。是故生於種種諸漏。是名念漏。菩薩摩訶薩常自思惟。我從往昔無數劫來。爲是身心造種種惡。以是因緣流轉生死。在三惡道具受衆苦。遂令我遠三乘正路。菩薩以是惡因緣故。於己身心生大怖畏。捨離衆惡趣向善道。善男子。譬如有王以四毒蛇盛之一篋令人養食瞻視臥起摩洗其身。若令一蛇生瞋恚者。我當準法戮之都市。爾時其人聞王切令。心生惶怖捨篋逃走。王時復遣五旃陀羅拔刀隨之。其人迴顧見後五人遂疾捨去。是時五人以惡方便藏所持刀密遣一人詐爲親善。而語之言。汝可還來。其人不信投一聚落欲自隱匿。既入聚中闚視諸舍都不見人。執諸瓶器悉空無物。既不見人求物不得。卽便坐地聞空中聲。咄哉男子。此聚空曠無有居民。今夜當有六大賊來。汝設遇者命將不全。汝當云何而得免之。爾時其人恐怖遂增。復捨而去。路值一河。河水漂急無有船栰。以怖畏故卽取種種草木爲栰。復更思惟。我設住此當爲毒蛇五旃陀羅一詐親者及六大賊之所危害。若渡此河栰不可依當沒水死。寧沒水死終不爲彼蛇賊所害。卽推草栰置之水中身倚其上。運手動足截流而去。既達彼岸安隱無患。心意泰然恐怖消除。菩薩摩訶薩得聞受持大涅槃經。觀身如篋。地水火風如四毒蛇。見毒觸毒氣毒嚙毒。一切衆生遇是四毒故喪其命。衆生四大亦復如是。或見爲惡。或觸爲惡。或氣爲惡。或嚙爲惡。以是因緣遠離衆善。復次善男子。菩薩摩訶薩觀四毒蛇有四種姓。所謂刹利婆羅門毘舍首陀。是四大蛇亦復如是有四種性。堅性濕性熱性動性。是故菩薩觀是四大與四毒蛇同其種性

走元明倶作趣○羅下同有者字○純同作淳○楯同作盾

愍同作憫下同

杖同作杖

善上同有諸字○識下同無也字○以是義故同作是故二字○觀下同有察五二字○唯明作惟下同○女弱元明倶作婦女○此同作五

復次善男子.菩薩摩訶薩觀是四大如四毒蛇.云何爲觀.是四毒蛇常伺人便.何時當視.何時當觸.何時當噓.何時當齧.四大毒蛇亦復如是.常伺衆生求其短缺.若爲四蛇之所殺者.終不至於三惡道中.若爲四大之所殺害.必至三惡定無有疑.是四毒蛇雖復瞻養亦欲殺人.四大亦爾.雖常供給.亦常牽人造作衆惡.是四毒蛇若一瞋者則能殺人.四大之性亦復如是.若一大發亦能害人.是四毒蛇雖同一處四心各異.四大毒蛇亦復如是.雖同一處性各別異.是四毒蛇雖復恭敬難可親近.四大毒蛇亦復如是.雖復恭敬亦難親近.是四毒蛇若害人時.或有沙門婆羅門等.若以呪藥則可療治.四大殺人雖有沙門婆羅門等神呪良藥.皆不能治.如自憙人聞四毒蛇氣臭可惡則便遠離.諸佛菩薩亦復如是.聞四大臭卽便遠離.爾時菩薩復更思惟四大毒蛇生大怖畏.背之馳走修八聖道.五旃陀羅卽是五陰.云何菩薩觀於五陰如旃陀羅.旃陀羅者常能令人恩愛別離怨憎集會.五陰亦爾.令人貪近不善之法遠離一切純善之法.復次善男子.如旃陀羅種種器仗以自莊嚴.若刀若楯若弓若箭若鎧若矟能害於人.五陰亦爾.以諸煩惱牢自莊嚴.害諸癡人令墮諸有.善男子.如旃陀羅有過之人得便害之.五陰亦爾.有諸結過常能害人.是故菩薩深觀五陰如旃陀羅.復次菩薩觀察五陰如旃陀羅.旃陀羅人無慈愍心怨親俱害.五陰亦爾.無慈愍心善惡俱害.如旃陀羅惱一切人.五陰亦爾.以諸煩惱常惱一切生死衆生.是故菩薩觀於五陰如旃陀羅.復次菩薩觀察五陰如旃陀羅.旃陀羅人常懷害心.五陰亦爾.常懷諸結惱害之心.如人無足刀杖侍從.當知必爲旃陀羅人之所殺害.衆生亦爾.無足無刀無有侍從.則爲五陰之所賊害.足名爲戒.刀名爲慧.侍從名爲善知識也.無此三事故爲五陰之所賊害.是故菩薩觀於五陰如旃陀羅.復次善男子.菩薩摩訶薩觀察五陰過旃陀羅.何以故.衆生若爲五旃陀羅之所殺者不墮地獄.爲陰殺者則墮地獄.以是義故.菩薩觀陰過旃陀羅.作是觀已而作願言.我寧終身近旃陀羅.不能暫時親近五陰.旃陀羅者唯能害於欲界癡人.是五陰賊遍害三界凡夫衆生.旃陀羅人唯能殺戮有罪之人.是五陰賊不問衆生有罪無罪悉能害之.旃陀羅人不害衰老婦女稚小.是五陰賊不問衆生老小女弱一切悉害.是故菩薩深觀此陰過旃陀羅.是故發願.寧當終身近旃陀羅.不能暫時親近五陰.復次善男子.旃陀羅者唯害他人終不自害.五陰之賊自害害他及旃陀羅.

○旃上同無及字○羅下同無旃陀羅三字

能知元明俱作知者○如其不知同作若不知者

覺同作知○知同作覺○難下知同作識○耶同作知

是同作此

旃陀羅人可以善言錢財寶貨求而得脫．五陰不爾．不可强以善言誘喩錢財寶貨求而得脫．旃陀羅人於四時中不必常殺．五陰不爾．常於念念害諸衆生．旃陀羅人唯在一處可有逃避．五陰不爾．遍一切處無可逃避．旃陀羅人雖復害人害已不隨．五陰不爾．殺衆生已隨逐不離．是故菩薩寧以終身近旃陀羅．不能暫時親近五陰．有智之人以善方便得脫五陰．善方便者卽八聖道六波羅蜜四無量心．以是方便而得解脫．身心不爲五陰所害．何以故．身如金剛心如虛空．是故身心難可沮壞．以是義故．菩薩觀陰成就種種諸不善法．生大怖畏修八聖道．亦如彼人畏四毒蛇五旃陀羅涉路而去無所顧留．詐親善者名爲貪愛．菩薩摩訶薩深觀愛結如怨詐親．若知實者則無能爲．若不能知必爲所害．貪愛亦爾．若知其性則不能令衆生輪轉生死苦中．如其不知輪迴六趣具受衆苦．何以故．愛之爲病難捨離故．如怨詐親難可遠離．怨詐親者常伺人便．令愛別離怨憎合會．愛亦如是．令人遠離一切善法近於一切不善之法．以是義故．菩薩摩訶薩深觀貪愛如怨詐親．見不見故．聞不聞故．如凡夫人見生死過雖有智慧以癡覆故後還不見．聲聞緣覺亦復如是．雖見不見雖聞不聞．何以故．以愛心故．所以者何．見生死過不能疾至阿耨多羅三藐三菩提．以是義故．菩薩摩訶薩觀此愛結如怨詐親．云何名爲怨詐親相．如怨不實詐現實相．不可親近詐現近相．實是不善詐現善相．實是不愛詐爲愛相．何以故．常伺人便欲爲害故．愛亦如是．常爲衆生非實詐實．非近詐近．非善詐善．非愛詐愛．常誑一切輪迴生死．以是義故．菩薩觀愛如怨詐親．怨詐親者但見身口不覩其心．是故能誑．愛亦如是．唯爲虛誑實不可得．是故能惑一切衆生．怨詐親者有始有終易可遠離．愛不如是．無始無終難可遠離．怨詐親者遠則難覺近則易知．愛不如是．近尙難知況復遠耶．以是義．故菩薩觀愛過於詐親．一切衆生以愛結故遠大涅槃近於生死．遠常樂我淨近無常苦無我不淨．是故我於處處經中說爲三垢．於現在事以無明故．不見過患不能捨離．愛怨詐親．終不能害有智之人．是故菩薩深觀此愛生大怖畏修八聖道．猶如彼人畏四毒蛇五旃陀羅及一詐親涉路不迴．空聚落者卽內六入．菩薩摩訶薩觀是六入空無所有猶如空聚．如彼怖人既入聚已乃至不見有一居人．遍捉甁器不得一物．菩薩亦爾．諦觀六入空無所有．不見衆生一物之實．是故菩薩觀內六入空無所有如彼空聚．善男子．彼空聚落群賊遠望．終不生

薩下同無摩訶薩三字

爾元明俱作然

姓同作性

於空虛之想。凡夫之人亦復如是。於六入聚不生空想。以其不能生空想故。輪迴生死受無量苦。善男子。羣賊既至乃生空想。菩薩亦爾。觀此六入常生空想。生空想故則不輪迴生死受苦。菩薩摩訶薩於此六入常無顚倒。無顚倒故。是故不復輪迴生死。復次善男子。如有羣賊入此空聚則得安樂。煩惱諸賊亦復如是。入此六入則得安樂。如賊住空聚心無所畏。煩惱羣賊亦復如是。住是六入亦無所畏。如彼空聚乃是師子虎狼種種惡獸之所住處。是內六入亦復如是。一切衆惡煩惱惡獸之所住處。是故菩薩深觀六入空無所有。純是一切不善住處。復次善男子。菩薩摩訶薩觀內六入空無所有如彼空聚。何以故。虛誑不實故。空無所有作有想故。實無有樂作樂想故。實無有人作人想故。內六入者亦復如是。空無所有而作有想。實無有樂而作樂想。實無有人而作人想。唯有智人乃能知之得其眞實。復次善男子。如空聚落或時有人或時無人。六入不爾。一向無人。何以故。性常空故。智者所知非是眼見。是故菩薩觀內六入多諸怨害。修八聖道不休不息。猶如彼人畏四毒蛇五旃陀羅一詐親善及六大賊怖著正路。六大賊者卽外六塵。菩薩摩訶薩觀此六塵如六大賊。何以故。能劫一切諸善法故。如六大賊能劫一切人民財寶。是六塵賊亦復如是。能劫一切衆生善財。如六大賊若入人舍則能劫奪現家所有不擇好惡。令巨富者忽爾貧窮。是六塵賊亦復如是。若入人根則能劫奪一切善法。善法既盡貧窮孤露作一闡提。是故菩薩諦觀六塵如六大賊。復次善男子。如六大賊欲劫人時要因內人。若無內人則便中還。是六塵賊亦復如是。欲劫善法要因內有衆生知見常樂我淨不空等相。若內無有如是等相。六塵惡賊則不能劫一切善法。有智之人內無是相。凡夫則有。是故六塵常來侵奪善法之財。不善護故爲其所劫。護者名慧。有智之人能善防護故不被劫。是故菩薩觀是六塵如六大賊等無差別。復次善男子。如六大賊能爲人民身心苦惱。是六塵賊亦復如是。常爲衆生身心苦惱。六大賊者唯能劫人現在財物。是六塵賊常劫衆生三世善財。六大賊者夜則歡樂。六塵惡賊亦復如是。處無明闇則得歡樂。是六大賊唯有諸王乃能遮止。六塵惡賊亦復如是。唯佛菩薩乃能遮止。是六大賊凡欲劫奪。不擇端正種姓聰哲多聞博學豪貴貧賤。六塵惡賊亦復如是。欲劫善法不擇端正乃至貧賤。是六大賊雖有諸王截其手足。猶故不能令其心息。六塵惡賊亦復如是。雖須陀洹斯陀含阿那含截其手足。亦

手動元明倶作動手○渡同作度下同

拔同作救

棸同作取○栰下同有者字

不能令不劫善法。如勇健人乃能摧伏是六大賊。諸佛菩薩亦復如是。乃能摧伏六塵惡賊。譬如有人多諸種族宗黨熾盛則不爲彼六賊所劫。衆生亦爾。有善知識不爲六塵惡賊所劫。是六大賊若見人物則能偸劫。六塵不爾。若見若知若聞若　若觸若覺皆悉能劫。六大賊者唯能劫奪欲界人財。不能劫奪色無色界。六塵惡賊則不如是。能劫三界一切善寶。是故菩薩諦觀六塵過彼六賊。作是觀已修八聖道直往不迴。如彼怖人畏四毒蛇五旃陀羅一詐親善及六大賊。捨空聚落涉路而去。路値一河者卽是煩惱。云何菩薩觀此煩惱猶如大河。如彼駛河能漂香象。煩惱駛河亦復如是。能漂緣覺。是故菩薩深觀煩惱猶如駛河。深難得底故名爲河。邊不可得故名爲大。其中多有種種惡魚。煩惱大河亦復如是。唯佛菩薩能得底故。故名極深。唯佛菩薩得其邊故。故名廣大。常害一切癡衆生故。故名惡魚。是故菩薩觀此煩惱猶如大河。如大河水能長一切草木叢林。煩惱大河亦復如是。能長衆生二十五有。是故菩薩觀此煩惱猶如大河。譬如有人墮大河水無有慚愧。衆生亦爾。墮煩惱河無有慚愧。如墮河者未得其底卽便命終。墮煩惱河亦復如是。未盡其底。周迴輪轉二十五有。所言底者名爲空相。若有不修如是空相。當知是人不得出離二十五有。一切衆生不能善修空無相故。常爲煩惱駛河所漂。如彼大河唯能壞身。不能漂沒一切善法。煩惱大河則不如是。能壞一切身心善法。彼大暴河唯能漂沒欲界中人。煩惱大河乃能漂沒三界人天。世間大河運手動足則到彼岸。煩惱大河唯有菩薩因六波羅蜜乃能得渡。如大河水難可得渡。煩惱大河亦復如是。難可得渡。云何名爲難可得渡。乃至十住諸大菩薩猶故未能畢竟得渡。唯有諸佛乃畢竟渡。是故名爲難可得渡。譬如有人爲河所漂不能修習毫氂善法。衆生亦爾。爲煩惱河所漂沒者。亦復不能修習善法。如人墮河爲水所漂。餘有力者則能拔濟。墮煩惱河爲一闡提。聲聞緣覺乃至諸佛不能拔濟。世間大河劫盡之時。七日竝照能令枯涸。煩惱大河則不如是。聲聞緣覺雖修七覺猶不能乾。是故菩薩觀諸煩惱。猶如暴河。譬如彼人畏四毒蛇五旃陀羅一詐親善及六大賊。捨空聚落隨路而去。既至河上棸草爲栰。菩薩亦爾。畏四大蛇五陰旃陀羅愛詐親善六入空聚六塵惡賊。至煩惱河修戒定慧解脫解脫知見六波羅蜜三十七品。以爲船栰。依乘此栰渡煩惱河。到於彼岸常樂涅槃。菩薩修行大涅槃者。作是思惟。我若不能忍受如是身苦心苦。

菩薩如是同作如是菩薩
敎同作言
先同作上○大上同有有字
名元明俱作得
水同作流
犍同作建

則不能令一切衆生渡煩惱河。以是思惟。雖有如是身心苦惱默然忍受。以忍受故則不生漏。菩薩如是尙無諸漏。況佛如來而當有漏。是故諸佛不名有漏。云何如來非無漏耶。如來常行有漏中故。有漏卽是二十五有。是故聲聞凡夫之人言佛有漏。諸佛如來眞實無漏。善男子。以是因緣諸佛如來無有定相。善男子。是故犯四重禁謗方等經及一闡提悉皆不定。爾時光明遍照高貴德王菩薩摩訶薩言。如是如是。誠如聖教。一切諸法悉皆不定。以不定故當知如來亦不畢竟入於涅槃。如佛先說。菩薩摩訶薩修大涅槃。聞不聞中有涅槃大涅槃。云何涅槃。云何大涅槃。爾時佛讚光明遍照高貴德王菩薩摩訶薩言。善哉善哉。善男子。若有菩薩得念總持。乃能如汝之所咨問。善男子。如世人言。有海大海。有河大河。有山大山。有地大地。有城大城。有衆生大衆生。有王大王。有人大人。有天天中天。有道大道。涅槃亦爾。有涅槃有大涅槃。云何涅槃。善男子。如人飢餓得少飯食名爲安樂。如是安樂亦名涅槃。如病得差則名安樂。如是安樂亦名涅槃。如人怖畏得歸依處則得安樂。如是安樂亦名涅槃。如貧窮人獲七寶物則得安樂。如是安樂亦名涅槃。如人觀骨不起貪欲則得安樂。如是安樂亦名涅槃。如是涅槃不得名爲大涅槃也。何以故。以飢渴故病故怖故貧故生貪著故。是名涅槃非大涅槃。善男子。若凡夫人及以聲聞。或因世俗。或因聖道。斷欲界結則得安樂。如是安樂亦名涅槃。不得名爲大涅槃也。能斷初禪乃至能斷非想非非想處結則得安樂。如是安樂亦名涅槃。不得名爲大涅槃也。何以故。還生煩惱有習氣故。云何名爲煩惱習氣。聲聞緣覺有煩惱氣。所謂我身我衣我去我來我說我聽。諸佛如來入於涅槃。涅槃之性無我無樂。唯有常淨。是則名爲煩惱習氣。佛法衆僧有差別相。如來畢竟入於涅槃。聲聞緣覺諸佛如來。所得涅槃等無差別。以是義故。二乘所得非大涅槃。何以故。無常樂我淨故。常樂我淨乃得名爲大涅槃也。善男子。譬如有處能受衆水名爲大海。隨有聲聞緣覺菩薩諸佛如來所入之處名大涅槃。四禪三三昧八背捨八勝處十一切處隨能攝取。如是無量諸善法者名大涅槃。善男子。譬如有河第一香象不能得底則名爲大。聲聞緣覺至十住菩薩不見佛性。名爲涅槃非大涅槃。若能了了見於佛性。則得名爲大涅槃也。是大涅槃唯大象王能盡其底。大象王者謂諸佛也。善男子。若摩訶那伽及鉢犍陀大力士等。經歷多時所不能上乃名大山。聲聞緣覺及諸菩薩摩訶那伽大力士等

所不能見。如是乃名大涅槃也。復次善男子。隨有小王之所住處名爲小城。轉輪聖王所住之處乃名大城。聲聞緣覺八萬六萬四萬二萬一萬住處名爲涅槃。無上法主聖王住處。乃得名爲大般涅槃。以是故名大般涅槃。善男子。譬如有人見四種兵不生怖畏。當知是人名大衆生。若有衆生。於三惡道煩惱惡業不生怖畏。而能於中廣度衆生。當知是人得大涅槃。若有人能供養父母。恭敬沙門及婆羅門修治善法。所言誠實無有欺誑。能忍諸惡惠施貧乏。名大丈夫。菩薩亦爾。有大慈悲憐愍一切。於諸衆生猶如父母。能度衆生於生死河普示衆生一實之道。是則名爲大般涅槃。善男子。大名不可思議。若不可思議一切衆生所不能信。是則名爲大般涅槃。唯佛菩薩之所見故名大涅槃。以何因緣復名爲大。以無量因緣然後乃得故名爲大。善男子。如世間人以多因緣之所得者則名爲大。涅槃亦爾。以多因緣之所得故。故名爲大。云何復名爲大涅槃。有大我故名大涅槃。涅槃無我大自在故。名爲大我。云何名爲大自在耶。有八自在則名爲我。何等爲八。一者能示一身以爲多身。身數大小猶如微塵。充滿十方無量世界。如來之身實非微塵。以自在故現微塵身。如是自在則爲大我。二者示一塵身滿於三千大千世界。如來之身實不滿於三千大千世界。何以故。以無礙故。直以自在故滿三千大千世界。如是自在名爲大我。三者能以滿此三千大千世界之身。輕擧飛空過於二十恒河沙等諸佛世界而無障礙。如來之身實無輕重。以自在故能爲輕重。如是自在名爲大我。四者以自在故而得自在。云何自在。如來一心安住不動。所可示化無量形類各令有心。如來有時或造一事。而令衆生各各成辦。如來之身常住一土。而令他土一切悉見。如是自在名爲大我。五者根自在故。云何名爲根自在耶。如來一根亦能見色聞聲嗅香別味覺觸知法。如來六根亦不見色聞聲嗅香別味覺觸知法。以自在故令根自在。如是自在名爲大我。六者以自在故得一切法。如來之心亦無得想。何以故。無所得故。若是有者可名爲得。實無所有云何名得。若使如來計有得想。是則諸佛不得涅槃。以無得故名得涅槃。以自在故得一切法。得諸法故名爲大我。七者說自在故如來演說一偈之義。經無量劫義亦不盡。所謂若戒若定若施若慧。如來爾時都不生念我說彼聽。亦復不生一偈之想。世間之人四句爲偈。隨世俗故說名爲偈。一切法性亦無有說。以自在故如來演說。以演說故名爲大我。八者如來遍滿一切諸處猶如虛空。

多明作名

大上元明俱無三千二字○礙同作閡下同

四上同有若字

百同作種

故同作靜

羅下元明倶無道人二字○犍同作揵次同

虛空之性不可得見.如來亦爾實不可見.以自在故令一切見.如是自在名爲大我.如是大我名大涅槃.以是義故名大涅槃.復次善男子.譬如寶藏多諸珍異百種具足故名大藏.諸佛如來甚深奧藏亦復如是.多諸奇異具足無缺.名大涅槃.復次善男子.無邊之物乃名爲大.涅槃無邊是故名大.復次善男子.有大樂故名大涅槃.涅槃無樂.以四樂故名大涅槃.何等爲四.一者斷諸樂故.不斷樂者則名爲苦.若有苦者不名大樂.以斷樂故則無有苦.無苦無樂乃名大樂.涅槃之性無苦無樂.是故涅槃名爲大樂.以是義故名大涅槃.復次善男子.樂有二種.一者凡夫.二者諸佛.凡夫之樂無常敗壞.是故無樂.諸佛常樂無有變異.故名大樂.復次善男子.有三種受.一者苦受.二者樂受.三者不苦不樂受.不苦不樂是亦爲苦.涅槃雖同不苦不樂.然名大樂.以大樂故名大涅槃.二者大寂靜故名爲大樂.涅槃之性是大寂靜.何以故.遠離一切憒閙法故.以大寂故名大涅槃.三者一切知故名爲大樂.非一切知不名大樂.諸佛如來一切知故.名爲大樂.以大樂故名大涅槃.四者身不壞故名爲大樂.身若可壞則不名樂.如來之身金剛無壞非煩惱身無常之身.故名大樂.以大樂故名大涅槃.善男子.世間名字或有因緣.或無因緣.有因緣者.如舍利弗.母名舍利.因母立字.故名舍利弗.如摩鍮羅道人.生摩鍮羅國.因國立名.故名摩鍮羅道人.如目犍連.目犍連者卽是姓也.因姓立名.故名目犍連.如我生於瞿曇種姓.因姓立名.稱爲瞿曇.如毗舍佉道人.毘舍佉者卽是星名.因星爲名名毗舍佉.如有六指.因六指故名六指人.如佛奴天奴.因佛因天.故名佛奴天奴.因濕生故.故名濕生.如因聲故.名爲迦迦羅.名究究羅.呾呾羅.如是等名是因緣名.無因緣者.如蓮花地水火風虛空.如曼陀婆一名二實.一名殿堂.二名飮漿.堂不飮漿.亦復得名爲曼陀婆.如薩婆車多名爲蛇蓋.實非蛇蓋.是名無因.强立名字.如坻羅婆夷名爲食油.實不食油.强爲立名名爲食油.是名無因强立名字.善男子.是大涅槃亦復如是.無有因緣强爲立名.善男子.譬如虛空不因小空名爲大也.涅槃亦爾.不因小相名大涅槃.善男子.譬如有法不可稱量不可思議.故名爲大涅槃亦爾.不可稱量不可思議.故得名爲大般涅槃.以純淨故名大涅槃.云何純淨.淨有四種.何等爲四.一者二十五有名爲不淨.能永斷故得名爲淨.淨卽涅槃.如是涅槃亦得名有.而是涅槃實非是有.諸佛如來隨世俗故說涅槃有.譬如世人非父言父非母言母.實非父母而言父

母。涅槃亦爾。隨世俗故說言諸佛有大涅槃。二者業淸淨故。一切凡夫業不淸淨故無涅槃。諸佛如來業淸淨故。故名大淨。以大淨故名大涅槃。三者身淸淨故。身若無常則名不淨。如來身常故名大淨。以大淨故名大涅槃。四者心淸淨故。心若有漏名曰不淨。佛心無漏故名大淨。以大淨故名大涅槃。善男子。是名善男子善女人修行如是大涅槃經具足成就初分功德

大般涅槃經卷第二十一

光明遍照高貴德王菩薩品之三

# 大般涅槃經卷第二十二

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

〔麗本〕〔宋本〕〔元本〕〔明本〕

## 光明遍照高貴德王菩薩品之四

復次善男子。云何菩薩摩訶薩修大涅槃成就具足第二功德。善男子。菩薩摩訶薩修大涅槃。昔所不得而今得之。昔所不見而今見之。昔所不聞而今聞之。昔所不到而今得到。昔所不知而今知之。云何名爲昔所不得而今得之。所謂神通。昔所不得而今乃得。通有二種。一者內。二者外。所言外者與外道共。內復有二。一者二乘。二者菩薩。菩薩修行大涅槃經所得神通。不與聲聞辟支佛共。云何名爲不與聲聞辟支佛共。二乘所作神通變化。一心作一不得衆多。菩薩不爾。於一心中則能具足現五趣身。所以者何。以得如是大涅槃經之勢力故。是則名爲昔所不得而今得之。又復云何昔所不得而今得之。所謂身得自在心得自在。何以故。一切凡夫所有身心不得自在。或心隨身或身隨心。云何名爲心隨於身。譬如醉人酒在身中。爾時身動心亦隨動。亦如身懶心亦隨懶。是則名爲心隨於身。又如嬰兒其身稚小心亦隨小。大人身大心亦隨大。又如有人身體麤澀心常思念欲得膏油潤漬令輭。是則名爲心隨於身。云何名爲身隨於心。所謂去來坐臥修行施戒忍辱精進。愁惱之人身則羸悴。歡喜之人身則肥鮮。恐怖之人身體戰動。專心聽法身則怡悅。悲泣之人涕淚橫流。是則名爲身隨於心。菩薩不爾。於身心中俱得自在。是則名爲昔所不得而今得之。復次善男子。菩薩摩訶薩所現身相猶如微塵。以此微身悉能遍至無量無邊恒河沙等諸佛世界無所障礙。而心常定初不移動。是則名爲心不隨身。是亦名爲昔所不到而今能到。何故復名昔所不到而今能到。一切聲聞辟支佛等所不能到。菩薩能到。是故名爲昔所不到而今能到。一切聲聞辟支佛等。雖以神通不能變身如細微塵遍至無量恒河沙等諸佛世界。聲聞緣覺身若動時心亦隨

品目三本俱無光明遍照四字下二品亦同

到三本俱作至下同

之勢同作威神

鮮同作悅○悅同作懌○泣同作苦○礙同作閡

聞同作聞者
薩下同無摩訶
薩三字下同
唯三本俱作惟
下同○善上同
無復次二字次
同○根同作通
可同作能○得
聞同作聞于
先同作上
今下元明俱無
云何二字

動。菩薩不爾。心雖不動身無不至。是名菩薩心不隨身。復次善男子。菩薩化身猶如三千大千世界。以此大身入一塵身。其心爾時亦不隨小。聲聞緣覺雖能化身令如三千大千世界。而不能以如此大身入微塵身。於此事中尙自不能。況能令心而不隨動。是名菩薩心不隨身。復次善男子。菩薩摩訶薩以一音聲。能令三千大千世界衆生悉聞。心終不念。令是音聲遍諸世界。使諸衆生昔所不聞而今得聞。而是菩薩亦初不言。我令衆生昔所不聞而今得聞。菩薩若言因我說法令諸衆生不聞者聞。當知是人終不能得阿耨多羅三藐三菩提。何以故。衆生不聞我爲說者。如此之心是生死心。一切菩薩是心已盡。以是義故。菩薩摩訶薩所有身心不相隨逐。善男子。一切凡夫身心相隨。菩薩不爾。爲化衆生故雖現身小心亦不小。何以故。諸菩薩等所有心性常廣大故。雖現大身心亦不大。云何大身。身如三千大千世界。云何小心行嬰兒行。以是義故心不隨身。菩薩摩訶薩已於無量阿僧祇劫。遠酒不飮而心亦動。心無悲苦身亦流淚。實無恐怖身亦戰慄。以是義故。當知菩薩身心自在不相隨逐。菩薩摩訶薩唯現一身。而諸衆生各各見異。復次善男子。云何菩薩摩訶薩修大涅槃。昔所不聞而今得聞。菩薩摩訶薩先取聲相。所謂象聲馬聲車聲人聲貝鼓簫笛歌哭等聲。而修習之。以修習故。能聞無量三千大千世界所有地獄音聲。復轉修習得異耳根。異於聲聞緣覺天耳。何以故。二乘所得淸淨耳根。若依初禪淨妙四大。唯聞初禪不聞二禪。乃至四禪亦復如是。雖可一時得聞三千大千世界所有音聲。而不能聞無量無邊恒河沙等世界音聲。以是義故。菩薩所得異於聲聞緣覺耳根。以是異故。昔所不聞而今得聞。雖聞音聲而心初無聞聲之相。不作有相常相樂相我相淨相主相依相作相因相定相果相。以是義故。諸菩薩等昔所不聞而今得聞。爾時光明遍照高貴德王菩薩摩訶薩言。如佛所說。不作定相不作果相。是義不然。何以故。如來先說。若人聞是大涅槃經一句一字。必定得成阿耨多羅三藐三菩提。如來於今云何復言無定無果。若得阿耨多羅三藐三菩提。卽是定相卽是果相。云何而言無定無果。聞惡聲故則生惡心。生惡心故則至三途。若至三途則是定果。云何而言無定無果。爾時如來讚言。善哉善哉善男子。能作是問。若使諸佛說諸音聲有定果相者。則非諸佛世尊之相。是魔王相。生死之相。遠涅槃相。何以故。一切諸佛凡所演說無定果相。善男子。譬如刀中照人面像。竪則見長橫則見廣。若

當三本俱作今
○之同作說

定下元明俱有相字

見下三本俱無善男子三字

作同作生

時上同有一字
○昔元明俱作

有定相云何而得竪則見長橫則見廣以是義故諸佛世尊凡所演說無定果相。善男子。夫涅槃者實非聲果。若使涅槃是聲果者。當知涅槃非是常法。善男子。譬如世間從因生法。有因則有果。無因則無果。因無常故果亦無常。所以者何。因亦作果。果亦作因。以是義故。一切諸法無有定相。若使涅槃從因生者。因無常故果亦無常。而是涅槃不從因生。體非是果。是故爲常。善男子。以是義故。涅槃之體無定無果。善男子。夫涅槃者亦可言定亦可言果。云何爲定。一切諸佛所有涅槃常樂我淨。是故爲定。無生老壞。是故爲定。一闡提等犯四重禁誹謗方等作五逆罪。捨除本心。必定得故。是故爲定。善男子。如汝所言。若人聞我說大涅槃一字一句得阿耨多羅三藐三菩提者。汝於是義猶未解了。汝|當諦聽。吾當爲汝更分別|之。善男子。若有善男子善女人聞大涅槃一字一句。不作字相。不作句相。不作聞相。不作佛相。不作說相。如是義者名無相相。以無相相故得阿耨多羅三藐三菩提。善男子。如汝所言。聞惡聲故至三塗者。是義不然。何以故。非以惡聲而至三塗。當知是果乃是惡心。所以者何。有善男子善女人等。雖聞惡聲心不生惡。是故當知非因惡聲生三趣中。而諸衆生因煩惱結。惡心滋多生三惡趣。非因惡聲。若聲有定相。諸有聞者一切悉應生於惡心。或有生者有不生者。是故當知聲無定相。以無|定故。雖復因之不生惡心。世尊。聲若無定。云何菩薩昔所不聞而今得聞。善男子。聲無定相。昔所不聞令諸菩薩而今得聞。以是義故。我作是說。昔所不聞而今得聞。善男子。云何昔所不見而今得見。|善男子。菩薩摩訶薩修大涅槃微妙經典。先取明相。所謂日月星宿庭燎燈燭珠火之明藥草等光。以修習故得異眼根。異於聲聞緣覺所得。云何爲異。二乘所得淸淨天眼。若依欲界四大眼根不見初禪。若依初禪不見上地。乃至自眼猶不能見。若欲多見極至三千大千世界。菩薩摩訶薩不修天眼見妙色身悉是骨相。雖見他方恒河沙等世界色相。不作色相。不作常相有相物相名字等相作因緣相。不作見相。不言是眼微妙淨相。|唯見因緣非因緣相。云何因緣。色是眼緣。若使是色非因緣者。一切凡夫不應生於見色之相。以是義故。色名因緣。非因緣者。菩薩摩訶薩雖復見色不|作色相。是故非緣。以是義故。菩薩所得淸淨天眼。異於聲聞緣覺所得。以是異故。|時遍見十方世界現在諸佛。是名菩薩|昔所不見而今得見。以是異故。能見微塵聲聞緣覺所不能見。以是異故。雖見自眼初無見相。見無常相見凡夫身三十六

物不淨充滿。如於掌中觀阿摩勒菓。以是義故。昔所不見而今得見。若見衆生所有色相。則知其人大小乘根。一觸衣故。亦知是人善惡諸根差別之相。以是義故。昔所不知而今得知。以一見故。昔所不知而今得知。以此知故。昔所不見而今得見。復次善男子。云何菩薩昔所不知而今得知。菩薩摩訶薩雖知凡夫貪恚癡心。初不作心及心數相。不作衆生及以物相。修第一義畢竟空相。何以故。一切菩薩常善修習空性相故。以修空故。昔所不知而今得知。云何爲知。知無有我無有我所。知諸衆生皆有佛性。以佛性故。一闡提等捨離本心。悉當得成阿耨多羅三藐三菩提。如此皆是聲聞緣覺所不能知。菩薩能知。以是義故。昔所不知而今得知。復次善男子。云何昔所不知而今得知。菩薩摩訶薩修大涅槃微妙經典。念過去世一切衆生所生種姓父母兄弟妻子眷屬知識怨憎。於一念中得殊異智。異於聲聞緣覺智慧。云何爲異。聲聞緣覺所有智慧。念過去世所有衆生種姓父母乃至怨憎。而作種姓至怨憎相。菩薩不爾。雖念過去種姓父母乃至怨憎。終不生於種姓父母怨憎等相。常作法相空寂之相。是名菩薩昔所不知而今得知。復次善男子。云何昔所不知而今得知。菩薩摩訶薩修大涅槃微妙經典。得他心智。異於聲聞緣覺所得。云何爲異。聲聞緣覺以一念智知人心時。則不能知地獄畜生餓鬼天心。菩薩不爾。於一念中遍知六趣衆生之心。是名菩薩昔所不知而今得知。復次善男子。復有異知。菩薩摩訶薩於一心中。知須陀洹初心次第至十六心。以是義故。昔所不知而今得知。是爲菩薩修大涅槃具足成就第二功德。復次善男子。云何菩薩摩訶薩修大涅槃成就具足第三功德。善男子。菩薩摩訶薩修大涅槃捨慈得慈。得慈之時不從因緣。云何名爲捨慈得慈。善男子。慈名世諦。菩薩摩訶薩捨世諦慈得第一義。慈第一義慈不從緣得。復次云何捨慈得慈。慈若可捨名凡夫慈。慈若可得即名菩薩無緣之慈。捨一闡提慈犯重禁慈謗方等慈作五逆慈。得憐愍慈得如來慈世尊之慈無因緣慈。云何復名捨慈得慈。捨黃門慈無根二根女人之慈屠膾獵師畜養鷄豬如是等慈。亦捨聲聞辟支佛慈。得諸菩薩無緣之慈。不見己慈不見他慈。不見持戒不見破戒。雖自見悲不見衆生。雖有苦受不見受者。何以故。以修第一眞實義故。是名菩薩修大涅槃成就具足第三功德。復次善男子。云何菩薩摩訶薩修大涅槃成就具足第四功德。善男子。菩薩摩訶薩修大涅槃成就具足第四功德。有十種事。何等爲十。一

---

眼〇菓三本倶作果下同

慈元明倶作故〇義下同無慈第一義四字〇愍三本倶作憫下同〇膾宋作儈

十下三本倶無種字

修同作脩

者根深難可傾拔。二者自身生決定想。三者不觀福田及非福田。四者修淨佛土。五者滅除有餘。六者斷除業緣。七者修淸淨身。八者了知諸緣。九者離諸怨敵。十者斷除二邊。云何根深難可傾拔。所言根者名不放逸。不放逸者爲是何根。所謂阿耨多羅三藐三菩提根。善男子。一切諸佛諸善根本皆不放逸。不放逸故諸餘善根展轉增長。以能增長諸善根故。於諸善中最爲殊勝。善男子。如諸跡中象跡爲上。不放逸法亦復如是。於諸善法最爲殊勝。善男子。如諸明中日光爲最。不放逸法亦復如是。於諸善法爲最第一。善男子。如諸王中轉輪聖王爲最第一。不放逸法亦復如是。於諸善法爲最第一。善男子。如諸流中四河爲最。不放逸法亦復如是。於諸善法爲上爲最。善男子。如諸山中須彌山王爲最第一。不放逸法亦復如是。於諸善法爲最第一。善男子。如水生花中青蓮爲最。不放逸法亦復如是。於諸善法爲最爲上。善男子。如陸生花中婆利師花爲最爲上。不放逸法亦復如是。於諸善法爲最爲上。善男子。如諸獸中師子爲最。不放逸法亦復如是。於諸善法爲最爲上。善男子。如飛鳥中金翅鳥王爲最爲上。不放逸法亦復如是。於諸善法爲最爲上。善男子。如大身中羅睺阿修羅王爲最爲上。不放逸法亦復如是。於諸善法爲最爲上。善男子。如一切衆生若二足四足多足無足中如來爲最。不放逸法亦復如是。於善法中爲最爲上。善男子。如諸衆中佛僧爲上。不放逸法亦復如是。於善法中爲最爲上。善男子。如佛法中大涅槃法爲最爲上。不放逸法亦復如是。於諸善法爲最爲上。善男子。以是義故。不放逸根深固難拔。云何不放逸故而得增長。所謂信根戒根施根慧根忍根聞根進根念根定根善知識根。如是諸根不放逸故而得增長。以增長故深固難拔。以是義故。名爲菩薩摩訶薩修大涅槃根深難拔。云何於身作決定想。於自身所生決定心。我今此身於未來世。定當爲阿耨多羅三藐三菩提器。心亦如是不作狹小。不作變易。不作聲聞辟支佛心。不作魔心及自樂心樂生死心。常爲衆生求慈悲心。是名菩薩於自身中生決定心。我於來世當爲阿耨多羅三藐三菩提器。以是義故。菩薩摩訶薩修大涅槃。於自身中生決定想。云何菩薩不觀福田及非福田。云何福田。外道持戒上至諸佛。是名福田。若有念言。如是等輩是眞福田。當知是心則爲狹劣。菩薩摩訶薩悉觀一切無量衆生無非福田。何以故。以善修習異念處故。有異念處善修習者。觀諸衆生無有持戒及以毀戒。常觀諸佛世尊所說。施雖四種俱得

茂林花菓三本俱作華果茂村次同

淨報.何等爲四.一者施主淸淨受者不淨.二者施主不淨受者淸淨.三者施受俱淨.四者二俱不淨.云何施淨受者不淨.施主具有戒聞智慧.知有惠施及以果報.受者破戒專著邪見無施無報.是名施淨受者不淨.云何名爲受者淸淨施主不淨.施主破戒專著邪見.言無惠施及以果報.受者持戒多聞智慧.知有惠施及施果報.是名施主不淨受者淸淨.云何名爲施受俱淨.施者受者俱有持戒多聞智慧.知有惠施及施果報.是名施受二俱淸淨.云何名爲二俱不淨.施者受者破戒邪見.言無有施及施果報.若如是者云何復言得淨果報.以無施無報故名爲淨.善男子.若有不見施及施報.當知是人不名破戒專著邪見.若依聲聞言不見施及施果報.是則名爲破戒邪見.若依如是大涅槃經.不見惠施及施果報.是則名爲持戒正見.菩薩摩訶薩有異念處.以修習故.不見衆生持戒破戒施者受者及施果報.是故得名持戒正見.以是義故.菩薩摩訶薩不觀福田及非福田.云何名爲淨佛國土.菩薩摩訶薩修大涅槃微妙經典.爲阿耨多羅三藐三菩提.度衆生故離殺害心.以此善根願與一切衆生共之.願諸衆生得壽命長有大勢力獲大神通.以是誓願因緣力故.於未來世成佛之時國土所有一切衆生.得壽命長有大勢力獲大神通.復次善男子.菩薩摩訶薩修大涅槃微妙經典.爲阿耨多羅三藐三菩提.度衆生故離偸盜心.以此善根願與一切衆生共之.願諸佛國土地所有純是七寶.衆生富足所欲自恣.以此誓願因緣力故.於未來世成佛之時.所得國土純是七寶.衆生富足所欲自恣.復次善男子.菩薩摩訶薩修大涅槃微妙經典.爲阿耨多羅三藐三菩提.度衆生故離婬欲心.以此善根願與一切衆生共之.願諸佛土所有衆生無有貪欲瞋恚癡心.亦無飢渴苦惱之患.以是誓願因緣力故.於未來世成佛之時.國土衆生遠離貪婬瞋恚癡心.一切無有飢渴苦惱.復次善男子.菩薩摩訶薩修大涅槃微妙經典.爲阿耨多羅三藐三菩提.度衆生故遠離妄語心.以此善根願與一切衆生共之.願諸佛土常有茂林花菓香樹.所有衆生得妙音聲.以是誓願因緣力故.於未來世成佛之時.所有國土常有茂林花菓香樹.其中衆生悉得淸淨上妙音聲.復次善男子.菩薩摩訶薩修大涅槃微妙經典.爲阿耨多羅三藐三菩提.度衆生故遠離兩舌.以此善根願與一切衆生共之.願諸佛土所有衆生常共和合講說正法.以是誓願因緣力故.成佛之時國土所有一切衆生悉共和合講論法要.復次善男子.菩薩摩訶薩修

石沙同作沙石
次同〇得同作
有
此同作是
佛同作國
婬三本俱作淫
六宋作二
僂三本俱作傴
〇闇同作暗〇
卑賤同作五錢

大涅槃微妙經典。爲阿耨多羅三藐三菩提。度衆生故遠離惡口。以此善根願與一切衆生共之。願諸佛土地平如掌無有石沙荊蕀惡刺。所有衆生其心平等。以是誓願因緣力故。於未來世成佛之時。所得國土地平如掌。無有石沙荊蕀惡刺。所有衆生其心平等。復次善男子。菩薩摩訶薩修大涅槃微妙經典。爲阿耨多羅三藐三菩提。度衆生故離無義語。以此善根願與一切衆生共之。願諸佛土所有衆生無有苦惱。以是誓願因緣力故。於未來世成佛之時。國土所有一切衆生無有苦惱。復次善男子。菩薩摩訶薩修大涅槃微妙經典。爲阿耨多羅三藐三菩提。度衆生故遠離貪嫉。以此善根願與一切衆生共之。願諸佛土一切衆生。無有貪嫉惱害邪見。以此誓願因緣力故。於未來世成佛之時。國土所有一切衆生。悉無貪嫉惱害邪見。復次善男子。菩薩摩訶薩修大涅槃微妙經典。爲阿耨多羅三藐三菩提。度衆生故遠離惱害。以此善根願與一切衆生共之。願諸佛土所有衆生。悉共修習大慈大悲得一子地。以是誓願因緣力故。於未來世成佛之時。世界所有一切衆生。悉共修習大慈大悲得一子地。復次善男子。菩薩摩訶薩修大涅槃微妙經典。爲阿耨多羅三藐三菩提。度衆生故遠離邪見。以此善根願與一切衆生共之。願諸佛土所有衆生。悉得摩訶般若波羅蜜。以是誓願因緣力故。於未來世成佛之時。世界衆生悉得受持摩訶般若波羅蜜。是名菩薩修淨佛土。云何菩薩摩訶薩滅除有餘。有餘有三。一者煩惱餘報。二者餘業。三者餘有。善男子。云何名爲煩惱餘報。若有衆生習近貪欲。是報熟故墮於地獄。從地獄出受畜生身。所謂鴿雀鴛鴦鸚鵡耆婆耆婆舍利伽鳥青雀魚鼈獼猴麞鹿。若得人身受黃門形女人二根無根婬女。若得出家犯初重戒。是名餘報。復次善男子。若有衆生。以殷重心習近瞋恚。是報熟故墮於地獄。從地獄出受畜生身。所謂毒蛇具四種毒。見毒觸毒齧毒噓毒。師子虎狼熊羆猫貍鷹鷂之屬。若得人身具足十六諸惡律儀。若得出家犯第二重戒。是名餘報。復次善男子。若有修習愚癡之人。是報熟時墮於地獄。從地獄出受畜生身。所謂象豬牛羊水牛蚤蝨蚊蝱蟻子等形。若得人身聾盲瘖瘂癃殘背僂。諸根不具不能受法。若得出家諸根闇鈍憙犯重戒乃至卑賤。是名餘報。復次善男子。若有修習憍慢之人。是報熟時墮於地獄。從地獄出受畜生身。所謂糞蟲駝驢犬馬。若生人中受奴婢身貧窮乞匃。或得出家常爲衆生之所輕賤破第四戒。是名餘報。如是等名煩惱餘報。如是餘

斷除同作除斷
滅除同作除滅
中上上同作上上中上四字〇十下同有種字
之三本俱作於
〇捺同作奈
壞同作壊
唯明作惟下同

報菩薩摩訶薩以能修習大涅槃故悉得除滅。云何餘業。謂一切凡夫業。一切聲聞業。須陀洹人受七有業。斯陀含人受二有業。阿那含人受色有業。是名餘業。如是餘業菩薩摩訶薩以能修習大涅槃故悉得斷除。云何除有。阿羅漢得阿羅漢果。辟支佛得辟支佛果。無業無結而轉二果。是名除有。如是三種有餘之法。菩薩摩訶薩修習大乘大涅槃經故得滅除。是名菩薩摩訶薩滅除有餘。云何菩薩修淸淨身。菩薩摩訶薩修不刹戒有五種心。謂下中上上中上上上。乃至正見亦復如是。是五十心名初發心。具足決定成五十心。是名滿足。如是百心名百福德。具足百福成於一相。如是展轉具足成就三十二相。名淸淨身。所以復修八十種好。世有衆生事八十神。何等八十。十二日十二大天五大星北斗馬天行道天婆羅墮跋闍天功德天二十八宿地天風天水天火天梵天樓陀天因提天拘摩羅天八臂天摩醯首羅天半闍羅天鬼子母天四天王天造書天婆藪天。是名八十。爲此衆生修八十好以自莊嚴。是名菩薩淸淨之身。何以故。是八十天一切衆生之所信伏。是故菩薩修八十好其身不動。令彼衆生隨其所信各各得見。見已宗敬各發阿耨多羅三藐三菩提心。以是義故。菩薩摩訶薩修於淨身。善男子。譬如有人欲請大王。要當莊嚴所有舍宅極令淸淨。辦具種種百味餚饍。然後王乃就其所請。菩薩摩訶薩亦復如是。欲請阿耨多羅三藐三菩提法輪王故。先當修身極令淸淨。無上法王乃當處之。以是義故。菩薩摩訶薩要當修於淸淨之身。善男子。譬如有人欲服甘露。先當淨身。菩薩摩訶薩亦復如是。欲服無上甘露法味般若波羅蜜。要當先以八十種好淸淨其身。善男子。譬如妙好金銀寶器盛之淨水。中表俱淨。菩薩摩訶薩其身淸淨亦復如是。盛阿耨多羅三藐三菩提水中表俱淨。善男子。如波羅捺素白之衣易受染色。何以故。性白淨故。菩薩摩訶薩亦復如是。以身淨故獲得阿耨多羅三藐三菩提。以是義故。菩薩摩訶薩修於淨身。云何菩薩摩訶薩了知諸緣。菩薩摩訶薩不見色相不見色緣不見色體。不見色生不見色滅。不見一相不見異相。不見見者不見相貌不見受者。何以故。了因緣故。如色一切法亦如是。是名菩薩了知諸緣。云何菩薩壞諸怨敵。一切煩惱是菩薩怨。菩薩摩訶薩常遠離故。是名菩薩壞諸怨敵。五住菩薩觀諸煩惱不名爲怨。所以者何。因煩惱故菩薩有生。以有生故故能展轉教化衆生。以是義故不名爲怨。何等爲怨。所謂誹謗方等經者。菩薩回生不畏地獄畜生餓鬼。唯畏

如是謗方等者。一切菩薩有八種魔名爲怨家。遠是八魔名離怨家。是名菩薩離諸怨敵。云何菩薩遠離二邊。言二邊者。謂二十五有及愛煩惱。菩薩常離二十五有及愛煩惱。是名菩薩遠離二邊。是名菩薩摩訶薩修大涅槃具足成就第四功德。爾時光明遍照高貴德王菩薩摩訶薩言。如佛所說。若有菩薩修大涅槃。悉作如是十事功德。如來何故唯修九事不修淨土。佛言。善男子。我於往昔亦常具修如是十事。一切菩薩及諸如來。無有不修是十事者。若使世界不淨充滿。諸佛世尊於中出者無有是處。善男子。汝今莫謂諸佛出興不淨世界。當知是心不善狹劣。汝今當知。我實不出閻浮提界。譬如有人說言此界獨有日月他方世界無有日月。如是之言無有義理。若有菩薩發如是言。此佛世界穢惡不淨。他方佛土清淨莊嚴。亦復如是。善男子。西方去此娑婆世界。度三十二恒河沙等諸佛國土。彼有世界名曰無勝。彼土何故名曰無勝。其土所有莊嚴之事皆悉平等無有差別。猶如西方安樂世界。亦如東方滿月世界。我於彼土出現於世。爲化衆生故於此界閻浮提中現轉法輪。非但我身獨於此中現轉法輪。一切諸佛亦於此中而轉法輪。以是義故。諸佛世尊非不修行如是十事。善男子。慈氏菩薩以誓願故。當來之世令此世界清淨莊嚴。以是義故。一切諸佛所有世界無不嚴淨。復次善男子。云何菩薩摩訶薩修大涅槃微妙經典。具足成就第五功德。善男子。菩薩摩訶薩修大涅槃具足成就第五功德。有五事果。何等爲五。一者諸根完具。二者不生邊地。三者諸天愛念。四者常爲天魔沙門刹利婆羅門等之所恭敬。五者得宿命智。菩薩以是大涅槃經因緣力故。具足如是五事功德。光明遍照高貴德王菩薩言。如佛所說。若有善男子善女人。修於布施則得具成五事功德。今云何言因大涅槃得是五事。佛言。善哉善哉。善男子。如是之事其義各異。今當爲汝分別解說。施得五事。不定不常不淨不勝不異非無漏。不能利益安樂憐愍一切衆生。若依如是大涅槃經。所得五事。是定是常是淨是勝是異是無漏。則能利益安樂憐愍一切衆生。善男子。夫布施者得離飢渴。大涅槃經能令衆生悉得遠離二十五有渴愛之病。布施因緣令生死相續。大涅槃經能令生死斷不相續。因布施故受凡夫法。因大涅槃得作菩薩。布施因緣能斷一切貧窮苦惱。大涅槃經能斷一切貧善法者。布施因緣有分有果。因大涅槃得阿耨多羅三藐三菩提無分無果。是名菩薩摩訶薩修大涅槃微妙經典具足成就第五功德。善男子。

皆悉三本俱作悉皆

事下同無果字

善上三本俱有復次二字

明三本俱作滓

云何菩薩修大涅槃微妙經典具足成就第六功德。菩薩摩訶薩修大涅槃得金剛三昧。安住是中悉能破散一切諸法。見一切法皆是無常皆是動相。恐怖因緣病苦劫盜。念念滅壞無有眞實。一切皆是魔之境界無可見相菩薩摩訶薩住是三昧。雖施衆生乃至不見一衆生實。爲衆生故精勤修習尸波羅蜜。乃至修習般若波羅蜜。亦復如是。菩薩若見有一衆生不能畢竟具足成就檀波羅蜜乃至具足般若波羅蜜。善男子。譬如金剛所擬之處無不碎壞。而是金剛無有折損。金剛三昧亦復如是。所擬之法無不碎壞。而是三昧無有折損。善男子。如諸寶中金剛最勝。菩薩所得金剛三昧亦復如是。於諸三昧爲最第一。何以故。菩薩摩訶薩修是三昧。一切三昧悉來歸屬。善男子。如諸小王悉來歸屬轉輪聖王。一切三昧亦復如是。悉來歸屬金剛三昧。善男子。譬如有人爲國怨讎人所患。有人殺之一切世人無不稱讚是人功德。金剛三昧亦復如是。菩薩修習能壞一切衆生怨敵。是故常爲一切三昧之所宗敬。善男子。譬如有人其力盛壯人無當者復更有人力能伏之。當知是人世所稱美。金剛三昧亦復如是。力能摧伏難伏之法。以是義故。一切三昧悉來歸屬。善男子。譬如有人在大海浴。當知是人已用諸河泉池之水。菩薩摩訶薩亦復如是。修習如是金剛三昧。當知已爲修習諸餘一切三昧。善男子。如香山中有一泉水名阿耨達。其泉具足八味之水。有人飮之無諸病苦。金剛三昧亦復如是具八正道。菩薩修習斷諸煩惱瘡疣重病。善男子。如人供養摩醯首羅。當知是人已爲供養一切諸天。金剛三昧亦復如是。有人修習當知已爲修習一切諸餘三昧。善男子。若有菩薩安住如是金剛三昧。見一切法無有障礙。如於掌中觀阿摩勒菓。菩薩雖復得如是見。終不作想見一切法。善男子。譬如有人坐四衢道見諸衆生來去坐臥。金剛三昧亦復如是。見一切法生滅出沒。善男子。譬如高山有人登之遠望諸方皆悉明了。金剛定山亦復如是。菩薩登之遠望諸法無不明了。善男子。譬如春月天降甘雨其滴微緻間無空處。明眼之人見之明了。菩薩亦爾。得金剛定淸淨之目。遠見東方所有世界。其中或有國土成壞。一切皆見明了無障。乃至十方亦復如是。善男子。如由乾陀山七日並出其山所有樹木叢林一切燋盡。菩薩修習金剛三昧亦復如是。所有一切煩惱叢林即時消滅。善男子。譬如金剛雖能摧碎一切有物終不生念我能摧破。金剛三昧亦復如是。菩薩修已能破煩惱。終不生念我能壞結。善男子。譬如大

而同作如

入明作入

評三本俱作平次同○則同作即

地能持萬物終不生念我力能持。火亦不念我能燒物。水亦不念我能潤漬。風亦不念我能動物。空亦不念我能容受。涅槃亦復不生念言。我令衆生而得滅度。金剛三昧亦復如是。雖能滅除一切煩惱。而初無心言我能滅。若有菩薩安住如是金剛三昧。於一念中變身如佛其數無量。遍滿十方恒河沙等諸佛世界。而是菩薩雖作是化。其心初無憍慢之想。何以故。菩薩常念。誰有是定能作是化。唯有菩薩安住如是金剛三昧乃能作耳。菩薩摩訶薩安住如是金剛三昧。於一念中遍到十方恒河沙等諸佛世界。還其本處。雖有是力亦不念言我能如是。何以故。以是三昧因緣力故。菩薩摩訶薩安住如是金剛三昧。於一念中能斷十方恒河沙等世界衆生所有煩惱。而心初無斷諸衆生煩惱之想。何以故。以是三昧因緣力故。菩薩住是金剛三昧。以一音聲有所演說。一切衆生各隨種類而得解了。示現一色一切衆生各各皆見種種色相。安住一處身不移易。能令衆生隨其方面各各而見。演說一法若界若入。一切衆生各隨本解而得聞之。菩薩安住如是三昧。雖見衆生而心初無衆生之相。雖見男女無男女相。雖見色法無有色相。乃至見識亦無識相。雖見晝夜無晝夜相。雖見一切無一切相。雖見一切煩惱諸結。亦無一切煩惱之相。見八聖道無聖道相。雖見菩提無菩提相。見於涅槃無涅槃相。何以故。善男子。一切諸法本無相故。菩薩以是三昧力故。見一切法如本無相。何故名爲金剛三昧。善男子。譬如金剛若在日中色則不定。金剛三昧亦復如是。在於大衆色亦不定。是故名爲金剛三昧。善男子。譬如金剛一切世人不能評價。金剛三昧亦復如是。所有功德一切人天不能評量。是故復名金剛三昧。善男子。譬如貧人得金剛寶則得遠離貧窮困苦惡鬼邪毒。菩薩摩訶薩亦復如是。得是三昧則能遠離煩惱諸苦諸魔邪毒。是故復名金剛三昧。是名菩薩修大涅槃具足成就第六功德。

# 大般涅槃經卷第二十二

# 大般涅槃經卷第二十三

〔麗士〕〔宋輔〕〔元輔〕〔明樹〕

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

## 光明遍照高貴德王菩薩品之五

復次善男子。云何菩薩摩訶薩修大涅槃微妙經典。具足成就第七功德。善男子菩薩摩訶薩修大涅槃微妙經典。作是思惟。何法能爲大般涅槃而作近因。菩薩。即知有四種法爲大涅槃而作近因。若言勤修一切苦行是大涅槃近因緣者。是義不然。所以者何。若離四法得涅槃者無有是處。何等爲四。一者親近善友。二者專心聽法。三者繫念思惟。四者如法修行。善男子。譬如有人身遇衆病。若熱若冷虛勞下瘧衆邪鬼毒。到良醫所。良醫即爲隨病說藥。是人至心善受醫敎。隨敎合藥如法服之。服已病愈身得安樂。有病之人譬諸菩薩。大良醫者譬善知識。良醫所說譬方等經。善受醫敎譬善思惟方等經義。隨敎合藥譬如法修行三十七助道之法。病除愈者譬滅煩惱。得安樂者。喩得涅槃常樂我淨。善男子。譬如有王欲如法治令民安樂。諮諸智臣其法云何。諸臣即以先王舊法而爲說之。王旣聞已至心信行。如法治國無諸怨敵。是故令民安樂無患。善男子。王者譬諸菩薩。諸智臣者譬善知識。智臣爲王所說治法譬十二部經。王旣聞已至心信行。譬諸菩薩繫心思惟十二部經所有深義。如法治國譬諸菩薩如法修行。所謂六波羅蜜。以能修習六波羅蜜故。無諸怨敵譬諸菩薩已離諸結煩惱惡賊。得安樂者譬諸菩薩得大涅槃常樂我淨。善男子。譬如有人遇惡癩病。有善知識而語之言。汝若能到須彌山邊病可得差。所以者何。彼有良藥味如甘露。若能服者病無不愈。其人至心信是事已。即往彼山採服甘露。其病除愈身得安樂。惡癩病者譬諸凡夫。善知識者譬諸菩薩摩訶薩等。至心信受譬四無量心。須彌山者譬八聖道。甘露味者譬於佛性。癩病除愈譬滅煩惱。得安樂者譬得涅槃常樂我淨。善男子。譬如有人畜諸弟子聰明大智。是人晝夜

大下三本俱有般字

到同作至下同

喩同作譬

愈宮作差○採同作采

惓同作倦
說三本俱作訟○純同作淳○復宋作後

常教不惓。諸菩薩等亦復如是。一切衆生有信不信。而常教化無有疲厭。善男子。善知識者所謂佛菩薩辟支佛聲聞人中信方等者。何故名爲善知識耶。善知識者能教衆生遠離十惡修行十善。以是義故名善知識。復次善知識者如法而說如說而行。云何名爲如法而說如說而行。自不殺生教人不殺。乃至自行正見教人正見。若能如是則得名爲眞善知識。自修菩提。亦能教人修行菩提。以是義故名善知識。自能修行信戒布施多聞智慧。亦能教人信戒布施多聞智慧。復以是義名善知識。善知識者有善法故。何等善法。所作之事不求自樂。常爲衆生而求安樂。見他有過不說其短。口常宣說純善之事。以是義故名善知識。善男子。如空中月從初一日至十五日漸漸增長。善知識者亦復如是。令諸學人漸遠惡法增長善法。善男子。若有親近善知識者。本未有戒定慧解脫解脫知見。即便有之。未具足者則得增廣。何以故以其親近善知識故。因是親近復得了達十二部經甚深之義。若能聽是十二部經甚深義者名爲聽法。聽法者則是大乘方等經典。聽方等經名眞聽法。眞聽法者即是聽受大涅槃經。大涅槃中聞有佛性如來畢竟不般涅槃。是故名爲專心聽法。專心聽法名八聖道。以八聖道能斷貪欲瞋恚愚癡故名聽法。夫聽法者名十一空。以此諸空於一切法不作相貌。夫聽法者名初發心乃至究竟阿耨多羅三藐三菩提心。以因初心得大涅槃。不以聞故得大涅槃。以修習故得大涅槃。善男子。譬如病人雖聞醫教及藥名字不能愈病。要以服故乃得除差。雖聽十二深因緣法。不能斷滅一切煩惱。要以繫念善思惟故能得除斷。是名第三繫念思惟。復以何義名繫念思惟。所謂三三昧。空三昧無相三昧無作三昧。空者於二十五有不見一實。無作者於二十五有不作願求。無相者無有十相。所謂色相聲相香相味相觸相生相住相滅相男相女相。修習如是三三昧者。是名菩薩繫念思惟。云何名爲如法修行。如法修行即是修行檀波羅蜜乃至般若波羅蜜。知陰入界眞實之相。亦知聲聞緣覺諸佛同於一道而般涅槃。法者即是常樂我淨。不生不老不病不死。不飢不渴不苦不惱不退不沒。善男子。解大涅槃甚深義者。則知諸佛終不畢竟入於涅槃。善男子。第一眞實善知識者。所謂菩薩諸佛世尊。何以故。常以三種善調御故。何等爲三。一者畢竟軟語。二者畢竟呵責。三者軟語呵責。以是義故。菩薩諸佛即是眞實善知識也。復次善男子。佛及菩薩爲大醫故名善知識。何以故。知病知藥應病授藥故。

有風病者三本俱作風病之人
二下同有因
渡同作度
根下同有本字
菓三本俱作果〇愍同作憫下同
唯同作惟下同〇誡三本俱作戒〇婬同作淫

譬如良醫善八種術.先觀病相.相有三種.何等爲三.謂風熱水.有風病者授之酥油.熱病之人授之石蜜.水病之人授之薑湯.以知病根授藥得差故名良醫.佛及菩薩亦復如是.知諸凡夫病有三種.一者貪欲.二者瞋恚.三者愚癡.貪欲病者教觀骨相.瞋恚病者觀慈悲相.愚癡病者觀十二緣相.以是義故.諸佛菩薩名善知識.善男子.譬如船師善渡人故名大船師.諸佛菩薩亦復如是.度諸衆生生死大海.以是義故名善知識.復次善男子.因佛菩薩令諸衆生具足修得善法根故.善男子.譬如雪山乃是種種微妙上藥根本之處.佛及菩薩亦復如是.悉是一切善根本處.以是義故名善知識.善男子.雪山之中有上香藥名曰娑呵.有人見之得壽無量無有病苦.雖有四毒不能中傷.若有觸者增長壽命滿百二十.若有念者得宿命智.何以故.藥勢力故.諸佛菩薩亦復如是.若有見者即得斷除一切煩惱.雖有四魔不能干亂.若有觸者命不可夭.不生不死不退不沒.所謂觸者若在佛邊聽受妙法.若有念者得阿耨多羅三藐三菩提.以是義故.諸佛菩薩名善知識.善男子.如香山中有阿耨達池.由是池故有四大河.所謂恒河辛頭私陀博叉.世間衆生常作是言.若有罪者浴此四河衆罪得滅.當知此言虛妄不實.除此已往何等爲實.諸佛菩薩是乃爲實.所以者何.若人親近則得滅除一切衆罪.以是義故名善知識.復次善男子.譬如大地所有藥木一切叢林百穀甘蔗花菓之屬.値天炎旱將欲枯死.難陀龍王及婆難陀憐愍衆生.從大海出降澍甘雨.一切叢林百穀草木滋潤還生.一切衆生亦復如是.所有善根將欲消滅.諸佛菩薩生大慈悲.從智慧海降甘露雨.令諸衆生具足還得十善之法.以是義故.諸佛菩薩名善知識.善男子.譬如良醫善八種術見諸病人.不觀種姓端正醜陋錢財寶貨悉爲治之.是故世稱爲大良醫.諸佛菩薩亦復如是.見諸衆生有煩惱病.不觀種姓端正醜陋錢財寶貨.生慈愍心悉爲說法.衆生聞已煩惱病除.以是義故.諸佛菩薩名善知識.以是親近善友因緣.則得近於大般涅槃.云何菩薩聽法因緣而得近於大般涅槃.一切衆生以聽法故則具信根.得信根故樂行布施戒忍精進禪定智慧.得須陀洹果乃至佛果.是故當知.得諸善法皆是聽法因緣勢力.善男子.譬如長者唯有一子.遣至他國市易所須.示其道路通塞之處.而復誡之.若遇婬女愼莫親愛.若親愛者喪身殞命及以財寶.弊惡之人亦莫交游.其子敬順父之教勅.身心安隱多獲寶貨.菩薩摩訶薩爲諸衆生敷演法要亦

善元明俱作諸
採取道三本俱作采求法
斵同作㔉次同
言無目者三本俱作無目之人
於同作在○難下同無比丘二字○舉宋作輿元明俱作舁○旣元明作卽
顚宋元俱作傎下同

復如是。示諸衆生及四部衆諸道通塞。是諸衆等以聞法故。遠離諸惡具足善法。以是義故。聽法因緣則得近於大般涅槃。善男子。譬如明鏡照人面像無不明了。聽法明鏡亦復如是。有人照之則見善惡明了無翳。以是義故。聽法因緣則得近於大般涅槃。善男子。譬如商人欲至寶渚。不知道路有人示之。其人隨語卽至寶渚。多獲諸珍不可稱計。一切衆生亦復如是。欲至善處採取道寶。不知其路通塞之相。菩薩示之衆生隨已。得至善處獲得無上大涅槃寶。以是義故。聽法因緣則得近於大般涅槃。善男子。譬如醉象狂逸暴惡多欲殺害。有調象師以大鐵鉤鉤斲其頂。卽時調順惡心都盡。一切衆生亦復如是。貪欲瞋恚愚癡醉故欲多造惡。諸菩薩等以聞法鉤斲之令住。更不得起造諸惡心。以是義故。聽法因緣則得近於大般涅槃。是故我於處處經中說。我弟子專心聽受十二部經。則離五蓋修七覺分。以是修習七覺分故。則得近於大般涅槃。以聽法故須陀洹人離諸恐怖。所以者何。須達長者身遭重病心大愁怖。聞舍利弗說須陀洹有四功德十種慰喩。聞是事已恐怖卽除。以是義故。聽法因緣則得近於大般涅槃。何以故。聞法眼故。世有三人。一者無目。二者一目。三者二目。言無目者常不聞法。一目之人雖暫聞法其心不住。二目之人專心聽受如聞而行。以聽法故得知世間。如是三人以是義故。聽法因緣則得近於大般涅槃。善男子。如我昔於拘尸那城。時舍利弗身遇病苦。我時顧命。阿難比丘廣爲說法。時舍利弗聞是事已告四弟子。汝舉我牀往至佛所我欲聽法。時四弟子奉命舁往。旣得聞法。聞法力故所苦除差身得安隱。以是義故。聽法因緣則得近於大般涅槃。云何菩薩思惟因緣而得近於大般涅槃。因是思惟心得解脫。何以故。一切衆生常爲五欲之所繫縛。以思惟故悉得解脫。以是義故思惟因緣則得近於大般涅槃。復次善男子。一切衆生常爲常樂我淨四法之所顚倒。以思惟故得見諸法無常無樂無我無淨。如是見已四倒卽斷。以是義故。思惟因緣則得近於大般涅槃。復次善男子。一切諸法有四種相。何等爲四。一者生相。二者老相。三者病相。四者滅相。以是四相能令一切凡夫衆生至須陀洹生大苦惱。若能繫念善思惟者。雖遇此四不生衆苦。以是義故。思惟因緣則得近於大般涅槃。復次善男子。一切善法無不因是思惟而得。何以故。有人雖於無量無邊阿僧祇劫專心聽法。若不思惟終不能得阿耨多羅三藐三菩提。以是義故。思惟因緣則得近於大般涅槃。復次善男子。若有衆

不上三本俱無以字

名下同無爲字

常上同無若字

見同作是

---

生。信佛法僧無有變易而生恭敬。當知皆是繫念思惟因緣力故。因得斷除一切煩惱。以是義故。思惟因緣則得近於大般涅槃。云何菩薩如法修行。善男子。斷諸惡法修習善法。是名菩薩如法修行。復次云何如法修行。見一切法空無所有無常無樂無我無淨。以是見故。寧捨身命不犯禁戒。是名菩薩如法修行。復次云何如法修行。修有二種。一者眞實。二者不實。不實者不知涅槃佛性如來法僧實相虛空等相。是名不實。云何眞實。能知涅槃佛性如來法僧實相虛空等相。是名眞實。云何名爲知涅槃相。涅槃之相凡有八事。何等爲八。一者盡。二善性。三實。四眞。五常。六樂。七我。八淨。是名涅槃。復有八事。何等爲八。一者解脫。二者善性。三者不實。四者不眞。五者無常。六者無樂。七者無我。八者無淨。復有六相。一者解脫。二者善性。三者不實。四者不眞。五者安樂。六者淸淨。若有衆生。依世俗道斷煩惱者。如是涅槃則有八事解脫不實。何以故。|以不常故。以無常故則無有實。無有實故則無有眞。雖斷煩惱以還起故。無常無我無樂無淨。是名涅槃解脫八事。云何六相。聲聞緣覺斷煩惱故。名爲解脫。而未能得阿耨多羅三藐三菩提故。名|爲不實。以不實故名爲不眞。未來之世當得阿耨多羅三藐三菩提。故名無常。以得無漏八聖道故。名爲淨樂。善男子。若如是知是知涅槃。不名佛性如來法僧實相虛空。云何菩薩知於佛性。佛性有六。何等爲六。一常二淨三實四善五當見六眞。復有七事。一者可證。餘六如上。是名菩薩知於佛性。云何菩薩知如來相。如來卽是覺相善相。常樂我淨解脫眞實示道可見。是名菩薩知如來相。云何菩薩知於法相。法者若善不善。若常不常。若樂不樂。若我無我。若淨不淨。若知不知。若解不解。若眞不眞。若修不修。若師非師。若實不實。是名菩薩知於法相。云何菩薩知於僧相。僧者|若常樂我淨。是弟子相可見之相善眞不實。何以故。一切聲聞得佛道故。何故名眞。悟法性故。是名菩薩知於僧相。云何菩薩知於實相。實相者若常無常。若樂無樂。若我無我。若淨無淨。若善不善。若有若無。若涅槃非涅槃。若解脫非解脫。若知不知。若斷不斷。若證不證。若修不修。若見不見。是名實相。非是涅槃佛性如來法僧虛空。是名菩薩因修如是大涅槃。故知於涅槃佛性如來法僧實相虛空等法差別之相。善男子。菩薩摩訶薩修大涅槃微妙經典。不見虛空。何以故。佛及菩薩雖有五眼所不見故。|唯有慧眼乃能見之。慧眼所見無法可見。故名爲見。若|見無物名虛空者。如是虛空乃名爲實。以是實故則名常無。以

礙同作閡下同○法元明俱作性

高上三本俱無光明遍照四字

悒宋作邑

涅上三本俱無是字

常無故無樂我淨。善男子。空名無法。無法名空。譬如世間無物名空。虛空之性亦復如是。無所有故名爲虛空。善男子。衆生之性與虛空性俱無實性。何以故。如人說言。除滅有物然後作空。而是虛空實不可作。何以故。無所有故。以無有故當知無空。是虛空性。若可作者則名無常。若無常者不名虛空。善男子。如世間人說言虛空無色無礙常不變易。是故世稱虛空之法爲第五大。善男子。而是虛空實無有性。以光明故。故名虛空。實無虛空。猶如世諦實無其性。爲衆生故說有世諦。善男子。涅槃之體亦復如是。無有住處。直是諸佛斷煩惱處。故名涅槃。涅槃卽是常樂我淨。涅槃雖樂非是受樂。乃是上妙寂滅之樂。諸佛如來有二種樂。一寂滅樂。二覺知樂。實相之體有三種樂。一者受樂。二寂滅樂。三覺知樂。佛性一樂以當見故。得阿耨多羅三藐三菩提時名菩提樂。爾時光明遍照高貴德王菩薩摩訶薩白佛言。世尊。若煩惱斷處是涅槃者。是事不然。何以故。如來往昔初成佛道。至尼連禪河邊。爾時魔王與其眷屬到於佛所而作是言。世尊。涅槃時到。何故不入。佛告魔王。我今未有多聞弟子善持禁戒聰明利智能化衆生。是故不入。若言煩惱斷處是涅槃者。諸菩薩等於無量劫已斷煩惱。何故不得稱爲涅槃。俱是斷處。何緣獨稱諸佛有之菩薩無耶。若斷煩惱非涅槃者。何故如來昔告生名婆羅門言。我今此身卽是涅槃。如來又時在毘舍離國。魔復啓請。如來。昔以未有弟子多聞持戒聰明利智能化衆生。不入涅槃。今已具足何故不入。如來爾時卽告魔言。汝今莫生悒遲之想。却後三月吾當涅槃。世尊。若使滅度非涅槃者。何故如來自期三月當般涅槃。世尊。若斷煩惱是涅槃者。如來往昔初在道場菩提樹下。斷煩惱時便是涅槃。何故復言却後三月當般涅槃。世尊。若使爾時是涅槃者。云何方爲拘尸那城諸力士等。說言後夜當般涅槃。如來誠實云何發是虛妄之言。爾時世尊告光明遍照高貴德王菩薩摩訶薩言。善男子。若言如來得廣長舌。當知如來於無量劫已離妄語。一切諸佛及諸菩薩。凡所發言誠諦無虛。善男子。如汝所言。波旬往昔啓請於我入涅槃者。善男子。而是魔王眞實不知涅槃定相。何以故。波旬意謂不化衆生默然而住便是涅槃。善男子。譬如世人見人不言無所造作。便謂是人如死無異。魔王波旬亦復如是。意謂如來不化衆生默無所說。便謂如來入般涅槃。善男子。如來不說佛法衆僧無差別相。唯說常住淸淨二法無差別耳。善男子。佛亦不說佛及佛性涅槃無差別相。唯說常恒不變

上明作尚
亦三本俱作即
悒元作邑
尸下三本俱無那字○焰同作炎
玄宮作懸

無差別耳。善男子。佛亦不說涅槃實相無差別相。唯說常有實不變易無差別耳。善男子。爾時我諸聲聞弟子生於諍訟。如拘睒彌諸惡比丘。違反我教多犯禁戒。受不淨物貪求利養。向諸白衣而自讚歎我得無漏。謂須陀洹果乃至我得阿羅漢果。毀辱他人。於佛法僧戒律和上不生恭敬。公於我前言如是物佛聽畜。如是等物佛不聽畜我亦言。如是等物我實不聽。復反我言。如是等物實是佛聽。如是惡人不信我言。爲是等故我告波旬汝莫悒遲。却後三月當般涅槃。善男子。因如是等惡比丘故。令諸聲聞受學弟子不見我身不聞我法。便言如來入於涅槃。唯諸菩薩能見我身常聞我法。是故不言我入涅槃。聲聞弟子雖復發言如來涅槃。而我實不入於涅槃。善男子。若我所有聲聞弟子說言如來入涅槃者。當知是人非我弟子是魔伴黨。邪見惡人非正見也。若言如來不入涅槃。當知是人眞我弟子非魔伴黨。正見之人非惡邪也。善男子。我初不見弟子之中有言如來不化衆生默然而住名般涅槃也。善男子。譬如長者多有子息捨至他方。未得還頃諸子咸謂父已長逝。而是長者實不終沒。諸子顚倒皆生沒想。聲聞弟子亦復如是。不見我故便謂如來已於拘尸那城娑羅雙樹間而般涅槃。而我實不般涅槃也。聲聞弟子生涅槃想。善男子。譬如明燈有人覆之餘不知者謂燈已滅。而是明焰實亦不滅。以不知故生於滅想。聲聞弟子亦復如是。雖有慧眼以煩惱覆令心顚倒。不見眞身而便妄生滅度之想。而我實不畢竟滅度。善男子。如生盲人不見日月。以不見故不知晝夜明暗之相。以不知故便說無有日月之實。實有日月盲者不見。以不見故而生倒想言無日月。聲聞弟子亦復如是。如彼生盲不見如來。便謂如來入於涅槃。如來實不入於涅槃。以倒想故生如是心。善男子。譬如雲霧覆蔽日月。癡人便言無有日月。日月實有直以覆故衆生不見。聲聞弟子亦復如是。以諸煩惱覆智慧眼不見如來。便言如來入於滅度。善男子。直是如來現嬰兒行非滅度也。善男子。如閻浮提日入之時衆生不見。以黑山障故。而是日性實無沒入。衆生不見生沒入想。聲聞弟子亦復如是。爲諸煩惱山所障故不見我身。以不見故便於如來生滅度想。而我實不畢竟永滅。是故我於毘舍離國告波旬言。却後三月我當涅槃。善男子。如來玄見迦葉菩薩却後三月善根當熟。亦見香山須跋陀羅竟安居已當至我所。是故我告魔王波旬。却後三月當般涅槃。善男子。有諸力士其數五百。終竟三月亦當得發阿耨多羅三藐三

梨同作離
乾同作揵
智同作聞○涅槃者同作於涅槃○㮈同作柰
目上同無大字○犍同作揵
槃下同無也字
滅三本倶作緘次同○槃又同作又槃
斷除同作除斷

菩提心。我爲是故告波旬言。却後三月當般涅槃。善男子。如純陀等及五百梨車菴羅果女。却後三月無上道心善根成熟。爲是等故我告波旬。却後三月當般涅槃。善男子。須那刹多親近外道尼乾子等。我爲說法滿十二年。彼人邪見不信不受。我知是人邪見根栽却後三月定可拔斷。我爲是故告波旬言。却後三月當般涅槃。善男子。何因緣故我於往昔尼連河邊告魔波旬。我今未有多智弟子。是故不得入涅槃者。我時欲爲五比丘等於波羅㮈轉法輪故。次復欲爲五比丘等。所謂耶奢富那毗摩羅闍憍梵波提須婆睺。次復欲爲郁伽長者等五十人。次復欲爲摩伽陀國頻婆娑羅王等無量人天。次復欲爲優樓頻螺迦葉門徒五百比丘。次復欲爲那提迦葉伽耶迦葉兄弟二人及五百弟子。次復欲爲舍利弗大目犍連等二百五十比丘轉妙法輪。是故我告魔王波旬不般涅槃。善男子。有名涅槃非大涅槃。云何涅槃非大涅槃。不見佛性而斷煩惱。是名涅槃非大涅槃。以不見佛性故無常無我唯有樂淨。以是義故。雖斷煩惱不得名爲大般涅槃也。若見佛性能斷煩惱。是則名爲大般涅槃。以見佛性故得名爲常樂我淨。以是義故。斷除煩惱亦得稱爲大般涅槃。善男子。涅者言不。槃者言滅。不滅之義名爲涅槃。槃又言覆。不覆之義乃名涅槃。槃言去來。不去不來乃名涅槃。槃者言取。不取之義乃名涅槃。槃言不定。定無不定乃名涅槃。槃言新故。無新故義乃名涅槃。槃言障礙。無障礙義乃名涅槃。善男子。有優樓迦迦毗羅弟子等言。槃者名相。無相之義乃名涅槃。善男子。槃者言有。無有之義乃名涅槃。槃名和合。無和合義乃名涅槃。槃者言苦。無苦之義乃名涅槃。善男子。斷煩惱者不名涅槃。不生煩惱乃名涅槃。善男子。諸佛如來煩惱不起。是名涅槃。所有智慧於法無礙。是爲如來。如來非是凡夫聲聞緣覺菩薩。是名佛性。如來身心智慧遍滿無量無邊阿僧祇土無所障礙。是名虛空。如來常住無有變易。名曰實相。以是義故。如來實不畢竟涅槃。是名菩薩修大涅槃微妙經典具足成就第七功德。善男子。云何菩薩摩訶薩修大涅槃微妙經典。具足成就第八功德。善男子。菩薩摩訶薩修大涅槃。除斷五事遠離五事。成就六事修習五事守護一事親近四事。信順一實心善解脫慧善解脫。善男子。云何菩薩斷除五事。所謂五陰。色受想行識。所言陰者其義何謂。能令衆生生死相續不離重擔。分散聚合三世所攝。求其實義了不可得。以是諸義故名爲陰。菩薩摩訶薩雖見色陰不見其相。何以故。於十色中推求其

之根本也同作諸惡根本

名元明俱作故

穀同作搆宋作搆並次同

性悉不可得。爲世界故說言爲陰。受有百八。雖見受陰初無受相。何以故受雖百八理無定實。是故菩薩不見受陰。想行識等亦復如是。菩薩摩訶薩深見五陰。是生煩惱之根本也。以是義故。方便令斷。云何菩薩遠離五事。所謂五見。何等爲五。一者身見。二者邊見。三者邪見。四者戒六。五者見取。因是五見生六十二見。因是諸見生死不絕。是故菩薩防護不近。云何菩薩成就六事。謂六念處。何等爲取。一者念佛。二者念法。三者念僧。四者念天。五者念施。六者念戒。是名菩薩成就六事。云何菩薩修習五事。所謂五定。一者知定。二者寂定。三者身心受快樂定。四者無樂定。五者首楞嚴定。修習如是五種定心。則得近於大般涅槃。是故菩薩勤心修習。云何菩薩守護一事。謂菩提心。菩薩摩訶薩常勤守護是菩提心。猶如世人守護一子。亦如瞎者護餘一目。如行曠野守護導者。菩薩守護菩提之心亦復如是。因護如是菩提心故。得阿耨多羅三藐三菩提。因得阿耨多羅三藐三菩提故。常樂我淨具足而有。卽是無上大般涅槃。是故菩薩守護一法。云何菩薩親近四事。謂四無量心。何等爲四。一者大慈。二者大悲。三者大喜。四者大捨。因是四心能令無量無邊衆生發菩提心。是故菩薩繫心親近。云何菩薩信順一實。菩薩了知一切衆生皆歸一道。一道者謂大乘也。諸佛菩薩爲衆生故分之爲三。是故菩薩信順不逆。云何菩薩心善解脫。貪恚癡心永斷滅故。是名菩薩心善解脫。云何菩薩慧善解脫。菩薩摩訶薩於一切法知無障礙。是名菩薩慧善解脫。因慧解脫昔所不聞而今得聞。昔所不見而今得見。昔所不到而今得到。爾時光明遍照高貴德王菩薩摩訶薩言。世尊。如佛所說。心解脫者是義不然。何以故。心本無繫。所以者何。是心本性不爲貪欲瞋恚愚癡諸結所縛。若本無繫云何而言心善解脫。世尊。若心本性不爲貪結之所繫者。何等因緣而能得繫。如人角本無乳相。雖加功力乳無由出。穀於乳者則不如是。加功雖少乳則多出。心亦如是。本無貪者今云何有。若本無貪後方有者。諸佛菩薩本無貪相今悉應有。世尊。譬如石女本無子相。雖加功力無量因緣子不可得。心亦如是本無貪相。雖造衆緣貪無由生。世尊。如鑽濕木火不可得。心亦如是。雖復鑽求貪不可得。云何貪結能繫於心。世尊。譬如壓沙油不可得。心亦如是。雖復壓之貪不可得。當知貪心二理各異。設復有之何能汙心。世尊。譬如有人安橛於空終不得住。安貪於心亦復如是。種種因緣不能令貪繫縛於心。世尊。若心無貪名解脫者。諸佛菩薩何故

不拔虛空中刺。世尊。過去世心不名解脫。未來世心亦無解脫。現在世心不與道共。何等世心名得解脫。世尊。如過去燈不能滅闇。未來世燈亦不滅闇。現在世燈復不滅闇。何以故。明之與闇二不竝故。心亦如是。云何而言心得解脫。世尊。貪亦是有若貪無者。見女相時不應生貪。若因女相而得生者。當知是貪眞實而有。以有貪故墮三惡道。世尊。譬如有人見畫女像亦復生貪。以生貪故得種種罪。若本無貪云何見畫而生於貪。若心無貪云何如來說言菩薩心得解脫。若心有貪云何見相然後方生。不見相者則不生耶。我今現見有惡果報。當知有貪瞋恚愚癡亦復如是。世尊。譬如衆生有身無我。而諸凡夫橫計我想。雖有我想不墮三趣。云何貪者於無女相而起女想。墮三惡道。世尊。譬如鑽木而生於火。然是火性衆緣中無。以何因緣而得生耶。世尊。貪亦如是。色中無貪。香味觸法亦復無貪。云何於色香味觸法而生貪耶。若衆緣中悉無貪者。云何衆生獨生於貪。諸佛菩薩而不生耶。世尊。心亦不定。若心定者無有貪欲瞋恚愚癡。若不定者云何而言心得解脫。貪亦不定。若不定者云何因之生三惡趣。貪者境界二俱不定。何以故。俱緣一色。或生於貪或生於瞋或生愚癡。是故貪者及與境界二俱不定。若俱不定。何故如來說言菩薩修大涅槃心得解脫。爾時世尊告光明遍照高貴德王菩薩摩訶薩言。善哉善哉。善男子。心亦不爲貪結所繫。亦非不繫。非是解脫非不解脫。非有非無。非現在非過去非未來。何以故。善男子。一切諸法無自性故。善男子。有諸外道作如是言。因緣和合則有果生。若衆緣中本無生性而能生者。虛空不生亦應生果。虛空不生非是因故。以衆緣中本有果性。是故合集而得生果。所以者何。如提婆達欲造牆壁則取泥土不取彩色。欲造畫像則集彩色不取草木。作衣取縷不取泥木。作舍取泥不取縷。以人取故。當知是中各能生果。以能生果故。當知因中必先有性。若無性者一物之中應當出生一切諸物。若是可取可作可出。當知是中必先有果。若無果者人則不取不作不出。唯有虛空無取無作故。能出生一切萬物。以有因故。如尼拘陀子生尼拘陀樹。乳有醍醐。縷中有布。泥中有瓶。善男子。一切凡夫無明所盲作是定說。色有著義。心有貪性。復言凡夫心有貪性亦解脫性。遇貪因緣心則生貪。若遇解脫心則解脫。雖作此說是義不然。有諸凡夫復作是言。一切因中悉無有果。因有二種。一者微細。二者麤大。細卽是常。麤則無常。從微細因轉成麤因。從此麤因轉復成果。麤無常故果亦

木三本俱作火

彩三本俱作采次同

卽同作則

因上同有於字

無常。善男子。有諸凡夫復作是言。心亦無因貪亦無因。以時節故則生貪心。如是等輩以不能知心因緣故。輪迴六趣具受生死。善男子。譬如𢤱犬繫之於柱終日繞柱不能得離。一切凡夫亦復如是。被無明𢤱繫生死柱繞二十五有不能得離。善男子。譬如有人墮於圊廁既得出已而復還入。如人病差還爲病因。如人涉路値空曠處既得過已而復還來。又如淨洗還塗泥土。一切凡夫亦復如是。已得解脫無所有處。唯未得脫非非想處。而復還來至三惡趣。何以故。一切凡夫唯觀於果不觀因緣。如犬逐塊不逐於人。凡夫之人亦復如是。唯觀於果不觀因緣。以不觀故。從非想退還三惡趣。善男子。諸佛菩薩終不定說因中有果因中無果及有無果非有非無果。若言因中先定有果及定無果定有無果定非有非無果。當知是等皆魔伴黨。繫屬於魔卽是愛人。如是愛人不能永斷生死繫縛。不知心相及以貪相。善男子。諸佛菩薩顯示中道。何以故。雖說諸法非有非無。而不決定。所以者何。因眼因色因明因心因念識則得生。是識決定不在眼中色中明中心中念中。亦非中間非有非無。從緣生故名之爲有無自性故名之爲無。是故如來說言諸法非有非無。善男子。諸佛菩薩終不定說心有淨性及不淨性。淨不淨心無住處故。從緣生貪故說非無。本無貪性故說非有。善男子。從因緣故心則生貪。從因緣故心則解脫。善男子。因緣有二。一者隨於生死。二者隨大涅槃。善男子。有因緣故。心共貪生共貪俱滅。有共貪生不共貪滅。有不共貪生共貪俱滅。有不共貪生不共貪滅。云何心共貪生共貪俱滅。善男子。若有凡夫未斷貪心修習貪心。如是之人心共貪生心共貪滅。一切衆生不斷貪心。心共貪生心共貪滅。如欲界衆生一切皆有初地味禪。若修不修常得成就。遇因緣故卽便得之。言因緣者謂火災也。一切凡夫亦復如是。若修不修心共貪生心共貪滅。何以故。不斷貪故。云何心共貪生不共貪滅。聲聞弟子有因緣故生於貪心。畏貪心故修白骨觀。是名心共貪生不共貪滅。復有心共貪生不共貪滅。如聲聞人未證四果。有因緣故生於貪心。證四果時貪心得滅。是名心共貪生不共貪滅。菩薩摩訶薩得不動地時。心共貪生不共貪滅。云何不共貪生共貪俱滅。若菩薩摩訶薩斷貪心已。爲衆生故示現有貪。以示現故能令無量無邊衆生諮受善法具足成就。是名不共貪生共貪俱滅。云何不共貪生不共貪滅。謂阿羅漢緣覺諸佛除不動地其餘菩薩。是名不共貪生不共貪滅。以是義故。諸佛菩薩不決定說心性本淨

心明作名○阿修三本俱作羅睺
黐宋作䵒次同
粘三本俱作黏次同○喩同作譬○不下同有能字○能下無同行字
擒宋作䵒元明俱作黐
和下三本俱有者字
種種外道同作外道種種○駞驢同作驢騾

性本不淨。善男子。是心不與貪結和合。亦復不與瞋癡和合。善男子。譬如日月雖爲烟塵雲霧及阿修羅之所覆蔽。以是因緣令諸衆生不能得見。雖不可見日月之性終不與彼五翳和合。心亦如是。以因緣故生於貪結。衆生雖說心與貪合。而是心性實不與合。若是貪心卽是貪性。若是不貪卽不貪性。不貪之心不能爲貪。貪結之心不能不貪。善男子。以是義故。貪欲之結不能汙心。諸佛菩薩永破貪結。是故說言心得解脫。一切衆生從因緣故生於貪結。從因緣故心得解脫。善男子。譬如雪山懸峻之處人與獼猴俱不能行。或復有處獼猴能行人不能行。或復有處人與獼猴二俱能行。善男子。人與獼猴能行處者。如諸獵師純以黐膠置之案上用捕獼猴。獼猴癡故往手觸之。觸已粘手。欲脫手故以腳蹋之。腳復隨著。欲脫腳故以口齧之。口復粘著。如是五處悉無得脫。於是獵師以杖貫之負還歸家。雪山嶮處譬佛菩薩所得正道。獼猴者譬諸凡夫。獵師者喩魔波旬。黐膠者譬貪欲結。人與獼猴俱不行者。譬諸凡夫魔王波旬俱不能行。獼猴能行人不能行者。譬諸外道有智慧者諸惡魔等雖以五欲不能繫縛。人與獼猴俱能行者。一切凡夫及魔波旬。常處生死不能修行。凡夫之人五欲所縛。令魔波旬自在將去。如彼獵師擒捕獼猴負之歸家。善男子。譬如國王安住己界身心安樂。若至他界則得衆苦。一切衆生亦復如是。若能自住於己境界則得安樂。若至他界則遇惡魔受諸苦惱。自境界者謂四念處。他境界者謂五欲也。云何名爲繫屬於魔。有諸衆生無常見常常見無常。苦見於樂樂見於苦。不淨見淨淨見不淨。無我見我我見無我。非實解脫妄見解脫。眞實解脫見非解脫。非乘見乘乘見非乘。如是之人名繫屬魔。繫屬魔者心不淸淨。復次善男子。若見諸法眞實是有總別定相。當知是人若見色時便作色相。乃至見識亦作識相。見男男相見女女相見日日相見月月相見歲歲相。見陰陰相見入入相見界界相。如是見者名繫屬魔。繫屬魔者心不淸淨。復次善男子。若見我是色色中有我我中有色色屬於我。乃至見我是識識中有我我中有識識屬於我。如是見者繫屬於魔非我弟子。善男子。我聲聞弟子遠離如來十二部經。修習種種外道典籍。不修出家寂滅之業。純營世俗在家之事。何等名爲在家之事。受畜一切不淨之物奴婢田宅象馬車乘駞驢雞犬獼猴豬羊種種穀麥。遠離師僧親附白衣違反聖教。向諸白衣作如是言。佛聽比丘受畜種種不淨之物。是名修習在家之事。有諸弟子不爲涅槃但

酤同作沽

不同作非

爲利養。親近聽受十二部經。招提僧物及僧鬘物。衣著貪噉如自己有。慳惜他家及以稱譽。親近國王及諸王子。卜筮吉凶推步盈虛。圍棊六博摴蒱投壺。親比丘尼及諸處女。畜二沙彌。常遊屠獵酤酒之家及旃陀羅所住之處。種種販賣手自作食。受使隣國通致信命。如是之人當知卽是魔之眷屬非我弟子。以是因緣心共貪生心共貪滅。乃至癡心共生共滅亦復如是。善男子。以是因緣心性不淨亦非不淨。是故我說心得解脫。若有不受不畜一切不淨之物。爲大涅槃受持讀誦十二部經書寫解脫。當知是等眞我弟子。不行惡魔波旬境界。卽是修習三十七品。以修習故不共貪生不共貪滅。是名菩薩修大涅槃微妙經典具足成就第八功德

# 大般涅槃經卷第二十三

光明遍照高貴德王菩薩品之五

# 大般涅槃經卷第二十四

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

〔麗士〕〔宋輔〕〔元輔〕〔明樹〕

## 光明遍照高貴德王菩薩品之六

復次善男子。云何菩薩摩訶薩修大涅槃微妙經典。具足成就第九功德。善男子。菩薩摩訶薩修大涅槃微妙經典。初發五事悉得成就。何等爲五。一者信。二者直心。三者戒。四者親近善友。五者多聞。云何爲信。菩薩摩訶薩信於三寶施有果報。信於二諦一乘之道更無異趣。爲諸衆生速得解脫。諸佛菩薩分別爲三。信第一義諦信善方便。是名爲信。如是信者若諸沙門若婆羅門若天魔梵。一切衆生所不能壞。因是信故得聖人性。修行布施若多若少悉得近於大般涅槃不墮生死。戒聞智慧亦復如是。是名爲信。雖有是信而亦不見。是爲菩薩修大涅槃成就初事。云何直心。菩薩摩訶薩於諸衆生作質直心。一切衆生若遇因緣則生諂曲。菩薩不爾。何以故。善解諸法悉因緣故。菩薩摩訶薩雖見衆生諸惡過咎終不說之。何以故。恐生煩惱。若生煩惱則墮惡趣。如是菩薩若見衆生有少善事則讚歎之。云何爲善。所謂佛性。讚佛性故令諸衆生發阿耨多羅三藐三菩提心。爾時光明遍照高貴德王菩薩摩訶薩白佛言。世尊。如佛所說。菩薩摩訶薩讚歎佛性。令無量衆生發阿耨多羅三藐三菩提心。是義不然。何以故。如來初開涅槃經時。說有三種。一者若有病人得良醫藥及瞻病者病則易差。如其不得則不可愈。二者若得不得悉不可差。三者若得不得悉皆可差。一切衆生亦復如是。若遇善友諸佛菩薩聞說妙法。能發阿耨多羅三藐三菩提心。如其不遇則不能發。所謂須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢辟支佛。二者雖遇善友諸佛菩薩聞說妙法亦不能發。若其不遇亦不能發。謂一闡提。三者若遇不遇一切悉能發阿耨多羅三藐三菩提心所謂菩薩。若言遇與不遇悉發阿耨多羅三藐三菩提心者。如來今者云何說言。因讚佛性令諸衆生發阿耨多

可三本俱作自

提下同無耶字

提下同無心字

丈下三本俱有性字

河同作海

先同作上下同

羅三藐三菩提心。世尊。若遇善友諸佛菩薩聞說妙法及以不遇。悉不能發阿耨多羅三藐三菩提心。當知是義亦復不然。何以故。如是之人當得阿耨多羅三藐三菩提故。一闡提輩以佛性故。若聞不聞悉亦當得阿耨多羅三藐三菩提故。世尊。如佛所說。何等名爲一闡提耶。謂斷善根。如是之義亦復不然。何以故。不斷佛性故。如是佛性理不可斷。云何佛說斷諸善根。如佛往昔說十二部經。善有二種。一者常。二者無常。常者不斷。無常者斷。無常可斷故墮地獄。常不可斷何故不遮。佛性不斷非一闡提。如來何故作如是說言一闡提。世尊。若因佛性發阿耨多羅三藐三菩提心。何故如來廣爲衆生說十二部經。世尊。譬如四河出阿耨達池。若有天人諸佛世尊。說言是河不入大海當還本源無有是處。菩提之心亦復如是。有佛性者。若聞不聞。若戒非戒。若施非施。若修不修。若智非智。悉皆應得阿耨多羅三藐三菩提。世尊。如優陀延山日從中出至于正南。日若念言我不至西還東方者。無有是處。佛性亦爾。若不聞不戒不施不修不智不得阿耨多羅三藐三菩提者。無有是處。世尊。諸佛如來說因果性非有非無。如是之義是亦不然。何以故。如其乳中無酪性者則無有酪。尼拘陀子無五丈者。則不能生五丈之質。若佛性中無阿耨多羅三藐三菩提樹者。云何能生阿耨多羅三藐三菩提樹。以是義故。所說因果非有非無如是之義云何相應。爾時世尊讚言。善哉善哉。善男子。世有二人。甚爲希有如優曇花。一者不行惡法。二者有罪能悔。如是之人甚爲希有。復有二人。一者作恩。二者念恩。復有二人。一者諮受新法。二者溫故不忘。復有二人。一者造新。二者修故。復有二人。一樂聞法。二樂說法。復有二人。一善問難。二善能答。善問難者汝身是也。善能答者謂如來也。善男子。因是善問卽得轉于無上法輪。能枯十二因緣大樹。能度無邊生死大河。能與魔王波旬共戰。能摧波旬所立勝幢。善男子。如我先說。三種病人値遇良醫瞻病好藥。及以不遇病悉得差。是義云何。若得不得謂定壽命。所以者何。是人已於無量世中修三種善。謂上中下。以修如是三種善故得定壽命。如鬱單越人壽命千年。有遇病者若得良醫好藥瞻病。及以不得悉皆得差。何以故。得定命故。善男子。如我所說。若有病人得遇良醫好藥瞻病病得除差。若不遇者則不得差。是義云何。善男子。如是之人壽命不定。命雖不盡有九因緣能夭其壽。何等爲九。一者知食不安而反食之。二者多食。三者宿食未消而復更食。四者大小便利不隨時節。五者病時

提下同無心字

不下同無能字不具信三本俱作信不具

非無常同作是常二字

言同作王

不隨醫教。六者不隨瞻病教勅。七者強耐不吐。八者夜行。以夜行故惡鬼打之。九者房室過差。以是緣故。我說病者若遇醫藥病則可差。若不遇者則不可愈。善男子。如我先說。若遇不遇俱不差者。是義云何。有人命盡若遇不遇悉不可差。何以故。以命盡故。以是義故我說病人若遇醫藥及以不遇悉不得差。衆生亦爾。發菩提心者若遇善友諸佛菩薩諮受深法。若不遇之皆悉當成。何以故。以其能發菩提心故。如鬱單越人得定壽命。如我所說。從須陀洹至辟支佛。若聞善友諸佛菩薩所說深法。則發阿耨多羅三藐三菩提心。若不值遇諸佛菩薩聞說深法。則不能發阿耨多羅三藐三菩提心。如不定命以九因緣命則中天。如彼病人值遇醫藥病則得差。若不遇者病則不差。是故我說。遇佛菩薩聞說深法則能發心。若不值遇則不能發。如我先說。若遇善友諸佛菩薩聞說深法。若不值遇俱不能發。是義云何。善男子。一闡提輩若遇善友諸佛菩薩聞說深法及以不遇。俱不得離一闡提心。何以故。斷善法故。一闡提輩亦得阿耨多羅三藐三菩提。所以者何。若能發於菩提之心。則不復名一闡提也。善男子。以何緣故。說一闡提得阿耨多羅三藐三菩提。一闡提輩實不能得阿耨多羅三藐三菩提。如命盡者雖遇良醫好藥瞻病不能得差。何以故。以命盡故。善男子。一闡名信。提名不具。不具信故名一闡提。佛性非信。衆生非具。以不具故云何可斷。一闡名善方便。提名不具。修善方便不具足故名一闡提。佛性非是修善方便。衆生非具。以不具故云何可斷。一闡名進。提名不具。進不具故名一闡提。佛性非進。衆生非具。以不具故云何可斷。一闡名念。提名不具。念不具故名一闡提。佛性非念。衆生非具。以不具故云何可斷。一闡名定。提名不具。定不具故名一闡提。佛性非定。衆生非具。以不具故云何可斷。一闡名慧。提名不具。慧不具故名一闡提。佛性非慧。衆生非具。以不具故云何可斷。一闡名無常善。提名不具。以無常善不具足故名一闡提。佛性非無常非善非不善。何以故。善法要從方便而得。而是佛性非方便得。是故非善。何故復名非不善耶。能得善果故。善果卽是阿耨多羅三藐三菩提。又善法者生已得故。而是佛性非生已得。是故非善。以斷生得諸善法故名一闡提。善男子。如汝所言。若一闡提有佛性者。云何不遮地獄之罪。善男子。一闡提中無有佛性。善男子。譬如有王聞箜篌音。其聲淸妙心卽耽著。喜樂愛念情無捨離。卽告大臣。如是妙音從何處出。大臣答言。如是妙音從箜篌出。王復語言。持是聲來。爾時

折同作折
耶三本俱作乎
搆同作構
千同作十
說於同作歎說
揵同作犍下同
㮈同作柰

大臣卽持箜篌置於王前．而作是言．大王當知．此卽是聲．王語箜篌．出聲出聲．而是箜篌聲亦不出．爾時大王卽斷其絃．聲亦不出．取其皮木悉皆折裂．推求其聲了不能得．爾時大王卽瞋大臣．云何乃作如是妄語．大臣白王．夫取聲者法不如是．應以衆緣善巧方便聲乃出耳．衆生佛性亦復如是．無有住處．以善方便故得可見．以可見故得阿耨多羅三藐三菩提．一闡提輩不見佛性．云何能遮三惡道罪．善男子．若一闡提信有佛性．當知是人不至三趣．是亦不名一闡提也．以不自信有佛性故卽墮三趣．墮三趣故名一闡提．善男子．如汝所說．若乳無酪性不應出酪．尼拘陀子無五丈性．則不應有五丈之質．愚癡之人作如是說．智者終不發如是言．何以故．以無性故．善男子．如其乳中有酪性者．不應復假衆緣力也．善男子．如水乳雜臥至一月終不成酪．若以一渧頗求樹汁．投之於中卽便成酪．若本有酪何故待緣．衆生佛性亦復如是．假衆緣故則便可見．假衆緣故得成阿耨多羅三藐三菩提．若待衆緣然後成者卽是無性．以無性故能得阿耨多羅三藐三菩提．善男子．以是義故．菩薩摩訶薩常讚人善不訟彼缺．名質直心．復次善男子．云何菩薩質直心耶．菩薩摩訶薩常不犯惡．設有過失卽時懺悔．於師同學終不覆藏．慚愧自責不敢復作．於輕罪中生極重想．若人詰問答言實犯．復問是罪爲好不好．答言不好．復問是罪爲善不善．答言不善．復問是罪是善果耶不善果耶．答言是罪實非善果．又問是罪誰之所造．將非諸佛法僧所作．答言非佛法僧我所作也．乃是煩惱之所搆集．以直心故信有佛性．信佛性故則不得名一闡提也．以直心故名佛弟子．若受衆生衣服飮食臥具醫藥種各千萬不足爲多．是名菩薩質直心也．云何菩薩修治於戒．菩薩摩訶薩受持禁戒．不爲生天不爲恐怖．乃至不受狗戒雞戒牛戒雉戒．不作破戒不作缺戒不作瑕戒不作雜戒．不作聲聞戒．受持菩薩摩訶薩戒尸羅波羅蜜戒．得具足戒不生憍慢．是名菩薩修大涅槃具第三戒．云何菩薩親近善友．菩薩摩訶薩常爲衆生．說於善道不說惡道．說於惡道非善果報．善男子．我身卽是一切衆生眞善知識．是故能斷富伽羅婆羅門所有邪見．善男子．若有衆生親近我者．雖有應生地獄因緣卽得生天．如須那刹多等應墮地獄．以見我故卽得斷除地獄因緣生於色天．雖有舍利弗目揵連等．不名衆生眞善知識．何以故．生一闡提心因緣故．善男子．我昔住於波羅㮈國時．舍利弗教二弟子．一觀白骨一令數息．經歷多年皆不得定．

嘖同作責○顚宋元俱作傎下同○浣三本俱作澣下同

斷同作之

斷宋元俱作斯

薩下三本俱有摩訶薩三字○薩下同無摩訶薩三字次同○部下同有經字○唯明作惟下同

以是因緣卽生邪見。言無涅槃無漏之法。若其有者我應得之。何以故。我能善持所受戒故。我於爾時見是比丘生此邪心。喚舍利弗而呵嘖之。汝不善教。云何乃爲是二弟子顚倒說法。汝二弟子其性各異。一主浣衣。一是金師。金師之子應敎數息。浣衣之人應敎骨觀。以汝錯敎令是二人生於惡邪。我於爾時爲是二人如應說法。二人聞已得阿羅漢果。是故我爲一切衆生眞善知識。非舍利弗目揵連等。若使衆生有極重結得遇我者。我以方便卽爲斷之。如我弟難陀有極重欲。我以種種善巧方便而爲除斷。鴦掘魔羅有重瞋恚。以見我故瞋恚卽斷。阿闍世王有重愚癡。以見我故癡心卽滅。如婆熈伽長者。於無量劫積集成就極重煩惱。以見我故卽便斷滅。設有弊惡斷下之人。親近於我作弟子者。以是因緣。一切人天恭敬愛念。尸利毱多邪見熾盛。因見我故邪見卽滅。因見我故斷地獄因作生天緣。如氣噓旃陀羅。命垂終時。因見我故還得壽命。如憍尸迦狂心錯亂。因見我故還得本心。如瘦瞿曇彌。屠家之子。常作惡業。以見我故卽便捨離。如闡提比丘。因見我故寧捨身命不毀禁戒。如草繫比丘。以是義故。阿難比丘說半梵行名善知識。我言不爾。具足梵行乃名善知識。是名菩薩修大涅槃具足第四親善知識。云何菩薩具足多聞。菩薩摩訶薩爲大涅槃十二部經書寫讀誦分別解說。是名菩薩具足多聞。除十一部唯毗佛略。受持讀誦書寫解說。亦名菩薩具足多聞。除十二部經。若能受持是大涅槃微妙經典。書寫讀誦分別解說。是名菩薩具足多聞。除是經典具足全體。若能受持一四句偈。復除是偈。若能受持如來常住性無變易。是名菩薩具足多聞。復除是事。若知如來常不說法。亦名菩薩具足多聞。何以故。法無性故。如來雖說一切諸法常無所說。是名菩薩修大涅槃成就第五具足多聞。善男子。若有善男子善女人。爲大涅槃具足成就如是五事。難作能作。難忍能忍。難施能施。云何菩薩難作能作。若聞有人食一胡麻得阿耨多羅三藐三菩提者。信是語故乃至無量阿僧祇劫常食一麻。若聞入火得阿耨多羅三藐三菩提者。於無量劫在阿鼻獄入熾火聚。是名菩薩難作能作。云何菩薩難忍能忍。若聞受苦手杖刀石斫打因緣得大涅槃。卽於無量阿僧祇劫身具受之不以爲苦。是名菩薩難忍能忍。云何菩薩難施能施。若聞能以國城妻子頭目髓腦惠施於人得阿耨多羅三藐三菩提者。卽於無量阿僧祇劫。以其所有國城妻子頭目髓腦惠施於人。是名菩薩難施能施。菩薩雖復難作能作。終不

施能三本俱作忍雖

「同無性字

念言是我所作.難施能施亦復如是.善男子.譬如父母唯有一子愛之甚重.以好衣裳上妙甘饍.隨時將養令無所乏.設令其子於父母所起輕慢心惡口罵辱.父母愛故不生瞋恨.亦不念言我與是兒衣服飲食.菩薩摩訶薩亦復如是.視諸衆生猶如一子.若子遇病父母亦病.爲求醫藥勤加救療.病既差已終不生念.我爲是兒療治病苦.菩薩亦爾.見諸衆生遇煩惱病.生愛念心而爲說法.以聞法故諸煩惱斷.煩惱斷已終不念言.我爲衆生斷諸煩惱.若生此念終不得成阿耨多羅三藐三菩提.唯作是念.無一衆生我爲說法令斷煩惱.菩薩摩訶薩於諸衆生不瞋不喜.何以故.善能修習空三昧故.菩薩若修空三昧者.當於誰所生瞋生喜.善男子.譬如山林猛火所焚若人所伐或爲水漂.而是林木當於誰所生瞋生喜.菩薩摩訶薩亦復如是.於諸衆生無瞋無喜.何以故.修空三昧故.爾時光明遍照高貴德王菩薩摩訶薩白佛言.世尊.一切諸法性自空耶.空空故空.若性自空者.不應修空然後見空.云何如來言以修空而見空耶.若性自不空.雖復修空不能令空.善男子.一切諸法性本自空.何以故.一切法性不可得故.善男子.色性不可得.云何色性.色性者非地水火風不離地水火風.非靑黃赤白不離靑黃赤白.非有非無.云何當言色有自性.以性不可得故說爲空.一切諸法亦復如是.以相似相續故.凡夫見已說言諸法性不空寂.菩薩摩訶薩具足五事.是故見法性本空寂.善男子.若有沙門及婆羅門.見一切法性不空者.當知是人非是沙門非婆羅門.不得修習般若波羅蜜.不得入於大般涅槃.不得現見諸佛菩薩.是魔眷屬.善男子.一切諸法性本自空.亦因菩薩修習空故見諸法空.善男子.如一切法性無常故滅能滅之.若非無常滅不能滅.有爲之法有生相故生能生之.有滅相故滅能滅之.一切諸法有苦相故苦能令苦.善男子.如鹽性鹹能鹹異物.石蜜性甘能甘異物.苦酒性酢能酢異物.薑本性辛能辛異物.訶梨勒苦能苦異物.菴羅果淡能淡異物.毒性能害令異物害.甘露之性令人不死.若合異物亦能不死.菩薩修空亦復如是.以修空故見一切法性皆空寂.光明遍照高貴德王菩薩復作是言.世尊.若鹽能令非鹹作鹹.修空三昧若如是者.當知是定非善非妙其性顚倒.若空三昧唯見空者.空是無法爲何所見.善男子.是空三昧見不空法能令空寂然非顚倒.如鹽非鹹作鹹.是空三昧亦復如是不空作空.善男子.貪是有性非是空性.貪若是空衆生不應以是因緣墮於地獄.若墮地獄云何貪

性當是空耶。善男子。色性是有。何等色性所謂顚倒。以顚倒故衆生生貪。若是色性非顚倒者。云何能令衆生生貪。以生貪故當知色性非不是有。以是義故。修空三昧非顚倒也。善男子。一切凡夫若見女人。卽生女相。菩薩不爾。雖見女人不生女相。以不生相貪則不生。貪不生故非顚倒也。以世間人見有女故。菩薩隨說言有女人。若見男時說言是女。則是顚倒。是故我爲闍提說言。汝婆羅門。若以晝爲夜是卽顚倒。以夜爲晝是亦顚倒。晝爲晝相夜爲夜相。云何顚倒。善男子。一切菩薩住九地者見法有性。以是見故不見佛性。若見佛性則不復見一切法性。以修如是空三昧故不見法性。以不見故則見佛性。諸佛菩薩有二種說。一者有性。二者無性。爲衆生故說有法性。爲諸賢聖說無法性。爲不空者見法空故。修空三昧令得見空。無法性者亦修空故空。以是義故修空見空。善男子。汝言見空空是無法爲何見者。善男子。如是如是。菩薩摩訶薩實無所見。無所見者卽無所有。無所有者卽一切法。菩薩摩訶薩修大涅槃。於一切法悉無所見。若有見者不見佛性。不能修習般若波羅蜜。不得入於大般涅槃。是故菩薩見一切法性無所有。善男子。菩薩不但因見三昧而見空也。般若波羅蜜亦空。禪波羅蜜亦空。毗梨耶波羅蜜亦空。羼提波羅蜜亦空。尸波羅蜜亦空。檀波羅蜜亦空。色亦空。眼亦空。識亦空。如來亦空。大般涅槃亦空。是故菩薩見一切法皆悉是空。是故我在迦毗羅城告阿難言。汝莫愁惱悲泣啼哭。阿難卽言。如來世尊我今親屬悉皆殄滅。云何當得不悲泣耶。如來與我俱生此城。俱同釋種親戚眷屬。云何如來獨不愁惱光顏更顯。善男子。我復告言。阿難。汝見迦毗眞實是有。我見空寂悉無所有。汝見釋種悉是親戚。我修空故悉無所見。以是因緣汝生愁苦。我身容顏益更光顯。諸佛菩薩修習如是空三昧故不生愁惱。是名菩薩修大涅槃微妙經典成就具足第九功德。善男子。云何菩薩修大涅槃微妙經典具足最後第十功德。善男子。菩薩修習三十七品。入大涅槃常樂我淨。爲諸衆生分別解說大涅槃經顯示佛性。若須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢辟支佛菩薩信是語者。悉得入於大般涅槃。若不信者輪迴生死。爾時光明遍照高貴德王菩薩白佛言。世尊。何等衆生於是經中不生恭敬。善男子。我涅槃後有聲聞弟子。愚癡破戒憙生鬪諍。捨十二部經。讀誦種種外道典籍文頌手筆。受畜一切不淨之物。言是佛聽。如是之人以好栴檀貿易凡木。以金易鍮石。銀易白鑞。絹易氀褐。以甘露味易於惡毒。云

色三本俱作是

法性乃至二種十七字宋在說有法性下

何下三本俱有所字

泣同作號

善上三本俱有復次二字

栴宋明俱作梅

下同○褐三本俱作氎下同
利同作供○若同作苦○擧同作譽
廣同作演○是同作時
見少三本俱作少見

何|梅檀貿易凡木.如我弟子爲供養故.向諸白衣演說經法.白衣情逸不喜聽聞.白衣處高比丘在下.兼以種種餚饍飲食而供給之.猶不肯聽.是名|梅檀貿易凡木.云何以金貿易鍮石.鍮石譬色聲香味觸.金以譬戒.我諸弟子以色因緣破所受戒.是名以金貿易鍮石.云何以銀易於白鑞.銀譬十善.鑞譬十惡.我諸弟子放捨十善行十惡法.是名以銀貿易白鑞.云何以絹貿易|褐.氎|褐以譬無慚無愧.絹譬慚愧.我諸弟子放捨慚愧習無慚愧.是名以絹貿易氎|褐.云何甘露貿易毒藥.毒藥以譬種種|利養.甘露以譬諸無漏法.我諸弟子爲利養故.向諸白衣|若自|擧讚言得無漏.是名甘露貿易毒藥.以如是等惡比丘故.是大涅槃微妙經典.廣行流布於閻浮提.當是之時有諸弟子.受持讀誦書寫是經.|廣說流布.當爲如是諸惡比丘之所殺害.|是惡比丘相與聚會共立嚴制.若有受持大涅槃經書寫讀誦分別說者.一切不得共住共坐談論語言.何以故.涅槃經者非佛所說.邪見所造.邪見之人卽是六師.六師所說非佛經典.所以者何.一切諸佛悉說諸法無常無我無樂無淨.若言諸法常樂我淨.云何當是佛所說經.諸佛菩薩聽諸比丘畜種種物.六師所說不聽弟子畜一切物.如是之義.云何當是佛之所說.諸佛菩薩不制弟子斷牛五味及以食肉.六師不聽食五種鹽五種牛味及以脂血.若斷是者云何當是佛之正典.諸佛菩薩演說三乘.而是經中純說一乘.謂大涅槃.如此之言云何當是佛之正典.諸佛畢竟入於涅槃.是經言佛常樂我淨不入涅槃.是經不在十二部數.卽是魔說非是佛說.善男子.如是之人雖我弟子.不能信順是涅槃經.善男子.當爾之時若有衆生.信此經典乃至半句.當知是人眞我弟子.因如是信卽見佛性入於涅槃.爾時光明遍照高貴德王菩薩白佛言.世尊.善哉善哉.如來今日善能開示大涅槃經.世尊.我因是事卽得悟解大涅槃經一句半句.以解一句至半句故|見少佛性.如佛所說.我亦當得入大涅槃.是名菩薩修大涅槃微妙經典具足成就第十功德

# 大般涅槃經卷第二十四

# 大般涅槃經卷第二十五

〔麗士〕〔宋輔〕〔元輔〕〔明樹〕

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

## 師子吼菩薩品第二十三之一

爾時佛告一切大衆。諸善男子。汝等若疑有佛無佛有法無法有僧無僧有苦無苦有集無集有滅無滅有道無道有實無實有我無我有樂無樂有淨無淨有常無常有乘無乘有性無性有衆生無衆生有有無有有眞無眞有因無因有果無果有作無作有業無業有報無報者。今恣汝問。吾當爲汝分別解說。善男子。我實不見若天若人若魔若梵若沙門若婆羅門有來問我不能答者。爾時會中有一菩薩名師子吼。即從座起𣪠容整服前禮佛足長跪叉手白佛言。世尊。我適欲問。如來大慈復垂聽許。爾時佛告諸大衆言。諸善男子。汝等今當於是菩薩深生恭敬尊重讚歎。應以種種香花伎樂瓔珞幡蓋衣服飲食臥具醫藥房舍殿堂而供養之迎來送去。所以者何。是人已於過去諸佛深種善根福德成就。是故今於我前欲師子吼。善男子。如師子王自知身力牙爪鋒鋩四足據地安住巖穴振尾出聲。若有能具如是諸相。當知是則能師子吼。眞師子王晨朝出穴頻申欠呿。四向顧望發聲震吼。爲十一事。何等十一。一爲欲壞實非師子詐作師子故。二爲欲試自身力故。三爲欲令住處淨故。四爲諸子知處所故。五爲羣輩無怖心故。六爲眠者得覺悟故。七爲一切放逸諸獸不放逸故。八爲諸獸來依附故。九爲欲調諸香象故。十爲教告諸子息故。十一爲欲莊嚴自眷屬故。一切禽獸聞師子吼。水性之屬潛沒深淵。陸行之類藏伏窟穴。飛者墮落。諸大香象怖走失糞。諸善男子。如彼野干雖逐師子至于百年。終不能作師子吼也。若師子子始滿三年則能哮吼如師子王。善男子。如來正覺智慧牙爪。四如意足六波羅蜜滿足之身。十力雄猛大悲爲尾。安住四禪淸淨窟宅。爲諸衆生而師子吼。摧破魔軍示衆十力。開佛行處爲諸邪見作歸依所。安撫生死怖

---

品目第上宋元俱有初字三下同無之一二字

樂無樂三本俱作苦無苦

𣪠元明俱作斂

人三本俱作菩薩二字〇爪同作齒〇鋩同作芒〇振宋作震〇申三本俱作伸下同

悟同作寤下同

諸同作大

衆三本俱作黨
礙同作閡下同
薩下同無摩訶薩三字
何下同無等字
善男子善哉善哉同作善哉善哉善男子
地下同無是名慧莊嚴五字
嚴下同無者字

畏。之衆覺悟無明睡眠衆生。行惡法者爲作悔心。開示邪見一切衆生。令知六師非師子吼故。破富蘭那等憍慢心故。爲令二乘生悔心故。爲教五住諸菩薩等生大力心故。爲令正見四部之衆於彼邪見四部徒衆不生怖畏故。從聖行梵行天行窟宅頻申而出。爲欲令彼諸衆生等破憍慢故。欠呿爲令諸衆生等生善法故。四向顧望爲令衆生得四無礙故。四足據地爲令衆生具足安住尸波羅蜜故。故師子吼。師子吼者名決定說。一切衆生悉有佛性。如來常住無有變易。善男子。聲聞緣覺雖復隨逐如來世尊無量百千阿僧祇劫。而亦不能作師子吼。十住菩薩若能修行是三行處。當知是則能師子吼。諸善男子。是師子吼菩薩摩訶薩。今欲如是大師子吼。是故汝等應當深心供養恭敬尊重讚歎。爾時世尊告師子吼菩薩摩訶薩言。善男子。汝若欲問今可隨意。師子吼菩薩摩訶薩白佛言。世尊。云何爲佛性。以何義故名爲佛性。何故復名常樂我淨。若一切衆生有佛性者。何故不見一切衆生所有佛性。十住菩薩住何等法不了了見。佛住何等法而了了見。十住菩薩以何等眼不了了見。佛以何眼而了了見。佛言。善男子。善哉善哉。若有人能爲法諮啓。則爲具足二種莊嚴。一者智慧。二者福德。若有菩薩具足如是二莊嚴者則知佛性。亦復解知名爲佛性。乃至能知十住菩薩以何眼見諸佛世尊以何眼見。師子吼菩薩言。世尊。云何名爲智慧莊嚴。云何名爲福德莊嚴。善男子。慧莊嚴者。謂從一地乃至十地。是名慧莊嚴。福德莊嚴者。謂檀波羅蜜乃至般若。非般若波羅蜜。復次善男子。慧莊嚴者。所謂諸佛菩薩。福德莊嚴者。謂聲聞緣覺九住菩薩。復次善男子。福德莊嚴者。有爲有漏有有有果報有礙非常。是凡夫法。慧莊嚴者。無爲無漏無有無果報無礙常住。善男子。汝今具足是二莊嚴。是故能問甚深妙義。我亦具足是二莊嚴能答是義。師子吼菩薩摩訶薩言。世尊。若有菩薩具足如是二莊嚴者。則不應問一種二種。云何世尊。說言能答一種二種。所以者何。一切諸法無一二種。一種二種者是凡夫相。佛言。善男子。若有菩薩無二種莊嚴。則不能知一種二種。若有菩薩具二莊嚴。則能解知一種二種。若言諸法無一二者。是義不然。何以故。若無一二云何得說一切諸法無一無二。善男子。若言一二是凡夫相。是乃名爲十住菩薩非凡夫也。何以故。一者名爲涅槃。二者名爲生死。何故一者名爲涅槃。以其常故。何故二者名爲生死。愛無明故。常涅槃者非凡夫相。生死二者亦非凡夫相。以是義故。具二莊嚴者能問能

名下三本俱有爲字　見上同無不字○三下同無者字○愍同作憫○如上同有善男子三字○問同作言　方便力同作諸方便○告同作語　渡同作度　苽同作爪

答。善男子。汝問云何爲佛性者。諦聽諦聽。吾當爲汝分別解說。善男子。佛性者名第一義空。第一義空名爲智慧。所言空者不見空與不空。智者見空及與不空常與無常苦之與樂我與無我。空者一切生死。不空者謂大涅槃。乃至無我者卽是生死。我者謂大涅槃。見一切空不見不空。不名中道。乃至見一切無我不見我者。不名中道。中道者名爲佛性。以是義故佛性常恒無有變易。無明覆故令諸衆生不能得見。聲聞緣覺見一切空不見不空。乃至見一切無我不見於我。以是義故不得第一義空。不得第一義空故不行中道。無中道故不見佛性。善男子。不見中道者凡有三種。一定樂行。二定苦行。三苦樂行。定樂行者。所謂菩薩摩訶薩憐愍一切諸衆生故。雖復處在阿鼻地獄如三禪樂。定苦行者。謂諸凡夫。苦樂行者。謂聲聞緣覺。聲聞緣覺行於苦樂作中道想。以是義故。雖有佛性而不能見。如汝所問。以何義故名佛性者。善男子。佛性者。卽是一切諸佛阿耨多羅三藐三菩提中道種子。復次善男子。道有三種。謂下上中。下者梵天無常謬見是常。上者生死無常謬見是常。三寶是常橫計無常。何故名上。能得最上阿耨多羅三藐三菩提故。中者名第一義空。無常見無常。常見於常。第一義空不名爲下。何以故。一切凡夫所不得故不名爲上。何以故。卽是上故。諸佛菩薩所修之道不上不下。以是義故名爲中道。復次善男子。生死本際凡有二種。一者無明。二者有愛。是二中間則有生老病死之苦。是名中道。如是中道能破生死故名爲中。以是義故。中道之法名爲佛性。是故佛性常樂我淨。以諸衆生不能見故。無常無樂無我無淨。佛性實非無常無樂無我無淨。善男子。譬如貧人家有寶藏是人不見以不見故無常無樂無我無淨。有善知識而語之言。汝舍宅中有金寶藏。何故如是貧窮困苦無常無樂無我無淨。卽以方便令彼得見。以得見故是人卽得常樂我淨。佛性亦爾衆生不見。以不見故無常無樂無我無淨。有善知識諸佛菩薩。以方便力種種敎告令彼得見。以得見故衆生卽得常樂我淨。復次善男子。衆生起見凡有二種。一者常見。二者斷見。如是二見不名中道。無常無斷乃名中道。無常無斷卽是觀照十二緣智。如是觀智是名佛性。二乘之人雖觀因緣。猶亦不得名爲佛性。佛性雖常以諸衆生無明覆故不能得見。又未能渡十二緣河。猶如兎馬。何以故。不見佛性故。善男子。是觀十二因緣智慧。卽是阿耨多羅三藐三菩提種子。以是義故。十二因緣名爲佛性。善男子。譬如胡苽名爲熱病。何以故。能爲熱

緣上三本俱無因字

唯明作惟下同

緣者三本俱作因緣

智下同無觀字

師上同無爾時二字

病作因緣故。十二因緣亦復如是。善男子。佛性者有因有因因。有果有果果。有因者即十二因緣。因因者即是智慧。有果者即是阿耨多羅三藐三菩提。果果者即是無上大般涅槃。善男子。譬如無明爲因諸行爲果行因識果。以是義故。彼無明體亦因亦因因。識亦果亦果果。佛性亦爾。善男子。以是義故。十二因緣不出不滅不常不斷非一非二不來不去非因非果。善男子。是因非果。如佛性是果非因。如大涅槃是因是果。如十二因緣所生之法非因非果。名爲佛性。非因果故常恒無變。以是義故。我經中說十二因緣其義甚深。無知無見不可思惟。乃是諸佛菩薩境界。非諸聲聞緣覺所及。以何義故甚深甚深。衆生業行不常不斷而得果報。雖念念滅而無所失。雖無作者而有作業。雖無受者而有果報。受者雖滅果不敗亡。無有慮知和合而有。一切衆生雖與十二因緣共行而不見知。不見知故無有終始。十住菩薩唯見其終不見其始。諸佛世尊見始見終。以是義故。諸佛了了得見佛性。善男子。一切衆生不能見於十二因緣。是故輪轉。善男子。如蠶作繭自生自死。一切衆生亦復如是。不見佛性故自造結業流轉生死。猶如拍毱。善男子。是故我於諸經中說。若有人見十二緣者即是見法。見法者即是見佛。佛者即是佛性。何以故。一切諸佛以此爲性。善男子。觀十二緣智凡有四種。一者下。二者中。三者上。四者上上。下智觀者不見佛性。以不見故得聲聞道。中智觀者不見佛性。以不見故得緣覺道。上智觀者見不了了。不了了故住十住地。上上智觀者見了了。故得阿耨多羅三藐三菩提道。以是義故。十二因緣名爲佛性。佛性者即第一義空。第一義空名爲中道。中道者即名爲佛。佛者名爲涅槃。爾時師子吼菩薩摩訶薩白佛言。世尊。若佛與佛性無差別者。一切衆生何用修道。佛言。善男子。如汝所問是義不然。佛與佛性雖無差別。然諸衆生悉未具足。善男子。譬如有人惡心害母害已生悔。三業雖善是人故名地獄人也。何以故。是人定當墮地獄故。是人雖無地獄陰界諸入。猶故得名爲地獄人。善男子。是故我於諸經中說。若見有人修行善者名見天人。修行惡者名見地獄。何以故。定受報故。善男子。一切衆生定得阿耨多羅三藐三菩提故。是故我說一切衆生悉有佛性。一切衆生眞實未有三十二相八十種好。以是義故。我於此經而說是偈

本有今無　本無今有　三世有法　無有是處

有同作得
提下元明俱無故字
曰三本俱作越
不下同有能字
得上同無能字
住明作地○畢同作事○欲元明俱作浴
彼三本俱作諸

善男子。有者凡有三種。一未來有。二現在有。三過去有。一切衆生未來之世當有阿耨多羅三藐三菩提。是名佛性。一切衆生現在悉有煩惱諸結。是故現在無有三十二相八十種好。一切衆生過去之世有斷煩惱。是故現在得見佛性。以是義故。我常宣說一切衆生悉有佛性。乃至一闡提等亦有佛性。一闡提等無有善法佛性亦善。以未來有故。一闡提等悉有佛性。何以故。一闡提等定當得成阿耨多羅三藐三菩提故。善男子。譬如有人家有乳酪。有人問言汝有酥耶。答言我有。酪實非酥。以巧方便定當得故。故言有酥。衆生亦爾悉皆有心。凡有心者定當得成阿耨多羅三藐三菩提。以是義故。我常宣說一切衆生悉有佛性。善男子。畢竟有二種。一者莊嚴畢竟。二者究竟畢竟。一者世間畢竟。二者出世畢竟。莊嚴畢竟者六波羅蜜。究竟畢竟者一切衆生所得一乘。一乘者名爲佛性。以是義故。我說一切衆生悉有佛性。一切衆生悉有一乘。以無明覆故不能得見。善男子。如鬱單曰三十三天果報覆故此間衆生不能得見。佛性亦爾。諸結覆故衆生不見。復次善男子。佛性者卽首楞嚴三昧。性如醍醐。卽是一切諸佛之母。以首楞嚴三昧力故。而令諸佛常樂我淨。一切衆生悉有首楞嚴三昧。以不修行故不得見。是故不能得成阿耨多羅三藐三菩提。善男子。首楞嚴三昧者有五種名。一者首楞嚴三昧。二者般若波羅蜜。三者金剛三昧。四者師子吼三昧。五者佛性。隨其所作處處得名。善男子。如一三昧得種種名。如禪名四禪。根名定根。力名定力。覺名定覺。正名正定。八大人覺名爲定覺。首楞嚴定亦復如是。善男子。一切衆生具足三定。謂上中下。上者謂佛性也。以是故言一切衆生悉有佛性。中者一切衆生具足初禪。有因緣時則能修習。若無因緣則不能修。因緣二種。一謂火災。二謂破欲界結。以是故言一切衆生悉具中定。下定者十大地中心數定也。以是故言一切衆生悉具下定。一切衆生悉有佛性。煩惱覆故不能得見。十住菩薩雖見一乘。不知如來是常住法。以是故言十住菩薩雖見佛性而不明了。善男子。首楞者名一切畢竟。嚴者名堅。一切畢竟而得堅固。名首楞嚴。以是故言首楞嚴定名爲佛性。善男子。我於一時住尼連禪河。告阿難言。我今欲洗。汝可取衣及以澡豆。我旣入水。一切飛鳥水陸之屬悉來觀我。爾時復有五百梵志來在河邊。因到我所各相謂言。云何而得金剛之身。若使瞿曇不說斷見。我當從其啓受齋法。善男子。我於爾時以他心智。知是梵志心之所念。告梵志言。云何謂我說於斷見。彼

有無同作無有又同

薩下三本俱無摩訶薩白佛五字○白下同無之異二字

譬如瞎者同作如眼膚瞖○目同作之○法下同無亦字○無我無樂同作無樂無我

藥同作果

則同作是

梵志言。瞿曇。先於處處經中說諸衆生悉有無我。既言無我。云何而言非斷見耶。若無我者。持戒者誰。破戒者誰。佛言。我亦不說一切衆生悉有無我。我常宣說一切衆生悉有佛性。佛性者豈非我耶。以是義故我不說斷。一切衆生不見佛性故。無常無我無樂無淨。如是則名說斷見也。時諸梵志聞說佛性即是我故。即發阿耨多羅三藐三菩提心。尋時出家修菩提道。一切飛鳥水陸之屬。亦發無上菩提之心。既發心已尋得捨身。善男子。是佛性者實非我也。為衆生故說名為我。善男子。如來有因緣故說無我為我。眞實無我。雖作是說無有虛妄。善男子。有因緣故說我為無我。而實有我。為世界故。雖說無我而無虛妄。佛性無我如來說我。以是常故。如來是我而說無我。得自在故。爾時師子吼菩薩摩訶薩白佛言。世尊。若一切衆生悉有佛性如金剛力士者。以何義故。一切衆生不能得見。佛言。善男子。譬如色法雖有靑黃赤白之異長短質像盲者不見。雖復不見。亦不得言無靑黃赤白長短質像。何以故。盲雖不見。有目見故。佛性亦爾。一切衆生雖不能見。十住菩薩見少分故。如來全見。十住菩薩所見佛性如夜見色。如來所見如晝見色。善男子。譬如瞎者見色不了。有善良醫而為治目。以藥力故得了了見。十住菩薩亦復如是。雖見佛性不能明了。以首楞嚴三昧力故能得明了。善男子。若有人見一切諸法無常無我無樂無淨。是非一切法亦無常無我無樂無淨。如是之人不見佛性。一切者名為生死。非一切者名為三寶。聲聞緣覺見一切法無常無我無樂無淨。非一切法亦見無常無我無樂無淨。以是義故不見佛性。十住菩薩見一切法無常無我無樂無淨。非一切法分見常樂我淨。以是義故。十分之中得見一分。諸佛世尊見一切法無常無我無樂無淨。非一切法見常樂我淨。以是義故。見於佛性如觀掌中阿摩勒菓。以是義故。首楞嚴定名為畢竟。善男子。譬如初月雖不可見不得言無。佛性亦爾。一切凡夫雖不得見亦不得言無佛性也。善男子。佛性者所謂十力四無所畏大悲三念處。一切衆生悉有三種。破煩惱故然後得見。一闡提等破一闡提。然後能得十力四無所畏大悲三念處。以是義故。我常宣說一切衆生悉有佛性。善男子。十二因緣一切衆生等共有之。亦內亦外。何等十二。過去煩惱名為無明。過去業者則名為行。現在世中初始受胎是名為識。入胎五分四根未具名為名色。具足四根未名觸時是名六入。未別苦樂是名為觸。染習一愛是名為受。習近五欲是名為愛。內外貪求是名為取。為內外

邏同作羅

以三本倶作果
○爲同作名

芽宋作牙下同

事起身口意業是名爲有．現在世識名未來生．現在名色六入觸受．名未來世老病死也．是名十二因緣．善男子．一切衆生雖有如是十二因緣或有未具．如歌羅邏時死則無十二．從生乃至老死得具十二．色界衆生無三種受三種觸三種愛無有老病．亦得名爲具足十二．無色衆生無色乃至無有老死．亦得名爲具足十二．以定得故．故名衆生平等具有十二因緣．善男子．佛性亦爾．一切衆生定當得成阿耨多羅三藐三菩提．是故我說一切衆生悉有佛性．善男子．雪山有草名爲忍辱．牛若食者則出醍醐．更有異草．牛若食者則無醍醐．雖無醍醐不可說言雪山之中無忍辱草．佛性亦爾．雪山者名爲如來．忍辱草者名大涅槃．異草者十二部經．衆生若能聽受諮啓大般涅槃則見佛性．十二部中雖不聞有．不可說言無佛性也．善男子．佛性者亦色非色非色非非色．亦相非相非相非非相．亦一非一非一非非一．非常非斷非非常非非斷．亦有亦無非有非無．亦盡非盡非盡非非盡．亦因亦果非因非果．亦義非義非義非非義．亦字非字非字非非字．云何爲色．金剛身故．云何非色．十八不共非色法故．云何非色非非色．色非色無定相故．云何爲相．三十二相故．云何非相．一切衆生相不現故．云何非相非非相．相非相不決定故．云何爲一．一切衆生悉一乘故．云何非一．說三乘故．云何非一非非一．無數法故．云何非常．從緣見故．云何非斷．離斷見故．云何非非常非非斷．無終始故．云何爲有．一切衆生悉皆有故．云何爲無．從善方便而得見故．云何非有非無．虛空性故．云何名盡．得首楞嚴三昧故．云何非盡．以其常故．云何非盡非非盡．一切盡相斷故．云何爲因．以了因故．云何爲果．以決定故．云何非因非果．以其常故．云何爲義．悉能攝取義無礙故．云何非義．不可說故．云何非義非非義．畢竟空故．云何爲字．有名種故．云何非字．名無名故．云何非字非非字．斷一切字故．云何非苦非樂．斷一切受故．云何非我．未能具得八自在故．云何非非我．以其常故．云何非我非非我．不作不受故．云何爲空．第一義空故．云何非空．以其常故．云何非空非非空．能爲善法作種子故．善男子．若有人能思惟解了大涅槃經如是之義．當知是人則見佛性．佛性者不可思議．乃是諸佛如來境界．非諸聲聞緣覺所知．善男子．佛性者非陰界入．非本無今有．非已有還無．從善因緣衆生得見．譬如黑鐵入火則赤出冷還黑．而是黑色非內非外．因緣故有．佛性亦爾．一切衆生煩惱火滅則得聞見．善男子．如種滅已芽則得生．而是芽性非內非

者有三　三本俱作有三種

有　上同無亦字

不知足不少欲　同作不少欲不知足

靜下宋無心不寂靜四字○集三本俱作習○瞋同作恚○不下宋無寂字

外。乃至花果亦復如是。從緣故有。善男子。是大涅槃微妙經典。成就具足無量功德之所成就。爾時師子吼菩薩摩訶薩言。世尊。菩薩具足成就幾法得見佛性而不明了。諸佛世尊成就幾法得了了見。善男子。菩薩具足成就十法。雖見佛性而不明了。云何爲十。一者少欲。二者知足。三者寂靜。四者精進。五者正念。六者正定。七者正慧。八者解脫。九者讚歎解脫。十者以大涅槃教化衆生。師子吼菩薩言。世尊。少欲知足有何差別。善男子。少欲者不求不取。知足者得少之時心不悔恨。少欲者少有所欲。知足者但爲法事心不愁惱。善男子。欲者有三。一者惡欲。二者大欲。三者欲欲。惡欲者。若有比丘心生貪欲。欲爲一切大衆上首。令一切僧隨逐我後。令諸四部悉皆供養恭敬讚歎尊重於我。令我先爲四衆說法。皆令一切信受我語。亦令國王大臣長者皆恭敬我。令我大得衣服飲食臥具醫藥上妙屋宅。爲生死欲是名惡欲。云何大欲。若有比丘生於欲心。云何當令四部之衆。悉皆知我得初住地乃至十住。得阿耨多羅三藐三菩提。得阿羅漢果乃至須陀洹果。我得四禪乃至四無礙智。爲於利養是名大欲。欲欲者。若有比丘欲生梵天魔天自在天轉輪聖王若刹利若婆羅門皆得自在。爲利養故是名欲欲。若不爲是三種惡欲之所害者。是名少欲。欲者名爲二十五愛。無有如是二十五愛。是名少欲。不求未來所欲之事。是名少欲。得而不著是名知足。不求恭敬是名少欲。得不積聚是名知足。善男子。亦有少欲不名知足。有知足不名少欲。有亦少欲亦知足。有不知足不少欲。少欲者謂須陀洹。知足者謂辟支佛。少欲知足者謂阿羅漢。不少欲不知足者所謂菩薩。善男子。少欲知足復有二種。一者善。二者不善。不善者所謂凡夫。善者聖人菩薩。一切聖人雖得道果不自稱說。不稱說故心不惱恨。是名知足。善男子。菩薩摩訶薩修習大乘大涅槃經欲見佛性。是故修習少欲知足。云何寂靜。寂靜有二。一者心靜。二者身靜。身寂靜者終不造作身三種惡。心寂靜者亦不造作意三種惡。是則名爲身心寂靜。身寂靜者不親近四衆。不預四衆所有事業。心寂靜者終不修習貪欲恚癡。是則名爲身心寂靜。或有比丘身雖寂靜心不寂靜。有心寂靜身不寂靜。有身心寂靜。又有身心俱不寂靜。身寂靜心不寂靜者。或有比丘坐禪靜處遠離四衆。心常積集貪欲瞋癡。是名身寂靜心不寂靜。心寂靜身不寂靜者。或有比丘親近四衆國王大臣。斷貪恚癡。是名心寂靜身不寂靜。身心寂靜者。謂佛菩薩。身心不

脫下三本俱無解脫二字
四下元明俱有者字
一下三本俱無者字○說同作責
故同作是

寂靜者.謂諸凡夫.何以故.凡夫之人身心雖靜.不能深觀無常無樂無我無淨.以是義故.凡夫之人不能寂靜身口意業.一闡提輩犯四重禁作五逆罪.如是之人亦不得名身心寂靜.云何精進.若有比丘欲令身口意業清淨.遠離一切諸不善業.修習一切諸善業者.是名精進.是勤進者繫念六處.所謂佛法僧戒施天.是名正念.具正念者所得三昧.是名正定.具正定者觀見諸法猶如虛空.是名正慧.具正慧者遠離一切煩惱諸結.是名解脫.得解脫者爲諸衆生稱美解脫.言是解脫常恒不變.是名讚歎解脫.解脫即是無上大般涅槃.涅槃者即是煩惱諸結火滅.又涅槃者名爲屋宅.何以故.能遮煩惱惡風雨故.又涅槃者名爲歸依.何以故.能過一切諸怖畏故.又涅槃者名爲洲渚.何以故.四大暴河不能漂故.何等爲四.一者欲暴.二者有暴.三者見暴.四無明暴.是故涅槃名爲洲渚.又涅槃者名畢竟歸.何以故.能得一切畢竟樂故.若有菩薩摩訶薩.成就具足如是十法.雖見佛性而不明了.復次善男子.出家之人有四種病.是故不得四沙門果.何等四病.謂四惡欲.一爲衣欲.二爲食欲.三爲臥具欲.四爲有欲.是名四惡欲.是出家病.有四良藥能療是病.謂糞掃衣能治比丘爲衣惡欲.乞食能破爲食惡欲.樹下能破臥具惡欲.身心寂靜能破比丘爲有惡欲.以是四藥除是四病.是名聖行.如是聖行則得名爲少欲知足.寂靜者有四種樂.何等爲四.一者出家樂.二寂靜樂.三永滅樂.四畢竟樂.得是四樂名爲寂靜.具四精進故名精進.具四念處故名正念.具四禪故.故名正定.見四聖實故.故名正慧.永斷一切煩惱結故.故名解脫.呵說一切煩惱過故.故名讚歎解脫.善男子.菩薩摩訶薩安住具足如是十法.雖見佛性而不明了.復次善男子.菩薩摩訶薩聞是經已親近修習.遠離一切世間之事.是名少欲.既出家已不生悔心.是名知足.既知足已.近空閑處遠離憒鬧.是名寂靜.不知足者不樂空閑.夫知足者常樂空寂.於空寂處常作是念.一切世間悉謂我得沙門道果.然我今者實未能得.我今云何誑惑於人.作是念已.精勤修習沙門道果.是名精進.親近修習大涅槃者.是名正念.隨順天行.是名正定.安住是定正見正知.是名正慧.正見知者能得遠離煩惱結縛.是名解脫.十住菩薩爲衆生故稱美涅槃.是則名爲讚歎解脫.善男子.菩薩摩訶薩安住具足如是十法.雖見佛性而不明了.復次善男子.夫少欲者.若有比丘住空寂處端坐不臥.或住樹下.或在塚間.或在露處.隨有草地而坐其上.乞食而食隨得爲足.或一坐

相下同無者字○子下元明俱無是字○菩上宋無名字
問三本俱作言
了同作明
故下同有則字
唯明作雖

食不過一食。唯畜三衣糞衣毳衣。是名少欲。既行是事心不生悔是名知足。修空三昧。是名寂靜。得四果已於阿耨多羅三藐三菩提心不休息。是名精進。繫心思惟如來常恒無有變易。是名正念。修八解脫是名正定。得四無礙是名正慧。遠離七漏是名解脫。稱美涅槃無有十相名歎解脫。十相者。謂生老病死色聲香味觸無常。遠離十相者名大涅槃。善男子。是名菩薩摩訶薩安住具足如是十法雖見佛性而不明了。復次善男子。爲多欲故親近國王大臣長者刹利婆羅門毘舍首陀。自稱我得須陀洹果至阿羅漢果。爲利養故。行住坐臥乃至大小便利。若見檀越猶行恭敬接引語言。破惡欲者名爲少欲。雖未能壞諸結煩惱。而能同於如來行處。是名知足。善男子。如是二法乃是念定近因緣也。常爲師宗同學所讚。我亦常於處處經中。稱美讚歎如是二法。若能具足是二法者。則得近於大涅槃門及五種樂。是名寂靜。堅持戒者名爲精進。有慚愧者名爲正念。不見心相名爲正定。不求諸法性相因緣。是名正慧。無有相故煩惱則斷。是名解脫。稱美如是大涅槃經。名讚解脫。善男子。是名菩薩摩訶薩安住十法。雖見佛性而不明了。善男子。如汝所問十住菩薩以何眼故。雖見佛性而不了了。諸佛世尊以何眼故。見於佛性而得了了。善男子。慧眼見故不得明了。佛眼見故故得明了。爲菩提行故則不了了。若無行故。則得了了。住十住故雖見不了不住不去故得了了。菩薩摩訶薩智慧因故見不了了。諸佛世尊斷因果故見則了了。一切覺者名爲佛性。十住菩薩不得名爲一切覺故。是故雖見而不明了。善男子。見有二種。一者眼見。二者聞見。諸佛世尊眼見佛性。如於掌中觀阿摩勒。十住菩薩聞見佛性故不了了。十住菩薩唯能自知定得阿耨多羅三藐三菩提。而不能知一切衆生悉有佛性

# 大般涅槃經卷第二十五

# 大般涅槃經卷第二十六

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

〔麗士〕〔宋輔〕〔元輔〕〔明樹〕

## 師子吼菩薩品之二

善男子。復有眼見。諸佛如來十住菩薩眼見佛性。復有聞見。一切衆生乃至九地聞見佛性。菩薩若聞一切衆生悉有佛性。心不生信不名聞見。善男子。若有善男子善女人欲見如來。應當修習十二部經受持讀誦書寫解說。師子吼菩薩摩訶薩言。世尊。一切衆生不能得知如來心相。當云何觀而得知耶。善男子。一切衆生實不能知如來心相。若欲觀察而得知者。有二因緣。一者眼見。二者聞見。若見如來所有身業。當知是則爲如來也。是名眼見。若觀如來所有口業。當知是則爲如來也。是名聞見。若見色貌一切衆生無與等者。當知是則爲如來也。是名眼見。若聞音聲微妙最勝。不同衆生所有音聲。當知是則爲如來也。是名聞見。若見如來所作神通。爲衆生爲利養。若爲衆生不爲利養。當知是則爲如來也。是名眼見。若觀如來以他心智觀衆生時。爲利養說爲衆生說。若爲衆生不爲利養。當知是則爲如來也。是名聞見。云何如來而受是身。何故受身爲誰受身。是名眼見。若觀如來云何說法。何故說法爲誰說法。是名聞見。以身惡業加之不瞋。當知是則爲如來也。是名眼見。以口惡業加之不瞋。當知是則爲如來也。是名聞見。若見菩薩初生之時。於十方面各行七步。摩尼跋陀富那跋陀鬼神大將執持幡蓋。震動無量無邊世界。金光晃曜彌滿虛空。難陀龍王及跋難陀。以神通力浴菩薩身。諸天形像承迎禮拜。阿私陀仙合掌恭敬。盛年捨欲如棄涕唾。不爲世樂之所迷惑。出家修道樂於閑寂。爲破邪見六年苦行。於諸衆生平等無二。心常在定初無散亂。相好嚴麗莊飾其身。所遊之處丘墟皆平。衣服離身四寸不墮。行時直視不顧左右。所食之物物無完過。坐起之處草不動亂。爲調衆生故往說法心無憍慢。是名眼見。若聞菩薩行七步已唱如是言。

品目之上同有第二十三四字下四品同○善男子乃至不名聞見五十五字三本俱屬前卷○一下二下並同無者字下同

爲上同有爲字下同

跋三本俱作婆

愍同作憫下同〇邏同作羅〇非同作過〇剋同作克

利上同無所謂二字〇[木+奈]同作柰下同

師上宋無爾時二字〇薩下三本俱無摩訶薩三字〇菓同作果下同〇不上同有亦字〇唯明作惟下同

礙三本俱作閡下同

得上同無能字

我今此身最是後邊。阿私陀仙合掌而言。大王當知。悉達太子定當得成阿耨多羅三藐三菩提。終不在家作轉輪王。何以故。相明了故。轉輪聖王相不明了。悉達太子身相炳著。是故必得阿耨多羅三藐三菩提。見老病死復作是言。一切衆生甚可憐愍。常與如是生老病死共相隨逐而不能觀。常行於苦我當斷之。從阿羅邏五通仙人受無想定。既成就已後說其非。從鬱陀仙受非有想非無想定。既成就已。說非涅槃是生死法。六年苦行無所剋獲。即作是言。修是苦行空無所得。若是實者我應得之。以虛妄故我無所得。是名邪術非正道也。既成道已。梵天勸請。惟願如來當爲衆生廣開甘露說無上法。佛言。梵王。一切衆生常爲煩惱之所障覆。不能受我正法之言。梵王復言。世尊。一切衆生凡有三種。所謂利根中根鈍根。利根能受惟願爲說。佛言。梵王。諦聽諦聽。我今當爲一切衆生開甘露門。即於波羅[木+奈]國轉正法輪宣說中道。一切衆生不破諸結非不能破。非破非不破故名中道。不度衆生非不能度。是名中道。非一切成亦非不成。是名中道。凡有所說不自言師不言弟子。是名中道。說不爲利非不得果。是名中道。正語實語時語眞語。言不虛發微妙第一。如是等法是名聞見。善男子。如來心相實不可見。若有善男子善女人欲見如來。應當依是二種因緣。爾時師子吼菩薩摩訶薩白佛言。世尊。如先所說。菴羅菓喩四種人等。有人行細心不正實。有人心細行不正實。有人心細行亦正實。有人心不細行不正實。是初二種云何可知。如佛所說。唯依是二不可得知。佛言。善哉善哉。善男子。菴羅果喩二種人等實難可知。以難知故。我經中說當與共住。住若不知當與久處。久處不知當以智慧。智慧不知當深觀察。以觀察故則知持戒及以破戒。善男子。具是四事。共住久處智慧觀察。然後得知持戒破戒。善男子。戒有二種。持者亦二。一究竟。二不究竟。有人以因緣故受持禁戒。智者當觀。是人持戒爲爲利養爲究竟持。善男子。如來戒者無有因緣。是故得名爲究竟戒。以是義故。菩薩雖爲諸惡衆生之所傷害不生恚礙。是故如來得名成就畢竟持戒究竟持戒。善男子。我昔一時與舍利弗及五百弟子俱。共止住摩伽陀國瞻婆大城。時有獵師追逐一鴿。是鴿惶怖至舍利弗影。猶故戰慄如芭蕉樹。至我影中身心安隱恐怖得除。是故當知。如來世尊畢竟持戒。乃至身影猶有是力。善男子。不究竟戒尚不能得聲聞緣覺。何況能得阿耨多羅三藐三菩提。復有二種。一爲利養。二爲正法。爲利養故受持禁戒。當知是戒不見佛

遇同作因

上明作倘下同○喩三本俱作諭○戒復有二同作復有二種

眞實同作禪定

善男子善哉善哉三本俱作善哉善哉善男子○以同作已○問下同無也字○謂同作因次

性及以如來。雖聞佛性及如來名。猶不得名爲聞見也。若爲正法受持禁戒。當知是戒能見佛性及以如來。是名眼見。亦名聞見。復有二種。一者根深難拔。二者根淺易動。若能修習空無相願。是名根深難拔。若不修習是三昧。雖復修習爲二十五有。是名根淺易動。復有二種。一爲自身。二爲衆生。爲衆生者能見佛性及以如來。持戒之人復有二種。一者性自能持。二者須他敎勑。若受戒已經無量世初不漏失。或値惡國遇惡知識惡時惡世。聞邪惡法邪見同止。爾時雖無受戒之法。修持如本無所毀犯。是名性自能持。若遇師僧白四羯磨然後得戒。雖得戒已。要憑和上諸師同學善友誨喩。乃知進止。聽法說法備諸威儀。是名須他敎勑。善男子。性能持者眼見佛性及以如來。亦名聞見。戒復有二。一聲聞戒。二菩薩戒。從初發心乃至得成阿耨多羅三藐三菩提。是名菩薩戒。若觀白骨乃至證得阿羅漢果。是名聲聞戒。若有受持聲聞戒者。當知是人不見佛性及以如來。若有受持菩薩戒者。當知是人得阿耨多羅三藐三菩提。能見佛性如來涅槃。師子吼菩薩言。世尊。何因緣故受持禁戒。佛言。善男子。爲心不悔故。何故不悔。爲受樂故。何故受樂。爲遠離故。何故遠離。爲安隱故。何故安隱。爲禪定故。何故禪定。爲實知見故。何故爲實知見。爲見生死諸過患故。何故爲見生死過患。爲心不貪著故。何故爲心不貪著。爲得解脫故。何故爲得解脫。爲得無上大涅槃故。何故爲得大般涅槃。爲得常樂我淨法故。何故爲得常樂我淨。爲得不生不滅故。何故爲得不生不滅。爲見佛性故。是故菩薩性自能持究竟淨戒。善男子。持戒比丘雖不發願求不悔心。不悔之心自然而得。何以故。法性爾故。雖不求樂遠離安隱眞實知見。見生死過心不貪著。解脫涅槃常樂我淨不生不滅。見於佛性而自然得。何以故。法性爾故。師子吼菩薩言。世尊。若因持戒得不悔果。因於解脫得涅槃果者。戒則無因。涅槃無果。戒若無因則名爲常。涅槃有因則是無常。若爾者涅槃則爲本無今有。若本無今有是爲無常。猶如然燈。涅槃若爾。云何得名我樂淨耶。佛言。善男子。善哉善哉。汝以曾於無量佛所種諸善根。能問如來如是深義。善男子。不失本念乃如是問也。我憶往昔過無量劫。婆羅㮈城有佛出世號曰善得。爾時彼佛三億歲中。演說如是大涅槃經。我時與汝俱在彼會。我以是事諮問彼佛。爾時如來爲衆生故。三昧正受。未答此義。善哉大士。乃能憶念如是本事。諦聽諦聽。當爲汝說。戒亦有因。謂聽正法。聽正法者是亦有因。謂近善友。近善友者是亦

同〇所謂同作因有〇二下元明俱有者字
謂大涅槃三本俱作大涅槃也
名之同作故名下同〇甜宋作恬下同〇四下五下三本俱無者字〇人同無間〇六下同無者字〇之同作爲
謂上三本俱無所字 吼下同無菩薩二字下同

---

有因。所謂信心。有信心者是亦有因。因有二種。一者聽法。二思惟義。善男子。信心者因於聽法。聽法者因於信心。如是二法亦因亦因因。亦果亦果果。善男子。譬如尼乾立拒舉瓶互爲因果不得相離。善男子。如無明緣行行緣無明。是無明行亦因亦因因。亦果亦果果。乃至生緣老死老死緣生。是生老死亦因亦因因。亦果亦果果。善男子。生能生法不能自生。不自生故由生生生。生生不自生賴生故生。是故二生亦因亦因因。亦果亦果果。善男子。信心聽法亦復如是。善男子。是果非因謂大涅槃。何故名果。是上果故。沙門果故。婆羅門果故。斷生死故。破煩惱故。是故名果。爲諸煩惱之所呵責。是故涅槃名果。煩惱者名爲過過。善男子。涅槃無因而體是果。何以故。無生滅故。無所作故。非有爲故是無爲故。常不變故。無處所故。無始終故。善男子。若涅槃有因則不得稱爲涅槃也。槃者言因。般涅言無。無有因故故稱涅槃。師子吼菩薩言。如佛所說。涅槃無因是義不然。若言無者則合六義。一者畢竟無故名之爲無。如一切法無我無我所。二者有時無故名之爲無。如世人言河池無水無有日月。三者少故名之爲無。如世人言食中少鹹名爲無鹹。甘漿少甜名爲無甜。四者無受故名之爲無。如旃陀羅不能受持婆羅門法。是故名爲無婆羅門。五者受惡法故名之爲無。如世人言受惡法者不名沙門及婆羅門。是故名爲無有沙門及婆羅門。六者不對故名之爲無。譬如無白名之爲黑。無有明故名之無明。世尊。涅槃亦爾。有時無因故名涅槃。佛言。善男子。汝今所說如是六義。何故不引畢竟無者以喩涅槃。乃取有時無耶。善男子。涅槃之體畢竟無因。猶如無我及無我所。善男子。世法涅槃終不相對。是故六事不得爲喩。善男子。一切諸法悉無有我。而此涅槃眞實有我。以是義故。涅槃無因而體是果。是因非果名爲佛性。非因生故是因非果。非沙門果故名非果。何故名因。以了因故。善男子。因有二種。一者生因。二者了因。能生法者是名生因。燈能了物故名了因。煩惱諸結是名生因。衆生父母是名了因。如穀子等是名生因。地水糞等是名了因。復有生因。謂六波羅蜜阿耨多羅三藐三菩提。復有了因。謂佛性阿耨多羅三藐三菩提。復有了因。謂六波羅蜜佛性。復有生因。謂首楞嚴三昧阿耨多羅三藐三菩提。復有了因。謂八正道阿耨多羅三藐三菩提。復有生因。所謂信心六波羅蜜。師子吼菩薩言。世尊。如佛所說。見於如來及以佛性。是義云何。世尊。如來之身無有相貌。非長非短非白非黑。無有方所不在三界。非有爲相非眼識

二下同有種字下同〇一下同無者字

生同作非

酵同作醪下同

譬如有人三本俱作一切衆生〇刀上同有若

識。云何可見佛性亦爾。佛言。善男子。佛身二種。一者常。二者無常。無常者爲欲度脫一切衆生方便示現。是名眼見。常者如來世尊解脫之身。亦名眼見亦名聞見。佛性亦二。一者可見。二不可見。可見者十住菩薩諸佛世尊。不可見者一切衆生。眼見者謂十住菩薩諸佛如來眼見衆生所有佛性。聞見者一切衆生九住菩薩聞有佛性。如來之身復有二種。一者是色。二者非色。色者如來解脫。非色者如來永斷諸色相故。佛性二種。一者是色。二者非色。色者阿耨多羅三藐三菩提。非色者凡夫乃至十住菩薩。十住菩薩見不了了。故名非色。善男子。佛性者復有二種。一者是色。二者非色。色者謂佛菩薩。非色者一切衆生。色者名爲眼見。非色者名爲聞見。佛性者非內非外。雖非內外然非失壞。故名衆生悉有佛性。師子吼菩薩言。世尊。如佛所說。一切衆生悉有佛性如乳中有酪。金剛力士諸佛佛性如淸醍醐。云何如來說言佛性非內非外。佛言。善男子。我亦不說乳中有酪。酪從乳生故言有酪。世尊。一切生法各有時節。善男子。乳時無酪亦無生酥熟酥醍醐。一切衆生亦謂是乳。是故我言乳中無酪。如其有者何故不得二種名字。如人二能言金鐵師。酪時無乳生酥熟酥及以醍醐。衆生亦謂是酪。非乳非生熟酪及以醍醐。乃至醍醐亦復如是。善男子。因有二種。一者正因。二者緣因。正因者如乳生酪。緣因者如酵煖等。從乳生故。故言乳中而有酪性。師子吼菩薩言。世尊。若乳無酪性角中亦無。何故不從角中生耶。善男子。角亦生酪。何以故。我亦說言緣因有二。一酵二煖。角性煖故亦能生酪。師子吼言。世尊。若角能生酪。求酪之人何故求乳而不取角。佛言。善男子。是故我說正因緣因。師子吼菩薩言。若使乳中本無酪性今方有者。乳中本無菴摩羅樹。何故不生。二俱無故。善男子。乳亦能生菴摩羅樹。若以乳灌一夜之中增長五尺。以是義故我說二因。善男子。若一切法一因生者可得難言。乳中何故不能出生菴摩羅樹。猶如四大爲一切色而作因緣。然色各異差別不同。以是義故。乳中不生菴摩羅樹。世尊。如佛所說。有二種因正因緣因。衆生佛性爲是何因。善男子。衆生佛性亦二種因。一者正因。二者緣因。正因者謂諸衆生。緣因者謂六波羅蜜。師子吼言。世尊。我今定知乳有酪性。何以故。我見世間求酪之人唯取於乳終不取水。是故當知乳有酪性。善男子。如汝所問是義不然。何以故。譬如有人欲見面像卽便取刀。師子吼言。世尊。以是義故乳有酪性。刀無面像何故取刀。佛言。善男子。若此刀中定有面像何故

顚倒。豎則見長橫則見闊。若是自面何故見長。若是他面何得稱言是己面像。若因己面見他面者何故不見驢馬面像。師子吼言。世尊眼光到彼故見面長。佛言。善男子。而此眼光實不到彼。何以故。近遠一時俱得見故。不見中間所有物故。善男子。光若到彼而得見者。一切衆生悉見於火何故不燒。如人遠見白物不應生疑。鵠耶幡耶人耶樹耶。若光到者云何得見水精中物淵中魚石。若不到見何故得見水精中物而不得見壁外之色。是故若言見光到彼而見長者是義不然。善男子。如汝所言乳有酪者。何故賣乳之人但取乳價不責酪直。賣驢馬者但取馬價不責駒直。善男子。世間之人無子息故故求娉婦。婦若懷妊不得言女。若言是女有兒性故故應娉者。是義不然。何以故。若有兒性亦應有孫。若有孫者則是兄弟。何以故。一腹生故。是故我言女無兒性。若其乳中有酪性者。何故一時不見五味。若樹子中有尼拘陀五丈質者。何故一時不見芽莖枝葉花菓形色之異。善男子。乳色時異味異菓異。乃至醍醐亦復如是。云何可說乳有酪性。善男子。譬如有人明當服酥今已患臭。若言乳中定有酪性亦復如是。善男子。譬如有人有筆紙墨和合成字。而是紙中本無有字。以本無故假緣而成。若本有者何須衆緣。譬如青黃合成綵色。當知是二本無綵性。若本有者何須合成。善男子。譬如衆生因食得命而此食中實無有命。若本有命未食之時食應是命。善男子。一切諸法本無有性。以是義故我說是偈

本無今有　本有今無　三世有法　無有是處

善男子。一切諸法因緣故生因緣故滅。善男子。若衆生內有佛性者。一切衆生應有佛身如我今也。衆生佛性不破不壞不牽不捉不繫不縛。如衆生中所有虛空。一切衆生悉有虛空。無罣礙故。各不自見有此虛空。若使衆生無虛空者。則無去來行住坐臥不生不長。以是義故。我經中說一切衆生有虛空界。虛空界者是名虛空。衆生佛性亦復如是。十住菩薩少能見之如金剛珠。善男子。衆生佛性諸佛境界。非是聲聞緣覺所知。一切衆生不見佛性。是故常爲煩惱繫縛流轉生死。見佛性故諸結煩惱所不能繫。解脫生死得大涅槃。師子吼菩薩言。世尊。一切衆生有佛性性如乳中酪性。若乳無酪性云何佛說有二種因。一者正因。二者緣因。緣因者一酵二煗。虛空無性故無緣因。佛言。善男子。若使乳中定有酪性者何須緣因。師子吼菩薩言。世尊。以有性故故須緣因。何以故。欲明

字〇顚宋元俱作傎下同〇世上三本俱無師子吼言四字〇善上同無佛言二字〇鵠同作鶴〇世下同無間之二字〇息故故求娉同作是故故聘三字〇娉同作聘〇芽同作牙下同〇已宋作以

若下三本俱有諸字

酵元明俱作酥

宋無

先三本俱作上下同〇名同作持〇酪上同有有字

見故。緣因者卽是了因。世尊譬如闇中先有諸物。爲欲見故以燈照了。若本無者燈何所照。如泥中有甁故須人水輪繩杖等而爲了因。如尼拘陀子須地水糞而作了因。乳中醉煖亦復如是須作了因。是故雖先有性要假了因然後得見。以是義故。定知乳中先有酪性。善男子。若使乳中定有酪性者。卽是了因。若是了因復何須了。善男子。若是了因性是了者。常應自了。若自不了何能了他。若言了因有二種性。一者自了。二者了他。是義不然。何以故。了因一法云何有二。若有二者乳亦應二。若使乳中無二相者。云何了因而獨有二。師子吼言。世尊。如世人言我共八人。了因亦爾自了了他。佛言。善男子。了因若爾則非了因。何以故。數者能數自色他色故得言八。而此色性自無了相。無了相故要須智性乃數自他。是故了因不能自了亦不了他。善男子。一切衆生有佛性者。何故修習無量功德。若言修習是了因者已同酪壞。若言因中定有果者。戒定智慧則無增長。我見世人本無禁戒禪定智慧。從師受已漸漸增益。若言師敎是了因者。當師敎時受者未有戒定智慧。若是了者應了未有。云何乃了戒定智慧令得增長。師子吼菩薩言。世尊。若了因無者。云何得名有乳有酪。善男子。世間答難凡有三種。一者轉答。如先所說何故名戒。以不悔故乃至爲得大涅槃故。二者默然答。如有梵志來問我言。我是常耶。我時默然。三者疑答。如此經中。若了因有二乳中何故不得有二。善男子。我今轉答。如世人言有乳酪者。以定得故是故得名有乳有酪。佛性亦爾。有衆生有佛性以當見故。師子吼言。世尊。如佛所說是義不然。過去已滅未來未到。云何名有。若言當有名爲有者。是義不然。如世間人見無兒息便言無兒。一切衆生無佛性者。云何說言一切衆生悉有佛性。佛言。善男子。過去名有。譬如種橘芽生子滅。芽亦甘甜。乃至生菓味亦如是。熟已乃醋。善男子。而是醋味子芽乃至生菓悉無。隨本熟時形色相貌則生醋味。而是醋味本無今有。雖本無今有非不因本。如是本子雖復過去故得名有。以是義故過去名有。云何復名未來爲有。譬如有人種植胡麻。有人問言何故種此。答言有油。實未有油。胡麻熟已取子熬蒸擣壓乃得。當知是人非虛妄也。以是義故名未來有。云何復名過去有耶。善男子。譬如有人私屛罵王。經歷年歲王乃聞之。聞已卽問何故見罵。答言。大王。我不罵也。何以故罵者已滅。王言。罵者我身二俱存在云何言滅。以是因緣喪失身命。善男子。是二實無而果不滅。是名過去有。云何復名未來有耶。譬如有人

坻三本俱作低下同○羅下同無尼字次同

細下同有障字

見同作其

見上同有可字

相三本俱作貌

往陶師所問有瓶不。答言有瓶。而是陶師實未有瓶。以有泥故故言有瓶。當如是人非妄語也。乳中有酪。衆生佛性亦復如是。欲見佛性應當觀察時節形色。是故我說一切衆生悉有佛性實不虛妄。師子吼言。一切衆生無佛性者。云何而得阿耨多羅三藐三菩提。以正因故。故令衆生得阿耨多羅三藐三菩提。何等正因。所謂佛性。世尊。若尼拘陀子無尼拘陀樹者。何故名爲尼拘陀子。而不名爲佉陀羅子。世尊。如瞿曇姓不得稱爲阿坻耶姓。阿坻耶姓亦復不得稱瞿曇姓。尼拘陀子亦復如是。不得稱爲佉陀羅尼子。佉陀羅尼子不得稱爲尼拘陀子。猶如世尊不得捨離瞿曇種姓。衆生佛性亦復如是。以是義故。當知衆生悉有佛性。佛言。善男子。若言子中有尼拘陀者。是義不然。如其有者何故不見。善男子。如世間物有因緣故不可得見。云何因緣。謂遠不可見如空中鳥跡。近不可見如人眼睫。壞故不見如根敗者。亂想故不見如心不專一。細故不見如小微塵。障故不見如雲表星。多故不見如稻聚中麻。相似故不見如豆在豆聚。尼拘陀樹不同如是八種因緣。如其有者何故不見。若言細故不見者。是義不然。何以故樹相麤故。若言性細云何增長。若言障故不可見者常應不見。本無麤相今則見麤。當知是麤本無見性。本無見性今則可見。當知是見亦本無性。子亦如是。本無有樹今則有之當有何咎。師子吼言。如佛所說有二種因。一者正因。二者了因。尼拘陀子以地水糞作了因故令細得麤。佛言。善男子。若本有者何須了因。若本無性了何所了。若尼拘陀中本無麤相。以了因故乃生麤者。何故不生佉陀羅樹。二俱無故。善男子。若細不見者麤應可見。譬如一塵則不可見多塵和合則應可見。如是子中麤應可見。何以故。是中已有芽莖花葉。一一葉中有無量子。一一子中有無量樹。是故名麤。有是麤故故應可見。善男子。若尼拘陀子有尼拘陀性而生樹者。眼見是子爲火所燒。如是燒性亦應本有。若本有者樹不應生。若一切法本有生滅。何故先生後滅不一時耶。以是義故當知無性。師子吼菩薩言。世尊。若尼拘陀子本無樹性而生樹者。是子何故不出於油。二俱無故。善男子。如是子中亦能出油。雖本無性因緣故有。師子吼言。何故不名胡麻油耶。善男子。非胡麻故。善男子。如火緣生火水緣生水。雖俱從緣不能相有。尼拘陀子及胡麻油亦復如是。雖俱從緣各不相生。尼拘陀子性能治冷。胡麻油者性能治風。善男子。譬如甘蔗因緣故生石蜜黑蜜。雖俱一緣色相各異。石蜜治熱黑蜜治冷。師子吼菩薩言。世尊。

緣上同無因字　次同○諸同作　壞○于同作於
待同作得○攢同作鑽
實宋作寶

如其乳中無有酪性。麻無油性。尼拘陀子無有樹性。泥無瓶性。一切衆生無佛性者。如佛先說。一切衆生悉有佛性。是故應得阿耨多羅三藐三菩提者。是義不然。何以故。人天無性以無性故。人可作天天可作人。以業緣故不以性故。菩薩摩訶薩以業因緣故。得阿耨多羅三藐三菩提。若諸衆生有佛性者。何因緣故。一闡提等斷諸善根墮于地獄。若菩提心是佛性者。一闡提等不應能斷。若可斷者云何得言佛性是常。若非常者不名佛性。若諸衆生有佛性者。何故名爲初發心耶。云何而言是毗跋致阿毗跋致。毗跋致者。當知是人無有佛性。世尊。菩薩摩訶薩一心趣向阿耨多羅三藐三菩提大慈大悲。見生老死煩惱過患。觀大涅槃無生老死煩惱諸過。信於三寶及業果報受持禁戒。如是等法名爲佛性。若離是法有佛性者。何須是法而作因緣。世尊。如乳不假緣必當成酪。生酥不爾要待因緣。所謂人功水瓶攢繩。衆生亦爾。有佛性者。應離因緣得阿耨多羅三藐三菩提。若定有者。行人何故。見三惡苦生老病死而生退心。亦不須修六波羅蜜。卽應得成阿耨多羅三藐三菩提。如乳非緣而得成酪。然非不因六波羅蜜而得成於阿耨多羅三藐三菩提。以是義故。當知衆生悉無佛性。如佛先說僧寶是常。如其常者則非無常。非無常者云何而得阿耨多羅三藐三菩提。僧若常者云何復言一切衆生悉有佛性。世尊。若使衆生從本已來無菩提心。亦無阿耨多羅三藐三菩提心後方有者。衆生佛性亦應如是本無後有。以是義故。一切衆生應無佛性。佛言。善哉善哉。善男子。汝已久知佛性之義。爲衆生故作如是問。一切衆生實有佛性。汝言衆生若有佛性不應言有初發心者。善男子。心非佛性。何以故。心是無常佛性常故。汝言何故有退心者。實無退心。心若有退終不能得阿耨多羅三藐三菩提。以遲得故名之爲退。此菩提心實非佛性。何以故。一闡提等斷於善根墮地獄故。若菩提心是佛性者。一闡提輩則不得名一闡提也。菩薩之心亦不得名爲無常也。是故定知菩提之心實非佛性。善男子。汝言衆生若有佛性不應假緣。如乳成酪者。是義不然。何以故。若言五緣成於生酥。當知佛性亦復如是。譬如衆石有金有銀有銅有鐵俱稟四大一名一實。而其所出各各不同。要假衆緣衆生福德爐冶人功。然後出生。是故當知本無金性。衆生佛性不名爲佛。以諸功德因緣和合得見佛性然後得佛。汝言衆生悉有佛性何故不見者。是義不然。何以故。以諸因緣未和合故。善男子。以是義故。我說二因正因緣因。正因者名

二下三本俱有種字

諸宋作謂

惡三本俱作罪

諸同作佛○支元明俱作肢

爲佛性。緣因者發菩提心。以二因緣得阿耨多羅三藐三菩提。如石出金。善男子。汝言僧常。一切衆生無佛性者。善男子。僧名和合。和合有二。一者世和合。二者第一義和合。世和合者名聲聞僧。義和合者名菩薩僧。世僧無常佛性是常。如佛性常義僧亦爾。復次有僧謂法和合。法和合者謂十二部經。十二部經常。是故我說法僧是常。善男子。僧名和合。和合者名十二因緣。十二因緣中亦有佛性。十二因緣常。佛性亦爾。是故我說僧有佛性。又復僧者諸佛和合。是故我說僧有佛性。善男子。汝言衆生若有佛性云何有退有不退者。諦聽諦聽。我當爲汝分別解說。善男子。菩薩摩訶薩有十三法則便退轉。何等十三。一者心不信。二者不作心。三者疑心。四者悋惜身財。五者於涅槃中生大怖畏。云何乃令衆生永滅。六者心不堪忍。七者心不調柔。八者愁惱。九者不樂。十者放逸。十一者自輕己身。十二者自見煩惱無能壞者。十三者不樂進趣菩提之法。善男子。是名十三法。令諸菩薩退轉菩提。復有六法壞菩提心。何等爲六。一者悋法。二者於諸衆生起不善心。三者親近惡友。四者不勤精進。五者自大憍慢。六者營務世業。如是六法則能破壞菩提之心。善男子。有人得聞諸佛世尊是人天師於衆生中最上無比勝於聲聞辟支佛等法眼明了見法無礙能度衆生於大苦海。聞已卽復發大誓願。如其世間有如是人我亦當得。以是因緣發阿耨多羅三藐三菩提心。或復爲他之所敎誨發菩提心。或聞菩薩阿僧祇劫修行苦行然後乃得阿耨多羅三藐三菩提。聞已思惟。我今不堪如是苦行云何能得。是故有退。善男子。復有五法退菩提心。何等爲五。一者樂在外道出家。二者不修大慈之心。三者好求法師過惡。四者常樂處在生死。五者不憙受持讀誦書寫解說十二部經。是名五法退菩提心。復有二法退菩提心。何等爲二。一者貪樂五欲。二者不能恭敬尊重三寶。以如是等衆因緣故退菩提心。云何復名不退之心。有人聞佛能度衆生生老病死不從師諮自然修習得阿耨多羅三藐三菩提。若菩提道是可得者。我當修習必令得之。以是因緣發菩提心。所作功德若多若少。悉以迴向阿耨多羅三藐三菩提。作是誓願。願我常得親近諸佛及佛弟子。常聞深法五情完具。若遇苦難不失是心。復願諸佛及諸弟子。常於我所生歡喜心具五善根。若諸衆生斫伐我身斬截手足頭目支節。當於是人生大慈心深自喜慶。如是諸人爲我增長菩提因緣。若無是者我當何緣而得成就阿耨多羅三藐三菩提。復發是願。莫令我得無

疾三本俱作疫

妬同作嫉

集同作習

値同作逢

根二根女人之身。不繫屬人不遭惡主。不屬惡王不生惡國。若得好身種姓眞正。多饒財寶不生憍慢。令我常聞十二部經受持讀誦書寫解說。若爲衆生有所演說。願令受者敬信無疑。常於我所不生惡心。寧當少聞多解義味。不願多聞於義不了。願作心師不師於心。身口意業不與惡交。能施一切衆生安樂。身戒心慧不動如山。爲欲受持無上正法。於身命財不生慳恡。不淨之物不爲福業。正命自活心無邪諂。受恩常念小恩大報。善知世中所有事藝。善解衆生方俗之言。讀誦書寫十二部經。不生懈怠懶墮之心。若諸衆生不樂聽聞。方便引接令彼樂聞。言常柔軟口不宣惡。不和合衆能令和合。有憂怖者令離憂怖。飢饉之世令得豐足。疾病之世作大醫王。病藥所須財寶自在。令疾病者悉得除愈。刀兵之劫有大力勢。斷其殘害令無遺餘。能斷衆生種種怖畏。所謂死畏閉繫打擲水火王賊貧窮破戒惡名惡道。如是等畏悉當斷之。父母師長深生恭敬。怨憎之中生大慈心。常修六念空三昧門十二因緣生滅等觀出息入息天行梵行及以聖行金剛三昧首楞嚴定。無三寶處令我自得寂靜之心。若其身心受大苦時。莫失無上菩提之心。莫以聲聞辟支佛心而生知足。無三寶處常在外道法中出家。爲破邪見不習其道。得法自在得心自在。於有爲法了了見過。令我怖畏二乘道果。如惜命者怖畏捨身。爲衆生故樂處三惡。如諸衆生樂忉利天。爲一一人於無量劫受地獄苦心不生悔。見他得利不生妬心。常生歡喜如自得樂。若値三寶當以衣服飮食臥具房舍醫藥燈明花香伎樂幡蓋七寶供養。若受佛戒堅固護持。終不生於毀犯之想。若聞菩薩難行苦行。其心歡喜不生悔恨。自識往世宿命之事。終不造作貪瞋癡業。不爲果報而集因緣。於現在樂不生貪著。善男子。若有能發如是願者。是名菩薩終不退失菩提之心。亦名施主。能見如來明了佛性。能調衆生度脫生死。善能護持無上正法。能得具足六波羅蜜。善男子。以是義故。不退之心不名佛性。善男子。汝不可以有退心故。言諸衆生無有佛性。譬如二人俱聞他方有七寶山。山有淸泉其味甘美。有能到者永斷貧窮。服其水者增壽萬歲。唯路懸遠嶮阻多難。時彼二人俱欲共往。一人莊嚴種種行具。一則空往無所齎持。相與前進路値一人。多齎寶貨七珍具足。二人便前問言。仁者。彼土實有七寶山耶。其人答言。實有不虛。我已獲寶飮服其水。唯患路嶮多有盜賊。沙礫蕀刺乏於水草。往者千萬達者甚少。聞是事已一人卽悔尋作是言。路旣懸遠艱難非一。

中三本俱作復

道同作路○美同作味

其直同作一人○返下同有轉字

薩下同無也字

父母所同作其父母

一下二下三下並無者字

膞同作蹲

往者無量達者無幾。而我云何當能到彼。我今產業粗自供足。若涉斯路或失身命。身命不全長壽安在。一人復言。有人能過我亦能過。若得果遂則得如願采取珍寶飮服甘水。如其不遂以死爲期。是時二人一則悔退一則前進。到彼山所多獲財寶。如願服水多齎所有還其所止。奉養父母供給宗親。時悔還者見是事已心中生熱。彼去已還我何爲住。卽便莊嚴涉道而去。七寶山者喩大涅槃。甘美之水喩於佛性。其二人者喩二菩薩初發心者。險惡道者喩於生死。所逢人者喩佛世尊。有盜賊者喩於四魔。沙礫棘刺喩諸煩惱。無水草者喩不修習菩提之道。一人還者喩退轉菩薩。其直往者喩不退菩薩。善男子。衆生佛性常住不變。猶彼險道不可說言人悔還故令道無常。佛性亦爾。善男子。菩提道中終無退者。善男子。如向悔者。見其先伴獲寶而還勢力自在供養父母給足宗親多受安樂。見是事已心中生熱。卽復莊嚴復道還去。不惜身命堪忍衆難。遂便到彼七寶山中。退轉菩薩亦復如是。善男子。一切衆生定當得成阿耨多羅三藐三菩提。以是義故我經中說。一切衆生乃至五逆犯四重禁及一闡提悉有佛性。師子吼言。世尊。云何菩薩有退不退。善男子。若有菩薩修習如來三十二相業因緣者。得名不退。得名菩薩摩訶薩也。名不動轉。名爲憐愍一切衆生。名勝一切聲聞緣覺。名阿毗跋致。善男子。若菩薩摩訶薩持戒不動施心不移。安住實語如須彌山。以是業緣得足下平如奩底相。若菩薩摩訶薩於父母所和上師長乃至畜生。以如法財供養供給。以是業緣得成足下千輻輪相。若菩薩摩訶薩不殺不盜。於父母師長常生歡喜。以是業緣得成三相。一者手指纖長。二者足跟長。三者其身方直。如是三相同一業緣。若菩薩摩訶薩修四攝法攝取衆生。以是業緣得網縵指如白鵝王。若菩薩摩訶薩父母師長若病苦時。自手洗拭捉持按摩。以是業緣得手足軟。若菩薩摩訶薩持戒聞法惠施無厭。以是業緣得節踝傭滿身毛上靡。若菩薩摩訶薩專心聽法演說正敎。以是業緣得鹿王膞。若菩薩摩訶薩於諸衆生不生害心。飮食知足常樂惠施瞻病給藥。以是業緣其身圓滿如尼拘陀樹。立手過膝。頂有肉髻無見頂相。若菩薩摩訶薩見怖畏者爲作救護。見裸跣者施與衣服。以是業緣得陰藏相。若菩薩摩訶薩親近智者遠離愚人。善喜問答。掃治行路。以是業緣皮膚細軟身毛右旋。若菩薩摩訶薩常以衣服飮食臥具醫藥香花燈明施人。以是業緣得身金色常光明曜。若菩薩摩訶薩行施之時。所珍之物

能捨不悋。不觀福田及非福田。以是業縁得七處滿相。若菩薩摩訶薩布施之時心不生疑。以是業縁得柔軟聲。若菩薩摩訶薩如法求財以用布施。以是業縁得缺骨充滿師子上身臂肘傭纖。若菩薩摩訶薩遠離兩舌惡口恚心。以是業縁得四十齒白淨齊密。若菩薩摩訶薩於諸衆生修大慈悲。以是業縁得二牙相。若菩薩摩訶薩常作是願。有來求者隨意給與。以是業縁得師子頰。若菩薩摩訶薩隨諸衆生所須飮食悉皆與之。以是業縁得味中上味。若菩薩摩訶薩自修十善兼以化人。以是業縁得廣長舌。若菩薩摩訶薩不訟彼短不謗正法。以是業縁得梵音聲。若菩薩摩訶薩見諸怨憎生於喜心。以是業縁得目睫紺色。若菩薩摩訶薩不隱他德稱揚其善。以是業縁得白毫相。善男子。若菩薩摩訶薩修習如是三十二相業因縁時。則得不退菩提之心。善男子。一切衆生不可思議。諸佛境界業果佛性亦不可思議。何以故。如是四法皆悉是常。以是常故不可思議。一切衆生煩惱覆障故名爲常。斷常煩惱故名無常。若言一切衆生常者。何故修習八聖道分爲斷衆苦。衆苦若斷則名無常。所受之樂則名爲常。是故我言一切衆生煩惱覆障不見佛性。以不見故不得涅槃

菩上三本俱無若字

# 大般涅槃經卷第二十六

一下二下並同無者字下同○芽同作牙下同

肢同作支

一下二下三下並無者字下同○牉三本倶作判

# 大般涅槃經卷第二十七

〔麗士〕〔宋輔〕〔元輔〕〔明樹〕

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

## 師子吼菩薩品之三

師子吼言。世尊。如佛所説。一切諸法有二種因。一者正因。二者縁因。以是二因應無縛解。是五陰者念念生滅。如其生滅誰縛誰解。世尊。因此五陰生後五陰。此陰自滅不至彼陰。雖不至彼能生彼陰。如因子生芽子不至芽雖不至芽而能生芽。衆生亦爾。云何縛解。善男子。諦聽諦聽。我當爲汝分別解説。善男子。如人捨命受大苦時。宗親圍遶號哭懊惱。其人惶怖莫知依救。雖有五情無所覺知。肢節戰動不能自持。身體虚冷煖氣欲盡見先所修善惡報相。善男子。如日垂沒山陵堆阜影現東移理無西逝。衆生業果亦復如是。此陰滅時彼陰續生。如燈生闇滅燈滅闇生。善男子。如蠟印印泥印與泥合印滅文成。而是蠟印不變在泥。文非泥出不餘處來。以印因縁而生是文。現在陰滅中陰陰生。是現在陰終不變爲中陰五陰。中陰五陰亦非自生不從餘來。因現陰故生中陰陰。如印印泥印壞文成。名雖無差而時節各異。是故我説。中陰五陰非肉眼見天眼所見。是中陰中有三種食。一者思食。二者觸食。三者意食。中陰二種。一善業果。二惡業果。因善業故得善覺觀。因惡業故得惡覺觀。父母交會牉合之時。隨業因縁向受生處。於母生愛於父生瞋。父精出時謂是己有。見已心悦而生歡喜。以是三種煩惱因縁。中陰陰壞生後五陰。如印印泥印壞文成。生時諸根有具不具。具者見色則生於貪。生於貪故則名爲愛。狂故生貪是名無明。貪愛無明二因縁故。所見境界皆悉顛倒。無常見常無我見我無樂見樂無淨見淨。以四倒故作善惡行。煩惱作業業作煩惱。是名繋縛。以是義故名五陰生。是人若得親近於佛及佛弟子諸善知識。便得聞受十二部經。以聞法故觀善境界。觀善境界故得大智慧。大智慧者名正知見。得知見故於生死中而生悔心。生悔心故不

一下二下三下四下五下六下八下並無者字

嘖三本俱作責

生歡樂。不生歡樂故能破貪心。破貪心故修八聖道。修八聖道故得無生死。無生死故名得解脫。如火不遇薪名之爲滅。滅生死故名爲滅度。以是義故名五陰滅。師子吼言。空中無刺云何言拔。陰無繫者云何繫縛。佛言。善男子。以煩惱鎖繫縛五陰。離五陰已無別煩惱。離煩惱已無別五陰。善男子。如柱持屋離屋無柱離柱無屋。衆生五陰亦復如是。有煩惱故名爲繫縛。無煩惱故名爲解脫。善男子。如拳合掌。繫縛等三合散生滅更無別法。衆生五陰亦復如是。有煩惱故名爲繫縛。無煩惱故名爲解脫。善男子。如說名色繫縛衆生。名色若滅則無衆生。離名色已無別衆生。離衆生已無別名色。亦名名色繫縛衆生。亦名衆生繫縛名色、師子吼言。世尊。如眼不自見指不自觸刀不自割受不自受。云何如來說言名色繫縛名色。何以故。言名色者卽是衆生。言衆生者卽是名色。若言名色繫縛衆生。卽是名色繫縛名色。佛言。善男子。如二手合時更無異法而來合也。名之與色亦復如是。以是義故。我言名色繫縛衆生。若離名色則得解脫。是故我言衆生解脫。師子吼言。世尊。若有名色是繫縛者。諸阿羅漢未離名色亦應繫縛。善男子。解脫二種。一者子斷。二者果斷。言子斷者名斷煩惱。阿羅漢等已斷煩惱衆結爛壞。是故子結不能繫縛。未斷果故名果繫縛。諸阿羅漢不見佛性。以不見故不得阿耨多羅三藐三菩提。以是義故可言果繫。不得說言名色繫縛。善男子。譬如然燈油未盡時明則不滅。油若盡者滅則無疑。善男子。所言油者喩諸煩惱。燈喩衆生。一切衆生煩惱油故不入涅槃。若得斷者則入涅槃。師子吼言。世尊。燈之與油二性各異。衆生煩惱則不如是。衆生卽是煩惱。煩惱卽是衆生。衆生名五陰五陰名衆生。五陰名煩惱煩惱名五陰。云何如來喩之於燈。佛言。善男子。喩有八種。一者順喩。二者逆喩。三者現喩。四者非喩。五者先喩。六者後喩。七先後喩。八者遍喩。云何順喩。如經中說。天降大雨溝瀆皆滿。溝瀆滿故小坑滿。小坑滿故大坑滿。大坑滿故小泉滿。小泉滿故大泉滿。大泉滿故小池滿。小池滿故大池滿。大池滿故小河滿。小河滿故大河滿。大河滿故大海滿。如來法雨亦復如是。衆生戒滿。戒滿足故不悔心滿。不悔心滿故歡喜滿。歡喜滿故遠離滿。遠離滿故安隱滿。安隱滿故三昧滿。三昧滿故正知見滿。正知見滿故厭離滿。厭離滿故呵嘖滿。訶責滿故解脫滿。解脫滿故涅槃滿。是名順喩。云何逆喩。大海有本所謂大河。大河有本所謂小河。小河有本所謂大池。大池有本所謂小池。小池有本所謂大泉。大泉

唯明作惟下同
採三本俱作采
渧明作滴
菓三本俱作果下同〇延同作旬下同
嘴同作觜下同

有本所。謂小泉。小泉有本所謂大坑。大坑有本所謂小坑。小坑有本所謂溝瀆。溝瀆有本所謂大雨。涅槃有本所謂解脫。解脫有本所謂呵責。呵責有本所謂厭離。厭離有本所謂正知見。正知見有本所謂三昧。三昧有本所謂安隱。安隱有本所謂遠離。遠離有本所謂喜心。喜心有本所謂不悔。不悔有本所謂持戒。持戒有本所謂法雨。是名逆喩。云何現喩。如經中說。衆生心性猶若獼猴。獼猴之性捨一取一。衆生心性亦復如是。取著色聲香味觸法無暫住時。是名現喩。云何非喩。如我昔告波斯匿王。大王。有親信人從四方來。各作是言。大王。有四大山從四方來欲害人民。王若聞者當設何計。王言。世尊。設有此來無逃避處。唯當專心持戒布施。我卽讚言。善哉大王。我說四山卽是衆生生老病死。生老病死常來切人。云何大王。不修戒施。王言。世尊。持戒布施得何等果。我言。大王。於人天中多受快樂。王言。世尊。尼拘陀樹持戒布施。亦於人天受安樂耶。我言。大王。尼拘陀樹不能持戒修行布施。如其能者則受無異。是名非喩。云何先喩。我經中說。譬如有人貪著妙花。採取之時爲水所漂。衆生亦爾。貪著五欲爲生老死之所漂沒。是名先喩。云何後喩。如法句經說。莫輕小惡以爲無殃。水渧雖微漸盈大器。是名後喩。云何先後喩。譬如芭蕉生菓則死。愚人得養亦復如是。如騾懷妊命不久全。云何遍喩。如經中說。三十三天有波利質多樹。其根入地深五由延高百由延。枝葉四布五十由延。葉熟則黃。諸天見已心生歡喜。是葉不久必當墮落。其葉旣落復生歡喜。是枝不久必當變色。枝旣變色復生歡喜。是色不久必當生皰。見已復喜是皰不久必當生嘴。見已復喜是嘴不久必當開敷。開敷之時香氣周遍五十由延。光明遠照八十由延。爾時諸天夏三月時在下受樂。善男子。我諸弟子亦復如是。葉色黃者喩我弟子念欲出家。其葉落者喩我弟子剃除鬚髮。其色變者喩我弟子白四羯磨受具足戒。初生皰者喩我弟子發阿耨多羅三藐三菩提心。嘴者喩於十住菩薩得見佛性。開敷者喩於菩薩得阿耨多羅三藐三菩提。香者喩於十方無量衆生受持禁戒。光者喩於如來名號無礙周遍十方。夏三月者喩三三昧。三十三天受快樂者。喩於諸佛在大涅槃得常樂我淨。是名遍喩。善男子。凡所引喩不必盡取。或取少分或取多分或復全取。如言如來面如滿月。是名少分。善男子。譬如有人初不見乳。轉問他言乳爲何類。彼人答言如水蜜貝。水則濕相蜜則甜相貝則色相。雖引三喩未卽乳實。善男子。我言譬喩喩於衆生亦復如

䇦三本俱作箱○軸同作轂○闇同作暗下同○燰宋元俱作煗

如上三本俱無譬字

是。善男子。離水無河。衆生亦爾。離五陰已無別衆生。善男子。如離䇦輿輪輻軸輞更無別車。衆生亦爾。善男子。若欲得合彼燈喩者。諦聽諦聽我今當說。炷者喩於二十五有。油者喩愛。明喩智慧。除破黑闇喩破無明。燰喩聖道。如燈油盡明焰則滅。衆生愛盡則見佛性。雖有名色不能繫縛。雖復處在二十五有。不爲諸有之所汙染。師子吼言。世尊。衆生五陰空無所有。誰有受敎修習道者。佛言。善男子。一切衆生皆有念心慧心發心勤精進心信心定心。如是等法雖念念生滅。猶故相似相續不斷。故名修道。師子吼言。世尊。如是等法皆念念滅。是念念滅亦相似相續。云何修習。佛言。善男子。如燈雖念念滅而有光明除破闇冥。念等諸法亦復如是。善男子。如衆生食雖念念滅亦令飢者而得飽滿。譬如上藥雖念念滅亦能愈病。日月光明雖念念滅亦能增長樹林草木。善男子。汝言念念滅云何增長者。心不斷故名爲增長。善男子。如人誦書所誦字句不得一時。前不至中中不至後。人之與字及以心想俱念念滅。以久修故而得通利。善男子。譬如金師從初習作至于皓首。雖念念滅前不至後。以積習故所作遂妙。是故得稱善好金師。讀誦經書亦復如是。善男子。譬如種子地亦不敎汝當生芽。以法性故芽則自生。乃至花亦不敎汝當作菓。以法性故而菓自生。衆生修道亦復如是。善男子。譬如數法一不至二二不至三。雖念念滅而至千萬。衆生修道亦復如是。善男子。譬如燈念念滅。初滅之焰不敎後焰我滅汝生當破諸闇。善男子。譬如犢子生便求乳。求乳之智實無人敎。雖念念滅而初飢得飽。是故當知不應相似。若相似者不應異生。衆生修道亦復如是。初雖未增以久修故。則能破壞一切煩惱。師子吼言。世尊。如佛所說。須陀洹人得果證已。雖生惡國猶故持戒。不殺盜淫兩舌飮酒。須陀洹陰即此處滅不至惡國。修道亦爾。不至惡國。若相似者何故不生淨妙國土。若惡國陰非須陀洹陰。云何而得不作惡業。佛言。善男子。須陀洹者雖生惡國終不失於須陀洹名。陰不相似。是故我引犢子爲喩。須陀洹人雖生惡國。以道力故不作惡業。善男子。譬如香山有師子王。是故一切飛鳥走獸。絕跡此山無敢近者。有時是王至雪山中。一切鳥獸猶故不住。須陀洹人亦復如是。雖不修道以道力故不作諸惡。善男子。譬如有人服食甘露。甘露雖滅以其力勢能令是人不生不死。善男子。如須彌山有上妙藥名楞伽利。有人服之雖念念滅。以藥力故不遇患苦。善男子。如轉輪王所坐之處。王雖不在無人敢近。何以故。王威力故。須陀

歿三本俱作沒〇亡同作沒〇姓同作性〇言如佛同作菩薩白佛言世尊如佛所十字

礙同作閡下同

無同作未

脫下同有果字

度元明俱作僻〇爲下三本俱有眞字〇慧同作智

洹人亦復如是。雖生惡國不修習道。以道力故不作惡業。善男子。須陀洹陰於此而滅雖生異陰。猶故不失須陀洹陰。善男子。譬如衆生爲果實故於種子中多役作業糞治溉灌。未得果實而子復滅。亦得名爲因子得果。須陀洹陰亦復如是。善男子。譬如有人資產巨富唯有一子先已終歿。其子有子復在他土。其人忽然奄便終亡。孫聞是已還收產業。雖知財貨非其所作。然其收取無遮護者。何以故。以姓一故。須陀洹陰亦復如是。師子吼言。如佛說偈。

比丘若修習　戒定及智慧　當知是不退　親近大涅槃

世尊。云何修戒云何修定。云何修慧。佛言。善男子。若有人受持禁戒。但爲自利人天受樂。不爲度脫一切衆生。不爲護持無上正法。但爲利養畏三惡道。爲命色力安無礙辯。畏懼王法惡名穢稱爲世事業。如是護戒則不得名修習戒也。善男子。云何名爲眞修習戒。受持戒時。若爲度脫一切衆生。爲護正法。度未度故。解未解故。歸無歸故。未入涅槃令得入故。如是修時不見戒不見戒相不見持者。不見果報不觀毀犯。善男子。若能如是是則名爲修習戒也。云何復名修習三昧。修三昧時。爲自度脫爲於利養。不爲衆生不爲護法。爲見貪欲穢食等過男女等根九孔不淨鬪訟打刺互相殺害。若爲此事修三昧者。是則不名修習三昧。善男子。云何復名眞修三昧。若爲衆生修習三昧。於衆生中得平等心。爲令衆生得不退法。爲令衆生得聖心故。爲令衆生得大乘故。爲欲護持無上法故。爲令衆生不退菩提故。爲令衆生得首楞嚴故。爲令衆生得金剛三昧故。爲令衆生得陀羅尼故。爲令衆生得四無礙故。爲令衆生見佛性故。作是行時不見三昧不見三昧相。不見修者。不見果報。善男子。若能如是是則名爲修習三昧。云何復名修於智慧。若有修者作是思惟。我若修習如是智慧。則得解脫度三惡道。誰能利益一切衆生。誰能度人於生死道。佛出世難如優曇花。我今能斷諸煩惱結必得解脫。是故我當勤修智慧速斷煩惱早得度脫。如是修者不得名爲修習智慧。云何名爲修習智慧者。若觀生老死苦。一切衆生無明所覆。不知修習無上正道。願我此身悉代衆生受大苦惱。衆生所有貧窮下賤破戒之心貪瞋癡業。願皆悉來集于我身。願諸衆生不生貪取。不爲名色之所繫縛。願諸衆生早度生死。令我一身處之不厭。願令一切皆得阿耨多羅三藐三菩提。

善上三本俱無復次二字
顚宋元俱作傎下同
常三本俱作色
夫宋作大

如是修時不見智慧不見智慧相。不見修者。不見果報。是則名爲修習智慧。善男子。修習如是戒定智慧。是名菩薩。不能如是修戒定慧。是名聲聞。|復次善男子。云何復名修習於戒。若能破壞一切衆生十六惡律儀。何等十六。一者爲利養食羔羊肥已轉賣。二者爲利買已屠殺。三者爲利養食豬豚肥已轉賣。四者爲利買已屠殺。五者爲利養食牛犢肥已轉賣。六者爲利買已屠殺。七者爲利養雞令肥肥已轉賣。八者爲利買已屠殺。九者釣魚。十者獵師。十一劫奪。十二魁膾。十三網捕飛鳥。十四兩舌。十五獄卒。十六呪龍。能爲衆生永斷如是十六惡業。是名修戒。云何修定。能斷一切世間三昧。所謂無身三昧。能令衆生生|顚倒心謂是涅槃。又無邊心三昧。淨聚三昧。世邊三昧。世斷三昧。世性三昧。世丈夫三昧。非想非非想三昧。如是等定能令衆生生|顚倒心謂是涅槃。若能永斷如是三昧。是則名爲修習三昧。云何復名修習智慧。能破世間所有惡見。一切衆生悉有惡見。所謂色卽是我亦是我所。色中有我我中有色。乃至識亦如是。|常卽是我色滅我存。色卽是我色滅我滅。復有人言。作者名我受者名色。復有人言。作者名色受者名我。復有人言。無作無受自生自滅悉非因緣。復有人言。無作無受悉是自在之所造作。復有人言。無有作者無有受者。一切悉是時節所作。復有人言。作者受者悉無所有。地等五大名爲衆生。善男子。若能破壞一切衆生如是惡見。是則名爲修習智慧。善男子。修習戒者爲身寂靜。修習三昧爲心寂靜。修習智慧爲壞疑心。壞疑心者爲修習道。修習道者爲見佛性。見佛性者爲得阿耨多羅三藐三菩提。得阿耨多羅三藐三菩提者。爲得無上大涅槃故。得大涅槃者爲斷衆生一切生死一切煩惱一切諸有一切諸界一切諸諦故。斷於生死乃至諸諦爲得常樂我淨法故。師子吼言。世尊。如佛所說。若不生滅名大涅槃。生亦如是不生不滅。何故不得名爲涅槃。善男子。如是如是。如汝所言。是生雖復不生不滅而有始終。世尊。是生死法亦無始終。若無始終則名爲常。常卽涅槃。何故不名生死爲涅槃耶。善男子。是生死法悉有因果。有因果故不得名之爲涅槃也。何以故。涅槃之體無因果故。師子吼言。世尊。|夫涅槃者亦有因果。如佛所說

　從因故生天　從因墮惡道　從因故涅槃　是故皆有因

如佛往昔告諸比丘。我今當說沙門道果。言沙門者。謂能具修戒定智慧。道者謂八聖道。沙門果者所謂涅槃。世

善上三本俱無佛言二字

陰同作蔭次同○移同作異

礙宋元俱作閡

尊。涅槃如是豈非果耶。云何說言涅槃之體無因無果。佛言。善男子。我所宣說涅槃因者所謂佛性。佛性之性不生涅槃。是故我言涅槃無因。能破煩惱故名大果。不從道生故名無果。是故涅槃無因無果。師子吼言。世尊。衆生佛性爲悉共有爲各各有。若共有者一人得阿耨多羅三藐三菩提時。一切衆生亦應同得。世尊。如二十人同有一怨。若一人能除餘十九人皆亦同除。佛性若爾。一人得時餘亦應得。若各各有則是無常。何以故。可算數故。然佛所說衆生佛性不一不二。若各各有不應說言諸佛平等。亦不應說佛性如空。佛言。善男子。衆生佛性不一不二。諸佛平等猶如虛空。一切衆生同共有之。若有能修八聖道者。當知是人則得明見。善男子。雪山有草名曰忍辱。牛若食之則成醍醐。衆生佛性亦復如是。師子吼言。如佛所說。忍辱草者一耶多耶。如其一者牛食則盡。如其多者云何而言衆生佛性亦如是耶。如佛所說。若有修習八聖道者則見佛性。是義不然。何以故。道若一者如忍辱草則應有盡。如其有盡一人修已餘則無分。道若多者云何得言具足修習。亦不得名薩婆若智。佛言。善男子。如平坦路。一切衆生悉於中行無障礙者。中路有樹其陰清涼。行人在下憩駕止息。然其樹陰常住不移。亦不消壞。無持去者。路喩聖道。陰喩佛性。善男子。譬如大城唯有一門。雖有多人經由入出。都無有能作障礙者。亦復無人破壞毀落而齎持去。善男子。譬如橋梁行人所由。亦無有人遮止障礙毀壞持去。善男子。譬如良醫遍療衆病。亦無有能遮止是醫治此捨彼。聖道佛性亦復如是。師子吼言。世尊。所引諸喩義不如是。何以故。先者在路於後則妨。云何而言無有障礙。餘亦皆爾。聖道佛性若如是者。一人修時應妨餘者。佛言。善男子。如汝所說義不相應。我所喩道是少分喩非一切也。善男子。世間道者則有障礙。此彼之異無有平等。無漏道者則不如是。能令衆生無有障礙。平等無二無有方處此彼之異。如是正道能爲一切衆生佛性而作了因不作生因。猶如明燈照了於物。善男子。一切衆生皆同無明因緣於行不可說言一人無明因緣行已其餘應無。一切衆生悉有無明因緣於行。是故說言十二因緣一切平等。衆生所修無漏正道亦復如是。等斷衆生煩惱四生諸界有道。以是義故名爲平等。其有證者彼此知見無有障礙。是故得名薩婆若智。師子吼言。一切衆生身不一種。或有天身或有人身畜生餓鬼地獄之身。如是多身差別非一。云何而言佛性爲一。佛言。善男子。譬如有人置毒乳中乃至醍醐皆悉有

㮈三本俱作奈
尸下同無那字
次二字亦同
恒下同無河字
那同作耶〇此
河同作河此
庠同作詳
止同作在〇尸
下同無那字

毒。乳不名酪。酪不名乳。乃至醍醐亦復如是。名字雖變毒性不失。遍五味中皆悉如是。若服醍醐亦能殺人。實不置毒於醍醐中。衆生佛性亦復如是。雖處五道受別異身。而是佛性常一無變。師子吼言。世尊。十六大國有六大城。所謂舍婆提城。婆枳多城。瞻婆城。毘舍離城。波羅㮈城。王舍城。如是六城世中最大。何故如來捨之在此邊地弊惡極陋隘小拘尸那城。入般涅槃。善男子。汝不應言拘尸那城邊地弊惡最陋隘小。應言是城微妙功德之所莊嚴。何以故。諸佛菩薩所行處故。善男子。如賤人舍。王若過者則應讚歎。是舍嚴麗福德成就。乃令大王迴駕臨顧。善男子。如人重病服穢弊藥服已病愈。即應歡喜讚歎是藥。最上最妙能愈我病。善男子。如人乘船在大海中。其船卒壞無所依倚。因倚死尸得到彼岸。到彼岸已應大歡喜讚歎是尸。我賴相遇而得安隱。拘尸那城亦復如是。乃是諸佛菩薩行處。云何而言邊地弊惡隘陋小城。善男子。我念往昔過恒河沙劫。劫名善覺。時有聖王姓憍尸迦。七寶成就千子具足。其王始初造立此城。周帀縱廣十二由延。七寶莊嚴土多有河。其水清淨柔軟甘美。所謂尼連禪河。伊羅跋提河。熙連禪河。伊搜末提河。毘婆舍那河。如是等河其數五百。此河彼岸樹木繁茂花菓鮮潔。爾時人民壽命無量。時轉輪聖王過百年已。作是唱言。如佛所說。一切諸法皆悉無常。若能修習十善法者。能斷如是無常大苦。人民聞已咸共奉修十喜之法。我於爾時聞佛名號。受持十善思惟修習。初發阿耨多羅三藐三菩提心。發是心已復以是法。轉教無量無邊衆生。言一切法無常變壞。是故我今續於此處。亦說諸法無常變壞。唯說佛身是常住法。我憶往昔所行因緣。是故今來在此涅槃。亦欲酬報此地往恩。以是義故我經中說。我眷屬者受恩能報。復次善男子。往昔衆生壽無量時。爾時此城名拘舍跋提。周帀縱廣五十由延。時閻浮提居民鄰接鷄飛相及。有轉輪王名曰善見。七寶成就千子具足。王四天下。第一太子思惟正法得辟支佛。時轉輪王見其太子成辟支佛威儀庠序神通希有。見是事已即捨王位如棄涕唾。出家在此娑羅樹間。八萬歲中修習慈心。悲喜捨心各八萬歲。善男子。欲知爾時善見聖王則我身是。是故我今常樂遊止如是四法。是四法者名爲三昧。以是義故。如來之身常樂我淨。善男子。以是因緣今來止此拘尸那城娑羅樹間。三昧正受。善男子。我念往昔過無量劫。此城爾時名迦毘羅衛。其城有王名曰白淨。其王夫人名曰摩耶。王有一子名悉達多。爾時王子不由師教

自然思惟.得阿耨多羅三藐三菩提.有二弟子.一名舍利弗.二名大目犍連.給侍弟子名曰阿難.爾時世尊在雙
樹間.演說如是大涅槃經.我時在會得預斯事.聞諸衆生悉有佛性.聞是事已卽於菩提得不退轉.尋自發願.願
未來世成佛之時.父母國土名字弟子侍使之人說法教化.如今世尊等無有異.以是因緣.今來在此敷揚演說
大涅槃經.善男子.我初出家未得阿耨多羅三藐三菩提時.頻婆娑羅王遣使而言.悉達太子.若爲聖王我當臣
屬.若不樂家得阿耨多羅三藐三菩提者.願先來至此王舍城說法度人受我供養.我時默然已受彼請.善男子.
我初得阿耨多羅三藐三菩提已向竭闍國.時伊連禪河有婆羅門.姓迦葉氏.與五百弟子在彼河側求無上道.
我爲是人故往說法.迦葉言.瞿曇.我今年邁已百二十.摩伽陀國所有人民.及其大王頻婆娑羅.咸謂我已證羅
漢果.我今若當在於汝前聽受法者.一切人民或生倒心.大德迦葉非羅漢耶.幸願瞿曇速往餘處.若此人民定
知瞿曇功德勝我.我等無由復得供養.我時答言.迦葉.汝若於我不生殷重大瞋恨者.見容一宿明當早去.迦葉
言.瞿曇.我心無他深相愛重.但我住處有一毒龍.其性暴急恐相危害.我言.迦葉.毒中之毒不過三毒.我今已斷.
世間之毒我所不畏.迦葉復言.苟能不畏善哉聽住.善男子.我於爾時故爲迦葉現十八變.如經中說.爾時迦葉
及其眷屬五百等輩.見聞是已證羅漢果.是時迦葉復有二弟.一名伽耶迦葉.二名那提迦葉.師徒眷屬復有五
百.亦皆證得阿羅漢果.時王舍城六師之徒聞是事已.卽於我所生大惡心.我時赴信受彼王請詣王舍城.未至
中路王與無量百千之衆悉來奉迎.我爲說法.時聞法已.欲界諸天八萬六千發阿耨多羅三藐三菩提心.頻婆
娑羅王所將營從十二萬人得須陀洹果.無量衆生成就忍心.旣入城已度舍利弗大目犍連及其眷屬二百五
十.令捨本心出家學道.我卽住彼受王供養.外道六師相與聚集詣舍衛城.時彼城中有一長者名須達多.爲兒
娉婦詣王舍城.旣達彼城寄止長者珊檀那舍.時此長者中夜而起.告諸眷屬.仁等可起速共莊嚴掃治宅舍辦
具餚饍.須達聞已尋自思惟.將非欲請摩伽陀王耶.爲有婚姻歡樂會乎.思惟是已尋前問言.大士.欲請摩伽陀王
頻婆娑羅耶.爲有婚姻歡樂會乎.忽務不安乃如是耶.長者答言.不也居士.我明請佛無上法王.須達長者初聞
佛名身毛皆竪.尋復問言.何等名佛.長者答言.汝不聞耶.迦毗羅城有釋種子.字悉達多.姓瞿曇氏.父名白淨.其

犍同作揵下同

時三本俱作是

聚集同作集聚

娉同作聘

非同作無○士同作王

忽明作怱

礙三本俱作閡
士元明俱作王
結三本俱作絡
惟宋元俱作唯
愍三本俱作憫
次同
斯同作此
告同作語

生未久相師占之。定當得作轉輪聖王。如菴羅菓已在手中。心不願樂捨之出家。無師自覺得阿耨多羅三藐三菩提。貪恚癡盡常住無變。不生不滅無有憂畏。於諸衆生其心平等。猶如父母等視一子。所有身心衆中最勝。雖勝一切而無憍慢。塗割二事其心無二。智慧通達於法無礙。具足十力四無所畏五智三昧大慈大悲及三念處。故號爲佛。明受我請。是故忽忽未暇相瞻。須達多言。善哉大士。所言佛者功德無上。今在何處。長者答言。今在此閻王舍大城。住迦蘭陀竹林精舍。時須達多一心念佛所有功德十力無畏五智三昧大慈大悲及三念處。作是念時忽然大明。其明猛盛猶如白日。卽尋光出至城門下。佛神力故門自然開。既出門已路有天祠。須達經過禮拜致敬。尋還黑闇。心生惶怖。復欲還返所止之處。時彼城門有一天神。告須達言。仁者若往如來所者多獲善利。須達多言。云何善利。天言。長者。假使有人眞實交結。駿馬百匹香象百頭寶車百乘。鑄金爲人其數復百。端正女人身佩瓔珞衆寶厠塡。上妙宮宅殿堂屋宇雕文刻鏤。金槃銀粟銀槃金粟。數各一百以施一人。如是展轉盡閻浮提所得功德。不如有人發意一步詣如來所。須達多言。善男子。汝是誰耶。天言。長者。我是勝相婆羅門子。是汝往昔善知識也。我因往日見舍利弗大目犍連心生歡喜。捨身得作北方天王毘沙門子。專知守護此王舍城。我因禮拜舍利弗等生歡喜心。尚得如是妙好之身。況當得見如來大師禮拜供養。須達長者聞是事已。卽還復道來詣我所。到已頭面敬禮我足。我時卽爲如應說法。長者聞已得須陀洹果。既獲果證復證我言。如來大慈。惟願臨顧。至舍衞城受我微供。我卽問言。卿舍衞城頗有精舍相容受不。須達多言。若佛哀愍必見垂顧。便當自竭營辦成立。善男子。我於爾時默然受請。須達長者已蒙聽許。卽白我言。我從昔來未爲斯事。惟願如來遣舍利弗指授儀則。我卽顧命勅令營佐。時舍利弗與須達多。共載一車往舍衞城。我神力故經一日夜便到所止。時須達多白舍利弗。大德。此大城外何處有地不近不遠多饒泉池。有好林樹花果鬱茂淸淨閑曠。我當於中爲佛世尊及比丘僧造立精舍。舍利弗言。祇陀園林不近不遠淸淨寂寞多有泉流。樹木花果隨時而有。此處最勝可立精舍。時須達多聞是語已。卽往祇陀大長者所。告祇陀言。我今欲爲無上法王造立僧坊。唯仁園地可以造立。吾今欲買能見與不。祇陀答言。設以眞金遍布其地猶不相與。須達多言。善哉祇陀。林地屬我汝便取金。祇陀答言。我園

不賣云何取金。須達多言若意不了當共往詣斷事人所。時二長者即共俱往。斷事者言。園屬須達祇陀取金。須達長者即時使人車馬載負隨集布地。一日之中唯五百步金未周遍。祇陀言曰。長者若悔隨意聽止。須達多言。吾不悔也。自念當出何藏金足。祇陀念言。如來法王眞實無上。所說妙法淸淨無染。故使斯人輕寶乃爾。即語須達。餘未遍者不復須金。請以見與。我自爲佛造立門樓。常使如來經由出入。祇陀長者自造門坊。須達長者七日之中成立大房足三百間。禪坊靜處六十三所。冬屋夏堂各各別異。廚坊浴室洗脚之處。大小圊厠無不備足。所設已訖。即執香鑪。向王舍城遙作是言。所設已辦。惟願如來慈哀憐愍。爲諸衆生受是住處。我時知是長者心。即與大衆發王舍城。譬如壯士屈伸臂頃。至舍衛城祇陀園林須達精舍。我既到已。須達長者以其所設奉施於我。我時受已即住其中

鑪明作爐

玄三本俱作懸

# 大般涅槃經卷第二十七

師子吼菩薩品之三

# 大般涅槃經卷第二十八

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

〔麗士〕〔宋合〕〔元輔〕〔明樹〕

## 師子吼菩薩品之四

是時六師心生嫉妬。悉來集詣波斯匿王。作如是言。大王當知。王之土境清夷閑靜。眞是出家住止之處。是故我等爲斯事故而來至此。大王。以正法治爲民除患。沙門瞿曇年旣幼稚。學日又淺道術無施。此國先有耆舊宿德。自怙王種不生恭敬。若是王種法應治民。如其出家應敬宿德。大王善聽。沙門瞿曇眞實不生王種之中。瞿曇沙門若有父母。何由劫奪他人父母。大王。我經中說。過千歲已有一妖祥幻化物出。所謂沙門瞿曇是也。是故當知。沙門瞿曇無父無母。若有父母云何說言。諸法無常苦空無我無作無受。以幻術故誑惑衆生。愚者信受智者捨之。大王。夫人王者天下父母。如稱如地如風如火如道如河如橋如燈如日如月。如法斷事不擇怨親。沙門瞿曇不聽我活。隨我去處追逐不捨。唯願大王。聽我與彼捔其道力。若彼勝我我當屬彼。我若勝彼彼當屬我。王言。大德。汝等各各自有行法止住之處。亦各不同。我今定知如來世尊於汝無妨。六師答言。云何無妨。沙門瞿曇以幻術法。誘誑諸人及婆羅門歸伏已盡。王若聽我與捔道力。王之善名流布八方。如其不者惡聲盈路。王言。大德。汝等未知如來道力威神巍巍。故求捔試。若定知者恐不能也。大王。汝今已受瞿曇幻耶。唯願大王。留神聽察莫輕我等。搆之虛言不如驗之以實。王言。善哉善哉。六師之徒歡喜而出。時波斯匿王卽勑嚴駕。來至我所頭面禮敬。右繞三帀退坐一面。而白我言。世尊。六師向來求捔道力。我不量度敢以許之。佛言。大王。善哉善哉。但當更於此國處處造立僧坊。何以故。我若與彼捔其神力。彼衆之中受化者多。此處狹小云何容受。善男子。我於爾時爲六師故。從初一日至十五日。現大希有神通變化。當是時也無量衆生發阿耨多羅三藐三菩提心。無量衆生於三

來同作共

唯同作惟下同

洹下三本俱無果字

愍同作憫下同○闇同作暗次同○申同作伸

相同作共

坐三本俱作住○一二等記數下同無者字下皆同○無同作於間下同無之字

實所生信不疑。六師徒衆其數無量。破邪見心正法出家。無量衆生於菩提中得不退心。無量衆生得陀羅尼諸三昧門。無量衆生得須陀洹果至阿羅漢果。爾時六師內心慚愧。相與圍繞至婆枳多城。教彼人民信受邪法。瞿曇沙門但說空事。善男子。我時爲母處忉利天波利質多樹安居說法。是時六師心大歡喜。唱言善哉。瞿曇幻術今已滅沒。復教無量無數衆生增長邪見。爾時頻婆娑羅波斯匿王及四部衆。白目連言。大德。此閻浮提邪見增長。衆生可愍。行大黑闇。惟願大德。至彼天上稽首世尊。如我言曰。譬如犢子其生未久。若不得乳必死無疑。我等衆生亦復如是。惟願如來哀愍衆生還來住此。時目揵連默然而許。如大力士屈申臂頃。往彼天上至世尊所。白佛言。閻浮提中所有四衆渴仰如來思見聞法。頻婆娑羅波斯匿王及四衆等。稽首足下。此閻浮提所有衆生。邪見增長行大黑闇甚可憐愍。譬如犢子其生未久。若不得乳必死不疑。我等亦爾。惟願如來。爲衆生故還來在此閻浮提中。佛告目連。汝今速還至閻浮提。告諸國王及四部衆。却後七日我當還下。爲六師故復當至彼婆枳多城。過七日已。佛與釋天梵天魔天無量天子及首陀會一切天人。前後圍繞至婆枳多城。大師子吼。作如是言。唯我法中獨有沙門及婆羅門。一切諸法無常無我。涅槃寂靜離諸過患。若言他法亦有沙門及婆羅門有常有我有涅槃者無有是處。爾時無量無邊衆生發阿耨多羅三藐三菩提心。是時六師各相謂言。若我法中實無沙門婆羅門者。云何而得世間供養。於是六師復相集聚詣毘舍離。善男子。我於一時住毘舍離菴羅林間。時菴羅女知我在中欲來我所。我於爾時告諸比丘。當觀念處善修智慧。隨所修習心莫放逸。云何名爲觀於念處。若有比丘。觀察內身不見於我及以我所。觀察外身及內外身。不見於我及以我所。觀受心法亦復如是。是名念處。云何名爲修習智慧。若有比丘。眞實而見苦集滅道。是名比丘修習智慧。云何名爲心不放逸。若有比丘。念佛念法念僧念戒念捨念天。是名比丘心不放逸。時菴羅女即至我所。頭面作禮右繞三帀。修敬已畢却坐一面。善男子。我於爾時爲菴羅女如應說法。是女聞已發阿耨多羅三藐三菩提心。時彼城中有梨車子。其數五百。來至我所。頭面作禮右繞三帀。修敬已畢却坐一面。我時復爲諸梨車子如應說法。諸善男子。夫放逸者有五事果。何等爲五。一者不得自在財利。二者惡名流布無外。三者不樂惠施窮乏。四者不樂見於四衆。五者不得諸天之身。諸善男

車下同無子字　礙同作閡下同　㮈同作柰次二字亦同　告同作而　如三本俱作至　○語明作女

子。因不放逸能生世法出世間法。若有欲得阿耨多羅三藐三菩提者。應當勤修不放逸法。夫放逸者復得十三果報。何等十三。一者樂爲世間作業。二者樂說無益之言。三者常樂久寢睡眠。四者樂說世間之事。五者常樂親近惡友。六者懈怠懶惰。七者常爲他人所輕。八者雖有所聞尋復忘失。九者樂處邊地。十者不能調伏諸根。十一者食不知足。十二者不樂空寂。十三者所見不正。是名十三。善男子。夫放逸者。雖得近佛及佛弟子猶故爲遠。諸黎車子言。我等自知是放逸人。何以故。如其我等不放逸者。如來法王當出我土。時大會中有婆羅門子。名曰無勝。語諸黎車。善哉善哉。如汝所言。頻婆娑羅王已獲大利。如來世尊出其國土。猶如大池生妙蓮花。雖生在水水不能汙。諸黎車子。佛亦如是。雖生彼國不爲世法之所滯礙。諸佛世尊無出無入。爲衆生故出現於世。不爲世法之所滯礙。仁等自迷耽荒五欲。不知親近往如來所。是故名爲放逸之人。非佛出於摩伽陀國名放逸也。何以故。如來世尊猶彼日月。非爲一人二人出世。時諸黎車聞是語已。尋發阿耨多羅三藐三菩提心。復作是言。善哉善哉。無勝童子。快說如是善妙之言。時諸黎車各各脫身所著一衣以施無勝。無勝受已轉以奉我。復作是言。世尊。我從黎車得是衣物。唯願如來哀愍衆生受我所獻。我於爾時愍彼無勝卽爲納受。時諸黎車同時合掌作如是言。唯願如來。於此土地一時安居受我微供。我時默然受黎車請。是時六師聞是事已。師宗相與詣波羅㮈。爾時我復往波羅㮈住波羅河邊。時波羅㮈有長者子。名曰寶稱。耽荒五欲不知非常。以我到故自然而得白骨觀法。見其殿舍宮人婇女悉爲白骨。心生怖懼。如刀毒蛇如賊如火。卽出其舍來詣我所隨路告言。瞿曇沙門。我今如爲賊所追逐甚大怖懼。願見救濟。佛言。善男子。佛法衆僧安隱無懼。長者子言。若三寶中無所畏者。我今亦當得無所畏。我卽聽其出家爲道。時長者子復有同友其數五十。亦聞寶稱厭離出家。卽共和順相與出家。六師聞已展轉復詣瞻婆大城。時瞻婆國一切人民。悉共奉事六師之徒。初未曾聞佛法僧名。多有諸人作極惡業。我於爾時爲衆生故往瞻婆城。時彼城中有大長者無有繼嗣。供事六師以求子息。於後不久其婦懷妊。長者知已往六師所。歡喜而言。我婦懷妊男耶女耶。六師答言。生必是女。長者聞已心生愁惱。復有知識來謂長者。何故愁惱乃如是耶。長者答言。我婦懷妊未知男女故問六師。六師見語。如我相法生必是女。我聞是語自惟年老財富無量。

揵三本俱作犍

玄同作懸

嘖同作責○瞿曇沙門同作沙門瞿曇○燒同作相○言同作語

如其非男無所付囑。是故我愁。知識復言。汝無智慧。先不聞耶。優樓頻螺迦葉兄弟爲誰弟子。佛耶六師耶。六師若是一切智者。迦葉何故捨之爲佛弟子。又舍利弗目揵連等。及諸國王頻婆娑羅等。諸王夫人末利夫人等。諸國長者須達多等。如是諸人非佛弟子耶。曠野鬼神。阿闍世王。護財醉象。鴦掘摩羅。惡心熾盛欲害其母。如是等輩斯非如來所調伏耶。長者。如來世尊於一切法知見無礙。故名爲佛。發言無二故名如來。斷煩惱故名阿羅訶。世尊所說終無有二。六師不爾云何可信。如來今者近在此住。若欲實知當詣佛所。爾時長者卽與是人來詣我所頭面作禮。右遶三帀合掌長跪。而作是言。世尊。於諸衆生平等無二怨親一相。我爲愛結之所繫縛。於怨親中未能無二。我今欲問如來世事。深自愧慚未敢發言。世尊。我婦懷妊。六師相言。生必是女。是事云何。佛言。長者。汝婦懷妊是男無疑。其兒生已福德無比。爾時長者聞是語已。生大歡喜便退還家。爾時六師聞我玄記生者必男有大福德。心生嫉妬。以菴羅果和合毒藥。持往其家語長者言。快哉瞿曇善說其相。汝婦臨月可服此藥。服此藥已兒則端正産者無患。長者歡喜受其毒藥與婦令服。服已尋死。六師歡喜周遍城市高聲唱言。沙門瞿曇記彼長者。婦當生男其兒福德天下無勝。今兒未生母已喪命。爾時長者復於我所生不信心。卽依世法殯斂棺蓋。送至城外多積乾薪以火焚之。我以道眼明見此事。顧命阿難。取我衣來。吾欲往彼摧滅邪見。時毘沙門天告摩尼跋陀大將言。如來今欲詣彼塚間。卿可速往平治掃灑安師子座求妙香花莊嚴其地。爾時六師遙見我往。各相謂言。瞿曇沙門至此塚間欲噉肉耶。爾時多有未得法眼諸優婆塞。各懷愧懼而白我言。彼婦已死願不須往。爾時阿難語諸人言。且待須臾。如來不久當廣開闡諸佛境界。我時到已坐師子座。長者難言。所言無二可名世尊。母已終亡云何生子。我言長者。卿於爾時都不見問母命脩短。但問所懷爲是男女。諸佛如來發言無二。是故當知定必得子。是時死尸火燒腹裂。子從中出端坐火中。猶如鴛鴦處蓮花臺。六師見已復作是言。妖哉瞿曇善爲幻術。長者見已心復歡喜。訶嘖六師。若言幻者汝何不作。我於爾時尋告耆婆。汝往火中抱是兒來。耆婆欲往。六師尚牽語耆婆言。瞿曇沙門所作幻術未必常爾。或能不能。如其不能脫能燒害。汝今云何信受其言。耆婆答言。如來使入阿鼻地獄。所有猛火尚不能燒。況世間火。爾時耆婆前入火聚。猶入清涼大河水中。抱持是兒還詣我

尸下三本俱無那字
時同作復
菓同作果
七元明俱作六
遍三本俱作帀
唯明作惟下同
顚宋元俱作傎下同

所授兒與我我受兒已告長者言。一切衆生壽命不定如水上泡。衆生若有重業果報。火不能燒毒不能害。是兒業報非我所作。時長者言。善哉世尊。是兒若得盡其天命。唯願如來爲立名字。佛言長者。是兒生於猛火之中。火名樹提。應名樹提。爾時會中見我神化。無量衆生發阿耨多羅三藐三菩提心。爾時六師周遍六城不得停足。慚愧低頭。復來至此拘尸那城。既至此已唱如是言。諸人當知。沙門瞿曇是大幻師。誑惑天下遍六大城。譬如幻師幻作四兵。所謂車兵馬兵象兵步兵。又復幻作種種瓔珞城郭宮宅河池樹木。沙門瞿曇亦復如是。幻作王身爲說法故。或作沙門婆羅門身男身女身小身大身。或作畜生鬼神之身。或說無常。或說有常。或時說苦。或時說樂。或說有我。或說無我。或說有淨。或說無淨。或時說有。或時無說。所爲虛妄故名爲幻。譬如因子隨子得菓。瞿曇沙門亦復如是。摩耶所生母既是幻。子不得非。沙門瞿曇無實知見。諸婆羅門經年積歲。修習苦行護持禁戒。尚言未有眞實知見。何況瞿曇年少學淺不修苦行。云何而有眞實知見。若能具滿七年苦行。見猶不多。況所修習不滿六年。愚人無智信受其教。如大幻師誑惑愚者。沙門瞿曇亦復如是。善男子。如是六師於此城中。大爲衆生增長邪見。善男子。我見是事心生憐愍。以其神力請召十方諸大菩薩。雲集此林周遍彌滿四十由旬。今於此中大師子吼。善男子。雖於空處多有所說。則不得名師子吼也。於此智人大衆之中。眞得名爲大師子吼。師子吼者說一切法悉無常苦無我不淨。唯說如來常樂我淨。爾時六師復作是言。若瞿曇有我我亦有我。所言我者見者名我。瞿曇。譬如有人向中見物。我亦如是。向喩於眼見者喩我。佛告六師。若言見者名我。是義不然。何以故。汝所引喩因向見者。人在一向六根俱用。若定有我因眼見者。何不如彼一根之中俱伺諸塵。若一根中不能一時聞見六塵。當知無我。所引向喩。雖經百年見者因之所見無異。眼根若爾年邁根熟亦應無異。人向異故見內見外。眼根若爾亦應內外一時俱見。若不見者云何有我。六師復言。瞿曇。若無我者誰能見耶。佛言。有色有明有心有眼。是四和合故名爲見。是中實無見者受者。衆生顚倒言有見者及以受者。以是義故。一切衆生所見顚倒。諸佛菩薩所見眞實。六師若言色是我者。是亦不然。何以故。色實非我。色若是我不應而得醜陋形貌。何故復有四姓差別。不悉一種婆羅門耶。何故屬他不得自在。諸根缺陋生不具足。何故不作諸天之身。而受地獄畜生餓鬼種種

苦故爲三本俱作以苦故

無及有上同無若字○言上同無復字

齊同作劑

及同作乃

頂上同無當字

---

諸身。若不能得隨意作者。當知必定無有我也。以無我故名爲無常。無常故苦。苦故爲空。空故顚倒。以顚倒故一切衆生輪轉生死。受想行識亦復如是。六師。如來世尊永斷色縛乃至識縛。是故名爲常樂我淨。復次色者卽是因緣。若因緣者則名無我。若無我者名爲苦空。如來之身非是因緣。非因緣故則名有我。若有我者卽常樂淨。六師復言。瞿曇。色亦非我乃至識亦非我。我者遍一切處猶如虛空。佛言。若遍有者則不應言我初不見。若初不見則知是見本無今有。若本無今有是名無常。若無常者云何言遍。若遍有者五道之中應具有身。若有身者應各受報。若各受報云何而言轉受人天。汝言遍者一耶多耶。我若一者則無父子怨親中人。我若多者一切衆生所有五根悉應平等。所有業慧亦應如是。若如是者云何說言根有具足不具足者。善業惡業愚智差別。瞿曇。衆生我者無有邊際。法與非法則有分齊。衆生修法則得好身。若行非法則得惡身。以是義故。衆生業果不得無差。佛言。六師。法與非法若如是者我則不遍。我若遍者則應悉到。如其到者修善之人亦應有惡。行惡之人亦應有善。若不爾者云何言遍。瞿曇。譬如一室然百千燈各各自明不相妨礙。衆生我者亦復如是。修善行惡不相雜合。汝等若言我如燈者。是義不然。何以故。彼燈之明從緣而有。燈增長故明亦增長。衆生我者則不如是。明從燈出住在異處。衆生我者不得如是從身而出住在異處。彼燈光明與闇共住。何以故。如闇室中然一燈時照則不了。及至多燈乃得明了。若初燈破闇則不須後燈。若須後燈。當知初明與闇共住。瞿曇。若無我者誰作善惡。佛言。若我作者云何名常。如其常者云何而得有時作善有時作惡。若言有時作善惡者。云何復得言我無邊。若我作者何故而復習行惡法。如其我是作者知者。何故生疑衆生無我。以是義故。外道法中定無有我。若言我者則是如來。何以故。身無邊故。無疑網故。不作不受故名爲常。不生不滅故名爲樂。無煩惱垢故名爲淨。無有十相故名爲空。是故如來常樂我淨空無諸相。諸外道言。若言如來常樂我淨無相故空。當知瞿曇所說之法則非空也。是故我今當頂戴受持。爾時外道其數無量。於佛法中信心出家。善男子。以是因緣故。我於此娑羅雙樹大師子吼。師子吼者名大涅槃。善男子。東方雙者破於無常獲得於常。乃至北方雙者破於不淨而得於淨。善男子。此中衆生爲雙樹故護娑羅林。不令外人取其枝葉斫截破壞。我亦如是爲四法故令諸弟子護持佛法。何等爲四。常樂我淨。

師上明有修字○敷三本俱作蕚下同○心明作生
無元明便作樂
發上三本俱有便字
蒸同作烝
光同作無
傳同作轉

此四雙樹四王典掌。我爲四王護持我法。是故於中而般涅槃。善男子。娑羅雙樹花果常茂。常能利益無量衆生。我亦如是。常能利益聲聞緣覺。花者喩我。果者喩樂。以是義故。我於此間娑羅雙樹入大寂定。大寂定者名大涅槃。師子吼言。世尊。如來何故二月涅槃。善男子。二月名春。春陽之月萬物生長。種植根栽花果敷榮。江河盈滿百獸孚乳。是時衆生多生常想。爲破衆生如是常心。說一切法悉是無常。唯說如來常住不變。善男子。於六時中孟冬枯顇衆不愛樂。陽春和液人所貪愛。爲破衆生世間樂故演說常樂。我淨亦爾。如來爲破世我世淨。故說如來眞實我淨。言二月者喩於如來二種法身。冬不樂者智者不樂如來無常入於涅槃。二月樂者喩於智者愛樂如來常樂我淨。種植者喩諸衆生聞法歡喜發阿耨多羅三藐三菩提心種諸善根。河者喩於十方諸大菩薩來詣我所諮受如是大涅槃典。百獸孚乳者喩我弟子生諸善根。花喩七覺。果喩四果。以是義故。我於二月入大涅槃。師子吼言。如來初生出家成道轉妙法輪皆以八日。何故涅槃獨十五日。佛言。善哉善哉。善男子。如十五日月無虧盈。諸佛如來亦復如是。入大涅槃無有虧盈。以是義故。於十五日入般涅槃。善男子。如十五日月盛滿時有十一事。何等十一。一能破闇。二令衆生見道非道。三令衆生見道邪正。四除鬱蒸得淸涼樂。五能破壞螢火高心。六息一切賊盜之想。七除衆生畏惡獸心。八能開敷優鉢羅花。九合蓮花。十發行人進路之心。十一令諸衆生樂受五欲多獲快樂。善男子。如來滿月亦復如是。一者破壞無明大闇。二者演說正道邪道。三者開示生死邪嶮涅槃平正。四者令人遠離貪欲瞋恚癡熱。五者破壞外道光明。六者破壞煩惱結賊。七者除滅畏五蓋心。八者開敷衆生種善根心。九者覆蓋衆生五欲之心。十者發起衆生進修趣向大涅槃行。十一者令諸衆生樂修解脫。以是義故。於十五日入大涅槃。而我眞實不入涅槃。我弟子中愚癡惡人。定謂如來入於涅槃。譬如母人多有諸子。其母捨行至他國土。未還之頃諸子各言我母已死。而是母人實不死也。師子吼菩薩言。世尊。何等比丘能莊嚴此娑羅雙樹。善男子。若有比丘受持讀誦十二部經。正其文句通達深義。爲人解說初中後善。爲欲利益無量衆生演說梵行。如是比丘則能莊嚴娑羅雙樹。師子吼言。世尊。如我解佛所說義者。阿難比丘卽其人也。何以故。阿難比丘受持讀誦十二部經。爲人開說正語正義。猶如瀉水置之異器。阿難比丘亦復如是。從佛所聞如聞傳說。善男

樂元明俱作常

莊嚴三本俱作
疾無同作不

惟元作唯次同

住下三本俱有
住字○如上同
有願字

住下同有者字
○空上同有爲
字

子。若有比丘得淨天眼。見於十方三千大千世界所有。如觀掌中菴摩勒果。如是比丘亦能莊嚴娑羅雙樹。師子吼言。世尊。若如是者。阿尼樓馱比丘卽其人也。何以故。阿尼樓馱天眼見於三千大千世界所有。乃至中陰悉能明了無障礙故。善男子。若有比丘少欲知足心樂寂靜。勤行精進念定慧解。如是比丘則能莊嚴娑羅雙樹。師子吼言。世尊。若如是者。迦葉比丘卽其人也。何以故。迦葉比丘善修少欲知足等法。善男子。若有比丘爲益衆生不爲利養。修習通達無諍三昧聖行空行。如是比丘則能莊嚴娑羅雙樹。師子吼言。世尊。若如是者。須菩提比丘卽其人也。何以故。須菩提者善修無諍聖行空行故。善男子。若有比丘善修神通。一念之中能作種種神通變化。一心一定能作二果。所謂水火。如是比丘則能莊羅娑羅雙樹。師子言吼。世尊。若如是者。目連比丘卽其人也。何以故。目揵連者善修神通無量變化故。善男子。若有比丘善修大智利智莊嚴智解脫智甚海智廣智無邊智無勝智實智。具足成就如是慧根。於怨親中心無差別。若聞如來涅槃無常心無憂慼。若聞常住不入涅槃不生欣慶。如是比丘則能莊嚴娑羅雙樹。師子吼言。世尊。若如是者。舍利弗比丘卽其人也。何以故。舍利弗者善能成就具足如是大智慧故。善男子。若有比丘。能說衆生悉有佛性。得金剛身無有邊際常樂我淨。身心無礙得八自在。如是比丘則能莊嚴娑羅雙樹。師子吼言。世尊。若如是者。唯有如來是其人也。何以故。如來之身金剛無邊常樂我淨身心無礙具八自在故。世尊。惟有如來乃能莊嚴娑羅雙樹。如其無者則不端嚴。惟願大慈爲莊嚴故。常住於此娑羅樹林。佛言。善男子。一切諸法性無住住。汝云何言。願如來住。善男子。凡言住者名爲色法。從因緣生故名爲住。因緣無處故名無住。如來斷已一切色縛。云何當言如來住耶。受想行識亦復如是。善男子。住名憍慢。以憍慢故不得解脫。不得解脫故名爲住。誰有憍慢從何處來。是故得名爲無住住。如來永斷一切憍慢。云何而言願如來住。住者名有爲法。如來已斷有爲之法。是故不住。住名空法。如來已斷如是空法。是故獲得常樂我淨。云何而言願如來住。住者名爲二十五有。如來已斷二十五有。云何而言願如來住。住者卽是一切凡夫。諸聖無去無來無住。如來已斷去來住相。云何言住。夫無住者名無邊身。身無邊故。云何而言惟願如來住娑羅林。若住此林則是有邊身。若有邊則是無常。如來是常。云何言住。夫無住者名曰虛空。如來之性同於虛空。云何言住。又無住

是下三本俱無義字
常元作當
尸下三本俱無那字次同
與明作於

者名金剛三昧。金剛三昧壞一切住。金剛三昧即是如來。云何言住。又無住者則名爲幻。如來同幻。云何言住。又無住者名無始終。如來之性無有始終。云何言住。又無住者名無邊法界。無邊法界即是如來。云何言住。又無住者名首楞嚴三昧。首楞嚴三昧知一切法而無所著。以無著故名首楞嚴。如來具足首楞嚴定。云何言住。又無住者名處非處力。如來成就處非處力。云何言住。又無住者名檀波羅蜜。檀波羅蜜若有住者。則不得至尸波羅蜜乃至般若波羅蜜。以是義故檀波羅蜜名爲無住。如來乃至不住般若波羅蜜。云何願言如來常住娑羅樹林。又無住者名修四念處。如來若住四念處者。則不能得阿耨多羅三藐三菩提。名不住住。又無住者名無邊衆生界。如來悉到一切衆生無邊界分而無所住。又無住者名無屋宅。無屋宅者名爲無有。無有者名爲無生。無生者名爲無死。無死者名爲無相。無相者名爲無繫。無繫者名爲無著。無著者名爲無漏。無漏即善。善即無爲。無爲者即大涅槃常。大涅槃常者即我。我者即淨。淨者即樂。常樂我淨即是如來。善男子。譬如虛空不住東方南西北方四維上下。如來亦爾。不住東方南西北方四維上下。善男子。若有說言。身口意惡得善果者。無有是處。身口意善得惡果者。亦無是處。若言凡夫得見佛性十住菩薩不得見者。亦無是處。一闡提犯五逆罪謗方等經毀四重禁。得阿耨多羅三藐三菩提者。亦無是處。六住菩薩煩惱因緣墮三惡道。亦無是處。菩薩摩訶薩以眞女身得阿耨多羅三藐三菩提者。亦無是處。一闡提常三寶無常。亦無是處。如來住於拘尸那城。亦無是處。善男子。如來今於此拘尸那城入大三昧深禪定窟。衆不見故名大涅槃。師子吼言。如來何故入禪定窟。善男子。爲欲度脫諸衆生故。未種善根令得種故。已種善根得增長故。善果未熟令得熟故。爲已熟者說趣阿耨多羅三藐三菩提故。輕賤善法者令生尊貴故。諸有放逸者令離放逸故。爲與文殊師利等諸大香象共論議故。爲欲教化樂讀誦者深愛禪定故。爲以聖行梵行天行化衆生故。爲觀不共深法藏故。爲欲呵責放逸弟子故。如來常寂猶尙樂定。況汝等輩煩惱未盡而生放逸。爲欲呵責諸惡比丘受畜八種不淨之物及不少欲不知足故。爲令衆生尊重所聞禪定法故。以是因緣入禪定窟。師子吼言。世尊。無相定者名大涅槃。是故涅槃名爲無相。以何因緣名爲無相。善男子。無十相故。何等爲十。所謂色相聲相香味觸相生住壞相男相女相。是名十相。無如是相故名無相。善男子。夫著

他下三本俱無者字
下上同無謂字
婆元明俱作波

相者則能生癡。癡故生愛。愛故繫縛。繫縛故受生。生故有死。死故無常。不著相者則不生癡。不生癡故則無有愛。無有愛故則無繫縛。無繫縛故則不受生。不受生故則無有死。無有死故則名爲常。以是義故涅槃名常。師子吼言。世尊。何等比丘能斷十相。佛言。善男子。若有比丘。時時修習三種相者則斷十相。時時修習三昧定相。時時修習智慧之相。時時修習捨相。是名三相。師子吼言。世尊云何名爲定慧捨相定。是三昧者一切衆生皆有三昧。云何方言修習三昧。若心在一境則名三昧。若更餘緣則不名三昧。如其不定非一切智。非一切智云何名定。若以一行得三昧者。其餘諸行亦非三昧。若非三昧則非一切智。若非一切智云何名三昧。慧捨二相亦復如是。佛言。善男子。如汝所言。緣於一境得名三昧。其餘諸緣不名三昧。是義不然。何以故。如是餘緣亦一境故。行亦如是。又言衆生先有三昧不須修者。是亦不然。所以者何。言三昧者名善三昧。一切衆生眞實未有。云何而言不須修習。以住如是善三昧中觀一切法。名善慧相。不見三昧智慧異相。是名捨相。復次善男子。若取色相不能觀色。常無常相是名三昧。若能觀色常無常相。是名慧相。三昧慧等觀一切法。是名捨相。善男子。如善御駕駟遲疾得所。遲疾得所故名捨相。菩薩亦爾。若三昧多者則修習慧。若慧多者則修習三昧。三昧慧等則名爲捨。善男子。十住菩薩智慧力多三昧力少。是故不得明見佛性。聲聞緣覺三昧力多智慧力少。以是因緣不見佛性。諸佛世尊定慧等故。明見佛性了了無礙。如觀掌中菴摩勒果。見佛性者名爲捨相。奢摩他者名爲能滅。能滅一切煩惱結故。又奢摩他者名曰能調。能調諸根惡不善故。又奢摩他者名曰寂靜。能令三業成寂靜故。又奢摩他者名曰遠離。能令衆生離五欲故。又奢摩他者名曰能淸。能淸貪欲瞋恚愚癡三濁法故。以是義故故名定相。毘婆舍那名爲正見。亦名了見。名爲能見。名曰遍見。名次第見。名別相見。是名爲慧。憂畢叉者名曰平等。亦名不諍。又名不觀。亦名不行。是名爲捨。善男子。奢摩他者有二種。一者世間。二出世間。復有二種。一者成就。二不成就。成就者所謂諸佛菩薩。不成就者所謂聲聞辟支佛等。復有三種。謂下中上。下者謂諸凡夫。中者聲聞緣覺。上者諸佛菩薩。復有四種。一退。二住。三進。四能大利益。復有五種。所謂五智三昧。何等爲五。一無食三昧。二無過三昧。三身意淸淨一心三昧。四因果俱樂三昧。五常念三昧。復有六種。一觀骨三昧。二慈三昧。三觀十二因緣三昧。四阿那婆那三昧。五

念覺觀三昧。六觀生滅三昧。復有七種。所謂七覺分。一念覺分。二擇法覺分。三精進覺分。四喜覺分。五除覺分。六定覺分。七捨覺分。復有七種。一須陀洹三昧。二斯陀含三昧。三阿那含三昧。四阿羅漢三昧。五辟支佛三昧。六菩薩三昧。七如來覺知三昧。復有八種。謂八解脫三昧。一內有色相外觀色解脫三昧。二內無色相外觀色解脫三昧。三淨解脫身證三昧。四空處解脫三昧。五識處解脫三昧。六無所有處解脫三昧。七非有想非無想處解脫三昧。八滅盡定解脫三昧。復有九種。所謂九次第定。四禪四空及滅盡定三昧。復有十種。所謂十一切處三昧。何等爲十。一者地一切處三昧。二者水一切處三昧。三者風一切處三昧。四者青一切處三昧。五者黃一切處三昧。六者赤一切處三昧。七者白一切處三昧。八者空一切處三昧。九者識一切處三昧。十者無所有一切處三昧。復有無數種。所謂諸佛菩薩。善男子。是名三昧相。善男子。慧有二種。一者世間。二出世間。復有三種。一者般若。二者毗婆舍那。三者闍那。般若者名一切衆生。毗婆舍那者一切聖人。闍那者諸佛菩薩。又般若者名爲別相。毗婆舍那者名爲總相。闍那者名爲破相。復有四種。所謂觀四眞諦。善男子。爲三事故修奢摩他。何等爲三。一者不放逸故。二者莊嚴大智故。三者得自在故。復次爲三事故修毗婆舍那。何等爲三。一者爲觀生死惡果報故。二者爲欲增長諸善根故。三者爲破一切諸煩惱故

# 大般涅槃經卷第二十八

色上三本俱無內有二字〇觀上同無相外二字

十上三本俱無爲字

那下同無者字

三上同無爲字

# 大般涅槃經卷第二十九

〔麗士〕〔宋合〕〔元輔〕〔明樹〕

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

## 師子吼菩薩品之五

師子吼言。世尊。如經中說。若毗婆舍那能破煩惱。何故復修奢摩他耶。佛言。善男子。汝言毗婆舍那破煩惱者。是義不然。何以故。有智慧時則無煩惱。有煩惱時則無智慧。云何而言毗婆舍那能破煩惱。善男子。譬如明時無闇闇時無明。若有說言明能破闇。無有是處。善男子。誰有智慧誰有煩惱。而言智慧能破煩惱。如其無者則無所破。善男子。若言智慧能破煩惱。爲到故破不到故破。若不到破者。凡夫衆生則應能破。若到故破者。初念應破。若初念不破後亦不破。若初到便破是則不到。云何說言智慧能破。若言到與不到而能破者。是義不然。復次毗婆舍那破煩惱者。爲獨能破爲伴故破。若獨能破。菩薩何故修八正道。若伴故破。當知獨則不能破也。若獨不能伴亦不能。如一盲人不能見色。雖伴衆盲亦不能見。毗婆舍那亦復如是。善男子。如地堅性火熱性水濕性風動性。而地堅性乃至風動性。非因緣作其性自爾。如四大性煩惱亦爾性自是斷。若是斷者云何而言智慧能斷。以是義故。毗婆舍那決定不能破諸煩惱。善男子。如鹽性鹹令異物鹹。蜜本性甘令異物甘。水本性濕令異物濕。智慧性滅令|異法滅者。是義不然。何以故。若法無滅云何智慧强能令滅。若言鹽鹹令異物鹹慧滅亦爾|能令異法滅者。是亦不然。何以故。智慧之性念念滅故。若念念滅云何而言能滅他法。以是義故。智慧之性不破煩惱。善男子。一切諸法有二種滅。一|者性滅。二|者畢竟滅。若性滅者云何而言智慧能滅。若言智慧能滅煩惱如火燒物。是義不然。何以故。如火燒物則有遺燼。智慧若爾應有餘燼。如斧伐樹破處可見。智慧若爾有何可見。慧若能令煩惱離者。如是煩惱應餘處現。如諸外道離六大城拘尸城現。若是煩惱不餘處現。則知智慧不能令離。善男子。一切諸

令下三本俱無異字〇令上同無能字
一二等記數下同[illegible]者字下同

生同作出○顚宋元俱作傎下同
浣三本俱作澣
御同作禦○巧同作工○鉗同作廿○鑷宋作鑈元明俱作鬲○托三本俱作撓○融消元明俱作鎔銷
利下三本俱有益字
戚同作慼
薩下三本俱無摩訶薩三字次二亦同

法性若自空.誰能令生誰能令滅.生異滅異無造作者.善男子.若修習定則得如是正智正見.以是義故.我經中說.若有比丘修習定者.能見五陰生滅之相.善男子.若不修定世間之事尙不能了.況於出世.若無定者平處顚墜.心緣異法口宣異言.耳聞異聲心解異義.欲造異字手書異文.欲行異路身涉異徑.若有修習三昧定者.則大利益乃至阿耨多羅三藐三菩提.善男子.菩薩摩訶薩具足二法.能大利益.一定二智.善男子.如刈菅草執急則斷.菩薩摩訶薩修是二法亦復如是.善男子.如拔堅木先以手動後則易出.菩薩定慧亦復如是.先以定動後以智拔.善男子.如浣垢衣先以灰汁後以清水衣則鮮潔.菩薩定慧亦復如是.善男子.如先讀誦後則解義.菩薩定慧亦復如是.善男子.譬如勇人先以鎧仗牢自莊嚴然後御陣能壞怨賊.菩薩定慧亦復如是.善男子.譬如巧匠鉗鑷盛金自在隨意托攬融消.菩薩定慧亦復如是.善男子.譬如明鏡照了面像.菩薩定慧亦復如是.善男子.如先平地然後下種.先從師受後思惟義.菩薩定慧亦復如是.以是義故.菩薩摩訶薩修是二法能大利益.善男子.菩薩摩訶薩修是二法.調攝五根堪忍衆苦.所謂飢渴寒熱打擲罵辱.惡獸所嚙蚊蝱所螫.常攝其心不令放逸.不爲利養行於非法.客塵煩惱所不能汙.不爲諸邪異見所惑.常能遠離諸惡覺觀.不久成就阿耨多羅三藐三菩提.爲欲成就利衆生故.善男子.菩薩摩訶薩修是二法.四倒暴風不能吹動.如須彌山雖爲四風之所吹鼓不能令動.不爲外道邪師所拔.如帝釋幢不可移轉.衆邪異術不能誑惑.常受微妙第一安樂.能解如來深祕密義.受樂不欣逢苦不戚.諸天世人恭敬讚歎.明見生死及非生死.善能了知法界法性身有常樂我淨之法.是則名爲大涅槃樂.善男子.定相者名空三昧.慧相者名無願三昧.捨相者名無相三昧.善男子.若有菩薩摩訶薩.善知定時慧時捨時及知非時.是名菩薩摩訶薩行菩提道.師子吼言.世尊.云何菩薩知時非時.善男子.菩薩摩訶薩因於受樂生大憍慢.或因說法而生憍慢.或因精勤而生憍慢.或因解義善問答時而生憍慢.或因親近惡知識故而生憍慢.或因布施所重之物而生憍慢.或因世間善法功德而生憍慢.或因世間豪貴之人所恭敬故而生憍慢.當知爾時不宜修智宜應修定.是名菩薩知時非時.若有菩薩勤修精進.未得利益涅槃之樂.以不得故生於悔心.以鈍根故不能調伏五情諸根.諸垢煩惱勢力盛故自疑戒律.有羸損故.當知爾時不宜修定宜應修智.

是名菩薩知時非時。善男子。若有菩薩定慧二法不平等者當知爾時不宜修捨。二法若等則宜修之。是名菩薩知時非時。善男子。若有菩薩修習定慧起煩惱者。當知爾時不宜修捨。宜應讀誦書寫解說十二部經念佛念法念僧念戒念天念捨。是名修捨。善男子。若有菩薩修習如是三法相者。以是因緣得無相涅槃。師子吼言。世尊。無十相故名大涅槃爲無相者。復以何緣名爲無生無出無作屋宅洲歸安隱滅度涅槃寂靜無諸病苦無所有耶。佛言。善男子。無因緣故。故名無生。以無爲故。故名無出。無造業故。故名無作。不入五見。故名屋宅。離四瀑水。故名爲洲。調衆生故。故名歸依。壞結賊故。故名安隱。諸結火滅。故名滅度。離覺觀故。故名涅槃。遠憒閙故名曰寂靜。永斷必死。故名無病。一切無故。名無所有。善男子。若菩薩摩訶薩作是觀時。卽得明了見佛性。師子吼言。世尊。菩薩摩訶薩成就幾法。能見如是無相涅槃至無所有。佛言。善男子。菩薩摩訶薩成就十法。則能明見涅槃無相至無所有。何等爲十。一者信心具足。云何名爲信心具足。深信佛法衆僧是常。十方諸佛方便示現。一切衆生及一闡提悉有佛性。不信如來生老病死及修苦行提婆達多眞實破僧出佛身血如來畢竟入於涅槃正法滅盡。是名菩薩信心具足。二者淨戒具足。云何名爲淨戒具足。善男子。若有菩薩自言戒淨。雖不與彼女人和合。見女人時或共嘲調言語戲笑。如是菩薩成就欲法毀破淨戒。汙辱梵行令戒雜穢。不得名爲淨戒具足。復有菩薩自言戒淨。雖不與彼女人身合嘲調戲笑。於壁障外遙聞女人瓔珞環釧種種諸聲心生愛著。如是菩薩成就欲法毀破淨戒。汙辱梵行令戒雜穢。不得名爲淨戒具足。復有菩薩自言戒淨。雖復不與女人和合言語嘲調聽其音聲。然見男子隨逐女時。或見女人隨逐男時。便生貪著。如是菩薩成就欲法毀破淨戒。汙辱梵行令戒雜穢。不得名爲淨戒具足。復有菩薩自言戒淨。雖復不與女人和合言語嘲調聽其音聲見男女相隨。然爲生天受五欲樂。如是菩薩成就欲法毀破淨戒。汙辱梵行令戒雜穢。不得名爲淨戒具足。善男子。若有菩薩淸淨持戒。而不爲戒不爲尸羅波羅蜜。不爲衆生不爲利養。不爲菩提不爲涅槃不爲聲聞辟支佛。唯爲最上第一義故護持禁戒。善男子。是名菩薩淨戒具足。三者親近諸善知識。善知識者若有能說信戒多聞布施智慧令人受行。是名菩薩善知識也。四者樂於寂靜。寂靜者所謂身心寂靜。觀察諸法甚深法界。是名寂靜。五者精進。精進者所謂繫心觀四正

瀑同作暴次同

曰同作爲

尸下三本俱無羅字○唯明作惟下同

正同作聖

愛明作受

即三本俱作則

成下同無就字
○經上同有佛字

摩三本俱作魔

諦。設頭火然終不放捨。是名精進。六者念具足。念具足者所謂念佛念法念僧念戒念天念捨。是名念具足。七者軟語。軟語者所謂實語妙語先意問訊時語眞語。是名軟語。八者護法。護法者所謂愛樂正法常樂演說。讀誦書寫思惟其義。廣宣敷揚令其流布。若見有人書寫解說讀誦讚歎思惟義者。爲求資生而供養之。所謂衣服飲食臥具醫藥。爲護法故不惜身命。是名護法。九者菩薩摩訶薩見有同學同戒有所乏少。轉從他乞衣鉢染衣瞻病所須衣服飲食臥具房舍而供給之。十者具足智慧。智慧者所謂觀於如來常樂我淨一切衆生悉有佛性。觀法二相。所謂空不空常無常樂無樂我無我淨不淨。異法可斷異法不可斷。異法從緣生異法從緣見。異法從緣果異法非緣果。是名具足智慧。善男子。是名菩薩具足十法即能明見涅槃無相。師子吼言。世尊。如佛先告純陀汝今已得見於佛性得大涅槃。成就阿耨多羅三藐三菩提。是義云何。世尊。如經中說。若施畜生得百倍報。施一闡提得千倍報。施持戒者百千倍報。若施外道斷煩惱者得無量報。施四道向及以四果至辟支佛得無量報。施不退菩薩及最後身諸大菩薩如來世尊。所得福報無量無邊不可稱計不可思議。純陀大士。若受如是無量報者。是報無盡。何時當得阿耨多羅三藐三菩提。世尊。經中復說。若人重心造善惡業必得果報。若現世受。若次生受。若後世受。純陀善業重心作故。當知是業必定受報。若定受報云何得成阿耨多羅三藐三菩提。云何復得見於佛性。世尊。經中復說。施三種人果報無盡。一者病人。二者父母。三者如來。世尊。經中復說。佛告阿難。一切衆生如其無有欲界業者。即得阿耨多羅三藐三菩提。色無色業亦復如是。世尊。如法句偈。非空非海中。非入山石間。無有地方所。脫之不受業。又阿尼樓馱言。世尊。我憶往昔以一食施。八萬劫中不墮三惡。世尊。一食之施尚得是報。何況純陀信心施佛。具足成就檀波羅蜜。世尊。若善果報不可盡者。謗方等經犯五逆罪毀四重禁一闡提罪云何可盡。若不可盡。云何能得見於佛性成阿耨多羅三藐三菩提。佛言。善哉善哉。善男子。唯有二人能得無量無邊功德。不可稱計不可宣說。能竭生死漂流瀑河。降魔怨敵摧魔勝幢。能轉如來無上法輪。一者善問。二者善答。善男子。佛十力中業力最深。善男子。有諸衆生於業緣中心輕不信。爲度彼故作如是說。善男子。一切作業有輕有重。輕重二業復各有二。一者決定。二不決定。善男子。或有人言。惡業無果。若言惡業定有果者。云何氣嘘旃陀

摩三本俱作魔

羅而得生天。鴦崛摩羅得解脫果。以是義故。當知作業有定得果不定得果。我為除斷如是邪見故於經中說如是語。一切作業無不得果。善男子。或有重業可得作輕。或有輕業可得作重。非一切人。唯有愚智。是故當知非一切業悉定得果。雖不定得亦非不得。善男子。一切衆生凡有二種。一者智人。二者愚人。有智之人以智慧力能令地獄極重之業現世輕受。愚癡之人現世輕業地獄重受。師子吼言。世尊。若如是者則不應求清淨梵行及解脫果。佛言。善男子。若一切業定得果者。則不應求梵行解脫。以不定故則修梵行及解脫果。善男子。若能遠離一切惡業則得善果。若遠善業則得惡果。若一切業定得果者。則不應求修習聖道。若不修道則無解脫。一切聖人所以修道。為壞定業得輕報故。不定之業無果報故。若一切業定得果者。則不應求修習聖道。若人遠離修習聖道得解脫者。無有是處。不得解脫得涅槃者。亦無是處。善男子。若一切業定得果者。一世所作純善之業。應當永已常受安樂。一世所作極重惡業。亦應永已受大苦惱。業果若爾則無修道解脫涅槃。人作人受。婆羅門作婆羅門受。若如是者則不應有下姓下有。人應常人。婆羅門應常婆羅門。小時作業應小時受。不應中年及老時受。老時作惡生地獄中。地獄初身不應便受。應待老時然後乃受。若老時不殺不應壯年得壽。若無壯壽云何至老。業無失故。業若無失。云何而有修道涅槃。善男子。業有二種。定以不定。定業有二。一者報定。二者時定。或有報定而時不定緣合則受。或三時受。所謂現受生受後受。善男子。若定心作善惡等業。作已深生信心歡喜。若發誓願供養三寶。是名定業。善男子。智者善根深固難動。是故能令重業為輕。愚癡之人不善深厚。能令輕業而作重報。以是義故。一切諸業不名決定。菩薩摩訶薩無地獄業。為衆生故發大誓願生地獄中。善男子。往昔衆生壽百年時。恒沙衆生受地獄報。我見是已即發大願受地獄身。菩薩爾時實無是業。為衆生故受地獄果。我於爾時在地獄中經無量歲。為諸罪人廣開分別十二部經。諸人聞已壞惡果報令地獄空。除一闡提。是名菩薩摩訶薩非現生後受是惡業。復次善男子。是賢劫中無量衆生墮畜生中受惡業果。我見是已復發誓願。為欲說法度衆生故。或作麞鹿羆鴿獼猴龍蛇金翅魚鼈狐兔牛馬之身。善男子。菩薩摩訶薩實無如是畜生惡業。以大願力為衆生故現受是身。是名菩薩摩訶薩非現生後受是惡業。復次善男子。是賢劫中復有無量無邊衆生生餓鬼中。或食吐汁

也三本俱作耶
槊同作矟○天同作夏
幼同作幻
採同作釆○破同作壞○與同作及
哭宋明俱作泣
數三本俱作量

脂肉膿血屎尿涕唾。壽命無量百千萬歲。初不曾聞漿水之名。況復眼見而得飲也。設遙見水生意往趣。到則變成猛火膿血。或時不變則有多人手執矛槊。遮護捉持不令得前。或天降雨至身成火。是名惡業果報。善男子。菩薩摩訶薩實無如是諸惡業果。爲化衆生令得解脫。故發誓願受如是身。是名菩薩摩訶薩非現生後受是惡業。善男子。我於賢劫生屠膾家畜養鷄猪牛羊。羂獵羅網漁捕。旃陀羅舍作賊劫盜。菩薩實無如是惡業。爲度衆生令得解脫。以大願力受如是身。是名菩薩摩訶薩非現生後受是惡業。善男子。是賢劫中復生邊地。多作貪欲瞋恚愚癡習行非法。不信三寶後世果報。不能恭敬父母親老耆舊長宿。善男子。菩薩爾時實無是業。爲令衆生得解脫故。以大願力而生其中。是名菩薩摩訶薩非現生後受是惡業。善男子。是賢劫中復受女身惡身貪身瞋身癡身妬身慳身幼身誑身纒蓋之身。善男子。菩薩爾時亦無是業。但爲衆生得解脫故。以大願力願生其中。是名菩薩摩訶薩非現生後受是惡業。善男子。我於賢劫受黃門身無根二根及不定根。善男子。菩薩摩訶薩實無如是諸惡身業。爲令衆生得解脫故。以大願力願生其中。是名菩薩摩訶薩非現生後受是惡業。善男子。我於賢劫復習外道尼乾子法信受其法。無施無祠無施祠報。無善惡業無善惡報。無現在世及未來世。無此無彼無有聖人無變化身無道涅槃。善男子。菩薩實無如是惡業。但爲衆生令得解脫。以大願力受是邪法。是名菩薩摩訶薩非現生後受是惡業。善男子。我念往昔與提婆達多俱爲商主。各各自有五百賈人。爲利益故至大海中採取珍寶。惡業緣故路過暴風。吹破船舫伴黨死盡。爾時我與提婆達多。不殺果報長壽緣故。爲風所吹俱至陸地。時提婆達多貪惜寶貨。生大憂苦發聲啼哭。我時語言。提婆達多。不須啼哭。提婆達多即語我言。諦聽諦聽。譬如有人貧窮困苦至塚墓間手捉死尸而作是言。願汝今者施我死樂。我當施汝貧窮壽命。爾時死尸即便起坐語貧人言。善男子。貧窮壽命汝自受之。我今甚樂如是死樂。實不欣汝貧窮而生。然我今日既無死樂。兼復貧窮。云何而得不啼哭耶。我復慰喻汝且莫愁。今有二珠價直無數。當分一枚以相惠施。我即分與復語之言。有命之人能得此寶。如其無命誰能得耶。我時疲弊詣一樹下止息眠臥。提婆達多貪心熾盛。爲餘一珠即生惡心。刺壞我目劫奪我珠。我時患瘡發聲呻號。時有一女來至我所而問我言。仁者何故呻號如是。我即爲其廣說本事。女人聞已

木元明俱作末○敷宋作荂○婇三本俱作采夭同

菓同作果

持同作治

色同作容

愍同作憫夭同○唯同作惟

復重問我。汝名字何。我即答言。名爲實語。女言。云何發汝爲實語耶。我即立誓。若我今於提婆達多有惡心者。目當如是永爲盲瞎。如其無者當還得眼。言已其目平復如故。善男子。是名菩薩摩訶薩說現世報。善男子。我念往昔生南天竺富單那城婆羅門家。是時有王名迦羅富。其性暴惡憍慢自大。年壯色美耽著五欲。我於爾時爲度衆生在彼城外寂默禪思。爾時彼王春木花敷。與其眷屬宮人婇女出城遊觀。在樹林下五欲自娛。其諸婇女捨王遊戲遂至我所。我時欲爲斷彼貪故而爲說法。時王尋來即見我時。便生惡心而問我言。汝今已得羅漢果耶。我言不得。復言。獲得不還果耶。我言不得。復作是言。汝今若未得是二果。則爲具足貪欲煩惱。云何自恣觀我女人。我即答言。大王當知。我今雖未斷貪欲結。然其內心實無貪著。王言。癡人。世有諸仙服氣食果見色猶貪。況汝盛年未斷貪欲。云何見色而當不著。我言。大王。見色不著實不因於服氣食菓。皆由繫心無常不淨。王言。若有輕他而生誹謗。云何得名修持淨戒。我言。大王。若有妬心則有誹謗。我無妬心云何言謗。王言。大德。云何名戒。大王。忍名爲戒。王言。若忍是戒者。當截汝耳。若能忍者知汝持戒。即截其耳。時我被截顏色不變。時王羣臣見是事已。即諫王言。如是大士不應加害。王告諸臣。汝等云何知是大士。諸臣答言見受苦時容色不變。王復語言。我當更試知變不變。即劓其鼻刖其手足。爾時菩薩已於無量無邊世中。修習慈悲愍苦衆生。時四天王心懷瞋忿雨沙礫石。王見是已心大怖懼。復至我所長跪而言。唯願哀愍聽我懺悔。我言。大王。我心無瞋亦如無貪。王言。大德。云何得知心無瞋恨。我即立誓。我若眞實無瞋恨者。令我此身平復如故。發是願已身即平復、是名菩薩摩訶薩說現世報。善男子。善業生報後報。及不善業亦復如是。菩薩摩訶薩得阿耨多羅三藐三菩提時。一切諸業悉得現報。不善惡業得現報者。如王作惡天降惡雨。亦如有人示獵師羆處及寶色鹿其手墮落。是名惡業現受果報。生報者如一闡提犯四重禁及五逆罪。後報者如持戒人深發誓願。願未來世常得如是淨戒之身。若有衆生壽百年時八十年時。於中當作轉輪聖王教化衆生。善男子。若業定得現世報者。則不能得生報後報。菩薩摩訶薩修三十二大人相業。則不能得現世報也。若業不得三種報者。是名不定。善男子。若言諸業定得報者。則不得有修習梵行解脫涅槃。當知是人非我弟子是魔眷屬。若言諸業有定不定。定者現報生報後報。不定者緣合則受不

則元明俱作人次同

飲三本俱作食次二字亦同○患同作苦○自同作白次同○輻同作副次三字亦同○則空往同作無資糧

修下同無習字

合不受。以是義故。應有梵行解脫涅槃。當知是人眞我弟子非魔眷屬。善男子。一切衆生不定業多決定業少以是義故。有修習道。修習道故。決定重業可使輕受。不定之業非生報受。善男子。有二種人。一者不定作定報現報作生報輕報作重報。應人中受在地獄受。二者定作不定。應生受者迴爲現受。重報作輕。應地獄受人中輕受。如是二人。一愚二智。智者爲輕。愚者令重。善男子。譬如二人於王有罪。眷屬多者其罪則輕。眷屬少者應輕更重。愚智之人亦復如是。智者善業多故重則輕受。愚者善業少故輕則重受。善男子。譬如二人。一則肥壯。一則羸瘦。俱沒深泥。肥壯能出。羸者則沒。善男子。譬如二人俱共服毒。一有呪力及阿伽陀。一者無有。有呪藥者毒不能傷。無呪藥者服時卽死。善男子。譬如二人俱多飲漿。一火勢盛。一則微弱。火勢多者則能消化。火勢弱者則爲其患。善男子。譬如二人爲王所繫。一有智慧。一則愚癡。其有智者則能得脫。愚癡之人無有脫期。善男子。譬如二人俱涉險路。一則有目。一則盲瞽。有目之人直過無患。盲者墜落墮深阬險。善男子。譬如二人俱共飲酒。一則多飲。一則少飲。其多飲者飲則無患。其少飲者飲則成患。善男子。譬如二人俱敵怨陣。一則鎧仗具足莊嚴。一則自身。其有仗者能破怨敵。其自身者不能自免。復有二人糞穢汙衣。一覺尋浣。一覺不浣。其尋浣者衣則淨潔。其不浣者垢穢日增。復有二人俱共乘車。一有輻軸。一無輻軸。有輻軸者隨意者去。無輻軸者則不移處。復有二人俱行曠路。一有資糧。一則空往。有資糧者則得度險。其空往者則不能過。復有二人爲賊所劫。一有寶藏。一則無藏。有寶藏者心無憂慼。其無藏者心則愁惱。愚智之人亦復如是。有善藏者重業輕受。無善藏者輕業重受。師子吼菩薩言。世尊。如佛所說。非一切業悉得定果。亦非一切衆生定受。世尊。云何衆生令現輕報地獄重受地獄重報現世輕受。佛言。一切衆生凡有二種。一者有智。二者愚癡。若能修習身戒心慧。是名智者。若不能修身戒心慧。是名愚癡。云何名爲不修習身。若不能攝五情諸根。名不修身。不能受持七種淨戒。名不修戒。不調心故名不修心。不修聖行名不修慧。復次不修身者不能具足淸淨戒體。不修戒者受畜八種不淨之物。不修心者不能修習三種相故。不修慧者不修梵行故。復次不修身者不能觀身。不能觀色及觀色相。不觀身相。不知身數。不知是身從此到彼。於非身中而生身相。於非色中而作色相。是故貪著我身身數。名不修身。不修戒者。若受下戒不名修戒。受持邊

所謂五欲三本俱作謂五欲也

給同作養

搥同作堆○繫同作擊○即同作則下同○懷宋作壞○善三本俱作害

軻同作訶責○栴宋元俱作旃○流三本俱作漏

戒爲自利戒爲自調戒不能普爲安樂衆生非爲護持無上正法爲生天上受五欲樂不名修戒不修心者若心散亂不能專一守自境界自境界者謂四念處他境界者所謂五欲若不能修四念處者名不修心於惡業中不善護心名不修慧復次不修身者不能深觀是身無常無住危脆念念滅壞是魔境界不修戒者不能具足尸波羅蜜不修心者不能具足禪波羅蜜不修慧者不能具足般若波羅蜜復次不修身者貪著我身及我所身我身常恒無有變易不修戒者爲自身故作十惡業不修心者於惡業中不能攝心不修慧者以不攝心不能分別善惡等法復次不修身者不斷我見不修戒者不斷戒取不修心者作貪瞋業趣向地獄不修慧者不斷癡心復次不修身者不能觀身雖無過咎而常是怨善男子譬如男子有怨常逐伺求其便智者覺已繫心愼護若不愼護則爲所害一切衆生身亦如是常以飲食冷煖將養若不如是將護守愼即當散壞善男子如婆羅門奉事火天常以香花讚歎禮拜供養承事期滿百年若一觸時尋燒人手是火雖得如是供養終無一念報事者恩一切衆生身亦如是雖於多年以好香花瓔珞衣服飲食臥具病瘦醫藥而供給之若遇內外諸惡因緣即時滅壞都不憶念往日供給衣食之恩善男子譬如有王畜四毒蛇置之一篋以付一人仰令瞻養是四蛇中設一生瞋則能害人是人恐怖常求飲食隨時守護一切衆生四大毒蛇亦復如是若一大瞋則能壞身善男子如人久病應當至心求醫療治若不勤必救死不疑一切衆生身亦如是常應攝心不令放逸若放逸者則便滅壞善男子譬如坏瓶不耐風雨打擲搥壓一切衆生身亦如是不耐飢渴寒熱風雨打繫惡罵善男子如癰未熟常當善護不令人觸設有觸者即大苦痛一切衆生身亦如是善男子如騾懷妊自害其軀一切衆生身亦如是內有風冷身即受苦善男子譬如芭蕉生實則枯一切衆生身亦如是善男子亦如芭蕉內無堅實一切衆生身亦如是善男子如蛇鼠狼各各相於常生怨心衆生四大亦復如是善男子譬如鵝王不樂塚墓菩薩亦爾於身塚墓亦不貪樂善男子如旃陀羅七世相繼不捨其業是故爲人之所輕賤是身種子亦復如是種子精血究竟不淨以不淨故諸佛菩薩之所軻呵善男子是身不如摩羅耶山生於栴檀亦不能生優鉢羅花芬陀利花瞻婆花摩利迦花婆師迦花九孔常流膿血不淨生處臭穢醜陋可惡常與諸蟲共在一處善男子譬如世間雖有上妙清淨園林死

尸至中則爲不淨。衆共捨之不生愛著。色界亦爾。雖復淨妙以有身故諸佛菩薩悉共捨之。善男子。若有不能作如是觀。名不修身。不修戒者。善男子。若不能觀戒是一切善法梯橙。亦是一切善法根本。如地悉是一切樹木所生之本。是諸善根之導首也。如彼商主導衆商人。戒是一切善法勝幢。如天帝釋所立勝幢。戒能永斷一切惡業及三惡道。能療惡病猶如藥樹。戒是生死險道資糧。戒是摧結破賊鎧仗。戒是滅結毒蛇良呪。戒是度惡業行橋梁。若有不能如是觀者。名不修戒。不修心者。不能觀心輕躁動轉難捉難調。馳騁奔逸如大惡象。念念迅速如彼電光。躁擾不住猶如獼猴。如幻如炎。乃是一切諸惡根本。五欲難滿如火獲薪。亦如大海吞受諸流。如曼陀山草木滋多。不能觀察生死虛妄。耽惑致患如魚吞鉤。常先引導諸業隨從。猶如貝母引導諸子。貪著五欲不樂涅槃。如駝食蜜乃至於死不顧觸草。深著現樂不觀後過。如牛貪苗不懼杖楚。馳騁周遍二十五有。猶如疾風吹兜羅毦。所不應求求無厭足。如無知人求無熱火。常樂生死不樂解脫。如紙婆蟲樂紙婆樹。迷惑愛著生死臭穢。猶如獄囚樂獄卒女。亦如廁豬樂處不淨。若有不能如是觀者。名不修心。不修慧者不觀智慧有大勢力如金翅鳥。能壞惡業壞無明闇猶如日光。能拔陰樹如水漂物。焚燒邪見猶如猛火。慧是一切善法根本。佛菩薩母之種子也。若有不能如是觀者不名修慧。善男子。第一義中若見身身相身因身果身聚身一身二此身彼身身滅身等身修修者。若有如是見者名不修身。善男子。若見戒戒相戒因戒果上戒下戒戒聚戒一戒二此戒彼戒戒滅戒等戒修修者戒波羅蜜、若有如是見者名不修戒。若見心心相心因心果心聚心及心數心一心二此心彼心心滅心等心修修者上中下心善心惡心。若有如是見者名不修心。善男子。若見慧慧相慧因慧果慧聚慧一慧二此慧彼慧慧滅慧等上中下慧鈍慧利慧慧修修者。若有如是見者名不修慧。善男子。若有不修身戒心慧。如是之人於小惡業得大惡報。以恐怖故常生是念。我屬地獄作地獄行。雖聞智者說地獄苦。常作是念。如鐵打鐵石還打石木自打木火蟲樂火。地獄之身還似地獄。若似地獄有何苦事。譬如蒼蠅爲唾所粘不能得出。是人亦爾。於小罪中不能自出。心初無悔不能修善覆藏瑕疵。雖有過去一切善業。悉爲是罪之所垢汙。是人所有現受輕報轉爲地獄極重惡果。善男子。如小器水置鹽一升其味鹹苦難可得飲。是人罪業亦復如是。善男子。譬如有人負

名不同作不名○橙同作隥
導首也三本俱作最導首○衆同作諸○破同作惡
炎同作燄○諸同作衆○曼同作漫
毦同作茸
知同作智
上上同有戒字○戒下同無戒字
得同作自

一下乃至五下並同無者字次同〇善上三本俱無諸字〇先同作上

他一錢不能償故身破繫縛多受衆苦。是人罪業亦復如是。師子吼菩薩言。世尊。是人何故令現輕報轉地獄受。佛言。善男子。一切衆生若具五事。令現輕報轉地獄受。何等爲五。一者愚癡故。二者善根微少故。三者惡業深重故。四者不懺悔故。五者不修本善業故。復有五事。一者修習惡業故。二者無戒財故。三者遠離諸善根故。四者不修身戒心慧故。五者親近惡知識故。善男子。是故能令現世輕報地獄重受。師子吼言。世尊。何等人能轉地獄報現世輕受。善男子。若有修習身戒心慧。如先所說。能觀諸法同如虛空。不見智慧不見智者。不見愚癡不見愚者。不見修習及修習者。是名智者。如是之人則能修習身戒心慧。是人能令地獄果報現世輕受。是人設作極重惡業。思惟觀察能令輕微。作是念言。我業雖重不如善業。譬如疊花雖復百斤終不能敵眞金一兩。如恒河中投一升鹽水無醎味飲者不覺。如巨富者雖多負人千萬寶物無能繫縛令其受苦。如大香象能壞鐵鎖自在而去。智慧之人亦復如是。常思惟言。我善力多惡業羸弱。我能發露懺悔除惡能修智慧。智慧力多無明力少。如是念已。親近善友修習正見。受持讀誦書寫解說十二部經。見有受持讀誦書寫解說之者。心生恭敬兼以衣食房舍臥具病藥花香。而供養之讚歎尊重。所至到處稱說其善不說其短。供養三寶敬信方等大涅槃經如來常恒無有變易一切衆生悉有佛性。是人能令地獄重報現世輕受。善男子。以是義故。非一切業悉有定果。亦非一切衆生定受

# 大般涅槃經卷第二十九

# 大般涅槃經卷第三十

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

〔麗士〕〔宋合〕〔元輔〕〔明樹〕

## 師子吼菩薩品之六

師子吼菩薩言。世尊。若一切業不定得果一切衆生悉有佛性。應當修習八聖道者。何因緣故一切衆生悉不得是大般涅槃。世尊。若一切衆生有佛性者。卽當定得阿耨多羅三藐三菩提。何須修習八聖道耶。世尊。如此經中說有病人。若得醫藥及瞻病人隨病飮食。若使不得皆悉除差。一切衆生亦復如是。若遇聲聞及辟支佛諸佛菩薩諸善知識。若聞說法修習聖道。若不遇不聞不修習道。悉當得成阿耨多羅三藐三菩提。何以故以佛性故。世尊。譬如日月無有能遮令不得至頞多山邊。四大河水不至大海。一闡提等不至地獄。一切衆生亦復如是。無有能遮令不得至阿耨多羅三藐三菩提。何以故以佛性故。世尊。以是義故。一切衆生不須修道。以佛性力故應得阿耨多羅三藐三菩提。不以修習聖道力故。世尊。若一闡提犯四重禁五逆罪等。不得阿耨多羅三藐三菩提者。應須修習。以因佛性定當得故。非因修習然後得也。世尊。譬如磁石去鐵雖遠以其力故鐵則隨著。衆生佛性亦復如是。是故不須勤修習道。佛言。善哉善哉。善男子。如恒河邊有七種人。若爲洗浴恐畏寇賊。或爲採花則入河中。第一人者入水則沒。何以故。羸無勢力不習浮故。第二人者雖沒還出出已復沒。何以故。身力大故則能還出不習浮故出已還沒。第三人者沒已卽出出更不沒。何以故。身重故沒力大故出。先習浮故出已卽住。第四人者入已便沒沒已還出出已卽住遍觀四方。何以故。重故則沒力大故還出。習浮則住。不知出處故觀四方。第五人者入已卽沒沒已還出出已卽住住已觀方觀已卽去。何以故爲怖畏故。第六人者入已卽去淺處則住。何以故觀賊近遠故。第七人者旣至彼岸。登上大山無復恐怖。離諸怨賊受大快樂。善男子。生死大河亦復如是。有七種

須修同作修習

畏三本俱作怖

則同作卽

渡同作度下同
○被同作披
一二等記數下
並同無者字下
同
祇同作祗
滅同作破
敗壞同作壞敗
○以同作已
得上三本俱無
能字
去同作出

人．畏煩惱賊故發意欲渡生死大河．出家剃髮身被法服．既出家已親近惡友．隨順其教聽受邪法．所謂衆生身者．即是五陰．五陰者卽名五大．衆生若死永斷五大．斷五大故何須修習善惡諸業．是故當知無有善惡及善惡報．如是則名一闡提也．一闡提者名斷善根．斷善根故沒生死河不能得出．何以故．惡業重故無信力故．如恒河邊第一人也．善男子．一闡提輩有六因緣．沒三惡道不能得出．何等為六．一者惡心熾盛故．二者不見後世故．三者樂習煩惱故．四者遠離善根故．五者惡業障隔故．六者親近惡知識故．復有五事沒三惡道．何等為五．一者於比丘邊作非法故．二者比丘尼邊作非法故．三者自在用僧祇物故．四者母邊作非法故．五者於五部僧互生是非故．復有五事沒三惡道．何等為五．一者常說無善惡果故．二者殺發菩提心衆生故．三者憙說法師過失故．四者法說非法非法說法故．五者為求法過而聽受故．復有三事沒三惡道．何等為三．一謂如來無常永滅．二謂正法無常遷變．三謂僧寶可滅壞故．是故常沒三惡道中．第二人者發意欲渡生死大河．斷善根故沒不能出．所言出者．親近善友則得信心．信心者信施施果．信善善果．信惡惡果．信生死苦無常敗壞．是名為信．以得信心修習淨戒．受持讀誦書寫解說．常行惠施善修智慧．以鈍根故復遇惡友．不能修習身戒心慧．聽受邪法．或值惡時處惡國土斷諸善根．斷善根故常沒生死．如恒河邊第二人也．第三人者發意欲渡生死大河．斷善根故於中沈沒．親近善友得名為出．信於如來是一切智常恒無變．為衆生故說無上道．一切衆生悉有佛性．如來非滅法僧亦爾無有滅壞．一闡提等不斷其法．終不能得阿耨多羅三藐三菩提．要當遠離然後乃得．以信心故修習淨戒．修淨戒已受持讀誦書寫解說十二部經．為諸衆生廣宣流布．樂於惠施修習智慧．以利根故堅住信慧心無退轉．如恒河邊第三人也．第四人者發意欲渡生死大河．斷善根故於中沈沒．親近善友故得信心．是名為出．得信心故受持讀誦書寫解說十二部經．為衆生故廣宣流布．樂於惠施修習智慧．以利根故堅住信慧．心無退轉遍觀四方．四方者四沙門果．如恒河邊第四人也．第五人者發意欲渡生死大河．斷善根故於中沈沒．親近善友故得信心．是名為出．以信心故受持讀誦書寫解說十二部經．為衆生故廣宣流布．樂於惠施修習智慧．以利根故堅住信慧心無退轉．無退轉已卽便前進．前進者謂辟支佛．雖能自渡不及衆生．是名為去．如恒河邊第五人也．第

爲欲同作欲爲

如同作若

菓同作果下同

得上同無應字

礙三本俱作閡下同

六人者發意欲渡生死大河。斷善根故於中沈沒。親近善友獲得信心。得信心故名之爲出。以信心故受持讀誦書寫解說十二部經。爲衆生故廣宣流布。樂於惠施修習智慧。以利根故堅住信慧心無退轉。無退轉已卽復前進遂到淺處。到淺處已卽住不去。住不去者所謂菩薩。爲欲度脫諸衆生故住觀煩惱。如恒河邊第六人也。第七人者發意欲渡生死大河。斷善根故於中沈沒。親近善友獲得信心。得信心已是名爲出。以信心故受持讀誦書寫解說十二部經。爲衆生故廣宣流布。樂於惠施修習智慧。以利根故堅住信慧心無退轉。無退轉已卽便前進。旣前進已得到彼岸登大高山離諸恐怖多受安樂。善男子。彼岸山者喩於如來。受安樂者喩佛常住。大高山者喩大涅槃。善男子。是恒河邊如是諸人。悉具手足而不能渡。一切衆生亦復如是。實有佛寶法寶僧寶。如來常說諸法要義有八聖道大般涅槃。而諸衆生悉不能得。此非我咎。亦非聖道衆生等過。當知悉是煩惱過惡。以是義故。一切衆生不得涅槃。善男子。譬如良醫知病說藥病者不服非醫咎也。善男子。如有施主以其所有施一切人。有不受者非施主咎。善男子。譬如日出幽冥皆明盲瞽之人不見道路非日過也。善男子。如恒河水能除渴乏渴者不飮非水咎也。善男子。譬如大地普生菓實平等無二農夫不種非地過也。善男子。如來普爲一切衆生。廣開分別十二部經。衆生不受非如來咎。善男子。若修道者卽得阿耨多羅三藐三菩提。善男子。汝言衆生悉有佛性應得阿耨多羅三藐三菩提。如礠石者。善哉善哉。以有佛性因緣力故。得阿耨多羅三藐三菩提。若言不須修聖道者。是義不然。善男子。譬如有人行於曠野渴乏遇井。其井極深雖不見水當知必有。是人方便求覓罐綆汲取則見。佛性亦爾。一切衆生雖復有之。要須修習無漏聖道然後得見。善男子。如有胡麻則得見油離諸方便則不得見。甘蔗亦爾。善男子。如三十三天北鬱單越。雖是有法。若無善業神通道力。則不能見地中草根及地下水。以地覆故。衆生不見佛性亦爾。不修聖道故不得見。善男子。如汝所說。世有病人若遇瞻病良醫好藥隨病飮食。及以不遇悉得差者。善男子。我爲六住諸菩薩等說如是義。善男子。譬如虛空於諸衆生非內非外非內外故亦無罣礙。衆生佛性亦復如是。善男子。譬如有人財在異方雖不現前隨意受用。有人問之則言我許。何以故以定有故。衆生佛性亦復如是。非此非彼以定得故言一切有。善男子。譬如衆生造作諸業若善若惡非內非外。如是業

安元明俱作如

重有輕三字俱作輕有重

已明作以○喚三本俱作呼

性非有非無。亦復非是本無今有。非無因出。非此作此受此作彼受彼作彼受。無作無受時節和合而得果報。衆生佛性亦復如是。亦復非是本無今有。非內非外非有非無非此非彼。非餘處來非無因緣。亦非一切衆生不見。有諸菩薩時節因緣和合得見。時節者所謂十住菩薩摩訶薩修八聖道於諸衆生得平等心。爾時得見不名爲作。善男子。汝言如礠石者。是義不然。何以故石不吸鐵。所以者何。無心業故。善男子。異法有故異法出生。異法無故異法滅壞。無有作者無有壞者。善男子。猶如猛火不能焚薪火出薪壞名爲焚薪。善男子。譬如葵藿隨日而轉。而是葵藿亦無敬心無識無業。異法性故而自迴轉。善男子。如芭蕉樹因雷增長。是樹無耳無心意識。異法有故異法增長。異法無故異法滅壞。善男子。如阿叔迦樹女人摩觸花爲之出。是樹無心亦無覺觸。異法有故異法出生。異法無故異法滅壞。善男子。如橘得尸菓則滋多。而是橘樹無心無觸。異法有故異法滋多。異法無故異法滅壞。善男子。如安石榴塼骨糞故菓實繁茂。安石榴樹亦無心觸。異法有故異法出生。異法無故異法滅壞。善男子。礠石吸鐵亦復如是。異法有故異法出生。異法無故異法滅壞。衆生佛性亦復如是。不能吸得阿耨多羅三藐三菩提。善男子。無明不能吸取諸行。行亦不能吸取識也。亦得名爲無明緣行行緣於識。有佛無佛法界常住。善男子。若言佛性住衆生中者。善男子。常法無住。若有住處即是無常。善男子。如十二因緣無定住處。若有住處十二因緣不得名常。如來法身亦無住處。法界法入法陰虛空悉無住處。佛性亦爾都無住處。善男子。譬如四大力雖均等有堅有熱有濕有動有重有輕有赤有白有黃有黑。而是四大亦無有業。異法界故各不相似。佛性亦爾。異法界故時至則現。善男子。一切衆生不退佛性故名之爲有。阿毘跋致故。以當有故。決定得故。定當見故。是故名爲一切衆生悉有佛性。善男子。譬如有王告一大臣汝牽一象以示盲者。爾時大臣受王勅已。多集衆盲以象示之。時彼衆盲各以手觸。大臣即還而白王言。臣已示竟。爾時大王即喚衆盲各各問言。汝見象耶。衆盲各言。我已得見。王言。象爲何類。其觸牙者即言象形如萊菔根。其觸耳者言象如箕。其觸頭者言象如石。其觸鼻者言象如杵。其觸脚者言象如木臼。其觸脊者言象如牀。其觸腹者言象如甕。其觸尾者言象如繩。善男子。如彼衆盲不說象體亦非不說。若是衆相悉非象者。離是之外更無別象。善男子。王喩如來應正遍知。臣喩方等大涅槃經。象喩

鈚 元明俱作釵
鬚 三本俱作須

佛性。盲喩一切無明衆生。是諸衆生聞佛說已或作是言。色是佛性。何以故。是色雖滅次第相續。是故獲得無上如來三十二相如來色常。如來色者常不斷故。是故說色名爲佛性。譬如眞金質雖遷變色常不異。或時作釧作鈚作盤。然其黃色初無改易。衆生佛性亦復如是。質雖無常而色是常。以是故說色爲佛性。或有說言。受是佛性。何以故。受因緣故獲得如來眞實之樂。如來受者謂畢竟受第一義受。衆生受性雖復無常。然其次第相續不斷。是故獲得如來常受。譬如有人姓憍尸迦。人雖無常而姓是常經千萬世無有改易。衆生佛性亦復如是。以是故說受爲佛性。又有說言。想是佛性。何以故。想因緣故獲得如來眞實之想。如來想者名無想想。無想想者非衆生想非男女想。亦非色受想行識想非想斷想。衆生之想雖復無常。以想次第相續不斷。故得如來常恒之想。善男子。譬如衆生十二因緣衆生雖滅而因緣常。衆生佛性亦復如是。以是故說想爲佛性。又有說言。行爲佛性。何以故行名壽命。壽因緣故獲得如來常住壽命。衆生壽命雖復無常。而壽次第相續不斷。故得如來眞實常壽。善男子。譬如十二部經聽者說者雖復無常而是經典常存不變。衆生佛性亦復如是。以是故說行爲佛性。又有說言。識爲佛性。識因緣故獲得如來平等之心。衆生意識雖復無常而識次第相續不斷。故得如來眞實常心。如火熱性火雖無常熱非無常。衆生佛性亦復如是。以是故說識爲佛性。又有說言。離陰有我我是佛性。何以故。我因緣故獲得如來八自在我。有諸外道說言。去來見聞悲喜語說爲我。如是我相雖復無常。而如來我眞實是常。善男子。如陰入界雖復無常而名是常。衆生佛性亦復如是。善男子。如彼盲人各各說象雖不得實非不說象。說佛性者亦復如是。非卽六法不離六法。善男子。是故我說衆生佛性非色不離色乃至非我不離我。善男子。有諸外道。雖說有我而實無我。衆生我者卽是五陰。離陰之外更無別我。善男子。譬如莖葉鬚臺合爲蓮花離是之外更無別花。衆生我者亦復如是。善男子。譬如牆壁草木和合名之爲舍離是之外更無別舍。如佉陀羅樹波羅奢樹尼拘陀樹欝曇鉢樹和合爲林離是之外更無別林。譬如車兵象馬步兵和合爲軍離是之外更無別軍。譬如五色雜綖和合名之爲綺離是之外更無別綺。如四姓和合名爲大衆離是之外更無別衆。衆生我者亦復如是。離五陰外更無別我。善男子。如來常住則名爲我。如來法身無邊無礙不生不滅得八自在。是名爲我。衆生眞實無如

必三本俱作畢
次必宋元俱作畢
必三本俱作畢下同
是明作見
耶宋作邪

是我及以我所。但以必定當得畢竟第一義空。故名佛性。善男子。大慈大悲名爲佛性。何以故。大慈大悲常隨菩薩如影隨形。一切衆生必定當得大慈大悲。是故說言一切衆生悉有佛性。大慈大悲者名爲佛性。佛性者名爲如來。大喜大捨名爲佛性。何以故。菩薩摩訶薩若不能捨二十五有。則不能得阿耨多羅三藐三菩提。以諸衆生必當得故。是故說言一切衆生悉有佛性。大喜大捨者卽是佛性。佛性者卽是如來。佛性者名大信心。何以故。以信心故菩薩摩訶薩則能具足檀波羅蜜乃至般若波羅蜜。一切衆生必定當得大信心故。是故說言一切衆生悉有佛性。大信心者卽是佛性。佛性者卽是如來。佛性者名一子地。何以故。以一子地因緣故。菩薩則於一切衆生得平等心。一切衆生必定當得一子地故。是故說言一切衆生悉有佛性。一子地者卽是佛性。佛性者卽是如來。佛性者名第四力。何以故。以第四力因緣故。菩薩則能教化衆生。一切衆生必定當得第四力故。是故說言一切衆生悉有佛性。第四力者卽是佛性。佛性者卽是如來。佛性者名十二因緣。何以故。以因緣故如來常住。一切衆生定有如是十二因緣。是故說言一切衆生悉有佛性。十二因緣卽是佛性。佛性者卽是如來。佛性者名四無礙智。以四無礙因緣故說字義無礙。字義無礙故能化衆生。四無礙者卽是佛性。佛性者卽是如來。佛性者名頂三昧。以修如是頂三昧故。則能總攝一切佛法。是故說言頂三昧者名爲佛性。十住菩薩修是三昧未得具足。雖見佛性而不明了。一切衆生必定得故。是故說言一切衆生悉有佛性。善男子。如上所說。種種諸法一切衆生定當得故。是故說言一切衆生悉有佛性。善男子。我若說色是佛性者。衆生聞已則生邪倒。以邪倒故命終則生阿鼻地獄。如來說法爲斷地獄。是故不說色是佛性。乃至說識亦復如是。善男子。若諸衆生了佛性者則不須修道。十住菩薩修八聖道少見佛性。況不修者而得見耶。善男子。如文殊師利諸菩薩等。已無量世修習聖道了知佛性。云何聲聞辟支佛等能知佛性。若諸衆生欲得了了知佛性者。應當一心受持讀誦書寫解說供養恭敬尊重讚歎是涅槃經。見有受持乃至讚歎如是經者。應當以好房舍衣服飮食臥具病瘦醫藥而供給之。兼復讚歎禮拜問訊。善男子。若有已於過去無量無邊世中親近供養無量諸佛深種善根。然後乃得聞是經名。善男子。佛性不可思議。佛法僧寶亦不可思議。一切衆生悉有佛性而不能知。是亦不可思議。如來常樂我淨之法亦不可思

當三本俱作常○菉同作綠○床宋作禾元作朱

線三本俱作綖○塼元明俱作摶

人三本俱作於衆生三字

愍同作憫下同

哭同作笑

熊三本俱作羆

議。一切衆生能信如是大涅槃經。亦不可思議。師子吼菩薩言。世尊。如佛所說。一切衆生能信如是大涅槃經不可思議者。世尊。是大衆中有八萬五千億人。於是經中不生信心。是故有能信是經者。名不可思議。善男子。如是諸人於未來世。亦當定得信是經典。見於佛性得阿耨多羅三藐三菩提。師子吼言。世尊。云何不退菩薩。自知決定有不退心。佛言。善男子。菩薩摩訶薩當以苦行自試其心。日食一胡麻經一七日。粳米菉豆麻子粟床及以白豆。亦復如是。各一七日食一麻時作是思惟。如是苦行都無利益。無利益事尚能爲之。況有利益而當不作。於無利益心能堪忍不退不轉。是故定得阿耨多羅三藐三菩提。如是等日修苦行時。一切皮肉消瘦皺減。如斷生瓠置之日中。其目𨵦陷如井底星。肉盡肋出如朽草屋。脊骨連現如重線塼。所坐之處如馬蹄跡。欲坐則伏欲起則偃。雖受如是無利益苦。然不退於菩提之心。復次善男子。菩薩摩訶薩爲破衆苦施安樂故。乃至能捨內外財物及其身命如棄芻草。若能不惜是身命者。如是菩薩自知必定有不退心。我定當得阿耨多羅三藐三菩提。復次菩薩爲法因緣。剜身爲燈氎纏皮肉酥油灌之燒以爲炷。菩薩爾時受是大苦。自呵其心而作是言。如是苦者。於地獄苦百千萬分猶未及一。汝於無量百千劫中受大苦惱都無利益。汝若不能受是輕苦。云何而能於地獄中救苦衆生。菩薩摩訶薩作是觀時身不覺苦。其心不退不動不轉。菩薩爾時應深自知。我定當得阿耨多羅三藐三菩提。善男子。菩薩爾時具足煩惱未者斷者。爲法因緣能以頭目髓腦手足血肉施人。以釘釘身投巖赴火。菩薩爾時雖受如是無量衆苦。若心不退不動不轉。菩薩當知我今定有不退之心。當得阿耨多羅三藐三菩提。善男子。菩薩摩訶薩爲破一切衆生苦惱。願作麤大畜生之身。以身血肉施於衆生。衆生取時復生憐愍。菩薩爾時閉氣不喘示作死相。令彼取者。不生殺害疑網之想。菩薩雖受畜生之身。終不造作畜生之業。何以故善男子。菩薩既得不退心已。終不造作三惡道業。菩薩摩訶薩若未來世。有微塵等惡業果報不定受者。以大願力爲衆生故而悉受之。譬如病人爲鬼所著藏隱身中。以呪力故卽時相現。或語或喜或瞋或罵或啼或哭。菩薩摩訶薩未來之世三惡道業亦復如是。菩薩摩訶薩受熊身時。常爲衆生演說正法。或受迦賓闍羅鳥身。爲諸衆生說正法故。受瞿陀身鹿身兎身象身羖羊獼猴白鴿金翅鳥龍蛇之身。受如是等畜生身時。終不造作畜生惡業。常爲其

薩下同無摩訶薩三字下同

一同作切

願同作相

利下同有益字

小元明俱作少

躃三本俱作躄

---

餘畜生衆生演說正法。令彼聞法速得轉離畜生身故。菩薩爾時雖受畜身不作惡業。當知必定有不退心。菩薩摩訶薩於飢饉世見餓衆生。作龜魚身無量由旬。復作是願。願諸衆生取我肉時隨取隨生。因食我肉離飢渴苦。一切悉發阿耨多羅三藐三菩提心。菩薩發願。若有因我離飢渴者。未來之世速得遠離二十五有飢渴之患。菩薩摩訶薩受如是苦心不退者。當知必定得阿耨多羅三藐三菩提。復次菩薩於疾疫世見病苦者。作是思惟。如藥樹王若有病者。取根取莖取枝取葉取花取果取皮取膚悉得愈病。願我此身亦復如是。若有病者聞聲觸身。服食血肉乃至骨髓病悉除愈。願諸衆生食我肉時。不生惡心如食子肉。我治病已常爲說法。願彼信受思惟轉教。復次善男子。菩薩具足煩惱雖受身苦。其心不退不動不轉。當知必定得不退心成阿耨多羅三藐三菩提。復次善男子。若有衆生爲鬼所病。菩薩見已即作是言。願作鬼身大身健身多眷屬身。使彼聞見病得除愈。菩薩摩訶薩爲衆生故勤修苦行。雖有煩惱不汙其心。復次善男子。菩薩摩訶薩雖復修行六波羅蜜。亦復不求六度之果。修行無上六波羅蜜時。作是願言。我今以此六波羅蜜施一一衆生。一一衆生受我施已。悉令得成阿耨多羅三藐三菩提。我亦自爲六波羅蜜。勤修苦行受諸苦惱。當受苦時願我不退菩提之心。善男子。菩薩摩訶薩作是願時。是名不退菩提之相。復次善男子。菩薩摩訶薩不可思議。何以故。菩薩摩訶薩深知生死多諸罪過。觀大涅槃有大功德。爲諸衆生處在生死受種種苦心無退轉。是名菩薩不可思議。復次善男子。菩薩摩訶薩無有因緣而生憐愍。實不受恩而常施恩。雖施於恩而不求報。是故復名不可思議。復次善男子。或有衆生。爲自利益修諸苦行。菩薩摩訶薩爲利他故修行苦行。是名自利。是故復名不可思議。復次菩薩具足煩惱。爲壞怨親所受諸苦修平等心。是故復名不可思議。復次菩薩若見諸惡不善衆生。若呵責若軟語若驅擯若縱捨。有惡性者現爲軟語。有憍慢者現爲大慢。而其內心實無憍慢。是名菩薩方便不可思議。復次菩薩具足煩惱少財物時。來求者多心不進小。是名菩薩不可思議。復次菩薩於佛出時知佛功德。爲衆生故於無佛處受邊地身。如盲如聾如跛如躃。是名菩薩不可思議。復次菩薩深知衆生所有罪過。爲度脫故常與共行。雖隨其意罪垢不汙。是故復名不可思議。復次菩薩了了知見無衆生相無煩惱汙。無修習道離煩惱者。雖爲菩提無菩提行。亦無成就菩提行者。無

有受苦及破苦者。而亦能爲衆生壞苦行菩提行。是故復名不可思議。復次菩薩受後邊身處兜率天。是亦名爲不可思議。何以故。兜率陀天欲界中勝。在下天者其心放逸。在上天者諸根闇鈍。是故名勝。修施修戒得上下身。修施戒定得兜率身。一切菩薩毀呰諸有破壞諸有。終不造作兜率天業受彼天身。何以故。菩薩若處其餘諸有。亦能教化成就衆生。實無欲心而生欲界。是故復名不可思議。菩薩摩訶薩生兜率天。有三事勝。一者命。二者色。三者名。菩薩摩訶薩實不求於命色名稱。雖無求心而成得勝。菩薩摩訶薩深樂涅槃然有因亦勝。是故復名不可思議。菩薩摩訶薩如是三事雖勝諸天。而諸天等於菩薩所。終不生於瞋心妬心憍慢之心。常生喜心。菩薩於天亦不憍慢。是故復名不可思議。菩薩摩訶薩不造命業。而於彼天畢竟壽命。是名命勝。亦無色業而妙色身光明遍滿。是名色勝。菩薩摩訶薩處彼天宮不樂五欲唯爲法事。是故名稱充滿十方。是名名勝。是故復名不可思議。菩薩摩訶薩下兜率天。是時大地六種震動。是故復名不可思議。何以故。菩薩下時欲色諸天悉來侍從。發大音聲讚歎菩薩。以口風氣故令地動。復有菩薩人中象王。人中象王名爲龍王。龍王初入胎時。有諸龍王在此地下或怖或寤。是故大地六種震動。是故復名不可思議。菩薩摩訶薩知入胎時住時出時。知父知母不淨不汙。如帝釋髮青色寶珠。是故復名不可思議。善男子。大涅槃經亦復如是不可思議。善男子。譬如大海有八不思議。何等爲八。一者漸漸轉深。二者深難得底。三者同一鹹味。四者潮不過限。五者有種種寶藏。六者大身衆生在中居住。七者不宿死尸。八者一切萬流。大雨投之不增不減。善男子。漸漸轉深有三事。何等爲三。一衆生福力。二者順風而行。三者河水入故。乃至不增不減亦各有三。是大涅槃微妙經典亦復如是有八不可思議。一漸漸深。所謂五戒十戒二百五十戒菩薩戒。須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果。辟支佛果菩薩果。阿耨多羅三藐三菩提果。是涅槃經說是等法。是名漸漸深。是故此經名漸漸深。二者深難得底。如來世尊不生不滅。不得阿耨多羅三藐三菩提。不轉法輪。不食不受不行惠施。是故名爲常樂我淨。一切衆生悉有佛性。佛性非色不離於色。非受想行識乃至不離於識。是常可見了因非作因。須陀洹乃至辟支佛。當得阿耨多羅三藐三菩提。亦無煩惱亦無住處。雖無煩惱不名爲常。是故名深。復有甚深於是經中。或時說我或說無我。或時說常或說無常。或時說淨或

呰三本倶作訾
唯明作惟
龍元明倶作象
寤三本倶作悟
離下同無於字次同

頂元明俱作顚
一味三本俱作同一鹹味四字
分同作足
作同作犯
性上同無法字
言上明若字闕
王同作玉
生三本俱作出
○出同作生事乃至母十四字同作種姓眷屬父母勝諸衆生十字

說不淨.或時說樂或時說苦.或時說空或說不空.或說一切有或說一切無.或說三乘或說一乘.或說五陰即是佛性.金剛三昧及以中道.首楞嚴三昧十二因緣第一義空.慈悲平等於諸衆生.頂智信心知諸根力.一切法中無罣礙智.雖有佛性不說決定.是故名深.三者一味.一切衆生同有佛性.皆同一乘同一解脫.一因一果同一甘露.一切當得常樂我淨.是名一味.四者潮不過限.如是經中制諸比丘.不得受畜八不淨物.若我弟子.有能受持讀誦書寫解說分別是大涅槃微妙經典.寧失身命終不犯之.是名潮不過限.五有種種寶藏.是經即是無量寶藏.所言寶者.謂四念處四正勤四如意分五根五力七覺分八聖道分.嬰兒行聖行梵行天行.諸善方便乘生佛性.菩薩功德如來功德聲聞功德緣覺功德.六波羅蜜無量三昧無量智慧.是名寶藏.六者大身衆生所居住處.大身衆生者謂佛菩薩.大智慧故名大衆生.大身故大大心故.大莊嚴故大調伏故.大方便故大說法故.大勢力故大徒衆故.大神通故大慈悲故常不變故.一切衆生無罣礙故.容受一切諸衆生故.是名大身衆生所居之處.七者不宿死尸.死尸者.謂一闡提犯四重禁五無間罪誹謗方等.非法說法法說非法.受畜八種不淨之物.佛物僧物隨意而用.或於比丘比丘尼所作非法事.是名死尸.是涅槃經離如是等.是故名爲不宿死尸.八者不增不減.無邊際故無始終故.非色故非作故.常住故不生滅故.一切衆生悉平等故.一切法性同一性故.是名無增減.是故此經如彼大海有八不思議.師子吼言.世尊.若言如來不生不滅名爲深者.一切衆生有四種生.卵生胎生濕生化生.是四種生人中具有.如施婆羅比丘優婆施婆羅比丘彌迦羅長者母尼拘陀長者母半闍羅長者母.各五百子同於卵生.當知人中則有卵生.濕生者如佛所說.我於往昔作菩薩時.作頂生王及手生王.如今所說菴羅樹女迦不多樹女.當知人中則有濕生.劫初之時一切衆生皆悉化生.如來世尊得八自在.何因緣故不化生耶.佛言.善男子.一切衆生四生所生.得聖法已.不得如本卵生濕生.善男子.劫初衆生皆悉化生.當爾之時佛不出世.善男子.若有衆生遇病苦時須醫須藥.劫初之時衆生化生.雖有煩惱其病未發.是故如來不出其世.劫初衆生身心非器.是故如來不出其世.善男子.如來世尊所有事業勝諸衆生.所謂種姓眷屬父母.以殊勝故凡所說法人皆信受.是故如來不受化生.善男子.一切衆生父作子業子作父業.如來世尊若受化身則無父母.若無

之身三本俱作身耶
唯同作惟○闇同作暗○返同作反
顚宋元俱作傎
嘴同作觜次同○啄宋作初元明俱作沮○洄澓宋作迴復○渡三本俱作度次同

父母云何能令一切衆生作諸善業。是故如來不受化身。善男子。佛正法中有二種護。一者內。二者外。內護者所謂禁戒。外護者族親眷屬。若佛如來受化身者則無外護。是故如來不受化身。善男子。有人恃姓而生憍慢。如來爲破如是慢故。生在貴姓不受化身。善男子。如來世尊有眞父母。父名淨飯母名摩耶。而諸衆生猶言是幻。云何當受化生之身。若受化身。云何得有碎身舍利。如來爲益衆生福德故碎其身而令供養。是故如來不受化身。一切諸佛悉無化生。云何獨令我受化身。爾時師子吼菩薩。合掌長跪右膝著地。以偈讚佛。

如來無量功德聚　我今不能廣宣說　今爲衆生演一分　唯願哀愍聽我說　衆生明無闇中行
具受無邊百種苦　世尊能令遠離之　是故世稱爲大悲　衆生往返生死繩　放逸迷荒無安樂
如來能施衆安樂　是故永斷生死繩　佛能施衆安樂故　自於己樂不貪樂　爲諸衆生修苦行
是故世間與供養　見他受苦身戰動　處在地獄不覺痛　爲諸衆生受大苦　是故無勝無有量
如來爲衆修苦行　成就具足滿六度　心處邪風不傾動　是故能勝世大士　衆生常欲得安樂
而不知修安樂因　如來能教令修習　猶如慈父愛一子　佛見衆生煩惱患　心苦如母念病子
常思離病諸方便　是故此身繫屬他　一切衆生行諸苦　其心顚倒以爲樂　如來演說眞苦樂
是故稱號爲大悲　世間皆處無明𣪍　無有智嘴能破之　如來智嘴能啄壞　是故名爲最大子
不爲三世所攝持　無有名字及假號　覺知涅槃甚深義　是故稱佛爲大覺　有河洄澓沒衆生
無明所盲不知出　如來自渡能渡彼　是故稱佛大船師　能知一切諸因果　亦復通達盡滅道
常施衆生病苦藥　是故世稱大醫王　外道邪見說苦行　因是能得無上樂　如來演說眞樂行
能令衆生受快樂　如來世尊破邪道　開示衆生正眞路　行是道者得安樂　是故稱佛爲導師
非自非他之所作　亦非共作無因作　如來所說苦受事　勝於一切諸外道　成就具足戒定慧
亦以此法教衆生　以法施時無妬悋　是故稱佛無緣悲　無所造作無因緣　獲得無因無果報
是故一切諸智者　稱說如來不求報　常共世間放逸行　而身不爲放逸汙　是故名爲不思議

世間八法不能汙　如來世尊無怨親　是故其心常平等　我師子吼讚大悲　能吼無量師子吼

大般涅槃經卷第三十

# 大般涅槃經卷第三十一

〔麗宼〕〔宋合〕〔元合〕〔明白〕

宋代沙門惠嚴等依泥洹經加之

## 迦葉菩薩品第二十四之一

迦葉菩薩白佛言.世尊.如來憐愍一切衆生.不調能調不淨能淨.無歸依者能作歸依.未解脫者能令解脫得八自在.爲大醫師作大藥王.善星比丘是佛菩薩時子.出家之後受持讀誦分別解說十二部經.壞欲界結獲得四禪.云何如來記說.善星.是一闡提廝下之人地獄劫住不可治人.如來何故不先爲其演說正法後爲菩薩.如來世尊若不能救.善星比丘.云何得名有大慈愍有大方便.佛言.善男子.譬如父母唯有三子.其一子者有信順心恭敬父母.利根智慧於世間事能速了知.其第二子不敬父母無信順心.利根智慧於世間事能速了知.其第三子不敬父母無信順心鈍根無智.父母若欲敎告之時.應先敎誰先親愛誰.當先敎誰知世間事.迦葉菩薩白佛言.世尊.應先敎授有信順心恭敬父母.利根智慧知世事者.其次第二乃及第三.而彼二子雖無信順恭敬之心.爲慈念故次復敎之.善男子.如來亦爾.其三子者.初喩菩薩.中喩聲聞.後喩一闡提.如十二部經修多羅中微細之義.我先已爲諸菩薩說.淺近之義爲聲聞說.世間之義爲一闡提五逆罪說.現在世中雖無利益.以憐愍故爲生後世諸善種子.善男子.如三種田.一者渠流便易.無諸沙鹵瓦石棘刺.種一得百.二者雖無沙鹵瓦石棘刺渠流險難.收實減半.三者渠流險難多有沙鹵瓦石棘刺.種一得一爲稾草故.善男子.農夫春月先種何田.世尊.先種初田次第二田後及第三.初喩菩薩.次喩聲聞.後喩一闡提.善男子.譬如三器.一者完.二者漏.三者破.若欲盛置乳酪酥水.先用何者.世尊.應用完者次用漏者後及破者.其完淨者喩菩薩僧.漏喩聲聞.破喩一闡提.善男子.如三病人俱至醫所.一者易治.二者難治.三不可治.善男子.醫若治者當先治誰.世尊.應先治易次及第二後及

---

品目宋元俱無之一二字　愍三本俱作憫下同　厮宋作斯下同　速三本俱作悉　信順同作有信○告下同無之時二字　有同作諸　一下二下並同無者字

善下同無種字

子下三本倶無故字

一下二下三下並同無者字

踡宋元倶作卷明作跧

嫉妬三本倶作妬嫉下同○而宋作怖○苦同作若

第三。何以故。爲親屬故。其易治者喻菩薩僧。其難治者喻聲聞僧。不可治者喻一闡提。現在世中雖無善果。以憐愍故爲種後世諸善種子。故善男子。譬如大王有三種馬。一者調壯大力。二者不調齒壯大力。三者不調羸老無力。王若乘御當先何者。世尊。應當先乘調壯大力。次乘第二後及第三。善男子。調壯大力喻菩薩僧。其第二者喻聲聞僧。其第三者喻一闡提。現在世中雖無利益。以憐愍故爲種後世諸善種子。故善男子。如大施時有三人來。一者貴族聰明持戒。二者中姓鈍根持戒。三者下姓鈍根毀戒。善男子。是大施主應先施誰。世尊。應先貴姓利根持戒次及第二後及第三。第一喻菩薩僧。第二喻聲聞僧。第三喻一闡提。善男子。如大師子殺香象時皆盡其力。殺兎亦爾。不生輕想。諸佛如來亦復如是。爲諸菩薩及一闡提。演說法時功用無二。善男子。我於一時住王舍城。善星比丘爲我給使。我於初夜爲天帝釋演說法要。弟子之法應後師眠。爾時善星以我久坐心生惡念。時王舍城小男小女。若啼不止父母則語。汝若不止當將汝付薄拘羅鬼。爾時善星反被拘執而語我言。速入禪室薄拘羅來。我言癡人。汝常不聞如來世尊無所畏耶。爾時帝釋卽語我言。世尊。如是人等亦復得入佛法中耶。我卽語言。憍尸迦。如是人者得入佛法。亦有佛性當得阿耨多羅三藐三菩提。我雖爲是善星說法。而彼都無信受之心。善男子。我於一時在迦尸國尸婆富羅城。善星比丘爲我給使。我時欲入彼城乞食。無量衆生虛心渴仰欲見我迹。善星比丘尋隨我後而毀滅之。旣不能滅而令衆生生不善心。我入城已。於酒家舍見一尼乾踡脊蹲地餐食酒糟。善星比丘見已而言。世尊。世間若有阿羅漢者是人最勝。何以故。是人所說無因無果。我言癡人。汝常不聞阿羅漢者。不飮酒不害人不欺誑不盜不婬。如是之人殺害父母食噉酒糟。云何而言是阿羅漢。是人捨身必定當墮阿鼻地獄。阿羅漢者永斷三惡。云何而言是阿羅漢。善星卽言。四大之性猶可轉易。欲令是人必墮阿鼻無有是處。我言癡人。汝常不聞諸佛如來誠言無二。我雖爲是善星說法。而彼絶無信受之心。善男子。我於一時與善星比丘住王舍城。爾時城中有一尼乾名曰苦得。常作是言。衆生煩惱無因無緣。衆生解脫亦無因緣。善星比丘復作是言。世尊。世間若有阿羅漢者苦得爲上。我言癡人。苦得尼乾實非羅漢。不能解了阿羅漢道。善星復言。何故羅漢於阿羅漢而生嫉妬。我言癡人。我於羅漢不生嫉妬。而汝自生惡邪見耳。若言苦得是羅漢者。却後七

舁三本俱作輿下同

終終三本俱作死死

蹲宋作拳元明俱作踡

語三本俱作言

失退四禪同作退禪定三字

日當患宿食腹痛而死。死已生於食吐鬼中。其同學輩當舁其尸置寒林中。爾時善星即往苦得尼乾子所語言。長老。汝今知不。沙門瞿曇記汝七日當患宿食腹痛而死。死已生於食吐鬼中。同學同師當舁汝尸置寒林中。長老。好善思惟作諸方便。當令瞿曇墮妄語中。爾時苦得聞是語已即便斷食。從初一日乃至六日。滿七日已便食黑蜜。食黑蜜已復飲冷水。飲冷水已腹痛而終。終已同學舁其尸喪置寒林中。即受食吐餓鬼之形在其尸邊。善星比丘聞是事已至寒林中。見苦得身受食吐形在其尸邊蹲脊蹲地。善星語言。大德死耶。苦得答言。我已死矣。云何死耶。答言。因腹痛死。誰出汝尸。答言。同學出置何處。答言。癡人。汝今不識是寒林耶。得何等身。答言。我得食吐鬼身。善星諦聽。如來善語眞語時語義語法語。善星。如來口出如是實語。汝於爾時云何不信。若有衆生不信如來眞實語者。彼亦當受如我此身。爾時善星即還我所作如是言。世尊。苦得尼乾命終之後生三十三天。我言癡人。阿羅漢者無有生處。云何而言苦得生於三十三天。世尊。實如所言。苦得尼乾實不生於三十三天。今受食吐餓鬼之身。我言癡人。諸佛如來誠言無二。若言如來有二言者。無有是處。善星即言。如來爾時雖作是說。我於是事都不生信。善男子。我亦常爲善星比丘說眞實法。而彼絕無信受之心。善男子。善星比丘雖復讀誦十二部經獲得四禪。乃至不解一偈一句一字之義。親近惡友退失四禪。失退四禪已生惡邪見。作如是說。無佛無法無有涅槃。沙門瞿曇善知相法。是故能得知他人心。我於爾時告善星言。我所說法初中後善。其言巧妙字義眞正所說無雜。具足成就清淨梵行。善星比丘復作是言。如來雖復爲我說法。而我眞實謂無因果。善男子。汝若不信如是事者。善星比丘今者近在尼連禪河可共往問。爾時如來即與迦葉往善星所。善星比丘遙見佛來。見已即生惡邪之心。以惡心故生身陷入墮阿鼻獄。善男子。善星比丘雖入佛法無量寶聚空無所獲。乃至不得一法之利。以放逸故惡知識故。譬如有人雖入大海多見衆寶而無所得。以放逸故。又如入海雖見寶聚自戮而死。或爲羅刹惡鬼所殺。善星比丘亦復如是。入佛法已爲惡知識羅刹大鬼之所殺害。善男子。是故如來以憐愍故。常說善星多諸放逸。善男子。若本貧窮於是人所雖生憐愍其心則薄。若本巨富後失財物。於是人所生於憐愍其心則厚。善星比丘亦復如是。受持讀誦十二部經獲得四禪。然後退失現可憐愍。是故我說善星比丘多諸放逸。多

若同作少
挓宋作撓元作撓明作橈
復三本俱作後
產同作生
蟻同作螘
過上同無所謂二字
一下二下並同無者字
牙同作芽

放逸故斷諸善根。我諸弟子有見聞者。於是人所無不生於重憐愍心。如初巨富後失財者。我於多年。常與善星共相隨逐。而彼自生惡邪之心。以惡邪故不捨惡見。善男子。我從昔來見是善星。若有善根如毛髮許。終不記彼斷絕善根。是一闡提斷下之人地獄劫住。以其宣說無因無果無有作業。爾乃記彼永斷善根。是一闡提斷下之人地獄劫住。善男子。譬如有人沒圊廁中。有善知識以手挓之。若得頭髮便欲拔出。久求不得爾乃息意。我亦如是。求覓善星微少善根便欲拔濟。終日求之乃至不得如毛髮許。是故不得拔其地獄。迦葉菩薩言。世尊。如來何故記彼當墮阿鼻地獄。善男子。善星比丘多有眷屬。皆謂善星是阿羅漢是得道果。我欲壞彼惡邪心故。記彼善星以放逸故墮於地獄。善男子。汝今當知。如來所說眞實無二。何以故。若佛所記當墮地獄。若不墮者無有是處。聲聞緣覺所記莂者。則有二種。或虛我實。如目揵連在摩伽陀國遍告諸人却後七日天當降雨。時竟不雨。復記牸牛當生白犢。及其產時乃產駮犢。記生男者後乃產女。善男子。善星比丘常爲無量諸衆生等。宣說一切無善惡果。爾時永斷一切善根。乃至無有如毛髮許。善男子。我久知是善星比丘當斷善根。猶故共住滿二十年畜養共行。我若遠弃不近左右。是人當敎無量衆生造作惡業。是名如來第五解力。世尊。一闡提輩以何因緣無有善法。善男子。一闡提輩斷善根故。衆生悉有信等五根。而一闡提輩永斷滅故。以是義故。殺害蟻子猶得殺罪。殺一闡提無有殺罪。世尊。一闡提者終無善法。是故名爲一闡提耶。佛言。如是如是。世尊。一切衆生有三種善。所謂過去未來現在。一闡提輩亦不能斷未來善法。云何說言斷諸善法名一闡提耶。善男子。斷有二種。一者現在滅。二者現在障於未來。一闡提輩具是二斷。是故我言斷諸善根。善男子。譬如有人沒圊廁中唯有一髮毛頭未沒。雖復一髮毛頭未沒。而一毛頭不能勝身。一闡提輩亦復如是。雖未來世當有善根。而不能救地獄之苦。未來之世雖可救拔。現在之世無如之何。是故名爲不可救濟。以佛性因緣則可得救。佛性者非過去非未來非現在。是故佛性不可得斷。如朽敗子不能生牙。一闡提輩亦復如是。世尊。一闡提輩不斷佛性佛性亦善。云何說言斷一切善。善男子。若諸衆生現在世中有佛性者。則不得名一闡提也。如世間中衆生我性。佛性是常三世不攝。三世若攝名爲無常。佛性未來以當見故。故言衆生悉有佛性。以是義故。十住菩薩具足莊嚴乃得少見。迦葉菩薩言。世

得見同作而得
爲同作名

調三本俱作提

尊.佛性者常猶如虛空.何故如來說言未來.如來若言一闡提輩無善法者.一闡提輩於其同學同師父母親族妻子.豈當不生愛念心邪.如其生者非是善乎.佛言.善哉善哉.善男子.快發斯問.佛性者猶如虛空.非過去非未來非現在.一切衆生有三種身.所謂過去未來現在.衆生未來具足莊嚴淸淨之身得見佛性.是故我言佛性未來.善男子.我爲衆生或時說因爲果.或時說果爲因.是故經中說命爲食見色爲觸.未來身淨故說佛性.世尊.如佛所說義如是者.何故說言一切衆生悉有佛性.善男子.衆生佛性雖現在無不可言無.如虛空性雖無現在不得言無.一切衆生雖復無常.而是佛性常住無變.是故我於此經中說.衆生佛性非內非外.猶如虛空非內非外.如其虛空有內外者.虛空不名爲一爲常.亦不得言一切處有.虛空雖復非內非外.而諸衆生悉皆有之.衆生佛性亦復如是.如汝所言.一闡提輩有善法者.是義不然.何以故.一闡提輩若有身業口業意業取業求業施業解業.如是等業悉是邪業.何以故.不求因果故.善男子如呵梨勒果根莖枝葉花實悉苦.一闡提業亦復如是.善男子.如來具足知諸根力.是故善能分別衆生上中下根.能知是人轉下作中.能知是人轉中作上.能知是人轉上作中.能知是人轉中作下.是故當知.衆生根性無有決定.以無定故或斷善根斷已還生.若諸衆生根性定者.終不先斷斷已復生.亦不應說一闡提輩墮於地獄壽命一劫.善男子.是故如來說一切法無有定相.迦葉菩薩白佛言.世尊.如來具足知諸根力.定知善星當斷善根.以何因緣聽其出家.佛言.善男子.我於往昔初出家時.吾弟難陀.從弟阿難.調婆達多.子羅睺羅.如是等輩皆悉隨我出家修道.我若不聽善星出家.其人次當得紹王位.其力自在當壞佛法.以是因緣我便聽其出家修道.善男子.善星比丘若不出家.亦斷善根於無量世都無利益.今出家已.雖斷善根能受持戒.供養恭敬耆舊長宿有德之人.修習初禪乃至四禪.是名善因.如是善因能生善法.善法既生能修習道.既修習道當得阿耨多羅三藐三菩提.是故我聽善星出家.善男子.若我不聽善星比丘出家受戒.則不得稱我爲如來具足十力.善男子.佛觀衆生具足善法及不善法.是人雖具如是二法.不久能斷一切善根具不善根.何以故.如是衆生不親善友.不聽正法不善思惟不如法行.以是因緣能斷善根具不善根.善男子.如來復知是人現世若未來世少壯老時.當近善友聽受正法苦集滅道.爾時則能還生善根.善男子.譬如

道已下同有能修正道○修正道已八字○諸同作身○見同作道

鬘三本俱作祇次同

葉下同無菩薩二字

有泉去村不遠其水甘美具八功德。有人熱渴欲往泉所。邊有智者。觀是渴人必定無疑當至水所。何以故。無異路故。如來世尊觀諸衆生亦復如是。是故如來名爲具足知諸根力。爾時世尊取地少土置之爪上。告迦葉言。是土多耶。十方世界地土多乎。迦葉菩薩白佛言。世尊。爪上土者不比十方所有土地。善男子。有人捨身還得人身。捨三惡身得受人身。諸根完具生於中國。具足正信能修習道。修習道已能得解脫。得解脫已能入涅槃。如爪上土。捨人身已得三惡身。捨三惡身得三惡身。諸根不具生於邊地。信邪倒見修習邪見。不得解脫常樂涅槃。如十方界所有地土。善男子。護持禁戒。精勤不懈不犯四重。不作五逆。不用僧鬘物。不作一闡提不斷善根。信如是等涅槃經典。如爪上土。毀戒懈怠。犯四重禁。作五逆罪。用僧鬘物。作一闡提斷諸善根。不信是經。如十方界所有地土。善男子。如來善知衆生如是上中下根。是故稱佛具知根力。迦葉菩薩白佛言。世尊。如來具足是知根力。是故能知一切衆生上中下根利鈍差別。知現在世衆生諸根。亦知未來衆生諸根。如是衆生於佛滅後作如是說。如來畢竟入於涅槃。或不畢竟入於涅槃。或說有我或說無我。或有中陰或無中陰。或說有退或說無退。或言如來身是有爲。或言如來身是無爲。或有說言十二因緣是有爲法。或說因緣是無爲法。或說心是有常。或說心是無常。或有說言。受五欲樂能障聖道。或說不遮。或說世第一法唯是欲界。或說三界。或說布施唯是意業。或有說言卽是五陰。或有說言有三無爲。或有說言無三無爲。復有說言或有造色。復有說言或無造色。或有說言有無作色。或或有說言無作色。或有說言有心數法。或有說言無心數法。或有說言有五種有。或有說言有六種有。或有說言八戒齋法優婆塞戒具足受得。或有說言不具受得。或說比丘犯四重已比丘戒在。或說不在。或有說言須陀洹人斯陀含人阿那含人阿羅漢人皆得佛道。或言不得。或說佛性卽衆生有。或說佛性離衆生有。或有說言犯四重禁作五逆罪一闡提等皆有佛性。或說言無。或有說言有十方佛。或有說言無十方佛。如其如來具足成就知根力者。何故今日不決定說。佛告迦葉菩薩。善男子。如是之義非眼識知。乃至非意識知。乃是智慧之所能知。若有智者我於是人終不作二。是亦謂我不作二說。於無智者作不定說。而是無智亦復謂我作不定說。善男子。如來所有一切善行。悉爲調伏諸衆生故。譬如醫王所有醫方悉爲療治一切病苦。善男子。如來世尊爲國土

礙同作閡下同

分三本俱作芬一字

是上同無善男子三字○顚宋元俱作傎下同○名下三本俱有爲字○佛下同有佛字

世諦說同作說世諦

故爲時節故爲他語故爲人故爲衆根故。於一法中作二種說。於一名法說無量名。於一義中說無量名。於無量義說無量名。云何一名說無量名。猶如涅槃。亦名涅槃亦名無生。亦名無出亦名無作。亦名無爲亦名歸依。亦名窟宅亦名解脫。亦名光明亦名燈明。亦名彼岸亦名無畏。亦名無退亦名安處。亦名寂靜亦名無相。亦名無二亦名一行。亦名淸涼亦名無闇。亦名無礙亦名無諍。亦名無濁亦名廣大。亦名甘露亦名吉祥。是名一名作無量名。云何一義說無量名。猶如帝釋。亦名帝釋亦名憍尸迦。亦名婆蹉婆亦名富蘭陀羅。亦名摩佉婆亦名因陀羅。亦名千眼亦名舍脂夫。亦名金剛亦名寶頂亦名寶幢。是名一義說無量名。云何於無量義說無量名。如佛如來名爲如來義異名異。亦名阿羅呵。義異名異亦名三藐三佛陀。義異名異。亦名船師亦名導師。亦名正覺亦名明行足。亦名大師子王。亦名沙門亦名婆羅門。亦名寂靜亦名施主。亦名到彼岸亦名大醫王。亦名大象王亦名大龍王。亦名施眼亦名大力士。亦名大無畏亦名寶聚。亦名商主亦名得脫。亦名大丈夫亦名天人師。亦名大分陀利亦名獨無等侶。亦名大福田亦名大智慧海。亦名無相亦名具足八智。如是一切義異名異。善男子。是名無量義中說無量名。復有一義說無量名。所謂如陰。亦名爲陰亦名顚倒。亦名爲諦亦名四念處。亦名四食亦名四識住處。亦名爲有亦名爲道。亦名爲時亦名衆生。亦名爲世亦名第一義。亦名三修謂身戒心。亦名因果亦名煩惱。亦名解脫亦名十二因緣。亦名聲聞辟支佛。亦名地獄餓鬼畜生人天。亦名過去現在未來。是名一義說無量名。善男子。如來世尊爲衆生故。廣中說略略中說廣。第一義諦說爲世諦。說世諦法爲第一義諦。云何名爲廣中說略。如告比丘。我今宣說十二因緣。云何名爲十二因緣。所謂因果。云何名爲略中說廣。如告比丘。我今宣說苦集滅道。苦者所謂無量諸苦。集者所謂無量煩惱。滅者所謂無量解脫。道者所謂無量方便。云何名爲第一義諦說爲世諦。如告比丘。吾今此身有老病死。云何名爲世諦說爲第一義諦。如告憍陳如。汝得法故名阿若憍陳如。是故隨人隨意隨時。故名如來知諸根力。善男子。我若當於如是等義作定說者。則不得稱我爲如來具知根力。善男子。有智之人當知香象所負非驢所勝。一切衆生所行無量。是故如來種種爲說無量之法。何以故。衆生多有諸煩惱故。若使如來說於一行。不名如來具足成就知諸根力。是故我於餘經中說。五種衆生不應還爲說五種法。

旡同作勿

尸下三本俱無那字

今同作等

為不信者不讚正信。為毀禁者不讚持戒。為慳貪者不讚布施。為懈怠者不讚多聞。為愚癡者不讚智慧。何以故。智者若為是五種人說是五事。當知說者不得具足知諸根力。亦不得名憐愍眾生。何以故。是五種人聞是事已。生不信心惡心瞋心。以是因緣於無量世受苦果報。是故不名憐愍眾生具知根力。是故我先於餘經中告舍利弗。如慎旡為利根之人廣說法語。鈍根之人略說法也。舍利弗言。世尊。我但為憐愍故說。非是具足根力故說。善男子。廣略說法是佛境界。非諸聲聞緣覺所知。善男子。如汝所言。佛涅槃後諸弟子等各異說者。是人皆以顛倒因緣不得正見。是故不能自利利他。善男子。是諸眾生非唯一性一行一根一種國土一善知識。是故如來為彼種種宣說法要。以是因緣十方三世諸佛如來。為眾生故開示演說十二部經。善男子。如來說是十二部經。非為自利但為利他。是故如來第五力者名稱解力。是二力故。如來深知。是人現在能斷善根。是人後世能斷善根。是人現在能得解脫。是人後世能得解脫。是故如來名無上力士。善男子。若言如來畢竟涅槃不畢竟涅槃。是人不解如來意故作如是說。善男子。是香山中有諸仙人五萬三千。皆於過去迦葉佛所。修諸功德未得正道。親近諸佛聽受正法。如來欲為是等人故。告阿難言。過三月已吾當涅槃。諸天聞已其聲展轉乃至香山。諸仙聞已即生悔心。作如是言。云何我等得生人中不親近佛。諸佛如來出世甚難如優曇花。我今當往至世尊所聽受正法。善男子。爾時五萬三千諸仙即來我所。我時即為如應說法。諸大士色是無常。何以故。色之因緣是無常故。無常因生色云何常。乃至識亦如是。爾時諸仙聞是法已。即時獲得阿羅漢果。善男子。拘尸那竭有諸力士三十萬人無所繫屬。自恃憍恣色力命財狂醉亂心。善男子。我為調伏諸力士故。告目連言。汝當調伏如是力士。時目揵連敬順我教。於五年中種種教化。乃至不能令一力士受法調伏。是故我復為彼力士告阿難言。過三月已吾當涅槃。善男子。時諸力士聞是語已。相與集眾平治道路。過三月已。我時便從毘舍離國至拘尸那城。中路遙見諸力士輩。即自化身為沙門像往力士所。作如是言。諸童子作何事耶。力士聞已皆生瞋恨。作如是言。沙門。汝今云何謂我等輩為童子耶。我時語言。汝今大眾三十萬人盡其身力。不能移此微小之石。云何不名為童子乎。諸力士言。汝若謂我為童子者。當知汝即是大人也。善男子。我於爾時以足二指撾出此石。是諸力士見是事已。即於己身

生輕劣想。復作是言。沙門。汝今復能移徒此石令出道不。我言。童子。何因緣故嚴治此道。諸力士言。沙門。汝不知耶。釋迦如來當由此路至娑羅林入於涅槃。以是因緣我等平治。我時讚言。善哉童子。汝等已發如是善心。吾當爲汝除去此石。我時以手舉擲高至阿迦尼吒。時諸力士見石在空。皆生驚怖尋欲四散。我復告言。諸力士等汝今不應生恐怖心各欲散去。諸力士言。沙門。若能救護我者我當安住。爾時我復以手接石置之右掌。力士見已心生歡喜。復作是言。沙門。是石常耶是無常乎。我於爾時以口吹之。石即散壞猶如微塵。力士見已唱言。沙門。是石無常。即生愧心而自考責。云何我等恃怙自在色力命財而生憍慢。我知其心即捨化身。還復本形而爲說法。力士見已一切皆發菩提之心。善男子。拘尸那竭有一工巧。名曰純陀。是人先於迦葉佛所發大誓願。釋迦如來入涅槃時。我當最後奉施飲食。是故我於毘舍離國顧命比丘優婆摩那。善男子。過三月已。吾當於彼拘尸那竭娑羅雙樹入般涅槃。汝可往告純陀令知。善男子。王舍城中有五通仙。名須跋陀年百二十。常自稱是一切智人。生大憍慢。已於過去無量佛所種諸善根。我亦爲欲調伏彼故。告阿難言。過三月已吾當涅槃。須跋聞已當來我所生信敬心。我當爲彼說種種法。其人聞已當得盡漏。善男子。羅閱耆王頻婆娑羅。其王太子名曰善見。業因緣故生惡逆心。欲害其父而不得便。爾時惡人提婆達多。亦因過去業因緣故。復於我所生不善心欲害於我。即修五通不久獲得。與善見太子共爲親厚。爲太子故現作種種神通之事。從非門出從門而入。從門而出非門而入。或時示現象馬牛羊男女之身。善見太子見已即生愛心喜心敬信之心。爲是事故嚴設種種供養之具而供養之。又復白言。大師聖人。我今欲見曼陀羅花。時提婆達多即便往至三十三天。從彼天人而求索之。其福盡故都無與者。既不得花作是思惟。曼陀羅樹無我我所。我若自取當有何罪。即前欲取便失神通。還見己身在王舍城。心生慚愧不能復見善見太子。復作是念。我今當往至如來所求索大衆。佛若聽者我當隨意敎詔勅使舍利弗等。爾時提婆達多便來我所作如是言。唯願如來。以此大衆付囑於我。我當種種說法敎化令其調伏。我言癡人。舍利弗等聰明大智世所信伏。我猶不以大衆付囑。況汝癡人食唾者乎。時提婆達復於我所部生惡心。作如是言。瞿曇。汝今雖復調伏大衆。勢亦不久當見磨滅。作是語已。大地即時六返震動。提婆達多尋時躄地。於其身邊

耆三本俱作祇

唯同作惟

達下同有多字○返同作反下同

多同作寺〇常同作當

韋同作毗次同

殺下三本俱有害字

出大暴風。吹諸塵土而汙坌之。提婆達多見惡相已。復作是言。若我此身現世必入阿鼻地獄。我要當報如是大怨。時提婆達多起往至善見太子所。善見見已卽問。聖人。何故顏容憔悴有憂色耶。提婆達言。我常如是汝不知乎。善見答言。願說其意何因緣爾。提婆達言。我今與汝極成親愛。外人罵汝以爲非理。我聞是事豈得不憂。善見太子復作是言。國人云何罵辱於我。提婆達言。國人罵汝爲未生怨。善見復言。何故名我爲未生怨。誰作此名。提婆達言。汝未生時一切相師皆作是言。是兒生已當殺其父。是故外人皆悉號汝爲未生怨。一切內人護汝心故。謂爲善見。韋提夫人聞是語已。旣生汝身於高樓上。棄之於地壞汝一指。以是因緣人復號汝爲婆羅留枝。我聞是已心生愁憒。而復不能向汝說之。提婆達多以如是等種種惡事。敎令殺父。若汝父死我亦能殺瞿曇沙門。善見太子問一大臣名曰雨行。大王何故爲我立字作未生怨。大臣卽爲說其本末。如提婆達所說無異。善見聞已。卽與大臣收其父王閉之城外。以四種兵而守衞之。韋提夫人聞是事已卽至王所。所守王人遮不聽入。爾時夫人生瞋恚心便呵罵之。時諸守人卽告太子。大王夫人欲見父王不審聽不。善見聞已復生瞋嫉。卽往母所前牽母髮拔刀欲斫。爾時耆婆白言。大王。有國已來罪雖極重不及女人。況所生母。善見太子聞是語已。爲耆婆故卽便放捨。遮斷父王衣服臥具飮食湯藥。過七日已王命便終。善見太子見父喪已方生悔心。雨行大臣復以種種惡邪之法而爲說之。大王。一切業行都無有罪。何故今者而生悔心。耆婆復言。大王。當知如是業者罪兼二重。一者殺父王。二者殺須陀洹。如是罪者除佛更無能除滅者。善見王言。如來淸淨無有穢濁。我等罪人云何得見。善男子。我知是事故告阿難。過三月已吾當涅槃。善見聞已卽來我所。我爲說法重罪得薄。獲無根信。善男子。我諸弟子聞是說已不解我意。故作是言。如來定說畢竟涅槃。善男子。菩薩二種。一者實義。二而假名。假名菩薩聞我三月當入涅槃。皆生退心而作是言。如其如來無常不住。我等何爲爲是事故。無量世中受大苦惱。如來世尊成就具足無量功德。尚不能壞如是死魔。況我等輩當能壞耶。善男子。是故我爲如是菩薩。而作是言。如來常住無有變易。善男子。我諸弟子聞是說已不解我意。定言如來終不畢竟入於涅槃。善男子。有諸衆生生於斷見。作如是言。一切衆生身滅之後。善惡之業無有受者。我爲是人作如是言。善惡果報實有受者。云何知有。善男子。過去

或三本倶作我
褐同作毼

之世拘尸那竭.有王名曰善見.作童子時經八萬四千歲.作太子時八萬四千歲.及登王位亦八萬四千歲.於獨處坐作是思惟.衆生薄福壽命短促.常有四怨而隨逐之.不自覺知猶予放逸.是故我當出家修道斷絕四怨生老病死.即勅有司.於其城外作七寶堂.作已便告羣臣百官宮內妃后諸子眷屬.汝等當知.我欲出家能見聽不.爾時大臣及其眷屬.各作是言.善哉.大王.今正是時.時善見王將一使人獨往堂上.復經八萬四千年修習慈心.是慈因緣.於後八萬四千世.次第得作轉輪聖王.三十世中作釋提桓因.無量世中作諸小王.善男子.爾時善見豈異人乎.莫作斯觀.即我身是.善男子.我諸弟子聞是說已不解我意.唱言如來定說有我及有我所.又我一時爲諸衆生.說言我者即是性也.所謂內外因緣十二因緣衆生五陰心算世間功德業行自在天世.即名爲我.我諸弟子聞是說已不解我意.唱言如來定說有我.善男子.復於異時有一比丘來至我所.作如是言.世尊.云何名我誰是我耶何緣故我.我時即爲比丘說言.比丘.無我我所.眼者即是本無今有已有還無.其生之時無所從來.及其滅時亦無所至.雖有業果無有作者.無有捨陰及受陰者.如汝所問云何我者我即期也.誰是我者即是業也.何緣我者即是愛也.比丘.譬如二手相拍聲出其中.我亦如是.衆生業愛三因緣故名之爲我.比丘.一切衆生色不是我.我中無色色中無我.乃至識亦如是.比丘.諸外道輩雖說有我終不離陰.若說離陰別有我者無有是處.一切衆生行如幻化熱時之焰.比丘.五陰皆是無常無樂無我無淨.善男子.爾時多有無量比丘.觀此五陰無我我所得阿羅漢果.善男子.我諸弟子聞是說已不解我意.唱言如來定說無我.善男子.我於經中復作是言.三事和合得受是身.一父二母三者中陰.是三和合得受是身.或時復說.阿那含人現般涅槃.或於中陰入般涅槃.或復說言.中陰身根具足明了.皆因往業如淨醍醐.善男子.我或時說.弊惡衆生所受中陰.如世間中麤澀氀褐.純善衆生所受中陰.如波羅奈所出白㲲.我諸弟子聞是說已不解我意.唱言如來說有中陰.善男子.我復爲彼逆罪衆生.而作是言.造五逆者捨身直入阿鼻地獄.我復說言.曇摩留枝比丘捨身直入阿鼻地獄.於其中間無止宿處.我復爲彼犢子梵志說言.梵志.若有中陰則有六有.我復說言.無色衆生無有中陰.善男子.我諸弟子聞是說已不解我意.唱言佛說定無中陰.善男子.我於經中復說有退.何以故.因於無量懈怠懶惰.諸比丘等不修

生上同無則字

道故．說退五種．一者樂於多事．二者樂說世事．三者樂於睡眠．四者樂近在家．五者樂多游行．以是因緣令比丘
退．說退因緣復有二種．一內二外．阿羅漢人雖離內因不離外因．以外因緣故則生煩惱．生煩惱故則便退失．復
有比丘名曰瞿坻．六返退失．退以慚愧復更進修第七即得．得已恐失以刀自害．我復或說有時解脫．或說六種
阿羅漢等．我諸弟子聞是說已不解我意．唱言如來定說有退．善男子．經中復說．譬如焦炭不適爲大．亦如瓶壞
更無瓶用．煩惱亦爾．阿羅漢斷終不還生．亦說衆生生煩惱因凡有三種．一者未斷煩惱．二者不斷因緣．三者不
善思惟．而阿羅漢無二因緣．謂斷煩惱無不善思惟．善男子．我諸弟子聞是說已不解我意．唱言如來定說無退．
善男子．我於經中說如來身凡有二種．一者生身．二者法身．言生身者即是方便應化之身．如是身者可時言是
生老病死長短黑白．是此是彼是學無學．我諸弟子聞是說已不解我意．唱言如來定說佛身是有爲法．法身即
是常樂我淨．永離一切生老病死．非白非黑非長非短非此非彼非學非無學．若佛出世及不出世．常住不動無
有變易．善男子．我諸弟子聞是說已不解我意．唱言如來定說佛身是無爲法．善男子．我經中說．云何名爲十二
因緣．從無明生行．從行生識．從識生名色．從名色生六入．從六入生觸．從觸生受．從受生愛．從愛生取．從取生有
從有生生．從生則有老死憂苦．善男子．我諸弟子聞是說已不解我意．唱言如來說十二緣定是有爲．我又一時
告喩比丘而作是言．十二因緣有佛無佛性相常住．善男子．有十二緣不從緣生．有從緣生非十二緣．有從緣生
亦十二緣．有非緣生亦非十二緣．有十二緣非緣生者．謂未來世十二支也．有從緣生非十二緣者．謂阿羅漢所
有五陰．有從緣生亦十二緣者．謂凡夫人所有五陰十二因緣．有非緣生非十二緣者．謂虛空涅槃．善男子．我諸
弟子聞是說已不解我意．唱言如來說十二緣定是無爲．善男子．我經中說．一切衆生作善惡業．捨身之時．四大
於此即時散壞．純善業者心即上行．純惡業者心即下行．善男子．我諸弟子聞是說已不解我意．唱言如來說心
定常．善男子．我於一時爲頻婆娑羅王．而作是言．大王當知．色是無常．何以故．從無常因而得生故．是色若從無
常因生智者．云何說言是常．若色是常不應壞滅生諸苦惱．今見是色散滅破壞．是故當知色是無常．乃至識亦
如是．善男子．我諸弟子聞是說已不解我意．唱言如來說心定斷．善男子．我經中說．我諸弟子受諸香花金銀寶

三本俱作八

暖明作煖下同

如是三本俱作第一

以明作如

乾三本俱作揵

男下宋無子我二字○子下明有我子二字

色下三本俱有已字○若下同無有字

物妻子奴婢百不淨物獲得正道。得正道已亦不捨離。我諸弟子聞是說已不解我意。定言如來說受五欲不妨聖道。又我一時復作是說。在家之人得正道者無有是處。善男子。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言如來說受五欲定遮正道。善男子。我經中說。遠離煩惱未得解脫。猶如欲界修習世間第一法也。善男子。我諸弟子聞作是說不解我意。唱言如來說第一法唯是欲界。又復我說。暖法頂法忍法世第一法。在於初禪至第四禪。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言如來說如是法在於色界。又復我說。諸外道等先已得斷四禪煩惱。修習暖法頂法忍法世第一法。觀四眞諦得阿那含果。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言如來說第一法在無色界。善男子我經中說。四種施中有三種淨。一者施主信因信果信施受者不信。二者受者信因果施施主不信。三者施主受者二俱有信。四者施主受者二俱不信。是四種施初三種淨。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言如來說施唯意。善男子。我於一時復作是說。施者施時以五事施。何等為五。一者施色。二者施力。三者施安。四者施命。五者施辯。以是因緣施主還得五事果報。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言佛說施即五陰。善男子。我於一時宣說涅槃。即是遠離煩惱永盡滅無遺餘。猶如燈滅更無法生。涅槃亦爾。言虛空者即無所有。譬如世間無所有故名為虛空。非智緣滅即無所有。如其有者應有因緣。有因緣故應有盡滅。以其無故無有盡滅。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言佛說無三無為。善男子。我於一時為目乾連而作是言。目連。夫涅槃者即是章句。即是足跡是畢竟處。是無所畏即是大師。即是大果是畢竟智。即是大忍無礙三昧是大法界。是甘露味即是難見。目連。若說無涅槃者。云何有人生誹謗者墮於地獄。善男子。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言如來說有涅槃。復於一時我為目連而作是說。目連。眼不牢固至身亦爾。皆不牢固。不牢固故名為虛空。食下迴轉消化之處。一切音聲皆名虛空。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言如來決定說有虛空無為。復於一時為目連說。目連。有人未得須陀洹果住忍法時。斷於無量三惡道報。當知不從智緣而滅。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言如來決定說有非智緣滅。善男子。我又一時為跋波比丘說。若比丘觀色。若過去若未來若現在。若近若遠若麁若細。如是等色非我我所。若有比丘。如是觀已能斷色愛。跋波又言。云何名色。我言。四大名色。四陰名名。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言如

斜同作邪
無同作有
王上同無菩提二字
果上同有因字
即下同有是字
○是上同有當知二字
惡上同無言字
也三本俱作耶
牙明作芽
壞上三本俱無斷字

來決定說言色是四大。善男子。我復說言。譬如因鏡則有像現。色亦如是因四大造。所謂麁細澀滑青黃赤白長短方圓斜角輕重寒熱飢渴煙雲塵霧。是名造色。猶如響像。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言如來說有四大則有造色。或無四大無有造色。善男子。往昔一時菩提王子作如是言。若有比丘。護持禁戒若發惡心。當知是時失比丘戒。我時語言。菩提王子。戒有七種從於身口有無作色。以是無作色因緣故。其心雖在惡無記中。不名失戒猶名持戒。以何因緣名無作色。非異色因不作異色果。善男子。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言佛說有無作色。善男子。我於餘經作如是言。戒者即是遮制惡法。若不作惡是名持戒。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言如來決定實說無無作色。善男子。我於經中作如是說。聖人色陰乃至識陰。皆是無明因緣所出。一切凡夫亦復如是。從無明生愛。當知是愛即是無明。從愛生取。當知是取即無明愛。從取生有。是有即是無明愛取。從有生受。當知是受即是行有。從受因緣生於名色無明愛取有行受觸識六入等。是故受者即十二支。善男子。我諸弟子。聞是說已不解我意。唱言如來說無心數。善男子。我於經中作如是說。從眼色明惡欲四法則生眼識。言惡欲者即是無明。欲性求時即名為愛。愛因緣取取名為業。業因緣識。識緣名色。名色緣六入六入緣觸。觸緣想受愛信精進定慧。如是等法因觸而生。然非是觸。善男子。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言如來說有心數。善男子我或時說唯有一有。或說二三四五六七八九至二十五。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言如來說有五有。或言六有。善男子。我往一時住迦毘羅衛尼拘陀林。時釋摩男來至我所。作如是言。云何名為優婆塞也。我即為說。若有善男子善女人。諸根完具受三歸依。是則名為優婆塞也。釋摩男言。世尊。云何名為一分優婆塞。我言。若受三歸及受一戒。是名一分優婆塞也。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言如來說優婆塞戒不具受得。善男子。我於一時住恒河邊。爾時迦旃延來至我所。作如是言。世尊。我教衆生令受齋法。或一日故一夜或一時或一念。如是之人成齋不耶。我言。比丘。是人得善不名得齋。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言如來說八戒齋具受乃得。善男子。我於經中作如是說。若有比丘。犯四重已不名比丘。名破比丘亡失比丘。不復能生善牙種子。譬如焦種不生果實。如多羅樹頭若斷壞則不生果。犯重比丘亦復如是。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言如來說諸比丘

非下同無是字

生下同無者字

犯重禁已失比丘戒。善男子。我於經中爲純陀說四種比丘。一者畢竟到道。二者示道。三者受道。四者汙道。犯四重者卽是汙道。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言如來說諸比丘犯四重已不失禁戒。善男子。我於經中告諸比丘。一乘一道一行一緣。如是一乘乃至一緣。能爲衆生作大寂靜。永斷一切繫縛愁苦及苦因。令一切衆到於一有。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言如來說須陀洹乃至阿羅漢皆得佛道。善男子。我於經中說須陀洹人間天上七返往來便般涅槃。斯陀含人一受人天便般涅槃。阿那含人凡有五種。或有中間般涅槃者。乃至上流般涅槃者。阿羅漢人凡有二種。一者現在。二者未來。現在亦斷煩惱五陰。未來亦斷煩惱五陰。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言如來說須陀洹至阿羅漢不得佛道。善男子。我於此經說言佛性具有六事。一常二實三眞四善五淨六可見。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言佛說衆生佛性離衆生有。善男子。我又說言。衆生佛性猶如虛空。虛空者非過去非未來非現在。非內非外。非是色聲香味觸攝。佛性亦爾。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言佛說衆生佛性離衆生有。善男子。我又復說。衆生佛性猶如貧女宅中寶藏。力士額上金剛寶珠。轉輪聖王甘露之泉。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言佛說衆生佛性離衆生有。善男子。我又復說。犯四重禁一闡提人謗方等經作五逆罪皆有佛性。如是衆生都無善法佛性是善。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言佛說衆生佛性離衆生有。善男子。我又復說。衆生者卽是佛性。何以故。若離衆生不得阿耨多羅三藐三菩提。是故我與波斯匿王說於象喩。如盲說象雖不得象然不離象。衆生說色乃至說識。是佛性者亦復如是。雖非佛性非不佛性。如我爲王說箜篌喩。佛性亦爾。善男子。我諸弟子聞是說已不解我意。作種種說如盲問乳。佛性亦爾。以是因緣或有說言。犯四重禁謗方等經作五逆罪一闡提等悉有佛性。或說言無。善男子。我於處處經中說言。一人出世多人利益。一國土中二轉輪王。一世界中二佛出世。無有是處。一四天下八四天王。乃至二他化自在天。亦無是處。然我乃說從閻浮提阿鼻地獄上至阿迦膩吒天。我諸弟子聞是說已不解我意。唱言佛說無十方佛。我亦於諸大乘經中。說有十方佛

大般涅槃經卷第三十一

品目之上明有第二十四四字

# 大般涅槃經卷第三十二

〔麗寔〕〔宋合〕〔元合〕〔明白〕

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

## 迦葉菩薩品之二

善男子。如是諍訟是佛境界。非諸聲聞緣覺所知。若人於是生疑心者。猶能摧壞無量煩惱如須彌山。若於是中生決定者是名執著。迦葉菩薩白佛言。世尊。云何執著。佛言。善男子。如是之人若從他聞。若自尋經若他故教。於所著事不能放捨。是名執著。迦葉復言。世尊。如是執著爲是善耶是不善乎。善男子。如是執著不名爲善。何以故。不能摧壞諸疑網故。迦葉復言。世尊。如是人者本自不疑。云何說言不壞疑網。善男子。夫不疑者即是疑也。世尊。若有人謂須陀洹人不墮三惡。是人亦當名著名疑。善男子。是可名定不得名疑。何以故。善男子。譬如有人先見人樹。後時夜行遙見杌根。便生疑想人耶樹耶。善男子。如人先見比丘梵志。後時於路遙見比丘即生疑想。是沙門耶是梵志乎。善男子。如人先見牛與水牛。後遙見牛便生疑想。彼是牛耶是水牛乎。善男子。一切衆生先見二物後便生疑。何以故。心不了故。我亦不說須陀洹人有墮三惡不墮三惡。是人何故生於疑心。迦葉言。世尊。如佛所說。要先見已然後疑者。有人未見二種物時亦復生疑。何等是耶所謂涅槃。世尊。譬如有人路過濁水。然未曾見而亦生疑。如是水者深耶淺耶。是人未見云何生疑。善男子。夫涅槃者即是斷苦。非涅槃者即是苦也。一切衆生見有二種。見苦非苦。苦非苦者。即是飢渴寒熱瞋喜病瘦安隱老壯生死繫縛解脫恩愛別離怨憎聚會。衆生見已即便生疑。當有畢竟遠離如是苦惱事不。是故衆生於涅槃中而生疑也。汝意若謂是人先來未見濁水云何疑者。是義不然。何以故。是人先於餘處見已。是故於此未曾到處而復生疑。世尊。是人先見深淺處時已不生疑。於今何故而復生疑。佛言。善男子。本未行故所以生疑。是故我言不了故疑。迦葉菩薩白佛言。世尊。如佛所說。

即三本俱作則下同

娠三本俱作身下同

於同作行

疑即是著著即是疑.爲是誰耶.善男子.斷善根者.迦葉言.世尊.何等人輩能斷善根.善男子.若有聰明黠慧利根能善分別.遠離善友不聽正法.不善思惟不如法住.如是之人能斷善根離是四事.心自思惟無有施物.何以故.施者即是捨於財物.若施有報當知施主常應貧窮.何以故.子果相似故.是故說言無因無果.若如是說無因無果.是則名爲斷善根也.復作是念.施主受者及以財物.三事無常無有停住.若無停住云何說言.此是施主受者財物.若無受者云何得果.以是義故無因無果.若如是說無因無果.當知是人能斷善根.復作是念.施者施時有五事施.受者受已或時作善或作不善.而是施主亦復不得善不善果.如世間法從子生果果還作子.因即施主果即受者.而是受者不能以此善不善法令施主得.以是義故無因無果.若如是說無因無果.當知是人能斷善根.復作是念無有施物.何以故.施物無記.若是無記云何而得善果報耶.無善惡果即是無記.財若無記當知即無善惡果報.是故無施無因無果.若如是說無因無果.當知是人能斷善根.復作是念.施者即意.若是意者無見無對非是色法.若非是色云何可施.是故無施無因無果.若如是說無因無果.當知是人能斷善根.復作是念.施主若爲佛像天像命過父母.而行施者即無受者.若無受者應無果報.若無果報是爲無因.若無因者是爲無果.若如是說無因無果.當知是人能斷善根.復作是念.無父無母.若言父母是衆生因生衆生者.理應常生無有斷絕.何以故.因常有故.然不常生.是故當知無有父母.復作是念.無父無母.何以故.若衆生身因父母有.一人應具男女二根.然無具者.當知衆生非因父母.復作是念.非因父母而生衆生.何以故.眼見衆生不似父母.謂身色心威儀進止.是故父母非衆生因.復作是念.一切世間有四種無.一者未生名無.如泥團時未有瓶用.二者滅已名無.如瓶壞已是名爲無.三者各異互無.如牛中無馬馬中無牛.四者畢竟名無.如兎角龜毛.衆生父母亦復如是.同此四無.若言父母衆生因者.父母死時子不必死.是故父母非衆生因.復作是念.若言父母衆生因者.應因父母常生衆生.然而復有化生濕生.是故當知非因父母生衆生也.復作是念.自有衆生非因父母而得生長.譬如孔雀聞雷震聲而便得娠.又如青雀飲雄雀淚而便得娠.如命命鳥見雄者舞即便得娠.作是念時.如其不遇善知識者.當知是人能斷善根.復作是念.一切世間無善惡果.何以故.有諸衆生具十善法.樂於惠施勤修功德.是

墮上同無多字〇道下同無中字〇於人天之同作人天二字

壞同作攘

愍同作憫下同

云上同無如其有邊四字

人亦復疾病集身中年夭喪.財物損失多諸憂苦.有行十惡慳貪嫉妬懶惰懈怠不修諸善.身安無病終保年壽.多饒財寶無諸愁苦.是故當知無善惡果.復作是念.我亦曾聞諸聖人說.有人修善命終多墮三惡道中.有人行惡命終生於人天之中.是故當知無善惡果.復作是念.一切聖人有二種說.或說殺生得善果報.或說殺生得惡果報.是故當知聖說不定.聖若不定我云何定.是故當知無善惡果.復作是念.一切世間無有聖人.何以故.若言聖人應得正道.一切衆生具煩惱時修正道者.當知是人正道煩惱一時俱有.若一時有當知正道不能破結.若無煩惱而修道者.如是正道爲何所作.是故具煩惱者道不能壞.不具煩惱道則無用.是故當知一切世間無有聖人.復作是念.無明緣行乃至生緣老死.是十二因緣一切衆生等共有之.八聖道者其性平等亦應如是.一人得時一切應得.一人修時應一切苦滅.何以故.煩惱等故.而今不得.是故當知無有正道.復作是念.聖人皆有同凡夫法.所謂飮食行住坐臥睡眠喜笑飢渴寒熱憂愁恐怖.若同凡夫如是事者.當知聖人不得聖道.若得聖道應當永斷如是等事.如是等事如其不斷當知無道.復作是念.聖人有身受五欲樂亦復罵辱.撾打於人嫉妬憍慢.受於苦樂作善惡業.是因緣故知無聖人.若有道者應斷是事.是事不斷當知無道.復作是念.多憐愍者名爲聖人.何因緣故名爲聖人.道因緣故名爲聖人.若道性憐愍.便應愍念一切衆生.不待修已然後方得.如其無愍何故聖人因得聖道能憐愍耶.是故當知世無聖道.復作是念.一切四大.不從因生.衆生等有是四大性.不觀衆生是邊應到.彼不應到.若有聖道性應如是.然今不爾.是故當知世無聖人.復作是念.若諸聖人有一涅槃.當知是則無有聖人.何以故.不可得故.常住之法理不可得不可取捨.若諸聖人涅槃多者是則無常.何以故.可數法故.涅槃若一.一人得時一切應得.涅槃若多是則有邊.如其有邊云何名常.若有說言涅槃體一解脫是多.如蓋是一牙舌是多.是義不然.何以故.一一所得非一切得.亦有邊故是應無常.若無常者云何得名爲涅槃耶.涅槃若無誰爲聖人.是故當知無有聖人.復作是念.聖人之道非因緣得.若聖人道非因緣得.何故一切不作聖人.若一切人非聖人者.當知是則無有聖人及以聖道.復作是念.聖說正見有二因緣.一者從他聞法.二者內自思惟.是二因緣若從緣生.所從生者復從緣生.如是展轉有無窮過.若是二事不從緣生.一切衆生何故不得.作是觀

亦上三本俱無
是人二字〇竟
同作定

時能斷善根。善男子。若有衆生。深見如是無因無果。是人能斷信等五根。善男子。斷善根者非是下劣愚鈍之人。亦非天中及三惡道。破僧亦爾。迦葉菩薩白佛言。世尊。如是之人何時當能還生善根。佛言。善男子。是人二時還生善根。初入地獄出地獄時。善男子。善有三種。過去現在未來。若過去者其性自滅。因雖滅盡果報未熟。是故不名斷過去果。斷三世因故名爲斷。迦葉菩薩白佛言。世尊。若斷三世因名斷善根。斷善根人即有佛性。如是佛性爲是過去爲是現在爲是未來爲遍三世。若過去者云何名常。佛性亦常。是故當知非過去也。若未來者云何名常。何故佛說一切衆生必定當得。若必定得云何言斷。若現在者復云何常。何故復言必定可見。如來亦說佛性有六。一常二眞三實四善五淨六可見。若斷善根有佛性者。則不得名斷善根也。若無佛性云何復言一切衆生悉有佛性。若言佛性亦有亦斷。云何如來復說是常。佛言。善男子。如來世尊爲衆生故有四種答。一者定答。二者分別答。三者隨問答。四者置答。善男子。云何定答。若問惡業得善果耶不善果乎。是應定答得不善果。善亦如是。若問如來一切智不。是應定答是一切智。若問佛法是清淨不。是應定答必定清淨。若問如來弟子如法住不。是應定答有如法住。是名定答。云何分別答。如我所說四眞諦法。云何爲四。苦集滅道。何謂苦諦。有八苦故名曰苦諦。云何集諦。五陰因故名爲集諦。云何滅諦。貪欲瞋癡畢竟盡故名爲滅諦。云何道諦。三十七助道法名爲道諦。是名分別答。云何隨問答。如我所說一切法無常。復有問言如來世尊爲何法故說於無常。答言如來爲有爲法故說無常。無我亦爾。如我所說一切法燒。他又問言如來世尊爲何法故說一切燒。答言如來爲貪瞋癡說一切燒。善男子。如來十力四無所畏大慈大悲三念處。首楞嚴等八萬億諸三昧門。三十二相八十種好。五智印等三萬五千諸三昧門。金剛定等四千二百諸三昧門。方便三昧無量無邊。如是等法是佛佛性。如是佛性則有七事。一常二我三樂四淨五眞六實七善。是名分別答。善男子。後身菩薩佛性有六。一常二淨三眞四實五善六少見。是名分別答。如汝先問斷善根人有佛性者。是人亦有如來佛性。亦有後身佛性。是二佛性障未來故得名爲無。畢竟得故得名爲有。是名分別答。如來佛性非過去非現在非未來。後身佛性現在未來少可見故得名現在。未具見故名爲未來。如來未得阿耨多羅三藐三菩提時。佛性因故亦是過去現在未來。果則不爾。有是三世有非

來明作老

三世。後身菩薩佛性因故亦是過去現在未來。果亦如是。是名分別答。九住菩薩佛性六種。一常二善三眞四實五淨六可見。佛性因故亦是過去現在未來。果亦如是。是名分別答。八住菩薩下至六住佛性五事。一眞二實三淨四善五可見。佛性因故亦是過去現在未來。果亦如是。是名分別答。五住菩薩下至初住佛性五事。一眞二實三淨四可見五善不善。善男子。是五種佛性六種佛性七種佛性。斷善根人必當得故。故得言有。是名分別答。若有說言。斷善根者定有佛性定無佛性。是名置答。迦葉菩薩言。世尊。我聞不答乃名置答。如來今者何因緣答而名置答。善男子。我亦不說置而不答乃說置答。善男子。如是置答復有二種。一者遮止。二者莫著。以是義故得名置答。迦葉菩薩白佛言。世尊。如佛所說。云何名因亦是過去現在未來。果亦過去現在未來。非是過去現在未來。佛言。善男子。五陰二種。一者因二者果。是因五陰是過去現在未來。是果五陰亦是過去現在未來。亦非過去現在未來。善男子。一切無明煩惱等結悉是佛性。何以故。佛性因故。從無明行及諸煩惱得善五陰。是名佛性。從善五陰乃至獲得阿耨多羅三藐三菩提。是故我於經中先說。衆生佛性如雜血乳。血者卽是無明行等一切煩惱。乳者卽是善五陰也。是故我說。從諸煩惱及善五陰得阿耨多羅三藐三菩提。如衆生身皆從精血而得成就。佛性亦爾。須陀洹人斯陀含人。斷少煩惱佛性如乳。阿那含人佛性如酪。阿羅漢人猶如生酥。從辟支佛至十住菩薩猶如熟酥。如來佛性猶如醍醐。善男子。現在煩惱爲作障故。令諸衆生不得覩見。如香山中有忍辱草。非一切牛皆能得食。佛性亦爾。是名分別答。迦葉菩薩白佛言。世尊。五種六種七種佛性。若未來有者云何說言斷善根人有佛性耶。佛言。善男子。如諸衆生有過去業。因是業故衆生現在得受果報。有未來業以未生故終不生果。有現在煩惱。若無煩惱一切衆生應當了了現見佛性。是故斷善根人以現在世煩惱因緣能斷善根。未來佛性力因緣故還生善根。迦葉言。世尊。未來云何能生善根。善男子。猶如燈日雖復未生亦能破闇。未來之生能生衆生。未來佛性亦復如是。是名分別答。迦葉菩薩白佛言。世尊。若言五陰是佛性者。云何說言衆生佛性非內非外。佛言。善男子。何因緣故如是失意。我先不說衆生佛性是中道耶。迦葉言。世尊。我實不失意。直以衆生於此中道不能解故。故發斯問。善男子。衆生不解卽是中道。或時有解或有不解。善男子。我爲衆生得開解故。說言佛性非內

非外。何以故。凡夫衆生或言佛性住五陰中如器中有果。或言離陰而有猶如虛空。是故如來說於中道。衆生佛性非內六入非外六入。內外合故名爲中道。是故如來宣說佛性卽是中道。非內非外故名中道。是名分別答。復次善男子。云何名爲非內非外。善男子。或言佛性卽是外道。何以故。菩薩摩訶薩於無量劫在外道中斷諸煩惱。調伏其心教化衆生。然後乃得阿耨多羅三藐三菩提。是以佛性卽是外道。或言佛性卽是內道。何以故。菩薩雖於無量劫中修習外道。若離內道則不能得阿耨多羅三藐三菩提。是以佛性卽是內道。是故如來遮此二邊。說言佛性非內非外亦名內外是名中道。是名分別答。復次善男子。或言佛性卽是如來金剛之身三十二相八十種好。何以故。不虛誑故。或言佛性卽是十力四無所畏大慈大悲及三念處首楞嚴等一切三昧。何以故。因是三昧生金剛身三十二相八十種好故。是故如來遮此二邊。說言佛性非內非外亦名內外是名中道。是名分別答。復次善男子。或有說言。佛性卽是內善思惟。何以故。離善思惟則不能得阿耨多羅三藐三菩提故。是故佛性卽是內善思惟。或有說言。佛性卽是從他聞法。何以故。從他聞法則能內善思惟。若不聞法則無思惟。是以佛性卽是從他聞法。是故如來遮此二邊。說言佛性非內非外亦名內外是名中道。復次善男子。復有說言。佛性是外謂檀波羅蜜。從檀波羅蜜得阿耨多羅三藐三菩提。是以說言檀波羅蜜卽是佛性。或有說言。佛性是內謂五波羅蜜。何以故。離是五事當知則無佛性因果。是以說言五波羅蜜卽是佛性。是故如來遮此二邊。說言佛性非內非外亦內亦外是名中道。復次善男子。或有說言。佛性在內譬如力士額上寶珠。何以故。常樂我淨如寶珠故。是以說言佛性在內。或有說言。佛性在外如貧寶藏。何以故。方便見故。佛性亦爾在衆生外。以方便故而得見之。是故如來遮此二邊。說言佛性非內非外亦內亦外是名中道。善男子。衆生佛性非有非無。所以者何。佛性雖有非如虛空。何以故。世間虛空雖以無量善巧方便不可得見。佛性可見。是故雖有非如虛空。佛性雖無不同兎角。何以故。龜毛兎角雖以無量善巧方便不可得生。佛性可生。是故雖無不同兎角。是故佛性非有非無亦有亦無。云何名有。一切悉有。是諸衆生不斷不滅猶如燈焰。乃至得阿耨多羅三藐三菩提。是故名有。云何名無。一切衆生現在未有一切佛法常樂我淨。是故名無。有無合故卽是中道。是故佛說衆生佛性非有非無。善男子。若有人問是

習宋作集
名上三本俱無是字
復上同無是名分別答五字

牙明作芽
性下三本俱無者字
冷同作下
言同作名
故下同無善男子三字○從同作是
芽宋元俱作牙

種子中有果無果耶.應定答言.亦有亦無.何以故.離子之外不能生果.是故名有.子未出牙.是故名無.以是義故亦有亦無.所以者何.時節有異其體是一.衆生佛性亦復如是.若言衆生中別有佛性者.是義不然.何以故.衆生卽佛性.佛性卽衆生.直以時異有淨不淨.善男子.若有問言.是子能生果不.是果能生子不.應定答言亦生不生.世尊.如世人說乳中有酪.是義云何.善男子.若有說言乳中有酪是名執著.若言無酪是名虛妄.離是二事應定說言亦有亦無.何故名有.從乳生酪因卽是乳果卽是酪.是名爲有.云何名無.色味各異服用不同.熱病服乳冷病服酪.乳生冷病酪生熱病.善男子.若言乳中有酪性者.乳卽是酪酪卽是乳.其性是一何因緣故.乳在先出酪不先生.若有因緣一切世人何故不說若無因緣何故酪不先出.若酪不先出誰作次第.乳酪生酥熟酥醍醐.是故知酪先無今有.若先無今有是無常法.善男子.若有說言.乳有酪性能生於酪.水無酪性故不生酪.是義不然.何以故.水草亦有乳酪之性.所以者何.因於水草則出乳酪.若言乳中定有酪性.水草無者是名虛妄.何以故.心不等故故言虛妄.善男子.若言乳中定有酪者.酪中亦應定有乳性.何因緣故乳中出酪酪不出乳.若無因緣當知是酪本無今有.是故智者應言乳中非有酪性非無酪性.善男子.是故如來於是經中說如是言.一切衆生定有佛性.是名爲著.若無佛性是名虛妄.智者應說衆生佛性亦有亦無.善男子.四事和合生於眼識.何等爲四.眼色明欲.是眼識性非眼非色非明非欲.從和合故便得出生.如是眼識本無今有.已有還無.是故當知無有本性.乳中酪性亦復如是.若有說言.水無酪性故不出酪.是故乳中定有酪性.是義不然.何以故.善男子.一切諸法異因異果.亦非一因生一切果.非一切果從一因生.善男子.如從四事生於眼識.不可復說從此四事應生耳識.善男子.離於方便乳中得酪酪出生酥.不得如是要須方便.善男子.智者不可見離方便從乳得酪謂得生酥亦應如是離方便得.善男子.是故我於是經中說.因生故法有.因滅故法無.善男子.如鹽性鹹能令非鹹使鹹.若非鹹物先有鹹性.世人何故更求鹽耶.若先無者當知先無今有.以餘緣故而得鹹也.若言不切不鹹之物皆有鹹性微故不知.由此微性鹽能令鹹.若本無性雖復有鹽不能令鹹.譬如種子自有四大緣外四大而得增長芽莖枝葉.鹽性亦爾者是義不然.何以故.不鹹之物先有鹹性者.鹽亦應有微不鹹性.是鹽若有如是二性.何因緣故.離

果下三本俱無者字○增上同有而字
有同作復
巴同作把
乎同作耶
伎同作技

不鹹物不可獨用。是故知鹽本無二性。如鹽一切不鹹之物亦復如是。若言外四大種力能增長內四大者。是義不然。何以故。次第說故。不從方便乳中得酪生酥乃至一切諸法皆不如是非方便得。四大亦復如是。若說從外四大增內四大。不見從內四大增外四大。如尸利沙果先無形質見昴星時果則出生足長五寸。如是果者實不因於外四大增。善男子。如我所說十二部經。或隨自意說。或隨他意說。或隨自他意說。云何名爲隨自意說。如五百比丘問舍利弗。大德。佛說身因何者是耶。舍利弗言。諸大德。汝等亦各得正解脫。自應識之。何緣方作如是問耶。有比丘言。大德。我未獲得正解脫時。意謂無明即是身因。作是觀時得阿羅漢果。復有說言。大德。我未獲得正解脫時。謂愛無明即是身因。作是觀時得阿羅漢果。或有說言。行識名色六入觸受愛取有生飲食五欲即是身因。爾時五百比丘各各自說已所解已。共往佛所稽首佛足右遶三匝。禮拜畢已却坐一面。各以如上己所解義向佛說之。舍利弗白佛言。世尊。如是諸人誰是正說誰不正說。佛告舍利弗。善哉善哉。一一比丘無非正說。舍利弗言。世尊。佛意云何。佛言。舍利弗。我爲欲界衆生說言。父母即是身因。如是等經名隨自意說。云何名爲隨他意說。如巴吒羅長者。來至我所作如是言。瞿曇。汝知幻不。若知幻者即大幻人。若不知者非一切智。我言長者。知幻之人名幻人耶。長者言。善哉善哉。知幻之人即是幻人。佛言長者。舍衞國內波斯匿王。有旃陀羅名曰氣嘘。汝知不耶。長者答言。瞿曇。我久知之。佛言。汝久知者可得即是旃陀羅不。長者言。瞿曇。我雖知是旃陀羅。然我此身非旃陀羅。佛言長者。汝得是義知旃陀羅非旃陀羅。我今何故不得知幻而非幻乎。長者。我實知幻。知幻人知幻果報知幻伎術。我知殺。知殺人知殺果報知殺解脫。乃至知邪見。知邪見人知邪見果報知邪見解脫。長者。若說非幻之人名爲幻人。非邪見人說邪見人得無量罪。長者言。瞿曇。如汝所說我得大罪。我今所有悉以相上。幸莫令彼波斯匿王知我此事。佛言長者。是罪因緣不必失財。乃當因是墮三惡道。是時長者聞惡道名心生恐怖白佛言聖人。我今失得獲得大罪。聖人今者是一切智應當了知獲得解脫。我當云何得脫地獄餓鬼畜生。爾時我爲說四眞諦。長者聞已得須陀洹果。心生慚愧向佛懺悔。我本愚癡佛非幻人而言是幻。我從今日歸依三寶。佛言。善哉善哉。長者。是名隨他意說。云何名爲隨自他說。如我所說。如一切世間智者說有我亦說有。智者說無我亦

他下同有意字

觀三本俱作知

鹿下同有子字

如同作寧

說無世間智人說五欲樂有無常苦無我可斷。我亦說有。世間智人說五欲樂有常我淨無有是處。我亦如是說無是處。是名隨自他說。善男子。如我所說。十住菩薩少見佛性。是名隨他意說。何故名少見。十住菩薩得首楞嚴等三昧三千法門。是故了了自知當得阿耨多羅三藐三菩提。不見一切衆生定得阿耨多羅三藐三菩提。是故我說。十住菩薩少分見佛性。善男子。我常宣說一切衆生悉有佛性。是名隨自意說。一切衆生不斷不滅。乃至得阿耨多羅三藐三菩提。是名隨自意說。一切衆生悉有佛性。煩惱覆故不能得見。我說如是汝說亦爾。是名隨自他意說。善男子。如來或時爲一法故說無量法。如經中說。一切梵行因善知識。一切梵行因雖無量。說善知識則已攝盡。如我所說。一切惡行邪見爲因。一切惡行因雖無量。若說邪見則已攝盡。或說阿耨多羅三藐三菩提信心爲因。是菩提因雖復無量。若說信心則已攝盡。善男子。如來雖說無量諸法以爲佛性。然不離於陰入界也。善男子。如來說法爲衆生故。有七種語。一者因語。二者果語。三者因果語。四者喩語。五者不應說語。六者世流布語。七者如意語。云何名因語。現在因中說未來果。如我所說。善男子。汝見衆生樂著乃至樂行邪見。當觀是人卽地獄人。善男子。若有衆生不樂殺生乃至邪見。當觀是人卽是天人。是名因語。云何果語。現在果中說過去因。如經中說。善男子。如汝所見貧窮衆生顏貌醜陋不得自在。當知是人定有破戒妬心瞋心無慙愧心。若見衆生多財巨富諸根完具威德自在。當知是人定有戒施精勤慙愧無有妬瞋。是名果語。云何因果語。如經中說。善男子。衆生現在六入觸因是名過去業果。如來亦說名之爲業。是業因緣得未來果。是名因果語。云何喩語。如說師子王者卽喩我身。大象王大龍王。波利質多羅樹。七寶聚大海須彌山大地大雨。船師導師調御丈夫力士牛王。婆羅門沙門大城多羅樹。如是喩經名爲喩語。云何不應語。我經中說。天地可合河不入海。如爲波斯匿王說四方山來。如爲鹿母優婆夷說。若婆羅樹能受八戒。則得受於人天之樂。如說十住菩薩有退轉心。不說如來有二種語。寧說須陀洹人墮三惡道。不說十住有退轉心。是名不應語。云何世流布語。如佛所說。男女大小去來坐臥車乘房舍瓶衣衆生常樂我淨軍林城邑幻化合散。是名世流布語。云何如意語。如我呵責毀禁之人。令彼自責護持禁戒。如我讃歎須陀洹人。令諸凡夫生於善心。讃歎菩薩爲令衆生發菩提心。說三惡道所有苦惱。爲令修習諸

智下同無印字

常上三本俱無言字下同

鮨宋作錯次同

善法故。說一切燒唯爲一切有爲法故。無我亦爾。說諸衆生悉有佛性。爲令一切不放逸故。是名如意語。善男子如來復有隨自意語。如來佛性則有二種。一者有二者無。有者所謂三十二相八十種好。十力四無所畏三念處大慈大悲首楞嚴等無量三昧。金剛等無量三昧。方便等無量三昧。五智印等無量三昧。是名爲有。無者所謂如來過去諸善不善無記。業因果報煩惱五陰十二因緣。是名爲無。善男子。如有無善不善。有漏無漏。世間非世間。聖非聖。有爲無爲。實不實。寂靜非寂靜。諍非諍。界非界。煩惱非煩惱。取非取。受記非受記。有非有。三世非三世。時非時。常無常我無我樂無樂淨無淨色受想行識非色受想行識。內入非內入。外入非外入。十二因緣非十二因緣。是名如來佛性有無。乃至一闡提佛性有無亦復如是。善男子。我雖說言一切衆生悉有佛性。衆生不解佛如是等隨自意語。善男子。如是語者後身菩薩尚不能解。況於二乘其餘菩薩。善男子。我往一時在耆闍崛山。與彌勒菩薩共論世諦。舍利弗等五百聲聞於是事中都不識知。何況出世第一義諦。善男子。或有佛性。一闡提有善根人無。或有佛性。善根人有一闡提無。或有佛性二人俱有。或有佛性二人俱無。善男子。我諸弟子若解如是四句義者。不應難言一闡提人定有佛性定無佛性。若言衆生悉有佛性。是名如來隨自意語。如來如是隨自意語。衆生云何一向作解。善男子。如恒河中有七衆生。一者常沒。二者暫出還沒。三者出已則住。四者出已遍觀四方。五者遍觀已行。六者行已復住。七者水陸俱行。言常沒者。所謂大魚受大惡業身重處深。是故常沒。暫出還沒者。如是大魚受惡業故。身重處淺暫見光明。因光故暫出。重故還沒。出已即住者。謂坻彌魚身處淺水。樂見光明故出已住。遍觀四方者。所謂鮨魚爲求食故遍觀四方。是故觀方。觀已行者。謂是鮨魚遙見餘物。謂是可食。疾行趣之故觀已行。行已復住者。是魚趣已既得可食即便停住。故行已復住。水陸俱行者。即是龜也。善男子。如是微妙大涅槃河。其中亦有七種衆生。從初常沒乃至第七或入或出。言常沒者。有人聞是大涅槃經。如來常住無有變易常樂我淨。終不畢竟入於涅槃。一切衆生悉有佛性。一闡提人謗方等經。作五逆罪犯四重禁。必當得成菩提之道。須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢辟支佛等。必當得成阿耨多羅三藐三菩提。聞是語已生不信心。即作是念。作是念已便作是言。是涅槃典即外道書。非是佛經。是人爾時遠離善友不聞正法。雖時得聞不能思惟。雖復思

思下三本俱有惟字○惡上同無所言二字○無上同無言字○顚宋元俱作傎○汙上增上惱下受上並三本俱無言字
熱三本俱作惱

縱廣宋作廣縱

遂三本俱作逆
雜同作離○暫宋作蹔

惟不思惟善。不思善故如惡法住。惡法住者則有六種。一者惡。二者無善。三者汙法。四者增有。五者惱熱。六受惡果。是名爲沒。何故名沒。無善心故。常行惡故。不修對治故。是名爲沒。所言惡者。聖人呵責故。心生怖畏故。善人遠離故。不益衆生故。是名爲惡。言無善者。能生無量惡果報故。常爲無明所纏繞故。樂與惡人爲等侶故。無有修善諸方便故。其心顚倒常錯謬故。是名無善。言汙法者。常汙身口故。汙淨衆生故。增不善業故。遠離善法故。是名汙法。言增有者。如上三人所行之法。能增地獄畜生餓鬼。不能修習解脫之法。身口意業不厭諸有。是名增有。言惱熱者。是人具行如上四事。能令身心二事煩熱遠離寂靜。則名爲熱。受地獄報故名爲熱。燒諸衆生故名爲熱。燒諸善法故名爲熱。善男子。信心淸涼是人不具是故名熱。言受惡果者是人具足行上五事。死墮地獄餓鬼畜生。善男子。有三惡事復名惡果。一者煩惱惡。二者業惡。三者報惡。是名受惡果報。善男子。是人具足如上六事。能斷善根作五逆罪。能犯四重能謗三寶。用衆僧物能作種種非法之事。是因緣故沈沒在於阿鼻地獄。所受身形縱廣八萬四千由延。是人身口心業重故不能得出。何以故。其心不能生善法故。雖有無量諸佛出世。不聞不見故名常沒。如恒河中大魚。善男子。我雖復說一闡提等名爲常沒。復有常沒非一闡提。何者是耶。如人爲有修施戒善。是名常沒。善男子。有善事四獲得惡果。何等爲四。一者爲勝他故讀誦經典。二者爲利養故受持禁戒。三者爲他屬故而行布施。四者爲於非想非非想處故繫念思惟。是四善事得惡果報。若人修集如是四事。是名沒已還出出已還沒。何故名沒。樂三有故。何故名出。以見明故。明者卽是聞戒施定。何故還沒。增長邪見生憍慢故。是故我於經中說偈。

若有衆生樂諸有　爲有造作善惡業　是人遂失涅槃道　是名暫出還復沒　行於黑闇生死海
雖得解脫雜煩惱　是人還受惡果報　是名暫出還復沒

善男子。如彼大魚因見光故暫得出水其身重故還復沈沒。如上二人亦復如是。善男子。或復有人樂著三有。是名爲沒。得聞如是大涅槃經生於信心。是名爲出。何因緣故名之爲出。聞是經已遠離惡法修習善法。是名爲出。是人雖信亦不具足。何因緣故信不具足。是人雖信大般涅槃常樂我淨。言如來身無常無我無樂無淨。如來則

唯三本倶作雖下同

上明作尙

有二種涅槃。一者有爲。二者無爲。有爲涅槃無常樂我淨。無爲涅槃有常樂我淨。雖信佛性是衆生有。不必一切皆悉有之。是故名爲信不具足。善男子。信有二種。一者信。二者求。如是之人雖復有信不能推求。是故名爲信不具足。信復有二。一從聞生。二從思生。是人信心從聞而生不從思生。是故名爲信不具足。復有二種。一信有道。二信得者。是人信心唯信有道。都不信有得道之人。是故名爲信不具足。復有二種。一者信正。二者信邪。言有因果有佛法僧。是名信正。言無因果三寶性異。信諸邪語富蘭那等。是名信邪。是人雖信佛法僧寶。不信三寶同一性相。雖信因果不信得者。是故名爲信不具足。是人成就不具足信。所受禁戒亦不具足。何因緣故名不具足。因不具故所得禁戒亦不具足。復何因緣名不具足。戒有二種。一威儀戒。二從戒戒。是人唯具威儀等戒不具從戒戒。是故名爲戒不具足。復有二種。一者作戒。二者無作戒。是人唯具作戒不具無作戒。是故名爲戒不具足。復有二種。一從身口得於正命。二從身口不得正命。是人雖從身口不得正命。是故名爲戒不具足。復有二種。一者求戒。二者捨戒。是人唯具求有之戒不得捨戒。是故名爲戒不具足。復有二種。一者隨有。二者隨道。是人唯具隨有之戒不具隨道。是故名爲戒不具足。復有二種。一者善戒。二者惡戒。身口意善是名善戒。牛戒狗戒是名惡戒。是人深信是二種戒倶有善果。是故名爲戒不具足。是人不具信戒二事。所修多聞亦不具足。云何名爲聞不具足。如來所說十二部經。唯信六部不信六部。是故名爲聞不具足。雖復受持是六部經不能讀誦。爲他解說無所利益。是故名爲聞不具足。又復受是六部經已。爲論議故爲勝他故。爲利養故爲諸有故。持讀誦說。是故名爲聞不具足。善男子。我於經中說聞具足。云何具足。者有比丘身口意善。先能供養和上諸師有德之人。是諸師等於是人所生愛念心。以是因緣教授經法。是人至心受持諷習。持諷習已獲得智慧。得智慧已能善思惟如法而住。善思惟已則得正義。得正義已身心寂靜。身心寂已則生喜心。喜心因緣心則得定。因得定故得正知見。正知見已於諸有中心生厭悔。悔諸有故能得解脫。是人無有如是等事。是故名爲聞不具足。是人不具如是三事。施亦不具。施有二種。一者財施。二者法施。是人雖復行於財施爲求有故。雖行法施亦不具足。何以故。祕不盡說畏他勝故。是故名爲施不具足。財法二施各有二種。一者聖。二者非聖。聖者施已不求果報。非聖施已求於果報。聖者法施

性下三本俱無佛性二字

有上三本俱無則字○既宋作卽

惋三本俱作惒○低同作坻下同

五下同無百字○波下同無吒字

師下同無夾註○婆同作婆○刀明作刁

爲增長法.非聖法施爲增諸有.如是之人爲增財故而行財施.爲增有故而行法施.是故名爲施不具足.復次是人受六部經.見受法者而供給之.不受法者則不供給.是故名爲施不具足.是人不具如上四事.所修智慧亦不具足.智慧之性性能分別.是人不能分別如來是常無常.如來於此涅槃經中.說言如來即是解脫.解脫即是如來.如來即是涅槃.涅槃即是解脫.於是義中不能分別.梵行即是如來.如來即是慈悲喜捨.慈悲喜捨即是解脫.解脫即是涅槃.涅槃即是慈悲喜捨.於是義中不能分別.是故名爲智不具足.復次不能分別佛性.|佛性即是如來.如來即是一切不共之法.不共之法即是解脫.解脫即是涅槃.涅槃即是不共之法.於是義中不能分別.是故名爲智不具足.復次不能分別四諦苦集滅道.不能分別四眞諦故不知聖行.不知聖行故不知如來.不知如來故不知解脫.不知解脫故不知涅槃.是故名爲智不具足.是人不具如是五事|則有二種.一增善法.二增惡法.云何名爲增長惡法.是人不見已不具足.自言具足而生著心.於同行中自謂爲勝.是故親近同己惡友.|旣親近已.復得更聞不具足法.聞已心喜其心染著.起於憍慢多行放逸.因放逸故親近在家.亦樂聞說在家之事.|遠離清淨出家之法.以是因緣增長惡法.增惡法故身口意等起不淨業.三業不淨故增長地獄畜生餓鬼.是名暫出還沒.暫出還沒者.我佛法中其誰是耶.謂提婆達多.瞿伽離比丘.|惋手比丘.善星比丘.|低舍比丘.滿宿比丘.慈地比丘尼.曠野比丘尼.方比丘尼.慢比丘尼.淨潔長者.求有優婆塞.舍勒釋種.象長者.名稱優婆夷.光明優婆夷.難陀優婆夷.軍優婆夷.鈴優婆夷.如是等人名爲暫出還沒.譬如大魚見明故出身重故沒.第二之人深自知見行不具足.不具足故求近善友.近善友故樂諮未聞.聞已樂受.受已樂善思惟.善思惟已能如法住.如法住故增長善法.增善法故終不復沒.是名爲住.我佛法中其誰是耶.謂舍利弗.大目揵連.阿若憍陳如等五比丘.耶舍等五|百比丘.阿㝹樓陀童子迦葉摩訶迦葉十力迦葉.瘦瞿曇彌比丘尼.波|吒羅花比丘尼.勝比丘尼.實義比丘尼.意比丘尼.跋陀比丘尼.淨比丘尼.不退轉比丘尼.頻婆娑羅王.郁伽長者.須達多長者.釋摩男.貧須達多.鼠狼長者子.名稱長者.具足長者.|師(有本作卽)子將軍.優|波離長者.刀長者.無畏優婆夷.善住優婆夷.愛法優婆夷.勇健優婆夷.天得優婆夷.善生優婆夷.具身優婆夷.牛得優婆夷.曠野優婆夷.摩訶斯那優婆夷.如是等比丘比丘尼優婆塞優

婆夷。得名爲住。云何爲住。常樂觀見善光明故。以是因緣若佛出世若不出世。如是等人終不造惡。是名爲住。如佤彌魚樂見光明不沈不沒。如是等衆亦復如是。是故我於經中說偈

若人善能分別義　至心求於沙門果　若能呵責一切有　是人名爲如法住　若能供養無量佛
則能無量世修道　若受世樂不放逸　是人名爲如法住　親近善友聽正法　內善思惟如法住
樂見光明修習道　獲得解脫安隱住

大般涅槃經卷第三十二

# 大般涅槃經卷第三十三

〔麗宮〕〔宋合〕〔元合〕〔明白〕

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

## 迦葉菩薩品第二十四之三

品目宋元俱無第二十四四字

六下三本俱無行字

攢同作鑽

善男子。智不具足凡有五事。是人知已求近善友。如是善友當觀是人貪欲瞋恚愚癡思覺何者偏多。若知是人貪欲多者。即應爲說不淨觀法。瞋恚多者爲說慈悲。思覺多者教令數息。著我多者當爲分析十八界等。是人聞已至心受持。心受持已如法修行。如法行已次第獲得四念處觀身受心法。得是觀已次第復觀十二因緣。如是觀已次得煖法。迦葉菩薩白佛言。世尊。一切衆生悉有煖法。何以故。如佛所說。三法和合名爲衆生。一壽二煖三識。若從是義一切衆生應先有煖。云何如來說言煖法因善友生。佛言。善男子。如汝所問有煖法者。一切衆生至一闡提皆悉有之。如我今者所說煖法。要因方便然後乃得。本無今有。以是義故非諸衆生一切先有。是故汝今不應難言一切衆生皆有煖法。善男子。如是煖法是色界法非欲界有。若言一切衆生有者。欲界衆生亦皆應有。欲界無故當知一切不必悉有。善男子。色界雖有非一切有。何以故。我弟子有外道則無。以是義故一切衆生不必悉有。善男子。一切外道唯觀六行。我諸弟子具足十六行。是十六行一切衆生不必悉有。迦葉菩薩白佛言。世尊。所言煖法云何名煖。爲自性煖爲他故煖。佛言。善男子。如是煖法自性是煖非他故煖。迦葉菩薩言。世尊。如來先說馬師滿宿無有煖法。何以故。於三寶所無信心故。是故無煖。當知信心即是煖法。善男子。信非煖法。何以故。因於信心後得煖故。善男子。夫煖法者即是智慧。何以故。觀四諦故。是故名之爲十六行。行即是智。善男子。如汝所問。何因緣故名爲煖者。善男子。夫煖法者即是八聖道之火相故名爲煖。善男子。譬如攢火先有煖氣次有火生後則煙出。是無漏道亦復如是。煖者即是十六行也。火者即是須陀洹果。煙者即是修道斷結。迦葉菩薩復白

縱廣宋作廣縱

䱜同作錯下同

俱三本俱作但

方下同有者字

顚宋元俱作傎

佛言世尊。如是煖法亦是有法亦是有爲。是法報得色界五陰。是故名有。是因緣故復名有爲。若是有爲云何能爲無漏道相。佛言。善男子。如是如是如汝所說。善男子。如是煖法雖是有爲有法。還能破壞有爲有法。是故能爲無漏道相。善男子。如人乘馬亦愛亦策。煖心亦爾。愛故受生。厭故觀行。是故雖復有法有爲。而能與彼正道作相得煖法人七十三種。欲界十種。是人具足一切煩惱。從斷一分至于九分。如欲界初禪。乃至無所有處亦復如是。是名七十三種。如是等人得煖法已。則不復能斷於善根作五逆罪犯四重禁。是人二種。一遇善友。二遇惡友。遇惡友者暫出還沒。遇善友者遍觀四方。觀四方者卽是頂法。是法雖復性是五陰亦緣四諦。是故得名遍觀四方。得頂法已次得忍法。是忍亦爾性亦五陰亦緣四諦。是人次得世第一法。是法雖復性是五陰亦緣四諦。是人次第得苦法忍。忍性是慧緣於一諦。如是忍法緣一諦已。乃至見斷煩惱得須陀洹果。是名第四遍觀四方。四方者卽是四諦。迦葉菩薩白佛言。世尊。如佛先說。須陀洹人所斷煩惱。猶如縱廣四十里水。其餘在者如一毛渧。此中云何說斷三結名須陀洹。一者我見。二者非因見因。三者疑網。世尊。何因緣故名須陀洹遍觀四方。復何因緣名須陀洹。復何因緣說須陀洹喩以䱜魚。佛言。善男子。須陀洹人雖復能斷無量煩惱。此三重故亦攝一切須陀洹人所斷結故。善男子。譬如大王出遊巡時雖有四兵世人俱言王來王去。何以故。世間重故。是三煩惱亦復如是。何因緣故名之爲重。一切衆生常所起故。微難識故。故名爲重。如是三結難可斷故。能爲一切煩惱因故。是三對治之怨敵故。謂戒定慧。善男子。有諸衆生聞須陀洹能斷如是無量煩惱。則生退心便作是言。衆生云何能斷如是無量煩惱。是故如來方便說三。如汝所問。何因緣故須陀洹人喩觀四方。善男子。須陀洹人觀於四諦獲得四事。一者住堅固道。二者能遍觀察。三者能如實見。四者能壞大怨。堅固道者是須陀洹所有五根無能動者。是故名爲住堅固道。能遍觀者悉能呵責內外煩惱。如實見者卽是忍智。壞大怨者謂四顚倒。如汝所問。何因緣故名須陀洹者。善男子。須名無漏。陀洹名修習。修習無漏故名須陀洹。善男子。復有須者名流。流有二種。一者順流。二者逆流。以逆流故名須陀洹。迦葉菩薩言。世尊。若從是義何因緣故。斯陀含人阿那含人阿羅漢人不得名爲須陀洹耶。善男子。從須陀洹乃至諸佛。亦得名爲須陀洹。若斯陀含乃至諸佛無須陀洹。云何得名斯陀含乃至佛。

無上三本俱無及字

返三本俱作反下同○魚下同有者字

骨上有上並同無言字

含下同無人字

得下同有得字○卽同作則

二下同無者字

---

一切衆生名有二種一者舊二者客。凡夫之時有世名字。既得道已更爲立名名須陀洹。以先得故名須陀洹以後得故名斯陀含。是人亦名須陀洹。亦名斯陀含。乃至佛亦復如是。善男子。流有二種。一者解脫。二者涅槃。一切聖人皆有是二。亦可得名須陀洹。亦名斯陀含。乃至佛亦復如是。善男子。須陀洹者亦名菩薩。何以故。菩薩者卽是盡智|及無生智。須陀洹人亦復求索如是二智。是故當知須陀洹人得名菩薩。須陀洹人亦得名覺。何以故。正覺見道斷煩惱故。正覺因果故。正覺共道及不共道故。斯陀含乃至阿羅漢亦復如是。善男子。是須陀洹凡有二種。一者利根。二者鈍根。鈍根之人人天七|返。是鈍根人復有五種。或有六|返五四三二。利根之人現在獲得須陀洹果至阿羅漢果。善男子。如汝所問。何因緣故須陀洹人喩以|鱔|魚。善男子。|鱔魚有四事。一者骨細故輕。二者有翅故輕。三者樂見光明。四者銜物堅持。須陀洹人亦有四事。|言骨細者喩煩惱微。|言有翅者喩奢摩他毘婆舍那。樂見光明喩於見道。銜物堅持喩聞如來說無常苦無我不淨堅持不捨。猶如魔王化作佛像。首羅長者見已心驚。魔見長者其心動已。卽語長者。我先所說四眞諦者是說不眞。今當爲汝更說五諦六陰十三入十九界。長者聞已尋觀法相都無此理。是故堅持其心不動。迦葉菩薩白佛言。世尊。是須陀洹先得道故名須陀洹。以初果故名須陀洹。若先得道名須陀洹者。得苦法忍時何故不得名須陀洹。乃名爲向。若以初果名須陀洹。外道之人先斷煩惱至無所有處。修無漏道得阿那含果。何故不名爲須陀洹。善男子。以初果故名須陀洹如汝所問。外道之人先斷煩惱至無所有處。修無漏道得阿那含。何故不名須陀洹者。善男子。以初果故名須陀洹。是人爾時具足八智及十六行。迦葉言。世尊。得阿那含|人亦復如是亦得八智具十六行。何故不得名須陀洹。善男子。有漏十六行有二種。一者共二者不共。無漏十六行亦有二種。一者向果。二者得果。八智亦二。一者向果。二者得果。須陀洹人捨共十六行得不共十六行。捨向果八智|得果八智。阿那含人|卽不如是。是故初果名須陀洹。善男子。須陀洹人緣於四諦。阿那含人唯緣一諦。是故初果名須陀洹。以是因緣喩以|鱔魚。遍觀已行者卽是斯陀含繫心修道。爲斷貪欲瞋癡憍慢。如彼|鱔魚遍觀方已爲食故行。行已復住喩阿那含得食已住。是阿那含凡有二種。一者現在得阿那含進修卽得阿羅漢果。二|者貪著色界無色界中寂靜三昧。是人不受欲界身故名阿那含。是阿那含

復有五種．一者中般涅槃．二者受身般涅槃．三者行般涅槃．四者無行般涅槃．五者上流般涅槃．復有六種．五種如上．六現在般涅槃．復有七種．六種如上．七無色界般涅槃行．般涅槃復有二種．或受二身或受四身．若受二身是名利根．若受四身是名鈍根．復有二種．一者精進無自在定．二者懈怠有自在定．復有二種．一者具精進定．二者不具．是二．善男子．欲色衆生有二種業．一者作業．二受生業．中涅槃者唯有作業無受生業．是故於中而般涅槃．捨欲界身未至色界．以利根故於中涅槃．是中涅槃．阿那含人有四種心．一者非學非無學．二者學．三者無學．四者非學非無學．入於涅槃．云何復名中般涅槃．善男子．是阿那含四種心中．二是涅槃．二非涅槃．是故名爲中般涅槃．受身涅槃復有二種．一者作業．二者生業．是人捨欲界身受色界身．精勤修道盡其壽命入於涅槃．迦葉菩薩言．世尊．若言盡命入涅槃者．云何而言受身涅槃．佛言．善男子．是人受身然後乃斷三界煩惱．是故名爲受身涅槃．善男子．行般涅槃者常修行道．以有爲三昧力故能斷煩惱入於涅槃．是名行般涅槃．無行般涅槃者是人定知當得涅槃．是故懈怠．亦以有爲三昧力故．壽盡則得入於涅槃．是名無行般涅槃．上流般涅槃者若有人得第四禪已．是人生於初禪愛心．以是因緣退生初禪．是有二流．一煩惱流．二者道流．以道流故是人壽盡生二禪愛．以愛因緣生於二禪．至第四禪亦復如是．是四禪中復有二種．一者入無色界．二者入五淨居．如是二人一樂三昧．二樂智慧．樂智慧者入五淨居．樂三昧者入無色界．如是二人．一者修第四禪有五階差．二者不修．云何爲五．下中上上中上上．修上上者處無小天．修上中者處善見天．修上品者處善可見天．修中品者處無熱天．修下品者處少廣天．如是二人．一樂論議．二樂寂靜．樂寂靜者入無色界．樂論議者處五淨居．復有二種．一者修熏禪．二者不修熏禪．修熏禪者入五淨居．不修熏禪者生無色界．盡其壽命而般涅槃．是名上流般涅槃．若欲入於無色界者．卽不能修四禪五差．若修五差則能呵責無色界定．迦葉菩薩白佛言．世尊．中涅槃者則是利根．若利根者何不現在入涅槃耶．何故欲界有中涅槃色界則無．佛言．善男子．是人現在四大羸劣不能修道．雖有比丘四大康健．無有房舍飲食衣服臥具醫藥．衆緣不具．是故不得現在涅槃．善男子．我昔一時在舍衞國阿那邠低精舍．有一比丘來至我所．作如是言．世尊．我常修道而不能得須陀洹果至阿羅漢果．我時卽告阿難言．汝今當

五下六下並同無種字
具下同無是二二字○二下同有者字
復三本俱作得
葉下同無菩薩二字
槃下同無善男子三字○有上同無以字○涅上同無般字
一下二下一下並同無者字
少同作小
低同作坻

唯同作惟
外下三本俱無而字
四同作向
水上同無言字

爲是比丘具諸所須.爾時阿難將是比丘.至祇陀林與好房舍.是時比丘語阿難言.大德.唯願爲我莊嚴房舍淨潔修治.七寶嚴麗懸繒幡蓋.阿難言.世間貧者乃名沙門.我當云何能辦是事.是比丘言.大德.若能爲我作者善.若不能者我當還往至世尊所.爾時阿難卽往佛所作如是言.世尊.向者比丘從我求索種種莊嚴七寶幡蓋.不審是事當云何耶.我於爾時復告阿難.汝今還去隨比丘意.所須之物爲辦具之.爾時阿難卽還房中.爲是比丘事事具辦.比丘得已繫念修道.不久卽得須陀洹果至阿羅漢果.善男子.無量衆生應入涅槃.以所乏故妨亂其心是故不得.善男子.復有衆生多憙敎化.其心忽務不能得定.是故不得現在涅槃.善男子.如汝所問.何因緣故捨欲界身有中涅槃色界無者.善男子.是人觀於欲界煩惱因緣有二.一者內二者外.而色界中無外因緣.欲界復有二種愛心.一者欲愛.二者食愛.觀是二愛至心呵責.旣呵責已得入涅槃.是欲界中能得呵責諸麤煩惱.所謂慳貪瞋妬無慙無愧.以是因緣能得涅槃.又欲界道其性勇健.何以故.得四果故.是故欲界有中涅槃色界中無.善男子.中涅槃者凡有三種.謂上中下.上者捨身未離欲界便得涅槃.中者始離欲界未至色界便得涅槃.下者離欲界已至色界邊乃得涅槃.喩以鯌魚得食已住.是人亦爾.云何名住.處在色界及無色界得受身故.是故名住.不受欲界人天地獄畜生餓鬼.是故名住.已斷無量諸煩惱結餘少在故.是故名住.復何因緣名之爲住.終不造作共凡夫事.是故名住.自無所畏不令他畏.是故名住.遠離二愛慳貪瞋恚.是故名住.善男子.到彼岸者喩阿羅漢辟支佛菩薩佛.猶如神龜水陸俱行.何因緣故喩之以龜.善藏五故.是阿羅漢乃至諸佛亦復如是.善覆五根是故喩龜.言水陸者水喩世間陸喩出世.是諸聖等亦復如是.能觀一切惡煩惱故到於彼岸.是故喩以水陸俱行.善男子.如恒河中七種衆生雖有魚龜之名不離於水.如是微妙大涅槃中.從一闡提上至諸佛雖有異名.然亦不離於佛性水.善男子.是七衆生若善法若不善法.若方便道若解脫道.若次第道若因若果.悉是佛性.是名如來隨自意語.迦葉菩薩言.世尊.若有因則有果.若無因則無果.涅槃名果常故無因.若無因者云何名果.而是涅槃亦名沙門名沙門果.云何沙門云何沙門果.善男子.一切世間有七種果.一者方便果.二者報恩果.三者親近果.四者餘殘果.五者平等果.六者果報果.七者遠離果.方便果者如世間人秋多收穀咸相謂言得方便

母下元明俱無父母二字〇我下同無今已二字

得下三本俱無果字

近下明有因字

門下三本俱無那字次同

果。方便果者名業行果。如是果者有二種因。一者近因。二者遠因。近因者所謂種子。遠因者謂水糞人功。是名方便果。報恩果者如世間人供養父母。父母咸言。我今已得恩養之果。子能報恩名之爲果。如是果者因亦二種。一者近因。二者遠因。近者卽是父母過去純善之業。遠者卽是所生孝子。是名報恩果。親近果者譬如有人親近善友或得須陀洹果至阿羅漢果。是人唱言。我今已得親近果報。如是果者因有二種。一者近因。二者遠因。近者信心。遠者善友。是名親近果。餘殘果者如因不殺得第三身延年益壽。是名殘果。如是果者有二種因。一者近因。二者遠因。近者卽是身口意淨。遠者卽是延年益壽。是名殘果。平等果者謂世界器。如是果者亦二種因。一者近因。二者遠因。近因者所謂衆生修十善業。遠因者所謂三災。是名平等果。果報果者如人獲得淸淨身已修身口意淸淨之業。是人便說我得果報果。如是果者因有二種。一者近因。二者遠因。近因者所謂現在身口意淨。遠因者所謂過去身口意淨。是名果報果。遠離果者卽是涅槃離諸煩惱。一切善業是涅槃因。復有二種。一者近因。二者遠因。近者卽是三解脫門。遠因者卽無量世所修善法。善男子。如世間法或說生因或說了因。出世之法亦復如是。亦說生因亦說了因。善男子。三解脫門三十七品。能爲一切煩惱作不生生因。亦爲涅槃而作了因。善男子。遠離煩惱則得了了見於涅槃。是故涅槃唯有了因無有生因。善男子。如汝所問。云何沙門。那云何沙門果者。善男子。沙門那者卽八正道。沙門果者從道畢竟永斷一切貪瞋癡等。是名沙門那沙門果。迦葉菩薩言。世尊。何因緣故八正道者名沙門那。善男子。世言沙門名乏那者名道。如是道者斷一切乏斷一切道。以是義故名八正道爲沙門那。從是道中獲得果故名沙門果。善男子。又沙門那者如世間人有樂靜者亦名沙門。如是道者亦復如是。能令行者離身口意惡邪命等得樂寂靜。是故名之爲沙門那。善男子。如世下人能作上人。是名沙門。如是道者亦復如是。能令下人作上人故。是故得名爲沙門那。善男子。阿羅漢人修是道者得沙門果。是故得名到於彼岸。阿羅漢果者卽是無學五分法身。戒定慧解脫解脫知見。因是五分得到彼岸。是故名爲到於彼岸。到彼岸故而自說言。我生已盡梵行已立。所作已辦更不受有。善男子。是阿羅漢永斷三世生因緣故。是故自說我生已盡。亦斷三界五陰身故。是故復言我生已盡。所修梵行已畢竟故。是故唱言梵行已立。又捨學道亦名已立。如本所求

我下同無生字○盡下同無盡字

常上同無爲字

渡同作度

有同作人

言明作有

今日已得是故唱言所作已辦。修道得果亦言已辦。獲得盡智無生智故。唱言我生已盡。盡諸有結。以是義故名阿羅漢得到彼岸。如阿羅漢辟支佛亦復如是。菩薩及佛具足成就六波羅蜜名到彼岸。是佛菩薩得阿耨多羅三藐三菩提已。名爲具足六波羅蜜。何以故。得六波羅蜜果故。以得果故名爲具足。善男子。是七衆生不修身不修戒不修心不修慧。不能修習如是四事。則能造作五逆重罪。能斷善根犯四重禁謗佛法僧是故得名爲常沈沒。善男子。是七人中有能親近善知識者。至心聽受如來正法。內善思惟如法而住。精勤修習身戒心慧。是故得名渡生死河到於彼岸。若有說言。一闡提人得阿耨多羅三藐三菩提者。是名染著。若言不得是名虛妄。善男子。是七種人或有一人具七。或有七人各一。善男子。若有心口異想異說。言一闡提得阿耨多羅三藐三菩提者。當知是人謗佛法僧。若人心口異想異說。言一闡提不得阿耨多羅三藐三菩提。是人亦名謗佛法僧。善男子。若有說言。八聖道分凡夫所得。是人亦名謗佛法僧。若有說言。八聖道分非凡夫得。是人亦名謗佛法僧。善男子。若有說言。一切衆生定有佛性定無佛性。是人亦名謗佛法僧。善男子。是故我於契經中說。有二種人謗佛法僧。一者不信瞋恚心故。二者雖信不解義故。善男子。若人信心無有智慧。是人則能增長無明。若有智慧無有信心。是人則能增長邪見。善男子。不信之人瞋恚心故。說言無有佛法僧寶。信者無慧顚倒解義。令聞法者謗佛法僧。善男子。是故我說。不信之人瞋恚心故。有信之人無智慧故。是人能謗佛法僧寶。善男子。若有說言。一闡提等未生善法便得阿耨多羅三藐三菩提。是人亦名謗佛法僧。若復有言。一闡提人捨一闡提於異身中得阿耨多羅三藐三菩提。是人亦名謗佛法僧。若復說言。一闡提人能生善根。生善根已相續不斷。得阿耨多羅三藐三菩提。故言一闡提得阿耨多羅三藐三菩提。當知是人不謗三寶。善男子。若有人言。一切衆生定有佛性。常樂我淨不作不生。煩惱因緣故不可見。當知是人謗佛法僧。若有說言。一切衆生都無佛性猶如兎角。從方便生本無今有已有還無。當知是人謗佛法僧。若有說言。衆生佛性非有如虛空。非無如兎角。何以故。虛空常故兎角無故。是故得言亦有亦無。有故破兎角。無故破虛空。如是說者不謗三寶。善男子。夫佛性者不名一法。不名十法不名百法。不名千法。不名萬法。未得阿耨多羅三藐三菩提時。一切善不善無記盡名佛性。如來或時因中說果果中說因。是名

現在過去三本俱作過去現在

礙同作閡下同

如來隨自意語。隨意語故名爲如來。隨意語故名阿羅呵。隨意語故名三藐三佛陀。迦葉菩薩言。世尊。如佛所說衆生佛性猶如虛空。云何名爲如虛空耶。善男子。虛空之性非過去非未來非現在。佛性亦爾。善男子。虛空非過去。何以故。無現在故。法若現在可說過去。以無現在故無過去亦無現在。何以故。無未來故。法若未來可說現在。以無未來故無現在亦無未來。何以故。無現在過去故。若有現在過去則有未來。以無現在過去故則無未來。以是義故虛空之性非三世攝。善男子。以虛空無故無有三世。不以有故無三世也。如虛空花非是有故無有三世。虛空亦爾。非是有故無有三世。善男子。無物者卽是虛空。佛性亦爾。善男子。虛空無故非三世攝。佛性常故非三世攝。善男子。如來已得阿耨多羅三藐三菩提。所有佛性一切佛法常無變易。以是義故無有三世猶如虛空。善男子。虛空無故非內非外。佛性常故非內非外。故說佛性猶如虛空。善男子。如世間中無罣礙處名爲虛空。如來得阿耨多羅三藐三菩提已。於一切佛法無有罣礙。故言佛性猶如虛空。以是因緣我說佛性猶如虛空。迦葉菩薩白佛言。世尊。如來佛性涅槃非三世攝而名爲有。虛空亦非三世所攝。何故不得名爲有耶。佛言。善男子。爲非涅槃名爲涅槃。爲非如來名爲如來。爲非佛性名爲佛性。云何名爲非涅槃耶。所謂一切煩惱有爲之法。爲破如是有爲煩惱。是名涅槃。非如來者謂一闡提至辟支佛。爲破如是一闡提等至辟支佛。是名如來。非佛性者所謂一切牆壁瓦石無情之物。離如是等無情之物。是名佛性。善男子。一切世間無非虛空對於虛空。迦葉菩薩白佛言。世尊。世間亦無非四大對而猶得名。四大是有虛空無對。何故不得名之爲有。佛言。善男子。若言涅槃非三世攝虛空亦爾者。是義不然。何以故。涅槃是有可見可證。是色足跡章句是有。是相是緣是歸依處。寂靜光明安隱彼岸。是故得名非三世攝。虛空之性無如是法。是故名無。若有離於如是等法更有法者。應三世攝。虛空若同是有法者。不得非是三世所攝。善男子。如世人說虛空名爲無色無對不可覩見。若無色無對不可見者卽心數法。虛空若同心數法者。不得不是三世所攝。若三世攝卽是四陰。是故離四陰已無有虛空。復次善男子。諸外道言。夫虛空者卽是光明。若是光明卽是色法。虛空若爾是色法者卽是無常。是無常故三世所攝。云何外道說非三世。若三世攝則非虛空。亦可說言虛空是常。善男子。復有人言。虛空者卽是住處。若有住處卽是色法。而一切處

法三本俱作切

皆是無常三世所攝。虛空亦常非三世攝。若說處者知無虛空。復有說言。虛空者即是次第。若是次第即是數法。若是可數即三世攝。若三世攝云何言常。善男子。若復說言。夫虛空者不離三法。一者空二者實三者空實若言空是。當知虛空是無常法。何以故。實處無故。若言實是。當知虛空亦是無常。何以故。空處無故。若空實故。當知虛空亦是無常。何以故。二處無故。是故虛空名之爲無。善男子。如說虛空是可作法。如說去樹去舍而作虛空。平作虛空覆於虛空。上於虛空畫虛空色如大海水。是故虛空是可作法。一切作法皆是無常猶如瓦瓶。虛空若爾應是無常。善男子。世間人說一切法中無罣礙處名虛空者。是無礙處於一法所。爲具足有爲分有耶。若具足有當知餘處則無虛空。若分有者則是彼此可數之法。若是可數當知無常。善男子。若有人說。虛空無礙與有並合。又復說言。虛空在物如器中果。二俱不然。何以故。若言並合則有三種。一異業合如飛鳥集樹。二共業合如兩羊相觸。三已合共合如二雙指合在一處。若言異業共合。異則有二。一是物業。二虛空業。若空業合物空則無常。若物業合空物則不遍。如其不遍是亦無常。若言虛空是常其性不動與動物合者。是義不然。何以故。虛空若常物亦應常。物若無常空亦無常。若言虛空亦常無常無有是處。若共業合。是義不然。何以故。虛空名遍。若與業合業亦應遍。若是遍者應一切遍。若一切遍應一切合。不應說有合與不合。若言已合共合如二雙指合。是義不然。何以故。先無有合後方合故。先無後有是無常法。是故不得說言虛空已合共合如世間法。先無後有是物無常。虛空若爾亦應無常。若言虛空在物如器中果。是義不然。何以故。如是虛空先無器時在何處住。若有住處虛空則多。如其多者云何言常言一言遍。若使虛空離空有住。有物亦應離虛空住。是故當知無有虛空。善男子。若有說言。指住之處名爲虛空。當知虛空是無常法。何以故。指有四方。若有四方當知虛空亦有四方。一切常法都無方所。以有方故虛空無常。若是無常不離五陰。要離五陰是無所有。善男子。有法若從因緣住者。當知是法名爲無常。善男子。譬如一切衆生樹木因地而住。地無常故因地之物次第無常。善男子。如地因水。水無常故地亦無常。如水因風。風無常故水亦無常。風依虛空。虛空無常故風亦無常。若無常者云何說言虛空是常遍一切處。虛空無故非是過去未來現在。亦如兎角是無物故。非是過去未來現在。是故我說。佛性常故非三世攝。虛空無故非三

慇三本俱作憫

白上同有復字
○佛同作是

顚宋元俱作傎

果元明俱作報

世攝。善男子。我終不與世間共諍。何以故。世智說有我亦說有。世智說無我亦說無。迦葉菩薩言。世尊。菩薩摩訶薩具足幾法不與世諍。不爲世法之所霑汙。佛言。善男子。菩薩摩訶薩具足十法不與世諍。不爲世法之所霑汙。何等爲十。一者信心。二者有戒。三者親近善友。四者内善思惟。五者具足精進。六者具足正念。七者具足智慧。八者具足正語。九者樂於正法。十者憐愍衆生。善男子。菩薩具足如是十法不與世諍。不爲世法之所霑汙。如優鉢羅花。迦葉菩薩白佛言。世尊。如佛所說。世智說有我亦說有。世智說無我亦說無。何等名爲世智有無。佛言。善男子。世智若說色是無常苦空無我。乃至識亦如是。善男子。是名世智說有我亦說有。善男子。世智說色無有常樂我淨。受想行識亦復如是。善男子。是名世智說無我亦說無。迦葉菩薩白佛言。世尊。世間智者即佛菩薩一切聖人。若諸聖人色是無常苦空無我。云何如來說佛色身常恒無變。世間智者所說無法。云何如來說言是有。如來世尊作如是說。云何復言不與世諍不爲世法之所霑汙。如來已離三種顚倒。所謂想倒心倒見倒。應說佛色實是無常。今乃說常。云何得名遠離顚倒不與世諍。佛言。善男子。凡夫之色從煩惱生。是故智說色是無常苦空無我。如來色者遠離煩惱。是故說是常恒無變。迦葉菩薩言。世尊。云何爲色從煩惱生。善男子。煩惱三種。所謂欲漏有漏無明漏。智者應當觀是三漏所有罪過。所以者何。知罪過已則能遠離。譬如醫師先診病脉知病所在然後授藥。善男子。如人將盲至棘林中捨之而還。盲人於後甚難得出。設得出者身體壞盡。世間凡夫亦復如是。不能知見三漏過患則隨逐行。如其見者則能遠離知罪過已。雖受果報果報輕微。善男子。有四種人。一作業時重受報時輕。二作業時輕受報時重。三作業時重受報亦重。四作業時輕受報亦輕。善男子。若人能觀煩惱罪過。是人作業受果俱輕。善男子。有智之人作如是念。我應遠離如是等漏。又復不應作如是等鄙惡之事。何以故。我今未得脫於地獄餓鬼畜生人天報故。我若修道當因是力破壞諸苦。是人觀已。貪欲瞋恚愚癡微弱。既見貪欲瞋癡輕已。其心歡喜。復作是念。我今如是皆由修道因緣力故。令我得離不善之法親近善法。是故現在得見正道。應當勤加而修習之。是人因是勤修道力遠離無量諸惡煩惱。及離地獄餓鬼畜生人天果報。是故我於契經中說。當觀一切有漏煩惱及有漏因。何以故。有智之人若但觀漏不觀漏因。則不能斷諸煩惱也。何以故。智者觀漏從

是因生。我今斷因漏則不生。善男子。如彼醫師先斷病因病則不生。智者先斷煩惱因者亦復如是。有智之人先當觀因次觀果報。知從善因生於善果。知從惡因生於惡果。觀果報已遠離惡因。觀果報已。復當次觀煩惱輕重。觀輕重已先離重者。既離重已輕者自去。善男子。智者若知煩惱煩惱因煩惱果報煩惱輕重。是人爾時精勤修道不息不悔。親近善友志心聽法。為滅如是諸煩惱故。善男子。譬如病者自知病輕必可除差。雖得苦藥服之不悔。有智之人亦復如是。勤修聖道歡喜不愁不息不悔。善男子。若人能知煩惱煩惱因煩惱果報煩惱輕重。為除煩惱故勤修聖道。是人不從煩惱生色。受想行識亦復如是。若不能知煩惱煩惱因煩惱果報煩惱輕重不勤修習。是人則從煩惱生色。受想行識亦復如是。善男子。知煩惱煩惱因煩惱果報煩惱輕重。為斷煩惱修行道者。即是如來。以是因緣如來色常乃至識常。善男子。不知煩惱煩惱因煩惱果報煩惱輕重不能修道即是凡夫。是故凡夫色是無常。受想行識悉是無常。善男子。世間智者一切聖人菩薩諸佛說是二義。我亦如是說是二義。是故我說不與世間智者共諍不為世法之所汙。迦葉菩薩復白佛言。世尊。如佛所說。三有漏者。云何名為欲漏有漏無明漏耶。佛言。善男子。欲漏者。內惡覺觀因於外緣生於欲漏。是故我昔在王舍城告阿難言。阿難。汝今受此女人所說偈頌。是偈乃是過去諸佛之所宣說。是故一切內惡覺觀外諸因緣。名之為欲。是名欲漏。有漏者。色無色界內諸惡法外諸因緣。除欲界中外諸因緣。內諸覺觀是名有漏。無明漏者。不能了知我及我所不別內外。名無明漏。善男子。無明即是一切諸漏根本。何以故。一切眾生無明因緣。於陰入界憶想作相。名為眾生。是名想倒心倒見倒。以是因緣生一切漏。是故我於十二部經。說無明者即是貪因瞋因癡因。迦葉菩薩言。世尊。如來昔於十二部經。說言不善思惟因緣生於貪欲瞋癡。今何因緣乃說無明。善男子。如是二法互為因果互相增長。不善思惟生於無明。無明因緣生不善思惟。善男子。其能生長諸煩惱者。皆悉名為煩惱因緣。親近如是煩惱因緣。名為無明不善思惟。如子生牙子是近因四大遠因。煩惱亦爾。迦葉菩薩白佛言。世尊。如佛所說無明即漏。云何復言因無明故生於諸漏。佛言。善男子。我如所說。無明漏者是內無明。因於無明生諸漏者是內外因。若說無明漏是名內倒不識無常苦空無我。若說一切煩惱因緣是名不知外我我所。若說無明漏。是名無始無終從無明生

道上三本俱無聖字

一上三本俱無是字

牙明作芽

入界三本俱作界入

若同作如

卽下同有是字

○心同作身○名心身宋元俱作言心身明作言身心○名下元明俱無爲字○卽三本俱作則

陰入界等。迦葉菩薩白佛言。世尊。如佛所說。有智之人知於漏因。云何名爲知於漏因。善男子。智者當觀。何因緣故生是煩惱。造作何行生此煩惱。於何時中生此煩惱。共誰住時生此煩惱。何處止住生此煩惱。觀何事已生於煩惱。受誰房舍臥具飲食衣服湯藥而生煩惱。何因緣故轉下作中轉中作上。下業作中中業作上。菩薩摩訶薩作是觀時。則得遠離生漏因緣。如是觀時未生煩惱遮令不生。已生煩惱便得除滅。是故我於契經中說。智者當觀生煩惱因。迦葉菩薩白佛言。世尊。衆生一身云何能起種種煩惱。佛言。善男子。如一器中有種種子得水雨已各各自生。衆生亦爾。器雖是一。愛因緣故而能生長種種煩惱。迦葉菩薩言。世尊。智者云何觀於果報。善男子。智者當觀。諸漏因緣能生地獄餓鬼畜生。是漏因緣得人天身。卽是無常苦空無我。是身器中得三種苦三種無常。是漏因緣能令衆生作五逆罪受諸惡報。能斷善根犯四重禁誹謗三寶。智者當觀。我旣受得如是之身。不應生起如是煩惱受諸惡果。迦葉菩薩言。世尊。有無漏果。復言智者斷諸果報。無漏果報在斷中不。諸得道人有無漏果。如其智者求無漏果。云何佛說一切智者應斷果報。若其斷者今諸聖人云何得有。善男子。如來或時因中說果果中說因。如世間人說泥卽瓶縷卽是衣。是名因中說果。果中說因者。牛卽水草人卽是食。我亦如是因中說果。先於經中作是說言。我從心身因心運心故名心身至梵天邊。是名因中說果。果中說因。此六入者名過去業。是名果中說因。善男子。一切聖人眞實無有無漏果報。一切聖人修道果報更不生漏。是故名爲無漏果報。善男子。有智之人如是觀時。卽得永滅煩惱果報。善男子。智者觀已。爲斷如是煩惱果報修習聖道。聖道者卽空無相願。修是道已能滅一切煩惱果報

## 大般涅槃經卷第三十三

品目之上明有第二十四四字

今三本俱作晉

白明作曰

# 大般涅槃經卷第三十四

〔麗宦〕〔宋合〕〔元合〕〔明白〕

宋代沙門慧嚴等依泥洹經加之

## 迦葉菩薩品之四

迦葉菩薩白佛言．世尊．一切衆生皆從煩惱而得果報．言煩惱者所謂惡也．從惡煩惱所生煩惱亦名爲惡．如是煩惱則有二種．一因二果．因惡故果惡．果惡故子惡．如紝婆果其子苦故花果莖葉一切皆苦．猶如毒樹其子毒故果亦是毒．因亦衆生果亦衆生．因亦煩惱果亦煩惱．煩惱因果即是衆生．衆生即是煩惱因果．若從是義．云何如來先喩雪山亦有毒草微妙藥王．若言煩惱即是衆生．衆生即是煩惱．云何而言衆生身中有妙藥王．佛言．善哉善哉．善男子．無量衆生咸同此疑．汝今能爲啓請求解．我亦能斷．諦聽諦聽．善思念之．今當爲汝分別解說．善男子．雪山喩者即是衆生．言毒草者即是煩惱．妙藥王者即淨梵行．善男子．若有衆生．能修如是清淨梵行．是名身中有妙藥王．迦葉菩薩白佛言．世尊．云何衆生有清淨梵行．善男子．猶如世間從子生果．是果有能與子作因．有不能者．有能作者．是名果子．若不能作唯得名果不得名子．一切衆生亦復如是．皆有二種．一者有煩惱果．是煩惱因．二者有煩惱果．非煩惱因．是煩惱果非煩惱因．是則名爲清淨梵行．善男子．衆生觀受知是一切漏之近因．所謂內外漏．受因緣故．不能斷絕一切諸漏．亦不能出三界牢獄．衆生因受著我我所．生於心倒想倒見倒．是故衆生先當觀受．如是受者爲一切愛而作近因．是故智者欲斷愛者當先觀受．善男子．一切衆生十二因緣所作善惡皆因受時．是故我爲阿難說言．阿難．一切衆生所作善惡皆是受時．是故智者先當觀受．既觀受已復當更觀．如是受者何因緣生．若因緣生．如是因緣復從何生．若無因生．無因何故不生無受．復觀是受不因自在天生．不因士夫生．不因微塵生．非時節生．不因想生．不因性生．不從自生．不從他生．非自他生．非無因生．是受皆從

者下三本俱無既字

卽同作則下同

顚宋元俱作傎下同

至上三本俱無乃字〇邊元明俱作量

緣合而生。因緣者卽是愛也。是和合中非有受非無受。是故我當斷是和合。斷和合故則不生受。善男子。智者旣觀因已次觀果報。衆生因受受於地獄餓鬼畜生乃至三界無量苦惱。受因緣故受無常樂。受因緣故斷於善根。受因緣故獲得解脫。作是觀時不作受因。云何名爲不作受因。謂分別受。何等受能作愛因。何等愛能作受因。善男子。衆生若能如是深觀愛因受因。則便能斷我及我所。善男子。若人能作如是等觀。則應分別愛之與受在何處滅。卽見愛受有少滅處。當知亦應有畢竟滅。爾時卽於解脫生信心。生信心已。是解脫處何由而得。知從八正卽便修習。云何名爲八正道耶。是道觀受有三種相。一者苦。二者樂。三者不苦不樂。如是三種俱能增長身之與心。何因緣故能增長耶。觸因緣也。是觸三種。一者無明觸。二者明觸。三者非明無明觸。言明觸者卽八正道。其餘二觸增長身心及三種受。是故我應斷二種觸。因緣觸斷不生三受。善男子。如是受者亦名爲因亦名爲果。智者當觀亦因亦果。云何爲因。因受生愛。名之爲因。云何名果。因觸生故。名之爲果。是故此受亦因亦果。智者如是觀是受已。次復觀愛受果報故。名之爲愛。智者觀愛復有二種。一者雜食。二者無食。雜食愛者因生老病死一切諸有。無食愛者斷生老病死一切諸有貪無漏道。智者復當作如是念。我若生是雜食之愛。則不能斷生老病死。我今雖貪無漏之道。不斷受因則不能得無漏道果。是故應當先斷是觸。觸旣斷已受則自滅。受旣滅已愛亦隨滅。是名八正道。善男子。若有衆生能如是觀。雖有毒身其中亦有微妙藥王。如雪山中雖有毒草亦有妙藥。善男子。如是衆生雖從煩惱而得果報。而是果報更不復爲煩惱作因。是卽名爲淸淨梵行。復次善男子。智者當觀。受愛二事何因緣生。知因想生。何以故。衆生見色亦不生貪。及觀受時亦不生貪。若於色中生顚倒想。謂色卽是常樂我淨。受是常恒無有變易。因是倒想生貪恚癡。是故智者應當觀想。云何觀想。當作是念。一切衆生未得正道皆有倒想。云何倒想。於非常中生於常想。於非樂中生於樂想。於非淨中生於淨想。方空法中生於我想。於非男女大小晝夜歲月衣服房舍臥具生於男女乃至臥具想。是想三種。一者小。二者大。三者無邊。小因緣故生於小想。大因緣故生於大想。無量緣故生無量想。復有小想。謂未入定。復有大想。謂已入定。復有無量想。謂十一切入。復有小想。所謂欲界一切想等。復有大想。所謂色界一切想等。復有無量想。謂無色界一切想等。三想滅故受則自

時明作如

脫同作說

滅.想受滅故名爲解脫.迦葉菩薩言.世尊.滅一切法名爲解脫.如來云何說想受滅名解脫耶.佛言.善男子.如來或時因衆生說聞者解法.或時因法說於衆生.聞者亦解說於衆生.云何名爲因衆生說聞者解法.如我先爲大迦葉說.迦葉.衆生滅時善法則滅.是名因衆生說聞者解法.云何因法說於衆生聞者亦解說於衆生.如我先爲阿難說言.我亦不說親近一切法.亦復不說不親近一切法.若法近已善法衰羸不善熾盛.如是法者不應親近.若法近已不善衰滅善法增長.如是法者是應親近.是名因法說於衆生聞者亦解說於衆生.善男子.如來雖說想受二滅.則已總說一切可斷.智者既觀如是想已次觀想因.是無量想因何而生.知因觸生.是觸二種.一者因煩惱觸.二者因解脫觸.因無明生名煩惱觸.因明生者名解脫觸.因煩惱觸生於倒想.因解脫觸生不倒想.觀想因已次觀果報.迦葉菩薩白佛言.世尊.若以因此煩惱之想生於倒想.一切聖人實有倒想而無煩惱.是義云何.佛言.善男子.云何聖人而有倒想.迦葉菩薩言.世尊.一切聖人牛作牛想亦說是牛.馬作馬想亦說是馬.男女大小舍宅車乘去來亦爾.是名倒想.善男子.一切凡夫有二種想.一者世流布想.二者著想.一切聖人唯有世流布想無有著想.一切凡夫惡覺觀故.於世流布生於著想.一切聖人善覺觀故.於世流布不生著想.是故凡夫名爲倒想.聖人雖知不名倒想.智者如是觀想因已次觀果報.是惡想果在於地獄餓鬼畜生人天中受.如我因斷惡覺觀故.無明觸斷.是故想斷.因想斷故果報亦斷.智者爲斷如是想因修八正道.善男子.若有能作如是等觀.則得名爲清淨梵行.善男子.是名衆生毒身之中有妙藥王如雪山中雖有毒草亦有妙藥.復次善男子.智者觀欲.欲者即是色聲香味觸.善男子.即是如來因中說果.從此五事生於欲耳實非欲也.善男子.愚癡之人貪求受之.於是色中生顚倒想.乃至觸中亦生倒想.倒想因緣便生於受.是故世間說因倒想生十種想.欲因緣故在於世間受惡果報.以惡加於父母沙門婆羅門等.所不應作而故作之.不惜身命.是故智者觀是惡想因緣故生欲心.智者如是觀欲因已次觀果報.是欲多有諸惡果報.所謂地獄餓鬼畜生人中天上.是名觀果報.若是惡想得除滅者.終不生於此欲心也.無欲心故不受惡受.無惡受故則無惡果.是故我應先斷惡想.斷惡想已如是等法自然而滅.是故智者爲滅惡想修八正道.是則名爲清淨梵行.是名衆生毒身之中有妙藥王如雪山中雖有毒草

煩上三本俱無是字

得同作是

之爲同作爲黑

亦有妙藥。復次善男子。智者如是觀是欲已次當觀業。何以故。有智之人當作是念。受想觸欲卽是煩惱。是煩惱者能作生業不作受業。如是煩惱與業共行則有二種。一作生業。二作受業。是故智者當觀於業。是業三種。謂身口意。善男子。身口二業亦名爲業亦名業果。意唯名業不名爲果。以業因故則名爲業。善男子。身口二業名爲外業意業名內。是三種業共煩惱行故作二種業。一者生業。二者受業。善男子。正業者卽意業也。期業者謂身口業。先發故名意業。從意業生名身口業。是故意業得名爲正。智者觀業已次觀業因。業因者卽無明觸。因無明觸衆生求有。求有因緣卽是愛也。愛因緣故造作三種身口意業。善男子。智者如是觀業因已次觀果報。果報有四。一者黑黑果報。二者白白果報。三者雜雜果報。四者不黑不白不黑不白果報。黑黑果報者。作業時垢果報亦垢。白白果報者。作業時淨果報亦淨。雜雜果報者。作業時雜果報亦雜。不白不黑不白不黑果報者。名無漏業。迦葉菩薩白佛言。世尊。先說無漏無有果報。今云何言不白不黑果報耶。佛言。善男子。是義有二。一者亦果亦報。二者唯果非報。黑黑果報亦名爲果亦名爲報。黑因生故得名爲果。能作因故復名爲報。淨雜亦爾。無漏果者因有漏生故名爲果。不作他因不名爲報。是故名果不名爲報。迦葉菩薩白佛言。世尊。是無漏業非是黑法。何因緣故不名爲白。善男子。無有報故不名爲白。對治黑故故名爲白。我今乃說受果報者名之爲白。是無漏業不受報故。不名爲白名爲寂靜。如是業者有定受報處。如十惡法定在地獄餓鬼畜生。十善之業定在人天。十不善法有上中下。上因緣故受地獄身。中因緣故受畜生身。下因緣故受餓鬼身。人業十善復有四種。一者下。二者中。三者上。四者上上。下因緣故生鬱單越。中因緣故生弗婆提。上因緣故生瞿陀尼。上上因緣生閻浮提。有智之人作是觀已卽作是念。我當云何斷是果報。復作是念。是業因緣無明觸生。我若斷除無明與觸。如是業果則滅不生。是故智者爲斷無明觸因緣故修八正道。是則名爲淸淨梵行。善男子。是名衆生毒身之中有妙藥王。如雪山中雖有毒草亦有妙藥。復次善男子。智者觀業觀煩惱已次觀是二所得果報。是二果報卽是苦也。既知是苦則能捨離一切受生。智者復觀煩惱因緣生於煩惱。業因緣故亦生煩惱。煩惱因緣復生於業。業因緣生苦。苦因緣故生於煩惱。煩惱因緣生有。有因緣生苦。有因緣生有。有因緣生業。業因緣生煩惱。煩惱因緣生苦。苦因緣生苦。善男子。智者

得明作能

愛元明俱作愛

善法三本俱作法之

若能作如是觀。當知是人能觀業苦。何以故。如上所觀。卽是生死十二因緣。若人能觀如是生死十二因緣。當知是人不造新業能壞故業。善男子。有智之人觀地獄苦。觀一地獄乃至一百三十六所。一一地獄有種種苦。皆是煩惱業因緣生。觀地獄已次觀餓鬼畜生等苦。作是觀已。復觀人天所有諸苦。如是衆苦皆從煩惱業因緣生。善男子。天上雖無大苦惱事。然其身體柔軟細滑。見五相時極受大苦、如地獄苦等無差別。善男子。智者深觀三界諸苦皆從煩惱業因緣生。善男子。譬如坏器則易破壞。衆生受身亦復如是。既受身已是衆苦器。譬如大樹花果繁茂衆鳥能壞。如多乾草小火能焚。衆生受身爲苦所壞亦復如是。善男子。智者若能觀苦八種如聖行中。當知是人能斷衆苦。善男子。智者深觀是八苦已次觀苦因。苦因者卽愛無明。是愛無明則有二種。一者求身。二者求財。求身求財二俱是苦。是故當知。愛無明者卽是苦因。善男子。是爲無明則有二種。一者內。二者外。內能作業外能增長。又復內能作業外作業果。斷內愛已業則得斷。斷外愛已果則得斷。內愛能生未來世苦。外愛能生現在世苦。智者觀愛卽是苦因。既觀因已次觀果報。苦果報者卽是取也。愛果名取。是取因緣卽內外愛則有愛苦。善男子。智者當觀愛因緣取。取因緣愛。若我能斷愛取二事。則不造業受於衆苦。是故智者爲斷愛苦修八正道。善男子。若有人能如是觀者。是則名爲清淨梵行。是名衆生毒身之中有妙藥王如雪山中雖有毒草亦有妙藥。迦葉菩薩白佛言。世尊。云何名爲清淨梵行。佛言。善男子。一切法是。迦葉菩薩言。世尊。一切法者義不決定。何以故。如來或說是善不善。或時說爲四念處觀。或說是十二入。或說是善知識。或說是十二因緣。或說是衆生。或說是正見邪見。或說十二部經。或說卽是二諦。如來今乃說一切法爲淨梵行。悉是何等一切法耶。佛言。善哉善哉。善男子。如是微妙大涅槃經。乃是一切善法寶藏。譬如大海是衆寶藏。是涅槃經亦復如是。卽是一切字義祕藏。善男子。如須彌山衆藥根本。是經亦爾。卽是菩薩戒之根本。善男子。譬如虛空是一切物之所住處。是經亦爾。卽是一切善法住處。善男子。譬如猛風無能繫縛。一切菩薩行是經者亦復如是。不爲一切煩惱惡法之所繫縛。善男子。譬如金剛無能壞者。是經亦爾。雖有外道惡邪之人不能破壞。善男子。如恒河沙無能數者。如是經義亦復如是無能數者。善男子。是經典者。爲諸菩薩而作法幢如帝釋幢。善男子。是經卽是趣涅槃城之商主也。如大導師

引諸商人趣向大海。善男子。是經能爲諸菩薩等作法光明。如世日月能破諸闇。善男子。是經能爲病苦衆生作大良藥。如香山中微妙藥王能治衆病。善男子。是經能爲一闡提杖。猶如羸人因之得起。善男子。是經能爲一切惡人而作橋梁。猶如世橋能渡一切。善男子。是經能爲行三有者遇煩惱熱而作陰涼。如世間蓋遮覆著熱。善男子。是經卽是大無畏王。能壞一切煩惱惡魔。如師子王降伏衆獸。善男子。是經卽是大神呪師。能壞一切煩惱魔鬼。如世呪師能去魍魎。善男子。是經卽是無上霜雹。能壞一切生死果報。如世雹雨壞諸果實。善男子。是經能爲壞戒目者作大良藥。猶如世間安闍陀藥善療眼痛。善男子。是經能住一切善法。如世間地能住衆物。善男子。是經卽是毀戒衆生之明鏡也。如世間鏡見諸色像。善男子。是經能爲無慚愧者而作衣服。如世衣裳障蔽形體。善男子。是經能爲貧善法者作大財寶。如功德天利益貧者。善男子。是經能爲渴法衆生作甘露漿。如八味水充足渴者。善男子。是經能爲煩惱之人而作法牀。如世乏人遇安隱牀。善男子。是經能爲初地菩薩至十地菩薩。而作瓔珞香花塗香末香燒香。清淨種性具足之乘。過於一切六波羅蜜受妙樂處。如忉利天波利質多羅樹。善男子。是經卽是金剛利斧。能伐一切煩惱大樹。卽是利刀能割習氣。卽是勇健能摧魔怨。卽是智火焚煩惱薪。卽因緣藏出辟支佛。卽是聲聞藏生聲聞人。卽是一切諸天之眼。卽是一切人之正道。卽是一切畜生依處。卽是餓鬼解脫之處。卽是地獄無上之尊。卽是一切十方衆生無上之器。卽是十方過去未來現在諸佛之父母也。善男子。是故此經攝一切法。如我先說。此經雖攝一切諸法。我說梵行卽是三十七助道法。善男子。若離如是三十七品。終不能得聲聞正果乃至阿耨多羅三藐三菩提果。不見佛性及佛性果。以是因緣梵行卽是三十七品。何以故。三十七品性非顚倒能壞顚倒。性非惡見能壞惡見。性非怖畏能壞怖畏。性是淨行能令衆行畢見造作清淨梵行。迦葉菩薩白佛言。世尊。有漏之法亦復能作無漏法因。如來何故不說有漏爲淨梵行。善男子。一切有漏卽是顚倒。是故有漏不得名爲清淨梵行。迦葉菩薩白佛言。世尊。世第一法爲是有漏爲是無漏耶。佛言。善男子。是有漏也。世尊。雖是有漏性非顚倒。何故不名清淨梵行。善男子。世第一法無漏因故似於無漏。向無漏故不名顚倒。善男子。清淨梵行發心相續乃至畢竟。世第一法唯是一念。是故不得名淨梵行。迦葉菩薩白佛言。世尊。衆生五識

渡同作度
三宋作五元明俱作二十五三字〇魔三本俱作惡
乏同作之
地同作住〇末宋元俱作粖〇受宋作是
聞上三本俱無聲字
道下同有之字
念同作心次同

主下三本俱無善男子三字

亦是有漏。非是顚倒復非一念。何故不名清淨梵行。善男子。衆生五識雖非一念。然是有漏復是顚倒。增諸漏故名爲有漏。體非眞實著想故倒。云何名爲體非眞實著想故倒。非男女中生男女想。乃至舍宅車乘瓶衣亦復如是。是名顚倒。善男子。三十七品性無顚倒。是故得名清淨梵行。善男子。若有菩薩。於三十七品。知根知因知攝知增知主知導知勝知實知畢竟者。如是菩薩則得名爲清淨梵行。迦葉菩薩白佛言。世尊。云何名爲知根乃至知畢竟耶。佛言。善男子。善哉善哉。菩薩發問爲於二事。一者爲自知故。二者爲他知故。汝今已知。但爲無量衆生未解啓請是事。是故我今重讚歎汝。善哉善哉。善男子。三十七品根本是欲。因名明觸。攝取名受。增名善思。主名爲念。導名爲定。勝名智慧。實名解脫。畢竟名爲大般涅槃。善男子。善欲卽是初發道心。乃至阿耨多羅三藐三菩提之根本也。是故我說欲爲根本。善男子。如世間說。一切苦惱愛爲根本。一切疾病宿食爲本。一切斷事鬪諍爲本。一切惡事虛妄爲本。迦葉菩薩白佛言。世尊。如來先於此經中說。一切善法不放逸爲本。今乃說欲。是義云何。佛言。善男子。若言生因善欲是也。若言了因不放逸是。如世間說。一切果者子爲其因。或復有說子爲生因地爲了因。是義亦爾。迦葉菩薩言。世尊。如來先於餘經中說。三十七品佛是根本。是義云何。善男子。如來先說。衆生初知三十七品佛是根本。若自證得欲爲根本。世尊。云何明觸名之爲因。善男子。如來或時說明爲慧或說爲信。善男子。信因緣故親近善友是名爲觸。親近因緣得聞正法是名爲觸。因聞正法身口意淨是名爲觸。因三業淨獲得正命是名爲觸。因正命故得淨根戒。因淨根戒樂寂靜處。因樂寂靜能善思惟。因善思惟得如法住。因如法住得三十七品。能壞無量諸惡煩惱。是名爲觸。善男子。受名攝取。衆生受時能作善惡。是故名受爲攝取也。善男子。受因緣故生諸煩惱。三十七品能破壞之。是故以受爲攝取也。因善思惟能破煩惱。是故名增。何以故。勤修習故得如是等三十七品。若觀能破諸惡煩惱要賴專念。是故以念爲主。如世間中一切四兵隨主將意。三十七品亦復如是皆隨念主。善男子。既入定已。三十七品能善分別一切法相。是故以定爲導。是三十七品分別法相智爲最勝。是故以慧爲勝。如是智慧知煩惱已。智慧力故煩惱消滅。如世間中四兵壞怨或一或二勇健者能。三十七品亦復如是。智慧力故能壞煩惱。是故以慧爲勝。善男子。雖因修習三十七品獲得四禪神通安樂亦不名實。若壞

煩惱證解脫時乃名爲實。是三十七品發心修道。雖得世樂及出世樂四沙門果及以解脫。亦不得名爲畢竟也。若能斷除三十七品所行之事是名涅槃。是故我說畢竟者即大涅槃。復次善男子。善愛念心即是欲也。因善愛念親近善友故名爲觸。是名爲因。因近善友故名爲受。是名攝取。因近善友能善思惟。故名爲增。因是四法能生長道。所謂欲念定智。是即名爲主導勝也。因是三法得二解脫。除斷愛故得心解脫。斷無明故得慧解脫。是名爲實。如是八法畢竟得果名爲涅槃。故名畢竟。復次善男子。欲者即是發心出家。觸者即是白四羯磨。是名爲因。攝者即是受二種戒。一者波羅提木叉戒。二者淨根戒。是名爲受。是名攝取。增者即是修習四禪。主者即是須陀洹果斯陀含果。導者即是阿那含果。勝者即是阿羅漢果。實者即是辟支佛果。畢竟者即是阿耨多羅三藐三菩提果。復次善男子。欲名爲識。觸名六入。攝名爲受。增名無明。主名名色。導名爲愛。勝名爲取。實名爲有。畢竟者名生老病死。迦葉菩薩言。世尊。根本因增。如是三法云何有異。善男子。所言根者即是初發。因者即是相似不斷。增者即是滅相似已能生相似。復次善男子。根即是作。因即是果。增即可用。善男子。未來之世雖有果報。以未受故名之爲因。及其受時是名爲增。復次善男子。根即是求。得即是因。用即是增。善男子。是經中根即是見道。因即修道。增者即是無學道也。復次善男子。根即正因。因即方便因。從是二因獲得果報。名爲增長。迦葉菩薩言。世尊。如佛所說。畢竟者即是涅槃。如是涅槃云何可得。善男子。若菩薩摩訶薩比丘比丘尼優婆塞優婆夷能修十想。當知是人能得涅槃。云何爲十。一者無常想。二者苦想。三者無我想。四者厭離食想。五者一切世間不可樂想。六者死想。七者多過罪想。八者離想。九者滅想。十者無愛想。善男子。菩薩摩訶薩比丘比丘尼優婆塞優婆夷。修習如是十種想者。是人畢竟定得涅槃。不隨他心自能分別善不善等。是名眞實稱比丘義乃至得稱優婆夷義。迦葉菩薩言。世尊。云何名爲菩薩乃至優婆夷等修無常想。善男子。菩薩二種。一初發心。二已行道。無常想者亦復二種。一麤二細。初心菩薩觀無常想時作是思惟。世間之物凡有二種。一內二外。如是內物無常變異。我見生時小時大時壯時老時死時。是諸時節各各不同。是故當知內物無常。復作是念。我見衆生或有肥鮮具足色力去來進止自在無礙。或見病苦色力毀頓顏貌羸損不得自在。或見財富庫藏盈溢。或見貧窮觸事斯乏。或見成就無量

受宋作愛
得慧三本倶作慧得
即下三本倶無是字
識下宋有也字〇竟下三本倶無者字
即下同有是字
增下同無者字〇二同作正〇比上同無若字
離下同有解脫二字
礙同作閡〇乏宋作之

功德。或見具足無量惡法。是故定知內法無常。復觀外法。子時牙時莖時葉時花時果時。如是諸時各各不同。如是外法。或有具足。或不具足。是故當知一切外物定是無常。既觀見法是無常已。復觀開法。我聞諸天具足成就極妙快樂。神通自在亦有五相。是故當知卽是無常。復聞劫初有諸衆生。各各具足上妙功德。身光自照不假日月。無常力故光滅德損。復聞昔有轉輪聖王統四天下。成就七寶得大自在。而不能壞無常之相。復觀大地。往昔之時安處布置無量衆生。間無空處如車輪許。具足生長一切妙藥。叢林樹木果實滋茂。衆生薄福令此大地無復勢力所生之物遂成虛耗。是故當知。內外之法一切無常。是則名爲麤無常也。既觀麤已次觀細者。云何名細。菩薩摩訶薩觀於一切內外之物乃至微塵。在未來時已是無常。何以故。具足成就破壞相故。若未來色非無常者。不得言色有十時差別。云何爲十。一者膜時。二者泡時。三者胞時。四者肉團時。五者皰時。六者嬰孩時。七者童子時。八者少年時。九者盛壯時。十者衰老時。菩薩觀膜。若非無常不應至胞。乃至盛壯非無常者終不至老。若是諸時非念念滅終不漸長。應當一時成長具足。無是事故。是故當知定有念念微細無常。復見有人諸根具足顏色暐曄。後見枯顇復作是念。是人定有念念無常。復觀四大及四威儀。復觀內外各二苦因。飢渴寒熱。復觀是四。若無念念微細無常。亦不得說如是四苦。若有菩薩能作是念。是名菩薩觀細無常。如內外色心法亦爾。何以故。行六處故。行六處時。或生喜心。或生瞋心。或生愛心。或生念心。展轉異生不得一種。是故當知。一切色法及非色法悉是無常。善男子。菩薩若能於一念中見一切法生滅無常。是名菩薩具無常想。善男子。智者修習無常想已。遠離常慢常倒想倒。次修苦想。何因緣故有如是苦。深知是苦因於無常。因無常故受生老病死。生老病死因緣故名爲無常。無常因緣故受內外苦。飢渴寒熱鞭打罵辱。如是等苦皆因無常。復次智者深觀此身。卽無常器。是器卽苦。以器苦故所受盛法亦復是苦。善男子。智者復觀生卽是苦。滅卽是苦。苦生滅故卽是無常非我我所。修無我想。智者復觀苦卽無常無常卽苦。若苦無常智者云何說言有我。苦非是我無常亦爾。如是五陰亦苦無常。衆生云何說言有我。復次觀一切法有異和名。不從一和合生一切法。亦非一法是一切和合果。一切和合皆無自性。亦無一性亦無異性。亦無物性亦無自在。諸法若有如是等相。智者云何說言有我。復作是念。一切法中無

牙明作芽
令三本俱作今
胞三本俱作疱
胞同作泡
無同作以
後元明俱作復
瞋明作顚○念三本俱作貪

苦下同無空字
壙三本俱作曠
摶同作揣
鑽元明俱作穳　○矛下三本俱無善男子三字　○食同作貪○
瘡同作創
覩同作想
尠同作鮮
當宋作常
進同作是

有一法能爲作者。若使一法不能作者。衆法和合亦不能作。一切諸法性終不能獨生獨滅。和合故滅。和合故生。是法生已衆生倒想。言是和合從和合生。衆生想倒無有眞實。云何而有眞實我耶。是故智者觀於無我。又復諦觀。何因緣故衆生說我。是我若有應一應多。我若一者云何而有刹利婆羅門毘舍首陀人天地獄餓鬼畜生大小老壯。是故知我非是一也。我若多者云何說言。衆生我者是一是遍無有邊際。若一若多二俱無我。智者如是觀無我已。次復觀於厭離食想。作是念言。若一切法無常苦空無我。云何爲食起身口意三種惡業。若有衆生。爲貪食故起身口意三種惡業。所得財物衆皆共之。後受苦果無共分者。善男子。智者復觀。一切衆生爲飮食故身心受苦。若從衆苦而得食者。我當云何於是食中而生貪著。是故於食不生貪心。復次智者當觀因於飮食身得增長。我今出家受戒修道爲欲捨身。今貪此食云何當得捨此身耶。如是觀已雖復受食。猶如壙野食其子肉。其心厭惡都不甘樂。深觀摶食有如是過。次觀觸食如被剝牛。爲無量蟲之所唼食。次觀思食如大火聚。識食猶如三百鑽矛。善男子。智者如是觀四食已。於食終不生貪樂想。若猶生貪當觀不淨。何以故。爲離食愛故。於一切食善能分別不淨之想。隨諸不淨令與相似。如是觀已。若得好食及以惡食。受時猶如塗癰瘡藥。終不生於貪愛之心。善男子。智者若能如是觀者。是名成就厭離食想。迦葉菩薩言。世尊。智者觀食作不淨想。爲是實觀虛解觀耶。若是實觀。所觀之食實非不淨。若是虛解。是法云何名爲善想。佛言。善男子。如是觀者亦是實觀亦是虛解。能壞貪食故名爲實。非蟲見蟲故名虛解。善男子。一切有漏皆名爲虛亦能得實。善男子。若有比丘。發心乞食預作是念。我當乞食。願得好者莫得麤惡。願必多得莫令尠少。亦願速得莫令遲晩。如是比丘不名於食得厭離想。所修善法日夜衰耗。不善之法漸當增長。善男子。若有比丘。欲乞食時先當願言。令諸乞者悉得飽滿。其施食者得無量福。我若得食爲療毒身。修習善法利益施主。作是願時所修善法日夜增長。不善之法漸當消滅。善男子。若有比丘能如是修。當知是人不空食於國中信施。善男子。智者具足如是四想。能修世間不可樂想。作是念言。一切世間無處不有生老病死。而我此身無處不生。若世間中無有一處當得離於生老病死。我當云何樂於世間。一切世間無有進得而不退失。是故世間定是無常。若是無常云何智人而樂於世。一一衆生周遍經歷一切世間

王下三本俱無之身二字　而同作如　香花同作華香　瀑三本俱作暴　惜同作憫〇大同作火

具受苦樂。雖復得受梵天之身乃至非想非非想天。命終還墮三惡道中。雖爲四王乃至他化自在天身命終生於畜生道中。或爲師子虎兕豺狼象馬牛驢。次觀轉輪聖王之身。統四天下豪貴自在。福盡貧困衣食不供。智者深觀如是事已。生於世間不可樂想。智者復觀世間有法。所謂舍宅衣服飲食臥具醫藥香花瓔珞種種伎樂財物寶貨。如是等事皆爲離苦。而是等物體卽是苦。云何以苦欲離於苦。善男子。智者如是觀已。於世間物不生愛樂而作樂想。善男子。譬如有人身嬰重病。雖有種種音樂倡伎香花瓔珞。終不於中生貪愛樂。智者觀已亦復如是。善男子。智者深觀。一切世間非歸依處。非解脫處非寂靜處。非可愛處非彼岸處。非是常樂我淨之法。若我貪樂如是世間。我當云何得離是法。如人不樂處闇而求光明還復歸闇。闇卽世間。明卽出世。若我樂世增長黑闇遠離光明。闇卽無明。光卽智明。是智明因卽是世間不可樂想。一切貪結雖是繫縛。然我今者貪於智明不貪世間。智者深觀如是法已。具足世間不可樂想。善男子。有智之人已修世間不可樂想。次修死想。觀是壽命。常爲無量怨讎所遶。念念損減無有增長。猶山瀑水不得停住。亦如朝露勢不久停。如囚趣市步步近死。如牽牛羊詣於屠所。迦葉菩薩言。世尊。云何智者觀念念滅。善男子。譬如四人皆善射術。聚在一處各射一方。俱作是念。我等四箭俱發俱墮。復有一人作是念言。如是四箭及其未墮。我能一時以手接取。善男子。如是之人可說疾不。迦葉菩薩言。如是世尊。佛言。善男子。他行鬼疾復速是人。有飛行鬼復速地行。四天王疾復速飛行。日月神天復速四王。行堅疾天復速日月。衆生壽命復速堅疾。善男子。一息一眴衆生壽命四百生滅。智者若能觀命如是。是名能觀念念滅也。善男子。智者觀命繫屬死王。我若能離如是死王。則得永斷無常壽命。復次智者觀是壽命。猶如河岸臨峻大樹。亦如有人作大逆罪及其受戮無憐惜者。如師子王大飢困時。亦如毒蛇吸大風時。猶如渴馬護惜水時。如大惡鬼瞋恚發時。衆生死王亦復如是。善男子。智者若能作如是觀。是則名爲修習死想。善男子。智者復觀。我今出家設得壽命七日七夜。我當於中精勤修道護持禁戒說法教化利益衆生。是名智者修於死想。復以七日七夜爲多。若得六日五日四日三日二日一日一時乃至出息入息之頃。我當於中精勤修道護持禁戒說法教化利益衆生。是名智者善修死想。智者具足如上六想。卽七想因。何等名七。一者常修想。二者樂修想。三者無

瞋想．四者無妬想．五者善願想．六者無慢想．七者三昧自在想．善男子．若有比丘具足七想．是名沙門名婆羅門．是名寂靜是名淨潔．是名解脫是名智者．是名正見名到彼岸．名大醫王是大商主．是名善解如來祕密．亦知諸佛七種之語名正見知．斷七種語中所生疑網．善男子．若人具足如上六想．當知是人能呵三界．遠離三界滅除三界．於三界中不生愛著．是名智者具足十想．若有比丘具足十想．卽得稱可沙門之相．爾時迦葉菩薩卽於佛前．以偈讚佛

憐愍世間大醫王　身及智慧俱寂靜　無我法中有眞我　是故敬禮無上尊
發心畢竟二不別　如是二心先心難　自未得度先度他　是故我禮初發心
初發已爲人天師　勝出聲聞及緣覺　如是發心過三界　是故得名最無上
世救要求然後得　如來無請而爲師　佛隨世間如犢子　是故得名大悲牛
如來功德滿十方　凡下無智不能讚　我今讚歎慈悲心　爲報身口二種業
世間常樂自利益　如來終不爲是事　能斷衆生世果報　是故我禮自他和
世間逐親作益厚　如來利益無怨親　佛無是相如世人　是故其心等無二
世間說異作業異　如來如說業無差　凡所修行斷諸行　是故得名爲如來
先已了知煩惱過　示現處之爲衆生　久於世間得解脫　樂處生死慈悲故
雖現天身及人身　慈悲隨逐如犢子　如來卽是衆生母　慈心卽是小犢子
自受衆苦念衆生　愍悲念時心不悔　憐愍心盛不覺苦　故我稽首拔苦者
如來雖作無量福　身口意業恒淸淨　常爲衆生不爲己　是故我禮淸淨業
如來受苦不覺苦　見衆生苦如己苦　雖爲衆生處地獄　不生苦想及悔心
一切衆生受異苦　悉是如來一人苦　覺已其心轉堅固　故能勤修無上道
佛具一味大慈心　愍念衆生如子想　衆生不知佛能救　故謗如來及法僧
世間雖具衆煩惱　亦有無量諸過惡　如是衆結及罪過　佛初發心已能壞
唯有諸佛能讚佛　除佛無能讚歎者　我今唯以一法讚　所謂慈心遊世間
如來是慈大法聚　是慈亦能度衆生　卽是無上眞解脫　解脫卽是大涅槃

# 大般涅槃經卷第三十四

足元明俱作是　卽三本俱作則　愍同作憫下同　已元明俱作心　師三本俱作歸　和三本俱作利　相同作想　受衆同作身受　生同作受　是慈同作慈是

# 大般涅槃經卷第二十五

〔麗蹇〕〔宋合〕〔元合〕〔明白〕

宋代沙門惠嚴等依泥洹經加之

## 憍陳如品第二十五之一

爾時世尊告憍陳如。色是無常。因滅是色獲得解脫常住之色。受想行識亦是無常。因滅是識獲得解脫常住之識。憍陳如。色即是苦。因滅是色獲得解脫安樂之色。受想行識亦復如是。憍陳如。色即是空。因滅空色獲得解脫非空之色。受想行識亦復如是。憍陳如。色是無我。因滅是色獲得解脫眞我之色。受想行識亦復如是。憍陳如色是不淨。因滅是色獲得解脫清淨之色。受想行識亦復如是。憍陳如。色是生老病死之相。因滅是色獲得解脫非生老病死相之色。受想行識亦復知是。憍陳如。色是無明因。因滅是色獲得解脫非無明因色。受想行識亦復如是。憍陳如。乃至色是生因。因滅是色獲得解脫非生因色。受想行識亦復如是。憍陳如。色者即是四顚倒因。因滅倒色獲得解脫非四倒因色。受想行識亦復如是。憍陳如。色是無量惡法之因。所謂男女等身食愛欲愛。貪瞋嫉妬惡心慳心。摶食識食思食觸食。卵生胎生濕生化生。五欲五蓋。如是等法皆因於色。因滅色故獲得解脫。無如是等無量惡色。受想行識亦復如是。憍陳如。色即是縛。因滅縛色獲得解脫無縛之色。受想行識亦復如是。憍陳如。色即是流。因滅流色獲得解脫非流之色。受想行識亦復如是。憍陳如。色非歸依。因滅是色獲得解脫歸依之色。受想行識亦復如是。憍陳如。色是瘡疣。因滅是色獲得解脫無瘡疣色。受想行識亦復如是。憍陳如。色非寂靜。因滅是色獲得涅槃寂靜之色。受想行識亦復如是。憍陳如。若有人能如是知者。是名沙門名婆羅門。具足沙門婆羅門法。憍陳如。若離佛法無有沙門無婆羅門。亦無沙門婆羅門法。一切外道虛假詐稱都無實行。雖復作相言有是二實無是處。何以故。若無沙門婆羅門法。云何而言有沙門婆羅門。我常於此大衆之中作師子吼。汝等

品目第上宋元俱有上字五下同無之一二字

顚宋元俱作傎○倒上同有傎字明有顚字○女三本俱作子

無同作及

邏同作羅下同

犍三本俱作揵次同〇子下同無答字

具宋作其

亦當在大衆中作師子吼。爾時外道有無量人。聞是語已心生瞋惡。瞿曇今說我等衆中無有沙門及婆羅門。亦無沙門婆羅門法。我當云何廣設方便語瞿曇言。我等衆中亦有沙門有沙門法。有婆羅門有婆羅門法。時彼衆中有一梵志。唱如是言。諸仁者。瞿曇之言如狂無異何可檢校。世間狂人或歌或舞。或哭或笑或罵或讚。於怨親所不能分別。沙門瞿曇亦復如是。或說我生淨飯王家。或言不生。或說生已行至七步。或說不行。或說從小習學世事。或說我是一切智人。或時處宮受樂生子。或時厭患呵責惡賤。或時親修苦行六年。或時呵責外道苦行。或言從彼鬱頭藍弗阿羅邏等稟承未聞。或時說其無所知曉。或時說言。菩提樹下得阿耨多羅三藐三菩提。或時說言。我不至樹無所剋獲。或時說言。我今此身卽是涅槃。或言身滅乃是涅槃。瞿曇所說如狂無異。何故以此而愁憒耶。諸婆羅門卽便答言。大士。我等今者何得不愁。沙門瞿曇先出家已。說無常苦空無我不淨。我諸弟子聞生恐怖。云何衆生無常苦空無我不淨不受其語。今者瞿曇復來至此娑羅林中。爲諸大衆說有常樂我淨之法。我諸弟子聞是語已。悉捨我去受瞿曇語。以是因緣生大愁苦。爾時復有一婆羅門。作如是言。諸仁者。諦聽諦聽。瞿曇沙門名修慈悲。是言虛妄非眞實也。若有慈悲云何敎我諸弟子等自受其法。慈悲果者隨順他意。今違我願。云何言有。若有說言。沙門瞿曇不爲世間八法所染。是亦虛妄。若言瞿曇少欲知足。今者云何奪我等利。若言種姓是上族者。是亦虛妄。何以故。從昔已來不見不聞大師子王殘害小鼠。若使瞿曇是上種姓。如何今者惱亂我等。若言瞿曇具大勢力。是亦虛妄。何以故。從昔已來亦不見聞金翅鳥王與烏共諍。若言力大。復以何事與我共鬪。若言瞿曇具他心智。是亦虛妄。何以故。若具此智。以何因緣不知我心。諸仁者。我昔曾從先舊智人聞說是事。過百年已世間當有一妖幻出。卽是瞿曇。如是妖惑今於此處娑羅林中將滅不久。汝等今者不應愁惱。爾時復有一尼犍子答言。仁者。我今愁苦不爲自身弟子供養。但爲世間癡闇無眼。不識福田及非福田。棄捨先舊智婆羅門供養年少。以爲愁耳。瞿曇沙門大知呪術。因呪術力能令一身作無量身。令無量身還作一身。或以自身作男女像牛羊象馬。我力能滅如是呪術。瞿曇沙門呪術旣滅。汝等當還多得供養受於安樂。爾時復有一婆羅門。作如是言。諸仁者。瞿曇沙門成就具足無量功德。是故汝等不應與諍。大衆答言。癡人。云何說言沙門瞿曇具

涕元明俱作洟　捔三本俱作角次同○伎同作技　怨親同作親怨　耶帝三本俱作邪諦　進勤修同作勤修習　卽同作則下同

大功德。其生七日母便命終。是可得名福德相耶。婆羅門言。罵時不瞋打時不報。當知卽是大福德相。其身具足三十二相八十種好無量神通。是故當知是福德相。心無憍慢先意問訊。言語柔軟初無麤獷。年志俱盛心不卒暴。王國多財無所愛戀。捨之出家如棄涕唾。是故我說。沙門瞿曇成就具足無量功德。大衆答言。善哉仁者。瞿曇沙門實如所說成就無量神通變化。我不與彼捔試是事。瞿曇沙門受性柔軟不堪苦行。生長深宮不綜外事。唯可軟語。不知伎藝書籍論議。請共詳辯正法之要。彼若勝我我當給事。我若勝彼彼當事我。爾時多有無量外道。和合共往摩伽陀王阿闍世所。王見便問。諸仁者。汝等各各修習聖道是出家人。捨離財貨及在家事。我國人民皆共供養。敬心瞻視無相犯觸。何故和合而來至此。諸仁者。汝等各受異法異戒出家不同。亦復各各自隨戒法出家修道。何因緣故。今者一心而共和合。猶如葉落旋風所吹聚在一處。說何因緣而來至此。我常擁護出家之人。乃至不惜身之與命。爾時一切諸外道衆。咸作是言。大王諦聽。大王今者。是大法橋。是大法礪。是大法秤。卽是一切功德之器。一切功德眞實之性。正法道路。卽是種子之良田也。一切國土之根本也。一切國土之明鏡也。一切諸天之形像也。一切國人之父母也。大王。一切世間功德寶藏卽是王身。何以故名功德藏。王斷國事不擇怨親。其心平等如地水火風。是故名王爲功德藏。大王。現在衆生雖復壽短。王之功德如昔長壽安樂時王。亦如頂生善見忍辱那睺沙王。耶耶帝王。尸毗王。一叉鳩王。如是等王具足善法。大王今者亦復如是。大王。以王因緣國土安樂人民熾盛。是故一切出家之人慕樂此國。持戒精勤修習正道。大王。我經中說。若出家人隨所住國。持戒精進勤修正道。其王亦有修善之分。大王。一切盜賊王已整理。出家之人都無畏懼。今者唯有一大惡人瞿曇沙門。王未檢校。我等甚畏。其人自恃豪族種姓身色具足。又因過去布施之報多得供養。恃此衆事生大憍慢。或因呪術而生憍慢。以是因緣不能苦行。受畜細軟衣服臥具。是故一切世間惡人。爲利養故往集其所。而爲眷屬不能苦行。呪術力故。調伏迦葉及舍利弗目揵連等。今復來至我所住處娑羅林中。宣說是身常樂我淨誘我弟子。大王。瞿曇先說無常無樂無我無淨。我能忍之。今乃宣說常樂我淨。我實不忍。惟願大王。聽我與彼瞿曇論議。王卽答言。諸大士。汝等今者爲誰教導。而令其心狂亂不定。如水濤波旋火之輪獼猴擲樹。是事可恥。智人若聞卽

愍同作憫下同
○鉋同作掊○
悟同作寤
渡同作度
兔同作兎
富羅同作羅富
塱下同無夾注
唯三本俱作惟
地上同無墮字

生憐愍.愚人聞之即生嗤笑.汝等所說非出家相.汝若病風黃水患者.吾悉有藥能療治之.如其鬼病家兄耆婆善能去之.汝等今者欲以手爪鉋須彌山.欲以口齒齚齧金剛.諸大士.譬如愚人見師子王飢時睡眠而欲悟之.如人以指置毒蛇口.如欲以手觸灰覆火.汝等今者亦復如是.善男子.譬如野狐作師子吼.猶如蚊子共金翅鳥捔行遲疾.如兎渡海欲盡其底.汝等今者亦復妃是.汝若夢見勝瞿曇者.是夢狂惑未足可信.諸大士.汝等今者興建是意.猶如飛蛾投大火聚.汝隨我語不須更說.汝雖讚我平等如秤.勿令外人復聞此語.爾時外道復作是言.大王.瞿曇沙門所作幻術到汝邊耶.乃令大王心疑不信是等聖人.大王.不應輕蔑如是大士.大王.是月增減.大海鹹味.摩羅延山.如是等事誰之所作.豈非我等婆羅門耶.大王.不聞阿竭多仙十二年中恒河之水停耳中耶.大王.不聞瞿曇仙人大現神通十二年中變作釋身.幷令釋身作羝羊形作千女根在釋身耶.大王.不聞耆兔仙人一日之中飲四海水令大地乾耶.大王.不聞婆藪仙人爲自在天作三眼耶.大王.不聞羅邏仙人變迦富羅城作塱(他本作國)土耶.大王.婆羅門中有如是等大力諸仙現可檢校.大王.云何見輕蔑耶.王言.諸仁者.若不見信故欲爲者.如來正覺今者近在娑羅林中.汝等可往隨意問難.如來亦當爲汝分別稱汝意答.爾時阿闍世王與諸外道徒衆眷屬.往至佛所頭面作禮右遶三匝.修敬已畢却住一面.白佛言.世尊.是諸外道欲隨意問難.唯願如來隨意答之.佛言.大王.且止我自知時.爾時衆中有婆羅門名闍提首那.作如是言.瞿曇.汝說涅槃是常法耶.如是如是.大婆羅門.婆羅門言.瞿曇.若說涅槃常者.是義不然.何以故.世間之法從子生果相續不斷.如從泥出瓶從縷得衣.瞿曇常說.修無常想獲得涅槃.因是無常果云何常.瞿曇又說.解脫欲貪即是涅槃.解脫色貪及無色貪即是涅槃.滅無明等一切煩惱即是涅槃.從欲乃至無明煩惱皆是無常.因是無常.所得涅槃亦應無常.瞿曇又說.從因故生天.從因故墮地獄.從因得解脫.是故諸法皆從因生.若從因故得解脫者.云何言常.瞿曇亦說.色從緣生故名無常.受想行識亦復如是.如是解脫若是色者當知無常.受想行識亦復如是.若離五陰有解脫者.當知解脫即是虛空.若是虛空不得說言從因緣生.何以故.是常是一遍一切處.瞿曇亦說.從因生者.即是苦也.若是苦者云何復說解脫是樂.瞿曇又說.無常即苦苦即無我.若是無常苦無我者即是不淨.一切從因所生諸

身同作觸
黑下明有者字
〇四三本俱作
五〇然同作若
相同作因
苦上同無言字
唯宋元俱作惟
鬚三本俱作鬢

法。皆無常苦無我不淨。云何復說涅槃即是常樂我淨。若瞿曇說亦常無常亦苦亦樂亦我無我亦淨不淨。如是豈非是二語耶。我亦曾從先舊智人聞說是語。佛若出世言則無二。瞿曇今者說於二語。復言佛即我身是也。是義云何。佛言。婆羅門。如汝所說。我今問汝隨汝意答。婆羅門言。善哉瞿曇。佛言。婆羅門。汝性常耶是無常乎。婆羅門言。我性是常。婆羅門。是性能作一切內外法之因耶。如是瞿曇。佛言。婆羅門。云何作因。瞿曇。從性生大。從大生慢。從慢生十六法。所謂地水火風空五知根。眼耳鼻舌身五業根。手腳口聲男女二根心平等根。是十六法從五法生。色聲香味觸。是二十一法根本有三。一者染。二者麤。三者黑。染者名愛。麤者名瞋。黑名無明。瞿曇。是二十四法皆因性生。婆羅門。是大等法常無常耶。瞿曇。我法性常。大等諸法悉是無常。婆羅門。如汝法中因常果無常。然我法中因雖無常果是常者有何等過。婆羅門。汝等法中有二因不。答言有。佛言云何為二。婆羅門言。一者生因。二者了因。佛言。云何生因。云何了因。婆羅門言。生因者如泥出瓶。了因者如燈照物。佛言。是二種因因性是一。若是一者。可令生因作於了因。可令了因作生因不。不也瞿曇。佛言。若使生因不作了因了因不作生因。可得說言是因相不。婆羅門言。雖不相作故有因相。婆羅門。了因所了即同了不。不也瞿曇。佛言。我法雖從無常獲得涅槃而非無常。婆羅門。從了因得故常樂我淨。從生因得故無常無樂無我無淨。是故如來所說有二。如是二語無有二也。是故如來名無二語。如汝所說。曾從先舊智人邊聞佛出於世無有二語。是言善哉。一切十方三世諸佛所說無差。是故說言佛無二語。云何無差。有同說有無同說無。故名一義。婆羅門。如來世尊雖名二語為了一語故。云何二語了於一語。如眼色二語生識一語。乃至意法亦復如是。婆羅門言。瞿曇。善能分別如是語義。我今未解所出二語了於一語。爾時世尊即為宣說四真諦法。婆羅門。言苦諦者亦二亦一。乃至道諦亦二亦一。婆羅門言。世尊。我已知已。佛言。善男子。云何知已。婆羅門言。世尊。苦諦一切凡夫二是聖人一。乃至道諦亦復如是。佛言。善哉已解。婆羅門言。世尊。我今聞法已得正見。今當歸依佛法僧寶。唯願大慈聽我出家。爾時世尊告憍陳如。汝當為是闍提首那剃除鬚髮聽其出家。時憍陳如即受佛敕為其剃髮。即下手時有二種落。一者鬚髮。二者煩惱。即於坐處得阿羅漢果。復有梵志。姓婆私吒。復作是言。瞿曇所說涅槃常耶。如是梵志婆私吒言。瞿曇。將不說無煩

唯三本倶作惟下同○你同作爾次同

惱爲涅槃耶.如是梵志.婆私吒言.瞿曇.世間四種名之爲無.一者未出之法名之爲無.如瓶未出泥時名爲無瓶.二者已滅之法名之爲無.如瓶壞已名爲無瓶.三者異相互無名之爲無.如牛中無馬馬中無牛.四者畢竟無故名之爲無.如龜毛兎角.瞿曇.若以除煩惱已名涅槃者.涅槃卽無.若是無者云何言有常樂我淨.佛言.善男子.如是涅槃非是先無.同泥時瓶.亦非滅無.同瓶壞無.亦非畢竟無.如龜毛兎角.同於異無.善男子.如汝所言.雖牛中無馬不可說言牛亦是無.雖馬中無牛亦不可說馬亦是無.涅槃亦爾.煩惱中無涅槃.涅槃中無煩惱.是故名爲異相互無.婆私吒言.瞿曇.若以異無爲涅槃者.夫異無者無常樂我淨.瞿曇.云何說言涅槃常樂我淨.佛言.善男子.如汝所說是異無者有三種無.牛馬悉是先無後有.是名先無.已有還無.是名壞無.異相無者.如汝所說.善男子.是三種無涅槃中無.是故涅槃常樂我淨.如世病人.一者熱病.二者風病.三者冷病.是三種病三藥能治.有熱病者酥能治之.有風病者油能治之.有冷病者蜜能治之.是三種藥能治如是三種惡病.善男子.風中無油.油中無風.乃至蜜中無冷.冷中無蜜.是故能治.一切衆生亦復如是有三種病.一者貪.二者瞋.三者癡.如是三病有三種藥.不淨觀者能爲貪藥.慈心觀者能爲瞋藥.觀因緣智能爲癡藥.善男子.爲除貪故作非貪觀.爲除瞋故作非瞋觀.爲除癡故作非癡觀.三種病中無三種藥.三種藥中無三種病.善男子.三種病中無三藥故.無常無我無樂無淨.三種藥中無三種病.是故得稱常樂我淨.婆私吒言.世尊.如來爲我說常無常.云何爲常.云何無常.佛言.善男子.色是無常.解脫色常.乃至識是無常.解脫識常.善男子.若有善男子善女人.能觀色乃至識是無常者.當知是人獲得常法.婆私吒言.世尊.我今已知常無常法.佛言.善男子.汝云何知常無常法.婆私吒言.世尊.我今知我色是無常得解脫常.乃至識亦如是.佛言.善男子.汝今善哉已報是身.告憍陳如.是婆私吒已證阿羅漢果.汝可施其三衣鉢器.時憍陳如如佛所勅施其衣鉢.時婆私吒受衣鉢已.作如是言.大德憍陳如.我今因是弊惡之身得善果報.唯願大德.爲我屈意至世尊所具宣我心.我既惡人觸犯如來|你瞿曇姓.|唯願爲我懺悔此罪.我亦不不能久住毒身.今入涅槃.時憍陳如卽往佛所.作如是言.世尊.婆私吒比丘生慙愧心.自言頑嚚觸犯如來|你瞿曇姓.不能久住是毒虵身.今欲滅身寄我懺悔.佛言.憍陳如.婆私吒比丘已於過去無量佛所成就善根.今受我

二下同無者字

說三本俱作言

語如法而住。如法住故獲得正果。汝等應當供養其身。爾時憍陳如從佛聞已。還其身所而設供養。時婆私吒於焚身時作種種神足。諸外道輩見是事已。高聲唱言。是婆私吒已得瞿曇沙門呪術。是人不久復當勝彼瞿曇沙門。爾時衆中復有梵志。名曰先尼。復作是言。瞿曇。有我耶。如來默然。瞿曇。無我耶。如來默然。第二第三亦如是問。佛皆默然。先尼言。瞿曇。若一切衆生有我遍一切處是一作者。瞿曇。何故默然不答。佛言。先尼。汝說是我遍一切處耶。先尼答言。瞿曇。不但我說一切智人亦如是說。佛言。善男子。若我周遍一切處者。應當五道一時受報。若有五道一時受報。汝等梵志何因緣故。不造衆惡爲遮地獄。修諸善法爲受天身。先尼言。瞿曇。我法中我則有二種。一作身我。二者常身我。爲作身我修離惡法不入地獄。修諸善法生於天上。佛言。善男子。如汝說我遍一切處。如是我者若作身中當知無常。若作身無云何言遍。瞿曇。我所立我亦在作中亦是常法。瞿曇。如人失火燒舍宅時。其主出去。不可說言舍宅被燒主亦被燒。我法亦爾。而此作身雖是無常。當無常時我則出去。是故我我亦遍亦常。佛言。善男子。如汝說我亦遍亦常。是義不然。何以故。遍有二種。一者常。二者無常。復有二種。一色。二無色。是故若言一切有者。亦常亦無常。亦色亦無色。若言舍主得出不名無常。是義不然。何以故。舍不名主主不名舍。異燒異出故得如是。我則不爾。何以故。我卽是色色卽是我。無色卽我我卽無色。云何而言色無常時我則得出。善男子。汝意若謂一切衆生同一我者。如是卽違世出世法。何以故。世間法名父母子女。若我是一。父卽是子子卽是父。母卽是女女卽是母。怨卽是親親卽是怨。此卽是彼彼卽是此。是故若說一切衆生同一我者。是卽違背世出世法。先尼言。我亦不說一切衆生同於一我。乃說一人各有一我。佛言。善男子。若言一人各有一我。是爲多我。是義不然。何以故。如汝先說我遍一切。若遍一切一切衆生業根應同。天得見時佛得亦見。天得作時佛得亦作。天得聞時佛得亦聞。一切諸法皆亦如是。若天得見非佛得見者。不應說我遍一切處。若不遍者是卽無常。先尼言。瞿曇。一切衆生我遍一切。法與非法不遍一切。以是義故。佛得作異天得作異。是故瞿曇不應說言佛得見時天得應見。佛得聞時天得應聞。佛言。善男子。法與非法非業作耶。先尼言。瞿曇。是業所作。佛言。善男子。若法非法是業作者。卽是同法。云何言異。何以故。佛得業處有天得我。天得業處有佛得我。是故佛得作時天得亦作。法與非

礙同作閡

吉元作告

敎元明俱作破

今汝明作汝今　○眞三本俱作見

法亦應如是。善男子。是故一切衆生法與非法若如是者。所得果報亦應不異。善男子。從子出果是子終不思惟分別。我唯當作婆羅門果。不與刹利毘舍首陀而作果也。何以故。從子出果終不障礙如是四姓。法與非法亦復如是不能分別。我唯當與佛得作果。不與天得作果。作天得果。不作佛得果。何以故。業平等故。先尼言。瞿曇。譬如一室有百千燈炷雖有異明則無差。燈炷別異喩法非法。其明無差喩衆生我。佛言。善男子。汝說燈明以喩我者。是義不然。何以故。室異燈異。是燈光明亦在炷邊亦遍室中。汝所言我若如是者。法非法邊俱應有我。我中亦應有法非法。若法非法無有我者。不得說言遍一切處。若俱有者何得復以炷明爲喩。善男子。汝意若謂炷之與明眞實別異。何因緣故炷增明盛炷枯明滅。是故不應以法非法喩於燈炷光明無差喩於我也。何以故。法非法我三事卽一。先尼言。瞿曇。汝引燈喩是事不吉。何以故。燈喩若吉我已先引。如其不吉何故復說。善男子。我所引喩都亦不作。吉以不吉隨汝意說。是喩亦說離炷有明。卽炷有明。汝心不等故說燈炷喩法非法。明則喩我。是故責汝。炷卽是明離炷有明。法卽有我我卽有法。非法卽我我卽非法。汝今何故。但受一邊不受一邊。如是喩者於汝不吉。是故我今還以敎汝。善男子。如是喩者卽是非喩。是非喩故於我卽吉於汝不吉。善男子。汝意若謂若我不吉汝亦不吉。是義不然。何以故。見世間人自刀自害自作他用。汝所引喩亦復如是。於我則吉於汝不吉。先尼言。瞿曇。汝先責我心不平等。今汝所說亦不平等。何以故。瞿曇。今者以吉向己不吉向我。以是推之眞是不平。佛言。善男子。如我不平能破汝不平。是故汝平我之不平卽是吉也。我之不平破汝不平。令汝得平卽是我平。何以故。同諸聖人得平等故。先尼言。瞿曇。我常是平。汝云何言壞我不平。一切衆生平等有我。云何言我是不平耶。善男子。汝亦說言。當受地獄。當受餓鬼。當受畜生。當受人天。我若先遍五道中者。云何方言當受諸趣。汝亦說言。父母和合然後生子。若子先有云何復言和合已有。是故一人有五趣身。若是五處先有身者。何因緣故爲身造業。是故不平。善男子。汝意若謂我是作者。是義不然。何以故。若我作者何因緣故自作苦事。然今衆生實有受苦。是故當知我非作者。若言是苦非我所作不從因生。一切諸法亦當如是不從因生。何因緣故說我作耶。善男子。衆生苦樂實從因緣。如是苦樂能作憂喜。憂時無喜喜時無憂。或喜或憂。智人云何說是常耶。善男子。汝說我常。若是

乃上三本俱無時字
人鎌同作鎌人
不同作非
更不復同作終不更〇智同作知

常者云何說有十時別異。常法不應有歌羅邏時乃至老時。虛空常法尚無一時況有十時。善男子。我者非是歌羅邏時乃至老時。云何說有十時別異。善男子。若我作者是我亦有盛時衰時。衆生亦有盛時衰時。若我爾者云何是常。善男子。我若作者云何一人有利有鈍。善男子。我若作者是我能作身業口業意業。若是我所作者云何口說無有我耶。云何自疑有耶無耶。善男子。汝意若謂離眼有見。是義不然。何以故。若離眼已別有見者何須此眼。乃至身根亦復如是。汝意若謂。我雖能見要因眼見。是亦不然。何以故。如有人言。須曼那花能燒大村。云何能燒。因火能燒。汝立我見亦復如是。先尼言。瞿曇。如人執鎌則能刈草。我因五根見聞至觸亦復如是。善男子。人鎌各異。是故執鎌能有所作。離根之外更無別我。云何說言我因諸根能有所作。善男子。汝意若謂執鎌能刈我亦如是。是我有手耶爲無手乎。若有手者何不自執。若無手者云何說言我是作者。善男子。能刈草者卽是鎌也。非我非人。若我人能何故因鎌。善男子。人有二業。一則執草。二則執鎌。是鎌唯有能斷之功。衆生見法亦復如是。眼能見色從和合生。若從因緣和合見者。智人云何說言有我。善男子。汝意若謂身作我受。是義不然。何以故。世間不見天得作業佛得受果。若言不是身作我非因受。汝等何故從於因緣求解脫耶。汝先是身非因緣生得解脫已。亦應非因而更生身。如身一切煩惱亦應如是。先尼言。瞿曇。我有二種。一者有知。二者無知。無知之我能得於身。有知之我能捨離身。猶如坏瓶既被燒已失於本色更不復生。智者煩惱亦復如是。旣滅壞已更不復生。佛言。善男子。所言知者智能知耶我能知乎。若智能知何故說言我是知耶。若我知者何故方便更求於智。汝意若謂我因智知同花喩壞。善男子。譬如刺樹性自能刺。不得說言樹執刺刺。智亦如是。智自能知云何說言我執智知。善男子。如汝法中我得解脫。無知我得知我得耶。若無知得當知猶故具是煩惱。若知得者當知已有五情諸根。何以故。離根之外別更無知。若具諸根云何復名得解脫耶。若言是我其性清淨離於五根。云何說言遍五道有。以何因緣爲解脫故修諸善法。善男子。譬如有人拔虛空刺。汝亦如是。我若清淨云何復言斷諸煩惱。汝意若謂不從因緣獲得解脫。一切畜生何故不得。先尼言。瞿曇。若無我者誰能憶念。佛告先尼。若有我者何緣復忘。善男子。若念是我者何因緣故念於惡念。念所不念不念所念。先尼復言。瞿曇。若無我者誰見誰聞。佛言。善男子。內有

糠三本俱作穅次同

酥宋作蘇○蓽茇同作畢鉢○桵同作桵

識意元明俱作意識

樂我宋元俱作我樂

何下三本俱有言字

六入外有六塵.內外和合生六種識.是六種識因緣得名.善男子.譬如一火因木得故名爲木火.因草得故名爲草火.因糠得故名爲糠火.因牛糞得名牛糞火.衆生意識亦復如是.因眼因色因明因欲名爲眼識.善男子.如是眼識不在眼中乃至欲中.四事和合故生是識.乃至意識亦復如是.若是因緣和合故生智.不應說見.卽是我乃至觸卽是我.善男子.是故我說眼識乃至意識一切諸法卽是幻也.云何如幻.本無今有已有還無.善男子.譬如酥麨蜜薑胡椒蓽茇蒲萄胡桃石榴桵子如是和合名歡喜丸.離是和合無歡喜丸.內外六入是名衆生我人士夫.離內外入無別衆生我人士夫.先尼言.瞿曇.若無我者云何說言我見我聞我苦我樂我憂我喜.佛言.善男子.若言我見我聞名有我者.何因緣故世間復言.汝所作罪非我見聞.善男子.譬如四兵和合名軍.如是四兵不名爲一.而亦說言.我軍勇健我軍勝彼.是內外入和合所作亦復如是.雖不是一亦得說言我作我受我見我聞我苦我樂.先尼言.瞿曇.如汝所言.內外和合誰出聲言我作我受.佛言.先尼.從愛無明因緣生業.從業生有.從有出生無量心數.心生覺觀.覺觀動風.風隨心觸喉舌齒脣.衆生想倒聲出說言.我作我受我見我聞.善男子.如幢頭鈴.風因緣故便出音聲.風大聲大風小聲小無有作者.善男子.譬如熱鐵投之水中出種種聲.是中眞實無有作者.善男子.凡夫不能思惟分別如是事故.說言有我及有我所我作我受.先尼言.如瞿曇說.無我我所何緣復說常樂我淨.佛言.善男子.我亦不說內外六入及六識意常樂我淨.我乃宣說滅內外入所生六識名之爲常.以是常故名之爲我.有常我故名之爲樂.常我樂故名之爲淨.善男子.衆生厭苦斷是苦因.自在遠離是名爲我.以是因緣我今宣說常樂我淨.先尼言.世尊.唯願大慈爲我宣說.我當云何獲得如是常樂我淨.佛言.善男子.一切世間從本已來具足大慢能增長慢.亦復造作慢因慢業.是故今者受慢果報.不能遠離一切煩惱得常樂我淨.若諸衆生欲得遠離一切煩惱.先當離慢.先尼言.世尊.如是如是.誠如聖教.我先有慢.因慢因緣故稱如來你瞿曇姓.我今已離如是大慢.是故誠心啓請求法.云何當得常樂我淨.佛言.善男子.諦聽諦聽.今當爲汝分別解脫.善男子.若能非自非他非衆生者遠離是法.先尼言.世尊.我已知解得正法眼.佛言.善男子.汝云何知已解已得正法眼.世尊.所言色者非自非他非諸衆生.乃至識亦復如是.我如是觀得正法眼.世尊.我今甚樂出家修道.願見

聽許。佛言。善來比丘。卽時具足淸淨梵行證阿羅漢果。外道衆中復有梵志姓迦葉氏。復作是言。瞿曇。身卽是命身異命異。如來默然。第二第三亦復如是。梵志復言。瞿曇。若人捨身未得後身。於其中間豈可不名身異命異。若是異者瞿曇何故默然不答。善男子。我說身命皆從因緣非不因緣。如身命一切法亦如是。梵志復言。瞿曇。我見世間有法不從因緣。佛言。梵志。汝云何見世間有法不從因緣。梵志言。我見大火焚燒榛木風吹絕焰墮在餘處。是豈不名無因緣耶。佛言。善男子。我說是火亦從因生非不從因。梵志言。瞿曇。絕焰去時不因薪炭。云何而言因於因緣。佛言。善男子。雖無薪炭因風而去。風因緣故其焰不滅。瞿曇。若人捨身未得後身中間壽命誰爲因緣。佛言。梵志。無明與愛而爲因緣。是無明愛二因緣故壽命得住。善男子。有因緣故身卽是命命卽是身。有因緣故身異命異。智者不應一向而說身異命異。梵志言。世尊。唯願爲我分別解說。令我了了得知因果。佛言。梵志。因卽五陰果亦五陰。善男子。若有衆生不然火者是則無煙。梵志言。世尊。我已知已我已解已。佛言。善男子。汝云何知云何解。世尊。火卽煩惱。能於地獄餓鬼畜生人天燒然。煙者卽是煩惱果報。無常不淨臭穢可惡。是故名煙。若有衆生不作煩惱。是人則無煩惱果報。是故如來說不然火則無有煙。世尊。我已正見。唯願慈矜聽我出家。爾時世尊告憍陳如。聽是梵志出家受戒。時憍陳如受佛勅已。和合衆僧聽其出家受具足戒。經五日已得阿羅漢果。外道衆中復有梵志。名曰富那。復作是言。瞿曇。汝見世間是常法已說言常耶。如是義者實耶虛耶。常無常亦常無常非常非無常有邊無邊亦有邊亦無邊非有邊非無邊。是身是命身異命異。如來滅後如去不如去亦如去不如去非如去非不如去。佛言。富那。我不說世間常虛實。常無常亦常無常非常非無常。有邊無邊亦有邊亦無邊非有邊非無邊。是身是命身異命異。如來滅後如去不如去亦如去不如去非如去非不如去。富那復言。瞿曇。今者見何罪過不作是說。佛言。富那。若有人說世間是常唯此爲實餘妄語者。是名爲見。見所見處是名見行。是名見業是名見著。是名見縛是名見苦是名見取是名見怖是名見熱是名見纏。富那。凡夫之人爲見所纏不能遠離生老病死。迴流六趣受無量苦。乃至非如去非不如去亦復如是。富那。我見是見有如是過。是故不著不爲人說。瞿曇。若見如是罪過不著不說。瞿曇。今者何見何著何所宣說。佛言。善男子。夫見著者名生死法。如來已離生死法故。

如上三本俱無善男子三字

請同作欲○採同作采

是故不著。善男子。如來名爲能見能說不名爲著。瞿曇。云何能見。云何能說。佛言。善男子。我能明見苦集滅道。分別宣說如是四諦。我見如是故能遠離一切見一切愛一切流一切慢。是故我具淸淨梵行無上寂靜獲得常身。是身亦非東西南北。富那言。瞿曇何因緣故常身非是東西南北。佛言善男子我今問汝隨汝意答於意云何善男子。如於汝前然大火聚。當其然時汝知然不。如是瞿曇。是火滅時汝知滅不。如是瞿曇。富那。若有人問汝前火聚然從何來滅何所至。當云何答。瞿曇。若有問者我當答言。是火生時賴於衆緣。本緣已盡新緣未至是火則滅。若復有問是火滅已至何方面。復云何答。瞿曇。我當答言。緣盡故滅不至方所。善男子。如來亦爾。若有無常色乃至無常識因愛故然。然者卽受二十五有。是故然時可說是火東西南北。現在愛滅二十五有果報不然。以不然故不可說有東西南北。善男子。如來已滅無常之色至無常識。是故身常。身若是常不得說有東西南北。富那言。請說一喩唯願聽採。佛言。善哉善哉。隨意說之。世尊。如大村外有娑羅林。中有一樹先林而生足一百年。是時林主灌之以水隨時修治。其樹陳朽皮膚枝葉悉皆脫落唯貞實在。如來亦爾。所有陳故悉已除盡。唯有一切眞實法在。世尊。我今甚樂出家修道。佛言。善來比丘。說是語已。卽時出家漏盡證得阿羅漢果

大般涅槃經卷第三十五

# 大般涅槃經卷第三十六

〔麗宦〕〔宋合〕〔元合〕〔明白〕

宋代沙門惠嚴等依泥洹經加之

## 憍陳如品下

復有梵志名曰清淨浮作如是言。瞿曇。一切衆生不知何法。見世間常無常亦常無常非有常非無常乃至非如去非不如去。佛言。善男子。不知色故乃至不知識故。見世間常乃至非如去非不如去。梵志言。瞿曇。衆生知何法故不見世間常乃至非如去非不如去。佛言。善男子。知色故乃至知識故。不見世間常乃至非如去非不如去。梵志言。世尊。唯願爲我分別解說世間常無常。佛言。善男子。若人捨故不造新業。是人能知常與無常。梵志言。世尊。我已知見。佛言。善男子。汝云何見。汝云何知。世尊。故名無明與愛。新名取有。若人遠離是無明愛不作取有。是人眞實知常無常。我今已得正法淨眼歸依三寶。唯願如來聽我出家。佛告憍陳如。聽是梵志出家受戒。時憍陳如受佛勅已。將至僧中爲作羯磨令得出家。十五日後諸漏永盡得阿羅漢果。犢子梵志復作是言。瞿曇。我今欲問能見聽不。如來默然。第二第三亦復如是。犢子復言。瞿曇。我久與汝共爲親友。汝之與我義無有二。我欲諮問何故默然。爾時世尊作是思惟。如是梵志其性儒雅純善質直。常爲知故而來諮啓不爲惱亂。彼若問者當隨意答。佛言。犢子。善哉善哉。隨所疑問吾當答之。犢子言。瞿曇。世有善耶。如是梵志。有不善耶。如是梵志。瞿曇。願爲我說令我得知善不善法。佛言。善男子。我能分別廣說其義。今當爲汝簡略說之。善男子。欲名不善。解脫欲者名之爲善。瞋恚愚癡亦復如是。殺名不善不殺名善。乃至邪見亦復如是。善男子。我今爲汝已說三種善不善法。及說十種善不善法。若我弟子能作如是分別三種善不善法乃至十種善不善法。當知是人能盡貪欲瞋恚愚癡一切諸漏。斷一切有。梵志言。瞿曇。是佛法中頗有一比丘。能盡如是貪欲瞋癡一切諸漏一切有不。佛言。善男子。是佛

品目下明作第二十五之二六字

名曰清淨浮三本俱作名淨二字

唯同作惟下同

見三本俱作解

頗同作盡

恚同作瞋
網下同無不字
雨宋作兩
礙三本俱作閡下同

法中非一二三乃至五百。乃有無量諸比丘等。能盡如是貪欲恚癡一切諸漏一切諸有。瞿曇。置一比丘。是佛法中頗有一比丘尼。能盡如是貪欲瞋癡一切諸漏一切有不。佛言。善男子。是佛法中非一二三乃至五百。乃有無量諸比丘尼。能斷如是貪欲瞋癡一切諸漏一切諸有。犢子言。瞿曇。置一比丘一比丘尼。是佛法中頗有一優婆塞。持戒精勤梵行淸淨度疑彼岸斷於疑網不。佛言。善男子。我佛法中非一二三乃至五百。乃有無量諸優婆塞。持戒精勤梵行淸淨。斷五下結得阿那含。度疑彼岸斷於疑網。犢子言。瞿曇。置一比丘一比丘尼一優婆塞。是佛法中頗有一優婆夷。持戒精勤梵行淸淨。度疑彼岸斷疑網不。佛言。善男子。我佛法中非一二三乃至五百。乃有無量諸優婆夷。持戒精勤梵行淸淨。斷五下結得阿那含。度疑彼岸斷於疑網。犢子言。瞿曇。置一比丘一比丘尼盡一切漏。一優婆塞一優婆夷持戒精勤梵行淸淨斷於疑網。是佛法中頗有優婆塞。受五欲樂心無疑網不。佛言。善男子。是佛法中非一二三乃至五百。乃有無量諸優婆塞。斷於三結得須陀洹。薄貪恚癡得斯陀含。如優婆塞優婆夷亦如是。世尊。我於今者樂說譬喩。佛言。善哉善哉。樂說便說。世尊。譬如難陀婆難陀龍王等降大雨。如來法雨亦復如是。平等雨於優婆塞優婆夷。世尊。若諸外道欲來出家。不審如來幾月試之。佛言。善男子。皆四月試不必一種。世尊。若不一種。唯願大慈聽我出家。爾時世尊告憍陳如。聽是犢子出家受戒。時憍陳如受佛勅已。立衆僧中爲作羯磨。於出家後滿十五日得須陀洹果。既得果已復作是念。若有智慧從學得者。我今已得堪任見佛。卽往佛所頭面作禮。修敬已畢卻住一面白佛言。世尊。諸有智慧從學得者我今已得。唯願爲我重分別說。令我獲得無學智慧。佛言。善男子。汝勤精進修習二法。一奢摩他二毗婆舍那。善男子。若有比丘欲得須陀洹果。亦當勤修如是二法。若復欲得斯陀含果阿那含果阿羅漢果。亦當修習如是二法。善男子。若有比丘欲得四禪四無量心。六神通。八背捨八勝處。無諍智頂智畢竟智四無礙智。金剛三昧盡智無生智。亦當修習如是二法。善男子。若欲得十住地無生法忍無相法忍不可思議法忍。聖行梵行天行菩薩行。虛空三昧智印三昧。空無相無作三昧。地三昧不退三昧。首楞嚴三昧金剛三昧。阿耨多羅三藐三菩提佛行。亦當修習如是二法。犢子聞已禮拜而出。在娑羅林中修是二法。不久卽得阿羅漢果。是時復有無量比丘欲往佛所。犢子見已問言。大德。欲何所

如上同有瞿曇二字○說上同有所字

机同作几○瓔同作纓下同○性下同無瞿曇二字次同

自能明作能自○能自三本俱作自能○下明作不○有自三本俱作自有○瞿上同無如字

---

至。諸比丘言。欲往佛所。犢子復言。諸大德。若至佛所願爲宣啓。犢子梵志修二法已得無學智。今報佛恩入於涅槃。時諸比丘至佛所已白佛言。世尊。犢子比丘寄我等語。世尊。犢子梵志修習二法得無學智。今報佛恩入於涅槃。佛言。善男子。犢子梵志得阿羅漢果。汝等可往供養其身。時諸比丘受佛勅已。還其尸所大設供養。納衣梵志復作是言。如瞿曇說。無量世中作善不善。未來還得善不善身。是義不然。何以故。如瞿曇說因煩惱故獲得是身。若因煩惱獲得身者。身爲在先煩惱在先。若煩惱在先。誰之所作住在何處。若身在先。云何說言因煩惱得。是故若言煩惱在先是則不可。若身在先是亦不可。若言一時又亦不可。先後一時義皆不可。是故我說。一切諸法皆有自性不從因緣。復次瞿曇。堅是地性。濕是水性。熱是火性。動是風性。無所罣礙是虛空性。是五大性非因緣有若使世間有一法性非因緣有。一切法性亦應如是非因緣有。若有一法從因緣有。何因緣故五大之性不從因緣。瞿曇。衆生善身及不善身獲得解脫。皆是自性不從因緣。是故我說一切諸法自性故有非因緣生。復次瞿曇。世間之法有定用處。譬如工匠云如是木任作車輿如是任作門戶牀机。亦如金師所可造作在額上者名之爲鬘。在頸下者名之爲瓔。在臂上者名之爲釧。在指上者。名之爲環。用處定故。名爲定性。瞿曇。一切衆生亦復如是。有五道性故有地獄餓鬼畜生人天。若如是者云何說言從於因緣。復次瞿曇。一切衆生其性各異。是故名爲一切自性。瞿曇。如龜陸生自能入水。犢子生已能自飲乳。魚見鉤餌自然吞食。毒蛇生已自然食土。如是等事誰有教者。如刺生已自然頭尖。飛鳥毛羽自然色別。世間衆生亦復如是。有利有鈍有富有貧有好有醜。有得解脫有得下有。是故當知。一切法中各有自性。復次如瞿曇說。貪欲瞋癡從因緣生。如是三毒因緣五塵。是義不然。何以故。衆生睡時遠離五塵。亦復生於貪欲瞋癡。在胎亦爾。初出胎時未能分別五塵好醜。亦復生於貪欲瞋癡。諸仙賢聖處閑寂處無有五塵。亦能生於貪欲瞋癡。亦復有人因於五塵生於不貪不瞋不癡。是故不必從於因緣生一切法。以自性故。復次瞿曇。我見世人五根不具多饒財寶得大自在。有根具足貧窮下賤不得自在爲人僕使。若有因緣何故如是。是故諸法各有自性不由因緣。復次瞿曇。世間小兒亦復未能分別五塵。或笑或啼。笑時知喜。啼時知愁。是故當知。一切諸法各有自性。復次瞿曇。世法有二。一者有。二者無。有即虛空。無即兎角。如是二法。

子生明作生子　唻三本俱作嗽次同〇祠祀同作祀祠　味同作物　漿明作漿　故下三本俱無善男子三字〇諸法皆三字同作法

一是有故不從因緣。二是無故亦非因緣。是故諸法有自性故不從因緣。佛言。善男子。如汝所言如五大性一切諸法亦應如是。是義不然。何以故。善男子。汝法中以五大是常。何因緣故一切諸法悉不是常。若世間物是無常者。是五大性何因緣故不是無常。若五大常世間之物亦應是常。是故汝說。五大之性有自性故不從因緣。令一切法同五大者。無有是處。善男子。汝言用處定故有自性者。是義不然。何以故。皆從因緣得名字故。若從因得名。亦從因得義。云何名爲從因得名。如在額上名之爲鬘。在頸名瓔。在臂名釧。在車名輪。火在草木名草木火。善男子。木初生時無箭矟性。從因緣故工造爲箭。從因緣故工造爲矟。是故不應說一切法有自性也。善男子。汝言如龜陸生性自入水。犢子生已性能飲乳。是義不然。何以故。若言入水非因緣者。俱非因緣何不入火。犢子生已性能唻乳不從因緣。俱非因緣何不唻角。善男子。若言諸法悉有自性不須教習無有增長。是義不然。何以故。今見有教緣教增長。是故當知無有自性。善男子若一切法有自性者。諸婆羅門一切不應爲淸淨身殺羊祠祀。若爲身祠。是故當知無有自性。善男子。世間語法凡有三種。一者欲作。二者作時。三者作已。若一切法有自性者。何故世中有是三語。有三語故。故知一切無有自性。善男子。若言諸法有自性者。當知諸法各有定性。若有定性甘蔗一物何緣作漿。作蜜石蜜酒苦酒等。若有一性何緣乃出如是等味。若一物中出如是等。當知諸法不得一定各有一性。善男子。若一切法有定性者。聖人何故飮甘蔗漿。石蜜黑蜜酒時不飮。後爲苦酒復還得飮。是故當知無有定性。若無定性云何不因因緣而有。善男子。汝說一切法有自性者。云何說喩。若有喩者當知諸法無有自性。若有自性當知無喩。世間智者皆說譬喩。當知諸法無有自性無有一性。善男子。汝言身爲在先煩惱在先者。是義不然。何以故。若我當說身在先者。汝可難言汝亦同我。身不在先何因緣故而作是難。善男子。一切衆生身及煩惱俱無先後一時而有。雖一時有要因煩惱而得有身。終不因身有煩惱也。汝意若謂如人二眼一時而得不相因待左不因右右不因左。煩惱及身亦如是者。是義不然。何以故。善男子。世間眼見炷之與明雖復一時明要因炷。終不因明而有炷也。善男子。汝意若謂身不在先故知無因。是義不然。何以故。若以身先無因緣故名爲無者。汝不應說一切諸法皆有因緣。若言不見故不說者。今見瓶等從因緣出。何故不說如瓶。身先因緣亦復如是

觸下三本俱無故字

五塵三本俱作五情

婆上同無一字

善男子。若見不見一切諸法。皆從因緣無有自性。善男子。若言一切法悉有自性無因緣者。汝何因緣說於五大。是五大性即是因緣。善男子。五大因緣雖復如是。亦不應說諸法皆同五大因緣。如世人說。一切出家精勤持戒。旃陀羅等亦應如是精勤持戒。善男子。汝言五大有定堅性。我觀是性轉故不定。善男子。酥蠟胡膠於汝法中名之爲地。是地不定。或同於水。或同於地。故不得說自性故堅。善男子。白鑞鉛錫銅鐵金銀。於汝法中名之爲火。是火四性。流時水性。動時風性。熱時火性。堅時地性。云何說言定名火性。善男子。水性名流。若水凍時不名爲地故名水者。何因緣故波動之時不名爲風。若動不名風。凍時亦應不名爲水。若是二義從因緣者。何故說言一切諸法不從因緣。善男子。若言五根性能見聞覺知觸故皆是自性不從因緣。是義不然。何以故。善男子。自性之性性不可轉。若言眼性見者常應能見。不應有見有不見時。是故當知從因緣見非無因緣。善男子。汝言非因五塵生貪解脫。是義不然。何以故。善男子。生貪解脫雖復不因五塵因緣。惡覺觀故則生貪欲。善覺觀故則得解脫。善男子。內因緣故生貪解脫。外因緣故則能增長。是故汝言。一切諸法各有自性。不因五塵生貪解脫。無有是處。善男子。汝言具足諸根乏於財物不得自在。諸根殘缺多饒財寶得大自在。因此以明有自性故不從因緣者。是義不然。何以故。善男子。衆生從業而有果報。如是果報則有三種。一者現報。二者生報。三者後報。貧窮巨富根具不具是業各異。若有自性。具諸根者應饒財寶。饒財寶者應具諸根。今則不爾。是故定知無有自性皆從因緣。善男子。如汝所言。世間小兒未能分別五塵因緣亦啼亦笑。是故一切有自性者。是義不然。何以故。若自性者笑應常笑啼應常啼。不應一笑一啼。若一笑一啼。當知一切悉從因緣。是故不應說一切法有自性故不從因緣。梵志言。世尊。若一切法從因緣有。如是身者從何因緣。佛言。善男子。是身因緣煩惱與業。梵志言。世尊。如其是身從煩惱業。是煩惱業可斷不耶。佛言。如是如是。梵志復言。世尊。唯願爲我分別解說。令我聞已不移是處悉得斷之。佛言。善男子。若知二邊中間無礙。是人則能斷煩惱業。世尊。我已知解得正法眼。佛言。汝云何知。世尊。二邊即色及色解脫。中間即是八正道也。受想行識亦復如是。佛言。善哉善哉。善男子。善知二邊斷煩惱業。世尊。唯願聽我出家受戒。佛言。善來比丘。即時斷除三界煩惱得阿羅漢果。爾時復有一婆羅門。名曰弘廣。復作是言。瞿曇。知我今所念

不。佛言。善男子。涅槃是常有爲無常。曲卽邪見直卽聖道。婆羅門言。瞿曇。何因緣故作如是說。善男子。吾意每謂。乞食是常別請無常。曲是戶鑰直是帝幢。是故我說。涅槃是常有爲無常。曲謂邪見直謂八正。非如汝先所思惟也。婆羅門言。瞿曇。實知我心。是八正道悉令衆生得盡滅不。爾時世尊默然不答。婆羅門言。瞿曇。已知我心。我今所問何故默然而不見答。時憍陳如卽作是言。大婆羅門。若有問世有邊無邊。如來常爾默然不答。八聖是直涅槃是常。若修八聖卽得滅盡。若不修習|則不能得。大婆羅門。譬如大城其城四壁都無孔竅唯有一門。其守門者聰明有智能善分別。可放則放可遮則遮。雖不能知出入多少。定知一切有入出者皆由此門。善男子。如來亦爾。城喩涅槃。門喩八正。守門之人喩於如來。善男子。如來今者雖不答汝盡與不盡。其有盡者要當修習是八正道。婆羅門言。善哉善哉。大德憍陳如。如來善能說微妙法。我今實欲知城知道自作守門。憍陳如言。善哉善哉。汝婆羅門。能發無上廣大之心。佛言。止止憍陳如。是婆羅門非適今日發是心也。乃往過去過無量|劫有佛世尊名普光明如來應正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。是人先已於彼佛所發阿耨多羅三藐三菩提心。此賢劫中當得作佛。久已通達了知法相。爲衆生故現處外道示無所知。以是因緣。汝憍陳如。不應讚言善哉善哉汝今能發如是大心。爾時世尊知已卽告憍陳如言。阿難比丘今爲所在。憍陳如言。世尊。阿難比丘在娑羅林外。去此大會十二由旬。而爲六萬四千億魔之所嬈亂。是諸魔衆悉自變身爲如來像。或有宣說一切諸法從因緣生。或有說言一切諸法不從因生。或有說言一切因緣皆是常法。|從緣生者悉是無常。或有說言五陰是實或說虛假。入界亦爾。或有說言有十二緣。或有說言正有四緣。或說諸法如幻如化如熱時焰。或有說言因聞得法。或有說言因思得法。或有說言因修得法。或復有說不淨觀法。或復有說出息入息。或復有說四念處觀。或復有說三種觀義七種方便。或復有說煖法頂法忍法世間第一法學無學地。菩薩初住乃至十住。或有說空無相無作。或復有說修多羅祇夜毗伽羅那伽陀優陀那尼陀那阿波陀那伊帝目多伽闍陀伽毗佛略阿浮陀達摩|優波提舍。或說四念處四正勤四如意足五根五力七覺|分八聖道。或說內空外空內外空有爲空無爲空無始空性空遠離空散空自相空無相空陰空入空界空善空不善空無記空菩提空道空涅槃空行空得

則同作卽

劫同作佛

從同作因

優三本俱作憂
○覺下同無分字

二同作三

言下同無諸比丘三字

憍陳宋作陳憍〇時上三本俱無爾字

言下同無阿難二字〇犍同作揵下同

空第一義空空空大空。或有示現神通變化身出水火。或身上出水身下出火。身下出水身上出火。左脅在下右
脅出水。右脅在下左脅出水。一脅震靁一脅降雨。或有示現諸佛世界。或復示現菩薩初生行至七步。處在深宮
受五欲時。初始出家修苦行時。往菩提樹坐三昧時。壞魔軍衆轉法輪時。示大神通入涅槃時。世尊。阿難比丘見
是事已。作是念言。如是神變昔來未見。誰之所作。將非世尊釋迦作耶。欲起欲語都不從意。阿難比丘入魔罥故。
復作是念。諸佛所說各各不同。我於今者當受誰語。世尊。阿難今者極受大苦。雖念如來無能救者。以是因緣不
來至此大衆之中。爾時文殊師利菩薩摩訶薩白佛言。世尊。此大衆中有諸菩薩。已於一生發阿耨多羅三藐三
菩提心。至無量生發菩提心。已能供養無量諸佛。其心堅固具足修行檀波羅蜜乃至般若波羅蜜。成就功德。久
已親近無量諸佛。淨修梵行得不退轉菩提之心。得不退忍不退轉持。得如法忍首楞嚴等無量三昧。如是等輩
聞大乘經終不生疑。善能分別宣說三寶同一性相常住不變。聞不思議不生驚怪。聞種種空心不怖懼。了了通
達一切法性。能持一切十二部經廣解其義。亦能受持無量諸佛十二部經。何憂不能受持如是大涅槃典。何因
緣故問憍陳如阿難所在。爾時世尊告文殊師利。諦聽諦聽。善男子。我成佛已過二十年住王舍城。爾時我告諸
比丘言。諸比丘。今此衆中誰能爲我受持如來十二部經。供給左右所須之事。亦使不失自身善利。時憍陳如在
彼衆中來白我言。我能受持十二部經。供給左右不失所作自利益事。我言。憍陳如。汝已朽邁當須使人。云何方
欲爲我給使。時舍利弗復作是言。我能受持佛一切語。供給所須不失所作自利益事。我言。舍利弗。汝已朽邁當
須使人。云何方欲爲我給使。乃至五百諸阿羅漢皆亦如是我悉不受。爾時目連在大衆中作是思惟。如來今者
不受五百比丘給使。佛意爲欲令誰作耶。思惟是已即便入定。觀見如來心在阿難。如日初出光照西壁。見是事
已即從定起語憍陳如。大德。我見如來欲令阿難給事左右。爾時憍陳如與五百阿羅漢往阿難所作如是言。阿
難。汝今當爲如來給使請受是事。阿難言。諸大德。我實不堪給事如來。何以故。如來尊重如師子王如龍如火。我
今穢弱云何能辦。諸比丘言。阿難。汝受我語給事如來得大利益。第二第三亦復如是。阿難言。諸大德。我亦不求
大利益事。實不堪任奉給左右。時目犍連復作是言。阿難。汝今未知。阿難言。大德。唯願說之。目犍連言。如來先日

爲同作作○何宋作阿
往三本俱作從
卽同作則下同
我同作有
寫同作瀉次同
慧三本俱作意○馱同作大○跋同作拔○那下無含字

僧中求使。五百羅漢皆求爲之如來不聽。我卽入定見如來意欲令汝爲。汝今云何反更不受。阿難聞已合掌長跪作如是言。諸大德。若有是事如來世尊與我三願。當順僧命給事左右。目犍連言。何等三願。阿難言。一者如來設以故衣賜我聽我不受。二者如來設受檀越別請聽我不往。三者聽我出入無有時節。如是三事佛若聽者。當順僧命。時憍陳如五百比丘還來我所作如是言。我等已勸阿難比丘。唯求三願。若佛聽者當順僧命。文殊師利。我於爾時讚阿難言。善哉善哉。阿難比丘具足智慧豫見譏嫌。何以故。當有人言。汝爲衣食奉給如來。是故先求不受故衣不隨別請。憍陳如。阿難比丘具足智慧。入出有時卽不能得廣作利益四部之衆。是故求欲出入無時。憍陳如。我爲阿難開是三事隨其意願。時目犍連還阿難所語阿難言。吾已爲汝啓請三事。如來大慈皆已聽許。阿難言。大德。若佛聽者請往給侍。文殊師利。阿難事我二十餘年。具足八種不可思議。何等爲八。一者事我已來二十餘年。初不隨我受別請食。二者事我已來初不受我陳故衣服。三者自事我來至我所時終不非時。四者自事我來具足煩惱。隨我入出諸王剎利豪貴大姓。見諸女人及天龍女不生欲心。五者自事我來持我所說十二部經。一經於耳曾不再問。如寫瓶水置之一瓶。唯除一問。善男子。琉璃太子殺諸釋氏壞迦毗羅城。阿難爾時心懷愁惱發聲大哭。來至我所作如是言。我與如來俱生此城同一釋種。云何如來光顏如常。我則憔悴。我時答言。阿難。我修空定故不同汝。過三年已還來問我。世尊。我往於彼迦毗羅城。曾聞如來修空三昧。是事虛實。我言。阿難。如是如是。如汝所說。六者自事我來雖未獲得知他心智。常知如來所入諸定。七者自事我來未得願智而能了知如是衆生到如來所。現在能得四沙門果。有後得者。有得人身。有得天身。八者自事我來如來所有祕密之言悉能了知。善男子。阿難比丘具足如是八不思議。是故我稱阿難比丘爲多聞藏。善男子。阿難比丘具足八法。能具足持十二部經。何等爲八。一者信根堅固。二者其心質直。三者身無病苦。四者常勤精進。五者具足念心。六者心無憍慢。七者成就定慧。八者具足從聞生智。文殊師利。毗婆尸佛侍者弟子名阿叔迦。亦復具足如是八法。尸棄如來侍者弟子名差摩迦羅。毗舍浮佛侍者弟子名憂波扇陀。迦羅鳩村馱佛侍者弟子名曰跋提。迦那含牟尼佛侍者弟子名曰蘇坻。迦葉佛侍者弟子名葉婆蜜多。皆亦具足如是八法。我今阿難亦復如是具足八法。

修元明俱作脩

◎摩三本俱作磨下同○羅下宋元俱不間空○鞞三本俱作裨同下宋元俱不間空○慢三本俱作曼○尼下宋元俱不間空○磨三本俱作摩○提同作啼○毗同作比○低同作坻○嵐下同不間空○泥下同不間空

是故我稱阿難比丘爲多聞藏．善男子．如汝所說．此大衆中雖有無量無邊菩薩．是諸菩薩皆有重任．所謂大慈大悲．如是慈悲之因緣故．各各忽務調伏眷屬莊嚴自身．以是因緣我涅槃後．不能宣通十二部經．若有菩薩或時能說人不信受．文殊師利．阿難比丘是吾之弟．給事我來二十餘年．所可聞法具足受持．喻如寫水置之一器．是故我今顧問阿難爲何所在．欲令受持是涅槃經．善男子．我涅槃後阿難比丘所未聞者．弘廣菩薩當能流布．阿難所聞自能宣通．文殊師利．阿難比丘今在他處．去此會外十二由旬．而爲六萬四千億魔之所惱亂．汝可往彼發大聲言．一切諸魔．諦聽諦聽．如來今說大陀羅尼．一切天龍乾闥婆阿脩羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人與非人．山神樹神河神海神舍宅等神．聞是持名無不恭敬受持之者．是陀羅尼十恒河沙諸佛世尊所共宣說．能轉女身．自識宿命．若受五事．一者梵行．二者斷肉．三者斷酒．四者斷辛．五者樂在寂靜．受五事已．至心信受讀誦書寫是陀羅尼．當知是人即得超越七十七億弊惡之身．爾時世尊即便說之

阿摩隷　毗摩隷　涅磨隷　曹伽隷　醯摩羅　若竭鞞　三慢那跋提　娑婆他娑檀尼　婆羅磨他娑檀尼　磨那斯　阿拙提　毗羅祇　菴羅賴低　婆嵐彌　婆嵐　摩莎隷　富泥富那摩奴賴絺

爾時文殊師利從佛受是陀羅尼已．至阿難所在魔衆中作如是言．諸魔眷屬．諦聽我說所從佛受陀羅尼呪．魔王聞是陀羅尼已．悉發阿耨多羅三藐三菩提心．捨於魔業即放阿難．文殊師利與阿難俱來至佛所．阿難見佛至心禮敬卻住一面．佛告阿難．是娑羅林外有一梵志．名須跋陀．年百二十．雖得五通未捨憍慢．獲得非想非非想定．生一切智起涅槃想．汝可往彼語須跋言．如來出世如優曇花．於今中夜當般涅槃．若有所作可及時作．莫於後日而生悔心．阿難．汝之所說彼定信受．何以故．汝曾往昔五百世中作須跋陀子．其人愛心習猶未盡．以是因緣信受汝語．爾時阿難受佛勅已．往須跋所作如是言．仁者當知．如來出世如優曇花．於今中夜當般涅槃．欲有所作可及時作．莫於後日生悔心也．須跋言．善哉阿難．我今當往至如來所．爾時阿難與須跋陀還至佛所．時須跋陀到已．問訊作如是言．瞿曇．我今欲問隨我意答．佛言．須跋．今正是時．隨汝所問．我當方便隨汝意答．瞿曇．有諸沙門婆羅門等作如是言．一切衆生受苦樂報．皆隨往日本業因緣．是故若有持戒精進．受身心苦能壞本

慜三本俱作憫○來元明俱作至

揃同作傳

有明作存

果宋作畢

業。本業既盡衆苦盡滅。衆苦盡滅卽得涅槃。是義云何。佛言。善男子。若有沙門婆羅門等作是說者。我爲憐慜當往來如是人所。既至彼已我當問之。仁者。實作如是說不。彼若見答。我如是說。何以故。瞿曇。我見衆生習行諸惡多饒財寶身得自在。又見修善貧窮多乏不得自在。又見有人多役力用求財不得。又見不求自然得者。又見有人慈心不殺反更中夭。又見憙殺終保年壽。又見有人淨修梵行精勤持戒有得解脫有不得者。是故我說一切衆生受苦樂報。皆由往日本業因緣。須跋。我復當問。仁者。實見過去業不。若有是業爲多少耶。現在苦行能破多少耶。能知是業已盡不盡耶。是業既盡一切盡耶。彼若見答。我實不知。我便當爲彼人引喩。譬如有人身被毒箭。其家眷屬爲請醫師令拔是箭。既拔箭已身得安隱。其後十年是人猶憶了了分明。是醫爲我拔出毒箭以藥塗揃。令我得差安隱受樂。仁既不知過去本業。云何能知現在苦行定能破壞過去業耶。彼若復言。瞿曇。汝今亦有過去本業。何故獨責我過去業。瞿曇經中亦作是說。若見有人豪貴自在。當知是人先世好施。如是不名過去業耶。我復答言。仁者。如是知者名爲比知不名眞知。我佛法中或有由因知果。或有從果知因。我佛法中有過去業有現在業。汝則不爾。唯有過去業無現在業。汝法不從方便斷業。我法不爾從方便斷。汝業盡已則得苦盡。我卽不爾。煩惱盡已業苦則盡。是故我今責汝過去業。彼人若言。瞿曇。我實不知從師受之。師作是說我實無咎。我言。仁者汝師是誰。彼若見答。是富蘭那。我復語言。汝昔何不一一諮問。大師實知過去業不。汝師若言我不知者。汝復云何受是師語。若言我知復應問言。下苦因緣受中上苦不。中苦因緣受下上苦不。上苦因緣受中下苦不。若言不者。復應問言。師云何說苦樂之報唯過去業非現在耶。復應問言。是現在苦過去有不。若過去有過去之業悉已都盡。若都盡者云何復受今日之身。若過去無唯現在有。云何復言衆生苦樂皆過去業。仁者。若知現在苦行能壞過去業。現在苦行復以何破。如其不破苦卽是常。苦若是常。云何說言得苦解脫。若更有行壞苦行者。過去已盡云何有苦。仁者。如是苦行能令樂業受苦果不。復令苦業受樂果不。能令無苦無樂業作不受果不。能令現報作生報不。能令生報作現報不。令是二報作無報不。能令定報作無報不。能令無報作定報不。彼若復言。瞿曇不能。我復當言。仁者。如其不能何因緣故受是苦行。仁者當知。定有過去業現在因緣。是故我言因煩惱生

由明作有

獲宋作後

相三本俱作想下同

業因業受報。仁者當知。一切衆生有過去業有現在因。衆生雖有過去壽業。要賴現在飮食因緣。仁者。若說衆生受苦受樂定由過去本業因緣。是事不然。何以故。仁者。譬如有人爲王除怨。以是因緣多得財寶。因是財寶受現在樂。如是之人現作樂因現受樂報。譬如有人殺王愛子。以是因緣喪失身命。如是之人現作苦因現受苦報。仁者。一切衆生現在因於四大時節土地人民受苦受樂。是故我說。一切衆生不必盡因過去本業受苦樂也。仁者。若以斷業因緣力故得解脫者。一切聖人不得解脫。何以故。一切衆生過去本業無始終故。是故我說。修聖道時是道能遮無始終業。仁者。若受苦行便得道者。一切畜生悉應得道。是故先當調伏其心不調伏身。以是因緣。我經中說。斫伐此林莫斫伐樹。何以故。從林生怖不從樹生。欲調伏身先當調心。心喩於林身喩於樹。須跋陀言。世尊。我已先調伏心。佛言。善男子。汝今云何能先調心。須跋陀言。世尊。我先思惟。欲是無常無樂無淨。觀色卽是常樂淸淨。作是觀已。欲界結斷獲得色處。是故名爲先調伏心。次復觀色。色是無常如癰如瘡如毒如箭。見無色常淸淨寂靜。如是觀已。色界結盡得無色處。是故名爲先調伏心。次復觀想。想卽是無常癰瘡毒箭。如是觀已。獲得非想非非想處。是非想非非想卽一切智寂靜淸淨。無有墮墜常恒不變。是故我能調伏其心。佛言。善男子。汝云何能調伏心耶。汝今所得非想非非想定猶名爲想。涅槃無想。汝云何言獲得涅槃。善男子。汝已先能呵責麤想。今者云何愛著細想。不知呵責如是非想非非想處。故名爲想如癰如瘡如毒如箭。善男子。汝師鬱頭藍弗利根聰明。尚不能斷如是非想非非想處受於惡身。況其餘者。世尊。云何能斷一切諸有。佛言。善男子。若觀實相是人能斷一切諸有。須跋陀言。世尊。云何名爲實相。善男子。無相之相名爲實相。世尊。云何名爲無相之相。善男子。一切法無自相他相及自他相。無無因相無作相無受相。無作者相無受者相。無法非法相。無男女相。無士夫相。無微塵相。無時節相。無爲自相無爲他相無爲自他相。無有相無無相。無生相無生者相。無因相無因因相。無果相無果果相。無晝夜相無明闇相。無見相無見者相。無聞相無聞者相。無覺知相無覺知者相。無菩提相無得菩提者相。無業相無業主相。無煩惱相無煩惱主相。善男子。如是等相隨所滅處名眞實相。善男子。一切諸法皆是虛假。隨其滅處是名爲實。是名實相。是名法界。名畢竟智。名第一義諦。名第一義空。善男子。是相法界畢竟智第一義

諦第一義空。下智觀故得聲聞菩提。中智觀故得緣覺菩提。上智觀故得無上菩提。說是法時。十千菩薩得一生實相。萬五千菩薩。得二生法界。二萬五千菩薩得畢竟智。三萬五千菩薩悟第一義諦。是第一義諦。亦名第一義空。亦名首楞嚴三昧。四萬五千菩薩得虛空三昧。是虛空三昧亦名廣大三昧。亦名智印三昧。五萬五千菩薩得不退忍。是不退忍。亦名如法忍。亦名如法界。六萬五千菩薩得陀羅尼。是陀羅尼。亦名大念心。亦名無礙智。七萬五千菩薩得師子吼三昧。是師子吼三昧。亦名金剛三昧。亦名五智印三昧。八萬五千菩薩得平等三昧。是平等三昧。亦名大慈大悲。無量恒河沙等衆生發阿耨多羅三藐三菩提心。無量恒河沙等衆生發緣覺心。無量恒河沙等衆生發聲聞心。人女天女二萬億人現轉女身得男子身。須跋陀羅得阿羅漢果

# 大般涅槃經卷第三十六

相宋作想

吼下三本俱無三昧二字

末題宋無般字六下明有終字